2026年度
国際文化学部
講義概要（シラバス）

法政大学

科目一覧 ［発行日：2026/5/1］最新版のシラバスは、法政大学Webシラバス（https://syllabus.hosei.ac.jp/）で確認してください。

凡例　その他属性

〈他〉：他学部公開科目
〈優〉：成績優秀者の他学部科目履修制度対象科目
〈S〉：サティフィケートプログラム_SDGs
〈ダ〉：サティフィケートプログラム_ダイバーシティ
〈カ〉：サティフィケートプログラム_カーボンニュートラル
〈グ〉：グローバル・オープン科目
〈実〉：実務経験のある教員による授業科目
〈ア〉：サティフィケートプログラム_アーバンデザイン
〈未〉：サティフィケートプログラム_未来教室

【C0100】国際文化情報学入門［大中　一彌、輿石　哲哉、岡村　民夫、和泉　順子］ 春学期授業/Spring 1
【C0200】【2026年度休講】国際文化情報学の展開［大中　一彌］ 春学期授業/Spring 3
【C0212】ディジタル情報学概論［重定　如彦］ 秋学期授業/Fall 5
【C0210】統計処理法［吉田　一星］ 春学期授業/Spring 6
【C0211】システム論［甲　洋介］ 秋学期授業/Fall 7
【C0213】文化情報学概論［森村　修］ 春学期授業/Spring 8
【C0214】情報産業論［今和泉　仁］ 春学期授業/Spring 10
【C0215】ネット文化論［神戸　雅一］ 秋学期授業/Fall 12
【C0220】表象文化概論［大嶋　良明、岡村　民夫、林　志津江、深谷　公宣］ 春学期授業/Spring 14
【C0221】メディアと情報［君塚　洋一］ 春学期授業/Spring 16
【C0222】社会と美術［平野　真弓］ 春学期授業/Spring 18
【C0223】メディアと社会［稲垣　立男］ 秋学期授業/Fall 21
【C0224】身体表象論［深谷　公宣］ 秋学期授業/Fall 23
【C0232】現代思想［森村　修］ 秋学期授業/Fall 24
【C0231】言語文化概論［衣笠　正晃］ 秋学期授業/Fall 25
【C0230】比較文化［岩下　弘史］ 春学期授業/Spring 26
【C0233】ジェンダー論［佐々木　一惠］ 春学期授業/Spring 27
【C0234】異文化間コミュニケーション［副島　健作］ 秋学期授業/Fall 29
【C0237】Philosophy of the Public Sphere ［石田　安実］ 秋学期授業/Fall 31
【C0235】国際関係学概論Ⅰ ［今泉　裕美子］ 春学期授業/Spring 33
【C0236】国際関係学概論Ⅱ ［今泉　裕美子］ 秋学期授業/Fall 35
【C0241】国家と民族［宮本　佳和］ 秋学期授業/Fall 37
【C0243】平和学［松本　悟］ 秋学期授業/Fall 38
【C0244】宗教と社会［佐々木　一惠］ 春学期授業/Spring 39
【C0245】Religion and Society ［佐々木　一惠］ 春学期授業/Spring 41
【C0242】国際文化協力［松本　悟］ 春学期授業/Spring 42
【C1001】異文化適応論［浅川　希洋志］ 秋学期授業/Fall 43
【C0400】情報システム概論［和泉　順子］ 秋学期授業/Fall 44
【C0401】情報システム概論［和泉　順子］ 秋学期授業/Fall 45
【C0402】情報システム概論［櫻井　茂明］ 秋学期授業/Fall 46
【C0403】情報システム概論［中村　文隆］ 秋学期授業/Fall 47
【C0404】情報システム概論［中村　文隆］ 秋学期授業/Fall 48
【C0410】メディア情報基礎［大嶋　良明］ 秋学期授業/Fall 49
【C0411】メディア情報基礎［大嶋　良明］ 秋学期授業/Fall 50
【C0412】メディア情報基礎［甲　洋介］ 秋学期授業/Fall 51
【C0413】メディア情報基礎［米倉　明男］ 秋学期授業/Fall 52
【C0414】メディア情報基礎［菊池　司］ 秋学期授業/Fall 53
【C0415】メディア情報基礎［菊池　司］ 秋学期授業/Fall 54
【C0420】ネットワーク基礎［大嶋　良明］ 春学期授業/Spring 55
【C0421】ネットワーク基礎［大嶋　良明］ 春学期授業/Spring 57
【C0422】ネットワーク基礎［和泉　順子］ 春学期授業/Spring 59
【C0423】ネットワーク基礎［金　勇］ 春学期授業/Spring 61
【C0424】ネットワーク基礎［金　勇］ 春学期授業/Spring 63
【C0432】メディア表現法［大嶋　良明］ 秋学期授業/Fall 65

【C0439】メディアアートの世界［大嶋　良明］ 春学期授業/Spring 67
【C0433】プログラミング言語基礎［和泉　順子］ 春学期授業/Spring 69
【C0434】【2026年度休講】仮想世界研究［甲　洋介］ 春学期授業/Spring 70
【C0437】社会とデータサイエンス［和泉　順子］ 秋学期授業/Fall 71
【C0300】【2026年度休講】世界の言語Ⅰ［輿石　哲哉］ 春学期授業/Spring 72
【C0301】世界の言語Ⅱ［内山　政春］ 春学期授業/Spring 74
【C0302】世界の英語［小中原　麻友］ 春学期授業/Spring 75
【C0303】言語の理論Ⅰ［石川　潔］ 春学期授業/Spring 78
【C0304】言語の理論Ⅱ［石井　創］ 秋学期授業/Fall 79
【C0305】社会言語学［国際文化学部　テスト用ダミー］ 春学期授業/Spring 81
【C0306】応用言語学［川﨑　貴子］ 秋学期授業/Fall 82
【C0500】英語コミュニケーションⅠ［ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ］ 秋学期授業/Fall 83
【C0501】英語コミュニケーションⅠ［ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ］ 秋学期授業/Fall 84
【C0502】英語コミュニケーションⅠ［ジョナサン・エイブル］ 秋学期授業/Fall 85
【C0503】英語コミュニケーションⅠ［ジョナサン・エイブル］ 秋学期授業/Fall 86
【C0504】英語コミュニケーションⅠ［ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ］ 秋学期授業/Fall 87
【C0505】英語コミュニケーションⅠ［ラスカイル　L.ハウザー］ 秋学期授業/Fall 88
【C0506】英語コミュニケーションⅠ［ラスカイル　L.ハウザー］ 秋学期授業/Fall 89
【C0510】英語コミュニケーションⅡ［ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ］ 春学期授業/Spring 90
【C0511】英語コミュニケーションⅡ［ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ］ 春学期授業/Spring 91
【C0512】英語コミュニケーションⅡ［ジョナサン・エイブル］ 春学期授業/Spring 92
【C0513】英語コミュニケーションⅡ［ジョナサン・エイブル］ 春学期授業/Spring 93
【C0514】英語コミュニケーションⅡ［ＰＡＵＬ　Ｋ　ＫＡＬＬＥＮＤＥＲ］ 春学期授業/Spring 94
【C0515】英語コミュニケーションⅡ［ラスカイル　L.ハウザー］ 春学期授業/Spring 95
【C0516】英語コミュニケーションⅡ［ラスカイル　L.ハウザー］ 春学期授業/Spring 96
【C0520】英語コミュニケーションⅢ［ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ］ 春学期授業/Spring 97
【C0521】英語コミュニケーションⅢ［ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ］ 春学期授業/Spring 98
【C0522】英語コミュニケーションⅢ［ジョナサン・エイブル］ 春学期授業/Spring 99
【C0523】英語コミュニケーションⅢ［ジョナサン・エイブル］ 春学期授業/Spring 100
【C0524】英語コミュニケーションⅢ［ＰＡＵＬ　Ｋ　ＫＡＬＬＥＮＤＥＲ］ 春学期授業/Spring 101
【C0525】英語コミュニケーションⅢ［ラスカイル　L.ハウザー］ 春学期授業/Spring 102
【C0526】英語コミュニケーションⅢ［ラスカイル　L.ハウザー］ 春学期授業/Spring 103
【C0530】英語アプリケーションⅠ［ジョナサン・エイブル］ 秋学期授業/Fall 104
【C0531】英語アプリケーションⅡ［Ｋｒｅｇｇ　Ｊｏｈｎｓｔｏｎ］ 春学期授業/Spring 105
【C0532】英語アプリケーションⅢ［ウォルター・カズマー］ 春学期授業/Spring 106
【C0533】英語アプリケーションⅣ［ウォルター・カズマー］ 秋学期授業/Fall 108
【C0534】英語アプリケーションⅤ［ジョナサン・エイブル］ 春学期授業/Spring 110
【C0535】英語アプリケーションⅥ［ラスカイル　L.ハウザー］ 春学期授業/Spring 112
【C0536】英語アプリケーションⅦ［ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ］ 秋学期授業/Fall 113
【C0537】英語アプリケーションⅧ［ＤＡＮＩＥＬ　Ｇ　ＤＵＳＺＡ］ 秋学期授業/Fall 114
【C0538】英語アプリケーションⅨ［ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ］ 秋学期授業/Fall 115
【C0539】英語アプリケーションⅩ［ラスカイル　L.ハウザー］ 秋学期授業/Fall 116
【C0580】ドイツ語コミュニケーションⅠ［Annette　Gruber］ 秋学期授業/Fall 117
【C0585】ドイツ語コミュニケーションⅡ［Ｓｃｈｍｉｄｔ　Ｕｔｅ］ 春学期授業/Spring 118
【C0590】ドイツ語コミュニケーションⅢ［Annette　Gruber］ 春学期授業/Spring 119
【C0595】ドイツ語アプリケーション［林　志津江］ 春学期授業/Spring 120
【C0596】ドイツ語アプリケーション［小川　敦］ 春学期授業/Spring 122
【C0597】ドイツ語アプリケーション［Ｓｃｈｍｉｄｔ　Ｕｔｅ］ 秋学期授業/Fall 123
【C0598】【2026年度休講】ドイツ語アプリケーション［小川　敦］ 秋学期授業/Fall 124
【C0610】フランス語コミュニケーションⅠ［カレンス　フィリップ］ 秋学期授業/Fall 125
【C0615】フランス語コミュニケーションⅡ［大中　一彌］ 春学期授業/Spring 126
【C0620】フランス語コミュニケーションⅢ［カレンス　フィリップ］ 春学期授業/Spring 130
【C0625】フランス語アプリケーション［ル　ルー　清野　ブレンダン］ 春学期授業/Spring 132
【C0626】フランス語アプリケーション［ル　ルー　清野　ブレンダン］ 秋学期授業/Fall 133
【C0627】フランス語アプリケーション［カレンス　フィリップ］ 春学期授業/Spring 134
【C0628】【2026年度休講】フランス語アプリケーション［ル　ルー　清野　ブレンダン］ 秋学期授業/Fall 135
【C0640】ロシア語コミュニケーションⅠ［エレーナ　三神］ 秋学期授業/Fall 136

【C0645】ロシア語コミュニケーションII ［エレーナ　三神］ 春学期授業/Spring 137
【C0650】ロシア語コミュニケーションIII ［エレーナ　三神］ 春学期授業/Spring 138
【C0655】ロシア語アプリケーション［佐藤　千登勢］ 春学期授業/Spring 139
【C0656】ロシア語アプリケーション［佐藤　千登勢］ 秋学期授業/Fall 140
【C0657】ロシア語アプリケーション［エレーナ　三神］ 秋学期授業/Fall 141
【C0670】中国語コミュニケーションI ［ショウ　イクテイ］ 秋学期授業/Fall 142
【C0675】中国語コミュニケーションII ［渡辺　昭太］ 春学期授業/Spring 143
【C0680】中国語コミュニケーションIII ［ショウ　イクテイ］ 春学期授業/Spring 144
【C0685】【2026年度休講】中国語アプリケーションI ［渡辺　昭太］ 秋学期授業/Fall 145
【C0688】中国語アプリケーションII ［張　勝蘭］ 秋学期授業/Fall 146
【C0687】中国語アプリケーションIII ［周　重雷］ 春学期授業/Spring 147
【C0686】中国語アプリケーションIV ［鈴木　靖］ 秋学期授業/Fall 148
【C0700】スペイン語コミュニケーションI ［OSNO I DE SASAKUBO H］ 秋学期授業/Fall ... 149
【C0705】スペイン語コミュニケーションII ［OSNO I DE SASAKUBO H］ 春学期授業/Spring 150
【C0710】スペイン語コミュニケーションIII ［OSNO I DE SASAKUBO H］ 春学期授業/Spring 151
【C0715】スペイン語アプリケーション［OSNO I DE SASAKUBO H］ 春学期授業/Spring 152
【C0716】スペイン語アプリケーション［OSNO I DE SASAKUBO H］ 春学期授業/Spring 153
【C0720】【2026年度休講】スペイン語アプリケーション［OSNO I DE SASAKUBO H］ 秋学期授業/Fall 154
【C0721】スペイン語アプリケーション［OSNO I DE SASAKUBO H］ 秋学期授業/Fall 155
【C0740】朝鮮語コミュニケーションI ［富所　明秀］ 秋学期授業/Fall 156
【C0745】朝鮮語コミュニケーションII ［梁　禮先］ 春学期授業/Spring 158
【C0750】朝鮮語コミュニケーションIII ［富所　明秀］ 春学期授業/Spring 159
【C0755】朝鮮語アプリケーション［梁　禮先］ 春学期授業/Spring 161
【C0756】朝鮮語アプリケーション［梁　禮先］ 秋学期授業/Fall 162
【C0757】朝鮮語アプリケーション［李　蕙臣］ 秋学期授業/Fall 163
【C0754】【2026年度休講】朝鮮語アプリケーション［李　蕙臣］ 春学期授業/Spring 164
【C0770】文化情報のデザインワークショップ［松田　美奈子］ 春学期授業/Spring 165
【C0771】文化情報のためのネットワーク技法［和泉　順子］ 春学期授業/Spring 166
【C0772】視覚デザインと文化情報［稲垣　立男］ 春学期授業/Spring 168
【C0773】情報アプリケーションI ［重定　如彦］ 秋学期授業/Fall 170
【C0774】情報アプリケーションII ［大嶋　良明］ 秋学期授業/Fall 171
【C0800】こころの科学［岡本　郁子］ 春学期授業/Spring 173
【C0802】こころとからだの現象学［森村　修］ 春学期授業/Spring 174
【C0801】ゲーム構築論［重定　如彦］ 春学期授業/Spring 175
【C0810】道具のデザイン学［松田　美奈子］ 春学期授業/Spring 176
【C0813】情報セキュリティとプライバシー［和泉　順子］ 春学期授業/Spring 177
【C0814】文化と生物［島野　智之、川上　裕司、黒沼　真由美、松崎　素道、鈴木　忠、富川　光］ 秋学期授業/Fall 178
【C0815】文化と環境情報［島野　智之、佐々木　美貴、中西　由季子、忽那　賢志、塚田　訓久、島田　瑞穂、吉川　翠、長谷川　真紀子］ 秋学期授業/Fall 179
【C0820】文化情報空間論［甲　洋介］ 秋学期授業/Fall 181
【C0821】コンピュータ音楽と音声情報処理［大嶋　良明］ 春学期授業/Spring 182
【C0830】コネクション・デザイン［川村　たつる］ 秋学期授業/Fall 184
【C0831】情報の編集論［川村　たつる］ 春学期授業/Spring 185
【C0832】文化情報の哲学［森村　修］ 秋学期授業/Fall 186
【C0833】ソーシャル・プラクティス［稲垣　立男］ 秋学期授業/Fall 188
【C0852】【2026年度休講】サブカルチャー論［島田　雅彦］ 春学期授業/Spring 190
【C0438】道具による感覚・体験のデザイン［甲　洋介］ 秋学期授業/Fall 191
【C0860】マルチメディア表現法［大嶋　良明］ 春学期授業/Spring 192
【C0861】フィールドワークと表現［稲垣　立男］ 春学期授業/Spring 194
【C0862】【2026年度休講】クリエイティブ・ライティング［島田　雅彦］ 秋学期授業/Fall 195
【C0864】【2026年度休講】五感共生論［川村　たつる］ 秋学期授業/Fall 196
【C0870】映像文化論［岡村　民夫］ 秋学期授業/Fall 197
【C0871】【2026年度休講】写真論［丹羽　晴美］ 秋学期授業/Fall 198
【C0872】映像と文学［林　志津江］ 秋学期授業/Fall 199
【C0880】【2026年度休講】演劇論［竹内　晶子］ 春学期授業/Spring 201
【C0881】ポピュラー音楽論［大嶌　徹］ 春学期授業/Spring 202

【C0882】コミックス論［野田　謙介］ 秋学期授業/Fall …… 203
【C0883】【2026年度休講】空間デザイン論［前田　尚武］ 秋学期授業/Fall …… 204
【C0884】Gender and Japanese Culture ［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 秋学期授業/Fall …… 206
【C1000】比較表象文化論［竹内　晶子］ 秋学期授業/Fall …… 208
【C1011】異文化と身体表現［深谷　公宣］ 春学期授業/Spring …… 209
【C0850】パフォーマンスの美学［森村　修］ 春学期授業/Spring …… 210
【C0854】現代美術論［平野　真弓］ 秋学期授業/Fall …… 212
【C0900】世界の中の日本文学［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 春学期授業/Spring …… 215
【C0901】【2026年度休講】世界の中の日本語［大野　ロベルト］ 秋学期授業/Fall …… 216
【C1021】【2026年度休講】日英翻訳論［大野　ロベルト］ 春学期授業/Spring …… 217
【C1022】実践翻訳技法［深谷　公宣］ 春学期授業/Spring …… 218
【C0910】中国の文化Ⅰ（現代中国社会）［張　勝蘭］ 春学期授業/Spring …… 219
【C0911】中国の文化Ⅱ（多民族社会中国）［張　勝蘭］ 秋学期授業/Fall …… 221
【C0912】中国の文化Ⅲ（日中文化交流史）［鈴木　靖］ 春学期授業/Spring …… 223
【C0913】中国の文化Ⅳ（中国語の構造）［渡辺　昭太］ 春学期授業/Spring …… 225
【C0914】中国の文化Ⅴ（中国語と日本語）［渡辺　昭太］ 秋学期授業/Fall …… 226
【C0915】中国の文化Ⅵ（古典思想・文学）［横打　理奈］ 秋学期授業/Fall …… 227
【C0916】【2026年度休講】中国の文化Ⅶ（近代文学）［桑島　道夫］ 春学期授業/Spring …… 228
【C0917】中国の文化Ⅷ（現代文学）［桑島　道夫］ 春学期授業/Spring …… 229
【C0918】【2026年度休講】中国の文化Ⅸ（中国俗文学）［鈴木　靖］ 秋学期授業/Fall …… 230
【C0919】【2026年度休講】中国の文化Ⅹ（歴史）［張　玉萍］ 秋学期授業/Fall …… 231
【C0920】朝鮮語圏の文化Ⅰ（朝鮮半島の文化史）［神谷　丹路］ 春学期授業/Spring …… 232
【C0921】【2026年度休講】朝鮮語圏の文化Ⅱ（朝鮮語の構造）［内山　政春］ 秋学期授業/Fall …… 233
【C0922】アジアの伝統芸能［鈴木　靖］ 秋学期授業/Fall …… 234
【C0931】ロシア・中央アジアの文化［佐藤　大雅］ 春学期授業/Spring …… 235
【C0932】ロシア・東欧の文化［佐藤　千登勢］ 春学期授業/Spring …… 237
【C0940】ドイツ語圏の文化Ⅰ［林　志津江］ 春学期授業/Spring …… 239
【C0941】【2026年度休講】ドイツ語圏の文化Ⅱ［林　志津江］ 春学期授業/Spring …… 240
【C0942】【2026年度休講】フランス語圏の文化Ⅰ（思想）［大中　一彌］ 秋学期授業/Fall …… 241
【C0943】【2026年度休講】フランス語圏の文化Ⅱ（芸術）［岡村　民夫］ 春学期授業/Spring …… 244
【C0948】フランス語圏の文化Ⅲ（歴史）［ル　ルー　清野　ブレンダン］ 秋学期授業/Fall …… 245
【C0999】フランス語圏の文化Ⅳ（複言語・複文化社会）［廣松　勲］ 春学期授業/Spring …… 247
【C0947】北米文化論（ケベック講座）［廣松　勲］ 秋学期授業/Fall …… 248
【C0945】スペイン語圏の文化Ⅰ［久木　正雄］ 春学期授業/Spring …… 249
【C0946】スペイン語圏の文化Ⅱ［佐々木　直美］ 秋学期授業/Fall …… 251
【C0950】カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）［PLAZA BALAGUE Marta］ 春学期授業/Spring …… 252
【C0951】カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）［PLAZA BALAGUE Marta］ 秋学期授業/Fall …… 254
【C0952】カタルーニャの文化Ⅲ（歴史・社会A）［PLAZA BALAGUE Marta］ 春学期授業/Spring …… 256
【C0953】カタルーニャの文化Ⅳ（歴史・社会B）［PLAZA BALAGUE Marta］ 秋学期授業/Fall …… 258
【C0960】英語圏の文化Ⅰ（文化史）［宇治谷　義英］ 春学期授業/Spring …… 260
【C0961】英語圏の文化Ⅱ（思想史）［ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ］ 秋学期授業/Fall …… 261
【C0962】英語圏の文化Ⅲ（現代事情）［粟飯原　文子］ 春学期授業/Spring …… 262
【C0963】英語圏の文化Ⅳ（文学と社会A）［須藤　祐二］ 秋学期授業/Fall …… 263
【C0964】英語圏の文化Ⅴ（文学と社会B）［北　文美子］ 秋学期授業/Fall …… 264
【C0965】英語圏の文化Ⅵ（文学と社会C）［中和　彩子］ 春学期授業/Spring …… 265
【C0966】英語圏の文化Ⅶ（英語の構造）［輿石　哲哉］ 春学期授業/Spring …… 266
【C0967】英語圏の文化Ⅷ（英語の歴史）［輿石　哲哉］ 秋学期授業/Fall …… 268
【C0970】Structure of English ［輿石　哲哉］ 春学期授業/Spring …… 270
【C0968】History of English ［輿石　哲哉］ 秋学期授業/Fall …… 272
【C0902】世界とつながる地域の歴史と文化［髙栁　俊男］ 春学期授業/Spring …… 274
【C1052】実践社会調査法［松本　悟］ 春学期授業/Spring …… 276
【C1048】実践国際協力［松本　悟］ 秋学期授業/Fall …… 277
【C1040】国際関係研究Ⅰ［松本　悟］ 春学期授業/Spring …… 278
【C1049】途上国経済論［武貞　稔彦］ 春学期授業/Spring …… 279
【C1030】宗教社会論Ⅰ［宮部　峻］ 秋学期授業/Fall …… 281
【C1031】宗教社会論Ⅱ［佐々木　一惠］ 秋学期授業/Fall …… 282
【C1032】宗教社会論Ⅲ（イスラーム思想）［久木　正雄］ 春学期授業/Spring …… 284

【C1023】 言葉と社会［小川　敦］ 春学期授業/Spring …… 285
【C1050】 多文化社会と人間［挽地　康彦］ 秋学期授業/Fall …… 287
【C1041】 国際関係研究Ⅱ ［松本　悟］ 秋学期授業/Fall …… 289
【C1043】 【2026年度休講】人の移動と国際関係Ⅰ ［張　勝蘭］ 秋学期授業/Fall …… 290
【C1044】 人の移動と国際関係Ⅱ ［髙柳　俊男］ 秋学期授業/Fall …… 292
【C1045】 【2026年度休講】人の移動と国際関係Ⅲ ［水谷　明子］ 秋学期授業/Fall …… 293
【C1051】 持続可能な社会［中西　由季子］ 春学期授業/Spring …… 294
【C1046】 地域協力・統合［大中　一彌］ 秋学期授業/Fall …… 295
【C1053】 The Global South: History and Politics ［佐々木　一惠］ 秋学期授業/Fall …… 297
【C1103】 情報文化演習［和泉　順子］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 299
【C1153】 情報文化演習［和泉　順子］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 301
【C1203】 情報文化演習［和泉　順子］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 303
【C1253】 情報文化演習［和泉　順子］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 305
【C1100】 情報文化演習［大嶋　良明］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 307
【C1150】 情報文化演習［大嶋　良明］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 310
【C1200】 情報文化演習［大嶋　良明］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 313
【C1250】 情報文化演習［大嶋　良明］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 316
【C1300】 情報文化演習［大嶋　良明］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 319
【C1350】 情報文化演習［大嶋　良明］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 322
【C1101】 情報文化演習［(春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO)、(秋）甲　洋介（Yousuke KINOE)］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 325
【C1151】 情報文化演習［(春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO)、(秋）甲　洋介（Yousuke KINOE)］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 327
【C1201】 情報文化演習［(春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO)、(秋）甲　洋介（Yousuke KINOE)］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 329
【C1251】 情報文化演習［(春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO)、(秋）甲　洋介（Yousuke KINOE)］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 331
【C1102】 情報文化演習［重定　如彦］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 333
【C1152】 情報文化演習［重定　如彦］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 335
【C1202】 情報文化演習［重定　如彦］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 337
【C1252】 情報文化演習［重定　如彦］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 339
【C1134】 国際社会演習［島野　智之］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 341
【C1184】 国際社会演習［島野　智之］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 343
【C1234】 国際社会演習［島野　智之］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 345
【C1284】 国際社会演習［島野　智之］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 347
【C1334】 国際社会演習［島野　智之］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 349
【C1384】 国際社会演習［島野　智之］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 351
【C1105】 情報文化演習［森村　修］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 353
【C1155】 情報文化演習［森村　修］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 356
【C1205】 情報文化演習［森村　修］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 359
【C1255】 情報文化演習［森村　修］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 362
【C1305】 情報文化演習［森村　修］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 365
【C1355】 情報文化演習［森村　修］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 368
【C1106】 表象文化演習［稲垣　立男］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 371
【C1156】 表象文化演習［稲垣　立男］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 374
【C1206】 表象文化演習［稲垣　立男］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 377
【C1256】 表象文化演習［稲垣　立男］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 380
【C1306】 表象文化演習［稲垣　立男］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 383
【C1356】 表象文化演習［稲垣　立男］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 386
【C1108】 表象文化演習［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 389
【C1158】 表象文化演習［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 391
【C1208】 表象文化演習［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 393
【C1258】 表象文化演習［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 395
【C1308】 表象文化演習［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 397
【C1358】 表象文化演習［ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 399
【C1107】 表象文化演習［岡村　民夫］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 401
【C1157】 表象文化演習［岡村　民夫］ 春学期・秋学期/Spring・Fall …… 403

【C1207】表象文化演習［岡村　民夫］春学期・秋学期/Spring・Fall 405
【C1257】表象文化演習［岡村　民夫］春学期・秋学期/Spring・Fall 407
【C1307】表象文化演習［岡村　民夫］春学期・秋学期/Spring・Fall 409
【C1357】表象文化演習［岡村　民夫］春学期・秋学期/Spring・Fall 411
【C1109】表象文化演習［倉本　さおり］春学期・秋学期/Spring・Fall 413
【C1159】表象文化演習［倉本　さおり］春学期・秋学期/Spring・Fall 415
【C1209】表象文化演習［倉本　さおり］春学期・秋学期/Spring・Fall 417
【C1259】表象文化演習［倉本　さおり］春学期・秋学期/Spring・Fall 419
【C1309】表象文化演習［倉本　さおり］春学期・秋学期/Spring・Fall 421
【C1359】表象文化演習［倉本　さおり］春学期・秋学期/Spring・Fall 423
【C1110】表象文化演習［深谷　公宣］春学期・秋学期/Spring・Fall 425
【C1160】表象文化演習［深谷　公宣］春学期・秋学期/Spring・Fall 427
【C1210】表象文化演習［深谷　公宣］春学期・秋学期/Spring・Fall 429
【C1260】表象文化演習［深谷　公宣］春学期・秋学期/Spring・Fall 431
【C1112】表象文化演習［竹内　晶子］春学期・秋学期/Spring・Fall 433
【C1162】表象文化演習［竹内　晶子］春学期・秋学期/Spring・Fall 434
【C1212】表象文化演習［竹内　晶子］春学期・秋学期/Spring・Fall 435
【C1262】表象文化演習［竹内　晶子］春学期・秋学期/Spring・Fall 436
【C1114】表象文化演習［林　志津江］春学期・秋学期/Spring・Fall 437
【C1164】表象文化演習［林　志津江］春学期・秋学期/Spring・Fall 441
【C1214】表象文化演習［林　志津江］春学期・秋学期/Spring・Fall 445
【C1264】表象文化演習［林　志津江］春学期・秋学期/Spring・Fall 449
【C1314】表象文化演習［林　志津江］春学期・秋学期/Spring・Fall 453
【C1364】表象文化演習［林　志津江］春学期・秋学期/Spring・Fall 457
【C1116】言語文化演習［副島　健作］春学期・秋学期/Spring・Fall 461
【C1166】言語文化演習［副島　健作］春学期・秋学期/Spring・Fall 463
【C1216】言語文化演習［副島　健作］春学期・秋学期/Spring・Fall 465
【C1266】言語文化演習［副島　健作］春学期・秋学期/Spring・Fall 467
【C1121】言語文化演習［大西　亮］春学期・秋学期/Spring・Fall 469
【C1171】言語文化演習［大西　亮］春学期・秋学期/Spring・Fall 471
【C1221】言語文化演習［大西　亮］春学期・秋学期/Spring・Fall 473
【C1271】言語文化演習［大西　亮］春学期・秋学期/Spring・Fall 475
【C1118】言語文化演習［衣笠　正晃］春学期・秋学期/Spring・Fall 477
【C1168】言語文化演習［衣笠　正晃］春学期・秋学期/Spring・Fall 479
【C1218】言語文化演習［衣笠　正晃］春学期・秋学期/Spring・Fall 481
【C1268】言語文化演習［衣笠　正晃］春学期・秋学期/Spring・Fall 483
【C1115】言語文化演習［奥石　哲哉］春学期・秋学期/Spring・Fall 485
【C1165】言語文化演習［奥石　哲哉］春学期・秋学期/Spring・Fall 487
【C1215】言語文化演習［奥石　哲哉］春学期・秋学期/Spring・Fall 489
【C1265】言語文化演習［奥石　哲哉］春学期・秋学期/Spring・Fall 491
【C1119】言語文化演習［佐々木　直美］春学期・秋学期/Spring・Fall 493
【C1169】言語文化演習［佐々木　直美］春学期・秋学期/Spring・Fall 495
【C1219】言語文化演習［佐々木　直美］春学期・秋学期/Spring・Fall 497
【C1269】言語文化演習［佐々木　直美］春学期・秋学期/Spring・Fall 499
【C1120】言語文化演習［佐藤　千登勢］春学期・秋学期/Spring・Fall 501
【C1170】言語文化演習［佐藤　千登勢］春学期・秋学期/Spring・Fall 503
【C1220】言語文化演習［佐藤　千登勢］春学期・秋学期/Spring・Fall 505
【C1270】言語文化演習［佐藤　千登勢］春学期・秋学期/Spring・Fall 507
【C1111】言語文化演習［鈴木　靖］春学期・秋学期/Spring・Fall 509
【C1161】言語文化演習［鈴木　靖］春学期・秋学期/Spring・Fall 510
【C1211】言語文化演習［鈴木　靖］春学期・秋学期/Spring・Fall 511
【C1261】言語文化演習［鈴木　靖］春学期・秋学期/Spring・Fall 512
【C1311】言語文化演習［鈴木　靖］春学期・秋学期/Spring・Fall 513
【C1361】言語文化演習［鈴木　靖］春学期・秋学期/Spring・Fall 514
【C1122】言語文化演習［遠藤　郁子］春学期・秋学期/Spring・Fall 515
【C1172】言語文化演習［遠藤　郁子］春学期・秋学期/Spring・Fall 517
【C1222】言語文化演習［遠藤　郁子］春学期・秋学期/Spring・Fall 519

【C1272】言語文化演習［遠藤　郁子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 521
【C1322】言語文化演習［遠藤　郁子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 523
【C1372】言語文化演習［遠藤　郁子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 525
【C1113】言語文化演習［廣松　勲］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 527
【C1163】言語文化演習［廣松　勲］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 529
【C1213】言語文化演習［廣松　勲］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 531
【C1263】言語文化演習［廣松　勲］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 533
【C1123】言語文化演習［岩下　弘史］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 535
【C1173】言語文化演習［岩下　弘史］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 537
【C1223】言語文化演習［岩下　弘史］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 539
【C1273】言語文化演習［岩下　弘史］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 541
【C1124】言語文化演習［大野　ロベルト］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 543
【C1174】言語文化演習［大野　ロベルト］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 545
【C1224】言語文化演習［大野　ロベルト］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 547
【C1274】言語文化演習［大野　ロベルト］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 549
【C1117】国際社会演習［粟飯原　文子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 551
【C1167】国際社会演習［粟飯原　文子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 553
【C1217】国際社会演習［粟飯原　文子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 555
【C1267】国際社会演習［粟飯原　文子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 557
【C1126】国際社会演習［今泉　裕美子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 559
【C1176】国際社会演習［今泉　裕美子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 562
【C1226】国際社会演習［今泉　裕美子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 565
【C1276】国際社会演習［今泉　裕美子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 568
【C1326】国際社会演習［今泉　裕美子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 571
【C1376】国際社会演習［今泉　裕美子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 574
【C1127】国際社会演習［大中　一彌］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 577
【C1177】国際社会演習［大中　一彌］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 580
【C1227】国際社会演習［大中　一彌］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 583
【C1277】国際社会演習［大中　一彌］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 586
【C1327】国際社会演習［大中　一彌］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 589
【C1377】国際社会演習［大中　一彌］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 592
【C1128】国際社会演習［小川　敦］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 595
【C1178】国際社会演習［小川　敦］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 597
【C1228】国際社会演習［小川　敦］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 599
【C1278】国際社会演習［小川　敦］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 601
【C1328】国際社会演習［小川　敦］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 603
【C1378】国際社会演習［小川　敦］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 605
【C1129】国際社会演習［佐々木　一惠］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 607
【C1179】国際社会演習［佐々木　一惠］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 609
【C1229】国際社会演習［佐々木　一惠］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 611
【C1279】国際社会演習［佐々木　一惠］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 613
【C1130】国際社会演習［張　勝蘭］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 615
【C1180】国際社会演習［張　勝蘭］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 617
【C1230】国際社会演習［張　勝蘭］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 619
【C1280】国際社会演習［張　勝蘭］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 621
【C1330】国際社会演習［張　勝蘭］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 623
【C1380】国際社会演習［張　勝蘭］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 625
【C1131】国際社会演習［髙柳　俊男］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 627
【C1181】国際社会演習［髙柳　俊男］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 629
【C1231】国際社会演習［髙柳　俊男］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 631
【C1281】国際社会演習［髙柳　俊男］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 633
【C1331】国際社会演習［髙柳　俊男］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 635
【C1381】国際社会演習［髙柳　俊男］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 637
【C1132】国際社会演習［岩瀬　裕子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 639
【C1182】国際社会演習［岩瀬　裕子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 641
【C1232】国際社会演習［岩瀬　裕子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 643
【C1282】国際社会演習［岩瀬　裕子］春学期・秋学期/Spring・Fall …… 645

【C1133】国際社会演習［松本　悟］春学期・秋学期/Spring・Fall 647
【C1183】国際社会演習［松本　悟］春学期・秋学期/Spring・Fall 649
【C1233】国際社会演習［松本　悟］春学期・秋学期/Spring・Fall 651
【C1283】国際社会演習［松本　悟］春学期・秋学期/Spring・Fall 653
【C1333】国際社会演習［松本　悟］春学期・秋学期/Spring・Fall 655
【C1383】国際社会演習［松本　悟］春学期・秋学期/Spring・Fall 657
【C1060】インターンシップ事前学習［岩下　弘史］春学期授業/Spring 659
【C1055】国際関係研究Ⅲ［粟飯原　文子］秋学期授業/Fall 661
【C1056】国際関係研究Ⅳ［宮本　佳和］秋学期授業/Fall 662
【C0551】Art, Rebellion and Advertising［ジョナサン・エイブル］秋学期授業/Fall 663
【C0550】The History of Tourism［ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ］秋学期授業/Fall 664
【C0969】History of Western Thought［ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ］秋学期授業/Fall 665

BSP100GA（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 100）

国際文化情報学入門

大中　一彌、奥石　哲哉、岡村　民夫、和泉　順子

配当年次／単位：1年／4単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：1年生全体を2クラスに分割する

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
『国際文化情報学入門』は各科目群の担当教員によるオムニバス講義です。今年度の担当は下記の4名です。
情報文化：和泉順子（イズミ・ミチコ）
表象文化：岡村民夫
言語文化：奥石哲哉（コシイシ・テツヤ）
国際社会：大中一彌（オオナカ・カズヤ）
国際文化学部の学生として身につけてもらいたい基本的な知識を捉え、学生各自が在学中に共通に必要となる「文化を学ぶ考え方」を理解するための講義です。私たちの学部では文化を『情報文化』『表象文化』『言語文化』『国際社会』の4つの面から捉えようとしており、それぞれの分野を専門とする4人の教員が担当します。
さらに，本科目では，大学で必要とされるアカデミック・スキルズや研究倫理についても学びます.

【到達目標】
「情報文化」は、現代の都市型社会において「情報」こそが我々の思考や生活の基盤であるとの立場から、情報の生成、編集、再構成と文化の伝達や人間と情報のかかわりについて学びます。特に、デジタル空間で得られる情報の特性を知ると同時に、それらを素材として自ら思考し経験することの意味を考えられるようになるのが目標です。
「表象文化」は、主に人間の知覚と創造行為の関連、創造行為のプロセスとメディアの関連を学びながら、幅広い知の視点の獲得を目指すとともに、研究対象とその方法を選ぶための初歩的な議論を導入します。「表象文化＝芸術に関する知識のインプットではない」こと、創造行為と日常の間にあるもの、表象文化と社会の結びつきについて、思考できるようになるのが目標です。
「言語文化」では，国際文化学部生として知っておいて欲しい言語に関する基本的な知識や様々な 外国語学習のコツを，英語を題材にしながら考えていきます．基本的なレファレンス類の使い方，大学での外国語の学び方，日々の情報の収集法等について等が，その内容です．あわせて，他の3分野とのインターフェースについて学んでいきます.
「国際社会」では、現代の世界における国家間・集団間の諸問題を文化的な視野のなかで考える態度と方法を学びます。簡単な単語を使い、外国語を積極的に話そうとする姿勢は大切ですが、話をする時の中身はよりいっそう大切です。この「入門」授業では、高校までの知識を確認しながら、日本もその一部である国際社会について考え、語るための糸口を見つけることが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・1年生全員が履修します。
・週2回講義があります。
・130名程度の中教室講義 ×2クラスでの講義です。
・出席、課題、レポート、試験等は分野ごとに課します。
初回授業（週2回どちらも）には必ず出席し、連絡事項を確認してください。授業形式（対面/オンライン）は授業担当者によって異なるので注意してください。また各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示します。本授業の開始日までに具体的なオンライン授業の方法などを、学習支援システムで提示します。
課題等のフィードバックについては，各分野担当教員が具体的な内容を，学習支援システム等を通じて提示します.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業全体のガイダンスを合同授業で実施する。
2	【Aグループ】第1講（表象・国際） 【Bグループ】第1講（情報・言語）	分野別授業（前半第1回） 情報：国際文化学部と情報、オンライン学習教材 表象：表象するものと表象されるもの 言語：大学でしっかりと文献を読む(1)（レファレンス類をしっかり使おう） 国際：文化とは何か
3	【Aグループ】第2講（表象・国際） 【Bグループ】第2講（情報・言語）	分野別授業（前半第2回） 情報：社会における情報 表象：文学テクスト論 言語：大学でしっかり（しっとり，しっぽり？）と文献を読む(2)（背景の文化事象を知ろう） 国際：教養としての文化（西洋Ⅰ）
4	【Aグループ】第3講（表象・国際） 【Bグループ】第3講（情報・言語）	分野別授業（前半第3回） 情報：文化としての情報 表象：西洋絵画の確立と受容 言語：大学でしっかりと文献を読む(3)（大学での外国語学習について作戦を立てよう），小テスト1（進度によります） 国際：文明と文化（西洋Ⅱ）
5	【Aグループ】第4講（表象・国際） 【Bグループ】第4講（情報・言語）	分野別授業（前半第4回） 情報：メディアと情報 表象：写真と映画の誕生 言語：大学でしっかりと文献を読む(4)（ジャンルの違いを意識しよう） 国際：幕末維新と文化（日本Ⅰ）
6	【Aグループ】第5講（表象・国際） 【Bグループ】第5講（情報・言語）	分野別授業（前半第5回） 情報：情報とセキュリティ 表象：日本の漫画とアニメ 言語：大学でしっかりと文献を読む(5)（大切なことをつかみ取ろう） 国際：明治２０年代から大正デモクラシーへ（日本Ⅱ）
7	【Aグループ】第6講（表象・国際） 【Bグループ】第6講（情報・言語）	分野別授業（前半第6回） 情報：情報とリテラシー 表象：表象と権力 言語：小テスト2,（進度によります）剽窃をしてはいけないのはなぜか？まとめ 国際：国際関係論への基本的な構え
8	【Aグループ】第1講（情報・言語） 【Bグループ】第1講（表象・国際）	分野別授業（後半第1回） 情報：国際文化学部と情報、オンライン学習教材 表象：表象するものと表象されるもの 言語：大学でしっかりと文献を読む(1)（レファレンス類をしっかり使おう） 国際：文化とは何か
9	【Aグループ】第2講（情報・言語） 【Bグループ】第2講（表象・国際）	分野別授業（後半第2回） 情報：社会における情報 表象：文学テクスト論 言語：大学でしっかり（しっとり，しっぽり？）と文献を読む(2)（背景の文化事象を知ろう） 国際：教養としての文化（西洋Ⅰ）
10	【Aグループ】第3講（情報・言語） 【Bグループ】第3講（表象・国際）	分野別授業（後半第3回） 情報：文化としての情報 表象：西洋絵画の確立と受容 言語：文献を読む(3)（大学での外国語学習について作戦を立てよう），小テスト1（進度によります） 国際：文明と文化（西洋Ⅱ）
11	【Aグループ】第4講（情報・言語） 【Bグループ】第4講（表象・国際）	分野別授業（後半第4回） 情報：メディアと情報 表象：写真と映画の誕生 言語：文献を読む(4)（ジャンルの違いを意識しよう） 国際：幕末維新と文化（日本Ⅰ）
12	【Aグループ】第5講（情報・言語） 【Bグループ】第5講（表象・国際）	分野別授業（後半第5回） 情報：情報とセキュリティ 表象：日本のアニメと漫画 言語：大学でしっかりと文献を読む(5)（大切なことをつかみ取ろう） 国際：明治２０年代から大正デモクラシーへ（日本Ⅱ）
13	【Aグループ】第6講（情報・言語） 【Bグループ】第6講（表象・国際）	分野別授業（後半第6回） 情報：情報とリテラシー 表象：表象と権力 言語：小テスト2,（進度によります）剽窃をしてはいけないのはなぜか？まとめ 国際：国際関係論への基本的な構え

14　　まとめ　　合同授業による総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各科目群に対応する「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」の授業において予習復習、課題、文献講読などが課されるので毎回の授業の後にかならずこれらの学習活動を行ってください。また大学での最初の科目授業であり、担当ごとの授業スタイルの違いもあるので、学習方法そのものに早い時期に慣れる必要があります。「学習支援ハンドブック」をはじめ、各教員の指示によくしたがって学習を進めてください。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
指定した教科書は用いませんが、必要な文献等に関しては、それぞれの分野ごとに必要に応じて指示します。

【参考書】
担当教員それぞれが開講時ないし授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
各分野の点数配分をそれぞれ25%とし、それを合計する。内訳は（　）のとおり。
情報文化＝25%（平常点15%, 試験10%）
表象文化＝25%（平常点15％,試験10％）
言語文化＝25%（平常点と小テストで25%）
国際社会＝25%（初年次教育用の2つの理解度チェックや毎回の小テスト、グループ・ディスカッションへの参加や授業への貢献）
【成績調査願への対応について】
「国際文化情報学入門」科目の成績評価においてＤまたはＥとなった学生が、所定の手続き・期間を守り、成績調査願を提出し、かつ調査後もＤまたはＥの評価が変わらない場合、翌年度の再履修にあたり、『国際文化情報学入門』４分野で、とくに努力が必要な事項について、当該の学生に回答する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
・大人数の必修の授業となりますので、円滑な運営が行えるよう配慮します。
・問い合わせ用のフォームを用意しました（要認証）https://forms.office.com/r/82VGUnBYnG　※ただし、科目履修登録などの事務手続きに関する質問や、成績評価に関する仮定の質問（もし〜したら、レターグレードはどうなりますか？）には答えられません。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を使用します（「国際社会」ではGoogle Classroomも使います）。そのため、スマートフォンやタブレット、できればノートパソコンのような情報端末が必要です。

【その他の重要事項】
・学年全体を2クラスにわけて授業を行ないます。
・どちらのクラスも週2回授業があります。
・自分がどちらのクラスに該当するか必ずご確認ください。
・体育会運動部に所属するみなさんへ：体育会の試合等で授業を欠席しなければならないとき、一定の基準を満たしていれば「公式競技参加による欠席願」を提出できます。ただし、基本的に、事後申請は不可であり、授業を欠席する１週間前までに担当教員に提出することになっています（全学ルール）。関係者の捺印など申請手続きに時間がかかりますので、早めに保健体育センターに申請してください。
・なんらかの障がいや疾患、メンタルな面を含むハンディキャップなど、諸事情によりグループディスカッション等、特定の作業に参加することが困難な方は、法政大学障がい学生支援室に「就学上の配慮」をできるだけ早い時期に求めてください。「就学上の配慮」が認められた場合は、障がい学生支援室から担当教員に連絡が来ますので、法政大学の環境で対応できる範囲で配慮をさせていただきます。
・この科目が開講されている期間中に「学校保健安全法に定める感染症」に感染した方は、国際文化学部の事務窓口に連絡し「感染症等に係る授業欠席等配慮願」を受け取ってください。そして、発行された「配慮願」を担当教員にご提出ください。学生側の都合による欠席とは異なる、感染拡大防止のための出席停止として扱います。

【授業形態について】
「言語文化」については、「対面」で行う予定です。
「表象文化」については、「対面」で行う予定です。
「国際社会」については、「リアルタイム・オンライン」で行う予定です。Zoomが使えるように、機材（パソコン、タブレット、スマートフォン）と環境（Wifi）をご準備ください。
「情報文化」については、「対面」で行う予定です。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
There are two objectives of this course taught by four instructors from FIC's four subfields of intercultural studies*:
A. You should become acquainted with the basic ideas and concepts which are necessary for intercultural studies.
B. You should begin to develop a framework of learning cultures other than your own, on the basis of which you can start to conduct your own research.
(*FIC's four subfields, in case you don't know:
(1) Informatics, Artefacts and Transculturality (IAT)
(2) Culture and Representation (C&R)
(3) Language and Culture (L&C)
(4) International Society and Culture (ISC))
Also, this course provides you with basic academic skills and enables you to familiarise yourself with fundamental research ethics.
【到達目標（Learning Objectives）】
We have the following subfield-based objectives:
(1) Re: IAT, you should:
- become acquainted with generation, editing, and restructuring of our information, together with its transmission and human involvement.
- be able to understand the quality of information obtained in cyberspace and to develop a framework thereby you can think and experience.
(2) Re: C&R, you should:
- be able to acquire a wider framework thereby you see the relationship various creative activities and various media.
- begin to develop a rudimentary framework to discuss those activities.
- be able to understand that this subfield is not simply an assemblage of knowledge about various art.
- be able to consider what lies between creative activities and our daily life, as well as how they interact with our society.
(3) Re: L&C, you should:
- familiarise yourself with general methodology of language and culture learning with special focus on the English language.
- be able to understand how to get necessary information by using reference books, the internet, etc.
- be able to understand how this subfield interfaces with other three subfields.
(4) Re: ISC, you should:
- be able to learn basic methodology of considering various nation- or group-based relations from various intercultural perspectives.
- be able to understand the importance of contents rather than mere linguistic fluency (although any attitude of facilitating communication is, of course, recommendable.)
- be able to develop a framework thereby you can reasonably see various international problems, making the most of the knowledge hitherto acquired.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
You should prepare for the class sessions according to the instructions given by instructors. Also, revising/reviewing is highly recommended for consolidating your learning. Minimum of 2 hours of study is required for each class session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
Each subfields has an equal 1/4 say (25%) for your final grades. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for this course.

BSP200GA（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 200）

【2026年度休講】国際文化情報学の展開

大中　一彌

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：人数制限あり

その他属性：〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は、1年次の「国際文化情報学入門」に続くものとして開設されたものである（ただし必修ではない）。本学部の４つの科目群「情報文化・表象文化・言語文化・国際社会」の垣根を超えた共通テーマのもとで、ゲスト講師を含む複数教員によるオムニバス授業を行い、学際的かつ分野横断的な知識を身につける。今年度のテーマは「デジタル化する社会・人間とコミュニケーション」。今年度のコーディネーターは国際文化学部教員の林志津江が担当する。

【到達目標】
１．本学部の四つの柱「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」にまたがった、学際的な視座を得ることができるようになる。
２．SA、SJ、ゼミ活動、卒業論文・卒業制作などで必要となる国際文化情報学のより発展的な知識や考え方を身につける。
３．諸問題により異文化交流が困難な状況であっても、国際文化情報学（intercultural communication）を多角的に捉えることによって、国際文化学部の学びの意義を改めて考え直し説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■オムニバス授業：本科目は、毎回異なる教員（本学部教員とゲスト講師）が、それぞれの専門分野から講義をするオムニバス方式で進める。
■本科目の授業形態は基本的には「対面」であるが、一部リアルタイムオンライン（Zoom）やオンデマンドで実施する。また各回担当者の都合や感染症の流行状況などの理由で、リアルタイムオンライン（Zoom）やオンデマンドによる授業に切りかえることがある。
■フィードバック：質問に対しては、Googleフォームないし学習支援システムの掲示板を通じて可能なかぎり回答する。あわせて、次回授業のなかでもフィードバックを行なう予定。ただし、履修人数が多いことが予想されるため、個別にフィードバックすることはしない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	4/10　林志津江（国際文化学部教員・本科目コーディネータ）この授業で何を学ぶか	この授業の狙い、進め方、主な内容、課題などについて説明する。
2	4/17　伊藤伸（デジタル庁参与・政策シンクタンク「構想日本」総括ディレクター・本学大学院兼任講師）：行政のデジタル化の現状と課題〜直接コミュニケーションの重要性	日本が「デジタル敗戦国」と言われるほどデジタル化が遅れた要因や、日本のデジタル化の現状と課題を整理したうえで、今後の目指す姿を実現にするにあたって、国と地方、行政と市民など、様々なコミュニケーションがどのような影響を与えていくのかを学ぶ。
3	4/24　和泉順子（国際文化学部教員）：情報通信技術の社会展開	インターネットやデータサイエンス・機械学習などの情報通信や関連技術は、今や社会インフラとして社会環境に必要不可欠になってきている。しかし、技術的には可能なサービスであっても法整備、運用条件、環境等によっては展開に至らないこともある。エストニアの電子政府や東京工業大学の「未来社会像2020」などから技術の社会展開と考える。
4	5/8　重定如彦（国際文化学部教員）：AIの歴史と生成AIについて	これまでのAIの歴史を踏まえながら、生成AIなどの簡単な仕組みについて説明し、生成AIとの付き合い方や、今後のAIについて議論する。
5	5/15　大嶋良明（国際文化学部教員）：計算機による自然言語処理	今日、広く利用が進む生成AI、音声認識、自動翻訳などについてコンピュータによる言語処理を実現する基盤技術とその背景にある機械学習の技術を概観する。特にソーシャルメディアなど大量のオンライン言語データからどのようにして文脈や話題性に関する知識が抽出されるのかを中心に解説する。
6	5/22　副島健作（国際文化学部教員）：デジタル化した社会における日本語の多様性: 話しことばと書きことば	スマートフォンの普及とともに、SNSに代表されるソーシャルメディアを利用したコミュニケーションが当たり前となった昨今、そこで用いられる日本語は、話しことばとも書きことばともどちらともつかないような形式を生み出し、多様性に富んでいます。その境界線上にある日本語の現象について、話しことばと書きことば、あるいは、音声言語と文字言語の対比を中心に考察します。
7	5/29　稲垣立男（国際文化学部教員）：DEGITAL 1970 ― 人々はデジタルで（を）どのように表現してきたのか ―	日本が高度成長期にあった1970年代は、アナログメディアの主導期であった。21世紀に入り、急速なテクノロジーの進化によりメディアはデジタルへと移行した。さらにコロナ禍を経て、AIが組み込まれた新しいメディアが日常に定着しつつある。この変遷の中で、私たちは「デジタル」でどのような表現をしてきたのか、そして「デジタル」が示すイメージがどのように変化してきたのかを考える。
8	6/5　中園有希（琉球大学准教授・本学通信教育部兼任講師）：学校教育のデジタル化は何をもたらすか―ドイツの事例から―	パンデミック以後、ドイツにおいても学校教育のデジタル化は急速に進んでいる。その意味と課題について、デジタル教科書・教材の開発と普及という観点から論じたい。
9	6/12　宮川創（筑波大学准教授）：古代地中海世界にデジタル技術でアクセスする	古典語の機械翻訳、写本の自動翻刻、３Dによる古代遺跡の再現など、エジプト学、西洋古典学、西洋古代史の分野でデジタル・ヒューマニティーズがどのように発展してきているのかについて学びます。
10	6/19　森川卓夫（昭和音楽大学客員教授）：音楽のデジタル化が、聴く側の楽しみ方をどのように変えたのか	デジタル録音が音楽制作のあり方を変え、DTMとボーカロイドが米津玄師、YOASOBI、Adoを生んだ。音楽の鑑賞方法もデジタル化が進み、ついにはAIロボット、Alter 3が誕生。この激変するデジタル環境の深化は、音楽の楽しみ方をどのように変えるのか。
11	6/26　宮川祥子（慶應義塾大学准教授）：災害時の支援活動における情報と連携	大規模災害時の自助・共助・公助の支援活動がどのようになされているか、また、支援活動においてどのように情報共有と連携が行われているのかを、特に「共助」におけるNPOなどによる民間支援に着目して解説する。
12	7/3　山本兼由（本学生命科学部教授）・松本悟（国際文化学部教員）：国際協力学者と分子生物学者との対談：デジタル化によって見えるもの（前編）	デジタル化で変遷している知識と社会について議論し、これまで見えていなかったものから浮き彫りとなっている課題を整理したい。
13	7/10　山本兼由（本学生命科学部教授）・松本悟（国際文化学部教員）：国際協力学者と分子生物学者との対談：デジタル化によって見えるもの（後編）	現代の社会課題に対して、生物学的なミクロな視点と社会学的なマクロな視点から討論し、その解決に向けた展望を見出したい。
14	7/17　林志津江（国際文化学部教員・本科目コーディネータ）国際文化学部で学ぶ意義を改めて考える	国際文化学部の学びの本質とは何か、この授業全体の講義を振り返りながら考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・担当講師によっては事前課題を前提に授業を進めるので、その場合は必ず事前課題の文献講読や映像視聴を行う。
・授業後課題を毎回課す。授業日当日を締め切りとし、短い文章で提出する。
・本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しないが、国際文化学部のホームページの以下の記述は必ず読んでおくこと。
●理念・目的
https://www.hosei.ac.jp/kokusai/shokai/rinen/

●ディプロマポリシー
https://www.hosei.ac.jp/kokusai/shokai/policy/diploma/

【参考書】
・事前に学習支援システムに掲示するか、授業の中で各講師が紹介する。

【成績評価の方法と基準】
授業後課題の提出60%、最終レポート40%。授業後課題は、設問に適切に答えていない場合や極端に分量が少ない場合は減点する。最終レポートは、14回の講義について論じるものである。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
・学習支援システムを用いるので初回授業の3日前には登録すること。
・講義内容の入替や変更等の可能性があるため、毎回授業前に「お知らせ」などを確認すること。
・オンライン授業回の際にはデジタルガジェット（特にPC）およびインターネット環境を準備すること。学内のインターネット環境を利用し受講する際にはWiFiが利用可能なデジタルガジェットが必要。

【その他の重要事項】
本授業の一部は、外部講師がその専門分野に応じて講義を行う。講義内容は、それぞれの担当回の内容を参照のこと。

【Outline (in English)】
This course aims at enabling students to acquire a broad range of perspectives about intercultural communication. By the end of this course, students will develop a deeper and critical understanding of intercultural communication through a series of lectures. The theme of this course is for this year 'Interculturality' and its boundaries - Reconsideration the boundaries that divide cultures -.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following;
Short reports : 60 %、term-end reports 40%

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

ディジタル情報学概論

重定　如彦

サブタイトル：ディジタル社会を生き抜くための基礎知識
配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ITを過大評価しても過小評価してもいけない。ムードに流されることなく、正しく理解することが重要である。
ディジタル情報化社会、それを支えるディジタル技術全体を広く正しく理解するために、文科系の学生、情報学に関心を持つ人を対象に、広い視野のもとにITの本質を明確にし、わかりやすく述べる。
この科目は本学部で展開する情報科目ならびに情報デザイン・メディア表現科目群の関連専攻科目の根幹であり、受講者が現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得ることを目指す。
情報学と聞くと数学の知識などが必要な難解なものであるというイメージがあるかもしれないが、本講義では複雑な数学の知識などがなくても理解できるようにわかりやすく説明する予定であるので、コンピュータや情報学に興味がある方は積極的に受講してほしい。

【到達目標】
ディジタルとは何かについて理解する。
ディジタル情報を用いた様々な要素技術について理解する。
ディジタル情報化社会及び、それを支えるディジタル技術全体を広く正しく理解する。
現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
上記の到達目標を達成するため、教科書である「ディジタル情報学概論」の内容をもとにディジタル情報学に関する様々なテーマについての講義を行う。
授業の前半ではディジタルとは何かについて、基本的な所からわかりやすく解説を行い、基礎知識がついた中盤以降から教科書の各項目に沿って解説するという手順で行う。
具体的にはまず「ディジタルとは何か」から始まり、ディジタル情報の性質、利点、欠点、応用などについて学び、ディジタル情報技術を利用するとどのようなことが実現可能になるかについて理解する。
次に、それらの知識を元に、現実世界の様々な分野において実際に使われていたり、将来において実現するであろうディジタル技術について解説する。
各回の講義はPowerPointと教科書を用いて行う。PowerPointの資料は授業が行われる週の頭までに学習支援システムにアップロードするので各自予習を行うこと。
おそらく資料や教科書で予習しただけではわからないことが多数でてくると思われる。わからない点を予習によってあらかじめ明確にしておき、授業での説明を聞いてもなお理解できない場合はそのままにせず、積極的に質問すること。
学習支援システムのアンケートの機能を使って、毎回授業のリアクションペーパーに相当するものを実施する。各回の授業の冒頭で、必要に応じてその中からいくつかを取り上げてコメントを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	授業の導入とディジタル	ディジタルとは何か 情報の符号化 ディジタルの利点と欠点
2回	情報の伝達	インターネットにおける情報の伝達 データの圧縮。誤りの検出と訂正
3回	情報通信	有線通信と無線通信 人工衛生を使った通信
4回	安全な通信と暗号その1	安全な通信の要件（機密性と安全性） 暗号の概要 共通鍵暗号と公開鍵暗号
5回	安全な通信と暗号その2	安全な通信の要件（認証と否認防止） 電子署名 認証局と公証局
6回	ディジタルデータと著作権	著作権と不正コピーの影響 著作権保護技術 HTMLとXML
7回	高度情報通信社会	高度情報通信社会の光と影 行政の情報化 ネットワークコミュニティ
8回	医療情報システム、福祉情報システム	医療情報システム 福祉情報システム
9回	交通情報システム、気象・環境システム、防災情報システム	交通情報システム 気象・環境情報システム 防災情報システム
10回	ディジタルコンテンツ	パッケージメディア ネットワーク型ディジタルコンテンツ 電子出版
11回	電子報道、電子図書館、ディジタルアーカイブ	電子報道 電子図書館 ディジタルアーカイブ
12回	3次元CG、ディジタルマップとGIS	3次元GC ディジタルマップとGIS
13回	サイバービジネス、ユビキタスコンピューティング	電子商取引 電子マネー電子商取引のセキュリティ ユビキタスコンピューティング RFID ユビキタスID
14回	人工知能、データサイエンス	人工知能、データサイエンス

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学習支援システムにある資料を各自ダウンロードし、予習・復習しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業で使用するPowerPointの資料（学習支援システムで配布する）

【参考書】
奥川峻史、桜井哲真、『デジタル情報学概論』、共立出版（2000）、ISBN4-320-02994-1
http://www.edu.i.hosei.ac.jp/ sigesada/
にいくつかこの授業の参考となるような教材を用意したので必要に応じて参照すること。

【成績評価の方法と基準】
「配分」
平常点10％、期末試験50％、レポート40％
「評価基準」
平常点は授業での質問など、授業への積極的な参加態度などを評価する。
レポートは冬休みの前の授業にテーマを説明するので、締め切り（冬休み明けの最初の授業の日）までに提出すること。
期末試験は筆記試験で持ち込み不可とする。試験範囲は授業の範囲とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
「リンクなどを使って実例をみせてもらえるとわかりやすい」という指摘があったので、なるべく最新の情報をのせたウェブページなどの情報を提示するように心がける予定である。
また、2013年度から授業に関連するような教材をいくつか作成し、ウェブから参照できるようにした。

【学生が準備すべき機器他】
PowerPointを使って資料を提示しながら授業を行う。

【その他の重要事項】
生成AIを補助的に利用することは認めるが、生成のみを利用したレポート課題の提出は認めない。

【Outline (in English)】
Objectives of this class are to acquire broad knowledge of digital information society, and digital information technologies which support the digital information society.
Students are expected to download the materials in the learning support system and prepare for and review them. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Distribution.
Normal score: 10%, Final exam: 50%, Report: 40%.
Grading Criteria
Normal scores will be based on your active participation in class, including questions.
Reports are to be submitted by the deadline (the first class day after the winter break), as the theme will be explained in the class before the winter break.
The final exam will be a written exam. The scope of the exam will be the scope of the class. Students who achieve at least 60% of the objectives of this class based on this grading method will be considered to have passed the class.

PRI200GA（情報学基礎 / Principles of informatics 200）

統計処理法

吉田　一星

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんは、インターネット・新聞・テレビなどを通してデータに日々接しています。大量で多様なデータの中から、必要なものを情報として抽出し、適切な解釈を与えることはけっして容易なことではありません。
統計学はデータを数値化し、客観的に分析・評価することで、本質を捉えようとするための方法論です。この科目ではそのような統計学の基本的な考え方を学んでいきます。
また、自然言語処理技術の研究開発の実務に携わっている講師が、現在ブームとなっている生成AIに使われている確率統計の考え方を紹介したいと思います。
例えば、ChatGPT などのように人間と自然な対話ができるシステムの背後には、大規模言語モデル（Large Language Model; LLM）と呼ばれる機械学習の仕組みが動いており、LLM を理解するためには確率統計の知識が必須です。本授業では、LLM の中で使われている確率統計の考え方を学び、LLM を実現する仕組みへの理解を深めます。

【到達目標】
・データの可視化（グラフ化）の方法を身につける
・データを解釈する方法を身につける
・基本統計量（平均、分散、相関等）の算出方法を理解する
・確率の計算方法を理解し、具体的な計算を実施できる
・確率分布の概念と、その実世界への応用の方法を理解する
・生成AIの仕組みと確率・統計との関係を理解する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業では、統計学の基本的な考え方を学んでいきます。統計を直感でなくデータに基づいて議論するための、最低限必要な確率の定義やその使い方を丁寧に解説します。その確率の言葉を使って、観測したい現象を数値データとして表現し分析するための統計的な道具を、多くの具体例に適用します。
　数学に興味がある人はもちろん、そうではない人でも、統計的な考え方が楽しめるようにしたいと思いますので、履修される方には授業への積極的な参加を期待します。
　授業は講義と演習から成ります。学んだ内容を具体的な問題に適用して解く計算の時間が、ほぼ毎回あります。
期末試験とその他の課題のフィードバックは、主に学習支援システムを通して行います。また、みなさんからの質問・コメントに対する解説・補足を授業内で随時行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンスとデータの理解方法1	授業の進め方についての説明・数値データの可視化・度数分布表とヒストグラム
第2回	データの理解方法2	データの代表値とその性質
第3回	データの理解方法3	散布図と相関係数
第4回	データの理解方法4	回帰分析
第5回	確率1	確率の定義
第6回	確率2	確率の様々な計算方法
第7回	確率3	条件つき確率とベイズの定理
第8回	確率分布1	確率変数と確率分布
第9回	生成AIの仕組み	生成AIの仕組みと確率・統計との関係
第10回	確率分布2	期待値と分散
第11回	確率分布3	二項分布
第12回	確率分布4	連続型確率変数と正規分布
第13回	確率分布5	確率分布の応用
第14回	期末試験	期末試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各1時間を標準とします。本授業のそれぞれの回は前回までの内容の理解を前提として進めますので、自分の理解度に応じて必ず自習して下さい。また、わからない点をそのままにせず、自分で調べても不明な場合は教員に積極的に質問して下さい。

【テキスト（教科書）】
教科書を使用しません。講師が作成した資料を使って授業を行います。

【参考書】
以下の参考書をお勧めします。
"経営・商学のための統計学入門　直感的な例題で学ぶ", 竹内広宜著, 講談社, 2021.

この他に参考となる資料は、授業の中で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
授業中に行う小テストなどの平常点と期末試験の結果を元に総合的に評価します。配点の目安としては、平常点30%、期末試験70%となります。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
その授業で学んだ内容に関連する現実世界のトピックを紹介する「コラム」が毎回好評ですので、到達目標のための学習時間を確保しながらできるだけコラムを継続したいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
講義時間で演習を行います。電卓がないと計算できないような問題は演習内では扱いませんが、授業に電卓などの情報機器を持ち込んでも構いません。ただし試験（小テスト・期末試験）での情報機器の持ち込みは不可です。

【その他の重要事項】
担当教員は、情報科学技術、とくに人工知能（Artificial Intelligence; AI）の研究開発を行う企業に所属しており、自然言語処理・機械学習分野に関して新技術の開発や製品化の実務経験を有しています。
例えば、ChatGPT などのように人間と自然な対話ができるシステムの背後には、大規模言語モデル（Large Language Model; LLM）と呼ばれる機械学習の仕組みが動いており、LLM を理解するためには確率統計の知識が必須です。本授業では、LLM の中で使われている確率統計の考え方を学び、LLM にできることとそうでないことを理解します。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
In our daily life, we find a large amount of data available through the internet and social media. It is often difficult to extract only necessary information from the various kind of massive data and interpret the information. Statistics is a methodology for quantifying and objectively analyzing data.
[Learning Objectives]
Students should be able to do the followings at the end of this course:
- Master basics of data visualization (graphs)
- Understand some ways of interpreting results of data analytics
- Understand basic statistical values (mean, variance, correlation coefficient, etc.)
- Understand basic knowledge of combinatorics and probability, and apply it to concrete calculation
- Understand the notion of probability distribution and its application to real world problems
- Understand the relationship between statistics and how generative AI works
The lecturer has practical experience in research and development of generative AI, especially large language models (LLMs). He will introduce how probability and statistics are used in LLMs to generate natural language responses to queries by a human user.
[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to complete homework after each class meeting. A typical time for the homework and to understand the course content after a class meeting is two hours.
[Grading Criteria/Policies]
Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term examination (30%) and Term-end examination (70%).

HUI200GA（人間情報学 / Human informatics 200）

システム論

甲　洋介

サブタイトル：人の営み、文化を『システム』という考え方から捉え直す
配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉〈S〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
● あなたの身近な『システム』たち
コンピュータやSNSばかりがシステムではない。私たちの生活はたくさんの『システム』に囲まれている。電子マネーやオンラインショップがシステムという説明は頷けるとしても、家族や社会、国際食糧支援、チームスポーツ、コンビニもシステム、と云われたらどうだろうか。
● 『家族』もシステム？
暮らしや社会の意外な仕組みが、広い意味でのシステムとして、私たちの文化の中に様々な形態で組み込まれている。交通にしても、家族にしても、多国間関係にしても、うまく機能している間は人々は気づかない。その仕組みがシステムとしてうまくはたらかなくなった時に問題は顕在化する。
● 「システムという考え方」を学ぶ
本講義を通じて、最初は複雑すぎて捉えられない事柄も、「システムという考え方」を用いて整理し、自分で系統立てて捉えることができるようになる。
　システムとは何か。文化の中の様々な物事をシステムとして捉えることによって、考え方が変わる。
　本講義では、暮らしの中の身近な例や、システムとして意識したことがない意外な例を取り上げながら、それがどのような意味でシステムなのか、解きほぐしていく。複雑な事柄も複数の構成要素が巧みに関係し合った現象として、理解が進む。対象の本質を浮かび上がらせ、改善策の考案へとつなげる。これを練習する。
● システムから世の中を見ると、いろいろな事が見えてくる
人が作ったモノだけでなく、『家族』や『社会』も一種のシステムである。たとえば『家族』とは何か、家族が家族でいようとする目的は何か、なぜ現在の形態になっているのか、一度は考えたことがあるかもしれない。あるいは、差別や階層など、他と区別するための概念が新たに生まれたり、消滅すると何が変わるのか。システムとして捉え直すと、それが社会の営みに対する *questions* を整理し、明確化することにもつながる。
　社会にはさまざまな形でシステムが埋め込まれている。その様態は常に変化している。そして、そこにはシステムとしての役割の変化がある。それらを発見する作業は面白い。なぜならその変化は、人間が暮らし方を変革してきた足跡そのものだから。

【到達目標】
・まずシステムの基本的な考え方を学び、要点を理解できるようになる。
・次に、簡単な事例であれば、「システムの考え方」を用いて、問題を解きほぐしながら複数の視点から分析し、自分なりの答えを「系統立てて」導く方法を組み立てられるようになる。
・本講義を終える頃には、社会の、またはあなたが着目する一見複雑に見える問題に対し、その問題を捉えやすく整理し直し、システムの考え方を用いて、自分なりの答えを系統立てて考えられるようになる、ことを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
概ねつぎの流れに沿って各回の授業を構成する。
(1) 前回のコメントシートを踏まえた解説、ディスカッション（約15分）
(2) 講義形式で、題材を提示し、考え方・いくつかの視点を解説（65分）
(3) 小課題を演習し、質問応答、コメントシート作成（20分）
講義と小課題の演習を組み合せる。授業冒頭(1)で前回をおさらいし、受講生のコメントシートを踏まえた解説で理解の深化を促し、各回の講義(2)につなぐ。各自の内容理解を小演習(3)で確認し、コメントシートとして提出する。この対話サイクルで授業を進める。
　授業中の討議を通じて，他の意見を認めつつ自分のオリジナルな考えをまとめ，他者が理解できるよう論理的な説明を練習する。その成果を期末レポートで確認する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	システムは難しくない。本講義の狙いと、進め方
第2回	システムは、あなたの身近にある	システムとはどのようなものか
第3回	暮らしの中のシステム	暮らしの中にある、様々なシステム
第4回	システム、という考え方	システム思考の基礎。複雑そうな事を、要素の間の関係性として捉え直してみる
第5回	大きな視野から、システムの要素を整理し、働きを分析する	システムの成果物、インプット・資源、環境条件、環境への副次的影響、の整理
第6回	人間の行為を、システムの視点から理解する	気まぐれに見える人間の行為も、システムから捉えると
第7回	システムの信頼性、可用性を高める	故障しないモノはない。しかしシステムのデザインを工夫すれば、信頼性、可用性を高められる
第8回	人と道具のシステム論 －文房具から宇宙旅行まで	人が何か目的をもって道具を使う、その状況をシステムとして捉えてみよう
第9回	社会というシステム ～個人から社会へ（パーソンズの理論）	社会は複雑に見える。社会をシステムとしてどう捉えるか
第10回	社会のシステム論(1) －ルーマンの理論	オートポイエーシス概念を用いて、社会システム論を説明する
第11回	社会のシステム論(2) －コミュニケーションの連鎖	ルーマンは，社会の複雑さや『分化』をどのように捉えるか
第12回	社会や文化に埋め込まれたシステムたち	人の住まう都市、地域コミュニティの生活を、システムとして再検討する
第13回	システムダイナミクス	システムダイナミクスを用いて、複雑な社会現象を、多様な見方から捉える
第14回	まとめ：暮らしから社会へ、人間社会から環境へ	まとめ、課題について、ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業の復習を兼ねて、小課題に取り組む。提出は主に学習支援システムを用いる。
・本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。社会システムの理解には、ニュースにある社会問題の背景について、自分で考える日頃の習慣が役に立つ。

【テキスト（教科書）】
講義資料を提示し、テキストは使用しません。

【参考書】
・知恵の樹 — 生きている世界はどのようにして生まれるのか（マトゥラーナ著、ちくま学芸文庫）1998

【成績評価の方法と基準】
・レスポンスシートや，授業・討議における積極的な貢献度合い（60％），
・期末レポートまたは期末試験（40％）
で総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。　基本事項の理解、記述の明確さ、答えを導くまでの論理性、必要に応じて多角的な視点から考察すること、が重要です。

【学生の意見等からの気づき】
「込み入った話になると難しい」との意見がありました。例示を増やし、分かりやすく解きほぐすことを心がけようと思います。

【関連科目】
「道具のデザイン」「文化情報空間論」と直接的に関連しています。また国際社会、表象文化の専門科目の基礎としても役立つように工夫されています。

【Outline (in English)】
This class allows you to learn basic principles of "System" theory.
By the end of the course, students should be able to practice basic principles of "Systems Thinking," and to re-examine some selected social issues by applying the methods of "Systems Thinking".
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on (1) final report/exam (40%) and (2) short reports and the quality of the student's in-class contribution (60%).

FRI200GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 200）

文化情報学概論

森村　修

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：情報倫理学
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
《授業の概要》
本科目は、国際文化学部が提唱する「文化情報学」という学問の「入門（**introduction**）」にあたる科目です。「文化情報学」とは、様々な文化現象を「文化情報」として捉え直し考察する学問です。そして、それぞれ固有の文化現象のなかに共通する新しい〈意味〉や〈価値〉を見出したり、文化現象を「文化情報」という角度から解釈し直したり、「文化情報」としての〈新しい意味〉や〈新しい価値〉を創出したりすることを目指します。
2026年度の本授業では、「**Art and Cosmotechnics**」」というテーマで、西洋芸術の論理と中国芸術の論理を形式化し、現在のテクノロジーの新たな方向性を哲学的に考察することから「文化情報学」にアプローチしていきます。
本授業で取り上げるのは、最近、活躍の著しい中国人哲学者・ユク・ホイ氏の著書『芸術と宇宙技芸』（春秋社、2024年）です。
《授業の目的》
本科目では、「芸術と宇宙技芸」に関するユク氏のテキストを読むことを通じて、現在の情報社会で生じている文化事象について考えていきます。
【授業の意義】
本科目の意義は、「文化情報学」を構築するにあたって、私たちが、「いかにして〈ヴァーチャリティ社会〉を行き抜くか〉という実践的な問いについて、各自が自らの生き方を反省的に考察することにあります。

【到達目標】
(1) 本科目の到達目標は、現代社会を〈ヴァーチャル社会〉として捉えることによって、現代の情報文化の中で、私たちがどのように〈ヴァーチャリティ〉と関わっていくかを考えるを身につけることを目指します。
(2) 情報哲学のテキストを哲学的に読むことができるようになることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、基本的に講義形式で行います。
(1) テーマに応じて、受講生の意見や考えを積極的に聞くことを試みます。
(2) 受講生各自の授業内容に関する理解を確認するために、リアクションペーパーを用います。
(3) リアクションペーパーの内容について、ディスカッションすることも考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	・授業を受ける上でのガイダンスと注意点 ・授業概要説明
第2回	『芸術と宇宙技芸』読解	0. はじめに
第3回	『芸術と宇宙技芸』読解	1.序論　感性の教育について 第一節　悲劇的宇宙の歴史心理学
第4回	『芸術と宇宙技芸』読解	1.序論　感性の教育について 第二節　悲劇の芸術における再帰的論理
第5回	『芸術と宇宙技芸』読解	1.序論　感性の教育について 第三節　芸術的経験の諸相
第6回	『芸術と宇宙技芸』読解	1.序論　感性の教育について 第四節　道家の宇宙技芸　対悲劇者の宇宙技芸
第7回	『芸術と宇宙技芸』読解	1.序論　感性の教育について 第五節　再帰的機械が凌駕する
第8回	『芸術と宇宙技芸』読解	1.序論　感性の教育について 第六節　ヨーロッパ、芸術、哲学のうとで
第9回	『芸術と宇宙技芸』読解	第1章　世界と大地 第七節　哲学の終わりのあとの芸術
第10回	『芸術と宇宙技芸』読解	第1章　世界と大地 第八節　芸術からのもうひとつの始まり
第11回	『芸術と宇宙技芸』読解	第1章　世界と大地 第九節　人工物のなかの真理
第12回	『芸術と宇宙技芸』読解	第1章　世界と大地 第十節　思考と絵画
第13回	『芸術と宇宙技芸』読解	第1章　世界と大地 第十一節　芸術と宇宙的なもの
第14回	まとめ	これまでの授業の総括——〈ヴァーチャル社会〉を生きるとはどういうことか？

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・各回のテーマによって、各自に意見を聞くことがあるので、頭を柔軟にしておいてください。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
① ユク・ホイ『芸術と宇宙技芸』春秋社、2024年

【参考書】
1. ユク・ホイ『中国における技術への問い　宇宙技芸論』、genron、2022年
2. ユク・ホイ『ポストヨーロッパ』岩波書店、2026年

【成績評価の方法と基準】
(1) テキストの読解などを行うことで授業の理解度を確認する。
(2) 学期末に試験（レポート）を課すことで、授業における達成度を測る。
(3) リアクションペーパーによって、授業に対する姿勢を問う。
※ 両者の結果から総合的に判断する。
三者の配分は、下記の通り。
(1) 小テスト・リアクションペーパーによる平常点（30％）
(2) 期末試験（70％）
※この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします
※要注意
リアルタイム・オンライン授業の場合は成績評価の方法と基準も変更します。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
コンピュータやタブレット（可能な限りスマートフォン）は、授業時間中に授業担当者が許可しない限り、原則として使用不可です。
・情報哲学を学ぶこと、情報機器を用いることは異なります。大学で学ぶために必要なのは五感と〈ひらめき〉（=直感・直観）であり、情報機器は「道具」（紙と筆記用具）の延長に過ぎません。

【その他の重要事項】
【注意点】
(1)「文化情報学」とは、**狭い意味での「情報学（informatics）」や「情報科学（information science）」ではありません。**。
・「文化情報学」は、文化の「情報学」ではなく、**「文化情報」の「学」**を意味しています。したがって、「情報科学」のつもりで「情報学」を理解しないように。
(2) 私たちは、他の国の文化や他の国の人たちから学ぶだけでなく、**動物や植物、地球環境から多くのものを学ぶ必要があります。**こうした視点を確保するためにも「文化情報学」という考えは重要だと思います。

【注意点】
・概論としては内容も含めて授業は極めて難しいです。それゆえ、大人数にはならないとは思いますが、今流行りのVtuberなどに言及するからと言って、興味本位だけの人は、なるべく参加をご遠慮ください。

・受講生数が多い場合は、教室のキャパシティーとは無関係に初回に選抜テストを実施します。受講希望者は、初回の授業に必ず出席してください。
・議論は大いに推奨しますが、仲間同士の「私語」は厳禁です。居眠りは「受講拒否」として考えますので、ご退室願います。

【Outline (in English)】
【Outline and objectivies】

This course is an “introduction” to the study of “Informatics of culture” proposed by the Faculty of Intercultural communication. "Informatics of Culture" is the study of various cultural phenomena as cultural information.

In the 2025 academic year, under the theme of “Cultural Philosophy of Virtual Society,” we will position the current information society as a “virtual society” and approach “Informatics of Culture” by philosophically examining the various cultural phenomena that arise in this society.

The “virtual society” discussed in this class is the subject of a book written by philosopher Takehiko Daikoku (Professor at Meiji University, 1961-), in which he discusses specific themes related to “virtuality”. For example, “mode,” VR, surveillance society, metaverse, generative AI, and so on.

In this class, in addition to these, we will consider the cultural philosophy of “virtual society” with a view to “Theory of Vtubers” and “Philosophy of Vturber,” which are derived from the discussion of metaverse.

【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to examine a theory of visual culture.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Term-end examination: 70%、in class contribution: 30%

FRI200GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 200）

情報産業論

今和泉　仁

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【授業の概要】
現代生活において、情報産業やメディア産業は非常に重要な役割を担っている。また情報産業は、高度に技術革新することにより、常に変化し続けている。これらの構造や課題、将来を理解することは、消費者やビジネスマンとして、技術や市場トレンドの動向に対応して、より良い判断をするために重要である。本講座では、メディアを中心とする情報産業における産業構造、ビジネスモデル、問題点、未来の展望などを理解することを目指す。授業の中では、業界トレンド、テクノロジーの進化、市場動向、企業戦略などについて学習することができる。
【授業の目的（何を学ぶか）】
1. メディア産業の変遷と現状: 過去から現在までのメディア産業の変遷を追い、現在のメディア産業の状況を理解する。
2. メディア技術の変革: 情報技術の進歩によって、メディア産業にもたらされた影響と、それによって変革されたメディア技術、その光と影について理解する。
3. メディアビジネスモデル: 新たなメディア技術に伴い、メディアビジネスモデルが変革していることを理解する。また、有料・無料・広告収入などのメディアビジネスモデルの種類と特徴について学ぶ。
4. メディア業界のグローバル化: メディア産業はグローバルな市場を持つようになっており、欧米におけるメディア産業の状況と、国内市場に与える影響、各国間でのメディアの共有・流通に関連する課題について理解する。

【到達目標】
下記の各項目についてデジタル技術がもたらしたメディア産業全体への変化を理解する
- 4K/8K、HDR、VoIP、クラウド・プロダクションなどの放送を変革する技術動向への理解
- CES、MWC、NAB、IBCなどの海外見本市からメディア関連産業がどのように変容しようとしているのかについての理解
- OTT、SVOD、AVOD、FAST、D2Cなどの新しいメディアビジネスモデルの理解
- NetflixやAmazon Prime Videoなどの欧米のメジャープレイヤーとTVerやAbemaなど国内の事業者の現状への理解
- 生成AIがメディア産業にもたらす変化と社会への影響についての理解
- IoT、自動運転、ヒューマノイド、Smart Cityなど、情報技術の革新がもたらす社会の変化についての理解
- インターネットによるメディア産業への負の影響としての違法配信とその対策についての理解
- 地球温暖化対策が求められる中でのメディア産業の対応の状況と将来の課題への理解
- 放送事業者にとってのdigital-firstとは何か、放送の将来像への理解

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業については対面授業を基本とし、基本的に、コロナ禍対策（消毒およびソーシャルディスタンスの確保等）を講じた上で、プロジェクターを使用してＰＣでのスライドや動画を活用します。題材は、国内外の最新情報を元に、適宜、インターネットの外部サイトに接続して具体的な事例を紹介します。
ただし第3回講義は講師が米国ラスベガスで開催されるメディア関連見本市NAB2026参加のため対面授業ができないので、オンデマンド授業とします。講師はCES（米国ラスベガスで1月開催）、IES（スペイン・バルセロナで2月開催）Mobile World Congress（スペイン・バルセロナで3月開催）、NAB（米国ラスベガスで4月開催）、IBC（オランダ・アムステルダムで9月開催）、CEATEC（日本・幕張で10月開催）、InterBEE（日本・幕張で11月開催）などの国内外で開催されるメディア系見本市で取材した最新動向、海外のスタートアップ企業への取材結果など、他では得られない生の情報を紹介します。
一方的に情報を伝えるだけでなくできるだけリアクティブな授業としたいので、毎回、授業後に感想や質問をメモで提出してもらい、それについて次回の授業冒頭で答えていく形を基本とします。また、例年5月末に開催されているNHK放送技術研究所（世田谷区砧）の一般公開に各自参加してもらい、持ち出し授業とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	デジタル技術とメディアの変遷	自己紹介を兼ね、講師が担当した様々な放送・メディア関連事業からメディアの変遷やトレンドの全体像について触れ、講座全体を概観する（この回のみオンデマンド授業）
第2回	放送事業を変革する最新技術の理解	4K/8K、HDR、VoIP（Video over IP）、クラウド・プロダクション等、今日の放送事業に大きな影響を与えている技術動向を紹介
第3回	コンテンツ販売ビジネスについて知っておくべきこと（オンデマンド講義）	放送コンテンツの二次利用としてのコンテンツ販売における著作権処理、メディア素材の管理、デリバリー方法などについて知る
第4回	NetflixとVOD事業の構造	Netflix、Amazon Prime Video等のVOD事業の構造、変遷、トレンド、Netflixがメディア産業に与えたインパクトについて理解する
第5回	Connected TVとFASTチャンネル	Connected TVとは何か？ FASTとは何か？ メディア業界で始まっている新しいビジネスモデルと変わる広告マーケット
第6回	放送はこれからどう変わっていくのか	英国ではBBCなどの放送局が電波による伝送からネットオンリーの伝送へ移行しようとしている。放送事業はこれからどうなっていくのか
第7回	NHK技研公開持ち出し授業	5月下旬に開催されるNHK技研公開に各自参加し、そこで見たものについてレポートを提出
第8回	国内外のメディア関連見本市から①	最新エレクトロニクス展示のCES2025とモバイル技術展MWC2025、及びCEATEC2024から
第9回	IoTと自動運転、スマートシティ	モノのインターネット（IoT）技術や自動運転技術などで未来の都市はどう変わっていくのか
第10回	バーチャルプロダクションの世界	撮影時のCO☒排出量削減に寄与するバーチャルプロダクションとは？その背景技術とトレンドを紹介。
第11回	国内外のメディア関連見本市から②	欧州の放送機器展（IBC2024）と米国の放送機器展（NAB2025）およびInterBEE2024から
第12回	メディアビジネスとAI	ChatGPTやBard、DALL-Eなどの AIがメディアビジネスに与える影響
第13回	メディア産業のネットゼロ対策	コンテンツ制作時における温暖化ガス排出量削減を図るための諸外国の取り組みと日本の現状について紹介
第14回	ストリーミングによる負の影響・違法配信の実態と対策	日本の放送が海外でも視聴できてしまう-著作権を無視した違法配信の実態と、それに対する対策について紹介

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
新聞やテレビ、ネット情報などに常に興味を持ち、直接触れることと合わせ、国内の各メディア・サービスの状況について、実際に利用し、日常的に理解を深めておく事。授業内で答えた質問や配布する資料について復習を通して理解を深めておく事。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特にありません。毎回パワーポイントのスライドや動画を活用します。

【参考書】
テレビ番組、新聞、雑誌、書籍、インターネット上に流れている情報。TVer、Abema TVなど国内で提供されているメディア関連サービスを実際に体験しておくこと。

【成績評価の方法と基準】
平常点（70％）、期末のレポート（30％）によって成績を評価します。レポート提出は必須です。期末レポートを提出しない場合は出席点があっても合格としません。期末レポート内容については、授業を通して得られた知識や情報をどのように理解し自分の考えにまとめているかと共に、なぜ、そのような結果になったかが分かりやすく伝わるように整理されて記載されているかを見て評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成したと判断した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
毎回講義終了後に、掲示板に授業の感想と質問を投稿してもらいます。講義から1週間以内に投稿があった場合、出席とみなします。感想や質問については、基本的に次の授業冒頭に取り上げ、質問内容に答えます。

【学生が準備すべき機器他】
特にありませんが、NetflixやAmazon Prime Videoなどの有料サービスに体験加入して見ることをオススメします。

【その他の重要事項】
実務家教員による授業
NHK及びNHK関連会社で放送・インターネット等のメディア業界で長年勤務してきた教員が実際に担当した業務や経験・知見からメディア産業の現状について解説する

パワーポイントのスライドや動画を多用し、出来るだけ分かり易くビジュアル化した授業とする予定

【Outline (in English)】
[Course outline]
The information and media industries play a very important role in modern life. In addition, the information industry is constantly changing due to high levels of technological innovation. Understanding their structure, challenges and future is important for making better decisions as consumers and business people in response to technological and market trends. This course aims to provide students with an understanding of the industrial structure, business models, issues and future prospects in the media and other information industries. During the course, students will learn about industry trends, technology evolution, market trends and corporate strategies.
Objectives of the class (what you will learn).
1.The evolution and current state of the media industry: to follow the evolution of the media industry from the past to the present and to understand the current state of the media industry.
2.Understanding the impact of advances in information technology on the media industry, and the ways in which media technology has been transformed by these advances, its lights and shadows.
3.Media business models: understand how media business models are being transformed by new media technologies. Also, learn about the types and characteristics of media business models such as paid, free and advertising revenue.
4.Globalisation of the media industry: the media industry has become a global marketplace, and students will understand the state of the media industry in Europe and the US, its impact on domestic markets, and issues related to the sharing and distribution of media between countries.
[Learning activities outside the classroom].
To deepen your understanding of the current development of media services on a daily basis by always being interested in newspaper, television and internet news sites. To deepen your understanding by revising the questions answered in class and the materials distributed. The standard study and revision time for each lesson is 2 hours.
[Grading Criteria / Guidelines]
Grades are determined by class attendance (40%), number of questions submitted per class session (10%), a short report on the NHK Science & Technology Lab Open House (10%), and an end-of-term report (40%).

FRI200GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 200）

ネット文化論

神戸　雅一

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
インターネットがスマートフォン等のデバイスとともに発展し、我々の生活スタイルは大きく変化しています。このような社会を「ネット社会」と呼びます。ネット社会の特性とその本質を理解することは、現代社会の動向に対して主体的に活動するために重要です。
本講義では通信ネットワークやコンピュータスマートフォンを基盤とするインターネットの仕組みや歴史、その特性について扱います。また、ネット社会における、価値観、経済活動、合意形成、それを支える情報システムの重要性、知的財産権、プライバシー、倫理、技術について講義します。こうした内容を理解し、ネット社会を構築する文化についての多面的な思考を深めていきたいと思います。
　本講義が対象とする領域は、極めて変化が激しいものです。社会的・技術的な課題も日々発生します。こうした課題に対する正解は必ずしも存在するわけではありません。したがって本講義は単なる知識の獲得のみを目的としません。社会で生じている事象の本質を捉え、自らの視点で解釈し、日常活動に対する思慮を深めることを主な目的とします。

【到達目標】
日々変化をするネット社会のなかで合理的な行動を行うために、自らにとって重要な情報の選択基準を持続的に構築する考え方の習得を目標とします。また、講義で扱われるネット社会の事例に対し、受講者自らの意見を論理的に説明することや課題を設定し解決案を検討することも目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義は、対面で実施します。感染症の拡大などあった場合にはリアルタイムオンライン講義を実施することもあります。ネット文化に関する話題をプレゼンテーション形式で紹介します。プレゼンテーション形式での実施ですが、講義で紹介した話題に対し、受講者が問題意識を持って主体的に考えることを期待します。受講者からの質問については、随時受け付けます。また各回の講義の最後にも時間を設けますので疑問点や詳細に知りたい事項があれば、積極的に質問してください。
毎回の講義の開始時に、講義の内容に関連するミニレポートの題目を提示しますので、講義終了後に提出してください。講義の初めに、前回のミニレポートの内容を取りまとめ、受講者の方にフィードバックします。
期末に、ネット文化に関し自らの意見を論じるレポートの提出を課します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ネットワークと文化の概要	ネットワークの基礎、ネットワーク構造と組織構造等の社会事象や文化の関係について講義します。
2	インターネットとパーソナルコンピュータの歴史	現代の情報化社会を支えるインターネット技術と応用の歴史とパーソナルコンピュータの歴史について講義します。
3	無線通信とコンピュータの歴史	情報化社会の新たな発展の契機となった携帯電話を中心とした無線通信とその応用事例について講義します。
4	ネットワークによる社会的価値の変化	携帯電話の普及によるネットワークの拡大のメカニズムとそれに伴う社会的価値の変化について講義します。
5	ネットワークと経済活動	インターネットの普及による経済活動の変化について、ECなどのビジネスの事例を中心に講義します。
6	ネットワーク時代の情報サービス	ネットワーク化し高度化する情報サービスの概念とその効果や課題について多面的な事例を扱い講義します。
7	ネットワークとグローバル化	ネットワークの普及がもたらすグローバル化という変化について講義します。
8	ネットワークによるグローバル化の影響	グローバル化した社会およびグローバル化後の社会における人工知能等の技術の進展の影響について講義します。
9	ネットワークによる合意形成	ネットワークによる合意形成とイノベーションについて、政策決定や、企業内の合意形成の事例を交え講義します。
10	ネットワーク時代の知的財産権	特許、実用新案等の産業財産権ならびに著作権の概要とネットワークとの関係について日常生活における事例を交え講義します。
11	ネットワークとプライバシー	プライバシー保護の制度や運用事例を紹介し、ネットワークの普及に伴い新たに生じるプライバシー問題、対策について講義します。
12	ネットワークと情報倫理	ネット社会の情報倫理の概念と、制度、技術、運用による社会秩序について、身近な事例を提示し講義します。
13	ネット文化論のまとめ	12回までの講義のエッセンスをまとめて補足説明します。
14	ネットワーク時代の金融サービス	ネットワークやAIが金融サービスに与えた影響について講義します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
初回講義の際に本講義が対象とする領域および各回の講義テーマをを紹介します。各回の講義テーマに関連する事象に日常的に関心を持ち、準備・復習をしてください。本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とします。ネット文化に関係するニュースやWebサイト等を日頃から関心を持って読み・聞き、そして考え、各回の講義終了時に提出するミニレポート、期末の課題に反映させてください。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。各回の講義に対して資料を配布します。

【参考書】
講義で紹介した内容についてさらに理解を深めたいという受講者のために各回の講義ごとに参考図書を紹介します。

【成績評価の方法と基準】
期末レポートの提出を単位取得の条件とします。成績の評価基準は下記の比率に基づいて行います。
1.　期末レポート：70%
講義を通じてネット文化論に関するテーマについて、自らの意見を論理的に記述してください。
2.　平常点：15%

講義への関心、参加度を評価し平常点とします。
3.　ミニレポート15%
毎回の講義内容を理解し、講義内容に即した設問に対して、自分の意見をミニレポートに記述し提出してください。
この成績評価をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
講義後に提出いただくミニレポートの内容を、次回の講義の冒頭に受講者の方にフィードバックします。これにより講師と受講者のインタラクションを図るようにしています。これ以外にも講義時に質問など議論したいことがあれば可能な限り応じます。

【学生が準備すべき機器他】
原則として対面講義としますが、感染症の拡大などによりリアルタイムオンライン講義で実施する場合もあります。そのためZoom等で講義を視聴できる受講環境をご用意ください。

【その他の重要事項】
本講義は原則として対面で実施します。対面での参加ができない場合には各回の講義で使用するプレゼンテーション資料の大半をPDFで配布しますので、それをもとに講義の内容を学習してください。
各回のミニレポートでの生成AIの利用は禁止します。各回の内容に基づいた設問に対して受講者の経験、意見を自由に書いてください。
期末レポートでの生成AIの利用は、提出するレポートの執筆前の調査や思考の整理については許可します。生成AIによる自動生成された文章や画像を、受講者自身で確認や吟味をすることなく利用することは許可しません。
虚偽の情報(例えば、学術情報や文献情報)の記載といった禁止した行為と思わる行為を検知した場合には、担当講師は大学により公開されている「試験等における不正行為の処分基準」に従い処分をする方針です。

【Outline (in English)】
-Course outline
This course introduces a way of thinking to make appropriate decisions dealing with ever changing world. The goal of this course is to explain effects, problems and solutions for these problems of “information network society.”
-Learning Objectives
In order to act rationally in the ever-changing Internet society, the goal of this course is to acquire the way of thinking to continuously construct criteria for selecting information that is important to oneself. The course also aims to enable students to logically explain their own opinions on the cases of the Internet society dealt with in the lecture, and to set up issues and consider solutions.
-Learning activities outside of classroom
In the first lecture, I will introduce the areas covered in this course and the lecture themes for each session. Students are expected to pay attention to events related to each lecture theme on a daily basis, and to prepare and review for the class. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. Please read, listen to, and think about news and websites related to Internet culture with interest on a daily basis, and reflect them in the mini-report to be submitted at the end of each lecture and in the final assignment.
-Grading Criteria /Policy
Submission of a final report is a condition for obtaining credits. The grading criteria will be based on the following ratios.
1. Final report: 70%
Please logically write your opinion on the topic of Internet culture theory throughout the lectures.
2.Ordinary points: 15%.
Students will be evaluated on their interest and participation in the lecture.
3.Mini-report: 15%.
Students are expected to understand the content of each lecture, and submit a mini-report describing their opinions on questions related to the lecture content.
Students who have achieved at least 60% of the objectives of this class will be graded on the basis of this grading system.
The use of generative AI is prohibited for each mini-report. Please write based on the questions in each session and your own experience and opinions.
For the final report, the use of Generative AI is permitted for research and thought-organizing purposes before submitting the report. However, it is not permitted to use text or images automatically generated by generative AI for final reports without students personally reviewing and examining them.
If any prohibited behavior, such as providing false information (for example, academic or literature information), is detected, the instructor will take disciplinary action in accordance with the university’s published "Criteria for Disciplining Cheating in Examinations, etc.

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

表象文化概論

大嶋　良明、岡村　民夫、林　志津江、深谷　公宣

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席すること

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
１年次開講の「国際文化情報学入門」に後続する、表象文化科目群の導入のための科目です。４人の教員が扱う専門分野の表象・文化現象の分析・読解を通じて、表象文化論の基本を学ぶことを目的とします。
「表象文化」とは、人間が様々なメディアや方法によって創造する行為、またその行為を通じて生み出されたものを指します。さらに個々の「表象文化」における表現手法、歴史的変遷などを辿りながら、それらが内包する意味、欲望、人々に与える影響の読解と解明を目指すのが「表象文化論」です。本科目の講義では、様々な芸術様式の概念や文芸批評理論、メディア論、文化記号論など、「表象文化論」で必要となる理論の導入に加え、文学や造形芸術、演劇、映像／映画、音楽、非言語的コミュニケーション、建築など、様々な文化現象・芸術様式について幅広く横断的に検証していきます。

【到達目標】
本科目では、入門科目である「国際文化情報学入門・表象文化科目群」に引き続き、表象文化論の基礎を学びます。本科目をきっかけに、履修者がさまざまな「表象」に対する理解を深め、国際文化学部が開講する複数の「表象文化科目群」科目を効果的に履修・学修できること、さらには各自の専門領域の開拓に向け、基礎的な知識を獲得しその定着を図れるようになることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
初回は、４名の担当教員が各自の講義について詳しく解説します。第２回〜第１３回までは、各担当教員が３回ずつ講義を行います。課題は各教員から出され、フィードバックも各教員から行います。第１４回は応用編として、４名の担当教員がそれぞれの研究分野について紹介します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 担当：全員	「表象文化概論」の４名の担当者全員が、それぞれの授業計画の概略と履修上の諸注意について説明します。
第2回	欲望の音楽（１） 担当：林志津江	「私が主人公」？　：市民階級と啓蒙の世紀に向けて／合唱とフランス革命と「第九」／「私の思いを音楽に託す」？
第3回	欲望の音楽（２） 担当：林志津江	「国民的音楽」とヴィルトゥオーゾの19世紀：「音楽学校」とは何のため？ ／作曲家と演奏家と聴衆の分離／「美しい芸術が私の人生を充実させる」？
第4回	欲望の音楽（３） 担当：林志津江	「アイデンティティ」あるいは「プロパガンダ」：近代戦争の果ての「クラシック音楽」／録音術と再生術が決定的に変えたもの／音楽がもたらす「一体感」？
第5回	モダニズム建築の始まり 担当：岡村民夫	ル・コルビュジエとフランク・ロイド・ライト
第6回	日本のモダニズム建築 担当：岡村民夫	前川国男と丹下健三
第7回	ヴァナキュラーな建築 担当：岡村民夫	関東大震災後のバラックと看板建築
第8回	電子音楽とコンピュータ（１） 担当：大嶋良明	電子音楽の発展史を概観し、電子楽器やコンピュータとの関連性を学ぶ。
第9回	電子音楽とコンピュータ（２） 担当：大嶋良明	テルミン（Theremin）、ハモンドオルガン、モーグシンセサイザなど電子楽器の系譜を学ぶ。
第10回	電子音楽とコンピュータ（３） 担当：大嶋良明	電子音楽の学際的研究拠点CCRMAが及ぼした影響とその功績を、デジタルシンセサイザーの開発研究とコンピュータ音楽の制作環境を中心に学ぶ。
第11回	映画とキリスト教（１） 担当：深谷公宣	ユダヤ教とキリスト教の教えの違いを確認し、20世紀半ばに主にハリウッドで制作された叙事詩映画（例：『十戒』など）で聖書やユダヤ教、キリスト教に関連する人物がどのように表象されているのかを検討する。また、そうした映画に当時のアメリカの政治状況（共産主義批判）がどのように反映しているのかを探る。
第12回	映画とキリスト教（２） 担当：深谷公宣	福音の概念、黙示思想と終末論について確認し、これらをテーマ、モチーフにしたいくつかの映画を検証する。イエス＝キリストの磔刑にみる身体表象や再臨のストーリーがどのように映画に描かれているか、事例を参照したうえで、米国トランプ政権の支持母体ともいわれる福音派の思想についても概観し、現代社会を取り巻く国際政治状況への理解も深める。余裕があれば、教派の違いについても触れる。
第13回	映画とキリスト教（３） 担当：深谷公宣	アガペーとエロスの違いを確認し、前者が社会を救う鍵として、後者が社会を乱す要因として描かれている作品の事例を検証する。また、キリスト教をテーマとしていない映画において、キリスト的人物（女性や子供を含む）が登場し、社会や人間関係を修復していく様子を描いた作品について紹介する。（例：『櫻の園』、『ヤンヤン 夏の想い出』など）
第14回	表象文化概論発展編 担当：全員	４人の担当教員が、それぞれの研究分野について紹介します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各担当教員が指示します。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業全体を通して用いるテキストはありません。
各担当教員が初回の講義時に指示します。

【参考書】
参考書については各担当教員が指示します。

【成績評価の方法と基準】
各担当者が担当回の成績を25点満点で示し、合計で100点満点で成績をつける。
平常点、課題、試験の割合や評価方法については、各教員が授業開始前までに伝える。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
担当者交代のため、該当しません。

【学生が準備すべき機器他】
・学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
・初回のガイダンスにかならず出席してください。初回の授業の課題提出が選抜試験を兼ねるので、受講希望者の初回授業の出席は必須です（受講者数上限は今年度授業実施教室の収容可能人数と同数）。

【Outline (in English)】
・Course Outline: This is an introductory course of the studies of culture and representation, structured around four major units taught by four different instructors: theater, music, nonverbal communication, and architecture. It thus aims at fostering students' awareness of the wide range of the field, as well as introducing some of the basic concepts and approaches in the discipline.
・Learning Objectives: On the basis of the skills and perspectives acquired in the 'Introduction to Intercultural Communication', students will be expected to understand various ideas of representational culture to use for further study in the advanced courses. Four instructors will help students find interesting subjects they can explore in a more specific field.
・Learning activities outside of the classroom: Follow the instructions provided by each instructor.
・Grading Criteria/Policy: Four instructors will give students marks in their own way, and the sum of the marks will be the final. For a detailed scoring policy, ask each instructor.

DES200GA（デザイン学 / Design science 200）

メディアと情報

君塚　洋一

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代社会におけるコミュニケーションを成り立たせるメディアと情報の特性とはたらきをさまざまな分野の考察を通して理解し、生活者として、また社会や市場への幅広い発信に携わる職業人として、メディアに対する姿勢とその活用の基礎を習得する。

【到達目標】
以下3点を目標とする。
1）身の回りで起こるメディアを介したコミュニケーションのメカニズム、メディアのはたらきを自覚する。
2）環境の監視、事業や組織・共同体の運営、文化の共有など、社会においてさまざまな目的のために行われるメディア・コミュニケーションの必要性と問題性の両面を学習する。
3）メディア・リテラシーの視点を身につけ、メディアと情報のもたらす現象について客観的な評価を行えるようにする。あわせて、あらゆる社会的活動に不可欠となる他者からの理解と支持を得るための情報発信（PR＝パブリック・リレーションズ）の視点を持てるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この科目は、各テーマにおいて、対面授業による説明や解題、質疑、受講生のコメント紹介、映像の鑑賞、簡易なグループワークなどを行う。
授業の初めに、前回の授業で゛提出されたリアクションペーパー（小課題）から何人かのコメントを取り上げ（匿名）、全体に対してフィードバックを行う。課題等の提出は「学習支援システム」を通じて行う予定で゛す。
＊
メディア史やメディア論の基礎をふまえ、映像、ニュース、広告、ブランド、SNSなどの具体的な題材を通して、情報テクノロジーと社会・文化のあり方、生活者のメディア利用行動やリアリティ意識の変容、市場情報システム、IT化の進むメディア産業の帰趨など、情報化社会とメディア・人間をめぐるさまざまな問題を考える。
また、著作権をはじめとした知的財産権の取扱いや、個人情報やプライバシーの保護、インターネット等メディアの活用において求められるモラルなど、情報倫理の問題についてもあわせて考えていく。
テーマに関連した資料映像を適宜鑑賞しながら学習する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義のテーマと履修上の注意
第2回	メディアとは何か	メディアとは何か？ ／何がメディアになるのか？ ／メディアの類型（タイプ）
第3回	コミュニケーションとは何か-1	「コミュニケーション」のさまざまなモデル、その規定要因（1）：物理的環境／社会的制御など
第4回	コミュニケーションとは何か-2	「コミュニケーション」のさまざまなモデル、その規定要因（2）：多層性・文脈／交話など
第5回	情報とは何か（「ニュース」を題材に）	情報とは何か？ ／どんな要件を満たせばニュースになるのか？ ／社会におけるニュースの役割・機能／マス・メディアの報道
第6回	パブリック・メディア-1	プロパガンダ（宣伝）と広報（PR）／近年の推奨コミュニケーションの問題
第7回	パブリック・メディア-2	マーケティング・コミュニケーションとブランド
第8回	ふりかえりレポート-1	第1回〜第7回のふりかえりレポート
第9回	ソーシャル・メディア	ソーシャル・メディアのはたらきと問題
第10回	観光とメディア	メディアが観光の対象をつくる／「聖地巡礼」／大衆と対象物
第11回	メディアと感情	メディアとしての芸術作品と「ノスタルジー」
第12回	メディア・リテラシー-1	共感をシェアするコミュニケーションとは？
第13回	メディア・リテラシー-2	社会をより適切に理解するコミュニケーションとは？ ・ポスト真実／フェイクニュースの拡散と影響など
第14回	まとめ ふりかえりレポート-2	情報源＝メディアの識別利用／ファクトチェック／メディアと感情／メディアのはたらきへの補論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1)インターネット、マスメディア、都市空間などにおいてさまざまなメディア表現にふれ、そのねらいや影響について考える習慣を身につける。
2)あるメディア表現について、オーディエンス、送り手・作り手(媒体社、広告会社等)の双方の立場からとらえる視点・発想の転換を行えるよう心がける。
3）前半の1回では、自分が注目したマス・メディアのニュース、まわりの人と話題にしたニュースをピックアップして提出し、授業の題材とする。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
原則として使用しない。

【参考書】
・稲増一憲『マスメディアとは何か　影響力の正体』中公新書、中央公論社、2022年
・法政大学大学院メディア環境設計研究所編『アフターソーシャルメディア　多すぎる情報といかに付き合うか』日経BP、2020年
・ダニエル・ブーニュー『コミュニケーション学講義―― メディオロジーから情報社会へ 』書籍工房早山、2010年
・竹内郁郎・児島和人・橋元良明編著『新版メディア・コミュニケーション論1』北樹出版、2005年
・笠原和俊『フェイクニュースを科学する――拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ』化学同人、2018年
・カリン・ウォール＝ヨルゲンセン『メディアと感情の政治学』勁草書房、2020年
・立岩陽一郎、揚井人文『ファクトチェックとは何か』岩波ブックレットNo.982、岩波書店、2018年
・石井淳蔵『ブランド　価値の創造』岩波新書、1999年

【成績評価の方法と基準】
毎回の小課題の提出（約30％）、ふりかえりレポート（2回：約70％）を課す。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。ただし、7〜8割以上の小課題の提出、2回のふりかえりレポートの提出を単位要件とする。

【学生の意見等からの気づき】
　メディアと情報について理論と実際の双方を扱うため、とりわけ前者はこの分野の基礎を習得した人でないとやや理解しにくいところがあるかと思う。より平易に伝える努力をする。
　毎回、テーマに関わる映像資料、配布資料を用意しており、これらは理解の助けになっているようである。
　また、メディア業界における実務について映像を中心に具体的に理解する回を設けているが、業界に関心がある人には好評のようである。

【学生が準備すべき機器他】
　とくになし。

【その他の重要事項】
　さまざまなメディアやコンテンツに興味を持つ学生の受講を希望する。メディア論についての基礎的知識を持っていることを前提とした中級者向けの講義を行う。

【受講上の留意点】
　本科目は、対面授業、授業内課題、ふりかえりレポートの3つで成り立つ。テーマについて高い関心をもち、積極的なレスポンスと活動を行う意欲のある受講者を求める。

【Outline (in English)】
　Students are advised to understand the characteristics and functions of media and information that make communication in modern society through consideration of various fields. And also they should learn the attitude towards media and the basis of their use as consumers, as future professionals engaged in broad dissemination to society and markets.
＊
Learning Objectives
(1) To become aware of the mechanisms of communication through the media that occur in our daily lives and the functions of the media.
(2) Learn about both the necessity and problems of media communication, which is used for various purposes in society, such as monitoring the environment, managing businesses and institutions, and sharing culture.
(3) Students need to acquire the perspective of media literacy and be able to objectively evaluate the phenomena brought about by media and information. At the same time, students need to be able to take the perspective of public relations (PR) to gain the understanding and support of others, which is essential for all social activities.
＊
Learning activities outside of classroom
(1) Acquire the habit of thinking about the aims and effects of various media expressions on television, the Internet, and in urban spaces.
(2) Students will try to change their perspective and ideas about a certain media expression from the standpoint of both the audience and the sender/producer (media company, advertising company, etc.).
(3) In the first half of the class, students will be asked to pick up news about mass media that they have paid attention to, or that they have talked about with others, and submit them to the class. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
＊
Grading Criteria/Policy
Students will be required to submit small assignments each time (approx. 40%) and to write a review report (twice: approx. 60%). Based on this grading method, students who have achieved at least 60% of the achievement goals of this class will pass the class. However, students are required to submit at least 70-80% of the small assignments and two retrospective reports for credit.

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

社会と美術

平野　真弓

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：受講希望者が1000人を超えた場合、抽選を行います。抽選方法については学習支援システムを通じて連絡しますので、よく確認をしておいてください。

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ダ〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
国際文化学部基幹科目「社会と美術」は、普段接する機会の少ない、先進的な表現領域に対する理解を深めるための入門的な授業です。この講義では、特に21世紀以降に関心を集めている社会と芸術との関係に焦点を当て、パフォーミング・アーツ、音楽、建築などの表象の世界の様々な事例を参照し、社会と芸術の接点や関係性について探求します。
本授業は、「近現代美術の歴史と理論」と「現代社会の課題と美術」という2つのテーマで構成されており、各領域のキーワードからそれぞれの課題や問題を検討、議論します。
第一部　「近現代の芸術史と理論」では、18世紀以降から21世紀までの美術史と理論を包括的に学び、芸術表現の変遷とその背後にある思想や理論を探求します。
第二部　「現代社会の課題と美術」では、社会や時代を映す鏡としての芸術表現と現代社会との関係について具体例を交えながら学びます。21世紀以降に注目されている社会と芸術との関係を扱ったアートの世界に焦点を当てていきます。

【到達目標】
近現代の美術史と現代社会と美術に関する課題の事例を紹介していきます。近現代美術史の基本を理解すること、各時代の社会的課題と芸術との関連を見いだすことがこの講義の目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
オンデマンド方式により授業を行います。
授業当日の流れ（重要）
1.　指定された公開日に、Google Classroomにその日の学習内容を掲載した資料（Google sites）のリンクを掲載する。
2.　資料を見ながら学習を進める。（当日であれば、授業時間外に学習しても構いません。）
3.　サイト内に小テストや授業内レポートのリンク（Google Forms）が掲載されているので、回答して提出する。
4.　授業内容に関する質問については、Google Formsに書き込んでおくと回答します。
授業の方法
　授業時間になるとGoogle Classroomを通じて受講に必要なリンク先や課題の提出について公開します。公開したウェブサイトに授業に関連したテキストや授業概要の映像（YouTube、40‐ 60分程度）、必要な画像やウェブサイトのリンク先などが掲載されていますので、そのサイトを見て学習を進めてください。ウェブサイトは年度末まで公開しておきます。
課題
　受講後、Google Formsで課題（小テストと簡単なレポート）を提出してもらいます。提出期間は授業終了後数日程度です。
質問・相談
　一般的な質問や相談についてはGoogle Classroomのチャット機能を使ってください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	講義内容について、進め方と方法、評価方法と基準
第2回	近代美術の誕生 古典主義、ロマン派、写実主義、印象派	近代の始まりと芸術運動に関する講義を行います。近代は、市民革命と産業革命によってその幕が開けられました。この時期の重要な出来事や社会の変遷が、芸術にも深い影響を与えました。市民革命によって生まれた新しい社会秩序や価値観、そして産業革命による技術の進化が、芸術家たちに新たな表現の手段を提供しました。古典主義、ロマン主義、写実主義、印象派などの芸術運動は、単なる美的表現にとどまらず、社会の変動や文化の転換を反映し、近代というコンセプトを徐々に体現していきます。授業では、これらの芸術運動を通して、近代社会の多様性や複雑性に迫り、芸術が社会と相互の作用について学んでいきます。
第3回	アバンギャルドの時代Ⅰ フォービズム、表現主義、キュビズム	印象派以降のフォービズム、表現主義、キュビズムを中心に、第一次世界大戦前の芸術運動の流れについて学びます。画家たちはより自由な表現を求めて様々な実験を始めます。フォービズムは色彩や筆触を強調し、視覚的な効果を追求しました。表現主義は主観的な感情の表現に力点を置きました。また、キュビズムは立体的視点から物体を捉える手法についての実験をしました。ポスト印象派と呼ばれた画家のゴーギャン、ゴッホ、セザンヌは、印象派以降のこれらの20世紀の前衛芸術運動に大きな影響を与え、新しい視点やアプローチを提示しました。授業ではこれらの芸術運動に関する理解を深め、背後に潜むアイディアや文化的な文脈にも焦点を当てて学んでいきます。
第4回	アバンギャルドの時代Ⅱ 未来派、ダダイズム シュルレアリズム、ロシア構成主義、バウハウス	第一次世界大戦前後のアバンギャルド芸術運動（前衛芸術）である未来派、ダダイズム、シュルレアリズムについて、またロシア革命前後のロシア構成主義とシュプレマティズムについて学びます。この時代登場した芸術運動は、現代アートの基となるコンセプチュアルな発想や、パフォーマンスやインスタレーションの原型となるような新しいアイディアが登場します。
第5回	ワークショップ1 単元の復習とワークショップ	近代美術の誕生、アバンギャルドの時代Ⅰ、アバンギャルドの時代Ⅱの復習及びワークショップを行います。

第6回	第二次世界大戦と戦後アメリカ美術 抽象表現主義、ネオダダ、ポップアート	第二次世界大戦により、ヨーロッパ各地は大きなダメージを受け、芸術の中心地としての地位をアメリカに譲ることとなりました。アメリカではその経済力を背景に、現代芸術の躍動的な拠点となり、さまざまな芸術運動が登場します。抽象表現主義、ネオダダ、ポップアート、ミニマル、コンセプチュアルアートなど、アメリカを中心として登場した芸術運動に加え、アンフォルメル、ヌーボー・レアリズム、アルテ・ポーヴェラなどヨーロッパの動向についても学びます。
第7回	1960年代の市民運動と新しい動向 フルクサス、パプニング、ビデオアートミニマリズム、コンセプチュアルアート、ランド・アート、アルテ・ポーヴェラ	1960年代になるとアフリカ系アメリカ人公民権運動、ベトナム反戦運動、女性解放運動、LSDを使った平和を訴えるフラワーパワージェネレーションなどの市民運動が盛んになります。1960年代の芸術シーンでは、伝統的な絵画や彫刻に留まらず、さまざまな新しい表現手法が登場しました。物質生よりも思想や概念に焦点を当てたミニマルアートやコンセプチュアルアート、ハプニングやパフォーマンスアートは身体や行為を介して会への関与をするなど、新しい芸術の動向が登場します。
第8回	多文化の時代 ポストミニマリズム、新表現主義、関係性の美術 、ソーシャリー・エンゲージドアート	1989年にベルリンの壁が崩壊して東西ドイツの境界線がなくなり、さらに東ヨーロッパ全体が消滅、冷戦構造が終焉を迎えます。東西対立の時代からアフリカやアジア、南米などを含んだ多文化の時代に移行します。アートの世界でも、1980年代以降アメリカやヨーロッパ中心からグローバルな考え方が一般的になります。アメリカのコマーシャリズムにより生まれた新表現主義の時代を経て、ミレニアム前夜にイギリスとヨーロッパで発生した二つのムーブメント、ヤング・ブリティッシュ・アーティスト」（YBA）とリレーショナルアートについての理解を深めます。21世紀に入り、芸術はますます社会に関与する方向へと進化しています。ソーシャリー・エンゲージド・アートやソーシャル・プラクティスといった社会に関与する芸術運動が盛んになっています。
第9回	ワークショップ2 ・単元の復習とワークショップ	戦後アメリカ美術、1960年代／市民運動と新しい動向、多文化の時代の講義内容に関する確認をします。
第10回	政治とアート 退廃芸術展と大ドイツ展、戦争画、東日本大震災とアート、表現の不自由展	第二次世界大戦前には社会主義国のソビエト連邦が国家となり、ドイツにはナチス党が台頭しました。戦争に至る思想統制の中、これらの国々の自由な芸術の精神は、弾圧を受けることになります。ベルリンの壁崩壊以降のアートの動きや近年の表現の自由をめぐる論争、文化政策の変化など、政治とアートについてプロパガンダ、社会主義リアリズム、ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻、表現の不自由展などの具体的な事例を通じて、アートが政治的な状況にどのように対応し、影響を与えてきたのかについて理解します。
第11回	ジェンダーとアート	社会的・文化的な性区別を指す「ジェンダー」、性的マイノリティ（性的少数者）を表す総称である「LGBTQ」についての言及は一般的になってきていますが、現在でもジェンダーフリーや性的マイノリティの自由は十分に実現されていません。こうした課題に芸術が関与し、社会的な枠組みを拡大し、偏見や差別に対抗するための意識を喚起する役割を担い、社会が自由を獲得するためのプロセスについて考えます。
第12回	環境とアート	私たちは古くから自然を観察し、芸術作品の主題としてきました。自然が提供する様々な風景や生態系は、画家や彫刻家などのアーティストにとって永遠のインスピレーション源となっています。また、19世紀の自然主義の考え方や、近年のランドアートの試みなど、自然は芸術において重要な役割を果たしてきました。しかし、近年では地球規模での環境問題が深刻化し、私たちは自然との関係性を再評価せざるを得なくなっています。地球の温暖化、生態系の破壊、資源の枯渇など、環境問題は私たちの生活に直接関わるものとして認識されるようになりました。地球温暖と関連するエネルギー問題は、世界の大きな課題となっており、日本においては東日本大震災をきっかけとした自然災害と原発問題が今でも続いています。 アートの世界では環境問題への関心を高め、作品を通じて社会に対話を呼びかけます。アートを通じた環境問題へのアプローチは、単なる美的な観点だけでなく、社会的な意識を喚起し、持続可能な社会を喚起します。
第13回	感染症の時代	2020年以降、私たちは新型コロナウィルス感染症の拡大という未曾有の状況に直面しました。現在では、私たちにとってパンデミックはすでに少し以前にあった出来事のように感じています。過去にも天然痘、ペスト、スペイン風邪、エイズなどが世界中に大きな打撃を与えました。感染症が引き起こす社会的課題は、その時代背景や科学技術の進歩によって異なる側面を持ちます。アートはその時代の複雑な感情や社会的な変化を反映してきました。感染症の起こす社会的課題と各時代のアートが感染症をどのように表してきたのかを関連づけて学びます。
第14回	ワークショップ3 単元の復習、ワークショップ	14回の講義について振り返り、芸術と社会の問題についてディスカッションをします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Google sitesで配信する授業コンテンツには、学習を深めるためのウェブサイトのリンクが多く紹介されていますので、興味のあるものについては閲覧することをおすすめします。。また、大学の近くには美術館やギャラリーが多くあります。可能であれば企画展、常設展などの展覧会などを多く鑑賞してください。

本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Google sitesを通じて授業に必要な資料を配布します。いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】
山本浩貴『現代美術史-欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
デイヴィッド・コッティントン（著者）、松井 裕美（翻訳）『現代アート入門』名古屋大学出版会、2020年
『改訂版 西洋・日本美術史の基本 美術検定1・2・3級公式テキスト』美術出版社、2014年
『続 西洋・日本美術史の基本』美術出版社、2016年
『新・アートの裏側を知るキーワード』美術出版社、2022年

【成績評価の方法と基準】
成績評価については、平常点（授業への取り組み）、課題とレポートの合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　課題とレポート（50%）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
ワークショップではスケッチによるプランや写真作品など簡単な実践に取り組みますが、受講される皆さんは例年課題について積極的に取り組まれているようです。楽しく解りやすい授業を心がけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のためにGoogle classroomを使いますが、履修に関する情報については学習支援システムを併用しますので、よく確認しておいてください。

【その他の重要事項】
受講希望者が1000人を超えた場合、抽選を行います。抽選方法については学習支援システムを通じて連絡しますので、よく確認をしておいてください。
実務経験のある教員による授業
平野真弓はフィリピン・マニラ在住のキュレーター・リサーチャーです。フィリピンを中心に東南アジアの展覧会史やキュレーションにまつわる思想や実践方法を研究しています。実践と研究活動で得た知識と経験を毎回の講義に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
"Society and Art" is an introductory lecture that will allow you to see and think about the new world of expression that you rarely come into contact with. In particular, we will focus on the world of art, which deals with the relationship between society and art, which has been attracting attention since the 21st century. You will also learn about the points of contact between society and art and their relationships by referring to various examples of performing arts such as theatre, music, and the world of representations such as architecture. Focusing on the two themes of "art history and theory" (first half) and "society and art" (second half), we will examine and discuss each issue and problem from the keywords of each area.
1. Art history and theory Learn about the history and theory of modern and contemporary art from the 18th to 21st centuries, which is the basis for learning about society and art.
2. Society and art Learn about the relationship between media as a mirror that reflects society and the times and artistic expression, with concrete examples.
Learning Objectives
Introducing familiar examples of art history, contemporary society and art from the past to the present. This lecture aims to understand the workings of art history and to find universal and social issues from familiar problems.
Learning activities outside of the classroom
The content delivered on the Google site contains many website links to deepen your learning, so we recommend browsing the ones that interest you. There are also many museums and galleries near the university. If possible, depending on the infection status of the new coronavirus, please watch exhibitions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades will be evaluated based on the total of class activities, assignments and reports. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Issues and reports (50%)
See rubrics for specific assessment guidelines.
Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

メディアと社会

稲垣　立男

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉〈S〉〈ア〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
私たちは現在様々なメディアに接する環境にあり、それらを通じて個人や社会とつながることを可能にしています。一方でメディアの利用によって引き起こされる様々な問題もあり、多様化した現代のメディアについてよりいっそう理解を深める必要があります。
「メディアと社会」では、メディアが社会のなかでどのような役割を担っているのか、将来メディアはどのようになるべきなのか、映像資料などの具体例を交えて読み解いていきます。
「現代メディア史」「メディア論」「メディアと表象」の3つのテーマを軸として、各領域のキーワードからそれぞれの課題や問題を検討、議論します。
メディアの歴史
古代から現代までのメディアの変遷と歴史について学びます。
メディア論
社会の中で機能するメディアやその問題点について明らかにしていきます。
メディアと表象
メディアという観点から様々な表現を読み解いていきます。

【到達目標】
過去から現在に至るメディアと社会に関する身近な事例を紹介していきます。身近な問題から普遍的、社会的な課題を見いだすことがこの講義の目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
・受講希望者が1000人を超える場合、抽選を行います。
・オンデマンド方式により授業を行います。
授業当日の流れ（重要）
1.　指定された公開日に、Google Classroomにその日の学習内容を掲載した資料（Google Sites）のリンクを掲載する。
2.　資料を見ながら学習を進める。（当日であれば、授業時間外に学習しても構いません。）
3.　サイト内に小テストや授業内レポートのリンク（Google Forms）が掲載されているので、回答して提出する。
4.　授業内容に関する質問については、Google Formsに書き込んでおくと回答します。
授業の方法
　授業時間になるとGoogle Classroomを通じて受講に必要なリンク先や課題の提出について公開します。公開したウェブサイトに授業に関連したテキストや授業概要の映像（YouTube、40〜60分程度）、必要な画像やウェブサイトのリンク先などが掲載されていますので、そのサイトを見て学習を進めてください。ウェブサイトは年度末まで公開しておきます。
課題
　受講後、Google Formsで課題（小テストと簡単なレポート）を提出してもらいます。提出期間は授業終了後数日程度です。
質問・相談
　一般的な質問や相談についてはGoogle Classroomのチャット機能を使ってください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業計画
第2回	メディアの歴史1 絵と文字	今からおよそ6万6000年前に人類は言語能力を獲得したと言われています。（諸説あり）その後、絵や文字を使って記録するようになりました。ここでは文字の誕生とその発達の歴史について学びます。
第3回	メディアの歴史2 文字の進化	活字誕生以前の印刷技術、紙の誕生、活字の誕生と書体とフォントについて学びます。文字の発明により、私たちは様々な情報を記録として残すことが可能になりました。その後、記録を残すための技術が発達していきます。
第4回	ワークショップ（1） 単元の復習：絵と文字、文字の進化	タイポグラフィについて 書体とフォント フォントデザイン
第5回	メディアの歴史3 計算・通信・検索	メディアと歴史をテーマに、コンピューターの発明につながる技術と計算・通信・検索のもたらす社会の変化について学びます。
第6回	メディアの歴史4 マスメディア（新聞、雑誌、ラジオ、テレビ）	社会の近代化とともに登場した新聞、雑誌、ラジオ、テレビなどのマスメディアの起源について学びます。
第7回	ワークショップ（2） 単元の復習：計算・通信・検索、マスメディア	ワークショップ・未来のコミュニケーション
第8回	メディア論1 マクルーハンのメディア論	「メディアはメッセージ」、「グローバルヴィレッジ」など、メディアに関する新しい概念を発信したマクルーハンの理論やチョムスキーのメディアについてのメッセージについて学びます。
第9回	メディア論2 インターネット	1995年以降のインターネットの進化について、地域社会を取り巻くメディアの役割と課題について学びます。
第10回	ワークショップ（3） 単元の復習：マクルーハンのメディア論、インターネット	ワークショップ・インターネット
第11回	メディアと表象1 デジタルコンテンツの誕生	1877年のトーマス・エジソンによる録音技術の開発以降、アナログレコードやテープレコーダー、さらにデジタル技術の発展。2000年代から拡大したMP3プレーヤーやインターネットでの音楽配信サービスに至るまでの歴史について学びます。
第12回	メディアと表象2 プロパガンダ・コマーシャル	インスタレーション、パフォーマンス、リレーショナル・アートなどについて
第13回	メディアと表象3 メディアとアミューズメント	日本におけるクリスマスの受容の歴史について、また料理番組やレストラン批評、ネットでの料理の検索など料理をめぐるメディア論について学びます。

第14回　ワークショップ（4）　メディアと社会をめぐるディスカッション
単元の復習：デジタルコンテンツの誕生、プロパガンダ・コマーシャル、メディアとアミューズメント　ワークショップ・デジタルのイメージ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Google Sitesで配信する授業コンテンツには、学習を深めるためのウェブサイトのリンクが多く紹介されていますので、興味のあるものについては閲覧することをおすすめします。美術展や音楽コンサート、ダンスや演劇の公演などを多く観るようにしてください。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Google Sitesを通じて授業に必要な資料を配布します。いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】
マーシャル マクルーハン『メディア論―人間の拡張の諸相』みすず書房、1987年
吉見俊哉『メディア文化論―メディアを学ぶ人のための15話』有斐閣、2004年
ジョン・A. ウォーカー、サラ チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門―美術史を超えるための方法論』晃洋書房、2001年

【成績評価の方法と基準】
成績評価については、平常点（授業への取り組み）、課題とレポートの合計で行います。取り組みの実験性や積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　課題とレポート（50%）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
ワークショップではスケッチによるプランや写真作品など簡単な実践に取り組みますが、受講される皆さんは例年課題について積極的に取り組まれているようです。メディアに関する複雑な問題点について、わかりやすく教えていきたいと思います。

【その他の重要事項】
実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を毎回の講義に反映させています。

【Outline (in English)】
We can connect with individuals and society through media. On the other hand, there are various problems caused in the course of these connections, so we need to deepen our understanding of diversified media.
This course will explore what role media has in society, how future media should be, and concrete examples such as video materials.
Focusing on the three themes of "History of Contemporary Media," "Media Theory," and "Media and Representation," we will consider and discuss issues and issues from keywords in each area.
1. Media history
Learn about the history of the media from ancient times to the present.
2. Media theory
We will clarify the media that work in society and their problems.
3. Media and representation
Read and understand various expressions from the perspective of the media.
Learning Objectives
Introducing familiar examples of media and society from the past to the present. This lecture aims to find universal and social issues from everyday issues.
Learning activities outside of the classroom
The content delivered on the Google site contains many website links to deepen your learning, so we recommend browsing the ones that interest you. There are also many museums and galleries near the university. If possible, depending on the infection status of the new coronavirus, please watch exhibitions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades will be evaluated based on the total of class activities, assignments and reports. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Issues and reports (50%)
See rubrics for specific assessment guidelines.
Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

身体表象論

深谷　公宣

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：定員60名。それを超えたら選抜

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
視覚芸術・文化に表現された身体を手がかりに、身体をみる／みせるとはどういうことかについて学ぶ。身体と社会の境界が歴史的・文化的に規定されていることを確認し、人間の身体を社会的にどのように位置づければよいのか、受講生が自分なりの考えを構築できるようにする。

【到達目標】
・芸術、文化における身体運動の表象形式を理解することができる。
・身体表象の特徴を、歴史的、社会的に位置づけることができる。
・作品に表現された身体に関する自分なりの見方を構築し、作品を批評・分析・記述することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・資料を元に講義する。受講生は毎月1回、その月に受けた授業に関するリアクション・ペーパーを提出する。
・リアクション・ペーパーのコメントを授業内で適宜、紹介することにより、フィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス 絵画における身体（1）	基本概念・用語の説明。参考文献の紹介。遠近法、聖母子像について考える。ジョット、ラファエロなど。
2	絵画における身体（2）	ヴィーナスの表象について考える：ボッティチェリ、ティッツィアーノ、ジョルジョーネ、マネなど。
3	彫刻における身体（1）	ルネサンス期から近代までの彫刻の身体表現について考える。ミケランジェロ、ベルニーニなど。
4	彫刻における身体（2）	日本における仏像の歴史と特徴的な姿勢について紹介する。
5	演劇における身体（1）	俳優という存在のあり方について考える。スタニスラフスキー・システム、鈴木メソッドなど。
6	演劇における身体（2）	パフォーマンスにおける身体と性のあり方について考える。シェイクスピア、宝塚、ダムタイプなど。
7	写真における身体（1）	肖像写真における顔、表情と「自己」について考える。アウグスト・ザンダー、ダイアン・アーバス、シンディ・シャーマンなど。
8	写真における身体（2）	写真における身体の位置と構図との関係について考える。アンリ＝カルティエ・ブレッソン、ロバート・フランクなど。
9	映像における身体（1）	映画における身体表象を鑑賞するのに必要な知識として、ショットとアングルの効果について確認し、具体例を用いながら考える。小津安二郎、溝口健二など。
10	映像における身体（2）	映画における人種の表象について考える。『招かれざる客』、など。
11	服飾における身体（1）	西洋における服飾の歴史的変遷を概観する。
12	服飾における身体（2）	日本における服飾の歴史的変遷を概観する。
13	舞踊における身体（1）	モダンダンスについて概観し、それが映画に取り入れられていく事例を考察する。マヤ・デレン、『ダンシング・チャップリン』など。
14	舞踊における身体（2）／授業のまとめ	前回に引き続き、モダンダンスについて概観し、その一部が取り入れられたミュージック・ビデオの文化的意義について紹介する。授業のまとめをおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
下記【参考書】に記載の資料を出来るだけ読むように努める。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。毎回、資料を配布する。

【参考書】
小林康夫『表象文化論講義　絵画の冒険』（東京大学出版会）
諸川春樹他『彫刻の解剖学ードナテッロからカノーヴァへ』（ありな書房）
清水真澄『仏像の顔』（岩波新書）
飯沢耕太郎『写真美術館へようこそ』（講談社現代新書）
西村清和『視線の物語　写真の哲学』（講談社メチエ）
森村泰昌『美術の解剖学講義』（ちくま学芸文庫）
ウォーレン・バックランド『フィルムスタディーズ入門』（晃洋書房）
蓮實重彦『監督　小津安二郎　〔増補決定版〕』（ちくま学芸文庫）
ジル・ドゥルーズ『シネマ』（1・2）（法政大学出版局）
矢田部英正『たたずまいの美学』（中公文庫）
スーザン・ソンタグ『反解釈』（ちくま学芸文庫）
鷲田清一『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫）
ジョン・バージャー『イメージ』（PARCO出版）
ダムタイプ『メモランダム　古橋悌二』（リトルモア）

【成績評価の方法と基準】
平常点30%: 毎月1回のペースで、リアクション・ペーパーを3回提出する。各回について、それまでの講義内容を把握し、自分なりに解釈することができているかを評価。
学期末レポート70％：身体表象に関するトピックについて分析的に考察し、考察の結果を丁寧に記述することができているかを評価。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
授業の進行状況により、扱うテーマや作品を変更することがあります。

【Outline (in English)】
・Course Outline: Through examining a form of body representation in visual art and culture, this course aims to introduce students to the way of viewing or showing the human body. With the idea of a historically or culturally defined boundary between the body and society, students will develop their own way of viewing the human body from a social perspective.
・Learning Objectives: By the end of this course, students will be able to understand the various styles in body representation seen in the field of art and culture and connect such styles with historical and social background. As a result, they will be able to provide a critical insight into the bodies in the work of art.
・Learning activities outside of the classroom: read the recommended books in the 'References'.
・Grading Criteria/Policy: Class participation 30%, Final paper 70%.

PHL200GA（哲学 / Philosophy 200）

現代思想

森村　修

サブタイトル：「生まれてこない方がよかった」とはどういうことか？ —— 反出生主義入門
配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【授業の概要】
本授業は「現代思想（contemporary thought）」という科目名がついているが、ただ単に「現代の流行の思想」を学ぶだけが目的ではない。私たちが生きている「同時代（contemporary）」で起こる出来事や物事の、「起源」や「本質」について「哲学的に考えること（philosophical thinking）」が「現代思想」という科目の目的である。
2026年度も、**デイヴィッド・ベネター（1966-）** の『生まれてこないほうが良かった—— 存在してしまうことの害悪』（**2006/邦訳新訂版2024**）を通じて、世界中にさまざまな影響を与えた思想としての「反出生主義」について哲学的に考察する。その際に、ベネターのテキストを十分に理解するために、ベネターのテキストを翻訳した小島和男氏（学習院大学教授）の『反出生主義入門—— 「生まれてこないほうが良かった」とはどういうことか』（2024）を用いて授業を進める。

【到達目標】
(1)「哲学的に考えること（philosophical thinking）」ができようになる。
(2) 本当の「哲学の問い」を探り、その問いに答える努力のなかで、生き方をもう一度捉え直し、自分が何をなすべきかを、ひとり一人考える力を身につけていくことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
毎回、授業概要を講義形式で行い、テキストの読解を授業内で試み、その理解を深める。授業で提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション—	・授業の概要説明 ・デヴィッド・ベネターとは誰か？
2	『反出生主義入門』①	Ⅰ. 反出生主義にふみ込む前に① 1. なぜ倫理の問題を考えなければならないのか？ 2. 中絶は不道徳か否か？
3	『反出生主義入門』②	Ⅰ. 反出生主義にふみ込む前に② 3. 未来への責任はあるか？
4	『反出生主義入門』③	Ⅱ.「生まれてこないほうが良かった」とはどのようなことか？ ① 1.『生まれてこないほうが良かった』全体の構成 2. 可能的存在についての価値判断
5	『反出生主義入門』④	Ⅱ.「生まれてこないほうが良かった」とはどのようなことか？ ② 3. 基本的非対称性とその説明力
6	『反出生主義入門』⑤	Ⅱ.「生まれてこないほうが良かった」とはどのようなことか？ ③ 4. 快が苦を打ち消せば良いのではないかという反論
7	『反出生主義入門』⑥	Ⅱ.「生まれてこないほうが良かった」とはどのようなことか？ ④ 5. 人生の質の評価と世界における苦痛
8	『反出生主義入門』⑦	Ⅱ.「生まれてこないほうが良かった」とはどのようなことか？ ⑤ 6. 子どもを作る権利について 7. 妊娠中絶賛成派
9	『反出生主義入門』⑧	Ⅱ.「生まれてこないほうが良かった」とはどのようなことか？ ⑥ 8. 段階的絶滅 9. 子どもを持たないことへの偏見とベネターの思い
10	『反出生主義入門』⑨	Ⅲ. 反出生主義について考えるうえで重要なこと① 1.『生まれてこないほうが良かった』がミソジニーである理由
11	『反出生主義入門』⑩	Ⅲ. 反出生主義について考えるうえで重要なこと② 2. 自殺について
12	『反出生主義入門』⑪	Ⅲ. 反出生主義について考えるうえで重要なこと③ 3. 親を責めても良いのか？
13	『反出生主義入門』⑫	Ⅲ. 反出生主義について考えるうえで重要なこと④ 4. 子どもを作っては絶対にいけないのか？ 5.「始める価値」と「続ける価値」の違いをベネターが強調しない理由
14	反出生主義とは何だったのか—— 総括	Ⅲ. 反出生主義について考えるうえで重要なこと⑤ 6. パズル解きか実存的な自分の問題か？ 7. 反出生主義と教育、それと養子について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業前に、基本的なテキストを必ず読んでおくこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
(1) デイヴィッド・ベネター『生まれてこないほうが良かった—— 存在してしまうことの害悪』、すずさわ書店、2024年
(2) 小島和男『反出生主義入門—— 「生まれてこないほうが良かった」とはどういうことか、青土社、2024年

【参考書】
(1) David Benatar, *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*,Harvard University Press, 2006.
(2)
※ テキスト以外の参考書については、授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
①期末試験・レポート（30％）、授業内レポート・レジュメ（30％）、平常点（40％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
※ 成績評価の方法と基準については、あくまで対面式授業の場合であり、リアルタイム・オンライン授業の場合は、成績評価の方法ならびに基準が変更されるので注意が必要。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
※ リアルタイム・オンライン授業に際しては、インターネット環境が整っていること、そのための機材が用意されていることが必須である。

【その他の重要事項】
1. 本科目は、「基幹科目」として、表象文化コースに配置されているが、コースの分類に関わらず興味のある学生に積極的に参加してもらいたい。
2. テキストが比較的高価であったり、テキストが英語を含む外国語を用いる場合、授業に参加する学生が激減する傾向にある。何が自分にとって必要かつ重要であるか、根本的に問い直してもらいたい。
3. テキストの選定や興味については学生の要望に応えることもありうるので、第1回目の授業には必ず参加すること。
4. 2025年度では、受講生数があまりに多かったため、事前に「選抜テスト」を行った。2026年度も同様の事態が危惧されるため、受講生が多数の場合には授業登録前に「選抜テスト」を行う予定である。

【Outline (in English)】
The purpose of the subject "modern thought" is to acquire the philosophical thinking about origin and essence of events and things occurring in the contemporary society where we live in. Therefore, although this class has the subject name "contemporary thought", it does not have the only purpose of learning the thought of modern trends. The purpose of this class is to philosophically examine “anti-natalism” through David Benatar’s (1966-) “Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence” (2006/New Revised Japanese Edition 2024).
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to think philosophically.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 70%,in class contribution: 30%.

LIT200GA（文学 / Literature 200）

言語文化概論

衣笠　正晃

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、20世紀以降さまざまな領域で展開された、言語（ことば）を手がかりとして文化や社会、そこに生きる人間のあり方を捉え直そうとした学問的営み（理論・概念）について学び、現代に生きる私たちが世界をどう見つめ、向き合うかを考えます。

【到達目標】
1）テキストや資料の誠実な読みにもとづいて、思想家たちの思想的背景や問題意識を捉え、その理論と基本概念を理解する。
2）言語（ことば）と文化・社会との密接なかかわりについて「意味」「身体」「権力」「テクノロジー」などといった観点から検討し、理解を深める。
3）学んだ理論を手がかりに、現代社会とそこに生きる自らのあり方についての問題意識をはぐくみ、自らのことばで表現・伝達する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　各回とも、出席者がテキストおよび事前配付資料の指定箇所を読み、十分な予習をおこなっていることを前提として、ハンドアウトで授業の流れを示しながら講義を進めます。
　授業形式は講義が中心となります。皆さんの主体的な取り組みを促し、その疑問の解決をはかるため、原則として毎回予習確認のためのクイズ（小テスト）を実施するとともに、リアクションペーパーのかたちで、感想や質問を提出してもらいます。リアクションペーパーのコメントや質問については次回授業で取り上げてフィードバックをおこないます。また復習を兼ねたミニレポートを提出してもらうことがあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス／イントロダクション	授業計画の説明＋4つの「ポスト状況」と現代思想の問い（テキスト第1章）（リアルタイムオンラインで実施）
2	19世紀から20世紀への思想的転回	実証主義・歴史主義からの転換とその社会背景
3	言語学の再定義	ソシュールによる一般記号学の構想（テキスト第2章）
4	ことば・無意識・主体	フロイトと精神分析（テキスト第4章）
5	ことばとしての文化	構造主義革命と一般記号学（テキスト第5章）
6	ことば・権力・規律	フーコーの「知の考古学」（テキスト第7章）
7	象徴支配と階級	ブルデューの文化社会学（テキスト第8章）
8	メディア・テクノロジーと文化産業(1)	マクルーハンと「グーテンベルク革命」（テキスト第9章）
9	メディア・テクノロジーと文化産業(2)	想像力の産業化と「象徴的貧困」（テキスト第10章）
10	国語とナショナリズム	国民国家と伝統の発明（テキスト第13章
11	アイデンティティと世界の変革	ジェンダー、エスニシティ、差異と同一性（テキスト第14章
12	「人文知」のあり方の転換(1)	20世紀思想の問題圏（テキスト第15章）
13	「人文知」のあり方の転換(2)	ポスト・ヒューマニズムをめぐって
14	学期授業の総括	学期末試験・振り返りとまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回とも教員の指示に従ってテキストや事前配付資料を授業までに精読し、質問ポイントを考えておくこと（授業のなかで小テストなどによって予習状況を確認します）。また課題としてミニレポートが課された場合は、期日までに作成し提出すること。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・石田英敬『現代思想の教科書――世界を考える知の地平15章』（筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、2010年）
※上記テキスト以外にも随時プリントを配付・使用します。

【参考書】
・岡本裕一朗『フランス現代思想史――構造主義からデリダ以後へ』（中央公論新社〈中公新書〉、2015年）
・石田英敬『記号論講義――日常生活批判のためのレッスン』（筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、2020年）
※その他、授業で随時指示します。なお上記テキスト（教科書）末尾の「読書案内」も参照してください。

【成績評価の方法と基準】
平常点（50％：リアクションペーパー、小テストなどの提出物を含む）と学期末試験（50％）をあわせて評価します。評価にあたっては以下の4点の達成度にもとづいて判断します。
1）テキストや資料についての予習が十分におこなわれているか。
2）思想家の思想的背景や問題意識のあり方、理論と基本概念が理解できているか。
3）授業にもとづき現代の文化・社会について自らの問題意識を具体的にもてているか。
4）授業をつうじて学び・考えたことを、主体的・説得的に表現できているか。
※この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
履修者による自発的・主体的な問題発見や取り組みをさらに促すように努めたい。またクラス規模を考慮したうえで、出席者による議論や意見交換の機会を取り入れたい。

【学生が準備すべき機器他】
授業資料の配付や提出物の回収、授業に関する連絡など、学期を通じて学習支援システムを利用します。小テスト等で利用することがありますので、指示があった場合は授業にデバイス端末（PCやタブレットなど）を持参してください。

【その他の重要事項】
・初回授業はリアルタイムオンラインで実施します（詳細は秋学期開始時に学習支援システムに掲示します）。万一受講者数が教室定員を超過する場合は、初回授業の課題にもとづき選抜をおこないます。
・履修者数などに応じて授業の進め方に修正を加えることがあります。

【Outline (in English)】
This course outlines the development of cultural and social theories since the beginning of the 20th century, paying particular attention to the impact of the so-called “linguistic turn" on the humanities. The goals of this course are to obtain basic knowledge of 20th-century cultural and social theories and theorists, to understand the inextricable relationship between language and culture, and to have a critical awareness toward the issues of the contemporary world. Students are expected to come to class well prepared by completing the required assignments; the required study time is more than four hours per class. The overall grade will be decided based on class participation (50%) and the final examination (50%).

LIT200GA（文学 / Literature 200）

比較文化

岩下　弘史

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ポストコロニアリズム、オリエンリズム、ジェンダー論、構造主義、文化人類学などの「理論」にも目くばせをしながら、比較文学・比較文化に必要な基礎を学ぶとともに、それらの理論を文学や映像作品など実際の芸術作品の比較分析に応用していきます。

【到達目標】
文化を比較するにあたって、単なる相違の指摘に留まらず、より深い社会的・文化的な背景の考察へと思考を深めていくときに役にたつのが、様々な「理論」です。この授業では、文化について考えるにあたって我々を助けてくれるいくつかの理論をとりあげ、具体的な作品分析への応用を通じてその理解を深めます。
授業での学びを通じて、学生は、ジャンル・時代・言語等を異にする文化の作品間の比較文化的な分析ができるようになるとともに、様々な「理論」を理解し、作品分析に応用できるようになることを目指します。
また「理論」は必ずしも文化を理解するのに万能ではありません。「理論」の限界とそれ以外の文化研究の手法についても学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業資料を元に講義をおこないます。事前に課題図書を読む必要がある回もあります。また講義の残り15分ほどで、講義についての課題を提出してもらいます。
フィードバックとして、毎回次の授業の際に前の授業で出された課題への回答にコメントをしていきます。また授業冒頭では皆さんが提出した回答のなかで重要な論点につながるものをとりあげて、復習もします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初回説明	授業の概要を説明する。
2	比較文学・比較文化研究の歴史・概要	比較文学・比較文化研究の歴史・概要について理解する
3	比較文学研究と関わる「理論」について①	比較文学研究と関わる「理論」、主にポストコロニアリズムについて学ぶ
4	比較文学研究と関わる「理論」について②	比較文学研究と関わる「理論」、主にフェミニズムについて学ぶ
5	文学と思想のかかわり①——夏目漱石の『こころ』とウィリアム・ジェイムズの宗教思想との関わり	夏目漱石の『こころ』とウィリアム・ジェイムズの宗教思想との関わりについて学ぶ
6	文学と思想のかかわり②——夏目漱石の『三四郎』とフェミニズムとの関わり	夏目漱石の『三四郎』と同時代思想ならびにフェミニズムとの関わりについて学ぶ
7	国境を越える芸術作品——翻訳研究①（谷崎潤一郎『痴人の愛』、吉本ばなな『キッチン』などについて）	翻訳研究の実践から学ぶ
8	国境を越える芸術作品——翻訳研究②（多和田葉子『えエクソフォニー』を読む）	翻訳の意義について考える
9	国境を越える芸術作品——翻訳研究②（『フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』と村上春樹らによる翻訳の検討）	翻訳研究の実践から学ぶ
10	アダプテーション研究——ジャンルを越境する文化①（『グレート・ギャツビー』の映画化についての背景）	アダプテーション研究や理論の概要を学ぶ
11	アダプテーション研究——ジャンルを越境する文化②（『グレート・ギャツビー』原作と映画の比較）	アダプテーション研究の実際の例を見て学ぶ
12	アダプテーション研究——ジャンルを越境する文化③（英米テレビドラマの比較）	アダプテーション研究の実際の例を見て学ぶ
13	比較文化研究の紹介——比較文化研究の実践に学ぶ	比較文化研究の実際の例を見て学ぶ
14	まとめと期末試験	授業のまとめをおこないつつ、期末試験に取り組む

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・課題図書が出た場合は必ずそれを読んできてください。
・4回以上課題を出さなかった場合、あるいは授業を欠席した場合単位修得の権利を失います。
・本授業の準備・復習時間は、約4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特にないですが、各回に用いる資料は印刷して、あるいは学習支援システムを通じて配布します。

【参考書】
松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』（世界思想社、1995）、佐々木英昭編『異
文化への視線一新しい比較文学のために』（名古屋大学出版会、1996）、Ben Hutchinson, Comparative Literatue: A Very Short Introduction (Oxford UP,2018)など。その他適宜授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】
・毎週の課題ならびに授業への参加（平常点）：65%
・期末試験：35%
・100点満点で60点以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
もう少しコメントを書く時間をとりたい。

【その他の重要事項】
受講者の人数や進度によって扱う題材に若干の変更があるかもしれません。あらかじめご了承ください。また成績のつけかたに若干の変更があるかもしれません。その際には必ず1〜3回目の授業で繰り返しお伝えいたします。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
In this course, students will learn the basics of the comparative literature and culture and finally how to analyze literary works and movies.
【Learning Objectives】
Students will learn how to compare and analyze literary works and movies in various viewpoints.
【Learning Activities outside of Classroom】
Students are expected to submit their answers to weekly study questions by due date.
【Grading Criteria/Policy】
Assignments and active participation in class discussion: 65%
Final exam: 35%

GDR200GA（ジェンダー / Gender 200）

ジェンダー論

佐々木　一惠

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉〈S〉〈ダ〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
多様性に富むグローバルな文化・社会を理解する上で、ジェンダーは重要な視点の一つです。この授業では、文化的・社会的な性の有り様としてのジェンダーが、歴史的にどのように構築されまた変化してきたかを、言説という概念を軸に考えていきます。そこから、自文化ならびに異文化について、ジェンダーの視点を通じて、より多角的な分析と理解ができるようになることを目指します。

【到達目標】
１．ジェンダー研究における基礎的概念を理解できるようになる。
２．言説分析の基本的な方法論を習得し、ジェンダーに関連する諸問題について、基礎的な言説分析ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
【重要なお知らせ】初回の授業はオンデマンドで実施し、2週目以降は対面で授業を行います。受講を希望する人は4月9日（木）までに学習支援システムでこの授業を登録してください。受講希望者が100名を超える場合は抽選を行います。受講を希望される方は、4月9日（木）に学習支援システムでアップロードされる登録希望票を記入してください。締切は4月11日（土）の午前10時です。4月12日（日）に抽選結果を学習支援システムでお知らせします。第2回目からの授業は抽選に合格した人のみ受講できます。
●ジェンダー研究において重要な諸概念（母性・身体・家族・セクシュアリティ・恋愛・マスキュリニティなど）を、歴史的な視点と現代日本の日常生活における視点の双方から検討していきます。
●一次資料の簡単な分析を行ってもらいます。そこから、概念・方法論の理解と実践方法を学んでいきます。
●毎回の授業の最後に出される問いに対する分析を、リアクションペーパーの形で提出してもらいます。
●提出されたリアクション・ペーパーについては、翌週の授業で複数紹介しながら講評します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の概要について
2	「男らしさ」と男性学の視点	①役割理論から、「男らしさ」を一つの「役割モデル（role model）」として考察する。 ②1980年代以降の男性学の系譜について理解する。
3	「男らしさ」と相互行為論	①＜男らしさ＞を相互行為論（アーヴィング・ゴフマンのドラマトゥルギーならびにイブ・セジウィックのホモソーシャリティ）の概念から考察する。 ②ホモソーシャリティ（男同士の絆）と国民国家・近代スポーツ・軍隊について検討する。
4	「母性」イデオロギー	①日本における国民国家形成と「母親」への役割期待の関係性、並びにその変遷について検討する。 ②高度成長期における母性イデオロギーの形成について議論する。 ③今日の日本社会における母親・母性に関する問題と、その背景について検討する。
5	性役割と「母性」	母親や母性に関する言説が、法律や政策にどのような形で影響を与えているのかを、親権並びに代理出産を事例として検討する。
6	異性愛規範とゲイ・スタディーズの視点	①近現代日本における同性愛の系譜を辿りながら、異性愛規範について考察する。 ②セクシュアリティをアイデンティティ概念から捉え、クイア・スタディーズの新たな視点について検討する。
7	性の商品化と消費	①フェミニズムにおける重要なテーマである、「性と生殖に関する自己決定権」の背景としての、近代における性規範について考察する。 ②ポルノグラフィと買売春を事例に、セクシュアリティの問題を検討する。
8	ジェンダーと身体規範	①美容整形の系譜をたどり、近現代におけるジェンダー化された身体規範と整形美容の関係について検討する。 ②「改造」できる身体という概念にもとづく美容整形をめぐる議論とその論点について検討する。
9	身体と自己アイデンティティー	「消費」という視点から、身体とアイデンティティの問題について検討する。
10	「ロマンティック・ラブ」イデオロギーと恋愛の物語性	①「恋愛」という概念がどのように日本に定着していったのかを議論する。 ②ロマンティック・ラブ・イデオロギーについて検討する。 ③「恋愛」の物語性について、ドラマなどの事例から検討する。
11	近代家族と「家庭」イデオロギー	①「近代家族」と国民国家形成との関係性について検討する。 ②「近代家族」の規範となった３つのイデオロギー（ロマンティック・ラブ、母性、家庭）について検討する。 ③「近代家族」の変容とその背景について議論する。
12	フェミニズムとジェンダー論	フェミニズムの思想的背景や展開の概略を理解し、今日におけるジェンダー論の視座を議論する。
13	今学期の授業に関する質疑応答	質問やコメントに答える。
14	試験・まとめと解説	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
次週の授業に関連する基礎概念について調べておくこと。授業内容の復習を行い、課題を作成すること。なお、本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
伊藤公雄『男性学入門』（作品社、1996年）。

伊藤公雄、牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』（世界思想社、2025年）。
千田有紀、中西祐子、青山薫『ジェンダー論をつかむ』（有斐閣、2013年）。
江原由美子、山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』（有斐閣、2006年）。
高橋幸、永田夏来『恋愛社会学：多様化する親密な関係に接近する』（ナカニシヤ出版、2024年）。
木村涼子、伊田久美子、熊安貴美江『よくわかるジェンダー・スタディーズ』（ミネルヴァ書房、2013年）。
伊藤 公雄、樹村 みのり、國信 潤子『女性学・男性学 - ジェンダー論入門』（有斐閣、2019年）。

【成績評価の方法と基準】
リアクション・ペーパー　40　%
期末試験　　60　%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
スマートフォンやパソコン等情報機器が必要です。

【その他の重要事項】
●初回の授業はオンデマンドで実施し、2週目以降は対面で授業を行います。
●受講を希望する人は4月9日（木）までに学習支援システムでこの授業を登録してください。受講希望者が100名を超える場合は抽選を行います。受講を希望される方は、4月9日（木）に学習支援システムでアップロードされる登録希望票を記入してください。締切は4月11日（土）の午前10時です。4月12日（日）に抽選結果を学習支援システムでお知らせします。
●第2回目からの授業は抽選に合格した人のみ受講できます。

【Outline (in English)】
The course is designed to facilitate an understanding of culture and society from the perspective of gender and sexuality. It introduces various issues related to gender and sexuality so that students become better able to analyze their own culture as well as other cultures in a multifaceted way from the standpoint of gender.
By the end of the course, students are expected to be able to: 1) understand the basic concepts in gender studies, and 2) acquire basic methods of discourse analysis and conduct basic discourse analysis on various gender-related issues.
Students will be expected to 1) check the basic concepts related to the next class lecture, and 2) review the content of the class and work on the assignments.
The final grade will be decided by the reaction paper (40%) and the final assignment (60%).

LIN200GA（言語学 / Linguistics 200）

異文化間コミュニケーション

副島　健作

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文化背景の異なる個人同士が出会い，互いに理解しあえる関係を築くというのは，人や情報の往来が加速度的に増す今日，もはや特別なことではない。
　異文化者が出会ったとき、それぞれの背景の文化が異なることが原因でどういうことが起こってくるのか。最悪のコミュニケーション・ブレイクに陥らないためには，どのような知識や心構えが必要だろうか。実例に基づくケーススタディを通して，この問いをコミュニケーションの観点から考えていく。

【到達目標】
1. コミュニケーション分野の主要な理論や概念を学び、文化が私たちのコミュニケーションに及ぼす影響について理解を深める
2. 実際の異文化接触場面で活用していけるような知識を修得する。
3. 多角的な視点を獲得し，「相手」とのインターアクションを通じて関係を改善する能力を養う

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
日本人と外国人がコミュニケーションをする上で，また，性別や年齢、地域性や社会的役割などの文化差が起因となる諸問題について、ケーススタディに取り組んでいく。学期末には，授業のまとめの活動として受講生自身で身近な異文化摩擦や誤解のケースを収集し，討論や考察をすすめていく。
・課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション「文化とコミュニケーション」について	授業の進め方について解説する「文化」をどうとらえるかについて講義する
2	判断保留・多面的思考の重要性について	現代社会を概観し，文化，コミュニケーション，異文化コミュニケーションの概念を整理する
3	事例研究①　海外旅行に関するケース	海外旅行で起きるすれ違いや摩擦
4	事例研究②　海外留学に関するケース	海外留学で起きるすれ違いや摩擦
5	事例研究③　海外赴任に関するケース	海外赴任で起きるすれ違いや摩擦
6	事例研究④　帰国日本人に関するケース	帰国日本人が経験する摩擦
7	事例研究⑤　日本在住外国人に関するケース	日本在住外国人が経験する摩擦
8	事例研究⑥　共文化に関するケース	共文化の違いによって起きるさまざまな問題
9	事例研究⑦　国際協力に関するケース	国際協力における交流の諸相
10	事例研究⑧　国際交渉に関するケース	国際交流における交流の諸相
11	事例研究⑨　マスメディアの影響に関するケース	メディア報道における交流の諸相
12	受講生による事例報告①：受講生のうち半分が発表	文化の体現者であるということと、異文化を理解するということにおける問題点を考えながら報告するー受講生を半分に分け，前半グループが報告する
13	受講生による事例報告②：残りの半分が発表	文化の体現者であるということと、異文化を理解するということにおける問題点を考えながら報告するー受講生を半分に分け，後半グループが報告する
14	討論・議論（授業内での期末試験実施の可能性あり）	これまでの学びを踏まえて提示されてきたテーマを扱う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
必ず教材の該当箇所を読んだ上で授業に参加し，その内容に関する疑問点や関連して討論してほしい内容，コメント等を用意すること。また，設定されたテーマに関して，自分なりの意見が披歴できるように普段から情報収集等を行うこと。
　本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
決まったテキストを使う予定はありません。

【参考書】
石井敏・久米昭元 (他) (2013)『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション―多文化共生と平和構築に向けて』有斐閣選書
久米昭元・長谷川典子 (2007)『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣選書
八代京子 ほか (2001)『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社

【成績評価の方法と基準】
平常点30％
提出物20％
事例報告20％
期末試験またはレポート30％で評価します。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
この授業は「コミュニケーション」の授業なので，学生への質問も活発に行い，グループワークも適宜取り入れます。コミュニケーションが苦手な学生でも積極的に参加しようとする姿勢を評価します。一方，コミュニケーションを最初から拒否する姿勢が少しでも見られれば，その受講生は教室内に存在していないとみなします。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In today's world, where the traffic of people and information is increasing at an accelerating pace, it is no longer unusual for individuals with different cultural backgrounds to meet and build mutually understandable relationships.
　When people from different cultures meet, what happens because of the different cultures in their backgrounds? What kind of knowledge and preparation is necessary to avoid the worst communication break? Through case studies based on actual examples, we will consider these questions from the perspective of communication.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1. To learn the major theories and concepts in the field of communication and gain an understanding of how culture affects our communication

2. To acquire knowledge that can be applied in actual cross-cultural contact situations
3. To gain multiple perspectives and develop the ability to improve relationships through inter-action with the "others".
【Learning activities outside of classroom】
Be sure to read the relevant parts of the study materials before participating in the class, and be prepared to raise questions about the content, discuss related topics, and make comments. In addition, students are expected to collect information so that they can express their own opinions on the set topics.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end report: 30%, Case study report: 20%, Assignments: 20, in class contribution: 30%

PHL200GA（哲学 / Philosophy 200）

Philosophy of the Public Sphere

石田　安実

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：人数制限あり
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.

その他属性：〈グ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

People often think that "philosophy" is quite an old subject – and very *difficult*, unfortunately. It is true that philosophical questions have been discussed in rather complicated and often confusing manners since many years ago, for example, by Socrates and Aristotle in the ancient Greek period. But many philosophers did and do believe that these questions are closely related to our everyday life. That is, we are surrounded by many *philosophical* issues, although we may not always be aware of their philosophical significance. Philosophical issues are thus basically our everyday issues. But how are they related to our life?

In this course, you will discuss various philosophical topics, their in-depth meanings, and their philosophical significance, attempting to find their very relevance to your life. I hope that *under the new perspective* gained in this course, you will be able to see your surroundings, your society, and the world in quite exciting and interesting manners. Out of many philosophical topics found in our daily life, we will pick and discuss 13 topics in class.

【到達目標】

This course provides a broad introduction to philosophical ways of thinking. It is open to students from all disciplines who wish to:
(1) understand some of the most fundamental philosophical topics (such as freedom, truth, and moral rightness and wrongness);
(2) develop the ability to explain these issues in clear, everyday terms; and
(3) apply philosophical ways of thinking (reasoning) to everyday issues.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】

L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】

Basic course requirements:

＊**No cell-phones are allowed to use in class.**
＊No prior coursework in philosophy is required.
＊Intellectual curiosity, with keen attention to facts and issues in everyday life.
＊A respectful attitude toward others' opinions.

-
-

On enrollment:

Enrollment in this course is limited to 20 students and will be granted on a first-come, first-served basis. Therefore, if you wish to take this course, please act promptly and follow the steps below:

(1) **You must send me an email (to the address below) explaining why you would like to take this course:**
yasushi.ishida.85@hosei.ac.jp

(2) If you are accepted, you will receive a confirmation email. If you are not accepted, you will be placed on a waiting list in the order in which applications are received (i.e., sending me the mail).

(3) Students who receive a confirmation email may then proceed with the 本登録 (official registration) process.

(4)**[Important] If you decide to cancel your enrollment, please be sure to notify me.** 授業を取らないと決めた場合は、必ず連絡をすること。そうしないと、ウェイティング・リストに載っている他の学生が登録できません。

-

・Students placed on the waiting list may register **only if** there are available openings and registration is still open (i.e., within the registration period).

-

・Admission is granted on a first-come, first-served basis. Equally important, I strongly encourage you to attend the first and/or second class meetings. **Failure to attend both of these meetings will affect your final grade (10%). If you have a legitimate reason for missing these classes, please be sure to contact me by email.**

-

Organization of the class:

▶ Each class will consist of **up to 100 minutes of lecture and discussion**. The class will be conducted in English.

▶ At present, **I plan to hold the first class meeting online (via Zoom)**. After that, classes will be held on campus (i.e., in person). Please make sure that you have the Zoom application installed on your computer, along with any necessary devices.

-

▶ I value interaction and exchange in class, so please make your best effort to express your ideas, even if you find it difficult. You will not be penalized for making mistakes — you are entitled to make mistakes in class! **Occasionally, we will have group discussions on assigned topics.**

-

◉ *On the Zoom meetings*:

・**I will e-mail you the "Zoom Link," "**授業参加用ミーティング**ID" and "**パスコード**" on** 学習支援システム **by Wednesdays (the day before the class).** You will have to sign in with your own Hosei University e-mail address and password.

・ Note: **If anyone engages in disruptive behavior during an online (Zoom) class** (often referred to as Zoom-bombing), I will immediately terminate the meeting and report the incident to the University. I will then post further instructions on the 学習支援システム regarding what students should do.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Guidance	Explaining the course
2	Moral judgment	How do we judge?
3	Morality	What does it mean to be "morally right"?
4	Relativism	Is everything relative?
5	Lying	Is lying always wrong?

6	Result Theory (Utilitarianism)	Is your action “right,” if it brings about a good result?
7	Rule Theory	Is your action “right,” if it follows a good rule?
8	Culture vs. Nature (1)	How different are they?
9	Culture vs. Nature (2)	The idea of “enhancement”
10	Freedom	Are we completely free?
11	Environmental Ethics	What you do may affect complete strangers.
12	Ethics in Medicine	How should we allocate limited resources?
13	Perception and Knowledge	Is Perception so accurate? What do we truly know?
14	Concluding remarks	Wrap-up: The Meaning of Life

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・I recommend that you review what you have learned in each meeting.
・You are normally expected to spend about two hours for the preparation and review for each class.

【テキスト（教科書）】
・There will be no specific textbooks assigned.
・Summary handouts will be given in class. Occasionally, reading materials may be assigned.

【参考書】
No specific books assigned. But looking into any (**large size**) philosophy dictionaries will be of great help.

【成績評価の方法と基準】
Assessment and Grading
Basically, your final grade will be assessed based on your participation in class discussions and your final project.
- Attitude / Participation: 50% of the course grade
- Final Project (a Paper): 50% of the course grade

Based on the grading criteria set by the instructor, students who successfully achieve **60% or more of the course requirements will receive a passing grade**.
-
* *Attitude / Participation:*
Class participation is very important in this field of study. I value your active involvement in class and would like to hear your ideas and opinions. Accordingly, your participation (including in-class comments and contributions) will be considered as part of your grade. However, you will **not** be penalized for making mistakes — you are entitled to make mistakes in class.
* *Reaction Paper:*
After **each** class meeting, you are **required** to submit a “reaction paper.” In this paper, you should briefly but clearly present your comments, questions, or insights (**up to about 200 words**) on the topic specified in class and the class discussion.
Reaction papers **must be submitted by the designated deadline** for each class. Late submissions will not be accepted unless you have a legitimate reason and contact me in advance. Failure to submit reaction papers on a regular basis will **negatively affect your participation grade**, as they constitute an essential component of class participation.
* *Final Exam:*
You will have to **submit a paper**. Details will be announced before the end of the semester. **Attendance at at least three-fourths (3/4) of the total number of class sessions is required in order to be eligible to take the final exam.**
**Plagiarism:*
When writing your reaction paper, it is essential that you present **your own views and insights,** rather than simply repeating ideas described or explained in published or preexisting materials (including websites).
Therefore, you may NOT submit text that is generated by ChatGPT or any other AI system, in whole or in part. If it is found that you have used ChatGPT or any form of AI assistance for your reaction paper, you will receive a grade of “D” (fail) for the course.

【学生の意見等からの気づき】
In previous semesters, I received several comments from students. For example, one student wrote, *“Having discussions in class was very hard at the beginning, but it helped me improve my English speaking skills and express myself more logically. Eventually, I found it quite exciting and stimulating.”*

【学生が準備すべき機器他】
Computers with the Zoom application.

【その他の重要事項】
<< **Please Read; Very Important**>>
・ Again, you may **NOT** submit text generated by ChatGPT or any other AI system, in whole or in part, for your paper. If it is found that you have used ChatGPT or any form of AI assistance, you will receive a grade of **“D” (fail)**.
・ Most of us already have a general or intuitive understanding of many basic philosophical issues. The key to deepening that understanding, however, lies in the ability to **critically examine these issues from multiple perspectives** -— a task that is neither obvious nor easy. In studying philosophy, you are often required to “step outside” your own perspective. *Philosophy* is different from *a philosophy*. *Philosophy* is an academic discipline that includes logic, metaphysics, ethics, epistemology, and related fields. *A philosophy*, by contrast, refers to a system of beliefs, concepts, or attitudes held by an individual or a group, or a particular view about an area of thought or activity. Everyone has some kind of philosophy, even if they have never studied philosophy formally. **An individual’s or a group’s philosophy can be examined, discussed, and challenged within the discipline of philosophy. As a result, studying philosophy may influence your own philosophy and may sometimes make you feel uneasy.**
・ Since philosophical thinking is an acquired skill, like many other skills it requires regular and sustained practice. **It is therefore important that you set aside sufficient time each week to prepare for class and to write your reaction paper to the best of your ability.**
・ As I value interaction and exchange in class, I am very interested in hearing your thoughts and feedback. For this reason, I strongly encourage you to attend all classes and actively participate in the discussions.

SOS200GA（その他の社会科学 / Social science 200）

国際関係学概論Ⅰ

今泉　裕美子

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：教室定員を超えた場合には抽選・選抜
その他属性：〈優〉〈S〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
国際文化学とは国際・文化学？、国際文化・学？、それとも…？ また、「国際」とは何でしょうか。これらの問いを念頭におきながら、「国際関係」に文化からアプローチするための前提となる学びとして、「国際関係」が人（及びその集団）のいかなる“つながり”によって形成、展開してきた／いるか、またその時代ごとの特徴、そして現代世界とその諸課題の所在、分析方法について学びます。
対象時期は近代国際関係の成立から第一次世界大戦までとし、「国際関係学概論Ⅱ」の前提となる内容となります。

【到達目標】
１．国際関係の構造と動態、これを分析するうえで用いられる概念や理論について基礎的な知識をもつことができる。
２．現代国際関係の事象、問題が、複雑に絡み合った要素からできていることを認識し、しかし複雑だと等閑視するのではなく、それらが生み出された歴史的過程（通時的な視点）、同時代に起きているほかの問題や事象との関係性（共時的な視点。学際的な捉え方）から分析できる。
３．上記を踏まえ、国際関係学及び国際関係に関する諸情報の収集や批判的考察の仕方を習得し、今日生起する事象、問題について自身の意見、解決への手がかりや手立てを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
１．初回授業はオンラインライブで実施する予定である。受講を希望する学生には、初回授業（欠席する場合は、配布資料を読んで）のリアクションペーパーを定められた方法と期限（初回授業時及びHoppiiで通知）までに提出してもらう。受講者数を調整する必要が生じた場合は、初回授業のリアクションペーパー提出者から抽選する。
２．授業計画はテキストの目次通りの構成ではないが、授業で言及する関連個所、それ以外の部分も読んでいることを前提に進める。
３．授業ではレジュメや資料を配布することを原則とする。
４．毎回リアクションペーパーを提出してもらう。授業内でクイズやテスト、意見を聞く機会を設けることがある。授業の予習、復習のために課題を出すことがある。
５．提出物に注目すべき意見や質問があれば紹介、フィードバックし、受講生のさらなる学びにつなげる。学生の関心、理解度、国際情勢の変化に応じて、授業計画を変更する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	本授業の目的、授業の進め方、注意事項の説明。
2	「国際関係」とは	近代国際関係の成立、Western State Systemの特徴を理解し、現代国際関係との異同を学ぶ。
3	市民革命、国民国家の登場と国際関係①	国民国家（nation state)の成立をもたらした市民革命、「市民」、「階級」の登場による国際関係の変化と特徴を学ぶ。
4	市民革命、国民国家の登場と国際関係②	国民国家（nation state)及びnationというactorの登場による国際関係の変化と特徴を学ぶ。
5	帝国主義と国際関係①「つながる/つなげられる」	ヨーロッパの資本主義発展を原動力とする世界分割、植民地支配、人の移動がもたらした世界の一体化の特徴を学ふ。
6	帝国主義と国際関係②「へだてる/へだてられる」	世界の一体化が進んだゆえの「分断」を学び、現代世界のグローバリゼーションとの関係を理解する。
7	帝国主義と国際関係③国際関係研究への視座	当時行われた「植民地」、「帝国主義」を対象とする研究やから、国際関係認識や分析の特徴を学び、現代世界でのそれらとの関係を考える。
8	帝国主義と「民族」-実態と概念①	主権国家形成との関わりから「民族」の実態と概念を学ぶ。
9	帝国主義と「民族」-実態と概念②	帝国主義時代を基点とする国際関係の変化のなかで「民族」の実態と概念を学ぶ。
10	帝国主義と「民族」-実態と概念③	現代世界の「民族」をめぐる諸問題を踏まえて、実態と概念を整理する。
11	第一次世界大戦と国際関係①近代国際関係の再編	人類初の「総力戦」がもたらした国際関係の変化を、民族運動、社会主義運動、社会の変化を中心に学ぶ。
12	第一次世界大戦と国際関係②国際組織と安全保障	国際連盟の成立、戦争の違法化、安全保障を中心に学ぶ。
13	第一次世界大戦と国際関係③植民地支配体制の再編	委任統治制度を中心に学ぶ。
14	春学期の授業の総括	授業の要点と国際関係学の視点と方法の確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
１．配布するレジュメや資料を読み、テキストや参考文献で予習、復習を行うこと。
２．関心があることを1つ持って授業に準備をする（SA先や卒業研究に関連すること、ゼミの専門分野など）。
３．予習、復習それぞれ2時間程度を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。

【参考書】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年。
岩田一政他編『国際関係研究入門【増補版】』東京大学出版会、2003年。
梅棹忠夫監修、松原正毅他編『世界民族問題事典　新訂増補版』平凡社、2002年。
川田侃他編『国際政治経済辞典　改定版』東京書籍㈱、2003年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
１．毎回提出を求めるリアクションペーパー、授業内で適宜実施するクイズ、課題への提出物の内容を総合して50%。セメスター末の試験50%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。
２．提出物について指示した期限、提出先を守らない場合、また、やむを得ない事情（対象となる事情や証明資料の提出は定期試験のルールに則る。ただし証明資料を提出しない場合は認めない。）によらない理由で提出しない場合は、未提出として扱う。

【学生の意見等からの気づき】
リアクションペーパーに出された質問、その時々の国際情勢を反映させた授業が好評であったため、これを継続する。

【学生が準備すべき機器他】
オンラインライブで授業を行う場合は、パソコンやタブレットなどの通信機器、安定的な接続、通信容量に制限がない環境を各自で準備する。

【その他の重要事項】
１．テキストは常に手元に置き、予習・復習以外にも読み進めること。
２．授業の２回目以後は対面授業を行うが、予告したうえでオンライン授業の回を設ける可能性もある。
３．Hoppiiの授業情報、通知などを随時、確認すること。教員と連絡をとる場合はTAを通じて行う。
４．リアクションペーパーを含む提出物において、他人や生成系AIが作成した文章をあたかも自分が作成したかのようにみせかけたりして用いることは認めない。

【Outline (in English)】
This is an introductory course to understand and analyze the issues and problems of international relations. This course deals with major concepts, theoretical frameworks, dynamics, and structure of international relations in historical context. This course also introduce how International Study has been conducted based on people's perspectives on international relations. The focus is on from the Peace of Westphalia to World War I.
It is strongly recommended that this course be taken before taking "Introduction to International Study II".
【Learning Objectives】
Students will be able to
１．Understand the origins and evolution of the international relations with key concepts and theories of International Studies.
２．Develop a critical thinking about some issues in contemporary world and analyzing them thorough understanding of International Studies as an academic discipline.
【Learning activities outside of classroom】
The standard time required for preparatory study and review for this class are 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
1. Reaction Papers, Quizzes and Small Assignments during the semester:50%
2.Term-end Examination or Report（The details will be informed later）:50%

SOS200GA（その他の社会科学 / Social science 200）

国際関係学概論 II

今泉　裕美子

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：教室定員を超えた場合には抽選・選抜
その他属性：〈優〉〈S〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
国際文化学とは国際・文化学？、国際文化・学？、それとも…？ また、「国際」とは何でしょうか。これらの問いを念頭におきながら、「国際関係」に文化からアプローチするための前提となる学びとして、「国際関係」が人（及びその集団）のいかなる“つながり”によって形成、展開してきた／いるか、またその時代ごとの特徴、そして現代世界とその諸課題の所在、分析方法について学びます。
対象時期は第二次世界大戦から現在までとし、「国際関係学概論Ⅰ」の内容を前提に進めます。

【到達目標】
１．国際関係の構造と動態、これを分析するうえで用いられる概念や理論について基礎的な知識をもつことができる。
２．現代国際関係の事象、問題が、複雑に絡み合った要素からできていることを認識し、しかし複雑だと等閑視するのではなく、それらが生み出された歴史的過程（通時的な視点、学際的な捉え方）、同時代に起きているほかの問題や事象との関係性（共時的な視点。学際的な捉え方）から分析できる。
３．上記を踏まえ、国際関係学及び国際関係に関する諸情報の収集や批判的考察の仕方を習得し、今日生起する事象、問題について自身の意見、解決への手がかりや手立てを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
１．授業計画はテキストの目次通りの構成ではないが、授業で言及する関連個所、それ以外の部分も読んでいることを前提に進める。
３．授業ではレジュメや資料を配布することを原則とする。
４．毎回リアクションペーパーを提出してもらう。授業内でクイズやテスト、意見を聞く機会を設けることがある。授業の予習、復習のために課題を出すことがある。
５．提出物に注目すべき意見や質問があれば紹介、フィードバックし、受講生のさらなる学びにつなげる。学生の関心、理解度、国際情勢の変化に応じて、授業計画を変更する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	本授業の目的、授業の進め方、注意事項の説明。「国際関係学概論Ⅰ」との関連を説明。
2	第二次世界大戦と国際関係	ヴェルサイユ・ワシントン体制の崩壊から第二次世界大戦に至る過程、第二次世界大戦の特徴を学ぶ。
3	第二次世界大戦の終結と国際関係①	国際連合、人権を重視する諸政策、戦争責任をめぐる国際法の変化を中心に、国際関係の特徴を学ぶ。
4	第二次世界大戦の終結と国際関係②	信託統治制度の創設、新植民地主義につながる国際関係の特徴を学ぶ。
5	冷戦と国際関係①―冷戦の始まり	冷戦の定義、IMF・GATT体制、冷戦的思考など冷戦体制の特徴、これらを対象とする戦後国際関係研究の特徴を学ぶ。
6	冷戦と国際関係②―核開発と管理	核管理をめぐる東西両陣営の対応、核抑止力を機能させえた核実験の実態を学び、現在に続く核と「平和」の関係を考える。
7	冷戦と国際関係③－植民地独立への介入と「熱戦」	中華人民共和国の成立、植民地独立の動きに米ソが介入した「熱戦」を中心に、国際関係の特徴を学ぶ。
8	冷戦体制の浸蝕と国際関係①―第三世界の台頭と南北問題	A・A会議、非同盟運動、新国際経済秩序など第三世界の動き、南北問題をめぐる「開発」と「発展」の問い直しを中心に、国際関係の特徴を学ぶ。
9	冷戦体制の浸蝕と国際関係②―南北問題の”解決”をめぐって	「南」から提起された「開発」、「発展」の問い直しと「平和」概念の変化を学び、現代国際関係にて多用されるようになった「グローバルサウス」概念との関係を学ぶ。
10	冷戦体制の浸蝕と国際関係③―米ソ関係及び東西両陣営内の変化	キューバ危機を契機とする核軍縮への動き、東西両陣営内の亀裂を中心に国際関係の特徴を学ぶ。
11	冷戦体制の崩壊と国際関係	新冷戦から冷戦体制の崩壊過程を崩壊後に持ち越された問題を中心に学ぶ。
12	ポスト冷戦体制とグローバリゼーション	ポスト冷戦体制の国際関係を、新自由主義に基づく市場経済の拡大、世界各地で激化したかにみえる「紛争」、「9.11」と以後続くいくつもの「戦争」、安全保障体制の変化を事例に、現代国際関係の特徴を学ぶ。
13	受講生の関心に基づくトピックス	受講生の関心に基づくトピックスを取り上げ現代国際関係への理解を深める。
14	秋学期の授業の総括	授業の要点と国際関係学の視点と方法の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
１．配布するレジュメや資料を読み込み、テキストや参考文献で予習、復習を行うこと。
２．関心があることを1つ持って授業に臨む（SA先や卒業研究に関連すること、ゼミの専門分野など）。
３．予習、復習それぞれ2時間程度を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。

【参考書】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年。
岩田一政他編『国際関係研究入門【増補版】』東京大学出版会、2003年。
梅棹忠夫監修、松原正毅他編『世界民族問題事典　新訂増補版』平凡社、2002年。
川田侃他編『国際政治経済辞典　改定版』東京書籍㈱、2003年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
１．毎回提出を求めるリアクションペーパー、授業内で適宜実施するクイズ、課題への提出物の内容を総合して50%。セメスター末の試験50%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。
２．提出物について指示した期限、提出先を守らない場合、また、やむを得ない事情（対象となる事情や証明資料の提出は定期試験のルールに則る）によらない理由で提出しない場合は、未提出として扱う。

【学生の意見等からの気づき】
リアクションペーパーに出された質問、その時々の国際情勢を反映させた授業が好評であったため、これを継続する。

【学生が準備すべき機器他】
オンラインライブで授業を行う場合は、パソコンやタブレットなどの通信機器、安定的な接続、通信容量に制限がない環境を各自で準備する。

【その他の重要事項】
１．テキストは常に手元に置き、予習・復習以外にも読み進めること。
２．予告したうえでオンライン授業の回を設ける可能性もある。
３．Hoppiiの授業情報、通知などを随時、確認すること。教員と連絡をとる場合はTAを通じて行う。
４．リアクションペーパーを含む提出物において、他人や生成系AIが作成した文章をあたかも自分が作成したかのようにみせかけたり、あるいは、前後関係や語句を若干変更して用いたりすることは認めない。
５．「国際関係学概論Ⅰ」未受講者も受講可能であるが、「国際関係学概論Ⅰ」既習を前提に進める。未受講者はⅠのシラバスを参照し、テキストや参考書の関係個所を読んで受講することを強く推奨する。

【Outline (in English)】
This is an introductory course to understand and analyze the issues and problems of international relations. This course deals with major concepts, theoretical frameworks, dynamics, and structure of international relations in historical context. This course also introduce how International Studies has been conducted based on people's perspectives on international relations. The focus is on from World War II to today. "Introduction to International Studies I" is highly recommended for those who take this course.
【Learning Objectives】
Students will be able to
１. Understand the origins and evolution of the international relations with key concepts and theories of International Studies.
２. Develop a critical thinking about some issues in contemporary world and analyzing them thorough understanding of International Studies as an academic discipline.
【Learning activities outside of classroom】
The standard time required for preparatory study and review for this class are 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
1. Reaction Papers, Quizzes and Small Assignments during the semester:50%
2.Term-end Examination or Report（The details will be informed later）:50%

SOC200GA（社会学 / Sociology 200）

国家と民族

宮本　佳和

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉〈S〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本人（あるいはご自身のルーツを踏まえて考えてみてください）とは誰を指すのだろうか。今日、私たちはそれほど意識することなく、国家や民族の枠組みを受け入れているかもしれません。しかし、これらは近代西洋で発明された後、「普遍的」な枠組みとしてグローバルに浸透ないし強要されたものでもあります。本授業では、日本とアフリカの事例をもとに、近代国家の成立過程、ナショナリズム、エスニシティ、植民地主義、移民問題などを取り上げ、国家と民族がいかに形成され、再編され、対立や共存を生み出してきたのかを考察します。

【到達目標】
・人種、民族、国民、エスニシティ、ナショナリズムなどの概念内容およびそれらが歴史的に構築されてきた過程を習得する。
・ものごとを相対的に捉えることによって得られる自己／他者の理解に関する洞察力を身に付ける。
・自明視されがちな「違い」を批判的に捉え直し、多文化共生社会を考えるための基礎的視座を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業の理解度や平常の取り組みを評価するため、授業コメントや質問・疑問を求めるリアクションペーパーを課します。
・リアクションペーパー等における興味深いコメントや質問等を授業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要、成績評価方法の説明
第2回	国家とは何か	国家の定義、近代国家の特徴
第3回	民族とは何か	民族、エスニック集団、国民の基本概念
第4回	人種とは何か	創られた人種概念
第5回	エスニシティの社会的構築	境界線はいかに引かれるか
第6回	ナショナリズムの理論	創造の共同体、国民の形成、民族の統合・排除
第7回	中間テスト	第2回〜第7回の内容の理解度テストと解説
第8回	近代日本の国家形成	明治維新と「日本人」の誕生
第9回	「単一民族」という神話	日本の中のアイヌと沖縄
第10回	アフリカ分割と創られた「部族」	分割統治と民族
第11回	ジェノサイドの過程とその後	ルワンダとナミビアの事例
第12回	アパルトヘイト後の南アフリカ	人種、民族を超えた国家統合の試み
第13回	日本の中の「外国人」	在日コリアン、ニューカマー
第14回	期末テストと総括	第9回〜第13回の内容の理解度テストと解説、授業全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業内で紹介する文化人類学や地域研究の関連文献を読み、授業内容の理解を深める。
・図書館などで関連文献を調べ、自らの興味関心を広げる。
・本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
中間テスト:25%、期末テスト:25%、平常点（リアクションペーパー、出席状況等）:50%として総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムや動画閲覧サービス等を利用します。

【その他の重要事項】
・本授業では授業コメント（リアクションペーパー）の提出を課しますが、生成AIツールは使用しないでください。
・初回授業において教室定員の都合で着席できなかった学生がいた場合は、当該学生に対してオンデマンドで授業資料を後日提供します。なお、第2回以降は教室を変更する予定です。
・対面をオンラインで同時配信するハイフレックス型授業は実施しません。
・シラバス内容や授業計画に変更が生じた場合は授業内もしくは学習支援システムで周知します。
・本学では成績評価におけるSの割合を受講者の20％以内を目安とすることを定めており（ただし少人数授業等を除く）、本授業でもこれに従って評価を行います。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This course introduces the basic concepts and theories of nation, ethnicity and Nationalism from the perspective of cultural anthropology. We will examine theoretical perspectives, drawing on abundant empirical studies from Japan and Africa.
[Learning Objectives]
At the end of the course, students are expected to understand how a nation is defined and how people use this concept for nation-building, economic development and welfare policy. Before/after each class meeting, students are expected to spend four hours studying the course content.
[Learning Activities Outside of the Classroom]
Before/after each class meeting, students are expected to spend four hours studying the course content.
[Grading Criteria/Policy]
Grading will be based on mid- and final examinations (25% each) and in-class contributions (50%).

POL200GA（政治学 / Politics 200）

平和学

松本　悟

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉〈S〉〈未〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では主に国際機構に着目して平和学を学ぶ。歴史、思想、組織、制度、文化などを通して平和や暴力について考え、国際社会コースの基幹科目として、各自がより深めたい専門領域を見つけるきっかけとなることを目指す。

【到達目標】
（1）消極的平和、積極的平和、文化的平和の概念を使って実例を説明できる。
（2）国際機構の特徴と平和との関係を具体的に説明できる。
（3）基本的なアカデミックスキルと平和学で取り上げられる方法を理解し、実例に適用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■基本方針：対面で実施する。学内業務などでやむを得ない場合はオンデマンド授業を行う場合もある。
■フィードバック：講義への質問は、学習支援システムの掲示板に質疑応答コーナーを設けて、そこでやり取りする。
■授業後課題：：2回に1回程度課す。基幹科目なのでアカデミックスキルを高
めることを目的とし、200字〜800字程度で書いてもらう。提出期限は授業日から3日以内。授業冒頭で課題への全体コメントを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	「平和」「平和学」とは何か	「平和」の概念や「平和学」の発展について考える。
2	国際機構誕生前の平和と暴力	17c以降の平和思想をふまえ、「力」による平和の賛否について考える
3	国際連盟の意義と限界	戦争を違法化し制裁によって守らせようとすることについて考える
4	国連憲章と自衛の武力	非暴力で戦争のない消極的平和を築くことができないのかを考える
5	２つの平和主義	「正しい戦争」という考え方の変遷と妥当性について考える
6	人道的介入の是非	暴力を止めるために暴力を使うことの是非について考える
7	紛争研究	解決した紛争に着目する
8	紛争解決学	紛争解決に関する学問的蓄積から平和学を学ぶ方法論を習得する。
9	積極的平和と国際開発機構（ユニセフ）	井戸掘りという「平和」的手段が暴力になる構造を考える。
10	積極的平和と国際開発機構（世界銀行）	開発協力が暴力になる構造を考える。
11	異議申し立てとオンブズマン	平和的手段が暴力にならないための仕組みについて考える。
12	文化と平和	「文化的平和」という概念を手がかりに、文化と平和（暴力）のつながりについて考える。
13	紛争と文化外交・平和教育	「何を」から「どのように」への転換と「平和」のつながりについて考える。
14	まとめ（権力と暴力）	「権力」という切り口から13回の授業を振り返り、授業全体のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業後課題は、法政大学の図書館HPのデーターベース等から文献を検索して論じるなど、大学生に必要な調査と思考を促すものである。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特になし

【参考書】
関連する文献を毎回の授業で示す。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内討論への参加度）20%、授業後課題30%、期末レポート50%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・学生から提出された授業後課題の答案に対して、個々人へのフィードバックを求める声があるが、履修者が多いためそれは不可能。また、労力の割に、それを活かそうと考えている学生が多いわけではない。したがって、提出された答案をもとに次の授業の冒頭でフィードバックし、それを各自が自分の答案に当てはめて自己分析してもらっている。自己採点能力も重要な力である。
・学習支援システムの「掲示板」を使って常時質問を受け付けているが、ほとんど質問はない。
・授業後課題はコロナ禍では毎回出していたが、負担の大きさに鑑みて、現在では学期中に5〜6回にしている。受講者からは、大学でのレポートの書き方やデータベースの使い方が身についたと好評である。
・学生からは「学びが大きい」「思考が深まる」というフィードバックが多いので、毎回のグループ討議と発表、それに対する教員のコメントを引き続き行う。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
・国際開発協力ＮＧＯやＮＨＫ記者としての実務経験を有する教員が、直接関わった開発事例や取材経験を挙げながら講義する。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course focuses on international organizations to explore "positive", "negative" and "cultural" peace in the Galtung's terms. It enables students to apply the Galtung's terms for explaining the conflicts and to analyze the functions of international organizations in "peace".
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) explaining the issues or events by using the concept of "positive", "negative", "cultural" peace.
2) explaining the functions of international organizations in avoiding certain type of the violence.
3) applying the basic academic skills and the analytical methods the peace studies use for actual cases of violence.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content or to write a short essay on a given topic.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on a short essay at each class meeting (50%) and a term-end report (50%).

SOC200GA（社会学 / Sociology 200）

宗教と社会

佐々木　一惠

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：150名（超えた場合は、選抜の可能性あり）
その他属性：〈優〉〈S〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
異文化理解において、宗教は重要な要素の一つです。この授業では、宗教というレンズを通して、過去そして現在における社会の諸問題を検討していきます。宗教と社会の関係を、格差・開発・ジェンダー・ナショナリズム・国民国家・消費・紛争などの問題から捉えることで、グローバル化の進む現代社会における多様な価値観との共生のあり方について考えていきます。

【到達目標】
１．宗教と社会の関係を考えるために必要な、基本的な概念や理論を理解できるようになる。
２．宗教と社会の関係について、基本的な分析概念や理論を用いて、基礎的な事例分析ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
【重要なお知らせ】初回の授業はオンデマンドで実施し、２週目以降は対面で授業を行います。受講を希望する人は4月10日（金）までに学習支援システムに登録してください。受講希望者が100名を超える場合は抽選を行います。受講を希望される方は、4月10日（金）に学習支援システムからアップロードされ登録希望票を記入してください。締切は4月12日（日）の午前10時です。4月13日（月）に抽選結果を学習支援システムでお知らせします。第2回目からの授業は抽選に合格した人のみ受講できます。
●歴史学・人類学・社会学・政治学において、宗教がどのように分析されてきたかを概観するとともに、具体的な諸事例から、宗教と社会の関係性とその多元性について議論していきます。
●毎回、授業の最後に出される問いに対する分析を、リアクションペーパーの形にまとめて提出してもらいます。
●提出されたリアクション・ペーパーについては、翌週の授業で複数紹介しながら講評します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	宗教とはなにか	この授業の目的や概略について説明する。
2	宗教を考えるためのアプローチ	近代宗教学の成立と歴史意識について概観した後、宗教を捉えるための学問が、何を問題とし、どのような過程で体系化されていったかを検討する。
3	医療技術の進歩と死生観	昨今の臓器移植・延命治療・尊厳死法案・iPS細胞をめぐる議論から、死生観と宗教・医療・国家の間の問題を、公的領域・私的領域の視点を交えながら考察する。
4	所有・貧困と宗教	宗教において、格差や貧困の問題はどのように考えられてきたのか、また格差や貧困の問題の是正を目的として、近代に出現した公的な福祉制度は、宗教における所有や貧困に対する考えや対応と、どのように関連していているのかを議論する。
5	ジェンダー・セクシュアリティと宗教	ジェンダーの視点から宗教を捉えなおすことで、宗教によって維持され権威づけられてきた男女の性差に関する規範・慣習・観念について再検討する。
6	ジェンダー・フェミニズムと宗教	慣習や伝統文化とジェンダーの問題を、宗教に関する事例から考える。そこから、近代の人間観の基盤ともなっていた合理的思考と慣習・伝統文化の規範との間の問題が、単純に近代／伝統あるいは普遍主義／相対主義の二分法で片付けられないことをみていく。
7	政治・国家と宗教	政治や国家と宗教の問題を、宗教のもつ社会的統合機能を切り口に、いわゆる「世俗主義」国家におけるナショナリズムと市民宗教について議論する。
8	紛争・暴力と宗教	社会の安寧と平和の維持を願う宗教の名の下に、なぜ暴力を行使し、紛争が発生するのか。宗教と暴力・ 紛争の問題を、宗教儀礼（供犠）、ケガレと差別、世俗化とグローバリゼーションの視点から理解を試みる。
9	消費社会と宗教	スピリチュアル（霊的なもの）と宗教との関連を、歴史的に考察すると同時に、昨今のスピリチュアル・ブームを現代の消費社会との関連から検討する。
10	グローバル化と宗教	グローバル化する世界における宗教の動態について、公的領域と私的領域の双方の視点から検討する。
11	科学・世俗化と宗教	科学と宗教の関係を、キリスト教と科学の歴史から考えるとともに、昨今の科学と宗教の間の問題を、進化論と生殖医療に関する問題から検討する。
12	社会思想と宗教	ポスト・コロニアリズムの視点から宗教についてのアプローチを考える。
13	今学期の授業に関する質疑応答	質問やコメントに答える。
14	試験・まとめと解説	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業の復習を行い、リアクション・ペーパーで書いた問題点や疑問点などについて各自掘り下げて検討して下さい。
なお、本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
○井上順孝『宗教社会学を学ぶ人のために』（ミネルヴァ書房、2016年）。
○伊藤雅之『現代スピリチュアリティ文化論：ヨーガ、マインドフルネスからポジティブ心理学まで』（明石書店、2021年）。
○櫻井義秀、三木英『よくわかる宗教社会学』（ミネルヴァ書房、2007年）。
○ロバート・D.・パットナム、デイヴィッド・E.・キャンベル『アメリカの恩寵ー宗教はいかに社会を分かち、むすびつけるか』（柏書房、2019年）。
○石井研士『メディアと宗教』（弘文堂、2024年）。

○望月哲也『社会理論としての宗教社会学』（北樹出版、2009年）。
○諸岡了介『世俗化論の生成：宗教という問いのゆくえ』（ミネルヴァ書房、2023年）。
○棚次正和、山中弘編著『宗教学入門』（ミネルヴァ書房、2005年）。
○島薗進、葛西賢太、福嶋信吉、藤原聖子編著『宗教学キーワード』（有斐閣、2006年）。
○田中雅一、川橋範子編著『ジェンダーで学ぶ宗教学』（世界思想社、2007年）。
○タラル・アサド『世俗の形成：キリスト教、イスラム、近代』（みすず書房、2006年）。
○ユルゲン・ハーバマス『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』（岩波書店、2007年）。
○ニコラス・ルーマン『宗教論：現代社会における宗教の可能性』（法政大学出版局、2009年）。
○中野毅『宗教の復権：グローバリゼーション・カルト論争・ナショナリズム』（東京堂出版、2002年）。
○磯前順一、タラル・アサド編『宗教を語りなおす：近代的カテゴリーの再考』（みすず書房、2006年）。
○ポール・シーブライト（黒輪篤嗣訳）『ビジネスとしての宗教』東洋経済新報社、2025年。
○『岩波講座 宗教（全10巻)』（岩波書店、2004年）。
○『諸宗教の倫理学（全5巻)』（九州大学出版会、1992～2006年）。

【成績評価の方法と基準】
リアクション・ペーパー　40　%
期末試験　60 %
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
スマートフォンやパソコンなどの情報通信機器。

【その他の重要事項】
●初回の授業はオンデマンドで実施し、2週目以降は対面で授業を行います。
●受講を希望する人は4月10日（金）までに学習支援システムに登録してください。受講希望者が100名を超える場合は抽選を行います。受講を希望される方は、4月10日（金）に学習支援システムからアップロードされ登録希望票を記入してください。締切は4月12日（日）の午前10時です。4月13日（月）に抽選結果を学習支援システムでお知らせします。
●第2回目からの授業は抽選に合格した人のみ受講できます。

【Outline (in English)】
The course explores the relationship between religion and society by taking up issues ranging from gender, nationalism, nation-states, consumer culture, to war and conflicts. It will discuss the possibilities of mutual understanding and coexistence of different religious values and practices in an era of global competition and interdependence.
By the end of the course, students are expected to be able to: 1) understand the basic concepts and theories that are important to examine the relationship between religion and society, and 2) use analytical concepts and theories to analyze case studies of the relationship between religion and society.
Students will be expected to review each class and explore the problems and questions that they wrote in their reaction papers.
The final grade will be decided by reaction paper (40%) and the final assignment (60%).

SOC200GA（社会学 / Sociology 200）

Religion and Society

佐々木　一惠

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：25人程度。希望者多数の場合には，入学時以降のTOEFLやTOEICなど標準的なテストの結果と初回授業へのコメントを総合的に評価して選考します。
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.

その他属性：〈グ〉〈優〉〈S〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course is designed to provide students with a comprehensive exploration of the complex intersections between society and religion in the context of a globalizing world. As globalization continues to shape and redefine human interactions, this course seeks to critically analyze the multifaceted roles that religion plays in influencing and responding to global dynamics. Students will explore issues such as immigration, nationalism, conflict, gender, sexuality, tourism, consumerism, and citizenship, all within the broader context of contemporary global society.

【到達目標】
By the end of this course,
① Students will have gained a nuanced understanding of the intricate connections between society and religion in the age of globalization, enabling them to critically engage with the complex issues that arise in our increasingly interconnected world.
② Through a multidisciplinary approach, students will be equipped with the knowledge and analytical tools to address the challenges and opportunities presented by the dynamic interplay of society, religion, and globalization.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
The first part of class focuses on providing students with a broad understanding of the background of the topic covered in the assigned readings. The class then engages in a discussion that allows students to share their insights and interpretations of the reading assignment. In the second half of the class, the focus shifts to a broader examination of the issues raised in the reading assignment. The class expands its scope to explore the implications, connections, and applications of the issues in a broader context.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Introduction	The outline of the course
2	Religion and Tourism	Modern Pilgrimage in Japan
3	Religion and Sport	Affinities in Religion and Sport
4	Religion and Gender	Anti-Hijab Protests in Iran
5	Religion and Diplomacy	Russian Orthodox Church and Soft Power
6	Religion and Sexuality	LGBTQ and Post-Colonialism in Africa
7	Religion and Nationalism	Yoga and Indian National Identity
8	Religion and Globalization	Mid-term examination
9	Religion and Global Capitalism	Consumer Jihad in Turkey
10	Religion and Immigration	Anti-Muslim Sentiments in Europe
11	Presentation ①	Oral presentation of final papers (Group 1 students)
12	Presentation ②	Oral presentation of final papers (Group 2 students)
13	Presentation ③	Oral presentation of final papers (Group 3 students)
14	Presentation ④	Oral presentation of final papers (Group 4 students)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are required to read the assignments and be ready for class discussions. Students are expected to spend about 4 hours a week on coursework outside the class.

【テキスト（教科書）】
There is no textbook for this course. All course materials are available online through the course web site.

【参考書】
Jayeel Cornelio, François Gauthier, Tuomas Martikainen and Linda Woodhead, eds., Routledge International Handbook of Religion in Global Society (Routledge, 2022).

【成績評価の方法と基準】
① Class participation 20%
② Mid-term examination (approximately one page in length) 20%
③ Final paper presentation 20%
④ Final paper (2-3 pages in length) 40%
Based on the grading criteria set by the instructor, students who successfully achieve 60% or more of the course goals will earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable

HUM200GA（その他の人文学 / humanities 200）

国際文化協力

松本　悟

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：100名前後が望ましい

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉〈S〉〈ダ〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では国際文化論の観点から国際協力の基礎を学ぶものである。具体的には国際協力の歴史や仕組み、国際協力が文化に及ぼす影響、文化面の国際協力のあり方について知識を習得するとともに、それらを用いて論理的に考える力を養うことを目的とする。基幹科目なので、１、２年生には、専攻科目や演習で更に深めたい学問領域やテーマを見つける機会にして欲しい。

【到達目標】
（1）国際文化論および国際協力についての基礎的な知識を身につける。
（2）国際協力と文化を結びつけて論理的に事象を分析できる。
（3）「技術と文化」「開発コミュニケーション」「文化遺産保護」「難民」「パブリックディプロマシー」などに授業で扱うテーマついて説明できる。
（4）基幹科目としてアカデミックスキルを身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■基本方針：対面で実施するが、学内業務の関係でオンデマンドを使用することもある。
■フィードバック：講義への質問は、学習支援システムの掲示板に質疑応答コーナーを設けて、そこでやり取りする。
■授業後課題：2回に1回程度課す。基幹科目なのでアカデミックスキルを高めることを目的とし、200字〜800字程度で書いてもらう。提出期限は授業日から3日以内。授業冒頭で課題への全体コメントを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション―国際文化協力とは―	この授業の狙い、進め方、国際文化協力の概論。リアルタイムオンライン授業で行い、履修希望者数を確認する。
2	技術と文化	川の水を煮沸せずに飲む行為を通して技術と文化について考える
3	普及とコミュニケーション	受け入れ「させる」ことをどう考えるか
4	協力される側だった日本	明治時代のお雇い外国人と「抵抗」を考える
5	日本への技術移転	贈与・交換・支配・互酬と国際協力
6	文化の受容と抵抗	文化接触（アカルチュレーション）から文化の受容を考える
7	文化財を守るとは	明治時代の日本で文化財をなぜ守るようになったのかを考える
8	国際的な文化財保護までの道のり	戦利品としての略奪と返還運動から文化財の国際的な捉え方の変化を考える
9	人類の遺産	世界遺産という発想はどこからきたのかを考える
10	政府開発援助（ODA）と文化協力	パブリックディプロマシーやソフトパワーについて考える
11	国際協力と想像力―期末レポートに向けて	期末レポートの課題文献とこの授業の繋がりを講義する
12	国際人権	文化要素としての人権について難民を例に「民権」との違いから考える
13	市民としての国際文化協力	日本の地域での難民受け入れを通して同化と社会的統合について考える
14	私と国際文化協力	担当教員の実務経験を踏まえて国際文化協力の授業での学びを再構成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業後課題は、法政大学の図書館HPのデーターベース等から文献を検索して論じるなど、大学生に必要な調査と思考を促すものである。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
以下の本は、複数回の授業の参考文献であるとともに、期末レポートの課題文献となる。到達目標４に関係している。各自入手すること。
松本悟・佐藤仁編著（2021）『国際協力と想像力―イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社。

【参考書】
毎回の講義に関連する参考文献はその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】
・授業後課題への回答などの平常点50%、期末レポート50%。
・授業後課題は設問に200字〜800字程度で答えるもので、カッコ内の場合は減点となる（例：設問や指示に的確に答えていない、極端に短い、文章として辻褄が合わない）。
・期末レポートは、授業で学んだ内容を踏まえて、課題文献を分析するもので、知識を問うものではない。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・短い文章や期末レポートの書き方の説明が役に立ったという声が多いので継続する。
・学生から提出された授業後課題の答案に対して、個々人へのフィードバックを求める声があるが、履修者が多いためそれは不可能。また、労力の割に、それを活かそうと考えている学生が多いわけではない。したがって、提出された答案をもとに次の授業の冒頭でフィードバックし、それを各自が自分の答案に当てはめて自己分析してもらっている。自己採点能力も重要な力である。
・学習支援システムの「掲示板」を使って常時質問を受け付けている。
・授業後課題はコロナ禍では毎回出していたが、負担の大きさに鑑みて、現在では学期中に5〜6回にしている。受講者からは、大学でのレポートの書き方やデータベースの使い方が身についたと好評である。
・毎回グループ討議と発表を取り入れ、教員がフィードバックをする。単に学生が意見を言うだけでなく、それをもとに教員とやり取りを行うことで考えが深まると、学生から好評。

【学生が準備すべき機器他】
・教科書は春学期の前半（5月末頃）までには入手しておくこと

【その他の重要事項】
NHK記者や、開発協力分野のNGOとして実務に関わってきた教員が、その経験を事例として取り上げながら講義やコメントをする。

【Outline (in English)】
【Course outline】
What is international cooperation from the perspectives of intercultural studies? It should covers impacts of inter-national cooperation on cultures, inter-cultural cooperation or inter-national cooperation in cultural fields. By the end of this course, students will understand those aspects of cooperation beyond the national borders and will be able to analyze them logically.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students are expected to;
1) acquire the basic knowledge on intercultural studies and international cooperation.
2) be able to analyze the issues in associating international cooperation and culture.
3) understand the key concepts of "technology and culture", "development communication", "protection of cultural heritage", "refugees" or "public diplomacy".
4) acquire and be able to apply the academic skills to write a short or term paper.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content or to write a short essay on a given topic.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on a short essay at each class meeting (50%) and a term-end report (50%).

PSY200GA（心理学 / Psychology 200）

異文化適応論

浅川　希洋志

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
国際社会で生きるとき、われわれは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えるとき、われわれは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考える傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。本講義では、文化心理学における比較文化的実証研究を取り上げながら、心の働きと文化の関連性について学んでいくとともに、世界という視点で捉えたとき、われわれが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを学んでいく。また、講義で扱う様々なトピックを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを併せて考えていく。

【到達目標】
しつけや教育の仕方、あるいは教育システムといったものが、いかにその社会で適応的に生きる人々、つまりその社会にあった行動パターンや感情の働き方を身につけた人々を育てるために作り上げられてきたものであるかを、授業で扱う様々なテーマを通して理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は「対面形式」で実施する予定であるが、状況に応じてZoom等によるオンライン授業や課題提示によるオンデマンド授業を実施する可能性もある。
授業は講義を中心に行う。また、心と文化の関係を描き出すようなビデオ、DVD等があれば適宜紹介する。
期末試験や課題等のフィードバックは、ポイントをまとめた文書を作成し、学習支援システムを用いて受講生に配布する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要を説明する。
第2回	文化心理学とは何か	文化心理学という分野がどのような理由から展開されるに至ったのかを、研究者の文化的盲点という観点から解説していく。
第3回	文化による自己認識の違い	文化による自己の捉え方の違いが、人々の認知や思考、行動にどのような影響をもたらすかを解説していく。
第4回	意欲構造の文化的差異	意欲の構造が文化によってどのように異なるかを、日米の実証的研究を紹介しながら解説していく。
第5回	日本人の努力帰属傾向	日本人が努力に価値をおく傾向が強いことを、日米の実証研究を概観しながら解説していく。また、その理由を考察する。
第6回	いい子アイデンティティの早期形成と自己規制のメカニズム	日本人の子どもが早期にいい子アイデンティティを形成し、それによって、いかに社会生活で自己規制を働かせるのかを解説していく。
第7回	日本のいい子、米国のいい子	日米のいい子像がそれぞれの社会で求められる人間像を反映するものであり、学校教育がいかにそれらを促進していくかを、解説していく。
第8回	日本人の気持ち主義	日本人がいかに人の気持ちを重視し、気持ちを知ろう、読もうとする傾向が強いか、またなぜ日本人がそういった傾向を身につけてきたのかを、解説していく。
第9回	気持ち志向のしつけ	気持ち志向を促進する日本のしつけの方法を、欧米のしつけの方法と比較しながら、解説していく。
第10回	日本人の道徳意識と道徳的判断	日本人の道徳意識と道徳判断が、欧米人のそれに比べ、人間関係的、感情的なところに強く影響されることを、実証研究をもとに解説していく。
第11回	道徳判断に必要とされる情報の日米比較	道徳判断において、日本人は人間関係的、感情的情報を求め、米国人に比べ、善悪の判断が厳しくない傾向にあるが、その理由について、実証研究を交えながら考察していく。
第12回	大きなピクチャーを捉えるために	さまざまな事件の原因推測に関する実証研究を紹介しながら、そこに、文化による自己観の違いが、いかに鮮明に反映されているかを確認していく。
第13回	生態環境から認知にいたる流れ	人々の生きる環境が、人々の行動や思考のパターン、そして認知のプロセスにどのように影響してきたのかを、歴史という大きな流れの中で捉え、ひとつのモデルとしてそれを解説していく。
第14回	授業の総括	授業のまとめ、期末試験の解説を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で扱うテーマを常に頭の片隅におきながら日常生活を送ること。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストは特に指定しない。適宜プリントを配付する。授業で配布するプリントはすべて学習支援システムにアップする。

【参考書】
東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』（東京大学出版会、1994年）、北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』（共立出版、1998年）、恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』（中公新書、1992年）、箕浦康子著『文化のなかの子ども』（東京大学出版会、1990年）、リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』（ダイヤモンド社、2004年）、増田貴彦著『ボスだけを見る欧米人みんなの顔を見る日本人』（講談社＋α新書、2010年）等。また、必要に応じて適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
期末試験により評価する。したがって、成績評価の「配分（%）」は期末試験100％となる。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
できるだけ身近で、具体的な例を用いて授業を展開していく。

【学生が準備すべき機器他】
授業で使うプリントは授業中に配布するが、学習支援システムにもアップする。配布するプリントに沿って授業を進めるので、欠席などによりプリントが手元にない場合は、必ず学習支援システムからダウンロードして授業に臨むこと。

【Outline (in English)】
(1) Course outline
This is an introductory course in cultural psychology. By being introduced to the theories and empirical findings in the field, students learn how culture shapes psychological processes of people.
(2) Learning Objectives
By the end of the course, students are expected to understand (a) how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships, and (b) what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies.
(3) Learning activities outside of classroom
Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.
(4) Grading Criteria/Policy
Final grade will be decided based on the term-end examination (100%).

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

情報システム概論

和泉　順子

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報処理システムを構成しているコンピュータのハードウェア及びソフトウェアの基本的な役割や動作を学習する。アセンブラやデータベース機能などの実習も行い、知識の習得だけでなく、自らが設定した条件でコンピュータが実際に動く部分を自ら確認し、学ぶ。

【到達目標】
コンピュータの構成、ハードウェア及びソフトウェアの動作やアセンブラなどを理解し、ITパスポートなどの試験の一部に対応可能な知識や技能の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
オンライン併用での開講の可能性がある。授業計画や授業実施方法の変更については、学習支援システムでその都度提示する。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出は、基本的には学習支援システム（Hoppii）を通じて行い、フィードバックも基本的には授業内あるいは学習支援システムで行う。補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答なども学習支援システムの掲示板機能を活用する。
授業は6つのテーマ、すなわち、1. コンピュータのハードウエアの構成及び役割、2. アセンブラの機能の学習・作成、3. ソフトウエアの構成及び役割、4. データベースAccessの機能の修得及び使用、5. 情報処理システムの種類と機能、6. 情報システムのセキュリティ、開発・保守の6項目である。
アセンブラおよびデータベースAccessの学習では実習を予定している。その他のテーマについては、講義が中心になるが、コンピュータの具体的な事例・事柄を示しながら、理解が容易になるような講義を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	コンピュータの開発経緯	計算具、計算器、計算機などの計算の変遷と、AIなどを含む現在のコンピュータの形態に至った開発経緯、基本概念を知る
第2回	データの基礎的表現	数値データの2進数、8進数、16進数および10進数について、その関係を含めて、理解する
第3回	各種データの表現	数値データ、論理データ、文字データ、音声データ及び画像データについて構造を理解する
第4回	中央処理装置	中央処理装置を構成する演算装置、制御装置、主記憶装置の構造を学ぶ
第5回	記憶装置、入出力装置、通信制御装置	記憶装置、入力装置、出力装置、通信制御装置の構造と役割について学習する
第6回	ソフトウエアの基本構成	ソフトウエアを構成する基本ソフトウエア、ミドルウエア及び応用ソフトウエアについて学習する
第7回	オペレーティングシステム	OSを構成する各種のプログラムおよびその役割、OSの種類と構成について理解する
第8回	言語処理ソフトウエア	機械語、アセンブラ言語および高水準言語の種類及びその処理方式について学ぶ
第9回	アセンブラ言語の基礎	仮想的計算機COMETの構成及びアセンブラ言語CASL2の基礎を学ぶ
第10回	アセンブラ言語の応用、実習	計算問題を解くプログラムをCASL2で作成する実習を行い、実行して結果を確認し、計算機の構造を理解する
第11回	ファイルシステム	ファイル構成、論理レコードの形式、ファイルの編成及びファイル処理方式について学習する
第12回	データベースシステムの基礎	データベースAccessの構造、それを使用してレコードの検索およびレコードの並べ替えを実習する
第13回	ソフトウェアの開発と保守、情報セキュリティ	ソフトウェアの開発と保守の考え方及び情報セキュリティと重要性やAIの基礎を理解し、その方法を学ぶ
第14回	授業のまとめ	コンピュータの構成や動作原理などを復習し、開発保守や情報セキュリティを考えた上でコンピュータの使い方を議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1．授業内容をテキストに従って予習する。
2．課題を提出し、授業内容を復習する。
3．授業で使用したソフトウエアについて、テーマを考えて独自で使用し、その機能を体験する。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
「情報システム概論」,和泉順子,櫻井茂明,中村文隆,サイエンス社, 2018, ISBN 978-4-7819-1430-5

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、課題・小テスト等（40%）、期末テスト（50%）および平常点（10%）で行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
期末テストの実施が困難な場合は、小テスト・課題・レポートを基準に、掲示板などでのコメントや情報共有を平常点として加点、オンライン試験などの実施などで評価する予定である。詳細は初回授業時に説明する。

【学生の意見等からの気づき】
理解を深めるため、授業進度を適宜調整する。

【学生が準備すべき機器他】
教科書を各自で準備し、予習・復習に用いることで授業内容の理解を深める。
情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、実習を想定しているAccess（データベース）はWindows環境のみのソフトウェアとなるため、この実習の場合は適宜登校・情報実習室PCの利用を推奨する。
オンライン併用の場合は、授業の解説や補足のためにZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、授業資料やお知らせ、課題等は基本的には学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
初回の授業に必ず出席すること。
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡを前提科目とする。
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。

【前提科目】
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡ

【Outline (in English)】
（Learning Objectives）
We will learn the basic behaviours of the hardware and software of the computer constituting the information processing system. We also do practical training such as assembler and database functions, not only acquire knowledge, but also learn where the computer actually works.
（Learning Objectives）
- To develop an understanding of computer configuration, hardware and software operation and assembler.
- The course aims to provide students with the knowledge and skills to prepare for some of the exams such as IT Passport.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (40%), in-class contribution(10%), and term-end exam (50%).

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

情報システム概論

和泉　順子

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報処理システムを構成しているコンピュータのハードウェア及びソフトウェアの基本的な役割や動作を学習する。アセンブラやデータベース機能などの実習も行い、知識の習得だけでなく、自らが設定した条件でコンピュータが実際に動く部分を自ら確認し、学ぶ。

【到達目標】
コンピュータの構成、ハードウェア及びソフトウェアの動作やアセンブラなどを理解し、ITパスポートなどの試験の一部に対応可能な知識や技能の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
オンライン併用での開講の可能性がある。授業計画や授業実施方法の変更については、学習支援システムでその都度提示する。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出は、基本的には学習支援システム（Hoppii）を通じて行い、フィードバックも基本的には授業内あるいは学習支援システムで行う。補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答なども学習支援システムの掲示板機能を活用する。
授業は6つのテーマ、すなわち、1. コンピュータのハードウエアの構成及び役割、2. アセンブラの機能の学習・作成、3. ソフトウエアの構成及び役割、4. データベースAccessの機能の修得及び使用、5. 情報処理システムの種類と機能、6. 情報システムのセキュリティ、開発・保守の6項目である。
アセンブラおよびデータベースAccessの学習では実習を予定している。その他のテーマについては、講義が中心になるが、コンピュータの具体的な事例・事柄を示しながら、理解が容易になるような講義を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	コンピュータの開発経緯	計算具、計算器、計算機などの計算の変遷と、AIなどを含む現在のコンピュータの形態に至った開発経緯、基本概念を知る
第2回	データの基礎的表現	数値データの2進数、8進数、16進数および10進数について、その関係を含めて、理解する
第3回	各種データの表現	数値データ、論理データ、文字データ、音声データ及び画像データについて構造を理解する
第4回	中央処理装置	中央処理装置を構成する演算装置、制御装置、主記憶装置の構造を学ぶ
第5回	記憶装置、入出力装置、通信制御装置	記憶装置、入力装置、出力装置、通信制御装置の構造と役割について学習する
第6回	ソフトウエアの基本構成	ソフトウエアを構成する基本ソフトウエア、ミドルウエア及び応用ソフトウエアについて学習する
第7回	オペレーティングシステム	OSを構成する各種のプログラムおよびその役割、OSの種類と構成について理解する
第8回	言語処理ソフトウエア	機械語、アセンブラ言語および高水準言語の種類及びその処理方式について学ぶ
第9回	アセンブラ言語の基礎	仮想的計算機COMETの構成及びアセンブラ言語CASL2の基礎を学ぶ
第10回	アセンブラ言語の応用、実習	計算問題を解くプログラムをCASL2で作成する実習を行い、実行して結果を確認し、計算機の構造を理解する
第11回	ファイルシステム	ファイル構成、論理レコードの形式、ファイルの編成及びファイル処理方式について学習する
第12回	データベースシステムの基礎	データベースAccessの構造、それを使用してレコードの検索およびレコードの並べ替えを実習する
第13回	ソフトウエアの開発と保守、情報セキュリティ	ソフトウエアの開発と保守の考え方及び情報セキュリティと重要性やAIの基礎を理解し、その方法を学ぶ
第14回	授業のまとめ	コンピュータの構成や動作原理などを復習し、開発保守や情報セキュリティを考えた上でコンピュータの使い方を議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1．授業内容をテキストに従って予習する。
2．課題を提出し、授業内容を復習する。
3．授業で使用したソフトウエアについて、テーマを考えて独自で使用し、その機能を体験する。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
「情報システム概論」,和泉順子,櫻井茂明,中村文隆,サイエンス社, 2018, ISBN 978-4-7819-1430-5

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、課題・小テスト等（40%）、期末テスト（50%）および平常点（10%）で行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
期末テストの実施が困難な場合は、小テスト・課題・レポートを基準に、掲示板などでのコメントや情報共有を平常点として加点、オンライン試験などの実施などで評価する予定である。詳細は初回授業時に説明する。

【学生の意見等からの気づき】
理解を深めるため、授業進度を適宜調整する。

【学生が準備すべき機器他】
教科書を各自で準備し、予習・復習に用いることで授業内容の理解を深める。
情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、実習を想定しているAccess（データベース）はWindows環境のみのソフトウェアとなるため、この実習の場合は適宜登校・情報実習室PCの利用を推奨する。
オンライン併用の場合は、授業の解説や補足のためにZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、授業資料やお知らせ、課題等は基本的には学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
初回の授業に必ず出席すること。
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡを前提科目とする。
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。

【前提科目】
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡ

【Outline (in English)】
（Learning Objectives）
We will learn the basic behaviours of the hardware and software of the computer constituting the information processing system. We also do practical training such as assembler and database functions, not only acquire knowledge, but also learn where the computer actually works.
（Learning Objectives）
- To develop an understanding of computer configuration, hardware and software operation and assembler.
- The course aims to provide students with the knowledge and skills to prepare for some of the exams such as IT Passport.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (40%), in-class contribution(10%), and term-end exam (50%).

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

情報システム概論

櫻井　茂明

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報処理システムを構成しているコンピュータのハードウェア及びソフトウェアの基本的な役割や動作を学習する。アセンブラやデータベース機能などの実習も行い、知識の習得だけでなく、自らが設定した条件でコンピュータが実際に動く部分を自ら確認し、学ぶ。

【到達目標】
コンピュータの構成、ハードウェア及びソフトウェアの動作やアセンブラなどを理解し、ITパスポートなどの試験の一部に対応可能な知識や技能の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
オンライン併用での開講の可能性がある。授業計画や授業実施方法の変更については、学習支援システムでその都度提示する。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出は、基本的には学習支援システム（Hoppii）を通じて行い、フィードバックも基本的には授業内あるいは学習支援システムで行う。補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答なども学習支援システムの掲示板機能を活用する。
授業は6つのテーマ、すなわち、1. コンピュータのハードウエアの構成及び役割、2. アセンブラの機能の学習・作成、3. ソフトウエアの構成及び役割、4. データベースAccessの機能の修得及び使用、5. 情報処理システムの種類と機能、6. 情報システムのセキュリティ、開発・保守の6項目である。
アセンブラおよびデータベースAccessの学習では実習を予定している。その他のテーマについては、講義が中心になるが、コンピュータの具体的な事例・事柄を示しながら、理解が容易になるような講義を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	コンピュータの開発経緯	計算具、計算器、計算機などの計算の変遷と、AIなどを含む現在のコンピュータの形態に至った開発経緯、基本概念を知る
第2回	データの基礎的表現	数値データの2進数、8進数、16進数および10進数について、その関係を含めて、理解する
第3回	各種データの表現	数値データ、論理データ、文字データ、音声データ及び画像データについて構造を理解する
第4回	中央処理装置	中央処理装置を構成する演算装置、制御装置、主記憶装置の構造を学ぶ
第5回	記憶装置、入出力装置、通信制御装置	記憶装置、入力装置、出力装置、通信制御装置の構造と役割について学習する
第6回	ソフトウエアの基本構成	ソフトウエアを構成する基本ソフトウエア、ミドルウエア及び応用ソフトウエアについて学習する
第7回	オペレーティングシステム	OSを構成する各種のプログラムおよびその役割、OSの種類と構成について理解する
第8回	言語処理ソフトウエア	機械語、アセンブラ言語および高水準言語の種類及びその処理方式について学ぶ
第9回	アセンブラ言語の基礎	仮想的計算機COMETの構成及びアセンブラ言語CASL2の基礎を学ぶ
第10回	アセンブラ言語の応用、実習	計算問題を解くプログラムをCASL2で作成する実習を行い、実行して結果を確認し、計算機の構造を理解する
第11回	ファイルシステム	ファイル構成、論理レコードの形式、ファイルの編成及びファイル処理方式について学習する
第12回	データベースシステムの基礎	データベースAccessの構造、それを使用してレコードの検索およびレコードの並べ替えを実習する
第13回	ソフトウェアの開発と保守、情報セキュリティ	ソフトウェアの開発と保守の考え方及び情報セキュリティと重要性やAIの基礎を理解し、その方法を学ぶ
第14回	授業のまとめ	コンピュータの構成や動作原理などを復習し、開発保守や情報セキュリティを考えた上でコンピュータの使い方を議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1．授業内容をテキストに従って予習する。
2．課題を提出し、授業内容を復習する。
3．授業で使用したソフトウエアについて、テーマを考えて独自で使用し、その機能を体験する。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
「情報システム概論」,和泉順子,櫻井茂明,中村文隆,サイエンス社, 2018, ISBN 978-4-7819-1430-5

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、課題・小テスト等（40%）、期末テスト（50%）および平常点（10%）で行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
期末テストの実施が困難な場合は、小テスト・課題・レポートを基準に、掲示板などでのコメントや情報共有を平常点として加点、オンライン試験などの実施などで評価する予定である。詳細は初回授業時に説明する。

【学生の意見等からの気づき】
理解を深めるため、授業進度を適宜調整する。

【学生が準備すべき機器他】
教科書を各自で準備し、予習・復習に用いることで授業内容の理解を深める。
情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、実習を想定しているAccess（データベース）はWindows環境のみのソフトウェアとなるため、この実習の場合は適宜登校・情報実習室PCの利用を推奨する。
オンライン併用の場合は、授業の解説や補足のためにZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、授業資料やお知らせ、課題等は基本的には学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
初回の授業に必ず出席すること。
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡを前提科目とする。
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。

【前提科目】
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡ

【Outline (in English)】
（Learning Objectives）
We will learn the basic behaviours of the hardware and software of the computer constituting the information processing system. We also do practical training such as assembler and database functions, not only acquire knowledge, but also learn where the computer actually works.
（Learning Objectives）
- To develop an understanding of computer configuration, hardware and software operation and assembler.
- The course aims to provide students with the knowledge and skills to prepare for some of the exams such as IT Passport.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (40%), in-class contribution(10%), and term-end exam (50%).

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

情報システム概論

中村　文隆

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報処理システムを構成しているコンピュータのハードウェア及びソフトウェアの基本的な役割や動作を学習する。アセンブラやデータベース機能などの実習も行い、知識の習得だけでなく、自らが設定した条件でコンピュータが実際に動く部分を自ら確認し、学ぶ。

【到達目標】
コンピュータの構成、ハードウェア及びソフトウェアの動作やアセンブラなどを理解し、ITパスポートなどの試験の一部に対応可能な知識や技能の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
オンライン併用での開講の可能性がある。授業計画や授業実施方法の変更については、学習支援システムでその都度提示する。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出は、基本的には学習支援システム（Hoppii）を通じて行い、フィードバックも基本的には授業内あるいは学習支援システムで行う。補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答なども学習支援システムの掲示板機能を活用する。
授業は6つのテーマ、すなわち、1. コンピュータのハードウエアの構成及び役割、2. アセンブラの機能の学習・作成、3. ソフトウエアの構成及び役割、4. データベースAccessの機能の修得及び使用、5. 情報処理システムの種類と機能、6. 情報システムのセキュリティ、開発・保守の6項目である。
アセンブラおよびデータベースAccessの学習では実習を予定している。その他のテーマについては、講義が中心になるが、コンピュータの具体的な事例・事柄を示しながら、理解が容易になるような講義を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	コンピュータの開発経緯	計算具、計算器、計算機などの計算の変遷と、AIなどを含む現在のコンピュータの形態に至った開発経緯、基本概念を知る
第2回	データの基礎的表現	数値データの2進数、8進数、16進数および10進数について、その関係を含めて、理解する
第3回	各種データの表現	数値データ、論理データ、文字データ、音声データ及び画像データについて構造を理解する
第4回	中央処理装置	中央処理装置を構成する演算装置、制御装置、主記憶装置の構造を学ぶ
第5回	記憶装置、入出力装置、通信制御装置	記憶装置、入力装置、出力装置、通信制御装置の構造と役割について学習する
第6回	ソフトウエアの基本構成	ソフトウエアを構成する基本ソフトウエア、ミドルウエア及び応用ソフトウエアについて学習する
第7回	オペレーティングシステム	OSを構成する各種のプログラムおよびその役割、OSの種類と構成について理解する
第8回	言語処理ソフトウエア	機械語、アセンブラ言語および高水準言語の種類及びその処理方式について学ぶ
第9回	アセンブラ言語の基礎	仮想的計算機COMETの構成及びアセンブラ言語CASL2の基礎を学ぶ
第10回	アセンブラ言語の応用、実習	計算問題を解くプログラムをCASL2で作成する実習を行い、実行して結果を確認し、計算機の構造を理解する
第11回	ファイルシステム	ファイル構成、論理レコードの形式、ファイルの編成及びファイル処理方式について学習する
第12回	データベースシステムの基礎	データベースAccessの構造、それを使用してレコードの検索およびレコードの並べ替えを実習する
第13回	ソフトウェアの開発と保守、情報セキュリティ	ソフトウェアの開発と保守の考え方及び情報セキュリティと重要性やAIの基礎を理解し、その方法を学ぶ
第14回	授業のまとめ	コンピュータの構成や動作原理などを復習し、開発保守や情報セキュリティを考えた上でコンピュータの使い方を議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1．授業内容をテキストに従って予習する。
2．課題を提出し、授業内容を復習する。
3．授業で使用したソフトウエアについて、テーマを考えて独自で使用し、その機能を体験する。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
「情報システム概論」,和泉順子,櫻井茂明,中村文隆,サイエンス社, 2018, ISBN 978-4-7819-1430-5

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、課題・小テスト等（40%）、期末テスト（50%）および平常点（10%）で行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
期末テストの実施が困難な場合は、小テスト・課題・レポートを基準に、掲示板などでのコメントや情報共有を平常点として加点、オンライン試験などの実施などで評価する予定である。詳細は初回授業時に説明する。

【学生の意見等からの気づき】
理解を深めるため、授業進度を適宜調整する。

【学生が準備すべき機器他】
教科書を各自で準備し、予習・復習に用いることで授業内容の理解を深める。
情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、実習を想定しているAccess（データベース）はWindows環境のみのソフトウェアとなるため、この実習の場合は適宜登校・情報実習室PCの利用を推奨する。
オンライン併用の場合は、授業の解説や補足のためにZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、授業資料やお知らせ、課題等は基本的には学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
初回の授業に必ず出席すること。
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡを前提科目とする。
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。

【前提科目】
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡ

【Outline (in English)】
（Learning Objectives）
We will learn the basic behaviours of the hardware and software of the computer constituting the information processing system. We also do practical training such as assembler and database functions, not only acquire knowledge, but also learn where the computer actually works.
（Learning Objectives）
- To develop an understanding of computer configuration, hardware and software operation and assembler.
- The course aims to provide students with the knowledge and skills to prepare for some of the exams such as IT Passport.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (40%), in-class contribution(10%), and term-end exam (50%).

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

情報システム概論

中村　文隆

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報処理システムを構成しているコンピュータのハードウェア及びソフトウェアの基本的な役割や動作を学習する。アセンブラやデータベース機能などの実習も行い、知識の習得だけでなく、自らが設定した条件でコンピュータが実際に動く部分を自ら確認し、学ぶ。

【到達目標】
コンピュータの構成、ハードウェア及びソフトウェアの動作やアセンブラなどを理解し、ITパスポートなどの試験の一部に対応可能な知識や技能の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
オンライン併用での開講の可能性がある。授業計画や授業実施方法の変更については、学習支援システムでその都度提示する。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出は、基本的には学習支援システム（Hoppii）を通じて行い、フィードバックも基本的には授業内あるいは学習支援システムで行う。補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答なども学習支援システムの掲示板機能を活用する。
授業は6つのテーマ、すなわち、1. コンピュータのハードウエアの構成及び役割、2. アセンブラの機能の学習・作成、3. ソフトウエアの構成及び役割、4. データベースAccessの機能の修得及び使用、5. 情報処理システムの種類と機能、6. 情報システムのセキュリティ、開発・保守の6項目である。
アセンブラおよびデータベースAccessの学習では実習を予定している。その他のテーマについては、講義が中心になるが、コンピュータの具体的な事例・事柄を示しながら、理解が容易になるような講義を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	コンピュータの開発経緯	計算具、計算器、計算機などの計算の変遷と、AIなどを含む現在のコンピュータの形態に至った開発経緯、基本概念を知る
第2回	データの基礎的表現	数値データの2進数、8進数、16進数および10進数について、その関係を含めて、理解する
第3回	各種データの表現	数値データ、論理データ、文字データ、音声データ及び画像データについて構造を理解する
第4回	中央処理装置	中央処理装置を構成する演算装置、制御装置、主記憶装置の構造を学ぶ
第5回	記憶装置、入出力装置、通信制御装置	記憶装置、入力装置、出力装置、通信制御装置の構造と役割について学習する
第6回	ソフトウエアの基本構成	ソフトウエアを構成する基本ソフトウエア、ミドルウエア及び応用ソフトウエアについて学習する
第7回	オペレーティングシステム	OSを構成する各種のプログラムおよびその役割、OSの種類と構成について理解する
第8回	言語処理ソフトウエア	機械語、アセンブラ言語および高水準言語の種類及びその処理方式について学ぶ
第9回	アセンブラ言語の基礎	仮想的計算機COMETの構成及びアセンブラ言語CASL2の基礎を学ぶ
第10回	アセンブラ言語の応用、実習	計算問題を解くプログラムをCASL2で作成する実習を行い、実行して結果を確認し、計算機の構造を理解する
第11回	ファイルシステム	ファイル構成、論理レコードの形式、ファイルの編成及びファイル処理方式について学習する
第12回	データベースシステムの基礎	データベースAccessの構造、それを使用してレコードの検索およびレコードの並べ替えを実習する
第13回	ソフトウエアの開発と保守、情報セキュリティ	ソフトウエアの開発と保守の考え方及び情報セキュリティと重要性やAIの基礎を理解し、その方法を学ぶ
第14回	授業のまとめ	コンピュータの構成や動作原理などを復習し、開発保守や情報セキュリティを考えた上でコンピュータの使い方を議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1．授業内容をテキストに従って予習する。
2．課題を提出し、授業内容を復習する。
3．授業で使用したソフトウエアについて、テーマを考えて独自で使用し、その機能を体験する。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
「情報システム概論」,和泉順子,櫻井茂明,中村文隆,サイエンス社, 2018, ISBN 978-4-7819-1430-5

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、課題・小テスト等（40%）、期末テスト（50%）および平常点（10%）で行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
期末テストの実施が困難な場合は、小テスト・課題・レポートを基準に、掲示板などでのコメントや情報共有を平常点として加点、オンライン試験などの実施などで評価する予定である。詳細は初回授業時に説明する。

【学生の意見等からの気づき】
理解を深めるため、授業進度を適宜調整する。

【学生が準備すべき機器他】
教科書を各自で準備し、予習・復習に用いることで授業内容の理解を深める。
情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、実習を想定しているAccess（データベース）はWindows環境のみのソフトウェアとなるため、この実習の場合は適宜登校・情報実習室PCの利用を推奨する。
オンライン併用の場合は、授業の解説や補足のためにZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、授業資料やお知らせ、課題等は基本的には学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
初回の授業に必ず出席すること。
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡを前提科目とする。
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。

【前提科目】
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡ

【Outline (in English)】
（Learning Objectives）
We will learn the basic behaviours of the hardware and software of the computer constituting the information processing system. We also do practical training such as assembler and database functions, not only acquire knowledge, but also learn where the computer actually works.
（Learning Objectives）
- To develop an understanding of computer configuration, hardware and software operation and assembler.
- The course aims to provide students with the knowledge and skills to prepare for some of the exams such as IT Passport.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (40%), in-class contribution(10%), and term-end exam (50%).

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

メディア情報基礎

大嶋　良明

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルチメディア作品を**Photoshop**と**Premier**で作ろう。
メディアとしてのコンピュータに着目し、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。

【到達目標】
PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
・PhotoshopやPremiereなどのソフトに親しみ、デジカメ写真や動画などを、Webサイトやレポート、作品作りなどに活用するテクニックを身につける。
・デザインの考え方を学び自分自身の表現に活かす練習をする。
・パソコンやデジカメなどで、モノのカタチや色をデータとして扱う方法を学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	メディアとは何か。メディア情報とそれを支える情報技術の文化史を学ぶ。
2	メディア情報の基礎	デジタルであるということ、メディア情報の基礎知識を学ぶ。
3	メディア情報の基礎：Web	オンラインメディアとしてのWebの特性とHTML5によるWebページの制作法を学ぶ。
4	メディア情報の基礎：静止画像	デジタル画像（静止画像）の仕組みとその特性を学ぶ。
5	制作実習A：実習とWeb化の手引き	PC・周辺機器ハードウェアとメディア機器の活用方法を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
6	制作実習A：静止画像の作品制作	Photoshopを用いたディジタル画像の制作の基本を学ぶ。
7	制作実習A：静止画像の作品制作	レイヤーを操作単位とする描画、編集、調整の技法を学ぶ。
8	メディア情報の基礎：動画像	デジタル動画像の特性と情報圧縮の仕組み、MPEG4など代表的な動画形式の特性を学ぶ。
9	制作実習B：実習とWeb化の手引き	静止画像・動画像・音楽を用いた簡単なマルチメディア・コンテンツ制作の手順と基礎知識を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
10	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作の基礎を学ぶ。素材画像の取り込みから基本的な編集操作を実習する。
11	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作を実践する。エフェクトを含む映像素材の効果的な編集やテキスト、音声を配置して作品としてまとめる方法を実習する。
12	Webの表現手法	HTML5によるWebページの制作法。スタイルシート利用のメリットと実例。基礎知識と制作手順を学ぶ。
13	制作実習C：スタイルシート	HTMLとスタイルシートを用いたWebコンテンツの構造化、CSSによるWebコンテンツの制作を学び、実習する。
14	まとめ	学習内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各講義の復習。実習課題作品を制作し、提出する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義初回に提示する。

【参考書】
講義において適宜提示する。マルチメディア検定ベーシック対応の参考書として、CG-ARTS協会、「入門マルチメディア[改訂新版]」、ISBN 978-4-903474-60-1を挙げる。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が 3 回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスに基づく共同担当科目として、各教員はそれまでのアンケート内容による気づきを共有し授業改善に役立てる。
2025年度に教室環境が更新したことで、実習の効率が大きく向上した。引き続き実習時の問題解消に努め履修者アンケートに基づきAdobe系アプリの使用感の向上に努めていく。

【学生が準備すべき機器他】
画像処理、映像制作の代表的なソフトでの実習が可能な、情報実習室において授業を行う。課題提出等にはWebClassなど学内Web環境を活用する。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
学生へのメッセージ：　マルチメディアデータを自由に編集できるようになると、コンピュータの多彩な機能の一つひとつが面白くなってくる。コンピュータが本当にパーソナルなツールとして身近に感じられる、そういう段階です。思い切りコンピュータを楽しんで欲しい。
本科目では、マルチメディアの活用実習、ならびに発見型学習を通じて**学生の就業力育成を支援する。**
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターを使用したメディア発信に関する実習を行う。

【前提科目】
「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」

【Outline (in English)】
This course provides students with basic knowledge and techniques in computer multimedia and web design at the entry level. It also deals with the concept of information design. The students will work on projects on Adobe Photoshop and Adobe Premier, AviUtl and on a simple case of HTML authoring. The objective of this course is to enable students to acquire fundamental understanding in digital multimedia and information design with elementary techniques in related authoring tools.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

メディア情報基礎

大嶋　良明

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルチメディア作品を**Photoshop**と**Premier**で作ろう。
メディアとしてのコンピュータに着目し、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。

【到達目標】
PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
・PhotoshopやPremiereなどのソフトに親しみ、デジカメ写真や動画などを、Webサイトやレポート、作品作りなどに活用するテクニックを身につける。
・デザインの考え方を学び自分自身の表現に活かす練習をする。
・パソコンやデジカメなどで、モノのカタチや色をデータとして扱う方法を学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	メディアとは何か。メディア情報とそれを支える情報技術の文化史を学ぶ。
2	メディア情報の基礎	デジタルであるということ、メディア情報の基礎知識を学ぶ。
3	メディア情報の基礎：Web	オンラインメディアとしてのWebの特性とHTML5によるWebページの制作法を学ぶ。
4	メディア情報の基礎：静止画像	デジタル画像（静止画像）の仕組みとその特性を学ぶ。
5	制作実習A：実習とWeb化の手引き	PC・周辺機器ハードウェアとメディア機器の活用方法を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
6	制作実習A：静止画像の作品制作	Photoshopを用いたディジタル画像の制作の基本を学ぶ。
7	制作実習A：静止画像の作品制作	レイヤーを操作単位とする描画、編集、調整の技法を学ぶ。
8	メディア情報の基礎：動画像	デジタル動画像の特性と情報圧縮の仕組み、MPEG4など代表的な動画形式の特性を学ぶ。
9	制作実習B：実習とWeb化の手引き	静止画像・動画像・音楽を用いた簡単なマルチメディア・コンテンツ制作の手順と基礎知識を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
10	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作の基礎を学ぶ。素材画像の取り込みから基本的な編集操作を実習する。
11	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作を実践する。エフェクトを含む映像素材の効果的な編集やテキスト、音声を配置して作品としてまとめる方法を実習する。
12	Webの表現手法	HTML5によるWebページの制作法。スタイルシート利用のメリットと実例。基礎知識と制作手順を学ぶ。
13	制作実習C：スタイルシート	HTMLとスタイルシートを用いたWebコンテンツの構造化、CSSによるWebコンテンツの制作を学び、実習する。
14	まとめ	学習内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各講義の復習。実習課題作品を制作し、提出する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義初回に提示する。

【参考書】
講義において適宜提示する。マルチメディア検定ベーシック対応の参考書として、CG-ARTS協会、「入門マルチメディア[改訂新版]」、ISBN 978-4-903474-60-1を挙げる。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が 3 回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスに基づく共同担当科目として、各教員はそれまでのアンケート内容による気づきを共有し授業改善に役立てる。
2025年度に教室環境が更新したことで、実習の効率が大きく向上した。引き続き実習時の問題解消に努め履修者アンケートに基づきAdobe系アプリの使用感の向上に努めていく。

【学生が準備すべき機器他】
画像処理、映像制作の代表的なソフトでの実習が可能な、情報実習室において授業を行う。課題提出等にはWebClassなど学内Web環境を活用する。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
学生へのメッセージ：　マルチメディアデータを自由に編集できるようになると、コンピュータの多彩な機能の一つひとつが面白くなってくる。コンピュータが本当にパーソナルなツールとして身近に感じられる、そういう段階です。思い切りコンピュータを楽しんで欲しい。
本科目では、マルチメディアの活用実習、ならびに発見型学習を通じて**学生の就業力育成を支援する。**
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターを使用したメディア発信に関する実習を行う。

【前提科目】
「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」

【Outline (in English)】
This course provides students with basic knowledge and techniques in computer multimedia and web design at the entry level. It also deals with the concept of information design. The students will work on projects on Adobe Photoshop and Adobe Premier, AviUtl and on a simple case of HTML authoring. The objective of this course is to enable students to acquire fundamental understanding in digital multimedia and information design with elementary techniques in related authoring tools.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

メディア情報基礎

甲　洋介

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルチメディア作品を**Photoshop**と**Premier**で作ろう。
メディアとしてのコンピュータに着目し、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。

【到達目標】
PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
・PhotoshopやPremiereなどのソフトに親しみ、デジカメ写真や動画などを、Webサイトやレポート、作品作りなどに活用するテクニックを身につける。
・デザインの考え方を学び自分自身の表現に活かす練習をする。
・パソコンやデジカメなどで、モノのカタチや色をデータとして扱う方法を学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	メディアとは何か。メディア情報とそれを支える情報技術の文化史を学ぶ。
2	メディア情報の基礎	デジタルであるということ、メディア情報の基礎知識を学ぶ。
3	メディア情報の基礎：Web	オンラインメディアとしてのWebの特性とHTML5によるWebページの制作法を学ぶ。
4	メディア情報の基礎：静止画像	デジタル画像（静止画像）の仕組みとその特性を学ぶ。
5	制作実習A：実習とWeb化の手引き	PC・周辺機器ハードウェアとメディア機器の活用方法を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
6	制作実習A：静止画像の作品制作	Photoshopを用いたディジタル画像の制作の基本を学ぶ。
7	制作実習A：静止画像の作品制作	レイヤーを操作単位とする描画、編集、調整の技法を学ぶ。
8	メディア情報の基礎：動画像	デジタル動画像の特性と情報圧縮の仕組み、MPEG4など代表的な動画形式の特性を学ぶ。
9	制作実習B：実習とWeb化の手引き	静止画像・動画像・音楽を用いた簡単なマルチメディア・コンテンツ制作の手順と基礎知識を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
10	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作の基礎を学ぶ。素材画像の取り込みから基本的な編集操作を実習する。
11	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作を実践する。エフェクトを含む映像素材の効果的な編集やテキスト、音声を配置して作品としてまとめる方法を実習する。
12	Webの表現手法	HTML5によるWebページの制作法。スタイルシート利用のメリットと実例。基礎知識と制作手順を学ぶ。
13	制作実習C：スタイルシート	HTMLとスタイルシートを用いたWebコンテンツの構造化、CSSによるWebコンテンツの制作を学び、実習する。
14	まとめ	学習内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各講義の復習。実習課題作品を制作し、提出する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義初回に提示する。

【参考書】
講義において適宜提示する。マルチメディア検定ベーシック対応の参考書として、CG-ARTS協会、「入門マルチメディア[改訂新版]」、ISBN 978-4-903474-60-1を挙げる。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が 3 回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスに基づく共同担当科目として、各教員はそれまでのアンケート内容による気づきを共有し授業改善に役立てる。
2025年度に教室環境が更新したことで、実習の効率が大きく向上した。引き続き実習時の問題解消に努め履修者アンケートに基づきAdobe系アプリの使用感の向上に努めていく。

【学生が準備すべき機器他】
画像処理、映像制作の代表的なソフトでの実習が可能な、情報実習室において授業を行う。課題提出等にはWebClassなど学内Web環境を活用する。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
学生へのメッセージ：　マルチメディアデータを自由に編集できるようになると、コンピュータの多彩な機能の一つひとつが面白くなってくる。コンピュータが本当にパーソナルなツールとして身近に感じられる、そういう段階です。思い切りコンピュータを楽しんで欲しい。
本科目では、マルチメディアの活用実習、ならびに発見型学習を通じて**学生の就業力育成を支援する。**
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターを使用したメディア発信に関する実習を行う。

【前提科目】
「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」

【Outline (in English)】
This course provides students with basic knowledge and techniques in computer multimedia and web design at the entry level. It also deals with the concept of information design. The students will work on projects on Adobe Photoshop and Adobe Premier, AviUtl and on a simple case of HTML authoring. The objective of this course is to enable students to acquire fundamental understanding in digital multimedia and information design with elementary techniques in related authoring tools.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

メディア情報基礎

米倉　明男

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルチメディア作品を**Photoshop**と**Premier**で作ろう。
メディアとしてのコンピュータに着目し、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。

【到達目標】
PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
・PhotoshopやPremiereなどのソフトに親しみ、デジカメ写真や動画などを、Webサイトやレポート、作品作りなどに活用するテクニックを身につける。
・デザインの考え方を学び自分自身の表現に活かす練習をする。
・パソコンやデジカメなどで、モノのカタチや色をデータとして扱う方法を学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	メディアとは何か。メディア情報とそれを支える情報技術の文化史を学ぶ。
2	メディア情報の基礎	デジタルであるということ、メディア情報の基礎知識を学ぶ。
3	メディア情報の基礎：Web	オンラインメディアとしてのWebの特性とHTML5によるWebページの制作法を学ぶ。
4	メディア情報の基礎：静止画像	デジタル画像（静止画像）の仕組みとその特性を学ぶ。
5	制作実習A：実習とWeb化の手引き	PC・周辺機器ハードウェアとメディア機器の活用方法を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
6	制作実習A：静止画像の作品制作	Photoshopを用いたディジタル画像の制作の基本を学ぶ。
7	制作実習A：静止画像の作品制作	レイヤーを操作単位とする描画、編集、調整の技法を学ぶ。
8	メディア情報の基礎：動画像	デジタル動画像の特性と情報圧縮の仕組み、MPEG4など代表的な動画形式の特性を学ぶ。
9	制作実習B：実習とWeb化の手引き	静止画像・動画像・音楽を用いた簡単なマルチメディア・コンテンツ制作の手順と基礎知識を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
10	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作の基礎を学ぶ。素材画像の取り込みから基本的な編集操作を実習する。
11	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作を実践する。エフェクトを含む映像素材の効果的な編集やテキスト、音声を配置して作品としてまとめる方法を実習する。
12	Webの表現手法	HTML5によるWebページの制作法。スタイルシート利用のメリットと実例。基礎知識と制作手順を学ぶ。
13	制作実習C：スタイルシート	HTMLとスタイルシートを用いたWebコンテンツの構造化、CSSによるWebコンテンツの制作を学び、実習する。
14	まとめ	学習内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各講義の復習。実習課題作品を制作し、提出する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義初回に提示する。

【参考書】
講義において適宜提示する。マルチメディア検定ベーシック対応の参考書として、CG-ARTS協会、「入門マルチメディア[改訂新版]」、ISBN 978-4-903474-60-1を挙げる。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が 3 回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスに基づく共同担当科目として、各教員はそれまでのアンケート内容による気づきを共有し授業改善に役立てる。
2025年度に教室環境が更新したことで、実習の効率が大きく向上した。引き続き実習時の問題解消に努め履修者アンケートに基づきAdobe系アプリの使用感の向上に努めていく。

【学生が準備すべき機器他】
画像処理、映像制作の代表的なソフトでの実習が可能な、情報実習室において授業を行う。課題提出等にはWebClassなど学内Web環境を活用する。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
学生へのメッセージ：　マルチメディアデータを自由に編集できるようになると、コンピュータの多彩な機能の一つひとつが面白くなってくる。コンピュータが本当にパーソナルなツールとして身近に感じられる、そういう段階です。思い切りコンピュータを楽しんで欲しい。
本科目では、マルチメディアの活用実習、ならびに発見型学習を通じて**学生の就業力育成を支援する。**
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターを使用したメディア発信に関する実習を行う。

【前提科目】
「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」

【Outline (in English)】
This course provides students with basic knowledge and techniques in computer multimedia and web design at the entry level. It also deals with the concept of information design. The students will work on projects on Adobe Photoshop and Adobe Premier, AviUtl and on a simple case of HTML authoring. The objective of this course is to enable students to acquire fundamental understanding in digital multimedia and information design with elementary techniques in related authoring tools.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

メディア情報基礎

菊池　司

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルチメディア作品を**Photoshop**と**Premier**で作ろう。
メディアとしてのコンピュータに着目し、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。

【到達目標】
PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
・PhotoshopやPremiereなどのソフトに親しみ、デジカメ写真や動画などを、Webサイトやレポート、作品作りなどに活用するテクニックを身につける。
・デザインの考え方を学び自分自身の表現に活かす練習をする。
・パソコンやデジカメなどで、モノのカタチや色をデータとして扱う方法を学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	メディアとは何か。メディア情報とそれを支える情報技術の文化史を学ぶ。
2	メディア情報の基礎	デジタルであるということ、メディア情報の基礎知識を学ぶ。
3	メディア情報の基礎：Web	オンラインメディアとしてのWebの特性とHTML5によるWebページの制作法を学ぶ。
4	メディア情報の基礎：静止画像	デジタル画像（静止画像）の仕組みとその特性を学ぶ。
5	制作実習A：実習とWeb化の手引き	PC・周辺機器ハードウェアとメディア機器の活用方法を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
6	制作実習A：静止画像の作品制作	Photoshopを用いたディジタル画像の制作の基本を学ぶ。
7	制作実習A：静止画像の作品制作	レイヤーを操作単位とする描画、編集、調整の技法を学ぶ。
8	メディア情報の基礎：動画像	デジタル動画像の特性と情報圧縮の仕組み、MPEG4など代表的な動画形式の特性を学ぶ。
9	制作実習B：実習とWeb化の手引き	静止画像・動画像・音楽を用いた簡単なマルチメディア・コンテンツ制作の手順と基礎知識を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
10	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作の基礎を学ぶ。素材画像の取り込みから基本的な編集操作を実習する。
11	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作を実践する。エフェクトを含む映像素材の効果的な編集やテキスト、音声を配置して作品としてまとめる方法を実習する。
12	Webの表現手法	HTML5によるWebページの制作法。スタイルシート利用のメリットと実例。基礎知識と制作手順を学ぶ。
13	制作実習C：スタイルシート	HTMLとスタイルシートを用いたWebコンテンツの構造化、CSSによるWebコンテンツの制作を学び、実習する。
14	まとめ	学習内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各講義の復習。実習課題作品を制作し、提出する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義初回に提示する。

【参考書】
講義において適宜提示する。マルチメディア検定ベーシック対応の参考書として、CG-ARTS協会、「入門マルチメディア[改訂新版]」、ISBN 978-4-903474-60-1を挙げる。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が 3 回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスに基づく共同担当科目として、各教員はそれまでのアンケート内容による気づきを共有し授業改善に役立てる。
2025年度に教室環境が更新したことで、実習の効率が大きく向上した。引き続き実習時の問題解消に努め履修者アンケートに基づきAdobe系アプリの使用感の向上に努めていく。

【学生が準備すべき機器他】
画像処理、映像制作の代表的なソフトでの実習が可能な、情報実習室において授業を行う。課題提出等にはWebClassなど学内Web環境を活用する。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
学生へのメッセージ：　マルチメディアデータを自由に編集できるようになると、コンピュータの多彩な機能の一つひとつが面白くなってくる。コンピュータが本当にパーソナルなツールとして身近に感じられる、そういう段階です。思い切りコンピュータを楽しんで欲しい。
本科目では、マルチメディアの活用実習、ならびに発見型学習を通じて**学生の就業力育成を支援する。**
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターを使用したメディア発信に関する実習を行う。

【前提科目】
「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」

【Outline (in English)】
This course provides students with basic knowledge and techniques in computer multimedia and web design at the entry level. It also deals with the concept of information design. The students will work on projects on Adobe Photoshop and Adobe Premier, AviUtl and on a simple case of HTML authoring. The objective of this course is to enable students to acquire fundamental understanding in digital multimedia and information design with elementary techniques in related authoring tools.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT100GA（計算基盤 / Computing technologies 100）

メディア情報基礎

菊池　司

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルチメディア作品を**Photoshop**と**Premier**で作ろう。
メディアとしてのコンピュータに着目し、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。

【到達目標】
PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
・PhotoshopやPremiereなどのソフトに親しみ、デジカメ写真や動画などを、Webサイトやレポート、作品作りなどに活用するテクニックを身につける。
・デザインの考え方を学び自分自身の表現に活かす練習をする。
・パソコンやデジカメなどで、モノのカタチや色をデータとして扱う方法を学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	メディアとは何か。メディア情報とそれを支える情報技術の文化史を学ぶ。
2	メディア情報の基礎	デジタルであるということ、メディア情報の基礎知識を学ぶ。
3	メディア情報の基礎：Web	オンラインメディアとしてのWebの特性とHTML5によるWebページの制作法を学ぶ。
4	メディア情報の基礎：静止画像	デジタル画像（静止画像）の仕組みとその特性を学ぶ。
5	制作実習A：実習とWeb化の手引き	PC・周辺機器ハードウェアとメディア機器の活用方法を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
6	制作実習A：静止画像の作品制作	Photoshopを用いたディジタル画像の制作の基本を学ぶ。
7	制作実習A：静止画像の作品制作	レイヤーを操作単位とする描画、編集、調整の技法を学ぶ。
8	メディア情報の基礎：動画像	デジタル動画像の特性と情報圧縮の仕組み、MPEG4など代表的な動画形式の特性を学ぶ。
9	制作実習B：実習とWeb化の手引き	静止画像・動画像・音楽を用いた簡単なマルチメディア・コンテンツ制作の手順と基礎知識を学ぶ。Web化のためのHTML関連事項を学習する。
10	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作の基礎を学ぶ。素材画像の取り込みから基本的な編集操作を実習する。
11	制作実習B：映像作品の制作	Premiereなどを用いたムービー制作を実践する。エフェクトを含む映像素材の効果的な編集やテキスト、音声を配置して作品としてまとめる方法を実習する。
12	Webの表現手法	HTML5によるWebページの制作法。スタイルシート利用のメリットと実例。基礎知識と制作手順を学ぶ。
13	制作実習C：スタイルシート	HTMLとスタイルシートを用いたWebコンテンツの構造化、CSSによるWebコンテンツの制作を学び、実習する。
14	まとめ	学習内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各講義の復習。実習課題作品を制作し、提出する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義初回に提示する。

【参考書】
講義において適宜提示する。マルチメディア検定ベーシック対応の参考書として、CG-ARTS協会、「入門マルチメディア[改訂新版]」、ISBN 978-4-903474-60-1を挙げる。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が 3 回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスに基づく共同担当科目として、各教員はそれまでのアンケート内容による気づきを共有し授業改善に役立てる。
2025年度に教室環境が更新したことで、実習の効率が大きく向上した。引き続き実習時の問題解消に努め履修者アンケートに基づきAdobe系アプリの使用感の向上に努めていく。

【学生が準備すべき機器他】
画像処理、映像制作の代表的なソフトでの実習が可能な、情報実習室において授業を行う。課題提出等にはWebClassなど学内Web環境を活用する。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
学生へのメッセージ：　マルチメディアデータを自由に編集できるようになると、コンピュータの多彩な機能の一つひとつが面白くなってくる。コンピュータが本当にパーソナルなツールとして身近に感じられる、そういう段階です。思い切りコンピュータを楽しんで欲しい。
本科目では、マルチメディアの活用実習、ならびに発見型学習を通じて**学生の就業力育成を支援する。**
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターを使用したメディア発信に関する実習を行う。

【前提科目】
「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」

【Outline (in English)】
This course provides students with basic knowledge and techniques in computer multimedia and web design at the entry level. It also deals with the concept of information design. The students will work on projects on Adobe Photoshop and Adobe Premier, AviUtl and on a simple case of HTML authoring. The objective of this course is to enable students to acquire fundamental understanding in digital multimedia and information design with elementary techniques in related authoring tools.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

ネットワーク基礎

大嶋　良明

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：抽選
備考（履修条件等）：

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界中どこでもInternetで安全確実にコミュニケーションできるようになろう
コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端的コミュニケーションツールの基本概念とその実現例を通して学ぶ。世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできる知識とスキルを修得する。

【到達目標】
インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身に着ける。海外でのインターネットの利用とePortfolio活用のスキルを身につけ、学外での学習記録や在外帰国報告のための活用法と有効性を理解する。本科目の履修とリテラシ関連科目での既習知識を総合することで、ITパスポート等にむけての知識習得を目指し、さらに関連の上位科目に結びつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
情報実習室にて講義および実習を行う。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システム(hoppii)を通じて行うが、補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
インターネットをいつでもどこでも（学外やSAなどで）安全確実に使いこなすために、ビデオ会議、動画配信、ソーシャルWebなど最新のサービス、アプリケーションを実習し、同時にセキュリティやネットワークの仕組みを学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	コンピュータ、ネットワーク、コミュニケーション	ネットワークの基礎概念と、相互接続することの利点を学ぶ。
2	インターネットの設計思想	ネットワークの接続形態、サーバ・クライアントモデル、LAN、WAN、伝送制御などを理解する。
3	インターネットの構成要素：名前、アドレス、経路制御とDNS	インターネットの構成要素であるドメイン名、IPアドレス、ルーティングを理解する。通信データのパケット化とアドレスの仕組みと経路制御の概念、ドメインの階層化による名前管理の方法、経路制御、DNSによる名前解決の概念を学ぶ。
4	インターネットの実習：ネットワークコマンド、無線LAN	ネットワークコマンド(ping, ipconfig, traceroute, nslookupなど)を活用する。無線LANでのネットワーク接続を実習する。
5	インターネットの仕組み（1）：通信プロトコル、TCP/IP	通信プロトコルの基礎概念と実装の階層化を理解しTCP/IPおよびUDP/IPの概念と設計思想を学ぶ。
6	インターネットの仕組み（2）：ネットワークの設計原理	プロトコル階層化について、さらに深く学ぶ。OSIの参照モデルとTCP/IPの各層との関係を理解する。パケットの送受信とサービスポートの関係について理解する。
7	電子メール（1）：電子メールの仕組み、メールサーバ、ドメイン、プロトコル	電子メールの概念とサービスの仕組みを学ぶ。メールアカウントとドメインの関係を学ぶ。メールサーバとメール送信、転送、受信の仕組みを理解する。
8	電子メール（2）：メールデータの構造	電子メールについてヘッダとメッセージデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。メッセージの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。添付ファイルの構造とマルチメディアデータのMIME符号化を学ぶ。
9	Webサービス（1）：HTML文書の交換とWebサーバ	HTML文書の設計とその構成法を理解する。Webサーバの基本動作を理解する。HTTPプロトコルの主な特徴を学ぶ。
10	Webサービス（2）：ハイパーテキストデータ	Webコンテンツ(HTTPデータ)についてヘッダとデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。コンテンツの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。MIMEデータとプラグイン、ヘルパーアプリケーションの仕組みを理解する。
11	ファイル転送・共有（FTP、SCP）	ファイルサーバの動作を理解する。サービスとしてのFTPとSCPを理解する。アップロード、ダウンロード、ファイル共有とフォルダの関係を理解する。
12	動画・音声の配信：ビデオ会議とストリーミング	TCPとUDPの違いを理解する。ダウンロード配信とオンデマンド配信の違いを理解する。リアルタイムマルチメディアを実習する。
13	データ保護、認証、暗号化	SSL暗号化の概念を学ぶ。HTTPSやWinSCPなどセキュアなプロトコルを用いたサービス利用を理解する。
14	ネットワーク利用のセキュリティ	ネチケット、パスワード管理、ウィルス対策を理解しセキュリティ意識を身に着ける。ネットワーク犯罪の深刻さを理解する。SPAM、 ボット、フィッシングについて学ぶ。機密保持、プライバシー保護、著作権尊重の重要性を理解する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本科目の学習内容、特にネットワーク接続や各種オンライン情報サービスの実習は現実のオンライン社会での応用力養成が何よりも大事である。学内ネットワークでの実習だけでなく、学外のインターネット環境でも検証を行い、SAなど在外環境でもネットワークが適切に活用できるよう十分に課外実習することにより学習効果が上がる。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　有賀妙子,大谷俊郎,吉田智子(著)『改訂新版 インターネット講座: ネットワークリテラシーを身につける』、北大路書房（2014）、ISBN:978-4-7628-2830-0

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が3回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスによる共同担当科目として、各教員はそれぞれのアンケートよりの気づきをお互いに共有し、よりよい授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室にて授業を行う。特にSAなどキャンパス外でのネットワーク接続とさまざまな活用方法についても実際の利用シナリオを意識した実習をおこなう。実習においては情報実習室に固定設置したPCのみならず、学生個人が利用するノートPCや携帯端末、情報センターの貸出ノートPCなどさまざまなICT機器を活用する。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもMacOSでも構わないが、 CUIコマンドによる基本的なファイル操作ができる環境（コマンドプロンプト、ターミナルなどの各種shellが利用できる環境）を前提としている。
授業の解説や補足にはZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
本科目では、Webを基盤とするICTの実習、ならびに発見型学習を通じて学生の就業力育成を支援する。

【資格を目指す人のために】本科目の学習内容は、職業人に共通に求められる知識を問うITパスポート試験（スキルレベル１）のテクノロジ系に密接に関連する。
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターやネットワークに関する実習を行う。

【前提科目】
前提科目：　「情報リテラシーⅠ」「情報リテラシーⅡ」
関連科目：　基幹科目「システム論」、「ディジタル情報学概論」

【Outline (in English)】
This course deals with the concept of inter-networking, network computing, and fundamentals in hierarchical design and operating principles of the Internet and its TCP/IP protocol. It provides with user level knowledge for well-known information services including email, web, and other services such as streaming, video chat and ePortfolio. It also covers contemporary issues on network security and WiFi. The objective of this course is to enable all students to fully use network computing in a comfortable and safe manner in studying abroad environment.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

ネットワーク基礎

大嶋　良明

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界中どこでもInternetで安全確実にコミュニケーションできるようになろう
コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端的コミュニケーションツールの基本概念とその実現例を通して学ぶ。世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできる知識とスキルを修得する。

【到達目標】
インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身に着ける。海外でのインターネットの利用とePortfolio活用のスキルを身につけ、学外での学習記録や在外帰国報告のための活用法と有効性を理解する。本科目の履修とリテラシ関連科目での既習知識を総合することで、ITパスポート等にむけての知識習得を目指し、さらに関連の上位科目に結びつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
情報実習室にて講義および実習を行う。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システム(hoppii)を通じて行うが、補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
インターネットをいつでもどこでも（学外やSAなどで）安全確実に使いこなすために、ビデオ会議、動画配信、ソーシャルWebなど最新のサービス、アプリケーションを実習し、同時にセキュリティやネットワークの仕組みを学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	コンピュータ、ネットワーク、コミュニケーション	ネットワークの基礎概念と、相互接続することの利点を学ぶ。
2	インターネットの設計思想	ネットワークの接続形態、サーバ・クライアントモデル、LAN、WAN、伝送制御などを理解する。
3	インターネットの構成要素：名前、アドレス、経路制御とDNS	インターネットの構成要素であるドメイン名、IPアドレス、ルーティングを理解する。通信データのパケット化とアドレスの仕組みと経路制御の概念、ドメインの階層化による名前管理の方法、経路制御、DNSによる名前解決の概念を学ぶ。
4	インターネットの実習：ネットワークコマンド、無線LAN	ネットワークコマンド(ping, ipconfig, traceroute, nslookupなど)を活用する。無線LANでのネットワーク接続を実習する。
5	インターネットの仕組み（1）：通信プロトコル、TCP/IP	通信プロトコルの基礎概念と実装の階層化を理解しTCP/IPおよびUDP/IPの概念と設計思想を学ぶ。
6	インターネットの仕組み（2）：ネットワークの設計原理	プロトコル階層化について、さらに深く学ぶ。OSIの参照モデルとTCP/IPの各層との関係を理解する。パケットの送受信とサービスポートの関係について理解する。
7	電子メール（1）：電子メールの仕組み、メールサーバ、ドメイン、プロトコル	電子メールの概念とサービスの仕組みを学ぶ。メールアカウントとドメインの関係を学ぶ。メールサーバとメール送信、転送、受信の仕組みを理解する。
8	電子メール（2）：メールデータの構造	電子メールについてヘッダとメッセージデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。メッセージの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。添付ファイルの構造とマルチメディアデータのMIME符号化を学ぶ。
9	Webサービス（1）：HTML文書の交換とWebサーバ	HTML文書の設計とその構成法を理解する。Webサーバの基本動作を理解する。HTTPプロトコルの主な特徴を学ぶ。
10	Webサービス（2）：ハイパーテキストデータ	Webコンテンツ(HTTPデータ)についてヘッダとデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。コンテンツの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。MIMEデータとプラグイン、ヘルパーアプリケーションの仕組みを理解する。
11	ファイル転送・共有（FTP、SCP）	ファイルサーバの動作を理解する。サービスとしてのFTPとSCPを理解する。アップロード、ダウンロード、ファイル共有とフォルダの関係を理解する。
12	動画・音声の配信：ビデオ会議とストリーミング	TCPとUDPの違いを理解する。ダウンロード配信とオンデマンド配信の違いを理解する。リアルタイムマルチメディアを実習する。
13	データ保護、認証、暗号化	SSL暗号化の概念を学ぶ。HTTPSやWinSCPなどセキュアなプロトコルを用いたサービス利用を理解する。
14	ネットワーク利用のセキュリティ	ネチケット、パスワード管理、ウィルス対策を理解しセキュリティ意識を身に着ける。ネットワーク犯罪の深刻さを理解する。SPAM、 ボット、フィッシングについて学ぶ。機密保持、プライバシー保護、著作権尊重の重要性を理解する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本科目の学習内容、特にネットワーク接続や各種オンライン情報サービスの実習は現実のオンライン社会での応用力養成が何よりも大事である。学内ネットワークでの実習だけでなく、学外のインターネット環境でも検証を行い、SAなど在外環境でもネットワークが適切に活用できるよう十分に課外実習することにより学習効果が上がる。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　有賀妙子,大谷俊郎,吉田智子(著)『改訂新版 インターネット講座: ネットワークリテラシーを身につける』、北大路書房（2014）、ISBN:978-4-7628-2830-0

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が3回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスによる共同担当科目として、各教員はそれぞれのアンケートよりの気づきをお互いに共有し、よりよい授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室にて授業を行う。特にSAなどキャンパス外でのネットワーク接続とさまざまな活用方法についても実際の利用シナリオを意識した実習をおこなう。実習においては情報実習室に固定設置したPCのみならず、学生個人が利用するノートPCや携帯端末、情報センターの貸出ノートPCなどさまざまなICT機器を活用する。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもMacOSでも構わないが、 CUIコマンドによる基本的なファイル操作ができる環境（コマンドプロンプト、ターミナルなどの各種shellが利用できる環境）を前提としている。
授業の解説や補足にはZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
本科目では、Webを基盤とするICTの実習、ならびに発見型学習を通じて学生の就業力育成を支援する。

【資格を目指す人のために】本科目の学習内容は、職業人に共通に求められる知識を問うITパスポート試験（スキルレベル１）のテクノロジ系に密接に関連する。
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターやネットワークに関する実習を行う。

【前提科目】
前提科目：　「情報リテラシーⅠ」「情報リテラシーⅡ」
関連科目：　基幹科目「システム論」、「ディジタル情報学概論」

【Outline (in English)】
This course deals with the concept of inter-networking, network computing, and fundamentals in hierarchical design and operating principles of the Internet and its TCP/IP protocol. It provides with user level knowledge for well-known information services including email, web, and other services such as streaming, video chat and ePortfolio. It also covers contemporary issues on network security and WiFi. The objective of this course is to enable all students to fully use network computing in a comfortable and safe manner in studying abroad environment.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

ネットワーク基礎

和泉　順子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界中どこでもInternetで安全確実にコミュニケーションできるようになろう
コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端的コミュニケーションツールの基本概念とその実現例を通して学ぶ。世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできる知識とスキルを修得する。

【到達目標】
インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身に着ける。海外でのインターネットの利用とePortfolio活用のスキルを身につけ、学外での学習記録や在外帰国報告のための活用法と有効性を理解する。本科目の履修とリテラシ関連科目での既習知識を総合することで、ITパスポート等にむけての知識習得を目指し、さらに関連の上位科目に結びつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
情報実習室にて講義および実習を行う。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システム(hoppii)を通じて行うが、補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
インターネットをいつでもどこでも（学外やSAなどで）安全確実に使いこなすために、ビデオ会議、動画配信、ソーシャルWebなど最新のサービス、アプリケーションを実習し、同時にセキュリティやネットワークの仕組みを学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	コンピュータ、ネットワーク、コミュニケーション	ネットワークの基礎概念と、相互接続することの利点を学ぶ。
2	インターネットの設計思想	ネットワークの接続形態、サーバ・クライアントモデル、LAN、WAN、伝送制御などを理解する。
3	インターネットの構成要素：名前、アドレス、経路制御とDNS	インターネットの構成要素であるドメイン名、IPアドレス、ルーティングを理解する。通信データのパケット化とアドレスの仕組みと経路制御の概念、ドメインの階層化による名前管理の方法、経路制御、DNSによる名前解決の概念を学ぶ。
4	インターネットの実習：ネットワークコマンド、無線LAN	ネットワークコマンド(ping, ipconfig, traceroute, nslookupなど)を活用する。無線LANでのネットワーク接続を実習する。
5	インターネットの仕組み（1）：通信プロトコル、TCP/IP	通信プロトコルの基礎概念と実装の階層化を理解しTCP/IPおよびUDP/IPの概念と設計思想を学ぶ。
6	インターネットの仕組み（2）：ネットワークの設計原理	プロトコル階層化について、さらに深く学ぶ。OSIの参照モデルとTCP/IPの各層との関係を理解する。パケットの送受信とサービスポートの関係について理解する。
7	電子メール（1）：電子メールの仕組み、メールサーバ、ドメイン、プロトコル	電子メールの概念とサービスの仕組みを学ぶ。メールアカウントとドメインの関係を学ぶ。メールサーバとメール送信、転送、受信の仕組みを理解する。
8	電子メール（2）：メールデータの構造	電子メールについてヘッダとメッセージデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。メッセージの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。添付ファイルの構造とマルチメディアデータのMIME符号化を学ぶ。
9	Webサービス（1）：HTML文書の交換とWebサーバ	HTML文書の設計とその構成法を理解する。Webサーバの基本動作を理解する。HTTPプロトコルの主な特徴を学ぶ。
10	Webサービス（2）：ハイパーテキストデータ	Webコンテンツ(HTTPデータ)についてヘッダとデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。コンテンツの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。MIMEデータとプラグイン、ヘルパーアプリケーションの仕組みを理解する。
11	ファイル転送・共有（FTP、SCP）	ファイルサーバの動作を理解する。サービスとしてのFTPとSCPを理解する。アップロード、ダウンロード、ファイル共有とフォルダの関係を理解する。
12	動画・音声の配信：ビデオ会議とストリーミング	TCPとUDPの違いを理解する。ダウンロード配信とオンデマンド配信の違いを理解する。リアルタイムマルチメディアを実習する。
13	データ保護、認証、暗号化	SSL暗号化の概念を学ぶ。HTTPSやWinSCPなどセキュアなプロトコルを用いたサービス利用を理解する。
14	ネットワーク利用のセキュリティ	ネチケット、パスワード管理、ウィルス対策を理解しセキュリティ意識を身に着ける。ネットワーク犯罪の深刻さを理解する。SPAM、 ボット、フィッシングについて学ぶ。機密保持、プライバシー保護、著作権尊重の重要性を理解する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本科目の学習内容、特にネットワーク接続や各種オンライン情報サービスの実習は現実のオンライン社会での応用力養成が何よりも大事である。学内ネットワークでの実習だけでなく、学外のインターネット環境でも検証を行い、SAなど在外環境でもネットワークが適切に活用できるよう十分に課外実習することにより学習効果が上がる。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　有賀妙子,大谷俊郎,吉田智子(著)『改訂新版 インターネット講座: ネットワークリテラシーを身につける』、北大路書房（2014）、ISBN:978-4-7628-2830-0

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が3回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスによる共同担当科目として、各教員はそれぞれのアンケートよりの気づきをお互いに共有し、よりよい授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室にて授業を行う。特にSAなどキャンパス外でのネットワーク接続とさまざまな活用方法についても実際の利用シナリオを意識した実習をおこなう。実習においては情報実習室に固定設置したPCのみならず、学生個人が利用するノートPCや携帯端末、情報センターの貸出ノートPCなどさまざまなICT機器を活用する。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもMacOSでも構わないが、 CUIコマンドによる基本的なファイル操作ができる環境（コマンドプロンプト、ターミナルなどの各種shellが利用できる環境）を前提としている。
授業の解説や補足にはZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
本科目では、Webを基盤とするICTの実習、ならびに発見型学習を通じて学生の就業力育成を支援する。

【資格を目指す人のために】本科目の学習内容は、職業人に共通に求められる知識を問うITパスポート試験（スキルレベル１）のテクノロジ系に密接に関連する。
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターやネットワークに関する実習を行う。

【前提科目】
前提科目：　「情報リテラシーⅠ」「情報リテラシーⅡ」
関連科目：　基幹科目「システム論」、「ディジタル情報学概論」

【Outline (in English)】
This course deals with the concept of inter-networking, network computing, and fundamentals in hierarchical design and operating principles of the Internet and its TCP/IP protocol. It provides with user level knowledge for well-known information services including email, web, and other services such as streaming, video chat and ePortfolio. It also covers contemporary issues on network security and WiFi. The objective of this course is to enable all students to fully use network computing in a comfortable and safe manner in studying abroad environment.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

ネットワーク基礎

金　勇

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界中どこでもInternetで安全確実にコミュニケーションできるようになろう
コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端的コミュニケーションツールの基本概念とその実現例を通して学ぶ。世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできる知識とスキルを修得する。

【到達目標】
インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身に着ける。海外でのインターネットの利用とePortfolio活用のスキルを身につけ、学外での学習記録や在外帰国報告のための活用法と有効性を理解する。本科目の履修とリテラシ関連科目での既習知識を総合することで、ITパスポート等にむけての知識習得を目指し、さらに関連の上位科目に結びつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
情報実習室にて講義および実習を行う。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システム(hoppii)を通じて行うが、補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
インターネットをいつでもどこでも（学外やSAなどで）安全確実に使いこなすために、ビデオ会議、動画配信、ソーシャルWebなど最新のサービス、アプリケーションを実習し、同時にセキュリティやネットワークの仕組みを学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	コンピュータ、ネットワーク、コミュニケーション	ネットワークの基礎概念と、相互接続することの利点を学ぶ。
2	インターネットの設計思想	ネットワークの接続形態、サーバ・クライアントモデル、LAN、WAN、伝送制御などを理解する。
3	インターネットの構成要素：名前、アドレス、経路制御とDNS	インターネットの構成要素であるドメイン名、IPアドレス、ルーティングを理解する。通信データのパケット化とアドレスの仕組みと経路制御の概念、ドメインの階層化による名前管理の方法、経路制御、DNSによる名前解決の概念を学ぶ。
4	インターネットの実習：ネットワークコマンド、無線LAN	ネットワークコマンド(ping, ipconfig, traceroute, nslookupなど)を活用する。無線LANでのネットワーク接続を実習する。
5	インターネットの仕組み（1）：通信プロトコル、TCP/IP	通信プロトコルの基礎概念と実装の階層化を理解しTCP/IPおよびUDP/IPの概念と設計思想を学ぶ。
6	インターネットの仕組み（2）：ネットワークの設計原理	プロトコル階層化について、さらに深く学ぶ。OSIの参照モデルとTCP/IPの各層との関係を理解する。パケットの送受信とサービスポートの関係について理解する。
7	電子メール（1）：電子メールの仕組み、メールサーバ、ドメイン、プロトコル	電子メールの概念とサービスの仕組みを学ぶ。メールアカウントとドメインの関係を学ぶ。メールサーバとメール送信、転送、受信の仕組みを理解する。
8	電子メール（2）：メールデータの構造	電子メールについてヘッダとメッセージデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。メッセージの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。添付ファイルの構造とマルチメディアデータのMIME符号化を学ぶ。
9	Webサービス（1）：HTML文書の交換とWebサーバ	HTML文書の設計とその構成法を理解する。Webサーバの基本動作を理解する。HTTPプロトコルの主な特徴を学ぶ。
10	Webサービス（2）：ハイパーテキストデータ	Webコンテンツ(HTTPデータ)についてヘッダとデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。コンテンツの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。MIMEデータとプラグイン、ヘルパーアプリケーションの仕組みを理解する。
11	ファイル転送・共有（FTP、SCP）	ファイルサーバの動作を理解する。サービスとしてのFTPとSCPを理解する。アップロード、ダウンロード、ファイル共有とフォルダの関係を理解する。
12	動画・音声の配信：ビデオ会議とストリーミング	TCPとUDPの違いを理解する。ダウンロード配信とオンデマンド配信の違いを理解する。リアルタイムマルチメディアを実習する。
13	データ保護、認証、暗号化	SSL暗号化の概念を学ぶ。HTTPSやWinSCPなどセキュアなプロトコルを用いたサービス利用を理解する。
14	ネットワーク利用のセキュリティ	ネチケット、パスワード管理、ウィルス対策を理解しセキュリティ意識を身に着ける。ネットワーク犯罪の深刻さを理解する。SPAM、 ボット、フィッシングについて学ぶ。機密保持、プライバシー保護、著作権尊重の重要性を理解する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本科目の学習内容、特にネットワーク接続や各種オンライン情報サービスの実習は現実のオンライン社会での応用力養成が何よりも大事である。学内ネットワークでの実習だけでなく、学外のインターネット環境でも検証を行い、SAなど在外環境でもネットワークが適切に活用できるよう十分に課外実習することにより学習効果が上がる。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　有賀妙子,大谷俊郎,吉田智子(著)『改訂新版 インターネット講座: ネットワークリテラシーを身につける』、北大路書房（2014）、ISBN:978-4-7628-2830-0

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が3回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスによる共同担当科目として、各教員はそれぞれのアンケートよりの気づきをお互いに共有し、よりよい授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室にて授業を行う。特にSAなどキャンパス外でのネットワーク接続とさまざまな活用方法についても実際の利用シナリオを意識した実習をおこなう。実習においては情報実習室に固定設置したPCのみならず、学生個人が利用するノートPCや携帯端末、情報センターの貸出ノートPCなどさまざまなICT機器を活用する。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもMacOSでも構わないが、 CUIコマンドによる基本的なファイル操作ができる環境（コマンドプロンプト、ターミナルなどの各種shellが利用できる環境）を前提としている。
授業の解説や補足にはZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
本科目では、Webを基盤とするICTの実習、ならびに発見型学習を通じて学生の就業力育成を支援する。

【資格を目指す人のために】本科目の学習内容は、職業人に共通に求められる知識を問うITパスポート試験（スキルレベル１）のテクノロジ系に密接に関連する。
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターやネットワークに関する実習を行う。

【前提科目】
前提科目：　「情報リテラシーⅠ」「情報リテラシーⅡ」
関連科目：　基幹科目「システム論」、「ディジタル情報学概論」

【Outline (in English)】
This course deals with the concept of inter-networking, network computing, and fundamentals in hierarchical design and operating principles of the Internet and its TCP/IP protocol. It provides with user level knowledge for well-known information services including email, web, and other services such as streaming, video chat and ePortfolio. It also covers contemporary issues on network security and WiFi. The objective of this course is to enable all students to fully use network computing in a comfortable and safe manner in studying abroad environment.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

ネットワーク基礎

金　勇

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：抽選

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界中どこでもInternetで安全確実にコミュニケーションできるようになろう
コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端的コミュニケーションツールの基本概念とその実現例を通して学ぶ。世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできる知識とスキルを修得する。

【到達目標】
インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身に着ける。海外でのインターネットの利用とePortfolio活用のスキルを身につけ、学外での学習記録や在外帰国報告のための活用法と有効性を理解する。本科目の履修とリテラシ関連科目での既習知識を総合することで、ITパスポート等にむけての知識習得を目指し、さらに関連の上位科目に結びつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
情報実習室にて講義および実習を行う。
履修予定者は、必ず初回授業日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日確認すること。
課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システム(hoppii)を通じて行うが、補助的にGoogle Classroom等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
インターネットをいつでもどこでも（学外やSAなどで）安全確実に使いこなすために、ビデオ会議、動画配信、ソーシャルWebなど最新のサービス、アプリケーションを実習し、同時にセキュリティやネットワークの仕組みを学ぶ。
●Webによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	コンピュータ、ネットワーク、コミュニケーション	ネットワークの基礎概念と、相互接続することの利点を学ぶ。
2	インターネットの設計思想	ネットワークの接続形態、サーバ・クライアントモデル、LAN、WAN、伝送制御などを理解する。
3	インターネットの構成要素：名前、アドレス、経路制御とDNS	インターネットの構成要素であるドメイン名、IPアドレス、ルーティングを理解する。通信データのパケット化とアドレスの仕組みと経路制御の概念、ドメインの階層化による名前管理の方法、経路制御、DNSによる名前解決の概念を学ぶ。
4	インターネットの実習：ネットワークコマンド、無線LAN	ネットワークコマンド(ping, ipconfig, traceroute, nslookupなど)を活用する。無線LANでのネットワーク接続を実習する。
5	インターネットの仕組み（1）：通信プロトコル、TCP/IP	通信プロトコルの基礎概念と実装の階層化を理解しTCP/IPおよびUDP/IPの概念と設計思想を学ぶ。
6	インターネットの仕組み（2）：ネットワークの設計原理	プロトコル階層化について、さらに深く学ぶ。OSIの参照モデルとTCP/IPの各層との関係を理解する。パケットの送受信とサービスポートの関係について理解する。
7	電子メール（1）：電子メールの仕組み、メールサーバ、ドメイン、プロトコル	電子メールの概念とサービスの仕組みを学ぶ。メールアカウントとドメインの関係を学ぶ。メールサーバとメール送信、転送、受信の仕組みを理解する。
8	電子メール（2）：メールデータの構造	電子メールについてヘッダとメッセージデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。メッセージの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。添付ファイルの構造とマルチメディアデータのMIME符号化を学ぶ。
9	Webサービス（1）：HTML文書の交換とWebサーバ	HTML文書の設計とその構成法を理解する。Webサーバの基本動作を理解する。HTTPプロトコルの主な特徴を学ぶ。
10	Webサービス（2）：ハイパーテキストデータ	Webコンテンツ(HTTPデータ)についてヘッダとデータの構造を理解する。ヘッダの各項目の機能を理解する。コンテンツの文字コードと多言語の扱いを学ぶ。MIMEデータとプラグイン、ヘルパーアプリケーションの仕組みを理解する。
11	ファイル転送・共有（FTP、SCP）	ファイルサーバの動作を理解する。サービスとしてのFTPとSCPを理解する。アップロード、ダウンロード、ファイル共有とフォルダの関係を理解する。
12	動画・音声の配信：ビデオ会議とストリーミング	TCPとUDPの違いを理解する。ダウンロード配信とオンデマンド配信の違いを理解する。リアルタイムマルチメディアを実習する。
13	データ保護、認証、暗号化	SSL暗号化の概念を学ぶ。HTTPSやWinSCPなどセキュアなプロトコルを用いたサービス利用を理解する。
14	ネットワーク利用のセキュリティ	ネチケット、パスワード管理、ウィルス対策を理解しセキュリティ意識を身に着ける。ネットワーク犯罪の深刻さを理解する。SPAM、 ボット、フィッシングについて学ぶ。機密保持、プライバシー保護、著作権尊重の重要性を理解する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本科目の学習内容、特にネットワーク接続や各種オンライン情報サービスの実習は現実のオンライン社会での応用力養成が何よりも大事である。学内ネットワークでの実習だけでなく、学外のインターネット環境でも検証を行い、SAなど在外環境でもネットワークが適切に活用できるよう十分に課外実習することにより学習効果が上がる。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　有賀妙子,大谷俊郎,吉田智子(著)『改訂新版 インターネット講座: ネットワークリテラシーを身につける』、北大路書房（2014）、ISBN:978-4-7628-2830-0

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
期末試験(40%)、平常点(授業の参画度を含む, 30%)、授業内の課題や小テスト（実技を含む, 30%）を総合的に評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
欠席が3回を超えると期末試験を受験できないので注意しよう。期末試験は授業内容理解の確認でもあるので未受験者には単位認定できない。なお、やむを得ない事情で未受験となった場合、代替措置の可否は担当教員ではなく必ず学部窓口にて相談ください。

【学生の意見等からの気づき】
共通シラバスによる共同担当科目として、各教員はそれぞれのアンケートよりの気づきをお互いに共有し、よりよい授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室にて授業を行う。特にSAなどキャンパス外でのネットワーク接続とさまざまな活用方法についても実際の利用シナリオを意識した実習をおこなう。実習においては情報実習室に固定設置したPCのみならず、学生個人が利用するノートPCや携帯端末、情報センターの貸出ノートPCなどさまざまなICT機器を活用する。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもMacOSでも構わないが、 CUIコマンドによる基本的なファイル操作ができる環境（コマンドプロンプト、ターミナルなどの各種shellが利用できる環境）を前提としている。
授業の解説や補足にはZoomあるいはWebexを用いる場合がある。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
本科目は、例年 抽選科目となる。抽選の期間や方法など学部事務からの案内などを確認すること。
本科目では、Webを基盤とするICTの実習、ならびに発見型学習を通じて学生の就業力育成を支援する。

【資格を目指す人のために】本科目の学習内容は、職業人に共通に求められる知識を問うITパスポート試験（スキルレベル１）のテクノロジ系に密接に関連する。
実務経験のある教員による授業：
コンピューター関連企業・研究所の勤務経験のある教員がコンピューターやネットワークに関する実習を行う。

【前提科目】
前提科目：　「情報リテラシーⅠ」「情報リテラシーⅡ」
関連科目：　基幹科目「システム論」、「ディジタル情報学概論」

【Outline (in English)】
This course deals with the concept of inter-networking, network computing, and fundamentals in hierarchical design and operating principles of the Internet and its TCP/IP protocol. It provides with user level knowledge for well-known information services including email, web, and other services such as streaming, video chat and ePortfolio. It also covers contemporary issues on network security and WiFi. The objective of this course is to enable all students to fully use network computing in a comfortable and safe manner in studying abroad environment.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final exam: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

メディア表現法

大嶋　良明

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：特になし、希望者多数の場合のみ選抜にします。初回の授業に出席すること。
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Photoshopの応用テクニックをいろいろ学ぼう
PCを使ってのマルチメディア制作とデザインの基礎を講義と実習を交えて学習する。とくにコンピュータ上でのメディアデータの特性とコンピュータによる画像処理、図形処理について表現・変換などの知識を身につける。Photoshopを基本ツールとして画像レタッチの諸技法を学ぶ。自ら写真を撮影し、いくつもの課題制作に取り組む。見やすい作品つくりを目指して、配置、コントラスト、整列などデザインの基礎知識を習得し、実習作品の表現に応用する。これらを通じて情報メディアの活用とメディアデータの処理技法を学習し、Webやパッケージメディアの視覚面をどのように活かすことができるかも学ぶ。セメスタ中の課題をクラス全体で合評することでお互いの作品の良いところを学び、質の高い制作を目指す。

【到達目標】
Photoshopの応用技法を習得し、デザイン、配色の基礎を修得し、PC上の画像処理とデジカメ、プリンタ等の周辺機器との関係を理解することで、ディジタルマルチメディアの特性を活かした中級以上の作品制作ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
情報実習室において講義と実習を行う。
●作品制作の理論と技法(講義と実習)
・デザインの基礎とPhotoshopの応用技法
- 画像のメリハリ、色のバランス、カラーチャンネル活用
- レイヤー、マスク、フィルタの技法
- コラージュ、モンタージュの技法：遠近感、光の表現、Photo-realisticな作品作りに必要な写真理論
- DTPに向けてのスキャナ、プリンタの利用法
●クリティーク（合評）と制作メモの提出
各自の作品を全員が批評し、作品表現の精神と批評の言語を学ぶ。
●ePortfolioによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。
●課題
・デジタル写真のリタッチ
・ポスター作り（Photoshop＋大判プリンタ・Web）
・写真表現の作品化（アルバム・Web）
・自由なテーマによる最終課題（Photoshop＋大判プリンタ・Web）
●大事にしたいこと
・誰もが自分だけのsomethingを持っている。みんなで学ぼう。
・マルチメディアデータとリアルなモノの関係性を常に考えよう。
・「コンピュータに簡単に取り込めない世界」を大事にしよう。
・感性だけでは作品は作れない。知識、技法、批評精神を持とう。
なお、毎回の授業で小テストを実施し、質問を受け付ける。次回授業の初めに前回の小テストの答え合わせと質問に関する回答の時間を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	メディアデータと情報活用	メディアデータの特性（音声、音響、文書・画像・映像)、コミュニケーションのデザイン、制作環境について学ぶ。
2	デザインの基本原則	CRAPの原理(近接、反復、整列、コントラスト)を学ぶ。
3	デザインの基本原則の応用	前2回の講義内容と既存のPhotoshopの基礎知識を活用して、自由課題で制作したポスター作品を持ち寄り、クリティーク（合評）をおこなう。
4	タイポグラフィの原理	欧文・和文フォントの特性を歴史的変遷を通じて学びレイアウトの基礎を理解する。
5	メディア処理ソフトウェアの実際－画像レタッチソフト（Adobe Photoshop CC）	サービスプリントをスキャンしたイメージデータを素材に基本的なレタッチ技法と必要なツールを復習する。
6	Webのためのディジタルイメージ、写真帳制作の課題と合評	ヒストグラムデータの活用法に慣れる。Webアルバム制作に必要な知識と技法を作品制作に活かす。
7	イメージの取り込みと調整	デジカメ写真、スキャン画像、フレームキャプチャ、PC画面コピーなど元画像の特性の違いに応じたイメージ素材の取り扱いを学ぶ。
8	レイヤーの技法	レイヤーを多用した作品実習を通じて素材どうしのなじませ方、立体感、奥行き感の作り込みを学ぶ。
9	画質の調整、シェーディングとブレンディング（前編）	写真の断片と描画の組み合わせによるコラージュ作品の制作実習を通じて、選択範囲のさまざまな調整、コントラスト、焼き込みとレイヤーの技法を学ぶ。
10	画質の調整、シェーディングとブレンディング（後編）	第9回に引き続き、制作実習の後半。
11	コラージュ、モンタージュのための技法	さまざまな遠近法、解像度と粒状性、輪郭や色味の変化、光の方向性などコラージュ、モンタージュ作品のための技法を学ぶ。
12	色の扱い：カラー、モノクロ、DuoTone	RGB、HSB, CMYKなどカラー表色系の関係、セピア系、シアン系などのモノクローム調色、スポットカラー、DuoToneなどの表現技法を学ぶ。
13	色の扱い：制作編	モノクロ基調のポスターに少ない色数でアクセントをつける制作課題と画面、印刷出力の品質の比較。
14	最終課題とまとめ	自由課題による最終課題を制作しクラス全員による合評。全作品、制作メモ、クラス全員による作品合評をまとめたポートフォリオの作成。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の授業の中で習得した制作知識と実習課題を各自の作品制作に活かすためには十分な練習が必要となる。カフェテリアでのマルチメディアPCを活用してテクニックを「手に覚えさせる」時間外の予習復習を励行します。
自由課題による制作には、オリジナルの写真を含めることを求めるのでディジタルカメラやスマートフォンを携行し、作品作りのアイデアとなる素材さがしを常日頃から心がけましょう。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
制作テキスト（必要部分の和訳プリント配布）：Adobe Photoshop5.5 and Illustrator8.0 Classroom Book, Adobe Press(2000), ISBN 0-201-65900-X
制作テキスト（必要部分のみをプリント配布）：Gregory Haun, "Photoshop Collage Techniques", Hayden(1997), ISBN 978-1568303499
制作テキスト(CMYK変換、色域外警告について参照)：Adobe Photoshop Classroom in a Book (2022 release): ISBN-13: 978-0137621101
デザイン論テキスト（初版を参照するため、必要部分のみをプリント配布）：R・ウィリアムズ「ノンデザイナーズ・デザインブック」、毎日コミュニケーションズ（1998)、
ISBN 4895630072

【参考書】
必要に応じて授業内で紹介する。ほかにマルチメディア検定ベーシック対応の参考書として、CG-ARTS協会、「第三版 入門マルチメディア　IT で変わるライフスタイル」、ISBN 978-4-903474-45-8を挙げておく。撮影技法については、キット　タケナガ（著）東京写真学園（監修)、「デジタル 写真の学校」、雷鳥社(2005)、ISBN 978-4-8441-3434-3 が理解に役立つ。

【成績評価の方法と基準】
平常点(授業参加の積極性,30%)、クリティーク(課題作品の相互批評,15%)、課題ならびにマルチメディア作品制作(35%)、ePortfolio(個人の作品集づくり,20%)を総合的に評価する。平常点の評価ポイントは、積極的な授業参加。すなわち表現意欲をコンピュータ上で形にする「やる気と努力」、作品作りの背後にある仕組みへの技術的関心度、作品に添付する制作メモ、合評に参加しお互いの作品から学び一人ひとりが自らを高めようとする向上心などが、授業参加の平常点として参入される。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
実習課題の内容とバラエティを検討し、中級テクニックの訓練単元を増やした。作品集は個人ポートフォリオだけではなく、クラス全体のギャラリーとしても公開を目指す。作品作りのテクニックだけではなく作品性の追求や作品批評を言語化することの重要性をさらに意識できるような授業運営を心がける。2023年度は印刷出力に関し色域外警告の取り扱いとCMYKへの変換について説明内容を増補充実させた。また2022年度より継続的にPC実習機の問題解消に努めている。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室にて授業を行う。

素材撮影のためにデジタルカメラが必要、光学性能では遜色ないスマートフォンの使用も認めるが、できれば絞り、シャッター速度、露出補正など撮影条件を細かく設定できるディジタルカメラによる撮影を心掛けて欲しい。
制作のためのフォトプリント用紙など課題に応じて若干のメディアが必要。ポスター印刷出力の校正と確認のためにプリンタを使用する。
提出作品はePortfolioにて保存公開する。

【その他の重要事項】
【重要】生成AIの出力をそのまま作品またはその一部に使用することは禁じる。
受講希望者は初回授業に出席すること。受講希望者が教室定員を超える場合には抽選を実施することがある。
情報系教員によるクラス授業とマルチメディア制作実習を通じて本科目では学生の就業力育成を支援する。
【資格を目指す人のために】本講義の参考書はマルチメディア検定ベーシック対応の標準テキストであり、すぐれた独習書である。

【前提科目】
前提科目：「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」、情報系基礎科目（「情報システム概論」、「メディア情報基礎」、「ネットワーク基礎」）。未修者の履修希望については担当教員の判断による。
写真の技法については「マルチメディア表現法」の履修をお薦めする。Photoshopの応用技法については本科目にて扱う。
関連科目：基幹科目「ディジタル情報学概論」など。

【実務経験のある教員による授業】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野の研究とシステム開発の経験がある。

【Outline (in English)】
This is an intermediate level workshop on Adobe Photoshop retouch and creative techniques for any students who has acquired basic knowledge and techniques in Photoshop. The course is organized of class workshops, weekly or biweekly assignments, and mutual critique.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Critique and review: 15%
Homework and in-class assignment: 35%
Individual e-Portfolio: 20%
You must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

メディアアートの世界

大嶋　良明

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
メディアアートの作品世界を知り、自作のプログラムでメディアアートの作品制作を体験しよう
本講義では芸術表現のためのプログラミング言語Processingのプログラム（スケッチ）基礎を学ぶ。またメディアアート作品の芸術論集を手がかりに、様々な作品例とそれらの構成手法を並行して学ぶことにより、メディアアートのためのビジュアルな表現手法を習得する。また現代的な潮流となりつつあるp5.js環境でのProessing流プログラムのWeb環境での実装についても学ぶ。

【到達目標】
メディアアート作品の鑑賞のための技術的な枠組みと批評言語を理解できる。Processingの制作環境での描画や対話機能を身に着け、メディアアートのための表現手法の基礎を習得する。
IoTやMakerムーブメントなどWebと現実世界が交差する今日的な環境、身の回りにある生活の道具がネットにつながるこれからの生活環境について理解し視野を拡げる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
情報実習室において講義と実習を行う。
●講義と実習（マルチメディア対応の情報実習室）
Processingプログラミング環境を活用して、入門書の単元に沿った実習課題に取り組む。習得知識をすぐに応用して理解度確認のための作品作りに取り組む。成果物を自分のスマートフォンなどでも動かしてみる。
●ePortfolioによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。
なお，毎回の授業で小テストを実施し，質問を受け付ける．次回授業の初めに前回の小テストの答え合わせと質問に関する回答の時間を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション：Processing入門	Processingとは何か、その開発の経緯と現在の動向を学ぶ。
2	Processingの基礎（１）：簡単な実例	基本図形の描画など単純な例題からProcessingプログラミングの基礎を習得する。
3	Processingの基礎（２）：基本描画	描画順序を理解する。描画スタイルを学ぶ。
4	Processingの基礎（３）：変数と制御構造	変数の概念を理解し、繰り返し演算などスケッチの制御構造と使用方法を学ぶ。
5	ユーザーインターフェース【制作課題１】	マウス追従、キーボード入力などユーザのGUI操作をスケッチに利用する技法を学ぶ。【課題１】習得した技法を総合して写真コンテンツのWebを制作する。
6	描画の操作：移動、回転、拡大縮小	移動、回転、拡大縮小など描画内容の操作方法、およびそれらの操作を部品化してまとめる技法を習得する。
7	メディアデータの扱い	イメージやムービーなど外部メディアデータの読み込みとスケッチでの利用法を学ぶ。
8	アニメーション：動きの演出【制作課題２：学習成果のまとめとWeb化の検討】	動画のトゥイーン技法、ランダム化、時間構造の処理、周期的運動など動画演出の技法を学ぶ。【課題】学習成果を活用してProcessing作品を制作する。p5.jsによるWeb化を試みる。
9	関数	関数の仕組みを理解し、各種描画処理や再利用される機能の部品化を学ぶ。
10	オブジェクト【学期末課題の構想】	オブジェクトの概念を理解し、スケッチ内容の概念的な構造化の考え方を学ぶ。【課題】学期末の制作物について構想を開始する。
11	配列	配列の概念を理解し、オブジェクトへの適用などスケッチでの使用を学ぶ。
12	外部データ、ビッグデータ	表データ、JSON形式の外部データ、API経由でのインターネットの各種サービスデータの利用技法を学ぶ。【課題】制作物の実装方法の構想発表。
13	リアルタイムデータ、デバイス連携	マイク音声などリアルタイムデータの取り込み、Arduinoマイコンとの連携方法、物理世界との接続を学ぶ。
14	まとめ：最終課題の発表と相互批評	学習内容をまとめ、可能な限り網羅的に盛り込んだ作品を制作し、授業内で発表、相互批評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
メディアアートの制作には多くの技術的なポイントがある。これらの問題を乗り越えて作品の構成技法を習得するには場数を踏むことが重要です。また授業内で単元として学習する各種の技法を実際のコンテンツ制作に応用する場面ではさまざまな可能性があるので、受講生はかならず授業時間外に自らのアイデアをProessing作品に応用する練習を行って欲しい。同時に学習成果の表示環境として各自の端末を積極的に検証に活用すること。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Casey Reas (著)、Ben Fry (著)、船田 巧 (翻訳)、「Processing をはじめよう 第２版 (Make: PROJECTS)」、オライリージャパン (2016)、ISBN-13: 978-4873117737

【参考書】
【Processing】
Daniel Shiffman (著), 尼岡 利崇 (翻訳)、「初めてのProcessing」、オライリージャパン(2018)、ISBN-13 : 978-4873118611
【p5.jsプログラミング】
Benedikt Gross (著)、Hartmut Bohnacker (著)、Julia Laub (著)、深津貴之 (監修)「Generative Design with p5.js―ウェブでのクリエイティブ・コーディング」、ビー・エヌ・エヌ新社(2018)、ISBN-13: 978-4802510974
【メディアアートのためのプログラミング】
Hartmut Bohnacker (著)、Benedikt Gross (著)、Julia Laub (著) 他、「Generative Design ― Processing で切り拓く、デザインの新たな地平」、ビー・エヌ・エヌ新社(2016)、ISBN:978-4802510134
【ジェネラティブ・アート】
マット・ピアソン (著)、Matt Pearson (著)、久保田 晃弘 (監修), 沖 啓介 (翻訳)、「[普及版]ジェネラティブ・アート―Processingによる実践ガイド」、ビー・エヌ・エヌ新社(2014)、ISBN-13: 978-4861009631

【成績評価の方法と基準】
平常点(授業参加の積極性,20%)、中間課題(30%)、最終課題(40%)、相互批評（10%）を目安にすべてを総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
プログラミング初心者にも活用できるよう演習課題を設定しProcessingの可能性を理解してもらえるよう優れた作品の紹介に努める。身近に利用できるPCとWeb環境で、学習成果の理解に役立つような授業を目指したい。メディアアートの動向にも触れる機会としたい。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室において授業を行う。各自のPCや携帯端末を実習の検証に活用する。
ePortfolio(WebClass)に学習成果を蓄積する。

【その他の重要事項】
自分でさまざまな工夫をこらして動きのあるメディア作品を制作するのは楽しいものです。コンピュータとインターネットを自己表現の仕掛けとして使いこなそう。
情報系教員によるクラス授業であり、Web を基盤とするICT の活用実習、ならびに発見型学習を通じて本科目では学生の就業力育成を支援する。

【前提科目】
前提科目：「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」を履修していることを前提とする。
関連科目：「ディジタル情報学概論」、「プログラミング言語基礎」

【実務経験のある教員による授業】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野での研究とシステム開発の経験がある。

【Outline (in English)】
This course deals with introduction to creative coding with Processing programming language. In addition, p5.js is practiced to extend presentation and interaction in
contemporary web-based context. Students will learn media art in contemporary environment and learn art of programming for creativity as well as creativity through programming.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 20%
Homework and in-class assignment: 30%
Final assignment: 40%
Critique: 10%

Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

プログラミング言語基礎

和泉　順子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：人数制限あり
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈優〉〈S〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報システムを構築する上で必要なプログラミングには様々な言語が用いられている。本講義ではオンライン併用環境であることを考慮し、使用言語をJavaScriptとする。ただし、基本的なプログラミング言語とも云えるC言語についても、データ型の概念、配列、関数、ポインタ、ファイル操作などのプログラミングに関する基本事項を学ぶために適宜補足として取り入れる。
JavaScriptやC言語を実際に使いながら基礎的な概念を学び、簡単なプログラムを作成する能力を修得する。

【到達目標】
プログラミングの基本構成として記述/実行方法や基本的な文法を理解し、簡単なプログラムを作成する能力を修得する。
具体的には、プログラミングで用いる用語や概念を理解し、独力でプログラミングに関する本を読んで理解できるようになること、かつ簡単なアルゴリズムを学習することで簡単なプログラムを実装できることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
授業では、(1)プログラミング言語仕様や構造の理解、(2)具体的な文法の学習、(3)プログラムの実装とデバッグ、というプログラミングの段階的な学習を行う。すべて計算機を使用した実習形式で行い、課題作成をとおして学習結果を確認する。
情報実習室での対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更や それにともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システム（Hoppii）でその都度提示する。抽選の可能性があるので、履修予定者は必ず初回授業前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加すること。
課題等の提出・フィードバックは、授業内および学習支援システムを通じて行う。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	授業の説明	授業の進め方、目的などを確認する
2	JavaScript概説	JavaScriptのプログラム（ソースコード）を記述するための環境（実装環境）および実行環境を確認する
3	変数、データ型	使用できる変数の使い方、使用できるデータの型、宣言の仕方について学習する
4	演算子と式	代入式、算術演算子、インクリメント/デクリメント演算子、代入演算子、関係演算子の用法を学ぶ
5	文とブロック	文とブロック、局所変数と大域変数の用法を理解して、使用する
6	条件分岐	if文用法を学習し、具体的問題を作成してみる
7	繰り返し	for文、while文の構造を学習し、問題に適用する
8	基本的なアルゴリズム（1）	並べ替えを例に、同じ問題であっても対応するアルゴリズムが複数あることを学ぶ
9	基本的なアルゴリズム（2）	アルゴリズムを学んだ上で、それをコードとしてどう表現するのかを学習し、試す
10	アルゴリズムの実装	データの並べ替えを行う簡単なプログラムを実装する
11	関数（1）	関数の概念と文法（形式）を学ぶ
12	関数（2）	実際に自分で関数を作ったり、すでに用意されている関数を使ったりして、目的を達成するコード作成を目指す
13	正規表現	正規表現の概念を学習し、パスワード強度チェックなど実際のサンプルコードを使ってを試行する
14	テストと授業のまとめ	授業での学習内容について、理解度を確認するためのテストを行う。また、テストの解説を行うことで授業をまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内容を復習し、課題を提出する。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて講義内で適宜連絡する。

【参考書】
必要に応じて講義内で適宜連絡する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、平常点（授業に対する貢献など）20%、課題 30%、期末テスト 50%、で行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
対面での期末テストの実施が困難であればオンライン試験を代替として行う。この場合は、期末テストの配分を下げ、小テスト・課題・レポート、授業内掲示板のコメントや情報共有を平常点を相対的に上げる予定である。詳細は初回授業時に説明する。

【学生の意見等からの気づき】
理解を深めるため、授業進度を適宜調整する。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、 テキストエディタを用いることを前提としている。
オンライン併用の場合は、実習の質問対応も含めて適宜Zoomを用いる可能性がある。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
初回授業に必ず出席し、資料等を閲覧・確認すること。
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡを前提科目とする。
受講者が多数の場合は、抽選で選抜する。履修予定者は、必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録してから、初回授業に参加すること。

【前提科目】
情報リテラシーⅠ、情報リテラシーⅡを前提科目とする。

【Outline (in English)】
（Course outline）
We will focus on the programming language specification and syntax of JavaScript and C language, which is one of the most famous programming languages, and learn the basics concepts related to programming.
（Learning Objectives）
To understand how to write and execute basic programming constructs and basic grammar, and to acquire the ability to create simple programs.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

HUI200GA（人間情報学 / Human informatics 200）

【2026年度休講】仮想世界研究

甲　洋介

サブタイトル：仮想世界とAIが拓く世界 ― 本当に君はヒトなの？と問う時代
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席すること
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会の重要なテーマとして「仮想世界」を取り上げる。仮想世界が人工知能と融合して新たな世界観が生まれつつある、と感じている人もいるだろう。本講義は「仮想世界」の問題に対して、受講生が具体的、かつ主体的に検討できるよう工夫されている。
●　手ごたえのない「現実」 vs. リアルな「仮想世界」
ヒトは仮想世界を作り出した。気がつくと、現実と仮想の境界はますます曖昧になってきたと感じる。しかし、この２つの世界がスムーズに接続された理想的な状態にはない。AR/XRやメタバースなど、これらを繋ぐさまざまな接合法が生み出されているが、試行段階とみるのが適切であろう。
　一方で、私たちの生活のさまざまな場面で、”手ごたえ”＝リアリティ（現実感）が薄れつつある、とも指摘される。私たちの日常生活は、仮想世界が浸透することによって何が『変化』し、どのように『拡張』されたのか。そして、それは問題なのか。
●　つながっているフリは寂しい？　　でも親密なのはもっと怖い
「情報」を軸とする変革の波は、社会だけでなく私たちの考え方に対して、深く影響を与え続けている。しかし、私たちはこの変化の意味を十分に把握しているとは言えない。仮想世界がもたらす意味を問い直す。
仮想世界の問題は、物語ではない。私たちの生活に現実に起きている現象である。本講義を通じて受講生は、『ヒトは原初から巧みに仮想（バーチャル）な世界を作り出し、つぎつぎに自分の限界を超えてきた動物である』ことに気づく。この現象の論点を見究め、洞察することを目指している。

【到達目標】
本科目の履修を終えると、次の基本主題とそれに対する考えを具体的な視点を駆使して説明できるようになる
a. 人間は仮想（バーチャル）な世界を早くから作り出し、自らを巧みに拡張させてきた動物であること
b. 仮想世界における「私」、それは「私」なのか、それともも う一つの「私」なのか
c. 「仮想現実感」(VR)の基本要素とその根底をなす考え方
d. 仮想世界の社会のさまざまな側面への浸透と影響

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の各回では、具体的なトピックが取り上げられ、自分たちの身の回りに起きている現象を例に取りながら、仮想世界の問題を捉える具体的な視点が提示される。
●　現実世界のリアリティが薄れたと指摘される一方で、仮想世界のリアリティは増しているように思われる。現実世界の生きにくさが実感される中、なぜか仮想世界は”生きやすい”。
仮想世界の構築はあなた自身の欲望が関与する、とされる。私たちは仮想世界に何を求め、私たちの何を変化させ、仮想世界と共にこれからをどう生きようとしているのか。いま問い直す必要があろう。
●　各回の冒頭で前回のおさらいと受講生のコメントを踏まえた解説を加え、その日のトピックにつなぐ。後半は、受講生の討議を促しながら、問題に切り込む論点を提示し、受講生が問題意識を育てる工夫をする。その成果をまとめ、最終レポートまたは期末試験において、総合的に仕上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	仮想世界は、不思議と生きやすい － それはなぜだろう
2	仮想世界への誘い	ネットでつながり、戸惑う － なぜか寂しい
3	仮想世界における「私」	仮想世界の私、それは仮面の私。それともホントの私？
4	仮想世界における「こころ」	現実より、仮想世界のほうに手ごたえを感じるパラドックス
5	仮想世界における「こころ」 － ところで、君は本当にヒトなの？ と問う時代	戸惑いから受容へ　－ヴァーチャルで恋した相手、それは○○だった
6	【グループ討議】仮想世界と付き合う	『没入』と、仮想世界とのアイロニカルな距離感について
7	仮想空間とAIが拓く世界	仮想世界にAIが入り込むと何が起こるだろうか
8	仮想現実とは何か	バーチャルリアリティ（VR）の基本概念
9	仮想現実とは何か：その根底をなす理論	仮想現実（VR）の構成要素、その根底をなす基本理論
10	仮想現実とは何か	仮想現実（VR/XR）技術の様々な分野への応用
11	仮想現実の応用：方向性	仮想現実（VR/XR）の様々な分野への応用
12	仮想現実の応用：社会が変わる	手ごたえのない経済、手ごたえのない戦争
13	【グループ討議】ヒトの欲望と仮想世界	ヒトの欲望を吸収し、膨張しつづける仮想世界
14	まとめ、総括討議、多層化する世界	リアルへの回帰か、それとも世界は『多層化』に向かうのか

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
コメントシートも含め、本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・Kinoe, Y.: "Mutual Harmony and Temporal Continuity: *Perspective from Japanese Garden.*" ACM SIGCHI Bulletin."https://dl.acm.org/doi/pdf/10.1145/157203.157204"
・「接続された心」"Life on the Screen"（S. タークル、早川書房）
・国際会議ACM SIGGRAPH DVD（Association for Computing Machinery）
・「2001年宇宙の旅」(A.C. クラーク, S. キューブリック脚本, ワーナー社配給)
他、M・ミンスキーのインタビュー記録など、講義で適宜指示をする。

【参考書】
・アニメ：「攻殻機動隊〜GHOST IN THE SHELL」
・映画：「惑星ソラリス」（アンドレイ・タルコフスキー）
・"Alone Together" (S.Turkle、Basic Books出版)
担当教員の研究プロジェクトや国際学会の資料など、タイムリーなトピックを紹介することがある。　他は、開講時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
・期末レポートまたは試験 (50％)
・授業・討議における積極性な貢献度合い（発表、コメントシートを含む）(50%)を総合して評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
『仮想世界におけるこころ』の問題に、受講生の関心が高いことが分かった。その主題を始め、受講生どうしの討議の時間を十分に取れるように図りたい。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布、リアクションペーパー・課題提出等に学習支援システムを利用するので授業前後にアクセスし確認すること。

【その他の重要事項】
いわゆるコンピュータの授業ではないので、注意のこと。
本講義では、討議に積極的に参画し、参加者の協同作業を通じて自らの問題意識を育てる姿勢が重要になる。

【履修条件】
「情報リテラシーⅠ・Ⅱ」を単位取得済みであること。

【関連科目】
・「道具のデザイン学」「道具による感覚・体験のデザイン」「文化情報空間論」と組み合わせて受講すると、理解が深まり面白くなる仕組みになっている。
・「メディア情報基礎」を履修済みであることが望ましいが必須ではない。

【Outline (in English)】
This class addresses the enlargement of "Virtual World," as one of the essential issues of our modern society. By the end of the course, students understand and should be able to explain a set of its key concepts: (1) the virtuality vs. the reality," (2) the issue of "self and identity" within cyber spaces, and (3) how to cultivate this society which integrates real world and virtual worlds.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on (1) final report/exam (50%) and (2) short reports and the quality of the student's in-class contribution (50%).

FRI200GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 200）

社会とデータサイエンス

和泉　順子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈優〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報化社会が発展・普及していく中で、様々なものがデジタル化されインターネットに接続されつつある。この授業ではIoT（Internet of Things）やビッグデータ等に関連するデータサイエンスというキーワードから、パソコンで作成するデータだけでなくセンサや人の行動、公的機関からの公開情報等から得られるデータがどこでどのように利活用されているのかを学ぶ。また、データサイエンティストとはどんな人材なのかを議論しながら、様々なデータの性質や扱い方、可視化等を統計学等の観点から学び、実践する。

【到達目標】
ビッグデータ、IoT、オープンデータ、といった言葉で表現される膨大なデータの利活用としてデータサイエンスのいくつかの事例と、そこから作られる情報や価値について学ぶ。個々のデータの具体的な内容ではなく、異なる内容や形式を持ったデータに共通する性質や、データを正しく扱うために情報科学だけでなく社会科学分野にも重要な統計学などを学ぶ。また、同じデータでも可視化の方法によって伝わり方が違う事を学び、実践する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
講義はPCを使用した実習形式で行い、授業内のプレゼンテーション、課題・小テストおよびレポートにより学習結果を確認する。
情報実習室での対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更や それにともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システム（Hoppii）でその都度提示する。抽選の可能性があるので、履修予定者は必ず初回授業前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加すること。
課題等の提出・フィードバックは、授業内および学習支援システムを通じて行う。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の説明、社会におけるデータサイエンスの重要性について
2	IoTとビッグデータ	IoT（Internet of Things）とは何か、ビッグデータの利活用事例を学ぶ
3	オープンデータの活用	公開されているオープンデータがどのように活用されているかを学び、自ら調べる
4	仮想空間のプライバシー	デジタルな空間、あるいはインターネット上におけるプライバシー確保に必要な技法の一部を学ぶ
5	統計処理の意味	データを抽出して価値を創出するために、どのような統計手法があるのかを学ぶ
6	統計分析の意味	統計処理したデータの分析から何が分かるのか、それが何に役立つのかを学ぶ
7	データの種類と尺度	４つの尺度と利用可能な測定値、および相関について学ぶ
8	統計の基本と実践（１）	平均値と中央値、正規分布、分散、標準偏差の意味について学ぶ
9	統計の基本と実践（２）	正規分布と確率について学ぶ
10	統計の基本と実践（３）	標本調査における無作為抽出と標本誤差について学ぶ
11	データの可視化	同じデータでも可視化の違いによって印象や伝わり方が異なることを学ぶ。また、データを説明するために適切なグラフは何かを学ぶ
12	データサイエンスの実践	自分の興味のあるオープンデータから適切な統計手法を用いてデータを読み取り表現する
13	プレゼンテーション	自分が調べ、読み取り、表現したことを授業内で発表する
14	議論と考察、授業のまとめ	授業内で扱ったデータについて質問を通して改善の余地を議論・考察する。 また授業のまとめを行い、授業内に簡単なレポートを作成、提出する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
統計学をはじめ数学の知識を多少使うため、各自の理解度に応じて適宜予習復習をすること。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業内で適宜指定する。

【参考書】
授業内で適宜指定する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、平常点20%、小テスト20%、プレゼンテーション30%、レポート30%で総合的に行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、 Excelでデータ分析ができる環境を前提としている。
最終課題となるプレゼンテーションは対面授業であってもZoomを用いることを想定している。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
受講者数が定員を超過する場合は抽選を行う。
初回授業はZoomを用いたオンライン授業となるが、受講者数把握のため、受講希望者は初回授業日の前日までに学習支援システムに仮登録した上で初回授業に出席すること。
詳細は学習支援システムを参照し、授業資料や「お知らせ」を必ず確認すること。
授業内容は、「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」の内容を概ね理解していることを前提に進みます。

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this class, you will learn how data, which may be obtained not only from data created by computers, but also from various sensors, human behavior, and information released by public institutions as "open data", is used in social activities. The keywords are "data science", "Internet of Things (IoT)", "open data" and "big data". Students will learn and practice the handling and visualisation of various types of data.
（Learning Objectives）
- Learn about some examples of data science as a way to make use of the vast amounts of data described by terms such as Big Data, IoT and Open Data.
- We will learn about the common properties of data with different contents and formats, and statistics.
- Learn and practice how the same data can be communicated in different ways depending on how it is visualised.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on the mid-term exam (20%), in-class contribution(20%), and the term-end preseentaion (30%) and report (30%).

LIN300GA（言語学 / Linguistics 300）

【2026年度休講】世界の言語 I

奥石　哲哉

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界の数多くの言語のうち，この授業では，インド・ヨーロッパ語族（印欧語族）の言語について考察していきます．この語族の言語は世界中に広がっていて，今では全ての大陸で話されています．この語族がどのようにしてできたのか，どのようにこの語族の言語が変化してきたのか，特徴はどのようなものか，世界の言語の中でどのような位置にあるのかについて知ることが，本科目のテーマです．

【到達目標】
具体的には，以下の５つです．
1）インド・ヨーロッパ語族の言語について，その全体像を把握すること．
2）インド・ヨーロッパ語族について，その歴史を知ること．
3）インド・ヨーロッパ語族の言語の研究の方法や背景について知ること．
4）他の語族とインド・ヨーロッパ語族の関係について知ること．
5）一般的に，言語の歴史・構造について，知識を得ること．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち，「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業は，基本的にシラバスに基づき，対面の講義形式で進めていきます．履修者数，履修者の知識等により，内容には修正を加えることがあることを予めご了解ください．
・授業は全て事前に用意したスライドを用いたプレゼン形式で行います．同スライドは予めダウンロード可能です．さらに，背景が白いものを事前に用意しそれを事前にプリントアウトした上で授業に持参して書き込みを作れば，自分だけのノートとしての機能をもたせることも可能です．
・「学習支援システム」を多用し，事前，事後の学習も可能な限り支援していきます．
・課題等に対するフィードバックは，基本的に「学習支援システム」を用いますが，状況に応じて，個人メール等で行うこともあります．
・各回に可能な限り前回のフィードバックを行い，さらに最終回では，それまでの授業のまとめ，復習を行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	・はじめに ・ヨーロッパとは？ ・最近のヨーロッパの傾向 ・比較の視点	授業のやり方について，概略を説明し，ヨーロッパについて学び，比較することの意味について学びます．
2	・地球単位で言語を考える ・英語で-aで終わる語 ・ある童話から ・欧米と日本	地球単位で言語を考えることを実際の例をいくつか見ながら考えます．
3	・Parallel textの意味	言語を比較する際の材料として，parallel textと呼ばれるものを使用することがあります．様々な例を使い，実際に言語の比較を行っていきます．
4	・印欧学の発達 ・印欧祖語 ・歴史的な背景	印欧学という学問がどのように発達してきたか，歴史的な背景を見ながら考えていきます．
5	・言語間の類似 ・音対応 ・貨幣と切手 ・個々の語派	言語観の類似をどのように説明するか考えていきます．印欧語族の語派について見ていきます．初回は，Indo-Iranian, Armenian, Albanianについてお話します．
6	・個々の語派（続き）	印欧語族の個々の語派について，引き続き見ていきます．今回は，Baltic, Slavic, Hittite, Tocharian, Hellenic, Italicの各語派についてお話します．
7	・英語へのラテン語の影響 ・個々の語派（続き） ・非印欧諸語 ・Grimm's Law	最初，英語へのラテン語の影響を見た後，語派の話を続けます．今回はCeltic, Germanicについて見ます．さらに，印欧語族でない言語についても学びます．その後，Grimm's Lawについて話し始めます．
8	・Grimm's Law（続き） ・Verner's Law ・Centum vs. Satem ・音対応と言語再建	Grimm's LawとVerner's Lawについて学び，さらに印欧語族を2分すると言われるCentum-Satem Splitについてお話します．それから音対応と言語再建について学びます．
9	・言語の語彙 ・歯擦音化 ・The letter C in English	言語の語彙の成り立ちについて見た後，自然な音変化の例として歯擦音化について考察します．英語のCという文字の歴史を例に取り，歯擦音化を例証します．
10	・ヨーロッパの地勢 ・印欧祖語はいつ話されていたか？	印欧語族の発達に，ヨーロッパの地勢が及ぼした影響について考察し，その後，印欧祖語の「いつ」問題について考察します．
11	・印欧祖語はどこで話されていたか？	印欧祖語の「どこ」問題について，最近の印欧学の成果を解説しながら考察します．
12	・印欧祖語はどこで話されていたか？（続き） ・印欧祖語の史的発達	前回に引き続き，印欧祖語の「どこ」問題について，最近の印欧学の成果を解説しながら考察しますその後，印欧祖語の発達の経緯を見ていきます．
13	・印欧祖語の史的発達（続き） ヨーロッパ早わかり 現在の欧州言語事情	印欧祖語がどのように発達を遂げたか，引き続きお話します．ヨーロッパの言語文化事情をまとめ，最後に現在の欧州言語事情に触れます．
14	・まとめ	最新の業績について少しだけ触れ，これまでの授業を総括します．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回，前回の内容を復習しながら，新しい内容に進みます．基本的な用語を習得し，方法論を理解しながら，参考文献等を読んで授業に臨んでください．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特定のものを考えてはいません．適宜，プリントなどを配布，提供いたします．

【参考書】
授業中，随時指定いたしますが，とりあえず以下のものを挙げておきます．
泉井久之助 (1968).『ヨーロッパの言語』. 東京：岩波書店.［古いですがよい本です．基本的にこの本の内容は，かなり本科目の内容と重なります．］
風間喜代三 (1978).『言語学の誕生』. 東京：岩波書店.
マルティネ，アンドレ，神山孝夫訳 (2003).『「印欧人」のことば誌―比較言語学概説―』. 東京：ひつじ書房.
Chapters 1 &2 from Denning, K, B. Kessler, and William R. Leben (2007). *English Vocabulary Elements*. Oxford: Oxford University Press.
Chapters 2 &3 from Stockwell, Robert &Donka Minkova (2001). *English Words: History and Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
Diamond, Jared (1997). *Guns, Germs and Steel*. London: Caggo & Windus.

【成績評価の方法と基準】
試験の結果(100%)に基づき成績を出します．人数が多すぎる場合，授業への参加度をみることは現実的ではないため，現段階では平常点は設定していませんが，人数を見て場合によっては平常点を加味します．この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
隔年開講のため，特にありません．

【学生が準備すべき機器他】
パソコン，スクリーン等を用います．

【その他の重要事項】
高校の時に用いた，いわゆる学習者用英和辞書ではなく，語源欄が充実している英語の辞書を用意して，関連の語などについて調べるようにしてください．授業でもお話ししますが，英語は西欧の諸言語を知る上で，非常に重要な言語ですので，何かと授業でも話す機会が多くなります．

【カリキュラム上の位置づけ】
本科目は，学部専門教育科目の（4）言語科目に属し，ことばを成り立たせているさまざまな要素について学ぶものです．「世界の言語II」と交替で隔年開講され，2年生以上が履修できます．

【Outline (in English)】
【Course Outline)】【Learning Objectives】
The objective of this course is to get a general idea of Indo-European languages.Specifically, by the end of the course, you should:
- become acquainted with the European languages in general,
- have enough knowledge about the their historical background,
- become acquainted with the basic knowledge about Indo-European studies and the backdrops of its development.
- have general knowledge about the relationship between Indo-European languages and other language families.
- begin to develop a general knowledge of linguistic history and structure.
【Learning Activities Outside of Classroom】

Each class session starts by reviewing the previous class session before new contents are introduced. Try to understand the basic facts and concepts before coming Tao the the class session.
【Grading Criteria /Policy】
Grades are given according to the result of the one big final exam.

LIN300GA（言語学 / Linguistics 300）

世界の言語II

内山　政春

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・この授業は「世界の言語Ⅰ」と交替で隔年開講されています．「世界の言語Ⅰ」がヨーロッパ諸言語に関する内容であるのに対して，この授業ではアジアの言語，特に東アジア漢字文化圏各国（日本，南北朝鮮，中国，台湾，ベトナム）の言語を中心に取り上げたいと思います．しかしそれに限らず，言語をとりまくさまざまな現象に関して言及しながら，みなさんの学習言語が何語であれ，その学習に少しでも役立つような話をしたいと思っています．人工言語として知られるエスペラントについても取り上げる予定です．

【到達目標】
・言語について公平な視点をもてるようになること（一例をあげれば「日本語は非論理的，英語は論理的」のような俗説に惑わされないようになること）．そして学習言語と日本語をさまざまな側面から対照できる力をつけること．以上のことを目標にして履修してください．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・基本的には講義形式で行ないますが，ＳＡ先の言語に関して言及するときは，該当する学生に質問することもあるでしょう．毎回のみなさんの感想や質問は，次回の授業で言及する予定です．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	言語と方言―ひとつの「ことば」とは―	・世界の国家数と言語数 ・言語と方言 ・日本の言語
2	言語の分類―やさしい言語と難しい言語―	・やさしい言語と難しい言語 ・系統論による分類 ・類型論による分類 ・外国語の難しさと文法
3	音声と音素―同じ「音」と異なる「音」―	・日本語のローマ字表記 ・音声と音素 ・ローマ字表記と音素 ・外国語学習と音
4	言語と文字―文字は「音」をあらわすものか―	・言語数と文字数 ・文字の系統と分類 ・ローマ字の広がり ・文字の目的
5	漢字と漢字文化圏	・言語としての漢字文化圏 ・中国語と漢字 ・漢字の伝播 ・表音文字の発達 ・漢字のしくみ ・形を失った漢字 ・漢字圏での固有名詞の読み方
6	中国語とその周辺１	・「中国語」とは？ ・「中国語」の表記
7	中国語とその周辺２	・「中国語」の用いられる地域 ・「中国語」は存在するか？
8	中国語とその周辺３	・中国語を用いる２つの国家
9	台湾の言語１	・台湾の中国語
10	台湾の言語２	・「多言語国家」としての台湾
11	朝鮮語とその周辺１	・朝鮮語の使用領域 ・言語と文字の名称 ・歴史と系統 ・朝鮮語の表記
12	朝鮮語とその周辺２	・ハングルの出現 ・近代の朝鮮語 ・戦後の朝鮮語 ・ハングルの海外「進出」 ・南北の朝鮮語のちがい ・語彙と文法
13	ヨーロッパの諸言語と文法カテゴリー	・ヨーロッパ諸言語の系統 ・ヨーロッパ諸言語の話者数 ・ヨーロッパ主要言語の語彙 ・語彙の借用 ・文法カテゴリー
14	エスペラント	・人工言語の試みとエスペラント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ＳＡ先の言語はもちろん，その他の外国語にも，そして日本語にも，ことばと名のつくものに広く関心を持ってください．関連する本を積極的に読んでください．
・本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・特にありません．

【参考書】
・特に指定はしませんが，各項目に関して興味のある人は『言語学大辞典』（三省堂）を参照してください．

【成績評価の方法と基準】
・従来の対面授業では，毎回の授業の終わりに講義に関する感想や質問を書いてもらっていましたが，今回は授業では出席確認のみにし，感想や質問はHoppiiで提出してもらうことにしようと思います．その方が時間の余裕をもってまとまったことを書けると思うからです．リアクションペーパーの内容は最低字数を定め（200字），毎回の内容を総合して評価します（100%）．100点満点で60点以上を合格とします．
・あまりにも出席が少ない場合，リアクションペーパーの内容があまりにもいいかげんな場合には，毎回の提出評価の対象から外すこともあります．

【学生の意見等からの気づき】
・授業が始まっているのに遅刻者が教室にゾロゾロ入ってくると，他の学生の迷惑にもなり，授業の進行も遅れがちになります．授業開始の時点で学生が着席しているのは「あたりまえ」のことです．それが守れない人，また私語をする人は，他の学生に迷惑となりますので，受講しないでください．

【学生が準備すべき機器他】
・教員が準備した映像資料を見てもらいながら話を進めます．

【その他の重要事項】
・順序と内容に若干の変更がある可能性があります．

【Outline (in English)】
< Course outline >
The aim of this course is to help students acquire general knowledge about languages in Asia, especially East Asia, including Japan, Korea, China, Taiwan and Vietnam.
This course will also deals with so-called constructed language "Esperanto".
< Learning Objectives >
The goal of this course is to acquire a fair perspective on language.
< Learning activities outside of classroom >
Students will be expected to submit a reaction paper after class.
< Grading Criteria/Policy >
Your overall grade in the class will be desided based on your reaction papers.

LIN300GA（言語学 / Linguistics 300）

世界の英語

小中原　麻友

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：選抜

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
グローバル化社会の現在、「英語」ほど広範に使用されている言語はありません。しかし、その「英語」とは一体どのようなものなのでしょうか。World EnglishesやEnglish as a lingua francaという言葉を聞いたことがありますか。
英語の国際的普及は、地域の社会的要因に関連して多様化した様々な英語変種を生み出しました。英・米・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドの各英語だけでなく、インド、シンガポール、フィリピン、マレーシア等のアジア諸国でも多様な「英語変種」が存在し、これらはWorld Englishes（世界の諸英語）と複数形で呼ばれています。また、グローバル化の進展は、ビジネスや教育上の国際交流・協力の急速な拡大をもたらし、そのような国際的な場において英語は、言語・文化の異なる者同士のコミュニケーションにおいて「共通語（a lingua franca）」として幅広く使用されています。本講義では、World EnglishesとEnglish as a lingua francaという２つの視点から、一見自明とも思われる「世界の英語」の実態について迫っていきます。
【学期前半】社会・人・言語へのグローバル化の影響や英語の国際的普及の過程を概観した後、特に、英米などの英語を母語とする国々やアジア諸国の多様化した英語変種の言語的特徴について、その歴史・社会・文化的背景にも触れながら学んで行きます。
【学期中盤】標準英語イデオロギーやネイティブスピーカー主義、英語帝国主義論、言語差別などの概念や現象について学習し、「英語」を取り巻く問題について理解を深めます。
【学期後半】ヨーロッパやアジア諸国での実際のコミュニケーションの事例を紹介しながら、ビジネスや高等教育等の国際的な場において言語文化を異にする者同士が、英語を共通語として使用してどのようにコミュニケーションを図っているのかについて、特にコミュニケーション・ストラテジーの使用を中心にその特徴を学んで行きます。
最終的には、学習内容に基づき、グローバル化社会における英語の役割と求められる英語コミュニケーション能力について批判的に考察できるようになることを目指します。

【到達目標】
1. 国際的普及によって多様化した英語変種の地域的特徴（音声の仕組み、および文法等）とその歴史・社会文化的背景について、具体的に説明することができる。
2. 国際共通語としての英語でのコミュニケーションの実態や特徴について、具体的に説明することができる。
3. 標準語イデオロギーやネイティブスピーカー主義などの「英語」を取り巻く問題や重要性を批判的に考察し、説明することができる。
4. 上記1-3を踏まえた上で、グローバル化社会における英語の役割と求められる英語コミュニケーション能力・異文化理解力について批判的に考察し、自分の意見を具体的かつ論理的に述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業は、PPT とオンライン上で配布するワークシートを使用した講義の他、グループ・ディスカッション、フィールドワーク、プレゼンテーション、リーディング、リスニング等の活動も取り入れて進めます。
・授業毎に提出するリアクションペーパーに、個別にフィードバックを行います。また良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。
・本講義では、課題の提示や提出、フィードバックなどに、Google Classroomを使用します。法政大学のGmailアカウントで使用が可能です。アクセスコードは、初回授業までに学習支援システムよりお知らせしますので、事前に登録をしておいてください（一度登録しても、後から登録を取り消すことが可能です）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の紹介・履修条件、導入（選抜）アンケート
第2回	講義・ディスカッション（1）	The influence of globalization: Linguistic diversity and English users（グローバル化の影響：言語的多様性と英語使用者）
第3回	講義・ディスカッション（2）	The global spread of English（英語の地球規模の普及）
第4回	講義・ディスカッション（3）	Diversification of English and preparation for group presentations（英語の多様化、グループプレゼン準備）
第5回	グループ・プレゼンテーション（1）	Varieties of English (1): Englishes in the UK, the US, and Canada（英語変種（1）：イギリス、アメリカ、カナダの英語）
第6回	グループ・プレゼンテーション（2）	Varieties of English (2): Englishes in Australia, New Zealand, India, and Thailand（英語変種（2）：オーストラリア、ニュージーランド、インド、タイの英語）
第7回	グループ・プレゼンテーション（3）	Varieties of English (3): Englishses in Vietnam, Malaysia, Singapore, and Indonesia（英語変種（3）：ベトナム、マレーシア、シンガポール、インドネシアの英語）
第8回	講義・ディスカッション（4）	The legacy of colonialism, native speakerism and standard language ideology（植民地化の遺産、ネイティブスピーカー主義、標準語イデオロギー）
第9回	講義・ディスカッション（5）	Native-speakerism and language attitudes（ネイティブスピーカー主義と言語態度）
第10回	講義・ディスカッション（6）	English as a lingua franca (ELF) communication (1): Introduction（共通語としての英語（ELF)でのコミュニケーション（1）：導入）
第11回	講義・ディスカッション（7）	ELF communication (2): Communication strategies (CS) for supporting meaning-making（ELFでのコミュニケーション（2）：話し手の発話を支援するコミュニケーション方略）
第12回	講義・ディスカッション（8）	ELF communication (3): CS for coping with communication problems（ELFでのコミュニケーション（3）：コミュニケーション上の問題に対処する方略）

第13回	講義・ディスカッション（9）	ELF communication (4): CS for facilitating communication（ELFでのコミュニケーション（4）：コミュニケーション上を促進する方略）
第14回	期末試験（あるいは期末レポート）、および総括	期末試験の実施（あるいは期末レポートの提出）とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間（計4時間/1回）を標準とします。
＜準備学習＞
1. リーディング課題（第3回、9回授業開始時まで；全2回予定）：指定の資料を読み内容を把握し、まとめる。
2. フィールドワーク（第2回、9回、12回授業開始時まで；全3回予定）：授業前までにインストラクションに沿って簡単なデータ収集・分析を行い、それに基づき考察を書く。
3. グループ・プレゼンテーション準備（第5～7回授業開始時まで）：グループごとのプレゼンテーションの準備を行う。プレゼンの準備には、原則、学術的な図書や論文、あるいはウェブサイトを使用し、学術的根拠に基づいていない個人の作成したウェブサイトやブログ等は使用しないこと。
＜復習＞
1. 授業毎のリアクションペーパー（第2～14回；全13回予定）：第2回以降、授業毎に学習内容を振り返るコメントを書き、次回授業開始前日までにGoogle Classroomの指定のフォームから提出する。
2. その他、期末試験、あるいは期末レポートに向け、適宜、復習する。

【テキスト（教科書）】
・教科書指定なし。ただし、以下の新書の一部を第2回のリーディング課題として使用予定。図書館にも所蔵はありますが、図書館へのアクセスが難しい学生については購入することを推奨します。
→ 久保田竜子, 2018.『英語教育幻想』. 筑摩書房, 東京.（参考：アマゾンにて新書902円、Kindle 770円）
・その他、テーマごとに参考文献を紹介します。配布資料やスライドは、原則英語です。
・授業のPPTは、授業終了後に、オンライン上で公開します。

【参考書】
＜World EnglishesとEnglish as a lingua francaについての背景知識＞
1. Crystal, D. (2003). English as a global language (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
2. Galloway, N., &Rose, H. (2015). Introducing global Englishes. London; New York, NY: Routledge.
3. Jenkins, J. (2015). Global Englishes: A resource book for students (3rd ed.). London; Yew York: Routledge. (Companion website: http://www.routledgetextbooks.com/textbooks/9780415638449/default.php)
4. Jenkins, J., Cogo, A., &Dewey, M. (2011). Review of developments in research into English as a lingua franca. Language Teaching, 44(03), 281-315.
5. Kirkpatrick, A. (2007). World Englishes paperback with audio CD: Implications for international communication and English language teaching. Cambridge, UK; New York: Cambridge University Press.
6. Murata, K. (2015). Exploring ELF in Japanese academic and business contexts: Conceptualisation, research and pedagogic implications: Routledge.
7. Murata, K., &Jenkins, J. (2009). Global Englishes in Asian contexts: Current and future debates. Houndmills ; New York: Palgrave Macmillan.
8. Seidlhofer, B. (2011). Understanding English as a lingua franca. Oxford: Oxford University Press.
9. Trudgill, P. &Hannah, J. (2002). International English: A Guide to the Varieties of Standard English (4th ed.). London: Arnold.
10. 唐澤一友. (2016).『世界の英語ができるまで』. 東京:亜紀書房.
11. 末延岑生. (2010).『ニホン英語は世界で通じる』. 東京: 平凡社.
12. 田中春美, 田中幸子 (2012).『World Englishes – 世界の英語への招待』. 京都: 昭和堂.
13. 鳥飼玖美子 (2011).『国際共通語としての英語』. 東京: 講談社.
14. 本名信行 (2002).『事典アジアの最新英語事情』. 東京：大修館.
15. 本名信行 (2003).『世界の英語を歩く』. 東京: 集英社新書.
16. Jenkins, J. &Panero, S. M. [野上陽子 監訳] (2026).『グローバルな英語たち：Global Englishes』関西学院大学出版会.
＜リスニング教材＞
1. 榎木園鉄也 (2012).『インド英語のリスニング』. 東京: 研究社.
2. 榎木薗鉄也. (2016).『インド英語のツボ：必ず聞き取れる5つのコツ』. 東京：アルク.
3. 柴田真一. (2016).『アジアの英語』. 東京：コスモピア.
4. ジョセフ・コールマン著、渡辺順子訳 (2008).『いろんな英語をリスニング』東京: 研究社.
5. 鶴田知佳子、柴田真一 (2008).『ダボス会議で聞く世界の英語』. 東京: コスモピア.
6. 平本照麿 (2010).『究極の英語リスニング Worldwide』. 東京：アルク.
7. 里井久輝 (2019).『世界の英語リスニング』. 東京：アルク
＜参考ウェブサイト＞
1. ACE. (2013). The Asian Corpus of English. Retrieved 23rd September 2014 http://corpus.ied.edu.hk/ace/index.html
2. IDEA (2017). International Dialects of English Archive. Accessed 20th September 2017 from http://www.dialectsarchive.com/dialects-accents
3. Sekiya, Yasushi, Kawaguchi, Yuji, Saito, Hiroko, Yoshitomi, Asako, Yazu, Norie, &Marphey, Phillip. (2006). World Englishes: English modules dialog based on research into sociolinguistic variation [Shakai gengogakuteki heni kenkyuu ni motoduita eigo mojuru] Retrieved 16th August 2016, from http://labo.kuis.ac.jp/module/index.html
4. VOICE. (2013). The Vienna-Oxford International Corpus of English (version 2.0 Online). Retrieved 23rd January 2013 from https://www.univie.ac.at/voice/

【成績評価の方法と基準】
＜平常点：5%＞
・「平常点」とは、出席率でなく授業内活動や質疑応答などへの積極的な貢献度を意味します。ディスカッションに積極的に貢献して下さい。
・授業毎のリアクションペーパーの提出率も平常点に含みます。
・遅刻2回（ただし、電車遅延は除く）で、欠席1回とみなします。
＜試験：50%＞
学期末（第14週）に試験を行うか、期末レポートを提出し、学習内容の理解度や考察・意見内容を総合的に判断します。（補足：試験 or レポートの実施は履修者数によって決定しますが、参考までに、これまではレポートとなるケースが多かったです。）
＜その他授業内外課題：45%＞
・授業毎のリアクションペーパーの内容に加え、リーディング課題、フィールドワーク、グループ・プレゼンテーションでの学習内容の理解度と考察内容を総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
音声データ、録画データ等を使用して、多様な英語変種やそのような英語での実際のコミュニケーションを聞く機会を設けます。

【学生が準備すべき機器他】
PCやタブレット端末を持参してください。

【その他の重要事項】
＊＊重要：初回授業について＊＊＊
受講希望者数が、例年より多くなった場合は、初回授業で選抜を実施します。よって、受講を希望する学生は、必ず初回授業に参加し、導入/選抜アンケートを提出してください。選抜を実施した場合、その結果は初回授業終了後、速やかに、各学生にメール等で通知します。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
授業中は、適宜ノートを取って下さい。ただし、ノートをとることよりも講義の内容に集中して、そのテーマについて自ら考えるようにしてください。「覚える」のではなく、「考える」ことが重要です。皆さんの意見を聞いて回りたいと思います。答えに正解・不正解はありませんので、積極的に意見交換することを期待します。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
In today's globalized world, English is one of the dominant tools for intercultural communication. But what exactly is this "English"?

Have you heard terms like "World Englishes" and "English as a lingua franca"? The global spread of English has given rise to diverse English varieties shaped by local sociocultural factors. These include not only the Englisehs of so-called "English-speaking countries" such as the United States, the United Kingdom, Canada, Australia, and New Zealand but also English varieties spoken in Asian countries such as India, Singapore, the Philippines, and Malaysia. Collectively, these varieties are referred to in the plural form as "World Englishes". Moreover, globalization has significantly expanded international exchange and cooperation in business and education, leading to the widespread use of "English as a lingua franca"– a common language among people from different linguistic and cultural backgrounds. This course aims to explore the reality of "English", which may initially seems straightforward, through the lenses of "World Englishes" and "English as a lingua franca". By the end of the course, students will critically examine the role of English and the communication competences required in the globalized world, building the knowledge gained throughout the semester.
[Learning Objectives]
1. Students can explain in detail the phonological and grammatical features of English varieties that have emerged through its global spread, as well as their historical, social, and cultural backgrounds.
2. They can describe in detail the realities and characteristic features of communication in English as a lingua franca.
3. They can critically analyze and explain issues surrounding English, such as standard language ideology and native-speakerism, and their significance.
4. Building on their understanding of the above points, they can critically examine the role of "English" and communication competences in English required in the globalized world, articulating their opinions in a specific and logical manner.
[Learning Activities outside of Classroom]
The standard preparation and review time for this course is set at two hours each (a total of four hours per session).
< Preparation>
1. Reading Assignment (by the beginning of Sessions 3 &9): Read the assigned reading materials.
2. Fieldwork and Report (by the beginning of Sessions 2, 9 &12): Carry out fieldwork three times.
3. Preparation for a Group Presentation (by the beginning of Session 5/6/7): Prepare presentation slides for your group presentation about varieties of English.
< Review>
1. Weekly comments (Sessions 2-14): Reflect on what you've learned in each session, and write comments in a designated form on Google Classroom. Submit the comment one day before the next session each week.
2. Preparation for final exam (or a term paper): Prepare for the final exam (or a term paper) by reviewing what you've learned in each of the sessions.
[Grading Criteria / Policy]
1. Class contribution (5%): Active contribution to class will be evaluated. Students are expected to contribute to discussion actively. The submission rate of weekly comments is counted here.
2. Final exam/term-end paper (50%): Exam answers (or term-end paper) will be evaluated in their contents.
3. Other tasks (45%): Weekly comments, reading assignment, fieldwork reports, group presentations will be evaluated in their contents.

LIN200GA（言語学 / Linguistics 200）

言語の理論 I

石川　潔

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　知識ゼロの人向けの言語科学の案内です。知識を得るというより、取り上げるそれぞれの分野の「ノリ」を実感していただくことを目指します。どの分野を自分が楽しめそうか、楽しめなさそうかの判断の材料としてお使いください。

【到達目標】
- 「言語」についての世間にあふれた誤解を解く。
- それぞれの分野への自分の向き・不向きの判断の材料を得る
　（あくまで「材料」に過ぎませんが）。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　具体的な謎の解明を通して、言語科学の様々な分野を紹介します。
　基本的には講義です。
　リアクションペーパーを募りますが、特に重要なものには口頭でのフィードバックを行う予定です。
　学生の理解度や要望などに応じて、スケジュールは柔軟に変えたいと思います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入、および「音素」その1（音声学・音韻論）	この授業の紹介、および、*party* はカタカナで何と言うべき？
第2回	「音素」その2（音声学・音韻論）	英語には日本語流の「長母音・短母音」は存在しない、その他
第3回	「音節」その1（音声学・音韻論）	アメリカ人いわく、「英単語のカタカナ発音をするのは、つらい」……なぜ？
第4回	「音節」その2（音声学・音韻論）	英語にも存在する母音挿入
第5回	日本語動詞（形態論）	日本語における「規則動詞」と「不規則動詞」
第6回	今日の文法理論その1（統語論）	統語論「研究」実体験：日本語を例として
第7回	今日の文法理論その2（統語論）	「５文型」の不適切さ、X-bar Theory
第8回	今日の文法理論その3（統語論）	英語の「動詞句」って何だろう？そんなもの、本当に native speaker の頭の中にあるの？
第9回	今日の文法理論その4（意味論・語用論）	英語の進行形の基本的意味
第10回	今日の文法理論その5（意味論・語用論）	なぜ進行形で丁寧さが出せるか
第11回	人間はどのように文を理解するか（心理言語学）	*Without her contributions failed to come in.* ってどういう意味？ ……「文の曖昧さ」およびそれへの対処
第12回	人間はどのように文を理解するか（心理言語学）	実験方法、そして人間の文処理の方式の理由
第13回	言語習得（心理言語学）	言語生得説、そして U-curve development
第14回	まとめ	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　リアクションペーパー。また、授業で学んだ方法論を、自分の身近な問題に応用して考えてみましょう。
　なお本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　学習支援システムにて教材を配布します。

【参考書】
　参考書は適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
　期末試験、100％。
　公平性を最重視するので、個人的な事情は一切考慮しません。
　但し、授業外での実験参加による加点が行なわれる場合があります（純粋加点であり、参加なしの人への減点はありません）。

【学生の意見等からの気づき】
　割と良い評価をいただけたと思うのですが、理解度はもっと上げたいと思います。

【その他の重要事項】
　この授業は『言語学概論Ｂ』とは独立していますが、両方とも合わせて受講することをお勧めします（そのために、コロナ禍の頃の「読むテキスト」の一部復活も検討します）。

【Outline (in English)】
（Course outline）An introduction to linguistic sciences for novice.
（Learning Objectives）To clear up common misconceptions concerning language, and to get a feel of how research in each of the fields is typically conducted.
（Learning activities outside of classroom）Reaction papers
（Grading Criteria /Policy）Final (100%)

LIN200GA（言語学 / Linguistics 200）

言語の理論 II

石井　創

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業の内容は、「『経験科学』としての言語学入門」です。いわゆる人文系の学生は、「科学」と聞くと一般に苦い顔をするものですが、それはおそらく「科学」に対する誤った認識によるものです。そのような誤解を解きつつ、統語論・形態論・意味論・音声学・音韻論といった言語学で基本となる諸分野を紹介し、各分野にどのような言語の謎があるのかを見ていきます。その紹介を通じて、受講者に言語研究における分野ごとの雰囲気や基礎知識に触れてもらうこと、そしてその中から自分の肌に合う分野を探してもらうことが授業の目的となります。

【到達目標】
1．言語学の各分野における基礎知識を理解できる
2．身近で話されている言語の事実に敏感に気付ける、また気付いた事実に対して初歩的な考察・分析ができる
3．科学研究の方法論に対して、正しい認識をもっている

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
1．形態
教室での「対面授業」を毎回実施する予定ですが、諸事情により部分的に「オンライン授業」を実施する場合がありえます。
2．進め方
講義形式が基本となりますが、内容理解を助けるために、受講者が授業内や宿題で練習問題を解く機会も適宜設けていきます。
教員は具体的な言語現象とそれにまつわる謎を提示しながら、その謎に対する答えを出すのに必要な基礎的な知識を説明していきます。しかし、教員が教える答えはいずれも「仮説」であり、「正解」ではありません。受講者は教えられた答えを鵜呑みにせず、そのもっともらしさを自分で疑う姿勢を大切にし、その姿勢によって得られた疑問点や不明点を授業内の質疑応答やリアクションペーパーで積極的に発信することが望まれます。また、リアクションペーパーで得られた面白い質問や意見は、時間の許す限りその後の授業内で紹介して、授業における話題や議論を広げるのに役立てていきます。
なお、受講者の理解度などに応じ、説明にかける授業の回数等は柔軟に調整します。よって、以下の授業計画は参考例となります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要説明、「言語学って何をするの？」、「語学と違うの？」、「言語学が科学？」
第2回	理論言語学とは？	下位分野とそれぞれで扱われる謎の種類
第3回	言語理論と言語観の変遷1	Saussure 〜アメリカ構造主義言語学
第4回	言語理論と言語観の変遷2	Chomsky 〜認知言語学
第5回	形態論1	語の内部構造と形態素
第6回	形態論2	語形成（派生と屈折）
第7回	音声学1	音声産出と子音・母音の体系
第8回	音声学2	異なる子音・母音の聞き分けとその手がかり
第9回	言語学と科学方法論	言語研究における問い・仮説・予測・データの関係
第10回	統語論1	句構造と X-bar Theory
第11回	統語論2	句構造から文構造へ（生成文法における「移動」）
第12回	意味論1	意味の記述と語彙分解
第13回	意味論2	述語のアスペクト
第14回	音韻論	音節とモーラ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業1回あたりの標準の準備・復習時間は、各2時間とします。
1．準備
事前配布されるその授業日のハンドアウトにあらかじめ目を通しておくと、その日の授業内容の理解の助けになるでしょう。また、前回の授業内容を理解していることを前提にその日の授業は行われます。よって、例えば統語論の回なら、それ以前の統語論の授業内容を見直す、というように、授業前にそれ以前の関連内容を思い返す作業を必ず行ってください。
2．復習（宿題、その他応用学習も含む）
その日の授業内容をハンドアウトやノートを用いて整理し、さらに宿題が課されていた場合はそれに取り組んでください。そして、これらの過程で疑問点・不明点が出てきたら、ハンドアウトの引用文献に当たるなど、まずは自分で答えを出す努力をしてみてください。その成果をリアクションペーパーや授業後の質問などにて教員に示してもらえれば、こちらもそれに対してさらなるリアクションをいたします。また、授業で出てきた言語現象と似たものを日々の生活の中で見つけたら、授業で学んだ方法でその現象について考えてみる習慣を身に付けていただきたいです。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用せず、代わりに適宜ハンドアウトを配布します。授業日の前にその日に使用するハンドアウトの PDF ファイルを学習支援システムにアップロードしますので、受講者は必ず各自でファイルを事前にダウンロードし、手元に用意した状態で授業に臨んでください。なお、ハンドアウトに直接書き込みをしたい人は、紙に印刷するか、もしくはファイルに直接書き込みができるタッチペン等のデバイスを用意してください。

【参考書】
参考書は授業内で必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
1．期末試験：100%
最終授業後の定期試験期間に実施します。
2．プラスアルファの加点
上記の通り、本科目の成績は期末試験による一発勝負での評価となりますが、それに加え、下記の項目を満たした受講生には若干の加点をいたします。
(a) リアクションペーパーや質疑応答などで、授業内容に対し良い質問やコメントを行った者
(b) 授業外で学内教員の実施する実験に参加した者
3．出席の確認
授業では出席を取りません。また、リアクションペーパーは出席票ではなく、授業の内容や方法に対して受講者が意見・質問・希望などを記すものであり、「出さないと減点される」という類のものではありません。

【学生の意見等からの気づき】
1．昨年度は「内容が面白い」、「説明がわかりやすい」等の好意的な感想を一昨年度よりも多くもらうことができ、一昨年度からのハンドアウトや説明方法の改善の効果を実感できた。他方で、「話を聞くだけのことが多く、どうしても眠くなってしまった」という意見もいただいたので、練習問題の提示方法・頻度や下記のコメントアプリの使い方などをもう一度見直して、受講生が自分で手を動かしながらより主体的に学べるように授業の進め方を工夫したい。
2．本科目では、受講生が授業中にスマホや PC から送信したコメントが教室内スクリーン上に匿名で流れるアプリを導入しているが、昨年度は受講生がアプリでコメントを送信する頻度が一昨年度よりも大幅に減ってしまった。教員・学生間の双方向の自由な意見交換や受講生の理解度確認のために、コメントアプリの授業における使用実例等を参考にして、学生が気軽にコメントを送信できる環境作りを進めたい。

【学生が準備すべき機器他】
「オンライン授業」が実施される場合、受講生は以下の機器・環境を準備する必要があります。
(a) 双方向通信アプリの Zoom を使用できるデバイス
(b) Zoom によるリアルタイム配信授業の視聴が可能なインターネット回線

【その他の重要事項】
学習支援システムからの授業や期末試験などに関するお知らせメールをきちんと受け取れるように、法政 Gmail の設定を行っておいてください。

【Outline (in English)】
1. Course outline
This is an introductory course on linguistics as an empirical science. It covers main areas of linguistics (e.g., syntax, morphology, semantics, phonetics, and phonology) and gives basic knowledge and illustrates specific research topics in these areas. This course aims to help students understand a scientific method of theoretical linguistics and find a research area that suits their interests.
2. Learning objectives
In this course, students are expected:
(a) to acquire the ability to understand basic knowledge in each field of linguistics.
(b) to become sensitive to, and to acquire the ability to give a rudimentary analysis of, facts about languages that are spoken around them.
(c) to correctly understand the scientific research methodology.
3. Learning activities outside of classroom
Preparatory study and review time for this course are 2 hours each.
(a) Preparation
Before each class meeting, take a look at the handout to be delivered beforehand. In addition, you should also refresh your memory of the contents of the previous class meeting that are related to the upcoming meeting.
(b) Review

You should reflect on what you have learned in the classroom, and work on the assignment if any. If you encounter a problem, you should first tackle it yourself, and let me know the results, however imperfect they are; I will then give a feedback to your attempt. Furthermore, employ the analysis methods you have learned to solve the problem you encounter in your daily life that is similar to the phenomenon taken up in the class.
4. Grading Criteria /Policy
Term-end examination: 100%

LIN300GA（言語学 / Linguistics 300）

社会言語学

国際文化学部　テスト用ダミー

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
私たちは日々、意識的にも無意識的にも言葉を使い分けています。例えば、友人や家族、先生と話すときを想像してみてください。自然と話し方が変わっているのではないでしょうか。こうした使い分けには、年齢・性別・地域・談話状況など、さまざまな社会的要因が影響しています。
社会言語学は、言語と社会の深いつながりについて考え、探究する学問です。この授業では、言葉を通して社会を見つめ、社会を通じて言葉を見つめることで、身の回りの「ことばの世界」を批判的に捉え直す視点を養うことを目指します。

【到達目標】
この授業では、言語と社会の関係に着目し、さまざまな社会における言語の機能や、社会が言語に対して抱く態度・評価、さらには言語政策といったテーマを概観します。言語はコミュニケーションの中核を担い、私たちが「誰であるか」、他者に「どう見られるか」、そして社会的存在として「どう振る舞うか」に大きな影響を与えます。
本講義では、以下の観点から社会と言語の関係を理解し、具体的な事例について説明・分析できるようになることを到達目標とします。
・ミクロ社会言語学の観点から、言語使用やバリエーション、言語変化と社会構造との関係を説明できる。
・マクロ社会言語学の観点から、言語に対する社会的態度や言語政策の事例を分析し、その背景を論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義では、社会言語学の主要なトピックを幅広く取り上げ、ミクロからマクロへと段階的に視野を広げながら理解を深めていきます。授業はPPTを使った講義形式を基本とし、適宜ディスカッションやグループワークを行います。また、講義内容に基づき毎回、リアクションペーパーに気づいたことや考えたことなどを書き、提出していただきます。
社会言語学的な現象は日常のあらゆる場面で観察できます。ぜひ「言語のアンテナ」を張り、自分や他者の言語使用を積極的に観察し、ちょっとした「フィールド・ワーク」のつもりで日常を眺めてみてください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	春学期の授業の進め方、教科書、履修条件について 社会言語学の背景・学問領域
第2回	言語と地域	「言語」と「方言」、地域変種
第3回	言語と社会階層	社会階層の差異と言語使用、標準変種と威信
第4回	言語と時間	実時間・見かけ上の時間、世代差
第5回	言語とジェンダー	ジェンダーの差異と言語使用
第6回	言語と文脈	状況に応じた言語使用
第7回	ポライトネス	ポライトネスという概念・理論
第8回	多言語社会	多言語主義、ダイグロシア、コード・スイッチング
第9回	言語接触	ピジンとクレオール
第10回	言語政策と計画	言語維持・喪失・移行・復興
第11回	言語と民族	民族と言語変種
第12回	教育と言語イデオロギー	教育と社会言語学的影響、言語とイデオロギー
第13回	春学期の振り返り	社会言語学的視点の再確認と今後への応用
第14回	期末試験	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
予習は必須ではありませんが、各回のテーマや内容について事前に自分なりに考えたり、関連事項を調べたりすることを推奨します。
授業後は、講義で学んだ内容を自身の身近な言語環境に当てはめて考察するとともに、異なるトピック間の関連や接点を意識しながら、知識を相互に結びつけて理解を深めてください。本講義で扱う社会言語学の諸概念は相互に密接に関連しています。たとえば、話者の年齢、社会階層、ジェンダーは互いに影響し合う要因であり、またミクロ社会言語学とマクロ社会言語学は対立するものではなく、補完的な視点を提供します。
本授業における授業時間外の学習時間は、2時間程度を標準とします。

【テキスト（教科書）】
指定の教科書はありません。

【参考書】
授業内外で適宜、参考書や補助資料を紹介します。

【成績評価の方法と基準】
リアクションペーパーや授業参加による平常点：25%
自らの言語使用に関するリフレクションペーパー：15%
期末試験：60%

【学生の意見等からの気づき】
本科目の担当は今年度が初めてです。授業計画については、みなさんのバックグラウンドや理解度に応じて、柔軟に変更・対応したいと思っています。気づいた点などがあれば、授業内外でお気軽にお知らせください。

【Outline (in English)】
(Outline and objectives) This course explores the relationship between language and society, focusing on the functions of language in different social contexts and the ways societies respond to language. Language plays a central role in communication, shaping who we are, how we are perceived, and how we function as social beings.
We will examine these issues from two perspectives: (1) how social structures influence the way people speak (e.g., gender, age, socioeconomic status), and (2) how societies deal with language (e.g., attitudes, language policy, bilingualism).
(Learning activities outside of classroom) Students are encouraged to reflect on the lecture content and relate sociolinguistic concepts to their own everyday language use. Students are expected to spend approximately two hours per class.
(Grading criteria/policy) Assessment is based on three components: participation (25%), linguistic self-reflection (15%), and a final examination (60%).

LIN300GA（言語学 / Linguistics 300）

応用言語学

川﨑　貴子

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Applied Linguisticsの分野の中でもLanguage Acquisitionの理論、特に第二言語習得を中心に扱います。言語習得の分野で、どのような研究がなされてきたか、また、言語習得の過程はどのようにして明らかにしていくのかを、授業、及び実験への参加を通して学びます。

【到達目標】
こどもはどのように母語を獲得するのか、そして大人の第二言語習得と母語習得とはどのように異なるのか、そして習得理論はその違い、および類似点をどのように説明してきたのかを学び、言語習得理論の知識を身につけることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は半期のみなので、他の分野の紹介も織り交ぜ、言語習得理論のエッセンスの紹介をします。基本的には講義形式ですが、毎回、提示された問題について考える時間を設けます。また、授業外で、本学学部生、大学院生、教員の行う言語実験に被験者として参加し、実験がどのようにしてなされるのかを学ぶことも推奨します。授業後にオンラインでいただいたコメント・質問には次の授業冒頭で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の内容説明
第2回	言語知識	子供と大人の言語知識
第3回	第一言語習得1	子供の言語習得
第4回	第一言語習得2	入力の問題点・生得性
第5回	第一言語習得3	臨界期仮説
第6回	第一言語習得4	第一言語習得の研究
第7回	言語教育〜言語習得	第二言語習得の歴史
第8回	第二言語習得1	第二言語習得における入力問題
第9回	第二言語習得2	L1とL2の相違点
第10回	第二言語習得3	言語差と難易度
第11回	SLA研究	実験方法の変遷
第12回	SLA理論1	パラメタと有標性
第13回	SLA理論2	パラメタの習得
第14回	SLA研究の教育への応用	理論と教育、第二言語教育

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
特に予習は必要ありませんが、授業の復習を行う必要があります。
授業内では宿題が出されます。宿題も含めて試験範囲となります。
宿題の回答を頭の中で考えるだけではなく、書いてまとめることが求められます。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
毎回、プリントを配布します。PDFファイルは、授業後に授業支援システムにアップロードします。

【参考書】
Lightbown, Patsy and Nina Spada 2011. How Languages Are Learned. Oxford University Press. [P. ライトバウン &N. スパダ『言語はどのように学ばれるか――外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』白井恭弘&岡田雅子（訳）2014. 岩波書店]
その他、授業内で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
最終試験を100％として評価します。

【学生の意見等からの気づき】
半期の授業ではあるが、様々な研究を広く紹介するよう心がけた。受講生にとって気づきの多い授業だったなら幸いです。

【Outline (in English)】
Outline: This course deals with Applied Linguistics, focusing on the theory of Language Acquisition, especially second language acquisition. Through classes and participation in experiments, students will learn what kind of research has been conducted in the field of language acquisition.
Goal: The purpose of this course is to provide students with knowledge about language acquisition and to enable them to think logically about issues related to language acquisition.
Learning activities outside of classroom: The required amount of study time is a minimum of four hours for each meeting of the class.
Grading Criteria:
Final exam: 100%

LANe100GA（英語 / English language education 100）

英語コミュニケーションⅠ

ANDREW　JONES

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.

【到達目標】
The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various oral discourse themes will be introduced and practised. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, and 4) review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Requirements of the all-English Classroom	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on the differences between the all-English classroom environment and classes where English is taught through Japanese translation.
Week 2	Introductory Learning Strategies: When in Doubt, Ask a Question.	Brief English lecture on concept of learning strategies. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice using confirmation questions to check and clarify meaning in English conversations.
Week 3	More Learning Strategies: Breaking Old Bad Habits	Brief English lecture on typical social behavior and coping strategies Japanese students often employ that are not effective or appropriate in an overseas setting. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on what social habits and behavior students need to change to have a truly successful study abroad experience.
Week 4	Learning Strategies: Knowing What You Don't Know Can Make Learning Easy and Fun	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
Week 5	Identity: Personal and Cultural Identity	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of personal and cultural identity.
Week 6	Values: Deciding Right and Wrong	Reading, pair work exercises, and small group discussions on personal values and how one decides between right and wrong.
Week 7	Values: Discussing Future Goals	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written exercise on one's values and future goals.
Week 8	Culture Shock: Advice for Dealing With Culture Shock	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of culture shock, and how to deal with it.
Week 9	Culture in Language: Proverbs and Idioms	Listening, reading, small group discussions, and written exercise on how culture is reflected in language such proverbs and idioms.
Week 10	Body Language and Customs: Signs and Gestures	Reading, pair work exercises, and small group discussions on how the meaning of signs and gestures change according to cultural customs.
Week 11	Body Language and Customs: Non-verbal Communication Norms	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written exercise on how customs affect body language and non-verbal communication norms.
Week 12	Individualism: Individualism and Collectivism	Reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of individualism and collectivism.
Week 13	Individualism: The Challenges of Different Working Styles	Listening, pair work exercises, and small group discussions, on how individual preferences can make different working styles challenging.
Week 14	Examination/Review	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students will be given homework in most lessons.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Initially, course materials will be provided by the instructor, but a textbook may be announced at a later date.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended. This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
40% Final Examination/Term Project
20% Homework
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
In order to increase student talking time, students will also take part in a five-minute English conversation during each lesson.

LANe100GA（英語 / English language education 100）

英語コミュニケーションⅠ

ＡＮＤＲＥＷ　ＪＯＮＥＳ

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.

【到達目標】
The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various oral discourse themes will be introduced and practised. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, and 4) review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Requirements of the all-English Classroom	Brief English lecture on course content, students responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on the differences between the all-English classroom environment and classes where English is taught through Japanese translation.
Week 2	Introductory Learning Strategies: When in Doubt, Ask a Question.	Brief English lecture on concept of learning strategies. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice using confirmation questions to check and clarify meaning in English conversations.
Week 3	More Learning Strategies: Breaking Old Bad Habits	Brief English lecture on typical social behavior and coping strategies Japanese students often employ that are not effective or appropriate in an overseas setting. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on what social habits and behavior students need to change to have a truly successful study abroad experience.
Week 4	Learning Strategies: Knowing What You Don't Know Can Make Learning Easy and Fun	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
Week 5	Identity: Personal and Cultural Identity	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of personal and cultural identity.
Week 6	Values: Deciding Right and Wrong	Reading, pair work exercises, and small group discussions on personal values and how one decides between right and wrong.
Week 7	Values: Discussing Future Goals	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written exercise on one's values and future goals.
Week 8	Culture Shock: Advice for Dealing With Culture Shock	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of culture shock, and how to deal with it.
Week 9	Culture in Language: Proverbs and Idioms	Listening, reading, small group discussions, and written exercise on how culture is reflected in language such proverbs and idioms.
Week 10	Body Language and Customs: Signs and Gestures	Reading, pair work exercises, and small group discussions on how the meaning of signs and gestures change according to cultural customs.
Week 11	Body Language and Customs: Non-verbal Communication Norms	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written exercise on how customs affect body language and non-verbal communication norms.
Week 12	Individualism: Individualism and Collectivism	Reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of individualism and collectivism.
Week 13	Individualism: The Challenges of Different Working Styles	Listening, pair work exercises, and small group discussions, on how individual preferences can make different working styles challenging.
Week 14	Examination/Review	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students will be given homework in most lessons. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Initially, course materials will be provided by the instructor, but a textbook may be announced at a later date.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended. This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
40% Final Examination/Term Project
20% Homework
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
In order to increase student talking time, students will also take part in a five-minute English conversation during each lesson.

LANe100GA（英語 / English language education 100）

英語コミュニケーションⅠ

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing.The course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one-year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.

【到達目標】
The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various oral discourse themes will be introduced and practiced. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, and 4) review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Requirements of the all-English Classroom	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on the differences between the all-English classroom environment and classes where English is taught through Japanese translation.
Week 2	Introductory Learning Strategies: When in Doubt, Ask a Question.	Brief English lecture on concept of learning strategies. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice using confirmation questions to check and clarify meaning in English conversations.
Week 3	More Learning Strategies: Breaking Old Bad Habits	Brief English lecture on typical social behavior and coping strategies Japanese students often employ that are not effective or appropriate in an overseas setting. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on what social habits and behavior students need to change to have a truly successful study abroad experience.
Week 4	Learning Strategies: Knowing What You Don't Know Can Make Learning Easy and Fun	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
Week 5	Food: as a reflection of culture.	Listening, reading, and pair work exercises on food as a reflection of culture.
Week 6	Food: as a social tool.	Listening, reading, and small group discussions on the concept of food as a social tool.
Week 7	Health: yours and healthcare around the world.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on healthcare in different countries.
Week 8	Politics. Explaining your system, and understand others.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on political systems in different countries.
Week 9	Money. Value and price in different cultures.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on value and price in different countries.
Week 10	Travel. A practical issue.	Listening, reading, and pair work exercises on the practical issue of travel.
Week 11	Transport as it reflects the needs of its users.	Listening, reading, and small group discussions on the concept of a transportation system being a reflection of the needs of its users.
Week 12	Belief: religion and belief in Japan and elsewhere.	Listening, reading, and small group discussions on the concept of religion and belief systems being in Japan and elsewhere.
Week 13	Saying 'Goodbye'. How we take our leave.	Listening, reading, small group discussions, and written exercises on different ways of saying 'Goodbye' depending on the situation.
Week 14	Examination/Review.	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Textual preparation and work for Presentations will be necessary. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
People Like Us Too, Simon Greenall. Macmillan Pub.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

LANe100GA（英語 / English language education 100）

英語コミュニケーション I

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing.The course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one-year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.

【到達目標】
The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various oral discourse themes will be introduced and practiced. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, and 4) review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Requirements of the all-English Classroom	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on the differences between the all-English classroom environment and classes where English is taught through Japanese translation.
Week 2	Introductory Learning Strategies: When in Doubt, Ask a Question.	Brief English lecture on concept of learning strategies. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice using confirmation questions to check and clarify meaning in English conversations.
Week 3	More Learning Strategies: Breaking Old Bad Habits	Brief English lecture on typical social behavior and coping strategies Japanese students often employ that are not effective or appropriate in an overseas setting. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on what social habits and behavior students need to change to have a truly successful study abroad experience.
Week 4	Learning Strategies: Knowing What You Don't Know Can Make Learning Easy and Fun	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
Week 5	Food: as a reflection of culture.	Listening, reading, and pair work exercises on food as a reflection of culture.
Week 6	Food: as a social tool.	Listening, reading, and small group discussions on the concept of food as a social tool.
Week 7	Health: yours and healthcare around the world.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on healthcare in different countries.
Week 8	Politics. Explaining your system, and understand others.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on political systems in different countries.
Week 9	Money. Value and price in different cultures.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on value and price in different countries.
Week 10	Travel. A practical issue.	Listening, reading, and pair work exercises on the practical issue of travel.
Week 11	Transport as it reflects the needs of its users.	Listening, reading, and small group discussions on the concept of a transportation system being a reflection of the needs of its users.
Week 12	Belief: religion and belief in Japan and elsewhere.	Listening, reading, and small group discussions on the concept of religion and belief systems being in Japan and elsewhere.
Week 13	Saying 'Goodbye'. How we take our leave.	Listening, reading, small group discussions, and written exercises on different ways of saying 'Goodbye' depending on the situation.
Week 14	Examination/Review.	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Textual preparation and work for Presentations will be necessary. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
People Like Us Too, Simon Greenall. Macmillan Pub.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

LANe100GA（英語 / English language education 100）

英語コミュニケーションⅠ

ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one-year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.

【到達目標】
The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various oral discourse themes will be introduced and practiced. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, and 4) review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Requirements of the all-English Classroom	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on the differences between the all-English classroom environment and classes where English is taught through Japanese translation.
Week 2	Introductory Learning Strategies: When in Doubt, Ask a Question.	Brief English lecture on concept of learning strategies. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice using confirmation questions to check and clarify meaning in English conversations.
Week 3	More Learning Strategies: Breaking Old Bad Habits	Brief English lecture on typical social behavior and coping strategies Japanese students often employ that are not effective or appropriate in an overseas setting. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on what social habits and behavior students need to change to have a truly successful study abroad experience.
Week 4	Learning Strategies: Knowing What You Don't Know, Can Make Learning Easy and Fun	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
Week 5	Your Life: Childhood Experiences	Listening, reading, and pair work exercises on life experiences.
Week 6	Your Life: Friends and Education	Listening, reading, and small group discussions on different types of friends and educational experiences.
Week 7	Your Life: Establishing Good Rapport	Listening on the concept of establishing rapport, followed by student presentations about their families, and written assignment introducing someone who influenced you.
Week 8	World Destinations: Describing Places	Listening, reading, and pair work exercises on describing places.
Week 9	World Destinations: Getting Around	Listening, reading, and small group discussions on traveling into, out of, and around different places in the world.
Week 10	World Destinations: Where to Visit in Japan	Listening on places to visit, followed by student presentations about their favorite spots in Japan, and written assignment describing a favorite place.
Week 11	Imagining the Future: Social and Technological Changes	Listening, reading, and pair work exercises on changes in society and technology.
Week 12	Imagining the Future: Personal Development	Listening, reading, and small group discussions on how to plan for the future.
Week 13	Imagining the Future: Talking about Uncertainty	Video on comparing solutions, followed by student presentations making recommendations for action, and written assignment.
Week 14	Examination/Review	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Daniel Barber &Marek Kiczkowiak, Voices 5 with Online Practice and Student's eBook, National Geographic Learning, ISBN-13:978-0-357-45885-3

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourage students to make suggestions to improve the course at anytime.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

LANe100GA（英語 / English language education 100）

英語コミュニケーションⅠ

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one-year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.

【到達目標】
The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various oral discourse themes will be introduced and practiced. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, and 4) review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Requirements of the all-English Classroom	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on the differences between the all-English classroom environment and classes where English is taught through Japanese translation.
Week 2	Introductory Learning Strategies: When in Doubt, Ask a Question.	Brief English lecture on concept of learning strategies. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice using confirmation questions to check and clarify meaning in English conversations.
Week 3	More Learning Strategies: Breaking Old Bad Habits	Brief English lecture on typical social behavior and coping strategies Japanese students often employ that are not effective or appropriate in an overseas setting. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on what social habits and behavior students need to change to have a truly successful study abroad experience.
Week 4	Learning Strategies: Knowing What You Don't Know, and Can Make Learning Easy and Fun	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
Week 5	Giving your experiences: Finding your stories and setting the scene	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
Week 6	Giving your experiences: Description and compression	Conversation exercises, and written assignment on describing experiences.
Week 7	Midterm Student Presentations	Individual student presentations to the class
Week 8	Discussing your opinions: Discussion and argument	Listening, reading, and pair work exercises on developing and expressing opinions.
Week 9	Discussing your opinions: The triangle of persuasion	Conversation exercises, and written assignment on persuasive discussion styles.
Week 10	Telling how you feel: Physical feelings, likes, wants and emotions	Listening, reading, conversation exercises and written assignment on expressing physical feelings, likes, wants, and emotions.
Week 11	Starting conversations: Friends and acquaintances	Listening, and pair work exercises on starting conversations with friends.
Week 12	Starting conversations: Strangers	Listening, and pair work exercises on starting conversations with strangers.
Week 13	Putting it all together: The flow of conversation	Conversation exercises, and written assignment on how conversations flow naturally from beginning to end.
Week 14	Final Presentation	Group presentations to the class

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Preparation for pair presentations.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
None

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
20% Homework
20% In class work
30% Midterm Presentation
30% Final Presentation
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
The course is constantly being improved based on feedback from students.

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANe100GA（英語 / English language education 100）

英語コミュニケーションⅠ

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one-year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.

【到達目標】
The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various oral discourse themes will be introduced and practiced. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, and 4) review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Class Orientation: Requirements of the all-English Classroom	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on the differences between the all-English classroom environment and classes where English is taught through Japanese translation.
2	Introductory Learning Strategies: When in Doubt, Ask a Question.	Brief English lecture on concept of learning strategies. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice using confirmation questions to check and clarify meaning in English conversations.
3	More Learning Strategies: Breaking Old Bad Habits	Brief English lecture on typical social behavior and coping strategies Japanese students often employ that are not effective or appropriate in an overseas setting. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on what social habits and behavior students need to change to have a truly successful study abroad experience.
4	Learning Strategies: Knowing What You Don't Know, and Can Make Learning Easy and Fun	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
5	Giving your experiences: Finding your stories and setting the scene	Brief English lecture, and reading on effective listening and reading strategies that help students identify unknown expressions and concepts more quickly, so they can develop a more fluid interactive learning style that allows them to ask for help more easily and thus making learning more enjoyable.
6	Giving your experiences: Description and compression	Conversation exercises, and written assignment on describing experiences.
7	Midterm Student Presentations	Individual student presentations to the class
8	Discussing your opinions: Discussion and argument	Listening, reading, and pair work exercises on developing and expressing opinions.
9	Discussing your opinions: The triangle of persuasion	Conversation exercises, and written assignment on persuasive discussion styles.
10	Telling how you feel: Physical feelings, likes, wants and emotions	Listening, reading, conversation exercises and written assignment on expressing physical feelings, likes, wants, and emotions.
11	Starting conversations: Friends and acquaintances	Listening, and pair work exercises on starting conversations with friends.
12	Starting conversations: Strangers	Listening, and pair work exercises on starting conversations with strangers.
13	Putting it all together: The flow of conversation	Conversation exercises, and written assignment on how conversations flow naturally from beginning to end.
14	Final Presentation	Group presentations to the class

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Preparation for pair presentations.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
None

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
20% Homework
20% In class work
30% Midterm Presentation
30% Final Presentation
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
The course is constantly being improved based on feedback from students.

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションII

ANDREW　JONES

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.

【到達目標】
Building on the English language skills acquired in the first year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will be expected to not only acquire vocabulary and expressions, but also find and analyze information from various forms of English media independently and complete weekly homework assignments. Special emphasis will be given to communicative presentation and writing skills necessary for successfully completing their study abroad programs in the fall semester. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Reorientation: How to Prepare for Overseas Study	Brief English reorientation at lecture on students' responsibilities, and what students should to be truly ready for their fall study abroad programs. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on personal study and preparation plans students plan to pursue before leaving Japan.
Week 2	Express Yourself: Letter of Introduction to a Host Family	Listening, reading, and small group discussions on how life with a host family could be different than life with ones own family. Followed by a written assignment on a self-introduction letter to a host family.
Week 3	Understanding Messages: Rules in the Home and School	Listening, reading, and small group discussions on rules commonly found in the study abroad home and school environments.
Week 4	Analyzing Learning Goals, Silent Interview	Listening, pair work exercise, and written assignment on analyzing one's desires and personal learning goals.
Week 5	Writing about Traditional Japanese Culture	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on traditional Japanese culture.
Week 6	Character Writing, Different Perspectives	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on how a person's character can affect his/her perspective on things.
Week 7	Editing, Common Errors, Writing Conventions	Listening, reading, pair work exercise, and written assignment on writing conventions, common errors and editing one's writing.
Week 8	Creative Writing Prompts, Collaborative Writing	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on individual creative writing, and collaborative group writing.
Week 9	Stretching the Imagination	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on using the written word to create a mental image.
Week 10	Creating a Utopian Society	Listening, pair work exercise, and written assignment on the concept of creating a Utopian society.
Week 11	Class Project	Brainstorming and planning.
Week 12	Evaluating and Revising the Class Project	Evaluating and revising the class project.
Week 13	Practical Tips, Preparation for Travel	Practical tips, preparation for travel.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/comments.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students will be expected to keep an English journal which will require weekly updates.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Course materials will be provided by the instructor.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
40% Final Examination/Term Project
20% Homework
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
In order to increase student talking time, students will also take part in a five-minute English conversation during each lesson.

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションII

ANDREW　JONES

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.

【到達目標】
Building on the English language skills acquired in the first year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will be expected to not only acquire vocabulary and expressions, but also find and analyze information from various forms of English media independently and complete weekly homework assignments. Special emphasis will be given to communicative presentation and writing skills necessary for successfully completing their study abroad programs in the fall semester. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Reorientation: How to Prepare for Overseas Study	Brief English reorientation at lecture on students' responsibilities, and what students should to be truly ready for their fall study abroad programs. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session on personal study and preparation plans students plan to pursue before leaving Japan.
Week 2	Express Yourself: Letter of Introduction to a Host Family	Listening, reading, and small group discussions on how life with a host family could be different than life with ones own family. Followed by a written assignment on a self-introduction letter to a host family.
Week 3	Understanding Messages: Rules in the Home and School	Listening, reading, and small group discussions on rules commonly found in the study abroad home and school environments.
Week 4	Analyzing Learning Goals, Silent Interview	Listening, pair work exercise, and written assignment on analyzing one's desires and personal learning goals.
Week 5	Writing about Traditional Japanese Culture	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on traditional Japanese culture.
Week 6	Character Writing, Different Perspectives	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on how a person's character can affect his/her perspective on things.
Week 7	Editing, Common Errors, Writing Conventions	Listening, reading, pair work exercise, and written assignment on writing conventions, common errors and editing one's writing.
Week 8	Creative Writing Prompts, Collaborative Writing	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on individual creative writing, and collaborative group writing.
Week 9	Stretching the Imagination	Reading, pair work exercise, small group discussions and written assignment on using the written word to create a mental image.
Week 10	Creating a Utopian Society	Listening, pair work exercise, and written assignment on the concept of creating a Utopian society.
Week 11	Class Project	Brainstorming and planning.
Week 12	Evaluating and Revising the Class Project	Evaluating and revising the class project.
Week 13	Practical Tips, Preparation for Travel	Practical tips, preparation for travel.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/comments.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students will be expected to keep an English journal which will require weekly updates. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Course materials will be provided by the instructor.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
40% Final Examination/Term Project
20% Homework
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
In order to increase student talking time, students will also take part in a five-minute English conversation during each lesson.

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションII

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.

【到達目標】
Building on the English language skills acquired in the first-year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will be expected to not only acquire vocabulary and expressions, but also find and analyze information from various forms of English media independently and complete weekly homework assignments. Special emphasis will be given to communicative presentation and writing skills necessary for successfully completing their study abroad programs in the Fall Semester. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Reorientation: How to Prepare for Overseas Study	Brief English reorientation at lecture on students' responsibilities, and what students should do to be truly ready for their fall study abroad programs. Students take notes, followed by a short reading and class discussion and question and answer session on personal study and preparation plans students plan to pursue before leaving Japan.
Week 2	Express Yourself: Letter of Introduction to a Host Family	Listening, reading, and small group discussions on how life with a host family could be different than life with ones own family. Followed by a written assignment on a self-introduction letter to a host family.
Week 3	Understanding Messages: Rules in the Home and School	Listening, reading, and small group discussions on rules commonly found in the study abroad home and school environments.
Week 4	Classroom techniques and behaviour in Japan and beyond.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on classroom styles of behavior inside and outside of Japan.
Week 5	The culture of eating out.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on how culture can effect why and when people eat out.
Week 6	Etiquette: redundant in a Global Society?	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on etiquette and if globalization has made the idea of learning manners unnecessary.
Week 7	The politics of having a vote.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on politics and the right to vote.
Week 8	How to stay well.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on how to stay well while living abroad.
Week 9	Shopping wisely.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on shopping wisely.
Week 10	Where will you stray to?	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on getting lost and what to do.
Week 11	How to get from A to B via X.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on traveling when changing modes of transportation is involved.
Week 12	Superstitions; are they the same everywhere?	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on superstitions and different beliefs.
Week 13	Re-entry. A safe landing.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on returning safely and the possibility of re-entry shock.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/Comments.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Text preparation and presentation planning will be required. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Materials will be provided as required.

【参考書】
And English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some Online News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションII

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.

【到達目標】
Building on the English language skills acquired in the first-year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will be expected to not only acquire vocabulary and expressions, but also find and analyze information from various forms of English media independently and complete weekly homework assignments. Special emphasis will be given to communicative presentation and writing skills necessary for successfully completing their study abroad programs in the Fall Semester. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Reorientation: How to Prepare for Overseas Study	Brief English reorientation at lecture on students' responsibilities, and what students should do to be truly ready for their fall study abroad programs. Students take notes, followed by a short reading and class discussion and question and answer session on personal study and preparation plans students plan to pursue before leaving Japan.
Week 2	Express Yourself: Letter of Introduction to a Host Family	Listening, reading, and small group discussions on how life with a host family could be different than life with ones own family. Followed by a written assignment on a self-introduction letter to a host family.
Week 3	Understanding Messages: Rules in the Home and School	Listening, reading, and small group discussions on rules commonly found in the study abroad home and school environments.
Week 4	Classroom techniques and behaviour in Japan and beyond.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on classroom styles of behavior inside and outside of Japan.
Week 5	The culture of eating out.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on how culture can effect why and when people eat out.
Week 6	Etiquette: redundant in a Global Society?	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on etiquette and if globalization has made the idea of learning manners unnecessary.
Week 7	The politics of having a vote.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on politics and the right to vote.
Week 8	How to stay well.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on how to stay well while living abroad.
Week 9	Shopping wisely.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on shopping wisely.
Week 10	Where will you stray to?	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on getting lost and what to do.
Week 11	How to get from A to B via X.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on traveling when changing modes of transportation is involved.
Week 12	Superstitions; are they the same everywhere?	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on superstitions and different beliefs.
Week 13	Re-entry. A safe landing.	Reading, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on returning safely and the possibility of re-entry shock.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/Comments.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Text preparation and presentation planning will be required.

【テキスト（教科書）】
Materials will be provided as required. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【参考書】
And English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some Online News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションII

PAUL　K　KALLENDER

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.

【到達目標】
Building on the English language skills acquired in the first-year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will be expected to not only acquire vocabulary and expressions, but also find and analyze information from various forms of English media independently and complete weekly homework assignments. Special emphasis will be given to communicative presentation and writing skills necessary for successfully completing their study abroad programs in the Fall Semester. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Reorientation: How to Prepare for Overseas Study	Brief English reorientation lecture on students' responsibilities, and what students should do to be truly ready for their fall study abroad programs. Students take notes, followed by a short reading and class discussion and question and answer session on personal study and preparation plans students plan to pursue before leaving Japan.
Week 2	Express Yourself: Letter of Introduction to a Host Family	Listening, reading, and small group discussions on how life with a host family could be different than life with ones own family. Followed by a written assignment on a self-introduction letter to a host family.
Week 3	Understanding Messages: Rules in the Home and School	Listening, reading, and small group discussions on rules commonly found in the study abroad home and school environments.
Week 4	Express Yourself: Explaining Steps in a Process	Listening, reading, and small group discussions on how to explain a step by step process. Followed by student presentations and a written assignment explaining how to do something that takes a number of different steps.
Week 5	Playing Games: Competition & Cooperation	Listening, reading, and pair work exercises on traditional sports and professional e-gaming.
Week 6	Missed Opportunities: Could've, Would've, Should've	Listening, reading, and small group discussions on events and regrets.
Week 7	Group Communication: Confusion & Clarification	Listening, reading, and small group discussions on communicating with members of a team and ways to clarify issues and eliminate confusion.
Week 8	Buying &Selling: Shopping in a Changing World	Listening, reading, and pair work exercises on different ways to shop in the modern world.
Week 9	Buying &Selling: Delivering New Services	Listening, reading, and small group discussions on new types of services and how you can get them.
Week 10	Buying &Selling: Bargaining & Negotiating Value	Listening, reading, and small group discussions on products and evaluating advertisements. Followed by written assignment describing a product for sale.
Week 11	History Revisited: Inspired by the Past	Listening, reading, and pair work exercises on how different historical events influence fiction and fantasy literature and media.
Week 12	History Revisited: At the Same Moment in Time	Listening, reading, and small group discussions on historical and personal events which occurred in different places at the same time.
Week 13	History Revisited: How it Influences Our Future	Biographical essay on a person who inspired you to make an important life choice.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons to enhance their participation in classroom activities and discussions. Students are also expected to find and analyze information from various forms of English media independently as a means of increasing their vocabulary and general knowledge. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Daniel Barber &Marek Kiczkowiak, Voices 5 with Online Practice and Student's eBook, National Geographic Learning, ISBN-13:978-0-357-45885-3

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourage students to make suggestions to improve the course at anytime.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションII

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.

【到達目標】
Building on the English language skills acquired in the first-year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will be expected to not only acquire vocabulary and expressions, but also find and analyze information from various forms of English media independently and complete weekly homework assignments. Special emphasis will be given to communicative presentation and writing skills necessary for successfully completing their study abroad programs in the Fall Semester. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Reorientation: How to Prepare for Overseas Study	Brief English reorientation lecture on students' responsibilities, and what students should do to be truly ready for their fall study abroad programs. Students take notes, followed by a short reading and class discussion and question and answer session on personal study and preparation plans students plan to pursue before leaving Japan.
Week 2	Express Yourself: Letter of Introduction to a Host Family	Listening, reading, and small group discussions on how life with a host family could be different than life with ones own family. Followed by a written assignment on a self-introduction letter to a host family.
Week 3	Understanding Messages: Rules in the Home and School	Listening, reading, and small group discussions on rules commonly found in the study abroad home and school environments.
Week 4	Study skills and time management	Listening, reading, and small group discussions how study more effectively by managing one's time wisely.
Week 5	Sharing your own culture	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on sharing one's own cultural ideas and practices to others.
Week 6	Universal and local cultural rules	Listening, reading, small group discussions, and written assignment on local and universal norms of behavior.
Week 7	Midterm Presentation	Individual student presentations to the class
Week 8	Social Rules	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the ideas of social rules and how they can vary according to context and culture.
Week 9	Ethics and honesty	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the ideas of ethics and honesty and how they can vary according to context and culture.
Week 10	Diversity and Difference	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of social diversity and individual differences.
Week 11	Individuality and Conformity	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of individuality and group conformity.
Week 12	Discussing controversial issues	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on some controversial social issues.
Week 13	Presentation Preparation and Practice	Students write up their final presentations scripts incorporating vocabulary and concepts covered in previous classes and practice reading their final presentations with student partners.
Week 14	Final Presentation	Individual student presentations to the class

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Preparation for student presentations.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
None

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
20% Homework
20% In Class Work
30% Midterm Presentation
30% Final Presentation
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
The course is constantly being improved based on feedback from students.

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションII

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents skills and future needs.

【到達目標】
Building on the English language skills acquired in the first-year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will be expected to not only acquire vocabulary and expressions, but also find and analyze information from various forms of English media independently and complete weekly homework assignments. Special emphasis will be given to communicative presentation and writing skills necessary for successfully completing their study abroad programs in the Fall Semester. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Reorientation: How to Prepare for Overseas Study	Brief English reorientation lecture on students' responsibilities, and what students should do to be truly ready for their fall study abroad programs. Students take notes, followed by a short reading and class discussion and question and answer session on personal study and preparation plans students plan to pursue before leaving Japan.
Week 2	Express Yourself: Letter of Introduction to a Host Family	Listening, reading, and small group discussions on how life with a host family could be different than life with ones own family. Followed by a written assignment on a self-introduction letter to a host family.
Week 3	Understanding Messages: Rules in the Home and School	Listening, reading, and small group discussions on rules commonly found in the study abroad home and school environments.
Week 4	Study skills and time management	Listening, reading, and small group discussions how study more effectively by managing one's time wisely.
Week 5	Sharing your own culture	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on sharing one's own cultural ideas and practices to others.
Week 6	Universal and local cultural rules	Listening, reading, small group discussions, and written assignment on local and universal norms of behavior.
Week 7	Midterm Presentation	Individual student presentations to the class
Week 8	Social Rules	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the ideas of social rules and how they can vary according to context and culture.
Week 9	Ethics and honesty	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the ideas of ethics and honesty and how they can vary according to context and culture.
Week 10	Diversity and Difference	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of social diversity and individual differences.
Week 11	Individuality and Conformity	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concepts of individuality and group conformity.
Week 12	Discussing controversial issues	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on some controversial social issues.
Week 13	Presentation Preparation and Practice	Students write up their final presentations scripts incorporating vocabulary and concepts covered in previous classes and practice reading their final presentations with student partners.
Week 14	Final Presentation	Individual student presentations to the class

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Preparation for student presentations.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
None

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
20% Homework
20% In Class Work
30% Midterm Presentation
30% Final Presentation
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
The course is constantly being improved based on feedback from students.

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションIII

ANDREW　JONES

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents weaknesses and what skill areas they need to improve.

【到達目標】
Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various discourse themes related to studying abroad in an English-speaking country will be explored in more depth. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, 4) and review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: How is Overseas Study Different?	Brief English lecture on how studying in English in an English-speaking country is different since everyone in class is a foreign student that must speak English to survive. Students take notes, followed by a short reading and question and answer session on what kind of difficulties students could face in that environment and how they might handle those difficulties.
Week 2	The World is Your Classroom! What Kind of Student are You?	Brief English lecture on how any place, and any situation could be an opportunity to learn something new if one has an open mind. Students take notes, followed by a short class discussion and written assignment where students need to analyze what kind of students they are now and how they may need to change.
Week 3	The World is Your Classroom! What Kind of Student Do You Want to Be?	Brief English lecture and reading on how carefully watching and listening to what others say and do, and asking questions about what they say and do is an easy way to learn about social norms and typical behavior as well as language. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice.
Week 4	The World is Your Classroom! What Kind of Student Should You Become?	Brief recap lecture on how to learn more quickly from your environment. Followed by a question and answer session, short class discussion and written assignment where students describe what kind of students they plan to become to make the most of their study abroad programs.
Week 5	Politeness: Ways of Showing Courtesy and Respect	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on politeness, and different ways of showing courtesy and respect.
Week 6	Communication Styles: Verbal Communication Norms	Reading, pair work exercises, and small group discussions on verbal communication styles and norms can vary between people and cultures.
Week 7	Communication Styles: Common Differences in Spoken Behavior	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on common differences in spoken behavior
Week 8	Gender and Culture: Examining Gender Issues in Japan and Abroad	Reading, pair work exercises, and small group discussions on gender issues inside of Japan and abroad.
Week 9	Gender and Culture: Cultural Expectations and Gender Roles	Listening, pair work exercises, small group discussions on cultural expectations and gender roles.
Week 10	Diversity: Multiculturalism and Stereotypes	Reading, pair work exercises, and small group discussions on Multiculturalism and stereotypes.
Week 11	Diversity: Learning from Our Differences	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on diversity and learning from personal and cultural differences.
Week 12	Social Change: Confronting Social Problems and Discrimination	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on confronting social problems and discrimination.
Week 13	Global Community: What Kind of Global Citizen are You?	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concept of a global community, and what kind of global citizen could be?
Week 14	Examination/Review	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students will be given homework in most lessons.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Course materials will be provided by the instructor.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
40% Final Examination/Term Project
20% Homework
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
In order to increase student talking time, students will also take part in a five-minute English conversation during each lesson.

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションIII

ANDREW　JONES

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents weaknesses and what skill areas they need to improve.

【到達目標】
Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various discourse themes related to studying abroad in an English-speaking country will be explored in more depth. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, 4) and review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: How is Overseas Study Different?	Brief English lecture on how studying in English in an English-speaking country is different since everyone in class is a foreign student that must speak English to survive. Students take notes, followed by a short reading and question and answer session on what kind of difficulties students could face in that environment and how they might handle those difficulties.
Week 2	The World is Your Classroom! What Kind of Student are You?	Brief English lecture on how any place, and any situation could be an opportunity to learn something new if one has an open mind. Students take notes, followed by a short class discussion and written assignment where students need to analyze what kind of students they are now and how they may need to change.
Week 3	The World is Your Classroom! What Kind of Student Do You Want to Be?	Brief English lecture and reading on how carefully watching and listening to what others say and do, and asking questions about what they say and do is an easy way to learn about social norms and typical behavior as well as language. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice.
Week 4	The World is Your Classroom! What Kind of Student Should You Become?	Brief recap lecture on how to learn more quickly from your environment. Followed by a question and answer session, short class discussion and written assignment where students describe what kind of students they plan to become to make the most of their study abroad programs.
Week 5	Politeness: Ways of Showing Courtesy and Respect	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on politeness, and different ways of showing courtesy and respect.
Week 6	Communication Styles: Verbal Communication Norms	Reading, pair work exercises, and small group discussions on verbal communication styles and norms can vary between people and cultures.
Week 7	Communication Styles: Common Differences in Spoken Behavior	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on common differences in spoken behavior
Week 8	Gender and Culture: Examining Gender Issues in Japan and Abroad	Reading, pair work exercises, and small group discussions on gender issues inside of Japan and abroad.
Week 9	Gender and Culture: Cultural Expectations and Gender Roles	Listening, pair work exercises, small group discussions on cultural expectations and gender roles.
Week 10	Diversity: Multiculturalism and Stereotypes	Reading, pair work exercises, and small group discussions on Multiculturalism and stereotypes.
Week 11	Diversity: Learning from Our Differences	Listening, pair work exercises, small group discussions, and written assignment on diversity and learning from personal and cultural differences.
Week 12	Social Change: Confronting Social Problems and Discrimination	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on confronting social problems and discrimination.
Week 13	Global Community: What Kind of Global Citizen are You?	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on the concept of a global community, and what kind of global citizen could be?
Week 14	Examination/Review	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students will be given homework in most lessons.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Course materials will be provided by the instructor.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
40% Final Examination/Term Project
20% Homework
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
In order to increase student talking time, students will also take part in a five-minute English conversation during each lesson.

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションIII

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their current weaknesses and what skill areas they need to improve.

【到達目標】
Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various discourse themes related to studying abroad in an English-speaking country will be explored in more depth. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, 4) and review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation. How is Overseas Study Different?	Brief English lecture on how studying in English in an English-speaking country is different since everyone in class is a foreign student that must speak English to survive. Students take notes, followed by a short reading and question and answer session on what kind of difficulties students could face in that environment and how they might handle those difficulties.
Week 2	The World Is Your Classroom. What Kind of Student Are You?	Brief English lecture on how any place, and any situation could be an opportunity to learn something new if one has an open mind. Students take notes, followed by a short class discussion and written assignment where students need to analyze what kind of students they are now and how they may need to change.
Week 3	The World Is Your Classroom. What Kind of Student Do You Want to Be?	Brief English lecture and reading on how carefully watching and listening to what others say and do, and asking questions about what they say and do is an easy way to learn about social norms and typical behavior as well as language. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice.
Week 4	The World is Your Classroom! What Kind of Student Should You Become?	Brief recap lecture on how to learn more quickly from your environment. Followed by a question and answer session, short class discussion and written assignment where students describe what kind of students they plan to become to make the most of their study abroad programs.
Week 5	Appearance reflecting the self and revealing others.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on appearances and what they can communicate to ourselves and to others.
Week 6	Meeting people in a domestic environment.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on meeting other people in domestic environment.
Week 7	Meeting people: other students, other countries.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on meeting other students from different countries at school and elsewhere.
Week 8	Meeting people: expressing ourselves. Etiquette and feelings.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on meeting people, and expressing our feelings while maintaining good manners.
Week 9	Culture: explaining Japan.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on explaining the culture of modern Japan.
Week 10	Culture: exploring tradition.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on exploring traditional Japanese culture.
Week 11	Culture: changing as we speak.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on how quickly cultures can change and evolve.
Week 12	Where we live: Town and Country.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on where people live and the difference between city and country life.
Week 13	Where we live: Directions and Dimensions.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on where people live, how to get there, how the perception of size and distance can change.
Week 14	Examination/Review	Examination/Review.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Text preparation and Presentation planning will be required. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
People Like Us Too, Simon Greenall. Macmillan Pub.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation.
20% Homework.
40% Final Examination/term project.
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションIII

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their current weaknesses and what skill areas they need to improve.

【到達目標】
Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various discourse themes related to studying abroad in an English-speaking country will be explored in more depth. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, 4) and review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation. How is Overseas Study Different?	Brief English lecture on how studying in English in an English-speaking country is different since everyone in class is a foreign student that must speak English to survive. Students take notes, followed by a short reading and question and answer session on what kind of difficulties students could face in that environment and how they might handle those difficulties.
Week 2	The World Is Your Classroom. What Kind of Student Are You?	Brief English lecture on how any place, and any situation could be an opportunity to learn something new if one has an open mind. Students take notes, followed by a short class discussion and written assignment where students need to analyze what kind of students they are now and how they may need to change.
Week 3	The World Is Your Classroom. What Kind of Student Do You Want to Be?	Brief English lecture and reading on how carefully watching and listening to what others say and do, and asking questions about what they say and do is an easy way to learn about social norms and typical behavior as well as language. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice.
Week 4	The World is Your Classroom! What Kind of Student Should You Become?	Brief recap lecture on how to learn more quickly from your environment. Followed by a question and answer session, short class discussion and written assignment where students describe what kind of students they plan to become to make the most of their study abroad programs.
Week 5	Appearance reflecting the self and revealing others.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on appearances and what they can communicate to ourselves and to others.
Week 6	Meeting people in a domestic environment.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on meeting other people in domestic environment.
Week 7	Meeting people: other students, other countries.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on meeting other students from different countries at school and elsewhere.
Week 8	Meeting people: expressing ourselves. Etiquette and feelings.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on meeting people, and expressing our feelings while maintaining good manners.
Week 9	Culture: explaining Japan.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on explaining the culture of modern Japan.
Week 10	Culture: exploring tradition.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on exploring traditional Japanese culture.
Week 11	Culture: changing as we speak.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on how quickly cultures can change and evolve.
Week 12	Where we live: Town and Country.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on where people live and the difference between city and country life.
Week 13	Where we live: Directions and Dimensions.	Listening, reading, pair work exercises, and small group discussions on where people live, how to get there, how the perception of size and distance can change.
Week 14	Examination/Review	Examination/Review.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Text preparation and Presentation planning will be required. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
People Like Us Too, Simon Greenall. Macmillan Pub.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションIII

PAUL　K　KALLENDER

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents weaknesses and what skill areas they need to improve.

【到達目標】
Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various discourse themes related to studying abroad in an English-speaking country will be explored in more depth. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, 4) and review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: How is Overseas Study Different?	Brief English lecture on how studying English in an English-speaking country is different since everyone in class is a foreign student that must speak English to survive. Students take notes, followed by a short reading and question and answer session on what kind of difficulties students could face in that environment and how they might handle those difficulties.
Week 2	The World is Your Classroom! What Kind of Student Are You?	Brief English lecture on how any place, and any situation could be an opportunity to learn something new if one has an open mind. Students take notes, followed by a short class discussion and written assignment where students need to analyze what kind of students they are now and how they may need to change.
Week 3	The World is Your Classroom! What Kind of Student Do You Want to Be?	Brief English lecture and reading on how carefully watching and listening to what others say and do, and asking questions about what they say and do is an easy way to learn about social norms and typical behavior as well as language. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice.
Week 4	The World is Your Classroom! What Kind of Student Should You Become?	Brief recap lecture on how to learn more quickly from your environment. Followed by a question and answer session, short class discussion and written assignment where students describe what kind of students they plan to become to make the most of their study abroad programs.
Week 5	Great Places &Tastes: Sights, Smells & Spices	Listening, reading, and pair work exercises on experiencing and enjoying different types of food.
Week 6	Great Places &Tastes: Table Manners & Customs	Listening, reading, and small group discussions on how culture influences table etiquette.
Week 7	Great Places &Tastes: Restaurants & Recommendations	Listening, reading, and small group discussions about different types of restaurants and menu options.
Week 8	Accidents &Incidents: Inventions	Listening, reading, and pair work exercises on how inventions come about.
Week 9	Accidents &Incidents: Coincidences	Listening, reading, and small group discussions on surprising occurrences.
Week 10	Working Life: Changing Jobs	Listening, reading, and small group discussions on work opportunities and personal limitations. Followed by student persuasive presentations on the benefits of a work life balance.
Week 11	Working Life: Teamwork	Listening, reading, and pair work exercises about working as a team member.
Week 12	Seeing &Believing: Tricks &Illusions	Listening, reading, and small group discussions on how different images can deceive us.
Week 13	Avoiding Embarrassment: Saving Face	Video, and short reading on how to be tactful and help ourselves and others avoid embarrassing situations.
Week 14	Examination/Review	Examination/Review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Daniel Barber &Marek Kiczkowiak, Voices 5 with Online Practice and Student's eBook, National Geographic Learning, ISBN-13:978-0-357-45885-3

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% In Class Evaluation
20% Homework
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance.
The instructor always welcomes comments and encourage students to make suggestions to improve the course at anytime.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションIII

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents weaknesses and what skill areas they need to improve.

【到達目標】
Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various discourse themes related to studying abroad in an English-speaking country will be explored in more depth. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, 4) and review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: How is Overseas Study Different?	Brief English lecture on how studying in English in an English-speaking country is different since everyone in class is a foreign student that must speak English to survive. Students take notes, followed by a short reading and question and answer session on what kind of difficulties students could face in that environment and how they might handle those difficulties.
Week 2	The World is Your Classroom! What Kind of Student are You?	Brief English lecture on how any place, and any situation could be an opportunity to learn something new if one has an open mind. Students take notes, followed by a short class discussion and written assignment where students need to analyze what kind of students they are now and how they may need to change.
Week 3	The World is Your Classroom! What Kind of Student Do You Want to Be?	Brief English lecture and reading on how carefully watching and listening to what others say and do, and asking questions about what they say and do is an easy way to learn about social norms and typical behavior as well as language. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice.
Week 4	The World is Your Classroom! What Kind of Student Should You Become?	Brief recap lecture on how to learn more quickly from your environment. Followed by a question and answer session, short class discussion and written assignment where students describe what kind of students they plan to become to make the most of their study abroad programs.
Week 5	Presentation	Presenting yourself with confidence and power
Week 6	Presentation	Organizing, presenting and arguing your case
Week 7	Group presentation	Preparation and practice
Week 8	Mid-term Presentation	Student Q&A and Instructor Feedback
Week 9	Informative discussion	Learning and teaching
Week 10	Persuasive discussion	Presenting one on one
Week 11	Persuasive discussion	Being politely powerful
Week 12	Presenting yourself socially	Learning to interact on a personal level
Week 13	Final Presentation	Preparation and practice
Week 14	Final Presentation	Student Q&A and Instructor Feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Preparation for student presentations.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
None

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
20% Homework
20% In Class Work
30% Midterm Presentation
30% Final Presentation
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
The course is constantly being improved based on feedback from students. Students in the course will provide feedback on other subjects that may be of interest and can be incorporated into future class plans.

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANe200GA（英語 / English language education 200）

英語コミュニケーションIII

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their currents weaknesses and what skill areas they need to improve.

【到達目標】
Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Various discourse themes related to studying abroad in an English-speaking country will be explored in more depth. The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to: 1) actively participate in classroom activities, 2) ask questions in class, 3) prepare weekly homework assignments at home, 4) and review lessons at home. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: How is Overseas Study Different?	Brief English lecture on how studying in English in an English-speaking country is different since everyone in class is a foreign student that must speak English to survive. Students take notes, followed by a short reading and question and answer session on what kind of difficulties students could face in that environment and how they might handle those difficulties.
Week 2	The World is Your Classroom! What Kind of Student are You?	Brief English lecture on how any place, and any situation could be an opportunity to learn something new if one has an open mind. Students take notes, followed by a short class discussion and written assignment where students need to analyze what kind of students they are now and how they may need to change.
Week 3	The World is Your Classroom! What Kind of Student Do You Want to Be?	Brief English lecture and reading on how carefully watching and listening to what others say and do, and asking questions about what they say and do is an easy way to learn about social norms and typical behavior as well as language. Students take notes, followed by short class discussion and pair work practice.
Week 4	The World is Your Classroom! What Kind of Student Should You Become?	Brief recap lecture on how to learn more quickly from your environment. Followed by a question and answer session, short class discussion and written assignment where students describe what kind of students they plan to become to make the most of their study abroad programs.
Week 5	Presentation	Presenting yourself with confidence and power
Week 6	Presentation	Organizing, presenting and arguing your case
Week 7	Group presentation	Preparation and practice
Week 8	Mid-term Presentation	Student Q&A and Instructor Feedback
Week 9	Informative discussion	Learning and teaching
Week 10	Persuasive discussion	Presenting one on one
Week 11	Persuasive discussion	Being politely powerful
Week 12	Presenting yourself socially	Learning to interact on a personal level
Week 13	Final Presentation	Preparation and practice
Week 14	Final Presentation	Student Q&A and Instructor Feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Preparation for student presentations.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
None

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
20% Homework
20% In Class Work
30% Midterm Presentation
30% Final Presentation
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
The course is constantly being improved based on feedback from students. Students in the course will provide feedback on other subjects that may be of interest and can be incorporated into future class plans.

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションⅠ

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
備考（履修条件等）：※国際文化学部のみ履修可能。
※「Art, Rebellion and Advertising」と同一の科目です。

その他属性：〈グ〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will examine certain cultural phenomena that impact our lives. Emphasis throughout this course will be on the notion of 'possibility' – the exercise of looking beyond mere appearance. The notion of 'possibility' will be used to explore three major themes – art, rebellion, and market advertising. Each theme will be explored through short authentic readings, visual material, and music CDs, all of which will be used to set the groundwork for group discussions and an exchange of viewpoints.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course is designed to improve students' critical thinking ability by challenging their belief systems while examining three cultural phenomena – art, rebellion and advertising.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Emphasis throughout this course will be on the notion of 'possibility' – the exercise of looking beyond mere surface appearance. We will use this notion of 'possibility' to explore three major themes – art, rebellion, and market advertising. Each theme will be explored through short authentic readings, visual material, and music CDs, all of which will be used to set the groundwork for group discussions and an exchange of viewpoints. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria.
Week 2	Theme: Art Topic: Symbols and Logos	English lecture, reading, discussion and written assignment on symbols and logos.
Week 3	Theme: Art Topic: Symbols and meanings in Vincent van Gogh's 'Peasant Shoes'	English reading, lecture and discussion on the symbols and their means in Vincent van Gogh's 'Peasant Shoes'.
Week 4	Theme: Art Topic: Analysis of Vincent van Gogh's 'Wheatfield with Crows'	English lecture, reading, discussion and written assignment on Vincent van Gogh's 'Wheatfield with Crows'.
Week 5	Theme: Art Topic: A Comparison of Edward Hopper's 'Nighthawks' (1942) and Archibald J. Motley Jr.'s 'Nightlife'	English reading, lecture and discussion on Edward Hopper's 'Nighthawks' (1942) and Archibald J. Motley Jr.'s 'Nightlife'.
Week 6	Theme: Art Topic: Art and Function: Can functional objects be works of art?	English lecture, reading, discussion and written assignment on whether functional objects can be considered works of art.
Week 7	Theme: Rebellion Topic: Music as means to change – Woody Guthrie and the Dustbowl of the 1930s	English reading, lecture and discussion on the music of Woody Guthrie and the Dustbowl of the 1930s.
Week 8	Theme: Rebellion Topic: Music as means to change – Bob Dylan and Neil Young	English lecture, reading, discussion and written assignment on the music of Bob Dylan and Neil Young as a stimulus for social change.
Week 9	Theme: Rebellion Topic: Martin Luther King: 'I have a dream' speech	English reading, lecture and discussion of Martin Luther King's 'I have a dream' speech.
Week 10	Theme: Advertising Topic: Advertising techniques	English lecture, reading, discussion and written assignment on advertising techniques.
Week 11	Theme: Advertising Topic: Advertising techniques continued	English reading, lecture and discussion of more techniques used in advertising.
Week 12	Theme: Advertising Topic: Advertising vs Branding	English lecture, reading, discussion and written assignment on advertising and branding.
Week 13	Theme: Beliefs Topic: Is the unexamined life worth living?	English reading, lecture and discussion on the underlying briefs people seldom consider.
Week 14	Theme: Final remarks and discussion	Final remarks and discussion.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Student presentations are to be researched outside class. Most presentations will have both a written and visual component. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
References will vary depending on the subject matter of the students' presentations. Research suggestions will be made by the instructor.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
Students are required to give presentations based on topics discussed in class. The purpose of the presentations is to further class discussion. Students are required to complete all assigned presentations to receive a passing grade. Class grade is based on presentations and participation in class discussions.
Presentations – 70%
Class Participation – 30%
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【学生が準備すべき機器他】
None

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションII

Ｋｒｅｇｇ　Ｊｏｈｎｓｔｏｎ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course is an introduction to the concepts and theories of Microeconomics for non-business majors meant to broaden and enhance students' worldviews and give them the English language tools necessary to deal with readings and conversations commonly found in the business world when English is used.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course aims to help students accomplish the following: 1) develop their knowledge of key vocabulary and concepts of economic theory with particular emphasis on microeconomics, 2) understand and be able to explain microeconomic models both verbally and graphically, and 3) analyze how changes in economic factors can affect individuals and entities within the economy.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
1. Students read individual chapters in the book.
2. A teacher-led discussion on the material from each chapter is held.
3. Student-led discussions in small groups covering self-check questions, review questions, and critical thinking questions are held.
4. End of chapter quizzes are taken.
5. Short writing assignments on topics covered in class (though not for every chapter) are given.
6. Student presentations on topics covered in chapters (schedule and class size permitting) are assigned and given.
Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria.
Week 2	Welcome to Economics: Why Economics is Important/ Macroeconomics & Microeconomics	English reading and lecture and on why it is important for everyone to be able to understand Economics.
Week 3	Welcome to Economics: Economic Theories & Models/ Economic Systems	English reading, discussion and written assignment on economic systems.
Week 4	Choice in a World of Scarcity: Choice & Budget Constraints/ Production Possibilities Frontier	English reading and lecture on the concepts of scarcity and the choices people and companies must make because of limited budgets.
Week 5	Choice in a World of Scarcity: Social Choices &Objections to the Economic Approach	English reading, discussion and written assignment on economic &social choices.
Week 6	Demand &Supply: Demand, Supply, & Equilibrium/ Changes to Equilibrium	English reading and lecture on the concepts of supply and demand.
Week 7	Demand &Supply: Student Presentations	Students make presentations on real world experiences with demand &supply using vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 8	Elasticity: Price Elasticity of Demand	English reading and lecture on the concepts of the price elasticity of demand.
Week 9	Elasticity: Price Elasticity of Supply	English reading and lecture on the concepts of the price elasticity of supply.
Week 10	Cost &Industry Structure: Explicit & Implicit Costs/ Accounting & Economic Profit	English reading and lecture on the concepts of cost, revenue, and profit.
Week 11	Cost &Industry Structure : The Structure of Costs in the Short Run &Long Run	English reading, discussion and written assignment on short & long run costs.
Week 12	Perfect Competition: Perfect Competition & Firm Output Decisions	English reading and lecture on the concepts of market competition.
Week 13	Perfect Competition: Entry &Exit Decisions in the Short Run & Long Run	English reading, discussion and written assignment on why companies open or close.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1. Read the assigned chapters in the book.
2. Complete the assigned self-check &review questions at the end of each chapter.
3. Prepare for regular quizzes after finishing each chapter.
4. Come to class ready to participate actively in each class by reading the material, completing the homework assignments, and ask questions or offer own opinions in English on topics covered in class.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
OpenStax, Principles of Microeconomics. OpenStax. 19 March 2014. < http://cnx.org/content/col11627/latest/> .

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
・Quizzes 50%
・Participation 20%
・Homework 15%
・Written Assignments 15%
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
More practice on using economic terminology and expressing own opinions on economic topics.

【学生が準備すべき機器他】
Students should bring a digital device to class, such as a computer or ipad so that they can view the material in the textbook, or print out each unit and bring it to class. The textbook should be downloaded so that it can be viewed or accessed easily during class.

【その他の重要事項】
Class size is limited to 24 students. If the number of students exceeds the number of seats available, students will be screened based on the level check given in the first class. Students hoping to take the class must attend the first class in order to ensure that they can get a seat. Students who don't attend the 2nd class after attending the 1st will be assumed to have dropped the course. Regular attendance is required to pass the class!

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションIII

ウォルター・カズマー

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will discuss and examine various cultural issues as well as make presentations on related cultural topics.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course explores English related to contemporary social and cultural topics, and offers a forum for students to talk about their experiences abroad and make contrasts and comparisons with life in Japan.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will discuss and examine various cultural issues as well as present on related cultural topics. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and written assignment.
Week 2	Youth Culture: Examining aspects of youth trends such as tattoos, piercings, selfies, Instagram, social media imprint, etc.	English lecture, and reading on trends in youth culture such as tattoos, piercings, selfies, and various type of social media. Followed by question and answer session, and small group discussions on these trends.
Week 3	Youth Employment: Where does the money go? Youth shopping trends for services and products	English lecture, and reading on youth trends in working styles, and new ways to shop and spend money. Followed by question and answer session, and small group discussions.
Week 4	Elderly Trends: Shopping for health, plastic surgery and Internet dating	English lecture, and reading on trends among older people including plastic surgery and internet dating. Followed by question and answer session, and small group discussions.
Week 5	Careers and Employment: Working life What is a career? Freelancing, temporary, and home business ownership Research Habits: Conducting group research-different sharing tips	English lecture, reading and small group discussions on new trends in working and career styles. Followed by instructor led discussion on how to conduct group research.
Week 6	Alternative Career Tracks: Unusual fields for employment Outlining of Presentations: Cluster and formal outlining	English lecture, reading and small group discussions on alternative forms of employment. Followed by instructor led discussion on ways to outline a presentation.
Week 7	Medical Advances: How medical technology is shaping our world of diseases &viruses Presentation Tip— Explanation of Structure: Introduction/Body/Conclusion	English lecture, reading and group discussion on the effects of new medical technologies. Followed by instructor led discussion on standard presentation structure and a written assignment.
Week 8	Medical Research: Big pharma and how medicine changes our reality Presentation Tip— Use of Voice and Posture: Voice and body language dos and don'ts for English public speaking	English lecture, reading and small group discussions on the implications of large-scale for profit medical research. Followed by instructor led discussion on the important things to remember and do when making a presentation.
Week 9	Health Issues: Diet considerations for life stages Presentation Tip— Use of Slides: Slide making dos and don'ts	English lecture, and group discussion on how people diets change at different times during a person's life. Followed by instructor led discussion on making presentation slides.
Week 10	Mental Health Considerations: Overworking, group and relationship stresses Presentation Tip— Group Work: Making sure group members pull their weigh and the presentation slides are together	English lecture, reading and group discussion on stresses caused by relationship at work. Followed by instructor led discussion on how to make sure all members of a group presentation work well together and a written assignment for group presentation.
Week 11	Technology in Our Blood: Technology changes Uber/Lyft, Yelp/Square, Meet up Presentation Tip— Final Slide Editing: Run through checklist of questions to ask on the final edit	English lecture, reading and small group discussions on new technologies creating the sharing society. Followed by instructor led discussion and advice on editing a presentation.
Week 12	Youth Trend Presentations: Presentations and discussions of youth trend themes	Student Group Presentations on youth trends incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures followed by question and answer session, and group discussion.
Week 13	Elderly Presentations: Presentations and discussions of elderly trend themes	Student Group Presentations on elderly trends incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures followed by question and answer session, and group discussion.
Week 14	Course Overview Discussions: Discussion of life themes used in the semester	Recap lecture and group discussion of the social and technological themes cover in the semester.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Homework, blog work, some presentation preparation.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some course material via handouts, websites, and class blog.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
75% Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)
25% Short Presentations

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
More pre-discussion work would be useful.

【学生が準備すべき機器他】
paper, writing instrument, smartphone or PC

【その他の重要事項】
Contact
kasmersensei@gmail.com

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションⅣ

ウォルター・カズマー

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will discuss and examine various cultural issues as well as present on related cultural topics.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. Students will be able to examine cultural issues and gain a better understanding of how others see Japan. This course explores English related to contemporary social and cultural topics, and offers a forum for students to make contrasts and comparisons with life in Japan.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will discuss and examine various cultural issues as well as present on related cultural topics. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and written assignment.
Week 2	Describing Your Life: Language activities centering around student life	English reading, pair work exercises, and small group discussions on describing student centered life experiences.
Week 3	Describing Other Lives: Language activities centering around family and acquaintance routines	English reading, pair work exercises, and small group discussions on describing the daily routines and life experiences of other people.
Week 4	Explaining Customs in Your Country: Holidays, national/regional habits	English reading, pair work exercises, and small group discussions focusing on Japanese customs, holidays, and regional or national habits.
Week 5	Explaining Customs in Selected Asian Countries: Holidays, national/regional habits Research habits: Conducting group research— different sharing tips	English reading, pair work exercises, and small group discussions focusing on different Asian customs, holidays, and regional or national habits. Followed by instructor led discussion on how to conduct group research.
Week 6	Explaining Customs in Selected Western European Countries: Holidays, national/regional habits Outlining of presentations: Cluster and formal outlining	English lecture, reading and small group discussions of some Western European holidays and regional habits. Followed by instructor led discussion on ways to outline a presentation.
Week 7	Discussion of Asian and Western National Differences: National holidays, national/regional habits Presentation Tip— Explanation of Structure: Introduction/Body/Conclusion	English lecture, reading and group discussion of difference between Asian and Western holidays and regional habits. Followed by instructor led discussion on standard presentation structure and a written assignment.
Week 8	Discussion of South American Customs in Selected Countries: Discussing cultural difference Presentation Tip— Use of Voice and Posture: Voice and body language dos and don'ts for English public speaking	English lecture, reading and small group discussions on some South American customs. Followed by instructor led discussion on the important things to remember and do and not do when making a presentation.
Week 9	Discussing Food Habits: Diet and how it affects customs Presentation Tip— Use of Slides: Slide making dos and don'ts	English lecture, and group discussion on how customs are affected by people's diets and food supplies. Followed by instructor led discussion on making presentation slides.
Week 10	Habits of Selected Parts of Africa: National holidays, national/regional habits Presentation Tip— Group Work: Making sure group members pull their weight and the presentation slides are together	English lecture, reading and group discussion on some African national holidays and habits. Followed by instructor led discussion on how to make sure all members of a group presentation work well together and a written assignment for group presentations.
Week 11	Examination of Sports by Continent in Selected Countries: Sports comparison by types, number of players Presentation tip— Final Slide Editing: Run through checklist of questions to ask on the final edit	English lecture, reading and small group discussions of sports in some countries and they can differ. Followed by instructor led discussion and advice on editing a presentation.
Week 12	African Presentations with Discussion of Main Themes: Discussion of presentations' themes based on music, art, and traditional public customs What would you do? — Culture clash examples	Student Group Presentations on African cultural theme incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures followed by question and answer session, and group discussion.
Week 13	South American Presentations with Discussion of Main Themes: Discussion of presentations' themes based on music, art, and traditional public customs What are the rules? — Relook at sports, but ones with unusual rules	Student Group Presentations on South American cultural theme incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures followed by question and answer session, and group discussion.

Week 14	Course Overview Discussion of Contrasting Presentation Themes: Discussion of cultural contrasts from country to country and region to region	Recap lecture and group discussion of the cultural and regional themes covered in the semester.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Homework, blog work, some presentation preparation.　The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some course material via handouts, websites, and class blog.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
75% Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)
25% Short Presentations
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
More pre-discussion work.

【学生が準備すべき機器他】
paper, writing instrument, smartphone or PC

【その他の重要事項】
Contact email
kasmersensei@gmail.com

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションⅤ

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Through pair work and group activities, students will converse on such topics as world knowledge, personality traits, animal testing and gun control.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The aim of this application course is to acquaint students with certain social/global topics and for the students to communicate their thoughts on the topics with their peers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
All classes will be student-centered and designed to maximize students' speaking opportunities. Through pair work and group activities, students will learn to converse about such topics as world knowledge, personality traits and travel experiences. Each class period will be divided into five parts: (a) pair work practice of a preassigned conversation, (b) Fact Sheet questions and answers (c) a question-answer session on a specific weekly topic, (d) a news item pair work reading and listening, and (e) a task-based pair work activity. Students' progress in pair work activities will be assessed by short weekly tests. Participation in all speaking exercises is compulsory. Students' attempts to use English to communicate will be regularly monitored in class. 20% of the students' final grade will be based on active class participation. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria.
Week 2	Topic: 'Money & Shopping'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'What personality type are you?' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #1 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Money &Shopping' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #1
Week 3	Topic: 'Single Life'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'Some artists are misunderstood!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #2 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Single Life' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #2
Week 4	Topic: 'Age and Youth'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'History is my best subject!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #3 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Age and Youth' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #3
Week 5	Topic: 'What if…?'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'I'm against animal testing!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #4 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'What if…?' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #4
Week 6	Topic: 'Children'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'I've finally given up smoking!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #5 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Children' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #5
Week 7	Topic: 'Cities'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'The 60s counterculture!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #6 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Cities' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #6
Week 8	Topic: 'University Life'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'After all, it's only a game!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #7 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'University Life' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #7
Week 9	Topic: 'Cellphones'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'Test my knowledge of geography!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #8 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Cellphones' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #8
Week 10	Topic: 'Travel'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'Does capital punishment work?' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #9 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Travel' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #9

Week 11	Topic: 'Teenagers'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'My Cat is Cool!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #10 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Teenagers' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #10
Week 12	Topic: 'Home'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'Staying Fit' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #11 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Home' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #11
Week 13	Topic: 'Time'	Part 1: Pair work Conversation Practice: 'No more cluttered bookshelves!' Part 2: Pair work Question & Answer Session – Fact Sheet: Week #12 Part 3: Small Group Question & Answer Discussion – Topic: 'Time' Part 4: English task-based vocabulary building pair work activity: Word-up Level 3: Set #12
Week 14	Examination/ Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are required to practice all assigned conversations before class so they can be spoken fluently. All questions and answers from the Fact Sheet must be practiced similarly. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
Students are expected to consult grammar texts and dictionaries prior to the weekly conversation and the questions-and-answer session.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
・Final Exam – 30%
・Weekly Conversation/Expression Sheet/Question-Answer tests – 40%
・Class Participation – 20%
・Word-up Tests – 10%
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションVI

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Though Canada is the second largest country geographically in the world, it has a comparatively small population. This disparity makes Canada's size both an asset and its challenge. In the Canadian Life course, we will look at those features that make Canada unique. Study topics will include First Nation/Aboriginal Peoples, Canadian Arts, Multiculturalism and English/French Culture.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The Canadian Life course explores Canadian culture and lifestyle and Canada's development as a nation. Each class period will be divided into four parts: (a) a short lecture introducing the week's topic, (b) Canadian fact sheet questions and answers, (c) a guided topical conversation, and (d) short readings and presentations. This course is designed for students to be actively involved in all in-class activities.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Though Canada is the second largest country in the world geographically, it has a comparatively small population. This disparity makes Canada's size both an asset and its challenge. During the course of the semester, we will look at those features that make Canada unique. Study topics will include First Nation/Aboriginal peoples, Canadian arts, multiculturalism and English/French culture. Each class period will be divided into four parts: (a) a short lecture introducing the week's topic, (b) Canadian fact sheet questions and answers, (c) a guided topical conversation, and (d) short readings and presentations. This course is designed for students to be actively involved in all in-class activities. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria.
Week 2	Canadian Geography	Conversation: 'I'm good at Canadian facts!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #1 Discussion Topic and Presentation
Week 3	Regions of Canada – The Maritimes Slideshow	Conversation: 'I'm a new immigrant to Canada!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #2 Discussion Topic and Presentation
Week 4	Regions of Canada – Quebec/Ontario Slideshow	Conversation: 'The Polar Bear Dip' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #3 Discussion Topic and Presentation
Week 5	Regions of Canada – The Prairies Slideshow	Conversation: 'Canoeing the Nahanni!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #4 Discussion Topic and Presentation
Week 6	Regions of Canada – Western Canada Slideshow	Conversation: 'This weather is amazing!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #5 Discussion Topic and Presentation
Week 7	Canadian Art – The Group of Seven	Conversation: 'Canada's National Sport?' Canada Fact Sheet: Week #6 Discussion Topic and Presentation
Week 8	Canadian Art – Norval Morrisseau	Conversation: 'What's your favourite Canadian city?' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #7 Discussion Topic and Presentation
Week 9	Canadian Music – Celtic Music	Conversation: 'Nova Scotia Bound!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #8 Discussion Topic and Presentation
Week 10	Canadian Music – Leonard Cohen, Buffy Saint-Marie	Conversation: 'Trudeaumania!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #9 Discussion Topic and Presentation
Week 11	First Nations People	Conversation: 'Canadian exports: I need some help!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #10 Discussion Topic and Presentation
Week 12	First Nations People	Skiing Mt. Whistler' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #11 Discussion Topic and Presentation
Week 13	Multiculturalism	Conversation: 'Quebec City Winter Carnival!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #12 Discussion Topic and Presentation
Week 14	Quebec	Conversation: 'Toronto has really changed!' Question &Answer Session – Canada Fact Sheet: Week #13 Discussion Topic and Presentation

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Presentation topics are to be researched outside class. A visual component is required for all presentations. Weekly conversations and Fact Sheet questions and answers are to be studied and practiced before class for fluency. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
References will vary depending on the subject matter of the students' presentations. Research suggestions will be made by the instructor prior to research.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
Students will be graded on their
1. Bi-weekly Presentations – 70%
2. Weekly Quizzes – 30%
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションVII

ANDREW　JONES

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will examine how the great changes happening from around 1400 to 1600 affected Renaissance art, and we will also observe how Renaissance art was a reflection of social and cultural change.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The Renaissance was a historical period that brought profound changes in literature, science, government, and social customs. It is, however, perhaps best remembered for its artistic developments. Starting in Italy in the early 1400s and continuing into the Netherlandish Renaissance of Northern Europe, we will look at specific artists that embody these periods, their broader artistic context, and discuss the social and cultural changes taking place that influenced their work.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Students will select a topic relevant to the lecture theme, and will then research, prepare, and give a presentation on that topic. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	The Italian Renaissance - The Beginnings of the Italian Renaissance: Giotto, Masaccio	English lecture, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	The Italian Renaissance - The High Renaissance: Michelangelo, Leonardo	English lecture, followed by class discussion and question and answer session.
Week 4	Presentation style - Presentation structure, posture, eye contact, gestures	English reading, and class discussion on good presentation style.
Week 5	The Italian Renaissance - Research presentation topic, draft scripts	English reading on potential research topics. Students write presentation scripts.
Week 6	The Italian Renaissance - Edit scripts, presentation practice	Rewriting research presentation, and in class presentation practice.
Week 7	The Italian Renaissance - Student presentations	Students make presentations on specific research topic incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 8	The Netherlandish Renaissance - Netherlandish Renaissance: van Eyck, Bosch	English lecture, followed by class discussion and question and answer session.
Week 9	The Netherlandish Renaissance - Netherlandish Renaissance: Historical context	English lecture, followed by class discussion and question and answer session.
Week 10	Presentation style - Creating effective visuals and presenting them effectively	English reading, and class discussion on effective presentation of visual aids.
Week 11	The Netherlandish Renaissance - Research presentation topic, draft script	English reading on potential research topics. Students write presentation scripts.
Week 12	The Netherlandish Renaissance - Edit scripts, presentation practice	Rewriting research presentation, and in class presentation practice.
Week 13	The Netherlandish Renaissance - Student presentations	First half of the class make presentations on specific research topic incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 14	The Netherlandish Renaissance - Student presentations	Second half of the class make presentations on specific research topic incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
This class will be demanding in terms of time spent on individual out-of-class assignments. Preparing for presentations at home will be vital. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide course material.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
60% Presentations, students will give two presentations during the course (2 x 30%).
20% Course participation, enthusiasm and willingness to speak English in class.
20% Portfolio of notes taken during lectures.
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
After receiving feedback from students, more background information about biblical and mythological characters will be discussed in lectures.

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションⅧ

ＤＡＮＩＥＬ　Ｇ　ＤＵＳＺＡ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse using a variety of communication methods related to presentations and discussions of both Japanese and foreign cultural topics. Students will discuss and present from a selection of topics provided in each class. Following each presentation, there will be a brief lecture and Q&A session. Students will then write a reflection, which will be submitted as homework.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The objective of this course is to discuss, research, present, and report cultural topics of interest at a level for academic writing or presentation. Students will have opportunities to practice and improve these skills in each class. Cultural issues will be drawn predominantly from news and advertising media.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
During each class meeting students will give short lectures related to cultural topics followed by classroom practice of various styles of English discourse. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
第2回	Presentation Introduction: How to format and deliver an academic presentation	Introduction to key vocabulary in presentations: cohesive devices, transition statements, and signposting.
第3回	Traditional Themes: Cultures, Lifestyles, and Kind Acts of Humanity	Presentation on a News Article. Note-taking, Questions & Answers, Group Discussions, and Written Assignment.
第4回	Contemporary Themes: Cultures, Lifestyles, and Kind acts of Humanity	Presentation on a News Article. Note-taking, Questions & Answers, Group Discussions, and Written Assignment.
第5回	Future Themes: Cultures, Lifestyles, and Kind Acts of Humanity	Presentation on a News Article. Note-taking, Questions & Answers, Group Discussions, and Written Assignment.
第6回	Present Theme of Choice	Student skills will be assessed by delivering two presentation summaries in class. The first will be chosen from one of their previous works, and the second will be from a unique set of themes.
第7回	National Festivals and Events (Descriptive)	Students prepare a descriptive presentation of a chosen national event, depending on their nationality, present it to the group, and fill out a reflection of what they have learned from their peers.
第8回	International Festivals and Events (Comparative)	Students prepare a comparative presentation of a favorite national event, depending on their nationality, present it to the group, and fill out a reflection of what they have learned from their peers. This presentation has a research component.
第9回	National and International Customs (Process)	Students prepare a presentation or essay explaining two kinds of processes (i.e., directional and informational). At the end of the class, students reflect and summarize what they learned from their peers.
第10回	Introduction to Debating and Arguing: Traditional Cultural Themes	Students learn a framework for preparing a single-sided argument. A debate topic will be chosen from a list and will prepare their single-sided argument manuscript or presentation.
第11回	Practicing Debate and Argument: Contemporary Cultural Themes	Students use the single-sided argument framework to present or write about a contemporary issue of their choice.
第12回	Introduction to Presenting a Two-sided Argument: Contemporary Global Themes	Students learn a framework for preparing a two-sided argument on a topic related to "Making a Better Future for Humanity." Students will choose their topic (e.g., cultural, economic, political, and environmental) and provide a summary of what they would like to discuss. Students will then develop support for their two-sided argument essay/presentation/speech/poster presentation.
第13回	Delivering a Two-sided Argument	Students will continue developing their two-sided argument by adding opposing evidence from interviews, web searches, AI interactions, and research. Referencing, cohesive devices, and formatting will be discussed. Students will then have one week to complete their artifact for final assessment.
第14回	Comments/ Summaries/ Conclusions	Students will receive detailed feedback and comments regarding their achievements and how to continue to improve their academic communication skills in the future.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Reading and research on assigned topics.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Material will be sourced online or provided in class.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
Weinschenk, S. (2012). 100 things every presenter needs to know about people. New Riders.

【成績評価の方法と基準】
30% Class Participation (Miscellaneous)
30% Written Assignments (Summaries)
40% Presentation(s) (Speech, Presentation, Poster, Essay)
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Not Applicable.

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションIX

ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
備考（履修条件等）：※国際文化学部のみ履修可能。
※「The History of Tourism」と同一の科目です。

その他属性：〈グ〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. All third and fourth-year students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country through their Study Abroad experience, which is an Intercultural Communication Activity sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
In this course, we will first look at the historical development of tourism and its expanding cultural significance. Later participating students will be asked to investigate potential areas and/or sites where tourism is developing or may be developed in the future. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	History of Tourism: World Tourism Day	Brief English lecture on UNWTO. Students take notes, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	History of Tourism: Global Code of Ethics for Tourism	Brief English lecture on UNWTO's Code of Ethics, students take notes, then discuss parts of the code and their practical meaning.
Week 4	History of Tourism: The Development of Mass Tourism	Brief English lecture on the technological and economic changes that made modern mass tourism possible. Students take notes, followed by class discussion, and Q&A session.
Week 5	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourist destinations incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 6	Tourist Markets: Transportation & Infrastructure	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 7	Tourist Markets: Accommodations	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 8	Tourist Markets: Attractions & Activities	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 9	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourism related topics incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 10	New Modes of Tourism: Cruises	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 11	New Modes of Tourism: Thematic Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 12	Business Constraints: The Economics of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 13	Social Considerations: The Environmental and Cultural Impacts of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some course material early in the semester, and participating students will generate more course material as the semester progresses.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)
20% Short Presentations
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】
OHC and PC presentations.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語アプリケーションX

ラスカイル　L.ハウザー

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：英語アプリケーション
旧科目との重複履修：○
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. We will first view successful presenters. Next we will discuss how and what makes their presentations effective. Finally, students will practice and present in class using an internationally acceptable style.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The objective of this particular course is to: 1) teach students the difference between domestic Japanese business presentation practices, and international business presentation style, and 2) prepare students to function effectively in an international business environment.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
The course will employ lecture and practical exercises to build the skills in a variety of situations. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: The Principles of International Presentation The differences between Japanese and International business presentation styles	Brief English lecture and reading on the differences between Japanese and International business presentation styles. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	Presenting with Yourself Confidence: The keys to presenting yourself as a confident professional	Brief English lecture on the main ways a presenter can show professional confidence. Students take notes, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	The Three Critical Questions: The three questions you have to answer BEFORE you do anything else.	Brief English lecture, reading and question and answer session on the three questions a presenter needs to ask before beginning to prepare a presentation. Followed by small group discussions of topics and a written assignment.
Week 4	Creating a Powerful and Persuasive Message: Developing the one point you want your audience to hear and remember	Brief English lecture, reading and question and answer session on what every presenter needs to do: Create a powerful and persuasive message. Followed by small group discussions of the main point for the audience and a written assignment.
Week 5	The Structure of a Presentation: How to build an effective presentation	Brief English lecture on effective presentation structure. Followed by small group discussions and a written assignment on outlining a presentation.
Week 6	Mid-term Presentation Preparation: Students work on their mid-term presentations	Students discuss and edit their presentation drafts with the advice of the instructor.
Week 7	Mid-term Presentations	Individual Student Presentations to the class
Week 8	The Principles of Effective Visual Presentation: How to present visually	Brief English lecture on the principles of making effective visual presentations. Students take notes, followed by class discussion, and question and answer session.
Week 9	Designing PowerPoint 1 - Working with the Software	Reading, question and answer session, and actual practice working with the standard business presentation software PowerPoint.
Week 10	Designing PowerPoint 2 - Text, Color and Composition	Instructor lead discussion, and actual practice working with PowerPoint. Observing both the effective and ineffective use of text, color and composition.
Week 11	Using Logic and Emotion to Persuade: The elements of persuading others	Brief English lecture on the concepts of using logic and emotion to persuade others. Students take notes, followed by class discussion, and written assignment.
Week 12	Group presentation skills	Brief English lecture on the keys to making effective group presentations. Students take notes, followed by class discussion, and written assignment.
Week 13	Developing Your Group Presentation	Students discuss and edit their group presentation drafts with the advice of the instructor.
Week 14	Final Group Presentations: Evaluation and Feedback	Group Student Presentations to the class

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Preparation for student presentations.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
Course materials will be provided by the instructor.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
20% Homework
20% In Class Work
30% Midterm Presentation
30% Final Presentation
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
The course is constantly being improved based on feedback from students. Based on feedback from past students, we will be studying more real-world examples of business presentations.

【学生が準備すべき機器他】
None

【その他の重要事項】
None

LANd100GA（ドイツ語 / German language education 100）

ドイツ語コミュニケーションⅠ

Annette　Gruber

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course aims to develop basic communication skills in German. The focus is on building up vocabulary, grammar, idiomatic phrases, pronunciation, listening and writing skills in order to master simple everyday situations in a German context.

【到達目標】
当講座では、学生一人ひとりがドイツ語で基礎的なコミュニケーションができるようになることを目指す。Basicな言語運用能力の一層の定着を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
想定された日常生活の具体的な場面の中で、実際にドイツ語を使ってみることによって、ドイツ語の基礎知識習得をはかる。
コミュニケーション能力育成という理由から、授業はすべてドイツ語で行われる。授業形態は言語活動、例えばペアワーク、グループワークなどが中心となる。授業での学習が最優先であるが、学習した内容を十分理解するために復習をすることが要求される。何よりも、楽しくドイツ語を学べるよう心掛けたい。
課題の提出およびフィードバックはHOPPIIで行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Einfuehrung	Uebersicht ueber Kursinhalte und Durchfuehrung
2	Im Moebelhaus	Akkusativ
3	Wie findest du den?	Syntax
4	Im Kaufhaus	Nomen im Plural
5	Termine vereinbaren	Idiomatische Phrasen
6	Mit Papa im Supermarkt	Personalpronomen im Dativ
7	Orientierung im Supermarkt	Nomen im Dativ
8	Gespraeche mit Verkaeufern	Idiomatische Phrasen
9	Einen Gast bewirten	Imperativ
10	Berufe: Vor-und Nachteile	Modalverben
11	Mein Arbeitsplatz	Wo? in, bei + Dativ
12	Verabredungen	Uhrzeit
13	Datum, Termine	Zeitangaben
14	Zusammenfassung und Wiederholung	Syntax, Wortschatz, Phrasen

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
You need to prepare for and revise every lesson. There will be assigmnments in the "Arbeitsbuch" and on the Learning Management System (HOPPII) every week. The workload should be up to 2 hours.

【テキスト（教科書）】
- Menschen. Deutsch als Fremdsprache. Kursbuch. A1.2
- Menschen. Deutsch als Fremdsprache. Arbeitsbuch. A1.2

【参考書】
自分にあった辞書、電子辞書でも可

【成績評価の方法と基準】
There will be a test after each chapter, which accounts for 60%.
Attendance, classroom participation and attitude account for 40%.
Always arrive for the lessons on time.

【学生の意見等からの気づき】
学生からの声に真摯に耳を傾ける。授業進度、説明の適切さなど、要望があれば応える。

【Outline (in English)】
In this class you will acquire basic knowledge and understanding of German vocabulary, phrases, sentence structures, grammar and pronunciation as well as communication skills in terms of speaking, listening, reading and writing.
There will be weekly homework based on the Arbeitsbuch as well as on HOPPII. The required study time for preparation and review will be up to one hour.
There will be a test at the end of each unit, which accounts for 60%, active classroom participation and regular attendance are essential and account for 40%. Always make sure to arrive on time.

LANd200GA（ドイツ語 / German language education 200）

ドイツ語コミュニケーションII

Ｓｃｈｍｉｄｔ　Ｕｔｅ

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
受講者が困難なくドイツ語圏で生活をするためと大学生活を送るために、積極的にドイツ語を使う必要があります。授業を通じて「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能を総合的に体得することが目標です。

【到達目標】
受講者は困難なくドイツ語圏で学生生活を送れるようになること
少しでも多く話せるようになること
一つでも多くの単語と表現を覚えること
がこの授業の目標です。
聴解力・読解力・表現力における弱点を補強し、基礎を確実なもの、使えるものとすることを目標にしています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業では基礎文法を含むテキストを用い、ドイツ語圏の日常生活や文化のさまざまな場面に題材を求めた、会話練習、聴きとり練習等に取り組む。口語表現力を重視しますので、必要な分野の語彙を習得、実践的なパートナー練習を通じて、コミュニケーション能力をアップすることをめざしています。
授業ごとに課題を出します。課題に対するフィードバックは授業内でおこないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション Einführung	Sich vorstellen Ich und meine Familie
2	日常生活と大学 Mein Alltag	Zeiten und Termine im Alltag und an der Uni
3	余暇 Freizeit	Veranstaltungen
4	食生活 Ernährung	Lebensmittel einkaufen und Essen im Restaurant
5	買い物 Kaufen, Kaufen	Im Geschäft: Preise und Konsum
6	住居 Wohnen	Eine Wohnung suchen
7	メディア Medien	Breif-Handy-SMS-Mail
8	健康 Gesundheit	Beim　Arzt
9	街の中 Orientierung	In der Stadt
10	場所と方向 Wege	Wegbeschreibungen verstehen
11	天気 Klima und Wetter	Wetterbericht verstehen
12	祝日とお祭り Feiertage und Feste	Feste in Deutschland und der Schweiz kennenlernen, Japanische Feste erklären
13	休暇 Urlaub	Eine Reise planen
14	Eine Region vorstellen	Präsentation

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
受講者は、授業で指示された期限までに宿題を行ってください（提出してもらうこともあります）。予習は特に必要ありませんが、授業で学習した内容の復習は必須です。特に単語は必ず覚えてください。本授業の準備・復習時間は、合わせて1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
コピーを配布します。

【参考書】
なし。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業の積極的な参加（発言）（30％）、提出した宿題（30％）、2回の小テスト（20％））、プレゼンテーション　(20%))

【学生の意見等からの気づき】
文章を書く練習は役に立ったようで、引き続き授業で取り上げたいと思っています。

【Outline (in English)】
In this course, the students will practice German in all four areas of language skills: listening, speaking, reading and writing, so that they can manage their study abroad program without major difficulties. Students will not only improve their communication skills, but they also have the chance to learn about cultural life in German speaking countries.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Students will receive feedback and comments on homework assignments in class activities throughout the term. Your study time will be about one hour for a class.
Grading will be decided based on class participation （30％）、homework（30％）、2 tests（20％）, presentation (20%)

LANd200GA（ドイツ語 / German language education 200）

ドイツ語コミュニケーションIII

Annette　Gruber

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course aims to develop basic communication skills in German. The focus is on building up vocabulary, grammar, idiomatic phrases, pronunciation, listening and writing skills in order to master simple everyday situations in a German context.

【到達目標】
想定された日常生活の具体的な場面の中で、学生一人ひとりが実際にドイツ語を使ってみることによって、ドイツ語のコミュニケーション能力の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
コミュニケーション能力育成という理由から、授業はすべてドイツ語で行われる。授業形態は言語活動、例えばペアワーク、グループワークなどが中心となる。授業での学習が最優先であるが、学習した内容を十分理解するために復習をすることが要求される。何よりも、楽しくドイツ語を学べるよう心掛けたい。
課題の提出およびフィードバックはHOPPIIで行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Einfuehrung	Uebersicht ueber Kursinhalte und Durchfuehrung
2	Terminvereinbarungen	Dialoge in Partnerarbeit
3	Familie und Freunde	Possessivartikel
4	Arbeiten im Haushalt	trennbare Verben
5	Wo? Wohin?	Wechselpraepositionen mit Dativ und Akkusativ
6	Berlin	Wegbeschreibung
7	Ueber Vergangenes sprechen	Perfekt
8	Meine Stadt	Personalpronomen im Akkusativ
9	Um Auskunft bitten/Auskunft geben	Wo-/Ja-Nein-Fragen Idiomatische Phrasen Training muendlicher Ausdruck
10	Um etwas bitten/auf Bitten reagieren	Imperativ Idiomatische Phrasen
11	Ansagen verstehen	Hoerverstehen (Alltagssituationen)
12	E-Mails schreiben	Training schriftlicher Ausdruck
13	Simulation Pruefung Start Deutsch 1	Leseverstehen, Hoerverstehen, muendlicher Ausdruck, schriftlicher Ausdruck
14	Wiederholung und Zusammenfassung	kommunikative Spiele

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
You need to prepare for and revise every lesson. There will be assigmnments in the "Arbeitsbuch" and on the Learning Management System (HOPPII) every week. The standard time for preparation and review of this class is 1 hour in total.

【テキスト（教科書）】
Tangram aktuell 1. Lektion 5-8. Kursbuch + Arbeitsbuch

【参考書】
自分にあった辞書、電子辞書でも可

【成績評価の方法と基準】
There wil a test after each chapter, which accounts for 60%.
Attendance, classroom participation and attitude account for 40%.
Always make sure to arrive for your lessons on time.

【学生の意見等からの気づき】
学生からの声に真摯に耳を傾ける。授業進度、説明の適切さなど、学生から要望があれば応える。

【Outline (in English)】
In this class you will acquire basic knowledge and understanding of German vocabulary, phrases, sentence structures, grammar and pronunciation as well as communication skills in terms of speaking, listening, reading and writing.
In this class you will acquire basic knowledge and understanding of German vocabulary, phrases, sentence structures, grammar and pronunciation as well as communication skills in terms of speaking, listening, reading and writing.
There will be weekly homework based on the Arbeitsbuch as well as on HOPPII. The required study time for preparation and review will be up to one hour.
There will be a test at the end of each unit, which accounts for 60%, active classroom participation and regular attendance are essential and account for 40%. Always make sure to arrive on time.

LANd300GA（ドイツ語 / German language education 300）

ドイツ語アプリケーション

林　志津江

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
これまでのドイツ語学習やSAプログラム・派遣留学などを通じて獲得したドイツ語運用能力を維持向上させるためのトレーニングを行います。ドイツ語の読む、書く・話す楽しみをともに味わって参りましょう。

【到達目標】
1）A2 B1レベルのドイツ語テクストを辞典類を用いて読解し、その表現を用いて自らもドイツ語で叙述・表現することができる。
2）ドイツ語で読んだテクストを関連付け、ドイツ語圏の生活、文化、社会など各種トピックについての理解を深めることができる。
3）特定のテーマについてドイツ語で意見を述べたり聞き取ったり、平易なレベルの議論を行うことができる。
4）まとまった分量の作文をドイツ語で書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・各回のテーマはドイツ語圏それぞれに共通する話題、異なる話題のバリエーションです。各参加者のドイツ語学習経験、ドイツ語圏滞在体験に配慮しつつ、テクストの理解を深めていきます。
・各回、指定されたドイツ語テクストを前もって読んでおきます（予習）
・授業は各回、テクストの読解分析が中心です。テクストの内容と重要概念（語彙）を確認しつつ、読解で確認した構文を使った作文練習をします。
・ペアワーク、グループワークと並行して、学期中に各参加者はプレゼンテーションを行います。
・プレゼンテーション課題の詳細と担当割り振りは授業第１回目に説明・確認します。
・LMSとして、Google Classroomを使用します。連絡手段として、学期を通じ法政Gメールをチェックしてください。
・授業内で行われたアウトプットに対しては授業の場でコメントします。提出物等のフィードバックは適宜、全体と個別に向けて行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の進め方などを確認します。
2	Moderne Geschichte: Vom Reich zur Republik	ドイツ近代の歴史：ドイツ帝国の成立 ー 激動の19世紀、そして第１次世界大戦
3	Der Anfang vom Ende - Die Weimarer Republik	ヴァイマール共和国 ー 黄金の20年代・終わりの始まり
4	Terror und Vernichtung - Der Dritte Reich	第３帝国下のドイツ ー 恐怖政治と絶滅政策
5	Politik und Parteien ／プレゼンテーション（１）	選挙には行きますか？
6	Krisen und Konflikte（I）	ドイツにはどんな社会問題が？？！
7	Krisen und Konflikte（II）プレゼンテーション（２）	ドイツにはどんな社会問題が？？！
8	Beginn der Moderne: Vom Mittelalter zur Romantik	近代の始まり ー 中世からロマン派の時代
9	Bildung als Lebenssinn／プレゼンテーション（３）	人生の意義としての教養・ウィーンと音楽
10	Das Paradigma der Moderne - Bis heute	学問と表現の自由 ー 科学の発展と表現主義、バウハウス
11	Kunst und Wissenschaft（I）プレゼンテーション（４）	「芸術」の様式とは？！
12	Kunst und Wissenschaft（II）	「芸術」の様式とは？！
13	Im Nordwesten von Deutschland(I) プレゼンテーション（５）	ドイツ北西部とはどんなところ？
14	Im Nordwesten von Deutschland(II)	リューネブルクってどんなところ？

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は各１時間以上を標準とします。
・授業ごと所定の予習・復習課題を行い提出します。授業時間外の課題（プレゼンテーションの分担）については別途指示します。
・インターネットやSNS等も使ってドイツ語圏のメディアに積極的にアクセスしてみましょう。新聞（日刊紙）などのニュース記事にチャレンジできればなお良しです。

【テキスト（教科書）】
„ Dreimal Deutsch“（Klett）（2025年度「ドイツ語７」使用教科書）
ISBN: 978-3-12-675237-4

【参考書】
中島悠爾ほか著『必携ドイツ文法総まとめ』（白水社、2003年）
その他は適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な参加と貢献：50%、プレゼンテーションおよび提出課題：50％を合わせ、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生からは逐次ヒアリングを行い、相互の意志の疎通に努めます。

【学生が準備すべき機器他】
・独和辞典および１〜２年次で使用したドイツ語文法の教科書は必携です。

【その他の重要事項】
・指定教科書をお持ちでない方については、科目担当者が販売します。履修登録・初回授業参加時にお知らせください。
・本科目はドイツ語圏SAプログラム参加学生や派遣留学を目指す方、学部専門科目に役立つドイツ語読解能力を身に付けたい方にフィットしています。目安としては４セメスター以上のドイツ語学習経験があることですが、学習進度には個人差もあります。迷う場合はぜひ担当者にご相談ください。
・授業内容（テーマ）と順序等はクラスの状況によって変更されることがあります。

・受講者には「ドイツ語技能検定試験（公益財団法人ドイツ語学文学振興会主催）」や「ドイツ政府公認ドイツ語能力検定試験（Goethe Zertifikat）」「オーストリア政府公認ドイツ語能力検定試験（ÖSD）」の受検を推奨します。以上の受験結果は2026年7月25日頃（予定）までに担当者に通知された場合のみ、上記「成績評価の方法と基準」の「平常点」に加算します。
・質問・相談などは担当者宛にメールで、あるいは授業の前後にも受け付けます。

【Outline (in English)】
This course is suitable for students with basic knowledge of the German language who wish to improve their ability to communicate in German: Target groups are previous participants of the SA-Program of Faculty of Intercultural Communication as well as the Hosei University Study Abroad Program or students with experiences in any German speaking societies. In the course, we combine German as a foreign language with cultural, historical and sociological issues, thus opening up interesting new perspectives.
【Learning Objectives】
・To develop an understanding of a wide range of topics relating to life, culture and society in German-speaking countries and to express and explain these in German.
・To be able to express their own opinions and take part in discussions on abstract topics in German.
・To be able to write texts of a certain length in German.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】
・The standard preparation and revision time for this course is at least one hour each.
・There are prescribed preparation and review tasks.
・Assignments outside of class time will be given on a case-by-case basis.
・In addition to the above, please read the newspaper (daily) or listen to the news as much as possible. It is advisable to make effective use of the internet and social networking sites for German-speaking media.
【Grading criteria】
The course will be judged on the basis of a combination of 50% of some ordinary marks (active participation and contribution to the class) and 50% of the others (presentations, submitted assignments).
On the basis of this grading system, students who have achieved at least 60% of the objectives of this course will be considered to have passed the course.

LANd300GA（ドイツ語 / German language education 300）

ドイツ語アプリケーション

小川　敦

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Gymnasium等、ドイツ語圏の中等教育（中学校・高校）で用いられる地理や歴史、公民の教科書を、辞書や文法書を用いながらじっくり読むことでこれまでに身につけたドイツ語力をさらに高めます。

【到達目標】
語彙や文法の複雑なドイツ語テキストにじっくり向き合うことでレベルの高いドイツ語を読めるようになる。ドイツ語圏に生きる人々の意識を知る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
内容を吟味しながらテクストを読んでいきます。また、学生と教員、学生同士で解釈に違いが出た場合はじっくり議論し解決していきます。
試験の返却の際に間違えやすいポイントを解説します。
受講生の関心や授業の進度に応じて、内容をある程度柔軟に修正・変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	教材や授業の進め方の確認
2	ドイツ語圏の教科書を読む・その１	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。関係代名詞に注意して読みます。
3	ドイツ語圏の教科書を読む・その２	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。前回に引き続き関係代名詞に注意して読みます。
4	ドイツ語圏の教科書を読む・その３	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。書き言葉としての受動態に注意して読みます。
5	ドイツ語圏の教科書を読む・その４	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。前回に引き続き書き言葉としての受動態に注意して読みます。
6	ドイツ語圏の教科書を読む・その５	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。zu不定詞句の使い方に注意して読みます。
7	ドイツ語圏の教科書を読む・その６	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。前回に引き続いてzu不定詞句の使い方に注意して読みます。
8	中間のまとめ、および読解の続き	前半で扱ってきたことのまとめを行います。
9	ドイツ語圏の教科書を読む・その７	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。属格に注意して読みます。
10	ドイツ語圏の教科書を読む・その８	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。前回に続いて属格に注意して読みます。
11	ドイツ語圏の教科書を読む・その９	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。英語にはない修飾語句に注意して読みます。
12	ドイツ語圏の教科書を読む・その１０	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。前回に引き続いて英語にはない修飾語句に注意して読みます。
13	ドイツ語圏の教科書を読む・その１１	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。ざっと読んで内容を把握する練習をします。
14	授業の最終的なまとめ	学期後半で学んだことを中心に、授業で扱ったまとめを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の授業の教材や資料は、学習支援システムで配布します。予習・復習ともに重要です。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は用いません。地理、歴史、政治をテーマとした教材をこちらで用意します。
辞書（独和辞典）は必須です。紙媒体でもアプリ（有料のものに限る）でも構いません。

【参考書】
・1回生で用いたドイツ語文法を扱った教科書
・中島悠爾・朝倉巧・平尾浩三『ドイツ文法総まとめ』白水社、2003年

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な参加30%、中間試験30%、期末試験40%とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者が自ら発言しやすい授業運営とするように努めています。

【学生が準備すべき機器他】
教材は基本的に電子データでの配布となります。授業にはスマートフォンではなくタブレットまたはPCを持参してください。

【その他の重要事項】
内容は決して難しいものではありませんし、扱うテキストの性格上、機械翻訳を用いればほとんどの日本語訳はできると思います。授業ではドイツ語の文そのものを文法的に解析する力や多様な語彙力を身につけるようにしてください。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Students further develop their German language skills through close reading of geography and history textbooks used in secondary education in German-speaking countries, using dictionaries and grammar books.
【到達目標（Learning Objectives）】
Students learn to read German texts with complex vocabulary and grammar at a high level. Students will also gain an insight into the attitudes of people living in German-speaking countries.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
Active participation 30%
Midterm examination 30%
Final examination 40%

LANd300GA（ドイツ語 / German language education 300）

ドイツ語アプリケーション

Ｓｃｈｍｉｄｔ　Ｕｔｅ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Alltagskultur im deutschen Sprachraum
ドイツ語圏の日常文化 ― 日本と比べてのぞいてみよう
この授業では、日常のちょっとした話題から最新の時事問題まで、ドイツ語圏の多彩なテーマを取り上げます。受講者はそれらを理解するだけでなく、自分自身の経験や日本の社会と比較しながら考え、意見を交換していきます。
簡単なディスカッションにも挑戦し、「違い」を楽しみつつ、物事を批判的に捉える力や、自分の生活文化をあらためて見つめ直す視点を養います。
また、本授業は Goethe-Institut などのドイツ語検定試験の準備としても役立つ内容です

【到達目標】
1）中級以上のテキストを理解できる。
2）様々な領域の語彙を習得する。
3）基本的な文法事項を復習し、中級以上の文法事項を習得する。
4）幅広いテーマについて、明確に意見を述べ、時事的な問題への見解を表明し、
　長所、短所を挙げることができる。
5）簡単なコメントやショートエッセイが書ける。
6）簡単なプレゼンテーションを作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
中級レベルの教科書のテキスト、新聞や雑誌の記事、音楽、テレビなどを通じて、なるべく自然なドイツ語に触れる事によって読む・聞く・書く・話す技能を磨きます。口語表現力を重視しますので、ドイツ語圏の日常生活と時事問題について情報交換し、日本と比較しながら、自分の意見を述べる練習と簡単なディスカッションの試みもします。課題等の提出・フィードバックは授業中または「学習支援システム」を通じて行う予定です。間違いを恐れずに楽しく発言をしてください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 自己紹介	Einstufung Selbstvorstellung
第2回	Stadt oder Land	Vorteile und Nachteile vergleichen und vorstellen
第3回	Männer und Frauen	Über Klischees sprechen Statistiken und Grafiken beschreiben
第4回	Hast du Netz？	Mediensprache
第5回	Tiere	Die Tierliebe der Deutschen Adjektive Wiederholung
第6回	Reparieren und Selbermachen	Etwas reklamieren Passiv Wiederholung
第7回	Musik	Festivalsommer Deutschsprachige Hits Liedtexte verstehen
第8回	Filme	Mein Lieblingsfilm Filme vorstellen
第9回	Regional - global	Eine Region vorstellen
第10回	Lebensträume	Glück als Schulfach
第11回	Klima und Umwelt	Nachrichten verstehen Widersprüche, Bedingungen und Konsequenzen ausdrücken
第12回	Ein Blick in die Zukunft	Prognosen
第13回	Wie peinlich!	Knigge interkulturell
第14回	Präsentation	Vortrag und Evaluation

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の復習時間は、合わせて1時間を標準とします。
予習はテキストを事前に読むと、授業で学習した内容の復習は必須です。特に単語は必ず覚えてください。

【テキスト（教科書）】
教材は学習支援システムで配布します。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
平常点 (授業での発言（30％)、宿題提出（30％)、プレゼンテーション　(40%)）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
「授業計画」は、授業の進度により変更する可能性があります。

【Outline (in English)】
In this course, we will explore a wide range of topics related to the German-speaking world, from familiar aspects of everyday life to current social issues. Students will not only work to understand these topics, but also compare them with their own experiences and with contemporary Japanese society, and exchange opinions on each theme.
We will also try out simple discussions, fostering a critical approach to social issues as well as encouraging students to reflect on their own everyday culture.
This course will also be useful as preparation for German language proficiency examinations, such as those offered by the Goethe-Institut.
Grading will be decided based on class participation（30 %)、homework (30 %）and presentation (40%)

LANd300GA（ドイツ語 / German language education 300）

【2026年度休講】ドイツ語アプリケーション

小川　敦

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ドイツ語で書かれた言語社会学（広く言語と社会、教育と社会、多言語主義等）に関する大学生向けのテキストを読みます。ドイツ語のテクストを通じて当該分野の理論的背景を学びます。

【到達目標】
語彙や文法の複雑なドイツ語テキストにじっくり向き合うことでレベルの高いドイツ語を読めるようになる。高等教育レベルの学術的な文を読めるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
グループまたは個人で一文ずつ文を解析し、内容を吟味しながらテクストを読んでいきます。また、学生と教員、学生同士で解釈に違いが出た場合はじっくり議論し解決していきます。
試験の返却の際に間違えやすいポイントを解説します。
受講生の関心や授業の進度に応じて、内容をある程度柔軟に修正・変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	教材や授業の進め方の確認
2	多言語主義・その１	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
3	多言語主義・その２	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
4	多言語主義・その３	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
5	教育と格差・その１	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
6	教育と格差・その２	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
7	教育と格差・その３	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
8	中間のまとめ、および読解の続き	前半で扱ってきたことのまとめを行います。
9	言語教育・その１	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
10	言語教育・その２	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
11	移民社会と言語・その１	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
12	移民社会と言語・その２	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
13	移民社会と言語・その３	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。
14	授業の最終的なまとめ	学期後半で学んだことを中心に、授業で扱ったまとめを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の授業の教材や資料は、学習支援システムで配布します。適宜予習してください。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は用いません。当該テーマの教材をこちらで用意します。
辞書（独和辞典）は必須です。紙媒体でもアプリでも構いません。オンラインの無料のものはまだ使い物になりませんので有料のものを用意してください。

【参考書】
・1回生で用いたドイツ語文法を扱った教科書
・中島悠爾・朝倉巧・平尾浩三『ドイツ文法総まとめ』白水社、2003年

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な参加40％、中間試験30％、期末試験30％とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者が自ら発言しやすい授業運営とするように努めています。

【学生が準備すべき機器他】
教材は基本的に電子データでの配布となります。授業にはスマートフォンではなくタブレットまたはPCを持参してください。

【その他の重要事項】
扱うテキストの性格上、機械翻訳を用いればほとんどの日本語訳はできてしまうと思いますが、授業ではドイツ語の文そのものを文法的に解析する力や多様な語彙力を身につけ、表面的な翻訳にとどまらず、内容を理解することに力を注いでください。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Through close reading of German-language texts on the sociology of language, students not only refine their German proficiency but also gain a deeper understanding of the field's theories and their background through the German language.
【到達目標（Learning Objectives）】
Close reading of German texts with complex vocabulary and grammar enables students to comprehend academic texts at the higher education level.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
Active participation 40%
Midterm examination 30%
Final examination 30%

LANf100GA（フランス語 / French language education 100）

フランス語コミュニケーションⅠ

カレンス　フィリップ

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
フランス語のコミュニケーション力を発展させるクラス。フランス語会話を日常生活の中で使えるように土台をつくります。聞く、読む、話す、書くの四つの能力をまんべんなく鍛え、確実に学習事項を身につけられるように構成されているプログラムです。表現と、関連する文法の機能を体系的に理解する練習を行い、学習のごく早い段階からフランス語のコミュニケーションを可能にし、学習のモチベーションを与えたいと思います。

【到達目標】
The goal of this course is the development of a communication skill in French at a basic level. The students will learn basic knowledge necessary to speak French. At the end of the course, the students are expected to do the following:
1.Improve comprehension and pronunciation in French,
2.Use basic grammar and vocabulary for oral communication,
3.Communicate in French about simple topics
4.Know more about French culture.
Students will receive feedback and comments on homework assignments in class activities throughout the term.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
If the Method(s) is changed, we will announce the details of any changes.)
この授業は「フランス語6とセットの科目です。担当する2人のネイティブ教員はともに同じテキストを使います。日常生活のテーマを通して、フランス語の会話力を養います。発音の聴き取り、繰り返し、質疑応答などのさまざまな練習を通じてフランス語のコミュニケーション力を発展させます。"遠隔授業の実施に伴う、授業計画や成績評価基準の変更については、学習支援システム上で通知する".
評価：中間・期末テスト:６０％　ミニテスト：20％　課題：10％　参加・積極性；10％
課題等に対するフィードバックは授業内でおこないます.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Introduction	授業の紹介
	L12: Révisions	12課
	Les goûts	復習
	aimer + noms	好み
2	L13	13課
	Activités préférées	好きな行為
	aimer + verbes	
3	L13	13課
	Apprécier	評価する
	Matières	科目
	Appreciation des profs	好きな先生
4	L14	14課
	Activités	活動
	études	する　プレーする
	faire / jouer	スポーツ
	Sport	楽器
	Instruments de musique	ケーム
	Jeux	
5	L14	14課
	Activités (suite)	活動　　趣味
	Etre membre de	クラブなどのメンバーです
	Enquête	アンケート
6	L15	15課
	Nombres de 0 a 60.	数字（0から60まで）
	L'heure	時間の表現
7	Révisions	復習
	Examen de mi-trimestre	中間テスト
8	L15	15課
	Activités quotidiennes	日常行為
	Emploi du temps	時間割
	Conjugaison au présent	現在形の活用
9	L15	15課
	Parler du quotidien	日常生活について話す
	verbes pronominaux	代名動詞
10	L16	16課
	Projets	予定
	Intentions	計画
	Futur proche	近接未来
11	L16	16課
	Parler du week-end	週末について話す
	Projets	予定
12	L17	17課
	Fréquence de ses actions	行為の頻度
	Pronoms	代名詞
13	Révisions	期末テスト
	Test de fin de semestre	
14	Correction du test	テスト返却
	Culture française	フランス文化

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回ミニテストを行い、課題（宿題）も出すので、よく復習してください。
本授業の宿題・復習時間は、合わせて1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書名：『Moi, je... コミュニケーションA1』
発行所：アルマ出版
著者：Bruno Vannieuwenhuyse, 他
ISBN: 9784905343332

【参考書】
電子辞書、紙の辞書どちらでも良いですが、
手元に用意しておくと便利です。授業の予習・復習にぜひ活用してください。

【成績評価の方法と基準】
毎回の授業での主体的な取り組み（予習・復習ができているかを含む）総合的に評価します。結果は次のように割り当てられます：
1. 中間テスト・期末試験: 60 %
2. ミニテスト：20%
3. 課題：10%
4. 積極性・平常点：10 %

【学生の意見等からの気づき】
冠詞や前置詞などをよりわかりやすく説明し、初歩の段階から苦手意識を持たず、
楽しんで学習できるよう工夫をしたい。

【Outline (in English)】
This course is a conversation class of level A2 with the objective to develop ability to use French in many situations. We will train the four competences as comprehension, reading, speaking and writing but in class, we will emphasize on oral communication.
This course is the first step as part of the program which prepares the students for their study trip and stay in Angers (France).
Students will be expected to have complete the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than one hour for a class.
Your overall grade in the class will be decided on the following:
Mid-term and Term end examinations: 60 %, Minitests : 20% Assignments: 10 %,
and in class contribution 10 %.

LANf200GA（フランス語 / French language education 200）

フランス語コミュニケーションⅡ

大中　一彌

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この科目「フランス語コミュニケーションⅡ」と留学のかかわりを紹介する動画です　https://x.gd/Fca6K　（約７分３５秒）
●スタディ・アブロード（ＳＡ）留学に出発する前の３セメスターめ、つまり最後の学期の授業です。
●ＳＡ留学とあわせると、あなたは最低でもフランス語を２年間みっちり勉強することになります。
●その一方で、あなたは、フランス語学習の、おおよその全体像（ここまでやればひととおり終えたといえる地点）をつかんだといえるでしょうか。
●この授業では、発音をはじめとするフランス語コミュニケーションのスキル向上を図りますが、同時に、帰国後もみすえて、フランス語学習の、おおよその全体像を示すことをも目指します。

【到達目標】
●目標１
2025年と2026年に買った２冊の教科書、すなわち
（ア）『文法と文化で学ぶ基礎フランス語』朝日出版社、2023年
（イ）『Moi, je コミュニケーション A2』アルマ出版、2025年（改訂版）
を学び、他の人にこれらの教科書の内容を部分的に教えられるようになっている。
●目標２
ＳＡフランスを有意義な留学とするための心構えができている
※次のリンク先に参考資料が置いてあります（Wordファイル）https://x.gd/6ovQw

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
●1. ４名の教員によるチームティーチングです。文法事項の説明は主に日本人教員が行ないます。また会話の練習はネイティブ教員２名が行ないます。
●2. この科目「フランス語コミュニケーションⅡ」では、この授業では、フォネティックの知識にもとづく音声面でのproduction（実際にある程度正確な発音で話したり読んだりできるか）と、automatisme（基本的な表現が自然にでてくるようにすること）を重視します。
●3. この科目「フランス語コミュニケーションⅡ」は、フランス語の文法学習全体の見通しを与えます。今はまだ全てを使いこなすことはできなくても「何を使いこなせるようになれば、できるようになったといえるのか？」という問いにたいする答えをもつことで、２年秋のＳＡ留学において取り組むべき課題を、あなたのなかではっきりとさせていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	2026年4月7日 a)アルファベを発音してください b)つづり字記号のついた文字の名前をいってください c)数字のつづりをいってください d)疑問形容詞 quel をつかった文をしゃべってください e)être 動詞＋属詞 **attribut** の構文をつかってしゃべってください	a)教科書（ア）1ページ b)教科書（ア）１ページ、教科書（イ）8ページ c)教科書（ア）76ページ、教科書（イ）9ページ d)教科書（ア）29&31ページ、教科書（イ）8&52ページ e)教科書（ア）5-6ページ
2	2026年4月14日 a) つづり字と母音 b)Qu'est-ce que...? をつかってしゃべってください c)疑問代名詞 d)複合過去 e)近接過去	a)教科書（ア）1〜3ページ ※用意されたGoogle Siteでフランス語の母音に関する予習をしてくる。 b)教科書（ア）6-7ページ、教科書（イ）16-17, 20-21ページ c)教科書（ア）37ページ　教科書（イ）68-69ページ d)教科書（ア）40-43ページ e)教科書（ア）24ページ
3	2026年4月21日 a)つづり字と子音 b)複合過去と半過去 c)代名動詞　目的補語 **Complément d'objet** とは d)代名詞としての le, la, les （補語人称代名詞）	a)教科書（ア）2〜3ページ b)教科書（イ）45＆47＆61＆65＆**71**ページ c)教科書（ア）52〜59ページ d)教科書（ア）32〜33ページ、教科書（イ）40-43ページ
4	2026年5月12日 a)複合過去と半過去 b)大過去 c)単文と複文の違いを説明してください、従位接続詞の« **que** » がふくまれる文をしゃべってください。 d)間接話法と直接話法 e)時に関する表現	a)教科書（ア）60-63ページ b)教科書（イ）66＆67ページ c)教科書（ア）64ページ、教科書（イ）81ページ d)教科書（ア）64&68ページ e)教科書（ア）80ページ
5	2026年5月19日 a)近接未来 b)単純未来 c)前未来 d)疑問副詞（**quand, où, comment, pourquoi, combien**）といっしょに未来時制の動詞をつかってしゃべってください e)時に関する表現	a)教科書（ア）24－27ページ、教科書（イ）68-71ページ b)教科書（ア）61-63ページ c)教科書（ア）64ページ d)教科書（ア）13ページ e)教科書（ア）80ページ

6	2026年5月26日 a)関係代名詞（従位接続詞の **que** や疑問副詞 **quand, où, comment, pourquoi, combien** と区別する） b)英語やフランス語を使ってフランス語の単語を尋ねてください。 c)形容詞の位置と性・数一致	a)教科書（ア）44-45, 65-67ページ、教科書（イ）17ページ b)教科書（イ）18ページ c)教科書（ア）20-23ページ、78－79ページ、教科書（イ）19ページ
7	2026年6月2日 a)条件法現在（半過去と単純未来の知識をいかす；日本語でもフランス語でも**敬語**がつかえる大人になろう） b)**命令法** ※ていねいなお願いとぶっきらぼうな命令の違い	a)教科書（ア）68-71ページ　教科書（イ）84-85, 92-95ページ b)教科書（ア）12-14ページ
8	2026年6月9日 a)条件法過去 ※単純時制と複合時制のちがいを説明してください。 b)Siで始まる節とジェロンディフ	a)教科書（ア）40-43, 68-71,**83**ページ b)教科書（ア）48-51ページ、教科書（イ）100-103ページ
9	2026年6月16日 a)接続法現在 b)形式上の主語 il ではじまる**非人称構文**	a)教科書（ア）72-75ページ、教科書（イ）81&85ページ b)教科書（ア）32-35＆82ページ
10	2026年6月23日 a)接続法過去と接続法の用法 b)形容詞・副詞の比較級・**最上級**	a)教科書（ア）72-75ページ、教科書（イ）81&85ページ b)教科書（ア）28&30ページ
11	2026年6月30日 授業内口頭小テスト①(a&b) ※理解度チェック①	a)出席者に対して、**教科書（ア）76-80**ページに掲載されている表現をランダムに指定→その場で**発音**できるかを記録します。評価は０点「(ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「(ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 b)出席者に対して、**教科書（イ）8-23**ページに掲載されている表現をランダムに指定→その場で発音できるかを記録します。評価は０点「(ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「(ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 ※宿題として、授業内口頭小テスト①に対応する教科書の範囲に関し、筆記や聞き取りの選択問題を中心とする**理解度チェック**を出題する予定です。
12	2026年7月07日 授業内口頭小テスト②(a&b) ※理解度チェック②	a)出席者に対して、**教科書（ア）4-23**ページに掲載されている表現をランダムに指定→その場で**発音**できるかを記録します。評価は０点「(ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「(ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 b)出席者に対して、**教科書（イ）24-39**ページに掲載されている表現をランダムに指定→その場で発音できるかを記録します。評価は０点「(ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「(ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 ※宿題として、授業内口頭小テスト②に対応する教科書の範囲に関し、筆記や聞き取りの選択問題を中心とする**理解度チェック**を出題する予定です。
13	2026年7月14日 授業内口頭小テスト③(a&b) ※理解度チェック③	a)出席者に対して、**教科書（ア）24-43**ページに掲載されている表現をランダムに指定→その場で**発音**できるかを記録します。評価は０点「(ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「(ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 b)出席者に対して、**教科書（イ）40-59**ページに掲載されている表現をランダムに指定→その場で発音できるかを記録します。評価は０点「(ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「(ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 ※宿題として、授業内口頭小テスト③に対応する教科書の範囲に関し、筆記や聞き取りの選択問題を中心とする**理解度チェック**を出題する予定です。

14	2026年7月21日 授業内口頭小テスト④(a&b) ※理解度チェック④	a)出席者に対して、**教科書（ア）44-63ページ**に掲載されている表現をランダムに指定→その場で**発音**できるかを記録します。評価は０点「（ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「（ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 b)出席者に対して、**教科書（イ）60-79ページ**に掲載されている表現をランダムに指定→その場で発音できるかを記録します。評価は０点「（ほぼ）まったく答えられない、聞こえない」１点「部分的には答えられる、聞き取れる」２点「（ほぼ）完全に答えられる、聞き取れる」の３段階で行います。 ※宿題として、授業内口頭小テスト④に対応する教科書の範囲に関し、筆記や聞き取りの選択問題を中心とする**理解度チェック**を出題する予定です。 ※※宿題としてではなく、意欲ある人が先に進むためのトレーニングとして、教科書の残りの範囲に関し、筆記や聞き取りの選択問題を中心とする理解度チェックを出題する可能性があります。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1) ＳＡ留学であなたがどれだけ進歩できるかは、かなりの部分、ＳＡ留学に出発する９月より前の段階における取り組みに左右されます。日本でもできるフランス語に関する取り組みを、アンジェに行ってから始めるのではもったいないです。単語帳づくりやシャドーイング、検定試験の受検は日本でもできます。ＳＡ留学で大きく成長するためにも、日本でできることは日本で済ませましょう。
2) 本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。この基準にしたがうなら、あなたがこの演習の予習や復習にかける時間は、１日あたり35分程度以上となります。

【テキスト（教科書）】
（ア）近江屋志穂・竹本研史『文法と文化で学ぶ基礎フランス語』朝日出版社、2025年（第３刷）
（イ）シモン・セルヴラン他『Moi, je コミュニケーション A2』アルマ出版、2025年（改訂版）。

【参考書】
仏和辞典。小学館ロベール仏和大辞典が法政大学図書館のオンラインデータベースに入っています。« JapanKnowledge »　からご覧になってください。ただし、学外からの閲覧にはVPN接続が必要です。

【成績評価の方法と基準】
1.平常点 30%
2.授業内の口頭による小テスト 35%
3.理解度チェック（Googleフォーム等を使い、授業時間外で実施）35%
4.その他（運営協力や「わたしとフランス語のつながり」の提出、外部語学検定試験の受験や合格）
※4.は1.～3.の合計100%の枠外で、5～10%にあたる点数を加点する。
※※なんらかの障がいや疾患、メンタルな面を含むハンディキャップなど、諸事情により聴解や読解、発話や文書作成などの活動に参加することが困難な方は、法政大学障がい学生支援室に「就学上の配慮」を求めてください。「就学上の配慮」が認められた場合は、障がい学生支援室から担当教員に連絡が来ますので、法政大学の環境で可能な範囲の配慮をさせていただきます。
※※※本科目が開講されている時期に「学校保健安全法に定める感染症」に感染した方は、国際文化学部の事務窓口に連絡し「感染症等に係る授業欠席等配慮願」を受け取ってください。そして、学部が発行する「配慮願」を担当教員にご提出ください。学生側の都合による欠席とは異なる、感染拡大防止のための出席停止として扱います。

【学生の意見等からの気づき】
・週４コマもフランス語を勉強しており、身につけたいとは思う・・・が、英語に比べ、文法上の性や動詞活用が複雑で、敬遠したくなるという方もいるようです。
・この科目「フランス語コミュニケーションⅡ」では、学習者のモチベーションを重視しています。はっきりとした目標を作っていくよう促すとともに、各自が希望する学びにアクセスできる場となるよう心掛けています。

【学生が準備すべき機器他】
資料の共有や課題の提出などに、Google ClassroomやWebClass、Boxを使いますので、タブレットやノートパソコンのような情報端末が必要です。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。問い合わせ先は次のリンク先をご覧ください（Wordファイル）。　https://x.gd/6ovQw
・あなたには、あなたも気づいていない潜在的な可能性があるかもしれません。派遣留学や大学院進学、海外や外資系企業・団体への就職をぜひ一度は検討してください。
・語学学校に留学し、インテンシブなコースに登録すると、週10-20時間は授業があるのが普通です。週４コマ×100分は多くみえますが、じっさいには、初めて習った外国語を早い時期に使えるようにするには、時間が足りません。アンジェに行ってから、リスニング力や語彙（ごい）の不足をできるだけ感じないよう、必修の４コマ以外にも、フランス語関連のILAC選択外国語科目や総合科目を履修してください。
・下記のリンク先に、ILAC選択外国語科目のうち、春学期科目の「時事フランス語Ⅰ」の説明文を置いてあります。TV5MondeやRFIのようなフランス語圏の公共放送のニュース・サイトを教材としていますが、TV5MondeやRFIは、ＳＡ先の一部の語学クラスでも教材として使われているようです。自学自習用教材としてアンジェ現地で使った先輩方もいらっしゃいました。しかし、時事問題が苦手な場合、全てフランス語で自学自習をするのは難しいでしょう。「時事フランス語Ⅰ」であれば、時事問題も文法用語もどちらも日本語で解説が受けられ、シャドーイングを通じた発音指導を行います。ＳＡを念頭に、現代のフランスを知り、実践的な発話の機会を多くもつ意味で、「時事フランス語Ⅰ」の履修をご検討ください。参考資料（Wordファイル）を次のリンク先に置いておきます　URL 準備中

【Outline (in English)】
This intermediate French course includes mainly oral production based on phonetic knowledge. Class meets four times a week. Students will prepare to study abroad in Angers, France (fall semester, 2022).
［Learning Objectives］
By the end of this course, students should be able to do the following at a minimum
1) You have learned to understand the meaning of the expressions in the textbook when you hear them.
2) You have been able to write the expressions you have learned in the textbook in French.
3) You have learned how to use the expressions in the textbook in your own conversations.
4) You will know how to read and understand sentences related to various situations in daily life.
5) You are expected to be able to express your opinions on texts related to various aspects of daily life.
6) You have been able to write emails and simple letters in French.
［Learning Activities outside of Classroom］
1) Please repeat and pronounce the important sentences in the textbook after each class to make them your own.

2) According to the Standards for the Establishment of Universities, the amount of preparation and revision time required to earn two credits for a lecture or seminar is at least four hours per session. If you follow this standard, the time you will spend on preparation and review for this exercise should be at least 35 minutes per day.
［Grading Criteria］
Your overall grade in the class will be decided on the following:
1) Attendance 30%
2) In-class activities (including quizzes) 40%
3) Tests 30%

LANf200GA（フランス語 / French language education 200）

フランス語コミュニケーションIII

カレンス　フィリップ

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
フランス・アンジェへ行く前の直前準備講座。日常生活の中で、フランス語での中コミュニケーションがもっと細かくできるようにレベルアップさせる練習を行う。さらに基礎文法を固め、必須な語彙を増やし、フランス語のスキルを高める。練習問題は多くの場合はペアで行うように学習者同士のコミュニケーションが促される仕組みになっているプログラムです。

【到達目標】
The main priority of this class will be strengthening and brushing up of the speaking ability.
Like last year, the students will learn to deal with facts and actions through everyday situations.
At the end of the course, the students are expected to do the following: improve oral comprehension and speaking ability in French, use any further oral French in concrete situations and have more knowledge about French custom and culture.
Students will receive feedback and comments on homework assignments in class activities throughout the term.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
前年度のテキストを終らせてから、次のステップとして会話中心の新しいテキストを使う。フランスで暮らせる目的を固めながらフランス語でネイティブとコミュニケーションを取るように会話の能力を強める。それぞれの日常生活の状況に関係がある様々な会話パターンを覚え、反応及び会話のスピードを高める練習も行う。
"遠隔授業の実施に伴う、授業計画や成績評価基準の変更については、学習支援システム上で通知する"。課題等に対するフィードバックは授業内でおこないます.
課題に対するフィードバックは授業内でおこないます.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Introduction	授業の紹介
	Moi,je.A1 Leçon 16	Moi,je.A1　16課
	Parler du week-end!	週末について
	Futur proche	近接未来
2	Leçon 17	17課
	Parler de ses goûts	趣味について
	Activités courantes	日常行為
3	Leçon 19	19課
	Parler des vacances	バカンスについて
	Le passé composé(1)	複合過去　半過去
	l'imparfait (1)	
4	Leçon 20	20課
	Parler de ses expériences	過去の経験
	Passé composé (2) déjà / ne .. pas encore /ne ...jamais	
5	Leçon 21	21課
	Parler de la géographie	地理について
	Situer	どこにあるか
	Points cardinaux	東西南北
6	Leçon 22	22課
	Parler du temps	天気
	La météo	天気予報
7	Révisions	復習
	Test mi-trimestre	中間テスト
8	Leçon 23	23課
	Planifier un voyage	旅行の計画
	Conseiller proposer	勧める
	Devoir pouvoir il faut	提案する
	La durée	
9	Moi, je ..A2 Leçon 4	Moi, je ...A2　4課
	Présenter sa région, Présenter sa ville	自分の地方、市、町の紹介る
	Articles prépositions	
10	Leçon 6	6課
	Présenter sa chambre Situer	自分の部屋の紹介
	Prépositions de lieu	ものはどこにあるか
11	Leçon 12	12課
	Présenter son film préféré	好きな映画
	Raconter une histoire	強調する
	Mise en relief	
12	Leçon 20	20課
	Conseils sur ta ville	町のいいところ
	Souhaiter conseiller Suggérer	願う　勧める
	Conditionnel	アドバイスする
		条件法
13	Révisions	復習
	Test de fin de trimestre	期末テスト
14	Correction du test	テスト返却
	Culture française	フランス文化

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回課題（宿題）を出すので、よく復習してください。
本授業の宿題・復習時間は、合わせて1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書名：『Moi, je... Communication A 1 増補改訂版』
発行所: アルマ
著者:Simon Serverin Saki Iishi　Chloé Bellec　Bruno Jactat
ISBN ：978-4-905343-33-2 (ÉDITION RÉVISÉE)
教科書名:『Moi, je... Communication A2 ÉDITION RÉVISÉE』
発行所: アルマ
著者:Simon Serverin avec Bruno Vannieu, Chloé Bellec, Saki Iishi, Bruno Jactat
ISBN ：978-4-905343-44-8 (ÉDITION RÉVISÉE)

【参考書】
辞書に関しては、電子辞書、紙の辞書どちらでも良いですが、手元に用意しておくと便利です。授業の予習・復習にぜひ活用してください。

【成績評価の方法と基準】
1. 中間テスト・期末試験: 60 %
2. ミニテスト:20%
3. 課題：10%

4.積極性: 5 %
5.平常点：5 %

【学生の意見等からの気づき】
実践の会話で、活用できるプリントを用意し、より実践できる授業を行います。

【Outline (in English)】
This course is a part of the second step program which prepares students for their study trip and stay in Angers (France). We will review and go further in the program in order to develop more oral skill in French. We will do many different kinds of exercises to reinforce basic grammar, increase vocabulary and learn more about French culture.
Students will be expected to have complete the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than one hour for a class.
Your overall grade in the class will be decided on the following:
Mid-term and Term end examination: 60 %
Mini-tests ：20 %
Assignments: 10 %
Class contribution 10 %.
Students will receive feedback and comments on homework assignments in class activities throughout the term."

LANf300GA（フランス語 / French language education 300）

フランス語アプリケーション

ル　ルー　清野　ブレンダン

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé (A2/B1). Les étudiants travailleront les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit afin d'améliorer leur niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir leurs connaissances sur les cultures francophones.

【到達目標】
Ce cours permet à des étudiants déjà assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : enrichissement du vocabulaire, développement des capacités de lecture et d'expression orales et écrites. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe au niveau B1, voire B2) et du 仏検 (2級 voire 準1級), ainsi que le concours pour partir en tant qu'étudiant en échange (派遣留学).

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
A l'aide d'une grande variété de documents (textes, images, vidéos, chansons...), les étudiants travailleront la compréhension et la communication orales, sans oublier l'écrit avec une révision systématique des points de grammaire qu'ils ont déjà étudiés.
Les contenus proposés seront très variés et permettront de découvrir de nombreux aspects culturels de la francophonie tout en voyageant autour du monde.
この授業では，作文やリーディングマラソン(フランス語多読)のような課題も課せられますので，そのつもりで参加して下さい。
課題等に関するフィードバックは基本的に授業時間内に行いますが, Hoppii を通じて行う場合もあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Faisons connaissance !	Présentation des participants Organisation et calendrier des activités
2	La famille	Famille recomposée, vie de famille
3	DELF B1	Entraînement (et correction): - compréhension orale et écrite - expression écrite (=rédaction n°1)
4	Caricatures ① Images du jour	Analyse de caricatures sur l'actualité
5	Question de génération	Participe passé Générations et éducation
6	Des amis pour toujours	Discours indirect au présent Différentes définitions de l'amitié
7	Vidéo ① Contenu informatif	Compréhension orale Traduction et sous-titrage ①
8	Se retrouver et se séparer	Rencontres, désaccords, disputes
9	DELF B1	Entraînement (et correction): - compréhension orale et écrite - expression écrite (=rédaction n°2)
10	Vidéo ② Contenu humoristique	Compréhension orale Traduction et sous-titrage ②
11	Caricatures ② Images du jour	Analyse de caricatures sur l'actualité
12	La famille: bilan	Révisions: passé composé, plus-que-parfait, participe passé, pronoms personnels...
13	Projet	Présentons nos proches
14	Caricatures ③ Images du jour	Analyse de caricatures sur l'actualité

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Une participation active en classe est indispensable. Des exercices ou tâches à réaliser seront donnés, à chaque cours ou presque, pour le cours suivant (réviser le vocabulaire, revoir un point de grammaire, écrire un petit texte, préparer un exposé, etc.).
予習・復習は当然ながら必須。この授業は2単位科目なので，法政大学学則（「1回の授業につき4時間以上」）に従い，本授業の準備学習・復習時間は4時間以上を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Les documents utilisés seront distribués en classe ou téléversés sur Hoppii ou Google Classroom.

【参考書】
Dictionnaire français-français ou français-japonais recommandé.
Attention: pas de "faux" dictionnaire en ligne!!!

【成績評価の方法と基準】
・宿題，ミニ発表，クラス内業務、その他の小テスト：約 25 %
・リーディングマラソン(フランス語多読)：約 25 %
・作文：約 25 %
・平常点（授業への参加状況）：約25%。尚，平常点に関しては減点方式をとり，4 回目の欠席で不合格となります。10分以上の遅刻は2回で欠席扱いとなり，遅延証明は2 回まで認めます。

【学生の意見等からの気づき】
学生の意見等を読み，特に工夫する必要のある点がないように思いました。改善を全くしない，という意味ではないのですが !

【その他の重要事項】
Ce cours est particulièrement adapté aux étudiants ayant déjà effectué un séjour en France ou qui visent le concours des étudiants d'échanges (派遣留学).
En fonction du nombre et du niveau des étudiants, le programme ci-dessus est susceptible d'être modifié au cours du semestre.

【Prerequisite】
Un niveau de français A2, au minimum, est nécessaire pour participer à ce cours.

【Outline (in English)】
This course is for intermediate students with A2/B1 level in French. The participants will improve their level of communication and expression, through activities using oral and written communication. Through the selected themes, students will also be able to develop their knowledge about francophone cultures.
Active participation in class is essential. Exercises or tasks will be given for the next class almost every week (thorough revision of vocabulary and/or grammar points, theme-related papers or presentations, readings, etc.).
Depending on the tasks involved, homework preparation will range from one to three hours.
Grading criteria are as follows:
・Homework, short tests and presentations: app.25 %
・"Reading marathon" (Extensive reading): app.25 %
・Essays: app.25 %
・Class participation: app.25%。

LANf300GA（フランス語 / French language education 300）

フランス語アプリケーション

ル　ルー　清野　ブレンダン

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé (A2/B1). Les étudiants travailleront les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit afin d'améliorer leur niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir leurs connaissances sur les cultures francophones.

【到達目標】
Ce cours permet à des étudiants déjà assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : enrichissement du vocabulaire, développement des capacités de lecture et d'expression orales et écrites. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe au niveau B1, voire B2) et du 仏検 (2 級 voire 準 1 級), ainsi que du concours pour partir en tant qu'étudiant en échange (派遣留学).

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
A l'aide d'une grande variété de documents (textes, images, vidéos, chansons...), les étudiants travailleront la compréhension et la communication orales, sans oublier l'écrit avec une révision systématique des points de grammaire qu'ils ont déjà étudiés.
Les contenus proposés seront très variés et permettront de découvrir de nombreux aspects culturels de la francophonie tout en voyageant autour du monde.
この授業では、作文やリーディングマラソン (フランス語多読) のような 課題も課せられますので、そのつもりで参加して下さい。
課題等に関するフィードバックは基本的に授業時間内に行いますが，Hoppii を通じて行う場合もあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Faisons connaissance !	Quoi de neuf? (vacances) Présentation des participants, organisation et calendrier des activités
2	Les clés du bonheur	Se changer les idées, se divertir: loisirs créatifs
3	DELF B1 (ou B2) ①	Entraînement (et correction): - compréhension orale et écrite - expression écrite (=rédaction n°1)
4	Caricatures ① Images du jour	Analyse de caricatures sur l'actualité
5	Art de vivre	Conditionnel présent et expression du souhait
6	Action!	Sports extrêmes Il faut / il ne faut pas + subjonctif
7	Vidéo ① Contenu informatif	Compréhension orale Traduction et sous-titrage ①
8	Activité physique	Donner des conseils, demander des informations
9	DELF B1 (ou B2) ②	Entraînement (et correction): - compréhension orale et écrite - expression écrite (=rédaction n°2)
10	Vidéo ② Contenu humoristique	Compréhension orale Traduction et sous-titrage ②
11	Caricatures ② Images du jour	Analyse de caricatures sur l'actualité
12	Les clés du bonheur: bilan	Verbes prépositionnels, souhait, conditionnel...
13	Projet	Organisons une activité de plein air
14	CBC/Radio Canada	Compréhensions orale et écrite

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Une participation active en classe est indispensable. Des exercices ou tâches à réaliser seront donnés, à chaque cours ou presque, pour le cours suivant (réviser le vocabulaire, revoir un point de grammaire, écrire un petit texte, préparer un exposé, etc.).
予習・復習は当然ながら必須。この授業は 2 単位科目なので，法政大学学則（「1 回の授業につき 4 時間以上」）に従い，本授業の準備学習・復習時間は 4 時間以上を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Les documents utilisés seront distribués en classe ou téléversés sur Hoppii ou Google Classroom.

【参考書】
Dictionnaire français-français ou français-japonais recommandé.
Attention: pas de "faux" dictionnaire en ligne!!!

【成績評価の方法と基準】
・宿題，ミニ発表，クラス内業務、その他の小テスト：約 25 %
・リーディングマラソン(フランス語多読)：約 25 %
・作文：約 25 %
・平常点（授業への参加状況）:約 25%。 尚、平常点に関しては減点方式をとり、4 回目の欠席で不合格となります。遅刻は2回で欠席扱いとなり、遅延証明は2回まで認めます。

【学生の意見等からの気づき】
学生の意見等を読み、工夫する必要のある点は特にないように思いました。改善は全くしない、という意味ではないのですが！

【その他の重要事項】
Ce cours est particulièrement adapté aux étudiants ayant déjà effectué un séjour en France ou qui visent le concours des étudiants d'échanges (派遣留学).
En fonction du nombre et du niveau des étudiants, le programme ci-dessus est susceptible d'être modifié au cours du semestre.

【Prerequisite】
Un niveau de français A2, au minimum, est nécessaire pour participer à ce cours.

【Outline (in English)】
This course is for intermediate students with A2/B1 level in French. The participants will improve their level of communication and expression, through activities using oral and written communication.
Through the selected themes, students will also be able to develop their knowledge about francophone cultures.
Active participation in class is essential. Exercises or tasks will be given for the next class almost every week (thorough revision of vocabulary and/or grammar points, theme-related papers or presentations, readings, etc.).
Depending on the tasks involved, homework preparation will range from one to three hours.
Grading criteria are as follows:
・Homework, short tests and presentations: app.25 %
・"Reading marathon" (Extensive reading): app.25 %
・Essays: app.25 %
・Class participation: app.25%

LANf300GA（フランス語 / French language education 300）

フランス語アプリケーション

カレンス　フィリップ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
2年間学んだフランス語の知識（語彙や文法など）を生かして、フランス語のコミュニケーション能力を高める授業です。日常の場面に応じて、フランス語で様々な練習問題を行い、フランス語を話す力を強めます。文法を復習しながら、新しい語彙や表現を覚えながら、フランスとフランスの文化についてももっと詳しく学びます。

【到達目標】
授業の目標はコミュニケーションの力を上げることです。
次の三つのポイントに重点を置きます。
1．フランス語の日常会話をもっと聞き取れるようにする。
2．フランス語の文法の知識を高め、色々な練習に通じて強化する。
3．フランス語の語彙や言い方を増やして、使えるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は基本的には対面で進めることを想定していますが、状況に応じてオンライン授業へと移行することがあったら、お知らせします。学生からの質問には授業時間内、または授業支援システムを通じてフィードバックしていきます。
授業の内容に関しては、まず、テキストを見ずに対話を聞き、理解し、少しずつ繰り返し音読します。その後、テキストを見ながら再び音読します。さらに、内容と関連がある練習問題を行います。最後に学んだものをもう一度使い、ロールプレーをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
①	Prise de contact Explications du programme L1 p10 Chez le traiteur la quantité encore/ne … plus) pronom “en”	自己紹介 プログラムの説明 1課　素材屋で 部分冠詞 量の表現 “en”代名詞
②	L2 p14,15 Commander un repas souhait conditionnel	2課 食事の注文 願う
③	L3 p18 A la boutique de bijoux pronoms démonstratifs	3課 宝石のブチックで 指示代名詞
④	L5 p22 Modifier une réservation (table ou chambre) verbe conjugués +verbe infinitif	5課 予約の変更 レストラン／ホテル 動詞＋不定詞
⑤	L6 p24 A la banque Complément de nom: ”de”	6課 銀行で 名詞補語　”de”
⑥	L7 p26 Echanger, se faire rembourser Expressions de temps + passé composé	7課 交換する 返済してもらう 時間の表現＋複合過去
⑦	Révisions Test de mi-trimestre	復習 中間テスト
⑧	L9 p32 Faire des comparaisons verbes construits sur des adjectifs, comparatif superlatif	9課 比較する 比較法 最上級
⑨	L10 p38 Se renseigner Interrogation indirecte	10課 問い合わせする 間接法
⑩	L11 p40 Localiser prépositions/adverbes de lieu	11課 位置、 場所を突き止める 場所の前置詞と副詞
⑪	L12 p44 A l’agence immobilière Subjonctif/indicatif	12課 不動産屋で 接続法か直接法
⑫	L15 p58 Déclarer un vol, un accident Forme passive	15課 窃盗の被害届 される　　受動態
⑬	Révisions Test final	復習 期末テスト
⑭	Correction du test Culture française	テストの返却 フランスの文化

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回課題（宿題）を出すので、よく復習してください。
本授業の宿題・復習時間は、合わせて1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Communication Progressive du Francais - A2 B1 Intermédiaire 2eme Edition: Livre de l’élève + Cd-audio,
Editions Clé International, Claire MIQUEL
(ISBN 978-209-038447-5)

【参考書】
辞書に関しては、電子辞書、紙の辞書どちらでも良いですが、手元に用意しておくと便利です。授業の予習・復習にぜひ活用してください。

【成績評価の方法と基準】
1. 中間テスト・期末試験:60 %
2. 課題:30%
3. 積極性:5 %
4. 平常点:5 %

【学生の意見等からの気づき】
より実践的に使えるフランス語を身につけさせる。
さらに、フランスの暮らしや文化についても取り入れていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
Hoppiにある教材にアクセスするには、スマートフォンかパソコンが必要です。

【その他の重要事項】
On aura un exemple du manuel et de son organisation en cliquant sur le lien suivant http://extranet.editis.com/it-yonixweb/images/330/art/doc/f/fbb51c54d7c6363531333636353638383434343935.pdf

【Outline (in English)】
The purpose of this course is the development of a communication skill in French at intermediate level (A2/B1). At first, we will strengthen comprehension and oral capacity. Additional drills and a lot of panels of exercises will be proposed to reinforce the grammar level and the vocabulary. The different topics taken from every-day life situations will give opportunities to learn more about French culture.
Students will be expected to prepare the next class and to have complete the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than one hour for a class.
Your overall grade in the class will be decided on the following:
Mid-term and Term end examination: 60 %, Assignments: 30 %, and in class contribution 10 %.

LANf300GA（フランス語 / French language education 300）

【2026年度休講】フランス語アプリケーション

ル　ルー　清野　ブレンダン

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français intermédiaire (B1/B2). A travers différents types d'activités, les étudiants pourront développer et renforcer leurs compétences de compréhension et de production à l'oral ainsi qu'à l'écrit. Ils pourront aussi, à travers les thèmes étudiés, compléter et élargir leurs connaissances sur les cultures francophones, et réfléchir à certains problèmes environnementaux.

【到達目標】
Ce cours permet à des étudiants déjà assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage: enrichissement du vocabulaire, développement des capacités d'écoute et d'expression orale et écrite. En lien avec les autres cours de フランス語アプリケーション, il permet la préparation des examens du DELF (niveau B1, voire B2) et du 仏検 (2級 voire 準1級).

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Les étudiants réaliseront diverses activités à partir d'extraits de trois bandes dessinées francophones récentes traitant de divers problèmes environnementaux. Ces activités leur permettront de travailler à la fois la compréhension orale, l'expression orale, mais aussi l'expression écrite.
Il s'agit d'un cours de type "Contents based learning".
En fonction du nombre d'étudiants, nous réfléchirons à la possibilité de participer à la "Journée de découverte de la Francophonie" organisée en décembre par la SJDF et l'Institut français, afin d'y présenter un travail oral sur la francophonie au Japon.
Le programme proposé ci-dessous est donc susceptible d'être modifié en fonction de la situation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
①	Introduction	Présentation du cours (programme, activités...) et des participants
②	Comment les riches ravagent la planète (2024)	Présentation de la BD
③	Comment les riches ravagent la planète	Partie 1: Jour de fête, jours de chauffe
④	Comment les riches ravagent la planète	Partie 2: Qui cause la catastrophe? Comment l'ostentation ravage la planète
⑤	Comment les riches ravagent la planète	Présentations des étudiants
⑥	Ressources : Un défi pour l'humanité (2024)	Présentation de la BD
⑦	Ressources : Un défi pour l'humanité	Partie 1: Les Cornucopiens, L'exponentielle,Les ressources
⑧	Ressources : Un défi pour l'humanité	Partie 2: De Gaïa à Thanatia, Le recyclage, Une civilisation techniquement soutenable
⑨	Ressources : Un défi pour l'humanité	Présentations des étudiants
⑩	Le Monde Sans Fin (2021)	Présentation de la BD
⑪	Le Monde Sans Fin	Partie 1: L'énergie
⑫	Le Monde Sans Fin	Partie 2: Le climat
⑬	Le Monde Sans Fin	Présentations des étudiants
⑭	Discussion finale	Que retenir de ces trois BD?

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Une participation active en classe est indispensable. Des exercices ou tâches à réaliser seront donnés, à chaque cours ou presque, en cours ou pour le cours suivant (lire les pages suivantes, réviser le vocabulaire, revoir un point de grammaire, écrire un petit texte, préparer un exposé, etc.).
予習・復習は当然ながら必須。この授業は2単位科目なので，法政大学学則（「1回の授業につき4時間以上」）に従い，本授業の準備学習・復習時間は4 時間以上を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Documents préparés et distribués en cours ou sur le LMS par l'enseignant.

【参考書】
Dictionnaire français-français recommandé, et au minimum un dictionnaire français-japonais / japonais-français. (Pas de FAUX dictionnaire en ligne!!!)

【成績評価の方法と基準】
・宿題，ミニ発表，その他の小テストや課題:約 40 %
・リーディングマラソン (フランス語多読):約 20 %
・作文:約 20 %
・平常点（授業への参加状況）:約 20%。 尚，平常点に関しては減点方式をとり，4 回目の欠席で不合格となります。10分までの遅刻は2 回につき欠席扱いとなり，遅延証明は2 回まで認めます。10 分以上の無断遅刻は欠席とみなします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の意見等を読み，工夫する必要のある点は特にないように思いました。改善は全くしない，という意味ではないのですが！

【Prerequisite】
Avoir fait deux ans de français, ou justifier d'un bon niveau A2 au minimum.

【Outline (in English)】
The purpose of this course is the development of communication skills (oral and written) in French for intermediate level (B1/B2).
Through different kinds of activities mainly based on comic books (ask and answer questions, reading, writing, etc.),students will strengthen their comprehension and production capacities in order to develop both oral and writing expression.
Through the selected themes (mainly environmental problems), students will also be able to develop their knowledge about francophone cultures.
Active participation in class is essential. Exercises or tasks will be given for the next class almost every week (thorough revision of vocabulary and/or grammar points, theme-related papers or presentations, readings, etc.).
Depending on the tasks involved, homework preparation will range from one to three hours.
Grading criteria are as follows:
・Homework, short tests and presentations: app.40 %
・"Reading marathon" (Extensive reading): app.20 %
・Essays: app.20 %
・Class participation: app.20%。

LANr100GA（ロシア語 / Russian language education 100）

ロシア語コミュニケーションⅠ

エレーナ　三神

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日常的に使われる会話表現の習得を目標とする授業です。ロシア語の発音とイントネーションに慣れることから始め、挨拶、受け答えの基礎から徐々に語彙を増やしていき、最小限の日常行動が可能となるような会話の基礎を作ります。また、講師との対話（会話）を通して、現地事情を感じてもらえるような授業を目指します。

【到達目標】
簡単なロシア語の質問を正しく理解し、答えることができる。簡単な言葉で自分のことを表現できる。文章を正確に読むことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
定型的なフレーズの音読練習、暗記、場面での応用で実践的に覚えます。授業では発音・イントネーションの練習、場面設定でのロールプレイなどを行います。
課題などに対する教員のフィードバックは、課題内容によって授業時や提出した課題につけたコメントの送信などの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	挨拶の基本	発音とイントネーションの練習。会話練習。
2	自己紹介、職業	発音とイントネーションの練習。リスニング、会話練習。
3	出身の話	リスニング、会話練習。
4	家族の話	リスニング、会話練習。
5	趣味や外見	リスニング、会話練習。
6	自己紹介の総合復習	リスニング、会話練習。
7	一日の流れ	リスニング、会話練習。
8	趣味	リスニング、会話練習。
9	食べ物・飲み物	リスニング、会話練習。
10	国の食卓	リスニング、会話練習。
11	街を歩く	リスニング、会話練習。
12	道の案内	リスニング、会話練習。
13	復習	1- 12の復習
14	期末試験	口述試験・解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業の後に学習支援システムに提出する宿題があります。
本授業の準備学習・復習時間は１時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付もしくは学習支援システムを通して配付します。
学習支援システムにて授業に使うPDFプリント及び音声データをダウンロードできます。

【参考書】
『初級　ロシア語』（法政大学ロシア語担当教員　編）2018/2019年度版

【成績評価の方法と基準】
学期末試験　50％、複数小テスト　30%、宿題　20％

【学生の意見等からの気づき】
口述試験の範囲を明確にします。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムにアクセスできる端末（スマートフォン、PCなど）、インター、ネット環境

【その他の重要事項】
実際の授業状況や学生の能力に応じて授業スケジュールを変更することがあります。ご質問などは elena.mikami.66@hosei.ac.jp までお問い合わせください。

【Outline (in English)】
（Course outline）
The aim of this course is to learn conversational expressions used in everyday life. This course deals with Russian pronunciation and intonation, basic conversational phrases and expanding Russian vocabulary for everyday activities. Students will practice Russian conversation with Russian native speaker teacher.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- Understand and answer simple Russian questions correctly.
- Can express him/herself in simple words.
- Can read sentences accurately.
（Learning activities outside of classroom）
As a learning activity outside of classroom students will be expected to have completed the homework after each class meeting. Your study time will about one hour for a class.
（Grading Criteria /Policy）
Term-end examination 50%, Word tests 30%, Homework 20%

LANr200GA（ロシア語 / Russian language education 200）

ロシア語コミュニケーションII

エレーナ　三神

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現地学習に備え、必要な会話力習得を目的とする授業です。1年次に学習したことを基に、また、会話表現に必要な事項を補いつつコミュニケーション力をつける練習を繰り返し行います。

【到達目標】
ロシアで学習、生活する上で必要な語彙を習得すること。ロシア語での質問を正確に理解し、それに適切に答えられること。自分の考えをロシア語で表現できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テーマごとに必要な語彙や構文を習い、それらを使う会話練習を行います。その他にリスニング、通訳、シャドーイング、会話実践のペアーワークなどの練習を行います。
会話を中心とした授業なので、積極的に授業に参加していただきたい。誤りを恐れずに発言することが語学上達につながります。
課題などに対する教員のフィードバックは、課題内容によって授業時や学習支援システムを通して提出した課題につけたコメントの送信などの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	自己紹介（復習）	リスニング、会話練習
2	家	リスニング、会話練習
3	部屋	リスニング、会話練習
4	特徴、色	リスニング、会話練習
5	食べ物、飲み物	リスニング、会話練習
6	レストラン	リスニング、会話練習
7	洋服	リスニング、会話練習
8	1日の流れ	リスニング、会話練習
9	希望、可否、義務	リスニング、会話練習
10	週のスケジュール	リスニング、会話練習
11	交通	リスニング、会話練習
12	移動の表現・まとめ	リスニング、会話練習
13	コースの総合復習	リスニング、会話練習
14	期末試験	口述試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業に扱った表現・単語の復習、作文又は聴解宿題が毎回あります。宿題提出や単語学習などはオンラインで行います。そのために学習支援システムや自習ができるオンライン学習アプリケーションを使います。
授業の準備学習・復習時間は合わせて1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
『初級ロシア語』（法政大学ロシア語担当教員編）2018/2019年度版

【成績評価の方法と基準】
学期末口述試験　50％、複数小テスト　30%、宿題　20％

【学生の意見等からの気づき】
口述試験の範囲をはっきりさせます。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムにアクセスできる端末（スマートフォン、PCなど）、プリント、インターネット環境。

【その他の重要事項】
実際の授業状況や学生の能力に応じて授業内容は多少変更することがあります。

【Outline (in English)】
【Course outline】
The goals of this course are to develop students' Russian language skills and abilities to interact more naturally in Russian, to give students the communication skills necessary for a successful study abroad.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- To acquire the vocabulary necessary for studying and living in Russia.
- Understand questions in Russian accurately and answer them appropriately.
- To be able to express one's thoughts in Russian.
【Learning activities outside of classroom】
As a learning activity outside of classroom students will be expected to have completed the homework after class meeting. It helps students to review expressions and vocabulary covered in class. The homework may include writing and listening comprehension tasks. Your study time will about one hour for a class.
【Grading Criteria】
Term-end examination 50%, Word tests 30%, Homework 20%

LANr200GA（ロシア語 / Russian language education 200）

ロシア語コミュニケーションIII

エレーナ　三神

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現地学習に備え、必要な会話力習得を目的とする授業です。1年次に学習したことを基に、また、会話表現に必要な事項を補いつつコミュニケーション力をつける練習を繰り返し行います。

【到達目標】
ロシアで学習、生活する上で必要な語彙を習得すること。ロシア語での質問を正確に理解し、それに適切に答えられること。自分の考えをロシア語で表現できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テーマごとに必要な語彙や構文を習い、それらを使う会話練習を行います。その他にリスニング、通訳、シャドーイング、会話実践のペアーワークなどの練習を行います。
会話を中心とした授業なので、積極的に授業に参加していただきたい。誤りを恐れずに発言することが語学上達につながります。
課題などに対する教員のフィードバックは、課題内容によって授業時や学習支援システム経由や提出した課題につけたコメントの送信などの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ものの位置	会話・リスニング練習
2	好きなこと	会話・リスニング練習
3	レストラン	会話・リスニング練習
4	ドレスコード	会話・リスニング練習
5	私の一日	会話・リスニング練習
6	おもな時間表現	会話・リスニング練習
7	ショッピング	会話・リスニング練習
8	普段移動	会話・リスニング練習
9	交通ルート	会話・リスニング練習
10	病院	会話・リスニング練習
11	季節・気候	会話・リスニング練習
12	ロシアの年行事	会話・リスニング練習
13	総合復習	会話・リスニング練習
14	期末試験	聴解テスト・筆記試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業に扱った表現・単語の復習、又は聴解宿題があります。
宿題提出や単語学習などはオンラインで行います。そのために学習支援システムや自習ができるオンライン学習アプリケーションを使います。
授業の準備学習・復習時間は合わせて1時間以上を標準とします。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
『初級ロシア語』（法政大学ロシア語担当教員編）2018/2019年度版

【成績評価の方法と基準】
学期末筆記試験　50％、小テスト　30%、宿題　20％
成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】
期末試験の範囲をはっきりさせます。

【学生が準備すべき機器他】
法政大学の学習支援システムにアクセスできる端末（スマートフォン、PCなど）、プリント、インターネット環境。

【その他の重要事項】
実際の授業状況や学生の能力に応じて授業内容は多少変更することがあります。

【Outline (in English)】
【Course outline】
The goals of this course are to develop students' Russian language skills and abilities to interact more naturally in Russian, to give students the communication skills necessary for a successful study abroad.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- To acquire the vocabulary necessary for studying and living in Russia.
- Understand questions in Russian accurately and answer them appropriately.
- To be able to express one's thoughts in Russian.
【Learning activities outside of classroom】
As a learning activity outside of classroom students will be expected to have completed the homework after each class meeting. It helps students to review expressions and vocabulary covered in class. The homework may include writing and listening comprehension tasks.Your study time will about one hour for a class.
【Grading Criteria】
Term-end examination 50%, Word tests 30%, Homework 20%

LANr300GA（ロシア語 / Russian language education 300）

ロシア語アプリケーション

佐藤　千登勢

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
これまで培ってきたロシア語の運用能力をさらに伸ばし、維持することを第一の目的とします。ロシア語の動画を視聴してロシアやエストニアの文化や社会に触れ、ロシア語の文法力とリスニングの力を高めると同時に慣用表現、決まった口語表現を覚えて使えるようにします。

【到達目標】
ロシア語能力検定試験３級程度、またロシア語検定試験（ＴＲＫИ）基礎レベル（A2）から第1レベル（B1）のロシア語運用能力（聴解と文法）を身につけること、その能力の維持を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
ロシア語の動画を視聴して質疑応答に答え、文法とリスニングの力がつくように進めます。映像や説明文を通して、ロシアやエストニアの文化や慣習を楽しみながら知ることも可能となります。小テストのフィードバックは翌週の教場で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。使用教材、視聴覚資料の確認。
第2回	What Estonians Think about Russian? 1	エストニアのロシア語話者、移民へのロシア語でのインタヴュー。リスニングと質疑応答。
第3回	What Estonians Think about Russian? 2	エストニアのロシア語話者、移民へのロシア語でのインタヴューの続き。リスニングと質疑応答。
第4回	What Estonians Think about Russian? 3	エストニアのロシア語話者、移民へのロシア語でのインタヴューの続き。リスニングと質疑応答。重要フレーズの暗記。
第5回	Narva: What Is It Like to Live at the Border with Russia? 1	エストニアとロシアの国境の都市ナルヴァのロシア語話者へのインタヴュー。リスニングと質疑応答。
第6回	Narva: What Is It Like to Live at the Border with Russia?　2	エストニアとロシアの国境の都市ナルヴァのロシア語話者へのインタヴューの続き。リスニングと質疑応答。
第7回	Narva: What Is It Like to Live at the Border with Russia? 3	エストニアとロシアの国境の都市ナルヴァのロシア語話者へのインタヴューの続き。リスニングと質疑応答。重要フレーズの暗記。
第8回	ЭСТОНЦЫ - "БАЛТИЙСКИЕ ТИГРЫ". ПОЧЕМУ ОНИ ТАК УСПЕШНЫ? 1	「バルトの虎」の異名をとるエストニア人、その成功の理由を探る概説。リスニングと質疑応答。
第9回	ЭСТОНЦЫ - "БАЛТИЙСКИЕ ТИГРЫ". ПОЧЕМУ ОНИ ТАК УСПЕШНЫ? 2	「バルトの虎」の異名をとるエストニア人、その成功の理由を探る概説の続き。リスニングと質疑応答。
第10回	ЭСТОНЦЫ - "БАЛТИЙСКИЕ ТИГРЫ". ПОЧЕМУ ОНИ ТАК УСПЕШНЫ? 3	「バルトの虎」の異名をとるエストニア人、その成功の理由を探る概説の続き。リスニングと質疑応答。重要フレーズの暗記。
第11回	Минусы жизни в Эстонии 1	エストニアでの生活、そのデメリットに関する概説。リスニングと質疑応答。
第12回	Минусы жизни в Эстонии 2	エストニアでの生活、そのデメリットに関する概説の続き。リスニングと質疑応答。
第13回	Минусы жизни в Эстонии 3	エストニアでの生活、そのデメリットに関する概説の続き。リスニングと質疑応答。重要フレーズの暗記。
第14回	これまでのまとめ	これまで培ってきたロシア語の表現を確認する簡単な小テストの実施と解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で視聴した動画内容の習得のために、１回につき1.5時間程度の予習・復習が必要となります。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付、もしはくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点80％、小テスト20％とし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
みなさん一人ひとりのロシア語運用能力に合わせたテクスト選びを心がけます。

【学生が準備すべき機器他】
予習と復習の際、ネット上の動画を視聴する環境が必要となります。教場では、PC持参の必要はありません。

【Outline (in English)】
●Course outline
The aim of this course is to maintain and improve Russian grammar and listening skills. We would like to share the pleasure of learning about the culture and customs of Russia and Estonia through the short movies in Russian.
●Learning Objectives
The purpose is to further develop and maintain the Russian language proficiency that has been cultivated so far(A2 to B1 in the CEFR）.
●Learning activities outside of classroom
It takes about 1.5 hours for class review.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80％) and quizzes(20％). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

LANr300GA（ロシア語 / Russian language education 300）

ロシア語アプリケーション

佐藤　千登勢

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ロシア映画を３編とりあげ、それぞれの作品に関する解説文をロシア語で読み、これを確認するかたちで映画作品を部分的に鑑賞します。ロシア語の読解力と聴解力を身につけること、維持することが目的となります。読解についてはＴＲＫИ第１レベル程度の力をつけることが可能となり、ロシアやウクライナの日常や慣習、歴史について知識を得ることができるでしょう。

【到達目標】
読解力を向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めるために、ロシア(ソ連）映画の解説文・作品論をロシア語で読み、これを確認するかたちでロシア映画の珠玉に触れます。そうすることで、ＴＲＫИ第１レベルの読解力、文法力を身につけると同時に、ロシアの文化や世相に関する知識を獲得できるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
ロシア（ソ連）映画の３つの作品に関する資料を講読します。みなさんの予習に基づいて進め、文法事項や文章の構造の説明をおこないます。作品に関する情報を把握した後、これを確認するために実際の映画作品を部分的に鑑賞します。課題は授業で確認と解説を行うかたちでフィードバックします。『火の馬』(1964)は、ウクライナの少数民族の神秘的な伝説を描いた不朽の名作。『太陽に灼かれて』(1994）はスターリン体制下の人間模様を描いた歴史的心理ドラマ。『夏の終止符』(2010）はソ連時代を象徴する上司と新生ロシアを象徴する実習生の青年、ただ二人によって展開される驚くべき心理劇です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。資料配付。
第2回	映画"Тени забытых предков" について1	"Тени забытых предков"の内容について読解。映画の一部を鑑賞。
第3回	映画"Тени забытых предков"について2	"Тени забытых предков"の内容と反響について読解。映画の続きを鑑賞。
第4回	映画"Тени забытых предков"について3	"Тени забытых предков"の内容と反響について読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第5回	映画"Утомлённые солнцем"について1	"Утомлённые солнцем"の概要と内容について読解。映画を鑑賞。
第6回	映画"Утомлённые солнцем"について2	"Утомлённые солнцем" の内容について続きを読解。映画の一部を鑑賞。
第7回	映画"Утомлённые солнцем"について3	"Утомлённые солнцем" の内容、反響について読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第8回	映画"Утомлённые солнцем"について4	"Утомлённые солнцем" の反響について続きを読解。映画の続きを鑑賞。
第9回	映画"Утомлённые солнцем"について5	"Утомлённые солнцем" の反響について続きを読解。映画の続きを鑑賞。
第10回	映画"Какя провёл этим летом"について1	"Какя провёл этим летом" を分析した論文を読解。映画の一部を鑑賞。
第11回	映画"Какя провёл этим летом"について2	"Какя провёл этим летом" を分析した論文の続きを読解。映画の続きを鑑賞。
第12回	映画"Какя провёл этим летом"について3	"Какя провёл этим летом" を分析した論文の続きを読解。映画の続きを鑑賞。
第13回	映画"Какя провёл этим летом"について4	"Какя провёл этим летом" を分析した論文の続きを読解。映画の続きを鑑賞。
第14回	まとめと確認	小テストと解説（フィードバック）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
映画作品に関するテクスト読解の予習に、１回につき２時間程度が必要となります。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付、もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点80％、小テスト20％とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
ロシア語の読解力向上とロシア映画鑑賞、双方への希望があったので、これに応じるような授業を組みました。

【その他の重要事項】
生成AI翻訳機能等の使用は、履修者の読解力向上にはまったく役に立ちません。辞書をひき、考えながら読む努力を惜しまないでください。

【Outline (in English)】
●Course outline
We will pick up some Russian film works, read the texts about them in Russian, and watch some scenes from the films while checking the texts. You will acquire reading comprehension and listening comprehension skills. You will be able to gain knowledge about the daily life, customs and history of Russia and Ukraine.
●Learning Objectives
Students will acquire the level of CEFR B1 of reading comprehension and grammar, as well as knowledge of Russian culture and social conditions.
●Learning activities outside of classroom
It takes about 1.5 hours to prepare for reading comprehension of texts about the Russian movies.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80 %) and quizzes(20 %). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

LANr300GA（ロシア語 / Russian language education 300）

ロシア語アプリケーション

エレーナ　三神

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
これまで培ってきたロシア語の運用能力をさらに伸ばし維持することを第一の目的とします。ロシア語ネイティブ講師との会話、リスニング練習、簡単な作文課題によりロシア語のコミュニケーション力を楽しくのびましょう。以前ロシア語短期語学研修に参加した学生は、培ったロシア語運用能力の維持のため履修を勧めます。

【到達目標】
ロシア連邦教育科学省が認定するロシア語検定試験（ＴＲＫИ）の基本レベル(CERF A2)又は第１レベル（CEFR B1）のロシア語運用能力（聴解と会話）を身につけるべく頑張りましょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業ではテキストのもとで会話表現を学び、それらの使用例を動画や音声資料を使ってヒアリングして、その表現を実際の会話で使う練習を行います。語学力アップのために通訳練習も行います。教材データは授業支援システム経由でダウンロードができます。
課題などに対する教員のフィードバックは、提出した課題に関するコメントなどの方法で行います。教員のフィードバックは課題内容によって授業時または学習支援支システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	自己紹介（復習）	インテラクティブな教材を使って初めて会った学生同士のスモールトークを練習する。
第2回	友達を作る	挨拶や簡単なフレーズを使って相手と自分について話す。使える表現幅を拡大する。
第3回	大学での勉強	学習を表す動詞を使い分けて勉強などについて話す。聴解、会話練習。
第4回	移動動詞の復習	移動を表す動詞を使って行ったや行きたいところについて話す。聴解、会話練習。
第5回	会話のエチケット	ロシア語の会話エチケットについて学ぶ。読解、会話練習。
第6回	海外旅行- 1	移動の動詞を使って旅行のルートについて話す。聴解、会話練習。
第7回	海外旅行- 2	移動の動詞を使い分けて移動手段について話す。聴解、会話練習。
第8回	海外旅行- 3	接頭辞のある移動の動詞を使って細かく移動を説明する。聴解、会話練習。
第9回	交通案内	接頭辞のある移動動詞を使って交通機関の使い方などについて話す。聴解、会話練習。
第10回	海外から来たお客の出迎え	位置と行き方について話す。聴解、会話練習。
第11回	待ち合わせ	時間表現を使い分けて「時間」と「期間」について話す。聴解、会話練習。
第12回	友達のところで- 1	所有表現を使って友達との会話をすすめる。聴解、会話練習。
第13回	友達のところで- 2	お客としてロシアの家を訪ねる。聴解、会話練習。
第14回	これまでのまとめと試験	これまで培ってきた会話表現を確認する試験の実施と解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業に扱った単語の復習、作文又は聴解宿題があります。
授業の準備学習・復習時間は、合わせて１時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
『初級ロシア語』（法政大学ロシア語担当教員編）2018/2019年度版

【成績評価の方法と基準】
宿題30%、授業への取り組み30%、期末試験40%とし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
期末テストの範囲はもっと明確にするようにします。

【Outline (in English)】
●Course outline
The aim of this course is to further develop and maintain the Russian language skills.Through conversation and listening practice with a native Russian-speaking instructor, students will enjoy improving their Russian communication skills. Students who participated in a Russian language program abroad are encouraged to take this course to improve their Russian language skills.
●Learning Objectives
At the end of the course, students are expected to be able to speak, read and listen in Russian on the topics studied in class. The students will be prepared to take the Russian Language Proficiency Test ＴＲＫИ A2-B1.
●Learning activities outside of classroom
As a learning activity outside of classroom there will be a homework assignment for some lessons to review the vocabulary covered in class and to listen. Your required study time is at least one hour for each class meeting.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Term-end examination 40%、in class contribution 30% homework 30%
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

LANc100GA（中国語 / Chinese language education 100）

中国語コミュニケーションⅠ

ショウ　イクテイ

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国語の発音及び基礎的な文法事項の基礎を固めつつ、中国語のコミュニケーションに必要な知識を習得する。

【到達目標】
中国語コミュニケーションに必要不可欠な発音と基礎的な文法に関する知識と技能を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
発音及び読解の練習を中心としつつ、徐々に習熟度を高めるよう授業を進める。
課題などへのフィードバックは授業時間またはメールを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
①	会話と授業に関する説明	中国語会話の練習と授業に関する注意事項などの説明
②	第１課	新出単語・ポイント 除了～以外、様態補語、一～就…、 否定～疑問詞、要是～(的話),(就)…
③	第１課	第1課の本文・練習問題
④	第２課	新出単語・ポイント 可不是嘛、不但～而且…、難到～ 嗎？ 比起～来、A是A～、不過…
⑤	第２課	第2課の本文・練習問題
⑥	第３課	新出単語・ポイント 使役文一讓、是～的、 省得～、疑問詞＋都/也、 該/応該
⑦	第３課	第3課の本文・練習問題
⑧	第４課	新出単語・ポイント 会～的、結果補語、根据～、以～為…、只要～ (就)…
⑨	第４課	第4課の本文・練習問題
⑩	第５課	新出単語・ポイント 連～都/也、不是～嗎？ 不是～就是…、跟～不一様、再～也…
⑪	第５課	第5課の本文・練習問題
⑫	第６課	新出単語・ポイント 既～也(又)…、不僅～而且、不管～都/也…、助動詞“得”、na能～
⑬	第６課	第6課の本文・練習問題
⑭	復習、試験、まとめ	ここまで習った内容を復習、確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業に出るまでに必ず復習と予習をしてくること。各課の新出単語とポイントをしっかり記憶し、理解したかどうかチェックすること。
・毎日最低20分テキストのCDを聞きながら、発音練習を行うこと。
・本授業の準備学習・復習時間は、合わせて1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
王慧琴・植村麻紀子著　『中国語口語コンプリート』　朝日出版社

【参考書】
必要なものは授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
期末テスト50％と平常点(学習態度、学習意欲、課題や小テストの提出及び完成度など)50％に基づいて、総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
よりよい授業を行うために、前年度の授業アンケートの学生の意見や要望を生かしていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
電子辞書を用意することを勧める。

【Outline (in English)】
Master the basic knowledge of Chinese pronunciation and fundamental grammatical matter while learning the necessary knowledge for Chinese communication.
Be sure to review and prepare before going to class. Make sure to remember the new words and points of each lesson and check if you understand them.
Practice pronunciation while listening to the text CD for at least 20 minutes each day.
Comprehensive evaluation based on 50% of the final test and 50% of normal points (learning attitude, learning motivation, submission of assignments and quizzes, completeness, etc.). Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

LANc200GA（中国語 / Chinese language education 200）

中国語コミュニケーションII

渡辺　昭太

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国語コミュニケーションIIは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学に向けて、中国語の作文力の向上を図ることを目的とした授業である。本授業では、テキストに記載されたポイントを教員が解説するとともに、受講生は日文中訳や並べ替え問題等に取り組むことで、既習の文法事項の定着及び作文力の向上を図る。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。

【到達目標】
本授業の到達目標は以下の通りである。
（1）テキストに提示されている説明を精読し、中国語の基本的な文法項目を正確に理解する。
（2）日文中訳や並べ替え問題等の練習を通じて、基本的な中国語文を適切に作ることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は、講義形式と演習形式を組み合わせて行う。
・受講生は、各回で扱う内容を予習し、練習問題を予め解いておくこと。授業時に全員に指名し、自分の解答を発表してもらう。
・教員は、文法ポイントを説明した後に、学生に練習問題の回答を確認し、適宜解説を行う。
・各種のフィードバックや質問の受け付けは毎回の授業時に行う。授業時以外にも、必要に応じてメールや学習支援システムで随時フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	シラバス及び授業概要の確認（本授業の意義と目的、授業概要、授業計画、成績評価方法など）
2	第1課、第2課	一語文・一句文、基本構文と主題化
3	第3課、第4課	時間< 時点と時間量> 、場所と存在・移動
4	第5課、第6課	疑問・否定、願望・必要
5	第7課、第8課	命令・依頼・可能、推定・伝聞
6	第9課、第10課	数量表現、修飾語
7	復習1	第1課～第10課までの復習
8	第11課、第12課	形容詞の程度と動詞の様態、比較・類似
9	第13課、第14課	時制とアスペクト、結果・方向・可能
10	第15課、第16課	二重目的語と対象を表わす前置詞、使役・受け身・“把”
11	第17課、第18課	仮定・条件、順序・全称
12	第19課、第20課	原因・目的・逆接、並列・累加
13	復習2	第11課～第20課までの復習
14	全体のまとめ	試験とその解説、学習内容のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業開始後は、テキストの復習を十分に行い、学習内容の定着を図ること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
・遠藤光暁、董燕『書く中国語』朝日出版社（2,200円＋税）

【参考書】
・相原茂（他）2016『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書　新訂版』東京：同学社

【成績評価の方法と基準】
・平常点（予習の実施状況、授業内で指名された時の回答状況等）を50%、期末試験を50%として合計100点満点とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
SA中国のクラス指定授業とはいえ、様々な背景を持つ学生（大学から中国語学習を始めた学生／高校から中国語学習を始めた学生／中国語ネイティブ（あるいはそれに近いレベル）の学生）が混在しているため、受講生の中国語習熟度を適宜確認しつつ、授業を進めていきたい。

【その他の重要事項】
・本授業は、SA中国2年生向けのクラス指定授業である。
・本授業は、全回の出席が評価の前提である。即ち、欠席は原則的に認めない。体調不良等のやむを得ない事情がある場合は、各種証明書を提出するなど、各自で然るべき対応を取ること。
・授業に関する情報は、全て学習支援システムを通じて連絡するため、随時確認すること。
・指定したテキストは必ず購入の上、毎回持参すること。

【Outline (in English)】
【Outline】
Chinese Communication II is the Chinese course for students who are preparing for the SA (Study Abroad) program. In this course, students will mainly improve their writing skills in Chinese. We use the textbook which shows various Chinese grammatical rules and do a lot of composition exercises.
【Goal】
The goals of this course are as follows:
(1) To understand the Chinese grammar through reading explanations shown in the textbook.
(2) To be able to appropriately compose basic Chinese sentences through exercises such as Japanese-Chinese translation, word order, etc.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】
・After every class, students are required to review the textbook.
・Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria】
・Grading will be decided based on in-class contribution (50%) and term-end test (50%).

LANc200GA（中国語 / Chinese language education 200）

中国語コミュニケーションIII

ショウ　イクテイ

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
一年次の既習内容に引き続き、更に基礎を固め、読解力や表現力などのスキルアップにつないでいくことを目的とする。

【到達目標】
一年次に習った内容を軸に、留学に必要な音読・訳読がこなせる。
コミュニケーションを取れるスキルがアップできる。
表現力を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
教科書に沿って、履修者のレベルを確認の上、内容への理解をチェックしながら、効果的に授業を進めていく。
課題などへのフィードバックは授業時間またはメールを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
①	解説と復習	春学期の学習内容の復習
②	第７課	新出単語・ポイント 如果～就…、寧可～也、 可能補語、雖然～但是…、按照～
③	第７課	第7課の本文・練習問題
④	第８課	新出単語・ポイント 一点儿～都/也＋否定形、与其～(還)不如…、要不然～、要麼～要麼、 即使～也…
⑤	第８課	第8課の本文・練習問題
⑥	第９課	新出単語・ポイント 差点儿～、之所以～是因為、自从～以後、無論如何～(也/都)、据説～
⑦	第９課	第9課の本文・練習問題
⑧	第１０課	新出単語・ポイント 有的～有的…、只有～才…、難怪～、 無論～都/也…、併不/併没～
⑨	第１０課	第10課の本文・練習問題
⑩	第１１課	新出単語・ポイント 趁着～、至於～、疑問詞～疑問詞…、 靠～、動詞＋起来
⑪	第１１課	第11課の本文・練習問題
⑫	第１２課	新出単語・ポイント 非～不可、对～来説、 一方面～另一方面…、 除非～否則…、既然～(就)…、由～(来)
⑬	第１２課	第12課の本文・練習問題
⑭	復習、まとめ、試験	第7課～第12課の復習と試験、確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業に出るまでに必ず復習と予習をしてくること。各課の新出単語と文法をしっかり記憶し、理解したかどうかチェックすること。
毎日最低20分テキストのCDを聞きながら、発音練習を行うこと。
本授業の準備学習・復習時間は合わせて1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
王慧琴・植村麻紀子著　『中国語口語コンプリート』　朝日出版社

【参考書】
必要なものは授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
期末テスト50％と平常点(学習態度、学習意欲、課題や小テストの提出及び完成度など)50％に基づいて、総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
よりよい授業を目指すために、前年度の授業アンケートの学生の意見や要望を生かしていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
電子辞書を用意することを勧める。

【Outline (in English)】
Following the contents of the previous course of the first year, we aim to further strengthen the foundation and link up skills such as reading ability and expressiveness.
Be sure to review and prepare before to class. Make sure to remember the new words and points of each lesson and check if you understand them.
Practice pronunciation while listening to the text CD for at least 20minutes each day.
Comprehensive evaluation based on 50% of the final test and 50% of normal points (learning attitude, learning motivation, submission of assignments and quizzes, completeness, etc.). Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

LANc300GA（中国語 / Chinese language education 300）

【2026年度休講】中国語アプリケーションⅠ

渡辺　昭太

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。本授業では特に「読む」能力を重点的に育成する。

【到達目標】
本授業の到達目標は、これまで積み上げてきた中国語能力を基礎に、長文の読解力を身につけ、それを翻訳力にまで高めることをめざしている。具体的には、中国の報道記事や評論文を辞書やネットを使用しながら十分に読めるレベルを目標としている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
新華社のニュースサイトや中央電視台ニュースアプリなど各種サイトが提供する報道記事を熟読し、和訳することによって中国語の読解力、翻訳力を高めるとともに、中国の政治、経済、社会、文化、歴史について理解を深める。
課題等へのフィードバックはHoppiiの掲示板や授業時間を通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション、論説文の基礎①	授業の進め方の説明、教材配布。『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第1課
第2回	論説文の基礎②	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第2課、第3課
第3回	論説文の基礎③	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第4課、第5課
第4回	論説文の基礎④	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第6課、第7課
第5回	プリント1①	政治・経済関係の記事を読み、日本語に訳す。
第6回	プリント1②	翻訳と講読を続ける。
第7回	プリント1③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第8回	プリント2①	社会関係の記事を読み、日本語に訳す。
第9回	プリント2②	翻訳と講読を続ける。
第10回	プリント2③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第11回	プリント3①	文化関係の記事を読み、日本語に訳す。
第12回	プリント3②	翻訳と講読を続ける。
第13回	プリント3③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第14回	読解力テストと講評	読解力テストの実施とテスト後の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
三潴正道『論説体中国語読解力養成講座』の第Ⅱ部論説体解析講座の練習問題を各自で翻訳し、第2回から第4回までの授業に備える、また、プリント教材（報道記事など）を読み、翻訳し、第5回から第13回までの授業に備えておく。本授業の準備・復習時間は、各1〜2時間程度。

【テキスト（教科書）】
プリント教材。

【参考書】
三潴正道『論説体中国語読解力養成講座－新聞・雑誌からインターネットまで』東方書店2010年

【成績評価の方法と基準】
第Ⅱ部論説体解析講座の練習問題の翻訳（20％）と学期末に実施する読解力テスト（80％）で達成度を判定する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。授業への出席は成績評価の大前提となる。

【学生の意見等からの気づき】
中国語そのものだけでなく、記事内容の背景についても十分に説明するよう心がけたい。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Chinese Application I〜IV are the Chinese courses for intermediate learners who have completed the SA (Study Abroad) program. The aim of Chinese Application I〜IV is to maintain and improve the Chinese communication skills which are acquired in the SA program. To achieve this aim, it is important to develop the four skills of listening, speaking, reading and writing. In this course, we will mainly improve the reading skill.
We will mainly read the news or critique in Chinese newspapers or magazines.
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants should be able to efficiently read news articles and critiques using dictionaries and the Internet.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, participants will be expected to translate exercises for reading comprehension（in the 2nd to 4th classes）、to read and translate specified news articles（in the 5th to 13th classes）. Your study time will be one or two hours.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated according to the following process: Translation of basic exercises (20%) and reading comprehension test conducted at the end of the semester (80%)
.

LANc300GA（中国語 / Chinese language education 300）

中国語アプリケーションII

張　勝蘭

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞く、話す」という四技能をバランスよく育成することが必要であるが、本授業では主に「書く」能力を重点的に育成する。具体的には、作文や翻訳を行う際に注意すべきことをルール化して編纂されたテキストを用い、そこに提示されたルールを講師が解説し、そのルールを応用した各種の練習問題に取り組むことで作文力の育成を図る。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。

【到達目標】
本授業の到達目標は以下の通りである。
(1) テキストに提示されている説明を精読し、中国語文法の特徴を深く理解する。
(2) 日文中訳や並べ替え問題等の練習を通じて、難易度の高い中国語文を適切に作ることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は、講義形式と演習形式を組み合わせて行う。また、受講生が発表を行う機会も設ける。練習問題へのフィードバック（解説・コメント等）や質問の受け付けは毎回の授業時に行う。授業時以外にも、必要に応じてメールや学習支援システムで随時フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	シラバス及び授業概要の確認（本授業の意義と目的、授業概要、授業計画、成績評価方法など）
2	第1課、第2課	中国語作文をする際に必要となる基本的文法事項の確認
3	第3課、第4課	所在・存在の表現、程度副詞“很”の機能、“吗”の使用条件、日中両言語の勧誘表現、「何か／どこか／だれか」の訳し方
4	第5課、第6課	疑問詞＋名詞の用法、疑問詞呼応構文、動詞の省略可能性、適切な動詞を補う必要性
5	第7課、第8課	多用される“来”と“去”、「動目」構造の語の特徴、「思う」を表す語の種類、動詞の重ね型
6	第9課、第10課	文脈に隠れた代名詞、“这么／那么”が必要な場合、副詞“就”の用法、副詞“才”の用法
7	第11課、第12課	副詞“都”の用法、副詞“只”の用法、副詞“也”の用法、副詞“再／又／还”の用法、副詞“再”の用法
8	第13課、第14課	「…から」と“从…”の対応関係、「…まで」と“…到”の対応関係、動詞後の“…到”、日中両言語のコピュラ文、“是…的”構文
9	第15課、第16課	「で／に／から／と／まで」を表す中国語の介詞、介詞句を含む文の否定、「…について」の表し方、「ちょっと・少し」の表し方、形容詞の動詞化および命令化
10	第17課、第18課	量詞の出現情況、数量の位置、形容詞を用いた過去事態の表現法、結果状態を表す“了”、過去の習慣的動作と“了”
11	第19課、第20課	補語の使用における動詞の重要性、日本語の観点からは訳出しにくい補語、“要”の使用条件、可能性を表す“会”、可能を表す“能”“会”“可以”
12	第21課、第22課	“被”構文の諸特徴、日本語の受身表現と“被”構文の対応関係、日本語の自動詞受身文の中国語での表現法、“把”構文の使用条件、“把”構文の使用制限
13	第23課、第24課	授受表現の特徴、目的表現の後置、将然表現、主体表現としての“人”、道具・手段や原因を表す「で」、否定と肯定の入れ替え、逆転の発想
14	全体のまとめ	試験とその解説、学習内容のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業開始後は、テキストの復習を十分に行い、学習内容の定着を図ること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
相原茂（著）2006『作文ルール66　日中翻訳技法』朝日出版社（2,300円＋税）

【参考書】
・劉月華（他）2019『実用現代漢語語法（第三版）』北京：商務印書館
・相原茂（他）2016『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書　新訂版』東京：同学社
・木村英樹2017『中国語はじめの一歩〔新版〕』（ちくま学芸文庫）東京：筑摩書房
・三宅登之2012『中級中国語　読みとく文法』東京：白水社
・守屋宏則（他）2019『やさしく くわしい 中国語文法の基礎［改訂新版］』東京：東方書店

【成績評価の方法と基準】
・平常点を50%、期末試験を50%として合計100点満点とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の中国語習熟度を適宜確認しつつ、授業を進めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
PC等を利用する可能性があるが、講師が必要に応じて準備する。

【その他の重要事項】
・本授業は、原則として日本語母語話者向けの授業である。そのため、中国語母語話者（留学生等）の受講は推奨しない。
・本授業は、全回の出席が評価の前提である。即ち、欠席は原則的に認めない。教育実習等のやむを得ない事情がある場合は、各種証明書を提出するなど、各自で然るべき対応を取ること。
・適宜、補足資料を配付することもあるが、指定したテキストは必ず購入の上、毎回持参すること。
・授業の進み具合により、授業内容を調整することがありますが、必ず事前に周知する。

【Outline (in English)】
【Outline】
Chinese Application I〜IV are the Chinese courses for intermediate learners who have completed the SA (Study Abroad) program. The aim of Chinese Application I〜IV is to maintain and improve the Chinese communication skills which are acquired in the SA program. To achieve this aim, it is important to develop the four skills of listening, speaking, reading and writing. In this course, students will mainly improve their writing skills. We use the textbook which shows various Japanese-Chinese translation rules and do a lot of composition exercises.
【Goal】
The goals of this course are as follows:
(1) To understand the Chinese grammar through reading explanations shown in the textbook.
(2) To be able to appropriately compose complicated Chinese sentences through exercises such as Japanese-Chinese translation, word order, etc.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】
・After every class, students are required to review the textbook.
・Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria】
・Grading will be decided based on in-class contribution (50%) and term-end test (50%).

LANc300GA（中国語 / Chinese language education 300）

中国語アプリケーションIII

周　重雷

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベル中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞くと、話す」という四技能をバランス良く育成することが必要であるが、本授業では主に「話す」能力を重点的に育成する。

【到達目標】
本授業の到達目標は以下の通りである：
１、正確な発音で中国語を話す。
２、日常会話を流暢に話す。
３、留学や就職などのために高度の会話能力を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
１、テーマを決めて、基本パターンをチェックする。
２、テーマに沿って、様々な会話パターンを作る。
３、受講者がそれぞれのパターンを使って授業内発表をする。
４、総括する。
課題などのフィードバックは授業時間に、もしくはメールにて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	１、シラバスの配布 ２、中国語による自己紹介
第2回	文章の読解・日常用語（１）	１、短い文章を読み、文法の基本を確認する ２、簡単な日常会話を練習する
第3回	文章の読解・日常用語（２）	１、会話文を朗読し、発音をチェックする ２、言い回しを使って日常会話を練習する
第4回	文章の読解・日常会話（３）	１、文章を読み、文法の基本を確認する ２、簡単な日常会話を練習する
第5回	授業内発表（１）	教師と一対一で会話する、もしくはグループでシミュレーションをする
第6回	文章の読解・日常用語（４）	１、文章を朗読し、発音をチェックする ２、日常会話を練習する
第7回	授業内発表（２）	教師と一対一で会話する、もしくはグループで発表する
第8回	実力テスト	HSK問題を解く
第9回	解説	HSK問題の解説を行う
第10回	文章の読解・日常会話（５）	１、文章の読解をする ２、日常会話の練習をする
第11回	授業内発表（３）	先生と一対一で面接のシミュレーションをする
第12回	文章の読解・日常会話（６）	１、長文を読む ２、日常会話をする
第13回	授業内発表（４）	スピーチの個人発表をする
第14回	試験・まとめ	試験および各会話パターンの復習と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テーマをよく確認し、流暢に発表できるように準備する。本授業の準備時間は２時間を標準とします。
また作文の課題も２回ほど課される。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布

【参考書】
劉月華　他『実用現代漢語語法（増訂版）』北京・商務印書館
日中・中日辞書（電子機器も可）

【成績評価の方法と基準】
期末テスト：60％
発表：40％

【学生の意見等からの気づき】
要望に応じて会話パターンの変更も可能。
基本は対面授業。

【学生が準備すべき機器他】
スマートフォンは必須

【その他の重要事項】
HSKや中国語検定の受験を推奨される。
留学生の受講をも歓迎する。

【Outline (in English)】
Chinese Application Ⅰ〜Ⅳ are the Chinese courses for intermediate learners who have completed the SA(Study Abroad) program.the aim of Chinese Application is to maintain and improve the Chinese communication skills which are acquired in the SA program.To achieve this aim,it is important to develop the four skills of listening,speaking,reading and writing. In the course, we will mainly improve to speaking skill.
We should achieve to these levels:
Talk by accurate pronunciation.
Talk the daily conversation well.
Achieve to the high-level that we can use the language for study-abroad or working.
We should prepare and review about two hours a week.
We maybe do the task of writing about two times.
Term-end test:60%
presentation:40%

LANc300GA（中国語 / Chinese language education 300）

中国語アプリケーションⅣ

鈴木　靖

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　中国語アプリケーションは、SA（Study Abroad）プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。
　中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞く、話す」という四技能をバランスよく育成することが必要であるが、本授業では主にe-Learningを利用した「聞く」力と「読む」力を重点的に育成する。

【到達目標】
　HSK4・5級の高スコア取得に必要な「聴力」（リスニング力）と「閲読」（リーディング力）を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業はe-Learningや過去問による事前学習と教室での発音練習や解説を組み合わせて行う。
　授業の具体的な進め方は、次のとおり。
〔授業前の事前学習〕
　授業前にパソコンまたはスマートフォンを使い、HSKの「聴力」問題の指定範囲のディクテーションと「閲読」問題の予習を行う
〔授業の進め方と方法〕
　①前回の復習のための小テスト
　②「聴力」問題のリピート練習と解説
　③「閲読」問題の解答と解説
〔課題等に対するフィードバックの方法〕
　課題等に対するフィードバックの方法としては、受講生全員が参加するLINEのグループを用意し、これを通じて全員または個別にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的と進め方について説明した後、事前学習に使用するe-Learning教材の利用方法を解説する
第2回	HSK4級対策①	・聴力問題第一部分 ・閲読問題第一部分
第3回	HSK4級対策②	・聴力問題第二部分（上） ・閲読問題第二部分
第4回	HSK4級対策③	・聴力問題第二部分（下） ・閲読問題第三部分（上）
第5回	HSK4級対策④	・聴力問題第三部分（上） ・閲読問題第三部分（中）
第6回	HSK4級対策⑤	・聴力問題第三部分（下） ・閲読問題第三部分（下）
第7回	HSK4級模擬試験	HSK4級対策の学習成果を確認するため、過去問を使って模擬試験を行う
第8回	HSK5級対策①	・聴力問題第一部分（上） ・閲読問題第一部分
第9回	HSK5級対策②	・聴力問題第二部分（下） ・閲読問題第二部分（上）
第10回	HSK5級対策③	・聴力問題第二部分（上） ・閲読問題第二部分（下）
第11回	HSK5級対策④	・聴力問題第二部分（中） ・閲読問題第三部分（上）4
第12回	HSK5級対策⑤	・聴力問題第二部分（下） ・閲読問題第三部分（中）
第13回	HSK5級対策⑥	・書写 ・閲読問題第三部分（下）
第14回	HSK5級模擬試験	HSK5級対策の学習成果を確認するため、過去問を使って模擬試験を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業の前に下記の事前学習を行うこと。
①教材ページ上に用意されたe-Learning教材を使い、HSKの「聴力」問題の中から毎回指定された範囲のディクテーションを行う
②教材ページ上に用意された問題冊子を使い、HSKの「閲読」問題の中から毎回指定された範囲の予習を行う

【テキスト（教科書）】
　テキストは使用せず、教材用ページに用意したe-Learning教材やHSKの問題冊子などを利用する。教材用ページのURLと利用方法については、第一回のガイダンス時に説明する

【参考書】
・劉月華『現代中国語文法総覧』（くろしお出版）
・中国教育部中外語言交流合作中心著・株式会社スプリックス編『中国語検定HSK公式過去問集4級 2021年度版』（スプリックス、2021年）
・中国教育部中外語言交流合作中心著・株式会社スプリックス編『中国語検定HSK公式過去問集5級 2021年度版』（スプリックス、2021年）

【成績評価の方法と基準】
①事前学習（ディクテーション・リーディング）の実施状況と小テストの成績（60％）
③HSK模擬試験の成績（40％）この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
　HSKの必修単語を覚えるのが難しいという声が多く寄せられたので、単語やフレーズを復習するe-Learningを用意した。

【学生が準備すべき機器他】
　e-Learningによる事前学習にはパソコンが必要となる。

【Outline (in English)】
〔Course outline〕
Chinese Application Ⅰ～Ⅳ are the Chinese courses for intermediate learners who have completed the SA (Study Abroad) program. The aim of Chinese Application Ⅰ～Ⅳ is to maintain and improve Chinese communication skills which were acquired in the SA program. To achieve this aim, it is important to develop the four language skills, of listening, speaking, reading and writing.
This course will focus mainly upon improving listening and reading skills through the use of e-Learning and past exams.
Chinese Application Ⅳ is a Chinese course designed specifically for the students who want to prepare for the HSK, Chinese proficiency test, level 4 and 5. This course will focus upon expanding vocabulary and improving listening and reading skills through the use of e-Learning and past exams. Students will also do mock examinations of the HSK through the use of a test simulator to help students prepare for the HSK tests.
〔Learning Objectives〕
The goal of this course is to develop the students' ability to understand and use Chinese language at a level required of the HSK6.
〔Learning activities outside of classroom〕
Students will be expected to have completed the required assignments before each class. These assignments are expected to require four or more hours for students to complete.
〔Grading Criteria /Policy〕
Grading will be decided based on assignments(80%) and mock examinations(20%).

LANs100GA（スペイン語 / Spanish language education 100）

スペイン語コミュニケーションⅠ

ＯＳＮＯ　Ｉ　ＤＥ　ＳＡＳＡＫＵＢＯ　Ｈ

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
The objective of this course is for students to become familiar with the spoken Spanish language.

【到達目標】
By the end of this course, students should be able to understand and engage in simple everyday conversations in Spanish.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Para conseguir el objetivo arriba mencionado,además de usar el libro de texto fijado para esta clase,yo les proporcionaré a los alumnos materiales audiovisuales necesarios para las prácticas orales, fundamentalmente. Al comienzo de cada lección se dará comentarios y las respuestas de las tareas dadas.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Comunicación	Presentación del curso. Alfabeto. Ortografía y pronunciación.Saludos y presentaciones.
2	Comunicación	Nombres propios. Números (I). Cultura : Nombres y apellidos.
3	Comunicación	Género y número de los sustantivos. Práctica. Expresiones con el artículo determinado. Práctica de los pronombres personales de sujeto.
4	Comunicación	Los adjetivos posesivos.El presente de indicativo - verbo tener. Los números (I)
5	Comunicación	Presente de indicativo - verbos regulares. Oraciones interrogativas y negativas.
6	Comunicación	Las preposiciones (I). Números (II). Cultura : biografía breve de personajes históricos. Los interrogativos (I)
7	Comunicación	Expresiones con el artículo determinado e indeterminado. Práctica de los adjetivos posesivos y calificativos.
8	Comunicación	Los adjetivos demostrativos. El presente de indicativo de los verbos SER/ESTAR/HABER Números (III).
9	Comunicación	Los verbos: IR/VER/HACER/PONER/SALIR La hora. Los días de la semana y los meses Los interrogativos (II)
10	Comunicación	Los verbos irregulares con cambio vocálico. Entrevista al compañero.
11	Comunicación	Los pronombres personales en función del objeto directo. Hablar del tiempo meteorológico
12	Comunicación	Los verbos: OÍR/VENIR/SABER/CONOCER. Los pronombre en función de complemento indirecto. receta de cocina: tortilla de patatas española y ceviche peruano
13	Comunicación	Los verbos:DAR/DECIR/TRAER Regalo de cumpleaños
14	Examen final	Examen final de conversación grupal

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
The standard preparation and review time for this class are 4 hours each.

【テキスト（教科書）】
Español en imágenes (1)　Eugenio de Prado, Hanako Saito, Shinji Nakamichi /イメージスペイン語
Editorial Asahi / 朝日出版社

【参考書】
辞書(電子辞書可、初修者には紙辞書が良いとされています)

【成績評価の方法と基準】
-Exams (50%)
-The active class participation of students (50%)

【学生の意見等からの気づき】
Reforzar el uso del material complementario elaborado por la profesora y crear un ambiente de confianza entre los estudiantes para lograr una mejor comunicación entre ellos.

【Outline (in English)】
【Course outline】
Basic Spanish communication.
【Learning Objectives】
The purpose of this course is to become familiar with spoken Spanish. We will put into practice, through simple conversations, the grammatical knowledge that we have already acquired and those we will gain. In addition, we will take care of the correct pronunciation and intonation.
At the end of this course, students will be able to understand and develop simple conversations about daily life in Spanish.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class, it is mandatory to review the topics covered.
It is necessary to put into practice and experience what has been learned in each class to achieve the stated objective.
The standard preparation and review time for this class is 4 hour.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be calculated based on exams (50%) and the class contribution of students (50%).

LANs200GA（スペイン語 / Spanish language education 200）

スペイン語コミュニケーションII

OSNO I DE SASAKUBO H

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Our goal is to increase the students' ability to understand and express themselves mainly orally./
Nuestro objetivo es elevar la capacidad de comprensión y expresión, fundamentalmente oral de los alumnos.

【到達目標】
We propose that, at the end of this course, students will be able to understand and express themselves in a variety of communicative situations./
Nos proponemos que, al final de este curso, los alumnos serán capaces de comprender y expresarse ralmente en diversas situaciones comunicativas.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Para conseguir el objetivo arriba mencionado,además de usar el libro de texto fijado para esta clase,yo les iré dando a los alumnos el material necesario para las prácticas orales, fundamentalmente.
Al comienzo de cada lección se dará comentarios y las respuestas de las tareas dadas.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Comunicación Hablar de las vacaciones de primavera	Presentación del curso. Repaso de verbos SABER / CONOCER
2	Comunicación La compra	Objeto indirecto, ropa, colores
3	Comunicación La rutina	Verbos reflexivos
4	Comunicación Planear un corto viaje	Expresiones de obligación
5	Comunicación Hablar de gustos	Verbos GUSTAR, DOLER y comunes a estos
6	Comunicación Hablar de pertenencias y practicar el uso de frases emotivas	Adjetivos posesivos II
7	Comunicación Comparar, universidades del mundo, deportes, tallas, etc.	Los comparativos
8	Comunicación Expresar emociones	Frases exclamativas. Los pronombre indefinidos
9	Comunicación Hablar del pasado	Pretérito indefinido de indicativo
10	Comunicación Presentar un personaje histórico	Pretérito indefinido Números 100 - 2,000
11	Comunicación Hablar de cuando era niño	El pretérito imperfecto
12	Comunicación ¿ Cómo era tu escuela?	Usos del pretérito imperfecto
13	Comunicación Hablar del estado de las cosas	El participio pasado El pretérito perfecto El pretérito pluscuamperfecto
14	Examen final	Entrevista al compañero

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
The standard preparation and review time for this class is 4 hours each.

【テキスト（教科書）】
"Español en imágenes" - Eugenio del Prado, Hanako Saito, Shinji Nakamichi ,
Editorial Asahi
(ISBN978-4-255-55102-9)

【参考書】
辞書(電子辞書可、初修者には紙辞書が良いとされています)

【成績評価の方法と基準】
-Exams (50%)
-The active class participation of students (50%)

【学生の意見等からの気づき】
Reforzar el uso de material complementario elaborado por la profesora.

【Outline (in English)】
【Course outline】
Intermediate communication Spanish.
【Learning Objectives】
Our objective is to increase the capacity of comprehension and expression, fundamentally oral, of the students. Enlargement and enrichment of your vocabulary will be one of our main objectives. We propose that week after week of class, students acquire a greater ability to understand and express themselves orally in very different situations.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class, it is mandatory to review the topics covered.
It is necessary to put into practice and experience what has been learned in each class to achieve the stated objective.
The standard preparation and review time for this class is 4 hour.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be calculated based on exams (50%) and the class contribution of students (50%).

LANs200GA（スペイン語 / Spanish language education 200）

スペイン語コミュニケーションIII

OSNO I DE SASAKUBO H

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
The objective of this course is, as in the previous courses, to increase the oral comprehension capacity and ability to express.

【到達目標】
They have to considerably increase their vocabulary and communication skills to prepare for the trip to Spain.
Before that time, we aim to reach a level that allows them to make the most of their stay and their classes in Spain.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Para lograr el objetivo arriba mencionado, además de usar el libro de texto indicado para esta clase, yo les iré dando a los alumnos el material necesario para las prácticas orales, fundamentalmente.
Al comienzo de cada lección se dará comentarios y las respuestas de las tareas dadas.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Comunicación Hacer mandatos, solicitudes, consejos	Presentación del curso. Repaso. EL IMPERATIVO I EL CONDICIONAL
2	Comunicación Hablar de deseos	EL PRESENTE DEL SUBJUNTIVO I
3	Comunicación Dar opiniones	EL PRESENTE DEL SUBJUNTIVO II
4	Comunicación Hablar de dudas	EL PRESENTE DEL SUBJUNTIVO III
5	Comunicación Expresión de convicción creencias y seguridad	Subjuntivo o indicativo en oraciones sustantivas
6	Comunicación Hablar de concesiones	INDEFINIDO DE INDICATIVO
7	Comunicación Preguntar por algo o alguien	LOS PRONOMBRE INDEFINIDOS
8	Comunicación Dar, recibir y/o pedir consejos y órdenes	IMPERATIVO
9	Comunicación Hablar del pasado IV	EL PRETÉRITO PLUSCUAMPERFECTO DE INDICATIVO
10	Comunicación Hablar de deseos	EL PRESENTE DE SUBJUNTIVO
11	Comunicación Hablar de deseos, anhelos y esperanzas	EL USO DEL SUBJUNTIVO EN ORACIONES RELATIVAS Y ADVERBIALES
12	Comunicación Expresar opiniones	PRETERITO PERFECTO DEL SUBJUNTIVO
13	Comunicación Dar opiniones, dar y recibir consejos en condiciones irreales	IMPERFECTO DEL SUBJUNTIVO
14	Examen final	Entrevista a un hispanohablante

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
The standard preparation and review time for this class are 4 hours each.

【テキスト（教科書）】
Español en imágenes 2 - Eugenio del Prado, Hanako Saito, Shinji Nakamichi.
Editorial Asahi
(ISBN978-4-255-55132-6)

【参考書】
辞書(電子辞書可、初修者には紙辞書が良いとされています)

【成績評価の方法と基準】
-Exams (50%)
-The active class participation of students (50%)

【学生の意見等からの気づき】
Reforzar el uso de material complementario elaborado por la profesora y crear un ambiente de confianza para mejorar su comunicación entre ellos.

【Outline (in English)】
【Course outline】
Advanced communication Spanish.
【Learning Objectives】
Our objective is to increase the capacity of comprehension and expression, fundamentally oral, of the students.
They have to considerably increase their vocabulary and communication skills to prepare for the trip to Spain. Before that time, we aim to reach a level that allows them to make the most of their stay and their classes in Spain.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class, it is mandatory to review the topics covered.
It is necessary to put into practice and experience what has been learned in each class to achieve the stated objective.
The standard preparation and review time for this class is 4 hour.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be calculated based on exams (50%) and the class contribution of students (50%).

LANs300GA（スペイン語 / Spanish language education 300）

スペイン語アプリケーション

ＯＳＮＯ　Ｉ　ＤＥ　ＳＡＳＡＫＵＢＯ　Ｈ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
The objective of this course is to raise the level of the Spanish language of each student, through reading and analysis of written and oral texts, etc.

【到達目標】
Improve your communication skills through the Spanish language.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Para conseguir los objetivos arriba mencionados, semana tras semana iremos avanzando haciendo uso del material que yo iré elaborando y repartiendo a los alumnos.
Al comienzo de cada lección se dará comentarios y las respuestas de las tareas dadas.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Aplicación	Planteamiento del curso. Exposición sobre la experiencia con el español.
2	Aplicación	Lectura y discusión: El español en el mundo. Spanglish
3	Aplicación	Presentación del español de un país determinado
4	Aplicación	El origen de los nombres del mundo hispano. Los hipocorísticos (nombres de cariño)
5	Aplicación	La familia I
6	Aplicación	La familia II
7	Aplicación	La residencia de ancianos
8	Aplicación	Examen Parcial Proyección de la película "El agente topo" I
9	Aplicación	Proyección de la película "El agente topo" II Discusión
10	Aplicación	Idiomas originarios del mundo hispano
11	Aplicación	El idioma quechua y su resistencia a través de la música
12	Aplicación	Presentación de un idioma originario
13	Aplicación	Las universidades de Hispanoamérica
14	Aplicación	Examen final: Presentación de una universidad de Hispanoamérica

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
The standard preparation and review time for this class are 4 hours each.

【テキスト（教科書）】
プリント使用

【参考書】
SHOGAKUKAN DICCIONARIO ESPAÑOL-JAPONÉS Segunda edición

【成績評価の方法と基準】
-Exams (50%)
-The active class participation of students (50%)

【学生の意見等からの気づき】
Seguir mejorando en la elaboración de materiales originales del gusto e interés de los alumnos.

【Outline (in English)】
【Course outline】
Application course.
【Learning Objectives】
The objective of this course is to maintain and raise the level of the Spanish language that students have reached during their learning either in Japan or in a Spanish-speaking country. Fields that we are going to deal with and skills that we are going to try to reinforce as far as possible: oral and written comprehension, grammar, and vocabulary. At the end of this course, students will be able to communicate in Spanish, both written and orally, in specific and daily life situations.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class, it is mandatory to review the topics covered.
It is necessary to put into practice and experience what has been learned in each class to achieve the stated objective.
The standard preparation and review time for this class is 4 hour.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be calculated based on exams (50%) and the class contribution of students (50%).

LANs300GA（スペイン語 / Spanish language education 300）

スペイン語アプリケーション

ＯＳＮＯ　Ｉ　ＤＥ　ＳＡＳＡＫＵＢＯ　Ｈ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
In this course, students will be able to write narrative texts applying their previous and new knowledge.

【到達目標】
At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Para conseguir los objetivos trazados, semana tras semana iremos avanzando haciendo uso de los cuentos propuestos en el libro de texto. Además,al comienzo de cada lección se dará comentarios y las respuestas de las tareas dadas.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Presentación del curso	Presentación del curso y la explicación de método de evaluación. Exposición de los estudiantes sobre su experiencia con el idioma español.
2	Aplicación "El padre el hijo y el burro"	Pretérito imperfecto. Lectura y análisis del cuento
3	Aplicación "El padre el hijo y el burro"	Pretérito imperfecto. Hablar del club al que integra.
4	Aplicación "El padre el hijo y el burro"	Pretérito imperfecto Redacción de cuando era estudiante de instituto
5	Aplicación "Mis galletas"	Pretérito indefinido Lectura y análisis del cuento
6	Aplicación "Mis galletas"	Hablar sobre lo que se hizo la semana pasada. Escribir un texto usando el pretérito indefinido.
7	Aplicación "El billete de 50 dólares"	Pretérito perfecto y pluscuamperfecto. Lectura y análisis del cuento
8	Aplicación "El billete de 50 dólares"	Hablar de lo que se hizo esta semana.
9	Aplicación "El billete de 50 dólares"	Redacción de un usando el pretérito pluscuamperfecto.
10	Aplicación "El último trabajo"	Lectura y análisis del cuento. Pretéritos de indicativo
11	Aplicación "El último trabajo"	El relativo "que" y"que"
12	Aplicación "Una magnífica cosecha"	Lectura y análisis del cuento.El reflexivo "se"
13	Aplicación "Una magnífica cosecha"	Hablar de la comida favorita. Escribir una receta
14	Examen final	Examen (Presentación de un cuento del mundo hispano)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
The standard preparation and review time for this class are 4 hours each.

【テキスト（教科書）】
CUÉNTAME 8 cuentos para disfrutar aprendiendo español.
Nivel intermedio
Editorial Asahi

【参考書】
SHOGAKUKAN DICCIONARIO ESPAÑOL-JAPONÉS Segunda edición

【成績評価の方法と基準】
-Exams (50%)
-The active class participation of students (50%)

【学生の意見等からの気づき】
Seguir mejorando en la elaboración de materiales originales del gusto e interés de los alumnos.

【Outline (in English)】
【Course outline】
Application course.
【Learning Objectives】
This course is aimed at those students who have sufficiently acquired basic Spanish grammar and conversation skills. Applying their previous and new knowledge they will be able to write narrative texts. Fields that we are going to deal with and skills that we are going to try to reinforce as much as possible are below: comprehension and expression, oral and written, grammar and vocabulary.
At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class, it is mandatory to review the topics covered.
It is necessary to put into practice and experience what has been learned in each class to achieve the stated objective.
The standard preparation and review time for this class is 4 hour.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be calculated based on exams (50%) and the class contribution of students (50%).

LANs300GA（スペイン語 / Spanish language education 300）

【2026年度休講】スペイン語アプリケーション

ＯＳＮＯ　Ｉ　ＤＥ　ＳＡＳＡＫＵＢＯ　Ｈ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
In this course, students will be able to write narrative texts applying their previous and new knowledge.

【到達目標】
At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Para conseguir los objetivos trazados, semana tras semana iremos avanzando haciendo uso de los cuentos propuestos en el libro de texto. Además,al comienzo de cada lección se dará comentarios y las respuestas de las tareas dadas.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Aplicación	Presentación del curso y la explicación de método de evaluación. Exposición de los estudiantes sobre su experiencia con el idioma español.
2	Aplicación "Una magnífica cosecha"	Lectura y análisis del cuento.El reflexivo "se"
3	Aplicación "Una magnífica cosecha"	Hablar sobre la comida favorita. Receta de cocina
4	Aplicación "La morcilla"	Lectura y análisis de cuento Introducción al presente del subjuntivo
5	Aplicación "La morcilla"	Hablar sobre deseos y anhelos.
6	Aplicación "La morcilla"	Opiniones sobre diversos temas de la actualidad
7	Aplicación "La morcilla"	Escribir una carta a un amigo.
8	Aplicación "El pintor Nocha"	Lectura y análisis del cuento Futuro/condicional
9	Aplicación "El pintor Nocha"	Hablar sobre su futuro
10	Aplicación "El pintor Nocha"	Hacer suposiciones del futuro.
11	Aplicación "El rabino"	Lectura y análisis del cuento
12	Aplicación "El rabino"	Pretéritos imperfecto y pluscuamperfecto de subjuntivo.
13	Aplicación "El rabino"	Hablar sobre lo que harán con el español aprendido
14	Aplicación	Examen final (Presentación del cuento redactado por los mismos alumnos)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
The standard preparation and review time for this class are 4 hours each.

【テキスト（教科書）】
CUÉNTAME 8 cuentos para disfrutar aprendiendo español.
Nivel intermedio
Editorial Asahi

【参考書】
SHOGAKUKAN DICCIONARIO ESPAÑOL-JAPONÉS Segunda edición

【成績評価の方法と基準】
-Exams (50%)
-The active class participation of students (50%)

【学生の意見等からの気づき】
Seguir mejorando en la elaboración de materiales originales del gusto e interés de los alumnos.

【Outline (in English)】
【Course outline】
Application course.
【Learning Objectives】
This course is aimed at those students who have sufficiently acquired basic Spanish grammar and conversation skills. Applying their previous and new knowledge they will be able to write narrative texts. Fields that we are going to deal with and skills that we are going to try to reinforce as much as possible are below: comprehension and expression, oral and written, grammar and vocabulary.
At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class, it is mandatory to review the topics covered.
It is necessary to put into practice and experience what has been learned in each class to achieve the stated objective.
The standard preparation and review time for this class is 4 hour.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be calculated based on exams (50%) and the class contribution of students (50%).

LANs300GA（スペイン語 / Spanish language education 300）

スペイン語アプリケーション

ＯＳＮＯ　Ｉ　ＤＥ　ＳＡＳＡＫＵＢＯ　Ｈ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
In this course, students will be able to write narrative texts applying their previous and new knowledge.

【到達目標】
At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Para conseguir los objetivos trazados, semana tras semana iremos avanzando haciendo uso de los cuentos propuestos en el libro de texto. Además,al comienzo de cada lección se dará comentarios y las respuestas de las tareas dadas.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Aplicación	Presentación del curso y la explicación de método de evaluación. Exposición de los estudiantes sobre su experiencia con el idioma español.
2	Aplicación "Una magnífica cosecha"	Lectura y análisis del cuento.El reflexivo "se"
3	Aplicación "Una magnífica cosecha"	Hablar sobre la comida favorita. Receta de cocina
4	Aplicación "La morcilla"	Lectura y análisis de cuento Introducción al presente del subjuntivo
5	Aplicación "La morcilla"	Hablar sobre deseos y anhelos.
6	Aplicación "La morcilla"	Opiniones sobre diversos temas de la actualidad
7	Aplicación "La morcilla"	Escribir una carta a un amigo.
8	Aplicación "El pintor Nocha"	Lectura y análisis del cuento Futuro/condicional
9	Aplicación "El pintor Nocha"	Hablar sobre su futuro
10	Aplicación "El pintor Nocha"	Hacer suposiciones del futuro.
11	Aplicación "El rabino"	Lectura y análisis del cuento
12	Aplicación "El rabino"	Pretéritos imperfecto y pluscuamperfecto de subjuntivo.
13	Aplicación "El rabino"	Hablar sobre lo que harán con el español aprendido
14	Aplicación	Examen final (Presentación del cuento redactado por los mismos alumnos)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
The standard preparation and review time for this class are 4 hours each.

【テキスト（教科書）】
CUÉNTAME 8 cuentos para disfrutar aprendiendo español.
Nivel intermedio
Editorial Asahi

【参考書】
SHOGAKUKAN DICCIONARIO ESPAÑOL-JAPONÉS Segunda edición

【成績評価の方法と基準】
-Exams (50%)
-The active class participation of students (50%)

【学生の意見等からの気づき】
Seguir mejorando en la elaboración de materiales originales del gusto e interés de los alumnos.

【Outline (in English)】
【Course outline】
Application course.
【Learning Objectives】
This course is aimed at those students who have sufficiently acquired basic Spanish grammar and conversation skills. Applying their previous and new knowledge they will be able to write narrative texts. Fields that we are going to deal with and skills that we are going to try to reinforce as much as possible are below: comprehension and expression, oral and written, grammar and vocabulary.
At the end of the course, students will be able to write a short narrative text and improve their communication skills in the Spanish language.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class, it is mandatory to review the topics covered.
It is necessary to put into practice and experience what has been learned in each class to achieve the stated objective.
The standard preparation and review time for this class is 4 hour.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be calculated based on exams (50%) and the class contribution of students (50%).

LANk100GA（朝鮮語 / Korean language education 100）

朝鮮語コミュニケーションⅠ

富所　明秀

配当年次／単位：1年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：グループ指定
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・春学期の学習内容を理解しているという前提で，文法と語彙をさらに学び，複雑な表現ができるようにつとめます.

【到達目標】
・授業で学んだ文の読み書きができ，声に出して言えるほか，自分で文を作り出す力（＝言いたいことが言える力）をだんだんと身につけていくことが目標です.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・「朝鮮語４」「朝鮮語６」「朝鮮語コミュニケーションⅠ」は共通教材を軸にリレー方式で行ないます．各課の学習事項が盛り込まれた作文練習は自宅でやってきてもらい，授業で答え合わせするのを原則とします．それぞれの授業で必要に応じ独自の教材も併用します.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	春学期の復習，第1課	語基の復習，話しことばと書きことば
2	第1課	接続形「～するから」，こそあどことばの用法，ピウプ不規則用言，「くださる」と「さしあげる」，「～してくださる」と「～してさしあげる」，よく用いられる謙譲形，「なる」の用法・その１
3	第2課	動作終了後の「～している」，禁止形（勧誘と命令の否定形），長い不可能形，他動詞と用いられる助詞「～に」，勧誘，命令をあらわすていねいな形，漢数字の粒読み，選択をあらわす助詞「～に」，「なる」の用法・その２
4	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます.
5	第3課	文中の疑問形「～する（の）か，～（の）か」，強調の表現「～のだ」，接続形「～するように」，存在詞と語尾の組み合わせ，感嘆をあらわすもう１つの形，方向をあらわす動詞，意思，推量をあらわす「～するつもりだから，～するはずだから」，助詞「～で，～に」
6	第4課	意思，推量をあらわすもう１つの形，接続形「～すると，～したら」，シオッ不規則用言，接続形「～していて」，接続形「～してこそ」，形容詞から動詞をつくる・その１，動詞のこそあどことば，「～したあとに，～してから」，やわらかい疑問詞疑問文，「～してしまう」，副詞をつくる語尾
7	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます.
8	第5課	用言の体言形・その１，「～することはする，～するにはする」，「～することにする」，「～しようと思う」，「～という」の短縮形，変化をあらわす助詞「～に」，いくつかの助詞，「～する方だ」，「～な方だ」，「～に比べて，～に比べると」，長い否定形，長い不可能形の助詞挿入
9	第6課	「～しようと思う」と「～という」の話しことば，「～したりする，～だったりする」，「～に行く」と「～にくる」，疑問詞の不定詞的用法，「～という」の後半省略形，用言のこそあどことばの用法，根拠をもった推量「～するようだ，～のようだ」，過去形の過去形（大過去形），推量をあらわす「～するはずだが」，助詞「～と」の話しことば，ヘヨ体の命令形，合成語の濃音化・その１
10	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます.
11	第7課	もう１つの疑問形，確認や同意をあらわす形，「～して」をあらわす２つの形・その１，接続詞「～ながら」，「～くなる，～するよう／～することになる」，指定詞の第Ⅲ語基のまとめ，指定詞の第Ⅲ語基のもう１つの形，用言の体言形を用いた表現・その１，助詞「～から」の用法，勧誘形「～しよう」
12	第8課	合成動詞「～していく」と「～してくる」，指定詞の否定形を用いた接続形，価格などをあらわす助詞「～で」，「～のもの」と濃音化，疑問形「～するのか」，命令形「～しろ，～せよ」，平叙形「～する，～である」
13	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます.
14	テスト	テスト

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・復習の時間を多く取ってください．何度も繰り返し書くこと，また恥ずかしがらずに声を出して読んでみることが，ことばを覚えることにもなり，「話す」第一歩となるのです.
・本授業の準備・復習時間は，合計１時間以上を標準とします.

【テキスト（教科書）】
・共通テキスト：内山政春『しくみで学ぶ中級朝鮮語』白水社

【参考書】
・教科書によって文法の説明方式が異なるので，指定のテキストに集中してください．春学期に用いた『しくみで学ぶ初級朝鮮語　改訂版』も参考書として活用してください．辞書は中辞典として小学館の『韓日辞典（旧：朝鮮語辞典)』，語彙数は少ないが文法・発音説明が充実しているものとして白水社の『コスモス朝和辞典』をお薦めします．後者は版元品切ですが，アマゾンで中古品を購入することができます．ただし悪徳業者に注意！ 評価が90パーセントに満たないところ（たとえばHave fun Japanなど）はすべて詐欺と断定してかまいません．在庫がないのに注文を受け，安いところから買って転売する，それができない場合向こうからキャンセルしてくるという手口です．

【成績評価の方法と基準】
・期末テストの成績によります（100%）．60点以上が合格です．

【学生の意見等からの気づき】
・授業の進度は当然ながら朝鮮語にまったく接したことのない初心者に合わせています．
・上の【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等)】では予習については触れませんでしたが，進度が早いと思う受講者は必要に応じて次回の項目に一通り目を通したり，練習問題の覚えていない単語を調べておくなり，各自努力をして授業の進度に合わせるようにしてください．
・作文練習をはじめとする練習問題の朝鮮語文はすべて出版社のサイトからダウンロードできる音声データに録音されています．解答をまとめて配布することはしません．音声データを聞き取って自分で解答を作るぐらいの意気込みで学びましょう．結果的に聞き取りの力も上達するはずです．
・やむを得ない事情以外での欠席を避けてください．

【その他の重要事項】
・既習者も，「わかっているから」と思わずに，はじめから学び直すつもりで真剣に授業に参加してください．

【Outline (in English)】
< Course outline >
In this class, we continue to learn basic grammar and vocabulary in detail on the premise what you learned in the spring semester have been mastered enough.
< Learning Objectives >
By the end of this course, students will be expected to master more complicated expressions in Korean.
< Learning activities outside of classroom >
After each class meeting, students will be expected to spend one hour to understand the course content.
< Grading Criteria/Policy >
Term-end examination (100%)

LANk200GA（朝鮮語 / Korean language education 200）

朝鮮語コミュニケーションII

梁　禮先

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「話す」「聞く」力の一層のレベルアップを計り、重なる「話す」「聞く」訓練を通して、自信を持って自然な朝鮮語の会話を身に付けていくことを目指します。今まで習った朝鮮語の力を、会話で様々に応用できるように、そのスキルを一層磨いていきます。

【到達目標】
SAに行った時のために、ある程度の生活会話が可能になることがこの授業の到達目標です。自分で考えてあらゆる場面で自然な表現ができるように、会話の力を磨いていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　会話中心に授業を進めていきます。会話体の言葉に慣れていくように、話す訓練などを通して身に付けていけるようにします。また、一年間習った朝鮮語の語彙・文法などを使って、自分で文章を考えて言葉にする訓練も繰り返していく予定です。
　課題等に対するフィードバック方法は、学習支援システムなどを利用します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業の進め方と簡単に復習	授業の進め方についての説明をします。
第2回	お久しぶりです	課題と会話とあいさつ文についての説明。
第3回	病気のとき	課題と会話と病気に関する単語などの説明。
第4回	私の家族	課題と会話とその説明について。
第5回	歌で習う朝鮮語	課題と韓国の歌から朝鮮語を習う。
第6回	天気について	課題と会話と四季などについての説明。
第7回	今日は何をしますか？	課題と会話と会話の言い回しの説明。
第8回	今日は何をするの？	課題と会話とバンマルについて。
第9回	遊園地にいきましょう	課題と会話とその説明について。
第10回	学校で	課題と会話とその説明について。
第11回	郵便局で	課題と会話とその説明について。
第12回	ホテルで	課題と会話とその説明について。
第13回	美容院で	課題と会話の練習とその説明について。
第14回	期末評価	期末テスト

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回課題について準備すること。また、事前に出すレポートもやってくること。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
梁　禮先「朝鮮語コミュニケーションII」とプリント（テキスト・プリントともに自家製教室用教材)

【参考書】
朝鮮語辞書、韓国に関連のある歴史・文化などの書籍

【成績評価の方法と基準】
朝鮮語で積極的に発言をすること。
発表・課題・小テスト・平常点(30%)と期末テスト(70%)を総合評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
※成績に関わらず30%以上の欠席の場合は不合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
会話と発音を上達するためには、音読が一番効果がありますので、音読に力を入れてください。
語学学習での予習は大事です。必ず、予習と課題をやってから授業に参加してください。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【その他の重要事項】
諸事情により、授業進行形式と内容が少々変わることがあります。

【Outline (in English)】
Course outline > The goal of this course is to improve your level of "speaking" and "listening" and to acquire the skills needed to have a natural Korean conversation with confidence through repetition of "speaking" and "listening" training. < Learning Objectives > To be able to apply Korean language skills, which you learned until today, to conversations in various ways, we will continue to hone our skills. The goal of this class is to be able to have a certain level of everyday conversation. < Learning activities outside of classroom > I will give you an assignment every time. Repeat reading practice and so on. < Grading Criteria/Policy > Term-end examination : 70 %,little exams and in class contribution: 30%.

LANk200GA（朝鮮語 / Korean language education 200）

朝鮮語コミュニケーションIII

富所　明秀

配当年次／単位：2年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：グループ指定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・１年次で学んだ文法と語彙の基礎の上に，「読む，書く，聞く，話す」の各能力を総合的に向上させることを目的とします．
・２年次秋学期のＳＡに備えます。

【到達目標】
・ＳＡに通用する語学力の習得，具体的には韓国外国語大「韓国語文化教育センター」の「３級」に編入できることを目標とします．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・「朝鮮語７」と「朝鮮語コミュニケーションⅢ」は共通教材を軸にリレー方式で行ないます．各課の学習事項が盛り込まれた作文練習は自宅でやってきてもらい，授業で答え合わせするのを原則とします．それぞれの授業で必要に応じ独自の教材も併用します．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	導入	前学期の復習と今学期の方針の説明をします．
2	第9課	ハンダ体，間接話法（引用形）・その２，第Ⅲ語基と合成動詞，「～しはじめる」，書きことばでの接続形「～し」，態と受身形，助詞「～の」，話し手の主張をあらわす形，母音「エ」の省略
3	第10課	数量の強調や概数などをあらわす助詞，「～してから」，間接話法と第Ⅲ語基，特別な否定形をもつ用言の反語，疑問詞と「～も」，「～だと思う」，「～について，～に関して」，もう１つの過去連体形・その１，用言の体言形を用いた表現・その２
4	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます．
5	第11課	手段，状況をあらわす「～して」，「～そうにみえる」，「～のため，～のせい」，合成語の濃音化・その２，漢字語の濃音化，「～ようだ」，意向をたずねる話しことば，タメグチ疑問形の話しことば，「～してから」
6	第12課	「～する考え，～するつもり」，「～と考える，～と思う」，「～のため」，婉曲をあらわす形のそのほかの意味・その１，「～して」の話しことば，親族名称とその尊敬形，助詞の尊敬形，「くれる，～してくれる」の間接話法，間接話法の話しことばと省略形，ハンダ体平叙形の用法，遠回しな希望の表現，「～とおりに，～するとおりに」
7	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます．
8	第13課	態と使役形，２ケタの固有数字，「～わけだ，～ようなものだ」，漢字の音読みと訓読み，形容詞から動詞をつくる・その２，疑問詞につく「～か」，もう１つの過去連体形・その２，助詞「～から」，接続形「～するやいなや」
9	第14課	「～することになる」，副詞形を作る「～して」，「～を通って」，他動詞に用いられる「～して」，動作の経過をあらわす「～していく，～してくる」，「～のあいだ，～するあいだ」，婉曲をあらわす形のそのほかの意味・その２，単位とともに用いられる漢数字と固有数字，「～にあたいする」，体験をあらわす形・その１，否定の表現いくつか
10	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます．
11	第15課	動作の完了を強調する形，「～しようかと思う」，体験をあらわす形・その２，「～だけだ」，「～しなければならない」の短縮形，用言の体言形・その２，選択をあらわす「～するか～する，～したり～する」，合成動詞と接続形の「～して」をともに用いる動詞，「する」の第Ⅲ語基の書きことば，年月日と週の言い方
12	口頭練習	復習を兼ねた口頭練習を行ないます．
13	よみもの	既習の文法・語彙知識を用いてある程度の長さの文章を読む練習を行ないます．
14	テスト	テスト

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ボアソナードタワー20階の国際文化学部資料室には検定試験の問題集や韓国で出版されている各大学の語学テキストなどを多数取り揃えていますので活用してみましょう．
・本授業の準備・復習時間は，合計１時間以上を標準とします．

【テキスト（教科書）】
・共通テキスト：内山政春『しくみで学ぶ中級朝鮮語』白水社

【参考書】
・教科書によって文法の説明方式が異なるので，指定のテキストに集中してください．昨年春学期に用いた『しくみで学ぶ初級朝鮮語改訂版』も参考書として活用してください．辞書は中辞典として小学館の『韓日辞典（旧：朝鮮語辞典）』，語彙数は少ないが文法・発音説明が充実しているものとして白水社の『コスモス朝和辞典』をお薦めします．後者は版元品切ですが，アマゾンで中古品を購入することができます．ただし悪徳業者に注意！ 評価が90パーセントに満たないところ（たとえばHave fun Japanなど）はすべて詐欺と断定してかまいません．在庫がないのに注文を受け，安いところから買って転売する，それができない場合向こうからキャンセルしてくるという手口です．
　本授業の準備学習・復習時間は、合わせて１時間を標準とします．

【成績評価の方法と基準】
・期末テストの成績によります（100%）．60点以上が合格です．なお，あまりに欠席が多い場合には，この成績評価基準にかかわらず不合格とすることがあります．

【学生の意見等からの気づき】
・語学の勉強は授業時間内だけで完結するものではありません．日常生活のなかで「朝鮮語ではどう表現するのか？」ということを考える習慣をつけましょう．
・作文練習をはじめとする練習問題の朝鮮語文はすべて出版社のサイトからダウンロードできる音声データに録音されています．解答をまとめて配布することはしません．音声データを聞き取って自分で解答を作るぐらいの意気込みで学びましょう．結果的に聞き取りの力も上達するはずです．
・やむを得ない事情以外での欠席を避けてください．

【Outline (in English)】
< Course outline>
In this class, we continue to learn basic grammar and vocabulary in detail on the premise what you learned in the spring semester have been mastered enough.
< Learning Objectives>
By the end of this course, students will be able to learn complicated expressions in Korean.
< Learning activities outside of classroom>
After each class meeting, students will be expected to spend one hours to understand the course content.
< Grading Criteria/Policy>
Term-end examination(100%)

LANk300GA（朝鮮語 / Korean language education 300）

朝鮮語アプリケーション

梁　禮先

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　既に身についている朝鮮語の知識を活用したり、もっと包括的に知識を吸収できることを目標にします。韓国の新聞、雑誌、映像などを使って、テキストには出ていない、自然な朝鮮語の使い方や、多様な表現を学んで自ら表現できることを目指します。授業は朝鮮語で進めていきます。

【到達目標】
朝鮮語のニュースや韓国の番組を字幕なしで理解できることを到達目標とします。また、自分の意見を自信をもって積極的に話したり、討論に積極的に参加できることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　韓国の映像や資料などを使って、現在の生きた朝鮮語の表現を学んでいきます。読む力・聞く力、また、ディスカッションを通して話す力を定着していきます。
授業は、朝鮮語で進めていきます。
　課題等に対するフィードバック方法は、リアクションペーパー提出や学習支援システムを利用します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業の説明と復習	春学期の授業の進め方について説明します。
第2回	日韓の違いについて	内容を読んで意見を話し合います。
第3回	韓国だけの文化などについて	内容を読んで意見を話し合います。
第4回	韓国の映像を見る	韓国の映像を見て、内容を把握します。
第5回	韓国語の随筆を読む	韓国の随筆を読みます。
第6回	韓国語の随筆を読む	内容について意見を話します
第7回	韓国新聞を読む	韓国の最新記事を読んで、韓国事情について把握。
第8回	韓国の映像を見る	韓国の話題の映像を見て内容を把握します。
第9回	韓国語の情報番組を見る	内容について感想を書きます
第10回	韓国の映像を見る	韓国の映像を見ます。
第11回	韓国語で発表する	発表内容を聞く。
第12回	韓国語で発表する	発表内容を話し合う。
第13回	韓国語で発表する	討論をする。
第14回	総合ディスカッション	春学期の話題からディスカッションを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
韓国のコンテンツを利用したり、新聞、小説などを読むこと。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリント、インターネットなど。

【参考書】
韓国語の辞書など。

【成績評価の方法と基準】
積極的に意見を話したり、討論に参加することです。
発表・レポート・平常点を総合して(50%)と、 期末レポート(50%)と、これらの成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
※成績に関わらず30%以上の欠席の場合は不合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
多様な主題を活用すべきことなど。
また、この授業は、出席して授業での討論や意見交換などを重要視しております。
そのために、平常点が50%になっております。出席が大事です。欠席が成績評価に大きく反映されるということです。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【その他の重要事項】
諸事情により、授業進行形式と内容が少々変わることがあります。あまり欠席をしないでください。

【Outline (in English)】
< Course outline > We aim to utilize knowledge of Korean language that we already have and to absorb knowledge more comprehensively. Using Korea newspapers, magazines, and videos, we aim to be able to express ourselves by learning how to use natural Korean language, various expressions, and newly built language. This course will be mainly conducted in the Korean.
< Learning Objectives >
The goal is to speak your opinion with confidence. Please actively participate in the discussion.
< Learning activities outside of classroom >
I will give you an assignment every time. Repeat reading practice and so on.The students will be expected to spend one hour to understand the course content.
< Grading Criteria /Policy >
Term-end examination ： 50 %,little exams　and in class contribution: 50%.

LANk300GA（朝鮮語 / Korean language education 300）

朝鮮語アプリケーション

梁　禮先

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　一定のテーマを決めてディスカッションを実施したり、韓国の文学作品を読んで、韓国の伝統・習慣・文学表現を習い、朝鮮語のレベルアップをはかります。朝鮮語の総合的能力の定着を目指すのがこの授業の目標であります。

【到達目標】
積極的に韓国語によるディスカッションに参加したり、韓国の文学作品も読めることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　色々なテーマに沿ったディスカッションをやったり、韓国の近代小説にもチャレンジして、韓国の近代文学の流れと、植民地時代の状況、人間の生き方、韓国の伝統と文化・歴史など、様々なことについて考えたり学ぶことができます。
映像などを使って自分の意見を発表したり、意見交換の場をもっと設定して、自由な韓国語の表現をより多く実践的に使えるようにしていきます。
課題等に対するフィードバック方法は、リアクションペーパー提出や学習支援システムなどを利用します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業の進め方と復習	授業の進め方についての説明をします。
第2回	韓国の映像を見る	ディスカッションをする
第3回	話題のテーマについて	意見交換する
第4回	韓国の文学を読む	問題点や意見交換をする
第5回	韓国の伝統や日本の伝統の比較	日韓伝統の意見交換をする
第6回	韓国の映像を見る	ディスカッションをする
第7回	韓国の文学を読む	問題点や感想などを述べる
第8回	日韓伝統・習慣について	意見交換をする
第9回	韓国の映像を見る	映像を見て、自由討論
第10回	話題のテーマについて	ディスカッションをする
第11回	個別プレゼンテーション	意見交換をする
第12回	個別プレゼンテーション	グループワーク
第13回	個別プレゼンテーション	討論をする
第14回	総合ディスカッション	授業の問題点や感想などの意見交換をしたり、討論します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前にテーマの内容やそれぞれの文学作品を調べてくること。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で説明します。

【参考書】
韓国の近代文学作品
湯浅克衛作品集『カンナニ』（インパクト出版会）

【成績評価の方法と基準】
積極的に意見を言ったり、討論に参加することです。
発表・レポート・平常点を総合して(50%)、期末レポート(50%)、など、これらの成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
※成績に関わらず30%以上の欠席の場合は不合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
文学作品だけではなく、後期も映像を取り入れる授業の必要性について。
また、この授業は、出席して授業での討論や意見交換などを重要視しております。
そのために、平常点が50%になっております。出席が大事です。欠席が成績評価に大きく反映されるということです。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【その他の重要事項】
諸事情により、授業進行形式と内容が少々変わることもあります。あまり欠席をしないでください。

【Outline (in English)】
< Course outline > To improve your level of Korean language, we will choose a topic and discuss, read Korea literature works, and learn Korea traditions, customs, and literary expressions. The aim of this class is to build comprehensive Korean language skills.
< Learning Objectives >
Please actively participate in the discussion in Korean.
The goal is to be able to read Korean literary works as well.
< Learning activities outside of classroom >
Check out the content of the theme.The students will be expected to spend one hour to understand the course content.
< Grading Criteria /Policy >
Term-end examination (100%)

LANk300GA（朝鮮語 / Korean language education 300）

朝鮮語アプリケーション

李　蕙臣

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、朝鮮語中上級学習者を対象とし、韓国の文学作品を読み進めることを通じて、朝鮮語の世界の広がりを体験することを目的とする。文学作品に込められた韓国人の情緒や価値観に触れながら、言語理解のみならず文化への理解を深めていく。

【到達目標】
韓国の文学作品を読むことを通じて、朝鮮語による比較的易しい長文を読み進める力を身につける。中級レベルの語彙や表現を復習しながら、より高いレベルの新しい語彙や文法事項を習得する。
また、朝鮮語で韓国の文学作品を読むことにより、韓国文化への理解を深める。さらに、作品の内容について、クラスメートに朝鮮語で質問したり、意見交換を行ったりすることができる運用能力を養う。加えて、同じジャンルの文学作品について調査し、その内容を朝鮮語で発表できるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
各作品のテーマやジャンルについて簡単なウォーミングアップを行った後、テキストに沿ってリーディングを進め、語彙や表現を学習しながら、朝鮮語を翻訳に頼らず理解する練習を行う。あわせて、内容理解を確認するための問題演習を行う。
また、作品に対する自身の感想を朝鮮語で書いたり発表したりする活動を通じて、表現力の向上を図る。さらに、同じジャンルの文学作品について調査し、朝鮮語によるプレゼンテーションにも取り組む（期末プレゼンテーション1回）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	・授業の進め方の説明
	韓国の随筆を読む①	・レベルチェック
		・自己紹介
2	韓国の随筆を読む②	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
3	韓国の小説を読む①	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
4	韓国の小説を読む②	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
5	韓国の詩を読む①	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
6	韓国の詩を読む②	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
7	韓国の古典小説を読む①	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
8	韓国の古典小説を読む②	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
9	韓国の建国神話を読む	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
10	韓国の映画評論を読む①	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
11	韓国の映画評論を読む②	・講義と質疑応答。
		・意見発表及びディスカッション。
12	期末プレゼンテーション	個人による発表を行う。
13	期末プレゼンテーション	個人による発表を行う。
14	期末試験	筆記試験を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、作品を読み、新出語彙や表現を調べる予習が必要です。本授業の準備、復習時間は各2時間を標準とします。
期末プレゼンテーションの準備（原稿、PPT）が必要です。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
期末プレゼンテーション50％、期末筆記試験30％、平常点20％
期末プレゼンテーションおよび試験は必須とし、いずれか一方を欠いた場合は、単位修得の要件を満たさない。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
期末プレゼンテーション用の機器は各自が用意すること。

【Outline (in English)】
< Course outline and Learning Objectives >
This course is designed for upper-intermediate learners of Korean and aims to broaden students' understanding of the Korean language through the reading of literary works written in Korean. By engaging with the emotions and values embedded in these literary texts, students will deepen not only their linguistic competence but also their cultural understanding.
In this course, students will present their own reflections on the literary works in Korean, as well as research other works within the same genre and present their findings in Korean. Through these activities, the course seeks to reinforce previously acquired speaking and writing skills and to develop students' ability to independently interpret and express ideas within the Korean linguistic and cultural world.
< Learning activities outside of classroom >
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
< Grading Criteria/Policy >
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
final presentation 50%, final exam 30% , attendance &participation (continuous assessment) 20％.

LANk300GA（朝鮮語 / Korean language education 300）

【2026年度休講】朝鮮語アプリケーション

李　蕙臣

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「ＳＡ韓国」から帰国した学生をはじめ、朝鮮語中上級向けのクラスである。
朝鮮語のニュース内容の理解と共に語彙力と文法能力を強化する。ニュースの主題や内容に関して様々な意見を発表出来る。

【到達目標】
身近な内容を扱ってる韓国のニュースを学習することで、朝鮮語の聴解力と読解力を身に着ける。中級レベルの語彙や表現を復習しながらより高いレベルの新しい言葉や文法も習得出来る。同時に、ニュース内容に関する関連事項を調べ、より深い理解へとつながるような探求心を養成する。内容について、クラスの仲間と朝鮮語で意見交換などできる力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
ニュースのトピックスに関する簡単な質疑応答を通してウォーミングアップをしする。繰り返して聴きながら内容を全体的に把握する。ニュースに出る語彙や表現について理解を深める。細かい部分まで把握できるようにリスニング練習と本文の読解練習を行う。ニュースの主題に関して積極的に自分の意見を話す、書く練習を行う。類似ニュースについて調べて朝鮮語で発表する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	・授業の進め方の説明 ・レベルチェック ・自己紹介
2	ニュース①経済	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
3	ニュース②社会(1)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
4	ニュース③社会(2)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
5	ニュース④社会(3)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
6	ニュース⑤文化(1)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
7	ニュース⑥文化(2)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
8	ニュース⑦文化(3)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
9	ニュース⑧文化(4)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
10	ニュース⑨健康(1)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
11	ニュース⑩健康(2)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
12	ニュース⑪天気(1)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
13	ニュース⑫天気(2)	・講義と質疑応答。 ・意見発表及びディスカッション。
14	まとめ	プレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、ニュースの記事を読み、新出語彙や表現を調べる予習が必要です。本授業の準備、復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
授業への参与度70％、プレゼンテーション30％。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
住所の内容は多少変更になる場合もあります。

【Outline (in English)】
< Course outline>
This course deals with Korean intermediate level.
< Learning Objectives>
At the end of the course, students are expected to enhance the development of the skill in reading, writing, listening and talking.
< Learning activities outside of classroom>
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
< Grading Criteria/Policy>
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Presentation ： 30%,in class contribution:70％.

HUI200GA（人間情報学 / Human informatics 200）

文化情報のデザインワークショップ

松田　美奈子

サブタイトル：ユーザの体験を考え、デザインする実践ワークショップ
配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：情報コミュニケーションI
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：受講状況により選抜することがあります
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ユーザーの体験をデザインする『面白さ』と『奥深さ』を、実践的に学ぶ科目
私たちの日常生活はたくさんの道具であふれている。日常生活で出会う道具には文房具のような小さなモノからアミューズメントパークのような大きなモノまである。それらの道具が魅力的で使いやすいと日常生活も豊かで楽しくなる。
　このワークショップでは、「道具を使いやすくデザインする方法論」と「新しい近未来の道具のデザイン」という２つのテーマに取り組む。　道具をデザインするという一見難しく思える課題を、手法の習得と実践の両方をバランスよく配置して、実践的に学べる科目である。
●　ユーザー調査を行い、特性を理解し、道具を使いやすくデザインする
講義の前半では、「道具の使いやすさ」に着目する。
　私たちの日常を様々な側面で支えてくれる道具たちを、使いやすく魅力あるのにするにはどうすればよいか？　その鍵は、ユーザの特性と、ユーザに起こっている出来事の的確な理解にある。　道具のデザインを改良する具体的な方法論を、実習を通じて学ぶ。
●　新しい、近未来の道具をデザインする
講義の後半では、「新しい近未来の道具のデザイン」に着目する。
　まだ存在しない未来の道具をデザインするにはどのようにすればよいのか？
　その手掛かりはユーザーの潜在的なニーズの把握にある。　利用者の生活が豊かになるような近未来の道具を考案し、コンセプトをデザインするための方法論を、実習を通じて学ぶ。

【到達目標】
「道具をもっと使いやすくデザインすること」と「新しい近未来の道具をデザインすること」、この２つをテーマとして、デザイン手法を実践的に学ぶ。
●　２つのテーマは学習内容が異なる。各テーマの基礎となる基本的な考え方、理論、調査計画の立て方、評価方法、データ収集方法、分析方法を学び、実践できるようになる。
●　グループワークの進め方、結果のまとめ方、成果発表の工夫を学び、実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
「道具を使いやすくデザインする方法論」と「新しい近未来の道具のデザイン」、この２つのテーマについて、具体的なデザイン手法の基礎を学び、実践する。授業は、講義とワークショップを組み合わせる。また受講者の学習状況や実践力をコメントシート等によって把握し、進め方に反映する。
●　前半では、身近で気になる道具を１つ取り上げ、利用者にとってより使いやすい道具に改良するための方法論を、実験実習によって実践的に学ぶ。道具の使いにくさの問題現象を分析・整理し、システム改良を行うための認知工学的方法論とその考え方を、グループワークによる実験実習を通じて習得する。
●　後半では、具体的な利用者の日常生活のある場面に着目し、利用者の生活をさまざまな角度から分析することにより、利用者の生活を豊かにする具体的な道具を１つ考案し、コンセプトを明確化させていく作業をグループワークを通じて行う。
●　各テーマごとに、受講生またはグループによる成果発表の機会を設ける。グループワークや成果発表では、受講生どうしの討議を促すとともに解説を行い、さらに改良アイディアを深められるように工夫する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	「道具の使いやすさ」とユーザー中心のデザイン
2	道具の使いやすさ（理論編）	道具の使いやすさ評価の基本を学ぶ
3	道具の使いやすさ評価（実験計画編）	使いやすさ評価実験の計画を立てる
4	道具の使いやすさ評価（準備編）	「道具の使いやすさ評価」に用いる実験手法の実習と、実験準備
5	道具の使いやすさ評価（実験編）	「道具の使いやすさ評価」を実験実習する
6	道具の使いやすさ改良（分析・考察編）	実験データを分析し、それに基づいて道具の具体的な設計改良を考案する
7	道具の使いやすさ改良（提言編）	道具を改良する具体的な提案と資料を準備する
8	成果発表とクラス討議	発表と討議を通じて、道具を使いやすくする改良事例を互いに学ぶ
9	「未来のモノのデザイン」の考え方	未来に向けたデザインとHCD（人間中心設計）プロセス
10	新しい近未来の道具（ブレインストーミング）	ある具体的な人物の、具体的な生活場面を切り出す
11	新しい道具のデザイン（分析編）	利用者特性と具体的なニーズを分析する
12	新しい道具のデザイン（アイディア編）	要求分析から、道具を発想する
13	新しい道具のデザイン（提言編）	要求分析から、新しい道具の提言を練る
14	成果発表とクラス討議	発表と討議を通じて、近未来の道具の発想例を互いに学ぶ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。授業時間外に観察や調査の実施、レポート作成などの活動が含まれる。

【テキスト（教科書）】
・「人間計測ハンドブック」第3章（認知心理過程の計測）（朝倉書店、産業技術総合研究所編）2013.
・ユーザインタフェースと認知モデル（甲洋介、人工知能学会論文誌）

【参考書】
・「ユーザーインタビューをはじめよう」（ポーチガル著、ビー・エヌ・エヌ新社）2017
・「デザイン思考が世界を変える〔アップデート版〕」(ティム・ブラウン著、早川書房) 2019
・「プロダクトデザインの基礎 スマートな生活を実現する」（JIDA編、ワークスコーポレーション）2014.
他については適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
・レスポンスシート、討議、発表、グループワークにおける貢献度合い (50％)
・課題レポート、プロトタイプなど制作物 (50％)
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。課題レポートの未提出者は単位認定できない。

【学生の意見等からの気づき】
グループディスカッションが有益とのコメントを踏まえ、講義と実習を効果的に組み合わせ、理解がより深まるように工夫する。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布、レスポンスシート・課題提出等に学習支援システム等を利用する。授業前後にはアクセスし確認すること。

【その他の重要事項】
本科目では、グループワーク中心の発見型学習を通じて学生の就業力育成を支援する。
「文化情報学の実践」科目群〔共通のテーマ〕
「文化情報学の実践」科目群では、文化情報学における重要な主題を選び、その基本となる考え方、課題解決の手法、実践に必要な知識を実習を通して学ぶ。情報実習室の機材・設備を活用した実験・実習を通じ、ICT活用スキルに加えて、実験の計画、分析、専門文献調査、考察、報告などを実践的に学ぶ。
実務経験のある教員による授業
教員は一般企業で製品/サービスのデザインに関わる業務に20年以上従事。ビジネスの現場でも幅広く活用できる実践的なデザインアプローチを学ぶ。

【前提科目と関連科目】
・「道具のデザイン学」「道具による感覚・体験のデザイン」「こころの科学」を合わせて履修することで、知識と実践の相乗効果が得られる。

【情報機器・視聴覚設備の活用】
ＰＣ、プロジェクター等の視聴覚設備を使用する。

【Outline (in English)】
This class provides you with an unique "Design Workshop". This class allows you to actively learn: (1) how to re-design everyday artifacts by the "User Experience (UX) Design" methodology, and (2) how to create ideas of conceptual designs of a near-future artifact.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on (1) final report/exam (50%) and (2) short reports and the quality of the student's in-class contribution (50%).

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

文化情報のためのネットワーク技法

和泉　順子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：情報コミュニケーションII
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：実習設備の許容人数を超えた場合に行う
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文化研究と成果発表の方法を身に着ける（旧科目：情報コミュニケーションII）
【旧科目：情報コミュニケーションⅠ〜Ⅲ共通テーマ】
文化情報学のいくつかのテーマについて情報スキルの重点的訓練を行う。コンピュータ設備を用いた実験・実習を通じて実験計画・結果分析・専門文献調査・考察・報告など方法論的訓練を行う。
【本科目の学習の目的】
本講義の前半において、Study Abroad環境すなわち在外環境におけるネットワークの実践的スキルと、研究倫理・データ倫理に基づいた問題解決の方法を学ぶ。本講義の後半では、文化情報編集のツールを取り上げる。GAS（Google Apps Script）を使ったGoogle Workspaceの統合・自動化の実習を例に、SA等の在外環境も含めた総合的な情報発信の有効性を学び、Web環境での有機的な情報共有を体験することを目的とする。

【到達目標】
SAや卒業研究などのフィールドワークにおける異文化研究を成功させるために、文化情報の調査研究の方法論を身に着ける。インターネット環境を十全に活用し、学習成果を公開し蓄積する。現地調査で得られた知見や体験をリアルタイムに共有することでネット社会にフィードバックできる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
前半に在外環境におけるインターネットの実践スキル、調査研究の方法論を学び、その上で情報機器を用いた文化研究成果の発信と共有を試すことになる。全体を通してSA等で収集したデータや研究成果の取りまとめを念頭に、何を文化研究するかを考え続けるクラスとして機能させることを目指す。在外環境での活動を想定した課題実習や協働学習を取り入れる。
課題等の提出・フィードバックは、授業内および学習支援システムを通じて行う。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。情報実習室での対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更や それにともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システムでその都度提示する。抽選の可能性があるため、履修予定者は必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション（全体）インターネットの仕組み	科目内容のガイダンス（全体）インターネットの仕組みを復習し、現状の使われ方（IPアドレス枯渇とその対応技術、無線LANの利欠点等）を学ぶ。
2	ネット社会の情報構造	IPアドレスの種類やドメイン名との関係、名前解決の仕組みを理解し、ドメイン情報を実習により確認する。
3	情報活用のための実践知識（1）	インターネットに接続できない状態になった場合の対応を考える。また大学VPN環境を確認する。
4	情報活用のための実践知識（2）	ネットワークスキルの学習成果をクラス討議を通じて総括し、問題点を整理・理解する。
5	フィールドワーク入門	現地での文化研究とは何か、在外環境での調査法について理解を深める。研究計画の立て方を学ぶ。
6	文化研究にむけての準備	質的研究と量的研究の違いを学び、取り組みたい研究課題とその手法の計画を立てる。
7	研究倫理・データ倫理	大学の研究倫理規定を参照し、研究倫理やデータ倫理の意味や目的、あるいはその手続きを確認する。
8	研究課題の計画	各々の研究課題に沿った調査計画とその中間報告を行う。
9	研究調査成果の蓄積・共有方法の検討	GoogleフォームやGoogleドライブを用い、研究調査や情報共有を確認・実践する。
10	蓄積した情報の統合・自動化	GAS（Google Apps Script）を用いてGoogleフォームやメールなどの統合・自動化を学ぶ。
11	情報公開の手法	調査研究の結果の公開対象や手法を検討し、準備する。
12	情報活用の応用と具体的な制作	具体的な成果物（研究成果の公開）制作に取り組む。進捗と問題点を報告する。
13	研究計画の確認と成果の公開	調査研究成果をGoogleサイトを用いて限定公開し、互いに議論する準備を行う。
14	全体のまとめ	学習成果の発表。事前の研究計画を基に研究の進め方や問題を振り返り、SA研究計画との接続を図る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「実験実習科目」として、いずれの担当においても教室外での課題活動が含まれる。具体的には以下のような課題を通して、適宜学習することが求められる。
1. (SA準備として)個人研究テーマの構想着手、在外インターネット環境の事前調査
2. 学外、学内でのインターネット接続、Webアクセス
3. 各種トラブルシューティング、レポート作成
4. 個人研究テーマの検討
5. 学外からの学内サービス（図書館の文献検索を含む）の確認
6. 学外における調査研究データの蓄積・管理・共有の確認、研究課題検討ミーティングの続行と報告書作成、検討結果にもとづく事前調査
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
開講時に指示する。

【参考書】
佐藤郁哉、「フィールドワーク―書を持って街へ出よう」、新曜社; 増訂版 (2006/12/20) ISBN 978-4788510302
水谷正大、「インターネット時代のコンピュータリテラシー」共立出版（1996）、ISBN4-320-02842-2

【成績評価の方法と基準】
平常点・授業参加（20%）、コンテンツ作成（40%）、実習課題（30%）、発表（10%）を目安とする。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
情報機器やネットワーク環境など、実際の在外学習環境は年々変化する。
これらの変化に対応して実習や事前学習の内容の改良を続ける。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室での実習型の授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、学習支援システムで公開する資料等を教室PCあるいは持ち込みPCで確認しながら使用して進める。
オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、PCを用いて大学のGoogle Workspaceを利用して作業することを前提とする。
最終課題となる発表や授業の補足はZoomあるいはWebexを用いる。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
したがって、授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
受講者数が定員を超過する場合は抽選を行う。
初回授業はZoomを用いたオンライン授業となるが、受講者数把握のため、受講希望者は初回授業日の前日までに学習支援システムに仮登録した上で初回授業に出席すること。
詳細は学習支援システムを参照し、授業資料や「お知らせ」を必ず確認すること。
SAをはじめ、フィールドワークとしての研究課題は文化情報の実践的研究の場であり、本講義はその有効な事前準備としても役立つものです。
Webを基盤とする高度なICTの活用実習ならびにグループワーク中心の発見型学習を通じて、本科目では学生の就業力育成を支援します。

【前提科目】
「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」を前提とする。
SA環境での実習内容と密接に関連するので「ネットワーク基礎」を前提、あるいは並行履修すること。

【Outline (in English)】
(Course outline)
The first half of the course reviews practical techniques of digital network communication, research and data ethics.
In the second half, students learn how to use GAS and other tools for editing cultural information.
(Learning Objectives)
- To acquire a methodology for research and study of cultural information.

- To make full use of the internet environment to publish and accumulate the results of their studies.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on the practical assignments (20%), in-class contribution(30%), and term-end presentation (10%) and content creation(40%).

DES200GA（デザイン学 / Design science 200）

視覚デザインと文化情報

稲垣　立男

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：情報コミュニケーションIII
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：席数を超えた場合選抜

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「視覚デザインと文化情報」は、情報デザインに関する入門的かつ実験的な実習科目です。ロゴタイプ、シンボルマーク、ピクトグラム、イラストレーションなどを題材に、デザインやアートに関わる基礎的なトレーニングを行います。

【到達目標】
作品制作と並行して行う毎回の対話を通じて、デザインの概念や視覚言語に関する理解を深め、人と人とのコミュニケーションを円滑にする視覚表現の基礎的なトレーニングを行います。あわせて、創作活動全般にも通じる、クリエイティブな造形表現に必要な知識・感覚・技術を養います。
また、絵を描くことに苦手意識のある人や、デジタルによる写真加工やデザイン制作が初めての人も、難しく考えずに積極的に手や体を動かすことで、「つくること」の楽しさを体験します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業では、視覚言語の基礎となる以下の3つのテーマを中心に、課題制作を行います。
1. ロゴタイプとシンボル（タイポグラフィー）
2. ピクトグラム（インフォグラフィックス）
3. イラストレーションとデザイン（グラフィックデザイン）
各課題に取り組むにあたっては、課題の意義や制作の進め方について講義を行うとともに、制作のポイント、使用する材料・道具、ソフトウェアの操作方法について説明します。各課題の最終段階では、作品発表（プレゼンテーション）および講評・フィードバックを実施します。
実習では、実習室に設置されている Adobe Illustrator を使用します。また、授業を円滑に進めるため、以下のオンラインツールを活用します。
・Google Sites（授業関連コンテンツの配信）
・Google Classroom、Google Forms（課題提出およびフィードバック管理）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の概要
第2回	ロゴタイプとシンボル（1）	講義 ロゴタイプとシンボルマーク ワークショップ 基本的な図形の書き方とシンボルマーク
第3回	ロゴタイプとシンボル（2）	講義 フォントと書体 ワークショップ ロゴタイプの制作（1）
第4回	ロゴタイプとシンボル（3）	ワークショップ ロゴマークの制作（2）
第5回	ピクトグラム（1）	講義 ピクトグラムとは ワークショップ ピクトグラムの模写
第6回	ピクトグラム（2）	講義 オリンピックのピクトグラム ワークショップ スポーツ・文化をテーマとしたピクトグラムの作成
第7回	ピクトグラム（3）	ワークショップ 大学構内の案内用サインの作成
第8回	インフォグラフィック（1）	講義 インフォグラフィックについて ワークショップ 気になったポスターをコピーする
第9回	インフォグラフィック（2）	講義 ZINEについて ワークショップ ZINEの制作1
第10回	インフォグラフィック（3）	ワークショップ ZINEの制作2
第11回	レイアウト（1）	講義 インフォグラフィックを元としたイラストの作成 ワークショップ パンフレット表紙レイアウト（1）
第12回	レイアウト（2）	ワークショップ パンフレット表紙レイアウト（2）
第13回	レイアウト（3）	ワークショップ パンフレット表紙レイアウト3 作品の制作（3）
第14回	作品の講評	課題作品のプレゼンテーションと講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
街の中のサインやポスター、本や雑誌、さまざまなプロダクツなどについて、視覚的な情報伝達の方法やデザインの工夫を意識して読み解いてください。大学近郊の美術館やギャラリーなどで、さまざまな作品を鑑賞するのもよいと思います。
また、人工物だけでなく自然物にも目を向け、美しいと思うものをスマートフォンやデジタルカメラ等で撮影し、ストックしておいてください。制作の材料として使用します。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Google Sitesを通じて授業に必要な資料を配布します。いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】
永井 弘人「デザイナーになる！　伝えるレイアウト・色・文字の大切な基本と生かし方」エムディエヌコーポレーション
原研哉「デザインのデザイン」岩波書店
ロビン・ウィリアムズ「ノンデザイナーズ・デザインブック」マイナビ出版
坂本伸二「デザイン入門教室［特別講義］確かな力を身につけられる　〜学び、考え、作る授業〜」SBクリエイティブ

【成績評価の方法と基準】
成績評価については、平常点（授業への取り組み）、課題とレポートの合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　課題とレポート（50%）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
ソフトの操作や専門用語などをわかりやすく解説していきたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
使用するソフトは以下の通りです。
　Adobe Illustrator（イラストレーションを描くためのソフト）
また、スケッチブック（ノート可）や鉛筆など、絵を描くための材料が必要となります。

【その他の重要事項】
初心者の皆さんには、各ソフトを用いた作品制作のコツをまず掴み、さらに完成度を高めていく方法をお伝えします。技術的な経験は問いませんので、アートやデザインの作品制作に自信のない人も、ぜひチャレンジしてみてください。
課題制作については、各受講者の能力やそれぞれが取り組みやすい進め方などを考慮し、毎回の内容や目標を固定的に定めていません。ディスカッションを通じて各自の課題を見極め、柔軟に取り組んでください。
初回のオンラインによるガイダンスには必ず出席してください。
登録希望者が教室の収容人数を超えた場合、選抜を行います。
実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティストです。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で行っており、これらの現場での経験を毎回の講義に反映させています。

【Outline (in English)】
Outline and objectives
This practical lesson is an introductory and experimental valuable lesson on information design. Basic training related to design and art such as logotypes, symbol marks, pictograms and illustrations.
Learning Objectives
Through each lecture held in parallel with the production of the work, we will deepen the understanding of the design concept and visual language and provide basic training on visual expression that facilitates communication between people. In addition, we will cultivate the knowledge, sense, and skills necessary for creative modelling expression that is familiar to all creative activities.
People who are not good at drawing or are new to digital photo processing and design production will experience the joy of making by actively moving their hands and body without thinking difficult.
Learning activities outside of the classroom
The content delivered on the Google site contains many website links to deepen your learning, so we recommend browsing the ones that interest you. There are also many museums and galleries near the university. If possible, depending on the infection status of the new coronavirus, please watch exhibitions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades will be evaluated based on the total of class activities, assignments and reports. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Issues and reports (50%)
Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

FRI300GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 300）

情報アプリケーションⅠ

重定　如彦

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席すること
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
インターネットの発達により、ウェブページを取り巻く技術は近年ますます発展しており、その重要性も増している。近年では、どのような職業であれ、ウェブページの技術と無縁の職業はありえないといっても過言ではないだろう。
ウェブページを記述するHTMLは近年新しいバージョンが作られ、その表現力が増している。本授業では最新のHTMLをベースに、CSSやJavascriptなどを用いて表現力の高いウェブページを作るための技法について学ぶ。
JavascriptやCSSの技術を使えば、アニメーションを表示することも簡単にできるようになっている。最終的にはHTML5を使って簡単な3Dグラフィックスを表現する方法を学び、迷路のウェブページを構築できることをめざす（完成例としてはhttp://www.edu.i.hosei.ac.jp/ sigesada/software/maze/maze.html を参照のこと）。

【到達目標】
ウェブページを記述する言語であるHTMLについて理解し、自分でウェブページを作成できるようになる。
CSSを使って表現力の高いウェブページを作成できるようになる。
Javascriptを使って動きのあるウェブページを作成できるようになる。
Three.jsを使って3Dグラフィックスを使ったウェブページを作成できるようになる。
インターネット環境で応用力のある豊かな情報発信能力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の前半でHTMLなどに関する説明の講義を行い、授業の後半でテキストエディタとウェブブラウザーを用いて実際にウェブページを作成する実習を行う。
学習支援システムのアンケートの機能を使って、毎回授業のリアクションペーパーに相当するものを実施する。各回の授業の冒頭で、必要に応じてその中からいくつかを取り上げてコメントを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	HTML5	HTML5とはどういうものかについて学ぶ HTMLの基礎知識について学ぶ
2	タグその1	見出し、段落、箇条書きなどのHTMLの基本的なタグについて学ぶ
3	タグその2	その他のHTMLの代表的なタグについて学ぶ
4	CSS	スタイルシートについて学ぶ
5	Javascript	Javascriptの基礎について学ぶ
6	Javascriptを使ったグラフィックス	HTMLのCanvasタグとJavascriptを使ったグラフィックスについて学ぶ
7	Three.js	Javascriptの3Dグラフィックスのライブラリである Three.jsについて学ぶ
8	3Dグラフィックスの基礎	3Dグラフィックスの基礎について学ぶ
9	3Dグラフィックスアニメーション	3Dグラフィックスのアニメーションについて学ぶ
10	迷路の表現方法	コンピューターで迷路をどのように表現するかについて学ぶ
11	迷路の2Dグラフィックス	コンピューターで表現した迷路を2Dグラフィックスで表現する方法について学ぶ
12	迷路の3Dグラフィックス	コンピューターで表現した迷路を3Dグラフィックスで表現する方法について学ぶ
13	迷路の自動生成	ランダムな迷路をコンピューターに自動生成させる方法について学ぶ
14	迷路の中を動き回る	コンピューターが作成した迷路内を動き回る方法について学ぶ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自、授業が終わった後に復習を行うこと。
また、課題として自分のオリジナルのウェブページと迷路のページを作成する課題を課すので、各自締切までに制作を行うこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業中に指示する。

【参考書】
授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点 10% 課題90%（ウェブページの課題50%、迷路の課題40%）
課題は授業内で適宜指示する。
2つの課題をもって定期試験の代わりとするので、試験は行わない。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室で各自1台のコンピューターを使って授業を行う。

【その他の重要事項】
プログラミングやウェブページ関連の授業を受講していることが望ましいが、やる気があればプログラミングの経験が無くても歓迎する。
課題で生成AIを補助的に利用することは認めるが、生成のみを利用した課題の提出は原則として認めない。
本授業では取り扱いませんが、プログラミングに関連するものとしてPythonで○×ゲームのAIを作成する記事を下記のURLで連載しているので興味がある方は参考にして下さい。
https://qiita.com/ysgeso/items/04deccdfe7ec15314c48

【Outline (in English)】
Objectives of this class are to acquire skills and knowkedge about web technology such as HTML, CSS and Javascript.
At first, this class learns about HTML and CSS, and create simple web page. Next, this class learns about javacscipt and create a interactive web page of 2D maze game. Finally, this class learns about webgl technology and create web page of 3D maze game.
Each student is required to review his or her work after the class.
In addition, you are required to create your own original maze page as a final project. Please do so by the deadline (one week after the last class).
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Ordinary points 10%, Assignments web page 50%, maze 40%.
Assignments will be given in class as needed.
The final assignment will be used as a substitute for the regular exam, so no exam will be given. Students who have achieved at least 60% of the objectives of this class based on this grading method are considered to have passed the class.

COT300GA（計算基盤 / Computing technologies 300）

情報アプリケーションII

大嶋　良明

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席すること
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
誰でも参加できる自由なモノづくりの世界的潮流、Makerムーブメントについて親しむ。実習形式でオリジナル電子楽器の製作を学ぶ。光、温度、圧力などの変化を検知してスピーカー、ディスプレイ、モーターなどの反応を制御する方法（意外と簡単！）やマイコン上のAI技術の活用法、スマホ、インターネットと連携したIoTの構築などを学び、自分のアイデアを作品として実現させる。

【到達目標】
Makerムーブメントの背景と現状について理解する。
楽器音の基本的理解にもとづく電子楽器の構成法を知る。
Arduinoマイコンによるセンサー入力の処理方法が理解できる。オーディオ信号を中心とした出力の制御方法が理解できる。
課題実習と作品制作を通じて、アイデアを成果物に実現する方法を構想できる。作りながら考える、考えながら作る自由闊達なモノづくりの精神を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
授業はすべて、情報実習室の機材・設備を活用した講義および実習形式で行い、参加者の学習状況や実践力を確かめながら進める方法で進めます。実習の内容はPBLの考え方にもとづき、ワークショップ形式でのモノづくりを体験します。作りながら考える、考えながら作るをモットーにワークショップを運営します。マイコン、配線材など必要な実習機材は用意します。ほかに各自の作品構想に必要となる部品は、既製品を分解する、100均で手に入れる、自作する…などの方法でクリエイティブな試行錯誤を楽しみながら調達しましょう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション：Arduino入門	授業内容の説明と導入、Makerムーブメントとは何か、モノづくりの実例に学ぶ。開発環境Arduino IDEの使い方とTinkercadを併用した学習環境を学ぶ。
2	初歩の実習：LEDの点滅実験（Lチカ）	Arduinoを用いたLEDの点滅実験（Lチカ）をする。ブレッドボードでの配線を学ぶ。
3	光らせてみよう：LEDの点滅、明暗、色の表現	スイッチ、抵抗、可変抵抗、LEDの回路構成と配線方法を学美、Arduinoでの制御方法を学ぶ。
4	ディスプレイを作ろう：表示の高機能化、文字やグラフィックスの電光表示	LCD、LED、OLEDディスプレイの活用とArduinoでの実現方法を学ぶ。
5	いろいろ測ってみよう：各種センサーの活用	温度センサー、圧電センサー、距離センサー、人感センサー、加速度センサーなど外界の状態を入力する方法を学ぶ。
6	音を出してみよう、メロディを演奏しよう：ブザー音や音階の出力	圧電ブザーやスピーカーから音階を出力する方法、メロディの演奏をArduinoでの実現する方法を学ぶ。
7	演奏を自動化しよう：シークエンサーの製作	自動演奏の仕組みを理解する。インターフェースを追加し演奏機能を拡張する。自動演奏の実行を視覚化する方法を学ぶ。楽器として完成させる。
8	人間の動作を取り込もう：ゲームパッド、ジョイスティックの利用	タッチスイッチ、ゲームパッド、ジョイスティックなどインタラクティブな操作情報を利用する方法を学ぶ。
9	IoTを実現しよう（1）：センサー情報の取得	IoTマイコンを使って各種センサー情報を取得、蓄積し送信する。
10	IoTを実現しよう（2）	IoTマイコンを使って送信したセンサー情報をスマホ、インターネットと連携させる。
11	身近なAI（1）：顔認識による人物検出	AIマイコン上でニューラルネットTensorFlow Liteを使った顔認識による人物検出を稼働させる。
12	身近なAI（2）：音声認識によるコマンド	AIマイコンで登録済み音声による起動ワード認識を稼働させる。
13	身近なAI（3）：手指のジェスチャー認識	AIマイコンのセンサーでジグザグ、円環、斜線など簡単な空間描画を認識させる。
14	ハード、ソフトの相互接続：MIDIとOSC	MIDIやOSCによるコンピュータ、楽器、電子装置の相互接続と制御の仕組みを理解する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【手を動かすことを大事にしよう】
Arduinoマイコンの開発環境はフリーソフトでWindows、 Mac、 Linuxいずれの環境でも利用可能です。また実習で使うArduinoは互換機であれば安価に入手できます。興味のある人はどんどん使って応用力を身につけてください。
【感性を磨こう】
「Make:」の関連書籍は図書館にも整備されつつあります。また作品発表の多くはオンラインでも閲覧可能なので、授業内でも折に触れてご紹介します。ぜひそれらの作品にふれることでアタマを柔らかくしてモノづくりの豊かな楽しさを感じ取ってください。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて講義中に紹介します。

【参考書】
必要に応じて講義中に紹介します。Makerムーブメント（モノづくりの世界）を楽しく学べる2冊と電子楽器の自作やプロトタイピングについての参考書を以下に紹介します。ぜひチェックしてください。
【何か作りたい！ でも何を作ろう…？】
Karen Wilkinson(著), Mike Petrich(著), 金井哲夫(訳)、「ティンカリングをはじめよう ―アート、サイエンス、テクノロジーの交差点で作って遊ぶ」、オライリージャパン(2015)、ISBN:978-4873117263
【Arduino＋音楽】
中西宜人、「Arduinoではじめる手作り電子楽器」、工学社(2015)、ISBN: ISBN978-4-7775-1916-3
【モノづくり＋デバイスアート】
青木 直史(著)、「ArduinoとProcessingではじめるプロトタイピング入門」、講談社(2017)、ISBN: 978-4061565692
小林茂(著)、「Prototyping Lab 第2版 ―「作りながら考える」ためのArduino実践レシピ」、オライリージャパン(2017)、ISBN:978-4873117898

【成績評価の方法と基準】
平常点(30%)、課題(30%)、学期末に提出する作品発表(30%)、合評(10%)により評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
多くの学生に興味を持ってもらえるよう、単元や実習内容にいろいろ工夫を盛り込みました。受講者のスキルやモノづくりへの好みの違いをお互いの刺激として各自が成長できるよう、課題演習や理解度チェックのバリエーションを用意しました。2020年度からは実機のArduinoとクラウド上のシミュレータTinkercadを併用することで自宅での学習環境も整備されています。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室を使用し、実習に必要なPC、Arduinoなど共通の電子部品と配線材は用意します。
課題作成時および提出時には貸与PCまたは個人PCが必要になります。

【その他の重要事項】
情報アプリケーション科目は情報学の総合力を育む科目であり、本科目ではモノづくりのための発想、知識、スキルの全てを身につけることを目指して欲しい。
受講希望者は初回授業に出席すること。受講希望者が教室定員を超える場合には抽選を実施することがある。

【実務経験のある教員による授業】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野での研究とシステム開発の経験がある。

【Outline (in English)】
This course deals with the creative development of original digital gadgets such as electronic percussion and sensory lights, gesture detection, wake word speech recognition, IoT applications by using various sensor devices, interactive human interface devices and display devices enabled by Arduino and RP2040-based micro-controllers. Students will become well familiar with the Arduino IDE (Integrated Development Environment) in a small classroom workshop environment.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final assignment: 30%
Critique: 10%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.

The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

HUI200GA（人間情報学 / Human informatics 200）

こころの科学

岡本　郁子

サブタイトル：こころが生み出す「体験のリアリティ」
配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
● 感動の想い出は、なぜかスローモーション
あなたが日々体験している「まさに今、私のこころがはたらいている」という実感を手掛かりにして、「こころ」という不思議なはたらきと、その面白さを様々な角度から理解することを目指す科目である。
● 「こころ」がはたらいている、と実感するのはどんな時？
「こころ」とはいったい何だろう。「こころ」についてよく知っているつもりなのに、いざ説明しようとするとうまく説明できない。なぜなら、自分の「こころがはたらいている」ことをあまりに当然に考えているから。
しかし、「こころ」がうまくはたらかない時や、あなたにとって初めての事、思いもよらない事に出会った時、その”存在”に気づくのである。実際に、あなたの「こころ」にとって想定外の現象は多く発生している。
● 「こころ」とはいったい何だろう
「こころ」のしくみを理解する上で基本となる「気づく」「覚える」「わかる」「誤る」「問題を解く」「感情がわく」に着目し、解説を加える。学術的な説明の前に、一人ひとりの「リアルなこころの体験」を整理することから出発しよう。大切なのは、こころがうまく機能している状態だけでなく、「こころが上手くはたらかない」現象にも光をあてることである。
ロボットや人工知能の分野では「こころを作ってみる」試みが急速に進む。一方で、「こころ」の探求は、単一の学問領域だけで本質に迫るのは難しい。心理学に加え、脳科学、人類学や言語学など様々な角度からアプローチが試みられ成果を上げている。「こころの科学」では、関連領域の知見を踏まえ、学際的な視点から「こころの科学」の基礎を学ぶ。

【到達目標】
・気づく、覚える、わかる、誤る、問題を解く、感情がわく等、「こころ」のしくみを理解する上で基本となる事柄について、その要点を説明できるようになる
・感情の役割、アフォーダンス概念など、講義で解説される基本主題について、それらが「こころの理解」にどのような新たな観点を与えるのか、その意義を簡潔に述べることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
「こころ」のはたらきとして、気づく、覚える、わかる、誤る、問題を解く、感情がわくに着目し、関連分野の知見を整理して一つ一つ解説を加える。学術的な説明だけでなく、一人ひとりの「リアルなこころの体験」を整理することにも力点を置く。
こころがうまく機能している状態だけでなく、こころが上手くはたらかない現象にも着目する。たとえば、「記憶する」だけでなく「忘れる」重要性、「わかる」だけでなく「間違える」プロセスにも着目する。それによって「こころ」の理解は面白くなるし、奥深さを学べる。
各講義の最初に、受講生のコミュニケーション・シート（小レポート）の内容を踏まえながら前回のおさらいと解説を行い、受講生の理解がさらに深まるように工夫する。
授業での問いかけや、コミュニケーション・シート（小レポート）を通して、受講生が一方的に知識を受け取るのではなく、自ら考え、内なる自分と対話をすることで、こころについての理解を深めていくように設計されている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめに	講義のアウトラインと進め方
2	こころについて、どのような理解を目指ざすのか	「こころのはたらき」を理解するための枠組みを準備する
3	気づく、対象を捉える、気づいてないのに分かっている	感覚から知覚、知覚から認知へ、意識、潜在認知
4	覚える、忘れる、覚えることは皆同じ？	記憶のしくみ、誤って覚える、忘却する
5	わかる、知らない、わからない	概念の形成、知識獲得と学習、言語の役割
6	間違える、「間違え」から分かるこころ	認知における無意識的な偏り、日常で起きる間違い
7	考える、問題を解く	『問題』とは何か、問題解決する、推論する
8	感情が生まれる、感情をはたらかせる　〜感情の役割の発見へ	感情の彩り、人類に共通する感情、感情を生み出す仕組み
9	感情に促される、影響される、感情に対する気づき	感情の果たす役割、感情の調節
10	脳からみた、こころ　人工物ではたらく、こころ	人工知能の仕組みと人間の直感的理解の違い
11	人間と環境との相互作用を基本視点とする生態学的アプローチ	生態学的視覚論（ギブソン）の基本的な考え方、アフォーダンス
12	社会・文化に埋め込まれた、こころ　〜個人から社会の視点へ	状況に埋め込まれた学習、正統的周辺参加、社会的実践としての学習
13	自分への理解を深める	自分を客観視する、自己理解を深める
14	「こころ」について再考する	こころについて学びの振り返りとまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
コミュニケーション・シート（小レポート）作成を含め、準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
開講時に指示する。

【参考書】
・日常と非日常からみる　こころと脳の科学（宮崎真ほか著、コロナ社）2018

【成績評価の方法と基準】
・授業への参画、コミュニケーション・シート（小レポート）提出を含む平常点　５０％
・中間および期末：課題レポートまたは試験　５０％
上記を総合的に評価し、評定を決める。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の６０％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
実際の現象を理解しやすいように、できる限り実験例や具体例の提示を心がける。

【学生が準備すべき機器他】
コミュニケーション・シート（小レポート）、課題提出等に学習支援システム等を利用する。授業前後に確認すること。

【関連科目】
・「道具のデザイン学」「道具による感覚・体験のデザイン」「文化情報空間論」「文化情報のデザインワークショップ」と組み合わせて受講すると、理解が多角的になり面白くなる仕組みになっている。
・「こころとからだの現象学」は姉妹科目である。合わせて履修することを推奨する。どちらが先でも良い。「こころ」について多角的な捉え方を学ぶことは人間について理解を深める基礎となる。

【Outline (in English)】
This class allows you to learn basics of science of the mind. It also aims to provide you with a new perspective of the mind by re-examining your real-world experiences in your "mind".
By the end of the course, students should be able to explain overview of fundamental elements of science of the mind including attention, emotion, concept learning, problem solving, mistake, and affordance.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on (1) final report/exam (50%) and (2) short reports and the quality of the student's in-class contribution (50%).

PHL300GA（哲学 / Philosophy 300）

こころとからだの現象学

森村　修

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
こころとからだの関係を考える
　あなたたちには「こころ」が「あります」か? 多くの人が「こころがある」と答えると思います。それでは、次の質問です。「それでは、あなたが言うように「こころがある」ならば、それは「どこにあります」か?」。ほとんどの人が「頭にある」、より正確には「脳にある」と答えるかもしれません。それでは、「こころが頭（脳）にある」ならば、こころと脳とは、どのように関係していますか?」。「こころがある」と答えた人に質問します。それでは、「こころは見えたり触れたり、知覚できたりしますか?」。もしも「こころ」が見えたり触れたりできないのに、あなたはどうして「ある」と言えるのでしょうか? あなたは「自分で体験しているから」と答えるかもしれません。それでは、「自分で体験するから、「こころはある」のですか? それでは尋ねますが、「あなたの体験は、あなたの「どこで」するのでしょうか? こころで体験するのですか? からだで体験するのですか?
　私たちは、「こころがからだにある」とか「こころを持っている」と日常生活の中で疑問を持たずに漠然と信じています。ただ、哲学はこうした常識を徹底的に疑います。何も前提にしないこと、それが哲学的立場としての「現象学」のモットーです。そこで「こころとからだの現象学」という本科目は、「こころとからだ」を考え、それらがどのように結びついているのか（結びついていないのか）について徹底的に追求していく、現象学（**Phänomenologie**）（独）という哲学的立場から考察する科目なのです。
「こころ」は存在しない
人間が思考する能力が始まって以来、「こころ」（魂）について徹底的に考えられきました。それにもかかわらず、「こころ」を十分に理解できたという学説は、自然科学も含めて存在しません。いまだに、「こころ」と「からだ」の関係すら明らかになったとは言えません。
「こころとからだの現象学」では、「こころの哲学」の歴史から様々な哲学者の見解をおさらいし、「こころの哲学」が具体的にどのような問題に取り組んできたかを学びます。そして、20世紀後半から現在に至るまで、認知科学や「こころの科学」と言われる分野と交流をしながら、新しい「こころとからだの哲学」を学んでいきます。

【到達目標】
・「こころの哲学」の歴史を学ぶことによって、「こころとからだ」の関係について、哲学的に説明できるようになる。
・哲学的な立場としての「現象学」の基礎を学ぶことができる。
・「こころとからだの現象学」を通じて、科学的にアプローチする「こころの科学」との関係性を明らかにすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
【授業の進め方】
本科目は、原則的には講義形式で行います。また、必要に応じて受講生たちから積極的に意見を聞くなどして、受講生1人ひとりが自分の「こころとからだの関係」に対して自覚的になるように、授業を進めます。というのも、現象学という哲学の立場は、主観的体験を重視し、自らの体験に基づいて哲学的な問いを立てていく哲学の立場だからです。
・事前に文献の一部を読んできてもらい、文献の内容を深く理解してもらうために、授業で文献内容についての要約を試みます。
・受講生の要約やコメントを受講生全員で検討し、互いの読解力を高めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション 講義の概略と進め方	こころとからだについての基本的な考え方
2	こころの働きは、ア・プリオリ（非経験的）のものか、ア・ポステリオリ（経験的）なものか?	認識の働きは、科学的に解明できるのか? —— カントとヴント
3	意識の働きは、どのように記述できるのか?	意識の志向性 —— フッサール超越論的現象学(1)
4	楽しい時はすぐに時間が過ぎるのに、退屈な時はなかなか時間が過ぎないのはなぜ?	時間意識の現象学 —— フッサール超越論的現象学(2)
5	からだは「存在する」のに、こころは「存在する」とはなかなか言えないのはなぜ?	世界内存在と道具 —— ハイデガー実存的現象学(1)
6	私が生きているうちは「存在する」なら、私が死んだら、私は存在しないのか?	実存的自己と死への「不安」 —— ハイデガー実存的現象学(2)
7	私たちの知覚は、どのように環境と関わるのか?	原子論的心理学への批判 —— ゲシュタルト心理学
8	私たちの知覚は、どのように身体に根ざしているのか?	現象学と心理学 —— メルロ=ポンティの現象学(1)
9	私たちのからだは、どのようにして生きているのか?	身体の現象学 —— メルロ=ポンティの現象学(2)
10	自己はひとりぼっちなのか?	自己の存在論 —— サルトルの現象学的実存主義
11	知覚は環境との相互作用なのか?	生態学的心理学 —— ジェームズ・J・ギブソンの生態学的心理学
12	コンピュータには何ができないか?	認知主義への現象学的批判 —— ヒューバート・ドレイファスの哲学
13	こころとからだの現象学に向けて	エナクティヴィズム —— 現象学的身体性認知科学
14	総合討議と、まとめ	「こころとからだ」について再考する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業で用いる文献を事前に読んでもらうことがある。
・また、各講義に生じた疑問について、そのつど発表できる準備をしておく。

【テキスト（教科書）】
・ステファン・コイファー&アントニー・チェメロ『現象学入門—— 新しい心の科学と哲学のために」田中彰吾・宮原克典訳、勁草書房、2018年
（Stephan Käufer and Anthony Chemero, *Phenomenology: An Introduction*, Polity Press, 2015.）

【参考書】
・ショーン・ギャラガー&ダン・ザハヴィ『現象学的な心—— 心の哲学と認知科学入門』石原孝二他訳、勁草書房、2011年
（Shaun Gallagher and Dan Zahavi, *The Phenomenological Mind: An Introduction to Philosophy of Mind and Cognitive Science*, Routledge, 2008/2nd Edition,2012.
・Tim Bayne and Michelle Montague eds. *Cognitive Phenomenology*, Oxford University Press, 2011.

【成績評価の方法と基準】
平常点(40%：討議への参画、小レポートを含む)と、試験あるいは課題レポート(60%)。以上を総合的に評価し、評定を決める。

【学生の意見等からの気づき】
「こころとからだ」の関係について考えることは、簡単なようでとても難しいので、なるべく具体的な経験をもとに議論を進めるようにする。

【学生が準備すべき機器他】
リアクションペーパー、課題提出等に授業支援システムを利用することがある。授業前後に確認すること。

【関連科目】
・「こころの科学」は姉妹科目である。合わせて履修することを推奨する。どちらが先でも良い。「こころ」について多角的な捉え方を学ぶことは人間について理解を深める基礎となる（甲先生）。
・「文化情報概論」や「文化情報の哲学」などと基本的なモチーフは共有しているので、これらとともに受講することが望ましいです。「概論」はこころとコミュニケーションの関係をテーマにしていますし、「文化情報の哲学」は、精神異常や発達障碍など「こころ」が病んだり障碍したり、また遺伝的に脳が障碍したりした人と精神やこころとの関係を論じています。

【Outline (in English)】
In this class, through the history of "phenomenological philosophy", we will confirm how "the relationship between mind and body" has been discussed and examine what kind of problems the phenomenological philosophy has tackled concretely. And from the latter half of the 20th century to the present, we will learn a new "phenomenology of mind and body" evolving under the influence of cognitive science and "mental science".

FRI300GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 300）

ゲーム構築論

重定　如彦

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この科目では、情報学を適用したモノづくりの面白さと難しさをコンピュータゲームのモノづくりを通して学ぶ。コンピュータにはワープロ、メールソフト、ウェブブラウザ、ゲームなどありとあらゆるソフトウェアがあり、我々は日々それらの他人が作成したソフトウェアを利用しているが、これらのソフトウェアが実際にどのようにして作られているかについて知っている人はあまりいないのが現状である。そのためコンピュータで何かを行う場合、他人の作成したソフトウェアを探して利用する必要があるが、そのようなソフトウェアが見つからなければあきらめるしかない。
　実際にはプログラミングを学ぶことで、簡単なソフトウェアであれば必要に応じて自分で作ることができるようになる。つまり、コンピュータのソフトウェアの消費者から、コンピュータのソフトウェアの生産者になることができるようになる。
　日常にあふれるコンピュータのソフトウェアはどのようにして作られているのか？ 本授業ではソフトウェアの中でも親しみやすいコンピュータゲームのプログラミングの観点から具体的な方法論を、実験実習を通じて学ぶ。
　コンピュータゲームの題材としては主に、占いや数当てゲームなどの初歩的なものからはじめ、最終的にはマインスイーパーやテトリスなどの知名度の高いゲームを扱う予定である。

【到達目標】
　コンピュータゲームのモノづくりを通じてコンピュータのソフトウェアがどのようにして動いているかを理解し、自分の力で簡単なソフトウェアを作り出すことができるような実践的な能力を身に着けることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
　授業ではコンピュータプログラミングの入門用言語としてJavascriptを用いたソフトウェア制作の実習を行う。様々なソフトウェアの制作を通じてプログラミングの基本となる考え方、課題、解決の手法、実践に必要な知識を実習を通して学ぶ。
　前半では、「占い」、「数当てゲーム」といった簡単なゲームを扱うことによってプログラミングの基礎を学ぶ。
　後半では「マインスイーパー」や誰もが知っている「テトリス」などといった複雑なゲームを扱うことでコンピュータのソフトがどのような考え方によって作られているかについて学ぶ。
　実際に取り上げるゲームの題材は学生の興味と理解に合わせて臨機応変に取り上げる予定であり、学生の要望によっては他の題材を取り上げる可能性もある。下記の授業計画は上記の題材を取り上げた場合の計画である。
　授業はすべて、情報実習室の機材・設備を活用した実習形式で行い、参加者の学習状況や実践力を確かめながら進める方法をとる。
学習支援システムのアンケートの機能を使って、毎回授業のリアクションペーパーに相当するものを実施する。各回の授業の冒頭で、必要に応じてその中からいくつかを取り上げてコメントを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	プログラミングとはどういうものかについて学ぶ。Javscriptの基礎について学ぶ
2	占い	変数、乱数、条件分岐について学び、占いのゲームを作成する
3	数当てゲームその１	変数を使って回数を数える方法について学び、数当てゲームを作成する
4	数当てゲームその２	数当てゲームを完成させる
5	マインスイーパーその１	配列変数について学び、マインスイーパーの盤面をどのように表現するかについて学ぶ
6	マインスイーパーその２	グラフィックスについて学び、マインスイーパーの画面の表示方法について学ぶ
7	マインスイーパーその３	マウスイベントについて学び、画面上をクリックすることによってマインスイーパーのマスを開く方法について学ぶ
8	マインスイーパーその４	マスを開いた際の処理、旗の処理、ゲームのクリアの判定方法について学ぶ
9	マインスイーパーその５	マインスイーパーを完成させる
10	テトリスその１	テトリスの盤面を表現する方法、様々な種類のブロックをどのように表現するかについて学ぶ
11	テトリスその２	ブロックの移動、回転の方法について学ぶ
12	テトリスその３	ブロックがくっついた時の処理、ブロックを消す方法について学ぶ
13	テトリスその４	ブロックを時間経過によって移動させるというアニメーションの手法を学ぶ
14	テトリスその５	その他、点数、ゲームオーバーなどテトリスに必要な機能を実現する方法について学び、ゲームを完成させる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
教科書を予習復習し、各自制作の実習を行う。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
学生のためのJavaScript　重定 如彦 著 東京電機大学出版局
授業で使用するので、受講する場合は必ず各自で入手する事

【参考書】
必要に応じて授業内で説明する

【成績評価の方法と基準】
平常点 10% 課題90%
課題は授業内で適宜指示する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
進め方が早すぎてわからなくなることがあったという意見があったので、早くなりすぎないように注意したい。

【学生が準備すべき機器他】
　情報実習室のパソコンを使用した実習型の授業である。授業は、教卓機パソコン画面上のテキストを使用し、各種ソフトウエア等を用いて進める。

【その他の重要事項】
熱意があればプログラミングの未経験者でもテトリスを完成させることが可能です。プログラミングやコンピューターゲームに興味がある方はぜひ受講してみてください。
マインスイーパーやテトリスの完成版を見たい方は、https://web.tdupress.jp/downloadservice/ISBN978-4-501-55770-6/からウェブ教材をダウンロードし、下記の操作を行ってください。なお、このウェブ教材はフリーソフトにしましたので、教科書を購入せずにダウンロードしてもOKです。
マインスイーパー
・上部の 11 章をクリックする
・左の項目の一番下にある解答例（J)をクリックする
テトリス
・上部の 15 章をクリックする
・左の項目の一番下にある解答例（J)をクリックする
　なお、この解答例では2色のブロックしか落ちてきませんが、少しプログラムを記述するだけでブロックの種類を増やすことができます。
その他の章も同様に解答例をクリックすることで、各章の章末問題の解答例を実際に見ることができます。
生成AIを補助的に利用することは認めるが、生成のみを利用した課題の提出は認めない。
本授業では取り扱いませんが、プログラミングに関連するものとしてPythonで○×ゲームのAIを作成する記事を下記のURLで連載しているので興味がある方は参考にして下さい。
https://qiita.com/ysgeso/items/04deccdfe7ec15314c48

【Outline (in English)】
Objectives of this class are to learn the enjoyment and difficulty of creating computer software by applying informatics.
The theme of computer software is entertainment. Starting from simple fortune telling software, this class deals with number guessing game, minesweeper, and tetris.
Students will prepare and review the textbook and practice their own work. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Ordinary points 10%, Assignments 90%.
Assignments will be given in class as appropriate. Students who have achieved at least 60% of the objectives of this class will be graded on the basis of this grading system.

HUI200GA（人間情報学 / Human informatics 200）

道具のデザイン学

松田　美奈子

サブタイトル：魅力的な体験をデザインする、という考え方
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：ヒューマンインターフェイス論
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席すること
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい< br /> 旧：ヒューマンイタンーフェイス論の修得者は履修不可

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
●　デザイナーだけではない。利用者の視点がデザインに役立つ！
日常生活はたくさんの道具やサービスであふれている。日常生活で出会う道具にはコンタクトレンズのような小さなモノから建築物やアミューズメントパークのような大きなモノまである。それらの道具が魅力的で使いやすいと日常生活も豊かで楽しくなる。
　利用者としてのあなたの体験に目を向けよう。お気に入りの道具を楽しむこともあれば、面倒な操作で不快になった体験もあるだろう。
●　デザインすると、暮らしはもっと快適になる
暮らしの道具やサービスを使いやすく魅力的にデザインすることは、その道具の利用者の生活をもっと豊かで快適なものにすることに直結している。道具のデザインは重要である。そのデザインに、ユーザからの視点が非常に役立つことが分かってきた。
●　ユーザの体験（エクスペリエンス）をデザインする、という考え方
ではどうデザインするか。本講義では、利用者にとって使いやすく、魅力的なものをデザインすることを目指す方法論「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」の基本から、デザイン手順までを実践的に学べる。それは、デザインする際の主役である「ユーザ」について深く理解し、特性を分析する作業から始まる。
「モノづくり」、特に道具・家具・文具のデザインに興味のある皆さんの参画を期待する。
　文化や特性が異なるために摩擦が生じるのは人種や民族間だけではない。ロボットを始め、人が造った人工物と人間も、材質や見かけだけでなく、知的能力、言語コミュニケーション能力、感覚、情動などさまざまな側面において異なっている。このため、人工物と人間の間でも様々な摩擦が生じる。このことを学ぶことは、これからの社会に重要な、人と人工物が共生する社会について考える際の基礎となる。

【到達目標】
UXデザインの基礎が身につく
・使いやすく魅力的な道具やサービスをデザインするための方法論、「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」の基本的な考え方を説明できるようになる。
・デザインの基本原則から、ユーザ特性の分析方法、デザイン手順まで、実践的に説明できるようになる。
・最終課題に取り組むことで、道具・商品・サービスのデザイン案を、利用者のエクスペリエンス(experience=体験)の観点からデザインし、企画を提案できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
日常生活を豊かで暮らしやすくする「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」を、基本から実践までを体系的に学ぶことができる。
●各回において受講生のコメントシートを踏まえながら前回のおさらいと解説をし、理解の深化を促す。受講生どうしの討議・意見交換の機会を適宜促すとともに解説を行う。改良アイディアがさらに得られるように工夫する。
●「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」の手法を学び、実践する
特に後半では、具体的なデザイン方法論の基本から実践手順までを学ぶ。講義での説明に基づいて、各自が練習課題に取り組む。その成果を蓄積していくとレポートが仕上がるように工夫されている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	暮らしはデザインの可能性であふれている
2	『暮らし』をシナリオに書いてみよう	日常生活の道具に着目し、「暮らしのシナリオ」を描く
3	なぜ使いにくいモノが暮らしにあふれるのか	デザイナーだって、利用者に喜んでほしい
4	使いやすい道具は生活を快適にする	決め手は、ヒトと道具のコミュニケーションのデザインだ
5	ユーザの心理学	ユーザの認知過程: 道具の「使いにくさ」を科学的に解析する
6	ヒューマンエラー	ヒトは間違えやすく、思い込みが強く、新しい事をなかなか覚えない動物である
7	道具の使いやすさ	「使いやすさ」を定義する。ユーザビリティの国際規格
8	「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」① *User Experience (UX) Design*	ユーザの特性を理解し、体験*(experience)*をデザインする、という考え方
9	「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」②理論	*UX Design* の考え方の基礎と基本原則を学ぶ
10	「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」③手順	デザインの流れと、具体的な手順
11	道具のデザイン実習①商品の企画、ユーザー分析	魅力ある企画書を作るために ユーザ・ニーズとシナリオに基づくデザイン
12	道具のデザイン実習②デザインプロセス	ユーザの快適な体験*(experience)*をデザインする
13	道具のデザイン実習③評価技法の例	道具の使いやすさの評価技法
14	デザイン案の発表会	受講生によるデザイン案の発表、ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業の復習を兼ねて、課題練習を少しづつ積み重ねる。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。授業時間外に観察や調査の実施、レポート作成のなどの活動が含まれる。

【テキスト（教科書）】
・「誰のためのデザイン」（D.A.ノーマン、新曜社）2015

【参考書】
・「ユーザーインタビューをはじめよう」（ポーチガル著、ビー・エヌ・エヌ新社）2017
・「ユーザビリティエンジニアリング」（樽本徹也、オーム社)2014
・「UXデザインの教科書」（安藤昌也著、丸善出版）2016
・NPO人間中心設計推進機構：　http://www.hcdnet.org/
・ユーザインタフェースと認知モデル（甲洋介、人工知能学会論文誌）
・「人間計測ハンドブック」（甲ほか、朝川書店）2013

【成績評価の方法と基準】
・レスポンスシート、授業・討議における積極性な貢献度合い(50％)
・発表とレポート(50％)
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生による互いのデザイン企画案の発表会が、大いに刺激になる、との感想が寄せられる。私もそれを楽しみにしている。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布、レスポンスシート・課題提出等に学習支援システム等を利用する。授業前後にアクセスし確認すること。

【その他の重要事項】
いわゆるコンピュータの授業ではないので、注意のこと。
【実務経験のある教員による授業】
教員は一般企業で製品/サービスのデザインに関わる業務に20年以上従事。ビジネスの現場でも幅広く活用できる実践的なデザインアプローチを学ぶ。

【履修条件】
・国際文化学部生は「情報リテラシーⅠ・Ⅱ」を単位取得済みであること。
・他学部生（国際文化学部生以外）は初回の授業に出席し必ず先生に履修の許可について相談すること。

【関連科目】
・姉妹科目の「文化情報のデザインワークショップ」は、ユーザーエクスペリエンス・デザイン手法の実践ワークショップになっている。これと併行履修することで知識と実践の相乗効果が得られる。

【情報機器・視聴覚設備の活用】
ＰＣ、プロジェクター等の視聴覚設備を活用する。

【Outline (in English)】
This class allows you to learn the "User Experience (UX) Design". By the end of the course, student understands the basic principles of the "UX Design" and should be able to understand how to apply some basic methods.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on (1) final report/exam (50%) and (2) short reports and the quality of the student's in-class contribution (50%).

COT200GA（計算基盤 / Computing technologies 200）

情報セキュリティとプライバシー

和泉　順子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
PCや携帯電話などのようにネットワーク接続する情報機器を使用する際、ウィルスなど意図しないプログラムを引き込んで、被害にあうことがある。情報技術が社会基盤となり、広く一般に利用される一方で、セキュリティや個人情報保護等の問題も広く認識されるようになってきた。この授業では、身近に利用している情報サービスに対するリスクや脅威を学習し、情報セキュリティやプライバシー、および匿名性に関する議論を行い、有効にネットワークを使用するため、ネットワークユーザー個人として、あるいは組織のネットワーク管理者としての基本的な知識と情報管理技術を身につけることを目標とする。
　ネットワーク上のウィルス等の脅威から身を守るためには、ファイアウォールやアンチウィルスソフト等に代表される情報システム的手法と、ルールや法律によりそれを抑止する手法がある。両者を解説する。

【到達目標】
・PC等、個人用情報機器を利用する上で、必要な情報セキュリティ知識を身につける。
・より高いセキュリティを実現する方策を立案できる。
・セキュリティを守るためにどのような社会制度があるかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
情報実習室での対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更や それにともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システム（Hoppii）でその都度提示する。抽選の可能性があるので、履修予定者は必ず初回授業前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加すること。
前半は主に講義中心に進めるが、途中で実習とその内容に関する課題がある。課題等の提出・フィードバックは、授業内および学習支援システムを通じて行う。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の構成と進め方、および学習環境について説明し、スケジュール、テキスト等の紹介する。
2	自分のPCを守る	アンチウィルスソフト、ファイアーウォール、アップデート。
3	アタックのパターン(1)	個人PCを狙う攻撃。「強い」パスワードとは。コンピューターウィルスやパスワードクラッキング。
4	アタックのパターン(2)	WEBを使う攻撃。クロスサイト・スクリプティング、DNSキャッシュポイズニング。
5	仮想世界の「名前」とアクセス制限	情報サービス上で用いている「名前」とプライバシー、匿名性について。また、データアクセスの制限の必要性とその手法。
6	インテリジェンス、OSINT	インテリジェンスとは。またその中で特にインターネットに親和性の高いOSINT（Open Source Intelligence)について。
7	暗号とは(1)	暗号の歴史と基礎理論。ハッシュ、電子署名などその応用。
8	暗号とは(2)	共通鍵暗号法の原理と実践（実習)。
9	暗号とは(3)	公開鍵暗号法の原理と実践（実習)。
10	電子署名と認証	電子署名とは。SSHによるネットショッピング。
11	組織としてのセキュリティ対策(1)	情報漏洩の事例紹介。
12	組織としてのセキュリティ対策(2)	CSIRTの必要性とその適応範囲。
13	法制度による情報安全対策	国際的なサイバー犯罪に関する法規・法律。
14	期末試験、授業のまとめ	授業内容の理解度を確認するための試験を実施。情報セキュリティの考えかたの確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
社会生活を送る上で、情報セキュリティとしてどんなリスクや脅威があり、そのためにどんな対策があるのか意識する。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に必要としない。

【参考書】
授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点（20%）と課題（またはレポート）（30%)、期末テストの成績（50%）を併用した評価を行う。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
対面での期末テスト実施が困難な場合は、オンライン試験に切り替えた上で、小テスト・課題・レポートの配点を若干上げる可能性がある、また掲示板などでのコメントや情報共有を平常点として加点する。詳細は初回授業時に説明する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の習熟度に応じて、授業の進度や課題の難易度は適宜調整しながら進める。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室のパソコンを使用した実習を伴う授業である。情報実習室で対面授業を行う場合は、教卓機パソコン画面上のテキストや資料を使用して進める。オンライン併用の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。
基本的にはWindowsでもmacOSでも構わないが、CUIコマンドによる基本的なファイル操作ができる環境（コマンドプロンプト、ターミナルなどの各種shellが利用できる環境）を前提としている。
毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
受講者数が定員を超過する場合は初回授業の課題をもとに選抜を行う。
初回授業はZoomを用いたオンライン授業となるが、受講者数把握のため、受講希望者は初回授業日の前日までに学習支援システムに仮登録すること。
詳細は学習支援システムを参照し、授業資料や「お知らせ」を必ず確認すること。
授業は「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」の内容を概ね理解していることを前提に進めます。また、授業内容に関連するので「ネットワーク基礎」の履修、あるいは並行履修を推奨します。

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this class, we learn the risks and threats to the information services that we are using closely. We will also discuss information security, privacy, and anonymity, with the goal of acquiring basic knowledge and skills for information management.
（Learning Objectives）
- To acquire the necessary information security knowledge for the use of personal information devices such as PCs.
- To be able to plan measures to achieve higher security.
- Understand what social systems are in place to protect security.
ks and related information technologies.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end exam (50%).

BIO200GA（その他の総合生物・生物学 / Biology 200）

文化と生物

島野　智之、川上　裕司、黒沼　真由美、松崎　素道、鈴木　忠、富川　光

サブタイトル：生活にいかす生物との関わり
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：バイオインフォマティクス
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：旧：バイオインフォマティクスの修得者は履修不可

その他属性：〈優〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文化という視点からみた生命の実像を学ぶ.
内容は大きく2つに分けて，(I-II)「ヒトを取り巻く文化と生物」と，(III-V)「生物それ自体とその進化」について講義を行う．分野は衛生学，美術，生物学，農業にわたり，生物情報をどのようにヒトが利用しているのかを学ぶ.

【到達目標】
ヒトの生活と生物にまつわる歴史，文化そして，現代的な問題を解決する方法について，考え理解する．生物の多様性や進化について，考え理解する．現代の生物学は情報科学的側面を強く持っている.ここでは，生命活動における情報（主に遺伝情報）の特徴とその役割について，現代生物学の手法を体験し，現状を理解する.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
講義はやわらかく，文系学生にも分かりやすい内容や説明を行う.
講義はオムニバス形式で，それぞれの分野の専門家に最新の知識を示してもらいます．11回までは，講義が中心ですが，特に，5-8回は，討議などもいれたアクティブラーニングの手法ももちいます．随時，ビデオやスライドを用いてわかりやすく紹介します.最後の実習（12回以降）は，実際にパソコンのソフトを用いて，外部の生物学専門機関が公開している種々のサービスを利用して行います.
メールの添付などの方法で課題等に対するフィードバックをおこないます.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	講義ガイダンス (I) ヒトの生活環境と生物 (1) 食文化と微生物 担当教員：川上	講義内容のあらすじ ①善玉菌と悪玉菌とは何か（細菌・真菌・ウイルスの違い）,②食中毒とは何か,③発酵食品に利用される微生物と食文化の発展について
2	(I) ヒトの生活環境と生物 (2) 健康的な食生活と微生物 担当教員：川上	①プロバイオティクスとは何か,②医食同源は健康的な食生活の基本,③人類の食糧難を引き起こす昆虫と救う昆虫（農業・食品害虫と昆虫食）について
3	(I) ヒトの生活環境と生物 (3) 住まいと害虫 担当教員：川上	①主な衛生害虫・衣類害虫・家屋害虫とその生態,②ダニ・昆虫アレルギーについて,③殺虫剤と害虫対策法
4	(I) ヒトの生活環境と生物 (4) 住まいと微生物 担当教員：川上	①病原体としての細菌・真菌（カビ)、②真菌アレルギーについて、③殺菌剤とIPM（総合的有害生物管理）による対策法
5	(I) ヒトの生活環境と生物 (5) 文化財を害虫やカビから守るためには 担当教員：川上	①文化財の保存科学現状と問題点、②カビ被害の実際と対策、③害虫被害の実際と対策
6	(I) ヒトの生活環境と生物 (6) 地球環境と微生物〜歴史を作る影の立役者〜 担当教員：川上	①感染症と人類の歴史、②ハンセン病と日本の歴史、③地球環境と農業分野への活用
7	(II) 生物の進化と塩基配列情報 (1) 塩基配列情報によって進化を推定する. 担当教員：島野	生物の進化を推定する．生物の遺伝子DNAの塩基配列情報から作成された系統樹から何がわかるのか.
8	(III) 動物とは？ (1) 死と復活 担当教員：鈴木	自然発生論争と蘇生論争
9	(III) 動物とは？ (2) 未発見の生物を発見するために，冒険に出よう. 担当教員：鈴木	生物と名前。なぜ生物に名前があるのか。どのように名前を付けるか。
10	(II) 生物と生態系 (1) 生物と環境の共進化 担当教員：松崎	生命の起源、共生による生物進化、地球環境の改変と適応
11	(II) 生物と生態系 (2) 生態系と寄生生物 担当教員：松崎	寄生生物が生態系で占める位置と役割（生態系改変や宿主操作）
12	(II) 生物と生態系 (3) 食文化と寄生生物 担当教員：松崎	寄生生物と食文化との関わり
13	(IV) 生物の分類と命名 (1) 人間生活と生物の分類 担当教員：富川	生物を分類し，名前を付けることの意味について，人間生活と関連付けて考える.
14	(V) 無脊椎動物解剖学 (1)無脊椎動物の体の仕組み 担当教員：黒沼	地球上で繁栄している無脊椎動物である節足動物の定義をおさらいし，様々な形態や筋肉のつき方,動きを比較する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本講義は，生物学だけでなく，情報科学，人文・社会科学などとの関連も含めて学ぶので，学生自身も普段から情報という視点で，様々な知識を相互に連関させて理解し,柔軟な思考ができるように努めてもらいたい.本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義テーマに合致する市販のテキストはない.個人的に作成した講義資料を使用する.

【参考書】
講義資料の最後に参考書のリストが掲げてある.教材をよく読んでレポートの作成に取り組んでください。

【成績評価の方法と基準】
基本は講義・実習の最後に提出してもらうレポート(60%)だが,この他に講義内で提出してもらう様々な文書(ビデオ等の感想,小テストなど)(40%)も加え,総合的に評価する.
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする.

【学生の意見等からの気づき】
今年度，カリキュラムを大幅に改訂し，国際文化学部の学生にも興味と応用的知識を提供するようにつとめている．引き続き，改善につとめている途中である.
受講生の数にもよるが，少数の場合は，個別に希望・要望等を聞いて講義内容・方法の改善に努めたい.

【学生が準備すべき機器他】
情報機器を使用します.パソコンにインストールされているソフトを元に，実習します.遺伝子データベース　http://www.ddbj.nig.ac.jp/searches-j.html を使います.

【その他の重要事項】
情報実習室で行うことに注意してください.

【Outline (in English)】
In this course, students will be introduced to how humans use biological information for culture through hygiene, art, biology, agriculture, etc., and the real image of life from the perspective of culture.
The content is divided into two major sections: (I-II) "Culture and organisms surrounding humans" and (III-V) "Organisms themselves and their evolution. The fields of study include hygiene, art, biology, and agriculture, and we will learn how humans use biological information.
Students are expected to complete the required assignments (class tests, assignment reports) at the end of each class.Your study time will be more than four hours for a class.
The basic grade is the report to be submitted at the end of the lecture/practice (60%). In addition to this, various documents to be submitted in the lecture (impressions of videos, etc., quizzes, etc.) (40%) will also be added, and students will be evaluated comprehensively.
Students who have achieved at least 60% of the objectives of the class will be graded on the basis of this grading system.

BIO200GA（その他の総合生物・生物学 / Biology 200）

文化と環境情報

島野　智之、佐々木　美貴、中西　由季子、忽那　賢志、塚田　訓久、島田　瑞穂、吉川　翠、長谷川　真紀子

サブタイトル：人間社会や文化が，生態系とどのように関わっているのか

配当年次／単位：2〜4年／2単位

旧科目名：

旧科目との重複履修：

毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall

人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
生物は、それぞれの生活環境に適した結果、多様性に富んだ進化の道を進んできている。多様な環境条件下で生活しているヒトは、環境に適応するためにさまざまな技術や思考を創造してきた。人間の活動と環境の相互作用によって構築される文化に着目し、自然科学及び人文社会科学の多面的な視点から、ヒトを取り巻く環境から得られる情報と文化の成り立ちや持続可能な社会について学ぶ。

【到達目標】
人間社会や文化が，生態系とどのように関わっているのかについて考え理解する．現代の生物学は情報科学的側面を強く持っている．ここでは，生態系，地球環境と，人間生活，食文化，病気などについて，現代生物学，栄養学，医学，保全生態学の観点から現状を理解する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
講義はやわらかく，文系学生にも分かりやすい内容や説明を行う．講義はオムニバス形式で，それぞれの分野の専門家に最新の知識を示してもらう．講義が中心だが，討議などもいれたアクティブラーニングの手法ももちいる．随時，ビデオやスライドを用いてわかりやすく紹介する．メールの添付などの方法をもちいて課題等に対するフィードバックをおこなう．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	講義ガイダンス (I) 生物多様性と持続可能性 (1) 生物多様性はなぜ必要なのか. 担当教員：島野	講義内容のあらすじ ①生物多様性条約　②食文化（乳製品）と生物多様性　③分類学と生物多様性
2	(II) 持続可能な社会づくりと未来 (1) SDG s de 地方創生ワークショップ 担当教員：中西	「SDGs de 地方創生」を通じて、SDGsを「まちづくり」や「地方創生」の身近な“プロジェクト”に引き寄せながら “自分事として体感”する．地域で暮らす市民，事業者，ＮＰＯ，自治体など地域の様々なステークスホルダーが、持続可能なまちづくり【地方創生 ×SDGs】の目標実現に向けたプロセスを疑似体験する． ①「SDGs de 地方創生」 ②まちづくり ③地方創生 ④人口減少
3	(II) 持続可能な社会づくりと未来 (2)Change for the blue（海洋プラスチック課題）ワークショップ 担当教員：中西	「Change for the blue」を通して、海洋プラスチック削減のために、企業・組織の一員としてできること、一市民としてできることについて考え、市民意識、技術、経済状況等も踏まえて、ごみ削減を体感する。 ①Change for the blue ②海洋プラスチック ③ごみ削減
4	(II) 持続可能な社会づくりと未来 (3) レゴ(R)・シリアスプレイ(R)のMethodと教材を活用したワークショップ（ありたい未来の世界を考える） 担当教員：中西	レゴ(R)・シリアスプレイ(R)のメソッドと教材を活用し、ありたい未来の世界の姿についてコンストラクショニズムに基づき、作品を作成し、内省し、対話を行う。①レゴブロック ②コンストラクショニズム ③対話
5	(III) 感染症と日本社会 (1) 野生動物とヒトの間の感染症 担当教員：島田	日本の原風景である里山では、人々の生活様式の変化に伴う荒廃が進み、野生動物が増加している。イノシシやシカを用いたジビエ料理の文化も交え、野生動物とヒトの間を行き来する人獣共通感染症について考える。
6	(III) 感染症と日本社会 (2) 新興感染症 担当教員：忽那	①新型コロナウイルス感染症とは？ ②新型コロナウイルス感染症とリスクコミュニケーション ③新型コロナウイルス感染症が社会に与えた影響
7	(IV) 生態系と持続可能な人間活動 (1) 土壌汚染 担当教員：長谷川	人間活動の影響によりおこる、化学物質や薬品、畜産などによる土壌汚染問題について学ぶ。また、汚染土壌中に棲む土壌動物の特徴について理解する。 ①人間活動の問題点 ②土壌汚染の具体例 ③汚染物質の土壌動物への影響
8	(IV) 生態系と持続可能な人間活動 (2) 近代以前の日本と現代の日本 担当教員：長谷川	江戸時代の暮らしや環境について学び、現代日本の社会生活の特徴について理解する。 ①江戸時代の暮らし ②循環型社会 ③江戸時代の農業
9	(II) 持続可能な社会づくりと未来 (4) 1日の生活様式と食生活を振り返る（生活活動調査＆食事バランスガイド） 担当教員：中西	生活活動調査と食事バランスガイドの調査用紙に回答し、一日の身体活動量を算定、エネルギー必要量や必要な食事バランスを知るとともに、各自の一日の食事を振り返り、どのような栄養バランスの食事をしているのか知り、改善点を考える。①身体活動量 ②推奨エネルギー摂取量 ③食事バランスガイド
10	(III) 感染症と日本社会 (3) エイズと社会 担当教員：塚田 ※この回は，オンラインに変更する可能性があります．事前にお知らせしますので注意してください	①「エイズ」ってなんだろう ②「エイズ」と向き合うことでみえてくるもの
11	(I) 生物多様性と持続可能性 (2) 霊長類の生物多様性 担当教員：吉川	霊長類の社会：ヒトは霊長類の１種であるという視点から、ヒトを含めた霊長類の社会や行動の違い、共通点を学ぶ。また、環境への適応について、ヒトの進化の隣人といわれるアフリカのチンパンジー等の行動生態の研究事例を学び、理解を深める。 ①ヒトと、ヒト以外の霊長類について ②霊長類の行動と生態
12	(V) 自然環境と文化 (1) 保全・再生 担当教員：佐々木	水辺の環境である湿地とその保全や利活用を推進するラムサール条約について学ぶ. さらに，新潟市佐潟の「潟普請」，習志野市谷津干潟の「アオサ対策」などの事例に即して，湿地の保全や再生にかかわる文化について考える.
13	(V) 自然環境と文化 (2) wise use（ワイズユース） 担当教員：佐々木	ラムサール条約が推進するワイズユース（賢明な利用）について学ぶ. さらに，大崎市の「ふゆみずたんぼ米」，檜枝岐村の尾瀬や温泉による観光，豊岡市の「環境経済戦略」などの事例に即して，ワイズユースにかかわる文化を考える.
14	(V) 自然環境と文化 (3) CEPA 担当教員：佐々木	ラムサール条約が進めるCEPA（コミュニケーション、力量形成，学習・教育，普及活動）について学ぶ. さらに，高島市の「ふるさと絵屏風」，ラムサール条約登録湿地関係市町村会議の「学習・交流会」，日本湿地学会の活動などの事例に即して，CEPAにかかわる文化を考える.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本講義は，生物学だけでなく，情報科学，人文・社会科学などとの関連も含めて学ぶので，学生自身も普段から情報という視点で，様々な知識を相互に連関させて理解し,柔軟な思考ができるように努めてもらいたい.本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
講義テーマに合致する市販のテキストはない.作成した講義資料を使用する.

【参考書】
講義資料の最後に参考書のリストが掲げてある.

【成績評価の方法と基準】
基本は講義・実習の最後に提出してもらうレポート(60%)だが,この他に講義内で提出してもらう様々な文書(ビデオ等の感想,小テストなど)(40%)も加え,総合的に評価する.この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
国際文化学部の学生にも興味と応用的知識を提供するようにつとめている．引き続き，改善に努めている．
受講生の数にもよるが，少数の場合は，個別に希望・要望等を聞いて講義内容・方法の改善に努めたい．

【学生が準備すべき機器他】
Hoppii学習支援システムを利用するので，情報機器（パソコンやタブレット）などを準備して下さい．

【その他の重要事項】
※講義10回目，塚田先生ご担当回　オンラインに変更する可能性があります．事前にお知らせしますので注意してください．

【Outline (in English)】
In this course, students will be introduced that living organisms have evolved in biological diversity as a result of their suitability to their respective living environments. Humans, living under diverse environmental conditions, have created a variety of technologies and thoughts to adapt to their environment.
The goal of this course is to understand the origins of culture and sustainable society with information obtained from the environment surrounding humans from multiple perspectives in the natural sciences and humanities and social sciences, with a particular focus on culture constructed through the interaction between human activities and the environment.
Students are expected to complete the required assignments (class tests, assignment reports) at the end of each class.Your study time will be more than four hours for a class.
The basic grade is the report to be submitted at the end of the lecture/practice (60%). In addition to this, various documents to be submitted in the lecture (impressions of videos, etc., quizzes, etc.) (40%) will also be added, and students will be evaluated comprehensively.
Students who have achieved at least 60% of the objectives of the class will be graded on the basis of this grading system.

HUI300GA（人間情報学 / Human informatics 300）

文化情報空間論

甲　洋介

サブタイトル：人工知能について考える、人間を捉える新たな視点
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代社会を捉える新たな視点として、『人工知能による人間と社会の拡張』の問題を取り上げる。時間軸の異なる３つの技法に着目する。
●　人工物を次々に生み出すことで自らの限界を超える
人間は自然界で非力な存在である。人工物を次々に生み出すことで、自分の身体的・感覚的・知的な限界を超えてきた。その結果、この世界は自然的な世界と言えなくなりつつある。私たちは自ら作り出した人工的世界に生きている、と考えるほうがむしろ自然だろう。
●　３つの『知』の仕組みに焦点をあてる　そしてどこに向かう？
知的人工物は、ロボットのように人間から独立した分かりやすいモノだけではない。身体に装着したり、服に埋め込んだり、脳波で作動させたり、ヒトの身体や能力と一体化して機能する人工物も存在する。知的人工物は日常生活の至るところに埋め込まれ、暮らしと一体化することだろう。その時に、何が起こるか。
●　これは人間の拡張なのか、人工的世界の拡張なのか
まず「人工物の科学」（H.A.サイモン）を理解することから始め、それをベースとして「知的人工物との暮らしのデザイン」について学ぶ。講義の終わりには、「都市」や「社会」もある意味で空間化した知的人工物として捉えることができるようになる。

【到達目標】
・人工物とは何か、それはどのように登場し、人間のもつ制約をどのように拡張してきたのか、「人工物の科学」の基礎を理解する。
・人工物が知的に振舞う技法として、知識表現、ニューラルネットワーク、遺伝的アルゴリズム、３つの仕組みの基礎を理解する。
・人間と人工物の共生を捉える幾つかの分析観点を学び、ある具体的な場面を切り出して、人工物によって拡張された暮らしのデザインに取り組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義は、受講生と教員の対話に加え、受講生どうしが討論し合い共に学び合う場を作りながら進める。
　まず「現在」を人間と知的な人工物との共生社会として捉えることから始まる。　そして、私たちの生活空間のさまざまな局面に人工物が浸透する様態に着目し、
①人間と独立したモノとして存在するいまの人工物、
②人間の身体や能力と一体化して作動し、人間を拡張する人工物、
③空間化し人間を包み込む環境として存在する人工物、
の3つの存在形態について検討する。
　これらの人工物が日常生活に埋め込まれることによって、私たちの生活習慣や文化はどのように変容し、生活空間はいかに拡張されうるのか。最後に、幾つかの生活場面を取り上げ、人間と社会の拡張を具体的にデザインすることに取り組む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	知的人工物との暮らし　〜サイバーパンクＳＦを超えて
2	暮らしの人工物のサイエンス	日常生活を構成する人工物
3	暮らしの人工物のサイエンス②	人工物を科学する、とはどのようなことか
4	人間のもつ制約を超える	人間の身体・感覚・認知の諸特性を拡張する人工物と、その方向性
5	変化に適応する人工物	環境を感じとり、身体を持つ知能としてのロボット
6	環境を感じ取り適応する知的な人工物	ニューラルネットワーク（神経回路網）モデル
7	環境を感じ取り適応する知的な人工物②	自然淘汰と遺伝的アルゴリズム
8	人間と一体化する人工物	身体と人工物の境界はすでにあいまいである
9	人間と一体化する人工物②	人間の知覚、感覚的諸能力との一体化
10	人間と協調する知的人工物	人間の認知的諸能力と一体化する
11	人間と協調する知的人工物②	人工物に感情は必要か
12	空間化する知的人工物	情報化する空間と、空間化する情報
13	人工物との暮らしのデザイン	具体的な場面を切り出して、人工物との暮らしをデザインする
14	まとめ	人間拡張学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義後に、講義と討議を通じて各自で考えた事柄をまとめ、学習支援システムに蓄積する。受講生からのコメントは講義で活かされる。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・システムの科学 第3版（H.サイモン著、パーソナルメディア）1999. 可能なら、The Sciences of the Artificial (The MIT Press、English Edition) 2019 が良い。J.E.Lairdによる序文が追補された.
他については、講義の進行に応じて指示する。

【参考書】
・「複雑さと共に暮らす」(D.A.ノーマン、新曜社)2011.
・「深層学習：ディープラーニング」(麻生英樹他、近代科学社)2015.
・Society 5.0（内閣府・科学技術政策）https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html
・「攻殻機動隊」（監督：押井守、ワーナー）他一連の作品群
他については、講義の進行に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】
・期末レポートまたは試験(50％)、
・授業・討議における積極性な貢献度合い（発表、レスポンスシートを含む）(50％)
を総合して評価する。
期末レポート未提出者／試験未受験者の単位は認定しない。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
具体例を増やし、分かりやすい説明を試みる。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布、レスポンスシート・課題提出等に学習支援システムを利用するので授業前後にアクセスし確認すること。

【その他の重要事項】
こころ、空間デザイン、人工知能、ロボットに興味のある皆さんに参画を期待する。

【履修条件】
・「情報リテラシーⅠ・Ⅱ」を単位取得済みであること。

【関連科目】
・「道具のデザイン学」「仮想世界研究」「こころの科学」「システム論」と組み合わせて受講することにより、履修効果が高まるようにデザインされている。

【Outline (in English)】
This class addresses the "Augmented Human", "Virtual Society" and "Intelligent Artifacts", as one of the essential issues of our modern society. It allows you to learn basic principles for designing the symbiosis and augmentation of human, society, and artifacts.
By the end of the course, students should be able to (a) explain basic concepts and framework of the augmentation of human and the intelligence of artifacts, and (b) discuss the design of the symbiosis of the “Augmented Human/Society” and “Intelligent Artifacts”.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on (1) final report/exam (50%) and (2) short reports and the quality of the student’s in-class contribution (50%).

COT300GA（計算基盤 / Computing technologies 300）

コンピュータ音楽と音声情報処理

大嶋　良明

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい
その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
PC でシンセサイザやエフェクタを自作する。音楽や音声を扱うプログラムを作る。 本講義では、音を扱うためのビジュアルプログラミング言語である Pure Data(Pd)を使って、さまざまな音の表現方法を学び作品を制作する。人間の表現行為を工学的に扱うことで、人間と機械のよりよい協調をマルチメディア、特に音楽や音声などオーディオメディアにより実現したい。同時に MIDI や OSC による他の機器との連携、ネットワーク環境での利用、IoT など現代的な利用のあり方を学ぶ。

【到達目標】
コンピュータ上で、音を生成する方法や、音の大きさ、長さ、音色、発音タイミングなどを制御する方法を習得し、サウンドプログラミングの基礎が理解できるようになる。Pure Data(Pd) に習熟しビジュアルプログラミングの考え方とコンピュータ音楽への応用が身につく。オープンソースソフトウェアとしての Pd の利点を認識し、Windows、 Mac など OS や機器の違いに影響されない作品作り、電子楽器とコンピュータとの連携を構想できるようになる。音響モデリングの実現例が切り開く先端的な音響処理の分野を理解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
ビジュアルプログラミング言語 Pd を使用して、情報教室でデモと実習を中心に学習を進め、音楽や電子楽器の自作を目指す。学期末を含めてセメスタ内に数回の課題を課す。講義・実習と平行して、Pd による音響モデリングの先端的な実現例を Andy Farnell のサンプルプログラムから学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンスおよび PureData(Pd)の概要	【講義と実習】PureData(Pd) とは何かを知り、基本的な操作方法を学ぶ。 【音響モデリング】DTMF トーン（プッシュホン）や家電話の呼出し音のモデル化を学ぶ。
2	Pd の基礎	【講義と実習】パッチ（Pd のプログラム）を作成する方法を学び、簡単な例題演習でパッチ作成の基本を習得する。 【音響モデリング】ボールが地面で跳ね返る音のモデル化を学ぶ。
3	音を出す	【講義と実習】音とは何か、コンピュータでの音響現象の扱いを理解し、音を出すパッチを作成する。 【音響モデリング】雷鳴の轟きのモデル化を学ぶ。
4	メトロノームを作る	【講義と実習】音出しのタイミング制御、音の繰り返し、テンポ設定の方法を学び、メトロノーム機能を実現する。パッチのテスト方法について学ぶ。 【音響モデリング】時を刻む柱時計のモデル化を学ぶ。
5	サンプラー機能を作る	【講義と実習】 オーディオサンプルの再生や録音した音を Pd で使う方法を学ぶ。 【音響モデリングの世界】 ジェット・エンジン音のモデル化を学ぶ。
6	リズムマシン (1)	【講義と実習】サンプラーで録音した音をさまざまなリズムで演奏するリズムマシンの基本形を作成する。 【音響モデリング】ヘリコプター飛行音のモデル化を学ぶ。
7	リズムマシン (2)	【講義と実習】リズムマシン基本形を発展させ、各ドラムパート音源を増やしモジュール化することで自動演奏楽器として完成させる。 【音響モデリング】人間の歌声のモデル化を学。
8	シンセサイザーと MIDI(1)	【講義と実習】波形合成によるシンセサイザーを作成する。MIDI による電子楽器の制御方法を理解する。 【音響モデリング】ロボット（スターウォーズ R2D2）の応答のモデル化を学ぶ。
9	シンセサイザーと MIDI(2)	【講義と実習】シンセサイザーの出力音にポルタメントやビブラートなどの効果を加える方法について学ぶ。MIDI 信号による制御を付加する。
10	音響効果の実装：リバーブ、ディレイ、フランジャー	【講義と実習】ディレイ音と直接音からなる音声再生と聴感上の効果の関係理解し、空間系エフェクトの実装に組み込む。 【課題制作】課題のガイダンス。最終課題を構想する。
11	インタラクティブ・アート：音と映像の連携	【講義と実習】 音に映像を連携させる手法を学ぶ。Web カメラから信号を Pd で加工する方法や Pd で映像を制御する方法を学ぶ。 【課題制作】進捗状況と問題点の共有。技法面での個々の問題点をクラス内で共有し、有効な解決を図る。
12	ネットワーク環境への拡張	【講義と実習】OSC プロトコルを理解し、ネットワーク環境下で複数の Pd パッチや外部制御を連動させる方法を学ぶ。 【課題制作】進捗状況と問題点の共有。技法面での個々の問題点をクラス内で共有し、有効な解決を図る。
13	フィジカル・コンピューティングとの連携	【講義と実習】Arduino、Raspberry Pi、Kinect、Leap Motion などフィジカル・コンピューティングと関連デバイスを学ぶ。Pduino による Pd と Arduino の連携方法を学ぶ。
14	まとめ	学習成果の総まとめを行う。課題作品の発表と相互批評、講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
情報リテラシー、メディア情報基礎、ディジタル情報学概論等の関連科目を前提知識として挙げておく。Pd はオープンソースのソフトウェアであり Windows でも Mac でもフリーで配布されており、情報カフェテリアの PC にもインストールされている。スマホ用にも Pd の実行環境は提供されている。授業時間外での Pd の実行環境を自分用に整備し、学習内容を十分に予習復習すること。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
実習内容を記したプリントを配布する。

【参考書】
参考書・参考資料等
【Pure Data】
美山千香士、『Pure Data チュートリアル＆リファレンス』、ワークスコーポレーション (2013) ISBN: 978-4862671424
松村 誠一郎、『Pd Recipe Book -Pure Data ではじめるサウンドプログラミング』、ビー・エヌ・エヌ新社 (2012) ISBN: 978-4861007804
中村隆之、『「PureData」ではじめるサウンド・プログラミング―「音」「映像」のための「ビジュアル・プログラミング」言語』、工学社 (2015) ISBN: 978-4777518821
【音響モデリング】
Andy Farnell, "Designing Sound," MIT Press(2010), ISBN:978-0262014410

【成績評価の方法と基準】
平常点（30％）、課題（30％）、最終課題の評点（40％）で成績を評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
講義だけではなく、実習を通して技術を体験できる授業にする。しかし、サウンドプログラミングの習得には毎回の授業だけではなく、課題の発展的応用を通じてコンピュータ音楽や音響現象への理解を深めることが同時に役に立つ。ぜひ情報実習室や個人の PC を利用して、授業時間以外にもプログラミングの復習時間を確保してほしい。また Web 公開されているさまざまな音響イベントやメディアアートの記録も積極的に参考にして欲しい。楽器屋で電子楽器に触れてみるのも良い体験となる。専門的な音楽の知識は必要としないが、音楽や音響への興味を大事にして授業に取り組んでほしい。

期中アンケートにおいて音楽知識に関する意見を貰ったので改めて明記するが、普通科での音楽の知識や簡単なポピュラー音楽用語のみで受講には十分であり、高度な楽典知識は前提としていない。

【学生が準備すべき機器他】
情報実習室のデスクトップPCを使用する。Pdはフリーにダウンロードできるので個人PC（Mac版、Linux版もある）にインストールすれば教室と同じ環境で作業できる。実習機器は担当教員が用意するので、受講のために購入する必要はない。

【その他の重要事項】
受講希望者は初回授業に出席すること。受講希望者が教室定員を超える場合には抽選を実施することがある。
実務経験のある教員による授業：
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理（特にディジタル音響、音声合成、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】
This course deals with electronic music and audio design and implementation by use of Pure Data, a visual programming language in a workshop-type classroom environment. The typical in-semester projects include drum machines, sequencers, studio audio effects, and music synthesizers. Advanced learners are encouraged to pursue MIDI/OSC enabled applications in collaborative environments, integration with sensor-enabled control interface, and small Arduino projects for interactivity.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Homework and in-class assignment: 30%
Final assignment: 40%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI300GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 300）

コネクション・デザイン

川村　たつる

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：ハイパーテクスト論
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：定員35名　定員を超えた場合は選抜を行いますので、初回授業には必ず出席してください。
備考（履修条件等）：旧：ハイパーテクスト論の修得者は履修不可

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、日本の住宅の変遷から見た家族関係の変化や現代の公共施設の在り方、シェアリング・エコノミー、ソーシャルネットワーク等の事例を見ていきながら、1989年にアメリカの社会学者によって提唱された「第三の居場所（サード・プレイス）」のような機能は、現代においてはどのように形を変え、どのような役割を持つことができるのかを考察していきながら、これからの “人と人” や “人と社会” の繋がり方を考えていきます。

【到達目標】
いろいろな事例を見ていきながら、受講者それぞれが “これからの第三の居場所（サード・プレイス）” を考えていくことで、社会における自身と他者の在り方を再考察できることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
■人数制限・選抜
本授業は、受講者により提出された課題の講評会を授業内で行う関係上、定員を35名とします。
※定員を超えた場合は選抜を行いますので、受講を希望される方は必ず初回授業に出席してください。

■授業の進め方
①授業は対面を基本としており、講義形式と2回のグループワーク、2回の講評会で構成されます。
②課題として、中間と最終の計2回のレポートを作成し、それぞれ2回の講評会で発表を行います。
③授業ごとに授業内容に関する授業リアクションの提出を必須とします。
※提出されたリアクションは、全員分の内容を提出者の名前を外して配布し、受講者全員で共有できるようにします。
※オンライン受講、オンデマンド受講について
本授業は対面を基本としていますが、特別な事情で対面で授業が受けられない場合は、オンライン受講、もしくは授業録画を視聴するオンデマンド受講が可能です。
オンライン受講、オンデマンド受講を希望される場合は、必ず事務に相談の上、必要書類を提出してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	①授業の進め方とルール説明を行います。 ②この授業を進めていく上で参考となる世の中の動きを紹介し、考察をしてみます。
第2回	考察1「サード・プレイス」	1989年にアメリカで提唱された “サード・プレイス” という考え方から、現代における第三の居場所の役割を考察をしてみます。
第3回	考察2「家族の在り方」	日本の住宅の変遷や現代における多様化する住まい方から “家族の在り方” を考察をしてみます。
第4回	考察3「パブリックスペース」	公共施設の事例から、これからの “公共性” とは何かを考察をしてみます。
第5回	考察4「共有する時代」	シェアリング・エコノミーなどの事例から “共有する時代” とは何かを考察をしてみます。
第6回	グループワーク①	中間レポートのためのグループワーク
第7回	中間レポート講評会	他の受講生の中間レポートを読み、意見交換
第8回	考察6「ネットワーク」	グラフ理論やスモールワールドモデル、経済学的理論などの基本的な概念から、“ネットワーク” を再考察をしてみます。
第9回	考察7「ソーシャルネットワーク」	ソーシャルネットワークを、インターネットの集団力学やネット炎上の研究、オンライン人格等の心理学的視点から考察をしてみます。
第10回	考察8「人と人との繋がり方」	発達心理学の視点から、発達段階で変化していく “仲間関係” を考察をしてみます。
第11回	考察9「ダイアローグとモノローグ」	「オープンダイアローグ」というフィンランドで行われている統合失調症の治療手法と、引きこもりを抱える家族の高齢化問題という視点から考察をしてみます。
第12回	グループワーク②	最終レポートのためのグループワーク
第13回	最終レポート講評会	他の受講生の最終レポートを読み、意見交換
第14回	これからの「サード・プレイス」とは？	最終レポートの内容からいくつか選び、これからの “サード・プレイス” を全員で考察してみます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
●授業リアクションは、授業後に各自が授業内容を振り返り、授業支援システムで提出を行うこととします。
●映像資料（20〜30分）がある場合は、授業までに各自でオンライン視聴して来てもらいます。
●課題は、各自が授業外で行うこととします。
●本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

※上記以外に準備学習や復習が必要なことは、随時授業内で設定します。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しません。

【参考書】
『サードプレイス―コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』レイ・オルデンバーグ著（みすず書房/2013年）、『新ネットワーク思考』アルバート＝ラズロ・バラバシ著（NHK出版/2002年）、『複雑な世界、単純な法則』マーク・ブキャナン著（草思社/2005年）、『インターネットの心理学』パトリシア・ウォレス（NTT出版/2018年）、『つながっているのに孤独』シェリー・タークル著（ダイヤモンド社/2018年）、『オープンダイアローグとは何か』斎藤 環著＋訳（医学書院/2015年）等。

【成績評価の方法と基準】
①成績評価を行うには、授業へ11回以上の出席を必要とします。
②授業リアクションの提出を必須とし、その内容から授業の理解度を評価（70%）します。
③課題である中間レポート、最終レポートの提出は必須とします。
④課題であるレポートに対して受講者自身がどのようなにアプローチができたかを評価（30%）します。
以上の成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
新たな知識を得たことで満足するのではなく、受講生各自がそれらを十分に考察できるように授業の進め方、振り返り方法を受講生の反応に応じて考えていきたい。
また、グループワークの時間を十分に確保し、意見交換が効果的にできるように工夫していきたい。

【その他の重要事項】
こどものワークショップの企画運営や、視覚に障がいを持つアテンドが暗闇でツアーを行うドイツ発祥のイベントの企画運営、異業種協業を模索する企業団体の運営などに関わった経験から、人と人の繋がり方や人と社会の繋がり方を事例を見ながら考察していきます。

【Outline (in English)】
In this class, we will examine how people are connecting with each other, which is changing in various ways in the modern age, and consider what form and role a "third place" will take in the future, which is needed by people apart from home and work. The goal of the class is to examine the "third place" in today's world.
The goal of the class is to enable students to reconsider how to connect people with each other and with society, while considering the "third place" in the modern age.
Reactions to the class content will be submitted online after class.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading will be based on 70% regular marks and 30% assignments.

DES300GA（デザイン学 / Design science 300）

情報の編集論

川村　たつる

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：情報編集論
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：定員40名　定員を超えた場合は選抜を行います。定員40名　定員を超えた場合は選抜を行いますので、初回授業には必ず出席してください。
備考（履修条件等）：旧：情報編集論の修得者は履修不可

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、解決をしたい目的のために“情報”を収集・分析し、効果的な表現を行う“デザイン”という方法論を手掛かりに、普段何気なく見ている広告（ポスターや新聞、雑誌等の広告）やテレビコマーシャル（映像広告）、商品パッケージなどをあらためて考察していきます。
また、近年散見される「広告」の炎上の事例を見ていきながら、どのように炎上が起こったのか、何が炎上を引き起こしているのかも考察していきます。
これらを題材に、「情報」の意味を考え、「情報の編集」を学んでいきます。

【到達目標】
普段何気なく見ている日常の中に、「情報」が編集され存在していることを認識し、受講者それぞれがその意味を考察できるようになることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
■人数制限・選抜
本授業は、受講者により提出された課題の発表を授業内で行う関係上、定員を35名とします。
※定員を超えた場合は選抜を行いますので、受講を希望される方は必ず初回授業に出席してください。

■授業の進め方
①授業は、対面の講義形式で行います。
②広告、映像広告、商品パッケージをテーマにした３回の課題設定し、提出された課題は発表を行い、受講者全員で共有します。
③授業ごとに授業内容に関する授業リアクションの提出を必須とします。
※提出されたリアクションは個人情報を外して配布し、受講者全員で共有できるようにします。

※オンライン受講、オンデマンド受講について
本授業は対面を基本としていますが、特別な事情で対面で授業が受けられない場合は、オンライン受講、もしくは授業録画を視聴するオンデマンド受講が可能です。
オンライン受講、オンデマンド受講を希望される場合は、必ず事務に相談の上、必要書類を提出してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	①授業の進め方とルール説明を行います。 ②この授業を進めていく上で必要な言葉の整理を行い、「ラスコー洞窟壁画」の事例や書籍の事例を見ながら考察してみます。
第2回	「デザイン」とは何か？	デザインに関係する用語の整理や方法論の解説、分類を行い、それぞれサンプルを使って、“デザインとは何か”を考察してみます。
第3回	「情報の編集」を考える	コンサートに関する駅貼りポスターの実例を比較しながら、“情報の編集”ということを考察してみます。
第4回	「最近気になる広告」を持ち寄って考える	受講者が最近気になっている“広告デザイン”を持ち寄り、“人は広告の何に惹かれるのか”を考察してみます。
第5回	「広告」とは何か？	広告に関係する用語の整理や分類を行い、サンプル事例を使って確認します。 さらに日本、韓国、アメリカ、イギリスの公共広告の事例を見ながら“広告とは何か”を考察してみます。
第6回	「広告」のこれまでを振り返る	昭和初期から現代までの代表的な広告デザインを見ていきながら、“広告の中の情報とは何か”を考察してみます。
第7回	「最近気になるテレビコマーシャル」を持ち寄って考えてみる	受講者が最近気になっている“テレビコマーシャル”を持ち寄り、“人は映像広告の何に惹かれるのか”を考察してみます。
第8回	「映像広告」のこれまでを振り返る	1990年〜現在までの代表的なテレビコマーシャルを観ていきながら、“映像広告の中の情報とは何か”を考察してみます。
第9回	「広告」の炎上（前編）	ジェンダー視点から整理された“広告の炎上パターン”を見ていきながら、“なぜ広告は炎上するのか”を考察してみます。
第10回	「広告」の炎上（後編）	さらに範囲を広げた炎上事例を見ていきながら、分析的視点で“広告の炎上”を再考察してみます。
第11回	「広告」と費用	広告の種類毎に費用の目安を見ていきながら、「広告」を再考察してみます。
第12回	「最近気になる商品パッケージ」を持ち寄って考えてみる	受講者が最近気になっている“商品パッケージ”を持ち寄り、“人は商品パッケージの何に惹かれるのか”を考察してみます。
第13回	「商品パッケージ」とは何か？	牛乳パッケージデザインの比較やロングセラー商品のパッケージデザイン、ブランディングのい事例を見ていきながら、“パッケージの中の情報とは何か”を考察してみます。
第14回	芸術作品としての「写真」「映像」の中の情報とは何か？	芸術作品としての「写真」や「映像」を見ていきながら、“芸術の中の情報とは何か”を考察してみます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
●授業リアクションは、授業後に各自が授業内容を振り返り、授業支援システムで提出を行うこととします。
●課題は、各自が授業外で行うこととします。
●本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。
※上記以外に準備学習や復習が必要なことは、随時授業内で設定します。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しません。

【参考書】
「知の編集工学」松岡正剛著（朝日文庫/2001年）、「Design Rule Index―デザイン、新・100の法則」ウィリアム・リドウエル/クリスティーナ・ホールデン/ジル・バトラー共著（BNN/2004年）、「デザイン思考が世界を変える」ティム・ブラウン著（早川書房/2010年）等。

【成績評価の方法と基準】
①成績評価を行うには、授業へ11回以上の出席を必要とします。
②授業リアクションの提出を必須とし、その内容から授業の理解度を評価（70%）します。
③全３回の課題をすべて提出し、その課題に対して受講者自身がどのようなにアプローチができたかを評価（30%）します。
以上の成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
新たな知識を得たことで満足するのではなく、受講生各自がそれらを自身で応用できるように授業の進め方、振り返り方法を受講生の反応に応じて考えていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
なし

【その他の重要事項】
工業デザイン、インテリアデザイン、グラフィックデザイン、Webデザインなどを手掛けてきた現役デザイナーが、それぞれ専門分野における経験から講義を行います。

【Outline (in English)】
In this class, students will study "information editing" by examining advertisements and product packages that they usually see without thinking, using the methodology of design to collect, analyze, and express "information" as a clue.
The goal of the class is for students to be able to recognize that information is edited and exists in the things they casually see, and to be able to think about the meaning of such information.
As learning outside of class, students are required to submit their reactions to the class content online after class.
Assignments are to be done outside of class by each student.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading will be based on 70% regular marks and 30% assignments.

FRI200GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 200）

文化情報の哲学

森村　修

サブタイトル：
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
《授業の概要》
本科目は、国際文化学部が提唱する「文化情報学」という新しい学問を哲学的に基礎づけるための科目です。そもそも「文化情報学」とは、様々な文化現象を「文化情報」として捉え直し考察する学問として新しく構築するために考案された学問です。この学問では、それぞれ固有の文化現象のなかに共通する新しい〈意味〉や〈価値〉を見出し、「文化情報」として編集しなおして解釈し、「文化情報」としての〈新しい意味〉や〈新しい価値〉を創出したり、さらにそれらの〈意味〉や〈価値〉を付加して新しく発信することを目指します。

そこで、本授業では、テクノロジーの進歩が私たちの生活のみならず社会構造を大きく変えていく現状を、「テクノロジーの哲学」の観点から考察していきます。特に、私たちの社会とテクノロジーとの関係を中心に、哲学理論研究から実際のテクノロジーの進歩がどのように社会を変えてきているか、また私たちの意識や心までも変化させているかを哲学的に考えていきます。
【授業の目的】
そこで、本授業では、**マーク・クーケルバーク（Mark Coeckelbargh, 1975-）の「テクノロジーの哲学」**を取り上げ、テクノロジーの進歩と社会との関係、さらには私たちの心や意識の問題から道徳や倫理、社会制度の問題にまで、テクノロジーが関わっていることを考察します。クーケルバーグは、日本語翻訳が次々と出版されており、「テクノロジーの哲学」研究の分野では大いに議論されているベルギーの哲学者です。

【到達目標】
(1) 21世紀を生きる私たちにとって、テクノロジーを「哲学する」ことがいかに重要であるかを学ぶことができる。
(2) 哲学的思考を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
講義形式で行う。その際に、必要に応じてテキストの読解を行う。また、テキストについて教員による解説を行ない、受講生と討議していく。また、リアクションペーパーなどを使用することも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション ・「テクノロジーの哲学」講義①	・本科目の意図の説明など 第Ⅰ部「テクノロジーの哲学」とは何か？ 第1章「テクノロジーを考える」とは？
2	「テクノロジーの哲学」講義②	第2章　「テクノロジーの哲学」の歴史と背景 1. テクノロジーの哲学の成り立ち 2. テクノロジーの哲学の背景
3	「テクノロジーの哲学」講義③	第Ⅱ部　理論からテクノロジーを考える 第3章　現象学と解釈学 1. ハイデガーの「テクノロジーへの問い」 2. マクルーハンのメディア論 2. テクノロジーの現象学
4	「テクノロジーの哲学」講義④	第4章　ポスト現象学・物質的解釈学・媒介理論 1. ドン・アイディのポスト現象学 2. フェルベークのポスト現象学 3. 物質的道徳性
5	「テクノロジーの哲学」講義⑤	第5章　批判理論とフェミニズム 1. マルクスとテクノロジー 2. テクノロジーをめぐるフェミニズムの思考 3. フェミニズムの「テクノロジーの哲学」
6	「テクノロジーの哲学」講義⑥	第6章　プラグマティズム、分析的アプローチ、異文化間・文化横断的な「テクノロジーの哲学」 1. プラグマティズム 2. 間文化的な「テクノロジーの哲学」
7	「テクノロジーの哲学」講義⑦	第Ⅲ部　具体的な技術から考える 第7章　情報テクノロジーから哲学、そして情報倫理へ 1. フロリディの情報哲学・情報倫理 2. フェイクニュースとインターネット
8	「テクノロジーの哲学」講義⑧	第8章　ロボット工学とAIから道徳的地位と人間関係をめぐる考察 1. モラル・マシーン 2. 道徳的被行為者性 3. セックスロボットと人間関係
9	「テクノロジーの哲学」講義⑨	第9章　遺伝子工学とサイボーグからトランスヒューマニズムとポストヒューマニズム 1. トランスヒューマニズムとヒューマン・エンハンスメント 2. ポストヒューマニズムとサイボーグ
10	「テクノロジーの哲学」講義⑩	第10章　気候変動とジオエンジニアリングから「自然」への問いと「人新世」の考察 1.「自然」の問題 2. 人新世—— 哲学からの応答
11	「テクノロジーの哲学」講義⑪	第11章　テクノロジーの哲学を超えてテクノロジーを考える 1. ソーシャルメディアと道徳哲学 2. 哲学的人間学 3. 言語の考察とテクノロジーの考察
12	「テクノロジーの哲学」講義⑫	第12章　テクノロジーの哲学とその他の学問 1. ロボット工学 2. 社会科学 3. 人文学
13	「テクノロジーの哲学」講義⑬	第13章　テクノロジーの哲学とアカデミア外の実践 1. イノベーション、政策 2. 芸術
14	「テクノロジーの哲学」講義—— 総括	・「テクノロジーの哲学」研究の未来と教育への応用

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・必要に応じて配布された資料に基づいて、レジュメを作成する。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
M・クーケルバーク『技術哲学講義』直江清隆・久木田水生監訳、丸善出版、2023

【参考書】
① M・クーケルバーク『AIの倫理学』直江清隆他訳、丸善出版、2020年
② M・クーケルバーク『AIの政治哲学』直江清隆他訳、丸善出版、2023年
③ M・クーケルバーク『デジタルテクノロジーと時間の哲学』直江清隆他訳、丸善出版、2024年
④ M・クーケルバーク『ロボット倫理学—— ソーシャルロボットから軍事ドローンまで』田畑暁生訳、青土社、2024年

【成績評価の方法と基準】
・期末テスト（70％）、授業内（30％）
※ この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする
※要注意【変更】
リアルタイム・オンライン授業の場合には、成績評価の方法と基準も変更する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
・テクノロジーを哲学的に考察するためには、皆さんの頭脳と身体があれば十分です。

【その他の重要事項】
・本科目は、哲学的思考の訓練の場であることを銘記すること。自分でいろいろと考えることが哲学の初歩ですので、考えることを実践してみましょう。
・授業担当者（森村）の他の科目との関連が極めて強いので、他の科目も併せて受講することをお勧めします。
1.「文化情報学概論」は、科目名からも近しいように、「文化情報学」の基礎を学ぶ科目です。そこでは、テクノロジーが情報社会と密接に関わっている点を、〈ヴァーチャル社会〉という観点から哲学的に捉えていきます。
2.「こころとからだの現象学」では、私たちの「こころ」がどのように、私たちの〈外〉にある〈ヴァーチャル社会〉から影響されているかを哲学的に考えていきます。

3.「現代思想」では、「生まれてこないほうがよかった」という反出生主義を哲学的に考えていきます。そこでは、人工妊娠中絶などテクノロジーが関わる医療問題を取り上げていきます。
4.ILAC科目「倫理学」では、ロボットを使用する際の倫理問題や、テクノロジーによる自動運転の行為者責任などについて、倫理学・道徳哲学からアプローチするための、基礎的な倫理学的思考を学びます。
5.ILAC科目「倫理学Ｌ」では、「ケアの倫理学」という観点から、テクノロジー機器による介護・看護の問題から、「ケアする」側は、なぜ「人間」でなければならないのか、また介護ロボットの倫理的問題などについても考察していきます。

【哲学することの姿勢について】
・本授業は、テクストを一文一文読解していく原書講読のスタイルをとる哲学の授業である。
・哲学の鍛錬で最も重要なことは、第一にテクストを正確に読めること、第二に、正確なテクスト理解の上に、自らの解釈を組み立てること、第三に、自らの解釈が何を根拠にしているかを明らかにできること、である。

【Outline (in English)】
【Couse outline】
This class aims to examine various aspects of various cultures as philosophical problems from the viewpoint of the "informatics of culture".

In this class, based on the perspective of “philosophy of technology,” we will examine the current situation in which technological progress is drastically changing not only our lives but also the social structure.
In particular, we will focus on the relationship between our society and technology, and philosophically consider how actual technological advances are changing our society and even our consciousness and minds.
【Objective of the class】
This class will therefore focus on Mark Coeckelbargh’s (1975-) “Philosophy of Technology” to examine the relationship between technological progress and society, and how technology is involved in issues ranging from our minds and consciousness to morality, ethics, and social institutions. Coeckelbargh is a Belgian philosopher whose work has been published in a series of Japanese translations and is much discussed in Philosophy of Technology.
【Leaning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- A. to learn how important it is for us to philosophize.
-B. to learn to think philosophically.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.
【Grading Criteria /Policies】
Final grade will be calculated according to the following process term-end examination (70%), and in-class contribution (30%).

SES300GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 300）

ソーシャル・プラクティス

稲垣　立男

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：情報デザイン
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ア〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「ソーシャル・プラクティス」では、ソーシャル・プラクティス、あるいはソーシャリー・エンゲージド・アートと呼ばれる、環境や政治、コミュニティ、ジェンダーなど、さまざまな社会的問題に直接働きかけるアートの分野について学びます。社会と直接関わる現代アートのアプローチに関する理論と実践を扱い、ワークショップ形式の実習授業を行います。

【到達目標】
この授業では、下記の3つのテーマで実習を行います。
1. 環境と社会
2. 共生社会
3. 政治課題
自分たちを取り巻くさまざまな社会的課題を捉え直し、調査を基に各自が課題を設定し、それを作品として表現する力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
いくつかの社会的問題をテーマとして仮想のアート・プロジェクトを実施し、グループワークによる調査やディスカッションを経て、さまざまな発表形式による作品制作を行います。
ワークショップの冒頭では、課題と関連した社会的課題に関する解説を行うとともに、美術史や美術理論に関する基本的な知識を確認します。
次に、資料調査や大学内外でのフィールドワークを通じて問題を探ります。
最後に、各自が資料調査やフィールドワーク、ディスカッションを経て、作品制作（プレゼンテーション）に取り組みます。
○ 授業を円滑に進めるために、以下のオンラインツールを使用します。
Google Sites（授業の基礎となるコンテンツの配信）
Google Classroom、Google Form（課題提出、そのフィードバック、質問など）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の概要 ソーシャル・プラクティスについて
第2回	ワークショップ（1） 環境と社会 / 言語による表現 講義と対話	地球温暖化、原発問題、海洋汚染など環境問題に関する対話
第3回	ワークショップ（1） 環境と社会 / 言語による表現 グループワーク	言語による表現を通じて環境に関するテーマについて考える
第4回	ワークショップ（1） 環境と社会 / 言語による表現 プレゼンテーション1	言語による表現によるプレゼンテーションと対話（1）
第5回	ワークショップ（1） 環境と社会 / 言語による表現 プレゼンテーション2	言語による表現によるプレゼンテーションと対話（2）
第6回	ワークショップ（2） 共生社会 / 映像・写真・絵画 講義と対話	コミュニティの崩壊、移民、難民問題など共生と社会に関する対話
第7回	ワークショップ（2） 共生社会 / 映像・写真・絵画 グループワーク	視覚表現を通じて共生社会について考える
第8回	ワークショップ（2） 共生社会 / 映像・写真・絵画 制作1	映像による作品制作と対話（1）
第9回	ワークショップ（2） 共生社会 / 映像・写真・絵画 制作2	映像による作品制作と対話（2）
第10回	ワークショップ（3） 政治問題 / インスタレーション・パフォーマンス 講義と対話	ジェンダー、貧困問題、表現の自由などに関するテーマについて考える
第11回	ワークショップ（3） 政治問題 / インスタレーション・パフォーマンス グループワーク	インスタレーション・パフォーマンスによるプレゼンテーションと対話
第12回	ワークショップ（3） 政治問題 / インスタレーション・パフォーマンス アクション1	インスタレーション・パフォーマンスによる行為と対話（1）
第13回	ワークショップ（3） 政治問題 / インスタレーション・パフォーマンス アクション2	インスタレーション・パフォーマンスによる行為と対話（2）
第14回	フィードバック	授業全体を俯瞰し、各課題の意義について、参考例を見ながら振り返ります。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Google Sitesで配信する授業コンテンツには、学習を深めるためのウェブサイトのリンクが多く紹介されていますので、興味のあるものについては閲覧することをおすすめします。また、大学の近くには美術館やギャラリーが多くありますので、企画展、常設展などの展覧会を多く鑑賞してください。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Google Sitesを通じて授業に必要な資料を配布します。いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】
Between Art and Anthropology: Contemporary Ethnographic Practice（Berg Pub Ltd）
パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント』フィルムアート社、2015年
アート&ソサイエティ研究センター SEA研究会『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践 芸術の社会的転回をめぐって 』 フィルムアート社、2018年

【成績評価の方法と基準】
成績評価については、平常点（授業への取り組み）、課題とレポートの合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　課題とレポート（50%）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
作品のアイデアから制作までのプロセスを丁寧に学んでいきましょう。

【その他の重要事項】
実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を毎回の講義に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
We learn a field of art that works directly on various social issues, such as social practice or environment and politics, called socially engaged art in this course. We will engage in the theory and practice of contemporary art on such an approach. In practical training, we will carry out virtual art projects with the theme of some social problems, work through group work surveys and discussions, and produce works in various presentation formats.
Learning Objectives
In this course, we will practice the following three themes.
1. Environmental problems and society
2. A symbiotic society
3. Political issues
We will re-examine the various social issues surrounding us and develop the ability to set problems and express them as works based on research.
Learning activities outside of the classroom
The content delivered on the Google site contains many website links to deepen your learning, so we recommend browsing the ones that interest you. There are also many museums and galleries near the university. If possible, depending on the infection status of the new coronavirus, please watch exhibitions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades will be evaluated based on the total of class activities, assignments and reports. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Issues and reports (50%)
See rubrics for specific assessment guidelines.
Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

【2026年度休講】サブカルチャー論

島田　雅彦

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：教室定員を超過した場合は選抜

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　サブカルチャーは新興の文化流行として、大衆文化や通俗趣味に分類されるが、表現者たちにより洗練が加えられ、いつしかメインカルチャーとなってゆく。文学、美術、音楽、漫画、映画、旅行、衣食文化、政治、科学あらゆるジャンルを横断し、文化流行全般の考察を通じ、コミュニケーション能力の土台にもなる雑多な教養を身につける。とりわけ、技術論に焦点を当て、文化の様態の変容を時代ごとに考察する。

【到達目標】
　イデオロギーや哲学の代わりにキャラクターやコピーがものをいう現代、政治も文化も素人が担い手になってゆく風潮を踏まえ、柔軟な批評精神を獲得し、サブカル全般に関する教養の底上げを図ると同時に、先人の斬新な発想の秘密に迫る。講義内容のまとめや復習は各自が行うが，授業内で行った小レポー ト等、課題に対する講評や解説は授業の最後にまとめて行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　原則的に講義形式で進めるが、質疑応答や議論にも時間を割き、履修者のコメントや発表をも取り入れながら、対話的に行いたい。文化流行全般に興味のある学生、「オタク」や「マニア」の参加も歓迎する。豊富な画像、映像をサンプルとして、見せつつ、歴史的な背景を踏まえることで、各ジャンルの未来に対する提言を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	サブカルチャーの定義	概論　モダニズムの定義。テクノロジーとの関わり。モダニズム時代の芸術運動の展開とその検証。
2	複製技術	黎明期の映画と産業としての発展の歴史。複製技術の進化とオーラの消滅
3	贋金作り	交換と消費。価値形態論　貨幣論
4	江戸町人文化	日本のサブカルチャーの原点としての江戸。好色一代男に見る江戸風俗。
5	アマチュアリズム	素人の手習い。趣味とサブカル。日曜画家。若者バカ者よそ者の力。素人の乱。
6	エロ・グロ・ナンセンス	コミックス、ヤクザ、風俗産業の揺籃としての戦後の焼跡闇市。
7	カウンターカルチャー	１９６０年代のアメリカの　カウンターカルチャーの研究。ヒッピー、サイケデリック、ゲイ・レボリューションなど。
8	漫画史	漫画独特の表現について。コミック進化論、多様性獲得に向けて。
9	徘徊・巡礼・観光	遊歩の思想。物見遊山の哲学。もてなしの文化。接待の流儀。テーマパークとしての都市、京都、ヴェネチア。
10	都市空間と仮想空間	住まいの変容。空間論。パラレルワールド。生息域（ニッチ）研究。
11	食文化の多様性	グルメという思想。越境する胃袋。
12	科学と迷信	マッドサイエンス。自然科学のサブカル化。スピリチュアル。文化流行。都市伝説。不老不死。AI。
13	メディアと政治	ポピュリズム　政党政治、代表制のゆくえ。デマ、陰謀説。ナショナリズム　まとめと全テーマに基づく質疑応答
14	授業内試験	学習支援システムを使った選択式試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業内での議論に参加すべく、質問を用意したり、得意分野での鑑賞を個人的に熱心に行うことが望ましい。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
　教室で指示する。

【参考書】
　教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】
　授業時間に予告して、筆記試験を行うが、議論への積極的参加も評価されよう。評価基準は平常点20％、選択式試験の結果80％とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
　質疑応答、討論への積極的参加を促す。

【Outline (in English)】
Subculture is classified as popular culture and popular hobby as an emerging culture epidemic, but it becomes somewhat mainstream culture as sophistication is added by expressers. Crossing all genres across literature, art, music, cartoons, movies, travel,fashion and food culture, politics, and science, we acquire miscellaneous culture that will also serve as the foundation of communication skills through consideration of cultural epidemics in general.Especially focusing on technology theory, we consider the transformation of the form of culture by the age.The goals of this course are to　acquire new awareness of subcultures, comprehensive understanding of subculture genres, and knowledge of historical background.A written test will be given but active participation in the discussion will also be appreciated. Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Your required study time is at least 4 hours for each class meeting.The evaluation criteria are 20% for normal points and 80% for multiple-choice test.　Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

HUI200GA（人間情報学 / Human informatics 200）

道具による感覚・体験のデザイン

甲　洋介

サブタイトル：カラダの『体験』から空間をデザインする
配当年次／単位：１〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：教室の収容人数を超えた場合は選抜を行う。

その他属性：〈優〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「体験」という個人的な出来事を、受講生がアタマとカラダを使って「体験し直す」ことを目指す科目である。
● 日常の体験こそ奥が深い
体験という言葉からあなたが思い浮かべるのは、忘れられない出来事、驚いたこと、可笑しな体験、つらかったことなど、ほとんどが『非日常的な』体験ではないだろうか。しかし体験の本質に迫りたいなら、むしろ、日常の豊かな体験にこそ目を向けるべきである。本講義によって受講生は、一見些細に思える日常の体験においてでさえ、身体のさまざまな感覚は研ぎ澄まされ、わずかな世界の変化を感じ取り、豊かに感情が湧き起こり、体験が生み出されていくさまを理解できるようになる。
● 『体験』から、空間をデザインする
今年度は、「空間の体験」を取り上げる。本講義を通じて受講生は、人間は他人との間にある距離・空間を絶妙にコントロールしながら、互いに巧みな空間行動をしていることを理解できるようになる。たとえばキャンパス、マーケット、カフェ、広場、駅ナカなど、多くの人々が行き交う場は、人間の空間行動の特性を観察し、解析するには格好の空間である。
身体は空間を感じ、体験を生み出す。空間のデザインによって、そこでの体験はどのように変化するのか。この理解をベースにし、日常の空間をデザインし直すことに取り組む。たとえばもっと快適に安らげるように、あるいはもっと自然な集中ができるように。
● 体験をデザインする、ということ
「経験」「体験」(*experience*) が今ほど注目される時代はない。一方で「経験の危機」も指摘される。仮想世界の浸透も手伝って、私たちの「体験」は急速に変化し、どこまでが想像で、どこからが本当の体験なのか、その境界は曖昧になりつつある。例えば、自分の身体と感覚を使って実際に体験していない出来事であっても、”あたかも体験したかのように”受け入れていることに気づく。本講義を通じて、この現象を、デザインの視点から批判的に問い直すことになる。

【到達目標】
受講生はつぎの３つについて、基本用語を使って簡潔な説明ができるようになる。
1) 体験するとはどのようなことか
2) 人間は、どのように空間を身体で感じ、感情を働かせながら、人との距離や空間を互いに調節し、巧みな空間行動をしているか
3) 空間の体験は、その空間のデザインによってどのように変化するのか。
そして、これらの知識を用いて具体的対象に対して基本を実践できるようになる。
これを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と、実際に手を動かすデザイン・ワークショップを組み合わせて展開させる。講義で取り上げる３つのテーマ、およびワークショップの概要は次の通りである。各回において受講生のコメントシートを踏まえながら前回内容のおさらいと解説をし、理解の深化を促す。
●【講義の３つのテーマ】
(a) 身体と感覚、体験するということ
(b) 空間を体験する。道具によって空間の体験を作る
(c) 身体の観点から、感覚・体験装置を再考する
●【デザインワークショップ】
さらに上記テーマのうち(b)空間体験に焦点を絞って、街角のカフェ、店、学校、オフィス空間、住宅内のリビングルームなど具体的な空間を例にとり、デザインワークショップによる実践を通じて理解する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	講義の狙い、構成、進め方のガイダンス
第2回	**[A] 身体、感覚、体験**	体験と身体。自然との境界としての身体・感覚
第3回	感覚と体験	感覚を体験する。直接体験と間接体験
第4回	感情の科学：感情をともなう体験	感情を体験する。感情を伴う体験のメカニズム
第5回	**[B] 人間の空間行動と空間体験のデザイン**	カラダで空間を感じる（視・聴・多感覚）
第6回	人間の空間行動	観察しよう。人間が見せる面白い空間行動
第7回	人間の空間行動〜パーソナルスペース	空間行動は、文化の中に組み込まれている
第8回	デザインワークショップ１	からだが『空間を体験する』
第9回	**[C] 身体から、感覚・体験装置を問い直す**	体験*experience*から、空間をデザインする
第10回	空間の体験　〜道具によって空間の体験を作る	学校という空間、カフェという場所。空間体験から考え直す
第11回	身体からみた『日本庭園』　〜日本庭園のふしぎ	身体を覚醒させる装置としての日本庭園。時間的な連続性
第12回	デザインワークショップ２	カフェ、オフィス、学校、『場所』のデザイン、発表と討議
第13回	空間体験の仮想化	現実と仮想体験の融合。スヌーズレン。仮想現実VR、拡張現実AR、ミックスドリアリティMR、代替現実SR
第14回	まとめ：身体、感覚、体験 -revisit -	生きられた空間。経験としての芸術。経験の危機

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・デザイン課題、発表のための資料づくりがあります。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
初回時に指示をする。

【参考書】
・「経験としての芸術」(J. デューイ)講談社学術文庫, 2004
・「かくれた次元」(E.T. ホール)みすず書房, 1970
・「空間の経験―身体から都市へ」(Y.F. トゥアン)ちくま学芸文庫, 1993

【成績評価の方法と基準】
・レポート、作品制作 (50％)
・コメントシート、発表、討議への積極的な参画、平常点（50％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
履修者からの要望が多い、建築空間での事例研究を増やそうと思う。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布、コメントシート・課題提出等に学習支援システムを利用する。授業前後にアクセスし確認すること。

【その他の重要事項】
講義を言葉で理解するだけではなく、日常のあらゆる機会をとらえて、身体と感性を駆使して理解しよう。面白い建築を訪ねたり、街の人々の空間行動を新しい視点からウォッチングしたり、日本庭園に仕掛けられた身体体験を批評的に味わったり、闇の中で海辺の波音にじっと耳をすます体験が役に立つ。
教室の収容人数を超えた場合は選抜を行う。

【重要な関連科目】
「道具のデザイン学」「こころの科学」「仮想世界研究」と組合せ受講することが望ましい。それらで学んだ知識を用いて、この講義および実習をより深い理解に基づいて進めることができるようになる。

【情報機器・視聴覚設備の活用】
ＰＣおよび、ＤＶＤ、プロジェクター等の視聴覚設備を活用し、講義形式とワークショップを組み合わせた授業を展開する。

【Outline (in English)】
This class allows you to learn (a) the basic concepts of experience, emotion, feeling and embodiment, and (b) the “design of experience”. This year, we will focus on human spatial experience and the design of spatial experience.
By the end of the course, students should be able to (a) explain the relationship between experience, emotion, feeling and embodiment, and (b) practice basic principles of "experience-based design” based on the understanding of the above basic concepts.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on (1) final report/work product (50%) and (2) short reports and the quality of the student’s in-class contribution (50%).

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

マルチメディア表現法

大嶋　良明

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：人数制限あり（15名）。希望者多数の場合は選抜します。初回授業に出席すること。
備考（履修条件等）：情報関連科目を履修済みであることが望ましい

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は、少人数ワークショップによるマルチメディア作品制作の実習です。
わかりやすく統合的に提示する手法を少人数ワークショップで学習する。画像、映像、音声など個々の編集技法の基本は既習のものとし、ここでの講義ではそれらの統合をコミュニケーションデザインの観点から学び、アイデアや表現意欲をコンテンツ制作に活かす効果的なオーサリングの戦略について学ぶ。またワークショップにおいては学習成果の体得をさらに確実にするために、ビデオ、Webマルチメディア、DTPなどの領域から練習課題を適宜設定する。受講者には各人の嗜好にもとづき映像作品、音楽作品やDTP作品などの個人プロジェクトを提案してもらい、セメスタを通じて制作する。

【到達目標】
写真表現、ポスター作り、DTP、レーザー加工、映像制作などのマルチメディア実習を通じて、自らの発想を人に伝わるマルチメディア作品の形にすること、同じ課題で制作したお互いの作品を相互批評してセンスを磨くこと、作品をプレゼンテーションすること、これら課題制作の訓練を通じて作品作りの一貫したプロセスを身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
少人数での演習設備を備えた教室においてワークショップ形式で講義と実習を行う。
●作品制作の理論と技法(講義と実習)
・デザインの基礎
・ポスター作り（Photoshop・Web）
・多様な出力形態（大判ポスター、アクリル板彫刻）
・写真技法：ライティング、構図、光の読み方
・写真表現の作品化（アルバム・Web・アクリルパネル）
・映像制作技法：Jingle、絵コンテ、ショートフィルム
●クリティーク
各自の作品を全員が批評することで、作品表現の精神と批評の言語を学ぶ。
●ePortfolioによる学習成果の公開
総合的な情報公開の場として活用する。
●課題
・ポスター作り（Photoshop＋大判プリンタ・Web）
・レーザーカッターによるアクリル板彫刻
・写真表現の作品化（アルバム・Web）
・Jingle (短い15秒程度のCM的映像)
・最終課題はショートムービー完成を標準メニューとするが、独自のチャレンジを大歓迎する。電子出版、メディアアート、デザイン、ゲーム、音楽制作などでも良い。
●大事にしたいこと
・コンピュータ上でのメディアデータの特性とtangibleなモノの世界でのパッケージの関係性をいつも考えよう。
・デジタル機器をとことん使ってみて初めて「コンピュータに簡単に取り込めない世界」があることがわかる。
・ノンデザイナーである我々だって、いい作品作りが可能だ。こわがらずにどんどん挑戦しよう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	コミュニケーションのデザイン	コミュニケーションのデザインについて学ぶ。CRAPの原則を学ぶ。【写真課題：line、pattern、texture】
2	メディアコンテンツのデザイン	マルチメディアデータの性質を理解する。クリティーク：line、pattern、texture　各自の写真作品を合評する。【写真課題：モノクロ、ライティング】
3	コミュニケーションデザインの手法－視覚・サウンド　　実習：期末課題の提案	コミュニケーションデザインの手法を学ぶ。クリティーク：モノクロ、ライティング【写真課題：人物ポートレート、ライティング】
4	コミュニケーションデザインの手法－Web	Webの特性とデザインについて理解する。【写真課題（承前）：人物ポートレート、ライティング】
5	情報デザインとコンテンツ制作－パッケージメディア	パッケージメディア（CD, DVDなど）の構成法を理解する。クリティーク：人物ポートレート、ライティング　実習：Premiereによる短いビデオ【課題：Premiereオンライン教材の学習】【学期末課題：ショートムービー】
6	情報デザインとコンテンツ制作－サイバースペース	情報デザインの基本原則を理解する。クリティーク：人物ポートレート、ライティング　実習：Preziによるオンライン・プレゼンテーション【課題：Web写真アルバム】
7	タイポグラフィの基礎	タイポグラフィの基礎を学ぶ。クリティーク：各自のWebポートフォリオを相互観賞し、お互いの技法と作品性を合評する。【課題：紙の写真アルバム】
8	メディア環境とデザイン	メディア環境とデザインを学ぶ。クリティーク：Webアルバム【課題：ポスターのデザイン】【学期末課題：企画書・絵コンテ提出】
9	多様な出力形態(1): DTP	印刷についての知識を学、DTP作業のワークフローを理解する。クリティーク：ポスター【課題：広告のデザイン】
10	モノづくりとマルチメディア	Makerムーブメントを題材とするモノづくりとマルチメディアの関係を学ぶ。クリティーク：広告【学期末課題：予告編ジングル仮提出】
11	多様な出力形態(2): レーザー加工	レーザー加工機による【実習】簡単な版下の作成とレーザーカッターによるアクリル板加工【課題】アクリル板切り出しと表面彫刻のためのレーザーカッター版下の作成
12	コンテンツプラットフォームとしてのインターネット環境	インターネットにおけるマルチメディアコンテンツの配信を学ぶ。【実習】各自デザインによるアクリル板のレーザー加工
13	コンテンツの流通、管理、知的所有権とメディア表現	コンテンツの流通、管理の仕組みとクリエイティブ・コモンズの考え方を学び、オンラインメディアの知的所有権の扱いを理解する。
14	まとめ：学期末課題のクリティーク	学習内容を総括する。各自の映像作品を相互観賞し、お互いの技法と作品性を合評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎週のように課題が出るので作品制作には十分に計画的に取り組むこと。また課題の多くは印刷出力やWeb上での公開を求めており、単に作品を完成させるだけではなく観賞可能な形式で相互批評に堪えるレベルものを準備するにはDTPやWeb制作の基礎知識と最低限の経験が求められる。これらについては授業内では特に触れないので各自が時間外に必要な知識を得ること。長尺プリンタを用いて制作物を大型の判型で出力し、セメスタ後半に制作展の開催を目指す。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて紹介する。

【参考書】
【マルチメディア全般】
参考書（1）CG-ARTS協会、「第三版 入門マルチメディア ITで変わるライフスタイル」、ISBN 978-4-903474-45-8
参考書（2）CG-ARTS協会、「実践マルチメディア」、ISBN 978-4-903474-44-1

※上記2冊は資格取得を目指す人にも最適の参考書である。

【デザイン技法】

Robin Williams (著), 吉川 典秀 (翻訳)、「ノンデザイナーズ・デザインブック」、毎日コミュニケーションズ (1998)、ISBN-13: 978-4895630078
【写真技法】
キット　タケナガ（著）　東京写真学園（監修)、「デジタル 写真の学校」、雷鳥社(2005)、ISBN 978-4-8441-3434-3
【ショートムービー制作】
ヒルマン・カーティス、「ウェブ時代のショート・ムービー」、フィルムアート社 (2006)、ISBN:978-4845906956
【DTP、印刷】
松田 哲夫 (著), 内澤 旬子 (イラスト)、「印刷に恋して」、晶文社 (2002)、ISBN: 978-4794965011
【オンライン・プレゼンテーション】
吉藤 智広 (著)、「あなたのプレゼンが劇的に変わる！ Preziデザインブック」、日経BP (2018)、ISBN-13: 978-4822254520

【成績評価の方法と基準】
平常点(授業参加の積極性を含む、30%)、クリティークなど授業参加による平常点(20%)、中間課題(30%)ならびに最終課題(20%)を総合的に評価する。平常点の評価ポイントは積極的な授業参加、すなわち映像や音響作品への表現意欲をコンピュータ上で形にする「やる気と努力」、作品作りの背後にある仕組みへの技術的関心度、制作メモの提出、合評形式の相互批評への参加など。これらすべてが、お互いの作品から学び一人ひとりが自らを高めようとする向上心として評価される。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
2011年度までは3〜4年次の科目だったが、受講希望者、履修者の要望を採り入れ、また教学上の配慮も含め、2012年度より2年次より履修可能とした。2017年度は他学部生が参加したことで作品制作も合評もこれまで以上に刺激的な学びとなった。作品制作のテクニックの重要性のみならず作品性の追求や批評のための言語化の作業の重要性を気づいてもらえるよう努める。作品集は個人ポートフォリオだけではなく、クラス全体のギャラリーとしても公開を目指す。

【学生が準備すべき機器他】
本科目は国際文化学部・情報セミナー室（BT#0704）にて授業を行う。制作にはデジカメ、ハンディカム、PCを必要とする。
長尺プリンタを用いて制作物を大型の判型で出力し、セメスタ後半に制作展を開催する。Web、メディア媒体ならびにePortfolioに提出作品を保存公開する。

【その他の重要事項】
【重要】生成AIの出力をそのまま作品またはその一部に使用することは禁じる。
学生へのメッセージ：Adobe系アプリはじめ様々なツールを駆使して制作とデザインに関するかなりの課題をこなしてもらいます。PCやソフトの操作を教える授業ではないので、作品作りを通じて自ら習得することを目指します。演習設備に限りがあるため20名程度の定員を設けており、受講者多数の場合には選抜することがあります。作品作りが好きでたまらない人、とにかく何か作ってみたい人を歓迎します。
情報系教員によるワークショップ形式の授業、マルチメディア実習、
高度なICT の活用実習、ならびに作品制作を通じて本科目では学生の就業力育成を支援します。
受講希望者は初回授業に出席すること。少人数ワークショップなので受講希望者が受入可能な上限人数を超える場合には抽選を実施することがある。

【前提科目】
前提科目：「情報リテラシーⅠ」、「情報リテラシーⅡ」、情報系基礎科目（「情報システム概論」、「メディア情報基礎」、「ネットワーク基礎」）
Photoshopの応用技法については「メディア表現法」の履修をお薦めする。写真の技法については、本科目にて扱う。
関連科目：基幹科目「ディジタル情報学概論」、情報科目「仮想世界研究」など。

【教員の実務経験】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野での研究とシステム開発の経験がある。

【Outline (in English)】
This course is a multimedia workshop for any advanced students with creative minds. The class is typically organized for 10-15 students so that everyone can work comfortably on weekly or biweekly assignments as well as on mutual critique starting from fundamentals in photography, large-format poster design, advertisement flyer design, laser engraving, web portfolio, to short film movie. All the creative efforts should eventually take the forms of individual artist portfolios to be presented at the public end-of-semester exhibition on campus.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 30%
Critique: 20%
Homework and in-class assignment: 30%
Final assignment: 20%
You must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

フィールドワークと表現

稲垣　立男

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：メディア表現ワークショップ１
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：選抜

その他属性：〈他〉〈優〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、表現活動へとつながるフィールドワークを中心とした実習科目です。各回の実習はワークショップ形式で行います。
教室および大学構内外をフィールドとし、「カメラを持って旅に出よう」「スケッチブックに記録しよう」「動きや音を拾うことから」という3つのテーマに基づいたフィールドワークを行い、その成果をプレゼンテーションとして発表します。

【到達目標】
みなさんは各課題を通じて、さまざまな表現活動に通じる取材・調査の方法や、複数のメディアを用いた表現方法を学びます。
課題に取り組むにあたっては、自由な発想と臨機応変な対応が求められます。柔軟な姿勢をもって、積極的に（楽しみながら）課題に取り組んでください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
下記の３つの内容に基づいて、制作実習をします。
第1課題　カメラを持って旅に出よう。
記録としての写真について、多様なテーマを通じて体験的に学びます。
第2課題　スケッチブックに記録しよう。
スケッチブックに、様々な現象や感情などを記録していきます。
第3課題　動きや音を拾うことから。
拾った動きや音をきっかけとして、何かを始めてみます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーションと選抜試験	授業内容の説明 教科書・参考資料 評価基準など
第2回	カメラを持って旅に出よう。(1)	課題説明と講義 記録としての写真
第3回	カメラを持って旅に出よう。(2)	ワークショップ 私の決定的瞬間
第4回	カメラを持って旅に出よう。(3)	ワークショップ 写真による「組曲」
第5回	カメラを持って旅に出よう。(4)	ワークショップ 私の原風景
第6回	スケッチブックに記録しよう。(1)	講義 スケッチの技法
第7回	スケッチブックに記録しよう。(2)	ワークショップ シュルレアリスムの実験
第8回	スケッチブックに記録しよう。(3)	ワークショップ 架空の研究
第9回	スケッチブックに記録しよう。(4)	ワークショップ 就職するためのスケッチ
第10回	動きや音を拾うことから。(1)	課題説明と講義 音や映像による記録
第11回	動きや音を拾うことから。　(2)	ワークショップ 日常の音に注目してみよう
第12回	動きや音を拾うことから。(3)	ワークショップ 反復する音
第13回	動きや音を拾うことから。(4)	ワークショップ 社会人になるための音
第14回	講評会	課題作品の発表と講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
これまでにあまり経験してこなかった表現の基となる取材活動に取り組みます。また、調べることに積極的な人、面白いことを知ることが好きな人は受講してみてください。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Google Sitesを通じて授業に必要な資料を配布します。いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】
山本浩貴『現代美術史―欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019
藤田 結子『現代エスノグラフィー: 新しいフィールドワークの理論と実践 (ワードマップ) 』新曜社、2013年

【成績評価の方法と基準】
成績評価については、平常点（授業への取り組み）、課題とレポートの合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　課題とレポート（50%）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
みなさんにとってわかりやすく、取り組みやすい課題とします。
楽しい授業にしましょう。

【学生が準備すべき機器他】
スケッチブック及びスマートフォンが必要となります。

【その他の重要事項】
実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を毎回の講義に反映させています。

【Outline (in English)】
This course is a practical training course centred on fieldwork that leads to expressive activities. Each session is conducted in a workshop format.
Using classrooms and locations both on and off campus as fields of practice, students carry out fieldwork based on three themes:
Going on a journey with a camera
Recording in a sketchbook
Starting from capturing movement and sound
The outcomes of this fieldwork are presented in the form of presentations.
Through the course, students engage in research and investigative activities that form the basis of creative expression, including approaches they may not have previously experienced. Students who are proactive in research and enjoy discovering new and interesting perspectives are encouraged to enrol.
The standard amount of preparation and review time for this course is two hours per session.
Grades are determined by a combination of class participation and assignments/reports, with particular emphasis placed on experimental approaches and active engagement. The grading breakdown is as follows:
1.Class participation (50%)
2.Assignments and reports (50%)
Students who achieve 60% or more of the course learning objectives, based on this evaluation method, will receive a passing grade.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

【2026年度休講】クリエイティブ・ライティング

島田　雅彦

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：メディア表現ワークショップ２
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説、エッセイ等の書き方ABCを伝授する。メールから企画書、報告 書、論文、創作、これら全ては特定のセオリーに基づいているので、これらを踏まえつつ、説得力や感動を与える手法に触れ、実作を通じて、文章表現の向上を図る。

【到達目標】
半期の授業を通じ、受講生は表現意欲や批評意識を刺激されるだろう。自己を語るコトバ、他者とのコミュニケーション能力を磨き上げるには、創作を実践することがショートカットになる。創作のエクササイズを重ねれば、説得力のある企画書の書き方、他者の関心を誘うプレゼンテーションの仕方も自ずと身につけられる。学生はそのスキルの獲得を目指し、課題をこなすこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
原則として講義形式を取るが、折々の課題に対する講評を交え、履修者との対話形式も随時とる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	執筆のエンジン	人はなぜ書かずにはいられないのか?
2	日記の書き方	日常の研究
3	物語の構成	起承転結のマジック
4	キャラクター作り	無個性 奇怪な普通人、気弱な英雄
5	メメント・モリ	死のデザイン 人はいかに死を受け入れ、解釈してきたか?
6	旅と文学	ロード・ノベル 放蕩息子の帰還
7	時間の処理	文学における独自の時間軸について
8	語り手は誰か？	私、吾輩、彼、伯爵夫人?
9	お金の話	信用制度、借金、フィクションとしての通貨
10	メタファーの戦略	模倣、置換、象徴、スイートハート
11	小説のトポロジー	現代小説の8割は東京が舞台
12	恋するものの普遍性	求愛のもっとも洗練された手段としての詩
13	素材の考察	想像力の源泉としてのマテリアル
14	まとめ、質疑応答、レポート提出	学んだことの集大成としての創作の完成指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
随時、テーマに沿った短文を書き、その講評を受ける。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『小説作法ABC』 島田雅彦　新潮選書２００９
『小説作法XYZ』　島田雅彦　　新潮選書　２０２２

【参考書】
『深読み日本文学』　島田雅彦　集英社インターナショナル新書２０１８

【成績評価の方法と基準】
折々のレポートと期末の創作７０%、平常点３０%この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ワークショップにふさわしい実践的指導に呼応する履修者の積極参加。より活発な対話を心がける。

【Outline (in English)】
Writing and reading are inseparable, but there are also people who become good readers through training of writing skills. Touching several examples, Students can acquire the ABC of how to write novels, essays etc, from the real author's standpoint. Based on a specific theory which is common to all of the projects, reports, papers, creative writings and e-mails , we will touch on effective methods that give persuasive power and sympathy, and improve the expression of sentences through actual work.The goals of this course are to　learn the basic theory of creation, the mechanism of speech, how to approach various themes of creation, etc.Evaluate active participation in the workshop and each report submission.　The evaluation criteria are 20% for normal points and 80% for reports. Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text.　Your required study time is at least 4 hours for each class meeting.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

【2026年度休講】五感共生論

川村　たつる

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：定員35名　定員を超えた場合は選抜を行います。詳細は学習支援システムで通知します。

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚という人間の五感の機能と役割を見ていきながら、それらが相互にどのように関係をしているのかを考察し、人は世界をどのように認識しているのかを学んでいきます。

【到達目標】
受講者それぞれが、講義と課題制作を通して、自身の感覚を再認識できることを目指している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■人数制限・選抜
本授業は、受講者により提出された課題の発表を授業内で行う関係上、定員を35名とします。
※定員を超えた場合は選抜を行いますので、受講を希望される方は、必ず初回授業に出席してください。

■授業の進め方
①授業は、対面の講義形式で行います。
②課題は、「視覚」「聴覚」「触覚」を中心に、それぞれの感覚にかかわる講義や簡単な実験等を通して、受講生各自がその感覚の再確認を行い、用意されたテーマで課題制作を行い、発表をするという流れで行います。
※課題は、身近な材料を使った簡単な工作のようなものをイメージしてください。
※課題制作に関しては、表現技術の出来・不出来を評価するものではなく、設定されたテーマをどのように理解し、考え、表現しようとしたのかに重点を置いて評価します。
③授業ごとに授業内容に関する授業リアクションの提出を必須とします。
※提出されたリアクションは、全員分の内容を提出者の名前を外して配布し、受講者全員で共有できるようにします。
※オンライン受講、オンデマンド受講について
本授業は対面を基本としていますが、特別な事情で対面で授業が受けられない場合は、オンライン受講、もしくは授業録画を視聴するオンデマンド受講が可能です。
オンライン受講、オンデマンド受講を希望される場合は、必ず事務に相談の上、必要書類を提出してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	感覚の特性
第2回	視覚１	視覚とは？
第3回	視覚２	視覚に関する事例から考察する
第4回	視覚３	「みる・みえる」を考える
第5回	作品発表会１	課題１で提出された作品の発表と意見交換
第6回	聴覚１	聴覚とは？
第7回	聴覚２	聴覚に関する事例から考察する
第8回	聴覚３	「きく・きこえる」を考える
第9回	作品発表会２	課題２で提出された作品の発表と意見交換
第10回	触覚１	触覚に関する事例から考察する
第11回	触覚２	「さわる・ふれる・ふれている」を考える
第12回	作品発表会３	課題３で提出された作品の発表と意見交換
第13回	嗅覚	嗅覚に関する事例から考察する
第14回	味覚	味覚に関する事例から考察する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
●授業リアクションの提出は、授業内容を振り返り、授業後に授業支援システムで提出を行うこととします。
●課題は、各自が授業外で行うこととします。
●本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。
※上記以外に準備学習や復習が必要なことは、随時授業内で設定します。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しません。

【参考書】
『錯覚の世界』ジャック・ニニオ著（新曜社/2004年）、『顔を科学する』山口直美・柿木隆介編（東京大学出版会/2013年）、『聴覚心理学概論』B.C.J. ムーア著（誠信書房/1994年）、『触覚の世界: 実験現象学の地平』ダーヴィット・カッツ著（新曜社/2003年）、『神経心理学コレクション：タッチ』岩村吉晃著（医学書院/2001年）、『体と手がつくる知覚世界』東山篤規著（勁草書房/2012年）、『味臭覚の科学』斉藤幸子・小早川達著（朝倉書店/2018年）、『「おいしさ」の錯覚』チャールズ・スペンス著（角川亜書店/2018年）等

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、出席率と各授業毎に提出される「授業内容に対するリアクション」から、授業の理解度を平常点として評価（70%）。
また、課題に対して受講者自身がどのようなにアプローチができたかを評価（30%）。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

※成績評価を行うためには、すべての課題提出を必須とします。

【学生の意見等からの気づき】
新たな知識を得たことで満足するのではなく、受講生各自がそれらを自身で再考察できるように授業の進め方、振り返り方法を受講生の反応に応じて考えていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
なし

【その他の重要事項】
視覚障害者が関わるNPO法人で実務経験のある教員が、その経験から感覚について講義を行う。

【Outline (in English)】
The course will consider how people perceive things/things by examining the interrelationships among the five senses.
The goal of the class is to enable each participant to reacquaint himself/herself with his/her own senses.
As learning outside of class hours, reactions to the class content will be submitted online after class.
Each student is expected to watch the video materials and complete assignments outside of class.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading will be based on 70% regular marks and 30% assignments.

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

映像文化論

岡村　民夫

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：定員60名。それを超えたら選抜

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
高畑勲・宮崎駿の作品を、欧米や日本のアニメ映画と比較しながら、主に彼らの作品のスタイルや映画史・アニメーション史上の位置を学習します。

【到達目標】
1960年代〜2020年代の日本のアニメの映画的・アニメ的特徴や制作体制について学び、現代のアニメ状況がどのように形成されたのかを知ることができます。またアニメや映画のスタイルを分析できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎週、アニメの制作体制、表現技術、スタッフ、制作体制などについての講義と、実作の抜粋の鑑賞を行います。そして鑑賞した映画について気づいたことを、学習支援システムを通じて書いてもらいます。それらのフィードバックは授業およびhoppiiを通じて行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンスおよび選抜	授業の内容、進め方について説明後、アニメを15分ほど鑑賞してもらい映像的分析を提出し、それをもとに受講資格者を選抜する。
第2回	古典的アニメーション映画と高畑勲の初監督映画の差異	『ピノキオ』『雪の女王』 『太陽の王子ホルスの大冒険』
第3回	日常生活と心象の表現 海外ロケーション	『アルプスの少女ハイジ』 『赤毛のアン』
第4回	宮崎駿の独立	『未来少年コナン』 『ルパン三世 カリオストロの城』
第5回	高畑勲・宮崎駿に影響を与えた外国のアニメーション と実写映画	『王と鳥』 『市民ケーン』
第6回	高畑勲・宮崎駿の日本回帰	『じゃりン子チエ』 「さらば愛しきルパンよ」
第7回	スタジオジブリの誕生	『風の谷のナウシカ』 『天空の城ラピュタ』
第8回	東京西郊外の里山	『となりのトトロ』 『平成狸合戦ぽんぽこ』
第9回	聖地巡礼とロケハンアニメ	『耳をすませば』 『パトレイバー2 the Movie』
第10回	メタモルフォーゼ	『崖の上のポニョ』 『ハウルの動く城』
第11回	戦争・災害の表現	『火垂るの墓』 『風立ちぬ』
第12回	高畑勲の影響	『マイマイ新子と千年の魔法』 『この世界の片隅に』
第13回	宮崎駿の影響	『時をかける少女』 『天気の子』 レポート提出
第14回	まとめ	レポートについての総評 補習：その他関連作品

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
授業で部分的に観た映画を、できるかぎり自主的に鑑賞することを望みます。

【テキスト（教科書）】
随時、プリントを配布します。

【参考書】
高畑勲『映画を作りながら考えたこと』岩波文庫
宮崎駿『出発点』徳間書店
叶精二『宮崎駿全書』フィルムアート社
ステファヌ・ルルー（岡村訳）『シネアスト宮崎駿　奇異なもののポエジー』みすず書房
ステファヌ・ルルー（岡村訳）『シネアスト高畑勲　アニメの現代性』みすず書房

【成績評価の方法と基準】
平常点（50％）とレポート（50％）。
平常点は出席だけでなく、コメントを通して評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。
なおコメントシートのフィードバックは、授業支援システムや授業を通じて行います。

【学生の意見等からの気づき】
授業時に積極的に意見を求める。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
初回に選抜テストを実施するので、必ず出席し試験を受けること。
講義の重点は映像の形式面にあります。

【旧科目との重複履修】
なし。

【Outline (in English)】
In this class, we study Isao Takahata and Hayao Miyazaki's work, through their style and their position in the history of animation and movie.
【Learning Objectives】At the end of course, students are expected to understand the history and style of the Japanese animation from the 50's to 90's.
【Learning activities outside of classroom】After each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
【Grading Criteria /Policies】Term-end report : 50%、in class contribution: 50%

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

【2026年度休講】写真論

丹羽　晴美

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現在、デジタルが主体となった写真について19世紀中頃の発明前後の歴史的背景から見直し、人間の知覚を拡げたメディアとして検証する。具体的に作品や作家論にも触れ、写真表現の可能性を考察すると共に、あたりまえになっている「見る」という行為を再考する。

【到達目標】
写真について、メディアと技術の両側面から基礎的な論点を把握し、歴史や他分野との関係について考察できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
主にプロジェクションによる講義を実施。19世紀から現在まで、発達する写真メディアと他分野へ与えた影響などを個々の状況をみながら考える。実際に展覧会を予習・鑑賞して、レポートを提出する回も設ける。課題に対するフィードバックは講義内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	写真というメディア：写真メディアを見直す	今、あまりにも身近になっている「写真」というメディアを再考する。
第2回	写真誕生前夜：19世紀の状況を見直す	様々なメディアが発明された19世紀を再考し、写真が発明される前の知覚を考える。
第3回	写真誕生：写真発明によって何が変わったか	19世紀半ば、写真発明に伴い何が起こり、社会状況にどのような影響があったかを考察する。
第4回	作家論１：現在と異なる写真技法を使った作家について	19世紀半ば、当時の最先端メディアを使った作品、作家は何を工夫し、何を獲得したか。
第5回	写真メディア史１：写真発達史とその背景	写真の発展に伴い、情報伝達にどのような影響があったか。
第6回	写真メディア史２：写真技術史とその影響	写真技術が発達するとは、社会的にどのようなことなのか。現代への影響も考える。
第7回	写真と絵画：表現としての写真	写真の登場は美術史に多大な影響を与えた。その様子と写真表現を考察する。
第8回	作家論２：写真独自の表現とは何か	表現として独立した写真は何を目指したか、具体的な作品を観て考える。
第9回	ドキュメンタリー１：ドキュメンタリーの中で果たした役割	写真の大きな特性である記録性は歴史の中で大きな役割を果たした。その変遷の考察。
第10回	ドキュメンタリー２：ドキュメンタリー写真の反省点と可能性	撮る者と観る者の意識によっては、写真は功罪となる。その反省点と今後の可能性。
第11回	作家論３：記録と表現の狭間	記録することと、自分の意思を表すことの狭間で作家達が何を表現しているかを考察。
第12回	現代の写真：写真でしかできない表現を目指す現代の写真	写真の特性を生かした様々な表現は、時に特異に見える。その中に隠された意図とは何か。
第13回	見えないもの：『見えるものと見えないもの』	メルロ＝ポンティの視覚論を引用しながら、写真がもたらした知覚を考察。
第14回	写真がもたらした知覚	全講義のまとめ。写真論、作家論、作品論などから様々な視覚効果を考察。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「作家論」講義には、実際に展覧会を観てレポートをまとめる回が含まれている。講義内に課題展覧会の予習を行い、レポート提出までは約２〜３週間の猶予を設ける。「作家論」講義時期は現時点での予定。詳細は講義内で指示する。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
講義内に指示

【成績評価の方法と基準】
レポート提出２割、期末試験８割この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
実際に行われている展覧会やイベントなどの情報照会が好評であったため、積極的に講義内で紹介していく予定。

【その他の重要事項】
講義の進行状況により、内容変更あり。

【Outline (in English)】
This course studies how photography widened human perception while rethinking the history of development of the media from the mid-19th century. As we see various photographic works, we examine the way of seeing.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

映像と文学

林　志津江

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大好きな小説やマンガが映画化・ドラマ化されたので、観てみたら「納得いかない！ 私の知ってるアレとは全然違うんですけど！」と感じた経験はありますか。この授業では「映像化された文学作品」を例に、文学作品（文字テクスト）から映画（映像）へというメディア・ジャンル変換の過程を分析しながら、芸術とメディアの関わりや、文学と映画のそれぞれが表現しうるものについて、自ら考えを深めていきます。あなたのガッカリした気持ち、あるいは「まあまあ期待以上」という気持ちの正体に、いつもとは違う視点から迫ってみませんか。

【到達目標】
1）さまざまな文学作品や映画に触れながら、文学と映画それぞれの形式的特徴や両者の関連、差異について理解を深めること。
2）「映画制作において参照された原典がある」現象の分析を通じ、受容美学やアダプテーションの理論の基本を学ぶこと。これは読む人、観る人としての自分を反省的に捉える訓練にもなります。
3）美的形式（表象）の分析を通じ、古典的なメディア論のテーゼの真意を理解すること。
4）「オリジナリティー」「模倣」「引用」「暗示」などの基本的な美学概念に触れ、芸術の社会的構築物としての側面を理解し、批判的思考の術を磨くこと。
5）この授業の経験を、どんな分野であれ、ゼミ論や卒論執筆その他のさまざまな場面に役立てられる自分になること。
その上でこの授業が、皆さんのお気に入りの一作品が見つかる機会になれば嬉しく思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・各回、対面授業で行います。
・理論的導入の後、文学作品とその映像化（劇映画）、ないし文学作品と文学作品に触発されて作られた翻案映画作品の組み合わせについて、特定の部分・シーンを対照的に検討する作業を繰り返しながら、文学作品と劇映画の形式、双方から読み取れるものについて考察します。
・扱う文学作品のテクストについてはご自分で用意していただきます。図書館で借りる形で構いません。
・授業ごと、所定の課題を作成・提出します（文学作品が手元にないと作成できません）。
・LMSとして、主にGoogle Classroomを使用します（予定）。
・提出物のフィードバックは、適宜全体に向けて行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション（1）	この授業について・文学（物語テクスト）と映画（映像表現）に関する理論的導入
2	オリエンテーション（2）	メディアと技術革新が可能にしたもの・文学（物語テクスト）と映画（映像表現）に関する理論的導入（2）
3	J. K.ローリング／C. コロンバス『ハリー・ポッターと賢者の石』（小説1995年、映画2001年）その1	ファンタジー小説V.S.映像テクノロジー・人物と背景を構成するためのメディア（1）
4	J. K.ローリング／C. コロンバス『ハリー・ポッターと賢者の石』（小説1995年、映画2001年）その2	「魔法（使い）」の表象・「見えないはずのもの（が見える）」の表現
5	筒井康隆／大林宣彦『時をかける少女』（小説1967年、映画1983年）その1	身体感覚の記憶の表現・人物と背景を構成するためのメディア（2）
6	筒井康隆／大林宣彦『時をかける少女』（小説1967年、映画1983年）その2	時間芸術と「タイムトラベル」・「ラブシーン」の成立条件・科学と私たちの未来
7	万城目学／本木克彦『鴨川ホルモー』（小説2006年、映画2009年）その1	青春群像劇と教養小説（Bildungsroman）・人物と背景を構成するためのメディア（3）
8	万城目学／本木克彦『鴨川ホルモー』（小説2006年、映画2009年）その2	「空想の事物」の表象・コンピューターゲームが変えた映像の知覚
9	S.フィッツジェラルド／J. クレイトン『グレート・ギャツビー』（小説1925年、映画1974年）その1	「悩める若者たち」・人物と背景を構成するためのメディア（4）
10	S.フィッツジェラルド／J. クレイトン『グレート・ギャツビー』（小説1925年、映画1974年）その2	作品解釈の歴史が映画化に与える影響
11	S.フィッツジェラルド／B. ラーマン『グレート・ギャツビー』（小説1925年、映画2013年）	「時代を超えた真実」V.S.「現代風にアレンジ」
12	R.ブラッドベリ／F. トリュフォー『華氏451（度）』（小説1955年、映画1966年）その1	サイエンス・フィクションとディストピアの表現、メディアによるメディア批判
13	R.ブラッドベリ／F. トリュフォー『華氏451（度）』（小説1955年、映画1966年）その2	メディア批判から政治批判へ・政治批判から愛の物語へ
14	まとめ	今学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・授業で扱う文学作品をあらかじめ読んで準備してください。

【テキスト（教科書）】
・授業資料および授業内で視聴・確認する映像はこちらで用意します。
・授業で扱う文学作品5点（文庫本・全て日本語）
①J. K. ローリング著（松岡佑子訳）『ハリー・ポッターと賢者の石』（静山社）1997年
②筒井康隆『時をかける少女』（角川書店）1967/2006年
③万城目学『鴨川ホルモー』（角川書店）2006年
④スコット・フィツジェラルド『グレート・ギャツビー』（新潮文庫）1974／2013年
⑤レイ・ブラッドベリ（伊藤典夫訳）『華氏451度（新訳版）』（早川書房）2003/2014年

（図書館等を利用する形で全く問題ありません）
文学作品のテクストが手元にないと、各回の提出課題は作成・提出できません。

【参考書】
・W・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』『一方通行路』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（１）（２）』ちくま学芸文庫、1995年/1996年所収）
・M・マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年
・F・キットラー（石光泰夫・石光輝子訳）『グラモフォン・フィルム・タイプライター』（筑摩書房）1999年
・L・ハッチオン（片渕悦久・鴨川啓信・武田雅史訳）『アダプテーションの理論』（晃洋書房）2012年
・J・ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 ― ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年
・A・パザン（野崎歓ほか訳）『映画とは何か（上）（下）』（岩波文庫）2015年
・R・バルト（蓮實重彦ほか訳）『映像の修辞学』（ちくま学芸文庫）2005年
・蓮實重彦『映画 誘惑のエクリチュール』（ちくま学芸文庫）1990年
・杉野健太郎編著『［映画学叢書］映画のなかの社会／社会のなかの映画』（ミネルヴァ書房）2011年
・杉野健太郎編著『［映画学叢書］交錯する映画 ー アニメ・映画・文学』（ミネルヴァ書房）2013年
・波戸岡景太『映画原作派のためのアダプテーション入門：フィッツジェラルドからピンチョンまで』（彩流社）2017年
・岩田和男・武田美保子・武田悠一（編）『アダプテーションとは何か 文学／映画批評の理論と実践』（世織書房）2017年
・小川公代・吉村和明（編）『文学とアダプテーションII ー ヨーロッパの古典を読む』（春風社）2021年
・小倉孝誠（編）『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社）2023年
・民間の各種映像ストリーミングサービス（あればベターです）
その他、適宜授業内に提示します。

【成績評価の方法と基準】
・授業毎作成・提出課題（平常点）100%
以上の成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
参加学生からのヒアリングは逐次行ない、参加者の意見や疑問に対する回答はできるだけ速やかに行ないます。

【学生が準備すべき機器他】
・紙媒体にて使用できる筆記用具
・授業で扱う文学作品５点（文庫本・全て日本語・図書館等利用可）
①J. K. ローリング著（松岡佑子訳）『ハリー・ポッターと賢者の石』（静山社）1997年
②筒井康隆『時をかける少女』（角川書店）1967/2006年
③万城目学『鴨川ホルモー』（角川書店）2006年
④S・フィツジェラルド『グレート・ギャツビー』（新潮文庫）1974／2013年
⑤R・ブラッドベリ（伊藤典夫訳）『華氏451度（新訳版）』（早川書房）2003/2014年
（詳細は授業支援システム上で、秋学期開始前に周知します）

【その他の重要事項】
・扱う作品と上記の順序は変更されることがあります。
・理由なく提出期限を経過した課題、所定のルート以外の方法で提出された課題は、原則として受理しません。欠席の代替措置（未提出課題の埋め合わせ）等も特に用意しません。
・部活動の公欠届や、就職活動を理由にした欠席届等の類の提出や通知は不要です。
・授業の進め方や課題に関する詳細は、第１回目の授業で説明します。質問や疑問のある方はできるだけ第１回目の授業に参加してください。

【Outline (in English)】
Why are we sometimes disappointed in movies that are made from literature or would feel disappointed about film adaptation or film as derivative work? This course introduces the fundamentals of reception theory/reader response literary theory as well as the very basis of film studies. It includes theories of derivative work as a film-making concept. For that purposes, the course deals with several combinations of literary works and its filming examples that are made from original literary works.
【Learning Objectives】
・To develop an understanding of a wide range of topics relating to life, culture and society.
・To be able to express their own opinions and to write texts of a certain length about themes above, especially about literature, films and its adaptation.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】
・The standard preparation and revision time for this course is at least two hours each.
・There are prescribed review tasks.
【Grading criteria】
The course will be judged on 100% of ordinary marks (submitted assignments /report) as a result of active participation.
On the basis of this grading system, students who have achieved at least 60% of the objectives of this course will be considered to have passed the course.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

【2026年度休講】演劇論

竹内　晶子

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ミュージカルも、テレビドラマも、映画も、オペラも、人形劇も、能も、歌舞伎も、宝塚も、演劇の一つです。音楽・美術・文学・舞踏を含む総合メディアである演劇は、古今東西の人間達の娯楽の中心に常にありました。
この授業では日本の古典演劇と近代西洋演劇との比較を軸に、演劇を構成する様々な要素、演劇を取り巻く様々な問題について考察します。その中で世界の演劇の多様なあり方や、基本的な演劇理論の応用を学ぶことにもなるでしょう。「なぜ我々／自分は演劇を見るのか」。様々な切り口から演劇を分析しながら、学生の一人一人がこの問への答えを探っていくことになります。

【到達目標】
・近代西洋演劇と対比した、日本古典演劇の特徴を理解する。
・基本的な演劇理論を理解し、実作品の分析に応用できるようになる。
・時代や文化、ジャンルを異にする多様な演劇作品の比較分析ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
(a)様々な演劇形態の説明、(b)基本的演劇理論の解説、(c)台本読解やDVD鑑賞とその分析、を交互に行っていきます。自分の頭で分析しながら観る・読む・聞く態度が、受講者には求められますので、毎週の課題(SQ)を期日までに提出することが必須です。単にDVDを漫然と観て講義を聞くだけの授業ではありません。
授業では皆さんの課題への回答を紹介し、様々な視点を共有していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	イントロダクション	授業説明
第二回	演出が可能にすることI：ゼッフィレッリ版、映画版演の「蝶々夫人」	鑑賞と分析
第三回	演出が可能にすることII：映画版、浅利圭太版の「蝶々夫人」	鑑賞
第四回	演出が可能にすることIII：映画版、浅利圭太版の「蝶々夫人」	議論、分析
第五回	演出が可能にすることIV：モンティ版、ウィルソン版の「蝶々夫人」	鑑賞、議論、分析
第六回	日本の古典演劇I	文楽、歌舞伎の歴史、
第七回	日本の古典演劇II	能の歴史、二層のコミュニケーション
第八回	日本の古典演劇III	能、文楽、歌舞伎の「所作」
第九回	日本の古典演劇とモダニズム	イエイツ、ブレヒト
第十回	異性装I	シェークスピア他、西洋演劇史における異性装
第十一回	異性装II	歌舞伎など、日本芸能史にみる異性装
第十二回	異性装III	宝塚の「男役」が可能にするもの
第十三回	古典演劇と現代の舞台	『王女メディア』『ク・ナウカで夢幻能なオセロー』他
第十四回	学生発表	新作能・新作歌舞伎・新作宝塚

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎週のSQ（Study Questions）への回答を、期限内に提出すること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
配布資料を用いる。

【参考書】
毛利三彌『演劇の詩学　劇上演の構造分析』相田書房、2007年。

【成績評価の方法と基準】
・課題（ＳＱ）：50%。締切厳守。
・積極的な授業参加：20%
・期末試験　30%
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
・4回以上欠席した場合は、単位修得の権利を失います。

【学生の意見等からの気づき】
学生の課題への回答を授業で紹介します。

【その他の重要事項】
・必ず初回授業に参加すること。履修を希望する学生が極端に多い場合には、選抜を実施します。

【Outline (in English)】
【Course Outline and Learning Objectives】 Students will learn some basic theater theories and analyze Japanese traditional theater in comparison with modern Western theater.【Learning Activities Outside of Classroom】 Students are required to submit weekly assignments.【Grading Criteria/Policy】weekly assignment (50%), active participation in class discussion (20%), final exam (30%)

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

ポピュラー音楽論

大嶌　徹

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
戦後から平成期にかけての日本の大衆音楽、ポピュラー音楽を歴史的に学ぶ。歌謡曲やアイドルやロックなどは、いまも娯楽として聴かれ続けている一方で、すでに多くの評論やファンの語りによって意味づけられてきた、歴史的な音楽でもある。本授業では、そうした語りを前提としながら、なぜ、どのようにして私たちの日常に浸透している音楽を「歴史」として語ることができるのかを、社会史、文化理論、文化産業論などの論点を交えて検討する。現代の音楽観を歴史の中に置き直すことで、日本の音楽文化をめぐる理解の前提そのものを問い直す。

【到達目標】
・戦後〜平成期の日本の大衆音楽の変遷を、年代・社会的背景・音楽様式を結びつけて大まかに概説できる。
・複数の理論的視点から現代の音楽観を相対化して捉えた上で、個別の作品や現象について客観的に考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義形式。リアクションペーパー等で質問を受け付け、授業内で回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	ガイダンス	授業の目的と概要の説明
2回	戦前戦後の連続と断絶：ラジオ放送とレコード産業	GHQ占領期のレコード産業とラジオ放送を対象に、音楽をめぐるメディア・制度・実践の戦前からの連続と断絶について。
3回	進駐軍施設の文化的影響	進駐軍キャンプ内の音楽施設を中心に、占領が残した音楽文化への直接的な影響について。
4回	美空ひばりの戦後像	1940〜50年代における美空ひばりの伝承的かつ雑食的な音楽性と戦後文化について
5回	音楽産業の構造転換	テレビ時代における音楽産業の構造転換と、専属契約制度の解体・外部制作システムの形成について。
6回	ロカビリーからGSまで	産業構造転換期における洋楽風流行歌（ポップス）について。
7回	歌謡曲の音楽生産	テレビメディアを集約点とする1970年代の音楽生産について
8回	テレビ芸能界の「偶像」生産：アイドル	日本型アイドルの歴史と特徴について。
9回	日本調歌謡の再編：演歌	「日本の心の歌」として商業的に再編された演歌について。
10回	前衛と大衆	前衛（政治／芸術）が大衆と接続した動きである「うたごえ運動」と「大阪万博」について。
11回	対抗文化と資本主義①：関西フォークとニューロック	1960年代アメリカ合衆国を中心に開花した対抗文化の日本への移入について。
12回	対抗文化と資本主義②：70年代フォークとニューミュージック	フォーク／ロックが音楽産業と折衝し、理念と商品化のあいだで変容する諸相について。
13回	都市オムニボアの正統性：はっぴいえんど史観と渋谷系	外来音楽を雑多に取り込み再編する都市音楽が、混淆の過程そのものを通じて獲得した〈本物らしさ〉の系譜について。
14回	Jポップとは何か	1990年代以降の主流的な大衆音楽＝Jポップの歴史的経緯とその特徴について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
配布資料を読み直しながら音源を聴く。配布資料掲載の参考文献を読む。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
レポート50%。
リアクションペーパー50%。　この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
リアクションペーパーに返答する時間を設けるなどして、学生からの要望や質問に応じられるよう工夫する。

【Outline (in English)】
This course examines Japanese popular music from the postwar period through the Heisei era from a historical perspective. Genres such as kayōkyoku, idol music, and rock continue to be enjoyed today as forms of entertainment, yet they are also historical forms of music whose meanings have long been shaped by criticism, commentary, and fan discourses.
Building on these existing narratives, the course explores why and how music that permeates our everyday lives can be discussed and analyzed as history.Drawing on perspectives from global music history, social history, cultural theory, and cultural industry studies, students will critically examine the historical positioning of popular music. By situating contemporary understandings of music within a broader historical context, the course aims to reconsider the underlying assumptions through which Japanese music culture has been understood.
【Grading Criteria /Policy】
Report assignment:50 %
Reaction paper　for each class 50 %
Preparatory study and review time for this class are 2 hours.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

コミックス論

野田　謙介

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
海外で日本のマンガが人気だという話をしばしば耳にします。実際、日本のアニメ・マンガを原語で楽しむために日本語を学ぶ外国の若者は、おどろくほど多いです。しかしながら海外における日本マンガ受容の実態を、わたしたちは本当に知っていると言えるのでしょうか。あるいは、そもそも日本語における「マンガ」は、どこまでを指し示せる言葉なのでしょうか。
　本授業では、マンガを理論的、歴史的、社会的な側面から概観します。そうすることによって、自覚的／客観的に「マンガ」をとらえなおすきっかけを提供したいと考えています。

【到達目標】
◆マンガの歴史について基礎的な知識を身につける。
◆マンガが自明な概念でないことを理解し、社会学的な観点から説明できるようになる。
◆普段なにげなく読んでいるマンガについて、その表現の仕組みを理論的に分析することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本的には講義形式ですすめます。毎回リアクションペーパーの提出をお願いします。リアクションペーパーや提出課題は適宜授業内でとりあげ、フィードバックをおこないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション：まんが、マンガ、漫画、コミックス？	マンガの呼称と現状
2	マンガの読み方I	マンガの要素について
3	マンガの読み方II	時間/運動、音について
4	マンガの読み方III	世界制作の方法
5	マンガの歴史	起源について
6	マンガの歴史：日本編I	戦前
7	マンガの歴史：日本編II	戦前から80年代まで
8	マンガの歴史：日本編III	80年代以降
9	マンガの歴史：日本編IV	コミケ
10	マンガとアニメーション	マンガ版とアニメ版の『ナウシカ』比較
11	マンガの歴史：海外編I	日本マンガの受容史
12	マンガの歴史：海外編II	米・仏のマンガ史
13	マンガの読み方IV	翻訳についてと授業内試験
14	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
予習として、指定作品を読んで/見てきてもらい、設定した質問に口頭で答えてもらうことがあります。また、課題を提出してもらうことがあります。

【テキスト（教科書）】
指定しない。必要なテキストについては適宜配布します。

【参考書】
各回のテーマにそって、授業で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
授業内試験（60%）、提出物（30%）、授業内発言（10%）。
文化を相対化する視点と分析的に漫画を読む方法を身につけたかどうかを評価基準とします。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者人数がそれほど多くなければ、出席者の発言をより促す工夫をします。

【Outline (in English)】
It is widely recognized that Japanese manga enjoys significant popularity in foreign countries. Indeed, many young people outside Japan study the Japanese language in order to engage with Japanese anime and manga in their original form. However, do we really know the actual situation overseas? First of all, what is "Manga" in Japanese? This course provides an overview of manga from a theoretical, historical, and social points of view, giving clues for rethinking the manga that has been considered to be self-evident.
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- have a basic knowledge on the history of manga.
- understand that manga is not an obvious concept,and explain it from a social perspective.
- analyze the mechanism of expression of manga, which we usually read unconsciously.
You may be asked to read the assigned works as a preparatory activity and answer the questions orally in class. You may also be asked to submit assignments.
Term-end examination: 60%、Short reports: 30%、in-class ramarks: 10%.
The evaluation criterion will be whether or not the student has acquired the perspective of relativizing own culture and the means of reading manga consciously. Based on this grading method, students who have achieved at least 60% of the achievement goals of this class will be considered to have passed the class.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

【2026年度休講】空間デザイン論

前田　尚武

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜　定員 20 名

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「空間」は、都市、建築、アート、グラフィック、映像などさまざまなデザイン手法が駆使されたメディアである。各々の領域で論じられている「空間」を講義と体験を通して多角的に理解し、空間デザインを表現・伝達する理論的かつ実践的な方法論を学ぶ。

【到達目標】
本講座は、デザインの制作技術を習得するのではなく、空間デザインを操るリテラシーを高めるとともに、空間が背負う社会的・文化的背景や文脈を理解する力を養うことが目標である。講義を通して理論を学び、フィールドワークでは講師とともに建築を巡り、空間を読み解き、その魅力を感じ取る力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講座は、一級建築士であり学芸員である講師がこれまで企画、設計、デザインを手がけた都市開発、建築、展覧会等を主たる題材に、舞台裏での経験と実例を基に空間デザインの理論と実務を講義する。また、講義に連動してフィールドワークを積極的に実施。訪問先との調整を行った上で下記各講座を再編し、日時、場所を決定し事前に周知する。講義の進行状況、登録人数等により、講義内容、フィールドワーク先、日程等は変更になる可能性があり、オンラインで実施することもある。授業の初めに、前回授業で提出されたリアクションペーパーからのコメントを紹介し、受講者に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	講義 ガイダンス	講義全体のガイダンス。テーマ、目標、スケジュールなど。
第2回	講義 アートと空間：美術館・博物館空間論	いま、美術館に求められる空間とは何か。企画、展示、運営など多角的な視点から美術館・博物館を考察するとともに、現代美術における空間表現：インスタレーション作品の制作過程から様々な展覧会での空間構成や照明デザインまで舞台裏を解説。
第3回	フィールドワーク アート・都市・空間：六本木ヒルズのパブリックアートと森美術館	講師が設計を担当した六本木ヒルズを巡り、都市の成り立ちや空間構成、都市とアートの関係を学ぶ。
第4回	フィールドワーク アート・都市・空間：六本木ヒルズのパブリックアートと森美術館	第２回で学んだ美術館の展示空間を美術館で観察し、現代美術の展示手法、展示空間のデザインなどの理解を深める。
第5回	講義 都市と空間：都市デザインの萌芽から未来へ	戦後復興都市計画から、建築運動メタボリズム、70 年大阪万博、六本木ヒルズなど現代日本の都市デザインの実験的試みを俯瞰し、都市空間の将来像を考える。
第6回	講義 アートと空間：エリアマネジメントとアート	近現代における環境芸術としてのアートが都市において果たしてきた役割といま求められているものは何かを解説。
第7回	講義＆フィールドワーク アートと空間：京都市京セラ美術館	国内最古の美術館建築で、2020年にリニューアル開館した京都市京セラ美術館。改修から現在まで携わっている講師が対面とオンラインのハイブリッドでその革新的なリノベーションについて解説。
第8回	講義＆フィールドワーク アートと空間：京都市京セラ美術館	京都市京セラ美術館の空間を対面とオンラインのハイブリッドでツアーを実施し、第２回で学んだ 理論を実践しているアートのための空間を観察する。
第9回	フィールドワーク 建築鑑賞：上野公園	重要文化財や世界遺産など明治から現代に至る数多くの大規模建築が集積する上野公園を講師の解説で巡り、日本の近現代建築史を実空間で体感し、理解を深める。
第10回	フィールドワーク 建築鑑賞：新橋・銀座	戦前のモダン建築からメタボリズム建築、ハイブランドの現代建築まで世界的建築家が競演する新橋・銀座エリアの建築を講師の解説で巡り、日本の近現代建築史を実空間で体感し、理解を深める。
第11回	講義 伝統と空間：日本建築の発見	日本建築の魅力を再発見し、国際的に伝えようとした明治の建築家・建築史家の軌跡を紹介し、伝統継承の問題を考える。
第12回	講義 伝統と空間：日本建築のグローバリズムと多様性	日本建築の影響がみられる国内外の近現代の建築作品の数々を読み解き、木組の構成美、民家、茶室まで多様な日本建築の特質を継承している現代建築を紹介し、空間デザインの未来を考える。
第13回	フィールドワーク 建築鑑賞：江戸東京たてもの園	講義で学んだ建築の理論を実空間を通して体験し理解を深める。
第14回	フィールドワーク 建築鑑賞：江戸東京たてもの園	講義で学んだ建築の理論を実空間を通して体験し理解を深める。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習としてフィールドワークの訪問先について、事前に公式HP等で十分に理解しておくこと。また、復習として各回コメントシートを提出すること。本授業の準備学習・復習時間は各1時間程度を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
・『モダン建築の京都 100』石田潤一郎・前田尚武編著　発行：Echelle-1　2021年
・その他必要に応じて授業時に随時紹介。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への積極的な参加、コメント・シートの記述内容）と、レポートの合計。講義期間中の講義およびフィールドワークを通してテーマを設定し、レポートを提出する。評価基準は平常点50 %、レポート 50 %とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
フィールドワーク先の美術館、博物館等の入館料が必要。

【その他の重要事項】
◉講義日程
土曜日３-４限2コマ連続開講（原則隔週）を予定。詳細日程は、2025年夏に、学習支援システムで周知する。
◉講師略歴
前田尚武（まえだ なおたけ）
一級建築士／学芸員。１９９４年、早稲田大学大学院修了。２００３年から１５年間、森美術館に在籍し、「メタボリズムの未来年展」（２０１１年）、「建築の日本展」（２０１８年）など建築展を企画。現在、京都市京セラ美術館企画推進ディレクター、「モダン建築の京都」（２０２１年）を企画。国内外の美術館・博物館の建築設計、展示企画やデザインに携わっている。一連の建築展企画で２０１９年度日本建築学会文化賞ほか受賞多数。２０２２年より建築公開イベント「京都モダン建築祭」実行委員を務める。

【Outline (in English)】
【Course outline】
“Space” is a media in which various design methods such as city, architecture, art, graphic, image etc. are utilized.
Understand the meaning of “Space” discussed diversely in each area through lectures and experiences and learn the theoretical and practical methodology of how to present and transmit space design.
【Learning Objectives】
The goal of this course is not to master design production techniques, but to enhance literacy in manipulating spatial design and to develop the ability to understand the social and cultural background and context that a space bears. Students will learn theory through lectures, and in fieldwork, they will tour architecture with the instructor to acquire the ability to read spaces and sense their appeal.
【Learning activities outside of classroom】

As preparatory study, students are required to fully understand the fieldwork destinations in advance through official websites, etc. In addition, students are required to submit a comment sheet for each session as a review. The standard preparation and review time for this class is about 1 hour each.
【Grading Criteria /Policy】
The sum of regular marks (active participation in class, written comments and sheets) and reports. Students will be required to submit a report on a theme developed through lectures and fieldwork during the lecture period. Evaluation will be based on 50% of regular points and 50% of reports. Based on this grading system, students who have achieved at least 60% of the achievement objectives of this class will be considered to have passed the course.

GDR300GA（ジェンダー / Gender 300）

Gender and Japanese Culture

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.
その他属性：〈グ〉〈優〉〈Ｓ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
In this course, we will analyze how gender and sexuality issues manifest throughout culture in Japan. Why do we need to discuss gender and sexuality in relation to Japanese contemporary culture? Who do we talk about when we discuss such issues? We will approach these questions from different perspectives and disciplines, such as history, literature, media, etc. While the main focus of this course is the representation of gender and sexuality in contemporary Japanese society, we will also address these issues in a global context.

【到達目標】
1. To become familiar with historical sources and social and political elements in regard to the construction of gender within contemporary Japanese society.
2. To develop critical thinking strategies and apply them in order to understand how gender and sexuality are represented within contemporary Japanese media.
3. To incorporate a gender perspective while participating in academic discussions, presenting on a selected topic, and writing analytical papers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
I will lecture to situate our readings and discussions or to clarify concepts, but in general, students should come prepared to contribute seriously to the learning community by actively joining the discussion.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Orientation	Introduction to the course, syllabus, and course expectations
第2回	Introduction to gender studies	Lecture on the basic concepts in gender studies
第3回	Japanese femininities	Lecture on femininities in contemporary Japan
第4回	Gender, media, and misogyny in Japan	Lecture on the #MeToo Movement in Japan
第5回	Masculinity studies	Lecture on masculinities in contemporary Japan
第6回	Gender and the family	Lecture on marriage and work-life balance in contemporary Japan
第7回	Idol culture	Lecture on the reproduction and subversion of gender models within the idol culture
第8回	Midterm exam	Summary of the first half of the course and in-class midterm exam to assess students' understanding of the topics discussed.
第9回	LGBTQ+ issues in contemporary Japan	Lecture on the progress of LGBTQ+ rights in Japan
第10回	Heteronormativity in contemporary Japan	Lecture on the reproduction of heteronormative/cisnormative models in Japanese society and the media
第11回	Food, gender, and family	Lecture on the representation of food, gender, and family in contemporary culture
第12回	Asexuality in Japan	Lecture on asexuality/aromanticism and its representation in contemporary culture
第13回	Final exam	Summary of the second half of the course and in-class final exam to assess students' understanding of the topics discussed.
第14回	Queer Japan	Screening: "Queer Japan" (directed by Graham Kolbeins, 2019)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are required to read the reference material (in English) by the next session, submit comment sheets, and work on their midterm exam, final exam, and final essay (one to three hours for every session).

【テキスト（教科書）】
Photocopies of readings will be distributed by the instructor.

【参考書】
Coates, Jennifer, Fraser Lucy, and Pendleton Mark (eds.), The Routledge Companion to Gender and Japanese Culture, Routledge, 2020
Kazuyoshi Kawasaka, Stefan Würrer (eds.), Beyond Diversity Queer Politics, Activism, and Representation in Contemporary Japan, Dusseldorf University Press, 2024.
Steger, Brigitte, Koch, Angelika (eds.), Manga Girl Seeks Herbivore Boy. Studying Japanese Gender at Cambridge, LIT Verlag, 2013
Steger, Brigitte, Koch, Angelika (eds.), Cool Japanese Men. Studying New Masculinities at Cambridge, LIT Verlag, 2017
Steger, Brigitte, Koch, Angelika, Tso, Christopher (eds.), Beyond Kawaii: Studying Japanese Feminities at Cambridge, LIT Verlag, 2021

【成績評価の方法と基準】
Discussion and participation (comment sheets, involvement during discussion): 20%
Active participation in class is required. Submit your comments via Hosei University Learning Management System at the end of each session.
Attendance will be taken every time. You will not receive credit for the course if you miss more than three classes. Students who are more than 15 minutes late will be marked as absent.
Mid-term exam: 30%
Final exam: 30%
Final essay: 20%

【学生の意見等からの気づき】
Group discussions help students to deepen their understanding of the course topics.
This course readings and classroom discussions will often focus on difficult and potentially challenging topics. Since readings and discussions might trigger strong feelings, content warnings will be given so that students will be prepared in advance.

【学生が準備すべき機器他】
Laptop to take the in-class exams and write the final essay.

【Outline (in English)】
In this course, we will analyze how gender and sexuality issues manifest throughout culture in Japan. Why do we need to discuss gender and sexuality in relation to Japanese contemporary culture? Who do we talk about when we discuss such issues? We will approach these questions from different perspectives and disciplines, such as anthropology, history, literature, media, etc. While the main focus of this course is the representation of gender and sexuality in contemporary Japanese society, we will also address these issues in a global context.
Learning goals
1. To become familiar with historical sources and social and political elements in regard to the construction of gender within contemporary Japanese society.
2. To develop critical thinking strategies and apply them in order to understand how gender and sexuality are represented within contemporary Japanese media.
3. To incorporate a gender perspective while participating in academic discussions, presenting on a selected topic, and writing analytical papers.
Grading policy
Discussion and participation (comment sheets, involvement during discussion): 20%
Active participation in class is required. Submit your comments via the Hosei University Learning Management System at the end of each session.
Attendance will be taken every time. You will not receive credit for the course if you miss more than three classes. Students who are more than 15 minutes late will be marked as absent.

Mid-term exam: 30%
Final exam: 30%
Final essay: 20%

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

比較表象文化論

竹内　晶子

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
学生は、オリエンタリズムとジェンダー論、それぞれについて基本的な枠組みを学んだあと、オペラ、バレエ、映画、舞台などの具体的な作品に対して、理論を応用した分析を試みていきます。

【到達目標】
・作品分析のツールとして理論を使いこなす力をつけるとともに、様々な表象文化作品の比較分析に必要な、基本的な能力を身に着ける。
・作品をとりまく時代・社会・文化が作品にどのように反映されているのか、また、伝達手段（メディア）が作品の表現にどのような影響を与えているのか、という表象文化分析に必須の問題意識を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この授業では、比較の手法を取り入れた表象文化分析を、理論の勉強と応用を通じて学びます。具体的には学期前半でオリエンタリズムを、後半でジェンダー論をとりあげ、これらの理論を用いて、オペラ、バレエ、映画、舞台などの作品群（同一テーマを扱いつつも、時代・メディアを異にする作品群）を比較分析していきます。
毎回、課題テキストや前回の授業で鑑賞した作品を考察し、SQ（Study Questions）への答えを準備してから授業に出席することが必須です。回答は、授業前に提出してもらう場合も、また、授業内で書いてもらう場合（小テスト）もあります。実際に自分の頭を悩ませて「分析」する作業を通じて初めて、「理論」を自分のツールとして使いこなすことが可能になり、具体的な作品を分析していく力が身につくはずだからです。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業説明
2	オリエンタリズムI	オペラ『蝶々夫人』台本分析
3	オリエンタリズムII	オペラ『蝶々夫人』演出分析
4	オリエンタリズムIII	映画『ラスト・サムライ』鑑賞
5	オリエンタリズムIV	映画『ラスト・サムライ』分析
6	オリエンタリズムV	映画『ベイマックス』鑑賞
7	オリエンタリズムVI	映画『ベイマックス』分析
8	ジェンダー論I	「シンデレラ」コンプレックス
9	ジェンダー論II	アニメ『シンデレラ』鑑賞
10	ジェンダー論III	アニメ『シンデレラ』分析
11	ジェンダー論IV	映画『エバーアフター』鑑賞
12	ジェンダー論V	映画『エバーアフター』分析
13	ジェンダー論VI	バレエ「シンデレラ」分析
14	総論	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎週、課題(SQ)への回答を準備しておくこと。事前提出が求められる課題には、定められた期限までに学習支援システムにレスポンスを提出すること。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
適宜配布プリントを使用します。教科書は用いません。

【参考書】
授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
・提出課題と授業内小テスト:　50％
・積極的な授業参加（ディスカッション）：20%
・期末テスト：30%
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
・4回以上欠席した場合は、単位修得の権利を失います。

【学生の意見等からの気づき】
学生の回答を授業内で多く紹介します。

【その他の重要事項】
履修希望者の数によっては初回の課題をもとに選抜を行いますので、必ず初回授業後、定められた締切日までに課題を提出してください。
本授業の課題への回答作成にあたって、生成ＡＩを含むオンライン上の資料収集は固く禁止します。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Students will learn the basic theoretical frameworks of Orientalism and gender studies, and then apply them to the analysis of actual art works of various genres (ex. opera, ballet, film, theater).
【Learning Objectives】
Students will learn how to compare and analyze films and theatrical performances while taking into consideration their sociohistorical contexts.
【Learning Activities outside of Classroom】
Students are expected to submit their answers to weekly study questions by due date.
【Grading Criteria/Policy】
Assignments and review exams: 50%
Active Participation in class discussion: 20%
Final exam: 30%

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

異文化と身体表現

深谷　公宣

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：受講希望者数が教室の収容人数を超えたら選抜

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界の諸地域にみられる舞踊の発生経緯、発展プロセス、文化的意義について学ぶ。表現技法を細かく分析するのではなく、宗教、性、習俗、観光化といった身体にまつわる社会的な問題を、舞踊を通して、異文化という視点から理解する。

【到達目標】
・舞踊の歴史的・文化的背景を叙述することができる。
・諸地域ごとの舞踊の知識を踏まえ、日本の伝統的な舞台芸術の特徴を日本文化を知らない人に説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・資料を元に講義する。受講生は毎月1回、その月に受けた授業に関するリアクション・ペーパーを提出する。
・リアクション・ペーパーのコメントを授業内で適宜、紹介することにより、フィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要、進め方、基本的な概念や用語、参考図書等の紹介。
2	ポリネシア（ハワイ）	ハワイのフラを取り上げる。王国の歴史・自然観・宗教観との関わり、フラ・カヒコとフラ・アウアナの違いなど。
3	アメリカ（1）南米（アルゼンチン）	アルゼンチン・タンゴを取り上げる。発生経緯、コンチネンタル・タンゴへの展開など。
4	アメリカ（2）北米（アメリカ合衆国）	ジャズ・ダンス、タップ・ダンスを取り上げる。音楽としてのジャズの歴史、ミンストレル・ショー、アイリッシュ・ダンスとの関わりなど。
5	映画にみるダンス（1）	『街の灯』、『フットルース』、『ダーティ・ダンシング』などの映像クリップを鑑賞し、各作品の背後にある社会・文化的特徴を考える。
6	ヨーロッパ（1）スペイン	フラメンコを取り上げる。ロマの踊りからの発展とフランコ体制における観光化など。
7	ヨーロッパ（2）ドイツ、オーストリア	ワルツを取り上げる。民俗舞踊（レントラー）、宮廷舞踊（メヌエット）との関わり、19世紀における発展経緯など。
8	ヨーロッパ（3）フランス、ロシア	バレエを取り上げる。バレエ・ダクシオンからロマンティック・バレエ、クラシック・バレエ、バレエ・リュスまでの歴史的展開など。
9	映画にみるダンス（2）	『赤い靴』、『ブラック・スワン』の映像クリップを鑑賞し、職業としてのダンサーと、プロデューサー、指導者との力関係について考える。
10	アジア（1）インド	インドの伝統舞踊を取り上げる。宗教観との関わりや性の問題など。
11	アジア（2）中国	京劇を取り上げる。時の権力者からの庇護・排除により、時代の変遷のなかでどう扱われたかなど。
12	アジア（3）日本	能を取り上げる。能の歴史的変遷、W・B・イエイツによる評価など。
13	映画にみるダンス（3）	『六つの顔』、『八月十五夜の茶屋』などの映像クリップを鑑賞し、これまで授業で扱った西洋の身体表象と日本の身体表象の違いを考える。
14	ケーススタディ／授業のまとめ	授業のまとめを兼ねたトピックを選定して講ずる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
下記【参考書】に記載の書籍を読むように努める。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。毎回、資料を配布する。

【参考書】
ジェラルド・ジョナス『世界のダンス―民族の踊り、その歴史と文化』（大修館書店）
邦正美『舞踊の文化史』（岩波新書）
渡辺保『日本の舞踊』（岩波新書）
渡辺保『身体は幻』（幻戯書房）
三隅治雄『踊りの宇宙ー日本の民族芸能』（吉川弘文館）
舞踊教育研究会『舞踊学講義』（大修館書店）
矢口祐人『ハワイとフラの歴史物語』（イカロス出版）
生明俊雄『タンゴと日本人』（集英社新書）
有本紀明『フラメンコのすべて』（講談社）
加藤雅彦『ウィンナ・ワルツーハプスブルグ帝国の遺産』（NHKブックス）
宮尾慈良『舞踊の民族誌ーアジア・ダンスノート』（彩流社）
宮尾慈良『これだけは知っておきたい　世界の民族舞踊』（新書館）
皆川厚一『インドネシア芸能への招待ー音楽・舞踊・演劇の世界』（東京堂出版）
魯大鳴『京劇入門』（音楽之友社）
白洲正子『能の物語』（講談社文芸文庫）
『野村萬斎　What is 狂言？』（檜書店）
Patricial Leigh Beam, World Dance Cultures: From Ritual to Spectacle. Routledge.

【成績評価の方法と基準】
平常点30%: 毎月1回のペースで、リアクション・ペーパーを3回提出する。各回について、それまでの講義内容を把握し、自分なりに解釈することができているかを評価。
学期末レポート70％：異文化と舞踊に関するトピックについて分析し、丁寧に記述することができているかを評価。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
授業の進行状況により、扱うテーマや作品を変更することがあります。

【Outline (in English)】
・Course outline: A survey course that studies a wide range of dance across cultures and time periods. We will explore the process of its development and the cultural values. Instead of analyzing the details of body mechanics, this course will focus on the social dimensions of dance in terms of religion, sex, habits, tourism and try to elicit its intercultural aspects.
・Learning Objectives: By the end of this course, students will be able to understand and describe dance history and culture. They will also be able to explain about traditional Japanese performances to those who do not know them.
・Learning activities outside of the classroom: read the recommended books in the 'References'.
・Grading Criteria/Policy: Class participation 30%, Final paper 70%.

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

パフォーマンスの美学

森村　修

サブタイトル：〈おぞましさ〉と〈かわいい〉の美学
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：パフォーマンス・スタディーズ
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：人数制限あり・選抜試験

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【授業の概要】
本科目「パフォーマンスの美学」では、いわゆる「身体表現」だけでなく、思考を表現した作品・対象（=オブジェ, objet)も、何らかの「実演＝パフォーマンス」として捉え、そこに内在する感性学=美学（aesthetics）を考察することを目的とする。それゆえ、いわゆる芸術表現としての「パフォーマンス・アート」には一般的には属さない「ファイン・アート」や、デザイン、詩などの文藝作品も、何らかの実演された表現として捉え、そこに見出せる「美」や「美意識」について哲学的に考察する。また、いわゆる「前衛芸術」や「実験芸術」など、政治的・イデオロギー的・宗教的な理由などで従来の学校教育では取り上げることがないアート運動や表現活動も「パフォーマンス」として含めて考察する。
2026年度は、山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち―― フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』（青弓社、2026年）を参照しながら、フェミニズム美学における〈おぞましさ〉と〈かわいい〉の理解を検討する。
【授業の意義】
フェミニズム美学の手法を用いて、少女表象が展開する美術作品、映像作品などを通じて、少女表象が単なる〈かわいさ〉だけを追求しているのではないことを明らかにする。その際に、「バフォーマンスの美学」という観点から、現代の美意識や美の価値観ではなかなか捉えにくい〈おぞましさ〉を探ることが、本授業の意義である。

【到達目標】
(1) 既成の価値観・マスメディアの流す価値観に対する、批判的視点を身につけることができる。
(2) 自らの価値観を問い直し、新たに刷新するための表現手段を具体的に説明することができる。
(3) 高校までの芸術教育や制度的なアート認識を新たに問い直し、自らの視点でアートについての鑑賞方法や参加方法について、説明できる。
(4) アートの領域の内部で生じた、20世紀以降のさまざまな変遷を辿ることで、「前衛芸術」のあり方について、現在のアートのあり方を予測することができる
(5)「パフォーマンス・スタディーズ」の基本について学ぶことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
【授業の概要】
本講義では、「フェミニズム美学」の観点から、少女表象が〈おぞましさ〉とともに展開する美術作品や映像作品を取り上げ、少女表象に何が託されているかを、学生と議論していく。
【授業の方法】
①基本的には、授業は「講義形式」で行うが、受講生との積極的な対話や討議を行う。特に文学（俳句・短歌・詩）作品については、教員による解釈を提示しながら、受講生の感想・解釈を積極的に取り入れていく。
②少女表象が典型的に見られる代表的な映像作品（実験映像・映画・演劇の記録など）を上映する。そこで、諸作品について、さまざまな解釈をしながら、授業参加者と討議していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・寺山修司の略歴紹介 ・講義の目的と概要についての解説を行う。
2	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・パフォーマンス・スタディーズの歴史について概観する。
3	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・パフォーマンス・スタディーズの概念について概観する。
4	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・フェミニズム美学研究①
5	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・少女／アブジェクト
6	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・文化論としての少女論
7	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・「少女趣味」とは何か
8	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・日本美術における少女
9	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・フェミニズム・アートの分析①
10	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・フェミニズム・アートの分析② ―― 現代芸術の「アニメ化」
11	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・少女たちの自己主張
12	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・少女のアブジェクト
13	山田萌果の『おぞましさと戯れる少女たち――フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』を読む	・少女の怪物化
14	〈おぞましさ〉と〈かわいい〉	・総括とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等)】
・なるべく多くの作品に触れるようにしてもらいたい

【テキスト（教科書)】
山田萌果『おぞましさと戯れる少女たち―― フェミニズム美学から読む日本現代美術の少女表象』（青弓社、2026年）

【参考書】
その都度指示する

【成績評価の方法と基準】
【成績評価】
①授業内での積極的な議論参加、発言・質問など（30％）
②期末リポート（70％）
【評価基準】
①作品を読んだり、見たりする際に、積極的に自らの意見を表明すること。表現することが、本講義にとって重要な評価基準になっている。
②期末リポートは、あくまで「批評（critique）」が求められている。単なる感想・意見では評価できない。「批評文」には、一定の「規準（criterion）」が前提されている必要がある。寺山修司の生き方や作品について「批評文」を書くためには、次の４点が明確に意識されていることが、本科目の「成績の評価基準」になっている。

【学生の意見等からの気づき】
学生からのリアクション・ペーパーを活用する

【学生が準備すべき機器他】
映像作品の上映があるので、各自がPCやタブレットを持参する必要がない。逆に、それらを使用することによって、授業に集中できない可能性もあるため、持参しないでもらいたい。

【その他の重要事項】
・本講義がめざしているのは、受講生の美意識や価値観の問い直しである。そこで、参加者全員に、既成の価値観やマスメディアが大量に流す情報に対する批判的な姿勢が求められている。それゆえ、本講義では、自らの価値観を積極的に打ち破る勇気をもつ学生の参加を望む。インターネットやマスメディアに毒された価値観をいったん破壊して、新しい美意識や価値観を構築するきっかけを掴むことが本講義の真の目的である。
・本科目は「表象文化」の科目群に位置づけられているが、本科目が重視する「現前性（presentation）」は「表象（representation）」概念の批判を含んでいることに注意すべきだろう。「現前性」にとって重要なのは、「「現場性」・「直接性」・「現在性」に特化した「パフォーマンス性（performativity）」であり、「いま・ここ」を最大限重視するアート作品に積極的に関与し、参加する態度であることを明記しておきたい。
・「表象文化概論」（特に、森村担当分「現代視覚文化論」）も合わせて受講することで、「パフォーマンス・スタディーズ」や「パフォーマンスの美学」という考えが、いわゆる視覚重視の「表象文化」を批判する視座をもつことを確認してもらいたい。

【お知らせ】
・「パフォーマンスの美学」という科目は、授業担当者（森村）の他の科目との関連が強くないよように思われるかもしれません。しかし、実は深いところで、他の科目と関わっているため、他の科目と併せて受講することをお勧めします。
1.「文化情報学概論」は、科目名からも近しいように、「文化情報学」の基礎を学ぶ科目です。そこでは、テクノロジーが情報社会と密接に関わっている点を、〈ヴァーチャル社会〉という観点から哲学的に捉えていきます。〈ヴァーチャリティ〉と〈リアリティ〉の関係が深く関わっており、身体を媒介する「パフォーマンス」と2Dの世界観がどのように関わるか学ぶことができます。
2.「こころとからだの現象学」では、私たちの「こころ」と「からだ」に着目することによって、私たちの〈外〉にある〈ヴァーチャル社会〉と身体とその表現の問題を哲学的に考えていきます。
3.「現代思想」では、「生まれてこないほうがよかった」という反出生主義を哲学的に考えていきます。そこでは、誕生や死について身体を含めて取り上げていきます。
4.ILAC科目「倫理学」では、身体によるパフォーマンスや言葉によるパフォーマンスが「暴力」として発現する可能性があることを倫理学・道徳哲学からアプローチします。
5.ILAC科目「倫理学Ｌ」では、「ケアの倫理学」という観点から、さまざまなパフォーマンスが「ケア」として倫理的問題を引き起こすことなどについても考察していきます。

【Outline (in English)】
Course Outline
The purpose of this course, "Aesthetics of Performance," is to consider all forms of expression as a kind of "performance" and to philosophically examine the "beauty" inherent in it. Therefore, by expanding the concept of "performance", not only "physical expression", but also works of art and objects (objet) that express thoughts will be considered as a kind of "performance" or "result of performance".
Therefore, "fine art," design, poetry, and other works of literature and art that do not generally belong to the so-called "performance art" as artistic expressions are also regarded as a kind of performed expression, and the "beauty" and "aesthetics" found in them are philosophically discussed.
In addition, art movements and expressive activities such as the so-called "avant-garde art" and "experimental art", which are not covered in conventional school education for political, ideological, or religious reasons, will also be considered as "performance".

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

現代美術論

平野　真弓

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：受講希望者が1000人を超えた場合、抽選を行います。抽選方法については学習支援システムを通じて連絡しますので、よく確認をしておいてください。

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ダ〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
今日の現代美術の世界は、様々な分野の最先端の芸術の分野（美術、建築、音楽、パフォーミングアーツ、映像、詩など）が複雑に交差しながら形成されています。この講義では、現代美術の多様性に焦点を当て、理論と実践の両面から探求します。現代美術のコンテクストを社会学、人類学や科学など他の領域かと対比しながら分析し、その中で多文化主義・関係性・コミュニケーションなどのテーマを読み解いていきます。こうしたアプローチを通じて、現代美術がどのように社会的、文化的な変化と相互作用しているかを深く理解するための基盤について学びます。学と比較参照し、多文化・関係性・コミュニケーションなどをキーワードに読み解いていきます。

【到達目標】
講義では、現代美術と関連のある芸術分野についても扱い、様々な芸術の分野における実験的なアプローチを検証し俯瞰することで、それらの考え方、アイディアについての理解を深めます。
みなさんには馴染みの薄い分野であると思いますので、最初に美術史や美術理論の基本的な知識を確認します。また、講義の間にワークショップ（感覚的、体験的に学ぶこと）を行い、より理解を深めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義映像や資料などの授業コンテンツをGoogle sites全て掲載して一定期間公開し、それをみながら授業を受講してもらうオンデマンド方式にします。
授業当日の流れ（重要）
1.指定された公開日に、Google Classroomにその日の学習内容を掲載した資料（Google sites）のリンクを掲載する。
2.資料を見ながら学習を進める。（当日であれば、授業時間外に学習しても構いません。）
3.Google Classroomに授業に関連した小テストや授業内レポートのリンク（Google Forms）が掲載されているので、回答して提出する。
4.授業内容に関する質問については、Google Formsに書き込んでおくと回答します。
授業の方法
授業時間になるとGoogle Classroomを通じて必要なリンク先や課題の提出について公開します。公開したウェブサイトに授業に関連したテキストや授業概要の映像（YouTube、40- 60分程度）、必要な画像やウェブサイトのリンク先などが掲載されていますので、そのサイトを見て学習を進めてください。ウェブサイトは年度末まで公開しておきます。
課題
受講後、Google Formで小テスト、もしくは簡単なレポートを提出してもらいます。提出期間は授業終了後数日程度です。
評価
実習課題とレポートの提出をもって出席とし、採点を行います。
質問・相談
一般的な質問や相談についてはGoogle Classroomを使ってください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 授業計画について	講義内容について 授業の進め方と方法について 評価方法と基準
第2回	メディアとアート 絵画・彫刻・ドローイング、写真・映像・インスタレーション	美術における様々な技法やメディアの探究について、その発展と変遷を詳細に考察します。この授業ではメディアの歴史的変遷と共に、アバンギャルドの時代から現代までの現代美術について学んでいきます。美術の歴史的なコンテクストの中で、異なる技法やメディアがどのように位置付けられ、進化してきたのかについて、探究していきます。
第3回	20世紀の美術 未来派・ダダ、シュルレアリスム 、アクション、ハプニング、ポップアート、 コンセプチュアル・ミニマルアート	第一次世界大戦前後のアバンギャルド芸術運動（前衛芸術）である未来派、ダダイズム、シュルレアリズムについて学びます。第二次世界大戦で壊滅的なダメージを受けたヨーロッパに代わり、経済力を背景にアメリカが現代芸術の中心地となりました。60年代以降には、概念的なアートや、ハプニング、ランドアートのような従来の絵画や彫刻にとらわれない表現様式が多く登場します。これらの表現は、芸術の領域に現代的な多様性をもたらしました。
第4回	21世紀の美術 新表現主義、YBA、関係性の美術 、ソーシャリー・エンゲージドアート	1980年代に、アメリカのコマーシャル・ギャラリーから生まれたムーブメント、「新表現主義」について学びます。新表現主義は、表現主義的なスタイルを追求し、絵画における感情的な表現と物質的な豊かさを再評価しました。また、ミレニアム前夜には、イギリスやフランスを中心に、二つの重要な芸術運動が登場しました。「ヤング・ブリティッシュ・アーティスト（YBA）」と呼ばれる運動で、若手アーティストの作品が国際的な注目を集めました。「リレーショナル・アート」は観客との関係性や環境との対話を重視することで、芸術の社会的な役割を再考しました。2010年代には「ソーシャリー・エンゲージド・アート」と「ソーシャル・プラクティス」という、社会的な関与をテーマにした芸術運動が注目を集めています。これらは芸術を社会問題に関与させ、社会的な変化を促すことに焦点を当てています。
第5回	ワークショップ1 単元のまとめ・ワークショップ	メディアとアート、20世紀の美術、21世紀の美術 の講義内容の確認をします。

第6回	現代アートとパフォーマンス1 パフォーマンス・アートの始まり／アクション、ハプニング、インスターション	パフォーマンス・アートは身体を用いて時間的な経過と共に行われる表現行為です。1960年代にアラン・カプローが「ハプニング」、また前衛音楽家のジョン・ケージは「イベント」という言葉を使って芸術の常識を破ろうとしました。70年代からは主にパフォーマンスアートと呼ばれるようになります。
第7回	現代アートとパフォーマンス2 社会と関わるアート／ビデオパフォーマンス、エンデュランスアート、テクノロジーとパフォーマンス、芸術と社会、委託されたパフォーマンス	ソーシャリー・エンゲージド・アートのような社会に対する直接的なアプローチのみならず、どのような時代の芸術作品もその作品が作られた社会と深く結びついています。各時代の社会と関わるアートに関する事例について学んでいきます。
第8回	身体とパフォーマンス パフォーミング・アーツ、バレエ、モダンバレエ、モダンダンス、コンテンポラリーダンス、舞踏	パフォーミング・アーツは視覚芸術であるファインアーツに対して演劇やダンスなどの舞台芸術、行為・アクションによって成立する芸術という意味で使われています。バレエに始まる近代ダンスの変遷、また現代演劇についても触れます。
第9回	音とパフォーマンス 現代音楽 ミュージック・コンクレート、フルクサス、ミニマル・ミュージック	シェーンベルクに始まり、ミュージック・コンクレート、ジョン・ケージの偶然性の音楽、ミニマルミュージックを経て現代に至る現代音楽の流れを美術の世界と比較しながら学んで行きます。
第10回	言葉とパフォーマンス ビート・ゼネレーション、スポークン・ワード、ラップ・ミュージック	シュルレアリスムやコンセプチュアルアートなどのテキストによる美術表現や言葉を使ったパフォーマンスアートと、ポエトリーリーディング/スポークンワードなどの現代詩の世界を比較します。
第11回	ワークショップ2 単元のまとめ・ワークショップ	現代美術とパフォーマンス1、現代美術とパフォーマンス2、身体とパフォーマンス、音とパフォーマンス、言葉とパフォーマンスの講義内容の確認をします。 ワークショップ・パフォーマンス
第12回	アートのある場所 美術館、国際展、アーティスト・イン・レジデンス、アート（アーティスト）・コレクティヴ、オルタナティブスペース	アートの生まれる場所について、美術館・国際展のような公的な場所、そしてアーティスト・イン・レジデンス、アーティスト・コレクティヴやオルタナティブスペースなど。それぞれの場所とそれに関わる人々について学びます。
第13回	批評/キュレーション 批評、モダンアートとコンテンポラリーアート、キュレーション	キュレーターは学術的な専門知識によって美術資料の収集や保管、展覧会の企画や構成、運営などを担当します。また、作品の理解や価値判断に関する美術批評のあり方について学びます。
第14回	ワークショップ3 単元のまとめ・ワークショップ	美術のある場所、批評/キュレーションの授業内容の確認をします。 ワークショップ・スライス・オブ・ライフ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Google sitesで配信する授業コンテンツには、学習を深めるためのウェブサイトのリンクが多く紹介されていますので、興味のあるものについては閲覧することをおすすめします。また、大学の近くには美術館やギャラリーが多くあります。可能であれば企画展、常設展などの展覧会などを多く鑑賞してください。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Google sitesを通じて授業に必要な資料を配布します。いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】
山本浩貴『現代美術史-欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
デイヴィッド・コッティントン（著者）、松井 裕美（翻訳）『現代アート入門』名古屋大学出版会、2020
小崎哲哉『現代アートとは何か』河出書房新社、2018年
『改訂版 西洋・日本美術史の基本 美術検定1・2・3級公式テキスト』美術出版社、2014年
『続 西洋・日本美術史の基本』美術出版社、2016年
『新・アートの裏側を知るキーワード』美術出版社、2022年

【成績評価の方法と基準】
成績評価については、平常点（授業への取り組み）、課題とレポートの合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　課題とレポート（50%）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
普段触れることの少ない現代芸術に関する専門的な内容の講義やワークショップになりますので、とてもやりがいがあると思います。ワークショップではスケッチによるプランや写真作品など簡単な実践に取り組みますが、受講される皆さんは例年課題について積極的に取り組まれているようです。楽しく解りやすい授業を心がけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のためにGoogle classroomを使いますが、履修に関する情報については学習支援システムを併用しますので、よく確認しておいてください。

【その他の重要事項】
受講希望者が1000人を超えた場合、抽選を行います。抽選方法については学習支援システムを通じて連絡しますので、よく確認をしておいてください。
実務経験のある教員による授業
平野真弓はフィリピン・マニラ在住のキュレーター・リサーチャーです。フィリピンを中心に東南アジアの展覧会史やキュレーションにまつわる思想や実践方法を研究しています。実践と研究活動で得た知識と経験を毎回の講義に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
This course is about contemporary art theory and practice.
Today’s contemporary art world is formed by the complex intersection of state-of-the-art (e.g. art, architecture, music, performing arts, images, poetry,) in various fields.
The context of contemporary art will be interpreted using keywords such as multiculturalism, relationships and communication as keywords.
Learning Objectives
The lecture will also deal with art fields related to contemporary art, and by examining and taking a bird’s-eye view of experimental approaches in various art fields, we will deepen our understanding of those ideas.
It seems unfamiliar to everyone, so check the introductory art history and art theory knowledge. In addition, we will hold workshops (learning sensuously and experientially) between lectures to deepen understanding.

Learning activities outside of the classroom
The content delivered on the Google site contains many website links to deepen your learning, so we recommend browsing the ones that interest you. There are also many museums and galleries near the university. If possible, depending on the infection status of the new coronavirus, please watch exhibitions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades will be evaluated based on the total of class activities, assignments and reports. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Issues and reports (50%)
See rubrics for specific assessment guidelines.
Based on this grade evaluation method, those who have achieved 60% or more of the achievement target of this class will be accepted.

LIT300GA（文学 / Literature 300）

世界の中の日本文学

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、一つの国、一つの言語、一つの文化に限定されない国境を越えた文学について学びます。さまざまな作家・作品を読みながら、日本文学における世界/世界文学における日本について考えます。また、現代小説を分析しながら世界における日本文学の位置付けについて考え、現代社会を考察するための視座を身につけます。

【到達目標】
1）現代日本文学についての基礎的な知識を身につける。
2）日本文学のテクストを分析できるようになる。
3）文学と社会の関連性について学び、世界から見た日本/日本から見た世界について自分の考えをまとめられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義形式で進めます。グループディスカッションも行います。
フィードバックは、寄せられた課題やコメントに対して授業内で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業計画について説明を行う。
第2回	移動する文学	バイリンガルな文学について考える。
第3回	バイリンガルな文学：多和田葉子	多和田葉子の作品を取り上げる。
第4回	バイリンガルな文学：水村美苗	水村美苗の作品を取り上げる。
第5回	移動する女性作家たち	須賀敦子の作品を取り上げる。
第6回	李良枝を読む	李良枝の作品を読んで、ディスカッションを行う。
第7回	温又柔を読む	温又柔の作品を読んで、ディスカッションを行う。
第8回	中間試験	第7回授業までの内容をまとめ、知識の習得を確認する授業内試験を行う。
第9回	文学における震災	震災文学論について考える。
第10回	多和田葉子と川上弘美の震災文学	多和田葉子、川上弘美の作品を取り上げる。
第11回	川上未映子の震災文学	川上未映子の作品を読んで、ディスカッションを行う。
第12回	世界における日本文学（1）	日本国外における村上春樹文学のブームや村田沙耶香の小説の翻訳とその受容について考える。
第13回	世界における日本文学（2）	松田青子、小山田浩子、柚木麻子らの小説の翻訳やその受容について考える。
第14回	期末試験	第9回〜第13回授業までの内容をまとめ、知識の習得を確認する授業内試験を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読む、授業内で示される課題（リアクション・ペーパー）対応など、準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要に応じてPDFでテキストを配布します。

【参考書】
辛島デイヴィッド『Haruki Murakamiを読んでいるときに我々が読んでいる者たち』（みすず書房、2018年）
辛島デイヴィッド『文芸ピープル「好き」を仕事にする人々』（講談社、2021年）
木村朗子『震災後文学論 ―あたらしい日本文学のために』（青土社、2013年）
木村朗子『その後の震災後文学論』（青土社、2018年）
木村朗子、アンヌ・バヤール＝坂井（編）『世界文学としての〈震災後文学〉』（明石書店、2021年）
郭南燕（編）『バイリンガルな日本語文学―多言語多文化のあいだ』（三元社、2013年）
鴻巣友季子『なぜ日本文学は英米で人気があるのか』（早川書房、2025年）
新・フェミニズム批評の会（編）『現代女性文学論』（翰林書房、2024年）
高橋源一郎、斎藤美奈子『この30年の小説、ぜんぶ一読んでしゃべって社会が見えた』（河出新書、2021年）
山出裕子『移動する女性たちの文学―多文化時代のジェンダーとエスニシティ』（御茶の水書房、2010年）

【成績評価の方法と基準】
グループワーク、ディスカッション、リアクションペーパー：20%
中間試験：30%
期末試験：30%
期末レポート：20%
毎回出欠を取ります。3回以上欠席があると失格になり、単位不認定になります。
15分以上遅れる場合、欠席扱いとなります。

【学生の意見等からの気づき】
授業内容の理解を深めるためにグループディスカッションが効果的だという意見が多かったため、引き続きグループで作品分析の時間を儲けたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
レポート作成のためのパソコン。

【その他の重要事項】
基本的に教授言語は日本語ですが、英語の参考文献を紹介することもあります。

【Outline (in English)】
This course is designed to enhance students' understanding of contemporary society through literature. In this class, we will learn about literature that transcends national borders and is not limited to one country, one language, or one culture. While reading various authors and their works, we will consider the world in Japanese literature and Japanese literature in the world.
Learning objectives:
By the end of the course, students should be able to do the following:
a) Have basic knowledge of contemporary Japanese literature.
b) Analyze texts of Japanese literature.
c) Understand the relationship between literature and society.
Learning activities outside of the classroom:
Students are required to read the reference material by the next session and submit comments sheets (one to three hours for every session).
Grading criteria/Policy:
The final grade will be decided based on the following:
Discussion and participation (comment sheets, involvement during discussion): 20%
Active participation in class is required. Submit your comments via Hosei University Learning Management System at the end of each session.
Attendance will be taken every time. You will not receive credit for the course if you miss more than three classes.
Midterm exam: 30%
Final exam: 30%
Final essay: 20%

LANj300GA（日本語 / Japanese language education 300）

【2026年度休講】世界の中の日本語

大野　ロベルト

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：受講は先着500名までとする。
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
外国語を学んだつもりがど忘れし、海外の文化に触れたつもりですっぽ抜ける。現代社会でおなじみのこの悲喜劇の一因は、そもそも日本語と日本文化に対する理解の浅さに起因するのではないか。言葉や文化はどのように出来上がり、どのように相関するのか。この授業では幕末から二十世紀末までの日本語を、近代文学を素材として、主に海外との応答関係のなかで見つめてみたい。原典のみならず英訳されたテクストにも目を向け、必要に応じて外国文学との比較にも供してみる。また、古典文学との比較などを行いながら、日本の近代性についても検討する。講義は春学期に開講される「日英翻訳論」と響き合う内容となっている。

【到達目標】
比較的な視点に立つことで、自国の言語や文化を海外のそれと横並びに眺めたうえで、客観的な評価を加え、それを言語化できるようになる。文学作品を深く読み解く技術が身につき、英語のテクストに触れることで、語学的な運用能力も向上する。現代言語学を中心とする文学理論の知識が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
リアルタイムでの作業を伴わない、フルオンデマンド形式のオンライン授業として実施する。このため講義が中心となるが、随時リアクションペーパー提出を奨励している。これらについては学習支援システムを通じてフィードバックを行い、必要に応じて講義内でも紹介する。成績判断の主な材料としては、中間レポートと期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明し、日本語の特徴について考える（日本語はどのような言語なのか）。
2	日本語らしさ	「月がきれいですね」を出発点に、日本語にまつわる神話を解体する（日本語は愛せない言語である）。
3	外国語と日本語１	夏目漱石の活動を中心にとりあげ、明治時代の日本語を考える（日本語は借りものの言語である）。
4	外国語と日本語２	中原中也を中心にとりあげ、近代日本の詩歌について考える（日本語は創造的な言語である）。
5	日本語を書く	永井荷風を中心にとりあげ、日本語における書記行為を考える（日本語は組み合わせ自由な言語である）。
6	日本語を聞く	泉鏡花を中心にとりあげ、日本語における「声」について考える（日本語は多声的な言語である）。
7	日本語と影	谷崎潤一郎を中心にとりあげ、日本語の美意識について考える（日本語は光と影のある言語である）。
8	日本語と音	宮沢賢治を中心に、擬態語や擬声語について考える（日本語は音楽的な言語である）。
9	日本語と私	太宰治を中心に、私小説の問題をとりあげる（日本語は私を語る言語である）。
10	世界と日本語１	川端康成を中心に、日本語における伝統への意識を考える（日本語は美しい言語である）。
11	世界と日本語２	三島由紀夫を中心に、世界文学としての日本文学のあり方を考える（日本語は世界的な言語である）。
12	世界と日本語３	大江健三郎を中心に、「個人的」なものとしての日本文学を考える（日本語はあいまいな言語である）。
13	日本語の消失	野口米次郎、牧野信一などをとりあげ、言葉の「息苦しさ」を考える（日本語は寂しい言語である）。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえりつつ、「未来の日本語」について想像してみる（日本語は楽しみな言語である）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の講義のテーマとなるテクストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
授業中に折に触れて紹介するが、以下を挙げておく。
小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』NHKブックス、1998

【成績評価の方法と基準】
平常点10％、中間レポート40％、期末レポート50％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
講義で取り扱う作品やテーマが多岐にわたるので、情報過多にならぬよう、無駄を削ぎ落とすことを心がけたい。

【Outline (in English)】
One cannot fathom the qualities of foreign language and culture without the set of skills nurtured through learning one's native language and culture. In this course, students will read works of literature produced from the late 19th century to the late 20th century while paying attention to how they contribute to the overall uniqueness of the Japanese language. To survey different works spanning across decades of modern Japan, and to demonstrate the findings in forms of written assignments and final paper, will be the objective of this course. The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 10% participation, 40% mid-term paper, and 50% final paper. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIT300GA（文学 / Literature 300）

【2026年度休講】日英翻訳論

大野　ロベルト

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：受講は先着500名までとする。

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
英訳を通して日本語に触れることは、ときに日本語のみを媒介とするよりも明瞭に、日本語の実像を描き出してくれる。その果てに見えてくるのは日本語に特有のもの、すなわち日本語のエッセンスであるから、実はこの授業のタイトルは「日英翻訳不可能論」とすべきである。この授業では、とくに「裸」の状態に近い日本語に触れるために、古典の英訳を中心にとりあげる。講義は秋学期に開講される「世界の中の日本語」と響き合う内容となっている。

【到達目標】
英語の運用能力が向上すると共に、受験勉強の「負の遺産」をなげうち、自由なアプローチで古典本来の味わいを楽しめるようになる。現代言語学を中心とする文学理論の知識が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
リアルタイムでの作業を伴わない、フルオンデマンド形式のオンライン授業として実施する。このため講義が中心となるが、随時リアクションペーパー提出を奨励している。これらについては学習支援システムを通じてフィードバックを行い、必要に応じて講義内でも紹介する。成績判断の主な材料としては、中間レポートと期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明し、翻訳とは何かについて考える。
2	日本的なるもの	「もののあはれ」の概念を素材に、前回に引き続き翻訳について考える。
3	詩歌を翻訳する１	俳句の翻訳について考える。
4	詩歌を翻訳する２	和歌の翻訳について考える。
5	日本語の淵源１	『古今和歌集』の序文を参考に、日本における詩歌の位置について考える。
6	日本語の淵源２	『万葉集』などを材料に、日本語の「成立」について考える。
7	物語の誕生１	『伊勢物語』をとりあげ、物語と文化の関係について考える。
8	物語の誕生２	『土佐日記』をとりあげ、母国語と外国語の関係について考える。
9	私を書く１	『枕草子』を素材に、言語と自我の関係について考える。
10	私を書く２	『徒然草』を素材に、自己と他者の関係について考える。
11	社会を描く１	『方丈記』をとりあげ、現実とフィクションの問題について考える。
12	社会を描く２	『無名草子』をとりあげ、言語とジェンダーについて考える。
13	日本語的なるもの	古典と向き合った翻訳者たちの姿から、彼らの見た「日本像」を探る。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえりつつ、近現代の日本語に起こった変化について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の講義のテーマとなるテクストについては、日本語の原典と英訳を事前に丁寧に読み比べ、単語の意味などについては事前に調べておくこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
授業中に折に触れて紹介するが、以下を挙げておく。
クリステワ『心づくしの日本語』ちくま新書、2011

【成績評価の方法と基準】
平常点10％、中間レポート40％、期末レポート50％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
オンデマンド授業の特性を活かしつつ、対面と比較して遜色のない、臨場感ある講義を心がけたい。

【Outline (in English)】
This course invites the students to survey the essence of the Japanese language by reading classical texts translated into English. In order to truly discover Japan, it is essential to look for things that are left untranslated.
To appreciate various works spanning across centuries of Japanese classical period, and to demonstrate the findings in forms of written assignments and final paper, will be the objective of this course.
The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 10% participation, 40% mid-term paper, and 50% final paper.　Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIT300GA（文学 / Literature 300）

実践翻訳技法

深谷　公宣

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：受講者の人数制限および選抜もありうる。
その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
完璧な翻訳は存在しない。だからこそ、翻訳は楽しい。この授業では、英語（など）を日本語に、日本語を英語（など）に置き換えることをひたすら繰り返しながら、言葉の仕組みについて学び、またその仕組みが文化ごとにどのように異なるのかを考える。なお、本授業はあくまでも言葉についての理解を深めるための授業であり、職業的な翻訳家の養成を目指すものではないが、そのような志望をもつ学生にとっても有益な内容であることは言うまでもない。

【到達目標】
日本語と英語を中心に、言語の仕組みや文化との相関について理解し、具体的な言葉で説明できるようになる。翻訳はもちろん、比喩などの文彩についても学び、実践を重ねることで、言語運用能力の本質的な向上を図る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎回のテーマに沿った簡単な講義のあと、個人やグループで翻訳課題に挑戦し、その成果を発表してもらう。教員やクラスメイトからの講評を受けて、ディスカッションを繰り返しながら理解を深めてゆく。また授業外の時間を使って、個人での翻訳プロジェクトを進めてもらう。具体的には、ある程度の分量のテクストを翻訳し、推敲を重ね、一つの作品に仕上げることになる。
2026年度は、授業担当者が学生時代に教えを受けた安西徹雄氏と須賀敦子氏の著作を教材に取り上げる。各回授業の前半は『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』（安西徹雄・著、バベル・プレス）の解説と演習をおこない、後半は『大司教に死来る』（ウィラ・キャザー・著、須賀敦子・訳、池澤夏樹・監修、河出書房新社）の訳文を検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明 教材と著者の業績紹介
2	翻訳英文法（１） 『大司教に死来る』（１）	翻：名詞の中に文を読め／主語を表わす所有格 大：Book Nine １の須賀訳を検討
3	翻訳英文法（２） 『大司教に死来る』（２）	翻：目的語を表わす所有格／of + 名詞（主語を表わす場合） 大：Book Nine ２の須賀訳を検討
4	翻訳英文法（３） 『大司教に死来る』（３）	翻：無生物主語の構文／"A Good Swimmer"の型 大：Book Nine ３の須賀訳を検討
5	翻訳英文法（４） 『大司教に死来る』（４）	翻：人称代名詞、指示代名詞／反復を避けるためのThat, One 大：Book Nine ４の須賀訳を検討
6	翻訳英文法（５） 『大司教に死来る』（５）	翻：関係代名詞（１）（接続詞を補う）／関係代名詞（２）（分解する） 大：Book Nine ５の須賀訳を検討
7	翻訳英文法（６） 『大司教に死来る』（６）	翻：形容詞・副詞を述語に（Many, Some）／文修飾の副詞 大：Book Nine ６の須賀訳を検討
8	翻訳英文法（７） 『大司教に死来る』（７）	翻：形容詞を副詞に（All, Every, Each）／比較級・最上級 大：Book Nine ７の須賀訳を検討
9	翻訳英文法（８） 『大司教に死来る』（８）	翻：否定のからんだ比較表現／as ... asの構文 大：Book Nine ８の須賀訳を検討
10	翻訳英文法（９） 『大司教に死来る』（９）	翻：受動態（１）（自動詞を使って能動態に）／受動態（２）（By〜を主語にして能動態に） 大：個人プロジェクトの報告（１）
11	翻訳英文法（１０） 『大司教に死来る』（１０）	翻：受動態（３）（暗示されたby〜を主語にして）／受動態（４）（受動態のまま） 大：個人プロジェクトの報告（２）
12	翻訳英文法（１１） 『大司教に死来る』（１１）	翻：仮定法（１）（主語に仮定のふくまれている場合）／仮定法（２）（副詞句に仮定のふくまれている場合） 大：個人プロジェクトの報告（３）
13	翻訳英文法（１２） 『大司教に死来る』（１２）	翻：話法（１）（直接話法を生かす）／話法（２）（直接話法を掘り起こす） 大：個人プロジェクトの報告（４）
14	授業のまとめ	プロジェクトの振り返り／授業の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文学を中心に活字に触れる習慣をつけ、言葉への感度を高める。個人プロジェクトは授業時間外に責任をもって進めること。本授業の準備学習・復習時間は週４時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要な資料は教員が配布する。ただし使い慣れた辞書は必須。紙・電子・アプリなど、形態は問わない。

【参考書】
主要教材
・安西徹雄『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』（バベル・プレス）
・ウィラ・キャザー著、須賀敦子訳、池澤夏樹監修『大司教に死来る』（河出書房新社）
・Cather, Willa. Death Comes to the Archbishop. Penguin Vitae.
参考書
・安西徹雄『英文翻訳術』（ちくま学芸文庫）
・須賀敦子『須賀敦子が選んだ日本の名作 60年代ミラノにて』（河出文庫）

【成績評価の方法と基準】
毎回のクラス内の課題50％、個人プロジェクト50％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
・受講者の人数制限および選抜もありうる。
・発表・ディスカッションに積極的になれない者は履修しないこと。

【Outline (in English)】
This course invites the students to participate in the rigorous yet fulfilling challenge of translation. Students are to tackle different assignments each week to appreciate various aspects of language and its relation to culture, while working on their own projects outside the classroom that are to be handed in by the end of the term.
Students will be able to renew their knowledge on language and how it relates to each culture. This class offers an opportunity to vastly improve the command of both English and Japanese, by working individually and in groups.
The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting, and working on their individual projects.
The grading criteria is as follows: 50% weekly in-class assignments, 50% individual project. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

ARSe200GA（地域研究（東アジア） / Area studies(East Asia) 200）

中国の文化Ⅰ（現代中国社会）

張　勝蘭

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義は、現代中国社会に関する基礎知識を習得し、歴史・政治・経済・民族・文化などの側面から、現代中国を総合的に理解することを目的とする。現代中国の社会と文化の多様性に加え、日本を中心とする東アジアとの繋がりにも注目し、多角的視点から思考を深める。
具体的には、社会の各側面や文化的現象を取り上げ、その背景となる歴史的・政治的・経済的要因や日中関係について解説する。
個別のトピックを通じて、固定的なイメージにとらわれない、等身大の中国社会を理解することを目指す。

【到達目標】
①現代中国社会に関する基礎知識を習得する。
②現代中国社会に関する重要な事柄について、多角的視点から根拠に基づいて考察し、自らの見解を論理的に説明できるようになる。
③等身大の中国を知り、中国に関するマスメディアの情報を客観的かつ多角的に捉える力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義では、歴史・政治・民族・経済・社会構造・教育・環境・文化・日本と中国の関係といった観点から、現代中国社会の現状と変化を概観する。
一般民衆の暮らしに焦点を当て、社会の変容や価値観の変化について考察を行う。
質問の受付および課題へのフィードバックは、授業内のほか、学習支援システムおよびメールを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	「現代中国社会」のアウトラインを説明し、行政区分・地域区分とその特徴、多民族の状況といった予備知識を紹介する。併せて授業の進め方、シラバスの使い方、成績評価について説明する。
第2回	歴史： 中華人民共和国の成立とその後の歩み	現代中国社会を理解するために、まず「中国とは何か」という問いを出発点として、その歴史的背景に触れた上で、中華人民共和国成立の経緯、及び成立後から現在に至るまでの歴史を概観する。
第3回	政治： 多民族国家ー中国	多民族国家である中国社会を理解するために、国家統合においてきわめて重要な民族問題について知っておく必要がある。「民族識別」工作や「民族区域自治」制度、「優遇政策」に焦点をあて、それらが民族間関係にどのように関わってきたのかを考察する。
第4回	民族①： マジョリティーの漢族について－少数民族社会との関わりから	現代中国社会を理解するには、まず中国総人口の九割以上を占める漢族を理解することが不可欠である。中国社会における漢族とは何かについて整理したうえで、漢族のサブグループとされる客家人を事例として取り上げ、少数民族社会との関わりについても検討する。
第5回	民族②： 漢族の伝統文化と多様な地域性	漢族の主な伝統文化について、衣・食・住の側面から整理し、そこにみられる多様な地域性について講義する。
第6回	経済： 改革開放と経済格差	中国経済の大転換である改革開放政策の実施を概観し、それに伴って生じた内陸部・沿岸部、都市部・農村部の経済格差の拡大について講義する。併せて三農問題、出稼ぎ者、留守児童、ポイント制度といった具体的な事例に焦点を当て、社会の構造的課題について考察する。
第7回	社会構造： 拡大する「中間層」の実態	経済発展と共に形成されてきた「中間層」（中等収入者）の実態、そして、彼らは海外との接触などにより、人権意識をはじめとする社会的政治的意識の変化について講義する。
第8回	教育： 超学歴社会と教育格差	現代中国は熾烈な学歴社会となっており、教育をめぐる格差が拡大しつつある。進学をめぐる競争、若者の就職難といった問題を通じて、その背景と実態について考察する。
第9回	環境： 南・北の違いと「南水北調」	中国の多様な風土や地域差に着目し、それらが社会に与えた影響について考える。経済発展と共に喫緊の課題となっている「水資源問題」について、「南水北調」プロジェクトを事例として取り上げ、考察する。
第10回	文化①： 「80後」・「90後」・「00後」の「新人類」文化から見る日中交流	1980年代、1990年代、2000年代に生まれの、いわゆる「新人類」と呼ばれる世代の文化に注目する。特にアニメ・コスプレなどのサブカルチャーを通して、中国と日本の間で生まれている新たな文化交流のあり方について講義する。
第11回	文化②： 中国の言語文化	漢語から少数民族の言語に至るまで中国における多様な言語文化を概観する。併せて、現代の世相や社会状況を反映する「新語」などにも注目し、言語と社会の関係について講義する。

第12回	日本と中国①：近代の日中関係	近代における日中関係の形成過程を、西洋との接触という国際環境の変化を背景に考察する。「開国」した日本が「和魂洋才」を掲げ、和製漢語を通じて西洋文化を吸収していった。「開港」した中国は「中体西用」を基本方針とし、西洋文化との距離を保とうとした。こうした対応の違いのもとで、日本と中国の間に様々な対立が生じる一方、多くの協力関係も形成された。中国社会の近代化における日本の影響について考察する。
第13回	日本と中国②：戦争から国交正常化・日中協力へ	日中戦争を経て、日中関係が長く凍結された後、1972年に国交正常化が実現した。その後、1978年から中国では経済の大転換となる「改革開放」政策が実施され、日本はその過程において重要な役割を果たした。戦争の記憶を含め、この時期の日中関係が中国社会にどのような影響を与えたのかについて考察する。
第14回	日本と中国③：戦略的互恵関係	改革開放を経て、世界第二の経済大国に成長した中国は、日本の最大貿易相手国となっている。また日本も中国にとって重要な貿易相手国である。両国は様々な問題を抱えながらも、戦略的互恵関係の構築を模索してきた。民間交流に注目し、現在の日中関係とそれが中国社会にどのような影響を与えているのかについて考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Hoppiiにアップロードされた講義資料を参照し、シラバスに記載された参考書および各回で提示する追加参考文献の該当箇所を読むことで、授業内容への理解を深める。

受講者は、各回につき事前・事後あわせておおむね2時間を目安に、関連知識の予習および授業内容の振り返りを行い、理解の深化に努める。また疑問点を整理し、まとめることが求められる。

【テキスト（教科書）】

特に定めない。毎回、事前に講義資料をHoppiiにアップロードする。

【参考書】

中国研究所編『中国年鑑』（2025年版）明石書店、2025年
エズラ・F・ヴォーゲル/益尾知佐子訳『日中関係史－1500年の交流から読むアジアの未来』、2019年
藤野彰編著『現代中国を知るための52章（第6版）』明石書店、2018年
富坂聡『中国の論点』角川oneテーマ21、2014 年
毛里和子/園田茂人編『中国問題－キーワードで読み解く』東京大学出版社、2012年
家近亮子・唐亮・松田康博編著『5分野から読み解く現代中国－歴史・政治・経済・社会・外交』（改訂版）晃洋書店、2009年
興梠一郎『中国激流－13億のゆくえ』岩波書店、2005年
また授業時に各テーマについての参考文献を適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

①現代中国社会に関する基礎知識が習得できているか。
②授業で扱った重要な現代中国社会の問題や文化事象を理解し、根拠に基づき論理的に説明できているか。
以上の2点に着目し、期末レポート（60％）、リアクションペーパー（20％）、受講態度（授業中の発言・質問）（20％）を用いてその到達度を総合して評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

授業の理解度を高めるため、音声・映像などのコンテンツを適宜活用する。私語等について注意を行い、受講者が授業に集中しやすい学習環境の維持に努める。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course introduces the changing values and lifestyle of Chinese people from viewpoints of politics, nation, economy, social structure, education, environment, culture, Japan-China relations to students taking this course.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to comprehensively understand the real China.
【Learning activities outside of classroom】
After each class meeting, participants will be expected to read the relevant chapter(s) from the text and write the reaction paper. Your required study time is two hours for each class meeting.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated according to the following process: term-end report（60％), reaction paper（20％）, and in-class contribution（20％）.

ARSe200GA（地域研究（東アジア） / Area studies(East Asia) 200）

中国の文化 II（多民族社会中国）

張　勝蘭

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国文明は、多様な風土のもとで、独自の歴史と文化を築いてきた様々な民族が、交流・衝突・融合を繰り返すなかで形成されてきた。
1949年中華人民共和国成立後、かつて400以上あるとされたエスニック・グループは、国家制度である「民族識別」によって、55少数民族として再編され、人口の90％以上を占める漢族とあわせて新たな「中華民族」という枠組みが提唱された。広大な領土に内包している複雑な民族間のせめぎ合いは、現代中国社会が抱える重要な課題である。
本講義の目的は、歴史および伝統文化の側面から中国における民族の多様性を理解するとともに、20世紀以降、国家統合を進める中で少数民族社会に生じた変化を検討することである。そのうえで、中国における国家と民族集団との関係、民族間関係、ならびに民族意識の現状について考察し、多民族社会としての中国を多角的に理解する力を養う。

【到達目標】
「民族」をキーワードとして中国社会を読み解く力を養う。特に、民族の多様性と国家統合との関係およびその現状について理解を深め、異文化理解・多文化共生の視座から中国社会を捉えることができるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義では、絶対多数を占める漢族をはじめ、西南部において内部に多様なサブグループを抱えるミャオ族、ならびに比較的高度な同一性を有する東北部のモンゴル族などを取り上げ、地域ごとの代表的な少数民族の歴史、社会、伝統文化について講義する。
これらの事例を通じて、辺境地域の人々がどのようにして独自の存在を維持してきたのかを検討し、政治的統一性と文化的多様性との関係に着目しながら、異文化理解および多文化共生のあり方について考察する。
質問の受付および課題へのフィードバックは、授業内およびHoppiiを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本講義「多民族社会中国」の全体像を説明するとともに、中国における多民族の状況を概観する。併せて、授業の進め方、シラバスの使い方、成績評価について説明する。
第2回	中国の民族識別と民族政策	中国の民族問題を理解するために、中国における「民族識別」工作とは何かを確認したうえで、現在の民族政策の内容について整理する。
第3回	マジョリティー：漢族①	中国全人口の9割以上を占めるマジョリティーである漢族について概観する。特に、「漢人」という名称の由来とその拡大過程、ならびに「漢族」という民族カテゴリーが形成されていくプロセスを考察する。
第4回	マジョリティー：漢族②	漢族の伝統文化について、秦漢時代にまで遡る「歳時風俗」を手がかりに講義する。そのうえで、地域差や生活様式の違いに着目し、現代における漢族の多様性を検討する。
第5回	西南地域の少数民族：ミャオ族①	中国南部を代表する少数民族であるミャオ族について、その歴史と伝統文化を概観する。あわせて、進化論・人種論に基づく「ミャオ族先住説」をめぐる議論を紹介し、近代国民国家の形成過程におけるミャオ族の位置づけについて考察する。
第6回	西南地域の少数民族：ミャオ族②	「着る史書」とも称されるミャオ族の伝統衣装に着目し、その歴史的変遷について講義する。あわせて、中国国内およびユネスコによる評価を踏まえ、衣装文化とミャオ族アイデンティティとの関係について考察する。
第7回	西南地域の少数民族：ミャオ族③	ミャオ族の伝統文化の「核心」とされる祖先祭祀を取り上げ、その代表的な形態を紹介する。そのうえで、中国国内でのナショナリズムの高まりや観光化、グローバル化の進展に伴い、祖先祭祀が新たな民族表象として展開していく状況を検討する。
第8回	西南地域の少数民族：ミャオ族④	ミャオ族の祖先祭祀の中でも特徴的な「敲牛祭祖」を事例として取り上げ、サブグループの次元から少数民族地域社会の内部多様性を具体的に検討する。
第9回	西南地域の少数民族：イ族	西南地域に居住する少数民族の多くが固有の文字を持たなかったのに対し、イ族（彝族）は独自の文字体系と社会制度を有してきた民族である。イ族の伝統文化を概観したうえで、現代中国におけるイ族の言語・文字教育の現状について考察する。
第10回	西南地域の少数民族：チベット族	仏教王国チベットの歴史とチベット族について概観したうえで、歴史的に見た中国とチベットの関係を整理し、現代におけるチベット問題について考察する。
第11回	西北地域の少数民族：ウイグル族	シルクロードの民として知られるウイグル族は、新疆ウイグル自治区に居住している。本回では、清朝期・民国期・中華人民共和国建国後における「新疆」の位置づけの変遷を整理したうえで、ウイグル族の伝統文化と現状について考察する。
第12回	西北地域の少数民族：回族	漢語を母語とする中国のムスリムである回族について紹介する。中国の少数民族の中で第三位の人口規模を有する回族は、その統一的な指標は身分証明書に「回族」と記載される点に限られるとも指摘されている。本回では、こうした特徴を踏まえ、回族の民族アイデンティティの形成過程を中心に考察する。
第13回	東北地域の民族：モンゴル族	「内モンゴル」と「外モンゴル」の歴史的展開を手がかりに、中国におけるモンゴル族の形成過程を理解し、その伝統と現状について講義する。
第14回	東北地域の少数民族：満族	中国最後の統一王朝である清朝を建国した満族を取り上げ、その歴史的形成過程、伝統文化、および現代における位置づけについて考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Hoppiiにアップロードされた講義資料を参照し、シラバスに記載された参考書および各回で提示する追加参考文献の該当箇所を読むことで、授業内容への理解を深める。
受講者は、各回につき事前・事後あわせておおむね2時間を目安に、関連知識の予習および授業内容の振り返りを行い、理解の深化に努める。また疑問点を整理し、まとめることが求められる。

【テキスト（教科書）】
特に定めない。毎回、事前に講義資料をHoppiiにアップロードする。適宜プリントも配布する。

【参考書】
費孝通編著（西澤治彦・菊池秀明・塚田誠之・吉開将人・曽士才共訳）『中華民族の多元一体構造』風響社、2008年
末成道男・曽士才編『世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在　01 東アジア』明石書店、2005年
毛里和子『現代中国の構造変動7　中華世界―アイデンティティの再編』東京大学出版会2001年
毛里和子『周縁からの中国―民族問題と国家』東京大学出版会、1998年
可児弘明・国分良成・鈴木正崇・関根政美編『民族で読む中国』朝日新聞社、1998年
松村一弥『中国の少数民族―その歴史と文化および現況』毎日新聞社、1983年
また授業時に各テーマについての参考文献を適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
①中国の多民族社会に関する基礎知識が習得できているか。
②授業で扱った代表的な民族を通して、中国における国家と民族集団との関係、民族間関係、ならびに民族意識の現状を理解し、根拠に基づき論理的に説明できているか。
以上の2点に着目し、期末レポート（60％）、リアクションペーパー（20％）、受講態度（授業中の発言・質問）（20％）を用いてその到達度を総合して評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】
授業の理解度を高めるため、音声・映像などのコンテンツを適宜活用する。私語等について注意を行い、受講者が授業に集中しやすい学習環境の維持に努める。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course introduces the ethnic diversity in China, especially focus on history, traditional culture and the changing values and lifestyle of them under the national integration of China to students taking this course.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to obtain basic knowledge about ethnic minorities in China, and also to be able to evaluate the relationship between ethnic diversity and national integration in China.
【Learning activities outside of classroom】
After each class meeting, participants will be expected to read the relevant chapter(s) from the text and write the reaction paper. Your required study time is two hours for each class meeting.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated according to the following process: term-end report（60 %), reaction paper（20 %）, and in-class contribution（20 %）.

HIS200GA（史学 / History 200）

中国の文化III（日中文化交流史）

鈴木　靖

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
二千年以上に及ぶ交流の中で、中国の人々は日本にどのようなイメージを持ってきたのか。各種文献や映像資料を通じて、古代から現在までの対日イメージの変遷を概観し、そこから何を学ぶことができるか考える。

【到達目標】
中国の人々の対日イメージがどのように変遷してきたのか、また、いかなる要因によって変化したかを歴史的に理解することにより、この隣国の人々とどのようにつきあっていくべきかについて、適切な判断ができる力を身につける。
By the end of the course, students will be able to:
Understand the reasons for the difference between how Japan sees itself and how they are perceived by China and Taiwan from a historical perspective.
Take appropriate actions to build good relations with both China and Taiwan.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業はスライドを使い、映像資料などを併用して行う。
課題などへのフィードバックは、授業中またはメールを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本人とは？	人類史の視点から“人種”、“民族”、そして“日本人”とは何かを考える 【キーワード】 ・分子人類学 ・日本人三重構造説
第2回	（1世紀〜6世紀）日本語文化圏“倭”の登場	縄文文化や弥生文化、古墳文化を築いた人々は、遺伝的にはアジア各地にルーツを持つ多様な集団であった。 彼らはやがて日本語を共通言語とする独自の文化圏「倭」を形成し、中国大陸や朝鮮半島との交流を開始する。 【キーワード】 ・漢委奴国王金印 ・稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣 ・江田船山古墳出土銀象嵌銘大刀 ・南朝梁蕭繹「職貢図」
第3回	（6世紀末）朝貢から外交へ	東海に浮かぶ一朝貢国に過ぎなかった倭は、隋がおよそ二百七十年ぶりに中国全土を統一したのを機に、使節を送り、対等な外交関係を求める。 【キーワード】 ・遣隋使 ・渡来人
第4回	（7世紀〜9世紀）遣唐使の時代	日本は中国の先進的な制度や文化を学ぶため、多くの優れた学生や学僧を中国に派遣する。彼らの勤勉で礼儀正しい行動は、中国の対日イメージを大きく変えていく。 【キーワード】 ・遣唐使 ・阿倍仲麻呂 ・鑑真
第5回	（9世紀〜13世紀）民間交流の時代へ	唐の衰退により遣唐使の派遣を停止した日本は、やがて独自の文化や技術を生み出していく。民間交流を通じて中国に輸出された日本の製品は、中国で高い評価を受ける。 【キーワード】 ・菅原道真 ・仮名文字 ・扇子
第6回	（13世紀〜14世紀）元寇	唐王朝の滅亡後、東アジアは征服王朝の時代を迎える。モンゴルがユーラシア大陸を席捲する中、日本も白村江の戦い以来の大規模な対外戦争＝元寇に襲われる。 【キーワード】 ・征服王朝
第7回	（15世紀〜16世紀）倭寇と遣明使	南北朝の争乱に始まった室町時代、日本を拠点する武装集団が朝鮮半島や中国沿海部を襲うようになる。東アジアの人々の対日イメージを180度変える最初の原因となった倭寇である。モンゴルを駆逐して漢民族王朝を復興した明は、倭寇対策のため民間貿易を禁じ、朝貢貿易への一本化を行う。 【キーワード】 ・「倭寇図巻」（東大史料編纂所所蔵） ・「明人抗倭図巻」（中国国家博物館所蔵）
第8回	（16世紀末）豊臣秀吉の朝鮮出兵	朝鮮半島や中国沿海部を襲った倭寇に続き、1592年から前後7年に及んだ豊臣秀吉の朝鮮出兵は、東アジアの人々に日本に対する負の記憶を刻み込む。朝鮮出兵の際、日本へ拉致された被虜人（捕虜）を通じて、朱子学が伝えられると、江戸幕府はこれを武士の正学と定め、平和で秩序ある社会を再構築した。また被虜人となった朝鮮の陶工たちは日本に磁器の生産技術を伝えた。
第9回	（20世紀初）魯迅と藤野先生	近代中国を代表する作家・魯迅が日本留学時代の恩師の思い出を書いた小説「藤野先生」。中国ではいまも中学校用教科書に収録され、毎年1600万以上の中学生がこの作品を通じて日中友好の大切さを学んでいる。 【キーワード】 ・藤野厳九郎 ・魯迅
第10回	（1920〜30年代）霧社事件	日清戦争の勝利により最初の植民地・台湾を獲得した日本。漢民族の抵抗運動を鎮圧し、植民地経営も軌道に乗ったと思われた1930年、山地に住む先住民が突如叛旗を翻した。「霧社事件」と呼ばれるこの戦いは、テレビドラマや映画を通じて、いまも台湾の人々に語りつがれている。 【キーワード】 ・ドラマ「風中緋桜」 ・映画「セデック・バレ」
第11回	(1930〜40年代)李香蘭が見た戦時下のポップカルチャー	1931年、日本軍現地部隊の謀略による満鉄爆破事件(柳条湖事件)を発端として、日中両国は十四年あまりにおよぶ戦争へと突入する。そうした中、旧満州(中国東北部)に生まれ、銀幕とステージを通じて、日中両国民から愛されたスターがいた。山口淑子、芸名・李香蘭である。彼女の眼を通して見た戦時下の日中関係について考える。 【キーワード】 ・李香蘭 ・平頂山事件 ・満州映画協会と中華電影
第12回	留用された日本人たち	終戦後、中国にいた日本の軍人や医療関係者、技術者の多くが、新中国建設のために「留用」された。留用された人々の証言を通じて、いまも中国で高く評価される日本人の事績について考える。 【キーワード】 ・「留用」された日本人

第13回	（1952～72）日中国交正常化と「二分論」	1937年から終戦まで8年に及んだ日中戦争は、戦場となった中国の人々の心に大きな傷を残した。一方、戦後の東西冷戦の中で、日本との早期講和を求めた中国政府は、「二分論」によって国民の理解を求め、72年の国交正常化を実現する。しかし、この「二分論」に対する日中双方の認識の違いが、やがて両国民の間に新たな対立を生じさせることになる。 【キーワード】 ・田中角栄 ・周恩来
第14回	（1972～現在）今日の日中関係	日中両国の関係にいまも影を落とす歴史問題、領土問題、台湾問題という三つを取り上げ、その原因と解決方法について考える。 【キーワード】 ・靖国問題 ・尖閣諸島（中国名・釣魚島）問題 ・台湾有事

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回授業の前に教材用ページの資料で事前学習を行う。本授業の準備学習時間は4時間を標準とする。
Students will be required to have completed the given, relevant assignments before each class. Study and class preparation will amount to at least four hours per class.

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しないが、事前学習の資料として、下記のページに資料を掲載しているので必ず参照すること。
https://hosei-ch.xsrv.jp/wp

【参考書】
①王勇『中国史のなかの日本像』（農山漁村文化協会、2000年）
②王暁秋著・木田知生訳『中日文化交流史話』（日本エディタースクール出版部、2000年）
③柳本通彦『台湾・霧社に生きる』（現代書館、1996年）
④服部龍二『日中国交正常化 - 田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』(中公新書、2011年)
⑤孫崎享『日本の国境問題』（ちくま新書、2012年）

【成績評価の方法と基準】
成績は以下の２つの基準をもとに評価する。
①毎回授業の後に提出するリアクション・ペーパーの内容（80％）
②期末レポート（20％）
これらの成績をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
Final grade will be calculated according to the following process:
1. Reaction papers(80%)
2. Term-end report (20%)

【学生の意見等からの気づき】
授業の復習に必要との要望があったため、授業用スライドのPDFを配布することにした。

【学生が準備すべき機器他】
授業用サイトを通じて資料の配布を行う。サイトへのアクセス方法は、第一回授業の中で説明する。

【Outline (in English)】
How does Japan's self image differ from the ideas and opinions held by the people of China and Taiwan throughout history?
What historical events, issues and persons of note helped to shape these ideas and opinions?
Understanding the reasons for the difference between how Japan sees itself and how they are seen by China and Taiwan through the use of text and visual materials.
By the end of the course, students will be able to:
Understand the reasons for the difference between how Japan sees itself and how they are perceived by China and Taiwan from a historical perspective.
Take appropriate actions to build good relations with both China and Taiwan.
Students will be required to have completed the given, relevant assignments before each class. Study and class preparation will amount to at least four hours per class.
Final grade will be calculated according to the following process:
1. Reaction papers(80%)
2. Term-end report (20%)

LANc300GA（中国語 / Chinese language education 300）

中国の文化Ⅳ（中国語の構造）

渡辺　昭太

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
初級中国語の学習を終えて、学ぶべき文法項目は一通り学んだにも関わらず、中国語文法の全体像や細かい点が明確に把握できていないと感じている人は多いだろう。本授業では、初級中国語の文法事項を復習しつつ、より発展的な内容を学び、中国語文法の体系的知識を身につけることを目標とする。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。

【到達目標】
本授業の到達目標は以下の通りである。
(1) 初級中国語で学んだ文法項目を確実に定着させる。
(2) 応用的・発展的な文法項目を学び、中国語文法を体系的に理解する。
(3) 比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・本授業は、授業方法分類上は「講義」であるが、ディスカッションを行う機会や練習問題の解答を学生が発表する機会も適宜設け、講義形式と演習形式を組み合わせた形で行う予定である。
・練習問題へのフィードバック（解説・コメント等）や質問の受け付けは毎回の授業時に行う。授業時以外にも、必要に応じてメールや学習支援システムで随時フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	シラバスを確認し、本授業の意義と目的を確認するとともに、授業の進め方や成績評価方法などの説明を行う。また、受講生の中国語学習歴などを確認する。
2	中国語の基本文型	「中国語の基本文型」に関する概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
3	アスペクト表現１	「完了相」、「変化相」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
4	アスペクト表現２	「経験相」、「将然相」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
5	アスペクト表現３	「進行相」、「持続相」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
6	補語１	「程度補語」、「数量補語」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
7	補語２	「結果補語」、「方向補語」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
8	補語３	「方向補語の派生用法」、「可能補語」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
9	“把”構文と“被”構文	「“把”構文（処置文）」、「“被”構文（受身文）」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
10	使役文（兼語文）と連動文	「使役文（兼語文）」、「連動文」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
11	比較文	「比較文」及び関連する諸表現の概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
12	その他の重要表現・構文１	「存現文」、「“是…的”構文」などの重要表現を取り上げて概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
13	その他の重要表現・構文２	「助動詞」、「複文」などの重要表現を取り上げて概説を行い、問題演習を通じて理解を深める。
14	まとめ	授業内容を振り返り、疑問点などを適宜確認・検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業開始後は、授業中に配布する資料を用いて復習を十分に行い、学習内容の定着を図ること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。必要な資料は講師が適宜準備する。

【参考書】
・大石智良 他 2010『ポイント学習中国語初級［改訂版］』東京：東方書店
・相原茂 他 2016『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書　新訂版』東京：同学社
・木村英樹 2017『中国語はじめの一歩〔新版〕』（ちくま学芸文庫）東京：筑摩書房
・三宅登之 2012『中級中国語　読みとく文法』東京：白水社
・守屋宏則 他 2019 『やさしく くわしい 中国語文法の基礎［改訂新版］』東京：東方書店
・劉月華 他 2019『実用現代漢語語法（第三版）』北京：商務印書館
・朱徳熙(著), 杉村博文・木村英樹(訳) 1995『文法講義ー朱徳熙教授の中国語文法要説ー』, 東京：白帝社

【成績評価の方法と基準】
・期末レポートを50%、平常点（練習問題への取り組み状況等）を50%として合計100点満点とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。
・本授業では期末試験は実施しない。

【学生の意見等からの気づき】
様々な背景を持つ受講生（SA中国の学生、第二外国語として中国語を学んだ学生、中国語ネイティブの学生など）がおり、中国語の理解度にも差があるため、難易度を適宜調節しつつ講義を行うよう心がけたい。

【学生が準備すべき機器他】
PC等を利用する可能性があるが、講師が必要に応じて準備する。

【その他の重要事項】
・授業に関する情報は、全て学習支援システムを通じて連絡するため、随時確認すること。
・中国語の文法知識があること（最低1年以上の中国語学習歴があること）を前提に授業を行う。
・本授業は、中国語という言語を文法の観点から分析・考察しつつ、中級レベルの文法力の育成を行う授業である。そのため、会話等を学ぶいわゆる「語学の授業」とは性質が異なる。
・本授業は、全回の出席が評価の前提である。即ち、欠席は原則的に認めない。教育実習等のやむを得ない事情がある場合は、各種証明書を提出するなど、各自で然るべき対応を取ること。

【Outline (in English)】
【Outline】
In this course, we will acquire enough systematic knowledge of Chinese grammar through reviewing the basic grammar and studying the advanced grammatical rules.
【Goal】
The goals of this course are as follows:
(1) To review grammatical items learned in Chinese course for beginners.
(2) To learn advanced grammatical items and systematically understand Chinese grammar.
(3) To be able to properly understand and express difficult Chinese sentences.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】
・After every class, students are required to review the materials.
・Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria】
・Grading will be decided based on term-end report (50%) and in-class contribution (50%).
・No final exam will be held in this course.

LANc300GA（中国語 / Chinese language education 300）

中国の文化Ⅴ（中国語と日本語）

渡辺　昭太

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
初級中国語の学習を終えて、中級段階に進んだ際に、難易度の高い中国語の意味を取り違えたり、中国語作文において間違った表現を使った経験がある人は多いだろう。また、中国人日本語学習者の日本語に触れた時、その日本語が不自然だと思いながらもその理由をうまく説明できないという経験をした人もいるかもしれない。本授業では、このような誤用例にスポットをあて、なぜそのような誤用が起きるのか、どのような表現にすれば適切な中国語／日本語表現になるのかを的確に分析できる力を養う。また、日中対照研究的視点から中国語を見ることにより、普段何気なく使っている日本語の文法的特徴を考える視点も養う。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。

【到達目標】
本授業の到達目標は以下の通りである。
(1) 中国語／日本語学習者の誤用例の検討を通じて、その原因を自分なりに説明できる。
(2) 授業資料に示された事柄の考察等を通じて、日中両言語の文法的諸特徴を適切に理解する。
(3) 比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・本授業は、授業方法分類上は「講義」であるが、ディスカッションを行う機会や練習問題の解答を学生が発表する機会も適宜設け、講義形式と演習形式を組み合わせた形で行う予定である。
・練習問題へのフィードバック（解説・コメント等）や質問の受け付けは毎回の授業時に行う。授業時以外にも、必要に応じてメールや学習支援システムで随時フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	シラバスを確認し、本授業の意義と目的を確認するとともに、授業の進め方や成績評価方法などの説明を行う。また、受講生の中国語学習歴などを確認する。
2	動詞関連表現１	中国語／日本語のアスペクト表現に関する誤用例の分析と考察を行う。
3	動詞関連表現２	中国語／日本語の助動詞、副詞的表現、否定表現に関する誤用例の分析と考察を行う。
4	形容詞関連表現１	中国語／日本語の形容詞に関する誤用例の分析と考察を行う。
5	形容詞関連表現２	中国語／日本語の比較表現に関する誤用例の分析と考察を行う。
6	名詞関連表現１	中国語／日本語の名詞、数量詞に関する誤用例の分析と考察を行う。
7	名詞関連表現２	中国語／日本語の連体修飾に関する誤用例の分析と考察を行う。
8	補語１	中国語の結果補語、方向補語に関する誤用例と関連する日本語表現の分析と考察を行う。
9	補語２	中国語の可能補語、数量補語に関する誤用例と関連する日本語表現の分析と考察を行う。
10	様々な構文１	中国語の把構文、受身文、使役文に関する誤用例と関連する日本語表現の分析と考察を行う。
11	様々な構文２	中国語の存現文、是…的構文に関する誤用例と関連する日本語表現の分析と考察を行う。
12	日本語と中国語の表現論的特徴１	日本語と中国語の表現論的相違（相対的表現と絶対的表現など）に関して考察する。
13	日本語と中国語の表現論的特徴２	日本語と中国語の表現論的相違（言語と文化など）に関して考察する。
14	まとめ	この授業で学んだ内容を振り返り、疑問点などを適宜確認・検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業開始後は、授業中に配布する資料を用いて復習を十分に行い、学習内容の定着を図ること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。必要な資料は講師が適宜準備する。

【参考書】
・大石智良 他 2010『ポイント学習中国語初級［改訂版］』東京：東方書店
・相原茂 他 2016『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書　新訂版』東京：同学社
・木村英樹 2017『中国語はじめの一歩〔新版〕』（ちくま学芸文庫）東京：筑摩書房
・三宅登之 2012『中級中国語　読みとく文法』東京：白水社
・守屋宏則 他 2019『やさしく くわしい 中国語文法の基礎［改訂新版］』東京：東方書店
・寺村秀夫 1982, 1984, 1991『日本語のシンタクスと意味Ⅰ〜Ⅲ』東京：くろしお出版
・寺村秀夫 1992, 1993『寺村秀夫論文集Ⅰ，Ⅱ』東京：くろしお出版
・劉月華 他 2019『実用現代漢語語法（第三版）』北京：商務印書館
・朱徳熙(著)，杉村博文・木村英樹(訳) 1995『文法講義ー朱徳熙教授の中国語文法要説ー』，東京：白帝社

【成績評価の方法と基準】
・期末レポートを50%、平常点（誤用例分析への取り組み状況や考察内容、発表・質疑応答内容など）を50%として合計100点満点とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
・本授業は期末試験は実施しない。

【学生の意見等からの気づき】
様々な背景を持つ受講生（SA中国の学生、第二外国語として中国語を学んだ学生、中国語ネイティブの学生など）がおり、中国語の理解度にも差があるため、難易度を適宜調節しつつ講義を行うよう心がけたい。

【学生が準備すべき機器他】
PC等を利用する可能性があるが、講師が必要に応じて準備する。

【その他の重要事項】
・授業に関する情報は、全て学習支援システムを通じて連絡するため、随時確認すること。
・中国語の文法知識があること（最低1年以上の中国語学習歴があること）を前提に授業を行う。
・本授業は、誤用例の分析を手がかりに、日中両言語の諸特徴を考察する授業である。そのため、会話等を学ぶいわゆる「語学の授業」とは性質が異なる。
・本授業は、全回の出席が評価の前提である。即ち、欠席は原則的に認めない。教育実習等のやむを得ない事情がある場合は、各種証明書を提出するなど、各自で然るべき対応を取ること。

【Outline (in English)】
【Outline】
In this course, we will acquire the basic skills of contrastive study of Chinese and Japanese. Especially, by analyzing various misuses of Japanese and Chinese, we will try to explain why learners make these mistakes and consider how to correct them.
【Goal】
The goals of this course are as follows:
(1) To be able to explain the cause in your own way by examining examples of misuses by Chinese / Japanese learners.
(2) To understand the grammatical features of both Japanese and Chinese languages.
(3) To be able to properly understand and express difficult Chinese sentences.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】
・After every class, students are required to review the materials.
・Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria】
・Grading will be decided based on term-end report (50%) and in-class contribution (50%).
・No final exam will be held in this course.

LIT300GA（文学 / Literature 300）

中国の文化VI（古典思想・文学）

横打　理奈

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　このコースでは、中国の古典を幅広く紹介します。代表的な中国古典のうち『論語』『易経』『孟子』『史記』を取り上げて、その内容を学んでいきます。これら中国の古典は古代社会の人々の精神文化の基層となるいくつかの論理を共有しています。実際に古典を読み解いていく中で、そうした中国文化の基層的な論理が、二千年以上の時を越えて現代社会においても機能している事例を発見できるようになります。また、『唐詩』などの文学についても幾つか取り上げ、現在の我々がいかに中国の古典との接点を持っているのかを理解できるようになります。

【到達目標】
＊中国古典が現代まで読み継がれてきた経緯
＊中国古典を現代語訳で読むときの注意点
＊中国古典の背景となる当時の社会環境
以上の内容を学ぶことで、中国古典の基礎知識を身につけ、現代の日本社会をより深く理解するための比較対象として中国古典を活用できる力を身につけることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業はテキストにもとづく講義形式ですが、漢文を声に出して読んだり、手を動かしてみたりと、古典に触れる機会を用意します。毎回リアクションペーパーを書いてもらい、次の授業の冒頭でコメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	中国古典入門	授業で扱う『論語』『易経』『孟子』『史記』の全体像を説明します。また唐詩など文学についても説明します。
2	『論語』と孔子、その学び	孔子の生涯をたどりながら、『論語』の思想がどのように形成されてきたかを学びます。『論語』を通じて、古代の人々が何をどのように学んでいたかを学びます。
3	『論語』と儒教	孔子が後代どのように神格化されていったか、儒教史の概略とあわせて学びます。
4	『易経』の世界観と実践	『易経』に託された古代中国の宇宙観を学びます。またテキストを使って、実際に易占いを行います。
5	『孟子』を読み、内容を知る	孟子の中にあるよく知られている故事成語や熟語なども漢文から学びます。
6	『孟子』と日本の関わりについて	日本の古典にあらわれる『孟子』を知り、どのように日本の文化や思想と関わりがあたのかを学びます。
7	『史記』を読み、内容を知る	中国の正史の最初に置かれる歴史書を学びます。また、日本でどのように読まれていたのかを説明します。
8	『史記』の世界	膨大な『史記』の中から、幾つか取り上げて実際に読み、そこに書かれていることを学びます。
9	唐詩について（1）歴史を知る	唐詩が書かれた時代について、説明します。また、中国の韻文の世界も簡単に説明します。
10	唐詩について（2）作品を読む（初唐・盛唐）	日本人によく知られている作品、あるいはその時代の特徴がよく現れている作品を紹介します。
11	唐詩について（3）作品を読む（中唐・晩唐）	日本人によく知られている作品、あるいはその時代の特徴がよく現れている作品を紹介します。
12	その他の文学（1）志怪小説と伝奇小説	孫子の兵法の概略を歴史的な受容を参照しつつ学びます。
13	その他の文学（2）四大奇書など	『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』などについて簡単に説明します。
14	試験とまとめ	論述試験を通して、これまでの授業内容を自分なりにまとめてもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業ではテキストの要点に絞って講義をするので、授業時間外でテキスト全体を通読しましょう。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『論語』（加地伸行、角川ソフィア文庫、2004）
『易経』（三浦國雄、角川ソフィア文庫、2010）
『孟子』（佐野大介、角川ソフィア文庫、2015）
『史記』（福島　正、角川ソフィア文庫、2010）
『老子・荘子』（野村茂夫、角川ソフィア文庫、2004）
『唐詩選』（深澤一幸、角川ソフィア文庫、2010）
※初回の授業で説明します。

【参考書】
必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
リアクションペーパー（授業終了時に毎回提出）50％、期末試験50％で成績を評価します。
なお5回以上の欠席で期末試験の受験資格を失います。また遅刻2回で欠席1回とみなします。

【学生の意見等からの気づき】
高校時代に漢文の授業を受けていない場合でも、内容についていけるよう、丁寧な解説を心がけます。

【Outline (in English)】
Course outline
This course provides a wide-ranging introduction to the Chinese classics, focusing on the Analects, the Book of Changes, the Mencius, and the Records of the Grand Historian.
We will also cover some literary works such as Tang poetry, allowing you to understand how we today have a connection with Chinese classics.
Learning Objectives
To be able to deeply understand modern Japanese society by learning the basic knowledge of Chinese philosophy.
Learning activities outside of classroom
Read the parts of the textbooks that were not mentioned in the lesson to supplement the understanding of the lesson contents.　The standard time for preparation and review outside of class is two hours each.
Grading Criteria/Policy
Grades will be evaluated with 50% reaction paper (submitted each time at the end of　class) and 50% final exam.
If you are absent five times or more, you will not be eligible to take the final exam. In addition, if you are late for class twice, it will be counted as one absence.

LIT300GA（文学 / Literature 300）

【2026年度休講】中国の文化Ⅶ（近代文学）

桑島　道夫

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
20世紀初め、中国でも言文一致運動（「文学革命」）が提唱され、「近代文学」が誕生します。中国近代文学は、近代以前の文学のあり方をどのように変革しようとしたのでしょうか。またそれは、欧米や日本の近代文学とどのような点で共通し、どのような点で異なっていたのでしょうか。本授業では、そうした問いを通して、中国近代（社会・文化）の歩みを文学の視点から考えます。

【到達目標】
中国近代文学とその歴史的・社会的な背景への認識を深めるなかで、中国近代の社会と文化を理解する重要な手がかりを獲得していただければ、と思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の節目節目で作品を配布し、課題を出します。履修者は課題に沿って作品を熟読したうえで授業に出席してください。
授業でコメントを求めることがあります。
授業後は、授業での議論と併せてコメントペーパーに記入し提出することになります（毎回というわけではありません）。次回の授業の初めにコメントペーパーをいくつか取り上げ、全員に向けてフィードバックします。
あるいは、事前に課題（作品の読み込み）に対してコメントペーパーを書いてもらい、授業の解説の際にそのなかからいくつか取り上げ、全員に向けてフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめに	中国「近代文学」の変革を考える前提として、近代以前の中国文学のあり方についてお話します
2	近代文学の誕生１	胡適と陳独秀の言文一致運動
3	近代文学の誕生２	魯迅「狂人日記」
4	近代文学の誕生３	魯迅「阿Q正伝」
5	近代文学の誕生４	周作人と日本
6	新世代の作家たち１	文学研究会
7	新世代の作家たち２	創造社
8	近代中国のモダニズム１	新月社
9	近代中国のモダニズム２	新感覚派
10	1930年代、注目すべき作家と作品１	茅盾「子夜」、巴金「家」ほか
11	1930年代、注目すべき作家と作品２	沈従文「辺城」ほか
12	解放区の「人民文学」	「文芸講話」と趙樹理「 小二黒の結婚」
13	淪陥区の文学	張愛玲「傾城の恋」
14	おわりに	中国近代文学の普遍性と特殊性

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
あらかじめ配布した作品を授業までに読んでおいてください。また、授業後に関連する課題をこなして（調べて）もらうことがあります。合わせて２時間程度でしょうか。

【テキスト（教科書）】
随時配布。

【参考書】
『原典で読む：図説中国20世紀文学』（中国文芸研究会、白帝社、1995年）、『中国語圏文学史』（藤井省三著、東京大学出版会、2011年）ほか、随時配布。

【成績評価の方法と基準】
期末レポート：60%
コメントペーパー・平常点：40%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上に達した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
常々分かりやすく説明したいと心がけていますが、もし分かりにくい場合は随時ご質問ください。質問が問題を掘り下げるいい機会になることはよくあります。

【Outline (in English)】
Course outline
This course introduces modern Chinese literatures through the development of society since the beginning of 20th century.
Learning Objectives
The goal of this course is to understand modern Chinese society and culture.
Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
Grading Criteria /Policies
Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 60%, Short reports /in class contribution: 40%.

LIT300GA（文学 / Literature 300）

中国の文化Ⅷ（現代文学）

桑島　道夫

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
1949年「新中国」建国後から現在までの文学を振り返ります（数篇、映画も取り上げます）。中国大陸に限らず、中国語圏である香港や台湾の文学を含みます。

【到達目標】
中国現代文学とその時代的・社会的な背景への認識を深めるなかで、中国現代の社会と文化を理解する重要な手がかりを獲得していただければ、と思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行います。詳細は学習支援システムで伝達します。
授業の節目節目で作品を配布し、課題を出します。履修者は課題に沿って作品を熟読したうえで授業に出席してください。
授業でコメントを求めることがあります。
授業後は、授業での議論と合わせてコメントペーパーに記入し提出することになります（毎回というわけではありません）。次回の授業の初めにコメントペーパーをいくつか取り上げ、全員に向けてフィードバックします。
あるいは、事前に課題（作品の読み込み）に対してコメントペーパーを書いてもらい、授業の解説の際にそのなかからいくつか取り上げ、全員に向けてフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめに――中華人民共和国建国後の政治と文学	胡風批判、反右派闘争ほか
2	文化大革命	白毛女の表象――民間伝承、集団創作歌舞劇、映画、そして革命現代京劇へ
3	みずからの言葉を取り戻す文学者たち	1970年代の傷痕文学から新時期文学へ
4	中国的不条理の表現――モダニズムの復活	王蒙「胡蝶」、高行建「ある男の聖書」、残雪「黄泥街」ほか
5	土着の習俗や民間伝承を取り込む情念――ルーツ文学派	莫言「赤い高粱」
6	もの言う農民作家	閻連科「人民に奉仕する」「丁庄の夢」「四書」ほか
7	中国の前衛作家群像――先鋒派	余華、蘇童、格非ほか
8	女性が自己を語る意味――女性作家の作品に表現された内面１	鉄凝「大浴女」
9	女性が自己を語る意味――女性作家の作品に表現された内面２	林白「たったひとりの戦争」、陳染「プライベートライフ」
10	女性が自己を語る意味――女性作家の作品に表現された内面３	衛慧「上海ベイビー」、棉棉「上海キャンディ」、アニー・ベイビー「さよなら、ビビアン」「蓮の花」
11	「80後」（80年代生まれ）の青春小説	韓寒「三重の門」、郭敬明「悲しみは逆流して河になる」
12	香港文学と中国映画	李碧華「ルージュ」「さらばわが愛――覇王別姫」ほか
13	台湾文学	李昂「夫殺し」ほか
14	おわりに	中国現代文学の特殊性と普遍性

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
あらかじめ配布した作品を授業までに読んでおいてください。また、授業後に関連する課題をこなして（調べて）もらうことがあります。併せて２時間程度でしょうか。

【テキスト（教科書）】
随時配布。

【参考書】
『原典で読む：図説中国20世紀文学』（中国文芸研究会、白帝社、1995年）、『中国語圏文学史』（藤井省三著、東京大学出版会、2011年）、『「規範」からの離脱――中国同時代作家たちの探索』（尾崎文昭編、山川出版社、2006年）ほか、授業でも随時配布。

【成績評価の方法と基準】
期末レポート：60%
コメントペーパー・平常点：40%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上に達した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
中国現代文学・文化のおもしろさをまだまだ伝えきれていないのでは、と自問する一方、皆さんの主体的な参加によってそれは「発見」されるものだとも感じます。

【Outline (in English)】
Course Outline
This course introduces modern Chinese literature through an examination of social developments in China since the early twentieth century.
Learning Objectives
The goal of this course is to help students understand modern Chinese society and culture.
Learning Activities Outside the Classroom
Before each class meeting, students are expected to read the assigned chapter(s) from the text. Students should plan to spend at least two hours preparing for each class session.
Grading Criteria / Policies
The final grade for this course will be determined as follows:
・Term-end examination: 60%
・Short reports and in-class participation: 40%

LIT300GA（文学 / Literature 300）

【2026年度休講】中国の文化IX（中国俗文学）

鈴木　靖

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
SAを機会に日本文化について改めて考え直す機会を得た人も多いだろう。しかし、日本文化とは何かを考えるには、古来、日本文化に多大な影響を与えてきた中国文化への理解が不可欠である。
この授業の目的は巨視的・微視的という二つの視点から中国文化史を通観することにある。
巨視的な視点からいえば、中国文化が東アジアの諸民族に及ぼした影響は計り知れない。表意と表音という二つの機能を備えた漢字の発明は、言語を異にする東アジアの諸民族に漢語という共通言語（Lingua Franca）を与え、それを基盤とする文明圏の成立と高度な精神的交流を可能にした。漢代以降、中国の国教となった儒教は、東アジアに倫理観にもとづく国際秩序と社会秩序を与え、サンスクリット語仏典の漢語への翻訳は東アジアに仏教という世界宗教を成立させた。紙や印刷術の発明は東アジアのみならず、世界の文化の発展と普及に革命的な影響を及ぼした。
いっぽう微視的な視点からいえば、中国歴代の文学、とりわけ市井の人々の間で次々と生み出された俗文学は、東アジアに庶民の文学を生み出す契機を与えた。この授業でも取り上げる三国志演義や水滸伝などは、わが国の文学にも多大な影響を与えている。

【到達目標】
中国の古代から近世に至る文化史を理解し、東アジアという広い視野から自文化を考え、説明できる力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は、準備学習と講義、リアクション・ペーパーによる質問・意見を組み合わせて行う。限られた授業時間を有効に使うため、毎回、授業の前に準備学習の資料を読み、講義への理解を深めるとともに、質問や意見がある場合には、リアクション・ペーパーを通じて積極的に発言してほしい。
課題などへのフィードバックは、授業中またはメールを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	講義の進め方と目的について概説する
第2回	殷代	文字の誕生
第3回	周代	采詩の官と詩経
第4回	春秋戦国時代	儒教経典が伝える民間伝承
第5回	秦代	亡国の民が伝えた物語
第6回	漢代	紙の誕生
第7回	魏晋南北朝時代	北朝と南朝の民間伝承に描かれた女性像
第8回	隋唐時代	敦煌変文の世界
第9回	五代十国時代	書籍出版のはじまり
第10回	北宋時代	三国志の誕生
第11回	南宋時代	水滸伝の誕生
第12回	元代	演劇の隆盛
第13回	明代	出版文化の隆盛
第14回	清代	民間芸能の隆盛

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前学習の資料を授業用ページを通じて配布するので、授業前に読んでくること。授業後は授業用スライドのPDFファイルを配布するので、これをもとに復習を行うこと。
本授業の準備学習・復習時間は計４時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しないが、事前学習の資料と授業で使用するスライドのPDFファイルを教材用ページを通して配付する。

【参考書】
各回の授業の中で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は次のような基準で行う。
①毎回授業の後に提出するリアクション・ペーパー（80％）
②期末レポート（20％）
これら成績をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
授業で使用するスライドをオンライン上でも見ることができるよう、授業用のサイトを開設し、スライドをアップした。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students understand how the Chinese culture influenced the development of Japanese culture. How kanji, Chinese characters, developed and became a Lingua Franca amongst the Asian countries, how Confucianism was founded and provided an ethical and philosophical doctrine regarding human relationships and social structures for the Asian countries. How Buddhism was introduced to China and spread amongst the Asian countries. Students will also need to consider when paper and printing were invented and how they changed the world. How Chinese Popular literature was born and influenced Japanese literature.
〔Learning Objectives〕
The goals of this course are to understand the cultural history of China and rethink our culture from an East Asian perspective.
〔Learning activities outside of the classroom〕
Before each class, students will be expected to have read the relevant article(s). Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
〔Grading Criteria/Policies〕
Grading will be decided based on reflection essays(80%) and an end of term report(20%).

HIS300GA（史学 / History 300）

【2026年度休講】中国の文化Ｘ（歴史）

張　玉萍

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：人数制限あり（50名限定）超過した場合は抽選を行ないます。
その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
言語・儀礼・服装など日常生活と密接な関係を持つ事柄から始め、近現代中国の世界へと入っていく。日本人にとっては隣国でありながら遠く感じられている中国の存在が、より一層身近になるようにすることが本授業の目的である。中国文化の中から幾つかのトピックを取り上げて、その歴史的な背景・影響を紹介・解説する。

【到達目標】
現在、日中両国民間の信頼関係は十分とは言えない。その原因を追究するには、近現代の日中関係史を避けて通ることはできない。19世紀末に日中両国の地位が逆転してから今日にいたるまでの日中関係が、現状とどのような因果関係にあるのかを、この授業を通じて知ることができる。そのうえで日中間の相互信頼を醸成する可能性を探り、異文化理解の方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業はオンラインの形で進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 中国とは何か（1）	地域文化へのアプローチ 地理――東低西高、南船北馬
第2回	中国とは何か（2）	民族――56民族の由来と特徴、分布
第3回	中国とは何か（3）	言語――普通話と方言
第4回	儒教（1）	中国人の価値観の中核
第5回	儒教（2）	儒教の興隆、衰退、復活
第6回	満族（1）	“入主中原”
第7回	満族（2）	“満” と “漢”
第8回	旗袍（1）	下位文化から上位文化への上昇
第9回	旗袍（2）	上位文化から下位文化への転落および復活
第10回	清末留日学生（1）	史上初の留日ブーム ――師弟関係の逆転
第11回	清末留日学生（2）	革命の揺りかご――東京と中華民国の成立
第12回	日中間における人的交流（1）	政治家としての戴季陶と日本
第13回	日中間における人的交流（2）	戴季陶の日本観およびその意義
第14回	全体総括	授業内容に関する理解度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各課題の内容に関して、興味のある部分をさらに自分なりに調べて、理解を深めていく。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業用資料はオンライン上で公開する。

【参考書】
張玉萍『戴季陶と近代日本』法政大学出版社、2011年。

【成績評価の方法と基準】
最終回に論述テストを行なう。授業で学んだ六つのテーマの中から興味を持ったものを一つ選び、それについて自分でより深く調べてまとめておく。試験では自分で調べたテーマと教員が指定したテーマの計二問について論述する。資料や授業のレジュメの持込を認める。期末テスト（70点）、平常点（授業資料の視聴確認、30点）により総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
学習効果を考慮して、履修者の人数を50人までに制限します。超過した場合は抽選を行ないます。

【Outline (in English)】
Starting with things that have close relationships with daily living such as language, ceremonies, and clothes, we will enter the world of modern and contemporary China. The purpose of this lesson is to ensure that China, which is often felt far away as a neighbor for the Japanese, becomes more familiar. Some topics taken from Chinese culture will be introduced and explained focusing on their historical background and influence.
At present, the level of trust between Japan and China is far from satisfactory. This lesson will help students to understand the causal relationship between the current situation and Japan-China relations from the reversal of the two countries' positions at the end of the 19th century to the present day. Then, the possibilities of fostering mutual trust between Japan and China will be explored, and the methods of cross-cultural understanding will be learned.
Students are expected to further their own understanding of the content of each assignment by further researching the areas of interest to them. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
An essay test will be given in the final session. Students are required to choose one of the six themes studied in class that interests them, research it in depth, and summarize it by themselves. In the examination, students are required to discuss two questions, one on the theme they have researched and one on the theme designated by the instructor. Students are allowed to bring their own materials and handouts from the class.
The final exam (70 points) and the regular exam (30 points for watching the class materials) will be used to evaluate the overall performance of the course.

HIS200GA（史学 / History 200）

朝鮮語圏の文化Ⅰ（朝鮮半島の文化史）

神谷　丹路

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
朝鮮半島は、日本の隣国、隣人であり、地理的にも歴史的にも、日本と密接な関係のある地域です。この授業では、朝鮮半島の文化や歴史、社会についての基礎事項を学びます。近年、朝鮮半島は、アジアへ、また世界への影響力を増しています。長い歴史の中で、朝鮮半島は、中国の影響を受けつつも、独自の文化・歴史を形成し、さらには日本へも大きな影響を与えてきました。朝鮮半島についての基本的な知識を身につけ、あるべきパートナーシップとは何かを探求することを目的とします。

【到達目標】
朝鮮半島独特の文化や歴史に関する基礎知識を身につけることによって、日本など周辺国との類似性や差異性についての考察ができるようになり、また東アジア全体を見渡すことができる広い視野を獲得します。さらに興味のある分野について、自分から引き続き勉強を続けていけるような力を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本的な流れは、以下の通りである。
朝鮮半島の地理、文化、歴史を概観し、基礎的な知識を確認する。その上で、朝鮮半島と日本とのあいだの文化的相互作用、共通点などに着目するとともに、一つの事象であっても、日本と朝鮮半島では、とらえかたが相違することもあり、それらを俯瞰的な視点から学ぶ。視覚資料を多く取り入れた授業資料を用い、幅広い、朝鮮半島の文化、歴史、社会の知識を吸収する。小テストを随時実施し、間違いの多かった問題などについては、次の授業時に解説する。なお、この授業は朝鮮に関して開講されている講義形式の専門科目のうち、もっとも入門的なものの一つである。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	導入／朝鮮・韓国とは	・朝鮮半島の２つの国家 ・朝鮮半島の地理 ・国のシンボル、言語、祝日 ・建国神話、昔話
2	民俗文化・伝統文化	・ユネスコ無形文化遺産 ・アリラン、パンソリ、ナムサダン、綱渡り、カンガンスルレ ・綱引き、農楽 ・キムチ
3	伝統行事と儒教文化	・正月、秋夕 ・葬送儀礼 ・儒教祭祀 ・現代社会と儒教 ・その他の宗教
4	古代から中世へ	・伽耶と倭 ・百済・高句麗と日本 ・新羅と日本 ・高麗と日本
5	中世から近世へ	・朝鮮王朝時代と日本 ・ハングル創製 ・科学、学問の発達 ・国難：豊臣秀吉、李舜臣 ・善隣友好外交、朝鮮通信使の訪日
6	朝鮮王宮と近代	・景福宮（王宮の再建から王妃虐殺事件まで） ・徳寿宮（大韓帝国の近代） ・昌徳宮（最後の国王、植物園、動物園）
7	日本の植民地時代	・韓国統監伊藤博文 ・在朝日本人 ・「土地調査事業」 ・三一独立運動 ・食糧「増産」と農民 ・戦時労務動員
8	解放から1950年代	・38度線と東西冷戦 ・朝鮮戦争 ・南北分断の固定化 ・離散家族
9	1960年代、70年代	・海外出稼ぎ ・日韓国交正常化 ・ベトナム戦争と韓国 ・財閥の形成
10	1980年代、90年代、2000年代	・社会の葛藤と民主化 ・民主化宣言 ・88年オリンピック ・労働運動 ・済州島四三事件の真相究明（歴史の再評価）
11	朝鮮沿岸漁業の百年	・朝鮮の漁業 ・20世紀前半日本漁民の朝鮮出漁 ・李ラインと日本漁船 ・日韓漁業協定 ・領土問題 ・済州島の海女
12	歴史の和解とは	・日本の戦争責任問題 ・日韓の摩擦 ・市民の文化交流 ・サブカルチャー ・韓国の日本語学習、日本の韓国・朝鮮語学習
13	世界のコリアン・韓国の外国人	・外国人労働者 ・多文化家庭 ・海外留学 ・在外コリアン
14	まとめ	期末試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
朝鮮語の知識は必要ありません。朝鮮・韓国に関する報道に関心を持ち、関連する本を積極的に読んでください。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
毎回、授業資料を配布します。

【参考書】
参考文献はその都度指示します。
『新訂増補　韓国朝鮮を知る事典』（平凡社）2014年
『日韓でいっしょに読みたい韓国史』（明石書店）2014年
『向かいあう日本と韓国・朝鮮の歴史　前近代編下』（青木書店）2006年
『学び、つながる日本と韓国の近現代史』（明石書店）2013年

【成績評価の方法と基準】
授業の理解度を確認するために、随時、課題、小テストを行う。学期末には、学習のまとめとして期末試験を行う。課題および小テスト（30％）、期末試験（70％）で評価する方針である。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
現在進行形の日本と朝鮮半島問題についても、随時、授業と関連付けて提示する。

【学生が準備すべき機器他】

【その他の重要事項】
ＳＡ韓国２年生はかならず受講してください。他学部の学生の受講も歓迎します。なお順序と内容に若干の変更がある場合があります。

【Outline (in English)】
< Course outline >
In this class, the students will learn the basics of culture, history, and society on the Korean Peninsula.
< Learning Objectives >
The aim of this course is to help to acquire a historical and cultural basic understanding of the Korean Peninsula. Since the Korean Peninsula is the nearest neighbor region for Japan, it is very important to firmly understand the Korean Peninsula for peaceful stability in East Asia.
< Learning activities outside of classroom >
Before/after each class meeting, students will be expected to spend one hour to understand the course content.
< Grading Criteria/Policy >
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Term-end examination: 70%, Assignments & little exams : 30%.

LANk300GA（朝鮮語 / Korean language education 300）

【2026年度休講】朝鮮語圏の文化 II（朝鮮語の構造）

内山　政春

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・朝鮮語を音声，文字，語彙，文法などさまざまな面から言語学的に観察することによって，朝鮮語の力を高めるのに（さらに言えば他の外国語を学ぶにあたって）役立つ知識を提供することを目的としています．
・また日頃接する機会の少ない，北朝鮮の言語と，さらに方言と古語についても言及したいと思っています．

【到達目標】
・この授業は，実践的な語学力をある程度もつであろう受講生が，その裏にある文法や語彙などの「ルール」を理解することで，ブロークンではないきちんとした語学力を身につけるのに役立つことを目的としています．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・みなさんには，少なくとも朝鮮語を２年（週３コマとして）学んだ程度の語学力が必要とされます．他学部学生（朝鮮語受講者）の受講も歓迎しますが，ついていくにはかなりの努力を要します．
・毎回課題を出し，受講生の回答に関して解説を加え，内容を共有できるようにします．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	音声と音素	２種類の「音」についての解説を行なう．
2	音素交替①	つづりと発音の「規則的なずれ」についての解説を行なう．
3	音素交替②	つづりと発音の「規則的ではないずれ」についての解説を行なう．
4	語種	おもに漢字ごと外来語についての解説を行なう．
5	体言と格	品詞分類や助詞についての解説を行なう．
6	用言①	用言の語幹と語尾の結合方式についての解説を行なう．
7	用言②	不規則用言についての解説を行なう．
8	ボイス	用言の受身と使役についての解説を行なう．
9	待遇法と敬語	朝鮮語の各種文体，ていねい形と尊敬形の区別などについての解説を行なう．
10	アスペクトと接続形	「〜ている」の２つの意味と動詞の性質の関係についての解説を行なう．
11	方言	おもに韓国の方言資料を見ながら標準ごとの違いについての解説を行なう．
12	南北の朝鮮語	北朝鮮の文献資料を見ながら韓国の朝鮮語との違いについての解説を行なう．
13	古語	『訓民正音』を見ながら現代語との違いについての解説を行なう．
14	まとめ	１学期間のまとめを行なう．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・「この授業のため」というのではなく，授業外でも朝鮮語に積極的に触れることが大切です．「この授業のため」の準備学習は特に必要ありませんが，毎回課題を出す予定なので，次回の授業までにやってきてください．授業外学習の標準時間は授業１回につき４時間を標準とします．

【テキスト（教科書）】
・プリントを配布します．

【参考書】
・授業中に必要に応じて説明します．

【成績評価の方法と基準】
・平常点（100%）によります．平常点は，毎回の授業で課題を出し，その評価によって決定します．あまりにも出席が少ない場合は評価の対象から外すこともあります．この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
この授業は朝鮮語の運用能力をある程度持つ学生を対象としているのは上に書いたとおりですが，にもかかわらず，シラバスも読まずにその前提条件を知らずに受講しようとする学生が毎回います．そういう非常識なことはやめてほしいと思います．
韓国人留学生（朝鮮語母語話者）の受講者の受講も歓迎しますが，単に「簡単そうだから」受講するのではなく，「なぜそうなのか」自分の母語を振り返る機会を持とうという意欲のある者に受講してほしいと思います．たとえば授業中に（授業内容とは無関係に）スマホを見てばかりの学生などがいた場合，途中でやめてもらうことになるかもしれません．

【その他の重要事項】
履修者の状況によっては，授業を朝鮮語で行ないます．またおそらく少人数の授業になると思いますので，受講者の希望があれば内容を一部変更することも考えられます．

【Outline (in English)】
< Course outline >
The aim of this course is to help students acquire advanced skills and knowledge of the Korean languages by observing linguistically from various aspects such as sounds, letters, vocabulary and grammar.
< Learning Objectives >
The goal of this course is for students who have a certain degree of practical language skills to gain a deeper understanding "rules" of Korean grammar and vocabulary.
< Learning activities outside of classroom >
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
< Grading Criteria / Policy >
Grading will be decided based on assignments (80%) and term-end report (20%).

ART300GA（芸術学 / Art studies 300）

アジアの伝統芸能

鈴木　靖

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　中国には「戯曲」と総称される300種あまりの伝統歌劇と「曲藝」と総称される400種ほどの語り物がある。こうした芸能を通じて、中国庶民の文芸世界を垣間見ようというのが本講義の目的である。中国の庶民が、どのような物語に笑い、怒り、涙したのかを、彼らの一番身近にあったメディアを通じて追体験していく。

【到達目標】
この授業を通じて、中国の伝統芸能の全体像とその代表的作品、演出・技法などを体系的に学び、そうした伝統文化が新たな文化の創出にどのような役割を果たすかを理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業は、講義とリアクション・ペーパーによる質問・意見を組み合わせて行う。講義では、できるだけ多くの映像資料を使い、中国の伝統芸能とそこから生まれた音楽や映画などの世界を体感していきたい。
　課題などへのフィードバックは、授業中またはメールを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに〜講義の目的と内容について	中国の伝統芸能を学ぶ目的と意義について考える
第2回	中国の伝統芸能とは	中国の伝統芸能にはどのようなものがあるのかを概観する
第3回	伝統芸能の美〜川劇「白蛇伝」を例に	魯迅が祖母から聞いたという杭州の雷峰塔にまつわる伝説を紹介した後、四川省の地方劇である川劇「白蛇伝」の第一幕から第二幕までを鑑賞しながら、雲牌という表現技巧を例に、「有声必歌、無動不舞」（声あれば必ず歌い、舞わざる動きなし）といわれる中国伝統演劇の特色について学ぶ
第4回	川劇「白蛇伝」の世界（一）	川劇「白蛇伝」の第三場から第五場前半までを鑑賞しながら、中国伝統演劇の表現技法である翎子功、船槳、臉譜、水袖功について学ぶ
第5回	川劇「白蛇伝」の世界（二）	川劇「白蛇伝」の第五場後半から第八場までを鑑賞しながら、中国伝統演劇の表現技法である假嗓、水袖功、水旗、毯子功を学んだ後、川劇独自の特殊技法である開慧眼、変臉について学ぶ
第6回	白蛇故事の変遷	中国の四大民間故事の一つである「白蛇伝」の歴史的変遷について学ぶ
第7回	現代によみがえる伝統芸能〜映画「舞台姐妹」から見た中国伝統演劇の世界	中国の伝統演劇の役者たちはどのような暮らしをしていたのか。越劇の女優たちを描いた映画「舞台姐妹」を通じて、役者たちの近代への歩みを学ぶ
第8回	現代によみがえる伝統芸能〜越劇から西洋音楽へ	越劇と西洋音楽を融合させ、梁山伯と祝英台の伝説を音楽によって克明に描き出したバイオリン協奏曲「梁祝」と、その誕生の背景についての学ぶ
第9回	現代によみがえる伝統芸能〜映画「梁祝 Butterfly Lovers」を例に（一）	「梁祝」故事の映画化の歴史を学ぶとともに、バイオリン協奏曲「梁祝」をテーマ曲として、この故事に新たな解釈を加えた映画「梁祝 Butterfly Lovers」の前半を鑑賞する
第10回	現代によみがえる伝統芸能〜映画「梁祝 Butterfly Lovers」を例に（二）	映画「梁祝 Butterfly Lovers」の後半を鑑賞するとともに、バレエやドラマなど、この故事に取材した新たな作品について学ぶ
第11回	梁祝故事の変遷	中国の四大民間故事の一つである「梁祝故事」の歴史的変遷について学ぶ
第12回	日本の伝統芸能とアジア（一）狂言「附子」「鏡男」を例に	19世紀の末、敦煌莫高窟から発見された敦煌写本『啓顔録』を通して、日本の狂言と中国との関わりについて学ぶ
第13回	日本の伝統芸能とアジア（二）落語・歌舞伎「牡丹灯籠」を例に	（明）瞿佑の怪異小説集『剪灯新話』を淵源とする日本の三大怪談の一つ「牡丹灯籠」を例に、中国の物語が、日本の落語や歌舞伎など古典芸能の演目となった歴史を学ぶ
第14回	伝統芸能を学ぶ意義とは	日米間の演劇交流の架け橋となったフォービアン・バワーズを例に、異文化としての伝統芸能を学ぶ意義について考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業に使用したスライドは、教材のページにアップしていく。これを参考に復習を行い、講義への理解を深めてほしい。

【テキスト（教科書）】
　なし

【参考書】
・村松一弥『中国の音楽』（勁草書房、1965年）

【成績評価の方法と基準】
成績評価は次のような基準で行う。
①毎回の授業後に提出するリアクションペーパー（80％）
②期末レポート（20％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
　隔年開講科目のため、昨年度は未開講。

【Outline (in English)】
〔Course outline〕
In China, there still remains more than three hundred forms of theatres and around four hundred types of traditional performing arts. This course aims to increase students' knowledge and understanding of Chinese folk literature through appreciating and studying these performing arts.
〔Learning Objectives〕
The goals of this course are to gain a deeper understanding of Chinese traditional performing arts and their original literary works and stagecraft. By the end of the course, students should be also able to understand the contribution of Chinese traditional performing arts as sources of popular culture.
〔Learning activities outside of the classroom〕
Before each class, students will be expected to have read the relevant article(s). Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
〔Grading Criteria/Policies〕
Grading will be decided based on reflection essays (80%) and an end of term report(20%).

ARSb300GA（地域研究（ロシア・スラブ地域） / Area studies(Russia/Slab) 300）

ロシア・中央アジアの文化

佐藤　大雅

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・「ロシア・中央アジアの文化」は、主にロシア・中央アジア（ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン（キルギス）、タジキスタン、トルクメニスタン）・南コーカサス（アゼルバイジャン、ジョージア（グルジア）、アルメニア）と呼ばれる地域を対象に、旧ソヴィエト連邦構成国の文化を広く取り上げる入門的な授業です。本授業ではソ連時代を中心に、ロシア帝国から現代に至るまでの文化とその背景について学んでいきます。
・ロシアとその「周辺」地域（中央アジア、南コーカサス等）は、歴史・政治・経済的な繋がりを背景に、相互浸透的にその文化を構築してきました。この地域の文化の特殊性は、ある文化的事象をひとつ切り取るだけでは理解することが難しく、常に近隣諸国との関係の中で捉える、広い視座を必要とします。
・この授業では、それぞれの国の政治・経済等の特徴に加え、文学／美術／建築／音楽／映画／思想などの分野における重要な人物や事柄に触れる機会を提供したいと思います。皆さんの興味の引き出しを増やしつつ、文化についての見方や考える力を深めてほしいと思います。
・本講義は、SAロシアの事前学習科目なのでSAエストニア（SAロシア代替）の２年生は必ず履修してください。

【到達目標】
(1) ロシア・中央アジア・南コーカサスの文化について、その背景と共に理解できるようになる。
(2) ロシア・中央アジア・南コーカサスの文化の重要な事項について、簡単な説明ができるようになる。
(3) 文化の考え方・論じ方について知見を深め、批判的思考ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・基本的には講義形式で授業を行います。加えて、適宜学生との議論や、グループディスカッションの時間を設けることもあります。
・授業毎にコメントシートを作成・提出してもらいます（成績評価の要件）。
・前回授業時のコメントシートからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方や成績評価方法についてのガイダンスを行う。
第2回	ロシア・中央アジア・南コーカサス諸国の現在：①ロシア	ロシア・中央アジア・南コーカサス諸国の現状について、政治・経済・地理・文化の概要を理解する。①では、この授業で扱う地域の総合的な把握を行うと共に、ロシアの現在の概況について学習する。
第3回	ロシア・中央アジア・南コーカサス諸国の現在：②中央アジア	ロシア・中央アジア・南コーカサス諸国の現状について、政治・経済・地理・文化の概要を理解する。②では、中央アジア5か国（ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタン）の現在の概況について学習する。
第4回	ロシア・中央アジア・南コーカサス諸国の現在：③南コーカサス	ロシア・中央アジア・南コーカサス諸国の現状について、政治・経済・地理・文化の概要を理解する。③では、南コーカサス3か国（アゼルバイジャン、ジョージア、アルメニア）の現在の概況について学習する。
第5回	国家・民族とは何か	ロシアとその「周辺」地域を理解する上で必要な、国家・民族の概念について学習する。
第6回	帝政期の文化	ロシア帝国における文化の展開を幅広く学習する。
第7回	ロシア革命とソヴィエト政権の樹立：ロシア・アヴァンギャルドの時代	ロシア・アヴァンギャルド芸術の展開について学習する。
第8回	スターリン時代：社会主義リアリズムの誕生	スターリン期のソヴィエト文化について学習する。
第9回	「雪どけ」期の文化①：雪どけ期の文化とは何か？	ソ連における「雪どけ」期の文化状況を学習する。
第10回	「雪どけ」期の文化②：ソ連でロック／ジャズは可能だったのか？	「雪どけ」以降の文化の一例として、ソ連の大衆音楽（ロック・ジャズ）の展開について学習する。
第11回	「雪どけ」期の文化③：社会主義リアリズムは芸術の発展を妨げたのか？	「雪どけ」以降の「公式芸術」の展開を見ることで、社会主義リアリズムがソ連の芸術に与えた影響について学習する。
第12回	ソ連の「非公式芸術」	ソ連の「非公式芸術」を学習することで、ソ連における「公式」と「非公式」の間の対立を考える。
第13回	「民族文化」の現在	後期ソ連〜ソ連崩壊後にかけて、それぞれの「民族文化」がどのように展開してきたかについて学習する。
第14回	まとめ・振り返り	本授業で学習した内容を振り返ると共に、文化研究への取り組み方について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で提示した参考文献等をもとに、自分なりに興味を抱いた内容について図書館等での文献調査や読書をしてほしいと思います（この作業は、期末レポートの題材選定や執筆の準備を兼ねています）。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しません。授業で使用する資料は、適宜紙媒体または学習支援システム等で配布します。

【参考書】
参考文献は適宜授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績評価については、①平常点（授業への取り組み姿勢、および授業後のコメントシート提出）：50％、②期末レポート：50％、に基づき、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出のために学習支援システム等を利用します。なお、授業時のPC持参は不要です。

【その他の重要事項】
生成AIツール（ChatGPT等）に関する注意事項：本授業では、成績評価対象となる期末レポートの作成に使用することは禁止とします。期末レポートの要件については、別途授業内で詳細に指示しますが、正確な引用注の記載や参考文献の表示等、内容の正確性を検証可能な条件を付けて出題することとします。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course introduces students to the cultural history of Russia, Central Asia, and the South Caucasus, especially in the Soviet period.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to:
(1) Have a basic knowledge of the cultural history of Russia, Central Asia, and the South Caucasus.
(2) Briefly explain the important cultural phenomena of these regions.
(3) Think critically about cultural phenomena.
【Learning Activities Outside of Classroom】
Before/after each class meeting, students are expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading Criteria /Policy】
・Class Participation / Reaction Paper: 50%
・Final Essay: 50%

ARSb300GA（地域研究（ロシア・スラブ地域） / Area studies(Russia/Slab) 300）

ロシア・東欧の文化

佐藤　千登勢

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ア〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ロシアといわゆる東欧諸国は、宗教、民族、イデオロギー、国家間の勢力均衡などの問題により、絶えず、支配被支配関係をさまざまなかたちで築いてきました。ソ連邦崩壊後、大方がEU加盟を果たした東欧諸国。しかしそのなかで経済的に「優等生」と位置付けられてきたハンガリーが政治的にはEUにおいて足並みを揃えない傾向にあったり、ポーランドでは宗教的倫理観に根差した法令が制定され、女性の権利が縮小される傾向も見られます。
この講義では、ロシアと東欧諸国（おもに、ハンガリー、ポーランド、チェコ）と今では北欧に分類されるエストニアのそれぞれの民族的差異や特殊性を、主に文化や風土、歴史を通して見る一方で、それぞれの関係性に焦点をあてる作業も行い、文化の相貌を概観すると同時にナショナリズムの問題を提起していきます。さまざまな情報から、国家や民族のありかた、複数の民族が共生するとはどういうことかをみなさんに考えてほしいと思います。
本講義はSAロシアの事前学習科目であるため、SAエストニア（SAロシア代替）の２年生は必ず履修してください。

【到達目標】
この授業は、受動的に講義を聴いたり映像を鑑賞したりするのではなく、多数の情報から自身の見解を導き、適切な文章でこれらをまとめる力をコメントシートを通して養うことを目的としています。学生のみなさんは、つねに問題意識をもちながら授業に臨んでほしいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義で扱う「東欧」は、ハンガリー、ポーランド、チェコが中心となります（他の東欧諸国については、適宜、言及）。さらに、北欧に属するエストニアについても講義を行います。これらの国々の歴史や世界遺産、文化（音楽、映画、文学、美術）、社会情勢を視聴覚資料を通して概観しながら東欧諸国とロシア（ソ連）との関係性を見ていくと同時に、ナショナリズムや現代の社会問題を提起していきます。私たちにとってもアクチュアルな問題として考えていくようにしましょう。毎回、コメントシートに見解をまとめてもらいますが、そのなかで興味深いコメントを選択し、翌週の授業でフィードバックしつつ、みなさんと共有します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ロシアと東欧諸国の言語・宗教／日本とポーランドの関係の一断面について。
第2回	ハンガリーの歴史概観：ソ連・ロシアとの関係	被支配と反抗の歴史を中心にハンガリーを概説。ハンガリー動乱、ヨーロッパ・ピクニック事件など。
第3回	ハンガリー：街並みと風土／世界遺産と現代のハンガリー	ハンガリーの歴史を伝える旧集落、世界遺産の数々、温泉文化について映像をまじえて解説。
第4回	ハンガリー：音楽と映画をめぐって	ロマ楽団からリストやバルトークの音楽について。歌謡「暗い日曜日」の謎をモチーフにした映画、ゴダ・クリスティナ、パールフィ・ジョルジ、タル・ベーラらの独特な作風の映画を紹介。
第5回	ポーランドの歴史概観：ソ連・ロシアとの関係	地図上での国家消滅に至る被支配とこれに対する蜂起、反抗の歴史からポーランドを概観。
第6回	ポーランド：街並みと風土、そして歴史からみる音楽と映画	ワルシャワ、クラクフ歴史地区の街並み、建築、そしてオシフィエンチム（アウシュヴィッツ）の収容所について。伝統音楽からショパンの作品を歴史的背景と関連付けながら鑑賞。アンジェイ・ワイダ作品の一部を鑑賞しながら史実を後世に伝える映画の力について考える。
第7回	ポーランド：社会を反映する映画	ポランスキー、キェシロフスキ、スコリモフスキ、シュモフスカ、パヴリコフスキらの映画を一部鑑賞しつつ、そこに描かれる社会情勢を汲みとる。
第8回	チェコの歴史概観：ソ連・ロシアとの関係	被抑圧と反抗の歴史からチェコを概観。映画『存在の耐えられない軽さ』『プラハ！』に描かれるチェコ事件について。
第9回	チェコ：街並みと風土／世界遺産を中心に	プラハ、チェスキー・クルムロフの歴史地区の歴史と佇まいについて。
第10回	チェコ：文学と映画をめぐって	プラハ・ドイツ語文学（リルケ、カフカ）を含め、ハシェク、カレル・チャペック、クンデラ、スヴェラークについて映画化された作品を紹介。思想統制下での実験的作品『ひなぎく』、チェコ人のメンタリティが濃厚な『コーリャ、愛のプラハ』を紹介。
第11回	チェコ：人形劇とアニメーション映画の世界	チェコ人の民族意識を支える人形劇、政治的諷刺を込めたトルンカのパペットアニメ、シュルレアリスムを極限まで追求したシュヴァンクマイエルの物体アニメ、国民的キャラのクルテクを生んだミレルの作品について。
第12回	エストニアの歴史外観：ソ連・ロシアとの関係	被抑圧の歴史からe-Estoniaの社会に至るまでの軌跡。
第13回	エストニア：街並みと風土	首都タリンの旧市街、カドリオルグ宮殿、「歌と踊りの祭典」、世界遺産について。
第14回	エストニア：文学と映画、音楽をめぐって	キヴィラフク、クロス、ヘインサーの文学、映画『ノベンバー』（サルネット監督）／アルボ・ペルトの音楽を通してエストニアの精霊信仰や死生観について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で紹介する映画、文学作品、音楽に、学生各人がもう一度触れる機会を設けてほしいと思います。映画作品のDVDソフトは大学のAVライブラリコーナー、もしくは国際文化学部資料室にある場合が多く、文学作品は図書館で借りることができます。予習・復習を行う時間には毎回４時間以上、期末レポートの作成には、１週間以上かけてください。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しません。毎授業にて、教員が作成した資料を教場もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
特定の参考書はありませんが、適宜、参考文献を教場もしくは学習支援システムにて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点50％、コメントシート30％、期末レポート20％に基づき、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
静かな環境で講義を進められるよう、配慮しますが、何よりも、皆さんの協力に期待します。

【Outline (in English)】
●Course outline
The course covers the history, culture and art of Russia and Eastern Europe (Hungary, Poland and the Czech Republic), as well as Estonia. In the process, students will understand and appreciate the domination and nationalism of the satellite countries.
●Learning Objectives
While watching videos about Russia,Eastern Europe and Estonia, students will be expected to develop the ability to put together appropriate sentences in a short time on the problems raised by the teacher. Students should attend classes with an awareness of problems and a critical perspective.
●Learning activities outside of classroom
Students should have the opportunity to re-watch the films, literary works, and music introduced in class. DVD software for movie works can be found in the AV library of the university or in the library of the Faculty of Intercultural Communication, and literary works can be borrowed at the library. Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Please take about a week to create the term-end report.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score (50％), Short reports (30％) and term-end reports (20％). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ARSa300GA（地域研究（ヨーロッパ）/ Area studies(Europe) 300）

ドイツ語圏の文化 I

林　志津江

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【近現代ドイツの歴史と文化】
ドイツ語圏のうち、主に近現代のドイツとオーストリアを扱います。18〜20世紀のドイツ語圏の人々のライフスタイルや価値観から、21世紀の日本に住む私たちがどのような示唆に与ることができるのでしょうか。この授業ではドイツ帝国の成立から二度の大戦、東西冷戦と東西ドイツ国家・ドイツ再統一に至る歴史を、文化現象と芸術作品を通じて概観します。

【到達目標】
1）近現代ドイツ語圏の歴史と文化に関する理解を深めるとともに、抽象的概念や文化に対する知的なアプローチの方法を学ぶ。
2）ナショナル・アイデンティティの実体や困難に対する思考・反省能力の涵養：「ドイツっぽい」と同様、「日本ならでは…」の正体もそこまで安心・確実なものではないかもしれません。
3）言語テクスト、文化現象や芸術の形式・分析の分析を通じて、抽象的な議論に慣れる：文化や芸術と呼ばれる現象を知的に理解し楽しめる能力は、人生を楽しく豊かに彩るため（だけ）にあるのではなく、むしろ21世紀の「グローバルな人」に求められる資質です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・18世紀後半〜20世紀のドイツ語圏における文化現象を、時系列に沿って扱います。
・各回、担当者による解説やテクスト講読を中心とする講義が中心ですが、適宜ペアワーク、グループワークの時間も設け、参加者が相互に授業内容の理解を深める機会を持ちます。
・LMSとしてGoogle Classroomを使用します。連絡手段として、学期を通じ法政Gメールをチェックしてください。
・授業内で行われたアウトプットに対しては授業の場でコメントします。提出物等のフィードバックは適宜、全体と個別に向けて行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	この授業について（オリエンテーション）
第2回	「皇帝」から「フォルク（Volk）へ」 — 「ドイツ人」って誰ですか	ハイドン『弦楽四重奏曲第77番ハ長調「皇帝」』／「神よ、皇帝フランツを守り給え」（1797年）／H. v. ファーラースレーベン「ドイツの歌」（1841年）
第3回	都市化するベルリン — 歴史を伝える絵画	メンツェル『ベルリン〜ポツダム鉄道』（1947年）／『サンスーシ宮殿でのフリードリヒ大王のフルートコンサート』（1850年）／『鉄圧延機工場』（1872-1875年）
第4回	革命あるいは父と息子の確執 — ヴィーンのワルツ・ビジネス	「リング」の建設／J. シュトラウス『ラデッキー行進曲』（1848年）／J. シュトラウス2世『美しき蒼きドナウ』（1867年）
第5回	自然への脱出（1） — 「芸術家」になるために	「青騎士」と「ブリュッケ」／O・ミュラー『水浴する風景』（1906年）、E.L. キルヒナー『ノレンドルフ広場』（1912年）、『ポツダム広場』（1914年）など
第6回	自然への脱出（2） — 徒歩旅行と合唱の「運動」	「現実から逃避したい」／感情と行動の共同体／「ヴァンダーフォーゲル」から「自由ドイツ青年」へ
第7回	審美眼から機能主義へ — 「バウハウス」の誕生	W. グロピウス『バウハウス宣言』（1919年）／G. ムヒェ「ハウス・アム・ホルン」（1923）／O. シュレンマー『トリアディック・バレエ』（1922年）など
第8回	女性と創造性（1） — 機械の時代の芸術	O. ディックス『大都会』（1927/28年）／C. シャート『ソーニャ』（1929年）／A. ザンダー『20世紀の人々』（1929年）など
第9回	女性と創造性（2） — 「デザイン」と「広告」	デッサウのバウハウス校舎（1925年）／バウハウスの織物工房・金属工房・タイポグラフィーと写真について
第10回	ナチの権力掌握とプロパガンダ（1） — 「ドイツ的な芸術」？！	「表現主義」をどう理解するか／「頽廃芸術展」と「大ドイツ芸術展」（1937年）
第11回	ナチの権力掌握とプロパガンダ（2） — 「ユダヤ系」の意味	ジャズとダンスホールの行方／「私は音楽がやりたいだけなので」？！
第12回	ドイツにモダニズムを取り戻す — 経済の奇跡と「過去の克服」	カッセルの「庭園見本市」から「ドクメンタ」へ／J. ボイス『7000本の樫の木』（1982-1987年）など
第13回	闘争の音・ベルリンの壁 — 「聴いてはいけない音楽」からのクラブカルチャー	Th. ブルスィヒ『太陽通り』（1999年）／「ラブ・パレード」（1989-2010）
第14回	まとめ	今学期のまとめ・筆記試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・授業内に配布されたプリント資料に、次授業までに再度目を通すこと。
・資料に記載の参考文献を読み、次授業に備えて準備すること。
・首都圏近郊の美術館（「キャンパス・メンバーズ」を活用）等で実際に様々な作品に触れること。

【テキスト（教科書）】
各回こちらからプリントを配布します。

【参考書】
・新野守弘・飯田道子・梅田紅子（編著）『知ってほしい国ドイツ』（高文研）2017年
・宮田眞治・畠山寛・濱中春（編著）『ドイツ文化55のキーワード』（ミネルヴァ書房）2015年
・木村靖二（編著）『ドイツ史（新版 世界各国史）』（山川出版社）2001年
・石田勇次編著『図説 ドイツの歴史（ふくろうの本）』（河出書房新社）2007年
その他、適宜授業内に提示します。

【成績評価の方法と基準】
・授業への積極的な参加と貢献・提出課題の作成（50%）
・筆記試験（50%）

【学生の意見等からの気づき】
学生からは逐次ヒアリングを行い、相互の意志の疎通に努めます。

【学生が準備すべき機器他】
筆記用具およびWiFiの受信可能なデジタルガジェット

【その他の重要事項】
・ドイツ語の知識（ドイツ語学習歴）の有無は問いません。ドイツ語のテクストを用いる場合は日本語訳を用意します。
・扱われる作品や順序は変更される場合があります。

【Outline (in English)】
This course introduces the art scene in German-speaking areas and countries from the end of the 19th century (modernism) to the present era. It deals with mainly fine arts (including architecture and handicrafts-design), theatrical arts as well as classical and popular music. In the course, we also focus on "Deutsche（German)" or "deutsch (German-like)" as concepts that we may feel we understand, but that are actually difficult to grasp without careful reflection. The work in this class will also lead us to reconsider general ideas and categorical ways of thinking, such as “Japanese,”“Japan,” or “Japanese-like.”
【Learning Objectives】
・To develop an understanding of a wide range of topics relating to life, culture and society.
・To be able to reflect on issues such as national identity or representational culture, express their own opinions and write texts of a certain length on the themes mentioned above.

ARSa300GA（地域研究（ヨーロッパ）/ Area studies(Europe) 300）

【2026年度休講】ドイツ語圏の文化 II

林　志津江

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ドイツ語圏の社会と人々の生活ぶりを、おもに18〜20世紀に成立した文学テクストや評論、文化現象をひも解きながら、歴史的に概観します。18〜20世紀のドイツ語圏の人々のライフスタイルや価値観から、21世紀の日本に住む私たちがどのような示唆に与ることができるのでしょうか。キーワードは ①愛国的ナショナリズム ②ジェンダー規範 ③住まいと身体／病 ④音楽とスポーツ の４点です。

【到達目標】
１）近代ドイツ語圏／ヨーロッパ諸国と日本との歴史的なつながりを理解するとともに、当該地域の歴史的・文化的事象を批判的に読解・検討することができる。
２）他者の声に耳を傾け、自身の思考を他者に伝える意思を持ち、適切な言説・文章（日本語）で表現することができる。
３）自らの外にある国・地域に関する考察の意義を知的に理解し、その営みを、自身の背負う文化の反省へと繋げることができる。
４）近代ヨーロッパに関する知識と理解が、近代の文明社会を問い直す方法、異文化間コミュニケーションの可能性の考察に繋がっていることを理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・時系列に沿って、特定の文化現象・文学／評論テクスト、芸術作品等を軸に、授業ごとのテーマに沿って考察と議論を行います。
・授業各回は、資料をスクリーンで投影しながらテーマと内容を確認します。芸術作品（音楽、図像、動画など）は授業中に、テクストの考察も授業内でみなさんと確認しながら進めます。
・授業終了後には小レポートを書き、自分の考えを言語化してまとめ提出します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス・前史	この授業について、「ドイツ語圏」ってどこ？ 何で「ドイツ」って言うの？
2	「女がコーヒーを飲むとはけしからん！」？	公共圏の生成と「コーヒーハウス」（W. A. モーツァルト『トルコ行進曲』／J. S. バッハ『コーヒーカンタータ』）
3	「音楽が流れる素敵な家庭」？	革命と国歌のための学校、音楽ってお金になるの？ 楽器とジェンダーの関係
4	「普通」「一般」「人間」って誰？	大学の建立・「若者」の夢見る世界（カント『啓蒙とは何か』など）
5	「体育」って何のため？	ポストナポレオン時代の軍隊制度・「カッコイイ兵士」と産む性の関係（ヤーン『ドイツ体操術』など）
6	私って「ドイツ人」だったの？	「母語」と「母国語」って違うの？（A. ドーデー『最後の授業』）
7	観光業と出稼ぎ（する女）の関係？	日光浴とサナトリウムと菜食主義者たちの世界（J. シュピリ『アルプスの少女ハイジ』など）
8	「清潔な水」？	大都市の発展と工業化の影で（森鴎外『舞姫』『独逸日記』・フォンターネ『迷誤あれば』）
9	「音楽で一体感」？	レコードとラジオの時代・「ヴァンダーフォーゲル」で発散させる反抗期
10	「第一次世界大戦でガラガラポン」？	「拡大路線」の終焉・第一次世界大戦下の食糧計画と「カブラの冬」
11	「OL」の誕生？	タイプライターと電話が変えたもの・「女子のための」商業教育コース（M. カレコ「月曜日にはちっぽけな勤め人」など）
12	「アメリカ」よりアメリカらしい？	ハイパーインフレと大不況、食品工業の興隆とエンターテイメント化するレストラン（I. コイン『人工シルクの女の子』その１）
13	法の庇護・「女の子」の真実？	性の解放と純愛の理想（I. コイン『人工シルクの女の子』その２／V. バウム『ホテルの人々』）
14	コーヒーの記憶ふたたび？	寒さと飢えとコーヒーの記憶・農芸化学産業の果てに（E. ケストナー『戦争日記』／H. ファラダ『ベルリンに一人死す』／I. コイン『この夜を超えて』）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。
・毎授業ごと、自分の考えをまとめた小レポートを作成・提出します（提出課題）。
・授業内に配布されたプリント資料に再度目を通す。
・資料に記載の参考文献を読み、次授業に備え準備する。

【テキスト（教科書）】
・授業ごと、担当者から資料を配布します。

【参考書】
・臼井隆一郎『コーヒーが巡り世界史が巡る 近代市民社会の黒い血液』（中央公論新社）1992年
・木村靖二（編著）『ドイツ史（新版 世界各国史）』（山川出版社）2001年
・石田勇次編著『図説 ドイツの歴史（ふくろうの本）』（河出書房新社）2007年
・F. ホフマン（阪井葉子、玉川裕子訳）『楽器と身体 ― 市民社会における女性の音楽活動』（春秋社）2004年
・川越修・辻英史（編）『社会国家を生きる： 20世紀ドイツにおける国家・共同性・個人』（法政大学出版局）2008年
・渡辺裕『歌う国民 ― 唱歌・校歌・うたごえ』（中央公論新社）2010年
・美留町義雄『鴎外のベルリン ― 交通・衛生・メディア』（水声社）2010年
・藤原辰史『ナチスのキッチン「食べる」ことの環境史』（水声社）2012年
・新野守弘・飯田道子・梅田紅子（編著）『知ってほしい国ドイツ』（高文研）2017年
・宮田眞治ほか編著『ドイツ文化55のキーワード』（ミネルヴァ書房）2015年
・弓削尚子『はじめての西洋ジェンダー史 家庭史からグローバルヒストリーまで』（山川出版社）2021年
・D. ランゲヴィーシェ（飯田芳弘訳）『統一国家なき国民 ― もう一つのドイツ史』（みすず書房）2023年
その他、適宜授業内に指示します。

【成績評価の方法と基準】
・授業への積極的な参加と貢献（議論）・小レポート（提出課題）（70%）
・学期末レポート（30%）
以上の合計で総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
・学生からは逐次ヒアリングを行い、相互の意志の疎通に努めます。

【学生が準備すべき機器他】
・筆記用具およびWiFiの受信可能なデジタルガジェット

【その他の重要事項】
・ドイツ語の知識（ドイツ語学習歴）の有無は問いません。ドイツ語のテクストを用いる場合は日本語訳を用意します。
・扱われる作品や順序は変更される場合があります。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course introduces cultural phenomena of german-speaking world, especially Germany in 19. and 20. century. The course deals with some cultural scene exclusively life and culture in modern German-speaking area and countries, especially Prussia with focusing on the way of living and Gender norms - for examples health care and body consciousness, infection and biomedicine, modern western music and sports and that all related with in the era of modernism. Students would understand meaning and points of topics and analyze handled issues through discussions, as thinking about its impact on our present-day society.
【Learning Objectives】
To develop an understanding of a wide range of topics relating to life, culture and society.
To be able to express their own opinions and to write texts of a certain length about themes above.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】
The standard preparation and revision time for this course is at least two hours each. There are prescribed review tasks.
【Grading criteria】
The course will be judged on the basis of a combination of 70% of ordinary marks (active participation and contribution to the class) and 30% of submitted assignments as prescribed review tasks.

PHL200GA（哲学 / Philosophy 200）

【2026年度休講】フランス語圏の文化Ⅰ（思想）

大中　一彌

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ア〉〈ダ〉〈未〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
［授業の目的］この授業では、17世紀を中心とするフランスの思想や文化をめぐり、いくつかの作品を概観します。この時代は、その後、グローバルに広がっていく近代社会の基本的な枠組が ― よくも悪くも ― 西ヨーロッパにおいて形づくられた時代です。この時代についての知識を得て、考えを深めることは、受講者自身がさまざまな文化に関して抱いている価値観を、より奥行きのある、洗練されたものにしていくのに役立ちます。
［授業の概要］
※世界史を大学受験のさいに選ばなかった人を念頭に置きつつ、基礎知識を補う意味で、やや長めに「授業の概要」を以下に記述します。
●デュビィ&マンドルー『フランス文化史』Ⅱによれば、17世紀前半のフランスは、ひとりの人間にたとえるなら「青春時代」のような状態にあった。ジャック・カルティエが「カナダ」と呼び、16世紀に探検した北アメリカの土地へは、17世紀に入ると交易やフランスからの入植が進められた。
●同じ頃、活版印刷と結びついて西ヨーロッパに広がった宗教改革は、伝統的なカトリック教国のフランスにも、プロテスタントの信仰を浸透させた。この浸透の結果もたらされた悲惨な宗教戦争を、ナントの勅令（1598年）により収拾したのはブルボン朝の創始者アンリ４世である。これに続く17世紀前半は、若々しさを連想させる経済社会の成長を基調としながらも、成長ゆえにカトリック教会を含む従来の秩序がゆらいだ時代でもあった。
●同時代の哲学者ルネ・デカルトは、迷信や思い込みに囚われた人間の意識のあり方を疑い、知識の確実な基礎を、数学や自然科学を支える合理精神のなかに、むしろ見いだした。
●同じく17世紀の哲学者パスカルの「人間は一本の葦に過ぎない、だがそれは考える葦である」という言葉は、環境に左右されやすく傷つきやすい肉体の弱さと、無限の宇宙をも分析しうる知性がもつ尊厳のあいだで、揺れ動く人間の姿をよく特徴づけている。
●17世紀から18世紀前半にまたがるルイ14世の治世は、フランス史において「偉大な世紀」と呼ばれる。政治面においてはいわゆる絶対王政、文化面においてはいわゆる古典主義をつうじて、それぞれの領域における秩序の完成が目指された。
●ナントの勅令の廃止（1685年）によりカトリック教国としての純化を図り、宗教的寛容で知られた当時随一の商業大国ネーデルラント（オランダ）を屈服させようとしたルイ14世の力の基盤となっていたのは、フランスの人口の多さ（約2000万人）にくわえ、国内における強力な徴兵・徴税制度といった、リシュリューやマザラン、コルベールら、王権に仕えた実務家たちがつみあげた成果のうえにできた、集権的な世俗の国家であった。
●また、文化面における古典主義は、こうした国家から庇護を受け、ルイ14世という君主の栄光を讃美する（現代でいう）プロパガンダの面を確かにもっていたが、ヨーロッパの多くの宮廷が模倣するような対外的影響力も実際に有していた。
●イギリスやオランダとともに、いわゆる啓蒙思想の震源地であったこの時代のフランスの哲学者たちは、国境を越えた「文芸の共和国」のなかで活動しており、ルイ14世により確立された集権的な専制政治や、宗教における純化志向がもたらしがちな狂信に対して、しばしば批判的であった。

【到達目標】
１．人が学び、成長し、より洗練された文化がかたちづくられていく際に、「古典」が果たしうる役割について、大学生にふさわしい建設的な意見を述べることができる。
２．「オリエンタリズム」や「ヨーロッパ中心主義」のような、基本的にはヨーロッパの外側からする定型的な批判にとどまることなく、異文化としての17世紀フランスを、ある程度内側から見る、個別の作品に即した理解をもったうえで、みずからの考えをまとめることができる。
３．ヨーロッパの近世芸術におけるギリシア・ローマの神々のモチーフの重要性や、モンテーニュやデカルトに見られる、旅行を通じ、みずからが生まれ育った文化（「自文化」）を相対化する視点に着目しながら、17世紀フランスにおける、さまざまな宗教や宗教批判のあり方について、「一神教は不寛容」「多神教は寛容」といったステレオタイプに陥らずに、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・この授業は基本的に「対面」です。
・学生からの書き込み等に対するフィードバックは、基本的に授業時間内に行いますが、学習支援システムやGoogle Classroomを利用する場合があります。
・授業内容の録画や録音の一部、ならびに授業時間内に扱い切れなかった内容を補足する動画を、受講者のみが視聴できる形で共有する場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	シラバスと毎回進行表の説明	この授業での学び：古典と「古典主義」。チャールズ英国王のフランス語スピーチ
第2回	フランスにおけるルネサンス	16世紀：お手本としてのイタリアの芸術
第3回	国民性としての「古典主義」というストーリー	「フランス精神」の理想は、明晰（めいせき）・判明なデカルト的合理主義、と伝統的に主張されてきた。古典主義と合理主義の結びつきに関するフーコーとデリダの対比
第4回	デカルトと「悪しき霊」	私や世界は実在すると、ほんとうに言えるのか？　あなたは悪しき霊（an evil genius）にだまされて、夢やまぼろしを現実と取り違えているだけではないのか？
第5回	遠近法と劇のなかの劇	デカルトは『屈折光学』で動物実験から網膜には我々が見る対象と似た「絵」（画像）が観察されると確認していた。フランス式の庭園とは、「光学とだまし絵の新しい法則」が活かされる、スペクタクルの空間である。
第6回	コルネイユ『舞台は夢』	原題はイリュージョン・コミック。全ては幻影なのか、それともむしろ、フィクションこそが人生の学校なのか？
第7回	絵画における古典主義	ワインと血、ダンスにあふれる若きプッサンの絵画。晩年のプッサンの作品《春》で神はどちらを向いていたか？
第8回	《王は踊る》	沼地に囲まれた小さな城館に過ぎなかったヴェルサイユが、ダンス好きの君主ルイ14世により、権力と芸術のための一大装置と化しました。

第9回	宮廷社会の成立	日本にも「すまじきものは宮仕え」という表現がありますが、王様の恩顧を得ようと競うフランスの宮廷社会でも、洗練された貴族の作法を身につけていないと生き残れなかったようです。
第10回	ヴァニタスと神の恩寵	シャンペーニュの絵画《ヴァニテ、あるいは人生の寓意》では、生命を象徴する赤い花のとなりに頭蓋骨と砂時計が置かれます。その意味とは？
第11回	モラリストと仮面	モラリストの「寓話」や「箴言（しんげん）」はしばしば挫折の経験を昇華したもの。子ども向けの寓話だからと、あなどるなかれ。
第12回	幾何学的な無限と「考える葦」	デカルトと並び、17世紀フランスを代表する思想家のパスカル。今でもヘクトパスカル（hPa）などの物理分野の単位に名を残しています。
第13回	パスカルの賭け	「私たちには、神が何であるかも、果たして存在するかどうかも、知ることができない…だが賭けなければならない」。あなたなら、神の存在、神の不在、どちらに賭けますか？
第14回	サン・テグジュペリ『人間の大地』（1939年）	「１人の痩せたパスカルを生み出すことは、金回りの良い月並みな人間を数名誕生させることよりよほど大事なことだ。」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
（ア）毎回、授業にたいするコメントの執筆をお願いいたします。
（イ）（ア）以外で、希望する受講者が授業内容にかんする話題提供を行った場合、積極的な参加態度として加点いたします。指定するLMS（学習支援システム-Hoppiiの掲示板かGoogle Classroomのストリーム＞コメント）に、文章やリンクを貼り付けてください。
（ウ）この授業の準備や復習に必要な学習時間は、提示された資料や映像を検討したり、上記（ア）（イ）を行ったりするのに必要な時間とします。日本語やその他の言語の習熟度が異なる多様な学生が履修する授業であるため、一律の時間の長さは掲載しませんが、大学設置基準に鑑みた場合、２単位の講義及び演習の準備・復習時間は１回につき４時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】
・教科書を買う必要はありません。
・シラバスの【授業計画】に示されている内容にかんする資料を毎回配布します。
・なお【授業計画】のより詳しい説明を、次のリンク先に置いてあります（Excelファイル）https://x.gd/nmWv1

【参考書】
参考となる映像作品：
パトリス・シェロー監督『王妃マルゴ』1994年。
ジェラール・コルビオ監督『王は踊る』2000年。
エリック・ロメール監督『モード家の一夜』1969年。
ロジェ・ヴァディム監督『ドンファン』1973年。
参考となる音楽作品：
夜の王のコンサート（夜の王のバレエに基づく）※原題"Le Ballet Royal de la Nuit"で検索してみてください。

【成績評価の方法と基準】
（ア）期末試験：実施しない（0%）
（イ）期末レポート：実施しない（0%）
（ウ）コメントシートの提出の有無および質（80%）
※各回10点満点、学習支援システム> テスト/アンケート機能から同じ週の土曜日午前09時00分00秒までに提出
（エ）平常点（20%）
※授業参加者数によるが、座席表に記入してもらうといった形を想定している。
（オ）その他（学生による話題提供、授業運営への協力、講師のミスの指摘を想定）
※（ウ）と（エ）の合計100%の枠外で5～20%の加点を行う。
※なんらかの障がいや疾患、メンタルな面を含むハンディキャップなど、諸事情により対面授業に参加することが困難な方は、法政大学障がい学生支援室に「就学上の配慮」をできるだけ早い時期に求めてください。「就学上の配慮」が認められた場合は、障がい学生支援室から担当教員に連絡が来ますので、代わりとなる課題に取り組んでいただきます。
※この科目が開講されている期間中に「学校保健安全法に定める感染症」に感染した方は、所属する学部に連絡し「感染症等に係る授業欠席等配慮願」を受け取ってください。そして、所属する学部が発行する「配慮願」を担当教員にご提出ください。学生側の都合による欠席とは異なる、感染拡大防止のための出席停止として扱います。

【学生の意見等からの気づき】
・過剰な学習負担とならないよう配慮しています。
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・問い合わせ先や、この授業で扱う範囲（17世紀のヨーロッパ）に関係する画像たちを、次のリンク先に置いておきましたので、ぜひご覧ください（Wordファイル） https://x.gd/cnNQC

【学生が準備すべき機器他】
資料の配布や学生側からの情報の提示など、さまざまな連絡は、基本的にすべてウェブ上（学習支援システム-Hoppii等）で行ないます。そのため、スマートフォンやタブレット、できればノートパソコンのような、情報端末が必要です。

【その他の重要事項】
※国際文化学部をはじめとする法政大学市ヶ谷キャンパスの各学部の学生だけでなく、社会学部・経済学部・現代福祉学部・スポーツ健康学部など多摩キャンパスの学生、情報科学部や生命科学部など小金井キャンパスの学生、外国人留学生や社会人学生の履修を歓迎します。
※千代田区キャンパスコンソの加盟校（大妻女子大学、大妻女子大学短期大学部、共立女子大学、共立女子短期大学、東京家政学院大学、二松学舎大学、専修大学）の学生の皆さんの履修を歓迎しています。
※この「フランス語圏の文化Ⅰ（思想）」における使用言語は日本語ですが、文化や社会にかんする内容を扱い、かつ、フランス語の学習を主な目的とする科目に「時事フランス語Ⅰ」（ https://x.gd/pdJmh ）「時事フランス語Ⅱ」（ https://x.gd/Eqqfz ）があります。語学の面も含めて学習したい方は、「時事フランス語」の履修をご検討ください。
※現代のヨーロッパ、特にその移民社会としての側面に、興味・関心のある方は、サマーセッションで開講される「教養ゼミⅠ『移民社会』入門～見える国境と見えない国境～（８月上旬）」（ https://x.gd/bp4JW ）やオータムセッションで開講される「教養ゼミⅡ『ポピュリズム』入門～トランプ氏が再登場した世界
で～（９月中旬）」（ https://x.gd/benIb ）をぜひ履修しましょう。人物や映像作品を軸に、各学部・学科の専門課程で学ぶのとは異なる視点から、いわゆる社会人の教養として求められる、現代の政治・社会・文化にかんする学びを、初学者が体験できるコースになっています。
※国際文化学部の学生で、ヨーロッパの文化的な側面に関心がある方は、大学院国際文化研究科で水２限に開講されている「多言語社会論A」（ https://x.gd/RI11D ）「多言語社会論B」（ https://x.gd/IYbfj ）を履修できます。2025年度は「青の政治学」がテーマです。「青」という色を導きの糸として、言語だけでなく、美術やファッションをふくめた、ヨーロッパ地域における文化と社会のかかわりについて見ていきます。

【Outline (in English)】
[Course outline]

This course offers students an introduction to 17th century French thought, highlighting links with literature, theater, architecture, and science. Students will read excerpts of texts and view films and paintings to get an idea of this historical period that the French often call "The Great Century" (Grand siècle). The 17th century was "great" not only because the Kingdom of France was at the peak of its power under the reign of Louis XIV, but also because philosophers like Blaise Pascal made insightful observations about the tragic nature of the human condition ("Man is only a reed, the weakest in nature; but he is a reed that thinks."). Proficiency in French is not required for this course but written assignments and oral participations in Japanese will be required.
[Learning Objectives]
1. Gain an overview of representative works of French thought and culture of the 16th and 17th centuries through the reading of the texts in each session.
2. Foster the ability to identify, without stereotyping, the themes contained in the characters and works of each text.
3. Develop each student's own ideas about the relationship between power and justice, and between religious fanaticism and violence.
[Learning activities outside of classroom]
(a) No preparation is required.
(b) Students may be asked to write comments on the class.
(c) Students who wish to contribute topics related to the class content other than (b) will receive points for their active participation. Please paste the text or link to the designated LMS (Learning Support System-Hoppii's Discussion Board or Google Classroom's Stream > Comments).
(d) The study time required for preparation and review of this class will be the time needed to study the materials and videos presented and to do (b) and (c) above. Since this is a class for diverse students with different proficiency levels in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be specified, but in accordance with the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for each 2 credit lecture and seminar should be at least 4 hours per session.
［Grading Criteria］
(a) Final Examination: Not conducted (0%)
(b) Final Report: Not conducted (0%)
(c) Submission and Quality of Comment Sheets (80%)
Each submission is graded on a 10-point scale per session. Comment sheets must be submitted via the Learning Support System > Test/Survey function by 9:00 a.m. on the Saturday of the same week.
(d) Class Participation (20%)
The evaluation method may vary depending on the number of participants. For example, students may be asked to fill in a seating chart.
(e) Others (e.g., student-led topic presentations, cooperation in class management, pointing out instructor's errors)
An additional 5－20% may be awarded beyond the combined total of (c) and (d), which accounts for 100% of the base grade.

ART200GA（芸術学 / Art studies 200）

【2026年度休講】フランス語圏の文化 II （芸術）

岡村　民夫

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ア〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代フランスの絵画・写真・映画の歴史を概観し、芸術的・社会的な意義を学びます。

【到達目標】
エポック・メイキンギな芸術家や流派、作品の名前などを覚え、その歴史的意義や社会背景を説明できるようになります。鑑賞力もアップします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と関連作品の鑑賞・分析を交互に行います。
コメントシートに関するフィードバックは授業内やhoppiiで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	講義のオリエンテーション
第2回	フランス古典主義	ヴェルサイユ宮殿 ロラン プッサン
第3回	新古典主義とロマン主義	ダヴィッド、アングル ドラクロワ
第4回	近代絵画のはじまり	写真の普及 写実主義 マネとボードレール
第5回	印象主義	モネ、ルノワール、ロダン
第6回	ポスト印象主義	スーラ、ゴーギャン、ゴッホ、セザンヌ
第7回	映画の誕生	リュミエール兄弟、メリエス
第8回	アヴァンギャルド１（キュビスム、フォーヴィスム、機能主義）	-ピカソとマチス -ドローネーの抽象絵画 -ル・コルビュジエの建築
第9回	アヴァンギャルド２（ダダイスム、シュルレアリスム）	-デュシャン -エルンスト、ダリ
第10回	エコール・ド・パリと詩的レアリスム	-ユトリロ、藤田 -カルネ、ジャン・ルノワール
第11回	パリ写真	-アジェ、ブラッサイ、カルチエ=ブレッソン
第12回	ヌーヴェル・ヴァーグ	-トリュフォー、ゴダール
第13回	補遺	これまで取り上げられなかった重要芸術家 期末試験の説明
第14回	期末試験	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
配布される資料を授業後によく読み復習すること。講義対象になった映画を自分で鑑賞することが望ましい。途中で、国立西洋美術館（上野）の常設展（無料）の観賞ミニ・レポートを課します。
本授業の復習時間は１時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントで代用します。

【参考書】
中条省平『フランス映画史の誘惑』集英社新書
そのほかは随時挙げます。

【成績評価の方法と基準】
コメントシートやミニ・レポートによる平常点（50％）＋期末試験（50％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
国立西洋美術館（上野）の常設展（無料）の観賞ミニ・レポートを課す。

【Outline (in English)】
【Course outline】We take a general view of history of French fine art, photography and movie.
【Leaning Objectives】The aim of this course are to know the outline of history of Morden French Arts, and to have an appreciation of great works.
【Learning activities outside of classroom】Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be one hours for a class.
【Grading Criteria/Policies】Your overall grade in this class will be decided based on the following:
Term-end examination(50%), In-class contribution (50%)

LIT200GA（文学 / Literature 200）

フランス語圏の文化III（歴史）

ル　ルー　清野　ブレンダン

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈ア〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業ではフランス語圏の歴史を，フランスの植民地帝国という導きの糸に沿って，様々なテーマについて考えながら勉強していきます。現在の「フランス語圏」（pays / régions francophones）のほとんどがフランスの植民地帝国にその由来をたどることができますので，フランスの植民地帝国を勉強することにより世界各地に広がるフランス語圏の諸地域との関係性が明らかになるはずです。

【到達目標】
この授業では，学生達はフランスの植民地帝国を導きの糸にフランス語圏の歴史に関する様々な側面を探求したり，論じたりします。 授業終了時には，それらのトピックに関する様々な概念や問題点を深く理解し，以下のことができるようになるでしょう。
①フランスの植民地帝国について基本的知識を獲得し，説明できる。
②植民地の概念を概ね理解できる。
③世の中の動きを歴史的に考えるための視点を獲得する。
(④フランス語圏への留学に備える。)

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この授業では，学生達は様々な資料(歴史的文章，論文，図や絵画など)を分析し，それについて議論したり，質問に答えたりします。教員は重要な事実や概念を説明するためにスライドを使用し，できるだけ双方向的かつ参加型にする予定です。学生達はグループワーク等を通じて学生同士で協力して資料を理解し，質問に答えることで，フランスの植民地帝国を導きの糸にフランス語圏の歴史に関する共通の知識を築いていくことを目指します。
この授業では，学生同士そして学生と教員とのやりとりは基本的に日本語で行われます。従って，履修者は大学レベルの日本語の基礎知識を持っていることが期待されます。しかしこの授業を受講するのに完璧な日本語力が必要ではありません。必要に応じて，難しい用語などを英語で補足説明をします。歴史や資料，特にフランスの植民地帝国及びフランス語圏の歴史に興味があることはこの授業を履修する大きな同期付けと言えましょう。
また，「フランス語圏の文化」という授業題名ですので使用する資料の多くはフランス語になりますが，必ずしもそれらを完璧に読解する必要はありません（並行して訳文を使う場合もあります）ので，フランス語の能力というよりはフランス語（圏）への興味が重要です。
この授業で成功する鍵は，毎週の予習と復習，そしてクラスでのグループワーク等のアクティビティに積極的に参加することです。
課題や質問事項等に関するフィードバックは基本的に授業時間内に行いますが，Hoppii を通じて行う場合もあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
①	授業紹介 植民地とは何か①	シラバスの確認 授業運営の紹介 植民地の定義，概要
②	植民地とは何か②	植民地の類型①
③	植民地とは何か③	植民地の類型②
④	植民地とは何か④	植民地（化）は過去の現象なのか？
⑤	フランス植民地帝国の名残①	オランジーナ
⑥	フランス植民地帝国の名残②	バナニア，ビスケット，遊園地
⑦	フランス植民地帝国の名残③	北米の地名
⑧	まとめと中間テスト	「植民地とは何か」及び「フランス植民地帝国の名残」（前半）
⑨	フランス植民地帝国の名残④	言語状況について①北米①
⑩	フランス植民地帝国の名残⑤	言語状況について②北米②
⑪	フランス植民地帝国の名残⑥	言語状況について③アフリカ
⑫	Nouvelle-France開拓への道①	「新」大陸への探検
⑬	Nouvelle-France開拓への道②	「新」大陸の探検と開拓
⑭	まとめと期末テスト	「フランス植民地帝国の名残」（後半）及び「Nouvelle-France開拓への道」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
予習，復習，課題や発表の準備が毎回求められます。
大学設置基準によれば，２単位の講義及び演習の準備・復習時間は１回につき４時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】
授業中に配布しますので，教科書を購入する必要はありません。

【参考書】
Pierre Singaravélou (dir.), "Colonisations. Notre histoire", éditions du Seuil, 2023
それ以外の参考書については必要に応じて授業中に指摘します。

【成績評価の方法と基準】
・中間テスト：30％
・期末テスト：30％
・発表やリフレクションシートなどの課題：20 ％
・平常点（授業への参加状況）：20 ％
※ 尚，平常点に関しては減点方式をとり，4回目の欠席で不合格となります。10分以上の遅刻は2回で欠席扱いとなり，遅延証明は2回まで認めます。何らかの理由で欠席した・する場合は，直ちに教員にメール等で連絡して説明すること。

【学生の意見等からの気づき】
学生の意見等を読み，工夫する必要のある点は特に明記されていないように思いました。改善は全くしない，という意味ではないのですが！

【学生が準備すべき機器他】
前もって合意した特別な状況以外は，授業中の電子機器（スマホ，パソコン等）の使用を認めません。ただし，資料を解読するための電子辞書の使用は認めます。

【Outline (in English)】
The main purpose of this course is for students to acquire knowledge and think about the history of the French colonial empire. One other purpose is for the students to learn about and use methods to read and analyse diverse categories of documents, written mainly in French.
It is not a goal of this course to acquire proficiency in Japanese, or any other language, therefore students are welcome whatever their language proficiency is.
Students will deal with reading (or watching...) various documents, study the vocabulary, and will discuss these and try to answer questions about them.
The format of the course will be as interactive and participatory as possible, with the help of screened slides in order to explain important facts and/or concepts. Classes will focus on group work, cooperation between students to understand the texts and answer questions, in order to build a common knowledge about the the history of the French colonial empire and its links to the "francophone" world.
The key to success in this course is weekly preparation and review of the class content, and active participation during class discussion.
The grading criteria shall be as follows:
・Mid-term exam: 30%
・Final exam: 30%

・Presentations, reflection papers, and/or other activities: 20 %
・Class participation: 20%

ARSa200GA（地域研究（ヨーロッパ）/ Area studies(Europe) 200）

フランス語圏の文化Ⅳ（複言語・複文化社会）

廣松　勲

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ア〉〈ダ〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
世界5大陸に広がるフランス語圏（フランコフォニー）社会を「複言語・複文化社会」と捉えた上で、それぞれの社会において複数の言語文化が、どのように共存しているのか、またはどのように軋轢が解消されているのかを論じる。
具体的には、カリブ海域諸島、カナダのケベック州、北アフリカ・マグレブ、サハラ以南アフリカ、フランス語圏ヨーロッパなどにおける言語・社会状況を解説することで、フランス語圏社会の普遍性と差異を提示する。

【到達目標】
(1) フランス語圏社会が複言語・複文化が共存する社会であることを具体的に知ること。
(2) 言及する各社会において、言語・文化の多様性がどのようにして維持されているのかを知ること。
(3) 言及する各社会において、「現地言語・文化」と「フランス語・文化」とが、どのような関係にあるのかを述べられるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
日本語で行われる講義形式の授業である。フランス語の予備知識は特に必要としない。
2〜3コマごとに言及する地域を変更しながら、それぞれの地域特性（歴史・政治・社会・言語状況など）を解説する。紙媒体の配布資料の他に、映画や音楽も参照しながら、具体的に各地域のフランス系文化について説明を行う。
毎回の授業においてコメントシートを執筆・提出してもらい、できるだけ次回以降の授業に反映させる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・授業の概要や評価の説明 ・「フランス語圏（フランコフォニー）」とは、いかなる概念なのか？ ・具体的なフランス語圏地域の解説
2	Ⅰ．カリブ海域諸島①	・カリブ海域諸島の歴史、社会および言語状況の説明 【マルチニック島】 ・フランス語とクレオール語の関係
3	Ⅰ．カリブ海域諸島②	【グアドループ島】 ・クレオール語の地位復権運動
4	Ⅰ．カリブ海域諸島③	【クレオール文学運動】 ・クレオール語表現文学の可能性 ・その他の島々とのつながり
5	Ⅱ．カナダ・ケベック州①	・北米大陸の歴史、社会および言語状況の説明 【ケベック】フランス系カナダ人からケベック人へ ・フランスのフランス語とケベックのフランス語の関係
6	Ⅱ．カナダ・ケベック州②	【ケベック】：インターカルチャーとトランスカルチャー ・母語とフランス語の関係
7	Ⅱ．カナダ・ケベック州③	【移動するエクリチュール】 ・その他の北米フランス語圏とのつながり
8	Ⅲ．マグレブ（北アフリカ諸国）①	・マグレブの歴史、社会および言語状況の説明 【アルジェリア】 ・アラビア語、ベルベル語、フランス語の関係
9	Ⅲ．マグレブ（北アフリカ諸国）②	【モロッコ】 ・アラビア語、ベルベル語、フランス語の関係
10	Ⅲ．マグレブ（北アフリカ諸国）③	【チュニジア】 ・アラビア語、ベルベル語、フランス語の関係
11	Ⅳ．サハラ以南のアフリカ①	・サハラ以南のアフリカの歴史、社会および言語状況の説明 【セネガル】 ・アフリカ諸語とフランス語との関係
12	Ⅳ．サハラ以南のアフリカ②	【ルワンダ、コンゴ民主共和国】 ・アフリカ諸語とフランス語との関係
13	Ⅴ．ヨーロッパのフランス語圏①	・ヨーロッパのフランス語圏の歴史、社会および言語状況の説明 【ベルギー】 ・フランス語、フラマン語、ドイツ語の関係
14	Ⅴ．ヨーロッパのフランス語圏② 総括	【スイス】 ・フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロマンシュ語の関係 【総括】 全体のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
期末レポート作成のためでもあるが、日頃から文学・映画・音楽・言語政策など、できるだけ多くフランス語圏の情報を収集すること。
授業で言及・提示する資料の邦訳（可能であれば原典）などにも当たり、できるだけ理解を深めること。
本授業の準備学習・復習時間は合計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・特になし。
・毎回、関連資料を配布する。

【参考書】
授業内容の理解やレポート作成の際に参考となる書籍や図書館の蔵書を、以下に挙げる。希望者には、さらに詳しく参考書などを提示する。
・鳥羽美鈴著,『多様性の中のフランス語：フランコフォニーについて考える』関西学院大学出版会，2012年.
・平野千香子著,『フランス植民地主義の歴史』人文書院，2002年.
・中村隆之著,『カリブ－世界論』人文書院，2013年.
・小畑精和著,『ケベック文学研究』御茶の水書房，2003年.
・明治大学中央図書館所蔵の「ケベック文庫」
・鵜戸聡著,「アラブ・フランコフォニーと越境の文学」『反響する文学』（土屋勝彦編，名古屋市立大学『人間文化研究叢書』創刊号），風媒社，2011年.
・梶茂樹・砂野幸稔編著,『アフリカのことばと社会：多言語状況を生きるということ』三元社，2009年.
・岩本和子著,『周縁の文学：ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社，2007年.
・法政大学多摩図書館所蔵の「スイスロマンド文学コレクション」

【成績評価の方法と基準】
・評価配分は、以下の通り
①平常点（コメントシートなど）：30％
②期末レポート：70％
・評価は、主に平常点と期末レポートによって行う。レポート作成については、各自がいずれかの地域（または国）における資料や作品を一つ選んだ上で、複数の言語や文化がどのような方策によって共存しているのかを論じてもらう。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
配布資料に基づいた説明が緩慢にならないように、できる限り映像・音声資料なども盛り込むことでメリハリをつけるようにする。

【その他の重要事項】
フランス語の知識は前提としません。

【Outline (in English)】
This course aims to enhance understanding of the situation of the French-speaking world (la francophonie) in focusing on the social problems concerned with French language. For this purpose, we will learn from a global perspective about the history and social situation of each countries or regions around the world.
The goals of this course are to understanding and explaining the socio-cultural situation of each French speaking regions.
Before and after each class meeting,students will be expected to spend four hours to read the relevant documents.
Your overall grade in the class will be decided based on th folloing:
in class contributions: 30%, term-end reports: 70%.

HUMc200GA

北米文化論（ケベック講座）

廣松　勲

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ア〉〈ダ〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、ケベック州政府の寄付講座である。
本授業は、北米のフランス語圏の一つである「カナダのケベック州」をフィールドとして、オムニバス形式で、各分野の専門家や招聘作家・研究者が担当する授業である。言語・文化・歴史・社会・政治といった包括的な側面から、現代のケベック社会を学ぶことによって、一つの地域において複数の価値観（言語、文化、歴史、政治、経済、社会など）が共生する方法を解説・検討することを主たる目的とする。
なお、具体的な授業内容や講演者については、初回授業において改めて通知するため、以下の「授業計画」は予定であることをご理解いただきたい。

【到達目標】
本授業の到達目標は、以下の通りである。
①フランス語圏の一例として、ケベック州の社会文化的状況を概説できる。
②多文化・多言語共生の一例として、ケベック州の社会文化的状況を概説できる。
③一つのフィールドを複数の観点から理解するという方法を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
オムニバス形式の授業によって、できるだけ包括的に「現代のケベック社会」に関する紹介・説明・分析を行う。
具体的な授業の進め方は、以下の通りである。最初と最後の数回の授業（3回程度）では、一人の教科担当者が「導入」や「総括」などを行う。それ以外の授業（11回程度）については、各分野の専門家の先生方などが授業を行うことになる。その内、少なくとも一度は、ケベック州からの招聘研究者による授業内の講演会を実施する（通訳付き）。
なお、毎回授業ではコメントシートを作成・提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	・イントロダクション：フランコフォニーとは何か？	・授業の進め方や最終課題について説明 ・フランス語圏（フランコフォニー）の歴史・社会・言語状況などについて概説
第2回	ケベック州の歴史① ・北米大陸のフランス語圏（フランコフォニー）の広がり ・ケベック州とはどのような地域なのか？	・ケベック州の歴史に注目しつつ、社会状況を概説する
第3回	ケベック州の歴史②	・ケベック州の歴史をより詳しく学ぶ
第4回	ケベック州の地理	・ケベック州の地理を学ぶ
第5回	授業内の講演会	・ケベック州の政治・歴状況を当事者から学ぶ
第6回	ケベック州の言語	・ケベック州の言語状況を包括的に学ぶ
第7回	ケベック州の政治①	・ケベック州の政治状況を具体例に基づいて学ぶ。
第8回	ケベック州の政治②	・ケベック州の政治状況を理論的に学ぶ。
第9回	ケベック州の社会問題①	・ケベック州の社会問題を具体例に基づいて学ぶ（主権獲得を巡る問題など）。
第10回	ケベック州の社会問題②	・ケベック州の社会問題を具体例に基づいて学ぶ（移民や宗教に関わる問題など）。
第11回	ケベック州の文化①	・ケベック州の文化を具体例に基づいて学ぶ（舞台芸術など）。
第12回	ケベック州の文化②	・ケベック州の文化を具体例に基づいて学ぶ（文学・映画など）。
第13回	ケベック州の文化③	・ケベック州の文化を具体例に基づいて学ぶ（音楽・ダンスなど）。
第14回	総括	・本授業の全体のまとめ ・映像資料などを用いて、現代ケベック州の社会を知る。 ・期末レポートの提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・毎回の授業をより深く理解するために、日頃からできるだけ広く・複合的な視点からケベック州（やカナダ）に関する情報を集めてほしい。
・期末レポート執筆のために、配布資料についても熟読してほしい。本授業の準備学習・復習時間は合計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・テキストは指定しない。各授業において資料などを配布する。

【参考書】
・各分野の参考書は、各授業において提示する。
・全体的な導入となる書籍としては、以下がある。
小畑精和・竹中豊編著『ケベックを知るための56章【第2版】』エリアスタディーズ・72巻，明石書店，2023年.

【成績評価の方法と基準】
・平常点と期末レポートに基づき、総合的に評価する。
①平常点（コメントシートなど）：40％
②期末レポート：60％
・期末レポートでは、本授業で扱われたいずれかの専門分野・側面を参照しつつ、自ら選択したテーマについて論じてもらう。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・14回という少ない回数だが、授業内容について、可能な限り多様になるよう心がける。
・質疑応答の時間を、可能な限り長く設けるようにする。

【その他の重要事項】
・第一回授業において、各授業の担当者・内容などを記載した資料を配布するため、必ず出席してほしいです。
・毎年度秋学期に開講予定の授業ですが、ケベック州政府寄付講座であるため、事情によって「閉講」となる年度もありえます。

【Outline (in English)】
This course introduces the key themes for a deeper understanding of the socio-cultural situation of the province of Québec (Canada). In 14 courses, we will deal with a variety of themes or problematics of the contemporary Québec (politics, social problems, economics, music, cinema, literature, etc). Each course will be given by the specialists of each research domain.
The goals of this course are to understand and explain the socio-cultural situation of Quebec. Before and after each class meeting, students will be expected to spend four hours reading the relevant documents. Your overall grade in the class will be decided based on the following: In-class contributions (discussion, reaction paper, etc): 40%, term-end report: 60%.

ARSa300GA（地域研究（ヨーロッパ）/ Area studies(Europe) 300）

スペイン語圏の文化Ⅰ

久木　正雄

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：スペイン語圏の文化Ⅰ（多言語国家スペイン）
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：人数枠を30名とし、それを超えた場合は抽選とする
その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、スペインの歴史と、そこに生きる人々が織り成す社会、そして彼らが生み出した有形・無形の文化遺産について学ぶ。とりわけ、スペインを構成する諸地域および言語・民族の多様性と、それらの歴史的重層性への理解を得ることを目的とする。また、バルセロナ大学へのSAに参加する２年生は、バルセロナとカタルーニャへの理解と関心を、空間的にも時間的にも広い視野の中で深めてもらいたい。

【到達目標】
スペインの歴史・文化・社会が放つ多彩な魅力と、そこに付随する諸問題への理解と関心を深め、各自の考えをプレゼンテーション、ディスカッション、学期末レポートにおいて精確に言語化することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この授業は、受講生の中から予め定めた担当者を主体として、各回のテーマに関するプレゼンテーションとディスカッションを中心に行う。課題等に対するフィードバックは授業内で行い、必要に応じて「学習支援システム」も活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方を確認した上で、受講生と教員との間で問題関心を共有する。
2	「多様」で「異質」なスペイン文化	しばしば他のヨーロッパ諸国の文化と比して「多様」で「異質」なものとして語られるスペイン文化について、その諸要素と言説形成の過程を批判的に考察する。
3	スペイン文化総論：19世紀末〜20世紀前半	王政復古体制期、第二共和政期、内戦期のスペイン史に関する理解を得ながら、近現代のスペイン文化を概観する。
4	スペイン文化総論：20世紀後半	フランコ体制期から民主化への移行期までのスペイン史に関する理解を得ながら、現代のスペイン文化を概観する。
5	スペインの諸言語	スペインで用いられている諸言語と、それらの歴史的・政治的位置への理解を深める。
6	宗教と人々	カトリック教会と国家、社会、そして人々との関係について、近現代を中心に考察する。
7	祝祭	いわゆる三大祭りを題材として、地域ごとに趣を異にするスペインの祝祭への理解を深める。
8	伝統芸能	フラメンコと闘牛を題材として、それらの地域性と「国民的」な伝統芸能としての側面について考える。
9	都市と建築	バルセロナに焦点を当てて、都市計画とアントーニ・ガウディの建築に代表される文化とその背景への理解を深める。
10	内戦と芸術	内戦とその記憶の問題について、文学、絵画、映画といった芸術作品との関係の中で考える。
11	サッカー	スペインの国民的スポーツと言えるサッカーの、娯楽としての側面と政治的な側面について考える。
12	ジェンダーと文化	スペインにおけるジェンダーと文化との関係について、主に女性史の観点から考察する。
13	世界の中のスペイン	ヨーロッパの一国としての、そしてスペイン語圏の一国としての、現在のスペインの姿について考える。
14	まとめ	今学期の学習内容を総括的に振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習として、事前に指示したテキストの範囲または配布した資料を熟読しておくこと。復習として、各回の内容を各自の問題関心に照らしながら咀嚼し直し、学期末レポートに備えること。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
立石博高編著『概説　近代スペイン文化史―18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房、2015年、ISBN9784623066759、本体価格3,200円。

【参考書】
- 田澤耕『カタルーニャを知る事典』平凡社新書、2013 年、ISBN9784582856743、本体価格860円。
- 立石博高、内村俊太編著『スペインの歴史を知るための50章』明石書店、2016年、ISBN9784750344157、本体価格2,000円。
その他、教場で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーション：30％、ディスカッションへの参加度：30％、学期末レポート：40％。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
各受講生の問題関心を尊重し、柔軟な議論が展開されるように努める。

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンテーションでプロジェクターを使用する場合には、接続用のPC（本体）は各自が用意すること。ケーブルやアダプターといった周辺機器は教員が用意する。

【その他の重要事項】
- 履修希望者は、初回授業の前々日までに「学習支援システム」で仮登録を行っておくこと。仮登録者数が定員を超過した場合は初回授業で選抜を行うこととし、その旨を初回授業の前日のうちに同システムで通知する。
- この授業は春学期で完結し、秋学期開講の「スペイン語圏の文化Ⅱ」（授業コード：C0946、担当教員：佐々木直美）との直接の連続性はない。

【Outline (in English)】
《Course outline》
This course is designed to provide students with a basic understanding of various aspects of Spain and its regions: histories, societies and cultures.
《Learning Objectives》

Students will gain basic knowledge of the histories, societies, and cultures of Spain and its regions, as well as the ability to express their ideas accurately in presentations, discussions, and an end-of-term report.
《Learning activities outside of classroom》
Students are expected to complete the required assignments before and after each class meeting. Each class will require more than four hours of study time.
《Grading Criteria / Policy》
Your overall grade in the class will be decided based on the following: Assigned presentation (30%), in-class contribution (30%), and end-of-term report (40%).

ARSd300GA（地域研究（中・南アメリカ）/ Area studies(Middle and South America) 300）

スペイン語圏の文化 II

佐々木　直美

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：スペイン語圏の文化 II（ラテンアメリカの社会と文化）
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：人数枠を30名とし、それを超えた場合は抽選とする

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業は「食」と「音楽」を通じて、スペイン語圏の社会と文化を理解することを目的とします。授業ではスペイン語のテキストやスペイン語の歌を数多く取りあげますが、スペイン語学習歴がなくても授業を理解できるように丁寧に説明するため、スペイン語既修者でなくても受講に問題はありません。「食」と「音楽」に関心があり、視野を広げる好奇心がある方なら大歓迎です。
　各テーマに関連する料理と歌を手がかりに、ラテンアメリカを理解するためのいくつかの重要なテーマについて一緒に考えましょう。

【到達目標】
①スペイン語圏の代表的な料理について、その社会の歴史と関連付けて理解できる。
②スペイン語圏の代表的な歌と音楽について、それが誕生し、広く支持された社会的背景を説明できるようになる。
③スペイン語の正しい発音を習得できるようになる。
④スペイン語圏の出来事について、積極的に関心を持ち、自身の意見を述べられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　教員による講義と受講生同士のグループワークを組み合わせて行います。各回のテーマについて、毎回音楽や映像資料を活用した講義のあと、グループ・ワークを行い、最後に各人がリアクションペーパーを提出することが必須です。授業内で提出する課題や発言などは平常点として評価します。
　課題等に関するフィードバックは、授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	アンデス文化（ペルー）	◆ジャガイモ料理の代表（パパ・ア・ラ・ワンカイーナ） ◆アンデス音楽と祭り
2	都市と農村（ペルー）	◆チチャとは？ トウモロコシのお酒と同じ名前の音楽
3	ペルー海岸地域（ペルー）	◆ペルー料理の代表（セビーチェ） ◆国民的舞踏マリネラ
4	首都リマ（ペルー）	◆トウモロコシを使った人気料理（タマレス） ◆行商人の歌声：プレゴネス ◆クリオーリョ音楽
5	ペルーにおけるアフリカ文化（ペルー）	◆黒人たちの料理（モンドンゴ） ◆スサナ・バカ
6	民衆の声（アルゼンチン）	◆アルゼンチン国民のシチュー（ロクロ） ◆　南米のフォルクローレ ◆　メルセデス・ソーサ
7	新しい歌（チリ、アルゼンチン、キューバ）	◆人生をありがとう ◆ビオレッタ・パラ ◆メルセデス・ソーサ ◆パブロ・ミラネス ◆シルビオ・ロドリゲス
8	移民１（1960年代〜アメリカ）	◆サルサ ◆映画「ウエスト・サイド・物語」が描くヒスパニック
9	移民　II（1960年代〜アメリカ）	◆映画「ウエスト・サイド物語」 ◆　ウィリー・コロン
10	移民III（2000年代以降アメリカ）	◆　映画「イン・ザ・ハイツ」が描くヒスパニック
11	移民III（2000年代以降アメリカ）	◆　映画「イン・ザ・ハイツ」と「ウエスト・サイド物語」の比較
12	カリブ諸国（キューバとドミニカ）	◆コーヒー ◆グロリア・エステファン ◆フアン・ルイス・ゲーラ
13	ラテンアメリカのクリスマス（メキシコ）	◆チレス・エン・ノガータ ◆マリアッチ ◆ルイス・ミゲル
14	境のないスペイン語圏文化	◆ペルー料理 ◆バッド・バニー ◆シャキーラ ◆レナタ・フローレス

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習として、事前に指示する資料を読んだり鑑賞したりすること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
購入が必要な教科書はありません。
参考図書や映像資料は授業内で適宜指示するので、図書館や大学のＡＶライブラリーなどを上手に活用すること。

【参考書】
伊藤嘉章・岡本郁生監修　『ラテン音楽入門』世界文化社、2025年。
そのほか、授業内で随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎回の課題や授業内での貢献を含む平常点70％、期末レポート30％を総合して評価します。
4回以上の欠席は評価「不可」とします。
また、15分以上の遅刻は2回で1回分の欠席とみなします。

【学生の意見等からの気づき】
各受講生の問題関心を尊重し、柔軟な議論が展開されるように努める。

【その他の重要事項】
受講者はスペイン語既修者に限らない。

【Outline (in English)】
The purpose of this class is to understand Spanish-speaking society and culture through < food> and < music> .
We use teaching materials in Spanish and a lot of Spanish songs, but even if you　don't understand Spanish, we will explain everything carefully. It doesn't matter if you have no prior experience of studying Spanish. We welcome anyone who is interested in food and music and has curiosity to broaden their horizons.
Using recipes and lyrics related to each lesson's theme as clues, students will learn about topics that will help them understand Spanish-speaking countries and communities.
＜Learning activities＞
Your study time will be more than two hours for a class.
< Grading Criteria/Policy>
Short reports: 70%、in class contribution: 30%.

LANs300GA（スペイン語 / Spanish language education 300）

カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）

PLAZA BALAGUE Marta

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本コースは、初級レベル（A1）のカタルーニャ語を対象とした実践的な入門講座です。コミュニカティブアプローチを採用し、日常生活における基本的な場面で簡単なやり取りができるようになること、また、簡単なメッセージの理解と発信を通じてカタルーニャ語への基礎的な理解を育むことを目的としています。
この授業の続きとして「カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）」もあるので、関心を持った学生はぜひ、最後まで付き合ってください。なお、カタルーニャ語はその政治的かつ社会的な状況を知ることが特に欠かせない言語であるため、並行して「カタルーニャの文化Ⅲ（歴史・社会A）」および「カタルーニャの文化Ⅳ（歴史・社会B）」を履修することを強く推薦します。

【到達目標】
本コース修了時には、以下のことができるようになります。
- 挨拶や自己紹介ができる。
- 基本的な個人情報を伝えられる。
- 人物や日常の行動を簡単に説明できる。
- 好みや嗜好を表現できる。
- 簡単な情報のやり取りができる。
- 近い将来の予定を表現できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本コースではタスク中心のコミュニカティブアプローチを採用し、聞く力と話す力を重視します。文法はガイド付きのアクティビティを通して機能的かつ帰納的に導入します。
- 授業態度：授業の内容を理解したり深めたりすること、カタルーニャ語圏の社会・文化に触れようとすること等、興味を持って授業に参加すること。
- 自己紹介の発表：自己紹介の短い個人発表を行います。
- 期末試験。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	カタルーニャ語入門。	挨拶と自己紹介。
2	個人情報①	アルファベット。発音と表記。動詞 ser、dir-se、人称代名詞。
3	個人情報②	疑問文、否定文、数字。
4	人と家族①	語彙と動詞 tenir。
5	人と家族②	人物の描写、基本的な所有表現および指示表現。
6	日常生活	生活習慣と直説法現在形。頻度副詞。
7	街	場所・施設、道案内。前置詞と位置表現。情報を尋ねる。
8	食事と飲み物	食事と飲み物：好みと嗜好の表現。動詞 agradar、voler。数量表現。
9	余暇	余暇：趣味や活動。動詞 agradar とその類似表現。
10	時間と予定	曜日、時刻、スケジュール管理。動詞 anar、fer。
11	予定を立てる	近接未来（anar a + 不定詞）。
12	買い物	数量と価格。動詞 voler、necessitar。
13	総復習と口頭表現。	自己紹介。
14	期末試験。	期末試験。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
少なくとも60分の予習と180分の復習を必要とします。ただし、時間の「長さ」はもちろん、時間の「質」も非常に大事です。そのため、集中の妨害や先延ばしを引き起こしやすい要素をなるべく避けることが肝心です。

【テキスト（教科書）】
配布資料（文法・練習・語彙を含みます）。

【参考書】
詳細な参考書リストは授業で提示します。
田澤耕（2002）『カタルーニャ語辞典』大学書林。
———（2007）『日本語カタルーニャ語辞典』大学書林。
———（2013）『カタルーニャ語小辞典』大学書林。
———（2013）『カタルーニャを知る事典』平凡社。
Dols, Nicolau, and Richard Mansell, 2017, *Catalan: An Essential Grammar*, Routledge.
Baptista Xuriguera, Joan, 2007, *Els Verbs Catalans Conjugats*, Claret.

【成績評価の方法と基準】
1) 授業参加度および評価課題: 30％
2) 口頭表現評価（第13回）: 30％
3) 期末試験: 40％
成績は100点満点とし、本コースの合格基準は60点以上とします。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
本シラバスは授業の進捗状況や受講生の関心などに合わせて、適宜変更される可能性があります。

【助成機関】
本科目はラモン・リュイ院（Institut Ramon Llull）の助成を受けて開講されています。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course provides a practical introduction to the Catalan language at A1 level, following a communicative approach. Its main objective is to enable students to interact in very basic everyday situations, understand and produce simple messages, and develop an initial awareness of the Catalan language.
Finally, this class is followed by “Catalan Culture II (Language B)”, so those who have interest in it, please do not hesitate to take them both. Besides, Catalan is a language that particularly cannot be isolated from its political and social circumstances, so I would highly recommend you to take “Catalan Culture III (History and Society A)” and “Catalan Culture IV (History and Society B)" as well.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students will be able to:
- Greet others and introduce themselves
- Provide basic personal information
- Describe people and daily routines
- Express likes and preferences
- Ask for and give simple information
- Make immediate plans
【Learning activities outside of classroom】

It is necessary at least 180 minutes for preparing and 60 minutes for reviewing each class. However, it is very important to pay heed not only to the “amount” of time, but also to its “quality”. Thus, it is essential to avoid distractions and factors that may cause procrastination.
【Grading Criteria / Policy】
1. Class participation and assessed coursework: 30%
2. Oral production assessment (Session 13): 30%
3. Final exam: 40%
The maximum score is 100 points. A minimum score of 60 points is required to pass the course.

LANs300GA（スペイン語 / Spanish language education 300）

カタルーニャの文化 II（言語B）

PLAZA BALAGUE Marta

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本コースは、カタルーニャ語入門コース（A1）の継続講座として設計されており、カタルーニャ語への学習経験が非常に限られている学習者を対象としています。CEFRのA2〜pre-B1レベルに位置づけられ、これまでに習得したコミュニケーションの基礎を定着させるとともに、表現の幅を広げ、口頭表現における自立性を高めることを目的としています。
本コースでは、コミュニカティブかつタスク中心のアプローチを採用し、聞く力と話す力を特に重視します。文法は段階的かつ機能的に導入され、常に実際のコミュニケーション場面と結びつけて学習します。過去の経験の語り、意見や必要性の表現、助言や推薦の表現に加え、接続法、関係文、間接話法といった文法構造も、ガイド付きで導入します。
本コースの目的はB1レベルを完全に習得することではなく、B1への確かな移行を支援し、日常的および簡単な学術的場面における自信と対話能力を育成することにあります。
最後に、カタルーニャ語はその政治的かつ社会的な状況を知ることが特に欠かせない言語であるため、並行して「カタルーニャの文化 III（歴史・社会A）」および「カタルーニャの文化IV（歴史・社会B）」を履修することを強く推薦します。

【到達目標】
本コース修了時には、以下のことができるようになります。
- 日常生活および基本的な学術的場面で自信をもってやり取りができる。
- 構成がやや複雑な短い口頭・筆記テキストを理解・作成できる。
- 過去の経験を語り、日常的な状況をより正確に描写できる。
- 意見、必要性、義務、助言を明確に表現できる。
- 簡単な関係文を用いて人・物・状況を説明できる。
- 間接話法の導入を通して、他者の発言内容を伝えることができる。
- 口頭表現における一貫性と流暢さの基本的な戦略を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
コミュニカティブかつタスク指向型の教授法を採用します。聞く・話す・読む・書く技能を統合的に扱います。文法は機能的かつ文脈に沿って導入します。動画、短い文章、音声などの実際の資料を学習者向けに調整して使用します。学生の積極的な参加と協力的学習を重視します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	もう一度はじめよう！	カタルーニャ語の復習と経験の共有、A1内容の定着と拡張、直説法現在形の復習、ser / estar、基本的なコミュニケーション戦略、自己紹介を広げる語彙
2	昔と今	過去、思い出、経験、変化について話す、習慣、比較、頻度・様態の副詞、比較級・最上級、時間表現、形容詞の一致
3	人生の物語	経歴や出来事を語る、過去①：現在完了、現在完了の形成、規則・不規則過去分詞、時間表現、最近の経験の語り
4	今と昔の姿	人・場所・状況をより詳しく描写する、過去②：線過去（未完了過去）、形成と用法、文脈と描写、現在完了との対比
5	意見と視点	意見、賛成・反対を表現する、談話の構成、時間接続詞、物語構成、弱形代名詞の機能的導入（em, et, li, en, hi）
6	出来事の流れ	時間・原因・結果による構成、意見と評価の表現、意見動詞（pensar, creure, trobar など）、que を用いた構文、賛成・反対、従属構文への導入
7	現代の日常生活	生活習慣と文化比較、接続法①：願望・必要性・助言、接続法現在の形成、voler que / cal que / és important que、助言や願望の表現
8	わかり合える？	依頼、助言、必要性の表現、接続法②：意見と感情、感情・評価の動詞、直説法と接続法の使い分け、実際の場面での練習
9	人や物を説明する	関係文による精密な表現、関係文①、que / on / qui、関係文の機能、人・場所・物の描写
10	こう言っていました…	間接話法で伝える、関係文②、前置詞付き関係文、el qual / la qual（限定的使用）、描写の精度向上
11	感情と願い	実際の文脈での接続法、より複雑な状況、問題と解決策の表現、haver de / caldre / poder、口頭相互作用の戦略
12	起こりうる状況	簡単な仮定・条件・反応、間接話法（導入）、dir / explicar / preguntar + que / si、メッセージの言い換え、他者の発言の伝達
13	口頭発表	口頭発表
14	期末試験	期末試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　少なくとも60分の予習と180分の復習を必要とします。ただし、時間の「長さ」はもちろん、時間の「質」も非常に大事です。そのため、集中の妨害や先延ばしを引き起こしやすい要素をなるべく避けることが肝心です。

【テキスト（教科書）】
配布資料（文法・練習・語彙を含みます）。

【参考書】
詳細な参考書リストは授業で提示します。
田澤耕（2002）『カタルーニャ語辞典』大学書林。
———（2007）『日本語カタルーニャ語辞典』大学書林。
———（2013）『カタルーニャ語小辞典』大学書林。
———（2013）『カタルーニャを知る事典』平凡社。
Dols, Nicolau, and Richard Mansell, 2017, *Catalan: An Essential Grammar*, Routledge.

【成績評価の方法と基準】
①授業参加度および授業内課題：30％
②口頭発表（第13回）：30％
③期末試験：40％
成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
本シラバスは、授業の進度および学生の関心に応じて変更される場合があります。

【助成機関】
本科目はラモン・リュイ院（Institut Ramon Llull）の助成を受けて開講されています。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course is a continuation of the introductory Catalan language course (A1) and is designed for students with very limited prior exposure to Catalan. It is positioned between A2 and pre-B1 levels of the CEFR and aims to consolidate previously acquired communicative foundations, expand expressive resources, and develop greater oral autonomy.
The course follows a communicative, task-based approach, with a clear priority given to oral comprehension and production. Grammar is introduced progressively and functionally, always linked to real communicative situations. The course works on, among other aspects, narrating past experiences, expressing opinions and needs, making recommendations, as well as a guided introduction to structures such as the subjunctive, relative clauses, and indirect speech.
The goal is not to achieve full mastery of the B1 level, but rather to facilitate a solid transition towards it, strengthening students' confidence and their ability to interact in everyday and simple academic contexts.
Finally, Catalan is a language that particularly cannot be isolated from its political and social circumstances, so I would highly recommend you to take“Catalan Culture III (History and Society A)” and “Catalan Culture IV (History and Society B)” as well.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students will be able to:
- Interact confidently in everyday and basic academic situations.
- Understand and produce short oral and written texts with a more developed structure.
- Narrate past experiences and describe habitual situations with greater precision.
- Express opinions, needs, obligations and recommendations clearly.
- Describe people, objects and situations using simple relative clauses.
- Convey information and report what others have said through an introduction to indirect speech.
- Develop basic strategies for coherence and fluency in oral production.
【Learning activities outside of classroom】
It is necessary at least 180 minutes for preparing and 60 minutes for reviewing each class. However, it is very important to pay heed not only to the “amount” of time, but also to its “quality”. Thus, it is essential to avoid distractions and factors that may cause procrastination.
【Grading Criteria / Policy】
1. Class participation and in-class tasks: 30%
2. Oral presentation (Session 13): 30%
3. Final exam: 40%
100 being the best possible grade, it is necessary to reach at least 60 to pass the course.

HIS300GA（史学 / History 300）

カタルーニャの文化III（歴史・社会A）

PLAZA BALAGUE Marta

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本コースは、歴史的・社会的・文化的観点からカタルーニャ文化を総合的に紹介することを目的としています。学生は、言語、伝統、芸術、現代社会に特に焦点を当てながら、カタルーニャのアイデンティティを形作る主要な要素について学びます。
最後に、この授業の続きとして「カタルーニャの文化IV（歴史・社会B）」もあるので、関心を持った人はぜひ、最後まで付き合ってください。なお、カタルーニャの世界に本格的に触れるために、カタルーニャ語の知識も欠かせないので、並行して「カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）」および「カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）」を履修することを強く推薦します。

【到達目標】
本コース修了時に、学生は以下のことができるようになります。
- カタルーニャ文化の主な特徴を理解する。
- 社会におけるカタルーニャ語の役割を理解する。
- カタルーニャの主要な歴史的出来事を把握する。
- 伝統、芸術表現、社会的慣習を解釈する。
- 現代のカタルーニャ社会を分析する。
- 特に日本との比較を通して、自身の文化的背景と照らし合わせながら異文化理解を深める。

本コース修了時には、学生はグローバルかつ異文化的な視点のもとで、現代社会におけるカタルーニャ文化について基礎的かつ体系的な理解を示すことができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
- 視聴覚資料を用いた参加型の講義。
- 文化的テキストやメディア資料の分析。
- 指導付きディスカッションおよび異文化理解を促す振り返り活動。
- 言語能力の習得を目的としない、文化理解に重点を置いたアプローチ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1.	コース導入＋カタルーニャと言語（1）	コースの目的と進め方の説明。カタルーニャの地理的位置、社会的多様性、使用されている言語の概要。
2.	カタルーニャと言語（2）	現代のカタルーニャ語。多言語社会としてのカタルーニャと言語・アイデンティティの関係。
3.	カタルーニャの歴史（1）	起源から18世紀までの歴史の流れ。主要な歴史的出来事の整理。
4.	カタルーニャの歴史（2）	19世紀以降の歴史：産業化、内戦、フランコ独裁政権、民主化、現代社会。
5.	伝統と祝祭（1）	年間行事と祝祭のカレンダー。宗教行事と市民的祝祭の役割。
6.	伝統と祝祭（2）	昔から続いている民俗文化：カスタイェース（人間の塔）、火祭り、地域協会の文化。
7.	芸術と文学（1）	カタルーニャ文学の概要と文化的背景。代表的な作家と作品。
8.	芸術と文学（2）	音楽、映画、視覚芸術など現代カタルーニャ文化の表現。
9.	現代のカタルーニャ社会（1）	日常生活、家族観、教育、労働、社会的価値観。
10.	現代のカタルーニャ社会（2）	現在の社会的課題と議論（若者、ジェンダー、多文化共生など）。
11.	カタルーニャと日本	歴史的接点、文化交流、相互イメージと比較の視点。
12.	世界の中のカタルーニャ	国際的な発信、文化外交、カタルーニャのイメージとブランド。
13.	映画鑑賞＆ディスカッション	カタルーニャの映画を観てから、グループでディスカッションを行います。
14.	口頭発表	コース全体で学習した中で、事前に教師とトピックを決め、口頭発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
少なくとも60分の予習と180分の復習を必要とします。ただし、時間の「長さ」はもちろん、時間の「質」も非常に大事です。そのため、集中の妨害や先延ばしを引き起こしやすい要素をなるべく避けることが肝心です。

【テキスト（教科書）】
特になし。

【参考書】
教場では細かい参考書リストを提供します。
田澤耕（2013）『カタルーニャを知る事典』平凡社。
――（2019）『物語　カタルーニャの歴史――知られざる地中海帝国の興亡』増補版、中央公論新社。
立石博高／奥野良知編（2013）『カタルーニャを知るための50章』明石書店。
Dominic Keown (ed.), 2011, *A Companion to Catalan Culture*, Boydell &Brewer.
Dowling, Andrew, 2022, *Catalonia: A New History*, Routledge.

【成績評価の方法と基準】
1)授業への参加と授業内活動：30%
2)小課題／振り返り：30%
3)ミニテスト：10%
4)最終プレゼンテーション：30%
成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
本シラバスは、授業の進度および学生の関心に応じて変更される場合があります。

【助成機関】
本科目はラモン・リュイ院（Institut Ramon Llull）の助成を受けて開講されています。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course provides a general introduction to Catalan culture from a historical, social and cultural perspective. Students will explore the key elements that shape Catalan identity, with particular attention to language, traditions, the arts and contemporary society. The course adopts an intercultural and comparative approach, especially suited to an international university context.

Finally, this class is followed by “Catalan Culture IV (History and Society B)”, so those who have interest in it, please do not hesitate to take them both. Besides, in order to have a genuine approach to the Catalan world, Catalan language becomes necessary, so I would highly recommend you to take “Catalan Culture I (Language A)” and “Catalan Culture II (Language B)” as well.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students will be able to:
- Understand the main features of Catalan culture.
- Identify the role of the Catalan language in society.
- Recognise key historical milestones in Catalonia.
- Interpret traditions, artistic expressions and social practices.
- Analyse contemporary Catalan society.
- Develop intercultural awareness through comparison between Catalonia and their own cultural background, with particular reference to Japan.
Upon completion of the course, students will demonstrate a solid introductory understanding of Catalan culture and its contemporary context within a global and intercultural framework.
【Learning activities outside of classroom】
It is necessary at least 180 minutes for preparing and 60 minutes for reviewing each class. However, it is very important to pay heed not only to the “amount” of time, but also to its “quality”. Thus, it is essential to avoid distractions and factors that may cause procrastination.
【Grading Criteria / Policy】
- Participation and in-class activities: 30%
- Short assignments / reflections: 30%
- Minitests: 10%
- Final presentation: 30%
The maximum score is 100 points. A minimum score of 60 points is required to pass the course.

HIS300GA（史学 / History 300）

カタルーニャの文化IV（歴史・社会B）

PLAZA BALAGUE Marta

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本コースは、現代カタルーニャ社会と文化について、歴史的・政治的・社会的・文化的な主要プロセスを通して深く学ぶことを目的とする。特に、産業化の時代から現代に至るまでの期間に焦点を当て、フランコ独裁体制、民主化への移行、現代の政治的議論、そして集団的アイデンティティの形成に関わる日常的実践を重点的に扱う。本コースでは、歴史分析と文化・社会的視点を組み合わせ、スポーツ、食文化、言語、社会運動などの具体例を用いることで、カタルーニャ社会を文脈的かつ批判的に理解することを目指す。
最後に、カタルーニャの世界を本格的に触れるために、カタルーニャ語の知識も欠かせないので、並行して「カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）」および「カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）」を履修することを強く推薦します。

【到達目標】
コース修了時に、学生は以下のことができるようになる：
1) 現代カタルーニャ社会を形成してきた主要な歴史的プロセスを理解する。
2) フランコ独裁体制および民主化移行期がカタルーニャに与えた影響を分析する。
3) 現在のカタルーニャの政治制度および社会的議論の主要要素を把握する。
4) スポーツや食文化を文化的・アイデンティティ的表現として解釈する。
5) カタルーニャの社会的・言語的・文化的多様性について、批判的かつ情報に基づいた視点を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義を中心に、参加型活動、テキスト分析、映像資料、ガイド付きディスカッション、個人またはグループによる短いリフレクション課題を組み合わせて行う。学生の積極的な参加と批判的思考の育成を重視する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1.	産業化と社会的闘争（19世紀〜20世紀初頭）I	コースII導入＋社会的闘争と文化の枠組み
2.	産業化と社会的闘争（19世紀〜20世紀初頭）II	産業化と社会的闘争（19世紀〜20世紀初頭）
3.	フランコ独裁体制、抑圧と文化的抵抗 I	フランコ独裁体制 I ―政治・文化・言語の抑圧
4.	産業化と社会的闘争（19世紀〜20世紀初頭）II	フランコ独裁体制 II ―文化的抵抗と日常生活
5.	民主化移行、自治とグローバル化	民主化移行、自治の復活、新しい社会運動
6.	カタルーニャ政治と独立運動 I	現代カタルーニャ政治―制度と政治体制
7.	カタルーニャ政治と独立運動 II	独立運動―歴史、重要人物、現代の議論
8.	経済・日常生活・アイデンティティ：スポーツと食文化 I	カタルーニャ経済―産業化、内戦、自治
9.	経済・日常生活・アイデンティティ：スポーツと食文化 II	移民、多文化共生、カタルーニャ・アイデンティティ
10.	経済・日常生活・アイデンティティ：スポーツと食文化 III	スポーツ・経済・アイデンティティ―FCバルセロナ
11.	経済・日常生活・アイデンティティ：スポーツと食文化 IV	日常文化とカタルーニャの食文化
12.	言語・ジェンダー・将来展望 I	現代のカタルーニャ語―使用、教育、将来の課題
13.	言語・ジェンダー・将来展望 II	ジェンダー、フェミニズム、LGTBI+
14.	口頭発表	口頭発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
少なくとも60分の予習と180分の復習を必要とします。ただし、時間の「長さ」はもちろん、時間の「質」も非常に大事です。そのため、集中の妨害や先延ばしを引き起こしやすい要素をなるべく避けることが肝心です。

【テキスト（教科書）】
配布資料。

【参考書】
詳細な参考書リストは授業で提示します。
田澤耕（2013）『カタルーニャを知る事典』平凡社。
―――（2019）『物語　カタルーニャの歴史――知られざる地中海帝国の興亡』増補版、中央公論新社。
立石博高／奥野良知編（2013）『カタルーニャを知るための50章』明石書店。
Dominic Keown (ed.), 2011, *A Companion to Catalan Culture*, Boydell &Brewer.
Dowling, Andrew, 2022, *Catalonia: A New History*, Routledge.

【成績評価の方法と基準】
評価は以下に基づいて行う：
- 授業参加およびクラス内活動：50％
- ミニテスト：20％
- 教員と事前に決めたテーマに基づく口頭発表：30％
成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
本シラバスは、授業の進度および学生の関心に応じて変更される場合があります。

【助成機関】
本科目はラモン・リュイ院（Institut Ramon Llull）の助成を受けて開講されています。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course offers an in-depth approach to contemporary Catalan society and culture through the main historical, political, social and cultural processes that have shaped present-day Catalonia. Particular emphasis is placed on the period from industrialization to the present, with special attention to the Franco dictatorship, the democratic transition, contemporary political debates, and everyday practices that contribute to the construction of collective identity.

The course combines historical analysis with a cultural and social perspective, incorporating concrete examples such as sport, gastronomy, language and social movements in order to foster a contextualised and critical understanding of Catalan reality.
Finally, in order to have a genuine approach to the Catalan world, Catalan language becomes necessary, so I would highly recommend you to take “Catalan Culture I (Language A)” and “Catalan Culture II (Language B)” as well.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students will be able to:
1. Understand the main historical processes that have shaped contemporary Catalan society.
2. Analyse the impact of the Franco dictatorship and the democratic transition in Catalonia.
3. Identify the key elements of the current Catalan political system and ongoing social debates.
4. Interpret everyday practices such as sport and gastronomy as cultural and identity expressions.
5. Develop a critical and informed perspective on the social, linguistic and cultural diversity of Catalonia.
【Learning activities outside of classroom】
It is necessary at least 180 minutes for preparing and 60 minutes for reviewing each class. However, it is very important to pay heed not only to the “amount” of time, but also to its “quality”. Thus, it is essential to avoid distractions and factors that may cause procrastination.
【Grading Criteria / Policy】
1. Active participation and in-class activities: 50%
2. Mini-tests: 20%
3. Oral presentation on one of the course topics, previously agreed with the instructor: 30%
100 being the best possible grade, it is necessary to reach at least 60 to pass the course.

ARSk300GA（地域研究（地域間比較）/ Area studies(Interregional comparison) 300）

英語圏の文化Ⅰ（文化史）

宇治谷　義英

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世イギリス演劇の事情について，基本的な情報を学んだ後，英語で書かれた論文を読むことで，各時代状況の中で，英米のみならず日本などの異文化圏においても，それらの演劇作品がどのように変化をして大衆に受け入れられてきたか，そしてその今日性について，他者とのディスカッションもおこなうことによって，学生一人一人が確認していく．

【到達目標】
異文化間における交流，つまり異文化間コミュニケーションを図るためには，異なる文化的背景を持った者同士が，お互いの文化を理解し合うことが必須である．そして，異なる文化的背景を持つ他者の文化的生産物(cultural products)を受容，理解するためには，その異文化間に横たわる文化的境界を越境するもの，つまり架け橋のような要素の存在が重要である．
本授業では，時代を超えて英語圏を代表する作家であるWilliam Shakespeareの演劇を中心にした近世イギリス演劇を，「異文化圏間」，「異時代間」を縦横に巡る「越境性」，「今日性」をキーワードに，変化する時代，そして異文化圏，特に日本の文化と関連させて把握できるようになること，そして演劇のみならず，時代の変革期における大衆文化と社会を関連づけて考えられるようになることを目指す．
さらには，英文で書かれた関連する論考を自分で読み解くこと，また特定のShakespeare作品の「越境性」「今日性」について受講生同士，そして外国人等の異なる文化的背景を持った人とのディスカッションを通して，自身による異文化の「越境」を体験することも目指す．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本的な事項の講義の後，あらかじめ割り当てられた受講生に劇作品および論文について発表をしてもらう．毎回リアクションペーパーの提出は必須とする．出されたリアクションペーパーは次回の授業で取り上げてフィードバックをおこなう．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	「演劇から始める異文化理解」	その目的，今日まで廃れない理由について，日本における歌舞伎，新劇，小劇場文化，同時に各受講者の身近な演劇体験と比較しながら考察する
第2回	「劇場」	近世イギリスの劇場と現代との違い，そして日本の劇場との類似性について
第3回	「テクスト」	近世イギリス演劇の上演台本の事情と現代との違いと類似性について
第4回	「文化と社会」	文化的生産物(cultural products)から当時の社会状況を割り出す意義
第5回	「近世イギリス演劇の今日性」	文化的生産物(cultural products)が持つ，異文化間，異なる時代と場所を越える要素を見つける方法について
第6回	異文化間交流の実体験(1)	事前に決めたShakespeare作品に関して，第1回から5回までの授業を踏まえて留学生や日本に滞在する外国人とディスカッションをおこなうことによって，お互いの文化的背景の違いが作品の受容方法に与える影響について実際に体験する．そこから受講生自身も含めて，異文化間を「越境」することの意義とは何かについて改めて考える
第7回	論文の解読A(1)	Shakespeareの「越境性」について，劇団と劇場から考える
第8回	論文の解読A(2)	Shakespeareの「越境性」について，演劇性から考える
第9回	論文の解読A(3)	Shakespeareの「越境性」について，大衆及び社会秩序との関連性から考える
第10回	論文の解読A(4)	Shakespeareの「越境性」について，メディアの問題から考える
第11回	論考の解読A(5)	Shakespeareの「越境性」について，文学作品の観点から考える
第12回	論考の解読B(1)	文化的生産物(cultural products)の異文化圏における受容の課題と意義について，第二次大戦前から1960年代以前のShakespeare作品を題材にした米ブロードウェイ・ミュージカルから考える
第13回	論考の解読B(2)	文化的生産物(cultural products)の異文化圏における受容の課題と意義について，1960年代以降のShakespeare作品を題材にした米ブロードウェイ・ミュージカルから考える
第14回	異文化間交流の実体験(2)	事前に決めたShakespeare作品に関して，第7回から13回までの授業を踏まえて留学生や日本に滞在する外国人とディスカッションをおこなうことによって，お互いの文化的背景の違いが作品の受容方法に与える影響について実際に体験する．そこから受講生自身も含めて，異文化間を「越境」することの意義とは何かについて改めて考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義形式の授業では内容に関して毎回課題を与えられる．論考を扱う授業では前もって当てられた範囲について発表できるように準備する．発表では前もってテーマを決めて準備しておく．
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に使用しない．

【参考書】
The Cambridge Companion to Shakespeare and Popular Culture, ed. Robert Shaughnessy (Cambridge: Cambridge University Press, 2007).
The Cambridge Companion to English Renaissance Drama, eds. A.R. Braunmuller, Michael Hattaway (Cambridge: Cambridge University Press, 1990).

【成績評価の方法と基準】
リアクションペーパー等課題の提出およびプレゼンによる平常点(20%)と試験(80%)．なお，教員による講義中および受講生による発表中の私語，やむを得ない場合を除く教室の出入りは厳禁．

【学生の意見等からの気づき】
担当した文献の英語について，教員から前もってある程度の道しるべ的な助言を与えるようにしたいと思っています．

【Outline (in English)】
In this course, students will learn about early modern English drama and how it was/is received through discussion with others.
The goal of this course is to acquire the above-mentioned knowledge and the ability to discuss it.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Term-end exam: 80%, assignments: 20%

PHL300GA（哲学 / Philosophy 300）

英語圏の文化 II（思想史）

MARK E FIELD

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：※国際文化学部のみ履修可能。
※「History of Western Thought」と同一の科目です。

その他属性：〈グ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
The Culture, Language, and Thought of the English-Speaking World is the product of many historical interactions between a variety of peoples with different ways of thinking and living in the world. To understand many aspects of the societies in the modern English-Speaking World, one must first recognize the historical forces that shaped them and brought them about.

【到達目標】
The primary goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand: 1) how societies and cultures change in general and 2) how the cultures of the English-Speaking World developed their unique forms. Using the framework of cultural change, we will examine the formation of "Western" religious and political institutions that developed before 1500 CE in order to better appreciate the roots of "Western" social, political, and economic thought. Building on this foundation, the evolution of modern social systems and political-economic thought that occurred in the English-Speaking World after 1500 CE will be discussed.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
The course will start out by outlining the forces behind cultural change. This will be followed by a series of lectures discussing the development of European political and religious institutions following the Ancient Greco-Roman era. We will then attempt to analyze Britain's rather unique political &economic institutions at the beginning of the modern era as a product of cultural change. Building on this foundation, the cultural changes, i.e., the changes in thought, caused by the Protestant Reformation and Enlightenment Philosophy will be examined and their impact on the development of British and American Political-Economic Systems through the 19th and 20th Centuries will be discussed. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	Class Orientation:	Introduction to the Forces Behind Cultural Change
2回	Religion &Philosophy:	The Foundations of Culture & Thought?
3回	The Role of Myths:	Social Formation in the Ancient World
4回	Cultural Conflicts:	Change in the Hellenic World
5回	The World at the End of the Ancient Era:	Roman's Unique Position
6回	Mass Migration:	The End of the Roman Empire
7回	Political and Religious Conflicts:	The Medieval World
8回	The World at the Beginning of the Modern Era:	Britain's Unique Position
9回	The Renaissance:	The English Reformation &The English Enlightenment
10回	The English World:	Revolutionary Challenges, Industrialization &Empire
11回	World War I:	Wilson's Democratic Vision
12回	World Depression:	Keynesian Economics &FDR's New Deal
13回	Post-War America & Britain:	The New International Order
14回	Examination/ Comments:	Recapping what has been covered in the semester.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lectures at home to enhance their participation in classroom lectures and discussions. Students may also be expected to find and analyze information from various forms of English resource materials and media independently for the preparation of Research Papers.
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some course reading material during the semester.

【参考書】
Participating students will do independent reading for their written assignments.

【成績評価の方法と基準】
30% In Class Evaluation (Participation, Discussions, etc.)
30% Homework/Research Paper/Midterm Examination,
40% Final Examination/Term Project.
**Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester.
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance.
The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester.
The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

ARSk300GA（地域研究（地域間比較） / Area studies(Interregional comparison) 300）

英語圏の文化III（現代事情）

粟飯原　文子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：教室定員以上の受講希望者がいる場合には抽選します

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
英語圏世界とは、むろんイギリスや北米だけではなく、世界中に広がるイギリスの統治地域や植民地（そしてアメリカの領土なども）を多く含みこむ。したがって、英語圏世界について学ぶこととは、多くの場合、旧植民地地域について学ぶことでもある。そのためにもこの授業では、かつて「第三世界」あるいは「南」と呼ばれた旧植民地地域の歴史的な軌跡を概観して、「世界史」を異なる視座から学び、ひいては「英語圏」という枠組を再考することを目的とする。

【到達目標】
・旧植民地地域について学び、現代の国際状況の理解につなげる。
・旧植民地地域の歴史を振り返り、その主体性を重んじながら、西洋の視点から語られる「世界史」に対する別様の視点を身につける。またそこから、多様な文化的背景をもつ人々および国々の相互交流とその意義や課題について複数の角度から理解する。
・東西の対立という観点から説明され、理解されがちな冷戦を、旧植民地地域の経験から再考する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業は学習支援システムを通じたオンライン（オンデマンド方式）での開講となる。毎週金曜日に「お知らせ」を配信するので確認すること。
・毎回視聴覚資料を配信する。各自で学習して、期限までに課題を提出すること。
・リアクションペーパーにおけるコメントの紹介、質問に対する応答を通じて、さらなる議論に活かしたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要と進め方、成績評価の基準などについて説明。まず、「英語圏の文化」とはなにか考える。
第2回	英語圏とはなにか	英語圏、英語使用地域の歴史的な背景と現在の状況について考える。
第3回	第一次世界大戦後の世界ー民族自決	第一次世界大戦のとらえ方、1919年の「民族自決」の世界的な動向について学ぶ。
第4回	反帝国主義連盟	植民地地域から多数の代表が集まった1927年のブリュッセル会議、その意義について学ぶ。
第5回	第二次世界大戦後の世界ー独立への道	第二次世界大戦前後の植民地地域の独立への動きを考える。
第6回	アジア・アフリカ会議	1955年のアジア・アフリカ会議（バンドン会議）の重要性を再考する。
第7回	アフリカ諸国独立	1957年のガーナ独立からアフリカ諸国独立の時代を振り返り、また、独立後の困難について考える。
第8回	非同盟諸国運動	1961年にベオグラードで誕生した非同盟諸国運動というまとまりについて学ぶ。
第9回	キューバ革命と三大陸人民会議	1959年のキューバ革命の衝撃、革命後のキューバを中心にして発展した連帯運動、この時代を覆うアメリカの影について学ぶ。
第10回	第三世界から見る冷戦①	旧植民地において冷戦とは、決して「冷戦」などではなく、その影響下で激しい戦争が起こっていた。また、多くの場ではアメリカによる軍事介入を受けた。旧植民地地域における「冷戦」とはなんであったか、二度にわけて学ぶ。
第11回	第三世界から見る冷戦②	前回の続き。いくつかの地域と国の事例をもとに、旧植民地地域の「冷戦」の経験を学ぶ。
第12回	構造調整の時代ー第三世界の弱体化	旧植民地地域はどのようにして苦境に陥っていったのか。その背景をたどり、現在の文脈につなげて考える。
第13回	現代の諸問題	現在の英語圏および旧植民地地域について概観する。
第14回	期末課題の説明とまとめ	全体の復習をおこない、期末課題について説明する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
復習として授業時に配布したハンドアウトや資料を読み直すこと。
また、参考文献を適宜紹介するので、それを読むこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
資料を配布する。

【参考書】
授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準は次の通り。
・各回の課題（リアクションペーパーなど）の提出（60％）
・期末課題（40％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ひとりひとりの疑問点を解決できるように、全体と個別のフィードバックを丁寧におこないたい。

【その他の重要事項】
・初回の授業資料は4月10日（金）13時にアップロードします。
　受講希望者は必ず、この時間までに、**Hoppii**の「講義内情報」を読んで、登録をおこなってください。
・受講希望者が多い場合、抽選をおこないます。

【Outline (in English)】
[Course outline] This course is designed to provide students with new insights into concepts and contours of the "English-speaking world" by focussing on the experiences of formerly colonised peoples and countries. [Learning objectives] Students will be expected to gain a comprehensive understanding of the historical trajectories of the "Third World" and thus a different perspective on World History. [Learning activities outside of classroom] Students will be expected to review the audio-visual materials and the handouts. The required study time is at least four hours for each class session. [Grading policy] Final grade will be decided based on the following: short reports 60% and term-end examination 40%.

LIT300GA（文学 / Literature 300）

英語圏の文化IV（文学と社会A）

須藤　祐二

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：教室定員数を超える受講希望者がいる場合には抽選を行う。

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アメリカ文学をアメリカの社会や文化のさまざまな諸相と関連づけて考察する。各時代の文学作品に明示的に示されている問題意識を考察するだけでなく、なにげない描写から読み取れるアメリカの社会や時代の特異性を検討する。また、文学作品が、時には時代を超えながら、絵画、映画、音楽などとどのような影響を相互に及ぼしているのかを考えることで、アメリカ文学だけでなくアメリカ文化の奥深さを味わってもらいたい。

【到達目標】
受講生は、アメリカ文学についての基礎的な知識を身につける。また、代表的な作品の内容を知るとともに、そこで描かれているアメリカの社会、文化、宗教、エスニシティ等の諸相を歴史的な視座から考察するための素地を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義形式で行う。
第1回授業で、いくつかのテーマを提示する。そして、そのテーマごとの説明に後続の授業を数回ずつ割り当て、そのテーマから、アメリカの文学が文化や社会環境とどのように関連づけられるのかを解説する。そのため、ある時代を切り取ってそれを考察するというプロセスが繰り返されるだろう。時間的な制約から、時系列に沿ったアメリカ史全体の説明はできない。受講生はアメリカの歴史について基礎的な知識を身につけておくと、より深く、そして、より容易に理解できるかもしれない。
最終授業でそれまでの講義内容のまとめや復習だけでなく、それまでに回答した質問等についてもフィードバックとしてもう一度解説をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テーマの設定	全体のテーマを設定する。
第2回	アメリカの神話創造	植民地建設時や独立戦争時の理念がアメリカ社会を支える神話としてどのように受け継がれているかを考える。
第3回	怖いものはなにか	アメリカのゴシック小説の特徴をヨーロッパのゴシック小説と比較して、前者における恐怖の描き方から「アメリカ的な素材」をめぐるアメリカ人作家のジレンマを検討する。
第4回	ウィルダネス	ウィルダネス（荒野）を舞台にした小説を紹介したうえで、この「アメリカ的な風景」がその後の絵画や映画などでどのように利用されてきたかを歴史的に考察する。
第5回	東や西へ	アメリカがフロンティア消滅以後の東部と西部にどのような価値が与え、19世紀から20世紀の文学がその価値をどのように活用してきたかを考察する。
第6回	海とアメリカ文学	アメリカを超えて海を舞台にしたアメリカ文学作品を紹介する。これらの作品が当時のアメリカの拡大志向やエスニシティへの意識をどのように反映しているのかを考察する。
第7回	時間、都市、産業化	19世紀後半以降のアメリカの都市化や産業化の進展、そして、社会における時間表象や都市表象がどのように変化したのかを紹介し、それらがモダニズムの文学作品にどのように反映されているのかを考察する。
第8回	「白人」と「アメリカ人」という概念	多様な移民が混在するアメリカにおいて、「白人」という概念がどのように変容してきたのかを確認し、アメリカ文学でこの「白さ」がどのように表象されているのかを考察する。
第9回	「黒人」というステレオタイプ	白人作家によるアフリカ系アメリカ人の表象を論じ、それらのステレオタイプ化されたイメージに白人側のどのような願望が透けて見えるのかを考える。また、映画においてそうしたイメージがどの程度踏襲されているのか、また反対にどのように変容しているのかを、文学作品との比較から考える。
第10回	観念としての「黒人」は誰のものか	20世紀前半のハーレム・ルネッサンスやそれ以降のアフリカ系アメリカ人の文学作品が自分たちの文化をどのように位置づけようと苦闘してきたかを考察する。時代背景の理解のため、ジャズがたどった受容の歴史の解説を加える。
第11回	メディアと消費文化の拡張	アメリカ文学が消費文化をどのように表現してきたかを紹介する。時代背景の理解のため、消費文化とメディアの関係の変容についての説明を加える。
第12回	アフリカ系アメリカ人の文学と音楽、スペクタクル	第11回で考察した消費文化の考察をアフリカ系アメリカ人に絞る。音楽を中心に「黒人」文化と消費文化の関係を考察し、その後、消費文化における「黒人」イメージから取り残された現実を、現代の黒人作家がどのように描いているかを検討する。
第13回	ジェンダー観の変容	アメリカにおける女性の権利拡大運動の推移を解説する。ジェンダー観の変化のなかで、20世紀の女性作家が何を描き、何を描けなかったのかを考察する、併せて、彼女たちの作品と20世紀以降の映画などにおける女性表象を比較検討する。
第14回	まとめ	講義内容のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で資料を配布するため、授業後に復習としても読み込むこと。
また、アメリカの歴史について基礎的な知識を得ておくこと。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。復習が重要である。

【テキスト（教科書）】
授業で使用する資料は配布する。

【参考書】
有賀夏紀 (編) 油井大三郎 (編)『アメリカの歴史――テーマで読む多文化社会の夢と現実』 有斐閣アルマ, 2003年
亀井俊介 (編)『アメリカ文化史入門――植民地時代から現代まで』昭和堂, 2006年
板橋好枝、高田賢一『はじめて学ぶアメリカ文学史』ミネルヴァ書房, 1991年
鈴木透『実験国家アメリカの履歴書――社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡（第2版）』慶應義塾大学出版会, 2016年

【成績評価の方法と基準】
学期末レポート（授業の理解度を測る）を70％、
課題図書/映画レポートを30％とする。
両方のレポートを提出してはじめて成績評価対象となる。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
例年、視覚資料が理解に役立ったという感想があるため、今年度も積極的に使用するつもりである。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course is designed to introduce students to the history of American literature and, through it, provide insight into various aspects of American culture and society. Students will not only explore the critical perspectives of authors as expressed in their works but also examine how American society during different historical periods is reflected in the underlying themes of these writings.
Additionally, the course aims to deepen students' appreciation of American literature by examining its influence on visual arts, film, and music across different eras.
【Learning Objectives】
By the end of this course, students should be able to explain key characteristics of American literature and its cultural significance.
【Learning Activities Outside the Classroom】
Students are expected to spend approximately two hours before or after each class reviewing and engaging with the course materials to fully grasp the content.
【Grading Criteria】
First Report: 30%, Second Report: 70%

LIT300GA（文学 / Literature 300）

英語圏の文化Ⅴ（文学と社会B）

北　文美子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：人数制限・選抜あり

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
１８世紀から２０世紀にかけての英語圏（イギリスとアイルランド）の文学作品を取り上げ、各作品の社会的・文化的・歴史的背景を考察しながら、文学を理解するうえでの知的視野を広げることをめざします。

【到達目標】
それぞれの文学作品にうかがえる文体・人物造型・風景描写などを仔細に検討することで、時代の思想を読み解き、近代・現代における文学と社会のつながりについて理解を深めます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義形式で授業を行います。毎回講義内容に対する各自の理解を確認するため、授業で扱った作品の引用をテキスト分析し、リアクション・ペーパー（課題）としてまとめ、提出してもらいます。レビュー・ウィークにリアクション・ペーパーをもとにしながら内容の復習をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	イントロダクション	コース概要について説明します。
2回	デフォーと近代資本主義	『ロビンソン・クルーソー』と資本主義社会・合理精神について考察します。
3回	メアリー・シェリーと近代ロマン主義	『フランケンシュタイン』とロマン派の興隆について考察します。
4回	マックファーソンとケルティシズム	『オシアン』とケルティシズム、オリエンタリズムとの関係を考察します。
5回	マシュー・アーノルドと帝国主義	『ケルト文学研究』と帝国主義、社会ダーウィン主義について考察します。
6回	バーナード・ショーと地方主義	『ピグマリオン』と帝国主義、標準英語化の動きについて考察します。
7回	レビュー	前半のまとめをします。
8回	イェイツと民族主義	『ケルトの薄明』と民話蒐集の政治的意図について考察します。
9回	ジョイスとモダニズム	『ユリシーズ』とモダニズム運動について考察します。
10回	ベケットとポストモダニズム	『モロイ』とポストモダニズム思想について考察します。
11回	アンジェラ・カーターとフェミニズム	『血染めの部屋』とフェミニズム思想、童話の脱構築について考察します。
12回	ブライアン・フリールとポストコロニアリズム	『トランスレーションズ』とアイルランドの植民地経験について考察します。
13回	レビュー	後半のまとめをします。
14回	学期末試験、まとめ	学期末試験、まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回取り上げる作品を原書あるいは翻訳で事前に読んでおいてください。本授業の準備学習・復習時間は各１時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
各回、プリントを配布します。

【参考書】
適宜、授業内で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点、リアクション・ペーパー（25％）
試験（75％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を
合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
参考文献の紹介に加えて、内容についての簡潔な解説も付け加えます。

【Outline (in English)】
(Course Outline)This course aims to deepen the understanding of British and Irish Literature from the 18th century to the 20th century, and to examine social, cultural and historical backgrounds of each literary work.
(Learning Objective)By the end of the semester, students are expected to make themselves familiar with the history of British and Irish Literature and to acquire an understanding about the relation between social, cultural and historical backgrounds and literary works.
(Learning activities outside of classroom) Students should read the relevant literary materiel beforehand, and spend more than one hour preparing for each class.
(Grading Criteria/Policy)
Assignments 30% Exam 70%

LIT300GA（文学 / Literature 300）

英語圏の文化VI（文学と社会C）

中和　彩子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：人数制限・選抜あり

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
名誉革命後の18世紀イギリスで発展した小説という文学ジャンルは、進歩と科学の世紀でもあった19世紀、とりわけヴィクトリア時代(1837-1901)の間に作品も媒体も、そして読者も多様化し、影響力のある一大文化産業となる。この授業では、19世紀末のイギリス小説に焦点を当て、さまざまな不安――ダーウィニズムが生み出した先祖返りの不安、退化幻想、そして植民地から本国、野蛮から文明への逆侵略の恐怖――を描いた代表的な作品を読むことを通じて、イギリス文学・文化・歴史への理解を深める。

【到達目標】
イギリス小説の代表的な作品を読み、テクスト（構造と細部）とその背景（文化・歴史）を理解する。
作品と作者の文学史における位置づけを理解する。
イギリス小説を原語でも読めるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
受講者が、小説の指定箇所や資料を読み、ワークシートに沿って準備学習をしていることを前提として授業を進める。グループ・ディスカッションを行ったあと、講師がディスカッションの結果を整理し解説を加えるというのが授業の基本的な進め方であるが、講義を中心とする回もある。
授業の終わりに、理解の確認のためのリフレクションペーパーを課す場合がある。
提出されたワークシートやリフレクションペーパーへのフィードバックは、翌週の授業内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス イントロダクション(1) イギリス文学・文化概説	授業に関する説明。受講希望者多数の場合は選抜。 18〜20世紀の小説を中心としたイギリス文学、およびその文化・社会的背景についての概説
2	イントロダクション（2）19世紀後半のイギリス文学・文化	授業で扱う作品、作家、その背景についての概説
3	ロバート・ルイス・スティーヴンソン『ジキル博士とハイド氏』(1886年）小説前半	演習（小説前半の分析）
4	『ジキル博士とハイド氏』(1886年）小説後半	演習（小説後半の分析）
5	『ジキル博士とハイド氏』(1886年）全体	演習（原文抜粋の分析）・講義
6	アーサー・コナン・ドイル『四つの署名』(1890年）小説前半	演習（小説前半の分析）
7	『四つの署名』小説後半	演習（小説後半の分析）
8	『四つの署名』全体	演習（原文抜粋の分析）・講義
9	H.G. ウェルズ『タイム・マシン』(1895年）	演習（原文抜粋の分析）・講義
10	H.G. ウェルズ　『モロー博士の島』(1896年）	演習（原文抜粋の分析）・講義
11	ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』(1902年）小説前半	演習（小説前半の分析）
12	『闇の奥』小説後半	演習（小説後半の分析）
13	『闇の奥』全体	演習（原文抜粋の分析）・講義
14	まとめ	試験、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の準備学習として、小説の指定箇所や資料を読み、ワークシートの問題に解答し、提出すること。
本授業の準備・復習時間は計４時間を標準とする。なるべく準備学習に重点を置くことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
(1) ３作品については、以下の邦訳の紙の書籍を使用する。受講許可を受けたあと、授業の予習に間に合うように、大学生協等で購入すること。
①スティーヴンスン、村上博基訳『ジーキル博士とハイド氏』 光文社古典新訳文庫, 2009.
②アーサー・コナン・ドイル、日暮雅通訳『四つの署名』 新訳シャーロック・ホームズ全集, 光文社文庫, 2007.
③コンラッド、黒原敏行訳『闇の奥』光文社古典新訳文庫, 2009.
(2)その他の作品については抜粋を配布する。

【参考書】
石塚久郎責任編集『イギリス文学入門』三修社, 2014.
※そのほか随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点（ワークシートやリフレクションペーパー等の提出物 70%）と、試験の成績（30%）の総合評価。成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】
・互いのワークシートの内容を共有することで、より多角的にテキストを理解できるので、グループワークの時間を長めにとる。

【学生が準備すべき機器他】
・毎回の授業内で、学習支援システムを利用する（「教材」配布、「課題」配布・提出、等）ため、PC等の端末（デバイス）を持参してください。

【その他の重要事項】
・授業に関する連絡は、学習支援システム（Webclass）を通じておこないます。
・初回授業について
受講希望者多数の場合、授業の最後に作成・提出してもらうペーパーをもとに、選抜をおこないます。
初回授業をやむを得ず欠席した受講希望者（仮登録者）は、当日中にWebclassを通じて仮登録者宛に出される「メッセージ」の指示にしたがってください。Webclassの「教材一覧」でも同じ指示を見られるようにしておきます。万が一「メッセージ」が届かなかった場合は、そちらを確認し、指示に従ってください。
選抜を実施した場合、追加で受講者希望者を受け入れることはできません。

【Outline (in English)】
Course Outline: “Culture and Society of the English Speaking World VI (Literature and Society C)” aims to introduce students to British literature in the context of British culture, society and history. Students will analytically and critically read some representative British literary works, published around the turn of the 20th century, that are obsessed with Victorian fin-de-siècle anxieties, and be introduced to their social and cultural contexts.
Learning Objectives: By the end of the course, students should be able to do the following: 1) understand the details of each novella/novel, and its cultural and historical context. 2) understand these works and their authors in the context of British literary history. 3) read and understand parts of each work, in English.
Learning activities outside of classroom: Students are expected to come to each class meeting well prepared by reading the assigned part of the text and doing the worksheet, given online, in advance. The required study time is about 4 hours per class.
Grading Policies: Grading will be decided based on worksheets and reflection papers (70%), and the term-end examination (30%)

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語圏の文化Ⅶ（英語の構造）

奥石　哲哉

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は，学生が現代英語の構造について，様々な面から考察するを目標にするものです．良きにつけ悪しきにつけ国際語になっている英語は，どのような言語であるのか，学生は，担当者とともに，授業を通じて考察していきます．

【到達目標】
１．学生が英語の音声面，文法面等の構造について，知識を得られること．
２．学生が英語の構造についての研究の仕方について，ある程度の知識を得られること．
３．学生が英語という言語に関しての様々な問に対して，答えるべき道筋をつけられること．
４．併せて，学生が英語・英語文化圏についての知識を深めること．
なお，上記の１，２で述べた知識ですが，ヤマとなる点は以下の通りです．
a) 音声器官，発音記号．
b) 音素の考え方（構造主義）．
c) 言語の知識を構成する各部門の考え方．
d) 記述上のさまざまな単位．
e) 統語範疇（品詞論）．
f) 直接構成素分析，句構造．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
現時点で考えていることは以下の2点です．
１．当面の間は学習支援システムを用いて学習に必要な資料を配布していきますが，質問、コメント等を受け付けることによって可能な限り履修者との双方向的な授業を目指したいと思います．
２．何をトピックにするか明確にし，履修者が問題意識を持って授業に臨めるようにしたいと思います．
課題等のフィードバックについては，「学習支援システム」や，個人メール等により行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション，英語の学び方	これから半期にわたる授業のやり方，教材について説明します．後半は，英語という言語について，どこでどのように話されているかなどを見た上で，英語史について簡単に触れます．
2	英語の音声について（１）	英語の音声について，その特徴を学んでいきます．言語音声に関する初回になりますので，音声研究において必要な調音器官などの用語，発声の原理について学びます．
3	英語の音声について（２）	英語の音声について，その特徴を学んでいきます．今回は，英語を離れ，一般的に単音の記述について見た後，子音・母音の分類原理について学習します．
4	英語の音声について（３）	英語の音声について学ぶ3回目です．英語の母音について，その分類を学んだ後，各母音について見ていきます．
5	英語の音声について（４）	英語の音声について学ぶ4回目です．二重母音，弱母音等について触れ，その後，フォニックスについて学習します．
6	英語の音声について（５）	英語の音声について学ぶ5回目です．母音についてまとめ，英語の子音を見ていきます．
7	英語の音声について（６）	英語の音声について学ぶ6回目です．子音についてまとめた後，音節，音結合について触れます．最後に，かぶせ音素（アクセント，リズム，イントネーション等）について解説します．
8	英語の文法について（１）	英語の文法について学ぶ1回目です．初回ですので，文法という用語の伝統的な意味と，新しい意味，生成文法の考え方等について学びます．
9	英語の文法について（２）	英語の文法について学ぶ2回目です．日英の語順の相違について概観した後，形態素，語，語彙素といった基本的な用語について学びます．
10	英語の文法について（３）	英語の文法について学ぶ3回目です．統語範疇という概念について概観します．具体的に，形容詞を例にとって，いかに統語範疇が規定されるか，検討します．
11	英語の文法について（４）	英語の文法について学ぶ4回目です．形容詞についての話をまとめ，他の統語範疇と形容詞の関係について学びます．英語の辞書の記述についても，検討します．
12	英語の文法について（５）	英語の文法について学ぶ5回目です．構成素という概念（おおまかな説明：語がどのような原理に基づいてグルーピングしていくのか）について学びます．そして，不連続構成素をどのように扱うかについての話をします．
13	英語の文法について（６）	英語の文法について学ぶ最後の回です．この回は，SVO+不定詞という構文を例にとり，それがどのように分析されるか，検討します．
14	まとめ〜今後につなげて	これまでの授業を総括し，その上で今後の英語学習にどのようにつなげていくか，授業で学んでいきます．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回，前回の内容を復習しながら，新しい内容に進みますので，学生は，基本的な用語を習得し，方法論を理解しながら，参考文献等を読んで授業に臨んでください．重要なのは，授業において，何らかの「引っ掛かり」を覚え，それを後で自分なりに調べるなどの行為を通じて，定着させていくことです．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特定のものを考えてはいません．適宜，プリントなどを配布，提供いたします．

【参考書】
授業中，随時指定いたしますが，とりあえず日本語で読めるものとして以下のものを挙げておきます．
・加島祥造 (1976).『英語の辞書の話』．東京：講談社[のちに講談社学術文庫に収載．]
・加島祥造 (1983).『新・英語の辞書の話』．東京：講談社[のちに講談社学術文庫に収載．]
・竹林滋・斉藤弘子 (1998).『改訂新版　英語音声学入門』．東京：大修館書店.
・中島文雄 (1991).『英語学とは何か』．東京：講談社[講談社学術文庫].
・田中菊雄 (1992).『英語研究者のために』．東京：講談社[講談社学術文庫].
・竹林滋 (1991).『英語発音に強くなる』．東京：岩波書店[岩波ジュニア新書].

【成績評価の方法と基準】
試験での成績を第一条件にして，平常点を加味します．言うまでもないことですが，出席することはすべての前提です．欠席は基本的に認めません．（やむを得ない場合に限り，欠席3で-10%（大体のところ評価にして１段階下がる），5で失格，というのを一応の目安とします．）
基本的に，最終試験で評価をいたします．その他のプロジェクト等を課す際には事前に周知します．）
この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更により，特にありません．

【学生が準備すべき機器他】
パソコンはあると便利ですし，発音記号のフォント，樹形図の書き方等に慣れることが可能になります．さらに，いろいろ興味深いサイトもありますので，授業や「授業支援システム」等を通じて，幅広く勉強ができます．

【その他の重要事項】
１．具体的なことは履修者の数，知識のレベルなどを加味して決めます．
２．本科目はグローバル・オープン科目のStructure of Englishと内容が同一ですので，重複履修はできません．
３．初回授業に必ず参加してください．
４．かなり速いペースで進みますので，真面目な態度で出席しないと履修は困難です．
● 授業形態については，「対面」となっていますが，場合によっては周知の上，「オンライン」も採り入れていきたいと思います．したがって，その点を考慮の上，履修をお願いします．

【カリキュラム上の位置づけ】
　本科目は，言語文化コースの3,4年次以上対象の授業です．（科目の性質上，SA英語圏の履修者が多いことが予想されます．）英語の構造をひと通り駆け足で学び，言語文化演習（あるいは卒業研究）へ結びつける科目です．半期ですので，かなり駆け足で勉強することになりますが，英語の構造について，基本的な知識は網羅するように心がけます．履修者は，自分なりに興味があるトピックを見つけ，方法論についても自分なりに知ろうとすることが大切です．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The aim of this course is to consider structural aspects of the English language, which has become the de facto 'global' language.Towards the end of the course, students will able to:
1. To get a general idea about how English sounds and grammatical phenomena are described.
2. To obtain a certain level of knowledge about how various structural aspects of modern English should be described.
3. To obtain enough knowledge about modern English so as to answer various questions about the alleged 'mysteries' of the English language.
4. To study English in its general sense. (You see, you all finished your SA programmes, so you should keep that level of English until graduation.)
【到達目標（Learning Objectives）】
The following is the list of important notions (among others) to be covered in this course:
a) articulatory organs and phonetic symbols,
b) the notion of phoneme (introduction to structural linguistics),
c) modular approach to linguistics,
d) various units in linguistic description,
e) syntactic categories (parts of speech),
f) immediate constituent analysis, phrase structural analysis.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Actual class sessions are all based on the Powerpoint slides (about 200 slides in all!) all prepared beforehand. So, in order to make the most of them you should:
- download and print out the slides and skim over them;
- attend the class w/the printed-out slides, concentrate on the contents of the lecture, and take as many notes as you can;
- visit the LMS site, and check the comments made by the instructor; and
- read the books/articles mentioned on the LMS site for further comprehension.
Should you have any trouble in taking realtime online class session, you can get access to the recorded educational material. Please check the LMS site for details.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
- Please note that attendance is taken for granted. However, if you miss a class, the following rule is applied: 1 demerit for each class missed. 3 demerits =-10% on your grade (roughly one letter grade). 5 demerits = failure for the course.
- The Final exam scheduled on the day of the final class session is very important, literally determining your grade. Please see my message on the LMS site for more information.
Any modification to the above shall be known to you by using LMS
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LANe300GA（英語 / English language education 300）

英語圏の文化Ⅷ（英語の歴史）

奥石　哲哉

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
英語の歴史は，ゲルマンの民族がブリテン島に侵入してから始まります．本授業では，担当者とともに，学生は，本来は大陸のゲルマンの部族の言語であった言語がブリテン島に入り英語になってから，どのような変化を遂げて，21世紀の今のような国際的な言語となっていったか学んでいきます．

【到達目標】
１．学生が英語の歴史について，ひと通りの知識を得ること．
２．学生が英語の歴史に興味を持ち，現代英語の様々な事象について，歴史的な説明を試みること．
３．学生が言語の歴史研究について，その大まかな方法論を知ること．
４．学生が英語の運用力をつけること．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
本授業では，担当者が授業用に用意したスライドを用いて講義型の授業をします．受講生は，講義に出席しつつ，併せて教材（以下の教科書）を各自読みすすめてください．読みやすい教材ですので，基本的な事柄の把握に重点をおきつつ読んでいってください．
各授業のフィードバックについては，「学習支援システム」にて詳細に行いますので，そちらを読んで内容の把握に努めてください．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション，英語以前の歴史	- 授業の進め方等の解説. - 現代英語の状況，話者数，分布等. - 英語史上の時代区分.
2	EARLY HISTORY 1	- IE studies &comparative linguistics - Proto-Indo-European
3	EARLY HISTORY 2	- Proto-Indo-European (cont'd) - Celts - Romans
4	OLD ENGLISH 1	- Latin influence on English - Anglo-Saxon invasion - Germanic languages sub-divisions
5	OLD ENGLISH 2	- Place name studies - *Angli* vs *wealas* - Christianisation - Viking raids - King Alfred's reign - OE runic inscriptions - Undley Bracteate and Franks Casket - OE pronunciation - 'Back to front' movements of OE pronunciation
6	OLD ENGLISH 3	- OE documents and poems (Law of Æthelberht, Gospels, *Beowulf*) - Oral tradition, alliteration, and OE compounding
7	OLD ENGLISH 4	- OE poems and alliteration - Norman Conquest - Social bilingualism in England
8	OLD ENGLISH 5	- ME: social bilingualism - English started to be spoken! - ME grammar, lexis - OE and ME dialects - Word order
9	MIDDLE ENGLISH 1	- ME documents (*Sumer Is Icumen In*, *The Canterbury Tales*, *Piers Plowman*) - Social changes - Great Vowel Shift
10	MIDDLE ENGLISH 2	- Great Vowel Shift (cont'd) - English becoming commoner! - Borrowed words - Shakespeare and the King James Bible
11	MIDDLE ENGLISH 3	- Biblical parallel text for comparison of OE, ME, and ModE - Shakespeare in original pronunciation - Spelling innovations
12	MODERN ENGLISH 1	- The first dictionaries (*A Table Alphabeticall*, Johnson's dictionary) - Linguistic prescriptivism - New words - *The Oxford English Dictionary*
13	MODERN ENGLISH 2	The Oxford English Dictionary (cont'd) - Received pronunciation and General American - Regional varieties
14	MODERN ENGLISH 3	- Regional varieties (cont'd) - Jargon and slang - The future of English

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学生は，まず，テキストを読んでくることから始めてください．この際，批判的に読むこと（書かれていることに疑問はないか，曖昧な記述はないか等問題意識を持って読むこと），出てくる用語等を資料，ネット等を用いて調べること，を意識的に行うことが重要です．授業後，復習をして固めれば，理解力が高まります．重要なのは，授業において，何らかの「引っ掛かり」を覚え，それを後で自分なりに調べるなどの行為を通じて，定着させていくことです．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Viney, Brigit (2008). The History of the English Language. Oxford University Press.

【参考書】
授業中，随時指定しますが，とりあえず日本語で読めるものとして以下のものを挙げておきます．
・北村達三 (1980).『英語を学ぶ人のための英語史』．東京：桐原書店．（内容として一番標準的ですが，最近の英語についての記述が少々足りません．）
・寺沢盾 (2008).『英語の歴史　過去から未来への物語』．東京：中央公論新社[中公新書].
・中尾俊夫，寺島廸子 (1988).『図説　英語史入門』．東京：大修館書店．
・ブラッドリ，H. 寺澤芳男訳 (1982).『英語発達小史』．東京：岩波書店[岩波文庫].

【成績評価の方法と基準】
試験での成績を第一条件にして，平常点を加味します．言うまでもないことですが，出席することはすべての前提です．欠席は基本的に認めません．（やむを得ない場合に限り，欠席3で-10%（大体のところ評価にして１段階下がる），5で失格，というのを一応の目安とします．）
基本的に，最終試験で評価をいたします．その他のプロジェクト等を課す際には事前に周知します．）
この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
昨年度休講のため，特にありません．

【学生が準備すべき機器他】
パソコンはあると便利ですし，発音記号のフォント，樹形図の書き方等に慣れることが可能になります．さらに，いろいろ興味深いサイトもありますので，授業や「学習支援システム」等を通じて，幅広く勉強ができます．

【その他の重要事項】
１．具体的なことは履修者の数，知識のレベルなどを加味して決めます．
２．本科目はグローバル・オープン科目のHistory of Englishと内容が同一ですので，重複履修はできません．
３．今年度はテキストを読んでいくことを中心にした授業構成に変えました．
４．「英語史」と「英国史」とは異なります．ことばに焦点を当てる授業です．
５．初回授業に必ず参加してください．

【カリキュラム上の位置づけ】
本科目は，言語文化コースの3,4年次以上対象の授業です．（科目の性質上，SA英語圏の履修者が多いことが予想されます．）英語の歴史をひと通り駆け足で学び，言語文化演習（あるいは卒業研究）へ結びつける科目です．半期のため，かなり駆け足で勉強することになりますが，英語の歴史の基本的な知識は網羅できると思います．履修者は，自分なりに興味があるトピックを見つけ，方法論についても自分なりに知ろうとすることが大切です．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
Towards the end of this course, students will be able to:
1. to study the history of the English language, which, good or bad, has become an 'international language' in our modern world; and

2. to develop a general interest in the language itself through doing a lot of reading.
【到達目標（Learning Objectives）】
The following are the concrete goals of this course:
1. To get a general idea how the English language has evolved,
2. To try to explain various apparent 'mysteries' of English in historical terms,
3. To begin to develop a general theory of linguistic change,
4. To study English in its general sense.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Students are expected to visit the relevant LMS site and get as much information as needed.
Admittedly, this is not an easy course with all those unfamiliar terms and concepts. So, it is strongly recommended to read the relevant materials suggested on the LMS site posted immediately after each class session by the instructor.Approximately two hours of preparation and reviewing are necessary for this course.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
- Please note that attendance is taken for granted. However, if you miss a class, the following rule is applied: 1 demerit for each class missed. 3 demerits =-10% on your grade (roughly one letter grade). 5 demerits = failure for the course.
- The Final exam scheduled on the day of the final class session is very important, literally determining your grade. Please see my message on the LMS site for more information.
Any modification to the above shall be known to you by using LMS
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LANe300GA（英語 / English language education 300）

Structure of English

奥石　哲哉

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.
その他属性：〈グ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
The aim of this course is to consider structural aspects of the English language, which has become the de facto 'global' language. Towards the end of this course, students will be able to attain the following goals indicated below.

【到達目標】
1. To get a general idea about how English sounds and grammatical phenomena are described.
2. To obtain a certain level of knowledge about how various structural aspects of modern English SHOULD be described.
3. To obtain enough knowledge about modern English so as to answer various questions about the alleged 'mysteries' of the English language.
4. To study English in its general sense. (You see, you all finished your SA programmes, so you should keep that level of English until graduation.)
The following is the list of important topics (among others) to be covered in this course:
a) articulatory organs and phonetic symbols,
b) the notion of phoneme (introduction to structural linguistics),
c) modular approach to linguistics,
d) various units in linguistic description,
e) syntactic categories (parts of speech),
f) intermediate constituency, phrase structural analysis

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Class sessions are going to be held face-to-face. The basic schedule remains the same; however, schedule change, if any, will be notified by using the Learning Management System (LMS). The details of the methods will be provided by using the LMS by several days prior to the first class session.
Actual class sessions are all based on the Powerpoint slides (about 200 slides in all!) all prepared beforehand. So, in order to make the most of them you should:
- download and print out the slides and skim over them;
- attend the class w/the printed-out slides, concentrate on the contents of the lecture, and take as many notes as you can;
- visit the LMS site, and check the comments made by the instructor; and
- read the books/articles mentioned on the LMS site for further comprehension.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	General Introduction	- Introduction - What's English? - English studies/linguistics - How many speakers? - AmE vs BritE
2	General Introduction (cont'd)	- Saussurean semiotics - Articulatory organs - Airstream mechanisms - VOT - Sound classification - Consonants
3	Sound Aspects of English (1)	- Vowels - Others - Monophthong vs. diphthong - The phoneme
4	Sound Aspects of English (2)	- Allophones - English vowels - Checked vs. free - Strong vs. weak - Long vs. short (tense vs. lax) - Phonics
5	Sound Aspects of English (3)	- Checked vowels in English - What are good phonetic transcriptions? - Long vowels - Diphthongs - Triphthongs - Weak vowels
6	Sound Aspects of English (4)	- Consonants - Stops - Fricatives and affricates - Nasals - Laterals - Semivowels
7	Sound Aspects of English (5)	- The syllable - English phonotactics - Sound connections - Suprasegmentals
8	Sound Aspects of English (6) and Meaning Aspects of English (1)	- Accent, rhythm and intonation - Grammar and lexis - 'Chain' and 'choice' - Selection vs. combination - Modular approach and brain lateralisation
9	Meaning Aspects of English (2)	- Word orders and generative grammar - Word order generalisation
10	Meaning Aspects of English (3)	- The word - The morpheme - The lexeme - A dozen words of English - Syntactic categories - Important criteria - Distribution, combinability, and ordering
11	Meaning Aspects of English (4)	- The adjective - Attributive vs. predicative uses - Adjectival semantics Central vs. peripheral adjectives - Adjectives and other syntactic categories
12	Meaning Aspects of English (5)	Immediate constituency - Flat vs. hierarchical structures - Phrase structure grammar - Discontinuous constituent?
13	Meaning Aspects of English (6)	- Movement rules and other ways to explain discontinuous constituency
14	Final Exam &final remarks	- Final exam of this course given. After that final remarks are in order.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to visit the relevant H'etudes site and get as much information as needed.
Admittedly, this is not an easy course with all those unfamiliar terms and concepts. So, it is strongly recommended to read the relevant materials suggested on the LMS site posted immediately after each class session by the instructor.
Approximately two hours of preparation and reviewing are necessary for this course.

【テキスト（教科書）】
There are no particular textbooks for this course.

【参考書】
Suggested reading materials to enhance students' comprehension will be mentioned through H'etudes in due course. However, the following (all written in Japanese) are recommendable prior to the opening of the course:
- 加島祥造 (1976).『英語の辞書の話』. 東京：講談社[のちに講談社学術文庫に収載.]
- 中島文雄 (1991).『英語学とは何か』. 東京：講談社[講談社学術文庫].
- 田中菊雄 (1992).『英語研究者のために』. 東京：講談社[講談社学術文庫].

- 竹林滋 (1991).『英語発音に強くなる』. 東京：岩波書店[岩波ジュニア新書].

【成績評価の方法と基準】
- Please note that attendance is taken for granted. However, if you miss a class, the following rule is applied: 1 demerit for each class missed. 3 demerits =-10% on your grade (roughly one letter grade). 5 demerits = failure for the course.
- The Final exam scheduled on the day of the final class session is very important, literally determining your grade. Please see my message on the LMS site for more information.
Any modification to the above shall be known to you by using LMS
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
n/a

【学生が準備すべき機器他】
Personal computers, good English dictionaries, etc.

【その他の重要事項】
This is just a half-year (semestral) course about the structural aspects of modern English, which is in many ways similar to 'Intro to English Linguistics' you see in English major's curriculum; only, the speed is much faster! Therefore, the contents covered should be rather selective in nature. Students are highly encouraged to study various matters not treated in class sessions.
Also, as is shown in Goals above, always having a strong interest in English per se is important. So, please study English hard and try to develop a 'feel' for the language.

【カリキュラム上の位置づけ】
Open for the third- and fourth-year FIC students (many of them probably being the SA-English students). Also open for non-FIC students. Appropriate for those who have strong interest in the English language and/or language studies in general.

LANe300GA（英語 / English language education 300）

History of English

奥石　哲哉

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、
あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.
その他属性：〈グ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Towards the end of this course, students will be able:
1. to study the history of the English language, which, good or bad, has become an 'international language' in our modern world; and
2. to develop a general interest in the language itself through doing a lot of reading.

【到達目標】
1. To get a general idea how the English language has evolved,
2. To try to explain various apparent 'mysteries' of English in historical terms,
3. To begin to develop a general theory of linguistic change,
4. To study English in its general sense. (You see, you must keep that level of English acquired through your SA experience!)

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Actual class sessions are all based on the Powerpoint slides (More than 200 slides in all!) all prepared beforehand. So, in order to make the most of them you should:
- download and print out the slides and skim over them;
- attend the class w/the printed-out slides, concentrate on the contents of the lecture, and take as many notes as you can;
- visit our Learning Management System (LMS)site and check the comments made by the instructor; and
- read the books/articles mentioned on the LMS site for further comprehension.
Please note that feedbacks to the lecture contents will be amply given on the LMS site. After each class session given, the detailed review articles will be given on the web; so please make the most of them.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Introduction; early history	- Introduction - IE studies &comparative linguistics - Proto-Indo-European
2	Early history (cont'd)	- Proto-Indo-European (cont'd) - Celts - Romans
3	Early history (cont'd) and Old English	- Latin influence on English - Anglo-Saxon invasion - Germanic languages sub-divisions
4	Old English (cont'd)	- Place name studies - *Angli* vs *wealas* - Christianisation - Viking raids - King Alfred's reign - OE runic inscriptions - Undley Bracteate and Franks casket
5	Old English (cont'd)	- Old English Pronunciation - 'Back to front' movements
6	Old English (cont'd)	- Old English documents and poems (Law of Æthelberht, Ælfric's *Colloquy*, Lindisfarne Gospels, *Beowulf*) - Oral tradition, alliteration, and OE compounding
7	Old English (cont'd)and Middle English	- OE poems and alliteration - Norman Conquest - Social bilingualism in England
8	Middle English (cont'd)	- ME: social bilingualism - English started to be spoken! - Middle English (Grammar and lexis, OE and ME dialects, word order, etc.)
9	Middle English (cont'd)	ME documents (*Sumer is Icumen in*, *The Canterbury Tales*, *Piers Plowman*) - Social changes - Great Vowel Shift
10	Modern English	- Great Vowel Shift (cont'd) - English becoming commoner! - Borrowed words - Shakespeare and the King James Bible
11	Modern English (cont'd)	- Biblical parallel texts - Shakespeare in original pronunciation - Spelling innovations
12	Modern English (cont'd)	- The first dictionaries (*A Table Alphabeticall*, Johnson's dictionary) - Linguistic prescriptivism - New words - *The Oxford English Dictionary*
13	Modern English (cont'd) and Present-day English	- *The Oxford English Dictionary* (cont'd) - Received Pronunciation and General American - Regional varieties
14	Present-day English (cont'd)	- Regional varieties (cont'd) - Jargon and slang - The future of English

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to visit the relevant LMS site and get as much information as needed.
Admittedly, this is not an easy course with all those unfamiliar terms and concepts. So, it is strongly recommended to read the relevant materials suggested on the LMS site posted immediately after each class session by the instructor.Approximately two hours of preparation and reviewing are necessary for this course.

【テキスト（教科書）】
Viney, Brigit (2008). *The History of the English Language*. Oxford: Oxford University Press.

【参考書】
Suggested reading materials to enhance students' comprehension will be mentioned through LMS in due course. However, the following are worth reading prior to the opening of the course:
- Algeo, John (2010). *The Origins and Development of the English Language*. Sixth edition. Boston: Wadsworth. [Based on the original work of Thomas Pyles. Careful about special phonetic notations used.]
- Barber, Charles, Joan C. Beal, and Philip A. Shaw (2009). *The English Language: A Historical Introduction*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press. [Offers clear explanations of linguistic ideas.]
- Bradley, Henry (1970). *The Making of English*. Tokyo: Seibido. [A bit out of date, but still a good introduction. Japanese translation available from Iwanami.]
- Schmitt, Norbert and Richard Marsden (2009). *Why Is English Like That? Historical Answers to Hard ELT Questions*. Ann Arbor: The University of Michigan Press. [A recent book; easy to read; written for English language teachers.]

【成績評価の方法と基準】
- Please note that attendance is taken for granted. However, if you miss a class, the following rule is applied: 1 demerit for each class missed. 3 demerits =-10% on your grade (roughly one letter grade). 5 demerits = failure for the course.
- The Final exam scheduled on the day of the final class session is very important, literally determining your grade. Please see my message on the LMS site for more information.
Any modification to the above shall be known to you by using LMS
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Overall, the instructor gets favourable comments from the students.

【学生が準備すべき機器他】
Using a personal computer is recommended, which enables you to get accustomed to make use of phonetic fonts as well as tree-drawing applications. Also, there are many interesting sites on the web which the instructor recommends you to visit.

【その他の重要事項】
In terms of its content, this course is the same as「英語圏の文化VIII（英語の歴史）」taught in Japanese. Therefore, if you have obtained credits taking that course, you cannot obtain credits by taking this course.
This course is just a half-year (semestral) course about the history of the English language. Students are highly encouraged to study various matters not treated in class sessions.
Also, as is shown in Goals above, always having a strong interest in English per se is important. So, please study English hard and try to develop a 'feel' for the language.

【カリキュラム上の位置づけ】
Open for the third- and fourth-year FIC students (many of them probably being the SA-English students). Also open for non-FIC students. Appropriate for those who have strong interest in the English language and historical linguistics.

ARSx200GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 200）

世界とつながる地域の歴史と文化

髙柳　俊男

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：選抜

その他属性：〈優〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業は、2012年度から夏休みに長野県南部の飯田・下伊那地域で実施している「ＳＪ国内研修」（ＳＪ＝Study Japan）に参加する留学生・ボランティア補助員および希望する一般学生を主対象に、その事前学習用として開講されるものである（留学生必修）。
「ＳＪ国内研修」とは、一般学生のＳＡに相当するもので、地方の中山間地域で見聞・交流・発表等の諸活動を経験することで、留学生にとってのＳＡとも言えるこの日本を、東京からの発想とは別に、地方の視点でも考えうる目を養うことを趣旨としている。
したがって、この授業の目標も、飯田・下伊那地域の歴史・社会・文化・民俗・自然などについて、一通りの前提知識を身につけることで、8泊9日程度の「ＳＪ国内研修」を有意義に送れるようにすることにある。国際文化学部の研修であることに鑑み、とりわけこの地域における国際化や異民族との関係、および文化活動に重点を置きながらみていく。

【到達目標】
授業の進展につれ、南信州の中山間地域である飯田・下伊那にも、東京とはまた異なる歴史・文化・自然があり、固有の国際関係があることが理解できるであろう。最終的には、「ＳＪ国内研修」に際して探求すべき自分なりのテーマをみつけ、夏休み中の自己学習を経て、研修本番につなげられるようにすることが目標である。
「ＳＪ国内研修」に参加せず、単なる一授業として受講することも可能だが、そうした受講者にとっては、飯田・下伊那を例に、日本のなかに存在する多様性や多文化を考える視点を得ることが到達目標となる。そこで得られた視点やアプローチは、日本の他地域を考える際にも有効に機能するであろう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
教員による講義が中心だが、受講生に随時発問しながら進める。関連する映像の上映も、適宜織り交ぜる。
特定の地域の細かな事実にとことんこだわるが、それは「個別を極めることを通して普遍に至る」こと、すなわちこの授業のタイトルのように、「飯田・下伊那から日本がみえる、世界とつながる」ことを具体的に知るためである。そのためには最低限、理解すべき事項は理解し、重要な固有名詞（地名、人名など）は覚えることが前提となる。
毎回、授業の最後に、感想や疑問・質問などをリアクションペーパーに書いてもらい、それを次回の授業冒頭で活用するなど、双方向的な授業になるよう心がけたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	本授業と「ＳＪ国内研修」の概要を説明する。受講希望者数によっては、選抜を実施することもあるので、初回の授業に必ず出席すること。
第2回	飯田・下伊那の概況①	飯田・下伊那地域にある1市3町10村について、行政区分、地形、気候、交通、物産などの概況をみていく。天竜川の果たした役割や、愛知県東部・静岡県西部との県境を越えたネットワーク（三遠南信）についても考える。
第3回	飯田・下伊那の概況②	前回に続いて、飯田市の成り立ちを考える。1937年に成立した当初の市域に、1950年代以降、周辺の15の自治体が合併していまの飯田市が形成されていることの意味、言い換えれば飯田市の統一性と多様性を具体的に考察する。
第4回	飯田・下伊那の歴史	飯田・下伊那地域が経てきた歴史の概要を、古代から現代まで通史的に学ぶ。中心的に扱う戦後史部分では、飯田市のアイデンティティの根幹にも関わる飯田大火、りんご並木、三六災害について知る。
第5回	飯田線建設史①	現在のＪＲ飯田線、とくに旧三信鉄道の建設史を、アイヌの測量士カネトや朝鮮人労働者に焦点を当ててみていく。飯田駅前に記念碑が建つ伊原五郎兵衛についても知る。
第6回	飯田線建設史②	前回学んだカネトについて、近年、住民自身により飯田線沿線各地で上演されている合唱劇『カネト』の映像を鑑賞しながら、再度考える。
第7回	満州移民の歴史①	1930年代以降、この地域から多数渡って行った満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍について、その史実と背景を学ぶ。
第8回	満州移民の歴史②	前回学んだ満蒙開拓青少年義勇軍について、そのテーマでつくられたアニメ『蒼い記憶』を鑑賞しながら、再度考える。
第9回	満州移民の歴史③	現在、この地域の人々が、満蒙開拓団の歴史やその結果として生まれたいわゆる中国残留孤児・残留婦人、中国帰国者のことを、どう後世に伝えようとしているかを、阿智村に開館した満蒙開拓平和記念館などを例に探る。また、「残留孤児の父」と称される阿智村の長岳寺住職、山本慈昭についても知る。
第10回	飯田・下伊那の多民族共生の現在	外国人が増え、市として外国人集住都市会議に参加している飯田市における外国人の実態や、国際化・多文化共生の取り組みについて考察する。平岡ダム建設における外国人強制労働の歴史を、後世に正しく伝えようと努める天龍村の姿勢についても、あわせて考察する。
第11回	飯田・下伊那の文化①	人形浄瑠璃や歌舞伎など、この地域に残る各種の伝統民俗芸能や、それを背景とする現在の文化イベントについて知る。とりわけ、飯田市内で活動する黒田人形・今田人形をはじめとする伊那谷４座について、映像で確認する。
第12回	飯田・下伊那の文化②	この地域の特色ある文化活動として、通巻1000号超の歴史を誇る郷土雑誌『伊那』の刊行や、活発な公民館活動について知る。あわせて、写真や童画で庶民の生活を記録してきた阿智村の熊谷元一についてもみていく。
第13回	飯田・下伊那の文化③	この地域ゆかりの文化人のうち、法政大学で学んだり教えたりした経験をもつ椋鳩十・西尾実・森田草平の３人について、自校教育の観点も含めて取り上げる。
第14回	まちづくりや自然との共生	早くからグリーンツーリズム、エコツーリズム、都市農村交流などを唱え、実践してきた飯田市の取り組みについて知る。山村留学がこの地域に果たしている役割や、1970年に廃村となった大平宿の保存活用運動についても探る。地域おこし協力隊など、若者による地域活性化の活動にも触れる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回配付するプリントに、「自習課題」を載せる。同じ内容は、ネット上の学習支援システムにも掲載する。これは自習であって、必ずしも提出義務はないが、提出すれば、就職活動などによる欠席を補う参考資料として加味する。可能な限りチャレンジして、学んだことをより深く考察し、定着させることを推奨する（提出期限：ネットへのアップから２週間後）。
従来は授業期間中に、この授業と関連した学部イベントを実施してきたが、コロナ期に中断して今に至っている。今年度は、状況を見ながら実施するかどうか考えたい。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用せず、学習内容に即したプリントを毎回、Ａ３で表裏１枚程度配付する。各回のプリントはファイルないし合冊にしておいて、実際の研修の場にも持参して活用すること。
かつては留学生の自習用として、しんきん南信州地域研究所『いいだ・南信州 大好き』（2010年）を当方で人数分用意して各人に差し上げていたが、絶版で入手が難しくなっている。資料室に複数冊あるので、そちらで適宜利用してほしい。

【参考書】
授業の中で適宜指示する。それらの大半は、ＢＴ20階の国際文化学部資料室および書庫に配架された「飯田・下伊那文庫」（書籍2,000冊以上、映像ＤＶＤ約350点所蔵）に収められている。飯田市以外ではこれだけ揃った場所は無いともいわれるこれら関連資料を、ぜひ大いに活用してほしい。

【成績評価の方法と基準】
毎回提出するリアクションペーパーに反映された授業に取り組む姿勢40％、途中での中間課題20％、学期末のレポート40％を目安とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ＳＪ国内研修に参加せず、１つの授業として受ける人には、「一地域のことをなんでこんなに細かく学ぶのか？」という疑問があるかもしれない。ただし、特定の一地域へのアプローチの仕方や、「個別を極めることを通して普遍に至る」という学び方は、他の分野にも幅広く応用が利くであろうと思われる。
それに関連して、昨年度の授業改善アンケートに、以下のような自由記述があったことを紹介しておきたい。
「留学生向けの授業ではあるが、日本人学生こそ本授業を履修すべきだと、一日本人学生として感じた。自分の住んでいる国に、どんな地域があるのか、どんな歴史があるのか、改めて学ぶべきだと考えさせられたことが何度もあった。また、南信州の地域の歴史や文化を深く知る中で、歴史の教科書やテレビにおける「真実」「事実」とは何か、改めて考えさせられた。
教授自身の実体験も授業の中で多数紹介されるため、全体的に非常に興味深い授業であった。」

【学生が準備すべき機器他】
上述のように、学習支援システムをもう一つの教室として活用する。新型コロナやインフルエンザの感染状況等により、対面授業が難しい場合はzoomを使用する。

【その他の重要事項】
「ＳＪ国内研修」に参加する人は、どのような形であれ、この事前学習授業の履修が前提条件になる。研修の参加経費や単位の有無は、参加資格によって異なるので、詳細は「履修の手引き」の該当頁を参照のこと。
ＳＪの実施時期は9月上～中旬で、出発前最終ミーティングを例年、春学期試験期間終了翌日に実施している。ボランティア補助員や一般参加者も含めた募集は、7月初旬から開始する。

【選抜の有無】
留学生、およびＳＪ参加への強い意欲を有する一般学生を優先し、教室の収容人員を超えた場合は初回授業で選抜を行なうことがある。

【Outline (in English)】
This course is primarily designed for students who participate in the SJ(Study Japan) program in summer session. Therefore this class aims to gain a basic understanding of history, culture, and ethnic issues of South Nagano, where the SJ program is implemented.
Students who will not participate in the SJ program are also able to take this class. For those students, the goal is to develop an eye for perceiving Japan from multiple perspectives.
Self-study assignments will be given in the handouts distributed in each class. Please try each time if possible to deepen what you have learned.
Final grade will be calculated according to the following process. Reaction papers for each class 40%, mid-semester report 20%, and term-end report 40%.

SOC300GA（社会学 / Sociology 300）

実践社会調査法

松本　悟

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
質的社会調査の実践と量的社会調査のリテラシーを学ぶことで、卒業研究などで活かせるような研究方法を身に着けることを目指す。なお、量的社会調査についてはリテラシーを学ぶに留め実践は行わない。

【到達目標】
（1）統計的な社会調査データの読み取りができる。
（2）質的調査（ドキュメント調査、ライフストーリーインタビュー調査）を実践できる。
（3）卒業研究などに必要な、問いの構想、妥当な調査、収集したデータを適切に使った論文を執筆できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■基本方針：対面で実施する。学内業務の関係でオンデマンドを使用することもある。
■フィードバック：発表に対しては授業内にコメントする。また授業への質問は、学習支援システムの掲示板に質疑応答コーナーを設けて、そこでやり取りする。
■授業の方法：①事前課題をもとに議論と講義を行う反転授業、②学生が提出した原稿などを全員で事前に読んできてコメントし合う方法、③教員が用意した課題をもとにしたグループ討議・発表などアクティブラーニングをフルに導入する、④文章力を向上するために、受講生が書いた文章に丁寧なコメントをする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクションと課題	本授業の内容を説明し、履修希望者が40人を超える場合は選抜のための課題に取り組む。
2	社会調査とは何か？	事前課題文献を読んだ上で、今まで思っていた社会調査との違いを議論する。
3	問いについて考える	社会調査はただ何かを調べることではない。必ず問いが必要である。調査をする際のよい問いとは何かを議論する。
4	ライフストーリーインタビュー調査の問いと構想	ライフストーリーインタビュー調査で明らかにする問いの発表とグループ討議。ライフストーリーインタビュー調査の方法と研究倫理に関する講義。
5	ドキュメント調査の問いと構想	ドキュメント調査で明らかにする問いの発表とグループ討議。ドキュメント調査の方法に関する講義。
6	プレゼンテーション	調査結果をどのように発表すると効果的かを演習形式で考える。
7	ライフストーリーインタビュー調査結果の口頭発表	ライフストーリーインタビュー調査の結果を口頭発表し議論する。
8	ドキュメント調査結果の口頭発表	ドキュメント調査の結果を口頭発表し議論する。
9	論文作法	これから執筆する論文の技法について講義と実習を行う。
10	執筆	ライフストーリーインタビュー調査もしくはドキュメント調査の結果を論文にする。
11	ライフストーリーインタビュー調査論文初稿	ライフストーリーインタビュー調査を選択した履修者の論文を事前に読んできて、グループでコメントし合う。
12	ドキュメント調査論文初稿	ドキュメント調査を選択した履修者の論文を事前に読んできて、グループでコメントし合う。
13	量的調査のリテラシー	数量化された量的調査の読み取り方を演習形式で学ぶ。
14	国際文化学部生にとっての社会調査法	授業で学んだことをＫＪ法を用いて整理する。論文の最終稿提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題は多いが、その分まちがいなく実践的な力が身につく。履修人数によって時間配分はシラバスと異なる可能性がある。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特にない

【参考書】
大谷他（2005）『社会調査へのアプローチ―論理と方法［第2版］』ミネルヴァ書房。
鹿島茂（2003）『勝つための論文の書き方』文春新書。
その他適宜授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】
ライフストーリーインタビュー調査論文もしくはドキュメント調査論文の最終稿が60%、口頭発表など授業課題が40%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
卒業論文を書く意思のある2〜4年生を主な対象とした授業であり、履修者は確実にその力がついている。毎年、授業で書いた論文をもとに法政大学懸賞論文に応募した受講生数名が入賞している。一方で学生の負担が大きいようなので、2025年度から、口頭発表まではライフストーリーインタビュー調査とドキュメント調査の両方を習得するが、執筆するのはライフストーリーインタビュー調査論文かドキュメント調査論文のどちらか1本とするやり方に変更した。

【学生が準備すべき機器他】
授業コードを使って必ず授業支援システムに自己登録すること。発表の際にはレジュメを人数分用意し事前に配布すること。

【その他の重要事項】
1．調査のハウツーを学ぶ授業ではない。論文を目的とした調査法の授業である。
2．この授業はアンケート（質問紙）などを使った統計分析は行わない。実践するのは質的調査法である。
3．履修の意思があるものの初回授業に出席できない場合は、必ず初回授業より前に担当教員にその旨を伝えること（smatsumoto[アットマーク]hosei.ac.jp）。
4．事前に統計の知識がなくても履修に問題はない。
5．課題は比較的多いが、その分学びも大きい。
6．遅刻は授業の進行の大きな妨げとなるので始業時には教室に入っていること。
7．担当教員は社会調査士の資格を持ち、海外での質的社会調査を実践してきた。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course contains lecture / practice of qualitative research, and literacy of quantitative research, but not includes practice of quantitative research. It enable students to apply the qualitative research methodologies such as life-story interview and document analysis and to use quantitative data for their graduation dissertations in proper manners.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) develop their literacy skills to understand the quantitative data.
2) practice the qualitative research (life-story interview and/or document analysis).
3) acquire the academic skills to develop a research question, an appropriate research method and write a short paper in academic manner.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to read the assigned book chapter, to write a draft paper or to have completed the required assignments and so on.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
one research paper: 60%, class assignments: 40%

SOS200GA（その他の社会科学 / Social science 200）

実践国際協力

松本　悟

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大学教育で「実践」から学ぶことには2つの意義があると考える。1つは体系立った学習の応用として、もう1つは新たに学習すべき領域を見つけるためである。この授業では後者を主たる目的とする。テーマは「国際開発協力」を中心的に取り上げる。国際開発協力の実践例を通して、国際社会の理解につながる思いもよらぬ学問分野の大切さを発見し、更なる学習と探究の端緒となるようにする。

【到達目標】
（1）国際開発協力の理解に必要な概念や用語を理解し説明できるようになる。
（2）国際開発協力の実践課題を抽象化し他に応用できるようになる。
（3）実践的な学習におけるグループ討議の意義を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■基本方針：対面で実施する。学内業務の関係でオンデマンドを使用することもある。
■フィードバック：毎回の発表に対しては授業内にコメントする。また授業への質問は、学習支援システムの掲示板に質疑応答コーナーを設けて、そこでやり取りする。
■授業の方法：具体的な国際開発協力のケース（事例）をもとにグループ討議を行う「ケースメソッド」を準用する。ケース文書は毎回事前課題の宿題として課す。①受講者をグループに分けての討議、②グループ発表を含む全クラス討議、③担当教員によるコメント・補足講義、の3つの要素を組み入れる。なお、本授業のケースメソッドはビジネススクールなどで使われる問題解決の手法としてではなく、視点の抽出方法として活用する。
■授業後課題：毎回の課題文献と授業をもとに短く書く。授業後3日以内に学習支援システムに投稿。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業のねらい、ケースメソッド、各ケースの特徴、グループ分け。履修者人数の確認。
2	国際開発協力概論	国際開発協力がどのような組織によって、いかなる分野で行われているかを概観する。
3	ケース1　保健衛生プロジェクト	あらかじめ示した質問にしたがってグループ討議。ケースの理解を深める。
4	ケース1を受けたグループ発表・討議	ケース1に関するグループ発表、その後全体討議。
5	ケース2　少数民族プロジェクト	あらかじめ示した質問にしたがってグループ討議。ケースの理解を深める。
6	ケース2を受けたグループ発表・討議	ケース2に関するグループ発表、その後全体討議。
7	ケース3　参加型開発プロジェクト	あらかじめ示した質問にしたがってグループ討議。ケースの理解を深める。
8	ケース3を受けたグループ発表・討議	ケース3に関するグループ討議、その後全体討議。
9	ケース4　緊急援助プロジェクト	あらかじめ示した質問にしたがってグループ討議。ケースの理解を深める。
10	ケース4を受けたグループ発表・討議	ケース4に関するグループ発表、その後全体討議。
11	事前事業評価表を読み解く	開発援助事業の事前事業評価をその場で読んで疑問点をあげ、その妥当性をグループで討議する。
12	事前調査報告書を読み解く	開発援助事業の事前調査報告書を事前に読み、そこから導かれる実務的に重要な点をグループで討議する。
13	実際のケースから	担当教員もしくは外部のゲストの実体験をもとに、実践上の課題を議論する。
14	授業内試験	13回の授業をもとにした授業内試験を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全員、授業前にケース（事例）文章を必ず「精読」して来なければならない。「精読」とは、わからない用語を自分で調べ、事実関係を理解できるように読むことを指す。あらかじめ何に留意して読むかは教員が指示する。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
山口しのぶ・毛利勝彦編（2011）『ケースで学ぶ国際開発』東信堂。

【参考書】
W.エレット（2010）『入門ケース・メソッド学習法』ダイヤモンド社。
その他、授業の中で示す。必要に応じてコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】
毎回の授業後課題20%、事前課題文献に基づいたグループ討議への参加度40%、授業内試験40%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。なお、授業内試験は紙媒体のものは全て持ち込み可。

【学生の意見等からの気づき】
・100分では討議と発表が終わらないという声が多いので、初めのうちは、1つのケースに授業2回分を充てる。
・教員から指定される分析をグループ討議で行い、その結果を発表した上で、全体でも討論をするのには100分間は非常に短いという声が多い。その一方で、短時間で深い議論を行い、一定の結論をグループで出す訓練の場になるという意見も聞かれる。そうした力を大学時代に養いたい学生にはお勧めの授業と言えそうである。

【学生が準備すべき機器他】
授業コードを使って必ず授業支援システムに自己登録すること。課題文献の提示や課題の提出に学習支援システム（Hoppii）を使う。

【その他の重要事項】
■国際開発協力NGOでの実務経験を有する教員が、自らが関わった具体的な開発事例も議論のためのケースとして取り上げる。
■グループ討議を軸とする授業であり、遅刻や欠席はグループ討議を困難にするため、なるべく出席すること。
■グループは第3回授業から事前に固定して作る。グループ替えは2-3回行う。第1回授業に出席できないものの履修を希望する学生は、必ず第2回授業日前日までに履修の意思を担当教員までメールで連絡すること（smatsumoto[アットマーク]hosei.ac.jp）。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course aims to motivate students to find out specific topics or fields which they want to study more to understand international development cooperation. The Case Method is applied for this course.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) Understanding the key concepts and the technical terms relevant to international development cooperation.
2) Turning abstract the lessons learned from the case method discussion and applying it for other cases.
3) Understanding benefits and usefulness of the group discussion in practical learning.
【Learning activities outside of classroom】
-Students will be expected to have read and analyze the assigned case documents based on the instruction before each class meeting.
-Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting.
-Totally, your study time will be at least four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end examination: 40%, assignments after a class meeting: 20%, in-class contribution: 40%.

POL200GA（政治学 / Politics 200）

国際関係研究Ⅰ

松本　悟

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：国際関係研究Ⅰ（アクターに着目した理論の捉え方）
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業ではアクター（行為の主体）に着目して「国際関係」を学ぶ。「国際関係」を国家の関係のみで語ることは困難であり、特にＮＧＯや企業などの民間アクターの存在は重要である。本授業ではそのために必要な理論を習得するとともに、それを通して国際社会の諸問題を多角的に分析する力を養う。

【到達目標】
（1）授業で扱う非国家アクターが「国際関係」にどのような影響を及ぼしているかを説明できる。
（2）「国際関係」に関わる事件や問題が生じたとき、理論的に現象を説明することができる。
（3）関連する文献の趣旨を正しく読み取ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■基本方針：対面で実施する。学内業務の関係で、オンデマンドを使用することもある。
■フィードバック：講義への質問は、学習支援システムの掲示板に質疑応答コーナーを設けて、そこでやり取りする。
■授業内討論：毎回グループ討議・発表を行い、教員がフィードバックする。また、数回は演習型の授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	国際関係研究の概要及び本授業の狙いと全体像を講義する。
2	理論とは何か	国際問題を考える際に無意識に使っている「理論」を自覚する。
3	リアリズム	具体例を通して国際関係の基本的パラダイムであるリアリズムを理解する。
4	リベラリズム	具体例を通して国際関係の基本的パラダイムであるリベラリズムを理解する。
5	コンストラクティヴィズムとマルキシズム	具体例を通して国際関係の基本的パラダイム（アプローチ）であるコンストラクティヴィズムとマルキシズムを理解する。
6	演習	ここまで学んだ4つのパラダイムを使って、国際社会の具体的な問題を複数の角度から分析する演習を行う。
7	ＮＧＯとは何か	ＮＧＯの定義、歴史、特徴などについて学ぶ。
8	規範起業家としてのＮＧＯ	国際社会におけるＮＧＯの役割として重視されている規範起業家について具体的な事例に基づいて考える。
9	国家補完と脱国家	ＮＧＯは国家を補完しているのか、国家を「脱している」（trans）のか、国際人道支援を通して考える。
10	ガバメンタリティ	国家に操られずにＮＧＯが国家に影響を与えることは可能なのか、具体例を通して考える。
11	民間助成団体	世界中のＮＧＯ活動に資金を提供する民間の助成団体の機能を国際関係学の枠組みで考えてみる。
12	民間企業と国際関係	民間企業が国際社会に及ぼしている影響について具体例を通じて考える。
13	ビジネスと人権	私的企業は何をしてもいいのか、「国連ビジネスと人権に関する指導原則」を例に考える。
14	まとめ（プライベートレジーム）	「非国家アクターが作る国際関係と責任の所在」という視点から授業全体を振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
【期末レポートの課題として使う】松本悟・大芝亮編（2013）『NGOから見た世界銀行―市民社会と国際機構のはざま―』ミネルヴァ書房。

【参考書】
毛利聡子（2011）『NGOから見る国際関係：グローバル市民社会への視座』法律文化社。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内討論への参加度）20%、授業後課題30%、期末レポート50%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・特になし。

【その他の重要事項】
・長年ＮＧＯとして国際開発の分野に携わってきた教員が、経験に基づくＮＧＯの現状を交えて講義する。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course focuses on "actors" in global society, which are not only nation-states but also NGOs and private companies. It enables students to analyze the global issues from various perspectives and to recognize the significance of "actor-oriented" and theoretical approach in international studies.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) explaining the influences exerted by non-state actors in "international relations".
2) explaining the incidents or problems relevant to "international relations" from theoretical viewpoints.
3) being able to read the relevant literatures critically and analytically.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content or to write a short essay on a given topic.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on a short essay at each class meeting (50%) and a term-end report (50%).

ECN300GA（経済学 / Economics 300）

途上国経済論

武貞　稔彦

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の経済は、様々な資源の供給元や市場として世界各国との相互依存を強めている。この講義は、世界人口の半数以上が暮らす、開発途上国と呼ばれる国や地域の経済と社会について、固有の歴史／文化的背景も含め日本とのかかわりを念頭におきながら基礎的な知識の習得をめざす。またそれらの基礎的な知識は、持続可能な開発目標（SDGs）に掲げられた各種課題／目標の理解の基礎となるものでもある。

【到達目標】
本講義においては、ア）途上国経済の分析枠組み、特徴、イ）主要地域や主要国の経済・社会の特徴について学び、ウ）日本社会や経済の世界における位置づけをよりよく理解し、エ）将来社会に出た際に諸外国の人々と基礎的な知識に基づいた意味あるコミュニケーションができるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
途上国経済論Ⅰにおいては、途上国の社会と経済を見る際に使われる分析枠組み、主要地域ごとの歴史と社会の概要、日本と特に関係が深いアジア諸国の経済と社会を中心に学ぶ。
学生の将来に関わりの深い日本企業の活動や、新聞などでとりあげられる現実の出来事、ニュースと関連づけて講義を行うことにより、自らの日々の生活にひきつけた現実社会の理解を目指す。
また学習支援システムを通じたコメント／質問の提出も可能とする。フィードバックは学習支援システムを通じて個別に行うが、必要に応じて授業内でも内容を紹介する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション：開発途上国とは。途上国経済を見る目	開発途上国とよばれる国や地域はどのようなところか、概念を整理する。同時に、途上国を見る際に頻繁に使われる分析枠組み（評価軸）を再考する。
第2回	経済成長の理論と途上国経済の位置づけ	経済学の世界では経済成長はどのようなものだと考えられているかを紹介し、途上国経済を扱う「開発経済学」の発展を概観する。
第3回	日本は途上国だったのか？ ：戦後日本の経済成長と現在の開発途上国経済	戦後日本は急速な経済成長をとげたが、現在の開発途上国にとって日本はどのような点で手本足り得るかを考える。
第4回	途上国社会・経済の概況（1）：アジア地域	アジア地域の「途上国」と呼ばれる国や地域が「キャッチアップ」を果たす過程で、政府・国家がどのような役割を果たしたのか、東アジアと南アジアをとりあげ、歴史的な視点から概観する。特に、分析の視点として「植民地」について考える。
第5回	途上国社会・経済の概況（2）：ラテンアメリカ地域	アジアと異なる「植民地」経験を持つラテンアメリカ地域が、その後どのように経済発展を遂げたか（または遂げられなかったか）を概観する。
第6回	途上国社会・経済の概況（3）：アフリカ	アジアと異なる「植民地」経験を持つアフリカ地域が、その後どのように経済発展を遂げたか（または遂げられなかったか）を概観する。
第7回	途上国社会・経済の概況（4）：映像でみる途上国社会経済	映像を通じて、途上国の社会と経済について知る。
第8回	主要国／地域の社会と経済（1）：韓国－危機とその克服	韓国は、目覚しい経済成長を遂げたNIESの代表である。一旦は先進国の仲間入りを果たした韓国の歩んだ道筋と1997年のIMF危機以降の経済・社会の状況について理解する。
第9回	主要国／地域の社会と経済（2）：台湾－その生い立ちと国際社会における立場	台湾も、韓国とならび目覚しい経済成長を遂げたNIESの一つである。現在の台湾の国際社会・国際経済における地位はその特殊な生い立ちに影響されていることを理解する。
第10回	主要国／地域の社会と経済（3）：香港およびシンガポール－小さな街の大きな経済	アジアNIESの一つである香港とシンガポールをとりあげ、資源のない国（都市）の経済成長について考える。
第11回	主要国／地域の社会と経済（4）：インドネシア－多様性の中の権威主義的開発体制	アセアン（Association of South East Asian Nations）の一員としてNIESに続き経済成長を遂げたインドネシアをとりあげ、政治体制と経済成長（経済発展）の関係について考える。
第12回	主要国／地域の社会と経済（5）：マレーシア－カリスマと経済成長	強力なリーダーによる経済成長戦略を通じて発展したマレーシア経済・社会を概観する。
第13回	民主主義と経済成長	アジア的価値がアジア諸国の経済成長をもたらしたのか。民主主義と経済成長の関係を、アジア諸国を例に考える。
第14回	経済成長、進歩、貧困	先進国、途上国いずれもが経済成長を通じた社会の進歩、貧困の克服を目指してきた。現代の途上国は経済成長によって貧困をなくすことができるのか、という問いを概観する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の講義で紹介される資料等を使用して必ず予習・復習をすること。
各回に指定される参考文献および参考図書の該当部分を講義の事前／事後に適宜参照し、講義内容の理解を深めることが必要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
担当教員が作成した印刷物を授業にて配布する。

【参考書】
グラボウスキー他（2008年）『経済発展の政治経済学』（日本評論社）
渡辺利夫編（2007年）『アジア経済読本（第4版）』（東洋経済新報社）

大塚啓二郎（2020年）『なぜ貧しい国はなくならないのか（第２版）正しい開発戦略を考える』(日本経済新聞出版)

【成績評価の方法と基準】
成績評価は中間レポートと期末試験による。成績配分は中間レポート20%、期末試験
80%を予定する。

【学生の意見等からの気づき】
授業内で学生の発言を促す工夫を行う。

【学生が準備すべき機器他】
講義ではスライドを主に利用する。講義資料として配布したものやスライドなどは、学習支援システム上に掲示する。

【実務経験のある教員による授業】
担当教員は、途上国への経済協力の実務に携わっていた経験がある。本講義に関しては途上国での駐在も含めた業務経験で得られた知見が活用されている。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This is a first part of the course on the economy and society of developing countries. Students will be able to obtain a reference framework and to understand basic structure of developing countries' economy including particular historical, cultural, and geographical settings. Those basic knowledge are also the basis for understanding the various issues/goals set forth in the Sustainable Development Goals (SDGs).
[Learning Objectives]
The objectives of this lecture are to a) learn about the analytical framework and characteristics of developing economies, b) learn about the characteristics of the economies and societies of major regions and major countries, c) better understand the position of Japanese society and economy in the world, and d) be able to communicate meaningfully with people in other countries based on basic knowledge in the future.
[Learning Activities outside of classroom]
Students are required to prepare for and review the materials introduced in each lecture.
It is necessary to refer to the relevant parts of the reference literature and reference books specified for each lecture before and after the lecture to deepen understanding of the lecture contents. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria/Policy]
Grading will be based on mid-term report and final exam. Grading will be based on mid-term report 20%, final exam 80%.

PHL200GA（哲学 / Philosophy 200）

宗教社会論 I

宮部　峻

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：宗教社会論 I （仏教思想）
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義は、近現代日本の仏教思想への理解を深めることを目的とします。
仏教は、日本においても長い発展の歴史を持つ宗教の一つです。「家の宗教」という言葉に代表されるように、日本に住む多くの人が、自覚的に信仰していない宗教なのかもしれません。しかし、葬式やお盆などに代表されるように、仏教は、今なお日本の生活に深く根ざしていると言えるでしょう。
日本の生活に根ざしながらも、近現代日本の仏教は、教義、儀礼や実践、教団組織などを近代化させながら発展しました。こうした展開は、仏教が「寺院から出て行く」過程でもあったと言われることもあります。仏教が「寺院から出ていく」歴史は、多くの人はあまり馴染みがないかもしれません。本講義では、仏教が「寺院から出ていく過程」を学ぶことで、近現代日本の仏教思想の発展の歴史に対する理解を深めていきます。それを通じて、今日の仏教のあり方を考えていくヒントを提供します。

【到達目標】
近現代日本の仏教思想について、歴史的事例をもとに論じることができる。
また近現代日本の仏教思想の展開を学ぶことにより、自らの「仏教」イメージを相対化するとともに、今日の仏教のあり方について認識を深めることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は、講義形式で行います。適宜、ディスカッションも設けます。課題提出後の授業、または学習支援システムにおいて、提出された課題からいくつかポイントを取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。大学の行動方針レベルの変更に応じた授業形態の詳細は学習支援システムでお知らせします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の内容と受講方法について
第2回	仏教の近代化（1）	日本の仏教の近代化について、教学の近代化を中心に学ぶ
第3回	仏教の近代化（2）	日本の仏教の近代化について、政治・国家との関わりを中心に学ぶ
第4回	仏教と社会事業（1）	仏教の社会事業が生じた歴史的背景について、1920年代の社会問題を中心に学ぶ
第5回	仏教と社会事業（2）	仏教の社会事業の制度化について学ぶ
第6回	仏教と戦争（1）	仏教と戦争の歴史について、日清・日露戦争期の仏教者の発言と活動を中心に学ぶ
第7回	仏教と戦争（2）	仏教と戦争の歴史について、アジア・太平洋戦争期における仏教の戦争協力を中心に学ぶ
第8回	仏教と平和（1）	仏教者の非戦・反戦について、日清・日露戦争、アジア・太平洋戦争期を中心に学ぶ
第9回	仏教と平和（2）	仏教者の非戦・反戦について、戦後の平和運動を中心に学ぶ
第10回	仏教と差別	仏教と差別の問題について近現代日本の歴史から学ぶ
第11回	仏教とジェンダー	仏教とジェンダーの問題について、日本仏教における女性の問題を中心に学ぶ
第12回	仏教とソーシャル・キャピタル	仏教とソーシャル・キャピタルについて、仏教者の社会貢献を中心に学ぶ
第13回	仏教と死	仏教と死の問題について、近年の死生学の議論を中心に学ぶ
第14回	まとめ	本講義を通じて学んだ歴史的事例をもとに、近現代日本の仏教思想の課題を学ぶ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
島薗進，2012,『現代社会とスピリチュアリティ』弘文堂.
吉永進一・大谷栄一・近藤俊太郎編，2016,『近代仏教スタディーズ』法藏館.
大谷栄一編，2019,『ともに生きる仏教』筑摩書房.

【成績評価の方法と基準】
レポート（50％）、平常点（50％）
平常点は、授業への参加状況および毎回の授業後に提出するリアクションペーパーで総合的に判断します。
レポートは、各回で取り上げた事例から一つ以上選んでいただき、各回で示した参考文献をもとに近現代日本の仏教思想が成し遂げたことと課題について論じていただきます。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【Outline (in English)】
The aim of this lecture is to understand the history of modern Japanese Buddhism. Japanese Buddhism has modernized their theology, practice, institutions. This lecture helps students to acquire the knowledge about the history of modern Japanese Buddhism. Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following: Term-end report: 50%, in class contribution: 50%.

HIS300GA（史学 / History 300）

宗教社会論 II

佐々木　一惠

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：宗教社会論 II（キリスト教と社会運動）
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
キリスト教は様々な社会思想と結びつきながら、近現代社会における諸問題に対する改革運動を、世界各地で展開してきました。この授業を通じて、学生は１９世紀以降におけるキリスト教を基盤とする社会運動が、どのように近現代社会における諸問題（労働問題・人種差別・貧困・ジェンダー問題・植民地主義など）を捉えたのか、また新たな社会思想（進化論、社会主義、フェミニズム、など）とどのように関わりをもっていったのかを、社会思想史・社会運動史の立場から分析し議論していきます。

【到達目標】
１．近現代のキリスト教に基づく社会運動を考える上で、重要な基本概念や理論について理解できるようになる。
２．宗教と社会運動の関係を、社会思想や歴史意識の視点から分析できるようになる。
３．キリスト教に基づく社会運動に関する簡単な史料分析を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
●各回ごとに、取り上げる運動と関連する聖書の箇所、運動を理解するための社会理論や分析概念、運動の具体的な内容を主に講義形式で説明していきます。
●各回ごとに、関連する一次史料の分析を、リアクション・ペーパーにまとめて提出してもらいます。
●提出されたリアクション・ペーパーについては、翌週の授業で複数紹介しながら講評します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	キリスト教という宗教の成り立ち、そして世界史の中におけるキリスト教を概観する。
2	千年王国論と救済・終末・ユートピアニズム	キリスト教の終末思想を概観する。千年王国論や救済史について議論し、それが近現代の思想と運動にどのように結びついていったかを考える。
3	信仰復興運動と奴隷制廃止運動	19世紀初頭の信仰復興（リバイバル）運動が、どのように奴隷制廃止運動および女性解放運動と関連していたかを議論する。
4	海外宣教運動と帝国主義	キリスト教の海外宣教の歴史を概観するとともに、19世紀半ばから20世紀初頭にかけてのキリスト教海外宣教運動と、欧米帝国主義との関係を、社会進化論や文化帝国主義の議論を交えながら検討する。
5	世界キリスト教婦人矯風会の理念と活動	アルコール中毒を、家庭と社会を滅ぼす罪悪とみなし、活動を展開したキリスト教婦人矯風会の運動を、キリスト教思想と当時の「家庭の領域」の議論を踏まえながら議論する。
6	社会的福音運動とリベラル神学	19世紀末から20世紀の初頭にかけて、スラム街などにおける貧困・労働・公衆衛生・教育などの問題に取り組んだ、社会的ゴスペル運動の理念と活動とその影響について考える。また、1920年代におけるリベラル神学と根本主義（ファンダメンタリズム）の対立についても議論する。
7	日本におけるキリスト教の思想と運動	明治・大正期における日本におけるキリスト教の展開とその神学的特徴を概観する。また、救世軍運動や日本キリスト教婦人矯風会の活動や、日本におけるキリスト教社会主義の運動の展開について議論する。
8	アジアにおけるエキュメニカル運動	エキュメニカル運動が出てきた歴史的背景とアジアにおける展開を概観する。また、それぞれの地域における民衆神学の展開について議論する。
9	アメリカにおける黒人運動と出エジプト記	出エジプト記・ヨシュア記が、被抑圧者に与えた解放に向かう想像力について理解する。そこから、19世紀半ば以降のアメリカにおける黒人の社会運動の展開について議論する。
10	ラテン・アメリカにおける解放の神学	ラテン・アメリカにおいて、解放の神学が興隆してきた歴史的背景を概観するとともに、その思想と活動実践について議論する。
11	キリスト教とファンダメンタリズム	アメリカにおけるファンダメンタリズムの思想を概観するとともに、その教義・運動がアメリカ社会に与えている政治的・文化的インパクトについて議論する。
12	キリスト教とジェンダー	キリスト教思想における女性観を概観するとともに、現代社会における性・ジェンダー問題とキリスト教の関係について議論する。
13	キリスト教とセクシュアリティ	キリスト教とセクシュアリティの 係を歴史的に概 したのち、昨今のクィア神学の取り組みについて議 する。
14	試験・まとめと解説	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の授業の復習をしっかり行い、重要な概念や理論、また社会運動の特徴について把握しておいて下さい。毎回のリアクション・ペーパーでは、別の回の授業で取り上げた運動やそれに関連する概念や理論を結び付けて議論することもあります。復習を通じて、概念・理論・用語を分析のツールとして使えるようにしておいて下さい。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
○岩井淳『千年王国を夢見た革命』講談社、1995年。

○田村秀夫『千年王国論―イギリス革命思想の源流』研究社、2000年。
○森本あんり『アメリカ・キリスト教史：理念によって建てられた国の軌跡』新教出版社、2006年。
○小檜山ルイ『帝国の福音ールーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』東京大学出版会、2019年。
○グスタボ・グティエレス『解放の神学』岩波書店、2000年。
○土肥昭夫『日本プロテスタント教史』新教出版社、2004年。
○アリスター・E・マクダラス『プロテスタント思想文化史』新教出版社、2009年。
○ Motoe Sasaki, Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Cornell University Press, 2016).
○ミラ・ゾンターク『＜グローバル・ヒストリー＞の中のキリスト教―近代アジアの出版メディアとネットワーク形成』新教出版社、2019年。
○パトリック・S・チェン（工藤万里江訳）『ラディカル・ラブークィア神学入門』新教出版社、2014年。

【成績評価の方法と基準】
1. リアクションペーパー（30％）
2. 期末試験（70％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
スマートフォンやパソコン等情報機器が必要です。

【Outline (in English)】
The course provides historical background on the relationship between religion and social movements by paying special attention to the Christian religion. It explores the ways that Christianity, along with the other modern ideas and practices such as the Enlightenment, romanticism, social Darwinism, utopianism, socialism, and nationalism, influenced the development of abolitionism, feminism, colonialism/imperialism, labor movements, decolonization movements, and civil rights movements.
By the end of the course, students are expected to be able to: 1) understand the basic concepts and theories that are important in examining the relationship between social movements and Christianity, 2) analyze the relationship between religion and social movements from the perspective of historical consciousness, and 3) conduct a basic historical analysis of social movements based on the ideas of Christianity.
Students will be expected to review each class to: 1) understand the important concepts, theories, and characteristics of social movements, and 2) be able to use the concepts and theories as tools for analysis. In each reaction paper, students may be required to analyze the connection between the movements and the theories that were covered in previous classes.
Students are expected to spend 4 hours per week working on homework, revision, and assignments.
The final grade will be decided by reaction paper (30%) and the final assignment (70%).

HIS300GA（史学 / History 300）

宗教社会論III（イスラーム思想）

久木　正雄

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：宗教社会論III（イスラーム思想）
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
イスラーム学に初めて触れる学生が、イスラームの教義と思想およびムスリムの歴史、社会、文化に関する基本的な知識を得るとともに、他の宗教や宗派・教派といった「異文化」との関係性について考える。

【到達目標】
イスラームとムスリムへの理解と関心を深めるとともに間文化的な視点を養い、各自の考えをリアクションペーパーと学期末レポートにおいて精確に言語化することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義形式で行う。毎回の授業の最後に学生からリアクションペーパーを提出してもらい、次の回の授業の中でそれに対するフィードバックを行う。リアクションペーパーの提出とフィードバックに関しては、必要に応じて「学習支援システム」も活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方を確認した上で、受講生と教員との間で問題関心を共有する。
2	世界の諸宗教とイスラーム	世界のさまざまな宗教の中でイスラームが占める位置と、それらの関係性について学ぶ。
3	イスラームの成立	ムハンマドの人物史を主軸に据えて、イスラームの成立過程について歴史的な観点から学ぶ。
4	六信五行	イスラームの世界観と価値観、そしてそれらに基づいたムスリムの生活について知る。
5	ウンマ／ハラール	イスラームにおける共同体をめぐる思想と、「合法」と「非合法」の概念について学ぶ。
6	クルアーン／ハディース	イスラームの二大聖典であるクルアーンとハディースについて、それぞれの成立過程、形態、概略的な内容を知る。
7	シャリーア	シャリーア（イスラーム法）と法学者および諸学派について学ぶ。
8	イスラーム諸宗派	イスラームの諸宗派について、二大宗派であるスンナ派とシーア派を中心に、それぞれの成立過程と特徴を学ぶ。
9	スーフィズム	スーフィズム（イスラーム神秘主義）について、成立過程と文化的・社会的な広がりを知る。
10	「イスラーム世界」と「西洋世界」	「イスラーム世界」と「西洋世界」の関係について、これらの用語を批判的に定義した上で考察する。
11	日本におけるイスラーム	日本におけるイスラームの受容について、歴史と現在の姿を知る。
12	イスラームと女性	イスラームにおけるジェンダーについて、イスラーム世界の内外双方からの女性表象を中心に考察する。
13	イスラームと現代世界	現代におけるイスラームの姿について、他の宗教や文化圏との関係の中で考察する。
14	まとめ	今学期の学習内容を総括的に振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習として、事前に配布した資料や指示した参考書を熟読しておくこと。復習として、各回の内容を各自の問題関心に照らしながら咀嚼し直し、学期末レポートに備えること。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布する。

【参考書】
- 東長靖『イスラームのとらえ方』山川出版社（世界史リブレット）、1996年、ISBN9784634341500、本体価格729円。
- 『クルアーン　日本語読解』東京ジャーミイ出版会、2022年 、ISBN9784910474007（https://tokyocamii.org/wp-content/uploads/2024/07/QuranNihongoDokkai_edition01_03.pdf）。
その他、教場で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
リアクションペーパーに基づく平常点：40％、学期末レポート：60％。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の多様な問題関心を、リアクションペーパーなどを通じて恒常的にすくい上げ、授業に反映させることに努める。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
- この授業は、偶数年度の春学期にのみ開講する隔年開講の授業である。奇数年度となる来年度は開講されないため、履修計画を立てる上で注意すること。
- この授業では、イスラームに関してもその他の宗教に関しても宗教教育を目的とせず、宗教とその信仰集団を専ら学問の対象としてのみ扱う。
- アラビア語などの外国語の運用能力の有無は問わない。

【Outline (in English)】
《Course outline》
This course is designed to provide students with a basic understanding of Islam and Muslims, and intercultural perspectives to other religions and denominations.
《Learning Objectives》
Students will gain basic knowledge of the religion, history, society and culture of Islam and Muslims, and the intercultural perspectives between different religions and denominations, as well as the ability to express their ideas accurately in reaction papers, and an end-of-term report.
《Learning activities outside of classroom》
Students are expected to complete the required assignments before and after each class meeting. Each class will require more than four hours of study time.
《Grading Criteria / Policy》
Your overall grade in the class will be decided based on the following: Reaction papers (40%), and end-of-term report (40%).

LIN200GA（言語学 / Linguistics 200）

言葉と社会

小川　敦

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「言葉と社会」「多言語社会」「言語（教育）政策」をテーマに、言語と社会がどのように関わっているのか、社会において言語はどのような役割を果たしているのかなどについて考えていきます。
「標準語と方言」「二言語併存」「国語」「少数言語」などの基本的な概念について解説し考察した上で、歴史的な経緯でいくつもの言語が用いられる社会、移民が多く住む社会での言語の話題について多く取り上げます。

【到達目標】
・社会的なコンテクストで言語がどのような役割を担っているかを理解する。
・それぞれの社会において言語の持つ役割や重要性が異なっていることを理解する。
・言語に対する価値観は人によって異なることを理解し、相対化して考えるべきことを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義形式ですが、できるだけ授業中にも学生同士で話し合うようにします。授業の最後にかならずリアクションペーパーを書いてもらいます。
授業の最初にリアクションペーパーに対してこちらからコメントをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：言語と国家	言語についている名前と国家の名前が必ずしも一致しないことや、「○○人なら○○語を話す(べき)」といった言説が自明ではないことを理解し、これからの授業につなげていきます。
第2回	言語と変種（標準語と方言）	日常的に「標準語」「方言」と呼んでいるものの実態について扱い、さらに社会集団語などのさまざまな言語変種について扱います。
第3回	国家と言語、標準語と方言の関係	前回に引き続き、何が変種を「方言」「言語」たらしめるのかについて、社会や国家との関係から考えます。
第4回	方言のイメージ	地域変種（「方言」）に対して抱くイメージがどのように形成されてきたのかを考えます。また、「方言コスプレ」と呼ばれる現象について、「役割語」の視点も踏まえて見ていきます。
第5回	言語とジェンダー	これまでのテーマと関連付けて、言語をジェンダーの視点から考えます。
第6回	危機言語	アイヌ語や琉球諸語から、危機に瀕する言語について考えます。
第7回	少数言語・言語権	少数言語の定義を見た上で、言語に対する権利や法律上の位置づけなどについて考えます。
第8回	移民社会としての日本と言語	日本では移民背景を持つ人がますます増えています。日本社会の対等な一員とするための言語的な配慮や権利について考えます。「やさしい日本語」についても扱います。
第9回	言語景観と言語サービス	前回の授業を踏まえて、多民族化・多言語化する日本社会における「言語景観」について考えます。何気なく通り過ぎていた標示について、この授業を機に気をつけるようにしてください。
第10回	ケーススタディ：フランス・アルザスの言語教育とアイデンティティ	フランスの東部、ドイツに接するアルザス地方の言語の歴史を見た上で、今日のフランス語とドイツ語の二言語教育、そしてアルザス人の言語アイデンティティについて考えます。
第11回	ケーススタディ：イタリア・南チロルの言語問題	イタリアの最北端に位置する南チロル地方（アルト・アディジェ）ではドイツ語系住民とイタリア語系住民が長年対立と和解を繰り返してきました。複数の言語集団の共存について、言語教育の点から考えます。
第12回	ケーススタディ：「方言」から「言語」を創り出した国家、ルクセンブルク	フランス語、ドイツ語、民衆の言語であるルクセンブルク語を公用語とする、多言語社会であるルクセンブルクを扱います。複数の言語を使えることを標榜しながら、アイデンティティの象徴として独自の言語を創り出してきた歴史を見ていきます。
第13回	ケーススタディ：「移民国家」としてのルクセンブルク	前回に続いてルクセンブルクを扱います。ルクセンブルクは人口の半数近くが外国籍であり、言語教育の面で課題に向き合っています。最近の事例を紹介しながら、ルクセンブルクでの課題と日本社会への示唆について考えます。
第14回	本講義のまとめ	講義でこれまでに扱ってきたテーマをもとに、試験を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特定の書籍を購入する必要はありません。
こちらに紹介した文献や授業中に紹介した文献について、できるだけ図書館やインターネットで探して勉強してください。

【参考書】
以下のようなものが挙げられますが、全て読みましょうというわけではありません。
そのほか、授業中に紹介します。
・井上・田邊（編著）『社会言語学の枠組み』くろしお出版、2022年
・柿原・仲・布尾・山下『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社、2021年
・言語権研究会（編）『ことばへの権利』三元社、1999年
・佐野直子『社会言語学のまなざし』三元社、2015年
・真田信治（編）『社会言語学の展望』くろしお出版、2006年
・杉野（監修）田中・波多野（編著）『言語と教育　多様化する社会のなかで新たな言語教育のあり方を探る』明石書店、2017年

・平高・木村（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、2017年
・田中・木村・宮里（編）『移民時代の言語教育―言語政策のフロンティア(1)』ココ出版、2009年
・三宅・新井『境界と周縁―社会言語学の新しい地平』ひつじ書房、2025年

【成績評価の方法と基準】
期末試験60％、コメントペーパーを含めた授業への参加40％とします。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。
初回授業には必ず参加してください。

【学生の意見等からの気づき】
受講者が自ら発言しやすい授業運営とするように努めます。

【学生が準備すべき機器他】
スマートフォンだけでなくPCやタブレット端末を準備すると受講しやすいです。

【その他の重要事項】
履修の条件として、第1回の授業には必ず参加してください。
授業中はよく話を聞き、ノートをとることに専念してください。
受講生の関心にあわせて、授業内容を柔軟に変更・修正することもありますので、ご承知おきください。
教員の専門の関係もあり、事例紹介ではヨーロッパ、とりわけドイツ語圏の話題が多くなりがちですが、受講生は必ずしも英語以外にドイツ語や他のヨーロッパ語を学んでいる必要はありません。言語と社会の関係に関心がある人、多言語社会や言語政策に関心がある人はご検討ください。

【Outline (in English)】
【授業の概要（plan du cours）】
Dans ce cours, nous explorerons la relation entre la langue et la société, ainsi que le rôle que celle-ci y joue. Après avoir présenté divers concepts de base, nous traiterons plusieurs questions linguistiques liées aux régions multilingues historiques ainsi qu'aux zones à forte population immigrée.
【到達目標（Objectifs d'apprentissage）】
À l'issue de ce cours, les étudiants seront capables de comprendre les fonctions du langage dans les contextes sociaux. Ils prendront également conscience de la diversité des valeurs associées au langage et développeront un esprit critique et comparatif.
【授業時間外の学習（Travail hors séance）】
Il est attendu des étudiants qu'ils consacrent deux heures à la préparation et à la révision de chaque cours.
【成績評価の方法と基準（Critères d'évaluation）】
Participation active 40%
Examen final 60%

SOC200GA（社会学 / Sociology 200）

多文化社会と人間

挽地　康彦

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義では、かつて多民族・多文化社会の指針として位置づけられた「多文化主義」（multiculturalism）について批判的に検討し、その後に提起された「間文化主義」や「多自然主義」などの新たな知見を吟味することを目的とする。文化の多様性と価値の平等を認め、互いのアイデンティティの尊重を唱える多文化主義は、民主主義国家における統合政策の精神であったが、西洋社会では他者への不寛容と排斥が蔓延し、多文化主義は失敗したと認識された。多文化主義はなぜ行き詰まったのか。多文化主義による社会統合を後退させた要因は何だったのか。そして多文化主義を乗り越えるために、今日どのような考え方が提起されているのか。授業では、上記の観点をめぐって議論しながら、日本版多文化主義でもある「多文化共生」についても、あわせて考察する。

【到達目標】
多文化主義の盛衰をめぐる歴史的・社会的な背景を踏まえながら、まずは、①多文化主義とそれに関連する諸概念との関係性を理解し、つぎに②多民族・多文化社会において多文化主義が失速するに至ったメカニズムと要因を多角的に捉えられるようになることが求められる。そのうえで、③ポスト多文化主義の思想的潮流についての知見を習得することをめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業形態は対面授業を基本とし、半期のうち７回までの授業を同時双方向型のオンライン授業（Zoom）で行う。各回の授業資料は、データ（PDF）で配信しながら進める（受講者が多いため、紙資料の配布は行わない）。
ZoomのURLとパスコードは、以下のとおりです。
https://hosei-ac-jp.zoom.us/j/84630179315?pwd=XHbl87wCGeIpe3yrumMqgbO7nEe1YP.1
ミーティングID：846 3017 9315
パスコード：041116

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方針の確認と問題提起
第2回	欧州移民政策の変遷①	20世紀後半以降におけるヨーロッパの移民政策を概観し、多民族・多文化が浸透していく社会的背景について学ぶ。
第3回	欧州移民政策の変遷②	20世紀後半以降におけるヨーロッパの移民政策を概観し、多民族・多文化が浸透していく社会的背景について学ぶ。
第4回	エスニック・リバイバル①	移民国アメリカの公民権運動以降の人種やエスニシティをめぐる議論と政策の展開について、ヨーロッパの経験と比較する。
第5回	エスニック・リバイバル②	移民国アメリカの公民権運動以降の人種やエスニシティをめぐる議論と政策の展開について、ヨーロッパの経験と比較する。
第6回	多文化主義の盛衰	多文化主義の諸特徴と意義、その台頭から後退までの経緯について共有する。
第7回	多文化社会の構成原理	同化主義、文化多元主義、文化相対主義などの諸概念を多文化社会の構成原理として分類しながら、多文化主義との関係を整理する。
第8回	多文化主義論争①	多文化主義に内在する困難性を、文化的固有性と普遍的価値の間のジレンマ（多文化主義と普遍主義の対立）の観点から概説する。
第9回	多文化主義論争②	多文化主義に内在する困難性を、文化的差異と分離・分裂の間のジレンマ（多文化主義と分離主義の対立）の観点から概説する。
第10回	多文化主義論争③	多文化主義に内在する困難性を、文化的共同体と個人の自由の間のジレンマ（多文化主義と個人主義の対立）の観点から概説する。
第11回	日本における多文化共生①	日本が移民国家へ転換するなかで、いかなる目的で「多文化共生」が唱導されたのかを、欧米社会の多文化主義と比較しながら確認する。
第12回	日本における多文化共生②	日本の多文化共生が空虚なスローガンで終始している問題点を、90年代以降の入管行政や日本型排外主義との関係から考察する。
第13回	ポスト多文化主義	多文化主義を批判的に乗り越えるための契機として、間文化主義、ノマディズム、コスモポリタニズム、多自然主義などの思潮を検討する。
第14回	まとめ	「要塞化」するホスト社会と「破局」に直面する難民との間にある諸問題について示唆する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内容を理解するために、各授業回のテーマに関する情報収集などの準備学習に２時間、授業後に関連文献の読解など復習時間に２時間を必要とする。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。授業回に応じてレジュメや資料を配信する。

【参考書】
参考・参照すべき文献は複数に上るため、授業の中で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
授業内容の理解度を測るために学期半ばで行う小テスト（20%）、学期末に提出を求める課題レポートの内容（70%）、平常点（10%）で評価する。
学期末レポートの課題は、提出期限の約１カ月前に指示する。レポート評価の基準は、以下の３つに設定する（①授業内容を踏まえているか、②習得した知見について正しく理解しているか、③独善的な論理展開でなく他者理解の観点から論述されているか）。
なお、小テストや学期末レポートの課題は、授業に出席しないと作成困難な内容となる。配信する授業レジュメのパッチワークでは単位取得の基準をクリアできない。とりわけ、期末レポートでは課題を正確に理解したうえで、受講者自身が主体的に調べ考察した内容が展開されてはじめて基準をクリアできる。

【学生の意見等からの気づき】
授業内容の理解に不安を覚える学生がいることから、学期半ばに小テストを実施して理解度を確認する。また、学習効果の高さの理由の他に、体調の優れない受講者が授業参加を希望するケースが少なくないことから、７回分の授業をオンラインで実施する。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業（Zoom）の場合
・パソコン（カメラ付き）
・インターネット接続が可能な環境
・パソコンがどうしても用意できない場合は、スマートフォンにzoomのアプ
リをインストールしておくこと。

【その他の重要事項】
・本科目では、初回授業を含めた７回分の授業をZoomを用いたオンライン形式で行う。
・初回の授業は、９月２２日（火）３限（13:10 ～ 14:50）にオンラインで行う。
・各授業のなかで質疑応答の時間を設ける予定である。

【Outline (in English)】
The purpose of this course is to critically examine multiculturalism, which was once positioned as a guideline for a multiethnic and multicultural society, and to examine new findings such as "interculturalism" and "multinaturalism" that have been raised since then. Multiculturalism, which recognizes cultural diversity and equality of values, and advocates respect for each other's identity, was the spirit of integration policies in democratic countries, but intolerance and exclusion of others became widespread in Western society, and multiculturalism was recognized as a failure. Why has multiculturalism stalled? What were the factors that led to the regression of social integration through multiculturalism? And what ideas are being proposed today to overcome multiculturalism? In this course, we will discuss the above perspectives, and also consider "multicultural conviviality," which is the Japanese version of multiculturalism.
Learning Objectives：
Based on the historical and social background of the rise and fall of multiculturalism, students will first understand the relationship between (1) multiculturalism and related concepts, and then (2) the mechanisms and factors that led to the failure of multiculturalism in multi-ethnic and multicultural societies from multiple perspectives. In addition, the course aims to provide students with an understanding of (3) the ideological trends of post-multiculturalism.
Learning activities outside of classroom：
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policies：
Final grade will be calculated according to the following process Mid-term examination(20%), term-end report(70%) and in-class contribution(10%).
The term-end report assignment will be given approximately one month before the due date. The following three criteria will be used in the evaluation of the report (1) whether it is based on the contents of the class, (2) whether the student has a correct understanding of the knowledge acquired, and (3) whether the report is written from the perspective of understanding others, rather than from a self-righteous logical perspective.

ARSf200GA（地域研究（東南アジア） / Area studies(Southeast Asia) 200）

国際関係研究 II

松本　悟

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：国際関係研究 II（メコン流域国の開発と環境（社会と自然））
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈実〉〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では東南アジア半島部のメコン地域／メコン河流域国／大メコン圏という「地域」に着目して「国際関係」を学ぶ。「開発」をテーマにし、特にその社会的・環境的側面を多角的に見る視点を養う。

【到達目標】
（1）「地域研究」の視点からメコン河流域の自然環境やそれに依拠する社会について学び、日本とは異なる生活様式や社会への理解を深める。
（2）メコン河流域の環境・社会問題と日本との関係について学ぶ。
（3）演習型（ゼミ形式）の反転学習を通して、国際関係研究としての「地域」を分析するための多角的な視点を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
■基本方針：対面で実施する。学内業務の関係でオンデマンドを使用することもある。
■発表とグループ討議：演習スタイルで授業を運営する。履修者は最低1回は発表を担当する。第3回授業以降は、課題文献を読んできていることを前提にした発表とグループ討議及び教員の補足授業という構成で行う。大学2年生でも理解できる文献の講読、発表、グループ討議といったアカデミックスキルを高めることを目的としている。詳細は第1回授業で説明する。
■発表担当者：2人1組となって担当する。事前にレジュメを準備し共同で発表する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	本授業の狙い、進め方を説明する。グループと発表者を決める。
2	「地域」とは何か（メコン全体）	メコン地域、メコン河流域国、大メコン圏などの用語をもとに、国際文化学部で学ぶ「地域」の射程について考える。
3	越境環境問題（中国、ラオス、タイ）	国を越える環境問題をどう考えるのか、因果関係やレジーム論などを参照軸に議論する。
4	小さな村から見えるもの（ラオス、タイ）	ラオスの小さな村の30年間の歩みから「開発と環境」を捉えるマクロな視点とミクロな視点について議論する。
5	森林「減少」と森林「破壊」（メコン全体）	環境問題が抱える広義の政治性について、ポリティカルエコロジーの視点を参照軸に議論する。
6	影響予測の人文学（タイ、ラオス）	開発の社会・環境影響を調査すればいいという問題解決策について、国際文化や地域研究の視点から議論する。
7	資金から見た人権・環境問題（ミャンマー）	環境破壊や人権侵害につながりやすい開発を進める資金源について議論する。
8	財と資源（カンボジア）	カンボジアのトンレサップ湖の漁業を事例に、財として見た魚について議論する。
9	洪水と水害（カンボジア、ベトナム）	メコンデルタの洪水を事例に、「水が溢れる」という現象について、国際文化の視点から議論する。
10	人身取引（タイ、ミャンマー）	不法滞在者への人権侵害を通じて、法律では解決できない問題を国際文化の視点から議論する。
11	境界（メコン全体）	メコン地域の呼び方は、政治的な背景によって異なる。何かに境界線を引くことの意味と危うさを議論する。
12	重複の機能（メコン全体）	メコン地域を含む国際協力の枠組みは複数存在し、一見すると重複している。そこから重複することの働きについて国際文化の視点から議論する。
13	歴史から考えるメコン開発（メコン全体）	ここまで取り上げた事例を解釈学、系譜学、考古学の視点から振り返り、歴史「から」ではなく歴史「を」学ぶ意義について議論する。
14	開発と責任（メコン全体）	開発が環境破壊や人権侵害に繋がる時、その「責任」を問いたくなるが、責任とは何だろうか。この授業全体を「責任」から問い直し議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当にあたっていない場合でも、必ず課題文献は読んできて下さい。比較的短い日本語で書かれた文章です。本授業の準備学習・復習時間は各1-2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし

【参考書】
授業の中で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点20%、発表20%、グループ討議への貢献度20%、期末レポート40%。期末レポートでは、授業で取り上げた概念、理論、事象を繋げて論理的な文章を書くことを求めます。レポートの狙いや書き方は、授業の中で丁寧に説明します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
履修者の感想は、後日学習支援システムに掲載します。受講前は、課題文献や発表を恐れていた学生もいましたが、実際にやってみると、読みやすい文献で、発表もいい経験になったという声がほとんどです。一方的に話をする講義ではないので、演習（ゼミ）に近い、大学生らしい学びができたという意見も多いです。どんな文献を読むのかは、履修を検討する際に、学習支援システムを通じて共有しますので、あまり心配はいりません。

【学生が準備すべき機器他】
課題文献を入手するために、授業コードを使って必ず学習支援システム（Hoppii）に自己登録して下さい。

【その他の重要事項】
■第1回授業授業後に発表担当者とグループを決めるので、履修を検討している学生は必ず第1回授業に出席して下さい。どうしても出席できない場合は、事前に履修の意思を担当教員にメールで連絡して下さい（smatsumoto[アットマーク]hosei.ac.jp）。
■学部や学年を超えて演習スタイルの授業を行うので、通常の講義形式の授業や、演習（ゼミ）とも異なる学びがあります。
■メコン河流域国で30年以上にわたってNGO活動に従事してきた実務家教員が、その活動経験を事例や余談に組み込みながら授業を進めます。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course focuses on "Mekong region" or "Mekong basin countries" or "Greater Mekong Subregion" of the mainland Southeast Asia and covers "development," in particular its social and environmental aspects in order to learn the multidisciplinary approach.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) taking reflective views of area studies, in particular implications of society-natural environment nexus in the Mekong region.
2) explaining the relations between the social environmental issues in the Mekong region and Japan.
3) understanding multi-disciplinary approach for analyzing "area" through flipped classroom method.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content or to write a short essay on a given topic.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following: presentation: 10%, group discussion: 20%, in-class contribution: 30%, term-end report : 40%.

ARSk300GA（地域研究（地域間比較）/ Area studies(Interregional comparison) 300）

【2026年度休講】人の移動と国際関係Ⅰ

張　勝蘭

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：人の移動と国際関係Ⅰ（華僑・華人社会）
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ダ〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人々の頻繁な越境的大移動がグローバリゼーションの象徴と言える。現在、四大移民集団の一つである中国系移民の人口は6000万人余りで、198か国・地域に分布していると言われている。これらの中国系移民が現地社会やエスニックコミュニティにどのような影響をもたらしているのか。本講義では、中国系移民（華僑：中国国籍保有者、華人：現地国籍保有者）について、移住と定着の歴史、チャイナタウン、経済、社会・教育、生活・文化などの側面から概観する。特に日本における華僑・華人の歴史と社会の特徴を理解し、日本社会との関わり及びそこから見える多様性について考えを深めることを目的とする。

【到達目標】
中国系移民に関する基礎知識を習得し、「人の国際移動」を理解する。華僑・華人問題を通して日本や国際社会における多文化共生について考える力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
前半の講義では、世界に広がる華僑・華人の歴史と現状について概観する。後半の講義では、日本における華僑・華人にフォーカスしてその歴史と社会の特徴を具体的に紹介し、考察する。質問の受付や課題へのフィードバックは授業内、学習支援システム及びメールにて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	人の移動と国際関係Ⅰのアウトラインを説明し、中国系移民（華僑・華人）の予備知識を紹介する。授業の進め方、シラバスの使い方、成績評価についても説明する。
第2回	華僑・華人の歴史	中国人の海外移住と定着の歴史について、西欧の植民地化以前から中華人民共和国成立後まで概観する。
第3回	チャイナタウン	チャイナタウンの形成と変貌について、主に東南アジア、アメリカを事例に講義する。
第4回	華僑・華人の経済	華僑・華人経済の伝統的特色、華人財閥、華人企業の戦略などについて説明する。
第5回	華僑・華人の社会・教育	華僑・華人社会の伝統的組織、華字報、華文教育などについて講義する。
第6回	華僑・華人の生活・文化	食文化をはじめとする華僑・華人の生活を紹介し、宗教にも触れる。
第7回	日本の華僑・華人の歴史と社会①	長崎、唐人貿易、唐人屋敷、唐通事をキーワードに、江戸時代の華僑・華人を見ていく。
第8回	日本の華僑・華人の歴史と社会②	三把刀、中華会館を中心に、明治から昭和までの華僑・華人について説明する。
第9回	日本の華僑・華人の歴史と社会③	戦前から戦後、そして現在に至るまでの華僑・華人社会について、華僑総会、新移民に焦点を当てて考察する。
第10回	日本の華僑・華人の生活空間	「横浜中華街」、「池袋中華街」を中心に日本の華僑・華人の重要な生活空間－中華街の実像を考察する。
第11回	日本の華僑・華人の教育	「僑校」（中華学校）は華僑の「三宝」の一つである。日本「僑校」の特徴や学校を取り巻く環境について講義する。
第12回	日本の華僑・華人の信仰と習俗	先祖供養である普度勝会と冠婚葬祭から日本の華僑・華人の信仰と風習を説明する。
第13回	日本の華僑・華人の文化創生	春節やランタン祭りを中心に日本の華僑・華人の文化を理解し、その変遷から地元との共生について考察する。
第14回	新華僑について	1980年代、中国の改革開放に伴い、来日した中国人「就学生」・「留学生」たちが急増し、いわゆる「新華僑」になっていく。この「新華僑」について講義する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学習支援システムにアップロードされた講義資料を参考に、シラバスに記載された参考書及び毎回の追加参考文献の関連部分を読み、授業内容への理解を深める。受講者は各2時間を使い、事前・事後に関連知識の予習、授業の振り返りを行い、理解を深めることに努める。疑問点を整理し、まとめる。

【テキスト（教科書）】
特に定めない。毎回、事前に講義資料を学習支援システムにアップロードする。

【参考書】
山下清海編『華僑・華人社会を知るための52章』明石書店、2023年
曽士才・王維編『日本華僑社会の歴史と文化―地域の視点から』明石書店、2020年
華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』丸善出版、2017年
山下清海編著『華人社会をわかる本－中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店、2005年
可児弘明・斯波義信・游仲勲編『華僑・華人事典』弘文堂、2002年
また授業時に各テーマについての参考文献を適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
①中国系移民（華僑・華人）に関する基礎知識が習得できている。
②中国系移民を通して「人の国際移動」を理解し、特に日本の華僑・華人の諸問題について根拠に基づき論理的に説明できる。
以上の2点に着目し、期末レポート（60％）、リアクションペーパー（20％）、受講態度（授業中の発言・質問）（20％）を用いてその到達度を総合して評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】
授業の理解度を高めるために、音声・映像などのコンテンツを活用する。私語などを注意し、授業に集中しやすい環境づくりに努める。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【Outline (in English)】
This course deals with the migration and settlement, Chinatowns, economy, social structure, education, custom and lifestyle of overseas Chinese in the world, especially focusing on overseas Chinese in Japan. At the end of the course, participants are expected to obtain basic knowledge about overseas Chinese, and also to be able to evaluate ethnic diversities in Japan.
Your required study time is two hours for each class meeting.

ARSk300GA（地域研究（地域間比較） / Area studies(Interregional comparison) 300）

人の移動と国際関係 II

髙柳　俊男

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：人の移動と国際関係 II（朝鮮民族のディアスポラ）
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
朝鮮民族のディアスポラ（離散）について考察する。
私たちの暮らす日本社会には、「在日韓国人」「在日朝鮮人」「在日コリアン」などと呼ばれる韓国・朝鮮系の人々が大勢住んでいるが、同様の現象は中国・旧ソ連・アメリカなど、世界各地で見られる。これらの人々が朝鮮半島を離れ、各地に移住した歴史やその後の変化、とくに現地社会での他民族との衝突や共生の営みを、各種の研究成果や教員自身の見聞をもとに、ともに考える。
朝鮮民族の移動と定着という個別のテーマを探求することを通して、移民過程や移住地での多文化共生・文化の変容という、世界に普遍的にみられる現象への理解につながるようにする。

【到達目標】
・各地に暮らす朝鮮民族について、その形成の歴史や現状の概略を理解する。
・それらをもとに、朝鮮民族のディアスポラ（離散）全体について考察する。
・朝鮮民族の事例を普遍化し、移民や多民族共生全般について考えを深める契機をつかむ。
・とりわけ私たちの住む日本における移民や多民族共生について、具体性を伴いつつ考えられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
世界各地に散らばっている朝鮮民族について、中国・旧ソ連・日本・アメリカを中心に、各数回ずつ取り上げて講義する。関連する映像資料を随時使用し、条件が許せばゲストをお招きした授業を実施したこともある。
毎回、授業の最後に、感想や疑問・質問などをリアクションペーパーに書いてもらい、それを次回の授業冒頭で活用するなど、限定的ながら双方向的な授業になるよう心がけたい。
また、ネット上の学習支援システムを、もう１つの授業の場として活用し、授業の補足や発展に資したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業計画の解説、参考書紹介、受講理由書の記入など。導入として、日本の各界で活躍する外国ゆかりの人物について触れる。
第2回	概況	ディアスポラ概念および朝鮮民族のディアスポラの概要について、まず学ぶ。
第3回	朝鮮内ディアスポラ	朝鮮内における歴史的な人口移動の典型として、火田民・土幕民の存在とその実態を知る。
第4回	中国の朝鮮族①	多民族国家中国の少数民族の一つに位置づけられる朝鮮族について、その概要を知る。
第5回	中国の朝鮮族②	前回学んだ中国の朝鮮族について、映像視聴を通してさらに深く探る。
第6回	旧ソ連の高麗人①	旧ソ連の高麗人（朝鮮系の人々）について、その概要を知る。とくに1937年、スターリンによる極東から中央アジアへの強制移住について学ぶ。
第7回	旧ソ連の高麗人②	前回学んだ旧ソ連の高麗人について、映像視聴を通してさらに深く探る。
第8回	在日韓国・朝鮮人①	私たちにとって一番身近であるはずの在日韓国・朝鮮人については、回数をかけて重点的に学ぶ。今回はまず、その概要として、形成史を知る。
第9回	在日韓国・朝鮮人②	在日韓国・朝鮮人史に関して、とくに海峡を越えた人の移動の観点から再整理する。
第10回	在日韓国・朝鮮人③	海峡を越えた人の移動の一つで、現在にも大きな影響を及ぼしている1959年からの北朝鮮帰国事業について、詳しく学ぶ。
第11回	在日韓国・朝鮮人④	在日韓国・朝鮮人についてここまで学んできた内容を、映像視聴を通してまとめる。
第12回	在日韓国・朝鮮人⑤	在日韓国・朝鮮人についての最終回として、若い世代の複合的なアイデンティティについて考察する。
第13回	在米コリアン	在米コリアンについて、ごく大まかな概要と、とくに1992年のロス暴動に関して学ぶ。
第14回	海外養子問題	韓国から戦後、孤児や私生児などが多数、養子として欧米に送られた。近年、当事者自らによってつくられた映画も紹介しながら、この問題を重点的に考察してまとめとする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回配付するプリントに「自習課題」を設定し、同じものを学習支援システム上にも載せる。これは「自習」なので必ずしも提出を要しないが、認識を深化させるためにもやってみることをお勧めする。提出した学生には、たとえば就職活動による授業の欠席などを補う要素として加味する。
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特定の書籍をテキストとしては使用せず、毎回、Ａ３で表裏１枚のプリントを作成して配付する。

【参考書】
参考文献はそのつど指示するが、事典として『韓国朝鮮を知る事典〔新版〕』（平凡社）、『岩波小辞典　現代韓国・朝鮮』（岩波書店）、『世界民族問題事典』（平凡社）、『世界民族事典』（弘文堂）、『人の移動事典：日本からアジアへ・アジアから日本へ』（丸善出版）などを適宜参照すること。

【成績評価の方法と基準】
毎回提出するリアクションペーパーに反映された授業に取り組む姿勢40％、学習支援システムを利用した中間での小課題20％、学期末のレポート40％を基準とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
過去のアンケートでは、以下のような好評をいただいた。
今回も、そうした授業になるよう努力したい。
・リアクションペーパーに毎回フィードバックしてくれたので、他の学生がどのように考えたのかを知れてよかった。
・映像資料が普段では見れないものが見れて良かった。
・ゲストを招いた講義が面白かった。
・学部の中でもすばらしい授業の一つ。

【その他の重要事項】
朝鮮半島の歴史や文化についての一定の知識を前提に話を進める、やや応用篇の授業である。事前に、毎年開講の「朝鮮語圏の文化Ⅰ 朝鮮半島の文化史」を受講しておくことが望ましい。未受講の場合は、そうした前提知識を自分で補うよう努めながら授業に臨むこと。
また、中華系や日系の移民を扱う「人の移動と国際関係Ⅰ」「人の移動と国際関係Ⅲ」（ともに隔年開講）も用意されているので、あわせて受講することをお勧めする。

【Outline (in English)】
This class examines the history and present condition of Korean residents living in various countries around the world.
Through the case of Koreans, students are expected to think universally about the migration, settlement, ethnic conflicts, and integration.
Final grade will be calculated according to the following process. Reaction papers for each class 40%, mid-semester report 20%, and term-end report 40%.

ARSk300GA（地域研究（地域間比較）/ Area studies(Interregional comparison) 300）

【2026年度休講】人の移動と国際関係III

水谷　明子

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：人の移動と国際関係III（アジア・太平洋）
旧科目との重複履修：×
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：旧：移民研究III（アジア・太平洋）の修得者は履修不可

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代以降の国際関係は、地域・国家における政治・経済・社会の変動から、人・モノ・情報の交換範囲を拡大し、国境を超えた移動・相互関係を増大させてきた。植民地支配や近代資本主義における労働市場の拡大、戦争などの歴史的経緯や政策によって、個人や集団同士が「他者」への認識および「他者」との関係を構築・再構築し、現在に至るまで様々な影響を与えている。本講義では、国際関係における人々の移動の歴史、近代以降の移動を引き起こした要因・政策について、日本を中心に確認した上で、戦後から現在までの日本・アジアの「人の移動」を検討する。特にジェンダーの視点から、近現代アジアにおける女性・家族の移動の特徴を考えたい。また、グローバル化と同時に多文化化が進行する中で、「他者」の理解や歴史・文化の接触による衝突と交流の可能性を、「自分ごと」として考えられるよう議論を行いたい。それによって、今後、現実に「他者」との摩擦に直面した際に、実態と歴史認識に鍛えられた批判精神を保てる能力を養うことを目的とする。

【到達目標】
1)近現代国際関係における人々の移動の背景・要因についての理論を確認し、2）それらが近現代日本とその周辺地域においてどのような歴史・政策を辿ってきたのか、具体的に検討する。更に、3）実態的な移動がどのように生じ、地域や移動する人々の特徴として現れているのか、4）近年の国際移動で注目される「女性の移動」の特徴とはどのようなものか、5）現在そして今後の日本の政策の課題を検討する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・本年度は教室で対面型の授業を行う。
・事前に授業資料を掲示し、授業内で予習・復習の課題を課す。
・資料を読み、特に現代日本の事例について受講生の関心に基づいてグループワーク、ディスカッションを行い、それについて発表の時間を設ける。
・講義の感想や質問事項をコメントシートに記入し、次回にそれについても議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	国際関係学における人々の移動についての議論を確認する。
2	東アジアにおける近代国際関係と人々の移動(1)	東アジアにおける近代国際関係の歴史を人々の移動から捉え直し、政治・経済・社会の変動と移民、出稼ぎの関係を検討する。近現代東アジア国際関係史を人々の移動から捉える研究史を整理する。
3	東アジアにおける近代国際関係と人々の移動(2)	日本近代の経済発展と植民地支配を人々の移動から検討する。グループワークのテーマを検討する。
4	東アジアにおける近代国際関係と人々の移動(3)	第二次世界大戦期の軍事を伴う人々の移動について検討する。
5	冷戦期東アジアと人々の移動(1)	太平洋戦争後、および冷戦初期の体制が人々の移動とどのように関わっていたか、朝鮮半島・中国・台湾の戦後を事例として検討する。
6	冷戦期東アジアと人々の移動(2)	太平洋戦争後、および冷戦初期の体制が人々の移動とどのように関わっていたか、日本・沖縄の戦後を事例として検討する。
7	現代日本における国際関係と人々の移動(1)	第二次世界大戦後の復興・経済成長後の日本における人々の移動の経験および「他者」意識について、「難民条約」締結と人権の視点から検討する。
8	現代日本における国際関係と人々の移動(2)	バブル崩壊やリーマンショックなど、1990年代以降の日本の断続的な経済不況とその中での労働力不足に伴う外国人労働者導入の議論から、人々の移動を検討する。
9	現代日本における国際関係と人々の移動(3)	戦前・戦後における女性の移動および「移動の女性化」と言われる現象について、ジェンダーの視点から考える。
10	現代日本における国際関係と人々の移動(4)	移動後の家族、および子どもたち、または家族離散など、家族の視点から人々の移動を考える。
11	グループ発表(1)	授業に関するテーマの中から、受講生が関心のあるものを選び、チームで調査・ディスカッションした上でグループワークの発表を行う。
12	グループ発表(2)	授業に関するテーマの中から、受講生が関心のあるものを選び、チームで調査・ディスカッションした上でグループワークの発表を行う。
13	グループ発表(3)	授業に関するテーマの中から、受講生が関心のあるものを選び、チームで調査・ディスカッションした上でグループワークの発表を行う。
14	振り返りとまとめ	振り返りと全体を通して人の移動から考える国際関係についてディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・配布資料などを参考に予習・復習し、受講コメントを提出する(30分)。
・授業の展開に応じて、指定された文献や参考書を読み、問題点や疑問点を事前にまとめる。
・予定では第11回目以降、グループごとにリサーチ発表を行う。発表に向けてグループで資料を検討し、発表用資料（スライド）の作成・事前練習などに取り組む。
・学期末レポートの準備をする。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しないが、各回に資料を指示する。

【参考書】
カースルズ&ミラー『国際移民の時代 第4版』関根政美ほか訳、名古屋大学出版会、2011年。
蘭信三『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年。
清水睦美ほか『日本社会の移民第二世代』明石書店、2021年。
田中宏『在日外国人――法の壁、心の溝 第三版』岩波新書、2013年。
サスキア・サッセン『グローバル・シティ ： ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2018年。

【成績評価の方法と基準】
・毎回のコメントシート提出30％。
・グループワーク35％
・学期末レポート35％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
動画・映像などを取り入れる。
グループ発表の準備時間を取る。
グループ発表の日程・グループの決め方は、学生の主体性を尊重して調整する。

【Outline (in English)】
This course introduces the history of immigration from/toward Japan and discusses political, economic, social, cultural effects. The goal of this course is to understand and communicate with “others” based on the historical perspective. Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class. Grading will be decided according to the following process short-comment-sheet every after class (30 %), group work and presentation(35 %), and term-end report (35 %).

SES200GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 200）

持続可能な社会

中西　由季子

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：隔年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：人数によっては選抜する。初回授業に出席すること。

その他属性：〈優〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ＳＤＧｓの実現には、持続可能な社会づくりが重要である。
SDGsとは何かをカードゲームや対話を通して体感しながら、持続可能な社会づくりを構成する「６つの視点」を軸にして、持続可能な社会づくりに関わる課題を見出し、その課題解決に向けて考察する。

【到達目標】
１．サステナブルとは何かを理解し、説明できる。
２．ＳＤＧｓとは何か理解し、説明できる。
３．グループワークや対話を通して、批判的に考える力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する力、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度を身につける。
４．自ら課題を見出し、その解決に向けての対策を考案することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
カードゲームやブロックによる表現、対話(ダイアローグ）を伴うワークショップ形式を中心とした講義・演習授業を実施する。各回授業後には、Ｇｏｏｇｌｅ　Ｆｏｒｍによるリアクションペーパー提出を求めます。適宜、課題提出を求めることもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	持続可能な社会とは	持続可能な社会とは ブロックを使用した対話
第2回	ＳＤＧｓ概要	ＭＤＧｓからＳＤＧｓへ ＳＤＧｓとは
第3回	ＳＤＧｓを体感する①	「２０３０ＳＤＧｓカードゲーム」を通して、ＳＤＧｓを体感する。
第4回	ＳＤＧｓを体感する②ー振り返り	ゲームを通して、感じたこと・考えたことを振り返り、現実世界においてできることを考える
第5回	貧困と飢餓	世界および日本における貧困と飢餓の現状と展望
第6回	地球の限界	アースオーバーシュートデー エコロジカルフットプリント
第7回	自然災害ー命を守る行動①	風水害２４により迫りくる大型台風直撃前後の過ごし方を体感し、自然災害時に潜む危機を知る
第8回	自然災害ー命を守る行動②振り返り	風水害を含め、災害に対する予備の行動、災害時の行動、被災避難時の行動について考える
第9回	食品ロス削減	食品ロスと気候変動
第10回	マイクロプラスチック課題	２０５０年プラスチックの海 ブロックを使用した対話
第11回	アンコンシャスバイアス	アンコンシャスバイアス ジェンダー平等 マイクロアグレッション
第12回	カーボンニュートラル①	２０５０カーボンニュートラルを実施し、炭素循環について考える
第13回	カーボンニュートラル②-振り返り	ゲームを振り返り、脱炭素社会について考え、対話する
第14回	ＳＤＧｓウォッシュ	ＳＤＧｓウォッシュ・グリーンウォッシュの概念を理解し、判断力を身につける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に各回のテーマに関する関連資料（新聞記事・書籍など）を読む。
授業後に示されるリアクションペーパー、課題等を期日までに提出する。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テキストは用いず、 必要な資料はプリントして配布します。

【参考書】
持続可能な地域のつくり方――未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン
筧裕介
英治出版（２０１９／５／９）
ＩＳＢＮ－１０：４８６２７６２５１４
ＩＳＢＮ－１３：９７８－４８６２７６２５１１

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業中の発言など）３０%、各回毎のレフレクションペーパー５０%、最終レポート２０%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の６０%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゲームやレゴブロックを活用し、対話を含めたアクティブラーニングの授業については、評価が高く安心している。
一方で、座学と対話のみの授業については、改善の希望コメントもあり、座学の時間を短く、対話の回数・時間を増やして主体的に参加できるようにしていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
授業には, 主としてパワーポイント映像およびビデオ資料を用います。グループワーク時にPCを用いることがあります。
リフレクションペーパーおよび課題提出等のために学習支援システムを利用します。

【Outline (in English)】
Creating a sustainable society is important for the realization of SDGs. While experiencing what the SDGs are through card games and dialogue, we will find issues related to the creation of a sustainable society centered on the "six perspectives" that make up a sustainable society, and work toward solving those issues.
At the end of the course, students are expected to be able to do the followings,
1.To understand and explain what sustainable means.
2.To Understand and explain what SDGs are.
3.　To acquire the ability to think critically, multilaterally and comprehensively, to communicate, to cooperate with others, to respect connections, and to participate willingly through group work and dialogue.
4. To identify problems and devise measures to solve them.
Ecpected learning activities outside of classroom will be collecting information, leading papers, doing homework,preparing your presentation.
It will be taken for 2 hours each lecture.
Your overall grade in the class will be decided
based on the following:
Usual performance score 50%, Reports 50%.
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ARSa400GA（地域研究（ヨーロッパ）/ Area studies(Europe) 400）

地域協力・統合

大中　一彌

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈S〉〈ア〉〈ダ〉〈未〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「ヨーロッパとは何か」という問いに、自分なりの答えを言えるようになるのがこの授業の目的です。
授業を紹介する動画を２つ用意しました。ぜひご覧ください：
《なぜ国は買えないのか》　https://x.gd/aZ8no　※学内者限定
《西ヨーロッパと自由》　https://x.gd/6bP6e　※学外からも閲覧できます。
学内には他にもヨーロッパ関連の科目があります。これらの授業と比較した時の、本授業「地域協力・統合」の特色は、高校までの世界史の知識を確かめながら、思想史や文化史に軸足をおきつつ、これからの国際社会で活躍する人材が身に付けておくべき基礎教養として、「ヨーロッパとは何か」について学ぶ点にあります。過去と現在を往復しながら、とくにヨーロッパと、その外部とされるものの境界（ボーダー）に焦点をあてつつ、認識をほりさげていきます。

【到達目標】
①「ヨーロッパ」の地理的広がりについて、みずからの考えを述べることができる。
②古代ギリシア、ヘレニズム、古代ローマの文化的・政治的・哲学的遺産と「ヨーロッパ」を関連付けて（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。
③西ローマ帝国崩壊前後以降、10世紀にいたるゲルマン人、ノルマン人、スラブ人の民族大移動と「ヨーロッパ」の形成を、各国史との関係で（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。
④カトリシズムを軸として形成される中世の西ヨーロッパと、正教を軸として形成される東ヨーロッパや、イスラームの拡大を関係づけつつ（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。
⑤ルネサンス期を特徴づけるユマニスムの人間論上の意義、大航海時代における非ヨーロッパ地域への影響、宗教改革がもたらした信仰と政治の関係性について、（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。
⑥中央集権化やヨーロッパ外における植民地をめぐる争い、「文芸の共和国」の出現など、一連の政治的文化的な変化を背景としつつ、商業の発展をつうじて発生した「ヨーロッパ中心主義」的な意識に関し、肯定・否定の両面から論じることができる。
⑦イギリス、アメリカ、フランスや他のヨーロッパ諸国にみられる市民的権利にもとづく思想・制度の発達について、（専門家としてではなく）学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・この科目「地域協力・統合」は、2025年度にひきつづき、2026年度も、リアルタイム・オンラインで実施します。
・授業時間（100分）の前半65分程度は、受講者全体へのフィードバック（15-20分）と講義（45-50分）にあてています。
・授業時間（100分）の後半35分程度を、グループディスカッションにあてています。
・毎回の授業資料はGoogle Classroomをつうじて事前に配布しています。
・学習支援システム-Hoppiiを利用し、小テストを受験してもらう場合があります。
・基本的にリアルタイム・オンラインですが、授業内容の録画を、受講者の個人情報の保護に留意しつつ、受講者のみが視聴できる形で共有する場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	受講上の約束事	授業内容の紹介、注意事項の説明
2	ヨーロッパの地理的定義	ユーラシア大陸から突き出た「半島」としてのヨーロッパ：東の境界は？
3	人の移動と石器・青銅器・鉄器時代	ヨーロッパ各地に広がるケルトの文化
4	考古学的定義	ギリシア世界
5	神話と政治	「ヨーロッパ」の語源とされる諸神話や、「アジア」と対比した際のギリシア世界の特質とされるものについて学ぶ
6	ヘレニズムと地中海世界	「ギリシア文明」の地理的拡大
7	古代ローマ	ローマの盛衰と遺産としての法制度や建築
8	西ローマの崩壊と民族大移動	統一的な地中海世界の終わり＝「文明」の崩壊のイメージ及びアジア諸民族の侵入
9	「周縁」としてのヨーロッパ	いわゆるノルマン人の全ヨーロッパへの進出、スラブ人の中東欧への進出
10	フランク王国と「12世紀のルネサンス」	西ヨーロッパにおけるカトリシズムを軸とした中世的秩序の形成
11	大航海時代とルネサンス、宗教改革	ポルトガルによるアフリカ大陸西岸の航海、ユマニスム的な「人間の尊厳」の観念、プロテスタンティズムの発生によるカトリック圏としての西ヨーロッパの分裂
12	16世紀-17世紀のヨーロッパ政治史	ハプスブルク家、オスマン・トルコ、テューダー朝のイギリス、ユグノー戦争、三十年戦争。西ヨーロッパ諸国間の紛争の新大陸やアジアにおける展開
13	「主権」の発動たる戦争、その悲惨を目の当たりにした人々による平和の希求	ジャック・カロ「戦争の悲惨」。クリュセ、コメニウス、ペンらに芽生えた統合の思想
14	啓蒙思想と革命	君主を含めた主権者同士の連合から、民主主義、ナショナリズムの時代への移行

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1. 小テストが宿題として出されます（ネット上で受験）
2. グループ・ディスカッションの課題の提出（授業時間内に提出まで至らなかった場合のみ）
2. 本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。

【テキスト（教科書）】
教科書を買う必要はありません。Google Classroom上で資料を配布します。

【参考書】
授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】
●１．期末テストは行いません　0%
●２．期末レポートは出題しません　0%
●３．小テストの受験【インターネット上において授業時間外に受験するため、体育会や就職活動中の学生、所属キャンパスを問わずすべての学生がオンラインで受験できます（※１）】60%
（※１）小テストは授業の復習であり、授業で配る資料をみれば、簡単に答えられるやさしい内容です。
●４．オンライン授業への参加【リアルタイム・オンライン授業＝月４限のZoomミーティングへの各学生による接続（※２）】20%
（※２）ただし、第１回、第２回、第14回のリアルタイム・オンライン授業（Zoomミーティング）の活動についてのみ、この項目●４．ではなく、●６．における評価対象といたします。
●５．グループ・ディスカッション＆学生間の共働【グループ・ディスカッションにおける意見交換への積極的参加や、グループ・ディスカッションにおける学生間のやりとりのとりまとめ、所定のGoogleフォームを用い、とりまとめた成果物を教員に提出（送信）する、等（※３）】20%
（※３）グループ・ディスカッションは、３〜６人程度の学生グループをZoomのブレイクアウト・ルーム機能を用いて毎回新たに作り、複数人の共同作業として行っています。Zoomに接続し、他の学生と共に議論に参加していたことがグループとして提出した成果物に記載されていれば、加点されます。
●６．その他【１．〜５．の合計100%には含めず、その外枠で10%程度まで加算します。】
（ア）運営への協力（協力してくれた方に加点しています；たとえば配布資料の誤字や、WebClassやGoogle Classroom等のLMSの設定の誤りの指摘。授業参加者間の連絡や情報共有に積極的に取り組んでくれたといった形の運営協力が加点の対象）
（イ）第１回、第２回、第14回のリアルタイム・オンライン授業（Zoomミーティング）と関連する活動への参加
（ウ）小テスト以外の提出物（アンケート等）で加点対象とするものが提出された場合

【学生の意見等からの気づき】
・ヨーロッパの文化史や政治史、経済史についての学びは、大人の教養として経験しておいたほうが良さそうではあるけれど、わかりづらそうで敬遠したくなるという方もいるようです。
・この科目「地域協力・統合」は、高校までの学習内容を確認しながら、大学の学部レベル以上の内容に深めていくという組み立てとすることで参加のハードルを下げ、そうした方（かた）が必要な学びにアクセスできる場となることを目指しています。

【学生が準備すべき機器他】
資料の共有などに、Google ClassroomやWebClassを使いますので、必要な機器や情報環境はお持ちであったほうが良いでしょう。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。

・留学や大学院進学、就職などの相談もOKです。
・問い合わせ先や、授業内容のイメージについては、次のリンク先をご覧ください（Wordファイル）https://x.gd/1W2Mf

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
What is Europe? This question, which many present-day Europeans ask themselves, is the main theme of this course. In this class, students will examine the question with an emphasis on the history of ideas and culture. Starting with the geographical notion of Europe as a “continent", students will familiarize themselves with its basic archaeological, ethnic, religious, philosophical, and historical aspects. Students will be encouraged to explore these areas to reflect on the modern idea of Europe as a haven of peace and the possibility or impossibility of a single European identity. She or he will move back and forth between the past and the present, focusing in particular on the ambivalence of the boundaries between Europe and its "others", in order to deepen her or his understanding of the question.
【到達目標（Learning Objectives）】
By the end of the course, students should be able to do the following:
1) Expressing her or his own views about the geographical spread of "Europe".
2) Relating the notion of "Europe" to the cultural, political, and philosophical legacies of ancient Greece, Hellenism, and Rome, and making an argument at a level appropriate for an undergraduate student.
3) Discussing, at a level appropriate for undergraduate students, the Great Migration of Germanic, Norman, and Slavic peoples and the formation of "Europe", in relation to the history of each country from the time of the collapse of the Western Roman Empire to the 10th century.
4) Explaining the relationship between Western Europe in the Middle Ages, which was formed around Catholicism, and Eastern Europe, which was formed around Orthodoxy, and the expansion of Islam, at a level appropriate for undergraduate students.
5) Describing, at a level appropriate for undergraduate students, the significance of humanism, which characterized the Renaissance, the impact of the so-called "Age of Discovery" on non-European countries, and the redefinition of the relationship between faith and politics resulting from the Reformation.
6) Argueing, both positively and negatively, about the "Eurocentric" consciousness that emerged through the development of commerce under a series of political and cultural changes, including the centralization of power, wars in colonies outside Europe, and the emergence of the "Republic of Letters".
7) Illustrating the significance for modern societies of the development of civil rights-based ideas and institutions with historical events in the United Kingdom, the United States, France, and other European countries at a level appropriate for undergraduate students.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
1) A simple quiz will be given almost every week as homework. Participation in this quiz is mandatory for all students taking the course. In order to answer this quiz, students need to use the learning support system - Hoppii (on the Internet).
2) According to the Standards for the Establishment of Universities, the minimum time of preparation and review required to earn two credits for a lecture or seminar is four hours per session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
Based on the following grading methods, students who have achieved at least 60% of the achievement objectives for this class will be considered to have passed the class (C minus or better on a letter grade basis).
1. No final exam will be given. 0%.
2. Attendance will not be taken 0%.
3. Quiz Examination [All students, regardless of their campus affiliation, including athletics and job-seeking students, can take the quiz online because of the use of Hoppii] 61%.
4. Group discussion and collaboration among students [Participation in group discussions, group discussion on Google Classroom, and sending the results to instructors, etc.] 25%.
5. End-of-term report (to be submitted only by those who wish to do so): 14%.

HIS300GA（史学 / History 300）

The Global South: History and Politics

佐々木　一惠

配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.

その他属性：〈グ〉〈優〉〈S〉〈ダ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
The course takes up current social, economic, and political issues related to "the Global South," such as climate change, immigration, tourism, pandemics, repatriation of art and cultural artifacts, and Black Lives Matter, from a transnational and cross-cultural perspective, incorporating the historical past.
By discussing various topics associated with the Global South, students will gain knowledge of important contemporary phenomena, acquire concepts and theories for analyzing these phenomena, and be able to research issues related to the Global South.

【到達目標】
At the end of this course, students will be able to:
・Understand the issues surrounding the Global South and their historical background.
・Analyze issues related to the Global South using concepts and theories from the framework of global and transnational history.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
The first part of the class focuses on providing students with a broad understanding of the background of the topic covered in the assigned readings and important concepts and theories related to the topic. The class then engages in a discussion that allows students to share their insights and interpretations of the reading assignment. In the second half of the class, the focus shifts to a broader examination of the issues raised in the reading assignment. The class expands its scope to explore the implications, connections, and applications of the issues in a broader context.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week1	Introduction	An overview of the course.
Week2	Climate Change	Explores the impact of climate change on the Global South and discusses the conflict between the Global South and developed countries over environmental issues.
Week3	Tourism	Traces the images of Africa as a tourist destination created by the West in the past and discusses how such images are currently being renovated and/or reframed.
Week4	Pandemics	Explores the pandemics that have historically plagued Latin America and discusses the problems caused by Covid-19.
Week5	Representation	Analyzes exotic advertising using Edward Said's notion of Orientalism and discusses how such images are now being appropriated by the Global South.
Week6	The midterm	The Practice of Analyzing Primary Sources and a Quiz
Week7	Immigration and Citizenship	Takes up the case of past migrants from India to East Africa and discusses their current situation as citizens in African countries.
Week8	Repatriation of Cultural Heritage	Using the case of museums in Germany that own artifacts confiscated from colonies, discusses the repatriation of cultural heritage.
Week9	Black Lives Matter Movement	Explores the current controversy over public history and monuments in the wake of the Black Lives Matter movement.
Week10	Final Paper Presentation 1	10-minute presentation on an issue related to the Global South, including a historical perspective.
Week11	Final Paper Presentation 2	10-minute presentation on an issue related to the Global South, including a historical perspective.
Week12	Final Paper Presentation 3	10-minute presentation on an issue related to the Global South, including a historical perspective.
Week13	Final Paper Presentation 4	10-minute presentation on an issue related to the Global South, including a historical perspective.
Class14	Wrap up	Summary of the course

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are required to read all the assignments and be ready for class discussions, and also write a paper analyzing assigned primary sources.
Students are expected to spend about 4 hours a week on coursework outside the class.

【テキスト（教科書）】
There is no textbook for this course. All course materials are available online through the course site.

【参考書】
○Carina Schmitt, eds. From Colonialism to International Aid

External Actors and Social Protection in the Global South (Palgrave Macmillan, 2020).
◯Danielle Watson, et al. Policing the Global South: Colonial Legacies, Pluralities, Partnerships, and Reform (Routledge, 2023).

【成績評価の方法と基準】
① Class participation 30%
② Primary document analysis quiz 20%
③ Presentation 20%
④ Final Paper 30%
Based on the grading criteria, students who successfully achieve 60% or more of course goals will earn a passing grade.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【学生が準備すべき機器他】
ICT devices such as laptops and tablets.

INF400GA（その他の情報学 / Information science 400）

情報文化演習

和泉　順子

サブタイトル：情報科学技術の問題の発見と考察
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期 /Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
コンピュータ及び情報通信技術の普及と発展により、コンピュータ・ネットワーク、特にインターネットは社会基盤の一部を担うようになった。インターネット上では様々なデジタル情報が交換され、既存メディアには無い多様性と価値を生み出している。その一方では、国境を超えたコミュニケーションメディアである点やその広がりから、他の社会システムとの協調や調整が必要なケースも多く、グローバルな視点での問題発見や解決が重要となる。
本演習では、こうした通信技術を基盤とした情報化・DX化において、コンピュータネットワークの基本的な考え方や構成技術を多種多様な書籍・文書通読や議論を通じて理解し、社会的課題の発見と解決について学ぶとともに、自らの意見を発信できる能力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
・インターネットの基本原理、考え方、構成技術などを議論を通じて自ら学び理解する
・グローバルな視点による社会課題の発見とその解決方法についての考え方を学ぶ
・技術的な視点に基づいた、自らの意見を発信する能力を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期・秋学期を通じて自分の意見や考え方を組み立て、他の人に分かるように言葉などで表現するアウトプットの練習を行う。
通年で、共通の本を精読して発表する「輪読」の他に、各々の興味に関連する読書（サーベイ）を継続的に行う。単純に本を読むだけでなく、そこから何を読み取ったかを他の人に説明するため、できるだけ本の内容や自分の意見を正しく伝えるために必要なスキルを学ぶ。
上記の関連情報収集とスキル習得と並行し、秋学期は春学期に得た知識をベースとして実社会における具体的な問題について議論する。現在の情報科学技術を支える構成技術を理解し、自分なりの考えをまとめて発信するために必要なスキルを習得する。
→　追記：状況に応じてオンライン授業となる可能性がある。各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	本演習の概要および春学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマを探る
2	これまでに修得した情報技術の確認	各々が、高校あるいは大学の講義でどのような情報関連科目を履修し、どのようなスキルや知識を修得したのか確認する
3	課題解決のための情報技術	今後取り組むテーマや興味に、あるいは解決したい問題に対して、どのような情報技術が影響するのか考え、なにが必要なのかを議論する
4	精読する本の紹介と選定	情報技術とその社会への影響に関する本の中で、インターネット白書や情報通信白書のような報告書、または履修者の興味に共通する本を複数紹介し、輪読する本と分担を決める
5	情報技術と社会環境（1）	近年話題となっている生成AIやロボット、IoT、ビッグデータなどの情報科学技術の現状と、展開に際しての問題点を議論する
6	情報技術と社会環境（2）	前回の議論を踏まえた自分なりの課題分析を論理的に説明するための準備を行う
7	学生発表（1）	前回の準備から、情報科学技術の展開に関する問題とその対応に関する発表を行い、互いの発表の過不足を議論する
8	学生発表（2）	前回の発表とそれに関する質疑応答、改善策に関する議論を踏まえ、再構築した発表を再度行い、改善を確認する
9	輪読と議論（1）	第4回で選定した本、および通信に関する白書について、関連技術や業界動向を掴むことを目的として輪読する。担当者によって1〜2章ずつ行う
10	輪読と議論（2）	前回に続き、輪読とその発表を行う
11	輪読と議論（3）	前回に続き、輪読とその発表を行う。また、輪読によって得られた知見、さらに調査が必要な点などについて確認する
12	研究テーマに関連する本の紹介	各々が自分の興味、あるいは研究テーマを意識しながら関連する本を選定し、簡単に発表する
13	他の人の研究テーマに関する質疑、提案	前回の発表をもとに、自分以外の研究テーマに関する質問や提案を行うことで、互いに新たな視点を得る
14	秋学期に向けての準備	秋学期に向けて、必要な知識やスキルを確認し、夏休みになにをするか自らが課題を設定する
1	イントロダクション	本演習の概要説明と導入、および秋学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマについての議論をおこなう
2	インターネット概要	現在のインターネットの役割と環境、およびこれまでの変遷について学ぶ
3	インターネットの構成要素	インターネットを支える技術と構造、およびデジタル情報の特徴について学ぶ
4	インターネットのサービスと課題	インターネットで現在行われているサービスについて考察すると共に、顕在化している、あるいはこれから起こりうる課題について議論する
5	学生発表(1)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
6	IoT・ビッグデータ	具体的なテーマとして、センサデータの利活用の事例や国内外の動向について解を深めると共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
7	セキュリティ(1)	具体的なテーマとして、身近な情報セキュリティについて議論し、情報収集の仕方やインシデント時の対応などを確認する
8	セキュリティ(2)	インターネット上の情報セキュリティに関する諸問題や国内外の動向について学ぶと共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
9	グローバルガバナンス	情報科学技術に関連するデータガバナンス、あるいはサービスの規格化・標準化や、国際的なルール作りの方法や過程について学ぶ
10	学生発表(2)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
11	テーマ演習(1)：テーマ選定	履修者の問題意識やテーマに基づき、具体的な事例やケースについて対話形式の議論によって理解を深め、個々の扱うテーマを定める
12	テーマ演習(2)：テーマ分析	選定したテーマについて、具体的な事例やケースを調べて理解を深め、個々の扱うテーマの問題や解決法の分析をおこなう
13	テーマ演習(3)：テーマ整理	個々の扱うテーマとその分析、および問題の整理を行なった上で、情報科学に関する技術的、あるいは運用や啓蒙など社会的にとり得るアプローチを考える
14	最終発表	履修者が、それぞれが情報科学技術の視点から、自身の問題発見・問題解決に向けた考察内容について、発表する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題として毎週「読書」し、そのメモを作成・提出および発表が求められる。

授業を受けるにあたって特別な前提知識は必要としない。課題やレポートについては、授業の中で適宜指示をする。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書は特に必要としない

【参考書】
必要な参考書などは授業の中で適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
成績は、授業における研究発表、および授業での学習状況などの平常点を総合して評価する。具体的には、授業における発言、議論、発表を50%、および読書課題などの平常点を50%を目安とした配分とする。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業に対応可能なPCおよびマイク等の周辺機器と、ネットワーク環境を準備する必要がある。

【Outline (in English)】
Course outline:
In this seminar, we learn about the basic concepts and composition techniques of computer networks, discuss the organisation and the solution about social problems regard to the internet. Moreover we also acquire the skill to represent their own opinions.
Learning Objectives:
The goal of this course is to provide students with an understanding of the basic concepts and configuration techniques of computer networks through reading and discussing a wide variety of books and documents, to learn about the discovery and solution of social problems, and to acquire the ability to communicate their own opinions.
Learning activities outside of classroom:
As an assignment, you are expected to make notes on the weekly readings.
The standard preparation and review time for this class is two hours each.
Grading Criteria:
Grading will be decided based on reading assignments (50%) and the discussions and presentations will account (50%).

INF400GA（その他の情報学 / Information science 400）

情報文化演習

和泉　順子

サブタイトル：情報科学技術の問題の発見と考察
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
コンピュータ及び情報通信技術の普及と発展により、コンピュータ・ネットワーク、特にインターネットは社会基盤の一部を担うようになった。インターネット上では様々なデジタル情報が交換され、既存メディアには無い多様性と価値を生み出している。その一方では、国境を超えたコミュニケーションメディアである点やその広がりから、他の社会システムとの協調や調整が必要なケースも多く、グローバルな視点での問題発見や解決が重要となる。
本演習では、こうした通信技術を基盤とした情報化・DX化において、コンピュータネットワークの基本的な考え方や構成技術を多種多様な書籍・文書通読や議論を通じて理解し、社会的課題の発見と解決について学ぶとともに、自らの意見を発信できる能力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
・インターネットの基本原理、考え方、構成技術などを議論を通じて自ら学び理解する
・グローバルな視点による社会課題の発見とその解決方法についての考え方を学ぶ
・技術的な視点に基づいた、自らの意見を発信する能力を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期・秋学期を通じて自分の意見や考え方を組み立て、他の人に分かるように言葉などで表現するアウトプットの練習を行う。
通年で、共通の本を精読して発表する「輪読」の他に、各々の興味に関連する読書（サーベイ）を継続的に行う。単純に本を読むだけでなく、そこから何を読み取ったかを他の人に説明するため、できるだけ本の内容や自分の意見を正しく伝えるために必要なスキルを学ぶ。
上記の関連情報収集とスキル習得と並行し、秋学期は春学期に得た知識をベースとして実社会における具体的な問題について議論する。現在の情報科学技術を支える構成技術を理解し、自分なりの考えをまとめて発信するために必要なスキルを習得する。
→　追記：状況に応じてオンライン授業となる可能性がある。各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	本演習の概要および春学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマを探る
2	これまでに修得した情報技術の確認	各々が、高校あるいは大学の講義でどのような情報関連科目を履修し、どのようなスキルや知識を修得したのか確認する
3	課題解決のための情報技術	今後取り組むテーマや興味に、あるいは解決したい問題に対して、どのような情報技術が影響するのか考え、なにが必要なのかを議論する
4	精読する本の紹介と選定	情報技術とその社会への影響に関する本の中で、インターネット白書や情報通信白書のような報告書、または履修者の興味に共通する本を複数紹介し、輪読する本と分担を決める
5	情報技術と社会環境（1）	近年話題となっている生成AIやロボット、IoT、ビッグデータなどの情報科学技術の現状と、展開に際しての問題点を議論する
6	情報技術と社会環境（2）	前回の議論を踏まえた自分なりの課題分析を論理的に説明するための準備を行う
7	学生発表（1）	前回の準備から、情報科学技術の展開に関する問題とその対応に関する発表を行い、互いの発表の過不足を議論する
8	学生発表（2）	前回の発表とそれに関する質疑応答、改善策に関する議論を踏まえ、再構築した発表を再度行い、改善を確認する
9	輪読と議論（1）	第4回で選定した本、および通信に関する白書について、関連技術や業界動向を掴むことを目的として輪読する。担当者によって1〜2章ずつ行う
10	輪読と議論（2）	前回に続き、輪読とその発表を行う
11	輪読と議論（3）	前回に続き、輪読とその発表を行う。また、輪読によって得られた知見、さらに調査が必要な点などについて確認する
12	研究テーマに関連する本の紹介	各々が自分の興味、あるいは研究テーマを意識しながら関連する本を選定し、簡単に発表する
13	他の人の研究テーマに関する質疑、提案	前回の発表をもとに、自分以外の研究テーマに関する質問や提案を行うことで、互いに新たな視点を得る
14	秋学期に向けての準備	秋学期に向けて、必要な知識やスキルを確認し、夏休みになにをするか自らが課題を設定する
1	イントロダクション	本演習の概要説明と導入、および秋学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマについての議論をおこなう
2	インターネット概要	現在のインターネットの役割と環境、およびこれまでの変遷について学ぶ
3	インターネットの構成要素	インターネットを支える技術と構造、およびデジタル情報の特徴について学ぶ
4	インターネットのサービスと課題	インターネットで現在行われているサービスについて考察すると共に、顕在化している、あるいはこれから起こりうる課題について議論する
5	学生発表(1)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
6	IoT・ビッグデータ	具体的なテーマとして、センサデータの利活用の事例や国内外の動向について解を深めると共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
7	セキュリティ(1)	具体的なテーマとして、身近な情報セキュリティについて議論し、情報収集の仕方やインシデント時の対応などを確認する
8	セキュリティ(2)	インターネット上の情報セキュリティに関する諸問題や国内外の動向について学ぶと共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
9	グローバルガバナンス	情報科学技術に関連するデータガバナンス、あるいはサービスの規格化・標準化や、国際的なルール作りの方法や過程について学ぶ
10	学生発表(2)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
11	テーマ演習(1)：テーマ選定	履修者の問題意識やテーマに基づき、具体的な事例やケースについて対話形式の議論によって理解を深め、個々の扱うテーマを定める
12	テーマ演習(2)：テーマ分析	選定したテーマについて、具体的な事例やケースを調べて理解を深め、個々の扱うテーマの問題や解決法の分析をおこなう
13	テーマ演習(3)：テーマ整理	個々の扱うテーマとその分析、および問題の整理を行なった上で、情報科学に関する技術的、あるいは運用や啓蒙など社会的にとり得るアプローチを考える
14	最終発表	履修者が、それぞれが情報科学技術の視点から、自身の問題発見・問題解決に向けた考察内容について、発表する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題として毎週「読書」し、そのメモを作成・提出および発表が求められる。

授業を受けるにあたって特別な前提知識は必要としない。課題やレポートについては、授業の中で適宜指示をする。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書は特に必要としない

【参考書】
必要な参考書などは授業の中で適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
成績は、授業における研究発表、および授業での学習状況などの平常点を総合して評価する。具体的には、授業における発言、議論、発表を50%、および読書課題などの平常点を50%を目安とした配分とする。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業に対応可能なPCおよびマイク等の周辺機器と、ネットワーク環境を準備する必要がある。

【Outline (in English)】
Course outline:
In this seminar, we learn about the basic concepts and composition techniques of computer networks, discuss the organisation and the solution about social problems regard to the internet. Moreover we also acquire the skill to represent their own opinions.
Learning Objectives:
The goal of this course is to provide students with an understanding of the basic concepts and configuration techniques of computer networks through reading and discussing a wide variety of books and documents, to learn about the discovery and solution of social problems, and to acquire the ability to communicate their own opinions.
Learning activities outside of classroom:
As an assignment, you are expected to make notes on the weekly readings.
The standard preparation and review time for this class is two hours each.
Grading Criteria:
Grading will be decided based on reading assignments (50%) and the discussions and presentations will account (50%).

INF400GA（その他の情報学 / Information science 400）

情報文化演習

和泉　順子

サブタイトル：情報科学技術の問題の発見と考察
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期 /Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
コンピュータ及び情報通信技術の普及と発展により、コンピュータ・ネットワーク、特にインターネットは社会基盤の一部を担うようになった。インターネット上では様々なデジタル情報が交換され、既存メディアには無い多様性と価値を生み出している。その一方では、国境を超えたコミュニケーションメディアである点やその広がりから、他の社会システムとの協調や調整が必要なケースも多く、グローバルな視点での問題発見や解決が重要となる。
本演習では、こうした通信技術を基盤とした情報化・DX化において、コンピュータネットワークの基本的な考え方や構成技術を多種多様な書籍・文書通読や議論を通じて理解し、社会的課題の発見と解決について学ぶとともに、自らの意見を発信できる能力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
・インターネットの基本原理、考え方、構成技術などを議論を通じて自ら学び理解する
・グローバルな視点による社会課題の発見とその解決方法についての考え方を学ぶ
・技術的な視点に基づいた、自らの意見を発信する能力を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期・秋学期を通じて自分の意見や考え方を組み立て、他の人に分かるように言葉などで表現するアウトプットの練習を行う。
通年で、共通の本を精読して発表する「輪読」の他に、各々の興味に関連する読書（サーベイ）を継続的に行う。単純に本を読むだけでなく、そこから何を読み取ったかを他の人に説明するため、できるだけ本の内容や自分の意見を正しく伝えるために必要なスキルを学ぶ。
上記の関連情報収集とスキル習得と並行し、秋学期は春学期に得た知識をベースとして実社会における具体的な問題について議論する。現在の情報科学技術を支える構成技術を理解し、自分なりの考えをまとめて発信するために必要なスキルを習得する。
→　追記：状況に応じてオンライン授業となる可能性がある。各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	本演習の概要および春学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマを探る
2	これまでに修得した情報技術の確認	各々が、高校あるいは大学の講義でどのような情報関連科目を履修し、どのようなスキルや知識を修得したのか確認する
3	課題解決のための情報技術	今後取り組むテーマや興味に、あるいは解決したい問題に対して、どのような情報技術が影響するのか考え、なにが必要なのかを議論する
4	精読する本の紹介と選定	情報技術とその社会への影響に関する本の中で、インターネット白書や情報通信白書のような報告書、または履修者の興味に共通する本を複数紹介し、輪読する本と分担を決める
5	情報技術と社会環境（1）	近年話題となっている生成AIやロボット、IoT、ビッグデータなどの情報科学技術の現状と、展開に際しての問題点を議論する
6	情報技術と社会環境（2）	前回の議論を踏まえた自分なりの課題分析を論理的に説明するための準備を行う
7	学生発表（1）	前回の準備から、情報科学技術の展開に関する問題とその対応に関する発表を行い、互いの発表の過不足を議論する
8	学生発表（2）	前回の発表とそれに関する質疑応答、改善策に関する議論を踏まえ、再構築した発表を再度行い、改善を確認する
9	輪読と議論（1）	第4回で選定した本、および通信に関する白書について、関連技術や業界動向を掴むことを目的として輪読する。担当者によって1〜2章ずつ行う
10	輪読と議論（2）	前回に続き、輪読とその発表を行う
11	輪読と議論（3）	前回に続き、輪読とその発表を行う。また、輪読によって得られた知見、さらに調査が必要な点などについて確認する
12	研究テーマに関連する本の紹介	各々が自分の興味、あるいは研究テーマを意識しながら関連する本を選定し、簡単に発表する
13	他の人の研究テーマに関する質疑、提案	前回の発表をもとに、自分以外の研究テーマに関する質問や提案を行うことで、互いに新たな視点を得る
14	秋学期に向けての準備	秋学期に向けて、必要な知識やスキルを確認し、夏休みになにをするか自らが課題を設定する
1	イントロダクション	本演習の概要説明と導入、および秋学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマについての議論をおこなう
2	インターネット概要	現在のインターネットの役割と環境、およびこれまでの変遷について学ぶ
3	インターネットの構成要素	インターネットを支える技術と構造、およびデジタル情報の特徴について学ぶ
4	インターネットのサービスと課題	インターネットで現在行われているサービスについて考察すると共に、顕在化している、あるいはこれから起こりうる課題について議論する
5	学生発表(1)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
6	IoT・ビッグデータ	具体的なテーマとして、センサデータの利活用の事例や国内外の動向について解を深めると共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
7	セキュリティ(1)	具体的なテーマとして、身近な情報セキュリティについて議論し、情報収集の仕方やインシデント時の対応などを確認する
8	セキュリティ(2)	インターネット上の情報セキュリティに関する諸問題や国内外の動向について学ぶと共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
9	グローバルガバナンス	情報科学技術に関連するデータガバナンス、あるいはサービスの規格化・標準化や、国際的なルール作りの方法や過程について学ぶ
10	学生発表(2)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
11	テーマ演習(1)：テーマ選定	履修者の問題意識やテーマに基づき、具体的な事例やケースについて対話形式の議論によって理解を深め、個々の扱うテーマを定める
12	テーマ演習(2)：テーマ分析	選定したテーマについて、具体的な事例やケースを調べて理解を深め、個々の扱うテーマの問題や解決法の分析をおこなう
13	テーマ演習(3)：テーマ整理	個々の扱うテーマとその分析、および問題の整理を行なった上で、情報科学に関する技術的、あるいは運用や啓蒙など社会的にとり得るアプローチを考える
14	最終発表	履修者が、それぞれが情報科学技術の視点から、自身の問題発見・問題解決に向けた考察内容について、発表する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題として毎週「読書」し、そのメモを作成・提出および発表が求められる。

授業を受けるにあたって特別な前提知識は必要としない。課題やレポートについては、授業の中で適宜指示をする。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書は特に必要としない

【参考書】
必要な参考書などは授業の中で適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
成績は、授業における研究発表、および授業での学習状況などの平常点を総合して評価する。具体的には、授業における発言、議論、発表を50%、および読書課題などの平常点を50%を目安とした配分とする。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業に対応可能なPCおよびマイク等の周辺機器と、ネットワーク環境を準備する必要がある。

【Outline (in English)】
Course outline:
In this seminar, we learn about the basic concepts and composition techniques of computer networks, discuss the organisation and the solution about social problems regard to the internet. Moreover we also acquire the skill to represent their own opinions.
Learning Objectives:
The goal of this course is to provide students with an understanding of the basic concepts and configuration techniques of computer networks through reading and discussing a wide variety of books and documents, to learn about the discovery and solution of social problems, and to acquire the ability to communicate their own opinions.
Learning activities outside of classroom:
As an assignment, you are expected to make notes on the weekly readings.
The standard preparation and review time for this class is two hours each.
Grading Criteria:
Grading will be decided based on reading assignments (50%) and the discussions and presentations will account (50%).

INF400GA（その他の情報学 / Information science 400）

情報文化演習

和泉　順子

サブタイトル：情報科学技術の問題の発見と考察
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
コンピュータ及び情報通信技術の普及と発展により、コンピュータ・ネットワーク、特にインターネットは社会基盤の一部を担うようになった。インターネット上では様々なデジタル情報が交換され、既存メディアには無い多様性と価値を生み出している。その一方では、国境を超えたコミュニケーションメディアである点やその広がりから、他の社会システムとの協調や調整が必要なケースも多く、グローバルな視点での問題発見や解決が重要となる。
本演習では、こうした通信技術を基盤とした情報化・DX化において、コンピュータネットワークの基本的な考え方や構成技術を多種多様な書籍・文書通読や議論を通じて理解し、社会的課題の発見と解決について学ぶとともに、自らの意見を発信できる能力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
・インターネットの基本原理、考え方、構成技術などを議論を通じて自ら学び理解する
・グローバルな視点による社会課題の発見とその解決方法についての考え方を学ぶ
・技術的な視点に基づいた、自らの意見を発信する能力を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期・秋学期を通じて自分の意見や考え方を組み立て、他の人に分かるように言葉などで表現するアウトプットの練習を行う。
通年で、共通の本を精読して発表する「輪読」の他に、各々の興味に関連する読書（サーベイ）を継続的に行う。単純に本を読むだけでなく、そこから何を読み取ったかを他の人に説明するため、できるだけ本の内容や自分の意見を正しく伝えるために必要なスキルを学ぶ。
上記の関連情報収集とスキル習得と並行し、秋学期は春学期に得た知識をベースとして実社会における具体的な問題について議論する。現在の情報科学技術を支える構成技術を理解し、自分なりの考えをまとめて発信するために必要なスキルを習得する。
→　追記：状況に応じてオンライン授業となる可能性がある。各回の授業計画の変更については、学習支援システムでその都度提示する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	本演習の概要および春学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマを探る
2	これまでに修得した情報技術の確認	各々が、高校あるいは大学の講義でどのような情報関連科目を履修し、どのようなスキルや知識を修得したのか確認する
3	課題解決のための情報技術	今後取り組むテーマや興味に、あるいは解決したい問題に対して、どのような情報技術が影響するのか考え、なにが必要なのかを議論する
4	精読する本の紹介と選定	情報技術とその社会への影響に関する本の中で、インターネット白書や情報通信白書のような報告書、または履修者の興味に共通する本を複数紹介し、輪読する本と分担を決める
5	情報技術と社会環境（1）	近年話題となっている生成AIやロボット、IoT、ビッグデータなどの情報科学技術の現状と、展開に際しての問題点を議論する
6	情報技術と社会環境（2）	前回の議論を踏まえた自分なりの課題分析を論理的に説明するための準備を行う
7	学生発表（1）	前回の準備から、情報科学技術の展開に関する問題とその対応に関する発表を行い、互いの発表の過不足を議論する
8	学生発表（2）	前回の発表とそれに関する質疑応答、改善策に関する議論を踏まえ、再構築した発表を再度行い、改善を確認する
9	輪読と議論（1）	第4回で選定した本、および通信に関する白書について、関連技術や業界動向を掴むことを目的として輪読する。担当者によって1〜2章ずつ行う
10	輪読と議論（2）	前回に続き、輪読とその発表を行う
11	輪読と議論（3）	前回に続き、輪読とその発表を行う。また、輪読によって得られた知見、さらに調査が必要な点などについて確認する
12	研究テーマに関連する本の紹介	各々が自分の興味、あるいは研究テーマを意識しながら関連する本を選定し、簡単に発表する
13	他の人の研究テーマに関する質疑、提案	前回の発表をもとに、自分以外の研究テーマに関する質問や提案を行うことで、互いに新たな視点を得る
14	秋学期に向けての準備	秋学期に向けて、必要な知識やスキルを確認し、夏休みになにをするか自らが課題を設定する
1	イントロダクション	本演習の概要説明と導入、および秋学期の進め方についての説明と、履修者の興味やテーマについての議論をおこなう
2	インターネット概要	現在のインターネットの役割と環境、およびこれまでの変遷について学ぶ
3	インターネットの構成要素	インターネットを支える技術と構造、およびデジタル情報の特徴について学ぶ
4	インターネットのサービスと課題	インターネットで現在行われているサービスについて考察すると共に、顕在化している、あるいはこれから起こりうる課題について議論する
5	学生発表(1)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
6	IoT・ビッグデータ	具体的なテーマとして、センサデータの利活用の事例や国内外の動向について解を深めると共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
7	セキュリティ(1)	具体的なテーマとして、身近な情報セキュリティについて議論し、情報収集の仕方やインシデント時の対応などを確認する
8	セキュリティ(2)	インターネット上の情報セキュリティに関する諸問題や国内外の動向について学ぶと共に、課題の発見と解決に向けた議論をおこなう
9	グローバルガバナンス	情報科学技術に関連するデータガバナンス、あるいはサービスの規格化・標準化や、国際的なルール作りの方法や過程について学ぶ
10	学生発表(2)	履修者自身の経験や調査に基づく、問題意識や解決手法について発表をおこなう
11	テーマ演習(1)：テーマ選定	履修者の問題意識やテーマに基づき、具体的な事例やケースについて対話形式の議論によって理解を深め、個々の扱うテーマを定める
12	テーマ演習(2)：テーマ分析	選定したテーマについて、具体的な事例やケースを調べて理解を深め、個々の扱うテーマの問題や解決法の分析をおこなう
13	テーマ演習(3)：テーマ整理	個々の扱うテーマとその分析、および問題の整理を行なった上で、情報科学に関する技術的、あるいは運用や啓蒙など社会的にとり得るアプローチを考える
14	最終発表	履修者が、それぞれが情報科学技術の視点から、自身の問題発見・問題解決に向けた考察内容について、発表する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題として毎週「読書」し、そのメモを作成・提出および発表が求められる。

授業を受けるにあたって特別な前提知識は必要としない。課題やレポートについては、授業の中で適宜指示をする。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書は特に必要としない

【参考書】
必要な参考書などは授業の中で適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
成績は、授業における研究発表、および授業での学習状況などの平常点を総合して評価する。具体的には、授業における発言、議論、発表を50%、および読書課題などの平常点を50%を目安とした配分とする。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業に対応可能なPCおよびマイク等の周辺機器と、ネットワーク環境を準備する必要がある。

【Outline (in English)】
Course outline:
In this seminar, we learn about the basic concepts and composition techniques of computer networks, discuss the organisation and the solution about social problems regard to the internet. Moreover we also acquire the skill to represent their own opinions.
Learning Objectives:
The goal of this course is to provide students with an understanding of the basic concepts and configuration techniques of computer networks through reading and discussing a wide variety of books and documents, to learn about the discovery and solution of social problems, and to acquire the ability to communicate their own opinions.
Learning activities outside of classroom:
As an assignment, you are expected to make notes on the weekly readings.
The standard preparation and review time for this class is two hours each.
Grading Criteria:
Grading will be decided based on reading assignments (50%) and the discussions and presentations will account (50%).

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

大嶋　良明

サブタイトル：作りながら発想する未来志向の電子楽器
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
●テーマ
永遠のテーマは、「マルチメディアとネットワーク」ですが、2026年度の重点テーマは、次世代の電子楽器と演奏方式を作りながら学ぶこと。インタラクティブで未来志向のプロジェクトに取り組みます。
●授業運営の方針
「やりたくなったらまず動く」“Be Proactive!” これに尽きます。
●ゼミで取り組み可能な研究テーマや作品制作の例：
テキストマイニング、大規模言語モデル、ソーシャルメディア分析、コンピュータ音楽、立体音響、メディアアート、フィジカルコンピューティング、教育工学、IoT、画像認識、音声認識、機械学習、センサー応用、　など
●「何を学ぶのか？」から「何ができるのか？ 何のために学ぶか？」へ
これまでのゼミ生たちはWeb, サウンドデザイン、アニメ制作、映画監督、UX、情報科教員などの分野に進み、留学、大学院進学者もたくさん輩出しました。参考にして下さい。

【到達目標】
●目標
・コンピュータを自分の表現のために応用すること
・インターネットネット社会で自分を表現すること
・来るべきネット社会を構想すること
を通して
・社会の中で十分に役に立つもの
・長期的に世の中を見通す力
を身につけたいです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
●ICTの最先端を学びます。
●各自がテーマを決めて、個人研究あるいは作品制作に取組みます。
●学習成果の「見える化」を目指します。
●4年生は各自（あるいは連名）で、2 3年生は全員でひとつのテーマで、国際文化情報学会および学外での成果発表に向けて取組みます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション、学術活動の基盤	アカデミック・スキルズと研究環境を理解する。学習環境について全員で習得する。
2	ものづくりの基盤	ArduinoやRaspberry Piなどをベースに考える楽器作りの制作環境を整える。
3	サンプリングとドラムマシン：録音再生する楽器	Maestro Rhythm Kingなど初期のドラムマシンやMellotronやFairlightなどのサンプラー楽器が果たした役割とその影響を学ぶ。
4	電子ドラム：発振器とノイズによる打楽器のリズム	Simmonsに始まる電子音による打楽器の原理と構成法について学ぶ。
5	ものづくり探訪（1）：ドラムマシン	Arduinoベースのオープンソースのドラムマシン Bleep Drumの構成原理を学び、ドラムマシンの製作する。
6	ハモンドオルガン：歯車と電磁ピックアップによる波形合成	Mark Vailの”Hammond Organ: Beauty in B”を参考にハモンドオルガンの機構的特徴について詳しく検討する。必要に応じてLaurens Hammondによる関連特許についても言及する。
7	Oramics Machine：「フィルムに描いた」電子音楽	Mick GriersonとTim Boonの”The Oramics Machine and the Origins of British Electronic and Computer Music”を読み解き、Daphne Oramが取り組んだOramics Machineの構造と特徴について学ぶ。
8	ものづくり探訪（2）：加算合成	楽音の加算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するドローバー方式の電子オルガンを製作する。
9	楽器のユーザーインターフェース（1）：演奏するとはどういうことか？	アコーディオン、フルート、サクソフォンなどの楽器に着目し、種々の楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
10	楽器のユーザーインターフェース（2）：音楽表現のための電子音の制御	20世紀の電子楽器に着目しテルミン、VCS3, Moogなどの電子楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
11	演奏におけるArtefacts	音楽演奏におけるartefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
12	Moogシンセサイザ：音源とフィルタによる減算合成	Minimoogに代表されるような、フィルタと音量の時間変化で楽音を構成する電子楽器について学ぶ。
13	ものづくり探訪（3）：ミュージックシンセサイザ	楽音の減算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するシンセサイザーを製作する。
14	【学習のまとめ（構想発表）】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究の構想を深化させる。
15	John Chowningとコンピュータ音楽：電子音楽と音響表現の先駆的開拓者	コンピュータ音楽におけるJohn Chowingの果たした役割に注目し、FM音源方式によるミュージックシンセサイザの原理と実装について学ぶ。
16	ものづくり探訪（4）：FM音源	FM音源方式のポリフォニックシンセサイザーSynthino XMの構造を学び、ArduinoによりFM音源部と簡単なシークエンサ機能を製作する。
17	初音ミクと歌声音声合成	歌声音声合成とFMシンセサイザーの関連について学ぶ。ポケットミクやSynthesizer-Vを使って実際の楽音合成を試みる。

18	ゲーム音楽とケータイ：集積回路の夢	ゲーム音楽の仕組みについて学ぶ。とくにPSGやFM音源の果たした役割を学ぶ。
19	MIDIとMML: コンピュータ音楽の記法	電子楽器を制御する共通規格としてのMIDIとゲーム音楽で多用されたMML記法について学ぶ。
20	ものづくり探訪（5）：MIDIコントローラ	Sparkfun MIDI Shieldの構造を学び、ArduinoやRaspberry Piを使ったMIDIコントローラを製作する。
21	音楽を生成するAI	音楽を生成するAIについて学ぶ。試用結果を共有する。
22	【中間発表・学会発表準備】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究構想を深化させる。本中間報告会の成果により学会発表応募の形態を検討する。
23	電波で世界とつながること：BluetoothとWiFIインターネット	室内環境でのBluetoothとTCP/IP, UDP/IPでのデバイス接続を学ぶ。
24	周囲を交わること：環境情報の取り込み	距離、温度など各種センサー情報から周囲環境を読み取り音の表現に取り込む方法を学ぶ。
25	顕在化する身体性：内なる変化が生み出すもの	ジェスチャー、姿勢、心拍、声などの生体情報を音の表現に取り込む方法を学ぶ
26	空間系の音響効果：空間の意識と奥行きの演出	リバーブによる残響効果やマルチスピーカーによる立体音響などによる音響空間の構成法を学ぶ。
27	ものづくり探訪（6）：総合演習	年間を通じて取り組んだものづくり実習の成果を統合したデモを製作する。
28	【期末発表】2026年度のまとめ：学習成果の見える化	学習内容の総まとめと公開コンテンツ化を目指す。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献講読、プロジェクト活動、自主的な学習など授業時間外に求められる学習行動はとても大事です。積極的に活動してください。
とくに学外での貴重な学びの機会として学術大会や学会イベントがあります。まずは聴講参加を心がけてください。そしてできれば研究発表できるようになりたいです。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
今年度にとりあげるテーマの教科書は指定しない。

【参考書】
必要に応じて提示します。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【コンピュータ音楽】Curtis Roads著 ; 青柳龍也 [ほか] 訳、「コンピュータ音楽 : 歴史・テクノロジー・アート」、東京電機大学出版局(2001)、ISBN: 978-4501532109
【何か作りたい！ でも何を作ろう…？】Karen Wilkinson(著), Mike Petrich(著), 金井哲夫(訳)、「ティンカリングをはじめよう ―アート、サイエンス、テクノロジーの交差点で作って遊ぶ」、オライリージャパン(2015)、ISBN:978-4873117263
【Arduino＋音楽】
中西宜人、「Arduinoではじめる手作り電子楽器」、工学社(2015)、ISBN: ISBN978-4-7775-1916-3
【モノづくり＋デバイスアート】青木 直史 (著)、「Arduino と Processingではじめるプロトタイピング入門」、講談社(2017)、ISBN: 978-4061565692
小林茂(著)、「Prototyping Lab 第2版 ―「作りながら考える」ためのArduino実践レシピ」、オライリージャパン(2017)、ISBN:978-4873117898
【電子楽器の開発】三枝文夫、「電子楽器ー過去｜現在｜未来」、ミュージックトレード社（2021）、ISBN 978-4908357268
【Pure Data】
美山千香士、『Pure Data チュートリアル＆リファレンス』、ワークスコーポレーション (2013) ISBN: 978-4862671424
松村 誠一郎、『Pd Recipe Book -Pure Dataではじめるサウンドプログラミング』、ビー・エヌ・エヌ新社(2012) ISBN: 978-4861007804
中村隆之、『「PureData」ではじめるサウンド・プログラミング―「音」「映像」のための「ビジュアル・プログラミング」言語』、工学社 (2015) ISBN: 978-4777518821
【音響モデリング】Andy Farnell, "Designing Sound," MIT Press(2010), ISBN:978-0262014410
【FMシンセサイザーの楽音合成】高山博、FMシンセのあたらしいトリセツ、リットーミュージック (2018)、ISBN 978-4845632725
【ハモンドオルガンとポピュラー音楽】Markn Vail, "The Hammond Organ: Beauty in the B", Backbeat Books (2004), ISBN 978-0879307059
【楽器の発明とその文化的意義】
Frode Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【成績評価の方法と基準】
●成績評価方法　セメスタ毎に総合評価します。欠席は認めません。止むを得ない事情で欠席する場合には必ず申し出てください。また講義内容を復習して次の授業までに実習課題を済ませておいてください。
Proactiveな運営方針にもとづき、学生個人による制作・研究（40%）、研究室全体で取り組むグループ活動(40%)、学会参加、作品応募、分野知識の外部実践（情報、データサイエンス、英語関連など)(20%)をすべて総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
最後にまとめとしての学会発表、あるいは何らかの作品制作（狭い意味での表現に限らず、システム・プログラム等でもよい）と制作レポートを課します。

【学生の意見等からの気づき】
（1）演習形式であるため、授業アンケートのような期末アンケートではその場の学習ニーズに対応できません。面談による個別指導によってこれまでも対応してきており、今後もこの方針を継続します。面談を通じての個別の研究指導とゼミでの学びをうまく組み合わせて効率的な学びをサポートできるよう配慮します。
（2）意欲ある学生の参加を歓迎します。4年次からの研究や作品制作も可能ですので、演習変更希望の場合は事前に相談ください。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミは国際文化学部情報セミナー室（BT#0704）にて行います。
研究活動では情報準備室（BT#0703）のネットワーク、サーバ、マルチメディア環境を併せて使用します。

【その他の重要事項】
●履修上の注意
まず手を動かす、自分で調べる、しっかり聞く、物怖じせずに発言する。そこから文化と情報を発想します。自分ひとりでは解らないこともありますから、担当教員と面談を通じて指導を受ける、あるいは作品制作について助言を受けるなど風通しの良いコミュニケーションを心がけてください。
また、
・情報系、メディア系専門科目の3〜4年次での履修
・情報処理・メディア・データサイエンス関連の検定資格取得
・継続的な英語力養成の必要性
を明言します。
研究室活動と関連の深い科目として：
・「コンピュータ音楽と音声情報処理」Pure Dataによる音楽制作
・「メディアアートの世界」Processingによるアニメーション作品制作
・「マルチメディア表現法」写真技法、大判印刷、レーザー加工機による作品制作
・「情報アプリケーションII」Arduino, ラズパイ, Jetsonによるモノづくり
・「多文化情報メディア論IA」機械学習、テキストマイニング、メディアデータ分析
・「多文化情報メディア論IB」インターネット、ソーシャルメディアの分析

を推奨します。

【教員の実務経験】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野の経験がある。

【Outline (in English)】
Course Outline: The course deals with designing and developing electronic musical instruments for the future.
Learning Objectives: his course is to help acquire basic knowledge and design skills for computer-based electronic musical instruments with interactive functionality and sensor fusion.
In addition to classroom activities and regular assignments, all students are encouraged to attend academic conferences and workshops, so as to broaden their views and strengthen area knowledge and develop programming skills.
Web-based tools are provided as the learning platform to support reflection and active learning.
The average study time outside of class per week would be roughly 4 hours.
Grading Policy: Individual research (40%), Lab activities (40%), Academic or area-specific activities(20%) 60% of overall evaluation score is required for academic credit.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

大嶋　良明

サブタイトル：作りながら発想する未来志向の電子楽器
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
●テーマ
永遠のテーマは、「マルチメディアとネットワーク」ですが、2026年度の重点テーマは、次世代の電子楽器と演奏方式を作りながら学ぶこと。インタラクティブで未来志向のプロジェクトに取り組みます。
●授業運営の方針
「やりたくなったらまず動く」“Be Proactive!” これに尽きます。
●ゼミで取り組み可能な研究テーマや作品制作の例：
テキストマイニング、大規模言語モデル、ソーシャルメディア分析、コンピュータ音楽、立体音響、メディアアート、フィジカルコンピューティング、教育工学、IoT、画像認識、音声認識、機械学習、センサー応用、　など
●「何を学ぶのか？」から「何ができるのか？ 何のために学ぶか？」へ
これまでのゼミ生たちはWeb, サウンドデザイン、アニメ制作、映画監督、UX、情報科教員などの分野に進み、留学、大学院進学者もたくさん輩出しました。参考にして下さい。

【到達目標】
●目標
・コンピュータを自分の表現のために応用すること
・インターネットネット社会で自分を表現すること
・来るべきネット社会を構想すること
を通して
・社会の中で十分に役に立つもの
・長期的に世の中を見通す力
を身につけたいです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
●ICTの最先端を学びます。
●各自がテーマを決めて、個人研究あるいは作品制作に取組みます。
●学習成果の「見える化」を目指します。
●4年生は各自（あるいは連名）で、2 3年生は全員でひとつのテーマで、国際文化情報学会および学外での成果発表に向けて取組みます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション、学術活動の基盤	アカデミック・スキルズと研究環境を理解する。学習環境について全員で習得する。
2	ものづくりの基盤	ArduinoやRaspberry Piなどをベースに考える楽器作りの制作環境を整える。
3	サンプリングとドラムマシン：録音再生する楽器	Maestro Rhythm Kingなど初期のドラムマシンやMellotronやFairlightなどのサンプラー楽器が果たした役割とその影響を学ぶ。
4	電子ドラム：発振器とノイズによる打楽器のリズム	Simmonsに始まる電子音による打楽器の原理と構成法について学ぶ。
5	ものづくり探訪（1）：ドラムマシン	Arduinoベースのオープンソースのドラムマシン Bleep Drumの構成原理を学び、ドラムマシンの製作する。
6	ハモンドオルガン：歯車と電磁ピックアップによる波形合成	Mark Vailの”Hammond Organ: Beauty in B”を参考にハモンドオルガンの機構的特徴について詳しく検討する。必要に応じてLaurens Hammondによる関連特許についても言及する。
7	Oramics Machine：「フィルムに描いた」電子音楽	Mick GriersonとTim Boonの”The Oramics Machine and the Origins of British Electronic and Computer Music”を読み解き、Daphne Oramが取り組んだOramics Machineの構造と特徴について学ぶ。
8	ものづくり探訪（2）：加算合成	楽音の加算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するドローバー方式の電子オルガンを製作する。
9	楽器のユーザーインターフェース（1）：演奏するとはどういうことか？	アコーディオン、フルート、サクソフォンなどの楽器に着目し、種々の楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
10	楽器のユーザーインターフェース（2）：音楽表現のための電子音の制御	20世紀の電子楽器に着目しテルミン、VCS3, Moogなどの電子楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
11	演奏におけるArtefacts	音楽演奏におけるartefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
12	Moogシンセサイザ：音源とフィルタによる減算合成	Minimoogに代表されるような、フィルタと音量の時間変化で楽音を構成する電子楽器について学ぶ。
13	ものづくり探訪（3）：ミュージックシンセサイザ	楽音の減算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するシンセサイザーを製作する。
14	【学習のまとめ（構想発表）】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究の構想を深化させる。
15	John Chowningとコンピュータ音楽：電子音楽と音響表現の先駆的開拓者	コンピュータ音楽におけるJohn Chowingの果たした役割に注目し、FM音源方式によるミュージックシンセサイザの原理と実装について学ぶ。
16	ものづくり探訪（4）：FM音源	FM音源方式のポリフォニックシンセサイザーSynthino XMの構造を学び、ArduinoによりFM音源部と簡単なシークエンサ機能を製作する。
17	初音ミクと歌声音声合成	歌声音声合成とFMシンセサイザーの関連について学ぶ。ポケットミクやSynthesizer-Vを使って実際の楽音合成を試みる。

18	ゲーム音楽とケータイ：集積回路の夢	ゲーム音楽の仕組みについて学ぶ。とくにPSGやFM音源の果たした役割を学ぶ。
19	MIDIとMML: コンピュータ音楽の記法	電子楽器を制御する共通規格としてのMIDIとゲーム音楽で多用されたMML記法について学ぶ。
20	ものづくり探訪（5）：MIDIコントローラ	Sparkfun MIDI Shieldの構造を学び、ArduinoやRaspberry Piを使ったMIDIコントローラを製作する。
21	音楽を生成するAI	音楽を生成するAIについて学ぶ。試用結果を共有する。
22	【中間発表・学会発表準備】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究構想を深化させる。本中間報告会の成果により学会発表応募の形態を検討する。
23	電波で世界とつながること：BluetoothとWiFIインターネット	室内環境でのBluetoothとTCP/IP, UDP/IPでのデバイス接続を学ぶ。
24	周囲を交わること：環境情報の取り込み	距離、温度など各種センサー情報から周囲環境を読み取り音の表現に取り込む方法を学ぶ。
25	顕在化する身体性：内なる変化が生み出すもの	ジェスチャー、姿勢、心拍、声などの生体情報を音の表現に取り込む方法を学ぶ
26	空間系の音響効果：空間の意識と奥行きの演出	リバーブによる残響効果やマルチスピーカーによる立体音響などによる音響空間の構成法を学ぶ。
27	ものづくり探訪（6）：総合演習	年間を通じて取り組んだものづくり実習の成果を統合したデモを製作する。
28	【期末発表】2026年度のまとめ：学習成果の見える化	学習内容の総まとめと公開コンテンツ化を目指す。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献講読、プロジェクト活動、自主的な学習など授業時間外に求められる学習行動はとても大事です。積極的に活動してください。
とくに学外での貴重な学びの機会として学術大会や学会イベントがあります。まずは聴講参加を心がけてください。そしてできれば研究発表できるようになりたいです。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
今年度にとりあげるテーマの教科書は指定しない。

【参考書】
必要に応じて提示します。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【コンピュータ音楽】Curtis Roads著 ; 青柳龍也 [ほか] 訳、「コンピュータ音楽 : 歴史・テクノロジー・アート」、東京電機大学出版局(2001)、ISBN: 978-4501532109
【何か作りたい！ でも何を作ろう…？】Karen Wilkinson(著), Mike Petrich(著), 金井哲夫(訳)、「ティンカリングをはじめよう ―アート、サイエンス、テクノロジーの交差点で作って遊ぶ」、オライリージャパン(2015)、ISBN:978-4873117263
【Arduino＋音楽】
中西宜人、「Arduinoではじめる手作り電子楽器」、工学社(2015)、ISBN: ISBN978-4-7775-1916-3
【モノづくり＋デバイスアート】青木 直史 (著)、「Arduino と Processingではじめるプロトタイピング入門」、講談社(2017)、ISBN: 978-4061565692
小林茂(著)、「Prototyping Lab 第2版 ―「作りながら考える」ためのArduino実践レシピ」、オライリージャパン(2017)、ISBN:978-4873117898
【電子楽器の開発】三枝文夫、「電子楽器ー過去｜現在｜未来」、ミュージックトレード社（2021）、ISBN 978-4908357268
【Pure Data】
美山千香士、『Pure Data チュートリアル＆リファレンス』、ワークスコーポレーション (2013) ISBN: 978-4862671424
松村 誠一郎、『Pd Recipe Book -Pure Dataではじめるサウンドプログラミング』、ビー・エヌ・エヌ新社(2012) ISBN: 978-4861007804
中村隆之、『「PureData」ではじめるサウンド・プログラミング―「音」「映像」のための「ビジュアル・プログラミング」言語』、工学社 (2015) ISBN: 978-4777518821
【音響モデリング】Andy Farnell, "Designing Sound," MIT Press(2010), ISBN:978-0262014410
【FMシンセサイザーの楽音合成】高山博、FMシンセのあたらしいトリセツ、リットーミュージック (2018)、ISBN 978-4845632725
【ハモンドオルガンとポピュラー音楽】Markn Vail, "The Hammond Organ: Beauty in the B", Backbeat Books (2004), ISBN 978-0879307059
【楽器の発明とその文化的意義】
Frode Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【成績評価の方法と基準】
●成績評価方法　セメスタ毎に総合評価します。欠席は認めません。止むを得ない事情で欠席する場合には必ず申し出てください。また講義内容を復習して次の授業までに実習課題を済ませておいてください。
Proactiveな運営方針にもとづき、学生個人による制作・研究（40%）、研究室全体で取り組むグループ活動(40%)、学会参加、作品応募、分野知識の外部実践（情報、データサイエンス、英語関連など)(20%)をすべて総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
最後にまとめとしての学会発表、あるいは何らかの作品制作（狭い意味での表現に限らず、システム・プログラム等でもよい）と制作レポートを課します。

【学生の意見等からの気づき】
（1）演習形式であるため、授業アンケートのような期末アンケートではその場の学習ニーズに対応できません。面談による個別指導によってこれまでも対応してきており、今後もこの方針を継続します。面談を通じての個別の研究指導とゼミでの学びをうまく組み合わせて効率的な学びをサポートできるよう配慮します。
（2）意欲ある学生の参加を歓迎します。4年次からの研究や作品制作も可能ですので、演習変更希望の場合は事前に相談ください。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミは国際文化学部情報セミナー室（BT#0704）にて行います。
研究活動では情報準備室（BT#0703）のネットワーク、サーバ、マルチメディア環境を併せて使用します。

【その他の重要事項】
●履修上の注意
まず手を動かす、自分で調べる、しっかり聞く、物怖じせずに発言する。そこから文化と情報を発想します。自分ひとりでは解らないこともありますから、担当教員と面談を通じて指導を受ける、あるいは作品制作について助言を受けるなど風通しの良いコミュニケーションを心がけてください。
また、
・情報系、メディア系専門科目の3〜4年次での履修
・情報処理・メディア・データサイエンス関連の検定資格取得
・継続的な英語力養成の必要性
を明言します。
研究室活動と関連の深い科目として：
・「コンピュータ音楽と音声情報処理」Pure Dataによる音楽制作
・「メディアアートの世界」Processingによるアニメーション作品制作
・「マルチメディア表現法」写真技法、大判印刷、レーザー加工機による作品制作
・「情報アプリケーションII」Arduino, ラズパイ, Jetsonによるモノづくり
・「多文化情報メディア論IA」機械学習、テキストマイニング、メディアデータ分析
・「多文化情報メディア論IB」インターネット、ソーシャルメディアの分析

を推奨します。

【教員の実務経験】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野の経験がある。

【Outline (in English)】
Course Outline: The course deals with designing and developing electronic musical instruments for the future.
Learning Objectives: his course is to help acquire basic knowledge and design skills for computer-based electronic musical instruments with interactive functionality and sensor fusion.
In addition to classroom activities and regular assignments, all students are encouraged to attend academic conferences and workshops, so as to broaden their views and strengthen area knowledge and develop programming skills.
Web-based tools are provided as the learning platform to support reflection and active learning.
The average study time outside of class per week would be roughly 4 hours.
Grading Policy: Individual research (40%), Lab activities (40%), Academic or area-specific activities(20%) 60% of overall evaluation score is required for academic credit.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

大嶋　良明

サブタイトル：作りながら発想する未来志向の電子楽器
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
●テーマ
永遠のテーマは、「マルチメディアとネットワーク」ですが、2026年度の重点テーマは、次世代の電子楽器と演奏方式を作りながら学ぶこと。インタラクティブで未来志向のプロジェクトに取り組みます。
●授業運営の方針
「やりたくなったらまず動く」“Be Proactive!” これに尽きます。
●ゼミで取り組み可能な研究テーマや作品制作の例：
テキストマイニング、大規模言語モデル、ソーシャルメディア分析、コンピュータ音楽、立体音響、メディアアート、フィジカルコンピューティング、教育工学、IoT、画像認識、音声認識、機械学習、センサー応用、　など
●「何を学ぶのか？」から「何ができるのか？ 何のために学ぶか？」へ
これまでのゼミ生たちはWeb, サウンドデザイン、アニメ制作、映画監督、UX、情報科教員などの分野に進み、留学、大学院進学者もたくさん輩出しました。参考にして下さい。

【到達目標】
●目標
・コンピュータを自分の表現のために応用すること
・インターネットネット社会で自分を表現すること
・来るべきネット社会を構想すること
を通して
・社会の中で十分に役に立つもの
・長期的に世の中を見通す力
を身につけたいです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
●ICTの最先端を学びます。
●各自がテーマを決めて、個人研究あるいは作品制作に取組みます。
●学習成果の「見える化」を目指します。
●4年生は各自（あるいは連名）で、2 3年生は全員でひとつのテーマで、国際文化情報学会および学外での成果発表に向けて取組みます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション、学術活動の基盤	アカデミック・スキルズと研究環境を理解する。学習環境について全員で習得する。
2	ものづくりの基盤	ArduinoやRaspberry Piなどをベースに考える楽器作りの制作環境を整える。
3	サンプリングとドラムマシン：録音再生する楽器	Maestro Rhythm Kingなど初期のドラムマシンやMellotronやFairlightなどのサンプラー楽器が果たした役割とその影響を学ぶ。
4	電子ドラム：発振器とノイズによる打楽器のリズム	Simmonsに始まる電子音による打楽器の原理と構成法について学ぶ。
5	ものづくり探訪（1）：ドラムマシン	Arduinoベースのオープンソースのドラムマシン Bleep Drumの構成原理を学び、ドラムマシンの製作する。
6	ハモンドオルガン：歯車と電磁ピックアップによる波形合成	Mark Vailの”Hammond Organ: Beauty in B”を参考にハモンドオルガンの機構的特徴について詳しく検討する。必要に応じてLaurens Hammondによる関連特許についても言及する。
7	Oramics Machine：「フィルムに描いた」電子音楽	Mick GriersonとTim Boonの”The Oramics Machine and the Origins of British Electronic and Computer Music”を読み解き、Daphne Oramが取り組んだOramics Machineの構造と特徴について学ぶ。
8	ものづくり探訪（2）：加算合成	楽音の加算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するドローバー方式の電子オルガンを製作する。
9	楽器のユーザーインターフェース（1）：演奏するとはどういうことか？	アコーディオン、フルート、サクソフォンなどの楽器に着目し、種々の楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
10	楽器のユーザーインターフェース（2）：音楽表現のための電子音の制御	20世紀の電子楽器に着目しテルミン、VCS3, Moogなどの電子楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
11	演奏におけるArtefacts	音楽演奏におけるartefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
12	Moogシンセサイザ：音源とフィルタによる減算合成	Minimoogに代表されるような、フィルタと音量の時間変化で楽音を構成する電子楽器について学ぶ。
13	ものづくり探訪（3）：ミュージックシンセサイザ	楽音の減算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するシンセサイザーを製作する。
14	【学習のまとめ（構想発表）】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究の構想を深化させる。
15	John Chowningとコンピュータ音楽：電子音楽と音響表現の先駆的開拓者	コンピュータ音楽におけるJohn Chowingの果たした役割に注目し、FM音源方式によるミュージックシンセサイザの原理と実装について学ぶ。
16	ものづくり探訪（4）：FM音源	FM音源方式のポリフォニックシンセサイザーSynthino XMの構造を学び、ArduinoによりFM音源部と簡単なシークエンサ機能を製作する。
17	初音ミクと歌声音声合成	歌声音声合成とFMシンセサイザーの関連について学ぶ。ポケットミクやSynthesizer-Vを使って実際の楽音合成を試みる。

18	ゲーム音楽とケータイ：集積回路の夢	ゲーム音楽の仕組みについて学ぶ。とくにPSGやFM音源の果たした役割を学ぶ。
19	MIDIとMML: コンピュータ音楽の記法	電子楽器を制御する共通規格としてのMIDIとゲーム音楽で多用されたMML記法について学ぶ。
20	ものづくり探訪（5）：MIDIコントローラ	Sparkfun MIDI Shieldの構造を学び、ArduinoやRaspberry Piを使ったMIDIコントローラを製作する。
21	音楽を生成するAI	音楽を生成するAIについて学ぶ。試用結果を共有する。
22	【中間発表・学会発表準備】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究構想を深化させる。本中間報告会の成果により学会発表応募の形態を検討する。
23	電波で世界とつながること：BluetoothとWiFIインターネット	室内環境でのBluetoothとTCP/IP, UDP/IPでのデバイス接続を学ぶ。
24	周囲を交わること：環境情報の取り込み	距離、温度など各種センサー情報から周囲環境を読み取り音の表現に取り込む方法を学ぶ。
25	顕在化する身体性：内なる変化が生み出すもの	ジェスチャー、姿勢、心拍、声などの生体情報を音の表現に取り込む方法を学ぶ
26	空間系の音響効果：空間の意識と奥行きの演出	リバーブによる残響効果やマルチスピーカーによる立体音響などによる音響空間の構成法を学ぶ。
27	ものづくり探訪（6）：総合演習	年間を通じて取り組んだものづくり実習の成果を統合したデモを製作する。
28	【期末発表】2026年度のまとめ：学習成果の見える化	学習内容の総まとめと公開コンテンツ化を目指す。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献講読、プロジェクト活動、自主的な学習など授業時間外に求められる学習行動はとても大事です。積極的に活動してください。
とくに学外での貴重な学びの機会として学術大会や学会イベントがあります。まずは聴講参加を心がけてください。そしてできれば研究発表できるようになりたいです。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
今年度にとりあげるテーマの教科書は指定しない。

【参考書】
必要に応じて提示します。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【コンピュータ音楽】Curtis Roads著 ; 青柳龍也 [ほか] 訳、「コンピュータ音楽 : 歴史・テクノロジー・アート」、東京電機大学出版局(2001)、ISBN: 978-4501532109
【何か作りたい！ でも何を作ろう…？】Karen Wilkinson(著), Mike Petrich(著), 金井哲夫(訳)、「ティンカリングをはじめよう ―アート、サイエンス、テクノロジーの交差点で作って遊ぶ」、オライリージャパン(2015)、ISBN:978-4873117263
【Arduino＋音楽】
中西宜人、「Arduinoではじめる手作り電子楽器」、工学社(2015)、ISBN: ISBN978-4-7775-1916-3
【モノづくり＋デバイスアート】青木 直史 (著)、「Arduino と Processingではじめるプロトタイピング入門」、講談社(2017)、ISBN: 978-4061565692
小林茂(著)、「Prototyping Lab 第2版 ―「作りながら考える」ためのArduino実践レシピ」、オライリージャパン(2017)、ISBN:978-4873117898
【電子楽器の開発】三枝文夫、「電子楽器ー過去｜現在｜未来」、ミュージックトレード社（2021）、ISBN 978-4908357268
【Pure Data】
美山千香士、『Pure Data チュートリアル＆リファレンス』、ワークスコーポレーション (2013) ISBN: 978-4862671424
松村 誠一郎、『Pd Recipe Book -Pure Dataではじめるサウンドプログラミング』、ビー・エヌ・エヌ新社(2012) ISBN: 978-4861007804
中村隆之、『「PureData」ではじめるサウンド・プログラミング―「音」「映像」のための「ビジュアル・プログラミング」言語』、工学社 (2015) ISBN: 978-4777518821
【音響モデリング】Andy Farnell, "Designing Sound," MIT Press(2010), ISBN:978-0262014410
【FMシンセサイザーの楽音合成】高山博、FMシンセのあたらしいトリセツ、リットーミュージック (2018)、ISBN 978-4845632725
【ハモンドオルガンとポピュラー音楽】Markn Vail, "The Hammond Organ: Beauty in the B", Backbeat Books (2004), ISBN 978-0879307059
【楽器の発明とその文化的意義】
Frode Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【成績評価の方法と基準】
●成績評価方法　セメスタ毎に総合評価します。欠席は認めません。止むを得ない事情で欠席する場合には必ず申し出てください。また講義内容を復習して次の授業までに実習課題を済ませておいてください。
Proactiveな運営方針にもとづき、学生個人による制作・研究（40%）、研究室全体で取り組むグループ活動(40%)、学会参加、作品応募、分野知識の外部実践（情報、データサイエンス、英語関連など)(20%)をすべて総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
最後にまとめとしての学会発表、あるいは何らかの作品制作（狭い意味での表現に限らず、システム・プログラム等でもよい）と制作レポートを課します。

【学生の意見等からの気づき】
（1）演習形式であるため、授業アンケートのような期末アンケートではその場の学習ニーズに対応できません。面談による個別指導によってこれまでも対応してきており、今後もこの方針を継続します。面談を通じての個別の研究指導とゼミでの学びをうまく組み合わせて効率的な学びをサポートできるよう配慮します。
（2）意欲ある学生の参加を歓迎します。4年次からの研究や作品制作も可能ですので、演習変更希望の場合は事前に相談ください。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミは国際文化学部情報セミナー室（BT#0704）にて行います。
研究活動では情報準備室（BT#0703）のネットワーク、サーバ、マルチメディア環境を併せて使用します。

【その他の重要事項】
●履修上の注意
まず手を動かす、自分で調べる、しっかり聞く、物怖じせずに発言する。そこから文化と情報を発想します。自分ひとりでは解らないこともありますから、担当教員と面談を通じて指導を受ける、あるいは作品制作について助言を受けるなど風通しの良いコミュニケーションを心がけてください。
また、
・情報系、メディア系専門科目の3〜4年次での履修
・情報処理・メディア・データサイエンス関連の検定資格取得
・継続的な英語力養成の必要性
を明言します。
研究室活動と関連の深い科目として：
・「コンピュータ音楽と音声情報処理」Pure Dataによる音楽制作
・「メディアアートの世界」Processingによるアニメーション作品制作
・「マルチメディア表現法」写真技法、大判印刷、レーザー加工機による作品制作
・「情報アプリケーションII」Arduino, ラズパイ, Jetsonによるモノづくり
・「多文化情報メディア論IA」機械学習、テキストマイニング、メディアデータ分析
・「多文化情報メディア論IB」インターネット、ソーシャルメディアの分析

を推奨します。

【教員の実務経験】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野の経験がある。

【Outline (in English)】
Course Outline: The course deals with designing and developing electronic musical instruments for the future.
Learning Objectives: his course is to help acquire basic knowledge and design skills for computer-based electronic musical instruments with interactive functionality and sensor fusion.
In addition to classroom activities and regular assignments, all students are encouraged to attend academic conferences and workshops, so as to broaden their views and strengthen area knowledge and develop programming skills.
Web-based tools are provided as the learning platform to support reflection and active learning.
The average study time outside of class per week would be roughly 4 hours.
Grading Policy: Individual research (40%), Lab activities (40%), Academic or area-specific activities(20%) 60% of overall evaluation score is required for academic credit.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

大嶋　良明

サブタイトル：作りながら発想する未来志向の電子楽器
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
●テーマ
永遠のテーマは、「マルチメディアとネットワーク」ですが、2026年度の重点テーマは、次世代の電子楽器と演奏方式を作りながら学ぶこと。インタラクティブで未来志向のプロジェクトに取り組みます。
●授業運営の方針
「やりたくなったらまず動く」“Be Proactive!” これに尽きます。
●ゼミで取り組み可能な研究テーマや作品制作の例：
テキストマイニング、大規模言語モデル、ソーシャルメディア分析、コンピュータ音楽、立体音響、メディアアート、フィジカルコンピューティング、教育工学、IoT、画像認識、音声認識、機械学習、センサー応用、　など
●「何を学ぶのか？」から「何ができるのか？ 何のために学ぶか？」へ
これまでのゼミ生たちはWeb, サウンドデザイン、アニメ制作、映画監督、UX、情報科教員などの分野に進み、留学、大学院進学者もたくさん輩出しました。参考にして下さい。

【到達目標】
●目標
・コンピュータを自分の表現のために応用すること
・インターネットネット社会で自分を表現すること
・来るべきネット社会を構想すること
を通して
・社会の中で十分に役に立つもの
・長期的に世の中を見通す力
を身につけたいです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
●ICTの最先端を学びます。
●各自がテーマを決めて、個人研究あるいは作品制作に取組みます。
●学習成果の「見える化」を目指します。
●4年生は各自（あるいは連名）で、2 3年生は全員でひとつのテーマで、国際文化情報学会および学外での成果発表に向けて取組みます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション、学術活動の基盤	アカデミック・スキルズと研究環境を理解する。学習環境について全員で習得する。
2	ものづくりの基盤	ArduinoやRaspberry Piなどをベースに考える楽器作りの制作環境を整える。
3	サンプリングとドラムマシン：録音再生する楽器	Maestro Rhythm Kingなど初期のドラムマシンやMellotronやFairlightなどのサンプラー楽器が果たした役割とその影響を学ぶ。
4	電子ドラム：発振器とノイズによる打楽器のリズム	Simmonsに始まる電子音による打楽器の原理と構成法について学ぶ。
5	ものづくり探訪（1）：ドラムマシン	Arduinoベースのオープンソースのドラムマシン Bleep Drumの構成原理を学び、ドラムマシンの製作する。
6	ハモンドオルガン：歯車と電磁ピックアップによる波形合成	Mark Vailの”Hammond Organ: Beauty in B”を参考にハモンドオルガンの機構的特徴について詳しく検討する。必要に応じてLaurens Hammondによる関連特許についても言及する。
7	Oramics Machine：「フィルムに描いた」電子音楽	Mick GriersonとTim Boonの”The Oramics Machine and the Origins of British Electronic and Computer Music”を読み解き、Daphne Oramが取り組んだOramics Machineの構造と特徴について学ぶ。
8	ものづくり探訪（2）：加算合成	楽音の加算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するドローバー方式の電子オルガンを製作する。
9	楽器のユーザーインターフェース（1）：演奏するとはどういうことか？	アコーディオン、フルート、サクソフォンなどの楽器に着目し、種々の楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
10	楽器のユーザーインターフェース（2）：音楽表現のための電子音の制御	20世紀の電子楽器に着目しテルミン、VCS3, Moogなどの電子楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
11	演奏におけるArtefacts	音楽演奏におけるartefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
12	Moogシンセサイザ：音源とフィルタによる減算合成	Minimoogに代表されるような、フィルタと音量の時間変化で楽音を構成する電子楽器について学ぶ。
13	ものづくり探訪（3）：ミュージックシンセサイザ	楽音の減算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するシンセサイザーを製作する。
14	【学習のまとめ（構想発表）】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究の構想を深化させる。
15	John Chowningとコンピュータ音楽：電子音楽と音響表現の先駆的開拓者	コンピュータ音楽におけるJohn Chowingの果たした役割に注目し、FM音源方式によるミュージックシンセサイザの原理と実装について学ぶ。
16	ものづくり探訪（4）：FM音源	FM音源方式のポリフォニックシンセサイザーSynthino XMの構造を学び、ArduinoによりFM音源部と簡単なシークエンサ機能を製作する。
17	初音ミクと歌声音声合成	歌声音声合成とFMシンセサイザーの関連について学ぶ。ポケットミクやSynthesizer-Vを使って実際の楽音合成を試みる。

18	ゲーム音楽とケータイ：集積回路の夢	ゲーム音楽の仕組みについて学ぶ。とくにPSGやFM音源の果たした役割を学ぶ。
19	MIDIとMML: コンピュータ音楽の記法	電子楽器を制御する共通規格としてのMIDIとゲーム音楽で多用されたMML記法について学ぶ。
20	ものづくり探訪（5）：MIDIコントローラ	Sparkfun MIDI Shieldの構造を学び、ArduinoやRaspberry Piを使ったMIDIコントローラを製作する。
21	音楽を生成するAI	音楽を生成するAIについて学ぶ。試用結果を共有する。
22	【中間発表・学会発表準備】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究構想を深化させる。本中間報告会の成果により学会発表応募の形態を検討する。
23	電波で世界とつながること：BluetoothとWiFIインターネット	室内環境でのBluetoothとTCP/IP, UDP/IPでのデバイス接続を学ぶ。
24	周囲を交わること：環境情報の取り込み	距離、温度など各種センサー情報から周囲環境を読み取り音の表現に取り込む方法を学ぶ。
25	顕在化する身体性：内なる変化が生み出すもの	ジェスチャー、姿勢、心拍、声などの生体情報を音の表現に取り込む方法を学ぶ
26	空間系の音響効果：空間の意識と奥行きの演出	リバーブによる残響効果やマルチスピーカーによる立体音響などによる音響空間の構成法を学ぶ。
27	ものづくり探訪（6）：総合演習	年間を通じて取り組んだものづくり実習の成果を統合したデモを製作する。
28	【期末発表】2026年度のまとめ：学習成果の見える化	学習内容の総まとめと公開コンテンツ化を目指す。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献講読、プロジェクト活動、自主的な学習など授業時間外に求められる学習行動はとても大事です。積極的に活動してください。
とくに学外での貴重な学びの機会として学術大会や学会イベントがあります。まずは聴講参加を心がけてください。そしてできれば研究発表できるようになりたいです。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
今年度にとりあげるテーマの教科書は指定しない。

【参考書】
必要に応じて提示します。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【コンピュータ音楽】Curtis Roads著 ; 青柳龍也 [ほか] 訳、「コンピュータ音楽 : 歴史・テクノロジー・アート」、東京電機大学出版局(2001)、ISBN: 978-4501532109
【何か作りたい！ でも何を作ろう…？】Karen Wilkinson(著), Mike Petrich(著), 金井哲夫(訳)、「ティンカリングをはじめよう ―アート、サイエンス、テクノロジーの交差点で作って遊ぶ」、オライリージャパン(2015)、ISBN:978-4873117263
【Arduino＋音楽】
中西宜人、「Arduinoではじめる手作り電子楽器」、工学社(2015)、ISBN: ISBN978-4-7775-1916-3
【モノづくり＋デバイスアート】青木 直史 (著)、「Arduino と Processingではじめるプロトタイピング入門」、講談社(2017)、ISBN: 978-4061565692
小林茂(著)、「Prototyping Lab 第2版 ―「作りながら考える」ためのArduino実践レシピ」、オライリージャパン(2017)、ISBN:978-4873117898
【電子楽器の開発】三枝文夫、「電子楽器ー過去｜現在｜未来」、ミュージックトレード社（2021）、ISBN 978-4908357268
【Pure Data】
美山千香士、『Pure Data チュートリアル＆リファレンス』、ワークスコーポレーション (2013) ISBN: 978-4862671424
松村 誠一郎、『Pd Recipe Book -Pure Dataではじめるサウンドプログラミング』、ビー・エヌ・エヌ新社(2012) ISBN: 978-4861007804
中村隆之、『「PureData」ではじめるサウンド・プログラミング―「音」「映像」のための「ビジュアル・プログラミング」言語』、工学社 (2015) ISBN: 978-4777518821
【音響モデリング】Andy Farnell, "Designing Sound," MIT Press(2010), ISBN:978-0262014410
【FMシンセサイザーの楽音合成】高山博、FMシンセのあたらしいトリセツ、リットーミュージック (2018)、ISBN 978-4845632725
【ハモンドオルガンとポピュラー音楽】Markn Vail, "The Hammond Organ: Beauty in the B", Backbeat Books (2004), ISBN 978-0879307059
【楽器の発明とその文化的意義】
Frode Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【成績評価の方法と基準】
●成績評価方法　セメスタ毎に総合評価します。欠席は認めません。止むを得ない事情で欠席する場合には必ず申し出てください。また講義内容を復習して次の授業までに実習課題を済ませておいてください。
Proactiveな運営方針にもとづき、学生個人による制作・研究（40%）、研究室全体で取り組むグループ活動(40%)、学会参加、作品応募、分野知識の外部実践（情報、データサイエンス、英語関連など)(20%)をすべて総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
最後にまとめとしての学会発表、あるいは何らかの作品制作（狭い意味での表現に限らず、システム・プログラム等でもよい）と制作レポートを課します。

【学生の意見等からの気づき】
（１）演習形式であるため、授業アンケートのような期末アンケートではその場の学習ニーズに対応できません。面談による個別指導によってこれまでも対応してきており、今後もこの方針を継続します。面談を通じての個別の研究指導とゼミでの学びをうまく組み合わせて効率的な学びをサポートできるよう配慮します。
（２）意欲ある学生の参加を歓迎します。4年次からの研究や作品制作も可能ですので、演習変更希望の場合は事前に相談ください。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミは国際文化学部情報セミナー室（BT#0704）にて行います。
研究活動では情報準備室（BT#0703）のネットワーク、サーバ、マルチメディア環境を併せて使用します。

【その他の重要事項】
●履修上の注意
まず手を動かす、自分で調べる、しっかり聞く、物怖じせずに発言する。そこから文化と情報を発想します。自分ひとりでは解らないこともありますから、担当教員と面談を通じて指導を受ける、あるいは作品制作について助言を受けるなど風通しの良いコミュニケーションを心がけてください。
また、
・情報系、メディア系専門科目の3〜4年次での履修
・情報処理・メディア・データサイエンス関連の検定資格取得
・継続的な英語力養成の必要性
を明言します。
研究室活動と関連の深い科目として：
・「コンピュータ音楽と音声情報処理」Pure Dataによる音楽制作
・「メディアアートの世界」Processingによるアニメーション作品制作
・「マルチメディア表現法」写真技法、大判印刷、レーザー加工機による作品制作
・「情報アプリケーションII」Arduino, ラズパイ, Jetsonによるモノづくり
・「多文化情報メディア論IA」機械学習、テキストマイニング、メディアデータ分析
・「多文化情報メディア論IB」インターネット、ソーシャルメディアの分析

を推奨します。

【教員の実務経験】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野の経験がある。

【Outline (in English)】
Course Outline: The course deals with designing and developing electronic musical instruments for the future.
Learning Objectives: his course is to help acquire basic knowledge and design skills for computer-based electronic musical instruments with interactive functionality and sensor fusion.
In addition to classroom activities and regular assignments, all students are encouraged to attend academic conferences and workshops, so as to broaden their views and strengthen area knowledge and develop programming skills.
Web-based tools are provided as the learning platform to support reflection and active learning.
The average study time outside of class per week would be roughly 4 hours.
Grading Policy: Individual research (40%), Lab activities (40%), Academic or area-specific activities(20%) 60% of overall evaluation score is required for academic credit.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

大嶋　良明

サブタイトル：作りながら発想する未来志向の電子楽器
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
●テーマ
永遠のテーマは、「マルチメディアとネットワーク」ですが、2026年度の重点テーマは、次世代の電子楽器と演奏方式を作りながら学ぶこと。インタラクティブで未来志向のプロジェクトに取り組みます。
●授業運営の方針
「やりたくなったらまず動く」“Be Proactive!” これに尽きます。
●ゼミで取り組み可能な研究テーマや作品制作の例：
テキストマイニング、大規模言語モデル、ソーシャルメディア分析、コンピュータ音楽、立体音響、メディアアート、フィジカルコンピューティング、教育工学、IoT、画像認識、音声認識、機械学習、センサー応用、　など
●「何を学ぶのか？」から「何ができるのか？ 何のために学ぶか？」へ
これまでのゼミ生たちはWeb, サウンドデザイン、アニメ制作、映画監督、UX、情報科教員などの分野に進み、留学、大学院進学者もたくさん輩出しました。参考にして下さい。

【到達目標】
●目標
・コンピュータを自分の表現のために応用すること
・インターネットネット社会で自分を表現すること
・来るべきネット社会を構想すること
を通して
・社会の中で十分に役に立つもの
・長期的に世の中を見通す力
を身につけたいです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
●ICTの最先端を学びます。
●各自がテーマを決めて、個人研究あるいは作品制作に取組みます。
●学習成果の「見える化」を目指します。
●4年生は各自（あるいは連名）で、2 3年生は全員でひとつのテーマで、国際文化情報学会および学外での成果発表に向けて取組みます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション、学術活動の基盤	アカデミック・スキルズと研究環境を理解する。学習環境について全員で習得する。
2	ものづくりの基盤	ArduinoやRaspberry Piなどをベースに考える楽器作りの制作環境を整える。
3	サンプリングとドラムマシン：録音再生する楽器	Maestro Rhythm Kingなど初期のドラムマシンやMellotronやFairlightなどのサンプラー楽器が果たした役割とその影響を学ぶ。
4	電子ドラム：発振器とノイズによる打楽器のリズム	Simmonsに始まる電子音による打楽器の原理と構成法について学ぶ。
5	ものづくり探訪（1）：ドラムマシン	Arduinoベースのオープンソースのドラムマシン Bleep Drumの構成原理を学び、ドラムマシンの製作する。
6	ハモンドオルガン：歯車と電磁ピックアップによる波形合成	Mark Vailの”Hammond Organ: Beauty in B”を参考にハモンドオルガンの機構的特徴について詳しく検討する。必要に応じてLaurens Hammondによる関連特許についても言及する。
7	Oramics Machine：「フィルムに描いた」電子音楽	Mick GriersonとTim Boonの”The Oramics Machine and the Origins of British Electronic and Computer Music”を読み解き、Daphne Oramが取り組んだOramics Machineの構造と特徴について学ぶ。
8	ものづくり探訪（2）：加算合成	楽音の加算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するドローバー方式の電子オルガンを製作する。
9	楽器のユーザーインターフェース（1）：演奏するとはどういうことか？	アコーディオン、フルート、サクソフォンなどの楽器に着目し、種々の楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
10	楽器のユーザーインターフェース（2）：音楽表現のための電子音の制御	20世紀の電子楽器に着目しテルミン、VCS3, Moogなどの電子楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
11	演奏におけるArtefacts	音楽演奏におけるartefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
12	Moogシンセサイザ：音源とフィルタによる減算合成	Minimoogに代表されるような、フィルタと音量の時間変化で楽音を構成する電子楽器について学ぶ。
13	ものづくり探訪（3）：ミュージックシンセサイザ	楽音の減算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するシンセサイザーを製作する。
14	【学習のまとめ（構想発表）】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究の構想を深化させる。
15	John Chowningとコンピュータ音楽：電子音楽と音響表現の先駆的開拓者	コンピュータ音楽におけるJohn Chowingの果たした役割に注目し、FM音源方式によるミュージックシンセサイザの原理と実装について学ぶ。
16	ものづくり探訪（4）：FM音源	FM音源方式のポリフォニックシンセサイザーSynthino XMの構造を学び、ArduinoによりFM音源部と簡単なシークエンサ機能を製作する。
17	初音ミクと歌声音声合成	歌声音声合成とFMシンセサイザーの関連について学ぶ。ポケットミクやSynthesizer-Vを使って実際の楽音合成を試みる。

18	ゲーム音楽とケータイ：集積回路の夢	ゲーム音楽の仕組みについて学ぶ。とくにPSGやFM音源の果たした役割を学ぶ。
19	MIDIとMML: コンピュータ音楽の記法	電子楽器を制御する共通規格としてのMIDIとゲーム音楽で多用されたMML記法について学ぶ。
20	ものづくり探訪（5）：MIDIコントローラ	Sparkfun MIDI Shieldの構造を学び、ArduinoやRaspberry Piを使ったMIDIコントローラを製作する。
21	音楽を生成するAI	音楽を生成するAIについて学ぶ。試用結果を共有する。
22	【中間発表・学会発表準備】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究構想を深化させる。本中間報告会の成果により学会発表応募の形態を検討する。
23	電波で世界とつながること：BluetoothとWiFIインターネット	室内環境でのBluetoothとTCP/IP, UDP/IPでのデバイス接続を学ぶ。
24	周囲を交わること：環境情報の取り込み	距離、温度など各種センサー情報から周囲環境を読み取り音の表現に取り込む方法を学ぶ。
25	顕在化する身体性：内なる変化が生み出すもの	ジェスチャー、姿勢、心拍、声などの生体情報を音の表現に取り込む方法を学ぶ
26	空間系の音響効果：空間の意識と奥行きの演出	リバーブによる残響効果やマルチスピーカーによる立体音響などによる音響空間の構成法を学ぶ。
27	ものづくり探訪（6）：総合演習	年間を通じて取り組んだものづくり実習の成果を統合したデモを製作する。
28	【期末発表】2026年度のまとめ：学習成果の見える化	学習内容の総まとめと公開コンテンツ化を目指す。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献講読、プロジェクト活動、自主的な学習など授業時間外に求められる学習行動はとても大事です。積極的に活動してください。
とくに学外での貴重な学びの機会として学術大会や学会イベントがあります。まずは聴講参加を心がけてください。そしてできれば研究発表できるようになりたいです。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
今年度にとりあげるテーマの教科書は指定しない。

【参考書】
必要に応じて提示します。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【コンピュータ音楽】Curtis Roads著 ; 青柳龍也 [ほか] 訳、「コンピュータ音楽 : 歴史・テクノロジー・アート」、東京電機大学出版局(2001)、ISBN: 978-4501532109
【何か作りたい！ でも何を作ろう…？】Karen Wilkinson(著), Mike Petrich(著), 金井哲夫(訳)、「ティンカリングをはじめよう ―アート、サイエンス、テクノロジーの交差点で作って遊ぶ」、オライリージャパン(2015)、ISBN:978-4873117263
【Arduino＋音楽】
中西宜人、「Arduinoではじめる手作り電子楽器」、工学社(2015)、ISBN: ISBN978-4-7775-1916-3
【モノづくり＋デバイスアート】青木 直史 (著)、「Arduino と Processingではじめるプロトタイピング入門」、講談社(2017)、ISBN: 978-4061565692
小林茂(著)、「Prototyping Lab 第2版 ―「作りながら考える」ためのArduino実践レシピ」、オライリージャパン(2017)、ISBN:978-4873117898
【電子楽器の開発】三枝文夫、「電子楽器ー過去｜現在｜未来」、ミュージックトレード社（2021）、ISBN 978-4908357268
【Pure Data】
美山千香士、『Pure Data チュートリアル＆リファレンス』、ワークスコーポレーション (2013) ISBN: 978-4862671424
松村 誠一郎、『Pd Recipe Book -Pure Dataではじめるサウンドプログラミング』、ビー・エヌ・エヌ新社(2012) ISBN: 978-4861007804
中村隆之、『「PureData」ではじめるサウンド・プログラミング―「音」「映像」のための「ビジュアル・プログラミング」言語』、工学社 (2015) ISBN: 978-4777518821
【音響モデリング】Andy Farnell, "Designing Sound," MIT Press(2010), ISBN:978-0262014410
【FMシンセサイザーの楽音合成】高山博、FMシンセのあたらしいトリセツ、リットーミュージック (2018)、ISBN 978-4845632725
【ハモンドオルガンとポピュラー音楽】Markn Vail, "The Hammond Organ: Beauty in the B", Backbeat Books (2004), ISBN 978-0879307059
【楽器の発明とその文化的意義】
Frode Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【成績評価の方法と基準】
●成績評価方法　セメスタ毎に総合評価します。欠席は認めません。止むを得ない事情で欠席する場合には必ず申し出てください。また講義内容を復習して次の授業までに実習課題を済ませておいてください。
Proactiveな運営方針にもとづき、学生個人による制作・研究（40%）、研究室全体で取り組むグループ活動(40%)、学会参加、作品応募、分野知識の外部実践（情報、データサイエンス、英語関連など)(20%)をすべて総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
最後にまとめとしての学会発表、あるいは何らかの作品制作（狭い意味での表現に限らず、システム・プログラム等でもよい）と制作レポートを課します。

【学生の意見等からの気づき】
（1）演習形式であるため、授業アンケートのような期末アンケートではその場の学習ニーズに対応できません。面談による個別指導によってこれまでも対応してきており、今後もこの方針を継続します。面談を通じての個別の研究指導とゼミでの学びをうまく組み合わせて効率的な学びをサポートできるよう配慮します。
（2）意欲ある学生の参加を歓迎します。4年次からの研究や作品制作も可能ですので、演習変更希望の場合は事前に相談ください。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミは国際文化学部情報セミナー室（BT#0704）にて行います。
研究活動では情報準備室（BT#0703）のネットワーク、サーバ、マルチメディア環境を併せて使用します。

【その他の重要事項】
●履修上の注意
まず手を動かす、自分で調べる、しっかり聞く、物怖じせずに発言する。そこから文化と情報を発想します。自分ひとりでは解らないこともありますから、担当教員と面談を通じて指導を受ける、あるいは作品制作について助言を受けるなど風通しの良いコミュニケーションを心がけてください。
また、
・情報系、メディア系専門科目の3〜4年次での履修
・情報処理・メディア・データサイエンス関連の検定資格取得
・継続的な英語力養成の必要性
を明言します。
研究室活動と関連の深い科目として：
・「コンピュータ音楽と音声情報処理」Pure Dataによる音楽制作
・「メディアアートの世界」Processingによるアニメーション作品制作
・「マルチメディア表現法」写真技法、大判印刷、レーザー加工機による作品制作
・「情報アプリケーションII」Arduino, ラズパイ, Jetsonによるモノづくり
・「多文化情報メディア論IA」機械学習、テキストマイニング、メディアデータ分析
・「多文化情報メディア論IB」インターネット、ソーシャルメディアの分析

を推奨します。

【教員の実務経験】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野の経験がある。

【Outline (in English)】
Course Outline: The course deals with designing and developing electronic musical instruments for the future.
Learning Objectives: his course is to help acquire basic knowledge and design skills for computer-based electronic musical instruments with interactive functionality and sensor fusion.
In addition to classroom activities and regular assignments, all students are encouraged to attend academic conferences and workshops, so as to broaden their views and strengthen area knowledge and develop programming skills.
Web-based tools are provided as the learning platform to support reflection and active learning.
The average study time outside of class per week would be roughly 4 hours.
Grading Policy: Individual research (40%), Lab activities (40%), Academic or area-specific activities(20%) 60% of overall evaluation score is required for academic credit.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

大嶋　良明

サブタイトル：作りながら発想する未来志向の電子楽器
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
●テーマ
永遠のテーマは、「マルチメディアとネットワーク」ですが、2026年度の重点テーマは、次世代の電子楽器と演奏方式を作りながら学ぶこと。インタラクティブで未来志向のプロジェクトに取り組みます。
●授業運営の方針
「やりたくなったらまず動く」“Be Proactive!” これに尽きます。
●ゼミで取り組み可能な研究テーマや作品制作の例：
テキストマイニング、大規模言語モデル、ソーシャルメディア分析、コンピュータ音楽、立体音響、メディアアート、フィジカルコンピューティング、教育工学、IoT、画像認識、音声認識、機械学習、センサー応用、　など
●「何を学ぶのか？」から「何ができるのか？ 何のために学ぶか？」へ
これまでのゼミ生たちはWeb, サウンドデザイン、アニメ制作、映画監督、UX、情報科教員などの分野に進み、留学、大学院進学者もたくさん輩出しました。参考にして下さい。

【到達目標】
●目標
・コンピュータを自分の表現のために応用すること
・インターネットネット社会で自分を表現すること
・来るべきネット社会を構想すること
を通して
・社会の中で十分に役に立つもの
・長期的に世の中を見通す力
を身につけたいです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
●ICTの最先端を学びます。
●各自がテーマを決めて、個人研究あるいは作品制作に取組みます。
●学習成果の「見える化」を目指します。
●4年生は各自（あるいは連名）で、2 3年生は全員でひとつのテーマで、国際文化情報学会および学外での成果発表に向けて取組みます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション、学術活動の基盤	アカデミック・スキルズと研究環境を理解する。学習環境について全員で習得する。
2	ものづくりの基盤	ArduinoやRaspberry Piなどをベースに考える楽器作りの制作環境を整える。
3	サンプリングとドラムマシン：録音再生する楽器	Maestro Rhythm Kingなど初期のドラムマシンやMellotronやFairlightなどのサンプラー楽器が果たした役割とその影響を学ぶ。
4	電子ドラム：発振器とノイズによる打楽器のリズム	Simmonsに始まる電子音による打楽器の原理と構成法について学ぶ。
5	ものづくり探訪（1）：ドラムマシン	Arduinoベースのオープンソースのドラムマシン Bleep Drumの構成原理を学び、ドラムマシンの製作する。
6	ハモンドオルガン：歯車と電磁ピックアップによる波形合成	Mark Vailの”Hammond Organ: Beauty in B”を参考にハモンドオルガンの機構的特徴について詳しく検討する。必要に応じてLaurens Hammondによる関連特許についても言及する。
7	Oramics Machine：「フィルムに描いた」電子音楽	Mick GriersonとTim Boonの”The Oramics Machine and the Origins of British Electronic and Computer Music”を読み解き、Daphne Oramが取り組んだOramics Machineの構造と特徴について学ぶ。
8	ものづくり探訪（2）：加算合成	楽音の加算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するドローバー方式の電子オルガンを製作する。
9	楽器のユーザーインターフェース（1）：演奏するとはどういうことか？	アコーディオン、フルート、サクソフォンなどの楽器に着目し、種々の楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
10	楽器のユーザーインターフェース（2）：音楽表現のための電子音の制御	20世紀の電子楽器に着目しテルミン、VCS3, Moogなどの電子楽器の機能や構造を器楽演奏面でのユーザーインターフェースの観点から分析する。
11	演奏におけるArtefacts	音楽演奏におけるartefacts(ここでは付加的人工物)による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
12	Moogシンセサイザ：音源とフィルタによる減算合成	Minimoogに代表されるような、フィルタと音量の時間変化で楽音を構成する電子楽器について学ぶ。
13	ものづくり探訪（3）：ミュージックシンセサイザ	楽音の減算合成をPure Dataでモデル化し、ArduinoやRaspberry Piで稼動するシンセサイザーを製作する。
14	【学習のまとめ（構想発表）】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究の構想を深化させる。
15	John Chowningとコンピュータ音楽：電子音楽と音響表現の先駆的開拓者	コンピュータ音楽におけるJohn Chowingの果たした役割に注目し、FM音源方式によるミュージックシンセサイザの原理と実装について学ぶ。
16	ものづくり探訪（4）：FM音源	FM音源方式のポリフォニックシンセサイザーSynthino XMの構造を学び、ArduinoによりFM音源部と簡単なシークエンサ機能を製作する。
17	初音ミクと歌声音声合成	歌声音声合成とFMシンセサイザーの関連について学ぶ。ポケットミクやSynthesizer-Vを使って実際の楽音合成を試みる。

18	ゲーム音楽とケータイ：集積回路の夢	ゲーム音楽の仕組みについて学ぶ。とくにPSGやFM音源の果たした役割を学ぶ。
19	MIDIとMML: コンピュータ音楽の記法	電子楽器を制御する共通規格としてのMIDIとゲーム音楽で多用されたMML記法について学ぶ。
20	ものづくり探訪（5）：MIDIコントローラ	Sparkfun MIDI Shieldの構造を学び、ArduinoやRaspberry Piを使ったMIDIコントローラを製作する。
21	音楽を生成するAI	音楽を生成するAIについて学ぶ。試用結果を共有する。
22	【中間発表・学会発表準備】	学習内容をまとめる。問題意識を共有するディスカッションから研究構想を深化させる。本中間報告会の成果により学会発表応募の形態を検討する。
23	電波で世界とつながること：BluetoothとWiFIインターネット	室内環境でのBluetoothとTCP/IP, UDP/IPでのデバイス接続を学ぶ。
24	周囲を交わること：環境情報の取り込み	距離、温度など各種センサー情報から周囲環境を読み取り音の表現に取り込む方法を学ぶ。
25	顕在化する身体性：内なる変化が生み出すもの	ジェスチャー、姿勢、心拍、声などの生体情報を音の表現に取り込む方法を学ぶ
26	空間系の音響効果：空間の意識と奥行きの演出	リバーブによる残響効果やマルチスピーカーによる立体音響などによる音響空間の構成法を学ぶ。
27	ものづくり探訪（6）：総合演習	年間を通じて取り組んだものづくり実習の成果を統合したデモを製作する。
28	【期末発表】2026年度のまとめ：学習成果の見える化	学習内容の総まとめと公開コンテンツ化を目指す。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献講読、プロジェクト活動、自主的な学習など授業時間外に求められる学習行動はとても大事です。積極的に活動してください。
とくに学外での貴重な学びの機会として学術大会や学会イベントがあります。まずは聴講参加を心がけてください。そしてできれば研究発表できるようになりたいです。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
今年度にとりあげるテーマの教科書は指定しない。

【参考書】
必要に応じて提示します。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【コンピュータ音楽】Curtis Roads著 ; 青柳龍也 [ほか] 訳、「コンピュータ音楽 : 歴史・テクノロジー・アート」、東京電機大学出版局(2001)、ISBN: 978-4501532109
【何か作りたい！ でも何を作ろう…？】Karen Wilkinson(著), Mike Petrich(著), 金井哲夫(訳)、「ティンカリングをはじめよう ―アート、サイエンス、テクノロジーの交差点で作って遊ぶ」、オライリージャパン(2015)、ISBN:978-4873117263
【Arduino＋音楽】
中西宜人、「Arduinoではじめる手作り電子楽器」、工学社(2015)、ISBN: ISBN978-4-7775-1916-3
【モノづくり＋デバイスアート】青木 直史 (著)、「Arduino と Processingではじめるプロトタイピング入門」、講談社(2017)、ISBN: 978-4061565692
小林茂(著)、「Prototyping Lab 第2版 ―「作りながら考える」ためのArduino実践レシピ」、オライリージャパン(2017)、ISBN:978-4873117898
【電子楽器の開発】三枝文夫、「電子楽器ー過去｜現在｜未来」、ミュージックトレード社（2021）、ISBN 978-4908357268
【Pure Data】
美山千香士、『Pure Data チュートリアル＆リファレンス』、ワークスコーポレーション (2013) ISBN: 978-4862671424
松村 誠一郎、『Pd Recipe Book -Pure Dataではじめるサウンドプログラミング』、ビー・エヌ・エヌ新社(2012) ISBN: 978-4861007804
中村隆之、『「PureData」ではじめるサウンド・プログラミング―「音」「映像」のための「ビジュアル・プログラミング」言語』、工学社 (2015) ISBN: 978-4777518821
【音響モデリング】Andy Farnell, "Designing Sound," MIT Press(2010), ISBN:978-0262014410
【FMシンセサイザーの楽音合成】高山博、FMシンセのあたらしいトリセツ、リットーミュージック (2018)、ISBN 978-4845632725
【ハモンドオルガンとポピュラー音楽】Markn Vail, "The Hammond Organ: Beauty in the B", Backbeat Books (2004), ISBN 978-0879307059
【楽器の発明とその文化的意義】
Frode Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【成績評価の方法と基準】
●成績評価方法　セメスタ毎に総合評価します。欠席は認めません。止むを得ない事情で欠席する場合には必ず申し出てください。また講義内容を復習して次の授業までに実習課題を済ませておいてください。
Proactiveな運営方針にもとづき、学生個人による制作・研究（40%）、研究室全体で取り組むグループ活動(40%)、学会参加、作品応募、分野知識の外部実践（情報、データサイエンス、英語関連など)(20%)をすべて総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
最後にまとめとしての学会発表、あるいは何らかの作品制作（狭い意味での表現に限らず、システム・プログラム等でもよい）と制作レポートを課します。

【学生の意見等からの気づき】
（1）演習形式であるため、授業アンケートのような期末アンケートではその場の学習ニーズに対応できません。面談による個別指導によってこれまでも対応してきており、今後もこの方針を継続します。面談を通じての個別の研究指導とゼミでの学びをうまく組み合わせて効率的な学びをサポートできるよう配慮します。
（2）意欲ある学生の参加を歓迎します。4年次からの研究や作品制作も可能ですので、演習変更希望の場合は事前に相談ください。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミは国際文化学部情報セミナー室（BT#0704）にて行います。
研究活動では情報準備室（BT#0703）のネットワーク、サーバ、マルチメディア環境を併せて使用します。

【その他の重要事項】
●履修上の注意
まず手を動かす、自分で調べる、しっかり聞く、物怖じせずに発言する。そこから文化と情報を発想します。自分ひとりでは解らないこともありますから、担当教員と面談を通じて指導を受ける、あるいは作品制作について助言を受けるなど風通しの良いコミュニケーションを心がけてください。
また、
・情報系、メディア系専門科目の3〜4年次での履修
・情報処理・メディア・データサイエンス関連の検定資格取得
・継続的な英語力養成の必要性
を明言します。
研究室活動と関連の深い科目として：
・「コンピュータ音楽と音声情報処理」Pure Dataによる音楽制作
・「メディアアートの世界」Processingによるアニメーション作品制作
・「マルチメディア表現法」写真技法、大判印刷、レーザー加工機による作品制作
・「情報アプリケーションII」Arduino, ラズパイ, Jetsonによるモノづくり
・「多文化情報メディア論IA」機械学習、テキストマイニング、メディアデータ分析
・「多文化情報メディア論IB」インターネット、ソーシャルメディアの分析

を推奨します。

【教員の実務経験】
担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のディジタル信号処理、マルチメディア処理分野の経験がある。

【Outline (in English)】
Course Outline: The course deals with designing and developing electronic musical instruments for the future.
Learning Objectives: his course is to help acquire basic knowledge and design skills for computer-based electronic musical instruments with interactive functionality and sensor fusion.
In addition to classroom activities and regular assignments, all students are encouraged to attend academic conferences and workshops, so as to broaden their views and strengthen area knowledge and develop programming skills.
Web-based tools are provided as the learning platform to support reflection and active learning.
The average study time outside of class per week would be roughly 4 hours.
Grading Policy: Individual research (40%), Lab activities (40%), Academic or area-specific activities(20%) 60% of overall evaluation score is required for academic credit.

DES400GA（デザイン学 / Design science 400）

情報文化演習

（春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO）、（秋）甲　洋介（Yousuke KINOE）

サブタイトル：デザイン学 ―〖身体、こころ、空間〗体験を豊かにする
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

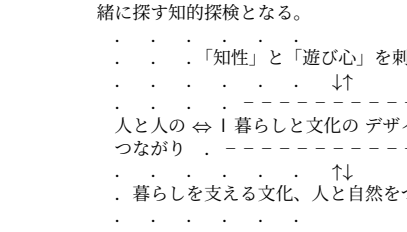
【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【コミュニケーション：身体が感じ、人がつながり、こころはダンスする】
ある人物の生活世界を豊かにすること、それは容易ではない。
こころが動き、感情がふるえ、他人とつながり、やがて体験が始まる。
他者の生活世界を深く理解し、『生』と『体験』を豊かにするデザイン学 ― それを目指す。　さぁ、いっしょにデザインを始めよう！
演習ではこころと感情の仕組みを基礎から学び　それを生かして、心地よい「空間の体験」、言葉にならない思いを伝える「新しいコミュニケーション」、知性と遊び心を刺激する「暮らしの道具」をデザインする。
時には、建築空間で人の行動をフィールドワークしたり、「モノづくり」にも挑戦する。 そのために、ふだん忘れている感覚、懐かしい匂い、言葉にならない色あい、うっとりする肌触り、ぞくっとする出会い…、そういう言葉を超えた身体と感覚の体験を呼び起こし、あなたのこころの声にじっくり耳を傾けよう。日常風景に隠れていた音たちが聴こえ始める。禅の思想が思い起こされる。
文献をじっくり読み、仲間と考えを深め、デザインを実践する演習である。
【興味あるテーマの例】
(1) 楽しくて使いやすい「道具、インテリア、家具」の制作
(2) モノづくりと体験づくり、アートとコミュニケーション、遊び心のデザイン
(3) 居心地よい空間、癒しのデザインの研究
(4) つながってるフリは寂しい、でも濃密なのはもっと怖い　〜　家族・恋人たちを繋ぐ、丁度よいつながり（コミュニケーション）のデザイン
(5) コトバで嘘をつけても、身体は本心を語ってしまう！ ー非言語コミュニケーションの研究
(6) モーションキャプチャを用いて『身体から生まれる繊細で不思議な表現』の研究
(7) 繋がりたいのに『つながれない』、メタバース（仮想世界）における「こころ」の問題
(8) 身体性認知科学、感情の科学、人工の知
(9) 身体、いのち、自然の息吹を伝える *Zen* 的文化情報空間のデザイン
(10) 人の体験はどのようにデザインされるのか

【到達目標】
・具体的な場面に対して、ユーザの視点から「感覚の体験」「道具」のデザインを実践できるようになる（人間中心デザイン技法）。
・ユーザ調査法を学び、問題の本質を洞察する力、よりよいデザインの方向性を嗅ぎ分ける美意識、研究をやり遂げる計画・実行力、を育む
君もやがて実社会に出たとき、答のない課題に取り組むことになる。そのときにここで得た力は頼りになるはずである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
「暮らしと文化のデザイン学」がテーマである。「コミュニケーション」「道具」「空間」のデザインを軸に、つぎの４つの観点を意識しながら学ぶ。ゼミ生は各回の討議、ワークショップで主体的に意見を出し合い、アイディアを提案できる。担当教員は討議やアイディアにフィードバックを返し、考えをさらに深めるよう導く。
本演習で取り組む課題のいくつかは未だ正解が分かっていない。《答え》を一緒に探す知的探検となる。



【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	ゼミの進め方、自己紹介、デザイン思考の概要
2	グループで取り組む課題の検討	誰にとっての、どんな課題を対象にするのか？ をグループで検討する
3	課題の背景、登場人物を理解する	背景情報、登場人物、課題に関する情報を共有し、主要ペルソナを決定する
4	現状シナリオを描く	現状において、どういう場面でどんな困難さがあるのかをシナリオの中で明確にし、解決すべき領域を決める
5	アイディアの検討	課題の解決案に対するアイディアを検討し、アイディアの優先順位づけを行う
6	ユーザー・ストーリーを描く	選定したアイディアを取り入れた、あるべきユーザー体験の姿をストーリーで表現する
7	プロトタイプの作成	プロトタイプを検討し、創作する
8	デザインリサーチの計画	プロトタイプを、対象とする人たちに提示して、フィードバックを得る、デザインリサーチの計画を立てる
9	デザインリサーチの実践	デザインリサーチを実践する
10	デザインリサーチの結果共有とまとめ	デザインリサーチの結果共有とまとめを行い、プロトタイプに反映する
11	グループ活動の統合	これまでの活動を統合し、今後の課題を検討する
12	グループ発表準備	グループ発表の準備を行う
13	グループ発表	グループでの取り組みを発表し、より良くするためのディスカッションを行う
14	個人研究、グループ研究の育て方	個人研究／グループ研究のテーマの発表
15	オリエンテーション(秋)	テーマの紹介、進め方の話し合い
16	良くデザインされた道具・空間は「生」を豊かにする?!	暮らしの道具・空間をフィールドワークする
17	暮らしの道具をデザインする①	基礎的な考え方を学ぶ
18	暮らしの道具をデザインする②	デザイン方法論を学ぶ
19	デザイン・ワークショップ	デザイン実習
20	こころと、感情の科学①	こころの働き、基礎を学ぶ
21	こころと、感情の科学②	理論を学び、考えを深める
22	こころと、感情の科学③	実例を学ぶ、体験する、考えを討議する
23	【話題】非言語コミュニケーション	非言語コミュニケーションを、身体の行動から捉える
24	空間の体験をデザインしよう①	空間の体験、基礎を学ぶ
25	空間の体験をデザインしよう②	アクティビティを分析し、体験をデザインする
26	空間の体験をデザインしよう③	実例を学ぶ:体験する、考えを深める
27	デザイン・ワークショップ	デザイン実習(グループ)
28	まとめ、発表、討議	個人研究の成果発表と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストを読む、発表準備、学内外でのフィールドワーク。実施可能な場合は、美術館、建築空間の探検に出かけ、可能なら夏や春に合宿がある。準備と復習は２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
各自の研究テーマを伺い、道具のデザイン、こころの科学、コミュニケーション、空間デザイン、情報学と人工知能を中心に提示する。

【参考書】
・「感情の科学」「コミュニケーションとしての身体」「こころの情報学」
・「未来のモノのデザイン」「弱いロボット」「ネット接続された心」「遊びと人間」
・「建築する身体」「アフォーダンス」「サステナブル建築」
・森の葬祭場（アスプルンド）、湖畔のアトリエ（コルビュジエ）、光の教会（安藤）、修学院離宮
・「デザインスプリント」「デザインリサーチの教科書」

【成績評価の方法と基準】
①発表や討議への参画、各回のレスポンス、②グループ実験や実習の取り組み、③成果レポート、の３つの観点を同じ配分で評価する。３つを総合した評価が到達目標の60%以上である者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
実験、体験、モノづくり実習の機会を増やし、建築探検にぜひ出かけよう

【学生が準備すべき機器他】
ノートPCがあるとグループワークや合宿の時に便利。

【情報機器・視聴覚設備の活用】
情報演習室と、甲研究室の先進的な機材を生かした実習を行う。

【参加希望者へ】
人間の「こころ」や感情のしくみ、コミュニケーション、モノづくり、建築、空間、玩具、家具のデザインに興味をもつ方に向いている。
次のような人物とのコラボレーションに興味がある：　①不完全燃焼なまま大学生活を終えたくない、②モノづくりが好き、③言葉にならない思いを大切にする、④建築、空間デザイン、インテリアに興味がある、⑤土俗的な感性をもつデザイナーとダンサー、⑥子どもや高齢者が楽しめる情報の道具を作りたい、⑦芸術家肌のプログラマー、⑧少なくともゾウとイルカには心が通じると信じている、⑨北欧建築、日本庭園、仏像に魅せられる、⑩海の中には、自分の知らない地球があと半分あることを知ってしまったダイバー、⑪人はそう簡単につながれない、SNSは孤独と分断の増幅装置であると気づいてしまった人。　好奇心旺盛で常識ある個性派、歓迎。
重要な関連科目（演習と組合せて学ぶ）
道具のデザイン学、道具による感覚・体験のデザイン、文化情報のデザインワークショップ、こころの科学、仮想世界研究、システム論

【注意】
”パソコンを実習するゼミ”ではないが、ロボットに魅惑的なしぐさのダンスをさせたり、優しくハグする人工物を作ったりすることがある。

【Outline (in English)】
This seminar allows you to study on DESIGN, Science of Mind, and Non-verbal Communication. You are also encouraged to join several types of Design Workshops including design of "experiences and artifacts" as well as a colloquium of basic literatures. We sometimes go out for a fieldwork of "art and architectures.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours for studying the relevant chapters from the text.
By the end of the seminar, students should be able to practice the principles and methodology of "User-centered eXperience Design" (UXD).
Final grade will be decided based on (1) final report, (2) presentations and group discussions, and (3) the quality of the student's contribution to workshops. Three aspects are evaluated with equal weight.

DES400GA（デザイン学 / Design science 400）

情報文化演習

（春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO）、（秋）甲　洋介（Yousuke KINOE）

サブタイトル：デザイン学 ―〖身体、こころ、空間〗体験を豊かにする
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

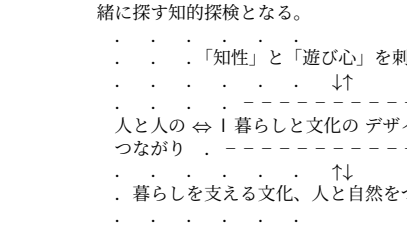
【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【コミュニケーション：身体が感じ、人がつながり、こころはダンスする】
ある人物の生活世界を豊かにすること、それは容易ではない。
こころが動き、感情がふるえ、他人とつながり、やがて体験が始まる。
他者の生活世界を深く理解し、『生』と『体験』を豊かにするデザイン学 ― それを目指す。　さぁ、いっしょにデザインを始めよう！
演習ではこころと感情の仕組みを基礎から学び　それを生かして、心地よい「空間の体験」、言葉にならない思いを伝える「新しいコミュニケーション」、知性と遊び心を刺激する「暮らしの道具」をデザインする。
時には、建築空間で人の行動をフィールドワークしたり、「モノづくり」にも挑戦する。 そのために、ふだん忘れている感覚、懐かしい匂い、言葉にならない色あい、うっとりする肌触り、ぞくっとする出会い…、そういう言葉を超えた身体と感覚の体験を呼び起こし、あなたのこころの声にじっくり耳を傾けよう。日常風景に隠れていた音たちが聴こえ始める。禅の思想が思い起こされる。
文献をじっくり読み、仲間と考えを深め、デザインを実践する演習である。
【興味あるテーマの例】
(1) 楽しくて使いやすい「道具、インテリア、家具」の制作
(2) モノづくりと体験づくり、アートとコミュニケーション、遊び心のデザイン
(3) 居心地よい空間、癒しのデザインの研究
(4) つながってるフリは寂しい、でも濃密なのはもっと怖い　〜　家族・恋人たちを繋ぐ、丁度よいつながり（コミュニケーション）のデザイン
(5) コトバで嘘をつけても、身体は本心を語ってしまう！ ー非言語コミュニケーションの研究
(6) モーションキャプチャを用いて『身体から生まれる繊細で不思議な表現』の研究
(7) 繋がりたいのに『つながれない』、メタバース（仮想世界）における「こころ」の問題
(8) 身体性認知科学、感情の科学、人工の知
(9) 身体、いのち、自然の息吹を伝える *Zen* 的文化情報空間のデザイン
(10) 人の体験はどのようにデザインされるのか

【到達目標】
・具体的な場面に対して、ユーザの視点から「感覚の体験」「道具」のデザインを実践できるようになる（人間中心デザイン技法）。
・ユーザ調査法を学び、問題の本質を洞察する力、よりよいデザインの方向性を嗅ぎ分ける美意識、研究をやり遂げる計画・実行力、を育む
君もやがて実社会に出たとき、答のない課題に取り組むことになる。そのときにここで得た力は頼りになるはずである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
「暮らしと文化のデザイン学」がテーマである。「コミュニケーション」「道具」「空間」のデザインを軸に、つぎの４つの観点を意識しながら学ぶ。ゼミ生は各回の討議、ワークショップで主体的に意見を出し合い、アイディアを提案できる。担当教員は討議やアイディアにフィードバックを返し、考えをさらに深めるよう導く。
本演習で取り組む課題のいくつかは未だ正解が分かっていない。《答え》を一緒に探す知的探検となる。



【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	ゼミの進め方、自己紹介、デザイン思考の概要
2	グループで取り組む課題の検討	誰にとっての、どんな課題を対象にするのか？ をグループで検討する
3	課題の背景、登場人物を理解する	背景情報、登場人物、課題に関する情報を共有し、主要ペルソナを決定する
4	現状シナリオを描く	現状において、どういう場面でどんな困難さがあるのかをシナリオの中で明確にし、解決すべき領域を決める
5	アイディアの検討	課題の解決案に対するアイディアを検討し、アイディアの優先順位づけを行う
6	ユーザー・ストーリーを描く	選定したアイディアを取り入れた、あるべきユーザー体験の姿をストーリーで表現する
7	プロトタイプの作成	プロトタイプを検討し、創作する
8	デザインリサーチの計画	プロトタイプを、対象とする人たちに提示して、フィードバックを得る、デザインリサーチの計画を立てる
9	デザインリサーチの実践	デザインリサーチを実践する
10	デザインリサーチの結果共有とまとめ	デザインリサーチの結果共有とまとめを行い、プロトタイプに反映する
11	グループ活動の統合	これまでの活動を統合し、今後の課題を検討する
12	グループ発表準備	グループ発表の準備を行う
13	グループ発表	グループでの取り組みを発表し、より良くするためのディスカッションを行う
14	個人研究、グループ研究の育て方	個人研究／グループ研究のテーマの発表
15	オリエンテーション(秋)	テーマの紹介、進め方の話し合い
16	良くデザインされた道具・空間は「生」を豊かにする?!	暮らしの道具・空間をフィールドワークする
17	暮らしの道具をデザインする①	基礎的な考え方を学ぶ
18	暮らしの道具をデザインする②	デザイン方法論を学ぶ
19	デザイン・ワークショップ	デザイン実習
20	こころと、感情の科学①	こころの働き、基礎を学ぶ
21	こころと、感情の科学②	理論を学び、考えを深める
22	こころと、感情の科学③	実例を学ぶ、体験する、考えを討議する
23	【話題】非言語コミュニケーション	非言語コミュニケーションを、身体の行動から捉える
24	空間の体験をデザインしよう①	空間の体験、基礎を学ぶ
25	空間の体験をデザインしよう②	アクティビティを分析し、体験をデザインする
26	空間の体験をデザインしよう③	実例を学ぶ:体験する、考えを深める
27	デザイン・ワークショップ	デザイン実習(グループ)
28	まとめ、発表、討議	個人研究の成果発表と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストを読む、発表準備、学内外でのフィールドワーク。実施可能な場合は、美術館、建築空間の探検に出かけ、可能なら夏や春に合宿がある。準備と復習は２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
各自の研究テーマを伺い、道具のデザイン、こころの科学、コミュニケーション、空間デザイン、情報学と人工知能を中心に提示する。

【参考書】
・「感情の科学」「コミュニケーションとしての身体」「こころの情報学」
・「未来のモノのデザイン」「弱いロボット」「ネット接続された心」「遊びと人間」
・「建築する身体」「アフォーダンス」「サステナブル建築」
・森の葬祭場（アスプルンド）、湖畔のアトリエ（コルビュジエ）、光の教会（安藤）、修学院離宮
・「デザインスプリント」「デザインリサーチの教科書」

【成績評価の方法と基準】
①発表や討議への参画、各回のレスポンス、②グループ実験や実習の取り組み、③成果レポート、の３つの観点を同じ配分で評価する。３つを総合した評価が到達目標の60%以上である者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
実験、体験、モノづくり実習の機会を増やし、建築探検にぜひ出かけよう

【学生が準備すべき機器他】
ノートPCがあるとグループワークや合宿の時に便利。

【情報機器・視聴覚設備の活用】
情報演習室と、甲研究室の先進的な機材を生かした実習を行う。

【参加希望者へ】
人間の「こころ」や感情のしくみ、コミュニケーション、モノづくり、建築、空間、玩具、家具のデザインに興味をもつ方に向いている。
次のような人物とのコラボレーションに興味がある：　①不完全燃焼なまま大学生活を終えたくない、②モノづくりが好き、③言葉にならない思いを大切にする、④建築、空間デザイン、インテリアに興味がある、⑤土俗的な感性をもつデザイナーとダンサー、⑥子どもや高齢者が楽しめる情報の道具を作りたい、⑦芸術家肌のプログラマー、⑧少なくともゾウとイルカには心が通じると信じている、⑨北欧建築、日本庭園、仏像に魅せられる、⑩海の中には、自分の知らない地球があと半分あることを知ってしまったダイバー、⑪人はそう簡単につながれない、SNSは孤独と分断の増幅装置であると気づいてしまった人。　好奇心旺盛で常識ある個性派、歓迎。
重要な関連科目（演習と組合せて学ぶ）
道具のデザイン学、道具による感覚・体験のデザイン、文化情報のデザインワークショップ、こころの科学、仮想世界研究、システム論

【注意】
”パソコンを実習するゼミ”ではないが、ロボットに魅惑的なしぐさのダンスをさせたり、優しくハグする人工物を作ったりすることがある。

【Outline (in English)】
This seminar allows you to study on DESIGN, Science of Mind, and Non-verbal Communication. You are also encouraged to join several types of Design Workshops including design of "experiences and artifacts" as well as a colloquium of basic literatures. We sometimes go out for a fieldwork of "art and architectures.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours for studying the relevant chapters from the text.
By the end of the seminar, students should be able to practice the principles and methodology of "User-centered eXperience Design" (UXD).
Final grade will be decided based on (1) final report, (2) presentations and group discussions, and (3) the quality of the student's contribution to workshops. Three aspects are evaluated with equal weight.

DES400GA（デザイン学 / Design science 400）

情報文化演習

（春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO）、（秋）甲　洋介（Yousuke KINOE）

サブタイトル：デザイン学 ―〖身体、こころ、空間〗体験を豊かにする
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

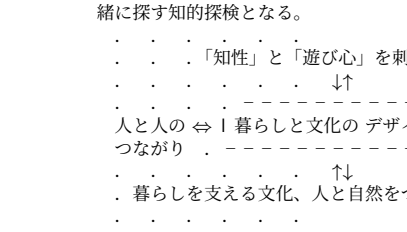
【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【コミュニケーション：身体が感じ、人がつながり、こころはダンスする】
ある人物の生活世界を豊かにすること、それは容易ではない。
こころが動き、感情がふるえ、他人とつながり、やがて体験が始まる。
他者の生活世界を深く理解し、『生』と『体験』を豊かにするデザイン学 ― それを目指す。　さぁ、いっしょにデザインを始めよう！
演習ではこころと感情の仕組みを基礎から学び　それを生かして、心地よい「空間の体験」、言葉にならない思いを伝える「新しいコミュニケーション」、知性と遊び心を刺激する「暮らしの道具」をデザインする。
時には、建築空間で人の行動をフィールドワークしたり、「モノづくり」にも挑戦する。 そのために、ふだん忘れている感覚、懐かしい匂い、言葉にならない色あい、うっとりする肌触り、ぞくっとする出会い…、そういう言葉を超えた身体と感覚の体験を呼び起こし、あなたのこころの声にじっくり耳を傾けよう。日常風景に隠れていた音たちが聴こえ始める。禅の思想が思い起こされる。
文献をじっくり読み、仲間と考えを深め、デザインを実践する演習である。
【興味あるテーマの例】
(1) 楽しくて使いやすい「道具、インテリア、家具」の制作
(2) モノづくりと体験づくり、アートとコミュニケーション、遊び心のデザイン
(3) 居心地よい空間、癒しのデザインの研究
(4) つながってるフリは寂しい、でも濃密なのはもっと怖い　〜　家族・恋人たちを繋ぐ、丁度よいつながり（コミュニケーション）のデザイン
(5) コトバで嘘をつけても、身体は本心を語ってしまう！ ー非言語コミュニケーションの研究
(6) モーションキャプチャを用いて『身体から生まれる繊細で不思議な表現』の研究
(7) 繋がりたいのに『つながれない』、メタバース（仮想世界）における「こころ」の問題
(8) 身体性認知科学、感情の科学、人工の知
(9) 身体、いのち、自然の息吹を伝える *Zen* 的文化情報空間のデザイン
(10) 人の体験はどのようにデザインされるのか

【到達目標】
・具体的な場面に対して、ユーザの視点から「感覚の体験」「道具」のデザインを実践できるようになる（人間中心デザイン技法）。
・ユーザ調査法を学び、問題の本質を洞察する力、よりよいデザインの方向性を嗅ぎ分ける美意識、研究をやり遂げる計画・実行力、を育む
君もやがて実社会に出たとき、答のない課題に取り組むことになる。そのときにここで得た力は頼りになるはずである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
「暮らしと文化のデザイン学」がテーマである。「コミュニケーション」「道具」「空間」のデザインを軸に、つぎの４つの観点を意識しながら学ぶ。ゼミ生は各回の討議、ワークショップで主体的に意見を出し合い、アイディアを提案できる。担当教員は討議やアイディアにフィードバックを返し、考えをさらに深めるよう導く。
本演習で取り組む課題のいくつかは未だ正解が分かっていない。《答え》を一緒に探す知的探検となる。



【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	ゼミの進め方、自己紹介、デザイン思考の概要
2	グループで取り組む課題の検討	誰にとっての、どんな課題を対象にするのか？ をグループで検討する
3	課題の背景、登場人物を理解する	背景情報、登場人物、課題に関する情報を共有し、主要ペルソナを決定する
4	現状シナリオを描く	現状において、どういう場面でどんな困難さがあるのかをシナリオの中で明確にし、解決すべき領域を決める
5	アイディアの検討	課題の解決案に対するアイディアを検討し、アイディアの優先順位づけを行う
6	ユーザー・ストーリーを描く	選定したアイディアを取り入れた、あるべきユーザー体験の姿をストーリーで表現する
7	プロトタイプの作成	プロトタイプを検討し、創作する
8	デザインリサーチの計画	プロトタイプを、対象とする人たちに提示して、フィードバックを得る、デザインリサーチの計画を立てる
9	デザインリサーチの実践	デザインリサーチを実践する
10	デザインリサーチの結果共有とまとめ	デザインリサーチの結果共有とまとめを行い、プロトタイプに反映する
11	グループ活動の統合	これまでの活動を統合し、今後の課題を検討する
12	グループ発表準備	グループ発表の準備を行う
13	グループ発表	グループでの取り組みを発表し、より良くするためのディスカッションを行う
14	個人研究、グループ研究の育て方	個人研究／グループ研究のテーマの発表
15	オリエンテーション(秋)	テーマの紹介、進め方の話し合い
16	良くデザインされた道具・空間は「生」を豊かにする?!	暮らしの道具・空間をフィールドワークする
17	暮らしの道具をデザインする①	基礎的な考え方を学ぶ
18	暮らしの道具をデザインする②	デザイン方法論を学ぶ
19	デザイン・ワークショップ	デザイン実習
20	こころと、感情の科学①	こころの働き、基礎を学ぶ
21	こころと、感情の科学②	理論を学び、考えを深める
22	こころと、感情の科学③	実例を学ぶ、体験する、考えを討議する
23	【話題】非言語コミュニケーション	非言語コミュニケーションを、身体の行動から捉える
24	空間の体験をデザインしよう①	空間の体験、基礎を学ぶ
25	空間の体験をデザインしよう②	アクティビティを分析し、体験をデザインする
26	空間の体験をデザインしよう③	実例を学ぶ:体験する、考えを深める
27	デザイン・ワークショップ	デザイン実習(グループ)
28	まとめ、発表、討議	個人研究の成果発表と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストを読む、発表準備、学内外でのフィールドワーク。実施可能な場合は、美術館、建築空間の探検に出かけ、可能なら夏や春に合宿がある。準備と復習は２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
各自の研究テーマを伺い、道具のデザイン、こころの科学、コミュニケーション、空間デザイン、情報学と人工知能を中心に提示する。

【参考書】
・「感情の科学」「コミュニケーションとしての身体」「こころの情報学」
・「未来のモノのデザイン」「弱いロボット」「ネット接続された心」「遊びと人間」
・「建築する身体」「アフォーダンス」「サステナブル建築」
・森の葬祭場（アスプルンド）、湖畔のアトリエ（コルビュジエ）、光の教会（安藤）、修学院離宮
・「デザインスプリント」「デザインリサーチの教科書」

【成績評価の方法と基準】
①発表や討議への参画、各回のレスポンス、②グループ実験や実習の取り組み、③成果レポート、の３つの観点を同じ配分で評価する。３つを総合した評価が到達目標の60%以上である者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
実験、体験、モノづくり実習の機会を増やし、建築探検にぜひ出かけよう

【学生が準備すべき機器他】
ノートPCがあるとグループワークや合宿の時に便利。

【情報機器・視聴覚設備の活用】
情報演習室と、甲研究室の先進的な機材を生かした実習を行う。

【参加希望者へ】
人間の「こころ」や感情のしくみ、コミュニケーション、モノづくり、建築、空間、玩具、家具のデザインに興味をもつ方に向いている。
次のような人物とのコラボレーションに興味がある：　①不完全燃焼なまま大学生活を終えたくない、②モノづくりが好き、③言葉にならない思いを大切にする、④建築、空間デザイン、インテリアに興味がある、⑤土俗的な感性をもつデザイナーとダンサー、⑥子どもや高齢者が楽しめる情報の道具を作りたい、⑦芸術家肌のプログラマー、⑧少なくともゾウとイルカには心が通じると信じている、⑨北欧建築、日本庭園、仏像に魅せられる、⑩海の中には、自分の知らない地球があと半分あることを知ってしまったダイバー、⑪人はそう簡単につながれない、SNSは孤独と分断の増幅装置であると気づいてしまった人。　好奇心旺盛で常識ある個性派、歓迎。
重要な関連科目（演習と組合せて学ぶ）
道具のデザイン学、道具による感覚・体験のデザイン、文化情報のデザインワークショップ、こころの科学、仮想世界研究、システム論

【注意】
”パソコンを実習するゼミ”ではないが、ロボットに魅惑的なしぐさのダンスをさせたり、優しくハグする人工物を作ったりすることがある。

【Outline (in English)】
This seminar allows you to study on DESIGN, Science of Mind, and Non-verbal Communication. You are also encouraged to join several types of Design Workshops including design of "experiences and artifacts" as well as a colloquium of basic literatures. We sometimes go out for a fieldwork of "art and architectures.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours for studying the relevant chapters from the text.
By the end of the seminar, students should be able to practice the principles and methodology of "User-centered eXperience Design" (UXD).
Final grade will be decided based on (1) final report, (2) presentations and group discussions, and (3) the quality of the student's contribution to workshops. Three aspects are evaluated with equal weight.

DES400GA（デザイン学 / Design science 400）

情報文化演習

（春）岡本　郁子（Ikuko OKAMOTO）、（秋）甲　洋介（Yousuke KINOE）

サブタイトル：デザイン学 ―〖身体、こころ、空間〗体験を豊かにする
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

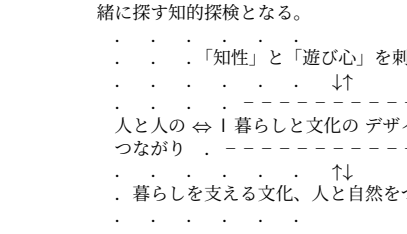
【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【コミュニケーション：身体が感じ、人がつながり、こころはダンスする】
ある人物の生活世界を豊かにすること、それは容易ではない。
こころが動き、感情がふるえ、他人とつながり、やがて体験が始まる。
他者の生活世界を深く理解し、『生』と『体験』を豊かにするデザイン学 ― それを目指す。　さぁ、いっしょにデザインを始めよう！
演習ではこころと感情の仕組みを基礎から学び　それを生かして、心地よい「空間の体験」、言葉にならない思いを伝える「新しいコミュニケーション」、知性と遊び心を刺激する「暮らしの道具」をデザインする。
時には、建築空間で人の行動をフィールドワークしたり、「モノづくり」にも挑戦する。 そのために、ふだん忘れている感覚、懐かしい匂い、言葉にならない色あい、うっとりする肌触り、ぞくっとする出会い…、そういう言葉を超えた身体と感覚の体験を呼び起こし、あなたのこころの声にじっくり耳を傾けよう。日常風景に隠れていた音たちが聴こえ始める。禅の思想が思い起こされる。
文献をじっくり読み、仲間と考えを深め、デザインを実践する演習である。
【興味あるテーマの例】
(1) 楽しくて使いやすい「道具、インテリア、家具」の制作
(2) モノづくりと体験づくり、アートとコミュニケーション、遊び心のデザイン
(3) 居心地よい空間、癒しのデザインの研究
(4) つながってるフリは寂しい、でも濃密なのはもっと怖い　〜　家族・恋人たちを繋ぐ、丁度よいつながり（コミュニケーション）のデザイン
(5) コトバで嘘をつけても、身体は本心を語ってしまう！ ー非言語コミュニケーションの研究
(6) モーションキャプチャを用いて『身体から生まれる繊細で不思議な表現』の研究
(7) 繋がりたいのに『つながれない』、メタバース（仮想世界）における「こころ」の問題
(8) 身体性認知科学、感情の科学、人工の知
(9) 身体、いのち、自然の息吹を伝える *Zen* 的文化情報空間のデザイン
(10) 人の体験はどのようにデザインされるのか

【到達目標】
・具体的な場面に対して、ユーザの視点から「感覚の体験」「道具」のデザインを実践できるようになる（人間中心デザイン技法）。
・ユーザ調査法を学び、問題の本質を洞察する力、よりよいデザインの方向性を嗅ぎ分ける美意識、研究をやり遂げる計画・実行力、を育む
君もやがて実社会に出たとき、答のない課題に取り組むことになる。そのときにここで得た力は頼りになるはずである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
「暮らしと文化のデザイン学」がテーマである。「コミュニケーション」「道具」「空間」のデザインを軸に、つぎの４つの観点を意識しながら学ぶ。ゼミ生は各回の討議、ワークショップで主体的に意見を出し合い、アイディアを提案できる。担当教員は討議やアイディアにフィードバックを返し、考えをさらに深めるよう導く。
本演習で取り組む課題のいくつかは未だ正解が分かっていない。《答え》を一緒に探す知的探検となる。



【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	ゼミの進め方、自己紹介、デザイン思考の概要
2	グループで取り組む課題の検討	誰にとっての、どんな課題を対象にするのか？ をグループで検討する
3	課題の背景、登場人物を理解する	背景情報、登場人物、課題に関する情報を共有し、主要ペルソナを決定する
4	現状シナリオを描く	現状において、どういう場面でどんな困難さがあるのかをシナリオの中で明確にし、解決すべき領域を決める
5	アイディアの検討	課題の解決案に対するアイディアを検討し、アイディアの優先順位づけを行う
6	ユーザー・ストーリーを描く	選定したアイディアを取り入れた、あるべきユーザー体験の姿をストーリーで表現する
7	プロトタイプの作成	プロトタイプを検討し、創作する
8	デザインリサーチの計画	プロトタイプを、対象とする人たちに提示して、フィードバックを得る、デザインリサーチの計画を立てる
9	デザインリサーチの実践	デザインリサーチを実践する
10	デザインリサーチの結果共有とまとめ	デザインリサーチの結果共有とまとめを行い、プロトタイプに反映する
11	グループ活動の統合	これまでの活動を統合し、今後の課題を検討する
12	グループ発表準備	グループ発表の準備を行う
13	グループ発表	グループでの取り組みを発表し、より良くするためのディスカッションを行う
14	個人研究、グループ研究の育て方	個人研究／グループ研究のテーマの発表
15	オリエンテーション(秋)	テーマの紹介、進め方の話し合い
16	良くデザインされた道具・空間は「生」を豊かにする?!	暮らしの道具・空間をフィールドワークする
17	暮らしの道具をデザインする①	基礎的な考え方を学ぶ
18	暮らしの道具をデザインする②	デザイン方法論を学ぶ
19	デザイン・ワークショップ	デザイン実習
20	こころと、感情の科学①	こころの働き、基礎を学ぶ
21	こころと、感情の科学②	理論を学び、考えを深める
22	こころと、感情の科学③	実例を学ぶ、体験する、考えを討議する
23	【話題】非言語コミュニケーション	非言語コミュニケーションを、身体の行動から捉える
24	空間の体験をデザインしよう①	空間の体験、基礎を学ぶ
25	空間の体験をデザインしよう②	アクティビティを分析し、体験をデザインする
26	空間の体験をデザインしよう③	実例を学ぶ:体験する、考えを深める
27	デザイン・ワークショップ	デザイン実習(グループ)
28	まとめ、発表、討議	個人研究の成果発表と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストを読む、発表準備、学内外でのフィールドワーク。実施可能な場合は、美術館、建築空間の探検に出かけ、可能なら夏や春に合宿がある。準備と復習は２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
各自の研究テーマを伺い、道具のデザイン、こころの科学、コミュニケーション、空間デザイン、情報学と人工知能を中心に提示する。

【参考書】
・「感情の科学」「コミュニケーションとしての身体」「こころの情報学」
・「未来のモノのデザイン」「弱いロボット」「ネット接続された心」「遊びと人間」
・「建築する身体」「アフォーダンス」「サステナブル建築」
・森の葬祭場（アスプルンド）、湖畔のアトリエ（コルビュジエ）、光の教会（安藤）、修学院離宮
・「デザインスプリント」「デザインリサーチの教科書」

【成績評価の方法と基準】
①発表や討議への参画、各回のレスポンス、②グループ実験や実習の取り組み、③成果レポート、の３つの観点を同じ配分で評価する。３つを総合した評価が到達目標の60%以上である者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
実験、体験、モノづくり実習の機会を増やし、建築探検にぜひ出かけよう

【学生が準備すべき機器他】
ノートPCがあるとグループワークや合宿の時に便利。

【情報機器・視聴覚設備の活用】
情報演習室と、甲研究室の先進的な機材を生かした実習を行う。

【参加希望者へ】
人間の「こころ」や感情のしくみ、コミュニケーション、モノづくり、建築、空間、玩具、家具のデザインに興味をもつ方に向いている。
次のような人物とのコラボレーションに興味がある：　①不完全燃焼なまま大学生活を終えたくない、②モノづくりが好き、③言葉にならない思いを大切にする、④建築、空間デザイン、インテリアに興味がある、⑤土俗的な感性をもつデザイナーとダンサー、⑥子どもや高齢者が楽しめる情報の道具を作りたい、⑦芸術家肌のプログラマー、⑧少なくともゾウとイルカには心が通じると信じている、⑨北欧建築、日本庭園、仏像に魅せられる、⑩海の中には、自分の知らない地球があと半分あることを知ってしまったダイバー、⑪人はそう簡単につながれない、SNSは孤独と分断の増幅装置であると気づいてしまった人。　好奇心旺盛で常識ある個性派、歓迎。
重要な関連科目（演習と組合せて学ぶ）
道具のデザイン学、道具による感覚・体験のデザイン、文化情報のデザインワークショップ、こころの科学、仮想世界研究、システム論

【注意】
”パソコンを実習するゼミ”ではないが、ロボットに魅惑的なしぐさのダンスをさせたり、優しくハグする人工物を作ったりすることがある。

【Outline (in English)】
This seminar allows you to study on DESIGN, Science of Mind, and Non-verbal Communication. You are also encouraged to join several types of Design Workshops including design of "experiences and artifacts" as well as a colloquium of basic literatures. We sometimes go out for a fieldwork of "art and architectures.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours for studying the relevant chapters from the text.
By the end of the seminar, students should be able to practice the principles and methodology of "User-centered eXperience Design" (UXD).
Final grade will be decided based on (1) final report, (2) presentations and group discussions, and (3) the quality of the student's contribution to workshops. Three aspects are evaluated with equal weight.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

重定　如彦

サブタイトル：コンピュータエンターテイメント
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現在、われわれの身の周りにはコンピュータを使ったありとあらゆるエンターテイメントが満ち溢れており、電車の中などでスマートフォンや携帯のゲーム機を楽しんでいる人の姿はめずらしくなくなってきている。また、単なる娯楽だけではなく、学習の場においてもコンピュータを使って楽しみながら学習効果を上げることを目的としたエデュテイメントと呼ばれるソフトウェアが注目を浴びている。また、近年では小学校からプログラミング教育が導入されるなど、プログラミングの技能の取得の必要性がますます高まってきている。
本演習ではそういったコンピュータを使ったエンターテイメントについて学び、自ら作品を作り上げていくことを目標とする。

【到達目標】
コンピュータエンターテイメントといってもそのジャンルは幅広く、プラットフォームもパソコン、ゲーム機、携帯端末を使ったものなど様々である。コンピュータエンターテイメントの特徴や、コンピュータエンターテイメントをどのようにして実現するかについて学び、理解する。
次にソフトを作成するための技法（プログラミングやウェブを使ったシステムの使い方）を学び、実際にソフトウェアを作成する。
われわれは普段はコンピュータのコンテンツを消費する立場であるが、コンテンツを提供する側の立場に立つことによって新しい視点を獲得し、新しいものをクリエイトする力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習の概要は以下の通り。
・輪講
コンピュータエンターテイメントに関する様々なテーマについて輪講を行い、基礎知識を身につける。
・プログラミングの演習
本演習の最終目的は何らかの作品を作成することであるが、そのためにはプログラミングの知識が必要不可欠になる。そのための演習を行う。
なお、学生のプログラミングの習熟度が異なっている場合は、習熟度別にグループを作り、演習を行う予定である。
・作品の設定と実習
3年次ではグループごとにいくつかの作品を設定し、その作品を製作する実習を行う。また、作品に関して中間発表と作品発表を行う。後期には対戦可能な作品を作成し、お互いのグループで対戦会を行う予定である。
・テーマの設定と構想発表
3年次の最後に、輪講やプログラミング演習を通じて、4年次に作成する作品に関するテーマを各自考え、構想を発表する。
・個人研究
4年次では各自のテーマに従って研究を行い、各自の研究成果をまとめ、発表する。
・国際文化情報学会における発表
各自の研究成果を国際文化情報学会において発表する。また、国際文化情報学会での発表の際に得られた意見などを自分の研究にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	概論とテーマ設定	コンピュータエンターテイメントの概論について学び、グループごとの輪講のテーマを設定する
2	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（変数について）
3	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（条件分岐について）
4	グループ３の輪講と演習。2回目のテーマ設定。	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（繰り返しについて）。2回目の輪講のテーマの設定を行う。
5	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（関数について）
6	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（ファイル操作について）
7	グループ３の輪講と演習	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（アルゴリズムについて）。なお、必要であれば、演習は引き続き行う。
8	作品のテーマの設定と実習	グループごとに作成する簡単な作品のテーマを設定し、実習を行う
9	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
10	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
11	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
12	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
13	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
14	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
15	品評会とまとめ	各グループの作品の品評会をおこない、春学期のまとめを行う
16	秋学期のテーマの設定と実習	お互いが対戦可能な作品のテーマを設定し、実習を行う
17	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
18	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
19	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
20	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
21	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
22	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
23	作品の品評会と次のテーマの設定	お互いの作品を対戦させ、品評会を行う。次の少し複雑な作品のテーマの設定を行う
24	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
25	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
26	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
27	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
28	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自、輪講の準備や作品の作成の作業などを行うこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【参考書】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【成績評価の方法と基準】
授業の参加度（３０％）、輪講や作品の制作（７０％）で評価する。
発表資料や作品は本授業で指示する場所に提出すること。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生のプログラミングの習熟度別にグループを分けたほうが良いという意見があったので、臨機応変にグループ分けを行う予定である。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミ室のコンピュータを使用する。

【その他の重要事項】
　プログラミングは一見難しく、とっつきにくそうに思えるかもしれないが、しっかりと勉強すれば2年間で自分自身の作品を作ることは十分に可能である。過去のゼミ生の一人に、途中まではあまりプログラミングに興味がなかったが、16パズルを作成する演習を行ったところプログラミングに興味を持ち始め、自分で本などを購入してシューティングゲームを作成した学生がいた。本ゼミでは、やる気があればプログラミングの未経験者でも歓迎する。
　また、以下のウェブページに過去のゼミの論文や、ゼミ生の作品の一部があるので興味のある方は参考にして欲しい。ただし、過去のゼミのテーマは現在のものと異なっているので、過去のゼミ論にはコンピュータエンターテイメントとは異なるテーマのものがある。
https://www.edu.i.hosei.ac.jp/ sigesada/zemi/
また、Pythonで○×ゲームのAIを作成する記事を下記のURLで連載しているので興味がある方は参考にして下さい。
https://qiita.com/ysgeso/items/04deccdfe7ec15314c48

【Outline (in English)】
In recent years, computer entertainments are very close to our daily life, and there are many people playing computer entertainment by smart phone in the train.　Moreover, software called edutainment software which uses entertainment for studying draws many people's attention. Objectives of this class are to study computer entertainment and to create original computer softwares.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours.
Evaluation will be made on the basis of class participation (30%), circular lectures and production of works (70%).
Presentation materials and works should be submitted.　Based on this grading method, students who have achieved at least 60% of the achievement goals for this class will be considered to have passed the class.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

重定　如彦

サブタイトル：コンピュータエンターテイメント
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現在、われわれの身の周りにはコンピュータを使ったありとあらゆるエンターテイメントが満ち溢れており、電車の中などでスマートフォンや携帯のゲーム機を楽しんでいる人の姿はめずらしくなくなってきている。また、単なる娯楽だけではなく、学習の場においてもコンピュータを使って楽しみながら学習効果を上げることを目的としたエデュテイメントと呼ばれるソフトウェアが注目を浴びている。また、近年では小学校からプログラミング教育が導入されるなど、プログラミングの技能の取得の必要性がますます高まってきている。
本演習ではそういったコンピュータを使ったエンターテイメントについて学び、自ら作品を作り上げていくことを目標とする。

【到達目標】
コンピュータエンターテイメントといってもそのジャンルは幅広く、プラットフォームもパソコン、ゲーム機、携帯端末を使ったものなど様々である。コンピュータエンターテイメントの特徴や、コンピュータエンターテイメントをどのようにして実現するかについて学び、理解する。
次にソフトを作成するための技法（プログラミングやウェブを使ったシステムの使い方）を学び、実際にソフトウェアを作成する。
われわれは普段はコンピュータのコンテンツを消費する立場であるが、コンテンツを提供する側の立場に立つことによって新しい視点を獲得し、新しいものをクリエイトする力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習の概要は以下の通り。
・輪講
コンピュータエンターテイメントに関する様々なテーマについて輪講を行い、基礎知識を身につける。
・プログラミングの演習
本演習の最終目的は何らかの作品を作成することであるが、そのためにはプログラミングの知識が必要不可欠になる。そのための演習を行う。
なお、学生のプログラミングの習熟度が異なっている場合は、習熟度別にグループを作り、演習を行う予定である。
・作品の設定と実習
3年次ではグループごとにいくつかの作品を設定し、その作品を製作する実習を行う。また、作品に関して中間発表と作品発表を行う。後期には対戦可能な作品を作成し、お互いのグループで対戦会を行う予定である。
・テーマの設定と構想発表
3年次の最後に、輪講やプログラミング演習を通じて、4年次に作成する作品に関するテーマを各自考え、構想を発表する。
・個人研究
4年次では各自のテーマに従って研究を行い、各自の研究成果をまとめ、発表する。
・国際文化情報学会における発表
各自の研究成果を国際文化情報学会において発表する。また、国際文化情報学会での発表の際に得られた意見などを自分の研究にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	概論とテーマ設定	コンピュータエンターテイメントの概論について学び、グループごとの輪講のテーマを設定する
2	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（変数について）
3	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（条件分岐について）
4	グループ３の輪講と演習。2回目のテーマ設定。	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（繰り返しについて）。2回目の輪講のテーマの設定を行う。
5	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（関数について）
6	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（ファイル操作について）
7	グループ３の輪講と演習	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（アルゴリズムについて）。なお、必要であれば、演習は引き続き行う。
8	作品のテーマの設定と実習	グループごとに作成する簡単な作品のテーマを設定し、実習を行う
9	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
10	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
11	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
12	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
13	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
14	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
15	品評会とまとめ	各グループの作品の品評会をおこない、春学期のまとめを行う
16	秋学期のテーマの設定と実習	お互いが対戦可能な作品のテーマを設定し、実習を行う
17	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
18	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
19	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
20	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
21	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
22	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
23	作品の品評会と次のテーマの設定	お互いの作品を対戦させ、品評会を行う。次の少し複雑な作品のテーマの設定を行う
24	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
25	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
26	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
27	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
28	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自、輪講の準備や作品の作成の作業などを行うこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【参考書】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【成績評価の方法と基準】
授業の参加度（３０％）、輪講や作品の制作（７０％）で評価する。
発表資料や作品は本授業で指示する場所に提出すること。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生のプログラミングの習熟度別にグループを分けたほうが良いという意見があったので、臨機応変にグループ分けを行う予定である。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミ室のコンピュータを使用する。

【その他の重要事項】
　プログラミングは一見難しく、とっつきにくそうに思えるかもしれないが、しっかりと勉強すれば2年間で自分自身の作品を作ることは十分に可能である。過去のゼミ生の一人に、途中まではあまりプログラミングに興味がなかったが、16パズルを作成する演習を行ったところプログラミングに興味を持ち始め、自分で本などを購入してシューティングゲームを作成した学生がいた。本ゼミでは、やる気があればプログラミングの未経験者でも歓迎する。
　また、以下のウェブページに過去のゼミの論文や、ゼミ生の作品の一部があるので興味のある方は参考にして欲しい。ただし、過去のゼミのテーマは現在のものと異なっているので、過去のゼミ論にはコンピュータエンターテイメントとは異なるテーマのものがある。
https://www.edu.i.hosei.ac.jp/ sigesada/zemi/
また、Pythonで○×ゲームのAIを作成する記事を下記のURLで連載しているので興味がある方は参考にして下さい。
https://qiita.com/ysgeso/items/04deccdfe7ec15314c48

【Outline (in English)】
In recent years, computer entertainments are very close to our daily life, and there are many people playing computer entertainment by smart phone in the train.　Moreover, software called edutainment software which uses entertainment for studying draws many people's attention. Objectives of this class are to study computer entertainment and to create original computer softwares.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours.
Evaluation will be made on the basis of class participation (30%), circular lectures and production of works (70%).
Presentation materials and works should be submitted.　Based on this grading method, students who have achieved at least 60% of the achievement goals for this class will be considered to have passed the class.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

重定　如彦

サブタイトル：コンピュータエンターテイメント
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現在、われわれの身の周りにはコンピュータを使ったありとあらゆるエンターテイメントが満ち溢れており、電車の中などでスマートフォンや携帯のゲーム機を楽しんでいる人の姿はめずらしくなくなってきている。また、単なる娯楽だけではなく、学習の場においてもコンピュータを使って楽しみながら学習効果を上げることを目的としたエデュテイメントと呼ばれるソフトウェアが注目を浴びている。また、近年では小学校からプログラミング教育が導入されるなど、プログラミングの技能の取得の必要性がますます高まってきている。
本演習ではそういったコンピュータを使ったエンターテイメントについて学び、自ら作品を作り上げていくことを目標とする。

【到達目標】
コンピュータエンターテイメントといってもそのジャンルは幅広く、プラットフォームもパソコン、ゲーム機、携帯端末を使ったものなど様々である。コンピュータエンターテイメントの特徴や、コンピュータエンターテイメントをどのようにして実現するかについて学び、理解する。
次にソフトを作成するための技法（プログラミングやウェブを使ったシステムの使い方）を学び、実際にソフトウェアを作成する。
われわれは普段はコンピュータのコンテンツを消費する立場であるが、コンテンツを提供する側の立場に立つことによって新しい視点を獲得し、新しいものをクリエイトする力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習の概要は以下の通り。
・輪講
コンピュータエンターテイメントに関する様々なテーマについて輪講を行い、基礎知識を身につける。
・プログラミングの演習
本演習の最終目的は何らかの作品を作成することであるが、そのためにはプログラミングの知識が必要不可欠になる。そのための演習を行う。
なお、学生のプログラミングの習熟度が異なっている場合は、習熟度別にグループを作り、演習を行う予定である。
・作品の設定と実習
3年次ではグループごとにいくつかの作品を設定し、その作品を製作する実習を行う。また、作品に関して中間発表と作品発表を行う。後期には対戦可能な作品を作成し、お互いのグループで対戦会を行う予定である。
・テーマの設定と構想発表
3年次の最後に、輪講やプログラミング演習を通じて、4年次に作成する作品に関するテーマを各自考え、構想を発表する。
・個人研究
4年次では各自のテーマに従って研究を行い、各自の研究成果をまとめ、発表する。
・国際文化情報学会における発表
各自の研究成果を国際文化情報学会において発表する。また、国際文化情報学会での発表の際に得られた意見などを自分の研究にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	概論とテーマ設定	コンピュータエンターテイメントの概論について学び、グループごとの輪講のテーマを設定する
2	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（変数について）
3	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（条件分岐について）
4	グループ３の輪講と演習。2回目のテーマ設定。	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（繰り返しについて）。2回目の輪講のテーマの設定を行う。
5	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（関数について）
6	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（ファイル操作について）
7	グループ３の輪講と演習	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（アルゴリズムについて）。なお、必要であれば、演習は引き続き行う。
8	作品のテーマの設定と実習	グループごとに作成する簡単な作品のテーマを設定し、実習を行う
9	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
10	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
11	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
12	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
13	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
14	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
15	品評会とまとめ	各グループの作品の品評会をおこない、春学期のまとめを行う
16	秋学期のテーマの設定と実習	お互いが対戦可能な作品のテーマを設定し、実習を行う
17	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
18	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
19	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
20	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
21	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
22	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
23	作品の品評会と次のテーマの設定	お互いの作品を対戦させ、品評会を行う。次の少し複雑な作品のテーマの設定を行う
24	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
25	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
26	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
27	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
28	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自、輪講の準備や作品の作成の作業などを行うこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【参考書】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【成績評価の方法と基準】
授業の参加度（３０％）、輪講や作品の制作（７０％）で評価する。
発表資料や作品は本授業で指示する場所に提出すること。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生のプログラミングの習熟度別にグループを分けたほうが良いという意見があったので、臨機応変にグループ分けを行う予定である。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミ室のコンピュータを使用する。

【その他の重要事項】
　プログラミングは一見難しく、とっつきにくそうに思えるかもしれないが、しっかりと勉強すれば2年間で自分自身の作品を作ることは十分に可能である。過去のゼミ生の一人に、途中まではあまりプログラミングに興味がなかったが、16パズルを作成する演習を行ったところプログラミングに興味を持ち始め、自分で本などを購入してシューティングゲームを作成した学生がいた。本ゼミでは、やる気があればプログラミングの未経験者でも歓迎する。
　また、以下のウェブページに過去のゼミの論文や、ゼミ生の作品の一部があるので興味のある方は参考にして欲しい。ただし、過去のゼミのテーマは現在のものと異なっているので、過去のゼミ論にはコンピュータエンターテイメントとは異なるテーマのものがある。
https://www.edu.i.hosei.ac.jp/ sigesada/zemi/
また、Pythonで○×ゲームのAIを作成する記事を下記のURLで連載しているので興味がある方は参考にして下さい。
https://qiita.com/ysgeso/items/04deccdfe7ec15314c48

【Outline (in English)】
In recent years, computer entertainments are very close to our daily life, and there are many people playing computer entertainment by smart phone in the train.　Moreover, software called edutainment software which uses entertainment for studying draws many people's attention. Objectives of this class are to study computer entertainment and to create original computer softwares.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours.
Evaluation will be made on the basis of class participation (30%), circular lectures and production of works (70%).
Presentation materials and works should be submitted.　Based on this grading method, students who have achieved at least 60% of the achievement goals for this class will be considered to have passed the class.

FRI400GA（情報学フロンティア / Frontiers of informatics 400）

情報文化演習

重定　如彦

サブタイトル：コンピュータエンターテイメント
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現在、われわれの身の周りにはコンピュータを使ったありとあらゆるエンターテイメントが満ち溢れており、電車の中などでスマートフォンや携帯のゲーム機を楽しんでいる人の姿はめずらしくなくなってきている。また、単なる娯楽だけではなく、学習の場においてもコンピュータを使って楽しみながら学習効果を上げることを目的としたエデュテイメントと呼ばれるソフトウェアが注目を浴びている。また、近年では小学校からプログラミング教育が導入されるなど、プログラミングの技能の取得の必要性がますます高まってきている。
本演習ではそういったコンピュータを使ったエンターテイメントについて学び、自ら作品を作り上げていくことを目標とする。

【到達目標】
コンピュータエンターテイメントといってもそのジャンルは幅広く、プラットフォームもパソコン、ゲーム機、携帯端末を使ったものなど様々である。コンピュータエンターテイメントの特徴や、コンピュータエンターテイメントをどのようにして実現するかについて学び、理解する。
次にソフトを作成するための技法（プログラミングやウェブを使ったシステムの使い方）を学び、実際にソフトウェアを作成する。
われわれは普段はコンピュータのコンテンツを消費する立場であるが、コンテンツを提供する側の立場に立つことによって新しい視点を獲得し、新しいものをクリエイトする力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習の概要は以下の通り。
・輪講
コンピュータエンターテイメントに関する様々なテーマについて輪講を行い、基礎知識を身につける。
・プログラミングの演習
本演習の最終目的は何らかの作品を作成することであるが、そのためにはプログラミングの知識が必要不可欠になる。そのための演習を行う。
なお、学生のプログラミングの習熟度が異なっている場合は、習熟度別にグループを作り、演習を行う予定である。
・作品の設定と実習
3年次ではグループごとにいくつかの作品を設定し、その作品を製作する実習を行う。また、作品に関して中間発表と作品発表を行う。後期には対戦可能な作品を作成し、お互いのグループで対戦会を行う予定である。
・テーマの設定と構想発表
3年次の最後に、輪講やプログラミング演習を通じて、4年次に作成する作品に関するテーマを各自考え、構想を発表する。
・個人研究
4年次では各自のテーマに従って研究を行い、各自の研究成果をまとめ、発表する。
・国際文化情報学会における発表
各自の研究成果を国際文化情報学会において発表する。また、国際文化情報学会での発表の際に得られた意見などを自分の研究にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	概論とテーマ設定	コンピュータエンターテイメントの概論について学び、グループごとの輪講のテーマを設定する
2	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（変数について）
3	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（条件分岐について）
4	グループ３の輪講と演習。2回目のテーマ設定。	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（繰り返しについて）。2回目の輪講のテーマの設定を行う。
5	グループ１の輪講と演習	グループ１のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（関数について）
6	グループ２の輪講と演習	グループ２のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（ファイル操作について）
7	グループ３の輪講と演習	グループ３のテーマの輪講を行う。また、プログラミングの演習を行う（アルゴリズムについて）。なお、必要であれば、演習は引き続き行う。
8	作品のテーマの設定と実習	グループごとに作成する簡単な作品のテーマを設定し、実習を行う
9	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
10	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
11	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
12	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
13	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
14	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
15	品評会とまとめ	各グループの作品の品評会をおこない、春学期のまとめを行う
16	秋学期のテーマの設定と実習	お互いが対戦可能な作品のテーマを設定し、実習を行う
17	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
18	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
19	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
20	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
21	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
22	グループ３の作品発表と実習	グループ３の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
23	作品の品評会と次のテーマの設定	お互いの作品を対戦させ、品評会を行う。次の少し複雑な作品のテーマの設定を行う
24	グループ１の作品の中間報告と実習	グループ１の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
25	グループ２の作品の中間報告と実習	グループ２の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
26	グループ３の作品の中間報告と実習	グループ３の作品の中間報告を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
27	グループ１の作品発表と実習	グループ１の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う
28	グループ２の作品発表と実習	グループ２の作品の発表を行う。またグループごとに作品を作成する実習を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自、輪講の準備や作品の作成の作業などを行うこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【参考書】
必要に応じて各自のレベルにあったものを指示する。

【成績評価の方法と基準】
授業の参加度（３０％）、輪講や作品の制作（７０％）で評価する。
発表資料や作品は本授業で指示する場所に提出すること。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生のプログラミングの習熟度別にグループを分けたほうが良いという意見があったので、臨機応変にグループ分けを行う予定である。

【学生が準備すべき機器他】
ゼミ室のコンピュータを使用する。

【その他の重要事項】
　プログラミングは一見難しく、とっつきにくそうに思えるかもしれないが、しっかりと勉強すれば2年間で自分自身の作品を作ることは十分に可能である。過去のゼミ生の一人に、途中まではあまりプログラミングに興味がなかったが、16パズルを作成する演習を行ったところプログラミングに興味を持ち始め、自分で本などを購入してシューティングゲームを作成した学生がいた。本ゼミでは、やる気があればプログラミングの未経験者でも歓迎する。
　また、以下のウェブページに過去のゼミの論文や、ゼミ生の作品の一部があるので興味のある方は参考にして欲しい。ただし、過去のゼミのテーマは現在のものと異なっているので、過去のゼミ論にはコンピュータエンターテイメントとは異なるテーマのものがある。
https://www.edu.i.hosei.ac.jp/ sigesada/zemi/
また、Pythonで○×ゲームのAIを作成する記事を下記のURLで連載しているので興味がある方は参考にして下さい。
https://qiita.com/ysgeso/items/04deccdfe7ec15314c48

【Outline (in English)】
In recent years, computer entertainments are very close to our daily life, and there are many people playing computer entertainment by smart phone in the train. Moreover, software called edutainment software which uses entertainment for studying draws many people's attention. Objectives of this class are to study computer entertainment and to create original computer softwares.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours.
Evaluation will be made on the basis of class participation (30%), circular lectures and production of works (70%).
Presentation materials and works should be submitted. Based on this grading method, students who have achieved at least 60% of the achievement goals for this class will be considered to have passed the class.

SES400GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 400）

国際社会演習

島野　智之

サブタイトル：持続可能な社会づくりと生物
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地球環境の加速的破壊が進むなか,持続可能な社会作りを考える．フィールドワーク等を通して，我々はどうあるべきかを各自考える．世界に視野を広げ見直してみる．「生き物と文化」について考える．ここ数年は鳥と表象，ノネコ，ペットの問題，ビーガン．生き物の命の問題など採り上げているが，それに限らない持続可能性についてのテーマについて取り組んでも良い．
適宜フィールドワークなどを取り入れて，社会の持続可能性について考える機会を作る．

【到達目標】
与えられた課題をこなすだけでなく,自分で問題点を見つけて取り組むことが出来るようになること．具体的には,積極的に現場に出かけて情報を収集できるようになること．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
授業だけではなく夏期休暇などを利用して，フィールドワークを計画している．
また,メイン・テーマ以外に,自由な視点でプロジェクトを企画・実践し,秋学期に開催される学部内の研究発表会に参加する（予定）.そして,論文作成に取り組む.
特に，教室を出てフィールドワークを考える（たとえば，地方への訪問など）．また，ゼミに関係したゲストをお招きする予定.
適宜，メール添付書類等を使った課題提出とその添削を行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介および1年間の授業計画
第2回	問いの力	問いあつめ 水平の問いと垂直の問い
第3回	問いの作法	問いあつめ オープンな問いとクローズな問い
第4回	４年生の論文テーマ発表１	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第5回	SDG s 新聞ワークショップ①	関心あるテーマに関して記事を収集し、紹介する。
第6回	SDG s 新聞ワークショップ ②	関心あるテーマに関する記事をまとめ、新聞を作成する
第7回	研究論文の要約および紹介①	関心あるテーマに関する記事・論文を探しまとめること．また，適切な記事・論文を選び出す検索方法を学ぶ.
第8回	研究論文の要約および紹介②	記事・論文をまとめ、プレゼンテーション資料を作成し、内容を紹介する。
第9回	SDGsワークショップ①	SDGs概論
第10回	SDGsワークショップ②	2030SDGsカードゲームでSDGsを体感する。
第11回	SDGsワークショップ③	2030年およびその先の世界について対話する。
第12回	3年生の研究テーマ発表	前回，前々回の討議を踏まえて，3年生の調査研究テーマを発表する.
第13回	４年生の論文の中間報告①	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．次週に修正を行う.
第14回	４年生の論文の中間報告②	修正を行った論文のテーマについて，さらにプレゼンテーションを交えて発表. さらに，コメントを付けて討議し修正する.
第15回	生物多様性ワークショップ	生物多様性について対話し、理解を深める
第16回	4年生の論文中間作成（前半）	進捗状況に基づいて，作成状況を報告，プレゼンテーションを行う．次週に修正.
第17回	4年生の論文中間作成（後半）	修正されたものについて，コメントを述べ，その後の発展の方向づけを行う.
第18回	3年生のプロジェクト成果発表	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第19回	国際文化学部学会準備①	テーマを出し合って討議する.
第20回	国際文化学部学会準備②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第21回	国際文化学部学会準備③	まとめ
第22回	4年生の論文発表①	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する. (4年生の１／３について)
第23回	4年生の論文発表②	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認（4年生の次の１／３について）
第24回	4年生の論文発表③	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認．（4年生の最後の１／３について），全員へのコメントと確認.
第25回	個人研究作成①	テーマを出し合って討議する.
第26回	個人研究作成②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第27回	個人研究作成③	まとめ
第28回	個人研究発表会	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分で課題を見つけ,多角的に取り組むこと．文献を収集するだけでなく,直接,調査・取材活動をおこなうこと．可能な限り,情報源に当たり，なにが，オリジナルであるのかを明確にした上で，レポートなどを作成すること．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします.

【テキスト（教科書）】
テキストは用いず,必要な資料はプリントして配布します.

【参考書】
「地球の論点 ―現実的な環境主義者のマニフェスト」 スチュアート ブランド (著), 仙名 紀 (翻訳), 英治出版, 2011.
他は必要に応じて,その都度,指示します.また,ゼミに関係したゲストをお招きする予定です.

【成績評価の方法と基準】
年度末までにまとめた各自の成果（50%）,およびそのために各自が行った企画・調査活動状況（＝平常点: 50％）.頑張る姿勢,真摯な姿勢を評価したいと思います.
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミは,受け身的な授業と異なり積極的にみんなで作り上げていくものです.４年生は後輩をサポートしお手本となるように心掛け,３年生は先輩をよく見て学んで下さい.

【学生が準備すべき機器他】
授業には,主としてパワーポイント映像およびビデオ資料を用い，各自に,パワーポイント，あるいは，ポスターなどでプレゼンテーションをしていただくことがあります.

【その他の重要事項】
本ゼミの目標は,文献などの間接情報だけに頼るのではなく,直接出向いて生の情報に触れ,それらを通して学ぶことの面白さを知り,自己を鍛えることでもあります.
そして,グループ活動を通じて切磋琢磨し,相手を思いやる心を身に付け,少しでも一人前の社会人に近づくことです.
与えられたことを行うだけでは一人前とは言えず,自分でさらに課題を見つけて取り組んでこそ,一人前と言えます.そのためには,小さな事でも損得を考えずに手抜きせず真面目に取り組むことが大切です.
授業の各回のテーマは,受講生の希望や最新のトピックスなど取り入れることがありますので,内容や順番が異なる場合があります.

【Outline (in English)】
Given the accelerated destruction of the global environment, consider creating a sustainable society through fieldwork.

Fieldwork will be incorporated as appropriate to provide students with opportunities to think about the sustainability of society.
At the end of this course, participants are expected to be able to not only solve a given task, but also find and tackle the problem on your own. Specifically, participants will be able to actively go to the site and collect information.
Specifically, participants will be able to actively visit the site and collect information. Expected learning activities outside the classroom include collecting information, reading papers, completing homework, and preparing presentations (2 hours for each lecture).
Your overall grade in the class will be decided
based on the following:
Usual performance score 50%, Reports 50%.
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

SES400GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 400）

国際社会演習

島野　智之

サブタイトル：持続可能な社会づくりと生物
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地球環境の加速的破壊が進むなか,持続可能な社会作りを考える．フィールドワーク等を通して，我々はどうあるべきかを各自考える．世界に視野を広げ見直してみる．「生き物と文化」について考える．ここ数年は鳥と表象，ノネコ，ペットの問題，ビーガン．生き物の命の問題など採り上げているが，それに限らない持続可能性についてのテーマについて取り組んでも良い．
適宜フィールドワークなどを取り入れて，社会の持続可能性について考える機会を作る．

【到達目標】
与えられた課題をこなすだけでなく,自分で問題点を見つけて取り組むことが出来るようになること．具体的には,積極的に現場に出かけて情報を収集できるようになること．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
授業だけではなく夏期休暇などを利用して，フィールドワークを計画している．
また,メイン・テーマ以外に,自由な視点でプロジェクトを企画・実践し,秋学期に開催される学部内の研究発表会に参加する（予定）.そして,論文作成に取り組む.
特に，教室を出てフィールドワークを考える（たとえば，地方への訪問など）．また，ゼミに関係したゲストをお招きする予定.
適宜，メール添付書類等を使った課題提出とその添削を行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介および1年間の授業計画
第2回	問いの力	問いあつめ 水平の問いと垂直の問い
第3回	問いの作法	問いあつめ オープンな問いとクローズな問い
第4回	４年生の論文テーマ発表１	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第5回	SDG s 新聞ワークショップ①	関心あるテーマに関して記事を収集し、紹介する。
第6回	SDG s 新聞ワークショップ ②	関心あるテーマに関する記事をまとめ、新聞を作成する
第7回	研究論文の要約および紹介①	関心あるテーマに関する記事・論文を探しまとめること．また，適切な記事・論文を選び出す検索方法を学ぶ.
第8回	研究論文の要約および紹介②	記事・論文をまとめ、プレゼンテーション資料を作成し、内容を紹介する。
第9回	SDGsワークショップ①	SDGs概論
第10回	SDGsワークショップ②	2030SDGsカードゲームでSDGsを体感する。
第11回	SDGsワークショップ③	2030年およびその先の世界について対話する。
第12回	3年生の研究テーマ発表	前回，前々回の討議を踏まえて，3年生の調査研究テーマを発表する.
第13回	４年生の論文の中間報告①	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．次週に修正を行う.
第14回	４年生の論文の中間報告②	修正を行った論文のテーマについて，さらにプレゼンテーションを交えて発表. さらに，コメントを付けて討議し修正する.
第15回	生物多様性ワークショップ	生物多様性について対話し、理解を深める
第16回	4年生の論文中間作成（前半）	進捗状況に基づいて，作成状況を報告，プレゼンテーションを行う．次週に修正.
第17回	4年生の論文中間作成（後半）	修正されたものについて，コメントを述べ，その後の発展の方向づけを行う.
第18回	3年生のプロジェクト成果発表	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第19回	国際文化学部学会準備①	テーマを出し合って討議する.
第20回	国際文化学部学会準備②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第21回	国際文化学部学会準備③	まとめ
第22回	4年生の論文発表①	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する. (4年生の１／３について)
第23回	4年生の論文発表②	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認（4年生の次の１／３について）
第24回	4年生の論文発表③	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認．（4年生の最後の１／３について），全員へのコメントと確認.
第25回	個人研究作成①	テーマを出し合って討議する.
第26回	個人研究作成②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第27回	個人研究作成③	まとめ
第28回	個人研究発表会	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分で課題を見つけ,多角的に取り組むこと．文献を収集するだけでなく,直接,調査・取材活動をおこなうこと．可能な限り,情報源に当たり，なにが，オリジナルであるのかを明確にした上で，レポートなどを作成すること．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします.

【テキスト（教科書）】
テキストは用いず,必要な資料はプリントして配布します.

【参考書】
「地球の論点 ―現実的な環境主義者のマニフェスト」 スチュアート ブランド (著), 仙名 紀 (翻訳), 英治出版, 2011.
他は必要に応じて,その都度,指示します.また,ゼミに関係したゲストをお招きする予定です.

【成績評価の方法と基準】
年度末までにまとめた各自の成果（50%）,およびそのために各自が行った企画・調査活動状況（＝平常点: 50％）.頑張る姿勢,真摯な姿勢を評価したいと思います.
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミは,受け身的な授業と異なり積極的にみんなで作り上げていくものです.４年生は後輩をサポートしお手本となるように心掛け,３年生は先輩をよく見て学んで下さい.

【学生が準備すべき機器他】
授業には,主としてパワーポイント映像およびビデオ資料を用い，各自に,パワーポイント，あるいは，ポスターなどでプレゼンテーションをしていただくことがあります.

【その他の重要事項】
本ゼミの目標は,文献などの間接情報だけに頼るのではなく,直接出向いて生の情報に触れ,それらを通して学ぶことの面白さを知り,自己を鍛えることでもあります.
そして,グループ活動を通じて切磋琢磨し,相手を思いやる心を身に付け,少しでも一人前の社会人に近づくことです.
与えられたことを行うだけでは一人前とは言えず,自分でさらに課題を見つけて取り組んでこそ,一人前と言えます.そのためには,小さな事でも損得を考えずに手抜きせず真面目に取り組むことが大切です.
授業の各回のテーマは,受講生の希望や最新のトピックスなど取り入れることがありますので,内容や順番が異なる場合があります.

【Outline (in English)】
Given the accelerated destruction of the global environment, consider creating a sustainable society through fieldwork.

Fieldwork will be incorporated as appropriate to provide students with opportunities to think about the sustainability of society.
At the end of this course, participants are expected to be able to not only solve a given task, but also find and tackle the problem on your own. Specifically, participants will be able to actively go to the site and collect information.
Specifically, participants will be able to actively visit the site and collect information. Expected learning activities outside the classroom include collecting information, reading papers, completing homework, and preparing presentations (2 hours for each lecture).
Your overall grade in the class will be decided
based on the following:
Usual performance score 50%, Reports 50%.
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

SES400GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 400）

国際社会演習

島野　智之

サブタイトル：持続可能な社会づくりと生物
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地球環境の加速的破壊が進むなか,持続可能な社会作りを考える．フィールドワーク等を通して，我々はどうあるべきかを各自考える．世界に視野を広げ見直してみる．「生き物と文化」について考える．ここ数年は鳥と表象，ノネコ，ペットの問題，ビーガン．生き物の命の問題など採り上げているが，それに限らない持続可能性についてのテーマについて取り組んでも良い．
適宜フィールドワークなどを取り入れて，社会の持続可能性について考える機会を作る．

【到達目標】
与えられた課題をこなすだけでなく,自分で問題点を見つけて取り組むことが出来るようになること．具体的には,積極的に現場に出かけて情報を収集できるようになること．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
授業だけではなく夏期休暇などを利用して，フィールドワークを計画している．
また,メイン・テーマ以外に,自由な視点でプロジェクトを企画・実践し,秋学期に開催される学部内の研究発表会に参加する（予定）.そして,論文作成に取り組む.
特に，教室を出てフィールドワークを考える（たとえば，地方への訪問など）．また，ゼミに関係したゲストをお招きする予定.
適宜，メール添付書類等を使った課題提出とその添削を行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介および1年間の授業計画
第2回	問いの力	問いあつめ 水平の問いと垂直の問い
第3回	問いの作法	問いあつめ オープンな問いとクローズな問い
第4回	４年生の論文テーマ発表１	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第5回	SDG s 新聞ワークショップ①	関心あるテーマに関して記事を収集し、紹介する。
第6回	SDG s 新聞ワークショップ ②	関心あるテーマに関する記事をまとめ、新聞を作成する
第7回	研究論文の要約および紹介①	関心あるテーマに関する記事・論文を探しまとめること．また，適切な記事・論文を選び出す検索方法を学ぶ.
第8回	研究論文の要約および紹介②	記事・論文をまとめ、プレゼンテーション資料を作成し、内容を紹介する。
第9回	SDGsワークショップ①	SDGs概論
第10回	SDGsワークショップ②	2030SDGsカードゲームでSDGsを体感する。
第11回	SDGsワークショップ③	2030年およびその先の世界について対話する。
第12回	3年生の研究テーマ発表	前回，前々回の討議を踏まえて，3年生の調査研究テーマを発表する.
第13回	４年生の論文の中間報告①	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．次週に修正を行う.
第14回	４年生の論文の中間報告②	修正を行った論文のテーマについて，さらにプレゼンテーションを交えて発表. さらに，コメントを付けて討議し修正する.
第15回	生物多様性ワークショップ	生物多様性について対話し、理解を深める
第16回	4年生の論文中間作成（前半）	進捗状況に基づいて，作成状況を報告，プレゼンテーションを行う．次週に修正.
第17回	4年生の論文中間作成（後半）	修正されたものについて，コメントを述べ，その後の発展の方向づけを行う.
第18回	3年生のプロジェクト成果発表	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第19回	国際文化学部学会準備①	テーマを出し合って討議する.
第20回	国際文化学部学会準備②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第21回	国際文化学部学会準備③	まとめ
第22回	4年生の論文発表①	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する. (4年生の１／３について)
第23回	4年生の論文発表②	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認（4年生の次の１／３について）
第24回	4年生の論文発表③	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認．（4年生の最後の１／３について），全員へのコメントと確認.
第25回	個人研究作成①	テーマを出し合って討議する.
第26回	個人研究作成②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第27回	個人研究作成③	まとめ
第28回	個人研究発表会	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分で課題を見つけ,多角的に取り組むこと．文献を収集するだけでなく,直接,調査・取材活動をおこなうこと．可能な限り,情報源に当たり，なにが，オリジナルであるのかを明確にした上で，レポートなどを作成すること．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします.

【テキスト（教科書）】
テキストは用いず,必要な資料はプリントして配布します.

【参考書】
「地球の論点 ―現実的な環境主義者のマニフェスト」 スチュアート ブランド (著), 仙名 紀 (翻訳), 英治出版, 2011.
他は必要に応じて,その都度,指示します.また,ゼミに関係したゲストをお招きする予定です.

【成績評価の方法と基準】
年度末までにまとめた各自の成果（50%）,およびそのために各自が行った企画・調査活動状況（＝平常点: 50％）.頑張る姿勢,真摯な姿勢を評価したいと思います.
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミは,受け身的な授業と異なり積極的にみんなで作り上げていくものです.４年生は後輩をサポートしお手本となるように心掛け,３年生は先輩をよく見て学んで下さい.

【学生が準備すべき機器他】
授業には,主としてパワーポイント映像およびビデオ資料を用い，各自に,パワーポイント，あるいは，ポスターなどでプレゼンテーションをしていただくことがあります.

【その他の重要事項】
本ゼミの目標は,文献などの間接情報だけに頼るのではなく,直接出向いて生の情報に触れ,それらを通して学ぶことの面白さを知り,自己を鍛えることでもあります.
そして,グループ活動を通じて切磋琢磨し,相手を思いやる心を身に付け,少しでも一人前の社会人に近づくことです.
与えられたことを行うだけでは一人前とは言えず,自分でさらに課題を見つけて取り組んでこそ,一人前と言えます.そのためには,小さな事でも損得を考えずに手抜きせず真面目に取り組むことが大切です.
授業の各回のテーマは,受講生の希望や最新のトピックスなど取り入れることがありますので,内容や順番が異なる場合があります.

【Outline (in English)】
Given the accelerated destruction of the global environment, consider creating a sustainable society through fieldwork.

Fieldwork will be incorporated as appropriate to provide students with opportunities to think about the sustainability of society.
At the end of this course, participants are expected to be able to not only solve a given task, but also find and tackle the problem on your own. Specifically, participants will be able to actively go to the site and collect information.
Specifically, participants will be able to actively visit the site and collect information. Expected learning activities outside the classroom include collecting information, reading papers, completing homework, and preparing presentations (2 hours for each lecture).
Your overall grade in the class will be decided
based on the following:
Usual performance score 50%, Reports 50%.
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

SES400GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 400）

国際社会演習

島野　智之

サブタイトル：持続可能な社会づくりと生物
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地球環境の加速的破壊が進むなか,持続可能な社会作りを考える．フィールドワーク等を通して，我々はどうあるべきかを各自考える．世界に視野を広げ見直してみる．「生き物と文化」について考える．ここ数年は鳥と表象，ノネコ，ペットの問題，ビーガン．生き物の命の問題など採り上げているが，それに限らない持続可能性についてのテーマについて取り組んでも良い．
適宜フィールドワークなどを取り入れて，社会の持続可能性について考える機会を作る．

【到達目標】
与えられた課題をこなすだけでなく,自分で問題点を見つけて取り組むことが出来るようになること．具体的には,積極的に現場に出かけて情報を収集できるようになること．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
授業だけではなく夏期休暇などを利用して，フィールドワークを計画している．
また,メイン・テーマ以外に,自由な視点でプロジェクトを企画・実践し,秋学期に開催される学部内の研究発表会に参加する（予定）.そして,論文作成に取り組む.
特に，教室を出てフィールドワークを考える（たとえば，地方への訪問など）．また，ゼミに関係したゲストをお招きする予定.
適宜，メール添付書類等を使った課題提出とその添削を行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介および1年間の授業計画
第2回	問いの力	問いあつめ 水平の問いと垂直の問い
第3回	問いの作法	問いあつめ オープンな問いとクローズな問い
第4回	４年生の論文テーマ発表１	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第5回	SDG s 新聞ワークショップ①	関心あるテーマに関して記事を収集し、紹介する。
第6回	SDG s 新聞ワークショップ ②	関心あるテーマに関する記事をまとめ、新聞を作成する
第7回	研究論文の要約および紹介①	関心あるテーマに関する記事・論文を探しまとめること．また，適切な記事・論文を選び出す検索方法を学ぶ.
第8回	研究論文の要約および紹介②	記事・論文をまとめ、プレゼンテーション資料を作成し、内容を紹介する。
第9回	SDGsワークショップ①	SDGs概論
第10回	SDGsワークショップ②	2030SDGsカードゲームでSDGsを体感する。
第11回	SDGsワークショップ③	2030年およびその先の世界について対話する。
第12回	3年生の研究テーマ発表	前回，前々回の討議を踏まえて，3年生の調査研究テーマを発表する.
第13回	４年生の論文の中間報告①	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．次週に修正を行う.
第14回	４年生の論文の中間報告②	修正を行った論文のテーマについて,さらにプレゼンテーションを交えて発表. さらに，コメントを付けて討議し修正する.
第15回	生物多様性ワークショップ	生物多様性について対話し、理解を深める
第16回	4年生の論文中間作成（前半）	進捗状況に基づいて，作成状況を報告，プレゼンテーションを行う．次週に修正.
第17回	4年生の論文中間作成（後半）	修正されたものについて，コメントを述べ，その後の発展の方向づけを行う.
第18回	3年生のプロジェクト成果発表	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第19回	国際文化学部学会準備①	テーマを出し合って討議する.
第20回	国際文化学部学会準備②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第21回	国際文化学部学会準備③	まとめ
第22回	4年生の論文発表①	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する. (4年生の１／３について)
第23回	4年生の論文発表②	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認（4年生の次の１／３について）
第24回	4年生の論文発表③	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認．（4年生の最後の１／３について），全員へのコメントと確認.
第25回	個人研究作成①	テーマを出し合って討議する.
第26回	個人研究作成②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第27回	個人研究作成③	まとめ
第28回	個人研究発表会	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分で課題を見つけ,多角的に取り組むこと．文献を収集するだけでなく,直接,調査・取材活動をおこなうこと．可能な限り,情報源に当たり，なにが，オリジナルであるのかを明確にした上で，レポートなどを作成すること．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします.

【テキスト（教科書）】
テキストは用いず,必要な資料はプリントして配布します.

【参考書】
「地球の論点 ―現実的な環境主義者のマニフェスト」 スチュアート ブランド (著), 仙名 紀 (翻訳), 英治出版, 2011.
他は必要に応じて,その都度,指示します.また,ゼミに関係したゲストをお招きする予定です.

【成績評価の方法と基準】
年度末までにまとめた各自の成果（50%）,およびそのために各自が行った企画・調査活動状況（＝平常点: 50％）.頑張る姿勢,真摯な姿勢を評価したいと思います.
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミは,受け身的な授業と異なり積極的にみんなで作り上げていくものです.４年生は後輩をサポートしお手本となるように心掛け,３年生は先輩をよく見て学んで下さい.

【学生が準備すべき機器他】
授業には,主としてパワーポイント映像およびビデオ資料を用い，各自に,パワーポイント，あるいは，ポスターなどでプレゼンテーションをしていただくことがあります.

【その他の重要事項】
本ゼミの目標は,文献などの間接情報だけに頼るのではなく,直接出向いて生の情報に触れ,それらを通して学ぶことの面白さを知り,自己を鍛えることでもあります.
そして,グループ活動を通じて切磋琢磨し,相手を思いやる心を身に付け,少しでも一人前の社会人に近づくことです.
与えられたことを行うだけでは一人前とは言えず,自分でさらに課題を見つけて取り組んでこそ,一人前と言えます.そのためには,小さな事でも損得を考えずに手抜きせず真面目に取り組むことが大切です.
授業の各回のテーマは,受講生の希望や最新のトピックスなど取り入れることがありますので,内容や順番が異なる場合があります.

【Outline (in English)】
Given the accelerated destruction of the global environment, consider creating a sustainable society through fieldwork.

Fieldwork will be incorporated as appropriate to provide students with opportunities to think about the sustainability of society.
At the end of this course, participants are expected to be able to not only solve a given task, but also find and tackle the problem on your own. Specifically, participants will be able to actively go to the site and collect information.
Specifically, participants will be able to actively visit the site and collect information. Expected learning activities outside the classroom include collecting information, reading papers, completing homework, and preparing presentations (2 hours for each lecture).
Your overall grade in the class will be decided
based on the following:
Usual performance score 50%, Reports 50%.
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

SES400GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 400）

国際社会演習

島野　智之

サブタイトル：持続可能な社会づくりと生物
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地球環境の加速的破壊が進むなか,持続可能な社会作りを考える．フィールドワーク等を通して，我々はどうあるべきかを各自考える．世界に視野を広げ見直してみる.「生き物と文化」について考える．ここ数年は鳥と表象，ノネコ，ペットの問題，ビーガン．生き物の命の問題など採り上げているが，それに限らない持続可能性についてのテーマについて取り組んでも良い.
適宜フィールドワークなどを取り入れて，社会の持続可能性について考える機会を作る.

【到達目標】
与えられた課題をこなすだけでなく,自分で問題点を見つけて取り組むことが出来るようになること．具体的には,積極的に現場に出かけて情報を収集できるようになること.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
授業だけではなく夏期休暇などを利用して，フィールドワークを計画している.
また,メイン・テーマ以外に,自由な視点でプロジェクトを企画・実践し,秋学期に開催される学部内の研究発表会に参加する（予定）.そして,論文作成に取り組む.
特に，教室を出てフィールドワークを考える（たとえば，地方への訪問など）．また，ゼミに関係したゲストをお招きする予定.
適宜，メール添付書類等を使った課題提出とその添削を行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介および1年間の授業計画
第2回	問いの力	問いあつめ 水平の問いと垂直の問い
第3回	問いの作法	問いあつめ オープンな問いとクローズな問い
第4回	４年生の論文テーマ発表１	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第5回	SDG s 新聞ワークショップ①	関心あるテーマに関して記事を収集し、紹介する。
第6回	SDG s 新聞ワークショップ ②	関心あるテーマに関する記事をまとめ、新聞を作成する
第7回	研究論文の要約および紹介①	関心あるテーマに関する記事・論文を探しまとめること．また，適切な記事・論文を選び出す検索方法を学ぶ.
第8回	研究論文の要約および紹介②	記事・論文をまとめ、プレゼンテーション資料を作成し、内容を紹介する。
第9回	SDGsワークショップ①	SDGs概論
第10回	SDGsワークショップ②	2030SDGsカードゲームでSDGsを体感する。
第11回	SDGsワークショップ③	2030年およびその先の世界について対話する。
第12回	3年生の研究テーマ発表	前回，前々回の討議を踏まえて，3年生の調査研究テーマを発表する.
第13回	４年生の論文の中間報告①	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．次週に修正を行う.
第14回	４年生の論文の中間報告②	修正を行った論文のテーマについて，さらにプレゼンテーションを交えて発表. さらに，コメントを付けて討議し修正する.
第15回	生物多様性ワークショップ	生物多様性について対話し、理解を深める
第16回	4年生の論文中間作成（前半）	進捗状況に基づいて，作成状況を報告，プレゼンテーションを行う．次週に修正.
第17回	4年生の論文中間作成（後半）	修正されたものについて，コメントを述べ，その後の発展の方向づけを行う.
第18回	3年生のプロジェクト成果発表	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第19回	国際文化学部学会準備①	テーマを出し合って討議する.
第20回	国際文化学部学会準備②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第21回	国際文化学部学会準備③	まとめ
第22回	4年生の論文発表①	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する. (4年生の１／３について)
第23回	4年生の論文発表②	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認（4年生の次の１／３について）
第24回	4年生の論文発表③	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認．（4年生の最後の１／３について），全員へのコメントと確認.
第25回	個人研究作成①	テーマを出し合って討議する.
第26回	個人研究作成②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第27回	個人研究作成③	まとめ
第28回	個人研究発表会	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分で課題を見つけ,多角的に取り組むこと．文献を収集するだけでなく,直接,調査・取材活動をおこなうこと．可能な限り,情報源に当たり，なにが，オリジナルであるのかを明確にした上で，レポートなどを作成すること．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします.

【テキスト（教科書）】
テキストは用いず,必要な資料はプリントして配布します.

【参考書】
「地球の論点 ―現実的な環境主義者のマニフェスト」 スチュアート ブランド (著), 仙名 紀 (翻訳), 英治出版, 2011.
他は必要に応じて,その都度,指示します.また,ゼミに関係したゲストをお招きする予定です.

【成績評価の方法と基準】
年度末までにまとめた各自の成果（50%）,およびそのために各自が行った企画・調査活動状況（＝平常点: 50％）.頑張る姿勢,真摯な姿勢を評価したいと思います.
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミは,受け身的な授業と異なり積極的にみんなで作り上げていくものです.４年生は後輩をサポートしお手本となるように心掛け,３年生は先輩をよく見て学んで下さい.

【学生が準備すべき機器他】
授業には,主としてパワーポイント映像およびビデオ資料を用い，各自に,パワーポイント，あるいは，ポスターなどでプレゼンテーションをしていただくことがあります.

【その他の重要事項】
本ゼミの目標は,文献などの間接情報だけに頼るのではなく,直接出向いて生の情報に触れ,それらを通して学ぶことの面白さを知り,自己を鍛えることでもあります.
そして,グループ活動を通じて切磋琢磨し,相手を思いやる心を身に付け,少しでも一人前の社会人に近づくことです.
与えられたことを行うだけでは一人前とは言えず,自分でさらに課題を見つけて取り組んでこそ,一人前と言えます.そのためには,小さな事でも損得を考えずに手抜きせず真面目に取り組むことが大切です.
授業の各回のテーマは,受講生の希望や最新のトピックスなど取り入れることがありますので,内容や順番が異なる場合があります.

【Outline (in English)】
Given the accelerated destruction of the global environment, consider creating a sustainable society through fieldwork.

Fieldwork will be incorporated as appropriate to provide students with opportunities to think about the sustainability of society.
At the end of this course, participants are expected to be able to not only solve a given task, but also find and tackle the problem on your own. Specifically, participants will be able to actively go to the site and collect information.
Specifically, participants will be able to actively visit the site and collect information. Expected learning activities outside the classroom include collecting information, reading papers, completing homework, and preparing presentations (2 hours for each lecture).
Your overall grade in the class will be decided
based on the following:
Usual performance score 50%, Reports 50%.
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

SES400GA（環境創成学 / Sustainable and environmental system development 400）

国際社会演習

島野　智之

サブタイトル：持続可能な社会づくりと生物
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地球環境の加速的破壊が進むなか,持続可能な社会作りを考える．フィールドワーク等を通して，我々はどうあるべきかを各自考える．世界に視野を広げ見直してみる.「生き物と文化」について考える．ここ数年は鳥と表象，ノネコ，ペットの問題，ビーガン．生き物の命の問題など採り上げているが，それに限らない持続可能性についてのテーマについて取り組んでも良い.
適宜フィールドワークなどを取り入れて，社会の持続可能性について考える機会を作る.

【到達目標】
与えられた課題をこなすだけでなく,自分で問題点を見つけて取り組むことが出来るようになること．具体的には,積極的に現場に出かけて情報を収集できるようになること.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。
授業だけではなく夏期休暇などを利用して，フィールドワークを計画している.
また,メイン・テーマ以外に,自由な視点でプロジェクトを企画・実践し,秋学期に開催される学部内の研究発表会に参加する（予定）.そして,論文作成に取り組む.
特に，教室を出てフィールドワークを考える（たとえば，地方への訪問など）．また，ゼミに関係したゲストをお招きする予定.
適宜，メール添付書類等を使った課題提出とその添削を行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介および1年間の授業計画
第2回	問いの力	問いあつめ 水平の問いと垂直の問い
第3回	問いの作法	問いあつめ オープンな問いとクローズな問い
第4回	４年生の論文テーマ発表１	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第5回	SDG s 新聞ワークショップ①	関心あるテーマに関して記事を収集し、紹介する。
第6回	SDG s 新聞ワークショップ ②	関心あるテーマに関する記事をまとめ、新聞を作成する
第7回	研究論文の要約および紹介①	関心あるテーマに関する記事・論文を探しまとめること．また，適切な記事・論文を選び出す検索方法を学ぶ.
第8回	研究論文の要約および紹介②	記事・論文をまとめ、プレゼンテーション資料を作成し、内容を紹介する。
第9回	SDGsワークショップ①	SDGs概論
第10回	SDGsワークショップ②	2030SDGsカードゲームでSDGsを体感する。
第11回	SDGsワークショップ③	2030年およびその先の世界について対話する。
第12回	3年生の研究テーマ発表	前回，前々回の討議を踏まえて，3年生の調査研究テーマを発表する.
第13回	４年生の論文の中間報告①	論文のテーマについて，プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．次週に修正を行う.
第14回	４年生の論文の中間報告②	修正を行った論文のテーマについて，さらにプレゼンテーションを交えて発表. さらに，コメントを付けて討議し修正する.
第15回	生物多様性ワークショップ	生物多様性について対話し、理解を深める
第16回	4年生の論文中間作成（前半）	進捗状況に基づいて，作成状況を報告，プレゼンテーションを行う．次週に修正.
第17回	4年生の論文中間作成（後半）	修正されたものについて，コメントを述べ，その後の発展の方向づけを行う.
第18回	3年生のプロジェクト成果発表	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.
第19回	国際文化学部学会準備①	テーマを出し合って討議する.
第20回	国際文化学部学会準備②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第21回	国際文化学部学会準備③	まとめ
第22回	4年生の論文発表①	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する. (4年生の１／３について)
第23回	4年生の論文発表②	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認（4年生の次の１／３について）
第24回	4年生の論文発表③	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する．前の週の4年生の修正の確認．（4年生の最後の１／３について），全員へのコメントと確認.
第25回	個人研究作成①	テーマを出し合って討議する.
第26回	個人研究作成②	討議したテーマに基づいて，調査研究をすすめる.
第27回	個人研究作成③	まとめ
第28回	個人研究発表会	プレゼンテーションを交えて発表. コメントを付けて討議する.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分で課題を見つけ,多角的に取り組むこと．文献を収集するだけでなく,直接,調査・取材活動をおこなうこと．可能な限り,情報源に当たり，なにが，オリジナルであるのかを明確にした上で，レポートなどを作成すること．本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします.

【テキスト（教科書）】
テキストは用いず,必要な資料はプリントして配布します.

【参考書】
「地球の論点 ―現実的な環境主義者のマニフェスト」 スチュアート ブランド (著), 仙名 紀 (翻訳), 英治出版, 2011.
他は必要に応じて,その都度,指示します.また,ゼミに関係したゲストをお招きする予定です.

【成績評価の方法と基準】
年度末までにまとめた各自の成果（50%）,およびそのために各自が行った企画・調査活動状況（＝平常点: 50％）.頑張る姿勢,真摯な姿勢を評価したいと思います.
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミは,受け身的な授業と異なり積極的にみんなで作り上げていくものです.４年生は後輩をサポートしお手本となるように心掛け,３年生は先輩をよく見て学んで下さい.

【学生が準備すべき機器他】
授業には,主としてパワーポイント映像およびビデオ資料を用い，各自に,パワーポイント，あるいは，ポスターなどでプレゼンテーションをしていただくことがあります.

【その他の重要事項】
本ゼミの目標は,文献などの間接情報だけに頼るのではなく,直接出向いて生の情報に触れ,それらを通して学ぶことの面白さを知り,自己を鍛えることでもあります.
そして,グループ活動を通じて切磋琢磨し,相手を思いやる心を身に付け,少しでも一人前の社会人に近づくことです.
与えられたことを行うだけでは一人前とは言えず,自分でさらに課題を見つけて取り組んでこそ,一人前と言えます.そのためには,小さな事でも損得を考えずに手抜きせず真面目に取り組むことが大切です.
授業の各回のテーマは,受講生の希望や最新のトピックスなど取り入れることがありますので,内容や順番が異なる場合があります.

【Outline (in English)】
Given the accelerated destruction of the global environment, consider creating a sustainable society through fieldwork.

Fieldwork will be incorporated as appropriate to provide students with opportunities to think about the sustainability of society.
At the end of this course, participants are expected to be able to not only solve a given task, but also find and tackle the problem on your own. Specifically, participants will be able to actively go to the site and collect information.
Specifically, participants will be able to actively visit the site and collect information. Expected learning activities outside the classroom include collecting information, reading papers, completing homework, and preparing presentations (2 hours for each lecture).
Your overall grade in the class will be decided
based on the following:
Usual performance score 50%, Reports 50%.
To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

PHL400GA（哲学 / Philosophy 400）

情報文化演習

森村　修

サブタイトル：藝術とは何でないか？ —— 藝術理論・藝術批評入門
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【本演習の概要】
私たちは、日常生活の中で、自分の意思や意図、気持ちや欲望を表現しています。例えば、ある人たちは、Facebook、Instagram、x（エックス）などのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を用いて、不特定多数の他者に向かって自分の意見や考えを述べたり、写真などを載せたりします。また、比較的小規模で近しい間柄のグループでは、LINEやメールなどを通じて、自分の気持ちや感情をLINEのスタンプや絵文字を使って表現します。

このように私たちは、様々な情報ネットワークを使って、自分の気持ちや思想の表現を、文字だけでなく記号や絵や写真などを用いて、他者に向けて発信したり、他者からの表現（物）を受信したりしています。

本演習（exercise）では、それを「思考のパフォーマンス」あるいは「思考のパフォーマンス表現」として捉えて、深く考えたり実践したりしていきます。つまり、私たちの日常的なやり取りのひとつひとつを「思考のパフォーマンス」や「思考のパフォーマンス表現」として捉えることが重要になります。しかも、私たちの日常のたわいない会話や行為は、実は社会や世界を変える「力」を秘めています。皆さんが発した言葉や、体や表情で表現する「パフォーマンス」は、権力をもつ為政者よりも、時には大きな「力」をもち、たくさんの人の心を動かし、社会そのものを変える力になります。

皆さんが用いるSNSは、気づかないうちにグローバルな世界と関わっているのだから、国境や言語、人種の壁を越えて、どこかの誰かが、皆さんが知らないうちに、皆さんが書いたものや、写真や動画で表現したものを見ています。それゆえ、皆さんが流す「思考のパフォーマンス」に影響されたり、行動を駆り立てられたりする人たちもいるでしょう。いついかなるときにも、また誰の身にも起こるため、避けられません。

だからこそ、私たちは自らの「力」を不要に不当に使うべきではないのです。私たちの狭い人間関係だけで、社会や世界は成り立っていないからこそ、私たちは、SNSだけでなく、私たちの身体表現や言葉を介した様々な「パフォーマンス表現」が、良い方向にも悪い方向にも社会を変える「力」があることにもっと自覚的になる必要があります。

そこで**2026**年度の本演習では、私たちの個人的な表現が、直接的に社会にコミットしていく在り方を、「美しさ」や「美意識」について、哲学的な視座から「批判的に考え、批判的に表現する」ことを試みます。

【本演習の目的】
本演習では、「自らの思考・思想を言語や身体などの直接的な手段を用いたり、芸術作品やデザインなどの作品を通して間接的に表現することによって、社会に関与（コミット）することはいかにして可能か」という問いについて考察していくことを目的とします。その際に、「美は社会を変える」というテーマを基本にして、藝術作品やデザインがもたらす「美しさ」や「美」などの価値をめぐって、美学（**aesthetics**）や芸術哲学（**philosophy of art**）の理論と実践を研究します。

ただ、本演習では、「思想のパフォーマンス」研究がテーマですから、アート（藝術）やパフォーマンス運動から多くを学びます。ただ注意してもらいたいのは、いわゆる藝術やデザインというジャンルでは、もはや美醜の境界が曖昧になり、藝術とは何か、美とか何かという問いに対する答えが多様化しています。そこで、本演習が重視するのは、〈藝術とは何でないか〉という消極的（negative）な問いを立てて考えていくことです。その際に、どのような答えであれ、それがある種の「思考のパフォーマンス」として捉えられるということ忘れないということです。

私たちを取り巻くグローバルな状況の中で、政治的な問題として、植民地主義、外国による侵略、戦争・紛争、権力による弾圧、社会的不公正、貧困、人種差別・性差別・障害者差別・高齢者差別が問題になっています。また、気候温暖化の爆発的進展によって、自然環境が激変しつつあります。また、少し前までは新型コロナウィルスの感染爆発によって、日常生活の危機を経験したはずなのに、今ではその頃の緊張感もなく、モラルも低下させるだけでなく、様々な事態を悪化させています。これらに対して、本演習では、「思考のパフォーマンス」研究の立場で、「美」や「美しさ」とは何でないか、「美意識」は、私たちの社会を変えるためにどのように必要／不必要なのか、「美」や「美醜」を考えることが、どのように社会を少しでもよくしていくことに貢献できるかを考えていきます。

そこで本演習では、皆さん自身の「思考のパフォーマンス表現」が、社会と密接に結びついていることを改めて考えてもらうとともに、自分の思考・思想をどのように変化させることによって、もっとよいパフォーマンスができ、結果的に社会に働きかけていくことができるかを考えることが目的です。そのために、演習内部では、仲間と切磋琢磨することで、互いの表現を検討し合いながら、自らの思考や思想を「論文」や「作品」にして表現していくことが重要な活動になります。

【本演習の意義】
本演習の意義は、日々の生活における欲望の力を考察し、欲望を正しく解放しながらも、自らの価値観としての美意識と他者や社会の美の基準をすり合わせることを学ぶことです。欲望が誤った方向に流れていかないように、また社会がもたらす「美」の基準がおかしなことになっていないかをきちんと精査し、自分と他者の差異に基づいて互いの欲望を正しくコントロールしながら表現にもたらすこと、そのためには、自らの欲望や美意識を深く思考する必要があります。そうすることによって、私たちの演習は、私たちの現実の世界を、少しでもよりよいものにしていくための批判的な視座を獲得することを目指します。

【到達目標】
①私たちの思考や美意識、さらにはそれらに基づく行為がどのように社会に関与しているかを理論的に考察することができます。つまり、私たちの思想を表現するために、簡単な文章から難しい哲学的テキストに至るまで「批判的に読む力」を身につけることができます。
②私たちの思考や行為をどのように表現すれば良いかを実践的に学ぶことができます。私たちの思考の生産物は、どのようにすればより良くなるのかを実践的に体験することで、「批判的に書く力」を身につけることができます。
③私たちの思考や行為が他者にどのように伝わっているかを技術的に学ぶために、自分が表現したものを公的に発表することで、「表現力」を身につけることができます。
④私たちの思考や行為が社会にどのように影響を与えることができるかを実際的に学ぶために、国際文化情報学会などの機会を利用して「プレゼンテーション力」を身につけることができます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
◆通常の授業では、次の二つの研究を主にして進めていきます。
①指定テキストに基づいた「グループ研究」
ゼミ生をいくつかのグループに分け、グループごとに事前に担当箇所の「テキストを読解」し、「レジュメを作成し」、ゼミ当日に担当グループが「発表」し、それ以外のゼミ生と「討議」します。そうすることで、テキストの理解を深めます。演習の基本となる研究なので、最も重要な活動になります。
②自分のテーマを研究する「個人研究」
個人の研究テーマは、演習の時間内で「発表」してもらいます。ゼミ生各自が自らのテーマに即して研究を進めます。個人研究のテーマは、グループ研究【ゼミのテーマ】とはまったく関係なくてもかまいません。ただ、なるべく【ゼミのテーマ】に近いテーマにした方が研究の効率は上がりますし、自分の研究に資することが多くなります。最終的に、研究の成果を、学期末・年度末に「ゼミ論」や「ゼミ制作」（2・3年生）、年度末に「ゼミ総括論文」や「ゼミ総括制作」（4年）にまとめてもらいます。個人研究は、自分の思想の表現として最も自由に研究できるテーマを担当教員と相談しながら、進めていきます。
◆ゼミ全体の課題
本演習では、毎年12月に開催される「国際文化情報学会」にインスタレーション部門で発表をしています。2026年度も、学会で発表する予定にしています。希望者があれば、他の部門（論文部門、ポスター部門、映像部門）にも参加を予定しています。
◆学年による課題
③２年生・３年生については、「グループ研究」に重点を置きながら、「読む」「書く」「発表する」「プレゼンする」ための「力」を身につけることが重要です。４年生については、個人研究をまとめあげて、思考表現の「パフォーマンス」を様々な媒体=メディアで発表できるように仕上げていきます。
④課外活動として、年２回（夏・冬）行う「ゼミ合宿」を実施します。
(1) 初夏には、「ゼミ遠足」を計画しています。これは、互いのテーマや関心について自己紹介しながら、ゼミに慣れることが目的です。
(2) 夏のゼミ合宿は、東京を離れて、様々な地域を訪問することで、その地域にある美術館や博物館、資料館などを訪ね、表現の仕方の多様性を学びます。
(3) 冬のゼミ合宿は、２・３年生の「ゼミ論」・「ゼミ制作」、４年生の「ゼミ総括研究」・「ゼミ総括制作」の合評会を行い、互いの「表現」を批評し合います。
⑤個別の希望者には、外部講師と連繋した「課外セミナー」や美術館・博物館などの公共施設の訪問なども考えています。可能であれば、知人が運営に携わっている「京都市京セラ美術館」を訪問し、京都という地域の歴史と美術館との関係、また美術館の運営などについて解説していただくことも考えています（予定・自由参加）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	プレゼミ	1. 顔合わせ 2. 今後の方針 3. 授業の進行など
2	グループ研究① シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(1)	1.血と美の関係をめぐって
3	グループ研究② シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(2)	2. さまざまな規範と目的
4	グループ研究③ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(3)	3. 文化が交差するところ
5	グループ研究④ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(4)	4. 富と市場と美術館
6	グループ研究⑤ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(5)	5. ジェンダー、天才、そしてゲリラ・ガールズ
7	個人研究① 前期中間発表	・個人研究の構想発表(1)
8	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(6)	6. 認識、創造、理解
9	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(7)	7. デジタル化と情報の伝播
10	グループ研究⑦ ハル・フォスター編『視覚論』(1)	1. マーティン・ジェイ「近代性における複数の「視の制度」
11	グループ研究⑧ ハル・フォスター編『視覚論』(2)	2. ジョナサン・クレーリー「近代化する視覚」
12	グループ研究⑨ ハル・フォスター編『視覚論』(3)	3. ロザリンド・クラウス「見る衝動／見させるパルス」
13	グループ研究⑩ ハル・フォスター編『視覚論』(4)	4. ノーマン・ブライソン「拡張された場における〈眼差し〉」 5. ジャクリン・ローズ「セクシュアリティと視覚―― いくつかの疑問」
14	個人研究② 個人研究　春学期・期末発表	個人研究の構想発表(2)
15	秋学期イントロダクション	①秋学期の演習概要説明 ②学会のテーマ決定 ③総括研究の注意など
16	グループ研究① 『モダニズムのハード・コア』(1)	1. クレメント・グリーンバーグ「モダニズムの絵画」 2. クレメント・グリーンバーグ「抽象表現主義以後」
17	グループ研究② 『モダニズムのハード・コア』(2)	3. マイケル・フリード「芸術と客体性」 4. T・J・クラーク「クレメント・グリーンバーグの芸術理論」
18	グループ研究③ 『モダニズムのハード・コア』(3)	5. マイケル・フリード「モダニズムはいかに作動するのか―― T・J・クラークへの反論」 6. T・J・クラーク「モダニズムに関する論議―― マイケル・フリードに答える」
19	個人研究① 「ゼミ論」中間発表①	ゼミ生の個人研究発表（1）
20	グループ研究④ 『モダニズムのハード・コア』(4)	7. マイケル・フリード「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(1) 8. ロザリンド・クラウス「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(2) 9. ベンジャミン・ブクロー「「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(3) 10. ディスカッション
21	グループ研究⑤ 『モダニズムのハード・コア』(5)	11. ロザリンド・クラウス「視覚的無意識」
22	グループ研究⑥ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(1)	1. アール・ブリュットと創造性の起源の探求
23	グループ研究⑦ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(2)	2. アウトサイダー・アートと蒐集の創造的役割
24	グループ研究⑧ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(3)	3. アール・ブリュットとサイコティック・アートの古典期
25	グループ研究⑨ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(4)	4. 今日のサイコティック・アートとアウトサイダー・アート
26	グループ研究⑩ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(5)	5. 落書きとその他のオートマティスム
27	グループ研究⑪ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(6)	6. アウトサイダー・アートの美術界への紹介とその問題
28	個人研究② 「ゼミ総括研究」最終発表②	ゼミ生の個人研究発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習

グループ研究の発表のためには、グループのメンバーが授業前に集まって準備する必要があります。メンバーが集まることで、テキストについての互いの理解が深まったり、わからなかった箇所を検討することができたり、テキストを理解するために必要な情報を他の資料やインターネットから得たりすることができます。これらの準備学習をすることで、仲間たちとのコミュニケーションが円滑になり、発表担当外の仲間から授業中に出される質問に対して、適切に応えることができるようになります。

そのために、授業外にグループで集まって集中学習することが、ゼミ内の活性化にも繋がり、各自の研究の広がりと深みを増すことになります。したがって、ゼミの事前研究のために時間は、週に二、三回、各２時間程度かかることを前提としてください。

【テキスト（教科書）】

(1) シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？ ―― 芸術理論入門』ブリュッケ、2007年
(2) 批評空間臨時増刊号『モダニズムのハード・コア　現代美術批評の地平』太田出版、1995年
(3) ハル・フォスター編『視覚論』樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、2007年
(4) デイヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』青土社、2011年

【参考書】

【演習のテーマに関係するもの】
(1) 佐々木健一『美学への招待　増補版』中公新書、2019年
(2) 井奥陽子『近代美学入門』ちくま新書、2023年。
【論文の書き方に関係するもの】
(1) 阿部幸大『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』光文社、2024年
(2) 大辻都編著・篠原学『アートとしての論述入門』京都造形芸術大学出版局・藝術学舎、2017年
(3) 廣野由美子『批評理論入門―― 『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書1790、2005年
(4) 杉原賢彦・暮沢剛巳・前島秀国『アートを書く! クリティカル文章術』フィルムアート社、2006年

【成績評価の方法と基準】

①グループ研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
②個人研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
③ゼミ論（２・３年生）（50％）／ゼミ総括研究（４年生）（50％）

【学生の意見等からの気づき】

2025年度は、担当者がサバティカルから戻ってきた最初の年だったので、昨年度との比較ができない。もう少し議論が活発になるように、ゼミ生の前向きな自習を準備させたい。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを基本的に用いていきますが、教員とゼミ生との連絡については様々なSNSやメールなどで、コミュニケーションを欠かさないようにしていきます。

【その他の重要事項】

【授業外の活動】

①ゼミ卒業生や大学院生との交流があります。年一回年末の「望年会」（私たちの演習では「年忘れ」の「忘年会」とは言いません。次の年を「希望の年」として迎えるために「望年会」と呼びます。一期生が20年以上前に、この名前をつけてくれました）には、１期生から現役のゼミ生まで20年以上歳が離れている、多彩な卒業生が集まります。学部生の皆さんが通ってきた悩みや、これから経験するかもしれないことについても、先輩たちが自分の経験を語り、仕事ややりがいについて話してくれます。これは、本演習の最大の人的資産であり、他のゼミには絶対に負けない資産です。それ以外にも、様々な方面で活躍する卒業生たちの交流が、密接に行われています。

②年２回の「ゼミ合宿」には、基本的に全員参加してください。合宿は、教室の中では経験できない場所で、教室や大学でしか関わらない人たちと関わりながら経験を積み重ね、それについて考えるために行っています。そのためにも、向上心をもって、より成長したい人が積極的に参加してくれることが前提です。だからこそ、本演習の合」は、欠かすことのできない課外活動です。合宿では、ゼミ生同士の交流、教員との親睦、さらには東京近郊では体験できない他の地域の施設などの訪問など、刺激を得る機会となっています。

※　本演習では、授業外の活動が重要です。積極的に参加し、自らを磨く「修練」を積むことが要求されていますので注意してください。

【注意と要望】
・本演習は、２コマ続きの授業になりますので、注意してください。
・基本的に、ゼミで課される課題に集中し、他のゼミ生と交流することが重要です。もちろんゼミ生の個性と自由は尊重しなければなりませんが、ゼミは集団活動ですから、過度な個人プレーには気をつけてもらいたいです。様々なことに好奇心を持ち、互いに切磋琢磨しながら協力し、真面目に研究に取り組む人に来てもらいたいです。本演習では、地味でかまいませんから、ひとつのことに熱中できることが重要です。

【コメント】
本演習は、「情報文化演習」のひとつですが、コンピュータを用いてゼミ活動をすることはありません。ただ、作品を制作したり、研究発表をする際に、パソコンが使えると便利かもしれません。それも、気にする必要はありません。

【Outline (in English)】
【Purpose of this exercise】
The purpose of this exercise is to examine the question of "What is *not* the beauty?" and "How can it be possible to engage in society (commit) by expressing one's thoughts?" In doing so, we will focus on the theory and practice of aesthetics and the Philosophy of art. In this exercise, it is important to refine your thoughts by giving good expression to your thoughts while working hard with each other. As a result, the ultimate purpose of this exercise is to express one's thoughts as "thesis" or "work".
【Significance of this exercise】
The significance of this seminar is twofold. First, in order to properly communicate your intentions and thoughts to others, students can refine their expressions by reflecting on their expressions. And secondly, your good expression can enable your participation and make your real world a little better.

PHL400GA（哲学 / Philosophy 400）

情報文化演習

森村　修

サブタイトル：藝術とは何でないか？ —— 藝術理論・藝術批評入門
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【本演習の概要】
私たちは、日常生活の中で、自分の意思や意図、気持ちや欲望を表現しています。例えば、ある人たちは、Facebook、Instagram、x（エックス）などのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を用いて、不特定多数の他者に向かって自分の意見や考えを述べたり、写真などを載せたりします。また、比較的小規模で近しい間柄のグループでは、LINEやメールなどを通じて、自分の気持ちや感情をLINEのスタンプや絵文字を使って表現します。

このように私たちは、様々な情報ネットワークを使って、自分の気持ちや思想の表現を、文字だけでなく記号や絵や写真などを用いて、他者に向けて発信したり、他者からの表現（物）を受信したりしています。

本演習（exercise）では、それを「思考のパフォーマンス」あるいは「思考のパフォーマンス表現」として捉えて、深く考えたり実践したりしていきます。つまり、私たちの日常的なやり取りのひとつひとつを「思考のパフォーマンス」や「思考のパフォーマンス表現」として捉えることが重要になります。しかも、私たちの日常のたわいない会話や行為は、実は社会や世界を変える「力」を秘めています。皆さんが発した言葉や、体や表情で表現する「パフォーマンス」は、権力をもつ為政者よりも、時には大きな「力」をもち、たくさんの人の心を動かし、社会そのものを変える力になります。

皆さんが用いるSNSは、気づかないうちにグローバルな世界と関わっているのだから、国境や言語、人種の壁を越えて、どこかの誰かが、皆さんが知らないうちに、皆さんが書いたものや、写真や動画で表現したものを見ています。それゆえ、皆さんが流す「思考のパフォーマンス」に影響されたり、行動を駆り立てられたりする人たちもいるでしょう。いついかなるときにも、また誰の身にも起こるため、避けられません。

だからこそ、私たちは自らの「力」を不要に不当に使うべきではないのです。私たちの狭い人間関係だけで、社会や世界は成り立っていないからこそ、私たちは、SNSだけでなく、私たちの身体表現や言葉を介した様々な「パフォーマンス表現」が、良い方向にも悪い方向にも社会を変える「力」があることにもっと自覚的になる必要があります。

そこで**2026**年度の本演習では、私たちの個人的な表現が、直接的に社会にコミットしていく在り方を、「美しさ」や「美意識」について、哲学的な視座から「批判的に考え、批判的に表現する」ことを試みます。
【本演習の目的】
本演習では、「自らの思考・思想を言語や身体などの直接的な手段を用いたり、芸術作品やデザインなどの作品を通して間接的に表現することによって、社会に関与（コミット）することはいかにして可能か」という問いについて考察していくことを目的とします。その際に、「美は社会を変える」というテーマを基本にして、藝術作品やデザインがもたらす「美しさ」や「美」などの価値をめぐって、美学（**aesthetics**）や芸術哲学（**philosophy of art**）の理論と実践を研究します。

ただ、本演習では、「思想のパフォーマンス」研究がテーマですから、アート（藝術）やパフォーマンス運動から多くを学びます。ただ注意してもらいたいのは、いわゆる藝術やデザインというジャンルでは、もはや美醜の境界が曖昧になり、藝術とは何か、美とか何かという問いに対する答えが多様化しています。そこで、本演習が重視するのは、〈藝術とは何でないか〉という消極的（negative）な問いを立てて考えていくことです。その際に、どのような答えであれ、それがある種の「思考のパフォーマンス」として捉えられるということ忘れないということです。

私たちを取り巻くグローバルな状況の中で、政治的な問題として、植民地主義、外国による侵略、戦争・紛争、権力による弾圧、社会的不公正、貧困、人種差別・性差別・障害者差別・高齢者差別が問題になっています。また、気候温暖化の爆発的進展によって、自然環境が激変しつつあります。また、少し前までは新型コロナウィルスの感染爆発によって、日常生活の危機を経験したはずなのに、今ではその頃の緊張感もなく、モラルも低下させるだけでなく、様々な事態を悪化させています。これらに対して、本演習では、「思考のパフォーマンス」研究の立場で、「美」や「美しさ」とは何でないか、「美意識」は、私たちの社会を変えるためにどのように必要／不必要なのか、「美」や「美醜」を考えることが、どのように社会を少しでもよくしていくことに貢献できるかを考えていきます。

そこで本演習では、皆さん自身の「思考のパフォーマンス表現」が、社会と密接に結びついていることを改めて考えてもらうとともに、自分の思考・思想をどのように変化させることによって、もっとよいパフォーマンスができ、結果的に社会に働きかけていくことができるかを考えることが目的です。そのために、演習内部では、仲間と切磋琢磨することで、互いの表現を検討し合いながら、自らの思考や思想を「論文」や「作品」にして表現していくことが重要な活動になります。
【本演習の意義】
本演習の意義は、日々の生活における欲望の力を考察し、欲望を正しく解放しながらも、自らの価値観としての美意識と他者や社会の美の基準をすり合わせることを学ぶことです。欲望が誤った方向に流れていかないように、また社会がもたらす「美」の基準がおかしなことになっていないかをきちんと精査し、自分と他者の差異に基づいて互いの欲望を正しくコントロールしながら表現にもたらすこと、そのためには、自らの欲望や美意識を深く思考する必要があります。そうすることによって、私たちの演習は、私たちの現実の世界を、少しでもよりよいものにしていくための批判的な視座を獲得することを目指します。

【到達目標】
①私たちの思考や美意識、さらにはそれらに基づく行為がどのように社会に関与しているかを理論的に考察することができます。つまり、私たちの思想を表現するために、簡単な文章から難しい哲学的テキストに至るまで「批判的に読む力」を身につけることができます。
②私たちの思考や行為をどのように表現すれば良いかを実践的に学ぶことができます。私たちの思考の生産物は、どのようにすればより良くなるのかを実践的に体験することで、「批判的に書く力」を身につけることができます。
③私たちの思考や行為が他者にどのように伝わっているかを技術的に学ぶために、自分が表現したものを公的に発表することで、「表現力」を身につけることができます。
④私たちの思考や行為が社会にどのように影響を与えることができるかを実際的に学ぶために、国際文化情報学会などの機会を利用して「プレゼンテーション力」を身につけることができます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
◆通常の授業では、次の二つの研究を主にして進めていきます。
①指定テキストに基づいた「グループ研究」
ゼミ生をいくつかのグループに分け、グループごとに事前に担当箇所の「テキストを読解」し、「レジュメを作成し」、ゼミ当日に担当グループが「発表」し、それ以外のゼミ生と「討議」します。そうすることで、テキストの理解を深めます。演習の基本となる研究なので、最も重要な活動になります。
②自分のテーマを研究する「個人研究」
個人の研究テーマは、演習の時間内で「発表」してもらいます。ゼミ生各自が自らのテーマに即して研究を進めます。個人研究のテーマは、グループ研究【ゼミのテーマ】とはまったく関係なくてもかまいません。ただ、なるべく【ゼミのテーマ】に近いテーマにした方が研究の効率は上がりますし、自分の研究に資することが多くなります。最終的に、研究の成果を、学期末・年度末に「ゼミ論」や「ゼミ制作」（2・3年生）、年度末に「ゼミ総括論文」や「ゼミ総括制作」（4年）にまとめてもらいます。個人研究は、自分の思想の表現として最も自由に研究できるテーマを担当教員と相談しながら、進めていきます。
◆ゼミ全体の課題
本演習では、毎年12月に開催される「国際文化情報学会」にインスタレーション部門で発表をしています。2026年度も、学会で発表する予定にしています。希望者があれば、他の部門（論文部門、ポスター部門、映像部門）にも参加を予定しています。
◆学年による課題
③２年生・３年生については、「グループ研究」に重点を置きながら、「読む」「書く」「発表する」「プレゼンする」ための「力」を身につけることが重要です。４年生については、個人研究をまとめあげて、思考表現の「パフォーマンス」を様々な媒体=メディアで発表できるように仕上げていきます。
④課外活動として、年２回（夏・冬）行う「ゼミ合宿」を実施します。
(1) 初夏には、「ゼミ遠足」を計画しています。これは、互いのテーマや関心について自己紹介しながら、ゼミに慣れることが目的です。
(2) 夏のゼミ合宿は、東京を離れて、様々な地域を訪問することで、その地域にある美術館や博物館、資料館などを訪ね、表現の仕方の多様性を学びます。
(3) 冬のゼミ合宿は、２・３年生の「ゼミ論」・「ゼミ制作」、４年生の「ゼミ総括研究」・「ゼミ総括制作」の合評会を行い、互いの「表現」を批評し合います。
⑤個別の希望者には、外部講師と連繋した「課外セミナー」や美術館・博物館などの公共施設の訪問なども考えています。可能であれば、知人が運営に携わっている「京都市京セラ美術館」を訪問し、京都という地域の歴史と美術館との関係、また美術館の運営などについて解説していただくことも考えています（予定・自由参加）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	プレゼミ	1. 顔合わせ 2. 今後の方針 3. 授業の進行など
2	グループ研究① シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(1)	1.血と美の関係をめぐって
3	グループ研究② シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(2)	2. さまざまな規範と目的
4	グループ研究③ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(3)	3. 文化が交差するところ
5	グループ研究④ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(4)	4. 富と市場と美術館
6	グループ研究⑤ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(5)	5. ジェンダー、天才、そしてゲリラ・ガールズ
7	個人研究① 前期中間発表	・個人研究の構想発表(1)
8	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(6)	6. 認識、創造、理解
9	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(7)	7. デジタル化と情報の伝播
10	グループ研究⑦ ハル・フォスター編『視覚論』(1)	1. マーティン・ジェイ「近代性における複数の「視の制度」
11	グループ研究⑧ ハル・フォスター編『視覚論』(2)	2. ジョナサン・クレーリー「近代化する視覚」
12	グループ研究⑨ ハル・フォスター編『視覚論』(3)	3. ロザリンド・クラウス「見る衝動／見させるパルス」
13	グループ研究⑩ ハル・フォスター編『視覚論』(4)	4. ノーマン・ブライソン「拡張された場における〈眼差し〉」 5. ジャクリン・ローズ「セクシュアリティと視覚―― いくつかの疑問」
14	個人研究② 個人研究　春学期・期末発表	個人研究の構想発表(2)
15	秋学期イントロダクション	①秋学期の演習概要説明 ②学会のテーマ決定 ③総括研究の注意など
16	グループ研究① 『モダニズムのハード・コア』(1)	1. クレメント・グリーンバーグ「モダニズムの絵画」 2. クレメント・グリーンバーグ「抽象表現主義以後」
17	グループ研究② 『モダニズムのハード・コア』(2)	3. マイケル・フリード「芸術と客体性」 4. T・J・クラーク「クレメント・グリーンバーグの芸術理論」
18	グループ研究③ 『モダニズムのハード・コア』(3)	5. マイケル・フリード「モダニズムはいかに作動するのか―― T・J・クラークへの反論」 6. T・J・クラーク「モダニズムに関する論議―― マイケル・フリードに答える」
19	個人研究① 「ゼミ論」中間発表①	ゼミ生の個人研究発表（1）
20	グループ研究④ 『モダニズムのハード・コア』(4)	7. マイケル・フリード「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(1) 8. ロザリンド・クラウス「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(2) 9. ベンジャミン・ブクロー「「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(3) 10. ディスカッション
21	グループ研究⑤ 『モダニズムのハード・コア』(5)	11. ロザリンド・クラウス「視覚的無意識」
22	グループ研究⑥ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(1)	1. アール・ブリュットと創造性の起源の探求
23	グループ研究⑦ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(2)	2. アウトサイダー・アートと蒐集の創造的役割
24	グループ研究⑧ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(3)	3. アール・ブリュットとサイコティック・アートの古典期
25	グループ研究⑨ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(4)	4. 今日のサイコティック・アートとアウトサイダー・アート
26	グループ研究⑩ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(5)	5. 落書きとその他のオートマティスム
27	グループ研究⑪ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(6)	6. アウトサイダー・アートの美術界への紹介とその問題
28	個人研究② 「ゼミ総括研究」最終発表②	ゼミ生の個人研究発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習

グループ研究の発表のためには、グループのメンバーが授業前に集まって準備する必要があります。メンバーが集まることで、テキストについての互いの理解が深まったり、わからなかった箇所を検討することができたり、テキストを理解するために必要な情報を他の資料やインターネットから得たりすることができます。これらの準備学習をすることで、仲間たちとのコミュニケーションが円滑になり、発表担当外の仲間から授業中に出される質問に対して、適切に応えることができるようになります。

そのために、授業外にグループで集まって集中学習することが、ゼミ内の活性化にも繋がり、各自の研究の広がりと深みを増すことになります。したがって、ゼミの事前研究のために時間は、週に二、三回、各２時間程度かかることを前提としてください。

【テキスト（教科書）】

(1) シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？ ―― 芸術理論入門』ブリュッケ、2007年
(2) 批評空間臨時増刊号『モダニズムのハード・コア　現代美術批評の地平』太田出版、1995年
(3) ハル・フォスター編『視覚論』榑沼範久訳、平凡社ライブラリー、2007年
(4) デイヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』青土社、2011年

【参考書】

【演習のテーマに関係するもの】
(1) 佐々木健一『美学への招待　増補版』中公新書、2019年
(2) 井奥陽子『近代美学入門』ちくま新書、2023年。
【論文の書き方に関係するもの】
(1) 阿部幸大『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』光文社、2024年
(2) 大辻都編著・篠原学『アートとしての論述入門』京都造形芸術大学出版局・藝術学舎、2017年
(3) 廣野由美子『批評理論入門―― 『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書1790、2005年
(4) 杉原賢彦・暮沢剛巳・前島秀国『アートを書く! クリティカル文章術』フィルムアート社、2006年

【成績評価の方法と基準】

①グループ研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
②個人研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
③ゼミ論（２・３年生）（50％）／ゼミ総括研究（４年生）（50％）

【学生の意見等からの気づき】

2025年度は、担当者がサバティカルから戻ってきた最初の年だったので、昨年度との比較ができない。もう少し議論が活発になるように、ゼミ生の前向きな自習を準備させたい。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを基本的に用いていきますが、教員とゼミ生との連絡については様々なSNSやメールなどで、コミュニケーションを欠かさないようにしていきます。

【その他の重要事項】

【授業外の活動】

①ゼミ卒業生や大学院生との交流があります。年一回年末の「望年会」（私たちの演習では「年忘れ」の「忘年会」とは言いません。次の年を「希望の年」として迎えるために「望年会」と呼びます。一期生が20年以上前に、この名前をつけてくれました）には、１期生から現役のゼミ生まで20年以上歳が離れている、多彩な卒業生が集まります。学部生の皆さんが通ってきた悩みや、これから経験するかもしれないことについても、先輩たちが自分の経験を語り、仕事ややりがいについて話してくれます。これは、本演習の最大の人的資産であり、他のゼミには絶対に負けない資産です。それ以外にも、様々な方面で活躍する卒業生たちの交流が、密接に行われています。

②年２回の「ゼミ合宿」には、基本的に全員参加してください。合宿は、教室の中では経験できない場所で、教室や大学でしか関わらない人たちと関わりながら経験を積み重ね、それについて考えるために行っています。そのためにも、向上心をもって、より成長したい人が積極的に参加してくれることが前提です。だからこそ、本演習の合」は、欠かすことのできない課外活動です。合宿では、ゼミ生同士の交流、教員との親睦、さらには東京近郊では体験できない他の地域の施設などの訪問など、刺激を得る機会となっています。

※　本演習では、授業外の活動が重要です。積極的に参加し、自らを磨く「修練」を積むことが要求されていますので注意してください。

【注意と要望】
・本演習は、２コマ続きの授業になりますので、注意してください。
・基本的に、ゼミで課される課題に集中し、他のゼミ生と交流することが重要です。もちろんゼミ生の個性と自由は尊重しなければなりませんが、ゼミは集団活動ですから、過度な個人プレーには気をつけてもらいたいです。様々なことに好奇心を持ち、互いに切磋琢磨しながら協力し、真面目に研究に取り組む人に来てもらいたいです。本演習では、地味でかまいませんから、ひとつのことに熱中できることが重要です。

【コメント】
本演習は、「情報文化演習」のひとつですが、コンピュータを用いてゼミ活動をすることはありません。ただ、作品を制作したり、研究発表をする際に、パソコンが使えると便利かもしれません。それも、気にする必要はありません。

【Outline (in English)】
【Purpose of this exercise】
The purpose of this exercise is to examine the question of "What is *not* the beauty?" and "How can it be possible to engage in society (commit) by expressing one's thoughts?" In doing so, we will focus on the theory and practice of aesthetics and the Philosophy of art. In this exercise, it is important to refine your thoughts by giving good expression to your thoughts while working hard with each other. As a result, the ultimate purpose of this exercise is to express one's thoughts as "thesis" or "work".
【Significance of this exercise】
The significance of this seminar is twofold. First, in order to properly communicate your intentions and thoughts to others, students can refine their expressions by reflecting on their expressions. And secondly, your good expression can enable your participation and make your real world a little better.

PHL400GA（哲学 / Philosophy 400）

情報文化演習

森村　修

サブタイトル：藝術とは何でないか？ —— 藝術理論・藝術批評入門
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【本演習の概要】
私たちは、日常生活の中で、自分の意思や意図、気持ちや欲望を表現しています。例えば、ある人たちは、Facebook、Instagram、x（エックス）などのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を用いて、不特定多数の他者に向かって自分の意見や考えを述べたり、写真などを載せたりします。また、比較的小規模で近しい間柄のグループでは、LINEやメールなどを通じて、自分の気持ちや感情をLINEのスタンプや絵文字を使って表現します。

このように私たちは、様々な情報ネットワークを使って、自分の気持ちや思想の表現を、文字だけでなく記号や絵や写真などを用いて、他者に向けて発信したり、他者からの表現（物）を受信したりしています。

本演習（exercise）では、それを「思考のパフォーマンス」あるいは「思考のパフォーマンス表現」として捉えて、深く考えたり実践したりしていきます。つまり、私たちの日常的なやり取りのひとつひとつを「思考のパフォーマンス」や「思考のパフォーマンス表現」として捉えることが重要になります。しかも、私たちの日常のたわいない会話や行為は、実は社会や世界を変える「力」を秘めています。皆さんが発した言葉や、体や表情で表現する「パフォーマンス」は、権力をもつ為政者よりも、時には大きな「力」をもち、たくさんの人の心を動かし、社会そのものを変える力になります。

皆さんが用いるSNSは、気づかないうちにグローバルな世界と関わっているのだから、国境や言語、人種の壁を越えて、どこかの誰かが、皆さんが知らないうちに、皆さんが書いたものや、写真や動画で表現したものを見ています。それゆえ、皆さんが流す「思考のパフォーマンス」に影響されたり、行動を駆り立てられたりする人たちもいるでしょう。いついかなるときにも、また誰の身にも起こるため、避けられません。

だからこそ、私たちは自らの「力」を不要に不当に使うべきではないのです。私たちの狭い人間関係だけで、社会や世界は成り立っていないからこそ、私たちは、SNSだけでなく、私たちの身体表現や言葉を介した様々な「パフォーマンス表現」が、良い方向にも悪い方向にも社会を変える「力」があることにもっと自覚的になる必要があります。

そこで**2026**年度の本演習では、私たちの個人的な表現が、直接的に社会にコミットしていく在り方を、「美しさ」や「美意識」について、哲学的な視座から「批判的に考え、批判的に表現する」ことを試みます。

【本演習の目的】
本演習では、「自らの思考・思想を言語や身体などの直接的な手段を用いたり、芸術作品やデザインなどの作品を通して間接的に表現することによって、社会に関与（コミット）することはいかにして可能か」という問いについて考察していくことを目的とします。その際に、「美は社会を変える」というテーマを基本にして、藝術作品やデザインがもたらす「美しさ」や「美」などの価値をめぐって、美学（**aesthetics**）や芸術哲学（**philosophy of art**）の理論と実践を研究します。

ただ、本演習では、「思想のパフォーマンス」研究がテーマですから、アート（藝術）やパフォーマンス運動から多くを学びます。ただ注意してもらいたいのは、いわゆる藝術やデザインというジャンルでは、もはや美醜の境界が曖昧になり、藝術とは何か、美とか何かという問いに対する答えが多様化しています。そこで、本演習が重視するのは、〈藝術とは何でないか〉という消極的（negative）な問いを立てて考えていくことです。その際に、どのような答えであれ、それがある種の「思考のパフォーマンス」として捉えられるということ忘れないということです。

私たちを取り巻くグローバルな状況の中で、政治的な問題として、植民地主義、外国による侵略、戦争・紛争、権力による弾圧、社会的不公正、貧困、人種差別・性差別・障害者差別・高齢者差別が問題になっています。また、気候温暖化の爆発的進展によって、自然環境が激変しつつあります。また、少し前までは新型コロナウィルスの感染爆発によって、日常生活の危機を経験したはずなのに、今ではその頃の緊張感もなく、モラルも低下させるだけでなく、様々な事態を悪化させています。これらに対して、本演習では、「思考のパフォーマンス」研究の立場で、「美」や「美しさ」とは何でないか、「美意識」は、私たちの社会を変えるためにどのように必要／不必要なのか、「美」や「美醜」を考えることが、どのように社会を少しでもよくしていくことに貢献できるかを考えていきます。

そこで本演習では、皆さん自身の「思考のパフォーマンス表現」が、社会と密接に結びついていることを改めて考えてもらうとともに、自分の思考・思想をどのように変化させることによって、もっとよいパフォーマンスができ、結果的に社会に働きかけていくことができるかを考えることが目的です。そのために、演習内部では、仲間と切磋琢磨することで、互いの表現を検討し合いながら、自らの思考や思想を「論文」や「作品」にして表現していくことが重要な活動になります。

【本演習の意義】
本演習の意義は、日々の生活における欲望の力を考察し、欲望を正しく解放しながらも、自らの価値観としての美意識と他者や社会の美の基準をすり合わせることを学ぶことです。欲望が誤った方向に流れていかないように、また社会がもたらす「美」の基準がおかしなことになっていないかをきちんと精査し、自分と他者の差異に基づいて互いの欲望を正しくコントロールしながら表現にもたらすこと、そのためには、自らの欲望や美意識を深く思考する必要があります。そうすることによって、私たちの演習は、私たちの現実の世界を、少しでもよりよいものにしていくための批判的な視座を獲得することを目指します。

【到達目標】
①私たちの思考や美意識、さらにはそれらに基づく行為がどのように社会に関与しているかを理論的に考察することができます。つまり、私たちの思想を表現するために、簡単な文章から難しい哲学的テキストに至るまで「批判的に読む力」を身につけることができます。
②私たちの思考や行為をどのように表現すれば良いかを実践的に学ぶことができます。私たちの思考の生産物は、どのようにすればより良くなるのかを実践的に体験することで、「批判的に書く力」を身につけることができます。
③私たちの思考や行為が他者にどのように伝わっているかを技術的に学ぶために、自分が表現したものを公的に発表することで、「表現力」を身につけることができます。
④私たちの思考や行為が社会にどのように影響を与えることができるかを実際的に学ぶために、国際文化情報学会などの機会を利用して「プレゼンテーション力」を身につけることができます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
◆通常の授業では、次の二つの研究を主にして進めていきます。
①指定テキストに基づいた「グループ研究」
ゼミ生をいくつかのグループに分け、グループごとに事前に担当箇所の「テキストを読解」し、「レジュメを作成し」、ゼミ当日に担当グループが「発表」し、それ以外のゼミ生と「討議」します。そうすることで、テキストの理解を深めます。演習の基本となる研究なので、最も重要な活動になります。
②自分のテーマを研究する「個人研究」
個人の研究テーマは、演習の時間内で「発表」してもらいます。ゼミ生各自が自らのテーマに即して研究を進めます。個人研究のテーマは、グループ研究【ゼミのテーマ】とはまったく関係なくてもかまいません。ただ、なるべく【ゼミのテーマ】に近いテーマにした方が研究の効率は上がりますし、自分の研究に資することが多くなります。最終的に、研究の成果を、学期末・年度末に「ゼミ論」や「ゼミ制作」（2・3年生）、年度末に「ゼミ総括論文」や「ゼミ総括制作」（4年）にまとめてもらいます。個人研究は、自分の思想の表現として最も自由に研究できるテーマを担当教員と相談しながら、進めていきます。
◆ゼミ全体の課題
本演習では、毎年12月に開催される「国際文化情報学会」にインスタレーション部門で発表をしています。2026年度も、学会で発表する予定にしています。希望者があれば、他の部門（論文部門、ポスター部門、映像部門）にも参加を予定しています。
◆学年による課題
③２年生・３年生については、「グループ研究」に重点を置きながら、「読む」「書く」「発表する」「プレゼンする」ための「力」を身につけることが重要です。４年生については、個人研究をまとめあげて、思考表現の「パフォーマンス」を様々な媒体=メディアで発表できるように仕上げていきます。
④課外活動として、年２回（夏・冬）行う「ゼミ合宿」を実施します。
(1) 初夏には、「ゼミ遠足」を計画しています。これは、互いのテーマや関心について自己紹介しながら、ゼミに慣れることが目的です。
(2) 夏のゼミ合宿は、東京を離れて、様々な地域を訪問することで、その地域にある美術館や博物館、資料館などを訪ね、表現の仕方の多様性を学びます。
(3) 冬のゼミ合宿は、２・３年生の「ゼミ論」・「ゼミ制作」、４年生の「ゼミ総括研究」・「ゼミ総括制作」の合評会を行い、互いの「表現」を批評し合います。
⑤個別の希望者には、外部講師と連繋した「課外セミナー」や美術館・博物館などの公共施設の訪問なども考えています。可能であれば、知人が運営に携わっている「京都市京セラ美術館」を訪問し、京都という地域の歴史と美術館との関係、また美術館の運営などについて解説していただくことも考えています（予定・自由参加）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	プレゼミ	1. 顔合わせ 2. 今後の方針 3. 授業の進行など
2	グループ研究① シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(1)	1.血と美の関係をめぐって
3	グループ研究② シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(2)	2. さまざまな規範と目的
4	グループ研究③ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(3)	3. 文化が交差するところ
5	グループ研究④ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(4)	4. 富と市場と美術館
6	グループ研究⑤ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(5)	5. ジェンダー、天才、そしてゲリラ・ガールズ
7	個人研究① 前期中間発表	・個人研究の構想発表(1)
8	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(6)	6. 認識、創造、理解
9	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(7)	7. デジタル化と情報の伝播
10	グループ研究⑦ ハル・フォスター編『視覚論』(1)	1. マーティン・ジェイ「近代性における複数の「視の制度」
11	グループ研究⑧ ハル・フォスター編『視覚論』(2)	2. ジョナサン・クレーリー「近代化する視覚」
12	グループ研究⑨ ハル・フォスター編『視覚論』(3)	3. ロザリンド・クラウス「見る衝動／見させるパルス」
13	グループ研究⑩ ハル・フォスター編『視覚論』(4)	4. ノーマン・ブライソン「拡張された場における〈眼差し〉」 5. ジャクリン・ローズ「セクシュアリティと視覚―― いくつかの疑問」
14	個人研究② 個人研究　春学期・期末発表	個人研究の構想発表(2)
15	秋学期イントロダクション	①秋学期の演習概要説明 ②学会のテーマ決定 ③総括研究の注意など
16	グループ研究① 『モダニズムのハード・コア』(1)	1. クレメント・グリーンバーグ「モダニズムの絵画」 2. クレメント・グリーンバーグ「抽象表現主義以後」
17	グループ研究② 『モダニズムのハード・コア』(2)	3. マイケル・フリード「芸術と客体性」 4. T・J・クラーク「クレメント・グリーンバーグの芸術理論」
18	グループ研究③ 『モダニズムのハード・コア』(3)	5. マイケル・フリード「モダニズムはいかに作動するのか―― T・J・クラークへの反論」 6. T・J・クラーク「モダニズムに関する論議―― マイケル・フリードに答える」
19	個人研究① 「ゼミ論」中間発表①	ゼミ生の個人研究発表（1）
20	グループ研究④ 『モダニズムのハード・コア』(4)	7. マイケル・フリード「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(1) 8. ロザリンド・クラウス「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(2) 9. ベンジャミン・ブクロー「「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(3) 10. ディスカッション
21	グループ研究⑤ 『モダニズムのハード・コア』(5)	11. ロザリンド・クラウス「視覚的無意識」
22	グループ研究⑥ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(1)	1. アール・ブリュットと創造性の起源の探求
23	グループ研究⑦ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(2)	2. アウトサイダー・アートと蒐集の創造的役割
24	グループ研究⑧ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(3)	3. アール・ブリュットとサイコティック・アートの古典期
25	グループ研究⑨ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(4)	4. 今日のサイコティック・アートとアウトサイダー・アート
26	グループ研究⑩ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(5)	5. 落書きとその他のオートマティスム
27	グループ研究⑪ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(6)	6. アウトサイダー・アートの美術界への紹介とその問題
28	個人研究② 「ゼミ総括研究」最終発表②	ゼミ生の個人研究発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習

グループ研究の発表のためには、グループのメンバーが授業前に集まって準備する必要があります。メンバーが集まることで、テキストについての互いの理解が深まったり、わからなかった箇所を検討することができたり、テキストを理解するために必要な情報を他の資料やインターネットから得たりすることができます。これらの準備学習をすることで、仲間たちとのコミュニケーションが円滑になり、発表担当外の仲間から授業中に出される質問に対して、適切に応えることができるようになります。

そのために、授業外にグループで集まって集中学習することが、ゼミ内の活性化にも繋がり、各自の研究の広がりと深みを増すことになります。したがって、ゼミの事前研究のために時間は、週に二、三回、各２時間程度かかることを前提としてください。

【テキスト（教科書）】

(1) シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？ ―― 芸術理論入門』ブリュッケ、2007年
(2) 批評空間臨時増刊号『モダニズムのハード・コア　現代美術批評の地平』太田出版、1995年
(3) ハル・フォスター編『視覚論』樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、2007年
(4) デイヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』青土社、2011年

【参考書】

【演習のテーマに関係するもの】
(1) 佐々木健一『美学への招待　増補版』中公新書、2019年
(2) 井奥陽子『近代美学入門』ちくま新書、2023年。
【論文の書き方に関係するもの】
(1) 阿部幸大『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』光文社、2024年
(2) 大辻都編著・篠原学『アートとしての論述入門』京都造形芸術大学出版局・藝術学舎、2017年
(3) 廣野由美子『批評理論入門―― 『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書1790、2005年
(4) 杉原賢彦・暮沢剛巳・前島秀国『アートを書く! クリティカル文章術』フィルムアート社、2006年

【成績評価の方法と基準】

①グループ研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
②個人研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
③ゼミ論（２・３年生）（50％）／ゼミ総括研究（４年生）（50％）

【学生の意見等からの気づき】

2025年度は、担当者がサバティカルから戻ってきた最初の年だったので、昨年度との比較ができない。もう少し議論が活発になるように、ゼミ生の前向きな自習を準備させたい。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを基本的に用いていきますが、教員とゼミ生との連絡については様々なSNSやメールなどで、コミュニケーションを欠かさないようにしていきます。

【その他の重要事項】

【授業外の活動】

①ゼミ卒業生や大学院生との交流があります。年一回年末の「望年会」（私たちの演習では「年忘れ」の「忘年会」とは言いません。次の年を「希望の年」として迎えるために「望年会」と呼びます。一期生が20年以上前に、この名前をつけてくれました）には、１期生から現役のゼミ生まで20年以上歳が離れている、多彩な卒業生が集まります。学部生の皆さんが通ってきた悩みや、これから経験するかもしれないことについても、先輩たちが自分の経験を語り、仕事ややりがいについて話してくれます。これは、本演習の最大の人的資産であり、他のゼミには絶対に負けない資産です。それ以外にも、様々な方面で活躍する卒業生たちの交流が、密接に行われています。

②年２回の「ゼミ合宿」には、基本的に全員参加してください。合宿は、教室の中では経験できない場所で、教室や大学でしか関わらない人たちと関わりながら経験を積み重ね、それについて考えるために行っています。そのためにも、向上心をもって、より成長したい人が積極的に参加してくれることが前提です。だからこそ、本演習の合」は、欠かすことのできない課外活動です。合宿では、ゼミ生同士の交流、教員との親睦、さらには東京近郊では体験できない他の地域の施設などの訪問など、刺激を得る機会となっています。

※　本演習では、授業外の活動が重要です。積極的に参加し、自らを磨く「修練」を積むことが要求されていますので注意してください。

【注意と要望】
・本演習は、２コマ続きの授業になりますので、注意してください。
・基本的に、ゼミで課される課題に集中し、他のゼミ生と交流することが重要です。もちろんゼミ生の個性と自由は尊重しなければなりませんが、ゼミは集団活動ですから、過度な個人プレーには気をつけてもらいたいです。様々なことに好奇心を持ち、互いに切磋琢磨しながら協力し、真面目に研究に取り組む人に来てもらいたいです。本演習では、地味でかまいませんから、ひとつのことに熱中できることが重要です。

【コメント】
本演習は、「情報文化演習」のひとつですが、コンピュータを用いてゼミ活動をすることはありません。ただ、作品を制作したり、研究発表をする際に、パソコンが使えると便利かもしれません。それも、気にする必要はありません。

【Outline (in English)】
【Purpose of this exercise】
The purpose of this exercise is to examine the question of "What is *not* the beauty?" and "How can it be possible to engage in society (commit) by expressing one's thoughts?" In doing so, we will focus on the theory and practice of aesthetics and the Philosophy of art. In this exercise, it is important to refine your thoughts by giving good expression to your thoughts while working hard with each other. As a result, the ultimate purpose of this exercise is to express one's thoughts as "thesis" or "work".
【Significance of this exercise】
The significance of this seminar is twofold. First, in order to properly communicate your intentions and thoughts to others, students can refine their expressions by reflecting on their expressions. And secondly, your good expression can enable your participation and make your real world a little better.

PHL400GA（哲学 / Philosophy 400）

情報文化演習

森村　修

サブタイトル：藝術とは何でないか？ —— 藝術理論・藝術批評入門
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【本演習の概要】
私たちは、日常生活の中で、自分の意思や意図、気持ちや欲望を表現しています。例えば、ある人たちは、Facebook、Instagram、x（エックス）などのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を用いて、不特定多数の他者に向かって自分の意見や考えを述べたり、写真などを載せたりします。また、比較的小規模で近しい間柄のグループでは、LINEやメールなどを通じて、自分の気持ちや感情をLINEのスタンプや絵文字を使って表現します。

このように私たちは、様々な情報ネットワークを使って、自分の気持ちや思想の表現を、文字だけでなく記号や絵や写真などを用いて、他者に向けて発信したり、他者からの表現（物）を受信したりしています。

本演習（exercise）では、それを「思考のパフォーマンス」あるいは「思考のパフォーマンス表現」として捉えて、深く考えたり実践したりしていきます。つまり、私たちの日常的なやり取りのひとつひとつを「思考のパフォーマンス」や「思考のパフォーマンス表現」として捉えることが重要になります。しかも、私たちの日常のたわいない会話や行為は、実は社会や世界を変える「力」を秘めています。皆さんが発した言葉や、体や表情で表現する「パフォーマンス」は、権力をもつ為政者よりも、時には大きな「力」をもち、たくさんの人の心を動かし、社会そのものを変える力になります。

皆さんが用いるSNSは、気づかないうちにグローバルな世界と関わっているのだから、国境や言語、人種の壁を越えて、どこかの誰かが、皆さんが知らないうちに、皆さんが書いたものや、写真や動画で表現したものを見ています。それゆえ、皆さんが流す「思考のパフォーマンス」に影響されたり、行動を駆り立てられたりする人たちもいるでしょう。いついかなるときにも、また誰の身にも起こるため、避けられません。

だからこそ、私たちは自らの「力」を不要に不当に使うべきではないのです。私たちの狭い人間関係だけで、社会や世界は成り立っていないからこそ、私たちは、SNSだけでなく、私たちの身体表現や言葉を介した様々な「パフォーマンス表現」が、良い方向にも悪い方向にも社会を変える「力」があることにもっと自覚的になる必要があります。

そこで**2026**年度の本演習では、私たちの個人的な表現が、直接的に社会にコミットしていく在り方を、「美しさ」や「美意識」について、哲学的な視座から「批判的に考え、批判的に表現する」ことを試みます。
【本演習の目的】
本演習では、「自らの思考・思想を言語や身体などの直接的な手段を用いたり、芸術作品やデザインなどの作品を通して間接的に表現することによって、社会に関与（コミット）することはいかにして可能か」という問いについて考察していくことを目的とします。その際に、「美は社会を変える」というテーマを基本にして、藝術作品やデザインがもたらす「美しさ」や「美」などの価値をめぐって、美学（**aesthetics**）や芸術哲学（**philosophy of art**）の理論と実践を研究します。

ただ、本演習では、「思想のパフォーマンス」研究がテーマですから、アート（藝術）やパフォーマンス運動から多くを学びます。ただ注意してもらいたいのは、いわゆる藝術やデザインというジャンルでは、もはや美醜の境界が曖昧になり、藝術とは何か、美とか何かという問いに対する答えが多様化しています。そこで、本演習が重視するのは、〈藝術とは何でないか〉という消極的（negative）な問いを立てて考えていくことです。その際に、どのような答えであれ、それがある種の「思考のパフォーマンス」として捉えられるということ忘れないということです。

私たちを取り巻くグローバルな状況の中で、政治的な問題として、植民地主義、外国による侵略、戦争・紛争、権力による弾圧、社会的不公正、貧困、人種差別・性差別・障害者差別・高齢者差別が問題になっています。また、気候温暖化の爆発的進展によって、自然環境が激変しつつあります。また、少し前までは新型コロナウィルスの感染爆発によって、日常生活の危機を経験したはずなのに、今ではその頃の緊張感もなく、モラルも低下させるだけでなく、様々な事態を悪化させています。これらに対して、本演習では、「思考のパフォーマンス」研究の立場で、「美」や「美しさ」とは何でないか、「美意識」は、私たちの社会を変えるためにどのように必要／不必要なのか、「美」や「美醜」を考えることが、どのように社会を少しでもよくしていくことに貢献できるかを考えていきます。

そこで本演習では、皆さん自身の「思考のパフォーマンス表現」が、社会と密接に結びついていることを改めて考えてもらうとともに、自分の思考・思想をどのように変化させることによって、もっとよいパフォーマンスができ、結果的に社会に働きかけていくことができるかを考えることが目的です。そのために、演習内部では、仲間と切磋琢磨することで、互いの表現を検討し合いながら、自らの思考や思想を「論文」や「作品」にして表現していくことが重要な活動になります。
【本演習の意義】
本演習の意義は、日々の生活における欲望の力を考察し、欲望を正しく解放しながらも、自らの価値観としての美意識と他者や社会の美の基準をすり合わせることを学ぶことです。欲望が誤った方向に流れていかないように、また社会がもたらす「美」の基準がおかしなことになっていないかをきちんと精査し、自分と他者の差異に基づいて互いの欲望を正しくコントロールしながら表現にもたらすこと、そのためには、自らの欲望や美意識を深く思考する必要があります。そうすることによって、私たちの演習は、私たちの現実の世界を、少しでもよりよいものにしていくための批判的な視座を獲得することを目指します。

【到達目標】
①私たちの思考や美意識、さらにはそれらに基づく行為がどのように社会に関与しているかを理論的に考察することができます。つまり、私たちの思想を表現するために、簡単な文章から難しい哲学的テキストに至るまで「批判的に読む力」を身につけることができます。
②私たちの思考や行為をどのように表現すれば良いかを実践的に学ぶことができます。私たちの思考の生産物は、どのようにすればより良くなるのかを実践的に体験することで、「批判的に書く力」を身につけることができます。
③私たちの思考や行為が他者にどのように伝わっているかを技術的に学ぶために、自分が表現したものを公的に発表することで、「表現力」を身につけることができます。
④私たちの思考や行為が社会にどのように影響を与えることができるかを実際的に学ぶために、国際文化情報学会などの機会を利用して「プレゼンテーション力」を身につけることができます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
◆通常の授業では、次の二つの研究を主にして進めていきます。
①指定テキストに基づいた「グループ研究」
ゼミ生をいくつかのグループに分け、グループごとに事前に担当箇所の「テキストを読解」し、「レジュメを作成し」、ゼミ当日に担当グループが「発表」し、それ以外のゼミ生と「討議」します。そうすることで、テキストの理解を深めます。演習の基本となる研究なので、最も重要な活動になります。
②自分のテーマを研究する「個人研究」
個人の研究テーマは、演習の時間内で「発表」してもらいます。ゼミ生各自が自らのテーマに即して研究を進めます。個人研究のテーマは、グループ研究【ゼミのテーマ】とはまったく関係なくてもかまいません。ただ、なるべく【ゼミのテーマ】に近いテーマにした方が研究の効率は上がりますし、自分の研究に資することが多くなります。最終的に、研究の成果を、学期末・年度末に「ゼミ論」や「ゼミ制作」（2・3年生）、年度末に「ゼミ総括論文」や「ゼミ総括制作」（4年）にまとめてもらいます。個人研究は、自分の思想の表現として最も自由に研究できるテーマを担当教員と相談しながら、進めていきます。
◆ゼミ全体の課題
本演習では、毎年12月に開催される「国際文化情報学会」にインスタレーション部門で発表をしています。2026年度も、学会で発表する予定にしています。希望者があれば、他の部門（論文部門、ポスター部門、映像部門）にも参加を予定しています。
◆学年による課題
③２年生・３年生については、「グループ研究」に重点を置きながら、「読む」「書く」「発表する」「プレゼンする」ための「力」を身につけることが重要です。４年生については、個人研究をまとめあげて、思考表現の「パフォーマンス」を様々な媒体=メディアで発表できるように仕上げていきます。
④課外活動として、年２回（夏・冬）行う「ゼミ合宿」を実施します。
(1) 初夏には、「ゼミ遠足」を計画しています。これは、互いのテーマや関心について自己紹介しながら、ゼミに慣れることが目的です。
(2) 夏のゼミ合宿は、東京を離れて、様々な地域を訪問することで、その地域にある美術館や博物館、資料館などを訪ね、表現の仕方の多様性を学びます。
(3) 冬のゼミ合宿は、２・３年生の「ゼミ論」・「ゼミ制作」、４年生の「ゼミ総括研究」・「ゼミ総括制作」の合評会を行い、互いの「表現」を批評し合います。
⑤個別の希望者には、外部講師と連繋した「課外セミナー」や美術館・博物館などの公共施設の訪問なども考えています。可能であれば、知人が運営に携わっている「京都市京セラ美術館」を訪問し、京都という地域の歴史と美術館との関係、また美術館の運営などについて解説していただくことも考えています（予定・自由参加）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	プレゼミ	1. 顔合わせ 2. 今後の方針 3. 授業の進行など
2	グループ研究① シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(1)	1.血と美の関係をめぐって
3	グループ研究② シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(2)	2. さまざまな規範と目的
4	グループ研究③ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(3)	3. 文化が交差するところ
5	グループ研究④ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(4)	4. 富と市場と美術館
6	グループ研究⑤ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(5)	5. ジェンダー、天才、そしてゲリラ・ガールズ
7	個人研究① 前期中間発表	・個人研究の構想発表(1)
8	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(6)	6. 認識、創造、理解
9	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(7)	7. デジタル化と情報の伝播
10	グループ研究⑦ ハル・フォスター編『視覚論』(1)	1. マーティン・ジェイ「近代性における複数の「視の制度」
11	グループ研究⑧ ハル・フォスター編『視覚論』(2)	2. ジョナサン・クレーリー「近代化する視覚」
12	グループ研究⑨ ハル・フォスター編『視覚論』(3)	3. ロザリンド・クラウス「見る衝動／見させるパルス」
13	グループ研究⑩ ハル・フォスター編『視覚論』(4)	4. ノーマン・ブライソン「拡張された場における〈眼差し〉」 5. ジャクリン・ローズ「セクシュアリティと視覚―― いくつかの疑問」
14	個人研究② 個人研究　春学期・期末発表	個人研究の構想発表(2)
15	秋学期イントロダクション	①秋学期の演習概要説明 ②学会のテーマ決定 ③総括研究の注意など
16	グループ研究① 『モダニズムのハード・コア』(1)	1. クレメント・グリーンバーグ「モダニズムの絵画」 2. クレメント・グリーンバーグ「抽象表現主義以後」
17	グループ研究② 『モダニズムのハード・コア』(2)	3. マイケル・フリード「芸術と客体性」 4. T・J・クラーク「クレメント・グリーンバーグの芸術理論」
18	グループ研究③ 『モダニズムのハード・コア』(3)	5. マイケル・フリード「モダニズムはいかに作動するのか―― T・J・クラークへの反論」 6. T・J・クラーク「モダニズムに関する論議―― マイケル・フリードに答える」
19	個人研究① 「ゼミ論」中間発表①	ゼミ生の個人研究発表（1）
20	グループ研究④ 『モダニズムのハード・コア』(4)	7. マイケル・フリード「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(1) 8. ロザリンド・クラウス「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(2) 9. ベンジャミン・ブクロー「「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(3) 10. ディスカッション
21	グループ研究⑤ 『モダニズムのハード・コア』(5)	11. ロザリンド・クラウス「視覚的無意識」
22	グループ研究⑥ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(1)	1. アール・ブリュットと創造性の起源の探求
23	グループ研究⑦ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(2)	2. アウトサイダー・アートと蒐集の創造的役割
24	グループ研究⑧ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(3)	3. アール・ブリュットとサイコティック・アートの古典期
25	グループ研究⑨ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(4)	4. 今日のサイコティック・アートとアウトサイダー・アート
26	グループ研究⑩ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(5)	5. 落書きとその他のオートマティスム
27	グループ研究⑪ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(6)	6. アウトサイダー・アートの美術界への紹介とその問題
28	個人研究② 「ゼミ総括研究」最終発表②	ゼミ生の個人研究発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習

グループ研究の発表のためには、グループのメンバーが授業前に集まって準備する必要があります。メンバーが集まることで、テキストについての互いの理解が深まったり、わからなかった箇所を検討することができたり、テキストを理解するために必要な情報を他の資料やインターネットから得たりすることができます。これらの準備学習をすることで、仲間たちとのコミュニケーションが円滑になり、発表担当外の仲間から授業中に出される質問に対して、適切に応えることができるようになります。

そのために、授業外にグループで集まって集中学習することが、ゼミ内の活性化にも繋がり、各自の研究の広がりと深みを増すことになります。したがって、ゼミの事前研究のために時間は、週に二、三回、各２時間程度かかることを前提としてください。

【テキスト（教科書）】

(1) シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？ ―― 芸術理論入門』ブリュッケ、2007年
(2) 批評空間臨時増刊号『モダニズムのハード・コア　現代美術批評の地平』太田出版、1995年
(3) ハル・フォスター編『視覚論』樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、2007年
(4) デイヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』青土社、2011年

【参考書】

【演習のテーマに関係するもの】
(1) 佐々木健一『美学への招待　増補版』中公新書、2019年
(2) 井奥陽子『近代美学入門』ちくま新書、2023年。
【論文の書き方に関係するもの】
(1) 阿部幸大『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』光文社、2024年
(2) 大辻都編著・篠原学『アートとしての論述入門』京都造形芸術大学出版局・藝術学舎、2017年
(3) 廣野由美子『批評理論入門―― 『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書1790、2005年
(4) 杉原賢彦・暮沢剛巳・前島秀国『アートを書く! クリティカル文章術』フィルムアート社、2006年

【成績評価の方法と基準】

①グループ研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
②個人研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
③ゼミ論（２・３年生）（50％）／ゼミ総括研究（４年生）（50％）

【学生の意見等からの気づき】

2025年度は、担当者がサバティカルから戻ってきた最初の年だったので、昨年度との比較ができない。もう少し議論が活発になるように、ゼミ生の前向きな自習を準備させたい。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを基本的に用いていきますが、教員とゼミ生との連絡については様々なSNSやメールなどで、コミュニケーションを欠かさないようにしていきます。

【その他の重要事項】

【授業外の活動】

①ゼミ卒業生や大学院生との交流があります。年一回年末の「望年会」（私たちの演習では「年忘れ」の「忘年会」とは言いません。次の年を「希望の年」として迎えるために「望年会」と呼びます。一期生が20年以上前に、この名前をつけてくれました）には、１期生から現役のゼミ生まで20年以上歳が離れている、多彩な卒業生が集まります。学部生の皆さんが通ってきた悩みや、これから経験するかもしれないことについても、先輩たちが自分の経験を語り、仕事ややりがいについて話してくれます。これは、本演習の最大の人的資産であり、他のゼミには絶対に負けない資産です。それ以外にも、様々な方面で活躍する卒業生たちの交流が、密接に行われています。

②年２回の「ゼミ合宿」には、基本的に全員参加してください。合宿は、教室の中では経験できない場所で、教室や大学でしか関わらない人たちと関わりながら経験を積み重ね、それについて考えるために行っています。そのためにも、向上心をもって、より成長したい人が積極的に参加してくれることが前提です。だからこそ、本演習の合」は、欠かすことのできない課外活動です。合宿では、ゼミ生同士の交流、教員との親睦、さらには東京近郊では体験できない他の地域の施設などの訪問など、刺激を得る機会となっています。

※　本演習では、授業外の活動が重要です。積極的に参加し、自らを磨く「修練」を積むことが要求されていますので注意してください。

【注意と要望】
・本演習は、２コマ続きの授業になりますので、注意してください。
・基本的に、ゼミで課される課題に集中し、他のゼミ生と交流することが重要です。もちろんゼミ生の個性と自由は尊重しなければなりませんが、ゼミは集団活動ですから、過度な個人プレーには気をつけてもらいたいです。様々なことに好奇心を持ち、互いに切磋琢磨しながら協力し、真面目に研究に取り組む人に来てもらいたいです。本演習では、地味でかまいませんから、ひとつのことに熱中できることが重要です。

【コメント】
本演習は、「情報文化演習」のひとつですが、コンピュータを用いてゼミ活動をすることはありません。ただ、作品を制作したり、研究発表をする際に、パソコンが使えると便利かもしれません。それも、気にする必要はありません。

【Outline (in English)】
【Purpose of this exercise】
The purpose of this exercise is to examine the question of "What is *not* the beauty?" and "How can it be possible to engage in society (commit) by expressing one's thoughts?" In doing so, we will focus on the theory and practice of aesthetics and the Philosophy of art. In this exercise, it is important to refine your thoughts by giving good expression to your thoughts while working hard with each other. As a result, the ultimate purpose of this exercise is to express one's thoughts as "thesis" or "work".
【Significance of this exercise】
The significance of this seminar is twofold. First, in order to properly communicate your intentions and thoughts to others, students can refine their expressions by reflecting on their expressions. And secondly, your good expression can enable your participation and make your real world a little better.

PHL400GA（哲学 / Philosophy 400）

情報文化演習

森村　修

サブタイトル：藝術とは何でないか？ —— 藝術理論・藝術批評入門
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【本演習の概要】
私たちは、日常生活の中で、自分の意思や意図、気持ちや欲望を表現しています。例えば、ある人たちは、Facebook、Instagram、x（エックス）などのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を用いて、不特定多数の他者に向かって自分の意見や考えを述べたり、写真などを載せたりします。また、比較的小規模で近しい間柄のグループでは、LINEやメールなどを通じて、自分の気持ちや感情をLINEのスタンプや絵文字を使って表現します。

このように私たちは、様々な情報ネットワークを使って、自分の気持ちや思想の表現を、文字だけでなく記号や絵や写真などを用いて、他者に向けて発信したり、他者からの表現（物）を受信したりしています。

本演習（exercise）では、それを「思考のパフォーマンス」あるいは「思考のパフォーマンス表現」として捉えて、深く考えたり実践したりしていきます。つまり、私たちの日常的なやり取りのひとつひとつを「思考のパフォーマンス」や「思考のパフォーマンス表現」として捉えることが重要になります。しかも、私たちの日常のたわいない会話や行為は、実は社会や世界を変える「力」を秘めています。皆さんが発した言葉や、体や表情で表現する「パフォーマンス」は、権力をもつ為政者よりも、時には大きな「力」をもち、たくさんの人の心を動かし、社会そのものを変える力になります。

皆さんが用いるSNSは、気づかないうちにグローバルな世界と関わっているのだから、国境や言語、人種の壁を越えて、どこかの誰かが、皆さんが知らないうちに、皆さんが書いたものや、写真や動画で表現したものを見ています。それゆえ、皆さんが流す「思考のパフォーマンス」に影響されたり、行動を駆り立てられたりする人たちもいるでしょう。いついかなるときにも、また誰の身にも起こるため、避けられません。

だからこそ、私たちは自らの「力」を不要に不当に使うべきではないのです。私たちの狭い人間関係だけで、社会や世界は成り立っていないからこそ、私たちは、SNSだけでなく、私たちの身体表現や言葉を介した様々な「パフォーマンス表現」が、良い方向にも悪い方向にも社会を変える「力」があることにもっと自覚的になる必要があります。

そこで**2026**年度の本演習では、私たちの個人的な表現が、直接的に社会にコミットしていく在り方を、「美しさ」や「美意識」について、哲学的な視座から「批判的に考え、批判的に表現する」ことを試みます。
【本演習の目的】
本演習では、「自らの思考・思想を言語や身体などの直接的な手段を用いたり、芸術作品やデザインなどの作品を通して間接的に表現することによって、社会に関与（コミット）することはいかにして可能か」という問いについて考察していくことを目的とします。その際に、「美は社会を変える」というテーマを基本にして、藝術作品やデザインがもたらす「美しさ」や「美」などの価値をめぐって、美学（**aesthetics**）や芸術哲学（**philosophy of art**）の理論と実践を研究します。

ただ、本演習では、「思想のパフォーマンス」研究がテーマですから、アート（藝術）やパフォーマンス運動から多くを学びます。ただ注意してもらいたいのは、いわゆる藝術やデザインというジャンルでは、もはや美醜の境界が曖昧になり、藝術とは何か、美とか何かという問いに対する答えが多様化しています。そこで、本演習が重視するのは、〈藝術とは何でないか〉という消極的（negative）な問いを立てて考えていくことです。その際に、どのような答えであれ、それがある種の「思考のパフォーマンス」として捉えられるということ忘れないということです。

私たちを取り巻くグローバルな状況の中で、政治的な問題として、植民地主義、外国による侵略、戦争・紛争、権力による弾圧、社会的不公正、貧困、人種差別・性差別・障害者差別・高齢者差別が問題になっています。また、気候温暖化の爆発的進展によって、自然環境が激変しつつあります。また、少し前までは新型コロナウィルスの感染爆発によって、日常生活の危機を経験したはずなのに、今ではその頃の緊張感もなく、モラルも低下させるだけでなく、様々な事態を悪化させています。これらに対して、本演習では、「思考のパフォーマンス」研究の立場で、「美」や「美しさ」とは何でないか、「美意識」は、私たちの社会を変えるためにどのように必要／不必要なのか、「美」や「美醜」を考えることが、どのように社会を少しでもよくしていくことに貢献できるかを考えていきます。

そこで本演習では、皆さん自身の「思考のパフォーマンス表現」が、社会と密接に結びついていることを改めて考えてもらうとともに、自分の思考・思想をどのように変化させることによって、もっとよいパフォーマンスができ、結果的に社会に働きかけていくことができるかを考えることが目的です。そのために、演習内部では、仲間と切磋琢磨することで、互いの表現を検討し合いながら、自らの思考や思想を「論文」や「作品」にして表現していくことが重要な活動になります。
【本演習の意義】
本演習の意義は、日々の生活における欲望の力を考察し、欲望を正しく解放しながらも、自らの価値観としての美意識と他者や社会の美の基準をすり合わせることを学ぶことです。欲望が誤った方向に流れていかないように、また社会がもたらす「美」の基準がおかしなことになっていないかをきちんと精査し、自分と他者の差異に基づいて互いの欲望を正しくコントロールしながら表現にもたらすこと、そのためには、自らの欲望や美意識を深く思考する必要があります。そうすることによって、私たちの演習は、私たちの現実の世界を、少しでもよりよいものにしていくための批判的な視座を獲得することを目指します。

【到達目標】
①私たちの思考や美意識、さらにはそれらに基づく行為がどのように社会に関与しているかを理論的に考察することができます。つまり、私たちの思想を表現するために、簡単な文章から難しい哲学的テキストに至るまで「批判的に読む力」を身につけることができます。
②私たちの思考や行為をどのように表現すれば良いかを実践的に学ぶことができます。私たちの思考の生産物は、どのようにすればより良くなるのかを実践的に体験することで、「批判的に書く力」を身につけることができます。
③私たちの思考や行為が他者にどのように伝わっているかを技術的に学ぶために、自分が表現したものを公的に発表することで、「表現力」を身につけることができます。
④私たちの思考や行為が社会にどのように影響を与えることができるかを実際的に学ぶために、国際文化情報学会などの機会を利用して「プレゼンテーション力」を身につけることができます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
◆通常の授業では、次の二つの研究を主にして進めていきます。
①指定テキストに基づいた「グループ研究」
ゼミ生をいくつかのグループに分け、グループごとに事前に担当箇所の「テキストを読解」し、「レジュメを作成し」、ゼミ当日に担当グループが「発表」し、それ以外のゼミ生と「討議」します。そうすることで、テキストの理解を深めます。演習の基本となる研究なので、最も重要な活動になります。
②自分のテーマを研究する「個人研究」
個人の研究テーマは、演習の時間内で「発表」してもらいます。ゼミ生各自が自らのテーマに即して研究を進めます。個人研究のテーマは、グループ研究【ゼミのテーマ】とはまったく関係なくてもかまいません。ただ、なるべく【ゼミのテーマ】に近いテーマにした方が研究の効率は上がりますし、自分の研究に資することが多くなります。最終的に、研究の成果を、学期末・年度末に「ゼミ論」や「ゼミ制作」（2・3年生）、年度末に「ゼミ総括論文」や「ゼミ総括制作」（4年）にまとめてもらいます。個人研究は、自分の思想の表現として最も自由に研究できるテーマを担当教員と相談しながら、進めていきます。
◆ゼミ全体の課題
本演習では、毎年12月に開催される「国際文化情報学会」にインスタレーション部門で発表をしています。2026年度も、学会で発表する予定にしています。希望者があれば、他の部門（論文部門、ポスター部門、映像部門）にも参加を予定しています。
◆学年による課題
③２年生・３年生については、「グループ研究」に重点を置きながら、「読む」「書く」「発表する」「プレゼンする」ための「力」を身につけることが重要です。４年生については、個人研究をまとめあげて、思考表現の「パフォーマンス」を様々な媒体=メディアで発表できるように仕上げていきます。
④課外活動として、年２回（夏・冬）行う「ゼミ合宿」を実施します。
(1) 初夏には、「ゼミ遠足」を計画しています。これは、互いのテーマや関心について自己紹介しながら、ゼミに慣れることが目的です。
(2) 夏のゼミ合宿は、東京を離れて、様々な地域を訪問することで、その地域にある美術館や博物館、資料館などを訪ね、表現の仕方の多様性を学びます。
(3) 冬のゼミ合宿は、２・３年生の「ゼミ論」・「ゼミ制作」、４年生の「ゼミ総括研究」・「ゼミ総括制作」の合評会を行い、互いの「表現」を批評し合います。
⑤個別の希望者には、外部講師と連繋した「課外セミナー」や美術館・博物館などの公共施設の訪問なども考えています。可能であれば、知人が運営に携わっている「京都市京セラ美術館」を訪問し、京都という地域の歴史と美術館との関係、また美術館の運営などについて解説していただくことも考えています（予定・自由参加）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	プレゼミ	1. 顔合わせ 2. 今後の方針 3. 授業の進行など
2	グループ研究① シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(1)	1.血と美の関係をめぐって
3	グループ研究② シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(2)	2. さまざまな規範と目的
4	グループ研究③ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(3)	3. 文化が交差するところ
5	グループ研究④ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(4)	4. 富と市場と美術館
6	グループ研究⑤ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(5)	5. ジェンダー、天才、そしてゲリラ・ガールズ
7	個人研究① 前期中間発表	・個人研究の構想発表(1)
8	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(6)	6. 認識、創造、理解
9	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(7)	7. デジタル化と情報の伝播
10	グループ研究⑦ ハル・フォスター編『視覚論』(1)	1. マーティン・ジェイ「近代性における複数の「視の制度」
11	グループ研究⑧ ハル・フォスター編『視覚論』(2)	2. ジョナサン・クレーリー「近代化する視覚」
12	グループ研究⑨ ハル・フォスター編『視覚論』(3)	3. ロザリンド・クラウス「見る衝動／見させるパルス」
13	グループ研究⑩ ハル・フォスター編『視覚論』(4)	4. ノーマン・ブライソン「拡張された場における〈眼差し〉」 5. ジャクリン・ローズ「セクシュアリティと視覚―― いくつかの疑問」
14	個人研究② 個人研究　春学期・期末発表	個人研究の構想発表(2)
15	秋学期イントロダクション	①秋学期の演習概要説明 ②学会のテーマ決定 ③総括研究の注意など
16	グループ研究① 『モダニズムのハード・コア』(1)	1. クレメント・グリーンバーグ「モダニズムの絵画」 2. クレメント・グリーンバーグ「抽象表現主義以後」
17	グループ研究② 『モダニズムのハード・コア』(2)	3. マイケル・フリード「芸術と客体性」 4. T・J・クラーク「クレメント・グリーンバーグの芸術理論」
18	グループ研究③ 『モダニズムのハード・コア』(3)	5. マイケル・フリード「モダニズムはいかに作動するのか―― T・J・クラークへの反論」 6. T・J・クラーク「モダニズムに関する論議―― マイケル・フリードに答える」
19	個人研究① 「ゼミ論」中間発表①	ゼミ生の個人研究発表（1）
20	グループ研究④ 『モダニズムのハード・コア』(4)	7. マイケル・フリード「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(1) 8. ロザリンド・クラウス「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(2) 9. ベンジャミン・ブクロー「「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(3) 10. ディスカッション
21	グループ研究⑤ 『モダニズムのハード・コア』(5)	11. ロザリンド・クラウス「視覚的無意識」
22	グループ研究⑥ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(1)	1. アール・ブリュットと創造性の起源の探求
23	グループ研究⑦ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(2)	2. アウトサイダー・アートと蒐集の創造的役割
24	グループ研究⑧ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(3)	3. アール・ブリュットとサイコティック・アートの古典期
25	グループ研究⑨ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(4)	4. 今日のサイコティック・アートとアウトサイダー・アート
26	グループ研究⑩ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(5)	5. 落書きとその他のオートマティスム
27	グループ研究⑪ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(6)	6. アウトサイダー・アートの美術界への紹介とその問題
28	個人研究② 「ゼミ総括研究」最終発表②	ゼミ生の個人研究発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習

　グループ研究の発表のためには、グループのメンバーが授業前に集まって準備する必要があります。メンバーが集まることで、テキストについての互いの理解が深まったり、わからなかった箇所を検討することができたり、テキストを理解するために必要な情報を他の資料やインターネットから得たりすることができます。これらの準備学習をすることで、仲間たちとのコミュニケーションが円滑になり、発表担当外の仲間から授業中に出される質問に対して、適切に応えることができるようになります。

　そのために、授業外にグループで集まって集中学習することが、ゼミ内の活性化にも繋がり、各自の研究の広がりと深みを増すことになります。したがって、ゼミの事前研究のために時間は、週に二、三回、各２時間程度かかることを前提としてください。

【テキスト（教科書）】

(1) シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？ ―― 芸術理論入門』ブリュッケ、2007年
(2) 批評空間臨時増刊号『モダニズムのハード・コア　現代美術批評の地平』太田出版、1995年
(3) ハル・フォスター編『視覚論』樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、2007年
(4) デイヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』青土社、2011年

【参考書】

【演習のテーマに関係するもの】
(1) 佐々木健一『美学への招待　増補版』中公新書、2019年
(2) 井奥陽子『近代美学入門』ちくま新書、2023年。
【論文の書き方に関係するもの】
(1) 阿部幸大『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』光文社、2024年
(2) 大辻都編著・篠原学『アートとしての論述入門』京都造形芸術大学出版局・藝術学舎、2017年
(3) 廣野由美子『批評理論入門―― 『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書1790、2005年
(4) 杉原賢彦・暮沢剛巳・前島秀国『アートを書く! クリティカル文章術』フィルムアート社、2006年

【成績評価の方法と基準】

①グループ研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
②個人研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
③ゼミ論（２・３年生）（50％）／ゼミ総括研究（４年生）（50％）

【学生の意見等からの気づき】

2025年度は、担当者がサバティカルから戻ってきた最初の年だったので、昨年度との比較ができない。もう少し議論が活発になるように、ゼミ生の前向きな自習を準備させたい。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを基本的に用いていきますが、教員とゼミ生との連絡については様々なSNSやメールなどで、コミュニケーションを欠かさないようにしていきます。

【その他の重要事項】

【授業外の活動】

①ゼミ卒業生や大学院生との交流があります。年一回年末の「望年会」（私たちの演習では「年忘れ」の「忘年会」とは言いません。次の年を「希望の年」として迎えるために「望年会」と呼びます。一期生が20年以上前に、この名前をつけてくれました）には、１期生から現役のゼミ生まで20年以上歳が離れている、多彩な卒業生が集まります。学部生の皆さんが通ってきた悩みや、これから経験するかもしれないことについても、先輩たちが自分の経験を語り、仕事ややりがいについて話してくれます。これは、本演習の最大の人的資産であり、他のゼミには絶対に負けない資産です。それ以外にも、様々な方面で活躍する卒業生たちの交流が、密接に行われています。

②年２回の「ゼミ合宿」には、基本的に全員参加してください。合宿は、教室の中では経験できない場所で、教室や大学でしか関わらない人たちと関わりながら経験を積み重ね、それについて考えるために行っています。そのためにも、向上心をもって、より成長したい人が積極的に参加してくれることが前提です。だからこそ、本演習の合」は、欠かすことのできない課外活動です。合宿では、ゼミ生同士の交流、教員との親睦、さらには東京近郊では体験できない他の地域の施設などの訪問など、刺激を得る機会となっています。

※　本演習では、授業外の活動が重要です。積極的に参加し、自らを磨く「修練」を積むことが要求されていますので注意してください。

【注意と要望】
・本演習は、２コマ続きの授業になりますので、注意してください。
・基本的に、ゼミで課される課題に集中し、他のゼミ生と交流することが重要です。もちろんゼミ生の個性と自由は尊重しなければなりませんが、ゼミは集団活動ですから、過度な個人プレーには気をつけてもらいたいです。様々なことに好奇心を持ち、互いに切磋琢磨しながら協力し、真面目に研究に取り組む人に来てもらいたいです。本演習では、地味でかまいませんから、ひとつのことに熱中できることが重要です。

【コメント】
本演習は、「情報文化演習」のひとつですが、コンピュータを用いてゼミ活動をすることはありません。ただ、作品を制作したり、研究発表をする際に、パソコンが使えると便利かもしれません。それも、気にする必要はありません。

【Outline (in English)】
【Purpose of this exercise】
The purpose of this exercise is to examine the question of "What is *not* the beauty?" and "How can it be possible to engage in society (commit) by expressing one's thoughts?" In doing so, we will focus on the theory and practice of aesthetics and the Philosophy of art. In this exercise, it is important to refine your thoughts by giving good expression to your thoughts while working hard with each other. As a result, the ultimate purpose of this exercise is to express one's thoughts as "thesis" or "work".
【Significance of this exercise】
The significance of this seminar is twofold. First, in order to properly communicate your intentions and thoughts to others, students can refine their expressions by reflecting on their expressions. And secondly, your good expression can enable your participation and make your real world a little better.

PHL400GA（哲学 / Philosophy 400）

情報文化演習

森村　修

サブタイトル：藝術とは何でないか？ —— 藝術理論・藝術批評入門
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【本演習の概要】
私たちは、日常生活の中で、自分の意思や意図、気持ちや欲望を表現しています。例えば、ある人たちは、Facebook、Instagram、x（エックス）などのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を用いて、不特定多数の他者に向かって自分の意見や考えを述べたり、写真などを載せたりします。また、比較的小規模で近しい間柄のグループでは、LINEやメールなどを通じて、自分の気持ちや感情をLINEのスタンプや絵文字を使って表現します。

このように私たちは、様々な情報ネットワークを使って、自分の気持ちや思想の表現を、文字だけでなく記号や絵や写真などを用いて、他者に向けて発信したり、他者からの表現（物）を受信したりしています。

本演習（exercise）では、それを「思考のパフォーマンス」あるいは「思考のパフォーマンス表現」として捉えて、深く考えたり実践したりしていきます。つまり、私たちの日常的なやり取りのひとつひとつを「思考のパフォーマンス」や「思考のパフォーマンス表現」として捉えることが重要になります。しかも、私たちの日常のたわいない会話や行為は、実は社会や世界を変える「力」を秘めています。皆さんが発した言葉や、体や表情で表現する「パフォーマンス」は、権力をもつ為政者よりも、時には大きな「力」をもち、たくさんの人の心を動かし、社会そのものを変える力になります。

皆さんが用いるSNSは、気づかないうちにグローバルな世界と関わっているのだから、国境や言語、人種の壁を越えて、どこかの誰かが、皆さんが知らないうちに、皆さんが書いたものや、写真や動画で表現したものを見ています。それゆえ、皆さんが流す「思考のパフォーマンス」に影響されたり、行動を駆り立てられたりする人たちもいるでしょう。いついかなるときにも、また誰の身にも起こるため、避けられません。

だからこそ、私たちは自らの「力」を不要に不当に使うべきではないのです。私たちの狭い人間関係だけで、社会や世界は成り立っていないからこそ、私たちは、SNSだけでなく、私たちの身体表現や言葉を介した様々な「パフォーマンス表現」が、良い方向にも悪い方向にも社会を変える「力」があることにもっと自覚的になる必要があります。

そこで**2026**年度の本演習では、私たちの個人的な表現が、直接的に社会にコミットしていく在り方を、「美しさ」や「美意識」について、哲学的な視座から「批判的に考え、批判的に表現する」ことを試みます。
【本演習の目的】
本演習では、「自らの思考・思想を言語や身体などの直接的な手段を用いたり、芸術作品やデザインなどの作品を通して間接的に表現することによって、社会に関与（コミット）することはいかにして可能か」という問いについて考察していくことを目的とします。その際に、「美は社会を変える」というテーマを基本にして、藝術作品やデザインがもたらす「美しさ」や「美」などの価値をめぐって、美学（**aesthetics**）や芸術哲学（**philosophy of art**）の理論と実践を研究します。

ただ、本演習では、「思想のパフォーマンス」研究がテーマですから、アート（藝術）やパフォーマンス運動から多くを学びます。ただ注意してもらいたいのは、いわゆる藝術やデザインというジャンルでは、もはや美醜の境界が曖昧になり、藝術とは何か、美とか何かという問いに対する答えが多様化しています。そこで、本演習が重視するのは、〈藝術とは何でないか〉という消極的（negative）な問いを立てて考えていくことです。その際に、どのような答えであれ、それがある種の「思考のパフォーマンス」として捉えられるということ忘れないということです。

私たちを取り巻くグローバルな状況の中で、政治的な問題として、植民地主義、外国による侵略、戦争・紛争、権力による弾圧、社会的不公正、貧困、人種差別・性差別・障害者差別・高齢者差別が問題になっています。また、気候温暖化の爆発的進展によって、自然環境が激変しつつあります。また、少し前までは新型コロナウィルスの感染爆発によって、日常生活の危機を経験したはずなのに、今ではその頃の緊張感もなく、モラルも低下させるだけでなく、様々な事態を悪化させています。これらに対して、本演習では、「思考のパフォーマンス」研究の立場で、「美」や「美しさ」とは何でないか、「美意識」は、私たちの社会を変えるためにどのように必要／不必要なのか、「美」や「美醜」を考えることが、どのように社会を少しでもよくしていくことに貢献できるかを考えていきます。

そこで本演習では、皆さん自身の「思考のパフォーマンス表現」が、社会と密接に結びついていることを改めて考えてもらうとともに、自分の思考・思想をどのように変化させることによって、もっとよいパフォーマンスができ、結果的に社会に働きかけていくことができるかを考えることが目的です。そのために、演習内部では、仲間と切磋琢磨することで、互いの表現を検討し合いながら、自らの思考や思想を「論文」や「作品」にして表現していくことが重要な活動になります。
【本演習の意義】
本演習の意義は、日々の生活における欲望の力を考察し、欲望を正しく解放しながらも、自らの価値観としての美意識と他者や社会の美の基準をすり合わせることを学ぶことです。欲望が誤った方向に流れていかないように、また社会がもたらす「美」の基準がおかしなことになっていないかをきちんと精査し、自分と他者の差異に基づいて互いの欲望を正しくコントロールしながら表現にもたらすこと、そのためには、自らの欲望や美意識を深く思考する必要があります。そうすることによって、私たちの演習は、私たちの現実の世界を、少しでもよりよいものにしていくための批判的な視座を獲得することを目指します。

【到達目標】
①私たちの思考や美意識、さらにはそれらに基づく行為がどのように社会に関与しているかを理論的に考察することができます。つまり、私たちの思想を表現するために、簡単な文章から難しい哲学的テキストに至るまで「批判的に読む力」を身につけることができます。
②私たちの思考や行為をどのように表現すれば良いかを実践的に学ぶことができます。私たちの思考の生産物は、どのようにすればより良くなるのかを実践的に体験することで、「批判的に書く力」を身につけることができます。
③私たちの思考や行為が他者にどのように伝わっているかを技術的に学ぶために、自分が表現したものを公的に発表することで、「表現力」を身につけることができます。
④私たちの思考や行為が社会にどのように影響を与えることができるかを実際的に学ぶために、国際文化情報学会などの機会を利用して「プレゼンテーション力」を身につけることができます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【授業の方法】
◆通常の授業では、次の二つの研究を主にして進めていきます。
①指定テキストに基づいた「グループ研究」
ゼミ生をいくつかのグループに分け、グループごとに事前に担当箇所の「テキストを読解」し、「レジュメを作成し」、ゼミ当日に担当グループが「発表」し、それ以外のゼミ生と「討議」します。そうすることで、テキストの理解を深めます。演習の基本となる研究なので、最も重要な活動になります。
②自分のテーマを研究する「個人研究」
個人の研究テーマは、演習の時間内で「発表」してもらいます。ゼミ生各自が自らのテーマに即して研究を進めます。個人研究のテーマは、グループ研究【ゼミのテーマ】とはまったく関係なくてもかまいません。ただ、なるべく【ゼミのテーマ】に近いテーマにした方が研究の効率は上がりますし、自分の研究に資することが多くなります。最終的に、研究の成果を、学期末・年度末に「ゼミ論」や「ゼミ制作」（2・3年生）、年度末に「ゼミ総括論文」や「ゼミ総括制作」（4年）にまとめてもらいます。個人研究は、自分の思想の表現として最も自由に研究できるテーマを担当教員と相談しながら、進めていきます。
◆ゼミ全体の課題
本演習では、毎年12月に開催される「国際文化情報学会」にインスタレーション部門で発表をしています。2026年度も、学会で発表する予定にしています。希望者があれば、他の部門（論文部門、ポスター部門、映像部門）にも参加を予定しています。
◆学年による課題
③２年生・３年生については、「グループ研究」に重点を置きながら、「読む」「書く」「発表する」「プレゼンする」ための「力」を身につけることが重要です。４年生については、個人研究をまとめあげて、思考表現の「パフォーマンス」を様々な媒体=メディアで発表できるように仕上げていきます。
④課外活動として、年２回（夏・冬）行う「ゼミ合宿」を実施します。
(1) 初夏には、「ゼミ遠足」を計画しています。これは、互いのテーマや関心について自己紹介しながら、ゼミに慣れることが目的です。
(2) 夏のゼミ合宿は、東京を離れて、様々な地域を訪問することで、その地域にある美術館や博物館、資料館などを訪ね、表現の仕方の多様性を学びます。
(3) 冬のゼミ合宿は、２・３年生の「ゼミ論」・「ゼミ制作」、４年生の「ゼミ総括研究」・「ゼミ総括制作」の合評会を行い、互いの「表現」を批評し合います。
⑤個別の希望者には、外部講師と連繋した「課外セミナー」や美術館・博物館などの公共施設の訪問なども考えています。可能であれば、知人が運営に携わっている「京都市京セラ美術館」を訪問し、京都という地域の歴史と美術館との関係、また美術館の運営などについて解説していただくことも考えています（予定・自由参加）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	プレゼミ	1. 顔合わせ 2. 今後の方針 3. 授業の進行など
2	グループ研究① シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(1)	1.血と美の関係をめぐって
3	グループ研究② シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(2)	2. さまざまな規範と目的
4	グループ研究③ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(3)	3. 文化が交差するところ
5	グループ研究④ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(4)	4. 富と市場と美術館
6	グループ研究⑤ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(5)	5. ジェンダー、天才、そしてゲリラ・ガールズ
7	個人研究① 前期中間発表	・個人研究の構想発表(1)
8	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(6)	6. 認識、創造、理解
9	グループ研究⑥ シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？：芸術理論入門』(7)	7. デジタル化と情報の伝播
10	グループ研究⑦ ハル・フォスター編『視覚論』(1)	1. マーティン・ジェイ「近代性における複数の「視の制度」
11	グループ研究⑧ ハル・フォスター編『視覚論』(2)	2. ジョナサン・クレーリー「近代化する視覚」
12	グループ研究⑨ ハル・フォスター編『視覚論』(3)	3. ロザリンド・クラウス「見る衝動／見させるパルス」
13	グループ研究⑩ ハル・フォスター編『視覚論』(4)	4. ノーマン・ブライソン「拡張された場における〈眼差し〉」 5. ジャクリン・ローズ「セクシュアリティと視覚―― いくつかの疑問」
14	個人研究② 個人研究　春学期・期末発表	個人研究の構想発表(2)
15	秋学期イントロダクション	①秋学期の演習概要説明 ②学会のテーマ決定 ③総括研究の注意など
16	グループ研究① 『モダニズムのハード・コア』(1)	1. クレメント・グリーンバーグ「モダニズムの絵画」 2. クレメント・グリーンバーグ「抽象表現主義以後」
17	グループ研究② 『モダニズムのハード・コア』(2)	3. マイケル・フリード「芸術と客体性」 4. T・J・クラーク「クレメント・グリーンバーグの芸術理論」
18	グループ研究③ 『モダニズムのハード・コア』(3)	5. マイケル・フリード「モダニズムはいかに作動するのか―― T・J・クラークへの反論」 6. T・J・クラーク「モダニズムに関する論議―― マイケル・フリードに答える」
19	個人研究① 「ゼミ論」中間発表①	ゼミ生の個人研究発表（1）
20	グループ研究④ 『モダニズムのハード・コア』(4)	7. マイケル・フリード「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(1) 8. ロザリンド・クラウス「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(2) 9. ベンジャミン・ブクロー「「ミニマリズムとポップ以降の美術論」(3) 10. ディスカッション
21	グループ研究⑤ 『モダニズムのハード・コア』(5)	11. ロザリンド・クラウス「視覚的無意識」
22	グループ研究⑥ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(1)	1. アール・ブリュットと創造性の起源の探求
23	グループ研究⑦ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(2)	2. アウトサイダー・アートと蒐集の創造的役割
24	グループ研究⑧ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(3)	3. アール・ブリュットとサイコティック・アートの古典期
25	グループ研究⑨ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(4)	4. 今日のサイコティック・アートとアウトサイダー・アート
26	グループ研究⑩ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(5)	5. 落書きとその他のオートマティスム
27	グループ研究⑪ ディヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』(6)	6. アウトサイダー・アートの美術界への紹介とその問題
28	個人研究② 「ゼミ総括研究」最終発表②	ゼミ生の個人研究発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習

グループ研究の発表のためには、グループのメンバーが授業前に集まって準備する必要があります。メンバーが集まることで、テキストについての互いの理解が深まったり、わからなかった箇所を検討することができたり、テキストを理解するために必要な情報を他の資料やインターネットから得たりすることができます。これらの準備学習をすることで、仲間たちとのコミュニケーションが円滑になり、発表担当外の仲間から授業中に出される質問に対して、適切に応えることができるようになります。

そのために、授業外にグループで集まって集中学習することが、ゼミ内の活性化にも繋がり、各自の研究の広がりと深みを増すことになります。したがって、ゼミの事前研究のために時間は、週に二、三回、各２時間程度かかることを前提としてください。

【テキスト（教科書）】

(1) シンシア・フリーランド『でも、これがアートなの？ ―― 芸術理論入門』ブリュッケ、2007年
(2) 批評空間臨時増刊号『モダニズムのハード・コア　現代美術批評の地平』太田出版、1995年
(3) ハル・フォスター編『視覚論』樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、2007年
(4) デイヴィド・マクラガン『アウトサイダー・アート―― 芸術のはじまる場所』青土社、2011年

【参考書】

【演習のテーマに関係するもの】
(1) 佐々木健一『美学への招待　増補版』中公新書、2019年
(2) 井奥陽子『近代美学入門』ちくま新書、2023年。
【論文の書き方に関係するもの】
(1) 阿部幸大『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』光文社、2024年
(2) 大辻都編著・篠原学『アートとしての論述入門』京都造形芸術大学出版局・藝術学舎、2017年
(3) 廣野由美子『批評理論入門―― 『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書1790、2005年
(4) 杉原賢彦・暮沢剛巳・前島秀国『アートを書く! クリティカル文章術』フィルムアート社、2006年

【成績評価の方法と基準】

①グループ研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
②個人研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25％）
③ゼミ論（２・３年生）（50％）／ゼミ総括研究（４年生）（50％）

【学生の意見等からの気づき】

2025年度は、担当者がサバティカルから戻ってきた最初の年だったので、昨年度との比較ができない。もう少し議論が活発になるように、ゼミ生の前向きな自習を準備させたい。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを基本的に用いていきますが、教員とゼミ生との連絡については様々なSNSやメールなどで、コミュニケーションを欠かさないようにしていきます。

【その他の重要事項】

【授業外の活動】

①ゼミ卒業生や大学院生との交流があります。年一回年末の「望年会」（私たちの演習では「年忘れ」の「忘年会」とは言いません。次の年を「希望の年」として迎えるために「望年会」と呼びます。一期生が20年以上前に、この名前をつけてくれました）には、１期生から現役のゼミ生まで20年以上歳が離れている、多彩な卒業生が集まります。学部生の皆さんが通ってきた悩みや、これから経験するかもしれないことについても、先輩たちが自分の経験を語り、仕事ややりがいについて話してくれます。これは、本演習の最大の人的資産であり、他のゼミには絶対に負けない資産です。それ以外にも、様々な方面で活躍する卒業生たちの交流が、密接に行われています。

②年２回の「ゼミ合宿」には、基本的に全員参加してください。合宿は、教室の中では経験できない場所で、教室や大学でしか関わらない人たちと関わりながら経験を積み重ね、それについて考えるために行っています。そのためにも、向上心をもって、より成長したい人が積極的に参加してくれることが前提です。だからこそ、本演習の合」は、欠かすことのできない課外活動です。合宿では、ゼミ生同士の交流、教員との親睦、さらには東京近郊では体験できない他の地域の施設などの訪問など、刺激を得る機会となっています。

※　本演習では、授業外の活動が重要です。積極的に参加し、自らを磨く「修練」を積むことが要求されていますので注意してください。

【注意と要望】
・本演習は、２コマ続きの授業になりますので、注意してください。
・基本的に、ゼミで課される課題に集中し、他のゼミ生と交流することが重要です。もちろんゼミ生の個性と自由は尊重しなければなりませんが、ゼミは集団活動ですから、過度な個人プレーには気をつけてもらいたいです。様々なことに好奇心を持ち、互いに切磋琢磨しながら協力し、真面目に研究に取り組む人に来てもらいたいです。本演習では、地味でかまいませんから、ひとつのことに熱中できることが重要です。

【コメント】
本演習は、「情報文化演習」のひとつですが、コンピュータを用いてゼミ活動をすることはありません。ただ、作品を制作したり、研究発表をする際に、パソコンが使えると便利かもしれません。それも、気にする必要はありません。

【Outline (in English)】
【Purpose of this exercise】
The purpose of this exercise is to examine the question of "What is *not* the beauty?" and "How can it be possible to engage in society (commit) by expressing one's thoughts?" In doing so, we will focus on the theory and practice of aesthetics and the Philosophy of art. In this exercise, it is important to refine your thoughts by giving good expression to your thoughts while working hard with each other. As a result, the ultimate purpose of this exercise is to express one's thoughts as "thesis" or "work".
【Significance of this exercise】
The significance of this seminar is twofold. First, in order to properly communicate your intentions and thoughts to others, students can refine their expressions by reflecting on their expressions. And secondly, your good expression can enable your participation and make your real world a little better.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

稲垣　立男

サブタイトル：コミュニケーションとアート
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では、社会とつながる作品制作やワークショップの実践を軸に、現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による創作など、幅広い表象文化に関する研究を行います。
さまざまなコラボレーションを通じて、背景の異なる人々の生活や文化に触れ、多様な方法によって相互の考えを理解する経験的な学びを重視します。また、学生各自が関心を持つ表象分野について考察を進めるとともに、その背景となる理論や思想についての研究を並行して進めます。
本演習では、以下のような姿勢が重要となります。
1. 既成概念にとらわれず、自由に発想すること
2. 様々な方法で他者と関わること
3. ものごとの本質を見極めようとすること
こうした姿勢を基盤として各自の研究課題に取り組み、社会につながる問いや問題を発見することを目標とします。このような能力は、周囲の情報に流されがちな現代社会において、自らの方向を主体的に定め、日々の生活をより豊かなものにする力となるでしょう。

【到達目標】
2・3年生
【春学期】
表象文化研究に関する各自の関心について考えるところから始めます。合わせて、研究発表（展覧会、公演）やグループで実施されるワークショップに参加し、実践と研究の関係について体験的に学びます。
【秋学期】
春学期の考察を基に、個人研究に取り組みます。国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に参加を通じて自分の研究や表現を伝え、フィードバックを得ることを経験します。
4年生
【春学期】
個人研究について考察を深めていきます。特に、各自のテーマについてこれまでにどのような研究や作品があったのかを調べること（先行研究）が中心となります。また、研究発表（展覧会、公演）やワークショップの運営に関わり、研究と実践を結びつける視点について考察します。
【秋学期】
研究の仕上げとして、国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に取り組みます。これまでの研究を学術的成果に結び付けます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
○グループワーク
【春学期】
表象文化についての理解を深めるため、ワークショップや課題解決型学習に取り組みます。
【秋学期】
1年間の取り組みの成果を国際文化情報学会で発表します。
○個人研究
個人研究は、一年間を通じてそれぞれが研究を進めます。
各学期の最後には、中間報告会・研究発表会（展覧会）を行います。
【春学期】
メディアラウンジ（市ヶ谷キャンパス・予定）
【秋学期】
デザインフェスタギャラリー（原宿・予定）
※個人研究については作品、論文のどちらかを選択して下さい。
2・3年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉などによる作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する。
・制作報告書　2000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文（8000字）
・先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
4年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する
・制作報告書　4000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文　16000字程度（日本語、表紙、日英の論文要旨をを含むこと）
・パワーポイント15ページに論文の内容を適切に表現する。
○ 学外での活動
・学外のワークショッププロジェクトへの参加（予定）
・デザインフェスタ（東京ビッグサイト）参加（予定）
・ゼミ合宿（予定）
・展覧会、公演等の鑑賞
○ デジタルコンテンツコンテスト
・映像部門（グループワーク）
・静止画部門（個人制作）
○ ぜんまい（in English）
・毎回授業の冒頭に、個人研究に関連したテーマについて、10分程度の英語プレゼンテーションを行います。
○ ブログ、Instagram
・毎回の研究活動を日本語と英語で記録・発信します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
4/8	オリエンテーション	・春学期の活動について ・研究の進め方
4/15	フィールドワーク 研究の方法	・コミュニケーションとアートについて ・個人研究について
4/22	映像ワークショップ 映像作品について	・デジタルコンテンツコンテストに応募する映像作品について、グループワークで制作します。 ・参考作品を観ながら作品のアイディア、コンセプトについて検討します。
5/13	映像ワークショップ 作品の構想	・グループに分かれて作品のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
5/20	映像ワークショップ 制作の準備	・作品制作に向けて、材料や場所の検討などの準備をします。
5/27	映像ワークショップ 作品の制作1	・撮影や編集など、作品の制作に着手します。

6/3	映像ワークショップ作品の制作2	・作品の完成に向けて取り組みます。
6/10	映像ワークショップ作品の制作3	・秋学期最初の授業までに作品を完成させます。
6/17	フィールドワーク 作品鑑賞	・美術館/ギャラリーの見学 ・研究の進め方
6/24	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品のアイディアと展示プラン	・7月5日（土）ー7月6日（日）に東京ビッグサイトで開催される「デザインフェスタ」の出展準備をします。 ・デザインフェスタでは参加型ウォールペインティングの制作を行います。
7/1	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品プランのプレゼンテーション	・参加型ウォールペインティングについて、各学生が作品のアイディアに関するプレゼンテーションをします。
7/8	ウォールペインティング/デザインフェスタ ワークショプの事前準備	・広報用のウェブサイト、チラシ、ポスター、ウォールペインティングで使用する材料の準備をします。
7/15	個人研究／春学期研究発表 作品搬入/展示	・展示会場で、作品の搬入と展示設営を行います。
7/22	個人研究／春学期研究発表 作品講評／搬出	・作品の講評と搬出を行います。
9/23	オリエンテーション	・秋学期の活動について ・研究の進め方 ・講評　夏休みの宿題（デジタルコンテンツコンテスト静止画部門・学部パンフレットの表紙コンテスト）
9/30	公共空間におけるワークショップの研究1-1	インスタレーション ・ワークショップの準備をします。
10/7	公共空間におけるワークショップの研究1-2	インスタレーション ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/14	公共空間におけるワークショップの研究2-1	参加型アート ・ワークショップの準備をします。
10/21	公共空間におけるワークショップの研究2-2	参加型アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/28	公共空間におけるワークショップの研究3-1	パフォーマンス・アート ・ワークショップの準備をします。。
11/4	公共空間におけるワークショップの研究3-2	パフォーマンス：アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
11/11	公共空間におけるワークショップ研究4-1	インターベンション ・ワークショップの準備をします。
11/18	国際文化情報学会プランニング	・研究発表のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
11/25	国際文化情報学会研究発表の準備	・研究発表の最終的な準備をします。
12/2	公共空間におけるワークショップ研究4-2	インターベンション ・実際の場所でワークショップを実施します。
12/10	個人研究／秋学期研究発表 ディスカッション	・各自の研究に関するプレゼンテーションを行います。
12/17	個人研究／秋学期研究発表 展示計画	・会場での展示について検討をします。
1/14	個人研究／秋学期研究発表 展示準備	・展示会場に必要なキャプションやポスターなどの準備を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1.　これまでの経験などは問いませんが、1年間を通じて意欲的に取り組む姿勢が求められます。
2.　個人研究については担当教員と相談しながら進めていくことが大切です。質問・疑問点については早めに教員に相談してください。大学院などへの進学を希望されている方についても、研究テーマや方法について教員に相談しながら検討してください。
3.　展覧会や公演など、作品を鑑賞する機会を積極的に持つことを大切にしてください。また芸術分野にに関する実習や講義も積極的に受講することも推奨します。

本授業では、準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

毎回の授業で使用する教科書はありませんが、いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】

パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント 』フィルムアート社、2015年
山本浩貴『現代美術史: 欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
沼野雄司『現代音楽史-闘争しつづける芸術のゆくえ』中央公論新社、2021年
平田オリザ『〈現代演劇〉のレッスン』フィルムアート社、2016年
木石岳、川島素晴『はじめての< 脱> 音楽 やさしい現代音楽の作曲法』自由現代社,
2018年
各自の研究に関連する実践例（プロジェクトや展覧会)、参考文献を参照しておいてください。

1.　美術に関する展覧会や講演、ダンスや演劇などのパフォーミングアーツの公演
2.　福祉施設、博物館、広場や公園など公的空間における環境計画
3.　病院や学校など、公的な場所でおこなうワークショップなどの研究
4.　地域コミュニティのポータルサイトや映像作品、冊子などの企画制作
5.　地域活性化のためのイベントやプロジェクトなどの計画案

【成績評価の方法と基準】

成績評価については、平常点（授業への取り組み)、共同研究（研究への協力と貢献)、個人研究（調査や研究の積極性）の合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。

1.　平常点（50%）
2.　共同研究（25%）
3.　個人研究（25%）

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミの活動運営は、チームワークについての重要な経験となりますので積極的に関わってください。特に、ゼミ内のコミュニケーションのあり方について考えていきましょう。

【学生が準備すべき機器他】

作品制作やプレゼンテーションでPCを活用する機会が多いと思いますので、関連した実習授業を履修しておくとよいでしょう。Wordpressでのブログや SNS による情報発信も積極的に行います。課題提出では学習支援システムを活用しますので、必ず登録しておいてください。
また、個人研究にに必要な道具や画材については、個別に準備して下さい。

【その他の重要事項】

◯演習の活動記録（ブログ）
http://inagakiseminar.com/document/
◯インスタグラム
https://www.instagram.com/inagakiseminar/

実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を授業に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
Research on various representational cultures (contemporary art, contemporary music, contemporary dance, contemporary theatre, film, text, etc.) with a focus on practices related to art projects and workshops that connect with society.
Through various collaborations, students learn experientially about the lives and cultures of people from different backgrounds and understand each other's ideas in multiple ways. In addition, each student will examine an area of representation in which they are interested and conduct parallel research on the theories behind it.
Throughout the research, the following attitudes are essential in this exercise
1. To think freely and without preconceived ideas
2. To engage with others in a variety of ways
3. To see things for what they are.
Based on these attitudes, the aim is for students to work on their research projects and discover problems that are relevant to society. These abilities will set our direction and enrich our daily lives in today's society, where we tend to be swept away by the information around us.
Learning activities outside of the classroom
1. No matter your experience, please work enthusiastically throughout the year.
2. It is crucial to proceed with individual research in consultation with the instructor in charge. If you have any questions or concerns, please consult with your faculty member.
3. Have the opportunity to appreciate the work at exhibitions, concerts, movie theatres and actively take practical training and lectures on other art and design.
The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades are evaluated based on class activities, contribution to research, and positiveness to research. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Joint research (25%)
3. Individual research (25%)
Please refer to the attached rubric table for the exact evaluation method.
Based on these grade evaluations, those who have achieved 60% or more of the target will be accepted.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

稲垣　立男

サブタイトル：コミュニケーションとアート
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では、社会とつながる作品制作やワークショップの実践を軸に、現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による創作など、幅広い表象文化に関する研究を行います。
さまざまなコラボレーションを通じて、背景の異なる人々の生活や文化に触れ、多様な方法によって相互の考えを理解する経験的な学びを重視します。また、学生各自が関心を持つ表象分野について考察を進めるとともに、その背景となる理論や思想についての研究を並行して進めます。
本演習では、以下のような姿勢が重要となります。
1. 既成概念にとらわれず、自由に発想すること
2. 様々な方法で他者と関わること
3. ものごとの本質を見極めようとすること
こうした姿勢を基盤として各自の研究課題に取り組み、社会につながる問いや問題を発見することを目標とします。このような能力は、周囲の情報に流されがちな現代社会において、自らの方向を主体的に定め、日々の生活をより豊かなものにする力となるでしょう。

【到達目標】
2・3年生
【春学期】
表象文化研究に関する各自の関心について考えるところから始めます。合わせて、研究発表（展覧会、公演）やグループで実施されるワークショップに参加し、実践と研究の関係について体験的に学びます。
【秋学期】
春学期の考察を基に、個人研究に取り組みます。国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に参加を通じて自分の研究や表現を伝え、フィードバックを得ることを経験します。
4年生
【春学期】
個人研究について考察を深めていきます。特に、各自のテーマについてこれまでにどのような研究や作品があったのかを調べること（先行研究）が中心となります。また、研究発表（展覧会、公演）やワークショップの運営に関わり、研究と実践を結びつける視点について考察します。
【秋学期】
研究の仕上げとして、国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に取り組みます。これまでの研究を学術的成果に結び付けます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
○グループワーク
【春学期】
表象文化についての理解を深めるため、ワークショップや課題解決型学習に取り組みます。
【秋学期】
1年間の取り組みの成果を国際文化情報学会で発表します。
○個人研究
個人研究は、一年間を通じてそれぞれが研究を進めます。
各学期の最後には、中間報告会・研究発表会（展覧会）を行います。
【春学期】
メディアラウンジ（市ヶ谷キャンパス・予定）
【秋学期】
デザインフェスタギャラリー（原宿・予定）
※個人研究については作品、論文のどちらかを選択して下さい。
2・3年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉などによる作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する。
・制作報告書　2000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文（8000字）
・先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
4年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する
・制作報告書　4000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文　16000字程度（日本語、表紙、日英の論文要旨をを含むこと）
・パワーポイント15ページに論文の内容を適切に表現する。
○ 学外での活動
・学外のワークショッププロジェクトへの参加（予定）
・デザインフェスタ（東京ビッグサイト）参加（予定）
・ゼミ合宿（予定）
・展覧会、公演等の鑑賞
○ デジタルコンテンツコンテスト
・映像部門（グループワーク）
・静止画部門（個人制作）
○ ぜんまい（in English）
・毎回授業の冒頭に、個人研究に関連したテーマについて、10分程度の英語プレゼンテーションを行います。
○ ブログ、Instagram
・毎回の研究活動を日本語と英語で記録・発信します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
4/8	オリエンテーション	・春学期の活動について ・研究の進め方
4/15	フィールドワーク 研究の方法	・コミュニケーションとアートについて ・個人研究について
4/22	映像ワークショップ 映像作品について	・デジタルコンテンツコンテストに応募する映像作品について、グループワークで制作します。 ・参考作品を観ながら作品のアイディア、コンセプトについて検討します。
5/13	映像ワークショップ 作品の構想	・グループに分かれて作品のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
5/20	映像ワークショップ 制作の準備	・作品制作に向けて、材料や場所の検討などの準備をします。
5/27	映像ワークショップ 作品の制作1	・撮影や編集など、作品の制作に着手します。

6/3	映像ワークショップ作品の制作2	・作品の完成に向けて取り組みます。
6/10	映像ワークショップ作品の制作3	・秋学期最初の授業までに作品を完成させます。
6/17	フィールドワーク 作品鑑賞	・美術館/ギャラリーの見学 ・研究の進め方
6/24	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品のアイディアと展示プラン	・7月5日（土）ー7月6日（日）に東京ビッグサイトで開催される「デザインフェスタ」の出展準備をします。 ・デザインフェスタでは参加型ウォールペインティングの制作を行います。
7/1	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品プランのプレゼンテーション	・参加型ウォールペインティングについて、各学生が作品のアイディアに関するプレゼンテーションをします。
7/8	ウォールペインティング/デザインフェスタ ワークショプの事前準備	・広報用のウェブサイト、チラシ、ポスター、ウォールペインティングで使用する材料の準備をします。
7/15	個人研究／春学期研究発表 作品搬入/展示	・展示会場で、作品の搬入と展示設営を行います。
7/22	個人研究／春学期研究発表 作品講評／搬出	・作品の講評と搬出を行います。
9/23	オリエンテーション	・秋学期の活動について ・研究の進め方 ・講評　夏休みの宿題（デジタルコンテンツコンテスト静止画部門・学部パンフレットの表紙コンテスト）
9/30	公共空間におけるワークショップの研究1-1	インスタレーション ・ワークショップの準備をします。
10/7	公共空間におけるワークショップの研究1-2	インスタレーション ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/14	公共空間におけるワークショップの研究2-1	参加型アート ・ワークショップの準備をします。
10/21	公共空間におけるワークショップの研究2-2	参加型アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/28	公共空間におけるワークショップの研究3-1	パフォーマンス・アート ・ワークショップの準備をします。。
11/4	公共空間におけるワークショップの研究3-2	パフォーマンス：アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
11/11	公共空間におけるワークショップ研究4-1	インターベンション ・ワークショップの準備をします。
11/18	国際文化情報学会プランニング	・研究発表のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
11/25	国際文化情報学会研究発表の準備	・研究発表の最終的な準備をします。
12/2	公共空間におけるワークショップ研究4-2	インターベンション ・実際の場所でワークショップを実施します。
12/10	個人研究／秋学期研究発表 ディスカッション	・各自の研究に関するプレゼンテーションを行います。
12/17	個人研究／秋学期研究発表 展示計画	・会場での展示について検討をします。
1/14	個人研究／秋学期研究発表 展示準備	・展示会場に必要なキャプションやポスターなどの準備を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1.　これまでの経験などは問いませんが、1年間を通じて意欲的に取り組む姿勢が求められます。
2.　個人研究については担当教員と相談しながら進めていくことが大切です。質問・疑問点については早めに教員に相談してください。大学院などへの進学を希望されている方についても、研究テーマや方法について教員に相談しながら検討してください。
3.　展覧会や公演など、作品を鑑賞する機会を積極的に持つことを大切にしてください。また芸術分野にに関する実習や講義も積極的に受講することも推奨します。

本授業では、準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

毎回の授業で使用する教科書はありませんが、いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】

パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント 』フィルムアート社、2015年
山本浩貴『現代美術史: 欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
沼野雄司『現代音楽史-闘争しつづける芸術のゆくえ』中央公論新社、2021年
平田オリザ『〈現代演劇〉のレッスン』フィルムアート社、2016年
木石岳、川島素晴『はじめての< 脱> 音楽 やさしい現代音楽の作曲法』自由現代社,
2018年
各自の研究に関連する実践例（プロジェクトや展覧会)、参考文献を参照しておいてください。
1.　美術に関する展覧会や講演、ダンスや演劇などのパフォーミングアーツの公演
2.　福祉施設、博物館、広場や公園など公的空間における環境計画
3.　病院や学校など、公的な場所でおこなうワークショップなどの研究
4.　地域コミュニティのポータルサイトや映像作品、冊子などの企画制作
5.　地域活性化のためのイベントやプロジェクトなどの計画案

【成績評価の方法と基準】

成績評価については、平常点（授業への取り組み)、共同研究（研究への協力と貢献)、個人研究（調査や研究の積極性）の合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　共同研究（25%）
3.　個人研究（25%）

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミの活動運営は、チームワークについての重要な経験となりますので積極的に関わってください。特に、ゼミ内のコミュニケーションのあり方について考えていきましょう。

【学生が準備すべき機器他】

作品制作やプレゼンテーションでPCを活用する機会が多いと思いますので、関連した実習授業を履修しておくとよいでしょう。Wordpressでのブログや SNS による情報発信も積極的に行います。課題提出では学習支援システムを活用しますので、必ず登録しておいてください。
また、個人研究にに必要な道具や画材については、個別に準備して下さい。

【その他の重要事項】

◯演習の活動記録（ブログ）
http://inagakiseminar.com/document/
◯インスタグラム
https://www.instagram.com/inagakiseminar/

実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を授業に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
Research on various representational cultures (contemporary art, contemporary music, contemporary dance, contemporary theatre, film, text, etc.) with a focus on practices related to art projects and workshops that connect with society.
Through various collaborations, students learn experientially about the lives and cultures of people from different backgrounds and understand each other's ideas in multiple ways. In addition, each student will examine an area of representation in which they are interested and conduct parallel research on the theories behind it.
Throughout the research, the following attitudes are essential in this exercise
1. To think freely and without preconceived ideas
2. To engage with others in a variety of ways
3. To see things for what they are.
Based on these attitudes, the aim is for students to work on their research projects and discover problems that are relevant to society. These abilities will set our direction and enrich our daily lives in today's society, where we tend to be swept away by the information around us.
Learning activities outside of the classroom
1. No matter your experience, please work enthusiastically throughout the year.
2. It is crucial to proceed with individual research in consultation with the instructor in charge. If you have any questions or concerns, please consult with your faculty member.
3. Have the opportunity to appreciate the work at exhibitions, concerts, movie theatres and actively take practical training and lectures on other art and design.
The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades are evaluated based on class activities, contribution to research, and positiveness to research. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Joint research (25%)
3. Individual research (25%)
Please refer to the attached rubric table for the exact evaluation method.
Based on these grade evaluations, those who have achieved 60% or more of the target will be accepted.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

稲垣　立男

サブタイトル：コミュニケーションとアート
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では、社会とつながる作品制作やワークショップの実践を軸に、現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による創作など、幅広い表象文化に関する研究を行います。
さまざまなコラボレーションを通じて、背景の異なる人々の生活や文化に触れ、多様な方法によって相互の考えを理解する経験的な学びを重視します。また、学生各自が関心を持つ表象分野について考察を進めるとともに、その背景となる理論や思想についての研究を並行して進めます。
本演習では、以下のような姿勢が重要となります。
1. 既成概念にとらわれず、自由に発想すること
2. 様々な方法で他者と関わること
3. ものごとの本質を見極めようとすること
こうした姿勢を基盤として各自の研究課題に取り組み、社会につながる問いや問題を発見することを目標とします。このような能力は、周囲の情報に流されがちな現代社会において、自らの方向を主体的に定め、日々の生活をより豊かなものにする力となるでしょう。

【到達目標】
2・3年生
【春学期】
表象文化研究に関する各自の関心について考えるところから始めます。合わせて、研究発表（展覧会、公演）やグループで実施されるワークショップに参加し、実践と研究の関係について体験的に学びます。
【秋学期】
春学期の考察を基に、個人研究に取り組みます。国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に参加を通じて自分の研究や表現を伝え、フィードバックを得ることを経験します。
4年生
【春学期】
個人研究について考察を深めていきます。特に、各自のテーマについてこれまでにどのような研究や作品があったのかを調べること（先行研究）が中心となります。また、研究発表（展覧会、公演）やワークショップの運営に関わり、研究と実践を結びつける視点について考察します。
【秋学期】
研究の仕上げとして、国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に取り組みます。これまでの研究を学術的成果に結び付けます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
○グループワーク
【春学期】
表象文化についての理解を深めるため、ワークショップや課題解決型学習に取り組みます。
【秋学期】
1年間の取り組みの成果を国際文化情報学会で発表します。
○個人研究
個人研究は、一年間を通じてそれぞれが研究を進めます。
各学期の最後には、中間報告会・研究発表会（展覧会）を行います。
【春学期】
メディアラウンジ（市ヶ谷キャンパス・予定）
【秋学期】
デザインフェスタギャラリー（原宿・予定）
※個人研究については作品、論文のどちらかを選択して下さい。
2・3年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉などによる作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する。
・制作報告書　2000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文（8000字）
・先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
4年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する
・制作報告書　4000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文　16000字程度（日本語、表紙、日英の論文要旨をを含むこと）
・パワーポイント15ページに論文の内容を適切に表現する。
○ 学外での活動
・学外のワークショッププロジェクトへの参加（予定）
・デザインフェスタ（東京ビッグサイト）参加（予定）
・ゼミ合宿（予定）
・展覧会、公演等の鑑賞
○ デジタルコンテンツコンテスト
・映像部門（グループワーク）
・静止画部門（個人制作）
○ ぜんまい（in English）
・毎回授業の冒頭に、個人研究に関連したテーマについて、10分程度の英語プレゼンテーションを行います。
○ ブログ、Instagram
・毎回の研究活動を日本語と英語で記録・発信します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
4/8	オリエンテーション	・春学期の活動について ・研究の進め方
4/15	フィールドワーク 研究の方法	・コミュニケーションとアートについて ・個人研究について
4/22	映像ワークショップ 映像作品について	・デジタルコンテンツコンテストに応募する映像作品について、グループワークで制作します。 ・参考作品を観ながら作品のアイディア、コンセプトについて検討します。
5/13	映像ワークショップ 作品の構想	・グループに分かれて作品のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
5/20	映像ワークショップ 制作の準備	・作品制作に向けて、材料や場所の検討などの準備をします。
5/27	映像ワークショップ 作品の制作1	・撮影や編集など、作品の制作に着手します。

6/3	映像ワークショップ作品の制作2	・作品の完成に向けて取り組みます。
6/10	映像ワークショップ作品の制作3	・秋学期最初の授業までに作品を完成させます。
6/17	フィールドワーク 作品鑑賞	・美術館/ギャラリーの見学 ・研究の進め方
6/24	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品のアイディアと展示プラン	・7月5日（土）ー7月6日（日）に東京ビッグサイトで開催される「デザインフェスタ」の出展準備をします。 ・デザインフェスタでは参加型ウォールペインティングの制作を行います。
7/1	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品プランのプレゼンテーション	・参加型ウォールペインティングについて、各学生が作品のアイディアに関するプレゼンテーションをします。
7/8	ウォールペインティング/デザインフェスタ ワークショプの事前準備	・広報用のウェブサイト、チラシ、ポスター、ウォールペインティングで使用する材料の準備をします。
7/15	個人研究／春学期研究発表 作品搬入/展示	・展示会場で、作品の搬入と展示設営を行います。
7/22	個人研究／春学期研究発表 作品講評／搬出	・作品の講評と搬出を行います。
9/23	オリエンテーション	・秋学期の活動について ・研究の進め方 ・講評　夏休みの宿題（デジタルコンテンツコンテスト静止画部門・学部パンフレットの表紙コンテスト）
9/30	公共空間におけるワークショップの研究1-1	インスタレーション ・ワークショップの準備をします。
10/7	公共空間におけるワークショップの研究1-2	インスタレーション ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/14	公共空間におけるワークショップの研究2-1	参加型アート ・ワークショップの準備をします。
10/21	公共空間におけるワークショップの研究2-2	参加型アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/28	公共空間におけるワークショップの研究3-1	パフォーマンス・アート ・ワークショップの準備をします。。
11/4	公共空間におけるワークショップの研究3-2	パフォーマンス：アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
11/11	公共空間におけるワークショップ研究4-1	インターベンション ・ワークショップの準備をします。
11/18	国際文化情報学会プランニング	・研究発表のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
11/25	国際文化情報学会研究発表の準備	・研究発表の最終的な準備をします。
12/2	公共空間におけるワークショップ研究4-2	インターベンション ・実際の場所でワークショップを実施します。
12/10	個人研究／秋学期研究発表 ディスカッション	・各自の研究に関するプレゼンテーションを行います。
12/17	個人研究／秋学期研究発表 展示計画	・会場での展示について検討をします。
1/14	個人研究／秋学期研究発表 展示準備	・展示会場に必要なキャプションやポスターなどの準備を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1.　これまでの経験などは問いませんが、1年間を通じて意欲的に取り組む姿勢が求められます。
2.　個人研究については担当教員と相談しながら進めていくことが大切です。質問・疑問点については早めに教員に相談してください。大学院などへの進学を希望されている方についても、研究テーマや方法について教員に相談しながら検討してください。
3.　展覧会や公演など、作品を鑑賞する機会を積極的に持つことを大切にしてください。また芸術分野にに関する実習や講義も積極的に受講することも推奨します。

本授業では、準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

毎回の授業で使用する教科書はありませんが、いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】

パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント 』フィルムアート社、2015年
山本浩貴『現代美術史: 欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
沼野雄司『現代音楽史-闘争しつづける芸術のゆくえ』中央公論新社、2021年
平田オリザ『〈現代演劇〉のレッスン』フィルムアート社、2016年
木石岳、川島素晴『はじめての< 脱> 音楽 やさしい現代音楽の作曲法』自由現代社,
2018年
各自の研究に関連する実践例（プロジェクトや展覧会)、参考文献を参照しておいてください。
1.　美術に関する展覧会や講演、ダンスや演劇などのパフォーミングアーツの公演
2.　福祉施設、博物館、広場や公園など公的空間における環境計画
3.　病院や学校など、公的な場所でおこなうワークショップなどの研究
4.　地域コミュニティのポータルサイトや映像作品、冊子などの企画制作
5.　地域活性化のためのイベントやプロジェクトなどの計画案

【成績評価の方法と基準】

成績評価については、平常点（授業への取り組み)、共同研究（研究への協力と貢献)、個人研究（調査や研究の積極性）の合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　共同研究（25%）
3.　個人研究（25%）

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミの活動運営は、チームワークについての重要な経験となりますので積極的に関わってください。特に、ゼミ内のコミュニケーションのあり方について考えていきましょう。

【学生が準備すべき機器他】

作品制作やプレゼンテーションでPCを活用する機会が多いと思いますので、関連した実習授業を履修しておくとよいでしょう。Wordpressでのブログや SNS による情報発信も積極的に行います。課題提出では学習支援システムを活用しますので、必ず登録しておいてください。
また、個人研究にに必要な道具や画材については、個別に準備して下さい。

【その他の重要事項】

◯演習の活動記録（ブログ）
http://inagakiseminar.com/document/
◯インスタグラム
https://www.instagram.com/inagakiseminar/

実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を授業に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
Research on various representational cultures (contemporary art, contemporary music, contemporary dance, contemporary theatre, film, text, etc.) with a focus on practices related to art projects and workshops that connect with society.
Through various collaborations, students learn experientially about the lives and cultures of people from different backgrounds and understand each other's ideas in multiple ways. In addition, each student will examine an area of representation in which they are interested and conduct parallel research on the theories behind it.
Throughout the research, the following attitudes are essential in this exercise
1. To think freely and without preconceived ideas
2. To engage with others in a variety of ways
3. To see things for what they are.
Based on these attitudes, the aim is for students to work on their research projects and discover problems that are relevant to society. These abilities will set our direction and enrich our daily lives in today's society, where we tend to be swept away by the information around us.
Learning activities outside of the classroom
1. No matter your experience, please work enthusiastically throughout the year.
2. It is crucial to proceed with individual research in consultation with the instructor in charge. If you have any questions or concerns, please consult with your faculty member.
3. Have the opportunity to appreciate the work at exhibitions, concerts, movie theatres and actively take practical training and lectures on other art and design.
The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades are evaluated based on class activities, contribution to research, and positiveness to research. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Joint research (25%)
3. Individual research (25%)
Please refer to the attached rubric table for the exact evaluation method.
Based on these grade evaluations, those who have achieved 60% or more of the target will be accepted.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

稲垣　立男

サブタイトル：コミュニケーションとアート
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では、社会とつながる作品制作やワークショップの実践を軸に、現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による創作など、幅広い表象文化に関する研究を行います。
さまざまなコラボレーションを通じて、背景の異なる人々の生活や文化に触れ、多様な方法によって相互の考えを理解する経験的な学びを重視します。また、学生各自が関心を持つ表象分野について考察を進めるとともに、その背景となる理論や思想についての研究を並行して進めます。
本演習では、以下のような姿勢が重要となります。
1. 既成概念にとらわれず、自由に発想すること
2. 様々な方法で他者と関わること
3. ものごとの本質を見極めようとすること
こうした姿勢を基盤として各自の研究課題に取り組み、社会につながる問いや問題を発見することを目標とします。このような能力は、周囲の情報に流されがちな現代社会において、自らの方向を主体的に定め、日々の生活をより豊かなものにする力となるでしょう。

【到達目標】
2・3年生
【春学期】
表象文化研究に関する各自の関心について考えるところから始めます。合わせて、研究発表（展覧会、公演）やグループで実施されるワークショップに参加し、実践と研究の関係について体験的に学びます。
【秋学期】
春学期の考察を基に、個人研究に取り組みます。国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に参加を通じて自分の研究や表現を伝え、フィードバックを得ることを経験します。
4年生
【春学期】
個人研究について考察を深めていきます。特に、各自のテーマについてこれまでにどのような研究や作品があったのかを調べること（先行研究）が中心となります。また、研究発表（展覧会、公演）やワークショップの運営に関わり、研究と実践を結びつける視点について考察します。
【秋学期】
研究の仕上げとして、国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に取り組みます。これまでの研究を学術的成果に結び付けます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
○グループワーク
【春学期】
表象文化についての理解を深めるため、ワークショップや課題解決型学習に取り組みます。
【秋学期】
1年間の取り組みの成果を国際文化情報学会で発表します。
○個人研究
個人研究は、一年間を通じてそれぞれが研究を進めます。
各学期の最後には、中間報告会・研究発表会（展覧会）を行います。
【春学期】
メディアラウンジ（市ヶ谷キャンパス・予定）
【秋学期】
デザインフェスタギャラリー（原宿・予定）
※個人研究については作品、論文のどちらかを選択して下さい。
2・3年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉などによる作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する。
・制作報告書　2000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文（8000字）
・先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
4年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する
・制作報告書　4000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文　16000字程度（日本語、表紙、日英の論文要旨をを含むこと）
・パワーポイント15ページに論文の内容を適切に表現する。
○ 学外での活動
・学外のワークショッププロジェクトへの参加（予定）
・デザインフェスタ（東京ビッグサイト）参加（予定）
・ゼミ合宿（予定）
・展覧会、公演等の鑑賞
○ デジタルコンテンツコンテスト
・映像部門（グループワーク）
・静止画部門（個人制作）
○ ぜんまい（in English）
・毎回授業の冒頭に、個人研究に関連したテーマについて、10分程度の英語プレゼンテーションを行います。
○ ブログ、Instagram
・毎回の研究活動を日本語と英語で記録・発信します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
4/8	オリエンテーション	・春学期の活動について ・研究の進め方
4/15	フィールドワーク 研究の方法	・コミュニケーションとアートについて ・個人研究について
4/22	映像ワークショップ 映像作品について	・デジタルコンテンツコンテストに応募する映像作品について、グループワークで制作します。 ・参考作品を観ながら作品のアイディア、コンセプトについて検討します。
5/13	映像ワークショップ 作品の構想	・グループに分かれて作品のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
5/20	映像ワークショップ 制作の準備	・作品制作に向けて、材料や場所の検討などの準備をします。
5/27	映像ワークショップ 作品の制作1	・撮影や編集など、作品の制作に着手します。

6/3	映像ワークショップ作品の制作2	・作品の完成に向けて取り組みます。
6/10	映像ワークショップ作品の制作3	・秋学期最初の授業までに作品を完成させます。
6/17	フィールドワーク 作品鑑賞	・美術館/ギャラリーの見学 ・研究の進め方
6/24	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品のアイディアと展示プラン	・7月5日（土）ー7月6日（日）に東京ビッグサイトで開催される「デザインフェスタ」の出展準備をします。 ・デザインフェスタでは参加型ウォールペインティングの制作を行います。
7/1	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品プランのプレゼンテーション	・参加型ウォールペインティングについて、各学生が作品のアイディアに関するプレゼンテーションをします。
7/8	ウォールペインティング/デザインフェスタ ワークショプの事前準備	・広報用のウェブサイト、チラシ、ポスター、ウォールペインティングで使用する材料の準備をします。
7/15	個人研究／春学期研究発表 作品搬入/展示	・展示会場で、作品の搬入と展示設営を行います。
7/22	個人研究／春学期研究発表 作品講評／搬出	・作品の講評と搬出を行います。
9/23	オリエンテーション	・秋学期の活動について ・研究の進め方 ・講評　夏休みの宿題（デジタルコンテンツコンテスト静止画部門・学部パンフレットの表紙コンテスト）
9/30	公共空間におけるワークショップの研究1-1	インスタレーション ・ワークショップの準備をします。
10/7	公共空間におけるワークショップの研究1-2	インスタレーション ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/14	公共空間におけるワークショップの研究2-1	参加型アート ・ワークショップの準備をします。
10/21	公共空間におけるワークショップの研究2-2	参加型アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/28	公共空間におけるワークショップの研究3-1	パフォーマンス・アート ・ワークショップの準備をします。。
11/4	公共空間におけるワークショップの研究3-2	パフォーマンス：アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
11/11	公共空間におけるワークショップ研究4-1	インターベンション ・ワークショップの準備をします。
11/18	国際文化情報学会プランニング	・研究発表のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
11/25	国際文化情報学会研究発表の準備	・研究発表の最終的な準備をします。
12/2	公共空間におけるワークショップ研究4-2	インターベンション ・実際の場所でワークショップを実施します。
12/10	個人研究／秋学期研究発表 ディスカッション	・各自の研究に関するプレゼンテーションを行います。
12/17	個人研究／秋学期研究発表 展示計画	・会場での展示について検討をします。
1/14	個人研究／秋学期研究発表 展示準備	・展示会場に必要なキャプションやポスターなどの準備を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1.　これまでの経験などは問いませんが、1年間を通じて意欲的に取り組む姿勢が求められます。
2.　個人研究については担当教員と相談しながら進めていくことが大切です。質問・疑問点については早めに教員に相談してください。大学院などへの進学を希望されている方についても、研究テーマや方法について教員に相談しながら検討してください。
3.　展覧会や公演など、作品を鑑賞する機会を積極的に持つことを大切にしてください。また芸術分野にに関する実習や講義も積極的に受講することも推奨します。

本授業では、準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

毎回の授業で使用する教科書はありませんが、いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】

パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント 』フィルムアート社、2015年
山本浩貴『現代美術史: 欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
沼野雄司『現代音楽史-闘争しつづける芸術のゆくえ』中央公論新社、2021年
平田オリザ『〈現代演劇〉のレッスン』フィルムアート社、2016年
木石岳、川島素晴『はじめての< 脱> 音楽 やさしい現代音楽の作曲法』自由現代社,
2018年
各自の研究に関連する実践例（プロジェクトや展覧会)、参考文献を参照しておいてください。
1.　美術に関する展覧会や講演、ダンスや演劇などのパフォーミングアーツの公演
2.　福祉施設、博物館、広場や公園など公的空間における環境計画
3.　病院や学校など、公的な場所でおこなうワークショップなどの研究
4.　地域コミュニティのポータルサイトや映像作品、冊子などの企画制作
5.　地域活性化のためのイベントやプロジェクトなどの計画案

【成績評価の方法と基準】

成績評価については、平常点（授業への取り組み)、共同研究（研究への協力と貢献)、個人研究（調査や研究の積極性）の合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　共同研究（25%）
3.　個人研究（25%）

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミの活動運営は、チームワークについての重要な経験となりますので積極的に関わってください。特に、ゼミ内のコミュニケーションのあり方について考えていきましょう。

【学生が準備すべき機器他】

作品制作やプレゼンテーションでPCを活用する機会が多いと思いますので、関連した実習授業を履修しておくとよいでしょう。Wordpressでのブログや SNS による情報発信も積極的に行います。課題提出では学習支援システムを活用しますので、必ず登録しておいてください。
また、個人研究にに必要な道具や画材については、個別に準備して下さい。

【その他の重要事項】

◯演習の活動記録（ブログ）
http://inagakiseminar.com/document/
◯インスタグラム
https://www.instagram.com/inagakiseminar/

実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を授業に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
Research on various representational cultures (contemporary art, contemporary music, contemporary dance, contemporary theatre, film, text, etc.) with a focus on practices related to art projects and workshops that connect with society.
Through various collaborations, students learn experientially about the lives and cultures of people from different backgrounds and understand each other's ideas in multiple ways. In addition, each student will examine an area of representation in which they are interested and conduct parallel research on the theories behind it.
Throughout the research, the following attitudes are essential in this exercise
1. To think freely and without preconceived ideas
2. To engage with others in a variety of ways
3. To see things for what they are.
Based on these attitudes, the aim is for students to work on their research projects and discover problems that are relevant to society. These abilities will set our direction and enrich our daily lives in today's society, where we tend to be swept away by the information around us.
Learning activities outside of the classroom
1. No matter your experience, please work enthusiastically throughout the year.
2. It is crucial to proceed with individual research in consultation with the instructor in charge. If you have any questions or concerns, please consult with your faculty member.
3. Have the opportunity to appreciate the work at exhibitions, concerts, movie theatres and actively take practical training and lectures on other art and design.
The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades are evaluated based on class activities, contribution to research, and positiveness to research. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Joint research (25%)
3. Individual research (25%)
Please refer to the attached rubric table for the exact evaluation method.
Based on these grade evaluations, those who have achieved 60% or more of the target will be accepted.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

稲垣　立男

サブタイトル：コミュニケーションとアート
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では、社会とつながる作品制作やワークショップの実践を軸に、現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による創作など、幅広い表象文化に関する研究を行います。
さまざまなコラボレーションを通じて、背景の異なる人々の生活や文化に触れ、多様な方法によって相互の考えを理解する経験的な学びを重視します。また、学生各自が関心を持つ表象分野について考察を進めるとともに、その背景となる理論や思想についての研究を並行して進めます。
本演習では、以下のような姿勢が重要となります。
1. 既成概念にとらわれず、自由に発想すること
2. 様々な方法で他者と関わること
3. ものごとの本質を見極めようとすること
こうした姿勢を基盤として各自の研究課題に取り組み、社会につながる問いや問題を発見することを目標とします。このような能力は、周囲の情報に流されがちな現代社会において、自らの方向を主体的に定め、日々の生活をより豊かなものにする力となるでしょう。

【到達目標】
2・3年生
【春学期】
表象文化研究に関する各自の関心について考えるところから始めます。合わせて、研究発表（展覧会、公演）やグループで実施されるワークショップに参加し、実践と研究の関係について体験的に学びます。
【秋学期】
春学期の考察を基に、個人研究に取り組みます。国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に参加を通じて自分の研究や表現を伝え、フィードバックを得ることを経験します。
4年生
【春学期】
個人研究について考察を深めていきます。特に、各自のテーマについてこれまでにどのような研究や作品があったのかを調べること（先行研究）が中心となります。また、研究発表（展覧会、公演）やワークショップの運営に関わり、研究と実践を結びつける視点について考察します。
【秋学期】
研究の仕上げとして、国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に取り組みます。これまでの研究を学術的成果に結び付けます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
○グループワーク
【春学期】
表象文化についての理解を深めるため、ワークショップや課題解決型学習に取り組みます。
【秋学期】
1年間の取り組みの成果を国際文化情報学会で発表します。
○個人研究
個人研究は、一年間を通じてそれぞれが研究を進めます。
各学期の最後には、中間報告会・研究発表会（展覧会）を行います。
【春学期】
メディアラウンジ（市ヶ谷キャンパス・予定）
【秋学期】
デザインフェスタギャラリー（原宿・予定）
※個人研究については作品、論文のどちらかを選択して下さい。
2・3年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉などによる作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する。
・制作報告書　2000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文（8000字）
・先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
4年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する
・制作報告書　4000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文　16000字程度（日本語、表紙、日英の論文要旨ををを含むこと）
・パワーポイント15ページに論文の内容を適切に表現する。
○ 学外での活動
・学外のワークショッププロジェクトへの参加（予定）
・デザインフェスタ（東京ビッグサイト）参加（予定）
・ゼミ合宿（予定）
・展覧会、公演等の鑑賞
○ デジタルコンテンツコンテスト
・映像部門（グループワーク）
・静止画部門（個人制作）
○ ぜんまい（in English）
・毎回授業の冒頭に、個人研究に関連したテーマについて、10分程度の英語プレゼンテーションを行います。
○ ブログ、Instagram
・毎回の研究活動を日本語と英語で記録・発信します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
4/8	オリエンテーション	・春学期の活動について ・研究の進め方
4/15	フィールドワーク 研究の方法	・コミュニケーションとアートについて ・個人研究について
4/22	映像ワークショップ 映像作品について	・デジタルコンテンツコンテストに応募する映像作品について、グループワークで制作します。 ・参考作品を観ながら作品のアイディア、コンセプトについて検討します。
5/13	映像ワークショップ 作品の構想	・グループに分かれて作品のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
5/20	映像ワークショップ 制作の準備	・作品制作に向けて、材料や場所の検討などの準備をします。
5/27	映像ワークショップ 作品の制作1	・撮影や編集など、作品の制作に着手します。

6/3	映像ワークショップ作品の制作2	・作品の完成に向けて取り組みます。
6/10	映像ワークショップ作品の制作3	・秋学期最初の授業までに作品を完成させます。
6/17	フィールドワーク 作品鑑賞	・美術館/ギャラリーの見学 ・研究の進め方
6/24	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品のアイディアと展示プラン	・7月5日（土）ー7月6日（日）に東京ビッグサイトで開催される「デザインフェスタ」の出展準備をします。 ・デザインフェスタでは参加型ウォールペインティングの制作を行います。
7/1	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品プランのプレゼンテーション	・参加型ウォールペインティングについて、各学生が作品のアイディアに関するプレゼンテーションをします。
7/8	ウォールペインティング/デザインフェスタ ワークショプの事前準備	・広報用のウェブサイト、チラシ、ポスター、ウォールペインティングで使用する材料の準備をします。
7/15	個人研究／春学期研究発表 作品搬入/展示	・展示会場で、作品の搬入と展示設営を行います。
7/22	個人研究／春学期研究発表 作品講評／搬出	・作品の講評と搬出を行います。
9/23	オリエンテーション	・秋学期の活動について ・研究の進め方 ・講評　夏休みの宿題（デジタルコンテンツコンテスト静止画部門・学部パンフレットの表紙コンテスト）
9/30	公共空間におけるワークショップの研究1-1	インスタレーション ・ワークショップの準備をします。
10/7	公共空間におけるワークショップの研究1-2	インスタレーション ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/14	公共空間におけるワークショップの研究2-1	参加型アート ・ワークショップの準備をします。
10/21	公共空間におけるワークショップの研究2-2	参加型アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/28	公共空間におけるワークショップの研究3-1	パフォーマンス・アート ・ワークショップの準備をします。。
11/4	公共空間におけるワークショップの研究3-2	パフォーマンス：アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
11/11	公共空間におけるワークショップ研究4-1	インターベンション ・ワークショップの準備をします。
11/18	国際文化情報学会プランニング	・研究発表のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
11/25	国際文化情報学会研究発表の準備	・研究発表の最終的な準備をします。
12/2	公共空間におけるワークショップ研究4-2	インターベンション ・実際の場所でワークショップを実施します。
12/10	個人研究／秋学期研究発表 ディスカッション	・各自の研究に関するプレゼンテーションを行います。
12/17	個人研究／秋学期研究発表 展示計画	・会場での展示について検討をします。
1/14	個人研究／秋学期研究発表 展示準備	・展示会場に必要なキャプションやポスターなどの準備を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1.　これまでの経験などは問いませんが、1年間を通じて意欲的に取り組む姿勢が求められます。
2.　個人研究については担当教員と相談しながら進めていくことが大切です。質問・疑問点については早めに教員に相談してください。大学院などへの進学を希望されている方についても、研究テーマや方法について教員に相談しながら検討してください。
3.　展覧会や公演など、作品を鑑賞する機会を積極的に持つことを大切にしてください。また芸術分野にに関する実習や講義も積極的に受講することも推奨します。

本授業では、準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

毎回の授業で使用する教科書はありませんが、いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】

パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント 』フィルムアート社、2015年
山本浩貴『現代美術史: 欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
沼野雄司『現代音楽史-闘争しつづける芸術のゆくえ』中央公論新社、2021年
平田オリザ『〈現代演劇〉のレッスン』フィルムアート社、2016年
木石岳、川島素晴『はじめての< 脱> 音楽 やさしい現代音楽の作曲法』自由現代社,
2018年
各自の研究に関連する実践例（プロジェクトや展覧会)、参考文献を参照しておいてください。

1.　美術に関する展覧会や講演、ダンスや演劇などのパフォーミングアーツの公演
2.　 福祉施設、博物館、広場や公園など公的空間における環境計画
3.　病院や学校など、公的な場所でおこなうワークショップなどの研究
4.　地域コミュニティのポータルサイトや映像作品、冊子などの企画制作
5.　地域活性化のためのイベントやプロジェクトなどの計画案

【成績評価の方法と基準】

成績評価については、平常点（授業への取り組み)、共同研究（研究への協力と貢献)、個人研究（調査や研究の積極性）の合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。

1.　平常点（50%）
2.　共同研究（25%）
3.　個人研究（25%）

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミの活動運営は、チームワークについての重要な経験となりますので積極的に関わってください。特に、ゼミ内のコミュニケーションのあり方について考えていきましょう。

【学生が準備すべき機器他】

作品制作やプレゼンテーションでPCを活用する機会が多いと思いますので、関連した実習授業を履修しておくとよいでしょう。Wordpressでのブログや SNS による情報発信も積極的に行います。課題提出では学習支援システムを活用しますので、必ず登録しておいてください。
また、個人研究にに必要な道具や画材については、個別に準備して下さい。

【その他の重要事項】

◯演習の活動記録（ブログ）
http://inagakiseminar.com/document/
◯インスタグラム
https://www.instagram.com/inagakiseminar/

実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を授業に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
Research on various representational cultures (contemporary art, contemporary music, contemporary dance, contemporary theatre, film, text, etc.) with a focus on practices related to art projects and workshops that connect with society.
Through various collaborations, students learn experientially about the lives and cultures of people from different backgrounds and understand each other's ideas in multiple ways. In addition, each student will examine an area of representation in which they are interested and conduct parallel research on the theories behind it.
Throughout the research, the following attitudes are essential in this exercise
1. To think freely and without preconceived ideas
2. To engage with others in a variety of ways
3. To see things for what they are.
Based on these attitudes, the aim is for students to work on their research projects and discover problems that are relevant to society. These abilities will set our direction and enrich our daily lives in today's society, where we tend to be swept away by the information around us.
Learning activities outside of the classroom
1. No matter your experience, please work enthusiastically throughout the year.
2. It is crucial to proceed with individual research in consultation with the instructor in charge. If you have any questions or concerns, please consult with your faculty member.
3. Have the opportunity to appreciate the work at exhibitions, concerts, movie theatres and actively take practical training and lectures on other art and design.
The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades are evaluated based on class activities, contribution to research, and positiveness to research. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Joint research (25%)
3. Individual research (25%)
Please refer to the attached rubric table for the exact evaluation method.
Based on these grade evaluations, those who have achieved 60% or more of the target will be accepted.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

稲垣　立男

サブタイトル：コミュニケーションとアート
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では、社会とつながる作品制作やワークショップの実践を軸に、現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による創作など、幅広い表象文化に関する研究を行います。
さまざまなコラボレーションを通じて、背景の異なる人々の生活や文化に触れ、多様な方法によって相互の考えを理解する経験的な学びを重視します。また、学生各自が関心を持つ表象分野について考察を進めるとともに、その背景となる理論や思想についての研究を並行して進めます。
本演習では、以下のような姿勢が重要となります。
1. 既成概念にとらわれず、自由に発想すること
2. 様々な方法で他者と関わること
3. ものごとの本質を見極めようとすること
こうした姿勢を基盤として各自の研究課題に取り組み、社会につながる問いや問題を発見することを目標とします。このような能力は、周囲の情報に流されがちな現代社会において、自らの方向を主体的に定め、日々の生活をより豊かなものにする力となるでしょう。

【到達目標】
2・3年生
【春学期】
表象文化研究に関する各自の関心について考えるところから始めます。合わせて、研究発表（展覧会、公演）やグループで実施されるワークショップに参加し、実践と研究の関係について体験的に学びます。
【秋学期】
春学期の考察を基に、個人研究に取り組みます。国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に参加を通じて自分の研究や表現を伝え、フィードバックを得ることを経験します。
4年生
【春学期】
個人研究について考察を深めていきます。特に、各自のテーマについてこれまでにどのような研究や作品があったのかを調べること（先行研究）が中心となります。また、研究発表（展覧会、公演）やワークショップの運営に関わり、研究と実践を結びつける視点について考察します。
【秋学期】
研究の仕上げとして、国際文化情報学会や個人研究展での研究発表に取り組みます。これまでの研究を学術的成果に結び付けます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
○グループワーク
【春学期】
表象文化についての理解を深めるため、ワークショップや課題解決型学習に取り組みます。
【秋学期】
1年間の取り組みの成果を国際文化情報学会で発表します。
○個人研究
個人研究は、一年間を通じてそれぞれが研究を進めます。
各学期の最後には、中間報告会・研究発表会（展覧会）を行います。
【春学期】
メディアラウンジ（市ヶ谷キャンパス・予定）
【秋学期】
デザインフェスタギャラリー（原宿・予定）
※個人研究については作品、論文のどちらかを選択して下さい。
2・3年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉などによる作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する。
・制作報告書　2000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文（8000字）
・先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
4年生
作品の場合
・作品（現代アート、現代音楽、ダンス、演劇、映像、言葉による作品）
・ポートフォリオ　パワーポイント20ページに研究の内容を適切に表現する
・制作報告書　4000字程度、日本語
・制作報告書には、先行研究、参考作品の調査資料を含むこと。
論文の場合
・論文　16000字程度（日本語、表紙、日英の論文要旨をを含むこと）
・パワーポイント15ページに論文の内容を適切に表現する。
○ 学外での活動
・学外のワークショッププロジェクトへの参加（予定）
・デザインフェスタ（東京ビッグサイト）参加（予定）
・ゼミ合宿（予定）
・展覧会、公演等の鑑賞
○ デジタルコンテンツコンテスト
・映像部門（グループワーク）
・静止画部門（個人制作）
○ ぜんまい（in English）
・毎回授業の冒頭に、個人研究に関連したテーマについて、10分程度の英語プレゼンテーションを行います。
○ ブログ、Instagram
・毎回の研究活動を日本語と英語で記録・発信します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
4/8	オリエンテーション	・春学期の活動について ・研究の進め方
4/15	フィールドワーク 研究の方法	・コミュニケーションとアートについて ・個人研究について
4/22	映像ワークショップ 映像作品について	・デジタルコンテンツコンテストに応募する映像作品について、グループワークで制作します。 ・参考作品を観ながら作品のアイディア、コンセプトについて検討します。
5/13	映像ワークショップ 作品の構想	・グループに分かれて作品のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
5/20	映像ワークショップ 制作の準備	・作品制作に向けて、材料や場所の検討などの準備をします。
5/27	映像ワークショップ 作品の制作1	・撮影や編集など、作品の制作に着手します。

6/3	映像ワークショップ作品の制作2	・作品の完成に向けて取り組みます。
6/10	映像ワークショップ作品の制作3	・秋学期最初の授業までに作品を完成させます。
6/17	フィールドワーク 作品鑑賞	・美術館/ギャラリーの見学 ・研究の進め方
6/24	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品のアイディアと展示プラン	・7月5日（土）ー7月6日（日）に東京ビッグサイトで開催される「デザインフェスタ」の出展準備をします。 ・デザインフェスタでは参加型ウォールペインティングの制作を行います。
7/1	ウォールペインティング/デザインフェスタ 作品プランのプレゼンテーション	・参加型ウォールペインティングについて、各学生が作品のアイディアに関するプレゼンテーションをします。
7/8	ウォールペインティング/デザインフェスタ ワークショプの事前準備	・広報用のウェブサイト、チラシ、ポスター、ウォールペインティングで使用する材料の準備をします。
7/15	個人研究／春学期研究発表 作品搬入/展示	・展示会場で、作品の搬入と展示設営を行います。
7/22	個人研究／春学期研究発表 作品講評／搬出	・作品の講評と搬出を行います。
9/23	オリエンテーション	・秋学期の活動について ・研究の進め方 ・講評　夏休みの宿題（デジタルコンテンツコンテスト静止画部門・学部パンフレットの表紙コンテスト）
9/30	公共空間におけるワークショップの研究1-1	インスタレーション ・ワークショップの準備をします。
10/7	公共空間におけるワークショップの研究1-2	インスタレーション ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/14	公共空間におけるワークショップの研究2-1	参加型アート ・ワークショップの準備をします。
10/21	公共空間におけるワークショップの研究2-2	参加型アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
10/28	公共空間におけるワークショップの研究3-1	パフォーマンス・アート ・ワークショップの準備をします。。
11/4	公共空間におけるワークショップの研究3-2	パフォーマンス：アート ・実際の場所でワークショップを実施します。
11/11	公共空間におけるワークショップ研究4-1	インターベンション ・ワークショップの準備をします。
11/18	国際文化情報学会プランニング	・研究発表のアイディア、コンセプトについて検討します。 ・チームの役割分担についても話し合います。
11/25	国際文化情報学会研究発表の準備	・研究発表の最終的な準備をします。
12/2	公共空間におけるワークショップ研究4-2	インターベンション ・実際の場所でワークショップを実施します。
12/10	個人研究／秋学期研究発表 ディスカッション	・各自の研究に関するプレゼンテーションを行います。
12/17	個人研究／秋学期研究発表 展示計画	・会場での展示について検討をします。
1/14	個人研究／秋学期研究発表 展示準備	・展示会場に必要なキャプションやポスターなどの準備を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1.　これまでの経験などは問いませんが、1年間を通じて意欲的に取り組む姿勢が求められます。
2.　個人研究については担当教員と相談しながら進めていくことが大切です。質問・疑問点については早めに教員に相談してください。大学院などへの進学を希望されている方についても、研究テーマや方法について教員に相談しながら検討してください。
3.　展覧会や公演など、作品を鑑賞する機会を積極的に持つことを大切にしてください。また芸術分野にに関する実習や講義も積極的に受講することも推奨します。

本授業では、準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

毎回の授業で使用する教科書はありませんが、いくつか参考書を紹介しますので、それらのうち少なくとも一冊を選んで購読することを勧めます。また各分野の研究に関して必要となる資料についてはその都度紹介します。

【参考書】

パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント 』フィルムアート社、2015年
山本浩貴『現代美術史: 欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
沼野雄司『現代音楽史-闘争しつづける芸術のゆくえ』中央公論新社、2021年
平田オリザ『〈現代演劇〉のレッスン』フィルムアート社、2016年
木石岳、川島素晴『はじめての< 脱> 音楽 やさしい現代音楽の作曲法』自由現代社,
2018年
各自の研究に関連する実践例（プロジェクトや展覧会)、参考文献を参照しておいてください。
1.　美術に関する展覧会や講演、ダンスや演劇などのパフォーミングアーツの公演
2.　福祉施設、博物館、広場や公園など公的空間における環境計画
3.　病院や学校など、公的な場所でおこなうワークショップなどの研究
4.　地域コミュニティのポータルサイトや映像作品、冊子などの企画制作
5.　地域活性化のためのイベントやプロジェクトなどの計画案

【成績評価の方法と基準】

成績評価については、平常点（授業への取り組み)、共同研究（研究への協力と貢献)、個人研究（調査や研究の積極性）の合計で行います。取り組みの実験性、積極性を重視します。採点比率は以下の通りです。
1.　平常点（50%）
2.　共同研究（25%）
3.　個人研究（25%）

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミの活動運営は、チームワークについての重要な経験となりますので積極的に関わってください。特に、ゼミ内のコミュニケーションのあり方について考えていきましょう。

【学生が準備すべき機器他】

作品制作やプレゼンテーションでPCを活用する機会が多いと思いますので、関連した実習授業を履修しておくとよいでしょう。Wordpressでのブログや SNS による情報発信も積極的に行います。課題提出では学習支援システムを活用しますので、必ず登録しておいてください。
また、個人研究にに必要な道具や画材については、個別に準備して下さい。

【その他の重要事項】

◯演習の活動記録（ブログ）
http://inagakiseminar.com/document/
◯インスタグラム
https://www.instagram.com/inagakiseminar/

実務経験のある教員による授業
稲垣立男はコンテンポラリーアーティスト。フィールドワークによる作品制作と美術教育に関する実践と研究を国内外で実施しており、これらの現場での経験を授業に反映させています。

【Outline (in English)】
Course outline
Research on various representational cultures (contemporary art, contemporary music, contemporary dance, contemporary theatre, film, text, etc.) with a focus on practices related to art projects and workshops that connect with society.
Through various collaborations, students learn experientially about the lives and cultures of people from different backgrounds and understand each other's ideas in multiple ways. In addition, each student will examine an area of representation in which they are interested and conduct parallel research on the theories behind it.
Throughout the research, the following attitudes are essential in this exercise
1. To think freely and without preconceived ideas
2. To engage with others in a variety of ways
3. To see things for what they are.
Based on these attitudes, the aim is for students to work on their research projects and discover problems that are relevant to society. These abilities will set our direction and enrich our daily lives in today's society, where we tend to be swept away by the information around us.
Learning activities outside of the classroom
1. No matter your experience, please work enthusiastically throughout the year.
2. It is crucial to proceed with individual research in consultation with the instructor in charge. If you have any questions or concerns, please consult with your faculty member.
3. Have the opportunity to appreciate the work at exhibitions, concerts, movie theatres and actively take practical training and lectures on other art and design.
The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
Grades are evaluated based on class activities, contribution to research, and positiveness to research. We emphasize the experimentality and positiveness of our efforts. The scoring ratio is as follows.
1. Initiatives for classes (50%)
2. Joint research (25%)
3. Individual research (25%)
Please refer to the attached rubric table for the exact evaluation method.
Based on these grade evaluations, those who have achieved 60% or more of the target will be accepted.

GDR400GA（ジェンダー / Gender 400）

表象文化演習

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

サブタイトル：ジェンダー・セクシュアリティ研究
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、階級など、我々のアイデンティティを形成するさまざまな要素がメディアにおいてどのように表象されているか検討します。小説、映画、漫画やアニメ、CMやミュージックビデオなど、広い意味での「物語」を読んで、分析を行う能力を養います。
また、ジェンダーやセクシュアリティの表象というテーマに沿って個人研究や国際文化情報学会での発表を行います。

【到達目標】
(1) 社会的・歴史的な要素を踏まえながら、表象分析が行える。
(2) メディアにおける多様性を分析し、ディスカッションを行うことができる。
(3) 論点を整理して、口頭発表や小論文でまとめることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行います。
(1) 文献に関する発表（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
(2) 一次資料の分析
(3) 個人研究の発表（個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
(4) グループ・ディスカッション
(5) 国際文化情報学会に向けてのグループワーク
フィードバックは、寄せられた課題やコメントに対して授業内で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	1年間の授業計画について説明を行う。
第2回	表象文化研究について	表象文化の基礎的知識について講義する。
第3回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(1)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第1章を読んで、ディスカッションを行う。
第4回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(2)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第2章を読んで、ディスカッションを行う。
第5回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(3)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第3章を読んで、ディスカッションを行う。
第6回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(4)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第4章を読んで、ディスカッションを行う。
第7回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(5)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第5章を読んで、ディスカッションを行う。
第8回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(6)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第6章を読んで、ディスカッションを行う。
第9回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(7)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第7章を読んで、ディスカッションを行う。
第10回	発表のやり方、レポートの書き方について	個人研究の内容を発表する方法やレポート・論文の書き方について学ぶ。
第11回	個人研究（グループ1）	4年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人研究（グループ2）	2年生、3年生の個人研究発表を行う。
第13回	フィールドワーク	ロン・ミュエク展（森美術館にて）を訪れる。
第14回	まとめ	春学期中に取り上げたテーマをまとめ、国際文化情報学会に向けてディスカッションを行う。
秋学期・第1回	秋学期・オリエンテーション	秋学期の計画および国際文化情報学会と論集作成に向けて説明する。
第2回	多文化について	多文化や越境性について講義する。
第3回	ダイバーシティについて	ダイバーシティについて講義する。
第4回	特権について	特権について講義する。
第5回	フィールドワーク	東京国際映画祭で映画を鑑賞する。
第6回	グループワーク(1)	表象文化作品の案を出し、国際文化情報学会の発表内容について議論する。
第7回	グループワーク(2)	国際文化情報学会の発表内容について決定する。
第8回	グループワーク(3)	表象文化作品を実際に創る。
第9回	グループワーク(4)	国際文化情報学会での発表の練り直しを行う。
第10回	グループワーク(5)	国際文化情報学会に向けて最終確認を行う。
第11回	個人発表（1）	2年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人発表（2）	3年生の個人研究発表を行う。
第13回	個人発表（3）	4年生の個人研究発表を行う。
第14回	まとめ	今年度の演習についてのまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読む、授業内で示される課題（リアクション・ペーパー、レポート、発表）対応など、準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
池田緑『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(青弓社、2024年）￥1,584税込
河野哲也『レポート・論文の書き方入門 （第４版）』(慶應義塾大学出版会、2018年)、￥1,100税込

【参考書】
稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学: 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）
菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房、2021年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 2 結婚、家族、労働 』晃洋書房、2022 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 3 健康／病、障害、身体』晃洋書房、2023年）
黒岩裕市『ゲイの可視化を読むー現代文学に描かれる＜性の多様性？ ＞』（晃洋書房、2016年）
清水晶子『フェミニズムってなんですか?』（文春新書、2022年）
森山至貴『LGBTを読みとく: クィア・スタディーズ入門』(ちくま新書、2017年)

【成績評価の方法と基準】
春学期、秋学期ともに、毎週の課題20%、研究発表とグループワーク35％、学期末レポート45%で総合的に評価する。
研究発表や学期末レポートでは、社会的・歴史的な要素を踏まえた上で、メディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象について論じる。

【学生の意見等からの気づき】
ジェンダー・セクシュアリティ研究に関する知識を深めるため、講義の時間を増やすべきことに気づいた。
国際文化情報学会に向けてしっかり準備する時間をとる必要があることに気づいた。
展覧会や映画祭など、学外で行われているイベントに積極的に参加することによって、ゼミ生のモチベーションが上がることに気づいた。

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンテーションやレポート作成を行うためのパソコンなど。

【その他の重要事項】
担当教員の他の授業の受講を推奨します。
【学部専攻科目】
「世界の中の日本文学」
「Gender and Japanese Culture」
【ILAC科目】
「クィア・スタディーズA/B」
【大学院科目（自由科目として受講）】
「多文化相関論I A/B」

【Outline (in English)】
Course outline:

This course is designed to enhance students' understanding of the representations of gender, sexuality, and race so as to enable them to use theoretical argumentation for their own analyses.
Students will develop the ability to read and analyze "stories" in the broadest sense, such as novels, movies, manga and anime, commercials and music videos.
Students will also conduct individual research and give presentations on the theme of representations of gender and sexuality.
Learning objectives:
By the end of the course, students should be able to do the following:
a) discuss the representation of social and political elements in literature, cinema, and popular culture.
b) analyze the role of the media in reflecting, reproducing, and subverting hegemonic gender norms.
c) connect their ideas and present them through oral presentations and essays.
Learning activities outside of the classroom:
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session).
Grading criteria/Policy:
The final grade will be decided based on the following:
Weekly assignments: 20%
Involvement during discussion and presentation: 35%
Final essay: 45%

GDR400GA（ジェンダー / Gender 400）

表象文化演習

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

サブタイトル：ジェンダー・セクシュアリティ研究
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、階級など、我々のアイデンティティを形成するさまざまな要素がメディアにおいてどのように表象されているか検討します。小説、映画、漫画やアニメ、CMやミュージックビデオなど、広い意味での「物語」を読んで、分析を行う能力を養います。
また、ジェンダーやセクシュアリティの表象というテーマに沿って個人研究や国際文化情報学会での発表を行います。

【到達目標】
(1) 社会的・歴史的な要素を踏まえながら、表象分析が行える。
(2) メディアにおける多様性を分析し、ディスカッションを行うことができる。
(3) 論点を整理して、口頭発表や小論文でまとめることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行います。
(1) 文献に関する発表（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
(2) 一次資料の分析
(3) 個人研究の発表（個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
(4) グループ・ディスカッション
(5) 国際文化情報学会に向けてのグループワーク
フィードバックは、寄せられた課題やコメントに対して授業内で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	1年間の授業計画について説明を行う。
第2回	表象文化研究について	表象文化の基礎的知識について講義する。
第3回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(1)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第1章を読んで、ディスカッションを行う。
第4回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(2)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第2章を読んで、ディスカッションを行う。
第5回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(3)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第3章を読んで、ディスカッションを行う。
第6回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(4)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第4章を読んで、ディスカッションを行う。
第7回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(5)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第5章を読んで、ディスカッションを行う。
第8回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(6)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第6章を読んで、ディスカッションを行う。
第9回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(7)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第7章を読んで、ディスカッションを行う。
第10回	発表のやり方、レポートの書き方について	個人研究の内容を発表する方法やレポート・論文の書き方について学ぶ。
第11回	個人研究（グループ1）	4年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人研究（グループ2）	2年生、3年生の個人研究発表を行う。
第13回	フィールドワーク	ロン・ミュエク展（森美術館にて）を訪れる。
第14回	まとめ	春学期中に取り上げたテーマをまとめ、国際文化情報学会に向けてディスカッションを行う。
秋学期・第1回	秋学期・オリエンテーション	秋学期の計画および国際文化情報学会と論集作成に向けて説明する。
第2回	多文化について	多文化や越境性について講義する。
第3回	ダイバーシティについて	ダイバーシティについて講義する。
第4回	特権について	特権について講義する。
第5回	フィールドワーク	東京国際映画祭で映画を鑑賞する。
第6回	グループワーク(1)	表象文化作品の案を出し、国際文化情報学会の発表内容について議論する。
第7回	グループワーク(2)	国際文化情報学会の発表内容について決定する。
第8回	グループワーク(3)	表象文化作品を実際に創る。
第9回	グループワーク(4)	国際文化情報学会での発表の練り直しを行う。
第10回	グループワーク(5)	国際文化情報学会に向けて最終確認を行う。
第11回	個人発表（1）	2年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人発表（2）	3年生の個人研究発表を行う。
第13回	個人発表（3）	4年生の個人研究発表を行う。
第14回	まとめ	今年度の演習についてのまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読む、授業内で示される課題（リアクション・ペーパー、レポート、発表）対応など、準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
池田緑『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(青弓社、2024年）￥1,584税込
河野哲也『レポート・論文の書き方入門 （第４版）』(慶應義塾大学出版会、2018年)、￥1,100税込

【参考書】
稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学: 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）
菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房、2021年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 2 結婚、家族、労働 』晃洋書房、2022 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 3 健康／病、障害、身体』晃洋書房、2023年）
黒岩裕市『ゲイの可視化を読むー現代文学に描かれる＜性の多様性？ ＞』（晃洋書房、2016年）
清水晶子『フェミニズムってなんですか?』（文春新書、2022年）
森山至貴『LGBTを読みとく: クィア・スタディーズ入門』(ちくま新書、2017年)

【成績評価の方法と基準】
春学期、秋学期ともに、毎週の課題20%、研究発表とグループワーク35％、学期末レポート45%で総合的に評価する。
研究発表や学期末レポートでは、社会的・歴史的な要素を踏まえた上で、メディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象について論じる。

【学生の意見等からの気づき】
ジェンダー・セクシュアリティ研究に関する知識を深めるため、講義の時間を増やすべきことに気づいた。
国際文化情報学会に向けてしっかり準備する時間をとる必要があることに気づいた。
展覧会や映画祭など、学外で行われているイベントに積極的に参加することによって、ゼミ生のモチベーションが上がることに気づいた。

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンテーションやレポート作成を行うためのパソコンなど。

【その他の重要事項】
担当教員の他の授業の受講を推奨します。
【学部専攻科目】
「世界の中の日本文学」
「Gender and Japanese Culture」
【ILAC科目】
「クィア・スタディーズA/B」
【大学院科目（自由科目として受講）】
「多文化相関論I A/B」

【Outline (in English)】
Course outline:

This course is designed to enhance students' understanding of the representations of gender, sexuality, and race so as to enable them to use theoretical argumentation for their own analyses.
Students will develop the ability to read and analyze "stories" in the broadest sense, such as novels, movies, manga and anime, commercials and music videos.
Students will also conduct individual research and give presentations on the theme of representations of gender and sexuality.
Learning objectives:
By the end of the course, students should be able to do the following:
a) discuss the representation of social and political elements in literature, cinema, and popular culture.
b) analyze the role of the media in reflecting, reproducing, and subverting hegemonic gender norms.
c) connect their ideas and present them through oral presentations and essays.
Learning activities outside of the classroom:
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session).
Grading criteria/Policy:
The final grade will be decided based on the following:
Weekly assignments: 20%
Involvement during discussion and presentation: 35%
Final essay: 45%

GDR400GA（ジェンダー / Gender 400）

表象文化演習

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

サブタイトル：ジェンダー・セクシュアリティ研究
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、階級など、我々のアイデンティティを形成するさまざまな要素がメディアにおいてどのように表象されているか検討します。小説、映画、漫画やアニメ、CMやミュージックビデオなど、広い意味での「物語」を読んで、分析を行う能力を養います。
また、ジェンダーやセクシュアリティの表象というテーマに沿って個人研究や国際文化情報学会での発表を行います。

【到達目標】
(1) 社会的・歴史的な要素を踏まえながら、表象分析が行える。
(2) メディアにおける多様性を分析し、ディスカッションを行うことができる。
(3) 論点を整理して、口頭発表や小論文でまとめることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行います。
(1) 文献に関する発表（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
(2) 一次資料の分析
(3) 個人研究の発表（個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
(4) グループ・ディスカッション
(5) 国際文化情報学会に向けてのグループワーク
フィードバックは、寄せられた課題やコメントに対して授業内で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	1年間の授業計画について説明を行う。
第2回	表象文化研究について	表象文化の基礎的知識について講義する。
第3回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(1)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第1章を読んで、ディスカッションを行う。
第4回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(2)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第2章を読んで、ディスカッションを行う。
第5回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(3)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第3章を読んで、ディスカッションを行う。
第6回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(4)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第4章を読んで、ディスカッションを行う。
第7回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(5)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第5章を読んで、ディスカッションを行う。
第8回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(6)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第6章を読んで、ディスカッションを行う。
第9回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(7)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第7章を読んで、ディスカッションを行う。
第10回	発表のやり方、レポートの書き方について	個人研究の内容を発表する方法やレポート・論文の書き方について学ぶ。
第11回	個人研究（グループ1）	4年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人研究（グループ2）	2年生、3年生の個人研究発表を行う。
第13回	フィールドワーク	ロン・ミュエク展（森美術館にて）を訪れる。
第14回	まとめ	春学期中に取り上げたテーマをまとめ、国際文化情報学会に向けてディスカッションを行う。
秋学期・第1回	秋学期・オリエンテーション	秋学期の計画および国際文化情報学会と論集作成に向けて説明する。
第2回	多文化について	多文化や越境性について講義する。
第3回	ダイバーシティについて	ダイバーシティについて講義する。
第4回	特権について	特権について講義する。
第5回	フィールドワーク	東京国際映画祭で映画を鑑賞する。
第6回	グループワーク(1)	表象文化作品の案を出し、国際文化情報学会の発表内容について議論する。
第7回	グループワーク(2)	国際文化情報学会の発表内容について決定する。
第8回	グループワーク(3)	表象文化作品を実際に創る。
第9回	グループワーク(4)	国際文化情報学会での発表の練り直しを行う。
第10回	グループワーク(5)	国際文化情報学会に向けて最終確認を行う。
第11回	個人発表（1）	2年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人発表（2）	3年生の個人研究発表を行う。
第13回	個人発表（3）	4年生の個人研究発表を行う。
第14回	まとめ	今年度の演習についてのまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読む、授業内で示される課題（リアクション・ペーパー、レポート、発表）対応など、準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
池田緑『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(青弓社、2024年）￥ 1,584税込
河野哲也『レポート・論文の書き方入門 （第４版）』(慶應義塾大学出版会、2018年)、￥1,100税込

【参考書】
稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学: 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）
菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房、2021年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 2 結婚、家族、労働 』晃洋書房、2022 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 3 健康／病、障害、身体』晃洋書房、2023年）
黒岩裕市『ゲイの可視化を読むー現代文学に描かれる＜性の多様性？ ＞』（晃洋書房、2016年）
清水晶子『フェミニズムってなんですか?』（文春新書、2022年）
森山至貴『LGBTを読みとく: クィア・スタディーズ入門』(ちくま新書、2017年)

【成績評価の方法と基準】
春学期、秋学期ともに、毎週の課題20%、研究発表とグループワーク35％、学期末レポート45%で総合的に評価する。
研究発表や学期末レポートでは、社会的・歴史的な要素を踏まえた上で、メディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象について論じる。

【学生の意見等からの気づき】
ジェンダー・セクシュアリティ研究に関する知識を深めるため、講義の時間を増やすべきことに気づいた。
国際文化情報学会に向けてしっかり準備する時間をとる必要があることに気づいた。
展覧会や映画祭など、学外で行われているイベントに積極的に参加することによって、ゼミ生のモチベーションが上がることに気づいた。

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンテーションやレポート作成を行うためのパソコンなど。

【その他の重要事項】
担当教員の他の授業の受講を推奨します。
【学部専攻科目】
「世界の中の日本文学」
「Gender and Japanese Culture」
【ILAC科目】
「クィア・スタディーズA/B」
【大学院科目（自由科目として受講）】
「多文化相関論I A/B」

【Outline (in English)】
Course outline:

This course is designed to enhance students' understanding of the representations of gender, sexuality, and race so as to enable them to use theoretical argumentation for their own analyses.
Students will develop the ability to read and analyze "stories" in the broadest sense, such as novels, movies, manga and anime, commercials and music videos.
Students will also conduct individual research and give presentations on the theme of representations of gender and sexuality.
Learning objectives:
By the end of the course, students should be able to do the following:
a) discuss the representation of social and political elements in literature, cinema, and popular culture.
b) analyze the role of the media in reflecting, reproducing, and subverting hegemonic gender norms.
c) connect their ideas and present them through oral presentations and essays.
Learning activities outside of the classroom:
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session).
Grading criteria/Policy:
The final grade will be decided based on the following:
Weekly assignments: 20%
Involvement during discussion and presentation: 35%
Final essay: 45%

GDR400GA（ジェンダー / Gender 400）

表象文化演習

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

サブタイトル：ジェンダー・セクシュアリティ研究
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、階級など、我々のアイデンティティを形成するさまざまな要素がメディアにおいてどのように表象されているか検討します。小説、映画、漫画やアニメ、CMやミュージックビデオなど、広い意味での「物語」を読んで、分析を行う能力を養います。
また、ジェンダーやセクシュアリティの表象というテーマに沿って個人研究や国際文化情報学会での発表を行います。

【到達目標】
(1) 社会的・歴史的な要素を踏まえながら、表象分析が行える。
(2) メディアにおける多様性を分析し、ディスカッションを行うことができる。
(3) 論点を整理して、口頭発表や小論文でまとめることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行います。
(1) 文献に関する発表（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
(2) 一次資料の分析
(3) 個人研究の発表（個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
(4) グループ・ディスカッション
(5) 国際文化情報学会に向けてのグループワーク
フィードバックは、寄せられた課題やコメントに対して授業内で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	1年間の授業計画について説明を行う。
第2回	表象文化研究について	表象文化の基礎的知識について講義する。
第3回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(1)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第1章を読んで、ディスカッションを行う。
第4回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(2)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第2章を読んで、ディスカッションを行う。
第5回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(3)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第3章を読んで、ディスカッションを行う。
第6回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(4)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第4章を読んで、ディスカッションを行う。
第7回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(5)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第5章を読んで、ディスカッションを行う。
第8回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(6)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第6章を読んで、ディスカッションを行う。
第9回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(7)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第7章を読んで、ディスカッションを行う。
第10回	発表のやり方、レポートの書き方について	個人研究の内容を発表する方法やレポート・論文の書き方について学ぶ。
第11回	個人研究（グループ1）	4年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人研究（グループ2）	2年生、3年生の個人研究発表を行う。
第13回	フィールドワーク	ロン・ミュエク展（森美術館にて）を訪れる。
第14回	まとめ	春学期中に取り上げたテーマをまとめ、国際文化情報学会に向けてディスカッションを行う。
秋学期・第1回	秋学期・オリエンテーション	秋学期の計画および国際文化情報学会と論集作成に向けて説明する。
第2回	多文化について	多文化や越境性について講義する。
第3回	ダイバーシティについて	ダイバーシティについて講義する。
第4回	特権について	特権について講義する。
第5回	フィールドワーク	東京国際映画祭で映画を鑑賞する。
第6回	グループワーク(1)	表象文化作品の案を出し、国際文化情報学会の発表内容について議論する。
第7回	グループワーク(2)	国際文化情報学会の発表内容について決定する。
第8回	グループワーク(3)	表象文化作品を実際に創る。
第9回	グループワーク(4)	国際文化情報学会での発表の練り直しを行う。
第10回	グループワーク(5)	国際文化情報学会に向けて最終確認を行う。
第11回	個人発表（1）	2年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人発表（2）	3年生の個人研究発表を行う。
第13回	個人発表（3）	4年生の個人研究発表を行う。
第14回	まとめ	今年度の演習についてのまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読む、授業内で示される課題（リアクション・ペーパー、レポート、発表）対応など、準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
池田緑『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(青弓社、2024年）￥1,584税込
河野哲也『レポート・論文の書き方入門 （第４版）』(慶應義塾大学出版会、2018年)、￥1,100税込

【参考書】
稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学: 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）
菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房、2021年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 2 結婚、家族、労働 』晃洋書房、2022 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 3 健康／病、障害、身体』晃洋書房、2023年）
黒岩裕市『ゲイの可視化を読むー現代文学に描かれる＜性の多様性？ ＞』（晃洋書房、2016年）
清水晶子『フェミニズムってなんですか?』（文春新書、2022年）
森山至貴『LGBTを読みとく: クィア・スタディーズ入門』(ちくま新書、2017年)

【成績評価の方法と基準】
春学期、秋学期ともに、毎週の課題20%、研究発表とグループワーク35％、学期末レポート45%で総合的に評価する。
研究発表や学期末レポートでは、社会的・歴史的な要素を踏まえた上で、メディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象について論じる。

【学生の意見等からの気づき】
ジェンダー・セクシュアリティ研究に関する知識を深めるため、講義の時間を増やすべきことに気づいた。
国際文化情報学会に向けてしっかり準備する時間をとる必要があることに気づいた。
展覧会や映画祭など、学外で行われているイベントに積極的に参加することによって、ゼミ生のモチベーションが上がることに気づいた。

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンテーションやレポート作成を行うためのパソコンなど。

【その他の重要事項】
担当教員の他の授業の受講を推奨します。
【学部専攻科目】
「世界の中の日本文学」
「Gender and Japanese Culture」
【ILAC科目】
「クィア・スタディーズA/B」
【大学院科目（自由科目として受講）】
「多文化相関論I A/B」

【Outline (in English)】
Course outline:

This course is designed to enhance students' understanding of the representations of gender, sexuality, and race so as to enable them to use theoretical argumentation for their own analyses.
Students will develop the ability to read and analyze "stories" in the broadest sense, such as novels, movies, manga and anime, commercials and music videos.
Students will also conduct individual research and give presentations on the theme of representations of gender and sexuality.
Learning objectives:
By the end of the course, students should be able to do the following:
a) discuss the representation of social and political elements in literature, cinema, and popular culture.
b) analyze the role of the media in reflecting, reproducing, and subverting hegemonic gender norms.
c) connect their ideas and present them through oral presentations and essays.
Learning activities outside of the classroom:
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session).
Grading criteria/Policy:
The final grade will be decided based on the following:
Weekly assignments: 20%
Involvement during discussion and presentation: 35%
Final essay: 45%

GDR400GA（ジェンダー / Gender 400）

表象文化演習

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

サブタイトル：ジェンダー・セクシュアリティ研究
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、階級など、我々のアイデンティティを形成するさまざまな要素がメディアにおいてどのように表象されているか検討します。小説、映画、漫画やアニメ、CMやミュージックビデオなど、広い意味での「物語」を読んで、分析を行う能力を養います。
また、ジェンダーやセクシュアリティの表象というテーマに沿って個人研究や国際文化情報学会での発表を行います。

【到達目標】
(1) 社会的・歴史的な要素を踏まえながら、表象分析が行える。
(2) メディアにおける多様性を分析し、ディスカッションを行うことができる。
(3) 論点を整理して、口頭発表や小論文でまとめることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行います。
(1) 文献に関する発表（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
(2) 一次資料の分析
(3) 個人研究の発表（個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
(4) グループ・ディスカッション
(5) 国際文化情報学会に向けてのグループワーク
フィードバックは、寄せられた課題やコメントに対して授業内で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	1年間の授業計画について説明を行う。
第2回	表象文化研究について	表象文化の基礎的知識について講義する。
第3回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(1)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第1章を読んで、ディスカッションを行う。
第4回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(2)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第2章を読んで、ディスカッションを行う。
第5回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(3)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第3章を読んで、ディスカッションを行う。
第6回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(4)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第4章を読んで、ディスカッションを行う。
第7回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(5)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第5章を読んで、ディスカッションを行う。
第8回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(6)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第6章を読んで、ディスカッションを行う。
第9回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(7)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第7章を読んで、ディスカッションを行う。
第10回	発表のやり方、レポートの書き方について	個人研究の内容を発表する方法やレポート・論文の書き方について学ぶ。
第11回	個人研究（グループ1）	4年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人研究（グループ2）	2年生、3年生の個人研究発表を行う。
第13回	フィールドワーク	ロン・ミュエク展（森美術館にて）を訪れる。
第14回	まとめ	春学期中に取り上げたテーマをまとめ、国際文化情報学会に向けてディスカッションを行う。
秋学期・第1回	秋学期・オリエンテーション	秋学期の計画および国際文化情報学会と論集作成に向けて説明する。
第2回	多文化について	多文化や越境性について講義する。
第3回	ダイバーシティについて	ダイバーシティについて講義する。
第4回	特権について	特権について講義する。
第5回	フィールドワーク	東京国際映画祭で映画を鑑賞する。
第6回	グループワーク(1)	表象文化作品の案を出し、国際文化情報学会の発表内容について議論する。
第7回	グループワーク(2)	国際文化情報学会の発表内容について決定する。
第8回	グループワーク(3)	表象文化作品を実際に創る。
第9回	グループワーク(4)	国際文化情報学会での発表の練り直しを行う。
第10回	グループワーク(5)	国際文化情報学会に向けて最終確認を行う。
第11回	個人発表（1）	2年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人発表（2）	3年生の個人研究発表を行う。
第13回	個人発表（3）	4年生の個人研究発表を行う。
第14回	まとめ	今年度の演習についてのまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読む、授業内で示される課題（リアクション・ペーパー、レポート、発表）対応など、準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
池田緑『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(青弓社、2024年）￥1,584税込
河野哲也『レポート・論文の書き方入門 （第４版）』(慶應義塾大学出版会、2018年)、￥1,100税込

【参考書】
稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学: 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）
菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房、2021年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 2 結婚、家族、労働 』晃洋書房、2022 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 3 健康／病、障害、身体』晃洋書房、2023年）
黒岩裕市『ゲイの可視化を読むー現代文学に描かれる＜性の多様性？ ＞』（晃洋書房、2016年）
清水晶子『フェミニズムってなんですか?』（文春新書、2022年）
森山至貴『LGBTを読みとく: クィア・スタディーズ入門』(ちくま新書、2017年)

【成績評価の方法と基準】
春学期、秋学期ともに、毎週の課題20%、研究発表とグループワーク35％、学期末レポート45%で総合的に評価する。
研究発表や学期末レポートでは、社会的・歴史的な要素を踏まえた上で、メディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象について論じる。

【学生の意見等からの気づき】
ジェンダー・セクシュアリティ研究に関する知識を深めるため、講義の時間を増やすべきことに気づいた。
国際文化情報学会に向けてしっかり準備する時間をとる必要があることに気づいた。
展覧会や映画祭など、学外で行われているイベントに積極的に参加することによって、ゼミ生のモチベーションが上がることに気づいた。

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンテーションやレポート作成を行うためのパソコンなど。

【その他の重要事項】
担当教員の他の授業の受講を推奨します。
【学部専攻科目】
「世界の中の日本文学」
「Gender and Japanese Culture」
【ILAC科目】
「クィア・スタディーズA/B」
【大学院科目（自由科目として受講）】
「多文化相関論I A/B」

【Outline (in English)】
Course outline:

This course is designed to enhance students' understanding of the representations of gender, sexuality, and race so as to enable them to use theoretical argumentation for their own analyses.
Students will develop the ability to read and analyze "stories" in the broadest sense, such as novels, movies, manga and anime, commercials and music videos.
Students will also conduct individual research and give presentations on the theme of representations of gender and sexuality.
Learning objectives:
By the end of the course, students should be able to do the following:
a) discuss the representation of social and political elements in literature, cinema, and popular culture.
b) analyze the role of the media in reflecting, reproducing, and subverting hegemonic gender norms.
c) connect their ideas and present them through oral presentations and essays.
Learning activities outside of the classroom:
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session).
Grading criteria/Policy:
The final grade will be decided based on the following:
Weekly assignments: 20%
Involvement during discussion and presentation: 35%
Final essay: 45%

GDR400GA（ジェンダー / Gender 400）

表象文化演習

ＬＥＴＩＺＩＡ　ＧＵＡＲＩＮＩ

サブタイトル：ジェンダー・セクシュアリティ研究
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、階級など、我々のアイデンティティを形成するさまざまな要素がメディアにおいてどのように表象されているか検討します。小説、映画、漫画やアニメ、CMやミュージックビデオなど、広い意味での「物語」を読んで、分析を行う能力を養います。
また、ジェンダーやセクシュアリティの表象というテーマに沿って個人研究や国際文化情報学会での発表を行います。

【到達目標】
(1) 社会的・歴史的な要素を踏まえながら、表象分析が行える。
(2) メディアにおける多様性を分析し、ディスカッションを行うことができる。
(3) 論点を整理して、口頭発表や小論文でまとめることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は原則として対面で行います。
(1) 文献に関する発表（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
(2) 一次資料の分析
(3) 個人研究の発表（個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
(4) グループ・ディスカッション
(5) 国際文化情報学会に向けてのグループワーク
フィードバックは、寄せられた課題やコメントに対して授業内で回答します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	1年間の授業計画について説明を行う。
第2回	表象文化研究について	表象文化の基礎的知識について講義する。
第3回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(1)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第1章を読んで、ディスカッションを行う。
第4回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(2)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第2章を読んで、ディスカッションを行う。
第5回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(3)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第3章を読んで、ディスカッションを行う。
第6回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(4)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第4章を読んで、ディスカッションを行う。
第7回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(5)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第5章を読んで、ディスカッションを行う。
第8回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(6)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第6章を読んで、ディスカッションを行う。
第9回	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(7)	『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』第7章を読んで、ディスカッションを行う。
第10回	発表のやり方、レポートの書き方について	個人研究の内容を発表する方法やレポート・論文の書き方について学ぶ。
第11回	個人研究（グループ1）	4年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人研究（グループ2）	2年生、3年生の個人研究発表を行う。
第13回	フィールドワーク	ロン・ミュエク展（森美術館にて）を訪れる。
第14回	まとめ	春学期中に取り上げたテーマをまとめ、国際文化情報学会に向けてディスカッションを行う。
秋学期・第1回	秋学期・オリエンテーション	秋学期の計画および国際文化情報学会と論集作成に向けて説明する。
第2回	多文化について	多文化や越境性について講義する。
第3回	ダイバーシティについて	ダイバーシティについて講義する。
第4回	特権について	特権について講義する。
第5回	フィールドワーク	東京国際映画祭で映画を鑑賞する。
第6回	グループワーク(1)	表象文化作品の案を出し、国際文化情報学会の発表内容について議論する。
第7回	グループワーク(2)	国際文化情報学会の発表内容について決定する。
第8回	グループワーク(3)	表象文化作品を実際に創る。
第9回	グループワーク(4)	国際文化情報学会での発表の練り直しを行う。
第10回	グループワーク(5)	国際文化情報学会に向けて最終確認を行う。
第11回	個人発表（1）	2年生の個人研究発表を行う。
第12回	個人発表（2）	3年生の個人研究発表を行う。
第13回	個人発表（3）	4年生の個人研究発表を行う。
第14回	まとめ	今年度の演習についてのまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読む、授業内で示される課題（リアクション・ペーパー、レポート、発表）対応など、準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
池田緑『ジェンダーの考え方　権力とポジショナリティから考える入門書』(青弓社、2024年）￥1,584税込
河野哲也『レポート・論文の書き方入門 （第４版）』(慶應義塾大学出版会、2018年)、￥1,100税込

【参考書】
稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学: 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）
菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房、2021年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 2 結婚、家族、労働 』晃洋書房、2022 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子(編)『クィア・スタディーズをひらく 3 健康／病、障害、身体』晃洋書房、2023年）
黒岩裕市『ゲイの可視化を読むー現代文学に描かれる＜性の多様性？ ＞』（晃洋書房、2016年）
清水晶子『フェミニズムってなんですか?』（文春新書、2022年）
森山至貴『LGBTを読みとく: クィア・スタディーズ入門』(ちくま新書、2017年)

【成績評価の方法と基準】
春学期、秋学期ともに、毎週の課題20%、研究発表とグループワーク35％、学期末レポート45%で総合的に評価する。
研究発表や学期末レポートでは、社会的・歴史的な要素を踏まえた上で、メディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象について論じる。

【学生の意見等からの気づき】
ジェンダー・セクシュアリティ研究に関する知識を深めるため、講義の時間を増やすべきことに気づいた。
国際文化情報学会に向けてしっかり準備する時間をとる必要があることに気づいた。
展覧会や映画祭など、学外で行われているイベントに積極的に参加することによって、ゼミ生のモチベーションが上がることに気づいた。

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンテーションやレポート作成を行うためのパソコンなど。

【その他の重要事項】
担当教員の他の授業の受講を推奨します。
【学部専攻科目】
「世界の中の日本文学」
「Gender and Japanese Culture」
【ILAC科目】
「クィア・スタディーズA/B」
【大学院科目（自由科目として受講）】
「多文化相関論I A/B」

【Outline (in English)】
Course outline:

This course is designed to enhance students' understanding of the representations of gender, sexuality, and race so as to enable them to use theoretical argumentation for their own analyses.
Students will develop the ability to read and analyze "stories" in the broadest sense, such as novels, movies, manga and anime, commercials and music videos.
Students will also conduct individual research and give presentations on the theme of representations of gender and sexuality.
Learning objectives:
By the end of the course, students should be able to do the following:
a) discuss the representation of social and political elements in literature, cinema, and popular culture.
b) analyze the role of the media in reflecting, reproducing, and subverting hegemonic gender norms.
c) connect their ideas and present them through oral presentations and essays.
Learning activities outside of the classroom:
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session).
Grading criteria/Policy:
The final grade will be decided based on the following:
Weekly assignments: 20%
Involvement during discussion and presentation: 35%
Final essay: 45%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

岡村　民夫

サブタイトル：場所論
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「場所」とは、私たちの文化を文字通り足下から支える基盤です。この演習では「文化」という観点から「場所」を研究するとともに、「文化」を「場所」の観点から捉えなおします。
　春学期の主題として、この演習ではこれまでに「風景」「旅行」「歩行」「庭園」「江戸・東京」「コンテンツ・ツーリズム」などを取り上げてきました。本年度は「東京アニメ」を主題としながら場所の文化的意義とその変遷について実践的に学びます。東京アニメの鑑賞、資料読解、ディスカッション、フィールドワークを通じて、都市と映像表現を読み解くスキルを身につけましょう。

【到達目標】
　作品鑑賞、文献学習、フィールドワークを通し、アニメ表現および東京の歴史や構造の知識を身につけることを目指します。発表したり、期末レポートを書いたりすることを通し、調査力、論理的な思考力、文章力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　春学期から秋学期前半は、1980年代から1990年代の東京アニメの鑑賞、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。
　秋学期前半は2000年代以降の東京アニメについて学生の発表、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。秋学期の期末レポートの主題は、場所に関する表象文化の研究であれば、「東京アニメ」以外の主題（「授業の概要と目的」を参照）でも、また作品制作でも構いません。
　年間を通じ、適宜、東京のフィールドワークや展覧会見学も実践します。
　なお下記の「授業計画」はあくまでも目安で、実際の履修者の人数や関心、開催される展覧会などに応じて柔軟に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス 教員による概説１	自己紹介。 １年間の計画の説明。 東京の全体に関する概説。
2	教員による概説２	実写による東京表現と東京アニメについての概説。
3	宮崎駿「さらば愛しきルパンよ」(1980）	「さらば愛しきルパンよ」の一部鑑賞とディスカッション。
4	新宿・高円寺フィールドワーク	新宿駅東口、高円寺大和陸橋付近、気象神社。
5	押井守『機動警察パトレーバー the Movie』(1989)	『機動警察パトレーバー the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。水辺からの視点、看板建築、同潤会アパートについて学習。
6	押井守『機動警察パトレーバー２ the Movie』(1993)	『機動警察パトレーバー２ the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。上空から視点、橋の歴史について学習。
7	隅田川フィールドワーク	下町博物館、永代橋、深川。
8	高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994）１	『平成狸合戦ぽんぽこ』の一部観賞とディスカッション。
9	『平成狸合戦ぽんぽこ』２	多摩丘陵、多摩ニュータウン、里山について学習。 『となりのトトロ』との比較。
10	南大沢フィールドワーク	ベルコリーヌ南大沢、東京都立大学。
11	近藤喜文『耳をすませば』（1995）１	『耳をすませば』の一部観賞とディスカッション。
12	近藤喜文『耳をすませば』（1995）２	アニメ聖地巡礼の歴史について学習。
13	聖蹟桜ヶ丘フィールドワーク	青春ポスト、いろは坂、金比羅神社、桜ヶ丘ロータリー。
14	春学期レポート提出 江戸東京博物館フィールドワーク	江戸東京博物館の常設展示を通し、春学期の学習を振り返る。
1	秋学期ガイダンス 教員による概説３	秋学期の計画の説明。 2000年代のアニメの新展開、CGの発展について概説。
2	江戸東京たてもの園フィールドワーク	農家、看板建築、銭湯、文化住宅の実物学習。
3	今敏『東京ゴッドファーザーズ』(2003)	『東京ゴッドファーザーズ』の一部観賞と学生発表。
4	新宿副都心フィールドワーク。	新宿区中央公園、都庁。
5	細田守『時をかける少女』(2006)中野・江古田フィールドワーク	『時をかける少女』の一部観賞と学生発表。
6	中野・江古田フィールドワーク	中井駅、林芙美子記念館、哲学堂。
7	原恵一『百日紅〜Miss HOKUSAI〜』(2015)	『百日紅 MissHOKUSAI』の一部観賞と学生発表。江戸の下町についての学習。
8	本所フィールドワーク	両国橋、すみだ北斎美術館、本所。
9	新海誠『言の葉の庭』(2015)	『言の葉の庭』の一部観賞と学生発表。雨と庭園について学習。
10	新宿御苑フィールドワーク	新宿駅南口、新宿御苑。
11	新海誠『君の名は。』(2016)	『君の名は。』の一部観賞と学生発表。鉄道と神社についての学習
12	四谷フィールドワーク	四谷駅、須賀神社、於岩稲荷田宮神社。
13	新海誠『天気の子』(2019)	『天気の子』の一部観賞と学生発表。雨、海、坂について学習。
14	期末レポート提出 田端フィールドワーク	田端南口、芥川龍之介旧居、田端文士記念館。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
-発表、研究に関する文献や映像の調査、フィールドワーク。
-ゼミ生と相談のうえ国際文化情報学会で研究発表をする。本授業の準備学習・復習時間は各１時間以上を標準とします。
-法政大学江戸東京研究センターのイベント参加を推奨します。

【テキスト（教科書）】
特になし（必要なものを教員が配布ないし貸与）。

【参考書】
岡村研究室に課題となる映画のDVDのほか、参考となりえる文献、地図、画集、写真集、映画・アニメDVD作品などが膨大にあります。

【成績評価の方法と基準】
ゼミ参加度（50％）と期末レポート（50％）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の議論をより活発にし、メリハリをつけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の発表では必ず配布資料を用意してください。

【その他の重要事項】
-フィールドワークは100ふんではおえられませんので、サブゼミへの参加が必須です。
-書籍を買ったり、美術館へ行ったり、アニメ・映画鑑賞をしたり、街歩きや旅行をしたりする好奇心と体力と余裕がある必要があります。
-ゼミのメンバーと協力しあい、責任を分担してください。

【Outline (in English)】
The foundation that supports our culture is "place." In this class, we Will learn about "place" from a cultural perspective and reconsider our culture. The themes of past classes have been "Landscape", "Travel", "Walking", "Garden", "Edo-Tokyo","Contents Tourism".The theme of this year is "Tokyo Anime".
【Learning Objectives】At the end of the course, students are expected to understand the importance of an interaction between the culture and the place.
【Learning activities outside of classroom】Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant texts.Your required study time is at least one hour for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy）】Your overall grade in the class will be decided based on the following. Term-end report:50%, in class contribution: 50%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

岡村　民夫

サブタイトル：場所論
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「場所」とは、私たちの文化を文字通り足下から支える基盤です。この演習では「文化」という観点から「場所」を研究するとともに、「文化」を「場所」の観点から捉えなおします。
　春学期の主題として、この演習ではこれまでに「風景」「旅行」「歩行」「庭園」「江戸・東京」「コンテンツ・ツーリズム」などを取り上げてきました。本年度は「東京アニメ」を主題としながら場所の文化的意義とその変遷について実践的に学びます。東京アニメの鑑賞、資料読解、ディスカッション、フィールドワークを通じて、都市と映像表現を読み解くスキルを身につけましょう。

【到達目標】
　作品鑑賞、文献学習、フィールドワークを通し、アニメ表現および東京の歴史や構造の知識を身につけることを目指します。発表したり、期末レポートを書いたりすることを通し、調査力、論理的な思考力、文章力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　春学期から秋学期前半は、1980年代から1990年代の東京アニメの鑑賞、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。
　秋学期前半は2000年代以降の東京アニメについて学生の発表、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。秋学期の期末レポートの主題は、場所に関する表象文化の研究であれば、「東京アニメ」以外の主題（「授業の概要と目的」を参照）でも、また作品制作でも構いません。
　年間を通じ、適宜、東京のフィールドワークや展覧会見学も実践します。
　なお下記の「授業計画」はあくまでも目安で、実際の履修者の人数や関心、開催される展覧会などに応じて柔軟に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス 教員による概説１	自己紹介。 １年間の計画の説明。 東京の全体に関する概説。
2	教員による概説２	実写による東京表現と東京アニメについての概説。
3	宮崎駿「さらば愛しきルパンよ」(1980）	「さらば愛しきルパンよ」の一部鑑賞とディスカッション。
4	新宿・高円寺フィールドワーク	新宿駅東口、高円寺大和陸橋付近、気象神社。
5	押井守『機動警察パトレーバー the Movie』(1989)	『機動警察パトレーバー the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。水辺からの視点、看板建築、同潤会アパートについて学習。
6	押井守『機動警察パトレーバー２ the Movie』(1993)	『機動警察パトレーバー２ the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。上空から視点、橋の歴史について学習。
7	隅田川フィールドワーク	下町博物館、永代橋、深川。
8	高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994）１	『平成狸合戦ぽんぽこ』の一部観賞とディスカッション。
9	『平成狸合戦ぽんぽこ』２	多摩丘陵、多摩ニュータウン、里山について学習。 『となりのトトロ』との比較。
10	南大沢フィールドワーク	ベルコリーヌ南大沢、東京都立大学。
11	近藤喜文『耳をすませば』（1995）１	『耳をすませば』の一部観賞とディスカッション。
12	近藤喜文『耳をすませば』（1995）２	アニメ聖地巡礼の歴史について学習。
13	聖蹟桜ヶ丘フィールドワーク	青春ポスト、いろは坂、金比羅神社、桜ヶ丘ロータリー。
14	春学期レポート提出 江戸東京博物館フィールドワーク	江戸東京博物館の常設展示を通し、春学期の学習を振り返る。
1	秋学期ガイダンス 教員による概説３	秋学期の計画の説明。 2000年代のアニメの新展開、CGの発展について概説。
2	江戸東京たてもの園フィールドワーク	農家、看板建築、銭湯、文化住宅の実物学習。
3	今敏『東京ゴッドファーザーズ』(2003)	『東京ゴッドファーザーズ』の一部観賞と学生発表。
4	新宿副都心フィールドワーク。	新宿区中央公園、都庁。
5	細田守『時をかける少女』(2006)中野・江古田フィールドワーク	『時をかける少女』の一部観賞と学生発表。
6	中野・江古田フィールドワーク	中井駅、林芙美子記念館、哲学堂。
7	原恵一『百日紅〜Miss HOKUSAI〜』(2015)	『百日紅 MissHOKUSAI』の一部観賞と学生発表。江戸の下町についての学習。
8	本所フィールドワーク	両国橋、すみだ北斎美術館、本所。
9	新海誠『言の葉の庭』(2015)	『言の葉の庭』の一部観賞と学生発表。雨と庭園について学習。
10	新宿御苑フィールドワーク	新宿駅南口、新宿御苑。
11	新海誠『君の名は。』(2016)	『君の名は。』の一部観賞と学生発表。鉄道と神社についての学習
12	四谷フィールドワーク	四谷駅、須賀神社、於岩稲荷田宮神社。
13	新海誠『天気の子』(2019)	『天気の子』の一部観賞と学生発表。雨、海、坂について学習。
14	期末レポート提出 田端フィールドワーク	田端南口、芥川龍之介旧居、田端文士記念館。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
-発表、研究に関する文献や映像の調査、フィールドワーク。
-ゼミ生と相談のうえ国際文化情報学会で研究発表をする。本授業の準備学習・復習時間は各１時間以上を標準とします。
-法政大学江戸東京研究センターのイベント参加を推奨します。

【テキスト（教科書）】
特になし（必要なものを教員が配布ないし貸与）。

【参考書】
岡村研究室に課題となる映画のDVDのほか、参考となりえる文献、地図、画集、写真集、映画・アニメDVD作品などが膨大にあります。

【成績評価の方法と基準】
ゼミ参加度（50％）と期末レポート（50％）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の議論をより活発にし、メリハリをつけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の発表では必ず配布資料を用意してください。

【その他の重要事項】
-フィールドワークは100ふんではおえられませんので、サブゼミへの参加が必須です。
-書籍を買ったり、美術館へ行ったり、アニメ・映画鑑賞をしたり、街歩きや旅行をしたりする好奇心と体力と余裕がある必要があります。
-ゼミのメンバーと協力しあい、責任を分担してください。

【Outline (in English)】
The foundation that supports our culture is "place." In this class, we Will learn about "place" from a cultural perspective and reconsider our culture. The themes of past classes have been "Landscape", "Travel", "Walking", "Garden", "Edo-Tokyo","Contents Tourism".The theme of this year is "Tokyo Anime".
【Learning Objectives】At the end of the course, students are expected to understand the importance of an interaction between the culture and the place.
【Learning activities outside of classroom】Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant texts.Your required study time is at least one hour for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy)】Your overall grade in the class will be decided based on the following. Term-end report:50%, in class contribution: 50%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

岡村　民夫

サブタイトル：場所論
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「場所」とは、私たちの文化を文字通り足下から支える基盤です。この演習では「文化」という観点から「場所」を研究するとともに、「文化」を「場所」の観点から捉えなおします。
　春学期の主題として、この演習ではこれまでに「風景」「旅行」「歩行」「庭園」「江戸・東京」「コンテンツ・ツーリズム」などを取り上げてきました。本年度は「東京アニメ」を主題としながら場所の文化的意義とその変遷について実践的に学びます。東京アニメの鑑賞、資料読解、ディスカッション、フィールドワークを通じて、都市と映像表現を読み解くスキルを身につけましょう。

【到達目標】
　作品鑑賞、文献学習、フィールドワークを通し、アニメ表現および東京の歴史や構造の知識を身につけることを目指します。発表したり、期末レポートを書いたりすることを通し、調査力、論理的な思考力、文章力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　春学期から秋学期前半は、1980年代から1990年代の東京アニメの鑑賞、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。
　秋学期前半は2000年代以降の東京アニメについて学生の発表、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。秋学期の期末レポートの主題は、場所に関する表象文化の研究であれば、「東京アニメ」以外の主題（「授業の概要と目的」を参照）でも、また作品制作でも構いません。
　年間を通じ、適宜、東京のフィールドワークや展覧会見学も実践します。
　なお下記の「授業計画」はあくまでも目安で、実際の履修者の人数や関心、開催される展覧会などに応じて柔軟に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス 教員による概説１	自己紹介。 １年間の計画の説明。 東京の全体に関する概説。
2	教員による概説２	実写による東京表現と東京アニメについての概説。
3	宮崎駿「さらば愛しきルパンよ」(1980）	「さらば愛しきルパンよ」の一部鑑賞とディスカッション。
4	新宿・高円寺フィールドワーク	新宿駅東口、高円寺大和陸橋付近、気象神社。
5	押井守『機動警察パトレーバー the Movie』(1989)	『機動警察パトレーバー the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。水辺からの視点、看板建築、同潤会アパートについて学習。
6	押井守『機動警察パトレーバー２ the Movie』(1993)	『機動警察パトレーバー２ the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。上空から視点、橋の歴史について学習。
7	隅田川フィールドワーク	下町博物館、永代橋、深川。
8	高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994）１	『平成狸合戦ぽんぽこ』の一部観賞とディスカッション。
9	『平成狸合戦ぽんぽこ』２	多摩丘陵、多摩ニュータウン、里山について学習。 『となりのトトロ』との比較。
10	南大沢フィールドワーク	ベルコリーヌ南大沢、東京都立大学。
11	近藤喜文『耳をすませば』（1995）１	『耳をすませば』の一部観賞とディスカッション。
12	近藤喜文『耳をすませば』（1995）２	アニメ聖地巡礼の歴史について学習。
13	聖蹟桜ヶ丘フィールドワーク	青春ポスト、いろは坂、金比羅神社、桜ヶ丘ロータリー。
14	春学期レポート提出 江戸東京博物館フィールドワーク	江戸東京博物館の常設展示を通し、春学期の学習を振り返る。
1	秋学期ガイダンス 教員による概説３	秋学期の計画の説明。 2000年代のアニメの新展開、CGの発展について概説。
2	江戸東京たてもの園フィールドワーク	農家、看板建築、銭湯、文化住宅の実物学習。
3	今敏『東京ゴッドファーザーズ』(2003)	『東京ゴッドファーザーズ』の一部観賞と学生発表。
4	新宿副都心フィールドワーク。	新宿区中央公園、都庁。
5	細田守『時をかける少女』(2006)中野・江古田フィールドワーク	『時をかける少女』の一部観賞と学生発表。
6	中野・江古田フィールドワーク	中井駅、林芙美子記念館、哲学堂。
7	原恵一『百日紅〜Miss HOKUSAI〜』(2015)	『百日紅 MissHOKUSAI』の一部観賞と学生発表。江戸の下町についての学習。
8	本所フィールドワーク	両国橋、すみだ北斎美術館、本所。
9	新海誠『言の葉の庭』(2015)	『言の葉の庭』の一部観賞と学生発表。雨と庭園について学習。
10	新宿御苑フィールドワーク	新宿駅南口、新宿御苑。
11	新海誠『君の名は。』(2016)	『君の名は。』の一部観賞と学生発表。鉄道と神社についての学習
12	四谷フィールドワーク	四谷駅、須賀神社、於岩稲荷田宮神社。
13	新海誠『天気の子』(2019)	『天気の子』の一部観賞と学生発表。雨、海、坂について学習。
14	期末レポート提出 田端フィールドワーク	田端南口、芥川龍之介旧居、田端文士記念館。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
-発表、研究に関する文献や映像の調査、フィールドワーク。
-ゼミ生と相談のうえ国際文化情報学会で研究発表をする。本授業の準備学習・復習時間は各１時間以上を標準とします。
-法政大学江戸東京研究センターのイベント参加を推奨します。

【テキスト（教科書）】
特になし（必要なものを教員が配布ないし貸与）。

【参考書】
岡村研究室に課題となる映画のDVDのほか、参考となりえる文献、地図、画集、写真集、映画・アニメDVD作品などが膨大にあります。

【成績評価の方法と基準】
ゼミ参加度（50％）と期末レポート（50％）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の議論をより活発にし、メリハリをつけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の発表では必ず配布資料を用意してください。

【その他の重要事項】
-フィールドワークは100ふんではおえられませんので、サブゼミへの参加が必須です。
-書籍を買ったり、美術館へ行ったり、アニメ・映画鑑賞をしたり、街歩きや旅行をしたりする好奇心と体力と余裕がある必要があります。
-ゼミのメンバーと協力しあい、責任を分担してください。

【Outline (in English)】
The foundation that supports our culture is "place." In this class, we Will learn about "place" from a cultural perspective and reconsider our culture. The themes of past classes have been "Landscape", "Travel", "Walking", "Garden", "Edo-Tokyo","Contents Tourism".The theme of this year is "Tokyo Anime".
【Learning Objectives】At the end of the course, students are expected to understand the importance of an interaction between the culture and the place.
【Learning activities outside of classroom】Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant texts.Your required study time is at least one hour for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy)】Your overall grade in the class will be decided based on the following. Term-end report:50%, in class contribution: 50%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

岡村　民夫

サブタイトル：場所論
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「場所」とは、私たちの文化を文字通り足下から支える基盤です。この演習では「文化」という観点から「場所」を研究するとともに、「文化」を「場所」の観点から捉えなおします。
　春学期の主題として、この演習ではこれまでに「風景」「旅行」「歩行」「庭園」「江戸・東京」「コンテンツ・ツーリズム」などを取り上げてきました。本年度は「東京アニメ」を主題としながら場所の文化的意義とその変遷について実践的に学びます。東京アニメの鑑賞、資料読解、ディスカッション、フィールドワークを通じて、都市と映像表現を読み解くスキルを身につけましょう。

【到達目標】
　作品鑑賞、文献学習、フィールドワークを通し、アニメ表現および東京の歴史や構造の知識を身につけることを目指します。発表したり、期末レポートを書いたりすることを通し、調査力、論理的な思考力、文章力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　春学期から秋学期前半は、1980年代から1990年代の東京アニメの鑑賞、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。
　秋学期前半は2000年代以降の東京アニメについて学生の発表、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。秋学期の期末レポートの主題は、場所に関する表象文化の研究であれば、「東京アニメ」以外の主題（「授業の概要と目的」を参照）でも、また作品制作でも構いません。
　年間を通じ、適宜、東京のフィールドワークや展覧会見学も実践します。
　なお下記の「授業計画」はあくまでも目安で、実際の履修者の人数や関心、開催される展覧会などに応じて柔軟に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス 教員による概説１	自己紹介。 １年間の計画の説明。 東京の全体に関する概説。
2	教員による概説２	実写による東京表現と東京アニメについての概説。
3	宮崎駿「さらば愛しきルパンよ」(1980）	「さらば愛しきルパンよ」の一部鑑賞とディスカッション。
4	新宿・高円寺フィールドワーク	新宿駅東口、高円寺大和陸橋付近、気象神社。
5	押井守『機動警察パトレーバー the Movie』(1989)	『機動警察パトレーバー the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。水辺からの視点、看板建築、同潤会アパートについて学習。
6	押井守『機動警察パトレーバー２ the Movie』(1993)	『機動警察パトレーバー２ the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。上空から視点、橋の歴史について学習。
7	隅田川フィールドワーク	下町博物館、永代橋、深川。
8	高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994）１	『平成狸合戦ぽんぽこ』の一部観賞とディスカッション。
9	『平成狸合戦ぽんぽこ』２	多摩丘陵、多摩ニュータウン、里山について学習。 『となりのトトロ』との比較。
10	南大沢フィールドワーク	ベルコリーヌ南大沢、東京都立大学。
11	近藤喜文『耳をすませば』（1995）１	『耳をすませば』の一部観賞とディスカッション。
12	近藤喜文『耳をすませば』（1995）２	アニメ聖地巡礼の歴史について学習。
13	聖蹟桜ヶ丘フィールドワーク	青春ポスト、いろは坂、金比羅神社、桜ヶ丘ロータリー。
14	春学期レポート提出 江戸東京博物館フィールドワーク	江戸東京博物館の常設展示を通し、春学期の学習を振り返る。
1	秋学期ガイダンス 教員による概説３	秋学期の計画の説明。 2000年代のアニメの新展開、CGの発展について概説。
2	江戸東京たてもの園フィールドワーク	農家、看板建築、銭湯、文化住宅の実物学習。
3	今敏『東京ゴッドファーザーズ』(2003)	『東京ゴッドファーザーズ』の一部観賞と学生発表。
4	新宿副都心フィールドワーク。	新宿区中央公園、都庁。
5	細田守『時をかける少女』(2006)中野・江古田フィールドワーク	『時をかける少女』の一部観賞と学生発表。
6	中野・江古田フィールドワーク	中井駅、林芙美子記念館、哲学堂。
7	原恵一『百日紅〜Miss HOKUSAI〜』(2015)	『百日紅 MissHOKUSAI』の一部観賞と学生発表。江戸の下町についての学習。
8	本所フィールドワーク	両国橋、すみだ北斎美術館、本所。
9	新海誠『言の葉の庭』(2015)	『言の葉の庭』の一部観賞と学生発表。雨と庭園について学習。
10	新宿御苑フィールドワーク	新宿駅南口、新宿御苑。
11	新海誠『君の名は。』(2016)	『君の名は。』の一部観賞と学生発表。鉄道と神社についての学習
12	四谷フィールドワーク	四谷駅、須賀神社、於岩稲荷田宮神社。
13	新海誠『天気の子』(2019)	『天気の子』の一部観賞と学生発表。雨、海、坂について学習。
14	期末レポート提出 田端フィールドワーク	田端南口、芥川龍之介旧居、田端文士記念館。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
-発表、研究に関する文献や映像の調査、フィールドワーク。
-ゼミ生と相談のうえ国際文化情報学会で研究発表をする。本授業の準備学習・復習時間は各１時間以上を標準とします。
-法政大学江戸東京研究センターのイベント参加を推奨します。

【テキスト（教科書）】
特になし（必要なものを教員が配布ないし貸与）。

【参考書】
岡村研究室に課題となる映画のDVDのほか、参考となりえる文献、地図、画集、写真集、映画・アニメDVD作品などが膨大にあります。

【成績評価の方法と基準】
ゼミ参加度（50％）と期末レポート（50％）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の議論をより活発にし、メリハリをつけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の発表では必ず配布資料を用意してください。

【その他の重要事項】
-フィールドワークは100ふんではおえられませんので、サブゼミへの参加が必須です。
-書籍を買ったり、美術館へ行ったり、アニメ・映画鑑賞をしたり、街歩きや旅行をしたりする好奇心と体力と余裕がある必要があります。
-ゼミのメンバーと協力しあい、責任を分担してください。

【Outline (in English)】
The foundation that supports our culture is "place." In this class, we Will learn about "place" from a cultural perspective and reconsider our culture. The themes of past classes have been "Landscape", "Travel", "Walking", "Garden", "Edo-Tokyo","Contents Tourism".The theme of this year is "Tokyo Anime".
【Learning Objectives】At the end of the course, students are expected to understand the importance of an interaction between the culture and the place.
【Learning activities outside of classroom】Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant texts.Your required study time is at least one hour for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy)】Your overall grade in the class will be decided based on the following. Term-end report:50%, in class contribution: 50%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

岡村　民夫

サブタイトル：場所論
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「場所」とは、私たちの文化を文字通り足下から支える基盤です。この演習では「文化」という観点から「場所」を研究するとともに、「文化」を「場所」の観点から捉えなおします。
　春学期の主題として、この演習ではこれまでに「風景」「旅行」「歩行」「庭園」「江戸・東京」「コンテンツ・ツーリズム」などを取り上げてきました。本年度は「東京アニメ」を主題としながら場所の文化的意義とその変遷について実践的に学びます。東京アニメの鑑賞、資料読解、ディスカッション、フィールドワークを通じて、都市と映像表現を読み解くスキルを身につけましょう。

【到達目標】
　作品鑑賞、文献学習、フィールドワークを通し、アニメ表現および東京の歴史や構造の知識を身につけることを目指します。発表したり、期末レポートを書いたりすることを通し、調査力、論理的な思考力、文章力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　春学期から秋学期前半は、1980年代から1990年代の東京アニメの鑑賞、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。
　秋学期前半は2000年代以降の東京アニメについて学生の発表、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。秋学期の期末レポートの主題は、場所に関する表象文化の研究であれば、「東京アニメ」以外の主題（「授業の概要と目的」を参照）でも、また作品制作でも構いません。
　年間を通じ、適宜、東京のフィールドワークや展覧会見学も実践します。
　なお下記の「授業計画」はあくまでも目安で、実際の履修者の人数や関心、開催される展覧会などに応じて柔軟に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス 教員による概説１	自己紹介。 １年間の計画の説明。 東京の全体に関する概説。
2	教員による概説２	実写による東京表現と東京アニメについての概説。
3	宮崎駿「さらば愛しきルパンよ」(1980）	「さらば愛しきルパンよ」の一部鑑賞とディスカッション。
4	新宿・高円寺フィールドワーク	新宿駅東口、高円寺大和陸橋付近、気象神社。
5	押井守『機動警察パトレーバー the Movie』(1989)	『機動警察パトレーバー the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。水辺からの視点、看板建築、同潤会アパートについて学習。
6	押井守『機動警察パトレーバー２ the Movie』(1993)	『機動警察パトレーバー２ the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。上空から視点、橋の歴史について学習。
7	隅田川フィールドワーク	下町博物館、永代橋、深川。
8	高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994）１	『平成狸合戦ぽんぽこ』の一部観賞とディスカッション。
9	『平成狸合戦ぽんぽこ』２	多摩丘陵、多摩ニュータウン、里山について学習。 『となりのトトロ』との比較。
10	南大沢フィールドワーク	ベルコリーヌ南大沢、東京都立大学。
11	近藤喜文『耳をすませば』（1995）１	『耳をすませば』の一部観賞とディスカッション。
12	近藤喜文『耳をすませば』（1995）２	アニメ聖地巡礼の歴史について学習。
13	聖蹟桜ヶ丘フィールドワーク	青春ポスト、いろは坂、金比羅神社、桜ヶ丘ロータリー。
14	春学期レポート提出 江戸東京博物館フィールドワーク	江戸東京博物館の常設展示を通し、春学期の学習を振り返る。
1	秋学期ガイダンス 教員による概説３	秋学期の計画の説明。 2000年代のアニメの新展開、CGの発展について概説。
2	江戸東京たてもの園フィールドワーク	農家、看板建築、銭湯、文化住宅の実物学習。
3	今敏『東京ゴッドファーザーズ』(2003)	『東京ゴッドファーザーズ』の一部観賞と学生発表。
4	新宿副都心フィールドワーク。	新宿区中央公園、都庁。
5	細田守『時をかける少女』(2006)中野・江古田フィールドワーク	『時をかける少女』の一部観賞と学生発表。
6	中野・江古田フィールドワーク	中井駅、林芙美子記念館、哲学堂。
7	原恵一『百日紅〜Miss HOKUSAI〜』(2015)	『百日紅 MissHOKUSAI』の一部観賞と学生発表。江戸の下町についての学習。
8	本所フィールドワーク	両国橋、すみだ北斎美術館、本所。
9	新海誠『言の葉の庭』(2015)	『言の葉の庭』の一部観賞と学生発表。雨と庭園について学習。
10	新宿御苑フィールドワーク	新宿駅南口、新宿御苑。
11	新海誠『君の名は。』(2016)	『君の名は。』の一部観賞と学生発表。鉄道と神社についての学習
12	四谷フィールドワーク	四谷駅、須賀神社、於岩稲荷田宮神社。
13	新海誠『天気の子』(2019)	『天気の子』の一部観賞と学生発表。雨、海、坂について学習。
14	期末レポート提出 田端フィールドワーク	田端南口、芥川龍之介旧居、田端文士記念館。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
-発表、研究に関する文献や映像の調査、フィールドワーク。
-ゼミ生と相談のうえ国際文化情報学会で研究発表をする。本授業の準備学習・復習時間は各１時間以上を標準とします。
-法政大学江戸東京研究センターのイベント参加を推奨します。

【テキスト（教科書）】
特になし（必要なものを教員が配布ないし貸与）。

【参考書】
岡村研究室に課題となる映画のDVDのほか、参考となりえる文献、地図、画集、写真集、映画・アニメDVD作品などが膨大にあります。

【成績評価の方法と基準】
ゼミ参加度（50％）と期末レポート（50％）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の議論をより活発にし、メリハリをつけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の発表では必ず配布資料を用意してください。

【その他の重要事項】
-フィールドワークは100ふんではおえられませんので、サブゼミへの参加が必須です。
-書籍を買ったり、美術館へ行ったり、アニメ・映画鑑賞をしたり、街歩きや旅行をしたりする好奇心と体力と余裕がある必要があります。
-ゼミのメンバーと協力しあい、責任を分担してください。

【Outline (in English)】
The foundation that supports our culture is "place." In this class, we Will learn about "place" from a cultural perspective and reconsider our culture. The themes of past classes have been "Landscape", "Travel", "Walking", "Garden", "Edo-Tokyo","Contents Tourism".The theme of this year is "Tokyo Anime".
【Learning Objectives】At the end of the course, students are expected to understand the importance of an interaction between the culture and the place.
【Learning activities outside of classroom】Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant texts.Your required study time is at least one hour for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy)】Your overall grade in the class will be decided based on the following. Term-end report:50%, in class contribution: 50%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

岡村　民夫

サブタイトル：場所論
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「場所」とは、私たちの文化を文字通り足下から支える基盤です。この演習では「文化」という観点から「場所」を研究するとともに、「文化」を「場所」の観点から捉えなおします。
　春学期の主題として、この演習ではこれまでに「風景」「旅行」「歩行」「庭園」「江戸・東京」「コンテンツ・ツーリズム」などを取り上げてきました。本年度は「東京アニメ」を主題としながら場所の文化的意義とその変遷について実践的に学びます。東京アニメの鑑賞、資料読解、ディスカッション、フィールドワークを通じて、都市と映像表現を読み解くスキルを身につけましょう。

【到達目標】
　作品鑑賞、文献学習、フィールドワークを通し、アニメ表現および東京の歴史や構造の知識を身につけることを目指します。発表したり、期末レポートを書いたりすることを通し、調査力、論理的な思考力、文章力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　春学期から秋学期前半は、1980年代から1990年代の東京アニメの鑑賞、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。
　秋学期前半は2000年代以降の東京アニメについて学生の発表、ディスカッション、関連フィールドワークを行い、期末レポートを提出します。秋学期の期末レポートの主題は、場所に関する表象文化の研究であれば、「東京アニメ」以外の主題（「授業の概要と目的」を参照）でも、また作品制作でも構いません。
　年間を通じ、適宜、東京のフィールドワークや展覧会見学も実践します。
　なお下記の「授業計画」はあくまでも目安で、実際の履修者の人数や関心、開催される展覧会などに応じて柔軟に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス 教員による概説１	自己紹介。 １年間の計画の説明。 東京の全体に関する概説。
2	教員による概説２	実写による東京表現と東京アニメについての概説。
3	宮崎駿「さらば愛しきルパンよ」(1980）	「さらば愛しきルパンよ」の一部鑑賞とディスカッション。
4	新宿・高円寺フィールドワーク	新宿駅東口、高円寺大和陸橋付近、気象神社。
5	押井守『機動警察パトレーバー the Movie』(1989)	『機動警察パトレーバー the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。水辺からの視点、看板建築、同潤会アパートについて学習。
6	押井守『機動警察パトレーバー２ the Movie』(1993)	『機動警察パトレーバー２ the Movie』の一部鑑賞とディスカッション。上空から視点、橋の歴史について学習。
7	隅田川フィールドワーク	下町博物館、永代橋、深川。
8	高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994）1	『平成狸合戦ぽんぽこ』の一部観賞とディスカッション。
9	『平成狸合戦ぽんぽこ』２	多摩丘陵、多摩ニュータウン、里山について学習。 『となりのトトロ』との比較。
10	南大沢フィールドワーク	ベルコリーヌ南大沢、東京都立大学。
11	近藤喜文『耳をすませば』（1995）１	『耳をすませば』の一部観賞とディスカッション。
12	近藤喜文『耳をすませば』（1995）２	アニメ聖地巡礼の歴史について学習。
13	聖蹟桜ヶ丘フィールドワーク	青春ポスト、いろは坂、金比羅神社、桜ヶ丘ロータリー。
14	春学期レポート提出 江戸東京博物館フィールドワーク	江戸東京博物館の常設展示を通し、春学期の学習を振り返る。
1	秋学期ガイダンス 教員による概説３	秋学期の計画の説明。 2000年代のアニメの新展開、CGの発展について概説。
2	江戸東京たてもの園フィールドワーク	農家、看板建築、銭湯、文化住宅の実物学習。
3	今敏『東京ゴッドファーザーズ』(2003)	『東京ゴッドファーザーズ』の一部観賞と学生発表。
4	新宿副都心フィールドワーク。	新宿区中央公園、都庁。
5	細田守『時をかける少女』(2006)中野・江古田フィールドワーク	『時をかける少女』の一部観賞と学生発表。
6	中野・江古田フィールドワーク	中井駅、林芙美子記念館、哲学堂。
7	原恵一『百日紅〜Miss HOKUSAI〜』(2015)	『百日紅 MissHOKUSAI』の一部観賞と学生発表。江戸の下町についての学習。
8	本所フィールドワーク	両国橋、すみだ北斎美術館、本所。
9	新海誠『言の葉の庭』(2015)	『言の葉の庭』の一部観賞と学生発表。雨と庭園について学習。
10	新宿御苑フィールドワーク	新宿駅南口、新宿御苑。
11	新海誠『君の名は。』(2016)	『君の名は。』の一部観賞と学生発表。鉄道と神社についての学習
12	四谷フィールドワーク	四谷駅、須賀神社、於岩稲荷田宮神社。
13	新海誠『天気の子』(2019)	『天気の子』の一部観賞と学生発表。雨、海、坂について学習。
14	期末レポート提出 田端フィールドワーク	田端南口、芥川龍之介旧居、田端文士記念館。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
-発表、研究に関する文献や映像の調査、フィールドワーク。
-ゼミ生と相談のうえ国際文化情報学会で研究発表をする。本授業の準備学習・復習時間は各１時間以上を標準とします。
-法政大学江戸東京研究センターのイベント参加を推奨します。

【テキスト（教科書）】
特になし（必要なものを教員が配布ないし貸与）。

【参考書】
岡村研究室に課題となる映画のDVDのほか、参考となりえる文献、地図、画集、写真集、映画・アニメDVD作品などが膨大にあります。

【成績評価の方法と基準】
ゼミ参加度（50％）と期末レポート（50％）を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の議論をより活発にし、メリハリをつけたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の発表では必ず配布資料を用意してください。

【その他の重要事項】
-フィールドワークは100ふんではおえられませんので、サブゼミへの参加が必須です。
-書籍を買ったり、美術館へ行ったり、アニメ・映画鑑賞をしたり、街歩きや旅行をしたりする好奇心と体力と余裕がある必要があります。
-ゼミのメンバーと協力しあい、責任を分担してください。

【Outline (in English)】
The foundation that supports our culture is "place." In this class, we Will learn about "place" from a cultural perspective and reconsider our culture. The themes of past classes have been "Landscape", "Travel", "Walking", "Garden", "Edo-Tokyo","Contents Tourism".The theme of this year is "Tokyo Anime".
【Learning Objectives】At the end of the course, students are expected to understand the importance of an interaction between the culture and the place.
【Learning activities outside of classroom】Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant texts.Your required study time is at least one hour for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy）】Your overall grade in the class will be decided based on the following. Term-end report:50%, in class contribution: 50%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

倉本　さおり

サブタイトル：小説、映像、サブカルチャー批評と創作
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
まずは自分の興味に合った研究テーマを選び、小説、映画、サブカルチャー作品を様々な角度から読み解く方法と創作に活かすヒントを学びます。文化やサブカルチャーを研究したい人には個別指導を行い、テーマが決まっていない人には共通のテーマに基づいた調査・分析手法を指導します。今年度は、〈視点と語り〉に焦点を当て、様々な作品を分析する予定です。また、研究成果として、研究論文、フィクション、映像作品やシナリオを制作することが目標です。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多角的に答えを見出す姿勢を身につける
・グループワークを通じ、論点を整理しながらディスカッションを行うことができるようになる
・先行研究を踏まえ、客観的な説得力をそなえた論文を書くことができるようになる
・先行作品を踏まえ、体系的な理解を構築したうえで自らのアイディアを作品として具体的に表現する技術を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力と同時にコンテンツ作りに必要な企画力、事務能力、協業する能力も養っていきます。
演習では各テーマに関して他の履修生や教員と議論をかわします。学期の終わりには各自の研究、創作の発表機会を持ち、その内容やプレゼンテーションの仕方が評価されます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したうえで、自己紹介の発展形としてセルフプロモーションを行ってもらいます。
第二回	イントロダクション	共通テーマの説明と共に個々のテーマ設定の仕方について確認していきます。
第三回	視点と語り①（語り手とはなにか）	上田慎一郎監督による低予算映画『カメラを止めるな』(2018年)を鑑賞し、〈視点〉から広がるフィクションや物語の可能性について検討します。
第四回	視点と語り②（ホラーとモキュメンタリー）	エドゥアルド・サンチェスとダニエル・マイリック監督による低予算ホラーの革命作『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』(1999年)を鑑賞し、POVと呼ばれる手法とその効果について学んでいきます。
第五回	共同討議と研究発表へのフィードバック	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、それぞれに研究発表の方向性を設定します。
第六回	視点と語り③（小説の視点とナラティブ）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」(1985年)を読み、テクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されうるのか分析していきます。
第七回	視点と語り④（映画の視点とナラティブ）	犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』(2003年)を鑑賞し、モノローグと視点に着目しながら原作となったテクストからどのようなプロセスを経て翻案に至ったのかディスカッションしながら考察していきます。
第八回	共同討議と各自研究発表のテーマ設定	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、改めて研究発表のテーマを各自設定します。
第九回	視点と語り⑤（時代背景の変化から考える）	タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、先行作品と比較しながら時代背景や社会環境の変化に着目しつつ考察を重ねていきます。
第十回	視点と語り⑥（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、視点から浮かびあがる社会環境の差異について考察を重ねていきます。
第十一回共同制作	視点と語り⑦（アダプテーションの諸相）	『ジョゼと虎と魚たち』をめぐってこれまでに検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第十二回	学期末ミニ発表会（前半）	これまでの授業（視点と語り）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。
第十三回	学期末ミニ発表会（後半）	各自の発表内容と検討し、クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第十四回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。
第十五回	夏休みの課題の発表	それぞれが設定した課題とその成果を発表してもらいます。
第十六回	共同研究もしくは共同制作討議	互いに意見を交換しながらゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作の検討を行います。
第十七回	企画の吟味　共同研究もしくは共同制作決定	企画会議を行いゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作のテーマを決定します。
第十八回	追加リサーチの指示	リサーチの具体的な方法を提案しながら個別指導を行います。
第十九回	映画館における作品鑑賞	フィールドワークの一環として上映中の映画を映画館で鑑賞し、その場で論評します。
第二十回	中間発表前半	各班が設定した研究発表テーマについてお互いにインタビューを行います。
第二十一回	中間発表後半	前回の授業での指摘を踏まえた上で論文指導を行います。
第二十二回	フィールドワーク	授業中に扱った作品の舞台となった場所を訪れ、〈視点とナラティブ〉の観点から表現の可能性を模索します。
第二十三回	視点と語り⑧（短歌を詠む）	前回のフィールドワークの体験を活かし、短歌を詠むことに挑戦します。
第二十四回	視点と語り⑨（短歌を読む）	それぞれがつくった短歌を論評し合うと同時に、近年のソーシャルメディアと短歌という表現の親和性についても考察していきます。
第二十五回	共同研究、共同制作の指導前半	各班の共同研究・共同制作の進捗状況をチェックしつつ、互いに意見を交換します。
第二十六回	共同研究、共同制作の指導後半	前回のフィードバックを整理し、研究と制作物に反映させます。
第二十七回	一年の成果の公開	各々執筆・制作した作品の修正、完成に向けたサポートを行います。
第二十八回	最終研究成果の提出	最終チェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課外活動として、取材、撮影、ロケハンの機会なども相談しながら検討します。ゼミの時間外にこちらが推薦する映画、書籍にできるだけ多く触れること。本授業の準備・復習時間は、各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で指示する。

【参考書】
授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
　共同製作での役割、個人研究の成果、学部学会発表などの総合的評価で決定する。評価基準は平常点40％、レポート、論文60％とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
２０２５年度は水曜日の４限に授業を行い、続く５限はサブゼミの時間とする。

【Outline (in English)】
Students will begin by selecting a research topic that aligns with their interests while exploring various interpretive approaches to novels, films, and subcultural works. Individualized guidance is available for those focusing on cultural or subcultural studies. For students who have yet to finalize a topic, the course provides instruction on research and analytical methods through a shared thematic framework. This year's primary focus will be on "perspective and narrative." As a final outcome, students may choose to produce a research paper, a work of fiction, or a video project.
Students will be evaluated on both the content and the method of their presentations. The final grade is based on class participation (40%) and final reports or dissertations (60%).

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

倉本　さおり

サブタイトル：小説、映像、サブカルチャー批評と創作
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
まずは自分の興味に合った研究テーマを選び、小説、映画、サブカルチャー作品を様々な角度から読み解く方法と創作に活かすヒントを学びます。文化やサブカルチャーを研究したい人には個別指導を行い、テーマが決まっていない人には共通のテーマに基づいた調査・分析手法を指導します。今年度は、〈視点と語り〉に焦点を当て、様々な作品を分析する予定です。また、研究成果として、研究論文、フィクション、映像作品やシナリオを制作することが目標です。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多角的に答えを見出す姿勢を身につける
・グループワークを通じ、論点を整理しながらディスカッションを行うことができるようになる
・先行研究を踏まえ、客観的な説得力をそなえた論文を書くことができるようになる
・先行作品を踏まえ、体系的な理解を構築したうえで自らのアイディアを作品として具体的に表現する技術を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力と同時にコンテンツ作りに必要な企画力、事務能力、協業する能力も養っていきます。
演習では各テーマに関して他の履修生や教員と議論をかわします。学期の終わりには各自の研究、創作の発表機会を持ち、その内容やプレゼンテーションの仕方が評価されます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したうえで、自己紹介の発展形としてセルフプロモーションを行ってもらいます。
第二回	イントロダクション	共通テーマの説明と共に個々のテーマ設定の仕方について確認していきます。
第三回	視点と語り①（語り手とはなにか）	上田慎一郎監督による低予算映画『カメラを止めるな』(2018年)を鑑賞し、〈視点〉から広がるフィクションや物語の可能性について検討します。
第四回	視点と語り②（ホラーとモキュメンタリー）	エドゥアルド・サンチェスとダニエル・マイリック監督による低予算ホラーの革命作『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』(1999年)を鑑賞し、POVと呼ばれる手法とその効果について学んでいきます。
第五回	共同討議と研究発表へのフィードバック	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、それぞれに研究発表の方向性を設定します。
第六回	視点と語り③（小説の視点とナラティブ）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」(1985年)を読み、テクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されうるのか分析していきます。
第七回	視点と語り④（映画の視点とナラティブ）	犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』(2003年)を鑑賞し、モノローグと視点に着目しながら原作となったテクストからどのようなプロセスを経て翻案に至ったのかディスカッションしながら考察していきます。
第八回	共同討議と各自研究発表のテーマ設定	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、改めて研究発表のテーマを各自設定します。
第九回	視点と語り⑤（時代背景の変化から考える）	タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、先行作品と比較しながら時代背景や社会環境の変化に着目しつつ考察を重ねていきます。
第十回	視点と語り⑥（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、視点から浮かびあがる社会環境の差異について考察を重ねていきます。
第十一回共同制作	視点と語り⑦（アダプテーションの諸相）	『ジョゼと虎と魚たち』をめぐってこれまでに検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第十二回	学期末ミニ発表会（前半）	これまでの授業（視点と語り）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。
第十三回	学期末ミニ発表会（後半）	各自の発表内容と検討し、クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第十四回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。
第十五回	夏休みの課題の発表	それぞれが設定した課題とその成果を発表してもらいます。
第十六回	共同研究もしくは共同制作討議	互いに意見を交換しながらゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作の検討を行います。
第十七回	企画の吟味　共同研究もしくは共同制作決定	企画会議を行いゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作のテーマを決定します。
第十八回	追加リサーチの指示	リサーチの具体的な方法を提案しながら個別指導を行います。
第十九回	映画館における作品鑑賞	フィールドワークの一環として上映中の映画を映画館で鑑賞し、その場で論評します。
第二十回	中間発表前半	各班が設定した研究発表テーマについてお互いにインタビューを行います。
第二十一回	中間発表後半	前回の授業での指摘を踏まえた上で論文指導を行います。
第二十二回	フィールドワーク	授業中に扱った作品の舞台となった場所を訪れ、〈視点とナラティブ〉の観点から表現の可能性を模索します。
第二十三回	視点と語り⑧（短歌を詠む）	前回のフィールドワークの体験を活かし、短歌を詠むことに挑戦します。
第二十四回	視点と語り⑨（短歌を読む）	それぞれがつくった短歌を論評し合うと同時に、近年のソーシャルメディアと短歌という表現の親和性についても考察していきます。
第二十五回	共同研究、共同制作の指導前半	各班の共同研究・共同制作の進捗状況をチェックしつつ、互いに意見を交換します。
第二十六回	共同研究、共同制作の指導後半	前回のフィードバックを整理し、研究と制作物に反映させます。
第二十七回	一年の成果の公開	各々執筆・制作した作品の修正、完成に向けたサポートを行います。
第二十八回	最終研究成果の提出	最終チェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課外活動として、取材、撮影、ロケハンの機会なども相談しながら検討します。ゼミの時間外にこちらが推薦する映画、書籍にできるだけ多く触れること。本授業の準備・復習時間は、各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で指示する。

【参考書】
授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
　共同製作での役割、個人研究の成果、学部学会発表などの総合的評価で決定する。評価基準は平常点40％、レポート、論文60％とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
２０２５年度は水曜日の４限に授業を行い、続く５限はサブゼミの時間とする。

【Outline (in English)】
Students will begin by selecting a research topic that aligns with their interests while exploring various interpretive approaches to novels, films, and subcultural works. Individualized guidance is available for those focusing on cultural or subcultural studies. For students who have yet to finalize a topic, the course provides instruction on research and analytical methods through a shared thematic framework. This year's primary focus will be on "perspective and narrative." As a final outcome, students may choose to produce a research paper, a work of fiction, or a video project.
Students will be evaluated on both the content and the method of their presentations. The final grade is based on class participation (40%) and final reports or dissertations (60%).

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

倉本　さおり

サブタイトル：小説、映像、サブカルチャー批評と創作
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
まずは自分の興味に合った研究テーマを選び、小説、映画、サブカルチャー作品を様々な角度から読み解く方法と創作に活かすヒントを学びます。文化やサブカルチャーを研究したい人には個別指導を行い、テーマが決まっていない人には共通のテーマに基づいた調査・分析手法を指導します。今年度は、〈視点と語り〉に焦点を当て、様々な作品を分析する予定です。また、研究成果として、研究論文、フィクション、映像作品やシナリオを制作することが目標です。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多角的に答えを見出す姿勢を身につける
・グループワークを通じ、論点を整理しながらディスカッションを行うことができるようになる
・先行研究を踏まえ、客観的な説得力をそなえた論文を書くことができるようになる
・先行作品を踏まえ、体系的な理解を構築したうえで自らのアイディアを作品として具体的に表現する技術を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力と同時にコンテンツ作りに必要な企画力、事務能力、協業する能力も養っていきます。
演習では各テーマに関して他の履修生や教員と議論をかわします。学期の終わりには各自の研究、創作の発表機会を持ち、その内容やプレゼンテーションの仕方が評価されます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したうえで、自己紹介の発展形としてセルフプロモーションを行ってもらいます。
第二回	イントロダクション	共通テーマの説明と共に個々のテーマ設定の仕方について確認していきます。
第三回	視点と語り①（語り手とはなにか）	上田慎一郎監督による低予算映画『カメラを止めるな』(2018年)を鑑賞し、〈視点〉から広がるフィクションや物語の可能性について検討します。
第四回	視点と語り②（ホラーとモキュメンタリー）	エドゥアルド・サンチェスとダニエル・マイリック監督による低予算ホラーの革命作『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』(1999年)を鑑賞し、POVと呼ばれる手法とその効果について学んでいきます。
第五回	共同討議と研究発表へのフィードバック	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、それぞれに研究発表の方向性を設定します。
第六回	視点と語り③（小説の視点とナラティブ）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」(1985年)を読み、テクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されうるのか分析していきます。
第七回	視点と語り④（映画の視点とナラティブ）	犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』(2003年)を鑑賞し、モノローグと視点に着目しながら原作となったテクストからどのようなプロセスを経て翻案に至ったのかディスカッションしながら考察していきます。
第八回	共同討議と各自研究発表のテーマ設定	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、改めて研究発表のテーマを各自設定します。
第九回	視点と語り⑤（時代背景の変化から考える）	タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、先行作品と比較しながら時代背景や社会環境の変化に着目しつつ考察を重ねていきます。
第十回	視点と語り⑥（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、視点から浮かびあがる社会環境の差異について考察を重ねていきます。
第十一回共同制作	視点と語り⑦（アダプテーションの諸相）	『ジョゼと虎と魚たち』をめぐってこれまでに検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第十二回	学期末ミニ発表会（前半）	これまでの授業（視点と語り）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。
第十三回	学期末ミニ発表会（後半）	各自の発表内容と検討し、クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第十四回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。
第十五回	夏休みの課題の発表	それぞれが設定した課題とその成果を発表してもらいます。
第十六回	共同研究もしくは共同制作討議	互いに意見を交換しながらゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作の検討を行います。
第十七回	企画の吟味　共同研究もしくは共同制作決定	企画会議を行いゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作のテーマを決定します。
第十八回	追加リサーチの指示	リサーチの具体的な方法を提案しながら個別指導を行います。
第十九回	映画館における作品鑑賞	フィールドワークの一環として上映中の映画を映画館で鑑賞し、その場で論評します。
第二十回	中間発表前半	各班が設定した研究発表テーマについてお互いにインタビューを行います。
第二十一回	中間発表後半	前回の授業での指摘を踏まえた上で論文指導を行います。
第二十二回	フィールドワーク	授業中に扱った作品の舞台となった場所を訪れ、〈視点とナラティブ〉の観点から表現の可能性を模索します。
第二十三回	視点と語り⑧（短歌を詠む）	前回のフィールドワークの体験を活かし、短歌を詠むことに挑戦します。
第二十四回	視点と語り⑨（短歌を読む）	それぞれがつくった短歌を論評し合うと同時に、近年のソーシャルメディアと短歌という表現の親和性についても考察していきます。
第二十五回	共同研究、共同制作の指導前半	各班の共同研究・共同制作の進捗状況をチェックしつつ、互いに意見を交換します。
第二十六回	共同研究、共同制作の指導後半	前回のフィードバックを整理し、研究と制作物に反映させます。
第二十七回	一年の成果の公開	各々執筆・制作した作品の修正、完成に向けたサポートを行います。
第二十八回	最終研究成果の提出	最終チェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課外活動として、取材、撮影、ロケハンの機会なども相談しながら検討します。ゼミの時間外にこちらが推薦する映画、書籍にできるだけ多く触れること。本授業の準備・復習時間は、各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で指示する。

【参考書】
授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
　共同製作での役割、個人研究の成果、学部学会発表などの総合的評価で決定する。評価基準は平常点40％、レポート、論文60％とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
２０２５年度は水曜日の４限に授業を行い、続く５限はサブゼミの時間とする。

【Outline (in English)】
Students will begin by selecting a research topic that aligns with their interests while exploring various interpretive approaches to novels, films, and subcultural works. Individualized guidance is available for those focusing on cultural or subcultural studies. For students who have yet to finalize a topic, the course provides instruction on research and analytical methods through a shared thematic framework. This year's primary focus will be on "perspective and narrative." As a final outcome, students may choose to produce a research paper, a work of fiction, or a video project.
Students will be evaluated on both the content and the method of their presentations. The final grade is based on class participation (40%) and final reports or dissertations (60%).

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

倉本　さおり

サブタイトル：小説、映像、サブカルチャー批評と創作
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
まずは自分の興味に合った研究テーマを選び、小説、映画、サブカルチャー作品を様々な角度から読み解く方法と創作に活かすヒントを学びます。文化やサブカルチャーを研究したい人には個別指導を行い、テーマが決まっていない人には共通のテーマに基づいた調査・分析手法を指導します。今年度は、〈視点と語り〉に焦点を当て、様々な作品を分析する予定です。また、研究成果として、研究論文、フィクション、映像作品やシナリオを制作することが目標です。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多角的に答えを見出す姿勢を身につける
・グループワークを通じ、論点を整理しながらディスカッションを行うことができるようになる
・先行研究を踏まえ、客観的な説得力をそなえた論文を書くことができるようになる
・先行作品を踏まえ、体系的な理解を構築したうえで自らのアイディアを作品として具体的に表現する技術を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力と同時にコンテンツ作りに必要な企画力、事務能力、協業する能力も養っていきます。
演習では各テーマに関して他の履修生や教員と議論をかわします。学期の終わりには各自の研究、創作の発表機会を持ち、その内容やプレゼンテーションの仕方が評価されます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したうえで、自己紹介の発展形としてセルフプロモーションを行ってもらいます。
第二回	イントロダクション	共通テーマの説明と共に個々のテーマ設定の仕方について確認していきます。
第三回	視点と語り①（語り手とはなにか）	上田慎一郎監督による低予算映画『カメラを止めるな』(2018年)を鑑賞し、〈視点〉から広がるフィクションや物語の可能性について検討します。
第四回	視点と語り②（ホラーとモキュメンタリー）	エドゥアルド・サンチェスとダニエル・マイリック監督による低予算ホラーの革命作『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』(1999年)を鑑賞し、POVと呼ばれる手法とその効果について学んでいきます。
第五回	共同討議と研究発表へのフィードバック	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、それぞれに研究発表の方向性を設定します。
第六回	視点と語り③（小説の視点とナラティブ）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」(1985年)を読み、テクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されうるのか分析していきます。
第七回	視点と語り④（映画の視点とナラティブ）	犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』(2003年)を鑑賞し、モノローグと視点に着目しながら原作となったテクストからどのようなプロセスを経て翻案に至ったのかディスカッションしながら考察していきます。
第八回	共同討議と各自研究発表のテーマ設定	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、改めて研究発表のテーマを各自設定します。
第九回	視点と語り⑤（時代背景の変化から考える）	タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、先行作品と比較しながら時代背景や社会環境の変化に着目しつつ考察を重ねていきます。
第十回	視点と語り⑥（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、視点から浮かびあがる社会環境の差異について考察を重ねていきます。
第十一回共同制作	視点と語り⑦（アダプテーションの諸相）	『ジョゼと虎と魚たち』をめぐってこれまでに検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第十二回	学期末ミニ発表会（前半）	これまでの授業（視点と語り）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。
第十三回	学期末ミニ発表会（後半）	各自の発表内容と検討し、クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第十四回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。
第十五回	夏休みの課題の発表	それぞれが設定した課題とその成果を発表してもらいます。
第十六回	共同研究もしくは共同制作討議	互いに意見を交換しながらゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作の検討を行います。
第十七回	企画の吟味　共同研究もしくは共同制作決定	企画会議を行いゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作のテーマを決定します。
第十八回	追加リサーチの指示	リサーチの具体的な方法を提案しながら個別指導を行います。
第十九回	映画館における作品鑑賞	フィールドワークの一環として上映中の映画を映画館で鑑賞し、その場で論評します。
第二十回	中間発表前半	各班が設定した研究発表テーマについてお互いにインタビューを行います。
第二十一回	中間発表後半	前回の授業での指摘を踏まえた上で論文指導を行います。
第二十二回	フィールドワーク	授業中に扱った作品の舞台となった場所を訪れ、〈視点とナラティブ〉の観点から表現の可能性を模索します。
第二十三回	視点と語り⑧（短歌を詠む）	前回のフィールドワークの体験を活かし、短歌を詠むことに挑戦します。
第二十四回	視点と語り⑨（短歌を読む）	それぞれがつくった短歌を論評し合うと同時に、近年のソーシャルメディアと短歌という表現の親和性についても考察していきます。
第二十五回	共同研究、共同制作の指導前半	各班の共同研究・共同制作の進捗状況をチェックしつつ、互いに意見を交換します。
第二十六回	共同研究、共同制作の指導後半	前回のフィードバックを整理し、研究と制作物に反映させます。
第二十七回	一年の成果の公開	各々執筆・制作した作品の修正、完成に向けたサポートを行います。
第二十八回	最終研究成果の提出	最終チェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課外活動として、取材、撮影、ロケハンの機会なども相談しながら検討します。ゼミの時間外にこちらが推薦する映画、書籍にできるだけ多く触れること。本授業の準備・復習時間は、各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で指示する。

【参考書】
授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
　共同製作での役割、個人研究の成果、学部学会発表などの総合的評価で決定する。評価基準は平常点40％、レポート、論文60％とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
２０２５年度は水曜日の４限に授業を行い、続く５限はサブゼミの時間とする。

【Outline (in English)】
Students will begin by selecting a research topic that aligns with their interests while exploring various interpretive approaches to novels, films, and subcultural works. Individualized guidance is available for those focusing on cultural or subcultural studies. For students who have yet to finalize a topic, the course provides instruction on research and analytical methods through a shared thematic framework. This year's primary focus will be on "perspective and narrative." As a final outcome, students may choose to produce a research paper, a work of fiction, or a video project.
Students will be evaluated on both the content and the method of their presentations. The final grade is based on class participation (40%) and final reports or dissertations (60%).

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

倉本　さおり

サブタイトル：小説、映像、サブカルチャー批評と創作
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
まずは自分の興味に合った研究テーマを選び、小説、映画、サブカルチャー作品を様々な角度から読み解く方法と創作に活かすヒントを学びます。文化やサブカルチャーを研究したい人には個別指導を行い、テーマが決まっていない人には共通のテーマに基づいた調査・分析手法を指導します。今年度は、〈視点と語り〉に焦点を当て、様々な作品を分析する予定です。また、研究成果として、研究論文、フィクション、映像作品やシナリオを制作することが目標です。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多角的に答えを見出す姿勢を身につける
・グループワークを通じ、論点を整理しながらディスカッションを行うことができるようになる
・先行研究を踏まえ、客観的な説得力をそなえた論文を書くことができるようになる
・先行作品を踏まえ、体系的な理解を構築したうえで自らのアイディアを作品として具体的に表現する技術を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力と同時にコンテンツ作りに必要な企画力、事務能力、協業する能力も養っていきます。
演習では各テーマに関して他の履修生や教員と議論をかわします。学期の終わりには各自の研究、創作の発表機会を持ち、その内容やプレゼンテーションの仕方が評価されます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したうえで、自己紹介の発展形としてセルフプロモーションを行ってもらいます。
第二回	イントロダクション	共通テーマの説明と共に個々のテーマ設定の仕方について確認していきます。
第三回	視点と語り①（語り手とはなにか）	上田慎一郎監督による低予算映画『カメラを止めるな』(2018年)を鑑賞し、〈視点〉から広がるフィクションや物語の可能性について検討します。
第四回	視点と語り②（ホラーとモキュメンタリー）	エドゥアルド・サンチェスとダニエル・マイリック監督による低予算ホラーの革命作『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』(1999年)を鑑賞し、POVと呼ばれる手法とその効果について学んでいきます。
第五回	共同討議と研究発表へのフィードバック	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、それぞれに研究発表の方向性を設定します。
第六回	視点と語り③（小説の視点とナラティブ）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」(1985年)を読み、テクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されうるのか分析していきます。
第七回	視点と語り④（映画の視点とナラティブ）	犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』(2003年)を鑑賞し、モノローグと視点に着目しながら原作となったテクストからどのようなプロセスを経て翻案に至ったのかディスカッションしながら考察していきます。
第八回	共同討議と各自研究発表のテーマ設定	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、改めて研究発表のテーマを各自設定します。
第九回	視点と語り⑤（時代背景の変化から考える）	タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、先行作品と比較しながら時代背景や社会環境の変化に着目しつつ考察を重ねていきます。
第十回	視点と語り⑥（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、視点から浮かびあがる社会環境の差異について考察を重ねていきます。
第十一回共同制作	視点と語り⑦（アダプテーションの諸相）	『ジョゼと虎と魚たち』をめぐってこれまでに検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第十二回	学期末ミニ発表会（前半）	これまでの授業（視点と語り）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。
第十三回	学期末ミニ発表会（後半）	各自の発表内容と検討し、クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第十四回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。
第十五回	夏休みの課題の発表	それぞれが設定した課題とその成果を発表してもらいます。
第十六回	共同研究もしくは共同制作討議	互いに意見を交換しながらゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作の検討を行います。
第十七回	企画の吟味　共同研究もしくは共同制作決定	企画会議を行いゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作のテーマを決定します。
第十八回	追加リサーチの指示	リサーチの具体的な方法を提案しながら個別指導を行います。
第十九回	映画館における作品鑑賞	フィールドワークの一環として上映中の映画を映画館で鑑賞し、その場で論評します。
第二十回	中間発表前半	各班が設定した研究発表テーマについてお互いにインタビューを行います。
第二十一回	中間発表後半	前回の授業での指摘を踏まえた上で論文指導を行います。
第二十二回	フィールドワーク	授業中に扱った作品の舞台となった場所を訪れ、〈視点とナラティブ〉の観点から表現の可能性を模索します。
第二十三回	視点と語り⑧（短歌を詠む）	前回のフィールドワークの体験を活かし、短歌を詠むことに挑戦します。
第二十四回	視点と語り⑨（短歌を読む）	それぞれがつくった短歌を論評し合うと同時に、近年のソーシャルメディアと短歌という表現の親和性についても考察していきます。
第二十五回	共同研究、共同制作の指導前半	各班の共同研究・共同制作の進捗状況をチェックしつつ、互いに意見を交換します。
第二十六回	共同研究、共同制作の指導後半	前回のフィードバックを整理し、研究と制作物に反映させます。
第二十七回	一年の成果の公開	各々執筆・制作した作品の修正、完成に向けたサポートを行います。
第二十八回	最終研究成果の提出	最終チェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課外活動として、取材、撮影、ロケハンの機会なども相談しながら検討します。ゼミの時間外にこちらが推薦する映画、書籍にできるだけ多く触れること。本授業の準備・復習時間は、各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で指示する。

【参考書】
授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
　共同製作での役割、個人研究の成果、学部学会発表などの総合的評価で決定する。評価基準は平常点40％、レポート、論文60％とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
２０２５年度は水曜日の４限に授業を行い、続く５限はサブゼミの時間とする。

【Outline (in English)】
Students will begin by selecting a research topic that aligns with their interests while exploring various interpretive approaches to novels, films, and subcultural works. Individualized guidance is available for those focusing on cultural or subcultural studies. For students who have yet to finalize a topic, the course provides instruction on research and analytical methods through a shared thematic framework. This year's primary focus will be on "perspective and narrative." As a final outcome, students may choose to produce a research paper, a work of fiction, or a video project.
Students will be evaluated on both the content and the method of their presentations. The final grade is based on class participation (40%) and final reports or dissertations (60%).

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

倉本　さおり

サブタイトル：小説、映像、サブカルチャー批評と創作
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
まずは自分の興味に合った研究テーマを選び、小説、映画、サブカルチャー作品を様々な角度から読み解く方法と創作に活かすヒントを学びます。文化やサブカルチャーを研究したい人には個別指導を行い、テーマが決まっていない人には共通のテーマに基づいた調査・分析手法を指導します。今年度は、〈視点と語り〉に焦点を当て、様々な作品を分析する予定です。また、研究成果として、研究論文、フィクション、映像作品やシナリオを制作することが目標です。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多角的に答えを見出す姿勢を身につける
・グループワークを通じ、論点を整理しながらディスカッションを行うことができるようになる
・先行研究を踏まえ、客観的な説得力をそなえた論文を書くことができるようになる
・先行作品を踏まえ、体系的な理解を構築したうえで自らのアイディアを作品として具体的に表現する技術を身につける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力と同時にコンテンツ作りに必要な企画力、事務能力、協業する能力も養っていきます。
演習では各テーマに関して他の履修生や教員と議論をかわします。学期の終わりには各自の研究、創作の発表機会を持ち、その内容やプレゼンテーションの仕方が評価されます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したうえで、自己紹介の発展形としてセルフプロモーションを行ってもらいます。
第二回	イントロダクション	共通テーマの説明と共に個々のテーマ設定の仕方について確認していきます。
第三回	視点と語り①（語り手とはなにか）	上田慎一郎監督による低予算映画『カメラを止めるな』(2018年)を鑑賞し、〈視点〉から広がるフィクションや物語の可能性について検討します。
第四回	視点と語り②（ホラーとモキュメンタリー）	エドゥアルド・サンチェスとダニエル・マイリック監督による低予算ホラーの革命作『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』(1999年)を鑑賞し、POVと呼ばれる手法とその効果について学んでいきます。
第五回	共同討議と研究発表へのフィードバック	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、それぞれに研究発表の方向性を設定します。
第六回	視点と語り③（小説の視点とナラティブ）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」(1985年)を読み、テクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されうるのか分析していきます。
第七回	視点と語り④（映画の視点とナラティブ）	犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』(2003年)を鑑賞し、モノローグと視点に着目しながら原作となったテクストからどのようなプロセスを経て翻案に至ったのかディスカッションしながら考察していきます。
第八回	共同討議と各自研究発表のテーマ設定	前回までの授業を踏まえてディスカッションを経たのち、改めて研究発表のテーマを各自設定します。
第九回	視点と語り⑤（時代背景の変化から考える）	タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、先行作品と比較しながら時代背景や社会環境の変化に着目しつつ考察を重ねていきます。
第十回	視点と語り⑥（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』(2020年)を鑑賞し、視点から浮かびあがる社会環境の差異について考察を重ねていきます。
第十一回共同制作	視点と語り⑦（アダプテーションの諸相）	『ジョゼと虎と魚たち』をめぐってこれまでに検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第十二回	学期末ミニ発表会（前半）	これまでの授業（視点と語り）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。
第十三回	学期末ミニ発表会（後半）	各自の発表内容と検討し、クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第十四回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。
第十五回	夏休みの課題の発表	それぞれが設定した課題とその成果を発表してもらいます。
第十六回	共同研究もしくは共同制作討議	互いに意見を交換しながらゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作の検討を行います。
第十七回	企画の吟味　共同研究もしくは共同制作決定	企画会議を行いゼミ共同での研究もしくは映像作品の共同制作のテーマを決定します。
第十八回	追加リサーチの指示	リサーチの具体的な方法を提案しながら個別指導を行います。
第十九回	映画館における作品鑑賞	フィールドワークの一環として上映中の映画を映画館で鑑賞し、その場で論評します。
第二十回	中間発表前半	各班が設定した研究発表テーマについてお互いにインタビューを行います。
第二十一回	中間発表後半	前回の授業での指摘を踏まえた上で論文指導を行います。
第二十二回	フィールドワーク	授業中に扱った作品の舞台となった場所を訪れ、〈視点とナラティブ〉の観点から表現の可能性を模索します。
第二十三回	視点と語り⑧（短歌を詠む）	前回のフィールドワークの体験を活かし、短歌を詠むことに挑戦します。
第二十四回	視点と語り⑨（短歌を読む）	それぞれがつくった短歌を論評し合うと同時に、近年のソーシャルメディアと短歌という表現の親和性についても考察していきます。
第二十五回	共同研究、共同制作の指導前半	各班の共同研究・共同制作の進捗状況をチェックしつつ、互いに意見を交換します。
第二十六回	共同研究、共同制作の指導後半	前回のフィードバックを整理し、研究と制作物に反映させます。
第二十七回	一年の成果の公開	各々執筆・制作した作品の修正、完成に向けたサポートを行います。
第二十八回	最終研究成果の提出	最終チェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課外活動として、取材、撮影、ロケハンの機会なども相談しながら検討します。ゼミの時間外にこちらが推薦する映画、書籍にできるだけ多く触れること。本授業の準備・復習時間は、各1時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で指示する。

【参考書】
授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
　共同製作での役割、個人研究の成果、学部学会発表などの総合的評価で決定する。評価基準は平常点40％、レポート、論文60％とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】
２０２５年度は水曜日の４限に授業を行い、続く５限はサブゼミの時間とする。

【Outline (in English)】
Students will begin by selecting a research topic that aligns with their interests while exploring various interpretive approaches to novels, films, and subcultural works. Individualized guidance is available for those focusing on cultural or subcultural studies. For students who have yet to finalize a topic, the course provides instruction on research and analytical methods through a shared thematic framework. This year's primary focus will be on "perspective and narrative." As a final outcome, students may choose to produce a research paper, a work of fiction, or a video project.
Students will be evaluated on both the content and the method of their presentations. The final grade is based on class participation (40%) and final reports or dissertations (60%).

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

深谷　公宣

サブタイトル：映画研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「映画からみる社会」をテーマとし、映画・映像作品の分析を行う。映画は時代や社会を反映している。作品分析により、時代や社会の有様が見えてくる。一年間の演習を通し、学生は映画作品分析力とそれに基づいた社会観察力を養う。

【到達目標】
(1)映画の社会的構成要素を検証できる。
(2)映画の美学的構成要素を検証できる。
(3)一次資料、二次資料を用いて作品分析を行い、そこから得た知見をもとに、研究発表や論文執筆、創作活動を行うことができる。
また、以上3点に付随して、次の力・姿勢も身につける。
・批判的視点
・創造的意欲
・文章作成やコミュニケーションに必要なロジックとパッション

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期：授業前に教員が課した映画作品を鑑賞し、関連資料を読んでおく。授業ではそれらについて発表、意見交換
・秋学期：各自、テーマを設定し、研究／制作を進める。授業では、研究／制作報告、質疑応答、意見交換
・フィールドワーク：数回実施（例：映画鑑賞、舞台鑑賞、映画関連イベント参加・施設訪問など）
・研究成果：「ゼミ論文」または「映像作品」にまとめる。後者の場合は、制作過程に関するレポートも提出
・フィードバック：ゼミ論文、制作レポートは、提出後にコメントを付して返却

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	春学期オリエンテーション	・授業の概要説明 ・自己紹介
2	小沼勝『NAGISA』 資料：四方田、栗原	子供／音楽(1) ・子供を取り巻く格差（coming of age, delinquencyのモチーフと、日活映画の系譜） ・挿入歌の意味（次週に扱う資料を読む）
3	クリス・バック、ジェニファー・リー『アナと雪の女王』 資料：ジャクソン、栗原	子供／音楽(2) ・ディズニー映画が描く子供の世界 ・伴奏音楽の意味（前週との比較）
4	劇団四季『アナと雪の女王』（舞台鑑賞）	・映画版との違いを意識し、劇団四季版を劇場で鑑賞
5	ピーター・ウィアー『いまを生きる』 資料：秦	教育／演劇 ・古典教育と自由 ・演劇が教育に果たす役割
6	中原俊『櫻の園』（1990年版） 資料：赤枝	性／演劇 ・LGBTQやフェミニズムの枠に収まらない性への感受性 ・演劇が社会に果たす役割（「運動」「連帯」の観点から）
7	アニエス・ヴァルダ『冬の旅』 資料：小柳 参考映画1：ケリー・ライカート『ウェンディ＆ルーシー』 参考映画2: ハーモニー・コリン『ミスター・ロンリー』	性／自由 ・女性映画監督について ・自由と孤独（前週までに観た作品との比較や参考映画の紹介）
8	森崎東『ペコロスの母に会いに行く』 資料：ETV特集「記憶は愛である〜森崎東・忘却と闘う映画監督〜」 参考映画：原一男『さようならCP』、『ゆきゆきて神軍』	戦争／介護 ・戦争の記憶の継承（森崎自身の活動や思想、また参考映画と照合） ・弱者や高齢者の介護のあり方（日本の現状を調べ、参考映画と照合）
9	カーティス・ハンソン『イン・ハー・シューズ』 資料：トビーン	介護／障がい ・弱者や高齢者の介護のあり方（前週の作品と比較） ・姉妹の関係性、詩と音楽の意味
10	北野武『あの夏、いちばん静かな海。』 参考映画：劇団ひとり『浅草キッド』	障がい／貧困 ・障がい者の「声」と「身振り」（北野のコメディアンとしての経歴も踏まえ考察） ・貧困と社会の包摂性について（同じく海を舞台にした『NAGISA』との比較、また夏を背景にした本作と季節が対照的な『冬の旅』との比較）
11	アラン・パーカー『ザ・コミットメンツ』 資料：岩見 参考映画: ピーター・ミュラン『マグダレンの祈り』	貧困／人種 ・経済低迷期アイルランドにおける貧困の描写（カトリックおよび労働者階級という視点から、参考映画を紹介） ・音楽と人種（作品のモチーフとなるソウル・ミュージックを軸に、これまでに扱った作品との比較）
12	リドリー・スコット『エイリアン』 資料：赤尾	人種／まとめ ・異人種との邂逅 ・春学期に観た映画を総合的に振り返り、意見交換
13	ワークショップ(1)	・制作に関する諸活動(1)
14	題目発表〜OPEN	・研究テーマとアウトラインの発表（4年生） ・合宿の計画について共有（実施する場合） ・秋学期へ向けた準備の確認
15	秋学期オリエンテーション レクリエーション	・研究／制作計画書の提出と報告（3年生） ・ゼミ生が好きな映画を当てるゲーム
16	中間発表会	研究／制作の進捗発表（4年生）
17	進捗報告1回目(1)	研究／制作報告と意見交換(1)
18	進捗報告1回目(2)	研究／制作報告と意見交換(2)
19	進捗報告1回目(3)	研究／制作報告と意見交換(3)
20	進捗報告2回目(1)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
21	進捗報告2回目(2)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
22	進捗報告2回目(3)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
23	ワークショップ(2)	制作に関する諸活動(2)
24	ワークショップ(3)	制作に関わる諸活動(3)
25	進捗報告3回目(1)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
26	進捗報告3回目(2)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
27	進捗報告3回目(3)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
28	成果発表会	研究／制作の結論部分を発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業で扱わない映画作品も積極的に観る。
・自身の研究に関わる資料は積極的に読む。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・教科書は使用しない。授業で読む論文やエッセイ等はプリント配布する。従って教科書代は不要だが、作品鑑賞に伴うチケット料金・レンタル・配信サービス利用料が実費でかかる。

【参考書】
・赤枝香奈子「レズビアン青春映画としての『櫻の園』」菅野優香編著『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房）
・赤尾千波『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』改訂増補版（富山大学出版会）
・岩見寿子、宮地裕美子、前村敦『映画で語るアイルランド―幻想のケルトからリアルなアイルランドへ』（論創社）
・岩本憲児他編『新・映画理論集成〈1〉歴史・人種・ジェンダー』（フィルムアート社）

・打樋啓史、加納和寛、橋本祐樹監修『キリスト教で読み解く世界の映画』（キリスト教新聞社）
・栗原詩子「『アナと雪の女王』の音楽的有機性」『西南学院大学　国際文化論集』第29巻第2号、45-69頁。
・小柳帝『小柳帝のバビロン・ノート 映画についての覚書4ー女性映画監督を俯瞰する』、woolen press。
・佐藤唯行『映画で学ぶエスニック・アメリカ』（NTT出版）
・島田裕巳『ローマで王女が知ったことー映画が描く通過儀礼』（筑摩書房）
・秦由美子『映画で読み解くイギリスの名門校ーエリートを育てる思想・教育・マナー』（光文社新書）
・ビートたけし『浅草キッド』（講談社文庫）
・眠り猫「女子高のイエスー中原俊『櫻の園』」note. 2024年3月24日。
・村上靖彦『傷の哲学、レヴィナス』（河出書房新社）
・四方田犬彦『アジアのなかの日本映画』（岩波書店）
・渡辺幻、佐野亨編著『ゼロ年代アメリカ映画100』（芸術新聞社）
・『タブーこそを撃て！　原一男と疾走する映画たち』（キネマ旬報社）
・ゴックシク他『映画で実践！　アカデミック・ライティング』（小鳥遊書房）
・ジャクソン、キャシー・マーロック『アメリカ映画における子どものイメージー社会文化的分析』（東信堂）
・トビーン『エリザベス・ビショップ　悲しみと理性』（港の人）
・バックランド『フィルムスタディーズ入門』（晃洋書房）
・ベッテルハイム『昔話の魔力』（評論社）
・ボードウェル、トンプソン『フィルムアート　映画芸術入門』（名古屋大学出版会）
・ミシェル＝フロドン『映画と国民国家』（岩波書店）
・ライアン『Film Analysis 映画分析入門』（フィルムアート社）

【成績評価の方法と基準】
・授業への参加度（発表と発言）　40%
・提出物　20%
・研究成果（論文等）　40%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・特になし

【学生が準備すべき機器他】
・特になし

【その他の重要事項】
・国際文化情報学会への参加の有無は学生と相談して決める。
・授業で扱う作品は進行状況等により変更する場合があります。

【Outline (in English)】
・Course outline: In this seminar we study films for social observation. Film works are often intended to reflect their age and society; a detailed exploration of films enables us to see how society is shaped during a certain period. The seminar aims to develop our ability to examine films, as well as our way of looking at society through film analysis.
・Learning Objectives: By the end of this course, students will be able to examine the social and aesthetic aspects of moving images, so that they can analyze and criticize films, or they may even create original short films.
・Learning activities outside of the classroom: go to movies and read the recommended books listed in the "References".
・Grading Criteria/Policy: Class participation 40%, Mini-paper 20%, Final paper 40%. The minimum passing grade is 60%, which indicates that the student has achieved the learning objectives.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

深谷　公宣

サブタイトル：映画研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「映画からみる社会」をテーマとし、映画・映像作品の分析を行う。映画は時代や社会を反映している。作品分析により、時代や社会の有様が見えてくる。一年間の演習を通し、学生は映画作品分析力とそれに基づいた社会観察力を養う。

【到達目標】
(1)映画の社会的構成要素を検証できる。
(2)映画の美学的構成要素を検証できる。
(3)一次資料、二次資料を用いて作品分析を行い、そこから得た知見をもとに、研究発表や論文執筆、創作活動を行うことができる。
また、以上3点に付随して、次の力・姿勢も身につける。
・批判的視点
・創造的意欲
・文章作成やコミュニケーションに必要なロジックとパッション

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期：授業前に教員が課した映画作品を鑑賞し、関連資料を読んでおく。授業ではそれらについて発表、意見交換
・秋学期：各自、テーマを設定し、研究／制作を進める。授業では、研究／制作報告、質疑応答、意見交換
・フィールドワーク：数回実施（例：映画鑑賞、舞台鑑賞、映画関連イベント参加・施設訪問など）
・研究成果：「ゼミ論文」または「映像作品」にまとめる。後者の場合は、制作過程に関するレポートも提出
・フィードバック：ゼミ論文、制作レポートは、提出後にコメントを付して返却

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	春学期オリエンテーション	・授業の概要説明 ・自己紹介
2	小沼勝『NAGISA』 資料：四方田、栗原	子供／音楽(1) ・子供を取り巻く格差（coming of age, delinquencyのモチーフと、日活映画の系譜） ・挿入歌の意味（次週に扱う資料を読む）
3	クリス・バック、ジェニファー・リー『アナと雪の女王』 資料：ジャクソン、栗原	子供／音楽(2) ・ディズニー映画が描く子供の世界 ・伴奏音楽の意味（前週との比較）
4	劇団四季『アナと雪の女王』（舞台鑑賞）	・映画版との違いを意識し、劇団四季版を劇場で鑑賞
5	ピーター・ウィアー『いまを生きる』 資料：秦	教育／演劇 ・古典教育と自由 ・演劇が教育に果たす役割
6	中原俊『櫻の園』（1990年版） 資料：赤枝	性／演劇 ・LGBTQやフェミニズムの枠に収まらない性への感受性 ・演劇が社会に果たす役割（「運動」「連帯」の観点から）
7	アニエス・ヴァルダ『冬の旅』 資料：小柳 参考映画1：ケリー・ライカート『ウェンディ＆ルーシー』 参考映画2: ハーモニー・コリン『ミスター・ロンリー』	性／自由 ・女性映画監督について ・自由と孤独（前週までに観た作品との比較や参考映画の紹介）
8	森崎東『ペコロスの母に会いに行く』 資料：ETV特集「記憶は愛である〜森崎東・忘却と闘う映画監督〜」 参考映画：原一男『さようならCP』、『ゆきゆきて神軍』	戦争／介護 ・戦争の記憶の継承（森崎自身の活動や思想、また参考映画と照合） ・弱者や高齢者の介護のあり方（日本の現状を調べ、参考映画と照合）
9	カーティス・ハンソン『イン・ハー・シューズ』 資料：トビーン	介護／障がい ・弱者や高齢者の介護のあり方（前週の作品と比較） ・姉妹の関係性、詩と音楽の意味
10	北野武『あの夏、いちばん静かな海。』 参考映画：劇団ひとり『浅草キッド』	障がい／貧困 ・障がい者の「声」と「身振り」（北野のコメディアンとしての経歴も踏まえ考察） ・貧困と社会の包摂性について（同じく海を舞台にした『NAGISA』との比較、また夏を背景にした本作と季節が対照的な『冬の旅』との比較）
11	アラン・パーカー『ザ・コミットメンツ』 資料：岩見 参考映画: ピーター・ミュラン『マグダレンの祈り』	貧困／人種 ・経済低迷期アイルランドにおける貧困の描写（カトリックおよび労働者階級という視点から、参考映画を紹介） ・音楽と人種（作品のモチーフとなるソウル・ミュージックを軸に、これまでに扱った作品との比較）
12	リドリー・スコット『エイリアン』 資料：赤尾	人種／まとめ ・異人種との邂逅 ・春学期に観た映画を総合的に振り返り、意見交換
13	ワークショップ(1)	・制作に関する諸活動(1)
14	題目発表〜OPEN	・研究テーマとアウトラインの発表（4年生） ・合宿の計画について共有（実施する場合） ・秋学期へ向けた準備の確認
15	秋学期オリエンテーション レクリエーション	・研究／制作計画書の提出と報告（3年生） ・ゼミ生が好きな映画を当てるゲーム
16	中間発表会	研究／制作の進捗発表（4年生）
17	進捗報告1回目(1)	研究／制作報告と意見交換(1)
18	進捗報告1回目(2)	研究／制作報告と意見交換(2)
19	進捗報告1回目(3)	研究／制作報告と意見交換(3)
20	進捗報告2回目(1)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
21	進捗報告2回目(2)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
22	進捗報告2回目(3)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
23	ワークショップ(2)	制作に関する諸活動(2)
24	ワークショップ(3)	制作に関わる諸活動(3)
25	進捗報告3回目(1)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
26	進捗報告3回目(2)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
27	進捗報告3回目(3)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
28	成果発表会	研究／制作の結論部分を発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業で扱わない映画作品も積極的に観る。
・自身の研究に関わる資料は積極的に読む。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・教科書は使用しない。授業で読む論文やエッセイ等はプリント配布する。従って教科書代は不要だが、作品鑑賞に伴うチケット料金・レンタル・配信サービス利用料が実費でかかる。

【参考書】
・赤枝香奈子「レズビアン青春映画としての『櫻の園』」菅野優香編著『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房）
・赤尾千波『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』改訂増補版（富山大学出版会）
・岩見寿子、宮地裕美子、前村敦『映画で語るアイルランド―幻想のケルトからリアルなアイルランドへ』（論創社）
・岩本憲児他編『新・映画理論集成〈1〉歴史・人種・ジェンダー』（フィルムアート社）

・打樋啓史、加納和寛、橋本祐樹監修『キリスト教で読み解く世界の映画』（キリスト教新聞社）
・栗原詩子「『アナと雪の女王』の音楽的有機性」『西南学院大学　国際文化論集』第29巻第2号、45-69頁。
・小柳帝『小柳帝のバビロン・ノート 映画についての覚書4ー女性映画監督を俯瞰する』、woolen press。
・佐藤唯行『映画で学ぶエスニック・アメリカ』（NTT出版）
・島田裕巳『ローマで王女が知ったことー映画が描く通過儀礼』（筑摩書房）
・秦由美子『映画で読み解くイギリスの名門校ーエリートを育てる思想・教育・マナー』（光文社新書）
・ビートたけし『浅草キッド』（講談社文庫）
・眠り猫「女子高のイエスー中原俊『櫻の園』」note. 2024年3月24日。
・村上靖彦『傷の哲学、レヴィナス』（河出書房新社）
・四方田犬彦『アジアのなかの日本映画』（岩波書店）
・渡辺幻、佐野亨編著『ゼロ年代アメリカ映画100』（芸術新聞社）
・『タブーこそを撃て！　原一男と疾走する映画たち』（キネマ旬報社）
・ゴックシク他『映画で実践！　アカデミック・ライティング』（小鳥遊書房）
・ジャクソン、キャシー・マーロック『アメリカ映画における子どものイメージー社会文化的分析』（東信堂）
・トビーン『エリザベス・ビショップ　悲しみと理性』（港の人）
・バックランド『フィルムスタディーズ入門』（晃洋書房）
・ベッテルハイム『昔話の魔力』（評論社）
・ボードウェル、トンプソン『フィルムアート　映画芸術入門』（名古屋大学出版会）
・ミシェル＝フロドン『映画と国民国家』（岩波書店）
・ライアン『Film Analysis 映画分析入門』（フィルムアート社）

【成績評価の方法と基準】
・授業への参加度（発表と発言）　40%
・提出物　20%
・研究成果（論文等）　40%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・特になし

【学生が準備すべき機器他】
・特になし

【その他の重要事項】
・国際文化情報学会への参加の有無は学生と相談して決める。
・授業で扱う作品は進行状況等により変更する場合があります。

【Outline (in English)】
・Course outline: In this seminar we study films for social observation. Film works are often intended to reflect their age and society; a detailed exploration of films enables us to see how society is shaped during a certain period. The seminar aims to develop our ability to examine films, as well as our way of looking at society through film analysis.
・Learning Objectives: By the end of this course, students will be able to examine the social and aesthetic aspects of moving images, so that they can analyze and criticize films, or they may even create original short films.
・Learning activities outside of the classroom: go to movies and read the recommended books listed in the "References".
・Grading Criteria/Policy: Class participation 40%, Mini-paper 20%, Final paper 40%. The minimum passing grade is 60%, which indicates that the student has achieved the learning objectives.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

深谷　公宣

サブタイトル：映画研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「映画からみる社会」をテーマとし、映画・映像作品の分析を行う。映画は時代や社会を反映している。作品分析により、時代や社会の有様が見えてくる。一年間の演習を通し、学生は映画作品分析力とそれに基づいた社会観察力を養う。

【到達目標】
(1)映画の社会的構成要素を検証できる。
(2)映画の美学的構成要素を検証できる。
(3)一次資料、二次資料を用いて作品分析を行い、そこから得た知見をもとに、研究発表や論文執筆、創作活動を行うことができる。
また、以上3点に付随して、次の力・姿勢も身につける。
・批判的視点
・創造的意欲
・文章作成やコミュニケーションに必要なロジックとパッション

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期：授業前に教員が課した映画作品を鑑賞し、関連資料を読んでおく。授業ではそれらについて発表、意見交換
・秋学期：各自、テーマを設定し、研究／制作を進める。授業では、研究／制作報告、質疑応答、意見交換
・フィールドワーク：数回実施（例：映画鑑賞、舞台鑑賞、映画関連イベント参加・施設訪問など）
・研究成果：「ゼミ論文」または「映像作品」にまとめる。後者の場合は、制作過程に関するレポートも提出
・フィードバック：ゼミ論文、制作レポートは、提出後にコメントを付して返却

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	春学期オリエンテーション	・授業の概要説明 ・自己紹介
2	小沼勝『NAGISA』 資料：四方田、栗原	子供／音楽(1) ・子供を取り巻く格差（coming of age, delinquencyのモチーフと、日活映画の系譜） ・挿入歌の意味（次週に扱う資料を読む）
3	クリス・バック、ジェニファー・リー『アナと雪の女王』 資料：ジャクソン、栗原	子供／音楽(2) ・ディズニー映画が描く子供の世界 ・伴奏音楽の意味（前週との比較）
4	劇団四季『アナと雪の女王』（舞台鑑賞）	・映画版との違いを意識し、劇団四季版を劇場で鑑賞
5	ピーター・ウィアー『いまを生きる』 資料：秦	教育／演劇 ・古典教育と自由 ・演劇が教育に果たす役割
6	中原俊『櫻の園』（1990年版） 資料：赤枝	性／演劇 ・LGBTQやフェミニズムの枠に収まらない性への感受性 ・演劇が社会に果たす役割（「運動」「連帯」の観点から）
7	アニエス・ヴァルダ『冬の旅』 資料：小柳 参考映画1：ケリー・ライカート『ウェンディ＆ルーシー』 参考映画2: ハーモニー・コリン『ミスター・ロンリー』	性／自由 ・女性映画監督について ・自由と孤独（前週までに観た作品との比較や参考映画の紹介）
8	森崎東『ペコロスの母に会いに行く』 資料：ETV特集「記憶は愛である〜森崎東・忘却と闘う映画監督〜」 参考映画：原一男『さようならCP』、『ゆきゆきて神軍』	戦争／介護 ・戦争の記憶の継承（森崎自身の活動や思想、また参考映画と照合） ・弱者や高齢者の介護のあり方（日本の現状を調べ、参考映画と照合）
9	カーティス・ハンソン『イン・ハー・シューズ』 資料：トビーン	介護／障がい ・弱者や高齢者の介護のあり方（前週の作品と比較） ・姉妹の関係性、詩と音楽の意味
10	北野武『あの夏、いちばん静かな海。』 参考映画：劇団ひとり『浅草キッド』	障がい／貧困 ・障がい者の「声」と「身振り」（北野のコメディアンとしての経歴も踏まえ考察） ・貧困と社会の包摂性について（同じく海を舞台にした『NAGISA』との比較、また夏を背景にした本作と季節が対照的な『冬の旅』との比較）
11	アラン・パーカー『ザ・コミットメンツ』 資料：岩見 参考映画: ピーター・ミュラン『マグダレンの祈り』	貧困／人種 ・経済低迷期アイルランドにおける貧困の描写（カトリックおよび労働者階級という視点から、参考映画を紹介） ・音楽と人種（作品のモチーフとなるソウル・ミュージックを軸に、これまでに扱った作品との比較）
12	リドリー・スコット『エイリアン』 資料：赤尾	人種／まとめ ・異人種との邂逅 ・春学期に観た映画を総合的に振り返り、意見交換
13	ワークショップ(1)	・制作に関する諸活動(1)
14	題目発表〜OPEN	・研究テーマとアウトラインの発表（4年生） ・合宿の計画について共有（実施する場合） ・秋学期へ向けた準備の確認
15	秋学期オリエンテーション レクリエーション	・研究／制作計画書の提出と報告（3年生） ・ゼミ生が好きな映画を当てるゲーム
16	中間発表会	研究／制作の進捗発表（4年生）
17	進捗報告1回目(1)	研究／制作報告と意見交換(1)
18	進捗報告1回目(2)	研究／制作報告と意見交換(2)
19	進捗報告1回目(3)	研究／制作報告と意見交換(3)
20	進捗報告2回目(1)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
21	進捗報告2回目(2)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
22	進捗報告2回目(3)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
23	ワークショップ(2)	制作に関する諸活動(2)
24	ワークショップ(3)	制作に関わる諸活動(3)
25	進捗報告3回目(1)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
26	進捗報告3回目(2)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
27	進捗報告3回目(3)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
28	成果発表会	研究／制作の結論部分を発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業で扱わない映画作品も積極的に観る。
・自身の研究に関わる資料は積極的に読む。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・教科書は使用しない。授業で読む論文やエッセイ等はプリント配布する。従って教科書代は不要だが、作品鑑賞に伴うチケット料金・レンタル・配信サービス利用料が実費でかかる。

【参考書】
・赤枝香奈子「レズビアン青春映画としての『櫻の園』」菅野優香編著『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房）
・赤尾千波『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』改訂増補版（富山大学出版会）
・岩見寿子、宮地裕美子、前村敦『映画で語るアイルランド―幻想のケルトからリアルなアイルランドへ』（論創社）
・岩本憲児他編『新・映画理論集成〈1〉歴史・人種・ジェンダー』（フィルムアート社）

・打樋啓史、加納和寛、橋本祐樹監修『キリスト教で読み解く世界の映画』（キリスト教新聞社）
・栗原詩子「『アナと雪の女王』の音楽的有機性」『西南学院大学　国際文化論集』第29巻第2号、45-69頁。
・小柳帝『小柳帝のバビロン・ノート 映画についての覚書4ー女性映画監督を俯瞰する』、woolen press。
・佐藤唯行『映画で学ぶエスニック・アメリカ』（NTT出版）
・島田裕巳『ローマで王女が知ったことー映画が描く通過儀礼』（筑摩書房）
・秦由美子『映画で読み解くイギリスの名門校ーエリートを育てる思想・教育・マナー』（光文社新書）
・ビートたけし『浅草キッド』（講談社文庫）
・眠り猫「女子高のイエスー中原俊『櫻の園』」note. 2024年3月24日。
・村上靖彦『傷の哲学、レヴィナス』（河出書房新社）
・四方田犬彦『アジアのなかの日本映画』（岩波書店）
・渡辺幻、佐野亨編著『ゼロ年代アメリカ映画100』（芸術新聞社）
・『タブーこそを撃て！　原一男と疾走する映画たち』（キネマ旬報社）
・ゴックシク他『映画で実践！　アカデミック・ライティング』（小鳥遊書房）
・ジャクソン、キャシー・マーロック『アメリカ映画における子どものイメージー社会文化的分析』（東信堂）
・トビーン『エリザベス・ビショップ　悲しみと理性』（港の人）
・バックランド『フィルムスタディーズ入門』（晃洋書房）
・ベッテルハイム『昔話の魔力』（評論社）
・ボードウェル、トンプソン『フィルムアート　映画芸術入門』（名古屋大学出版会）
・ミシェル＝フロドン『映画と国民国家』（岩波書店）
・ライアン『Film Analysis 映画分析入門』（フィルムアート社）

【成績評価の方法と基準】
・授業への参加度（発表と発言）　40%
・提出物　20%
・研究成果（論文等）　40%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・特になし

【学生が準備すべき機器他】
・特になし

【その他の重要事項】
・国際文化情報学会への参加の有無は学生と相談して決める。
・授業で扱う作品は進行状況等により変更する場合があります。

【Outline (in English)】
・Course outline: In this seminar we study films for social observation. Film works are often intended to reflect their age and society; a detailed exploration of films enables us to see how society is shaped during a certain period. The seminar aims to develop our ability to examine films, as well as our way of looking at society through film analysis.
・Learning Objectives: By the end of this course, students will be able to examine the social and aesthetic aspects of moving images, so that they can analyze and criticize films, or they may even create original short films.
・Learning activities outside of the classroom: go to movies and read the recommended books listed in the "References".
・Grading Criteria/Policy: Class participation 40%, Mini-paper 20%, Final paper 40%. The minimum passing grade is 60%, which indicates that the student has achieved the learning objectives.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

深谷　公宣

サブタイトル：映画研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「映画からみる社会」をテーマとし、映画・映像作品の分析を行う。映画は時代や社会を反映している。作品分析により、時代や社会の有様が見えてくる。一年間の演習を通し、学生は映画作品分析力とそれに基づいた社会観察力を養う。

【到達目標】
(1)映画の社会的構成要素を検証できる。
(2)映画の美学的構成要素を検証できる。
(3)一次資料、二次資料を用いて作品分析を行い、そこから得た知見をもとに、研究発表や論文執筆、創作活動を行うことができる。
また、以上3点に付随して、次の力・姿勢も身につける。
・批判的視点
・創造的意欲
・文章作成やコミュニケーションに必要なロジックとパッション

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期：授業前に教員が課した映画作品を鑑賞し、関連資料を読んでおく。授業ではそれらについて発表、意見交換
・秋学期：各自、テーマを設定し、研究／制作を進める。授業では、研究／制作報告、質疑応答、意見交換
・フィールドワーク：数回実施（例：映画鑑賞、舞台鑑賞、映画関連イベント参加・施設訪問など）
・研究成果：「ゼミ論文」または「映像作品」にまとめる。後者の場合は、制作過程に関するレポートも提出
・フィードバック：ゼミ論文、制作レポートは、提出後にコメントを付して返却

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	春学期オリエンテーション	・授業の概要説明 ・自己紹介
2	小沼勝『NAGISA』 資料：四方田、栗原	子供／音楽(1) ・子供を取り巻く格差（coming of age, delinquencyのモチーフと、日活映画の系譜） ・挿入歌の意味（次週に扱う資料を読む）
3	クリス・バック、ジェニファー・リー『アナと雪の女王』 資料：ジャクソン、栗原	子供／音楽(2) ・ディズニー映画が描く子供の世界 ・伴奏音楽の意味（前週との比較）
4	劇団四季『アナと雪の女王』（舞台鑑賞）	・映画版との違いを意識し、劇団四季版を劇場で鑑賞
5	ピーター・ウィアー『いまを生きる』 資料：秦	教育／演劇 ・古典教育と自由 ・演劇が教育に果たす役割
6	中原俊『櫻の園』（1990年版） 資料：赤枝	性／演劇 ・LGBTQやフェミニズムの枠に収まらない性への感受性 ・演劇が社会に果たす役割（「運動」「連帯」の観点から）
7	アニエス・ヴァルダ『冬の旅』 資料：小柳 参考映画1：ケリー・ライカート『ウェンディ＆ルーシー』 参考映画2: ハーモニー・コリン『ミスター・ロンリー』	性／自由 ・女性映画監督について ・自由と孤独（前週までに観た作品との比較や参考映画の紹介）
8	森崎東『ペコロスの母に会いに行く』 資料：ETV特集「記憶は愛である〜森崎東・忘却と闘う映画監督〜」 参考映画：原一男『さようならCP』、『ゆきゆきて神軍』	戦争／介護 ・戦争の記憶の継承（森崎自身の活動や思想、また参考映画と照合） ・弱者や高齢者の介護のあり方（日本の現状を調べ、参考映画と照合）
9	カーティス・ハンソン『イン・ハー・シューズ』 資料：トビーン	介護／障がい ・弱者や高齢者の介護のあり方（前週の作品と比較） ・姉妹の関係性、詩と音楽の意味
10	北野武『あの夏、いちばん静かな海。』 参考映画：劇団ひとり『浅草キッド』	障がい／貧困 ・障がい者の「声」と「身振り」（北野のコメディアンとしての経歴も踏まえ考察） ・貧困と社会の包摂性について（同じく海を舞台にした『NAGISA』との比較、また夏を背景にした本作と季節が対照的な『冬の旅』との比較）
11	アラン・パーカー『ザ・コミットメンツ』 資料：岩見 参考映画: ピーター・ミュラン『マグダレンの祈り』	貧困／人種 ・経済低迷期アイルランドにおける貧困の描写（カトリックおよび労働者階級という視点から、参考映画を紹介） ・音楽と人種（作品のモチーフとなるソウル・ミュージックを軸に、これまでに扱った作品との比較）
12	リドリー・スコット『エイリアン』 資料：赤尾	人種／まとめ ・異人種との邂逅 ・春学期に観た映画を総合的に振り返り、意見交換
13	ワークショップ(1)	・制作に関する諸活動(1)
14	題目発表〜OPEN	・研究テーマとアウトラインの発表（4年生） ・合宿の計画について共有（実施する場合） ・秋学期へ向けた準備の確認
15	秋学期オリエンテーション レクリエーション	・研究／制作計画書の提出と報告（3年生） ・ゼミ生が好きな映画を当てるゲーム
16	中間発表会	研究／制作の進捗発表（4年生）
17	進捗報告1回目(1)	研究／制作報告と意見交換(1)
18	進捗報告1回目(2)	研究／制作報告と意見交換(2)
19	進捗報告1回目(3)	研究／制作報告と意見交換(3)
20	進捗報告2回目(1)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
21	進捗報告2回目(2)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
22	進捗報告2回目(3)	1回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
23	ワークショップ(2)	制作に関する諸活動(2)
24	ワークショップ(3)	制作に関わる諸活動(3)
25	進捗報告3回目(1)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(1)
26	進捗報告3回目(2)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(2)
27	進捗報告3回目(3)	2回目の進捗報告を踏まえて、研究／制作報告と意見交換(3)
28	成果発表会	研究／制作の結論部分を発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業で扱わない映画作品も積極的に観る。
・自身の研究に関わる資料は積極的に読む。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・教科書は使用しない。授業で読む論文やエッセイ等はプリント配布する。従って教科書代は不要だが、作品鑑賞に伴うチケット料金・レンタル・配信サービス利用料が実費でかかる。

【参考書】
・赤枝香奈子「レズビアン青春映画としての『櫻の園』」菅野優香編著『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房）
・赤尾千波『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』改訂増補版（富山大学出版会）
・岩見寿子、宮地裕美子、前村敦『映画で語るアイルランド―幻想のケルトからリアルなアイルランドへ』（論創社）
・岩本憲児他編『新・映画理論集成〈1〉歴史・人種・ジェンダー』（フィルムアート社）

・打樋啓史、加納和寛、橋本祐樹監修『キリスト教で読み解く世界の映画』（キリスト教新聞社）
・栗原詩子「『アナと雪の女王』の音楽的有機性」『西南学院大学　国際文化論集』第29巻第2号、45-69頁。
・小柳帝『小柳帝のバビロン・ノート 映画についての覚書4ー女性映画監督を俯瞰する』、woolen press。
・佐藤唯行『映画で学ぶエスニック・アメリカ』（NTT出版）
・島田裕巳『ローマで王女が知ったことー映画が描く通過儀礼』（筑摩書房）
・秦由美子『映画で読み解くイギリスの名門校ーエリートを育てる思想・教育・マナー』（光文社新書）
・ビートたけし『浅草キッド』（講談社文庫）
・眠り猫「女子高のイエスー中原俊『櫻の園』」note. 2024年3月24日。
・村上靖彦『傷の哲学、レヴィナス』（河出書房新社）
・四方田犬彦『アジアのなかの日本映画』（岩波書店）
・渡辺幻、佐野亨編著『ゼロ年代アメリカ映画100』（芸術新聞社）
・『タブーこそを撃て！　原一男と疾走する映画たち』（キネマ旬報社）
・ゴックシク他『映画で実践！　アカデミック・ライティング』（小鳥遊書房）
・ジャクソン、キャシー・マーロック『アメリカ映画における子どものイメージー社会文化的分析』（東信堂）
・トビーン『エリザベス・ビショップ　悲しみと理性』（港の人）
・バックランド『フィルムスタディーズ入門』（晃洋書房）
・ベッテルハイム『昔話の魔力』（評論社）
・ボードウェル、トンプソン『フィルムアート　映画芸術入門』（名古屋大学出版会）
・ミシェル＝フロドン『映画と国民国家』（岩波書店）
・ライアン『Film Analysis 映画分析入門』（フィルムアート社）

【成績評価の方法と基準】
・授業への参加度（発表と発言）　40%
・提出物　20%
・研究成果（論文等）　40%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・特になし

【学生が準備すべき機器他】
・特になし

【その他の重要事項】
・国際文化情報学会への参加の有無は学生と相談して決める。
・授業で扱う作品は進行状況等により変更する場合があります。

【Outline (in English)】
・Course outline: In this seminar we study films for social observation. Film works are often intended to reflect their age and society; a detailed exploration of films enables us to see how society is shaped during a certain period. The seminar aims to develop our ability to examine films, as well as our way of looking at society through film analysis.
・Learning Objectives: By the end of this course, students will be able to examine the social and aesthetic aspects of moving images, so that they can analyze and criticize films, or they may even create original short films.
・Learning activities outside of the classroom: go to movies and read the recommended books listed in the "References".
・Grading Criteria/Policy: Class participation 40%, Mini-paper 20%, Final paper 40%. The minimum passing grade is 60%, which indicates that the student has achieved the learning objectives.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

竹内　晶子

サブタイトル：比較文化・比較演劇
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較演劇・比較文化
「ジェンダー」と「越境」が一年を通してのテーマです。作品・コンテンツ・文化が「越境」していく際に、どのような困難を乗り越えるのか、またどのような可能性を切り開いていくのか、またその現象・作品を分析する際にどのようなアプローチが可能なのかを、理論と実践的な作品分析を通じて学んで行きます。また、テーマとアプローチを設定し、先行研究をおさえて、新たな知見を盛り込んだ論文を執筆する手法も、学期を通じて学んでいきます。
キーワード：ジェンダー、日本表象、アダプテーション、影響・受容関係、演劇、映画、アニメ、ミュージカル、宝塚歌劇、マンガ、バレエ

【到達目標】
・ジェンダーに関する基本的な知識を身に付ける。
・舞台作品や漫画を分析するための、基本的な理論的枠組みを理解する。
・上記の考え方を使って、具体的な作品分析ができるようになる。
・異なるジャンルの作品間の比較文化的な分析ができるようになる。
・先行研究を踏まえて、緻密なテクスト分析にもとづいた、客観的かつ説得力をもった論文を書くことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、講義と演習形式を組み合わせて進めます。それぞれの理論を学んでから、実際にテクスト分析をし、性別や国境、言語などの「境界」や「越境」がどのようなところに表れているのかを議論します。加えて、関連する論文の講読を通して、授業では補いきれないテクスト分析の方法や論理的な文章の書き方を学びます。
秋学期も講義・購読・演習形式を組み合わせます。基本的な演劇理論、漫画理論を学んだ後、様々な演出の違いや、ジャンルをまたいだ翻案作品の分析を実際に試みます。戯曲からバレエ（複数バージョン）、映画（複数バージョン）、ミュージカルという異なるジャンルで展開された「ロミオとジュリエット」、漫画からアニメ、舞台へと展開した「ブルーロック」を取り上げる予定。また授業概でも、できるかぎり様々なジャンルの舞台に足を運ぶ予定。両学期ともに、学生には各自研究発表と期末論文を課します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
2	象徴としての女性像：エバ	テキスト講読とディスカッション
3	象徴としての女性像：マリア	テクスト講読とディスカッション
4	象徴としての女性像：ユーディット	テキスト講読とディスカッション
5	ビジュアル・イメージとしての女	テクスト講読とディスカッション
6	テレビドラマの家族史	テクスト講読とディスカッション
7	日本のポピュラー音楽とジェンダー　I	テキスト講読
8	日本のポピュラー音楽とジェンダー II	作品分析
9	2.5次元ミュージカル　I	テキスト講読
10	2.5次元ミュージカル II	作品分析
11	BL文化論 I	テキスト講読
12	ＢＬ文化論 II	作品分析
13	学生発表（１）	期末論文中間発表
14	学生発表（２）	期末論文中間発表
15	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
16	個人研究発表 I	4年生
17	個人研究発表 II	4年生
18	共同研究発表　I	3年生
19	共同研究発表 II	3年生
20	共同研究発表 III	3年生
21	個人研究発表　IV	4年生
22	個人研究発表　V	4年生
23	個人研究発表 VI	国際文化情報学会における個人研究発表の予行演習
24	共同研究発表 IV	国際文化情報学会における共同研究発表の予行演習
25	個人研究発表 VII	3年生
26	個人研究発表 VIII	3年生
27	個人研究発表 IX	3年生
28	まとめ	総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業内での発表や期末論文に向けた調査・原稿の執筆と推敲
・授業の中で出される課題への取り組み
・本授業の準備・復習時間は、4時間を目安とします。

【テキスト（教科書）】
・必要な資料は、授業中に配布します。

【参考書】
・ウェルカー、ジェームズ編『ＢＬが開く扉　変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社、2019年。
・落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川学芸出版、2000年。
・北川純子編『鳴り響く〈性〉－日本のポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房、1999年。
・須川亜紀子『2.5次元文化論　舞台・キャラクター・ファンダム』青弓社、2021年。
・毛利三彌『演劇の詩学　劇上演の構造分析』相田書房、2007年。
・若桑みどり『象徴としての女性像　ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』筑摩書房、2000年。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（議論など）　40％
・課題提出と発表 20％
・期末論文　40％

【学生の意見等からの気づき】
取り上げる論文や作品は、ゼミ参加者の関心に応じて微調整します。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Comparative Theatre and Culture
"Gender" and“Crossing Borders" are the year-long themes of this seminar. Through the study of theories and hands-on analysis of works, students will acquire the ability to analyze works that overcome various "borders" such as language, culture, nationality, genre, and gender, from multiple perspectives.
Keywords: gender, adaptation, orientalism, representations of Japan, theatre, films, animation, musicals, Takarazuka Revue, manga, and ballet.
【Learning Objectives】
Students will learn how to compare and analyze plays of various theatrical traditions and genres.
【Learning Activities outside of Classroom】
We plan to go to see various types of plays.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading Criteria/Policy】
Assignments and participation in class discussion: 40%
Presentations: 20%
term paper: 40%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

竹内　晶子

サブタイトル：比較文化・比較演劇
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較演劇・比較文化
「ジェンダー」と「越境」が一年を通してのテーマです。作品・コンテンツ・文化が「越境」していく際に、どのような困難を乗り越えるのか、またどのような可能性を切り開いていくのか、またその現象・作品を分析する際にどのようなアプローチが可能なのかを、理論と実践的な作品分析を通じて学んで行きます。また、テーマとアプローチを設定し、先行研究をおさえて、新たな知見を盛り込んだ論文を執筆する手法も、学期を通じて学んでいきます。
キーワード：ジェンダー、日本表象、アダプテーション、影響・受容関係、演劇、映画、アニメ、ミュージカル、宝塚歌劇、マンガ、バレエ

【到達目標】
・ジェンダーに関する基本的な知識を身に付ける。
・舞台作品や漫画を分析するための、基本的な理論的枠組みを理解する。
・上記の考え方を使って、具体的な作品分析ができるようになる。
・異なるジャンルの作品間の比較文化的な分析ができるようになる。
・先行研究を踏まえて、緻密なテクスト分析にもとづいた、客観的かつ説得力をもった論文を書くことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、講義と演習形式を組み合わせて進めます。それぞれの理論を学んでから、実際にテクスト分析をし、性別や国境、言語などの「境界」や「越境」がどのようなところに表れているのかを議論します。加えて、関連する論文の講読を通して、授業では補いきれないテクスト分析の方法や論理的な文章の書き方を学びます。
秋学期も講義・購読・演習形式を組み合わせます。基本的な演劇理論、漫画理論を学んだ後、様々な演出の違いや、ジャンルをまたいだ翻案作品の分析を実際に試みます。戯曲からバレエ（複数バージョン）、映画（複数バージョン）、ミュージカルという異なるジャンルで展開された「ロミオとジュリエット」、漫画からアニメ、舞台へと展開した「ブルーロック」を取り上げる予定。また授業概でも、できるかぎり様々なジャンルの舞台に足を運ぶ予定。両学期ともに、学生には各自研究発表と期末論文を課します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
2	象徴としての女性像：エバ	テキスト講読とディスカッション
3	象徴としての女性像：マリア	テクスト講読とディスカッション
4	象徴としての女性像：ユーディット	テキスト講読とディスカッション
5	ビジュアル・イメージとしての女	テクスト講読とディスカッション
6	テレビドラマの家族史	テクスト講読とディスカッション
7	日本のポピュラー音楽とジェンダー　I	テキスト講読
8	日本のポピュラー音楽とジェンダー II	作品分析
9	2.5次元ミュージカル　I	テキスト講読
10	2.5次元ミュージカル II	作品分析
11	BL文化論 I	テキスト講読
12	ＢＬ文化論 II	作品分析
13	学生発表（１）	期末論文中間発表
14	学生発表（２）	期末論文中間発表
15	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
16	個人研究発表 I	4年生
17	個人研究発表 II	4年生
18	共同研究発表　I	3年生
19	共同研究発表 II	3年生
20	共同研究発表 III	3年生
21	個人研究発表　IV	4年生
22	個人研究発表　V	4年生
23	個人研究発表 VI	国際文化情報学会における個人研究発表の予行演習
24	共同研究発表 IV	国際文化情報学会における共同研究発表の予行演習
25	個人研究発表 VII	3年生
26	個人研究発表 VIII	3年生
27	個人研究発表 IX	3年生
28	まとめ	総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業内での発表や期末論文に向けた調査・原稿の執筆と推敲
・授業の中で出される課題への取り組み
・本授業の準備・復習時間は、4時間を目安とします。

【テキスト（教科書）】
・必要な資料は、授業中に配布します。

【参考書】
・ウェルカー、ジェームズ編『ＢＬが開く扉　変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社、2019年。
・落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川学芸出版、2000年。
・北川純子編『鳴り響く〈性〉－日本のポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房、1999年。
・須川亜紀子『2.5次元文化論　舞台・キャラクター・ファンダム』青弓社、2021年。
・毛利三彌『演劇の詩学　劇上演の構造分析』相田書房、2007年。
・若桑みどり『象徴としての女性像　ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』筑摩書房、2000年。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（議論など）　40％
・課題提出と発表 20％
・期末論文　40％

【学生の意見等からの気づき】
取り上げる論文や作品は、ゼミ参加者の関心に応じて微調整します。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Comparative Theatre and Culture
"Gender" and“Crossing Borders" are the year-long themes of this seminar. Through the study of theories and hands-on analysis of works, students will acquire the ability to analyze works that overcome various "borders" such as language, culture, nationality, genre, and gender, from multiple perspectives.
Keywords: gender, adaptation, orientalism, representations of Japan, theatre, films, animation, musicals, Takarazuka Revue, manga, and ballet.
【Learning Objectives】
Students will learn how to compare and analyze plays of various theatrical traditions and genres.
【Learning Activities outside of Classroom】
We plan to go to see various types of plays.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading Criteria/Policy】
Assignments and participation in class discussion: 40%
Presentations: 20%
term paper: 40%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

竹内　晶子

サブタイトル：比較文化・比較演劇
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較演劇・比較文化
「ジェンダー」と「越境」が一年を通してのテーマです。作品・コンテンツ・文化が「越境」していく際に、どのような困難を乗り越えるのか、またどのような可能性を切り開いていくのか、またその現象・作品を分析する際にどのようなアプローチが可能なのかを、理論と実践的な作品分析を通じて学んで行きます。また、テーマとアプローチを設定し、先行研究をおさえて、新たな知見を盛り込んだ論文を執筆する手法も、学期を通じて学んでいきます。
キーワード：ジェンダー、日本表象、アダプテーション、影響・受容関係、演劇、映画、アニメ、ミュージカル、宝塚歌劇、マンガ、バレエ

【到達目標】
・ジェンダーに関する基本的な知識を身に付ける。
・舞台作品や漫画を分析するための、基本的な理論的枠組みを理解する。
・上記の考え方を使って、具体的な作品分析ができるようになる。
・異なるジャンルの作品間の比較文化的な分析ができるようになる。
・先行研究を踏まえて、緻密なテクスト分析にもとづいた、客観的かつ説得力をもった論文を書くことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、講義と演習形式を組み合わせて進めます。それぞれの理論を学んでから、実際にテクスト分析をし、性別や国境、言語などの「境界」や「越境」がどのようなところに表れているのかを議論します。加えて、関連する論文の講読を通して、授業では補いきれないテクスト分析の方法や論理的な文章の書き方を学びます。
秋学期も講義・購読・演習形式を組み合わせます。基本的な演劇理論、漫画理論を学んだ後、様々な演出の違いや、ジャンルをまたいだ翻案作品の分析を実際に試みます。戯曲からバレエ（複数バージョン）、映画（複数バージョン）、ミュージカルという異なるジャンルで展開された「ロミオとジュリエット」、漫画からアニメ、舞台へと展開した「ブルーロック」を取り上げる予定。また授業概でも、できるかぎり様々なジャンルの舞台に足を運ぶ予定。両学期ともに、学生には各自研究発表と期末論文を課します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
2	象徴としての女性像：エバ	テキスト講読とディスカッション
3	象徴としての女性像：マリア	テクスト講読とディスカッション
4	象徴としての女性像：ユーディット	テキスト講読とディスカッション
5	ビジュアル・イメージとしての女	テクスト講読とディスカッション
6	テレビドラマの家族史	テクスト講読とディスカッション
7	日本のポピュラー音楽とジェンダー　I	テキスト講読
8	日本のポピュラー音楽とジェンダー II	作品分析
9	2.5次元ミュージカル　I	テキスト講読
10	2.5次元ミュージカル II	作品分析
11	BL文化論 I	テキスト講読
12	ＢＬ文化論 II	作品分析
13	学生発表（１）	期末論文中間発表
14	学生発表（２）	期末論文中間発表
15	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
16	個人研究発表 I	4年生
17	個人研究発表 II	4年生
18	共同研究発表　I	3年生
19	共同研究発表 II	3年生
20	共同研究発表 III	3年生
21	個人研究発表　IV	4年生
22	個人研究発表　V	4年生
23	個人研究発表 VI	国際文化情報学会における個人研究発表の予行演習
24	共同研究発表 IV	国際文化情報学会における共同研究発表の予行演習
25	個人研究発表 VII	3年生
26	個人研究発表 VIII	3年生
27	個人研究発表 IX	3年生
28	まとめ	総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業内での発表や期末論文に向けた調査・原稿の執筆と推敲
・授業の中で出される課題への取り組み
・本授業の準備・復習時間は、4時間を目安とします。

【テキスト（教科書）】
・必要な資料は、授業中に配布します。

【参考書】
・ウェルカー、ジェームズ編『ＢＬが開く扉　変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社、2019年。
・落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川学芸出版、2000年。
・北川純子編『鳴り響く〈性〉－日本のポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房、1999年。
・須川亜紀子『2.5次元文化論　舞台・キャラクター・ファンダム』青弓社、2021年。
・毛利三彌『演劇の詩学　劇上演の構造分析』相田書房、2007年。
・若桑みどり『象徴としての女性像　ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』筑摩書房、2000年。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（議論など）　40％
・課題提出と発表 20％
・期末論文　40％

【学生の意見等からの気づき】
取り上げる論文や作品は、ゼミ参加者の関心に応じて微調整します。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Comparative Theatre and Culture
"Gender" and“Crossing Borders" are the year-long themes of this seminar. Through the study of theories and hands-on analysis of works, students will acquire the ability to analyze works that overcome various "borders" such as language, culture, nationality, genre, and gender, from multiple perspectives.
Keywords: gender, adaptation, orientalism, representations of Japan, theatre, films, animation, musicals, Takarazuka Revue, manga, and ballet.
【Learning Objectives】
Students will learn how to compare and analyze plays of various theatrical traditions and genres.
【Learning Activities outside of Classroom】
We plan to go to see various types of plays.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading Criteria/Policy】
Assignments and participation in class discussion: 40%
Presentations: 20%
term paper: 40%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

竹内　晶子

サブタイトル：比較文化・比較演劇
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較演劇・比較文化
「ジェンダー」と「越境」が一年を通してのテーマです。作品・コンテンツ・文化が「越境」していく際に、どのような困難を乗り越えるのか、またどのような可能性を切り開いていくのか、またその現象・作品を分析する際にどのようなアプローチが可能なのかを、理論と実践的な作品分析を通じて学んで行きます。また、テーマとアプローチを設定し、先行研究をおさえて、新たな知見を盛り込んだ論文を執筆する手法も、学期を通じて学んでいきます。
キーワード：ジェンダー、日本表象、アダプテーション、影響・受容関係、演劇、映画、アニメ、ミュージカル、宝塚歌劇、マンガ、バレエ

【到達目標】
・ジェンダーに関する基本的な知識を身に付ける。
・舞台作品や漫画を分析するための、基本的な理論的枠組みを理解する。
・上記の考え方を使って、具体的な作品分析ができるようになる。
・異なるジャンルの作品間の比較文化的な分析ができるようになる。
・先行研究を踏まえて、緻密なテクスト分析にもとづいた、客観的かつ説得力をもった論文を書くことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、講義と演習形式を組み合わせて進めます。それぞれの理論を学んでから、実際にテクスト分析をし、性別や国境、言語などの「境界」や「越境」がどのようなところに表れているのかを議論します。加えて、関連する論文の講読を通して、授業では補いきれないテクスト分析の方法や論理的な文章の書き方を学びます。
秋学期も講義・購読・演習形式を組み合わせます。基本的な演劇理論、漫画理論を学んだ後、様々な演出の違いや、ジャンルをまたいだ翻案作品の分析を実際に試みます。戯曲からバレエ（複数バージョン）、映画（複数バージョン）、ミュージカルという異なるジャンルで展開された「ロミオとジュリエット」、漫画からアニメ、舞台へと展開した「ブルーロック」を取り上げる予定。また授業概でも、できるかぎり様々なジャンルの舞台に足を運ぶ予定。両学期ともに、学生には各自研究発表と期末論文を課します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
2	象徴としての女性像：エバ	テキスト講読とディスカッション
3	象徴としての女性像：マリア	テクスト講読とディスカッション
4	象徴としての女性像：ユーディット	テキスト講読とディスカッション
5	ビジュアル・イメージとしての女	テクスト講読とディスカッション
6	テレビドラマの家族史	テクスト講読とディスカッション
7	日本のポピュラー音楽とジェンダー　I	テキスト講読
8	日本のポピュラー音楽とジェンダー II	作品分析
9	2.5次元ミュージカル　I	テキスト講読
10	2.5次元ミュージカル II	作品分析
11	BL文化論 I	テキスト講読
12	ＢＬ文化論 II	作品分析
13	学生発表（１）	期末論文中間発表
14	学生発表（２）	期末論文中間発表
15	イントロダクション	授業内容の紹介と説明
16	個人研究発表 I	4年生
17	個人研究発表 II	4年生
18	共同研究発表　I	3年生
19	共同研究発表 II	3年生
20	共同研究発表 III	3年生
21	個人研究発表　IV	4年生
22	個人研究発表　V	4年生
23	個人研究発表 VI	国際文化情報学会における個人研究発表の予行演習
24	共同研究発表 IV	国際文化情報学会における共同研究発表の予行演習
25	個人研究発表 VII	3年生
26	個人研究発表 VIII	3年生
27	個人研究発表 IX	3年生
28	まとめ	総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業内での発表や期末論文に向けた調査・原稿の執筆と推敲
・授業の中で出される課題への取り組み
・本授業の準備・復習時間は、4時間を目安とします。

【テキスト（教科書）】
・必要な資料は、授業中に配布します。

【参考書】
・ウェルカー、ジェームズ編『ＢＬが開く扉　変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社、2019年。
・落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川学芸出版、2000年。
・北川純子編『鳴り響く〈性〉－日本のポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房、1999年。
・須川亜紀子『2.5次元文化論　舞台・キャラクター・ファンダム』青弓社、2021年。
・毛利三彌『演劇の詩学　劇上演の構造分析』相田書房、2007年。
・若桑みどり『象徴としての女性像　ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』筑摩書房、2000年。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（議論など）　40％
・課題提出と発表 20％
・期末論文　40％

【学生の意見等からの気づき】
取り上げる論文や作品は、ゼミ参加者の関心に応じて微調整します。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Comparative Theatre and Culture
"Gender" and“Crossing Borders" are the year-long themes of this seminar. Through the study of theories and hands-on analysis of works, students will acquire the ability to analyze works that overcome various "borders" such as language, culture, nationality, genre, and gender, from multiple perspectives.
Keywords: gender, adaptation, orientalism, representations of Japan, theatre, films, animation, musicals, Takarazuka Revue, manga, and ballet.
【Learning Objectives】
Students will learn how to compare and analyze plays of various theatrical traditions and genres.
【Learning Activities outside of Classroom】
We plan to go to see various types of plays.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading Criteria/Policy】
Assignments and participation in class discussion: 40%
Presentations: 20%
term paper: 40%

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

林　志津江

サブタイトル：ポップ・カルチャー／ポピュラー音楽の系譜
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
あなたは自分の「好み」に関する自覚を持っていますか。あなたの日常を彩るSNSなどのメディアを通じて、あなたは誰と何を共有し、誰に向けて何を伝えようとしているのでしょう？ 私たちが「〜を好き」な者同士で「繋がれる」と思ってしまうのはなぜでしょうか。私たちの生きる社会において、音楽は時に熱狂や共感を誘う原動力であり続けてきました。ロック、ポップス、パンク、ソウル、ヒップホップ、アイドル、J-POP、K-POP、アニソン、EDM、テクノ＆レイヴ、エレクトロニカ、アンビエント・・・。この演習で主に扱うのは、「集う」「嗜好する」文化の典型であるポピュラー音楽とポップ・カルチャーの諸形式です。嗜好とそれに関するコミュニケーション行為を通じて、人々は「つながり」「アイデンティティ」「共感」などの感情に出逢います。この演習では、音楽やポップ・カルチャーの成立要素を分析しながら、インターネットやSNSをめぐる諸現象、流行の諸形式やファンダムの行動様式など、文化とメディアを通して見える社会のあり方にするどく迫ります。

【到達目標】
・あらゆる美的形式（音楽、映像、文学、ダンス、舞台、マンガ、アニメ、ゲーム、造形芸術、その他何でも）に軽やかにアクセスできる、自分が「いい」と思えるものを追いかけるフットワークを持てること。
・メディアの構造やポピュラー音楽の基本構成要素、モダニズムの形式に関する知識を得て、批判的な洞察を行うことができる。
・文化研究の諸概念、「記憶」「世代」「身体」「アイデンティティ」「文化受容」等の概念の意味、ポップ・カルチャー（拡大芸術）の歴史的展開を理解することができる。
・ポピュラー音楽／ポップ・カルチャーという現象の特質や、個々の作品やシーンに関するテーマで、論理的に明解でまとまった自分のテーゼを提示できる。
・良い観察者、良いリスナーになれる。ミュージシャン／作曲家と批評家の関係、正当な批評とは何か、芸術批評は印象批評を超えることができるのか、多様化する芸術形式をめぐる問題について思考できる。
・芸術と政治・社会との関わりとその困難に対し、誠実な想像力を持つことができ、それに関する自身の思考を言語化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習形式です。両学期とも輪読と研究発表を並行して進めます。
・参加者は授業終了後に「振り返り」コメントを提出します。提出されたコメントに対し、次回授業時にサマリー形式でフィードバックを行います。
・参加者は各学期必ず研究発表を行います。
・春学期は、輪読を通じてポピュラー音楽をめぐる概念と通史にアプローチするとともに研究発表のトライアルを行います。秋学期は春学期の内容を深めつつ自身のテーマで研究発表に挑戦します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション―「ポピュラー音楽」と「ポップカルチャー」	研究発表の分担決定、「音楽」「文化」について日頃感じていること、「ポピュラー音楽」じゃない音楽って何？ ポピュラー音楽とポップカルチャー
2	【第１部：リズム】（第１章）ヒット曲が持つ「４つの条件」	「ヒット曲」とは？、ヒット曲の「４つの条件」、リズムと「ヒット曲」の関係
3	（第２章）「リズム」	「ビート」と「リズム」、「テンポ」とBPM、音価の表現性、「グルーヴ」と「スウィング」
4	（第３章）リズムの生命力	「裏切りのリズム」、感情とテンポ、ボーカルとシンコペーションの関係、フレーズ・リズム・拍
5	（第４章・第５章）リズムの魅力と一体感	「リズム」が作り出す魅力と「気持ちよさ」というダイナミクス、「わかりやすさ」、変拍子あるいは繰り返しクラーベとシンコペーション、歌詞とフィットするリズム、表現、言葉とリズム、リズムの表現する「世界」
6	（第６章）リズムの恩恵	音楽がもたらす恩恵とは？「まとまり」の話、リズムと「意味」、リズムと「型」、「整った」リズム
7	（第７章）まとめー「４つの条件」の実践	「４つの条件」を兼ね備えた歌：「もっと聴きたい」、「一体感」、ドラムとベースが誘う世界、リズムと「４つの条件」
8	【第２部：音楽と社会①】音楽と社会（１）―テクノロジーの夜明け	大量生産・大量消費時代の幕開け、著作権とレコード（フォノグラフ、グラモフォン）の誕生
9	音楽と社会（２）―技術革新とメディアの変容	戦争とラジオとマイクロフォン、映画館とダンスホール、ジャズ・エイジの到来、楽曲形式（２）
10	音楽と社会（３）―若者・階級・音楽	余暇の誕生、中産階級の産み出した若者世代、ラジオと「音楽番組」
11	音楽と社会（４）―新しいメディア・新しい音楽	大量消費社会と「アメリカ」の時代、「ティーンエイジャー」の誕生とロックンロール
12	音楽と社会（５）―ラジオとテレビと映画と音楽	「スター」を求めて、音楽番組のための音楽、「LPレコード」と「ドーナツ盤（45回転シングル）」
13	【第３部：音楽と社会②】人種と階級（１）―音楽が社会を変革する？	ロックンロールからロックへ、フォークソングとビートニク、「レイス」から「ソウル」へ
14	人種と階級（２）―カウンターカルチャーの台頭	「追っかけ」という人々、ロックの市場価値、FMラジオとヒットチャート、ヴェトナム戦争と音楽フェスティバル
15	人種と階級（３）―「抵抗の証」が一大文化産業になる	「ポップ戦略」とブリティッシュ・インヴェイジョン、「アートスクール」から世界へ
16	人種と階級（４）―労働者階級の誇りと人間の尊厳	「パンクはアティテュードだ」、スカとレゲエの存在理由、「ソウル」から「ファンク」へ

17	人種と階級（5）— レイヴ・ドラッグ・インディーズ、サンプリングあるいは冷戦の終結	「バンドエイド」の真実、「舞台の下で」つながる、クラブとレイヴ／DJというアーティスト、ヒップ・ホップという生き方、ハウス／テクノが興隆する理由
18	人種と階級（6）— ダンスと音楽とMTV、見る音楽とセクシュアリティの関係	疲弊する工業都市の文化、ディスコと「見る音楽」、「女性ロックミュージシャン」という職業
19	日本のポピュラー音楽（1）—「日本のロック」— 洋楽VS.邦楽	グループサウンズと「アメリカ」、ロックかフォークか？「はっぴいえんど」の登場と「日本」というコンテンツ
20	日本のポピュラー音楽（2）—「ガラパゴス化」の起源・記号化するアイドル	歌謡曲とニュー・ミュージック、「テレビに出ない」、「清く正しく美しい」スターたち
21	日本のポピュラー音楽（3）— J-POPとバンドとインストアライブ、「スター」から「推し」の時代へ	アイドルの「オタク」、「渋谷系」と蒐集する文化、Wi-fiとYoutube、iTunesからストリーミングへ、会いに行けるアイドルとK-POPの目指す世界
22	【第4部】研究発表（1）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
23	研究発表（2）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
24	研究発表（3）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
25	研究発表（4）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
26	研究発表（5）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
27	研究発表（6）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
28	研究発表（7）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・自分にとって楽しめるもの、興味のあるもの／ことに没頭して、知識と経験を増やすこと。
・各自に必要な文献を読み、研究発表の準備のための資料にアクセスすること。
・自分にとって大切な外国語（もちろんSA先言語を含む）をしっかり勉強すること。
・毎日活字に目を通す、特に日刊紙を読むこと。
・あなたの日常そのものが、あなたの選ぶ学びのテーマにつながっています。この演習に参加した経験が、充実した日々の営みとなり、自分の人生の糧となることに自信を持ってください。
・自分が何かを大切に思っていること、人と話す時間を愛しんでください。あらゆることに積極的にチャレンジして、心揺さぶられる体験にたくさんめぐりあってください。

【テキスト（教科書）】

・毛利嘉孝『ポピュラー音楽と資本主義 増補』（せりか書房）2012年
・西兼志『アイドル／メディア論講義』（東京大学出版会）2017年
・長崎励朗『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学: 愉しい音楽の語り方』（創元社）2021年
・ドクター・キャピタル『ヒット曲のリズムの秘密』（集英社インターナショナル）2022年

【参考書】

・マーシャル・マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年
・ヴァルター・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（1）』（筑摩書房、1995年/1996年所収）
・Th.-W. アドルノ（三光長治・高辻知義訳）『不協和音 — 管理社会における音楽』（平凡社）1998年／Th.-W. アドルノ（高辻知義・渡辺健訳）『音楽社会学序説』（平凡社）1999年
・J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『象徴交換と死』（筑摩書房）1992年／J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『消費社会の神話と構造 新装版』（紀伊国屋書店）2015年
・ギー・ドゥボール（木下誠訳）『スペクタクルの社会』（筑摩書房）2003年
・セリーナ・トッド（近藤康裕訳）『ザ・ピープル イギリス労働者階級の盛衰』（みすず書房）2016年
・ヨッヘン・ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年
・ポール・ブルーム（大橋洋訳）『反共感論』（白揚社）2018年
・ピエール・ブルデュー（石井洋二郎役）『ディスタンクシオン〈普及版〉I〔社会的判断力批判』『ディスタンクシオン〈普及版〉II〔社会的判断力批判〕』（藤原書店）2020年
・ティム・インゴルド（奥野克己・鹿野マティアス訳）『世代とは何か』（亜紀書房）2024年
・池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論』（講談社）1994年
・見田宗介『現代社会の理論: 情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波書店）1996年
・北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か: 不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』（書肆侃侃房）2019年
・今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』（中央公論新社）2023年
・小倉孝誠（編）『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社）2023年
***
・ヘンリー・プレザンツ（片岡義男訳）『音楽の革命 — バロック・ジャズ・ビートルズ』（晶文社）1971年
・サイモン・フリス（細川周平・竹田賢一訳）『サウンドの力 — 若者・余暇・ロックの政治学』（晶文社）1991年
・ディック・ヘブディジ（山口淑子訳）『サブカルチャー スタイルの意味するもの』（未来社）1986/1999年
・スーザン・マクレアリ（女性と音楽研究フォーラム訳）『フェミニン・エンディング　音楽・ジェンダー・セクシュアリティ』（新水社）1997年
・ピーター・ファン＝デル＝マーヴェ（中村とうよう訳／横関裕子・守屋純子協力）『ポピュラー音楽の基礎理論』（ミュージックマガジン社）1999年
・ジェイソン・トインビー（安田昌弘訳）『ポピュラー音楽をつくる — ミュージシャン・創造性・制度』（みすず書房）2004年
・ウルフ・ポーシャルト（原克訳）『DJカルチャー　ポップカルチャーの思想史』（三元社）2004年
・ニール・ガブラー（中谷和男訳）『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』（ダイヤモンド社）2007年
・クリストファー・スモール（野澤豊一・西島千尋訳）『ミュージッキング — 音楽は"行為"である』（水声社）2011年
・ジェフ・チャン／DJクール・ハーク（押野素子訳）『ヒップホップ・ジェネレーション（新装版）』（リットー・ミュージック）2016年
・スティーヴン・ウィット（関美和訳）『誰が音楽をタダにした? — 巨大産業をぶっ潰した男たち』（早川書房）2016/2018年
・ゾーイ・フラード＝ブラナー／アーロン・M・グレイザー（関美和訳）『ファンダム・レボリューション — SNS時代の新たな熱狂』（早川書房）2017年
・キム・ヨンデ（桑畑優香訳）『BTSを読む　なぜ世界を夢中にさせるのか』（柏書房）2020年
・マシュー・コリン（坂本真理子訳）『レイヴ・カルチャー エクスタシー文化とアシッド・ハウスの物語』（Pヴァイン）2021年
・ジェイソン・ドーシー／デニス・ヴィラ（門脇弘典訳）『Z世代マーケティング 世界を激変させるニュー・ノーマル』（ハーパーコリンズ ジャパン）2021年
・チャ・ミンジュ（桑畑優香訳）『BTSを哲学する』（かんき出版）2022年
・J. D. ・ヴァンス（関根光宏・山田文訳）『ヒルビリー・エレジー〜アメリカの繁栄から取り残された白人たち〜』（光文社）2022年
・アーロン・コーエン（夏目大訳）『シカゴ・ソウルはどう世界を変えたのか — 黒人文化運動と音楽ビジネスの変革史』（亜紀書房）2023年
・ポール・ゴーマン（川田倫代訳）『評伝　マルコム・マクラーレン』（イースト・プレス）2024年
・ビル・ブルースター／フランク・ブロートン（島田陽子ほか訳）『そして、みんなクレイジーになっていく DJカルチャーとクラブ・ミュージックの100年史（増補改訂版）』（DU Books）2024年
・スーザン・ロジャース／オギ・オーガス（中川泉訳）『あなたがあの曲を好きなわけ:「音楽の好み」がわかる七つの要素』（化学同人）2024年
・アンガス・フレッチャー（田畑暁生訳）『世界はナラティブでできている: なぜ物語思考が重要なのか』（青土社）2024年

・アレックス・ニヴン（中村明美訳）『オアシスの階級闘争《Definitely Maybe》で読み解く、音楽とポピュリズム』（DU BOOKS）2025年
・見田宗介『近代日本の心情の歴史 — 流行歌の社会心理史』（講談社）1978年
・小泉文夫『日本の音 世界のなかの日本音楽』（青土社）1978年／（平凡社）1994/2017年
・小泉文夫『歌謡曲の構造』（冬樹社）1984年／（平凡社）1996年
・池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店）1984年
・中村とうよう『大衆音楽の真実』（ミュージックマガジン社）1985年
・小川博司『音楽する社会』（勁草書房）1988年
・渡辺裕『聴衆の誕生 — ポスト・モダン時代の音楽文化』（中央公論新社）1989年
・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』（岩波書店）1999年
・渡辺潤『アイデンティティの音楽 メディア、若者、ポピュラー文化』（世界思想社）2000年
・東浩紀『動物化するポストモダン — オタクから見た日本社会』（講談社）2001年
・東谷護（編著）『ポピュラー音楽へのまなざし』（勁草書房）2003年
・竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中央公論新社）2003年
・生明俊雄『ポピュラー音楽は誰が作るのか — 音楽産業の政治学』（勁草書房）2004年
・烏賀陽弘道『J-POPとは何か — 巨大化する音楽産業』（岩波書店）2005年
・増田聡『聴衆をつくる — 音楽批評の解体文法』（青土社）2006年
・行川和彦『パンク・ロック/ハードコア史』（リットー・ミュージック）2007年
・東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生　動物化するポストモダン２』（講談社）2007年
・大塚英志／東浩紀『リアルのゆくえ — おたく オタクはどう生きるか』（講談社）2008年
・宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房）2008/2011年
・大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店）2008年
・森正人『大衆音楽史: ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』（中央公論新社）2008年
・菊池清麿『日本流行歌変遷史 — 歌謡曲の誕生からJ・ポップの時代へ』（論創社）2008年
・前川洋一郎（編著）『カラオケ進化論』（廣済堂）2009年
・上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか — 教育と音楽の大衆社会史』2010年
・輪島裕介『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光文社）2010年
・長谷川町蔵・大和田俊之『文化系のヒップホップ入門』（アルテスパブリッシング）2011年
・太田省一『アイドル進化論 — 南沙織から初音ミク、AKB 48まで』（筑摩書房）2011年
・大野佐紀子『アーティスト症候群 — アートと職人、クリエーターと芸能人』（河出書房新社）2011年
・大和田俊之『アメリカ音楽史 — ミンストレル・ショウ・ブルースからヒップホップまで』（講談社）2011年
・ピーター・バラカン『ピーターバラカン音楽日記』（集英社インターナショナル）2011年
・宮本直美『宝塚ファンの社会学: スターは劇場の外で作られる』（青弓社）2011年
・斎藤環『承認をめぐる病』（日本評論社）2013年
・小泉恭子『メモリースケープ あの頃を思い出す音楽』（みすず書房）2013年
・南田勝也『オルタナティヴロックの社会学』（花伝社）2014年
・マキタスポーツ『すべてのJ-POPはパクリである ― 現代ポップス論考』（扶桑社）2014年
・ブレイディみかこ『ザ・レフト — UK左翼セレブ列伝』（Pヴァイン）2014年
・柴那典『初音ミクはなぜ世界を変えたのか？』（太田出版）2014年
・佐々木敦『ニッポンの音楽』（講談社）2014年
・東園子『宝塚・やおい・愛の読み替え — 女性とポピュラーカルチャーの社会学』（新曜社）2015年
・鈴木惣一郎『細野晴臣 録音術』（DU Books）2015年
・輪島裕介『踊る昭和歌謡 リズムからみる大衆音楽』（NHK出版）2015年
・太田省一『ジャニーズの正体 エンターテインメントの戦後史』（双葉社）2016年
・柴那典『ヒットの崩壊』（講談社）2016年
・ピーター・バラカン『ロックの英詩を読む — 世界を変える歌』（集英社インターナショナル）2016年
・谷口昭弘『ディズニー・ミュージック〜ディズニー映画 音楽の秘密』（スタイルノート）2016年
・石田英敬『大人のためのメディア論講義』（筑摩書房）2016年
・菊池清麿『昭和演歌の歴史: その群像と時代』（アルファベータブックス）2017年
・谷口ヨシキ『暗黒ディズニー入門』（コアマガジン）2017年
・中川和亮『ライブ・エンタテインメントの社会学 — イベントにおける「受け手（Participants）」のリアリティ』（五絃舎）2017年
・若尾裕『サステナブル・ミュージック』（アルテスパブリッシング）2017年
・山田陽一『響きあう身体: 音楽・グルーヴ・憑依』（春秋社）2017年
・牧村憲一・藤井丈司・柴那典『渋谷音楽図鑑』（太田出版）2017年
・毛利嘉孝（編著）他『アフター・ミュージッキング』（東京藝術大学出版会）2017年
・ジェームス・M・バーダマン／里中哲彦『はじめてのアメリカ音楽史』（筑摩書房）2018年
・金成玟『K-Pop — 新感覚のメディア』（岩波書店）2018年
・田中雄二『エレベーター・ミュージック・イン・ジャパン 日本のBGMの歴史』（DU Books）2018年
・田中雄二『AKB48とニッポンのロック〜秋元康アイドルビジネス論』（スモール出版）2018年
・藤井丈司『YMOのONGAKU』（アルテスパブリッシング）2019年
・ピーター・バラカン『新版 魂（ソウル）のゆくえ』（アルテスパブリッシング）2019年
・大谷能生『平成日本の音楽の教科書』（新曜社）2019年
・近田春夫『考えるヒット テーマはジャニーズ』（スモール出版）2019年
・山下壮起『ヒップホップ・レザレクション — ラップミュージックとキリスト教』（新教出版社）2019年
・ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）2019年
・石田英敬『記号論講義 — 日常生活批判のためのレッスン』（筑摩書房）2020年
・岡田暁生『音楽の危機 —《第九》が歌えなくなった日』（中公公論新社）2020年
・日比野啓『アメリカン・ミュージカルとその時代』（青土社）2020年
・大和田俊之・柳樂光隆・南田勝也『ポップ・ミュージックを語る10の視点』（アルテスパブリッシング）2020年
・國分功一郎／熊谷晋一郎『< 責任> の生成 — 中動態と当事者研究』（新曜社）2020年
・木村元『音楽が本になるとき: 聴くこと・読むこと・語らうこと』（木立の文庫）2020年
・瀬崎圭二『関西フォークとその時代: 声の対抗文化と現代詩』（青弓社）2021年
・延江浩『松本隆 言葉の教室』（マガジンハウス）2021年
・田家秀樹『風街とデラシネ　作詞家・松本隆の50年』（角川書店）2021年
・大和田俊之『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）2021年
・宮本直美『ミュージカルの歴史 — なぜ突然歌いだすのか』（中央公論新社）2022年
・永冨真梨・忠聡太・日高良祐（編）『クリティカル・ワード　ポピュラー音楽〈聴く〉を広げる・更新する』（フィルムアート社）2023年
・高増明（編）『ポピュラー音楽の社会経済学［第２版］』（ナカニシヤ出版）2023年
・木石岳『歌詞のサウンドテクスチャー うたをめぐる音声詞学論考』（白水社）2023年
・川崎大助『教養としてのパンク・ロック』（光文社）2023年
・田淵俊彦『混沌時代の新・テレビ論』（ポプラ社）2024年
・川上幸之介『パンクの系譜学』（書肆侃侃房）2024年
・小島智『検証・80年代日本のロック』（アルファベータブックス）2024年
・伊藤浩介『脳と音楽』（世界文化社）2024年
・宇野常寛『庭の話』（講談社）2024年
・輪島祐介・永冨真梨（編）『入門ポピュラー音楽の文化史：〈戦後日本〉を読み直す』（ミネルヴァ書房）2024年
・日高良祐（編）柴那典ほか（著）『シティ・ポップ文化論』（フィルムアート社）2024年

・喜多村雄一『報道しないメディア ― ジャニーズ性加害問題をめぐって』（岩波書店）2025年
・南田勝也『ライブミュージックの社会学』（青弓社）2025年
・野田努『完全版 ブラック・マシン・ミュージック ディスコ、ハウス、デトロイト・テクノ（上）／（下）』（河出書房新社）2025年
・難波優輝『物語化批判の哲学 〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（講談社）2025年
・鈴木貴歩『音楽ビジネス』（クロスメディア・パブリッシング）2025年
・南田勝也『ロックミュージックの社会学 決定版』（青弓社）2026年
その他適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
【２・３年生】（春学期）研究発表作成・プレゼンテーション・議論への貢献50％、レポート50％を基本ラインとし、授業への参加・貢献を総合的に判断します。（秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
【４年生】（春・秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生からの意見ヒアリングは逐次行い、意志の疎通と内容改善につとめます。

【その他の重要事項】
・夏季休暇中ないしその前後に、フィールドワーク（音楽フェス・音楽ライブ体験）とその事前・事後学習を行う予定です。
・フィールドワークは基本的に全員参加です。かかる費用は一人（一回）数千円～２万円程度、オンラインならその1/3～1/2程度で無料配信のものも数多くあります（この点に不安がある場合はぜひ担当者に事前に相談して下さるとありがたいです）。
・「教科書」の扱い方・詳細の大凡は、演習説明会ならびに各学期初回授業時に説明します。
・音楽を聴く習慣がある、音楽が「好き」という自覚のある方の参加はもちろん大歓迎です。しかし本演習は、そうでなければ参加できない場所では全くありません。演習の最大の目的は、興味がない人同士が議論しあえる場所であることです。
・自分の研究テーマについては、本演習の近接分野を自由に選んで構いません。一般的に「ポピュラー音楽」の範疇には入らない、古典的西洋音楽の形態（クラシック音楽）へのアプローチも可能です。
・音楽学（楽典、音楽理論）やデジタル音楽技術についての知識は特に必要ありませんが、それがあればより楽しめるテーマもありえます。また平易な音楽理論は楽曲分析に必要ですが、そこは発表者の説明次第で、参加者の誰もが理解できるはずです。
・音楽コンテンツを制作するという演習ではありません。
・本演習は、芸術談義・音楽談義を繰り広げる場ではなく、むしろそうした談義的文化の背景にあるもの、嗜好品と社会とのかかわり、アイデンティティを構成するものとしての排他性について考える場所です。よって演習で鍛えられるのは「誰もがわかる言葉で事柄を説明できる能力」の方であり、知識の量で相手を圧倒するような態度は評価の対象外です。
・メディア技術の発展のおかげで、今や音楽は最も安価（＝タダ同然で手に入るように思えるもの）なコンテンツのひとつになりました。演習ではもちろんそうした現象についても批判的な検討を試みますが、著作権は絶対に守って下さい。もちろん音楽以外の著作権についても同様です。

【Outline (in English)】
This course deals with pop culture as well as impact of COVID-19 on the cultural and creative sectors especially popular music like Rock, Pops, Punk, Hip-Hop, EDM, House/Techno/Rave, J-Pop/Idol or K-Pop etc.; how "bring us together"-culture like popular music should/could be with "new normal"? It also enhances recognition of their forming condition in our society along with relationship between art and people. The participants are expected to explain basic concepts of modern art, pop culture, popular music and media studies. They are also expected to be able to evaluate or explain changes in the media environment and its influences into art and culture related with our dairy life. The aims of this seminar are to be able to discuss and imagine not-understandable actual situation of our living world and to realize how complex the relationship is between art/culture and politics by which our dairy lives are affected unconsciously. The key words of this seminar are: "media"/"technologies", "empathy"/"sympathy", "sense of unity", "body" and "identity". The participants are evaluated through presentations, writing reports and discussion each times.
【Grading Criteria /Policy】
2nd and 3rd year students
Report assignment:50％
Research Presentation and contribution to discussion in the class;50％
4th year students
Report assignment;40％
Research presentation and contribution to discussion in the class;60％
Preparatory study and review time for this class are 2 hours.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

林　志津江

サブタイトル：ポップ・カルチャー／ポピュラー音楽の系譜
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
あなたは自分の「好み」に関する自覚を持っていますか。あなたの日常を彩るSNSなどのメディアを通じて、あなたは誰と何を共有し、誰に向けて何を伝えようとしているのでしょう？ 私たちが「〜を好き」な者同士で「繋がれる」と思ってしまうのはなぜでしょうか。私たちの生きる社会において、音楽は時に熱狂や共感を誘う原動力であり続けてきました。ロック、ポップス、パンク、ソウル、ヒップホップ、アイドル、J-POP、K-POP、アニソン、EDM、テクノ＆レイヴ、エレクトロニカ、アンビエント・・・。この演習で主に扱うのは、「集う」「嗜好する」文化の典型であるポピュラー音楽とポップ・カルチャーの諸形式です。嗜好とそれに関するコミュニケーション行為を通じて、人々は「つながり」「アイデンティティ」「共感」などの感情に出逢います。この演習では、音楽やポップ・カルチャーの成立要素を分析しながら、インターネットやSNSをめぐる諸現象、流行の諸形式やファンダムの行動様式など、文化とメディアを通して見える社会のあり方にするどく迫ります。

【到達目標】
・あらゆる美的形式（音楽、映像、文学、ダンス、舞台、マンガ、アニメ、ゲーム、造形芸術、その他何でも）に軽やかにアクセスできる、自分が「いい」と思えるものを追いかけるフットワークを持てること。
・メディアの構造やポピュラー音楽の基本構成要素、モダニズムの形式に関する知識を得て、批判的な洞察を行うことができる。
・文化研究の諸概念、「記憶」「世代」「身体」「アイデンティティ」「文化受容」等の概念の意味、ポップ・カルチャー（拡大芸術）の歴史的展開を理解することができる。
・ポピュラー音楽／ポップ・カルチャーという現象の特質や、個々の作品やシーンに関するテーマで、論理的に明解でまとまった自分のテーゼを提示できる。
・良い観察者、良いリスナーになれる。ミュージシャン／作曲家と批評家の関係、正当な批評とは何か、芸術批評は印象批評を超えることができるのか、多様化する芸術形式をめぐる問題について思考できる。
・芸術と政治・社会との関わりとその困難に対し、誠実な想像力を持つことができ、それに関する自身の思考を言語化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習形式です。両学期とも輪読と研究発表を並行して進めます。
・参加者は授業終了後に「振り返り」コメントを提出します。提出されたコメントに対し、次回授業時にサマリー形式でフィードバックを行います。
・参加者は各学期必ず研究発表を行います。
・春学期は、輪読を通じてポピュラー音楽をめぐる概念と通史にアプローチするとともに研究発表のトライアルを行います。秋学期は春学期の内容を深めつつ自身のテーマで研究発表に挑戦します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション―「ポピュラー音楽」と「ポップカルチャー」	研究発表の分担決定、「音楽」「文化」について日頃感じていること、「ポピュラー音楽」じゃない音楽って何？ ポピュラー音楽とポップカルチャー
2	【第１部：リズム】（第１章）ヒット曲が持つ「４つの条件」	「ヒット曲」とは？、ヒット曲の「４つの条件」、リズムと「ヒット曲」の関係
3	（第２章）「リズム」	「ビート」と「リズム」、「テンポ」とBPM、音価の表現性、「グルーヴ」と「スウィング」
4	（第３章）リズムの生命力	「裏切りのリズム」、感情とテンポ、ボーカルとシンコペーションの関係、フレーズ・リズム・拍
5	（第４章・第５章）リズムの魅力と一体感	「リズム」が作り出す魅力と「気持ちよさ」というダイナミクス、「わかりやすさ」、変拍子あるいは繰り返しクラーベとシンコペーション、歌詞とフィットするリズム、表現、言葉とリズム、リズムの表現する「世界」
6	（第６章）リズムの恩恵	音楽がもたらす恩恵とは？「まとまり」の話、リズムと「意味」、リズムと「型」、「整った」リズム
7	（第７章）まとめー「４つの条件」の実践	「４つの条件」を兼ね備えた歌：「もっと聴きたい」、「一体感」、ドラムとベースが誘う世界、リズムと「４つの条件」
8	【第２部：音楽と社会①】音楽と社会（１）―テクノロジーの夜明け	大量生産・大量消費時代の幕開け、著作権とレコード（フォノグラフ、グラモフォン）の誕生
9	音楽と社会（２）―技術革新とメディアの変容	戦争とラジオとマイクロフォン、映画館とダンスホール、ジャズ・エイジの到来、楽曲形式（２）
10	音楽と社会（３）―若者・階級・音楽	余暇の誕生、中産階級の産み出した若者世代、ラジオと「音楽番組」
11	音楽と社会（４）―新しいメディア・新しい音楽	大量消費社会と「アメリカ」の時代、「ティーンエイジャー」の誕生とロックンロール
12	音楽と社会（５）―ラジオとテレビと映画と音楽	「スター」を求めて、音楽番組のための音楽、「LPレコード」と「ドーナツ盤（45回転シングル）」
13	【第３部：音楽と社会②】人種と階級（１）―音楽が社会を変革する？	ロックンロールからロックへ、フォークソングとビートニク、「レイス」から「ソウル」へ
14	人種と階級（２）―カウンターカルチャーの台頭	「追っかけ」という人々、ロックの市場価値、FMラジオとヒットチャート、ヴェトナム戦争と音楽フェスティバル
15	人種と階級（３）―「抵抗の証」が一大文化産業になる	「ポップ戦略」とブリティッシュ・インヴェイジョン、「アートスクール」から世界へ
16	人種と階級（４）―労働者階級の誇りと人間の尊厳	「パンクはアティテュードだ」、スカとレゲエの存在理由、「ソウル」から「ファンク」へ

17	人種と階級（5）— レイヴ・ドラッグ・インディーズ、サンプリングあるいは冷戦の終結	「バンドエイド」の真実、「舞台の下で」つながる、クラブとレイヴ／DJというアーティスト、ヒップ・ホップという生き方、ハウス／テクノが興隆する理由
18	人種と階級（6）— ダンスと音楽とMTV、見る音楽とセクシュアリティの関係	疲弊する工業都市の文化、ディスコと「見る音楽」、「女性ロックミュージシャン」という職業
19	日本のポピュラー音楽（1）—「日本のロック」— 洋楽VS.邦楽	グループサウンズと「アメリカ」、ロックかフォークか？「はっぴいえんど」の登場と「日本」というコンテンツ
20	日本のポピュラー音楽（2）—「ガラパゴス化」の起源・記号化するアイドル	歌謡曲とニュー・ミュージック、「テレビに出ない」、「清く正しく美しい」スターたち
21	日本のポピュラー音楽（3）— J-POPとバンドとインストアライブ、「スター」から「推し」の時代へ	アイドルの「オタク」、「渋谷系」と蒐集する文化、Wi-fiとYoutube、iTunesからストリーミングへ、会いに行けるアイドルとK-POPの目指す世界
22	【第4部】研究発表（1）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
23	研究発表（2）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
24	研究発表（3）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
25	研究発表（4）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
26	研究発表（5）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
27	研究発表（6）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
28	研究発表（7）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・自分にとって楽しめるもの、興味のあるもの／ことに没頭して、知識と経験を増やすこと。
・各自に必要な文献を読み、研究発表の準備のための資料にアクセスすること。
・自分にとって大切な外国語（もちろんSA先言語を含む）をしっかり勉強すること。
・毎日活字に目を通す、特に日刊紙を読むこと。
・あなたの日常そのものが、あなたの選ぶ学びのテーマにつながっています。この演習に参加した経験が、充実した日々の営みとなり、自分の人生の糧となることに自信を持ってください。
・自分が何かを大切に思っていること、人と話す時間を愛しんでください。あらゆることに積極的にチャレンジして、心揺さぶられる体験にたくさんめぐりあってください。

【テキスト（教科書）】

・毛利嘉孝『ポピュラー音楽と資本主義 増補』（せりか書房）2012年
・西兼志『アイドル／メディア論講義』（東京大学出版会）2017年
・長崎励朗『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学: 愉しい音楽の語り方』（創元社）2021年
・ドクター・キャピタル『ヒット曲のリズムの秘密』（集英社インターナショナル）2022年

【参考書】

・マーシャル・マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年
・ヴァルター・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（1）』（筑摩書房、1995年/1996年所収）
・Th.-W. アドルノ（三光長治・高辻知義訳）『不協和音 — 管理社会における音楽』（平凡社）1998年／Th.-W. アドルノ（高辻知義・渡辺健訳）『音楽社会学序説』（平凡社）1999年
・J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『象徴交換と死』（筑摩書房）1992年／J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『消費社会の神話と構造 新装版』（紀伊国屋書店）2015年
・ギー・ドゥボール（木下誠訳）『スペクタクルの社会』（筑摩書房）2003年
・セリーナ・トッド（近藤康裕訳）『ザ・ピープル イギリス労働者階級の盛衰』（みすず書房）2016年
・ヨッヘン・ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年
・ポール・ブルーム（大橋洋訳）『反共感論』（白揚社）2018年
・ピエール・ブルデュー（石井洋二郎役）『ディスタンクシオン〈普及版〉I〔社会的判断力批判』『ディスタンクシオン〈普及版〉II〔社会的判断力批判〕』（藤原書店）2020年
・ティム・インゴルド（奥野克己・鹿野マティアス訳）『世代とは何か』（亜紀書房）2024年
・池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論』（講談社）1994年
・見田宗介『現代社会の理論: 情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波書店）1996年
・北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か: 不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』（書肆侃侃房）2019年
・今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』（中央公論新社）2023年
・小倉孝誠（編）『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社）2023年
***
・ヘンリー・プレザンツ（片岡義男訳）『音楽の革命 — バロック・ジャズ・ビートルズ』（晶文社）1971年
・サイモン・フリス（細川周平・竹田賢一訳）『サウンドの力 — 若者・余暇・ロックの政治学』（晶文社）1991年
・ディック・ヘブディジ（山口淑子訳）『サブカルチャー スタイルの意味するもの』（未来社）1986/1999年
・スーザン・マクレアリ（女性と音楽研究フォーラム訳）『フェミニン・エンディング　音楽・ジェンダー・セクシュアリティ』（新水社）1997年
・ピーター・ファン＝デル＝マーヴェ（中村とうよう訳／横関裕子・守屋純子協力）『ポピュラー音楽の基礎理論』（ミュージックマガジン社）1999年
・ジェイソン・トインビー（安田昌弘訳）『ポピュラー音楽をつくる — ミュージシャン・創造性・制度』（みすず書房）2004年
・ウルフ・ポーシャルト（原克訳）『DJカルチャー　ポップカルチャーの思想史』（三元社）2004年
・ニール・ガブラー（中谷和男訳）『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』（ダイヤモンド社）2007年
・クリストファー・スモール（野澤豊一・西島千尋訳）『ミュージッキング — 音楽は"行為"である』（水声社）2011年
・ジェフ・チャン／DJクール・ハーク（押野素子訳）『ヒップホップ・ジェネレーション（新装版）』（リットー・ミュージック）2016年
・スティーヴン・ウィット（関美和訳）『誰が音楽をタダにした? — 巨大産業をぶっ潰した男たち』（早川書房）2016/2018年
・ゾーイ・フラード＝ブラナー／アーロン・M・グレイザー（関美和訳）『ファンダム・レボリューション — SNS時代の新たな熱狂』（早川書房）2017年
・キム・ヨンデ（桑畑優香訳）『BTSを読む　なぜ世界を夢中にさせるのか』（柏書房）2020年
・マシュー・コリン（坂本真理子訳）『レイヴ・カルチャー エクスタシー文化とアシッド・ハウスの物語』（Pヴァイン）2021年
・ジェイソン・ドーシー／デニス・ヴィラ（門脇弘典訳）『Z世代マーケティング 世界を激変させるニュー・ノーマル』（ハーパーコリンズ ジャパン）2021年
・チャ・ミンジュ（桑畑優香訳）『BTSを哲学する』（かんき出版）2022年
・J. D. ・ヴァンス（関根光宏・山田文訳）『ヒルビリー・エレジー〜アメリカの繁栄から取り残された白人たち〜』（光文社）2022年
・アーロン・コーエン（夏目大訳）『シカゴ・ソウルはどう世界を変えたのか — 黒人文化運動と音楽ビジネスの変革史』（亜紀書房）2023年
・ポール・ゴーマン（川田倫代訳）『評伝　マルコム・マクラーレン』（イースト・プレス）2024年
・ビル・ブルースター／フランク・ブロートン（島田陽子ほか訳）『そして、みんなクレイジーになっていく DJカルチャーとクラブ・ミュージックの100年史（増補改訂版）』（DU Books）2024年
・スーザン・ロジャース／オギ・オーガス（中川泉訳）『あなたがあの曲を好きなわけ:「音楽の好み」がわかる七つの要素』（化学同人）2024年
・アンガス・フレッチャー（田畑暁生訳）『世界はナラティブでできている: なぜ物語思考が重要なのか』（青土社）2024年

・アレックス・ニヴン（中村明美訳）『オアシスの階級闘争《Definitely Maybe》で読み解く、音楽とポピュリズム』（DU BOOKS）2025年
・見田宗介『近代日本の心情の歴史 — 流行歌の社会心理史』（講談社）1978年
・小泉文夫『日本の音 世界のなかの日本音楽』（青土社）1978年／（平凡社）1994/2017年
・小泉文夫『歌謡曲の構造』（冬樹社）1984年／（平凡社）1996年
・池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店）1984年
・中村とうよう『大衆音楽の真実』（ミュージックマガジン社）1985年
・小川博司『音楽する社会』（勁草書房）1988年
・渡辺裕『聴衆の誕生 — ポスト・モダン時代の音楽文化』（中央公論新社）1989年
・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』（岩波書店）1999年
・渡辺潤『アイデンティティの音楽 メディア、若者、ポピュラー文化』（世界思想社）2000年
・東浩紀『動物化するポストモダン — オタクから見た日本社会』（講談社）2001年
・東谷護（編著）『ポピュラー音楽へのまなざし』（勁草書房）2003年
・竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中央公論新社）2003年
・生明俊雄『ポピュラー音楽は誰が作るのか — 音楽産業の政治学』（勁草書房）2004年
・烏賀陽弘道『J-POPとは何か — 巨大化する音楽産業』（岩波書店）2005年
・増田聡『聴衆をつくる — 音楽批評の解体文法』（青土社）2006年
・行川和彦『パンク・ロック/ハードコア史』（リットー・ミュージック）2007年
・東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生　動物化するポストモダン２』（講談社）2007年
・大塚英志／東浩紀『リアルのゆくえ — おたく オタクはどう生きるか』（講談社）2008年
・宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房）2008/2011年
・大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店）2008年
・森正人『大衆音楽史: ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』（中央公論新社）2008年
・菊池清麿『日本流行歌変遷史 — 歌謡曲の誕生からJ・ポップの時代へ』（論創社）2008年
・前川洋一郎（編著）『カラオケ進化論』（廣済堂）2009年
・上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか — 教育と音楽の大衆社会史』2010年
・輪島裕介『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光文社）2010年
・長谷川町蔵・大和田俊之『文化系のヒップホップ入門』（アルテスパブリッシング）2011年
・太田省一『アイドル進化論 — 南沙織から初音ミク、AKB 48まで』（筑摩書房）2011年
・大野佐紀子『アーティスト症候群 — アートと職人、クリエーターと芸能人』（河出書房新社）2011年
・大和田俊之『アメリカ音楽史 — ミンストレル・ショウ・ブルースからヒップホップまで』（講談社）2011年
・ピーター・バラカン『ピーターバラカン音楽日記』（集英社インターナショナル）2011年
・宮本直美『宝塚ファンの社会学: スターは劇場の外で作られる』（青弓社）2011年
・斎藤環『承認をめぐる病』（日本評論社）2013年
・小泉恭子『メモリースケープ あの頃を思い出す音楽』（みすず書房）2013年
・南田勝也『オルタナティヴロックの社会学』（花伝社）2014年
・マキタスポーツ『すべてのJ-POPはパクリである ― 現代ポップス論考』（扶桑社）2014年
・ブレイディみかこ『ザ・レフト — UK左翼セレブ列伝』（Pヴァイン）2014年
・柴那典『初音ミクはなぜ世界を変えたのか？』（太田出版）2014年
・佐々木敦『ニッポンの音楽』（講談社）2014年
・東園子『宝塚・やおい・愛の読み替え — 女性とポピュラーカルチャーの社会学』（新曜社）2015年
・鈴木惣一郎『細野晴臣 録音術』（DU Books）2015年
・輪島裕介『踊る昭和歌謡 リズムからみる大衆音楽』（NHK出版）2015年
・太田省一『ジャニーズの正体 エンターテインメントの戦後史』（双葉社）2016年
・柴那典『ヒットの崩壊』（講談社）2016年
・ピーター・バラカン『ロックの英詩を読む — 世界を変える歌』（集英社インターナショナル）2016年
・谷口昭弘『ディズニー・ミュージック〜ディズニー映画 音楽の秘密』（スタイルノート）2016年
・石田英敬『大人のためのメディア論講義』（筑摩書房）2016年
・菊池清麿『昭和演歌の歴史: その群像と時代』（アルファベータブックス）2017年
・谷口ヨシキ『暗黒ディズニー入門』（コアマガジン）2017年
・中川和亮『ライブ・エンタテインメントの社会学 — イベントにおける「受け手（Participants）」のリアリティ』（五絃舎）2017年
・若尾裕『サステナブル・ミュージック』（アルテスパブリッシング）2017年
・山田陽一『響きあう身体: 音楽・グルーヴ・憑依』（春秋社）2017年
・牧村憲一・藤井丈司・柴那典『渋谷音楽図鑑』（太田出版）2017年
・毛利嘉孝（編著）他『アフター・ミュージッキング』（東京藝術大学出版会）2017年
・ジェームス・M・バーダマン／里中哲彦『はじめてのアメリカ音楽史』（筑摩書房）2018年
・金成玟『K-Pop — 新感覚のメディア』（岩波書店）2018年
・田中雄二『エレベーター・ミュージック・イン・ジャパン 日本のBGMの歴史』（DU Books）2018年
・田中雄二『AKB48とニッポンのロック〜秋元康アイドルビジネス論』（スモール出版）2018年
・藤井丈司『YMOのONGAKU』（アルテスパブリッシング）2019年
・ピーター・バラカン『新版 魂（ソウル）のゆくえ』（アルテスパブリッシング）2019年
・大谷能生『平成日本の音楽の教科書』（新曜社）2019年
・近田春夫『考えるヒット テーマはジャニーズ』（スモール出版）2019年
・山下壮起『ヒップホップ・レザレクション — ラップミュージックとキリスト教』（新教出版社）2019年
・ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）2019年
・石田英敬『記号論講義 — 日常生活批判のためのレッスン』（筑摩書房）2020年
・岡田暁生『音楽の危機 —《第九》が歌えなくなった日』（中公公論新社）2020年
・日比野啓『アメリカン・ミュージカルとその時代』（青土社）2020年
・大和田俊之・柳樂光隆・南田勝也『ポップ・ミュージックを語る10の視点』（アルテスパブリッシング）2020年
・國分功一郎／熊谷晋一郎『< 責任> の生成 — 中動態と当事者研究』（新曜社）2020年
・木村元『音楽が本になるとき: 聴くこと・読むこと・語らうこと』（木立の文庫）2020年
・瀬崎圭二『関西フォークとその時代: 声の対抗文化と現代詩』（青弓社）2021年
・延江浩『松本隆 言葉の教室』（マガジンハウス）2021年
・田家秀樹『風街とデラシネ　作詞家・松本隆の50年』（角川書店）2021年
・大和田俊之『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）2021年
・宮本直美『ミュージカルの歴史 — なぜ突然歌いだすのか』（中央公論新社）2022年
・永冨真梨・忠聡太・日高良祐（編）『クリティカル・ワード　ポピュラー音楽〈聴く〉を広げる・更新する』（フィルムアート社）2023年
・高増明（編）『ポピュラー音楽の社会経済学［第２版］』（ナカニシヤ出版）2023年
・木石岳『歌詞のサウンドテクスチャー うたをめぐる音声詞学論考』（白水社）2023年
・川崎大助『教養としてのパンク・ロック』（光文社）2023年
・田淵俊彦『混沌時代の新・テレビ論』（ポプラ社）2024年
・川上幸之介『パンクの系譜学』（書肆侃侃房）2024年
・小島智『検証・80年代日本のロック』（アルファベータブックス）2024年
・伊藤浩介『脳と音楽』（世界文化社）2024年
・宇野常寛『庭の話』（講談社）2024年
・輪島祐介・永冨真梨（編）『入門ポピュラー音楽の文化史：〈戦後日本〉を読み直す』（ミネルヴァ書房）2024年
・日高良祐（編）柴那典ほか（著）『シティ・ポップ文化論』（フィルムアート社）2024年

・喜多村雄一『報道しないメディア ― ジャニーズ性加害問題をめぐって』（岩波書店）2025年
・南田勝也『ライブミュージックの社会学』（青弓社）2025年
・野田努『完全版 ブラック・マシン・ミュージック ディスコ、ハウス、デトロイト・テクノ（上）／（下）』（河出書房新社）2025年
・難波優輝『物語化批判の哲学 〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（講談社）2025年
・鈴木貴歩『音楽ビジネス』（クロスメディア・パブリッシング）2025年
・南田勝也『ロックミュージックの社会学 決定版』（青弓社）2026年
その他適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
【２・３年生】（春学期）研究発表作成・プレゼンテーション・議論への貢献50％、レポート50％を基本ラインとし、授業への参加・貢献を総合的に判断します。（秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
【４年生】（春・秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生からの意見ヒアリングは逐次行い、意志の疎通と内容改善につとめます。

【その他の重要事項】
・夏季休暇中ないしその前後に、フィールドワーク（音楽フェス・音楽ライブ体験）とその事前・事後学習を行う予定です。
・フィールドワークは基本的に全員参加です。かかる費用は一人（一回）数千円～２万円程度、オンラインならその1/3～1/2程度で無料配信のものも数多くあります（この点に不安がある場合はぜひ担当者に事前に相談して下さるとありがたいです）。
・「教科書」の扱い方・詳細の大凡は、演習説明会ならびに各学期初回授業時に説明します。
・音楽を聴く習慣がある、音楽が「好き」という自覚のある方の参加はもちろん大歓迎です。しかし本演習は、そうでなければ参加できない場所では全くありません。演習の最大の目的は、興味がない人同士が議論しあえる場所であることです。
・自分の研究テーマについては、本演習の近接分野を自由に選んで構いません。一般的に「ポピュラー音楽」の範疇には入らない、古典的西洋音楽の形態（クラシック音楽）へのアプローチも可能です。
・音楽学（楽典、音楽理論）やデジタル音楽技術についての知識は特に必要ありませんが、それがあればより楽しめるテーマもありえます。また平易な音楽理論は楽曲分析に必要ですが、そこは発表者の説明次第で、参加者の誰もが理解できるはずです。
・音楽コンテンツを制作するという演習ではありません。
・本演習は、芸術談義・音楽談義を繰り広げる場ではなく、むしろそうした談義的文化の背景にあるもの、嗜好品と社会とのかかわり、アイデンティティを構成するものとしての排他性について考える場所です。よって演習で鍛えられるのは「誰もがわかる言葉で事柄を説明できる能力」の方であり、知識の量で相手を圧倒するような態度は評価の対象外です。
・メディア技術の発展のおかげで、今や音楽は最も安価（＝タダ同然で手に入るように思えるもの）なコンテンツのひとつになりました。演習ではもちろんそうした現象についても批判的な検討を試みますが、著作権は絶対に守って下さい。もちろん音楽以外の著作権についても同様です。

【Outline (in English)】
This course deals with pop culture as well as impact of COVID-19 on the cultural and creative sectors especially popular music like Rock, Pops, Punk, Hip-Hop, EDM, House/Techno/Rave, J-Pop/Idol or K-Pop etc.; how "bring us together"-culture like popular music should/could be with "new normal"? It also enhances recognition of their forming condition in our society along with relationship between art and people. The participants are expected to explain basic concepts of modern art, pop culture, popular music and media studies. They are also expected to be able to evaluate or explain changes in the media environment and its influences into art and culture related with our dairy life. The aims of this seminar are to be able to discuss and imagine not-understandable actual situation of our living world and to realize how complex the relationship is between art/culture and politics by which our dairy lives are affected unconsciously. The key words of this seminar are: "media"/"technologies", "empathy"/"sympathy", "sense of unity", "body" and "identity". The participants are evaluated through presentations, writing reports and discussion each times.
【Grading Criteria /Policy】
2nd and 3rd year students
Report assignment:50％
Research Presentation and contribution to discussion in the class;50％
4th year students
Report assignment;40％
Research presentation and contribution to discussion in the class;60％
Preparatory study and review time for this class are 2 hours.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

林　志津江

サブタイトル：ポップ・カルチャー／ポピュラー音楽の系譜
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
あなたは自分の「好み」に関する自覚を持っていますか。あなたの日常を彩るSNSなどのメディアを通じて、あなたは誰と何を共有し、誰に向けて何を伝えようとしているのでしょう？ 私たちが「〜を好き」な者同士で「繋がれる」と思ってしまうのはなぜでしょうか。私たちの生きる社会において、音楽は時に熱狂や共感を誘う原動力であり続けてきました。ロック、ポップス、パンク、ソウル、ヒップホップ、アイドル、J-POP、K-POP、アニソン、EDM、テクノ＆レイヴ、エレクトロニカ、アンビエント・・・。この演習で主に扱うのは、「集う」「嗜好する」文化の典型であるポピュラー音楽とポップ・カルチャーの諸形式です。嗜好とそれに関するコミュニケーション行為を通じて、人々は「つながり」「アイデンティティ」「共感」などの感情に出逢います。この演習では、音楽やポップ・カルチャーの成立要素を分析しながら、インターネットやSNSをめぐる諸現象、流行の諸形式やファンダムの行動様式など、文化とメディアを通して見える社会のあり方にするどく迫ります。

【到達目標】
・あらゆる美的形式（音楽、映像、文学、ダンス、舞台、マンガ、アニメ、ゲーム、造形芸術、その他何でも）に軽やかにアクセスできる、自分が「いい」と思えるものを追いかけるフットワークを持てること。
・メディアの構造やポピュラー音楽の基本構成要素、モダニズムの形式に関する知識を得て、批判的な洞察を行うことができる。
・文化研究の諸概念、「記憶」「世代」「身体」「アイデンティティ」「文化受容」等の概念の意味、ポップ・カルチャー（拡大芸術）の歴史的展開を理解することができる。
・ポピュラー音楽／ポップ・カルチャーという現象の特質や、個々の作品やシーンに関するテーマで、論理的に明解でまとまった自分のテーゼを提示できる。
・良い観察者、良いリスナーになれる。ミュージシャン／作曲家と批評家の関係、正当な批評とは何か、芸術批評は印象批評を超えることができるのか、多様化する芸術形式をめぐる問題について思考できる。
・芸術と政治・社会との関わりとその困難に対し、誠実な想像力を持つことができ、それに関する自身の思考を言語化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習形式です。両学期とも輪読と研究発表を並行して進めます。
・参加者は授業終了後に「振り返り」コメントを提出します。提出されたコメントに対し、次回授業時にサマリー形式でフィードバックを行います。
・参加者は各学期必ず研究発表を行います。
・春学期は、輪読を通じてポピュラー音楽をめぐる概念と通史にアプローチするとともに研究発表のトライアルを行います。秋学期は春学期の内容を深めつつ自身のテーマで研究発表に挑戦します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション―「ポピュラー音楽」と「ポップカルチャー」	研究発表の分担決定、「音楽」「文化」について日頃感じていること、「ポピュラー音楽」じゃない音楽って何？ ポピュラー音楽とポップカルチャー
2	【第１部：リズム】（第１章）ヒット曲が持つ「４つの条件」	「ヒット曲」とは？、ヒット曲の「４つの条件」、リズムと「ヒット曲」の関係
3	（第２章）「リズム」	「ビート」と「リズム」、「テンポ」とBPM、音価の表現性、「グルーヴ」と「スウィング」
4	（第３章）リズムの生命力	「裏切りのリズム」、感情とテンポ、ボーカルとシンコペーションの関係、フレーズ・リズム・拍
5	（第４章・第５章）リズムの魅力と一体感	「リズム」が作り出す魅力と「気持ちよさ」というダイナミクス、「わかりやすさ」、変拍子あるいは繰り返しクラーベとシンコペーション、歌詞とフィットするリズム、表現、言葉とリズム、リズムの表現する「世界」
6	（第６章）リズムの恩恵	音楽がもたらす恩恵とは？「まとまり」の話、リズムと「意味」、リズムと「型」、「整った」リズム
7	（第７章）まとめー「４つの条件」の実践	「４つの条件」を兼ね備えた歌：「もっと聴きたい」、「一体感」、ドラムとベースが誘う世界、リズムと「４つの条件」
8	【第２部：音楽と社会①】音楽と社会（１）―テクノロジーの夜明け	大量生産・大量消費時代の幕開け、著作権とレコード（フォノグラフ、グラモフォン）の誕生
9	音楽と社会（２）―技術革新とメディアの変容	戦争とラジオとマイクロフォン、映画館とダンスホール、ジャズ・エイジの到来、楽曲形式（２）
10	音楽と社会（３）―若者・階級・音楽	余暇の誕生、中産階級の産み出した若者世代、ラジオと「音楽番組」
11	音楽と社会（４）―新しいメディア・新しい音楽	大量消費社会と「アメリカ」の時代、「ティーンエイジャー」の誕生とロックンロール
12	音楽と社会（５）―ラジオとテレビと映画と音楽	「スター」を求めて、音楽番組のための音楽、「LPレコード」と「ドーナツ盤（45回転シングル）」
13	【第３部：音楽と社会②】人種と階級（１）―音楽が社会を変革する？	ロックンロールからロックへ、フォークソングとビートニク、「レイス」から「ソウル」へ
14	人種と階級（２）―カウンターカルチャーの台頭	「追っかけ」という人々、ロックの市場価値、FMラジオとヒットチャート、ヴェトナム戦争と音楽フェスティバル
15	人種と階級（３）―「抵抗の証」が一大文化産業になる	「ポップ戦略」とブリティッシュ・インヴェイジョン、「アートスクール」から世界へ
16	人種と階級（４）―労働者階級の誇りと人間の尊厳	「パンクはアティテュードだ」、スカとレゲエの存在理由、「ソウル」から「ファンク」へ

17	人種と階級（5）— レイヴ・ドラッグ・インディーズ、サンプリングあるいは冷戦の終結	「バンドエイド」の真実、「舞台の下で」つながる、クラブとレイヴ／DJというアーティスト、ヒップ・ホップという生き方、ハウス／テクノが興隆する理由
18	人種と階級（6）— ダンスと音楽とMTV、見る音楽とセクシュアリティの関係	疲弊する工業都市の文化、ディスコと「見る音楽」、「女性ロックミュージシャン」という職業
19	日本のポピュラー音楽（1）—「日本のロック」— 洋楽VS.邦楽	グループサウンズと「アメリカ」、ロックかフォークか？「はっぴいえんど」の登場と「日本」というコンテンツ
20	日本のポピュラー音楽（2）—「ガラパゴス化」の起源・記号化するアイドル	歌謡曲とニュー・ミュージック、「テレビに出ない」、「清く正しく美しい」スターたち
21	日本のポピュラー音楽（3）— J-POPとバンドとインストアライブ、「スター」から「推し」の時代へ	アイドルの「オタク」、「渋谷系」と蒐集する文化、Wi-fiとYoutube、iTunesからストリーミングへ、会いに行けるアイドルとK-POPの目指す世界
22	【第4部】研究発表（1）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
23	研究発表（2）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
24	研究発表（3）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
25	研究発表（4）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
26	研究発表（5）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
27	研究発表（6）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
28	研究発表（7）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・自分にとって楽しめるもの、興味のあるもの／ことに没頭して、知識と経験を増やすこと。
・各自に必要な文献を読み、研究発表の準備のための資料にアクセスすること。
・自分にとって大切な外国語（もちろんSA先言語を含む）をしっかり勉強すること。
・毎日活字に目を通す、特に日刊紙を読むこと。
・あなたの日常そのものが、あなたの選ぶ学びのテーマにつながっています。この演習に参加した経験が、充実した日々の営みとなり、自分の人生の糧となることに自信を持ってください。
・自分が何かを大切に思っていること、人と話す時間を愛しんでください。あらゆることに積極的にチャレンジして、心揺さぶられる体験にたくさんめぐりあってください。

【テキスト（教科書）】

・毛利嘉孝『ポピュラー音楽と資本主義 増補』（せりか書房）2012年
・西兼志『アイドル／メディア論講義』（東京大学出版会）2017年
・長崎励朗『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学: 愉しい音楽の語り方』（創元社）2021年
・ドクター・キャピタル『ヒット曲のリズムの秘密』（集英社インターナショナル）2022年

【参考書】

・マーシャル・マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年
・ヴァルター・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（1）』（筑摩書房、1995年/1996年所収）
・Th.-W. アドルノ（三光長治・高辻知義訳）『不協和音 — 管理社会における音楽』（平凡社）1998年／Th.-W. アドルノ（高辻知義・渡辺健訳）『音楽社会学序説』（平凡社）1999年
・J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『象徴交換と死』（筑摩書房）1992年／J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『消費社会の神話と構造 新装版』（紀伊国屋書店）2015年
・ギー・ドゥボール（木下誠訳）『スペクタクルの社会』（筑摩書房）2003年
・セリーナ・トッド（近藤康裕訳）『ザ・ピープル イギリス労働者階級の盛衰』（みすず書房）2016年
・ヨッヘン・ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年
・ポール・ブルーム（大橋洋訳）『反共感論』（白揚社）2018年
・ピエール・ブルデュー（石井洋二郎役）『ディスタンクシオン〈普及版〉I〔社会的判断力批判』『ディスタンクシオン〈普及版〉II〔社会的判断力批判〕』（藤原書店）2020年
・ティム・インゴルド（奥野克己・鹿野マティアス訳）『世代とは何か』（亜紀書房）2024年
・池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論』（講談社）1994年
・見田宗介『現代社会の理論: 情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波書店）1996年
・北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か: 不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』（書肆侃侃房）2019年
・今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』（中央公論新社）2023年
・小倉孝誠（編）『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社）2023年
***
・ヘンリー・プレザンツ（片岡義男訳）『音楽の革命 — バロック・ジャズ・ビートルズ』（晶文社）1971年
・サイモン・フリス（細川周平・竹田賢一訳）『サウンドの力 — 若者・余暇・ロックの政治学』（晶文社）1991年
・ディック・ヘブディジ（山口淑子訳）『サブカルチャー スタイルの意味するもの』（未来社）1986/1999年
・スーザン・マクレアリ（女性と音楽研究フォーラム訳）『フェミニン・エンディング　音楽・ジェンダー・セクシュアリティ』（新水社）1997年
・ピーター・ファン＝デル＝マーヴェ（中村とうよう訳／横関裕子・守屋純子協力）『ポピュラー音楽の基礎理論』（ミュージックマガジン社）1999年
・ジェイソン・トインビー（安田昌弘訳）『ポピュラー音楽をつくる — ミュージシャン・創造性・制度』（みすず書房）2004年
・ウルフ・ポーシャルト（原克訳）『DJカルチャー　ポップカルチャーの思想史』（三元社）2004年
・ニール・ガブラー（中谷和男訳）『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』（ダイヤモンド社）2007年
・クリストファー・スモール（野澤豊一・西島千尋訳）『ミュージッキング — 音楽は"行為"である』（水声社）2011年
・ジェフ・チャン／DJクール・ハーク（押野素子訳）『ヒップホップ・ジェネレーション（新装版）』（リットー・ミュージック）2016年
・スティーヴン・ウィット（関美和訳）『誰が音楽をタダにした? — 巨大産業をぶっ潰した男たち』（早川書房）2016/2018年
・ゾーイ・フラード＝ブラナー／アーロン・M・グレイザー（関美和訳）『ファンダム・レボリューション — SNS時代の新たな熱狂』（早川書房）2017年
・キム・ヨンデ（桑畑優香訳）『BTSを読む　なぜ世界を夢中にさせるのか』（柏書房）2020年
・マシュー・コリン（坂本真理子訳）『レイヴ・カルチャー エクスタシー文化とアシッド・ハウスの物語』（Pヴァイン）2021年
・ジェイソン・ドーシー／デニス・ヴィラ（門脇弘典訳）『Z世代マーケティング 世界を激変させるニュー・ノーマル』（ハーパーコリンズ ジャパン）2021年
・チャ・ミンジュ（桑畑優香訳）『BTSを哲学する』（かんき出版）2022年
・J. D. ・ヴァンス（関根光宏・山田文訳）『ヒルビリー・エレジー〜アメリカの繁栄から取り残された白人たち〜』（光文社）2022年
・アーロン・コーエン（夏目大訳）『シカゴ・ソウルはどう世界を変えたのか — 黒人文化運動と音楽ビジネスの変革史』（亜紀書房）2023年
・ポール・ゴーマン（川田倫代訳）『評伝　マルコム・マクラーレン』（イースト・プレス）2024年
・ビル・ブルースター／フランク・ブロートン（島田陽子ほか訳）『そして、みんなクレイジーになっていく DJカルチャーとクラブ・ミュージックの100年史（増補改訂版）』（DU Books）2024年
・スーザン・ロジャース／オギ・オーガス（中川泉訳）『あなたがあの曲を好きなわけ:「音楽の好み」がわかる七つの要素』（化学同人）2024年
・アンガス・フレッチャー（田畑暁生訳）『世界はナラティブでできている: なぜ物語思考が重要なのか』（青土社）2024年

・アレックス・ニヴン（中村明美訳）『オアシスの階級闘争《Definitely Maybe》で読み解く、音楽とポピュリズム』（DU BOOKS）2025年
・見田宗介『近代日本の心情の歴史 — 流行歌の社会心理史』（講談社）1978年
・小泉文夫『日本の音 世界のなかの日本音楽』（青土社）1978年／（平凡社）1994/2017年
・小泉文夫『歌謡曲の構造』（冬樹社）1984年／（平凡社）1996年
・池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店）1984年
・中村とうよう『大衆音楽の真実』（ミュージックマガジン社）1985年
・小川博司『音楽する社会』（勁草書房）1988年
・渡辺裕『聴衆の誕生 — ポスト・モダン時代の音楽文化』（中央公論新社）1989年
・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』（岩波書店）1999年
・渡辺潤『アイデンティティの音楽 メディア、若者、ポピュラー文化』（世界思想社）2000年
・東浩紀『動物化するポストモダン — オタクから見た日本社会』（講談社）2001年
・東谷護（編著）『ポピュラー音楽へのまなざし』（勁草書房）2003年
・竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中央公論新社）2003年
・生明俊雄『ポピュラー音楽は誰が作るのか — 音楽産業の政治学』（勁草書房）2004年
・烏賀陽弘道『J-POPとは何か — 巨大化する音楽産業』（岩波書店）2005年
・増田聡『聴衆をつくる — 音楽批評の解体文法』（青土社）2006年
・行川和彦『パンク・ロック/ハードコア史』（リットー・ミュージック）2007年
・東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生　動物化するポストモダン２』（講談社）2007年
・大塚英志／東浩紀『リアルのゆくえ — おたく オタクはどう生きるか』（講談社）2008年
・宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房）2008/2011年
・大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店）2008年
・森正人『大衆音楽史: ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』（中央公論新社）2008年
・菊池清麿『日本流行歌変遷史 — 歌謡曲の誕生からJ・ポップの時代へ』（論創社）2008年
・前川洋一郎（編著）『カラオケ進化論』（廣済堂）2009年
・上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか — 教育と音楽の大衆社会史』2010年
・輪島裕介『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光文社）2010年
・長谷川町蔵・大和田俊之『文化系のヒップホップ入門』（アルテスパブリッシング）2011年
・太田省一『アイドル進化論 — 南沙織から初音ミク、AKB 48まで』（筑摩書房）2011年
・大野佐紀子『アーティスト症候群 — アートと職人、クリエーターと芸能人』（河出書房新社）2011年
・大和田俊之『アメリカ音楽史 — ミンストレル・ショウ・ブルースからヒップホップまで』（講談社）2011年
・ピーター・バラカン『ピーターバラカン音楽日記』（集英社インターナショナル）2011年
・宮本直美『宝塚ファンの社会学: スターは劇場の外で作られる』（青弓社）2011年
・斎藤環『承認をめぐる病』（日本評論社）2013年
・小泉恭子『メモリースケープ あの頃を思い出す音楽』（みすず書房）2013年
・南田勝也『オルタナティヴロックの社会学』（花伝社）2014年
・マキタスポーツ『すべてのJ-POPはパクリである ― 現代ポップス論考』（扶桑社）2014年
・ブレイディみかこ『ザ・レフト — UK左翼セレブ列伝』（Pヴァイン）2014年
・柴那典『初音ミクはなぜ世界を変えたのか？』（太田出版）2014年
・佐々木敦『ニッポンの音楽』（講談社）2014年
・東園子『宝塚・やおい・愛の読み替え — 女性とポピュラーカルチャーの社会学』（新曜社）2015年
・鈴木惣一郎『細野晴臣 録音術』（DU Books）2015年
・輪島裕介『踊る昭和歌謡 リズムからみる大衆音楽』（NHK出版）2015年
・太田省一『ジャニーズの正体 エンターテインメントの戦後史』（双葉社）2016年
・柴那典『ヒットの崩壊』（講談社）2016年
・ピーター・バラカン『ロックの英詩を読む — 世界を変える歌』（集英社インターナショナル）2016年
・谷口昭弘『ディズニー・ミュージック〜ディズニー映画 音楽の秘密』（スタイルノート）2016年
・石田英敬『大人のためのメディア論講義』（筑摩書房）2016年
・菊池清麿『昭和演歌の歴史: その群像と時代』（アルファベータブックス）2017年
・谷口ヨシキ『暗黒ディズニー入門』（コアマガジン）2017年
・中川和亮『ライブ・エンタテインメントの社会学 — イベントにおける「受け手（Participants）」のリアリティ』（五絃舎）2017年
・若尾裕『サステナブル・ミュージック』（アルテスパブリッシング）2017年
・山田陽一『響きあう身体: 音楽・グルーヴ・憑依』（春秋社）2017年
・牧村憲一・藤井丈司・柴那典『渋谷音楽図鑑』（太田出版）2017年
・毛利嘉孝（編著）他『アフター・ミュージッキング』（東京藝術大学出版会）2017年
・ジェームス・M・バーダマン／里中哲彦『はじめてのアメリカ音楽史』（筑摩書房）2018年
・金成玟『K-Pop — 新感覚のメディア』（岩波書店）2018年
・田中雄二『エレベーター・ミュージック・イン・ジャパン 日本のBGMの歴史』（DU Books）2018年
・田中雄二『AKB48とニッポンのロック〜秋元康アイドルビジネス論』（スモール出版）2018年
・藤井丈司『YMOのONGAKU』（アルテスパブリッシング）2019年
・ピーター・バラカン『新版 魂（ソウル）のゆくえ』（アルテスパブリッシング）2019年
・大谷能生『平成日本の音楽の教科書』（新曜社）2019年
・近田春夫『考えるヒット テーマはジャニーズ』（スモール出版）2019年
・山下壮起『ヒップホップ・レザレクション — ラップミュージックとキリスト教』（新教出版社）2019年
・ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）2019年
・石田英敬『記号論講義 — 日常生活批判のためのレッスン』（筑摩書房）2020年
・岡田暁生『音楽の危機 —《第九》が歌えなくなった日』（中公公論新社）2020年
・日比野啓『アメリカン・ミュージカルとその時代』（青土社）2020年
・大和田俊之・柳樂光隆・南田勝也『ポップ・ミュージックを語る10の視点』（アルテスパブリッシング）2020年
・國分功一郎／熊谷晋一郎『< 責任> の生成 — 中動態と当事者研究』（新曜社）2020年
・木村元『音楽が本になるとき: 聴くこと・読むこと・語らうこと』（木立の文庫）2020年
・瀬崎圭二『関西フォークとその時代: 声の対抗文化と現代詩』（青弓社）2021年
・延江浩『松本隆 言葉の教室』（マガジンハウス）2021年
・田家秀樹『風街とデラシネ　作詞家・松本隆の50年』（角川書店）2021年
・大和田俊之『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）2021年
・宮本直美『ミュージカルの歴史 — なぜ突然歌いだすのか』（中央公論新社）2022年
・永冨真梨・忠聡太・日高良祐（編）『クリティカル・ワード　ポピュラー音楽〈聴く〉を広げる・更新する』（フィルムアート社）2023年
・高増明（編）『ポピュラー音楽の社会経済学［第２版］』（ナカニシヤ出版）2023年
・木石岳『歌詞のサウンドテクスチャー うたをめぐる音声詞学論考』（白水社）2023年
・川崎大助『教養としてのパンク・ロック』（光文社）2023年
・田淵俊彦『混沌時代の新・テレビ論』（ポプラ社）2024年
・川上幸之介『パンクの系譜学』（書肆侃侃房）2024年
・小島智『検証・80年代日本のロック』（アルファベータブックス）2024年
・伊藤浩介『脳と音楽』（世界文化社）2024年
・宇野常寛『庭の話』（講談社）2024年
・輪島祐介・永冨真梨（編）『入門ポピュラー音楽の文化史：〈戦後日本〉を読み直す』（ミネルヴァ書房）2024年
・日高良祐（編）柴那典ほか（著）『シティ・ポップ文化論』（フィルムアート社）2024年

・喜多村雄一『報道しないメディア ― ジャニーズ性加害問題をめぐって』（岩波書店）2025年
・南田勝也『ライブミュージックの社会学』（青弓社）2025年
・野田努『完全版 ブラック・マシン・ミュージック ディスコ、ハウス、デトロイト・テクノ（上）／（下）』（河出書房新社）2025年
・難波優輝『物語化批判の哲学 〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（講談社）2025年
・鈴木貴歩『音楽ビジネス』（クロスメディア・パブリッシング）2025年
・南田勝也『ロックミュージックの社会学 決定版』（青弓社）2026年
その他適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
【２・３年生】（春学期）研究発表作成・プレゼンテーション・議論への貢献50％、レポート50％を基本ラインとし、授業への参加・貢献を総合的に判断します。（秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
【４年生】（春・秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生からの意見ヒアリングは逐次行い、意志の疎通と内容改善につとめます。

【その他の重要事項】
・夏季休暇中ないしその前後に、フィールドワーク（音楽フェス・音楽ライブ体験）とその事前・事後学習を行う予定です。
・フィールドワークは基本的に全員参加です。かかる費用は一人（一回）数千円～２万円程度、オンラインならその1/3～1/2程度で無料配信のものも数多くあります（この点に不安がある場合はぜひ担当者に事前に相談して下さるとありがたいです）。
・「教科書」の扱い方・詳細の大凡は、演習説明会ならびに各学期初回授業時に説明します。
・音楽を聴く習慣がある、音楽が「好き」という自覚のある方の参加はもちろん大歓迎です。しかし本演習は、そうでなければ参加できない場所では全くありません。演習の最大の目的は、興味がない人同士が議論しあえる場所であることです。
・自分の研究テーマについては、本演習の近接分野を自由に選んで構いません。一般的に「ポピュラー音楽」の範疇には入らない、古典的西洋音楽の形態（クラシック音楽）へのアプローチも可能です。
・音楽学（楽典、音楽理論）やデジタル音楽技術についての知識は特に必要ありませんが、それがあればより楽しめるテーマもありえます。また平易な音楽理論は楽曲分析に必要ですが、そこは発表者の説明次第で、参加者の誰もが理解できるはずです。
・音楽コンテンツを制作するという演習ではありません。
・本演習は、芸術談義・音楽談義を繰り広げる場ではなく、むしろそうした談義的文化の背景にあるもの、嗜好品と社会とのかかわり、アイデンティティを構成するものとしての排他性について考える場所です。よって演習で鍛えられるのは「誰もがわかる言葉で事柄を説明できる能力」の方であり、知識の量で相手を圧倒するような態度は評価の対象外です。
・メディア技術の発展のおかげで、今や音楽は最も安価（＝タダ同然で手に入るように思えるもの）なコンテンツのひとつになりました。演習ではもちろんそうした現象についても批判的な検討を試みますが、著作権は絶対に守って下さい。もちろん音楽以外の著作権についても同様です。

【Outline (in English)】
This course deals with pop culture as well as impact of COVID-19 on the cultural and creative sectors especially popular music like Rock, Pops, Punk, Hip-Hop, EDM, House/Techno/Rave, J-Pop/Idol or K-Pop etc.; how "bring us together"-culture like popular music should/could be with "new normal"? It also enhances recognition of their forming condition in our society along with relationship between art and people. The participants are expected to explain basic concepts of modern art, pop culture, popular music and media studies. They are also expected to be able to evaluate or explain changes in the media environment and its influences into art and culture related with our dairy life. The aims of this seminar are to be able to discuss and imagine not-understandable actual situation of our living world and to realize how complex the relationship is between art/culture and politics by which our dairy lives are affected unconsciously. The key words of this seminar are: "media"/"technologies", "empathy"/"sympathy", "sense of unity", "body" and "identity". The participants are evaluated through presentations, writing reports and discussion each times.
【Grading Criteria /Policy】
2nd and 3rd year students
Report assignment:50％
Research Presentation and contribution to discussion in the class;50％
4th year students
Report assignment;40％
Research presentation and contribution to discussion in the class;60％
Preparatory study and review time for this class are 2 hours.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

林　志津江

サブタイトル：ポップ・カルチャー／ポピュラー音楽の系譜
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
あなたは自分の「好み」に関する自覚を持っていますか。あなたの日常を彩るSNSなどのメディアを通じて、あなたは誰と何を共有し、誰に向けて何を伝えようとしているのでしょう？ 私たちが「〜を好き」な者同士で「繋がれる」と思ってしまうのはなぜでしょうか。私たちの生きる社会において、音楽は時に熱狂や共感を誘う原動力であり続けてきました。ロック、ポップス、パンク、ソウル、ヒップホップ、アイドル、J-POP、K-POP、アニソン、EDM、テクノ＆レイヴ、エレクトロニカ、アンビエント・・・。この演習で主に扱うのは、「集う」「嗜好する」文化の典型であるポピュラー音楽とポップ・カルチャーの諸形式です。嗜好とそれに関するコミュニケーション行為を通じて、人々は「つながり」「アイデンティティ」「共感」などの感情に出逢います。この演習では、音楽やポップ・カルチャーの成立要素を分析しながら、インターネットやSNSをめぐる諸現象、流行の諸形式やファンダムの行動様式など、文化とメディアを通して見える社会のあり方にするどく迫ります。

【到達目標】
・あらゆる美的形式（音楽、映像、文学、ダンス、舞台、マンガ、アニメ、ゲーム、造形芸術、その他何でも）に軽やかにアクセスできる、自分が「いい」と思えるものを追いかけるフットワークを持てること。
・メディアの構造やポピュラー音楽の基本構成要素、モダニズムの形式に関する知識を得て、批判的な洞察を行うことができる。
・文化研究の諸概念、「記憶」「世代」「身体」「アイデンティティ」「文化受容」等の概念の意味、ポップ・カルチャー（拡大芸術）の歴史的展開を理解することができる。
・ポピュラー音楽／ポップ・カルチャーという現象の特質や、個々の作品やシーンに関するテーマで、論理的に明解でまとまった自分のテーゼを提示できる。
・良い観察者、良いリスナーになれる。ミュージシャン／作曲家と批評家の関係、正当な批評とは何か、芸術批評は印象批評を超えることができるのか、多様化する芸術形式をめぐる問題について思考できる。
・芸術と政治・社会との関わりとその困難に対し、誠実な想像力を持つことができ、それに関する自身の思考を言語化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習形式です。両学期とも輪読と研究発表を並行して進めます。
・参加者は授業終了後に「振り返り」コメントを提出します。提出されたコメントに対し、次回授業時にサマリー形式でフィードバックを行います。
・参加者は各学期必ず研究発表を行います。
・春学期は、輪読を通じてポピュラー音楽をめぐる概念と通史にアプローチするとともに研究発表のトライアルを行います。秋学期は春学期の内容を深めつつ自身のテーマで研究発表に挑戦します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション―「ポピュラー音楽」と「ポップカルチャー」	研究発表の分担決定、「音楽」「文化」について日頃感じていること、「ポピュラー音楽」じゃない音楽って何？ ポピュラー音楽とポップカルチャー
2	【第１部：リズム】（第１章）ヒット曲が持つ「４つの条件」	「ヒット曲」とは？、ヒット曲の「４つの条件」、リズムと「ヒット曲」の関係
3	（第２章）「リズム」	「ビート」と「リズム」、「テンポ」とBPM、音価の表現性、「グルーヴ」と「スウィング」
4	（第３章）リズムの生命力	「裏切りのリズム」、感情とテンポ、ボーカルとシンコペーションの関係、フレーズ・リズム・拍
5	（第４章・第５章）リズムの魅力と一体感	「リズム」が作り出す魅力と「気持ちよさ」というダイナミクス、「わかりやすさ」、変拍子あるいは繰り返しクラーベとシンコペーション、歌詞とフィットするリズム、表現、言葉とリズム、リズムの表現する「世界」
6	（第６章）リズムの恩恵	音楽がもたらす恩恵とは？「まとまり」の話、リズムと「意味」、リズムと「型」、「整った」リズム
7	（第７章）まとめー「４つの条件」の実践	「４つの条件」を兼ね備えた歌：「もっと聴きたい」、「一体感」、ドラムとベースが誘う世界、リズムと「４つの条件」
8	【第２部：音楽と社会①】音楽と社会（１）―テクノロジーの夜明け	大量生産・大量消費時代の幕開け、著作権とレコード（フォノグラフ、グラモフォン）の誕生
9	音楽と社会（２）―技術革新とメディアの変容	戦争とラジオとマイクロフォン、映画館とダンスホール、ジャズ・エイジの到来、楽曲形式（２）
10	音楽と社会（３）―若者・階級・音楽	余暇の誕生、中産階級の産み出した若者世代、ラジオと「音楽番組」
11	音楽と社会（４）―新しいメディア・新しい音楽	大量消費社会と「アメリカ」の時代、「ティーンエイジャー」の誕生とロックンロール
12	音楽と社会（５）―ラジオとテレビと映画と音楽	「スター」を求めて、音楽番組のための音楽、「LPレコード」と「ドーナツ盤（45回転シングル）」
13	【第３部：音楽と社会②】人種と階級（１）―音楽が社会を変革する？	ロックンロールからロックへ、フォークソングとビートニク、「レイス」から「ソウル」へ
14	人種と階級（２）―カウンターカルチャーの台頭	「追っかけ」という人々、ロックの市場価値、FMラジオとヒットチャート、ヴェトナム戦争と音楽フェスティバル
15	人種と階級（３）―「抵抗の証」が一大文化産業になる	「ポップ戦略」とブリティッシュ・インヴェイジョン、「アートスクール」から世界へ
16	人種と階級（４）―労働者階級の誇りと人間の尊厳	「パンクはアティテュードだ」、スカとレゲエの存在理由、「ソウル」から「ファンク」へ

17	人種と階級（5）— レイヴ・ドラッグ・インディーズ、サンプリングあるいは冷戦の終結	「バンドエイド」の真実、「舞台の下で」つながる、クラブとレイヴ／DJというアーティスト、ヒップ・ホップという生き方、ハウス／テクノが興隆する理由
18	人種と階級（6）— ダンスと音楽とMTV、見る音楽とセクシュアリティの関係	疲弊する工業都市の文化、ディスコと「見る音楽」、「女性ロックミュージシャン」という職業
19	日本のポピュラー音楽（1）—「日本のロック」— 洋楽VS.邦楽	グループサウンズと「アメリカ」、ロックかフォークか？「はっぴいえんど」の登場と「日本」というコンテンツ
20	日本のポピュラー音楽（2）—「ガラパゴス化」の起源・記号化するアイドル	歌謡曲とニュー・ミュージック、「テレビに出ない」、「清く正しく美しい」スターたち
21	日本のポピュラー音楽（3）— J-POPとバンドとインストアライブ、「スター」から「推し」の時代へ	アイドルの「オタク」、「渋谷系」と蒐集する文化、Wi-fiとYoutube、iTunesからストリーミングへ、会いに行けるアイドルとK-POPの目指す世界
22	【第4部】研究発表（1）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
23	研究発表（2）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
24	研究発表（3）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
25	研究発表（4）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
26	研究発表（5）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
27	研究発表（6）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
28	研究発表（7）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・自分にとって楽しめるもの、興味のあるもの／ことに没頭して、知識と経験を増やすこと。
・各自に必要な文献を読み、研究発表の準備のための資料にアクセスすること。
・自分にとって大切な外国語（もちろんSA先言語を含む）をしっかり勉強すること。
・毎日活字に目を通す、特に日刊紙を読むこと。
・あなたの日常そのものが、あなたの選ぶ学びのテーマにつながっています。この演習に参加した経験が、充実した日々の営みとなり、自分の人生の糧となることに自信を持ってください。
・自分が何かを大切に思っていること、人と話す時間を愛しんでください。あらゆることに積極的にチャレンジして、心揺さぶられる体験にたくさんめぐりあってください。

【テキスト（教科書）】

・毛利嘉孝『ポピュラー音楽と資本主義 増補』（せりか書房）2012年
・西兼志『アイドル／メディア論講義』（東京大学出版会）2017年
・長崎励朗『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学: 愉しい音楽の語り方』（創元社）2021年
・ドクター・キャピタル『ヒット曲のリズムの秘密』（集英社インターナショナル）2022年

【参考書】

・マーシャル・マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年
・ヴァルター.・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（1）』（筑摩書房、1995年/1996年所収）
・Th.-W. アドルノ（三光長治・高辻知義訳）『不協和音 — 管理社会における音楽』（平凡社）1998年／Th.-W. アドルノ（高辻知義・渡辺健訳）『音楽社会学序説』（平凡社）1999年
・J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『象徴交換と死』（筑摩書房）1992年／J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『消費社会の神話と構造 新装版』（紀伊国屋書店）2015年
・ギー・ドゥボール（木下誠訳）『スペクタクルの社会』（筑摩書房）2003年
・セリーナ・トッド（近藤康裕訳）『ザ・ピープル イギリス労働者階級の盛衰』（みすず書房）2016年
・ヨッヘン・ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年
・ポール・ブルーム（大橋洋訳）『反共感論』（白揚社）2018年
・ピエール・ブルデュー（石井洋二郎役）『ディスタンクシオン〈普及版〉I〔社会的判断力批判』『ディスタンクシオン〈普及版〉II〔社会的判断力批判〕』（藤原書店）2020年
・ティム・インゴルド（奥野克己・鹿野マティアス訳）『世代とは何か』（亜紀書房）2024年
・池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論』（講談社）1994年
・見田宗介『現代社会の理論: 情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波書店）1996年
・北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か: 不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』（書肆侃侃房）2019年
・今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』（中央公論新社）2023年
・小倉孝誠（編）『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社）2023年
***
・ヘンリー・プレザンツ（片岡義男訳）『音楽の革命 — バロック・ジャズ・ビートルズ』（晶文社）1971年
・サイモン・フリス（細川周平・竹田賢一訳）『サウンドの力 — 若者・余暇・ロックの政治学』（晶文社）1991年
・ディック・ヘブディジ（山口淑子訳）『サブカルチャー スタイルの意味するもの』（未来社）1986/1999年
・スーザン・マクレアリ（女性と音楽研究フォーラム訳）『フェミニン・エンディング　音楽・ジェンダー・セクシュアリティ』（新水社）1997年
・ピーター・ファン＝デル＝マーヴェ（中村とうよう訳／横関裕子・守屋純子協力）『ポピュラー音楽の基礎理論』（ミュージックマガジン社）1999年
・ジェイソン・トインビー（安田昌弘訳）『ポピュラー音楽をつくる — ミュージシャン・創造性・制度』（みすず書房）2004年
・ウルフ・ポーシャルト（原克訳）『DJカルチャー　ポップカルチャーの思想史』（三元社）2004年
・ニール・ガブラー（中谷和男訳）『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』（ダイヤモンド社）2007年
・クリストファー・スモール（野澤豊一・西島千尋訳）『ミュージッキング — 音楽は"行為"である』（水声社）2011年
・ジェフ・チャン／DJクール・ハーク（押野素子訳）『ヒップホップ・ジェネレーション（新装版）』（リットー・ミュージック）2016年
・スティーヴン・ウィット（関美和訳）『誰が音楽をタダにした? — 巨大産業をぶっ潰した男たち』（早川書房）2016/2018年
・ゾーイ・フラード＝ブラナー／アーロン・M・グレイザー（関美和訳）『ファンダム・レボリューション — SNS時代の新たな熱狂』（早川書房）2017年
・キム・ヨンデ（桑畑優香訳）『BTSを読む　なぜ世界を夢中にさせるのか』（柏書房）2020年
・マシュー・コリン（坂本真理子訳）『レイヴ・カルチャー エクスタシー文化とアシッド・ハウスの物語』（Pヴァイン）2021年
・ジェイソン・ドーシー／デニス・ヴィラ（門脇弘典訳）『Z世代マーケティング 世界を激変させるニュー・ノーマル』（ハーパーコリンズ ジャパン）2021年
・チャ・ミンジュ（桑畑優香訳）『BTSを哲学する』（かんき出版）2022年
・J. D.・ヴァンス（関根光宏・山田文訳）『ヒルビリー・エレジー〜アメリカの繁栄から取り残された白人たち〜』（光文社）2022年
・アーロン・コーエン（夏目大訳）『シカゴ・ソウルはどう世界を変えたのか — 黒人文化運動と音楽ビジネスの変革史』（亜紀書房）2023年
・ポール・ゴーマン（川田倫代訳）『評伝　マルコム・マクラーレン』（イースト・プレス）2024年
・ビル・ブルースター／フランク・ブロートン（島田陽子ほか訳）『そして、みんなクレイジーになっていく DJカルチャーとクラブ・ミュージックの100年史（増補改訂版）』（DU Books）2024年
・スーザン・ロジャース／オギ・オーガス（中川泉訳）『あなたがあの曲を好きなわけ:「音楽の好み」がわかる七つの要素』（化学同人）2024年
・アンガス・フレッチャー（田畑暁生訳）『世界はナラティブでできている: なぜ物語思考が重要なのか』（青土社）2024年

・アレックス・ニヴン（中村明美訳）『オアシスの階級闘争《Definitely Maybe》で読み解く、音楽とポピュリズム』（DU BOOKS）2025年
・見田宗介『近代日本の心情の歴史 — 流行歌の社会心理史』（講談社）1978年
・小泉文夫『日本の音 世界のなかの日本音楽』（青土社）1978年／（平凡社）1994/2017年
・小泉文夫『歌謡曲の構造』（冬樹社）1984年／（平凡社）1996年
・池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店）1984年
・中村とうよう『大衆音楽の真実』（ミュージックマガジン社）1985年
・小川博司『音楽する社会』（勁草書房）1988年
・渡辺裕『聴衆の誕生 — ポスト・モダン時代の音楽文化』（中央公論新社）1989年
・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』（岩波書店）1999年
・渡辺潤『アイデンティティの音楽 メディア、若者、ポピュラー文化』（世界思想社）2000年
・東浩紀『動物化するポストモダン — オタクから見た日本社会』（講談社）2001年
・東谷護（編著）『ポピュラー音楽へのまなざし』（勁草書房）2003年
・竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中央公論新社）2003年
・生明俊雄『ポピュラー音楽は誰が作るのか — 音楽産業の政治学』（勁草書房）2004年
・烏賀陽弘道『J-POPとは何か — 巨大化する音楽産業』（岩波書店）2005年
・増田聡『聴衆をつくる — 音楽批評の解体文法』（青土社）2006年
・行川和彦『パンク・ロック/ハードコア史』（リットー・ミュージック）2007年
・東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生　動物化するポストモダン２』（講談社）2007年
・大塚英志／東浩紀『リアルのゆくえ — おたく オタクはどう生きるか』（講談社）2008年
・宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房）2008/2011年
・大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店）2008年
・森正人『大衆音楽史: ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』（中央公論新社）2008年
・菊池清麿『日本流行歌変遷史 — 歌謡曲の誕生からJ・ポップの時代へ』（論創社）2008年
・前川洋一郎（編著）『カラオケ進化論』（廣済堂）2009年
・上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか — 教育と音楽の大衆社会史』2010年
・輪島裕介『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光文社）2010年
・長谷川町蔵・大和田俊之『文化系のヒップホップ入門』（アルテスパブリッシング）2011年
・太田省一『アイドル進化論 — 南沙織から初音ミク、AKB 48まで』（筑摩書房）2011年
・大野佐紀子『アーティスト症候群 — アートと職人、クリエーターと芸能人』（河出書房新社）2011年
・大和田俊之『アメリカ音楽史 — ミンストレル・ショウ・ブルースからヒップホップまで』（講談社）2011年
・ピーター・バラカン『ピーターバラカン音楽日記』（集英社インターナショナル）2011年
・宮本直美『宝塚ファンの社会学: スターは劇場の外で作られる』（青弓社）2011年
・斎藤環『承認をめぐる病』（日本評論社）2013年
・小泉恭子『メモリースケープ あの頃を思い出す音楽』（みすず書房）2013年
・南田勝也『オルタナティヴロックの社会学』（花伝社）2014年
・マキタスポーツ『すべてのJ-POPはパクリである ― 現代ポップス論考』（扶桑社）2014年
・ブレイディみかこ『ザ・レフト — UK左翼セレブ列伝』（Pヴァイン）2014年
・柴那典『初音ミクはなぜ世界を変えたのか？』（太田出版）2014年
・佐々木敦『ニッポンの音楽』（講談社）2014年
・東園子『宝塚・やおい・愛の読み替え — 女性とポピュラーカルチャーの社会学』（新曜社）2015年
・鈴木惣一郎『細野晴臣 録音術』（DU Books）2015年
・輪島裕介『踊る昭和歌謡 リズムからみる大衆音楽』（NHK出版）2015年
・太田省一『ジャニーズの正体 エンターテインメントの戦後史』（双葉社）2016年
・柴那典『ヒットの崩壊』（講談社）2016年
・ピーター・バラカン『ロックの英詩を読む — 世界を変える歌』（集英社インターナショナル）2016年
・谷口昭弘『ディズニー・ミュージック〜ディズニー映画 音楽の秘密』（スタイルノート）2016年
・石田英敬『大人のためのメディア論講義』（筑摩書房）2016年
・菊池清麿『昭和演歌の歴史: その群像と時代』（アルファベータブックス）2017年
・谷口ヨシキ『暗黒ディズニー入門』（コアマガジン）2017年
・中川和亮『ライブ・エンタテインメントの社会学 — イベントにおける「受け手（Participants）」のリアリティ』（五絃舎）2017年
・若尾裕『サステナブル・ミュージック』（アルテスパブリッシング）2017年
・山田陽一『響きあう身体: 音楽・グルーヴ・憑依』（春秋社）2017年
・牧村憲一・藤井丈司・柴那典『渋谷音楽図鑑』（太田出版）2017年
・毛利嘉孝（編著）他『アフター・ミュージッキング』（東京藝術大学出版会）2017年
・ジェームス・M・バーダマン／里中哲彦『はじめてのアメリカ音楽史』（筑摩書房）2018年
・金成玟『K-Pop — 新感覚のメディア』（岩波書店）2018年
・田中雄二『エレベーター・ミュージック・イン・ジャパン 日本のBGMの歴史』（DU Books）2018年
・田中雄二『AKB48とニッポンのロック〜秋元康アイドルビジネス論』（スモール出版）2018年
・藤井丈司『YMOのONGAKU』（アルテスパブリッシング）2019年
・ピーター・バラカン『新版 魂（ソウル）のゆくえ』（アルテスパブリッシング）2019年
・大谷能生『平成日本の音楽の教科書』（新曜社）2019年
・近田春夫『考えるヒット テーマはジャニーズ』（スモール出版）2019年
・山下壮起『ヒップホップ・レザレクション — ラップミュージックとキリスト教』（新教出版社）2019年
・ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）2019年
・石田英敬『記号論講義 — 日常生活批判のためのレッスン』（筑摩書房）2020年
・岡田暁生『音楽の危機 —《第九》が歌えなくなった日』（中公公論新社）2020年
・日比野啓『アメリカン・ミュージカルとその時代』（青土社）2020年
・大和田俊之・柳樂光隆・南田勝也『ポップ・ミュージックを語る10の視点』（アルテスパブリッシング）2020年
・國分功一郎／熊谷晋一郎『< 責任> の生成 — 中動態と当事者研究』（新曜社）2020年
・木村元『音楽が本になるとき: 聴くこと・読むこと・語らうこと』（木立の文庫）2020年
・瀬崎圭二『関西フォークとその時代: 声の対抗文化と現代詩』（青弓社）2021年
・延江浩『松本隆 言葉の教室』（マガジンハウス）2021年
・田家秀樹『風街とデラシネ　作詞家・松本隆の50年』（角川書店）2021年
・大和田俊之『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）2021年
・宮本直美『ミュージカルの歴史 — なぜ突然歌いだすのか』（中央公論新社）2022年
・永冨真梨・忠聡太・日高良祐（編）『クリティカル・ワード　ポピュラー音楽〈聴く〉を広げる・更新する』（フィルムアート社）2023年
・高増明（編）『ポピュラー音楽の社会経済学［第２版］』（ナカニシヤ出版）2023年
・木石岳『歌詞のサウンドテクスチャー うたをめぐる音声詞学論考』（白水社）2023年
・川崎大助『教養としてのパンク・ロック』（光文社）2023年
・田淵俊彦『混沌時代の新・テレビ論』（ポプラ社）2024年
・川上幸之介『パンクの系譜学』（書肆侃侃房）2024年
・小島智『検証・80年代日本のロック』（アルファベータブックス）2024年
・伊藤浩介『脳と音楽』（世界文化社）2024年
・宇野常寛『庭の話』（講談社）2024年
・輪島祐介・永冨真梨（編）『入門ポピュラー音楽の文化史：〈戦後日本〉を読み直す』（ミネルヴァ書房）2024年
・日高良祐（編）柴那典ほか（著）『シティ・ポップ文化論』（フィルムアート社）2024年

・喜多村雄一『報道しないメディア ― ジャニーズ性加害問題をめぐって』（岩波書店）2025年
・南田勝也『ライブミュージックの社会学』（青弓社）2025年
・野田努『完全版 ブラック・マシン・ミュージック ディスコ、ハウス、デトロイト・テクノ（上）／（下）』（河出書房新社）2025年
・難波優輝『物語化批判の哲学 〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（講談社）2025年
・鈴木貴歩『音楽ビジネス』（クロスメディア・パブリッシング）2025年
・南田勝也『ロックミュージックの社会学 決定版』（青弓社）2026年
その他適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
【２・３年生】（春学期）研究発表作成・プレゼンテーション・議論への貢献50％、レポート50％を基本ラインとし、授業への参加・貢献を総合的に判断します。（秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
【４年生】（春・秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生からの意見ヒアリングは逐次行い、意志の疎通と内容改善につとめます。

【その他の重要事項】
・夏季休暇中ないしその前後に、フィールドワーク（音楽フェス・音楽ライブ体験）とその事前・事後学習を行う予定です。
・フィールドワークは基本的に全員参加です。かかる費用は一人（一回）数千円～２万円程度、オンラインならその1/3～1/2程度で無料配信のものも数多くあります（この点に不安がある場合はぜひ担当者に事前に相談して下さるとありがたいです）。
・「教科書」の扱い方・詳細の大凡は、演習説明会ならびに各学期初回授業時に説明します。
・音楽を聴く習慣がある、音楽が「好き」という自覚のある方の参加はもちろん大歓迎です。しかし本演習は、そうでなければ参加できない場所では全くありません。演習の最大の目的は、興味がない人同士が議論しあえる場所であることです。
・自分の研究テーマについては、本演習の近接分野を自由に選んで構いません。一般的に「ポピュラー音楽」の範疇には入らない、古典的西洋音楽の形態（クラシック音楽）へのアプローチも可能です。
・音楽学（楽典、音楽理論）やデジタル音楽技術についての知識は特に必要ありませんが、それがあればより楽しめるテーマもありえます。また平易な音楽理論は楽曲分析に必要ですが、そこは発表者の説明次第で、参加者の誰もが理解できるはずです。
・音楽コンテンツを制作するという演習ではありません。
・本演習は、芸術談義・音楽談義を繰り広げる場ではなく、むしろそうした談義的文化の背景にあるもの、嗜好品と社会とのかかわり、アイデンティティを構成するものとしての排他性について考える場所です。よって演習で鍛えられるのは「誰もがわかる言葉で事柄を説明できる能力」の方であり、知識の量で相手を圧倒するような態度は評価の対象外です。
・メディア技術の発展のおかげで、今や音楽は最も安価（＝タダ同然で手に入るように思えるもの）なコンテンツのひとつになりました。演習ではもちろんそうした現象についても批判的な検討を試みますが、著作権は絶対に守って下さい。もちろん音楽以外の著作権についても同様です。

【Outline (in English)】
This course deals with pop culture as well as impact of COVID-19 on the cultural and creative sectors especially popular music like Rock, Pops, Punk, Hip-Hop, EDM, House/Techno/Rave, J-Pop/Idol or K-Pop etc.; how "bring us together"-culture like popular music should/could be with "new normal"? It also enhances recognition of their forming condition in our society along with relationship between art and people. The participants are expected to explain basic concepts of modern art, pop culture, popular music and media studies. They are also expected to be able to evaluate or explain changes in the media environment and its influences into art and culture related with our dairy life. The aims of this seminar are to be able to discuss and imagine not-understandable actual situation of our living world and to realize how complex the relationship is between art/culture and politics by which our dairy lives are affected unconsciously. The key words of this seminar are: "media"/"technologies", "empathy"/"sympathy", "sense of unity", "body" and "identity". The participants are evaluated through presentations, writing reports and discussion each times.
【Grading Criteria /Policy】
2nd and 3rd year students
Report assignment:50％
Research Presentation and contribution to discussion in the class;50％
4th year students
Report assignment;40％
Research presentation and contribution to discussion in the class;60％
Preparatory study and review time for this class are 2 hours.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

林　志津江

サブタイトル：ポップ・カルチャー／ポピュラー音楽の系譜
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
あなたは自分の「好み」に関する自覚を持っていますか。あなたの日常を彩るSNSなどのメディアを通じて、あなたは誰と何を共有し、誰に向けて何を伝えようとしているのでしょう？ 私たちが「〜を好き」な者同士で「繋がれる」と思ってしまうのはなぜでしょうか。私たちの生きる社会において、音楽は時に熱狂や共感を誘う原動力であり続けてきました。ロック、ポップス、パンク、ソウル、ヒップホップ、アイドル、J-POP、K-POP、アニソン、EDM、テクノ＆レイヴ、エレクトロニカ、アンビエント・・・。この演習で主に扱うのは、「集う」「嗜好する」文化の典型であるポピュラー音楽とポップ・カルチャーの諸形式です。嗜好とそれに関するコミュニケーション行為を通じて、人々は「つながり」「アイデンティティ」「共感」などの感情に出逢います。この演習では、音楽やポップ・カルチャーの成立要素を分析しながら、インターネットやSNSをめぐる諸現象、流行の諸形式やファンダムの行動様式など、文化とメディアを通して見える社会のあり方にするどく迫ります。

【到達目標】
・あらゆる美的形式（音楽、映像、文学、ダンス、舞台、マンガ、アニメ、ゲーム、造形芸術、その他何でも）に軽やかにアクセスできる、自分が「いい」と思えるものを追いかけるフットワークを持てること。
・メディアの構造やポピュラー音楽の基本構成要素、モダニズムの形式に関する知識を得て、批判的な洞察を行うことができる。
・文化研究の諸概念、「記憶」「世代」「身体」「アイデンティティ」「文化受容」等の概念の意味、ポップ・カルチャー（拡大芸術）の歴史的展開を理解することができる。
・ポピュラー音楽／ポップ・カルチャーという現象の特質や、個々の作品やシーンに関するテーマで、論理的に明解でまとまった自分のテーゼを提示できる。
・良い観察者、良いリスナーになれる。ミュージシャン／作曲家と批評家の関係、正当な批評とは何か、芸術批評は印象批評を超えることができるのか、多様化する芸術形式をめぐる問題について思考できる。
・芸術と政治・社会との関わりとその困難に対し、誠実な想像力を持つことができ、それに関する自身の思考を言語化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習形式です。両学期とも輪読と研究発表を並行して進めます。
・参加者は授業終了後に「振り返り」コメントを提出します。提出されたコメントに対し、次回授業時にサマリー形式でフィードバックを行います。
・参加者は各学期必ず研究発表を行います。
・春学期は、輪読を通じてポピュラー音楽をめぐる概念と通史にアプローチするとともに研究発表のトライアルを行います。秋学期は春学期の内容を深めつつ自身のテーマで研究発表に挑戦します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション―「ポピュラー音楽」と「ポップカルチャー」	研究発表の分担決定、「音楽」「文化」について日頃感じていること、「ポピュラー音楽」じゃない音楽って何？ ポピュラー音楽とポップカルチャー
2	【第１部：リズム】（第１章）ヒット曲が持つ「４つの条件」	「ヒット曲」とは？、ヒット曲の「４つの条件」、リズムと「ヒット曲」の関係
3	（第２章）「リズム」	「ビート」と「リズム」、「テンポ」とBPM、音価の表現性、「グルーヴ」と「スウィング」
4	（第３章）リズムの生命力	「裏切りのリズム」、感情とテンポ、ボーカルとシンコペーションの関係、フレーズ・リズム・拍
5	（第４章・第５章）リズムの魅力と一体感	「リズム」が作り出す魅力と「気持ちよさ」というダイナミクス、「わかりやすさ」、変拍子あるいは繰り返しクラーベとシンコペーション、歌詞とフィットするリズム、表現、言葉とリズム、リズムの表現する「世界」
6	（第６章）リズムの恩恵	音楽がもたらす恩恵とは？「まとまり」の話、リズムと「意味」、リズムと「型」、「整った」リズム
7	（第７章）まとめー「４つの条件」の実践	「４つの条件」を兼ね備えた歌：「もっと聴きたい」、「一体感」、ドラムとベースが誘う世界、リズムと「４つの条件」
8	【第２部：音楽と社会①】音楽と社会（１）―テクノロジーの夜明け	大量生産・大量消費時代の幕開け、著作権とレコード（フォノグラフ、グラモフォン）の誕生
9	音楽と社会（２）―技術革新とメディアの変容	戦争とラジオとマイクロフォン、映画館とダンスホール、ジャズ・エイジの到来、楽曲形式（２）
10	音楽と社会（３）―若者・階級・音楽	余暇の誕生、中産階級の産み出した若者世代、ラジオと「音楽番組」
11	音楽と社会（４）―新しいメディア・新しい音楽	大量消費社会と「アメリカ」の時代、「ティーンエイジャー」の誕生とロックンロール
12	音楽と社会（５）―ラジオとテレビと映画と音楽	「スター」を求めて、音楽番組のための音楽、「LPレコード」と「ドーナツ盤（45回転シングル）」
13	【第３部：音楽と社会②】人種と階級（１）―音楽が社会を変革する？	ロックンロールからロックへ、フォークソングとビートニク、「レイス」から「ソウル」へ
14	人種と階級（２）―カウンターカルチャーの台頭	「追っかけ」という人々、ロックの市場価値、FMラジオとヒットチャート、ヴェトナム戦争と音楽フェスティバル
15	人種と階級（３）―「抵抗の証」が一大文化産業になる	「ポップ戦略」とブリティッシュ・インヴェイジョン、「アートスクール」から世界へ
16	人種と階級（４）―労働者階級の誇りと人間の尊厳	「パンクはアティテュードだ」、スカとレゲエの存在理由、「ソウル」から「ファンク」へ

17	人種と階級（5）— レイヴ・ドラッグ・インディーズ、サンプリングあるいは冷戦の終結	「バンドエイド」の真実、「舞台の下で」つながる、クラブとレイヴ／DJというアーティスト、ヒップ・ホップという生き方、ハウス／テクノが興隆する理由
18	人種と階級（6）— ダンスと音楽とMTV、見る音楽とセクシュアリティの関係	疲弊する工業都市の文化、ディスコと「見る音楽」、「女性ロックミュージシャン」という職業
19	日本のポピュラー音楽（1）—「日本のロック」— 洋楽VS.邦楽	グループサウンズと「アメリカ」、ロックかフォークか？「はっぴいえんど」の登場と「日本」というコンテンツ
20	日本のポピュラー音楽（2）—「ガラパゴス化」の起源・記号化するアイドル	歌謡曲とニュー・ミュージック、「テレビに出ない」、「清く正しく美しい」スターたち
21	日本のポピュラー音楽（3）— J-POPとバンドとインストアライブ、「スター」から「推し」の時代へ	アイドルの「オタク」、「渋谷系」と蒐集する文化、Wi-fiとYoutube、iTunesからストリーミングへ、会いに行けるアイドルとK-POPの目指す世界
22	【第4部】研究発表（1）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
23	研究発表（2）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
24	研究発表（3）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
25	研究発表（4）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
26	研究発表（5）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
27	研究発表（6）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
28	研究発表（7）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・自分にとって楽しめるもの、興味のあるもの／ことに没頭して、知識と経験を増やすこと。
・各自に必要な文献を読み、研究発表の準備のための資料にアクセスすること。
・自分にとって大切な外国語（もちろんSA先言語を含む）をしっかり勉強すること。
・毎日活字に目を通す、特に日刊紙を読むこと。
・あなたの日常そのものが、あなたの選ぶ学びのテーマにつながっています。この演習に参加した経験が、充実した日々の営みとなり、自分の人生の糧となることに自信を持ってください。
・自分が何かを大切に思っていること、人と話す時間を愛しんでください。あらゆることに積極的にチャレンジして、心揺さぶられる体験にたくさんめぐりあってください。

【テキスト（教科書）】

・毛利嘉孝『ポピュラー音楽と資本主義 増補』（せりか書房）2012年
・西兼志『アイドル／メディア論講義』（東京大学出版会）2017年
・長崎励朗『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学: 愉しい音楽の語り方』（創元社）2021年
・ドクター・キャピタル『ヒット曲のリズムの秘密』（集英社インターナショナル）2022年

【参考書】

・マーシャル・マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年
・ヴァルター.・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（1）』（筑摩書房、1995年/1996年所収）
・Th.-W. アドルノ（三光長治・高辻知義訳）『不協和音 — 管理社会における音楽』（平凡社）1998年／Th.-W. アドルノ（高辻知義・渡辺健訳）『音楽社会学序説』（平凡社）1999年
・J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『象徴交換と死』（筑摩書房）1992年／J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『消費社会の神話と構造 新装版』（紀伊国屋書店）2015年
・ギー・ドゥボール（木下誠訳）『スペクタクルの社会』（筑摩書房）2003年
・セリーナ・トッド（近藤康裕訳）『ザ・ピープル イギリス労働者階級の盛衰』（みすず書房）2016年
・ヨッヘン・ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年
・ポール・ブルーム（大橋洋訳）『反共感論』（白揚社）2018年
・ピエール・ブルデュー（石井洋二郎役）『ディスタンクシオン〈普及版〉I〔社会的判断力批判』『ディスタンクシオン〈普及版〉II〔社会的判断力批判〕』（藤原書店）2020年
・ティム・インゴルド（奥野克己・鹿野マティアス訳）『世代とは何か』（亜紀書房）2024年
・池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論』（講談社）1994年
・見田宗介『現代社会の理論: 情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波書店）1996年
・北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か: 不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』（書肆侃侃房）2019年
・今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』（中央公論新社）2023年
・小倉孝誠（編）『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社）2023年
***
・ヘンリー・プレザンツ（片岡義男訳）『音楽の革命 — バロック・ジャズ・ビートルズ』（晶文社）1971年
・サイモン・フリス（細川周平・竹田賢一訳）『サウンドの力 — 若者・余暇・ロックの政治学』（晶文社）1991年
・ディック・ヘブディジ（山口淑子訳）『サブカルチャー スタイルの意味するもの』（未来社）1986/1999年
・スーザン・マクレアリ（女性と音楽研究フォーラム訳）『フェミニン・エンディング　音楽・ジェンダー・セクシュアリティ』（新水社）1997年
・ピーター・ファン＝デル＝マーヴェ（中村とうよう訳／横関裕子・守屋純子協力）『ポピュラー音楽の基礎理論』（ミュージックマガジン社）1999年
・ジェイソン・トインビー（安田昌弘訳）『ポピュラー音楽をつくる — ミュージシャン・創造性・制度』（みすず書房）2004年
・ウルフ・ポーシャルト（原克訳）『DJカルチャー　ポップカルチャーの思想史』（三元社）2004年
・ニール・ガブラー（中谷和男訳）『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』（ダイヤモンド社）2007年
・クリストファー・スモール（野澤豊一・西島千尋訳）『ミュージッキング — 音楽は"行為"である』（水声社）2011年
・ジェフ・チャン／DJクール・ハーク（押野素子訳）『ヒップホップ・ジェネレーション（新装版）』（リットー・ミュージック）2016年
・スティーヴン・ウィット（関美和訳）『誰が音楽をタダにした? — 巨大産業をぶっ潰した男たち』（早川書房）2016/2018年
・ゾーイ・フラード＝ブラナー／アーロン・M・グレイザー（関美和訳）『ファンダム・レボリューション — SNS時代の新たな熱狂』（早川書房）2017年
・キム・ヨンデ（桑畑優香訳）『BTSを読む　なぜ世界を夢中にさせるのか』（柏書房）2020年
・マシュー・コリン（坂本真理子訳）『レイヴ・カルチャー エクスタシー文化とアシッド・ハウスの物語』（Pヴァイン）2021年
・ジェイソン・ドーシー／デニス・ヴィラ（門脇弘典訳）『Z世代マーケティング 世界を激変させるニュー・ノーマル』（ハーパーコリンズ ジャパン）2021年
・チャ・ミンジュ（桑畑優香訳）『BTSを哲学する』（かんき出版）2022年
・J. D. ・ヴァンス（関根光宏・山田文訳）『ヒルビリー・エレジー〜アメリカの繁栄から取り残された白人たち〜』（光文社）2022年
・アーロン・コーエン（夏目大訳）『シカゴ・ソウルはどう世界を変えたのか — 黒人文化運動と音楽ビジネスの変革史』（亜紀書房）2023年
・ポール・ゴーマン（川田倫代訳）『評伝　マルコム・マクラーレン』（イースト・プレス）2024年
・ビル・ブルースター／フランク・ブロートン（島田陽子ほか訳）『そして、みんなクレイジーになっていく DJカルチャーとクラブ・ミュージックの100年史（増補改訂版）』（DU Books）2024年
・スーザン・ロジャース／オギ・オーガス（中川泉訳）『あなたがあの曲を好きなわけ:「音楽の好み」がわかる七つの要素』（化学同人）2024年
・アンガス・フレッチャー（田畑暁生訳）『世界はナラティブでできている: なぜ物語思考が重要なのか』（青土社）2024年

・アレックス・ニヴン（中村明美訳）『オアシスの階級闘争《Definitely Maybe》で読み解く、音楽とポピュリズム』（DU BOOKS）2025年
・見田宗介『近代日本の心情の歴史 — 流行歌の社会心理史』（講談社）1978年
・小泉文夫『日本の音 世界のなかの日本音楽』（青土社）1978年／（平凡社）1994/2017年
・小泉文夫『歌謡曲の構造』（冬樹社）1984年／（平凡社）1996年
・池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店）1984年
・中村とうよう『大衆音楽の真実』（ミュージックマガジン社）1985年
・小川博司『音楽する社会』（勁草書房）1988年
・渡辺裕『聴衆の誕生 — ポスト・モダン時代の音楽文化』（中央公論新社）1989年
・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』（岩波書店）1999年
・渡辺潤『アイデンティティの音楽 メディア、若者、ポピュラー文化』（世界思想社）2000年
・東浩紀『動物化するポストモダン — オタクから見た日本社会』（講談社）2001年
・東谷護（編著）『ポピュラー音楽へのまなざし』（勁草書房）2003年
・竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中央公論新社）2003年
・生明俊雄『ポピュラー音楽は誰が作るのか — 音楽産業の政治学』（勁草書房）2004年
・烏賀陽弘道『J-POPとは何か — 巨大化する音楽産業』（岩波書店）2005年
・増田聡『聴衆をつくる — 音楽批評の解体文法』（青土社）2006年
・行川和彦『パンク・ロック/ハードコア史』（リットー・ミュージック）2007年
・東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生　動物化するポストモダン２』（講談社）2007年
・大塚英志／東浩紀『リアルのゆくえ — おたく オタクはどう生きるか』（講談社）2008年
・宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房）2008/2011年
・大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店）2008年
・森正人『大衆音楽史: ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』（中央公論新社）2008年
・菊池清麿『日本流行歌変遷史 — 歌謡曲の誕生からJ・ポップの時代へ』（論創社）2008年
・前川洋一郎（編著）『カラオケ進化論』（廣済堂）2009年
・上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか — 教育と音楽の大衆社会史』2010年
・輪島裕介『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光文社）2010年
・長谷川町蔵・大和田俊之『文化系のヒップホップ入門』（アルテスパブリッシング）2011年
・太田省一『アイドル進化論 — 南沙織から初音ミク、AKB 48まで』（筑摩書房）2011年
・大野佐紀子『アーティスト症候群 — アートと職人、クリエーターと芸能人』（河出書房新社）2011年
・大和田俊之『アメリカ音楽史 — ミンストレル・ショウ・ブルースからヒップホップまで』（講談社）2011年
・ピーター・バラカン『ピーターバラカン音楽日記』（集英社インターナショナル）2011年
・宮本直美『宝塚ファンの社会学: スターは劇場の外で作られる』（青弓社）2011年
・斎藤環『承認をめぐる病』（日本評論社）2013年
・小泉恭子『メモリースケープ あの頃を思い出す音楽』（みすず書房）2013年
・南田勝也『オルタナティヴロックの社会学』（花伝社）2014年
・マキタスポーツ『すべてのJ-POPはパクリである — 現代ポップス論考』（扶桑社）2014年
・ブレイディみかこ『ザ・レフト — UK左翼セレブ列伝』（Pヴァイン）2014年
・柴那典『初音ミクはなぜ世界を変えたのか？』（太田出版）2014年
・佐々木敦『ニッポンの音楽』（講談社）2014年
・東園子『宝塚・やおい・愛の読み替え — 女性とポピュラーカルチャーの社会学』（新曜社）2015年
・鈴木惣一郎『細野晴臣 録音術』（DU Books）2015年
・輪島裕介『踊る昭和歌謡 リズムからみる大衆音楽』（NHK出版）2015年
・太田省一『ジャニーズの正体 エンターテインメントの戦後史』（双葉社）2016年
・柴那典『ヒットの崩壊』（講談社）2016年
・ピーター・バラカン『ロックの英詩を読む — 世界を変える歌』（集英社インターナショナル）2016年
・谷口昭弘『ディズニー・ミュージック〜ディズニー映画 音楽の秘密』（スタイルノート）2016年
・石田英敬『大人のためのメディア論講義』（筑摩書房）2016年
・菊池清麿『昭和演歌の歴史: その群像と時代』（アルファベータブックス）2017年
・谷口ヨシキ『暗黒ディズニー入門』（コアマガジン）2017年
・中川和亮『ライブ・エンタテインメントの社会学 — イベントにおける「受け手（Participants）」のリアリティ』（五絃舎）2017年
・若尾裕『サステナブル・ミュージック』（アルテスパブリッシング）2017年
・山田陽一『響きあう身体: 音楽・グルーヴ・憑依』（春秋社）2017年
・牧村憲一・藤井丈司・柴那典『渋谷音楽図鑑』（太田出版）2017年
・毛利嘉孝（編著）他『アフター・ミュージッキング』（東京藝術大学出版会）2017年
・ジェームス・M・バーダマン／里中哲彦『はじめてのアメリカ音楽史』（筑摩書房）2018年
・金成玟『K-Pop — 新感覚のメディア』（岩波書店）2018年
・田中雄二『エレベーター・ミュージック・イン・ジャパン 日本のBGMの歴史』（DU Books）2018年
・田中雄二『AKB48とニッポンのロック〜秋元康アイドルビジネス論』（スモール出版）2018年
・藤井丈司『YMOのONGAKU』（アルテスパブリッシング）2019年
・ピーター・バラカン『新版 魂（ソウル）のゆくえ』（アルテスパブリッシング）2019年
・大谷能生『平成日本の音楽の教科書』（新曜社）2019年
・近田春夫『考えるヒット テーマはジャニーズ』（スモール出版）2019年
・山下壮起『ヒップホップ・レザレクション — ラップミュージックとキリスト教』（新教出版社）2019年
・ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）2019年
・石田英敬『記号論講義 — 日常生活批判のためのレッスン』（筑摩書房）2020年
・岡田暁生『音楽の危機 —《第九》が歌えなくなった日』（中公公論新社）2020年
・日比野啓『アメリカン・ミュージカルとその時代』（青土社）2020年
・大和田俊之・柳樂光隆・南田勝也『ポップ・ミュージックを語る10の視点』（アルテスパブリッシング）2020年
・國分功一郎／熊谷晋一郎『< 責任> の生成 — 中動態と当事者研究』（新曜社）2020年
・木村元『音楽が本になるとき: 聴くこと・読むこと・語らうこと』（木立の文庫）2020年
・瀬崎圭二『関西フォークとその時代: 声の対抗文化と現代詩』（青弓社）2021年
・延江浩『松本隆 言葉の教室』（マガジンハウス）2021年
・田家秀樹『風街とデラシネ　作詞家・松本隆の50年』（角川書店）2021年
・大和田俊之『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）2021年
・宮本直美『ミュージカルの歴史 — なぜ突然歌いだすのか』（中央公論新社）2022年
・永冨真梨・忠聡太・日高良祐（編）『クリティカル・ワード　ポピュラー音楽〈聴く〉を広げる・更新する』（フィルムアート社）2023年
・高増明（編）『ポピュラー音楽の社会経済学［第２版］』（ナカニシヤ出版）2023年
・木石岳『歌詞のサウンドテクスチャー うたをめぐる音声詞学論考』（白水社）2023年
・川崎大助『教養としてのパンク・ロック』（光文社）2023年
・田淵俊彦『混沌時代の新・テレビ論』（ポプラ社）2024年
・川上幸之介『パンクの系譜学』（書肆侃侃房）2024年
・小島智『検証・80年代日本のロック』（アルファベータブックス）2024年
・伊藤浩介『脳と音楽』（世界文化社）2024年
・宇野常寛『庭の話』（講談社）2024年
・輪島祐介・永冨真梨（編）『入門ポピュラー音楽の文化史：〈戦後日本〉を読み直す』（ミネルヴァ書房）2024年
・日高良祐（編）柴那典ほか（著）『シティ・ポップ文化論』（フィルムアート社）2024年

・喜多村雄一『報道しないメディア ― ジャニーズ性加害問題をめぐって』（岩波書店）2025年
・南田勝也『ライブミュージックの社会学』（青弓社）2025年
・野田努『完全版 ブラック・マシン・ミュージック ディスコ、ハウス、デトロイト・テクノ（上）／（下）』（河出書房新社）2025年
・難波優輝『物語化批判の哲学 〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（講談社）2025年
・鈴木貴歩『音楽ビジネス』（クロスメディア・パブリッシング）2025年
・南田勝也『ロックミュージックの社会学 決定版』（青弓社）2026年
その他適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
【２・３年生】（春学期）研究発表作成・プレゼンテーション・議論への貢献50％、レポート50％を基本ラインとし、授業への参加・貢献を総合的に判断します。（秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
【４年生】（春・秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生からの意見ヒアリングは逐次行い、意志の疎通と内容改善につとめます。

【その他の重要事項】
・夏季休暇中ないしその前後に、フィールドワーク（音楽フェス・音楽ライブ体験）とその事前・事後学習を行う予定です。
・フィールドワークは基本的に全員参加です。かかる費用は一人（一回）数千円～２万円程度、オンラインならその1/3～1/2程度で無料配信のものも数多くあります（この点に不安がある場合はぜひ担当者に事前に相談して下さるとありがたいです）。
・「教科書」の扱い方・詳細の大凡は、演習説明会ならびに各学期初回授業時に説明します。
・音楽を聴く習慣がある、音楽が「好き」という自覚のある方の参加はもちろん大歓迎です。しかし本演習は、そうでなければ参加できない場所では全くありません。演習の最大の目的は、興味がない人同士が議論しあえる場所であることです。
・自分の研究テーマについては、本演習の近接分野を自由に選んで構いません。一般的に「ポピュラー音楽」の範疇には入らない、古典的西洋音楽の形態（クラシック音楽）へのアプローチも可能です。
・音楽学（楽典、音楽理論）やデジタル音楽技術についての知識は特に必要ありませんが、それがあればより楽しめるテーマもありえます。また平易な音楽理論は楽曲分析に必要ですが、そこは発表者の説明次第で、参加者の誰もが理解できるはずです。
・音楽コンテンツを制作するという演習ではありません。
・本演習は、芸術談義・音楽談義を繰り広げる場ではなく、むしろそうした談義的文化の背景にあるもの、嗜好品と社会とのかかわり、アイデンティティを構成するものとしての排他性について考える場所です。よって演習で鍛えられるのは「誰もがわかる言葉で事柄を説明できる能力」の方であり、知識の量で相手を圧倒するような態度は評価の対象外です。
・メディア技術の発展のおかげで、今や音楽は最も安価（＝タダ同然で手に入るように思えるもの）なコンテンツのひとつになりました。演習ではもちろんそうした現象についても批判的な検討を試みますが、著作権は絶対に守って下さい。もちろん音楽以外の著作権についても同様です。

【Outline (in English)】
This course deals with pop culture as well as impact of COVID-19 on the cultural and creative sectors especially popular music like Rock, Pops, Punk, Hip-Hop, EDM, House/Techno/Rave, J-Pop/Idol or K-Pop etc.; how "bring us together"-culture like popular music should/could be with "new normal"? It also enhances recognition of their forming condition in our society along with relationship between art and people. The participants are expected to explain basic concepts of modern art, pop culture, popular music and media studies. They are also expected to be able to evaluate or explain changes in the media environment and its influences into art and culture related with our dairy life. The aims of this seminar are to be able to discuss and imagine not-understandable actual situation of our living world and to realize how complex the relationship is between art/culture and politics by which our dairy lives are affected unconsciously. The key words of this seminar are: "media"/"technologies", "empathy"/"sympathy", "sense of unity", "body" and "identity". The participants are evaluated through presentations, writing reports and discussion each times.
【Grading Criteria /Policy】
2nd and 3rd year students
Report assignment:50％
Research Presentation and contribution to discussion in the class;50％
4th year students
Report assignment;40％
Research presentation and contribution to discussion in the class;60％
Preparatory study and review time for this class are 2 hours.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

表象文化演習

林　志津江

サブタイトル：ポップ・カルチャー／ポピュラー音楽の系譜
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
あなたは自分の「好み」に関する自覚を持っていますか。あなたの日常を彩るSNSなどのメディアを通じて、あなたは誰と何を共有し、誰に向けて何を伝えようとしているのでしょう？ 私たちが「〜を好き」な者同士で「繋がれる」と思ってしまうのはなぜでしょうか。私たちの生きる社会において、音楽は時に熱狂や共感を誘う原動力であり続けてきました。ロック、ポップス、パンク、ソウル、ヒップホップ、アイドル、J-POP、K-POP、アニソン、EDM、テクノ＆レイヴ、エレクトロニカ、アンビエント・・・。この演習で主に扱うのは、「集う」「嗜好する」文化の典型であるポピュラー音楽とポップ・カルチャーの諸形式です。嗜好とそれに関するコミュニケーション行為を通じて、人々は「つながり」「アイデンティティ」「共感」などの感情に出逢います。この演習では、音楽やポップ・カルチャーの成立要素を分析しながら、インターネットやSNSをめぐる諸現象、流行の諸形式やファンダムの行動様式など、文化とメディアを通して見える社会のあり方にするどく迫ります。

【到達目標】
・あらゆる美的形式（音楽、映像、文学、ダンス、舞台、マンガ、アニメ、ゲーム、造形芸術、その他何でも）に軽やかにアクセスできる、自分が「いい」と思えるものを追いかけるフットワークを持てること。
・メディアの構造やポピュラー音楽の基本構成要素、モダニズムの形式に関する知識を得て、批判的な洞察を行うことができる。
・文化研究の諸概念、「記憶」「世代」「身体」「アイデンティティ」「文化受容」等の概念の意味、ポップ・カルチャー（拡大芸術）の歴史的展開を理解することができる。
・ポピュラー音楽／ポップ・カルチャーという現象の特質や、個々の作品やシーンに関するテーマで、論理的に明解でまとまった自分のテーゼを提示できる。
・良い観察者、良いリスナーになれる。ミュージシャン／作曲家と批評家の関係、正当な批評とは何か、芸術批評は印象批評を超えることができるのか、多様化する芸術形式をめぐる問題について思考できる。
・芸術と政治・社会との関わりとその困難に対し、誠実な想像力を持つことができ、それに関する自身の思考を言語化することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習形式です。両学期とも輪読と研究発表を並行して進めます。
・参加者は授業終了後に「振り返り」コメントを提出します。提出されたコメントに対し、次回授業時にサマリー形式でフィードバックを行います。
・参加者は各学期必ず研究発表を行います。
・春学期は、輪読を通じてポピュラー音楽をめぐる概念と通史にアプローチするとともに研究発表のトライアルを行います。秋学期は春学期の内容を深めつつ自身のテーマで研究発表に挑戦します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション―「ポピュラー音楽」と「ポップカルチャー」	研究発表の分担決定、「音楽」「文化」について日頃感じていること、「ポピュラー音楽」じゃない音楽って何？ ポピュラー音楽とポップカルチャー
2	【第１部：リズム】（第１章）ヒット曲が持つ「４つの条件」	「ヒット曲」とは？、ヒット曲の「４つの条件」、リズムと「ヒット曲」の関係
3	（第２章）「リズム」	「ビート」と「リズム」、「テンポ」とBPM、音価の表現性、「グルーヴ」と「スウィング」
4	（第３章）リズムの生命力	「裏切りのリズム」、感情とテンポ、ボーカルとシンコペーションの関係、フレーズ・リズム・拍
5	（第４章・第５章）リズムの魅力と一体感	「リズム」が作り出す魅力と「気持ちよさ」というダイナミクス、「わかりやすさ」、変拍子あるいは繰り返しクラーベとシンコペーション、歌詞とフィットするリズム、表現、言葉とリズム、リズムの表現する「世界」
6	（第６章）リズムの恩恵	音楽がもたらす恩恵とは？「まとまり」の話、リズムと「意味」、リズムと「型」、「整った」リズム
7	（第７章）まとめー「４つの条件」の実践	「４つの条件」を兼ね備えた歌：「もっと聴きたい」、「一体感」、ドラムとベースが誘う世界、リズムと「４つの条件」
8	【第２部：音楽と社会①】音楽と社会（１）―テクノロジーの夜明け	大量生産・大量消費時代の幕開け、著作権とレコード（フォノグラフ、グラモフォン）の誕生
9	音楽と社会（２）―技術革新とメディアの変容	戦争とラジオとマイクロフォン、映画館とダンスホール、ジャズ・エイジの到来、楽曲形式（２）
10	音楽と社会（３）―若者・階級・音楽	余暇の誕生、中産階級の産み出した若者世代、ラジオと「音楽番組」
11	音楽と社会（４）―新しいメディア・新しい音楽	大量消費社会と「アメリカ」の時代、「ティーンエイジャー」の誕生とロックンロール
12	音楽と社会（５）―ラジオとテレビと映画と音楽	「スター」を求めて、音楽番組のための音楽、「LPレコード」と「ドーナツ盤（45回転シングル）」
13	【第３部：音楽と社会②】人種と階級（１）―音楽が社会を変革する？	ロックンロールからロックへ、フォークソングとビートニク、「レイス」から「ソウル」へ
14	人種と階級（２）―カウンターカルチャーの台頭	「追っかけ」という人々、ロックの市場価値、FMラジオとヒットチャート、ヴェトナム戦争と音楽フェスティバル
15	人種と階級（３）―「抵抗の証」が一大文化産業になる	「ポップ戦略」とブリティッシュ・インヴェイジョン、「アートスクール」から世界へ
16	人種と階級（４）―労働者階級の誇りと人間の尊厳	「パンクはアティテュードだ」、スカとレゲエの存在理由、「ソウル」から「ファンク」へ

17	人種と階級（5）— レイヴ・ドラッグ・インディーズ、サンプリングあるいは冷戦の終結	「バンドエイド」の真実、「舞台の下で」つながる、クラブとレイヴ／DJというアーティスト、ヒップ・ホップという生き方、ハウス／テクノが興隆する理由
18	人種と階級（6）— ダンスと音楽とMTV、見る音楽とセクシュアリティの関係	疲弊する工業都市の文化、ディスコと「見る音楽」、「女性ロックミュージシャン」という職業
19	日本のポピュラー音楽（1）—「日本のロック」— 洋楽VS.邦楽	グループサウンズと「アメリカ」、ロックかフォークか？「はっぴいえんど」の登場と「日本」というコンテンツ
20	日本のポピュラー音楽（2）—「ガラパゴス化」の起源・記号化するアイドル	歌謡曲とニュー・ミュージック、「テレビに出ない」、「清く正しく美しい」スターたち
21	日本のポピュラー音楽（3）— J-POPとバンドとインストアライブ、「スター」から「推し」の時代へ	アイドルの「オタク」、「渋谷系」と蒐集する文化、Wi-fiとYoutube、iTunesからストリーミングへ、会いに行けるアイドルとK-POPの目指す世界
22	【第4部】研究発表（1）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
23	研究発表（2）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
24	研究発表（3）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
25	研究発表（4）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
26	研究発表（5）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
27	研究発表（6）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う
28	研究発表（7）	各分担者の選んだテーマに沿って研究発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
・自分にとって楽しめるもの、興味のあるもの／ことに没頭して、知識と経験を増やすこと。
・各自に必要な文献を読み、研究発表の準備のための資料にアクセスすること。
・自分にとって大切な外国語（もちろんSA先言語を含む）をしっかり勉強すること。
・毎日活字に目を通す、特に日刊紙を読むこと。
・あなたの日常そのものが、あなたの選ぶ学びのテーマにつながっています。この演習に参加した経験が、充実した日々の営みとなり、自分の人生の糧となることに自信を持ってください。
・自分が何かを大切に思っていること、人と話す時間を愛しんでください。あらゆることに積極的にチャレンジして、心揺さぶられる体験にたくさんめぐりあってください。

【テキスト（教科書）】

・毛利嘉孝『ポピュラー音楽と資本主義 増補』（せりか書房）2012年
・西兼志『アイドル／メディア論講義』（東京大学出版会）2017年
・長崎励朗『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学: 愉しい音楽の語り方』（創元社）2021年
・ドクター・キャピタル『ヒット曲のリズムの秘密』（集英社インターナショナル）2022年

【参考書】

・マーシャル・マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年
・ヴァルター.・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（1）』（筑摩書房、1995年/1996年所収）
・Th.-W. アドルノ（三光長治・高辻知義訳）『不協和音 — 管理社会における音楽』（平凡社）1998年／Th.-W. アドルノ（高辻知義・渡辺健訳）『音楽社会学序説』（平凡社）1999年
・J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『象徴交換と死』（筑摩書房）1992年／J.・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『消費社会の神話と構造 新装版』（紀伊国屋書店）2015年
・ギー・ドゥボール（木下誠訳）『スペクタクルの社会』（筑摩書房）2003年
・セリーナ・トッド（近藤康裕訳）『ザ・ピープル イギリス労働者階級の盛衰』（みすず書房）2016年
・ヨッヘン・ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年
・ポール・ブルーム（大橋洋訳）『反共感論』（白揚社）2018年
・ピエール・ブルデュー（石井洋二郎役）『ディスタンクシオン〈普及版〉I〔社会的判断力批判』『ディスタンクシオン〈普及版〉II〔社会的判断力批判〕』（藤原書店）2020年
・ティム・インゴルド（奥野克己・鹿野マティアス訳）『世代とは何か』（亜紀書房）2024年
・池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論』（講談社）1994年
・見田宗介『現代社会の理論: 情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波書店）1996年
・北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か: 不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』（書肆侃侃房）2019年
・今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』（中央公論新社）2023年
・小倉孝誠（編）『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社）2023年
***
・ヘンリー・プレザンツ（片岡義男訳）『音楽の革命 — バロック・ジャズ・ビートルズ』（晶文社）1971年
・サイモン・フリス（細川周平・竹田賢一訳）『サウンドの力 — 若者・余暇・ロックの政治学』（晶文社）1991年
・ディック・ヘブディジ（山口淑子訳）『サブカルチャー スタイルの意味するもの』（未来社）1986/1999年
・スーザン・マクレアリ（女性と音楽研究フォーラム訳）『フェミニン・エンディング　音楽・ジェンダー・セクシュアリティ』（新水社）1997年
・ピーター・ファン＝デル＝マーヴェ（中村とうよう訳／横関裕子・守屋純子協力）『ポピュラー音楽の基礎理論』（ミュージックマガジン社）1999年
・ジェイソン・トインビー（安田昌弘訳）『ポピュラー音楽をつくる — ミュージシャン・創造性・制度』（みすず書房）2004年
・ウルフ・ポーシャルト（原克訳）『DJカルチャー　ポップカルチャーの思想史』（三元社）2004年
・ニール・ガブラー（中谷和男訳）『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』（ダイヤモンド社）2007年
・クリストファー・スモール（野澤豊一・西島千尋訳）『ミュージッキング — 音楽は"行為"である』（水声社）2011年
・ジェフ・チャン／DJクール・ハーク（押野素子訳）『ヒップホップ・ジェネレーション（新装版）』（リットー・ミュージック）2016年
・スティーヴン・ウィット（関美和訳）『誰が音楽をタダにした? — 巨大産業をぶっ潰した男たち』（早川書房）2016/2018年
・ゾーイ・フラード＝ブラナー／アーロン・M・グレイザー（関美和訳）『ファンダム・レボリューション — SNS時代の新たな熱狂』（早川書房）2017年
・キム・ヨンデ（桑畑優香訳）『BTSを読む　なぜ世界を夢中にさせるのか』（柏書房）2020年
・マシュー・コリン（坂本真理子訳）『レイヴ・カルチャー エクスタシー文化とアシッド・ハウスの物語』（Pヴァイン）2021年
・ジェイソン・ドーシー／デニス・ヴィラ（門脇弘典訳）『Z世代マーケティング 世界を激変させるニュー・ノーマル』（ハーパーコリンズ ジャパン）2021年
・チャ・ミンジュ（桑畑優香訳）『BTSを哲学する』（かんき出版）2022年
・J. D.・ヴァンス（関根光宏・山田文訳）『ヒルビリー・エレジー〜アメリカの繁栄から取り残された白人たち〜』（光文社）2022年
・アーロン・コーエン（夏目大訳）『シカゴ・ソウルはどう世界を変えたのか — 黒人文化運動と音楽ビジネスの変革史』（亜紀書房）2023年
・ポール・ゴーマン（川田倫代訳）『評伝　マルコム・マクラーレン』（イースト・プレス）2024年
・ビル・ブルースター／フランク・ブロートン（島田陽子ほか訳）『そして、みんなクレイジーになっていく DJカルチャーとクラブ・ミュージックの100年史（増補改訂版）』（DU Books）2024年
・スーザン・ロジャース／オギ・オーガス（中川泉訳）『あなたがあの曲を好きなわけ:「音楽の好み」がわかる七つの要素』（化学同人）2024年
・アンガス・フレッチャー（田畑暁生訳）『世界はナラティブでできている: なぜ物語思考が重要なのか』（青土社）2024年

・アレックス・ニヴン（中村明美訳）『オアシスの階級闘争《Definitely Maybe》で読み解く、音楽とポピュリズム』（DU BOOKS）2025年
・見田宗介『近代日本の心情の歴史 — 流行歌の社会心理史』（講談社）1978年
・小泉文夫『日本の音 世界のなかの日本音楽』（青土社）1978年／（平凡社）1994/2017年
・小泉文夫『歌謡曲の構造』（冬樹社）1984年／（平凡社）1996年
・池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店）1984年
・中村とうよう『大衆音楽の真実』（ミュージックマガジン社）1985年
・小川博司『音楽する社会』（勁草書房）1988年
・渡辺裕『聴衆の誕生 — ポスト・モダン時代の音楽文化』（中央公論新社）1989年
・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』（岩波書店）1999年
・渡辺潤『アイデンティティの音楽 メディア、若者、ポピュラー文化』（世界思想社）2000年
・東浩紀『動物化するポストモダン — オタクから見た日本社会』（講談社）2001年
・東谷護（編著）『ポピュラー音楽へのまなざし』（勁草書房）2003年
・竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中央公論新社）2003年
・生明俊雄『ポピュラー音楽は誰が作るのか — 音楽産業の政治学』（勁草書房）2004年
・烏賀陽弘道『J-POPとは何か — 巨大化する音楽産業』（岩波書店）2005年
・増田聡『聴衆をつくる — 音楽批評の解体文法』（青土社）2006年
・行川和彦『パンク・ロック/ハードコア史』（リットー・ミュージック）2007年
・東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生　動物化するポストモダン２』（講談社）2007年
・大塚英志／東浩紀『リアルのゆくえ — おたく オタクはどう生きるか』（講談社）2008年
・宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房）2008/2011年
・大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店）2008年
・森正人『大衆音楽史: ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』（中央公論新社）2008年
・菊池清麿『日本流行歌変遷史 — 歌謡曲の誕生からJ・ポップの時代へ』（論創社）2008年
・前川洋一郎（編著）『カラオケ進化論』（廣済堂）2009年
・上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか — 教育と音楽の大衆社会史』2010年
・輪島裕介『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光文社）2010年
・長谷川町蔵・大和田俊之『文化系のヒップホップ入門』（アルテスパブリッシング）2011年
・太田省一『アイドル進化論 — 南沙織から初音ミク、AKB 48まで』（筑摩書房）2011年
・大野佐紀子『アーティスト症候群 — アートと職人、クリエーターと芸能人』（河出書房新社）2011年
・大和田俊之『アメリカ音楽史 — ミンストレル・ショウ・ブルースからヒップホップまで』（講談社）2011年
・ピーター・バラカン『ピーターバラカン音楽日記』（集英社インターナショナル）2011年
・宮本直美『宝塚ファンの社会学: スターは劇場の外で作られる』（青弓社）2011年
・斎藤環『承認をめぐる病』（日本評論社）2013年
・小泉恭子『メモリースケープ あの頃を思い出す音楽』（みすず書房）2013年
・南田勝也『オルタナティヴロックの社会学』（花伝社）2014年
・マキタスポーツ『すべてのJ-POPはパクリである ― 現代ポップス論考』（扶桑社）2014年
・ブレイディみかこ『ザ・レフト — UK左翼セレブ列伝』（Pヴァイン）2014年
・柴那典『初音ミクはなぜ世界を変えたのか？』（太田出版）2014年
・佐々木敦『ニッポンの音楽』（講談社）2014年
・東園子『宝塚・やおい・愛の読み替え — 女性とポピュラーカルチャーの社会学』（新曜社）2015年
・鈴木惣一郎『細野晴臣 録音術』（DU Books）2015年
・輪島裕介『踊る昭和歌謡 リズムからみる大衆音楽』（NHK出版）2015年
・太田省一『ジャニーズの正体 エンターテインメントの戦後史』（双葉社）2016年
・柴那典『ヒットの崩壊』（講談社）2016年
・ピーター・バラカン『ロックの英詩を読む — 世界を変える歌』（集英社インターナショナル）2016年
・谷口昭弘『ディズニー・ミュージック〜ディズニー映画 音楽の秘密』（スタイルノート）2016年
・石田英敬『大人のためのメディア論講義』（筑摩書房）2016年
・菊池清麿『昭和演歌の歴史: その群像と時代』（アルファベータブックス）2017年
・谷口ヨシキ『暗黒ディズニー入門』（コアマガジン）2017年
・中川和亮『ライブ・エンタテインメントの社会学 — イベントにおける「受け手（Participants）」のリアリティ』（五絃舎）2017年
・若尾裕『サステナブル・ミュージック』（アルテスパブリッシング）2017年
・山田陽一『響きあう身体: 音楽・グルーヴ・憑依』（春秋社）2017年
・牧村憲一・藤井丈司・柴那典『渋谷音楽図鑑』（太田出版）2017年
・毛利嘉孝（編著）他『アフター・ミュージッキング』（東京藝術大学出版会）2017年
・ジェームス・M・バーダマン／里中哲彦『はじめてのアメリカ音楽史』（筑摩書房）2018年
・金成玟『K-Pop — 新感覚のメディア』（岩波書店）2018年
・田中雄二『エレベーター・ミュージック・イン・ジャパン 日本のBGMの歴史』（DU Books）2018年
・田中雄二『AKB48とニッポンのロック〜秋元康アイドルビジネス論』（スモール出版）2018年
・藤井丈司『YMOのONGAKU』（アルテスパブリッシング）2019年
・ピーター・バラカン『新版 魂（ソウル）のゆくえ』（アルテスパブリッシング）2019年
・大谷能生『平成日本の音楽の教科書』（新曜社）2019年
・近田春夫『考えるヒット テーマはジャニーズ』（スモール出版）2019年
・山下壮起『ヒップホップ・レザレクション — ラップミュージックとキリスト教』（新教出版社）2019年
・ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）2019年
・石田英敬『記号論講義 — 日常生活批判のためのレッスン』（筑摩書房）2020年
・岡田暁生『音楽の危機 —《第九》が歌えなくなった日』（中公公論新社）2020年
・日比野啓『アメリカン・ミュージカルとその時代』（青土社）2020年
・大和田俊之・柳樂光隆・南田勝也『ポップ・ミュージックを語る10の視点』（アルテスパブリッシング）2020年
・國分功一郎／熊谷晋一郎『< 責任> の生成 — 中動態と当事者研究』（新曜社）2020年
・木村元『音楽が本になるとき: 聴くこと・読むこと・語らうこと』（木立の文庫）2020年
・瀬崎圭二『関西フォークとその時代: 声の対抗文化と現代詩』（青弓社）2021年
・延江浩『松本隆 言葉の教室』（マガジンハウス）2021年
・田家秀樹『風街とデラシネ　作詞家・松本隆の50年』（角川書店）2021年
・大和田俊之『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）2021年
・宮本直美『ミュージカルの歴史 — なぜ突然歌いだすのか』（中央公論新社）2022年
・永冨真梨・忠聡太・日高良祐（編）『クリティカル・ワード　ポピュラー音楽〈聴く〉を広げる・更新する』（フィルムアート社）2023年
・高増明（編）『ポピュラー音楽の社会経済学［第２版］』（ナカニシヤ出版）2023年
・木石岳『歌詞のサウンドテクスチャー うたをめぐる音声詞学論考』（白水社）2023年
・川崎大助『教養としてのパンク・ロック』（光文社）2023年
・田淵俊彦『混沌時代の新・テレビ論』（ポプラ社）2024年
・川上幸之介『パンクの系譜学』（書肆侃侃房）2024年
・小島智『検証・80年代日本のロック』（アルファベータブックス）2024年
・伊藤浩介『脳と音楽』（世界文化社）2024年
・宇野常寛『庭の話』（講談社）2024年
・輪島祐介・永冨真梨（編）『入門ポピュラー音楽の文化史：〈戦後日本〉を読み直す』（ミネルヴァ書房）2024年
・日高良祐（編）柴那典ほか（著）『シティ・ポップ文化論』（フィルムアート社）2024年

・喜多村雄一『報道しないメディア ― ジャニーズ性加害問題をめぐって』（岩波書店）2025年
・南田勝也『ライブミュージックの社会学』（青弓社）2025年
・野田努『完全版 ブラック・マシン・ミュージック ディスコ、ハウス、デトロイト・テクノ（上）／（下）』（河出書房新社）2025年
・難波優輝『物語化批判の哲学 〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（講談社）2025年
・鈴木貴歩『音楽ビジネス』（クロスメディア・パブリッシング）2025年
・南田勝也『ロックミュージックの社会学 決定版』（青弓社）2026年
その他適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
【２・３年生】（春学期）研究発表作成・プレゼンテーション・議論への貢献50％、レポート50％を基本ラインとし、授業への参加・貢献を総合的に判断します。（秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
【４年生】（春・秋学期）研究発表と授業への積極的な参加・貢献60％、レポート課題40％を基本ラインとし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生からの意見ヒアリングは逐次行い、意志の疎通と内容改善につとめます。

【その他の重要事項】
・夏季休暇中ないしその前後に、フィールドワーク（音楽フェス・音楽ライブ体験）とその事前・事後学習を行う予定です。
・フィールドワークは基本的に全員参加です。かかる費用は一人（一回）数千円～２万円程度、オンラインならその1/3～1/2程度で無料配信のものも数多くあります（この点に不安がある場合はぜひ担当者に事前に相談して下さるとありがたいです）。
・「教科書」の扱い方・詳細の大凡は、演習説明会ならびに各学期初回授業時に説明します。
・音楽を聴く習慣がある、音楽が「好き」という自覚のある方の参加はもちろん大歓迎です。しかし本演習は、そうでなければ参加できない場所では全くありません。演習の最大の目的は、興味がない人同士が議論しあえる場所であることです。
・自分の研究テーマについては、本演習の近接分野を自由に選んで構いません。一般的に「ポピュラー音楽」の範疇には入らない、古典的西洋音楽の形態（クラシック音楽）へのアプローチも可能です。
・音楽学（楽典、音楽理論）やデジタル音楽技術についての知識は特に必要ありませんが、それがあればより楽しめるテーマもありえます。また平易な音楽理論は楽曲分析に必要ですが、そこは発表者の説明次第で、参加者の誰もが理解できるはずです。
・音楽コンテンツを制作するという演習ではありません。
・本演習は、芸術談義・音楽談義を繰り広げる場ではなく、むしろそうした談義的文化の背景にあるもの、嗜好品と社会とのかかわり、アイデンティティを構成するものとしての排他性について考える場所です。よって演習で鍛えられるのは「誰もがわかる言葉で事柄を説明できる能力」の方であり、知識の量で相手を圧倒するような態度は評価の対象外です。
・メディア技術の発展のおかげで、今や音楽は最も安価（＝タダ同然で手に入るように思えるもの）なコンテンツのひとつになりました。演習ではもちろんそうした現象についても批判的な検討を試みますが、著作権は絶対に守って下さい。もちろん音楽以外の著作権についても同様です。

【Outline (in English)】
This course deals with pop culture as well as impact of COVID-19 on the cultural and creative sectors especially popular music like Rock, Pops, Punk, Hip-Hop, EDM, House/Techno/Rave, J-Pop/Idol or K-Pop etc.; how "bring us together"-culture like popular music should/could be with "new normal"? It also enhances recognition of their forming condition in our society along with relationship between art and people. The participants are expected to explain basic concepts of modern art, pop culture, popular music and media studies. They are also expected to be able to evaluate or explain changes in the media environment and its influences into art and culture related with our dairy life. The aims of this seminar are to be able to discuss and imagine not-understandable actual situation of our living world and to realize how complex the relationship is between art/culture and politics by which our dairy lives are affected unconsciously. The key words of this seminar are: "media"/"technologies", "empathy"/"sympathy", "sense of unity", "body" and "identity". The participants are evaluated through presentations, writing reports and discussion each times.
【Grading Criteria /Policy】
2nd and 3rd year students
Report assignment:50％
Research Presentation and contribution to discussion in the class;50％
4th year students
Report assignment;40％
Research presentation and contribution to discussion in the class;60％
Preparatory study and review time for this class are 2 hours.

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

副島　健作

サブタイトル：日本語教育のための日本語学
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語を母語としない学習者に日本語を教えるという側面から、日本語に関する知識の形成、日本語学習者の母語など他の言語との相違、コミュニケーションのための文法・語彙について考えを深める。また、「ポライトネス」理論によって、日本語の「語用論」的な機能について学ぶ。

【到達目標】
1）言語の実態と、一般的な母語話者が持っている言語的知識を区別する（日本語を客観的にとらえる）。
2）言語資料から言語的事象を取り出す方法を身につける。
3）広く相対的な観点から日本語を捉える方法を身につける。
4）相手の感情を害する誤用とはどういうものか、発話スタイルなど、誤用以外にも相手の感情に影響するものがあるか、考える。
5）言語には使用者や使用の状況、場面によって様々なヴァリエーションがあり、また言語そのものも刻一刻と変化していくものである。この問題についての考えを深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
まずは自分たちが母語をどのように使用しているかという実態を観察し、次に日本語言語学や語用論等の知見を応用して分析する。
　具体的には、授業計画であげたような項目について、観察をはじめる（ボトムアップのアプローチ）。同時に並行して理論書の講読をすすめていく（トップダウンのアプローチ）。
　最終的には、受講者の問題意識に応じて、現象の断片について個々に考察をすすめ、その都度授業内でフィードバックしていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション 具体的エピソード i	テキストの紹介・配布。 授業の進め方の確認。 外国人の日本語使用から「気づく」日本語の使用上の問題点を確認する。
第2回	具体的エピソード ii	第一回に引き続き、問題点を確認する。
第3回	文献購読　① 言語学の１分野としての日本語学／音声・音韻	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	文献講読　② 形態論（１）－形態素、語、品詞－／形態論（２）－活用－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第5回	文献講読　③ 格／文の構造と文法カテゴリー	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	文献講読　④ 主題と主語／ボイス（１）－受身と使役－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第7回	文献講読　⑤ ボイス（２）－授受－／自動詞と他動詞	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	文献講読　⑥ 時間を表す表現（１）－テンス－／時間を表す表現（２）	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第9回	文献講読　⑦ モダリティ／とりたて	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	文献講読　⑧ 複文（１）／複文（２）－因果関係	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第11回	文献講読　⑨ 名詞修飾／「のだ」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第12回	文献講読　⑩ 「は」と「が」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第13回	文献購読　⑪ 談話・テキスト	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第14回	春学期試験	春学期の内容に関する試験
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認。 これまで学んできた日本語言語学に関する知識をまとめ，その問題点を確認する。
第2回	研究計画書とは	研究計画書の例をいくつか見て，全体の構成をイメージする。
第3回	文献講読 ⑫ 敬語	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	研究課題を決め，研究目的を書く	各自の頭の中を話し合いやメモを通して明示し，構想を整理して研究テーマを考える。
第5回	文献購読 ⑬ 方言	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	研究動機・背景の内容と構成を考える	各自の研究テーマについて，「どうしてその問題を研究したいのか」という動機と，「どうして自分の研究が必要なのか」という背景について書いてみる。
第7回	文献購読 ⑭ さまざまなバリエーション／日本語教育文法	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	研究に意義を見い出す	各自の研究テーマについて，「研究目的が達成できたら、どのような貢献ができるか」という意義について書いてみる。
第9回	文献購読 ⑮ コーパス / まとめ	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	骨組みになる文章に必要な根拠を考える	事実なのか，他人の意見なのか自分の判断，考えなのか，わかるように書く。自分の判断や考えの根拠についても適切に書けるようになる。
第11回	テーマに関する報告	各自のテーマについて報告する
第12回	引用の仕方を学ぶ・研究論文検索	他人の意見や主張を引用できるようになる。出典について適切に書けるようになる。参考文献リストを書けるようになる。
第13回	全体のまとめ	一年間学んできた内容についてのまとめ
第14回	報告とレポート提出	各自のテーマと研究計画について報告する。 レポートを提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
その都度言及するアサインメントに必ずアクセスし、自分で自分が扱うべき領域を開拓していくように努めること。その内容については、必要があれば、その都度質疑応答や議論の対象としたい。
　本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
最初に、庵功雄『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版』を購読する予定であるが，受講生の希望によって変更する可能性もある。後期には滝浦真人『ポライトネス入門』を購読する場合もある（その場合は授業内で指示する）。

【参考書】
高橋太郎（2005)『日本語の文法』ひつじ書房
日本語文法学会（編）(2014)『日本語文法辞典』大修館書店
益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版
ブラウン＆レヴィンソン／田中典子監訳(2011)『ポライトネス』研究社
滝浦真人(2005)『日本の敬語論』大修館書店
井出祥子(2006)『わきまえの語用論』大修館書店
三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮表現行動』ひつじ書房
トマス／浅羽亮一監修(1998)『語用論入門』研究社
オーティー編／浅羽亮一監修(2004)『異文化理解の語用論』研究社

【成績評価の方法と基準】
本授業の到達目標がどれくらい達成できているかを以下の方法により合計１００点で評価する。
　レポート（40％）＝（興味のある研究論文について紹介し、自分の意見を述べる）
　発表のパフォーマンス（20％）
　理解度確認のための課題（20％）
　受講態度、その他（20％）
　この成績評価の方法をもとに総合的に判定し、60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
講読は主に3年生が対象で，4年生は議論を通してその理解をサポートする。

【その他の重要事項】
少しでも日本語教師に興味があるならば、適宜相談に乗ります。

【Outline (in English)】
【Course outline】
From the aspect of teaching Japanese to non-native learners, students can deepen their thinking about the formation of knowledge about the Japanese language, the differences between Japanese and other languages such as the native language of the learners, and grammar and vocabulary for communication, as well as learn about the pragmatic functions of the Japanese language through the theory of "politeness".
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) To distinguish between the actual state of language and the linguistic knowledge possessed by native speakers in general (an objective view of the Japanese language).
(2) To learn how to extract linguistic events from linguistic materials.
(3) To learn how to understand the Japanese language from a broad and relative perspective.
(4) To think about what kinds of misuse are harmful to the other person's feelings, and whether there are other things besides misuse, such as speech style, that can affect the other person's feelings.
(5) There are many variations of language depending on the user, the situation of use, and the occasion, and language itself changes from moment to moment. Students will deepen their thinking on this issue.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to be sure to access the assignments that are mentioned in each case, and try to develop your own areas to handle. The contents will be the subject of question-and-answer sessions and discussions, if necessary.
Your required study time is at least four hours for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Report (40%) =(Introduce a research paper of your interest and state your opinion)
Performance of the presentation (20%)
Assignments to check for understanding (20%)
Attitude and others (20%)

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

副島　健作

サブタイトル：日本語教育のための日本語学
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語を母語としない学習者に日本語を教えるという側面から、日本語に関する知識の形成、日本語学習者の母語など他の言語との相違、コミュニケーションのための文法・語彙について考えを深める。また、「ポライトネス」理論によって、日本語の「語用論」的な機能について学ぶ。

【到達目標】
1）言語の実態と、一般的な母語話者が持っている言語的知識を区別する（日本語を客観的にとらえる）。
2）言語資料から言語的事象を取り出す方法を身につける。
3）広く相対的な観点から日本語を捉える方法を身につける。
4）相手の感情を害する誤用とはどういうものか、発話スタイルなど、誤用以外にも相手の感情に影響するものがあるか、考える。
5）言語には使用者や使用の状況、場面によって様々なヴァリエーションがあり、また言語そのものも刻一刻と変化していくものである。この問題についての考えを深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
まずは自分たちが母語をどのように使用しているかという実態を観察し、次に日本語言語学や語用論等の知見を応用して分析する。
　具体的には、授業計画であげたような項目について、観察をはじめる（ボトムアップのアプローチ）。同時に並行して理論書の講読をすすめていく（トップダウンのアプローチ）。
　最終的には、受講者の問題意識に応じて、現象の断片について個々に考察をすすめ、その都度授業内でフィードバックしていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション 具体的エピソード i	テキストの紹介・配布。 授業の進め方の確認。 外国人の日本語使用から「気づく」日本語の使用上の問題点を確認する。
第2回	具体的エピソード ii	第一回に引き続き、問題点を確認する。
第3回	文献購読　① 言語学の１分野としての日本語学／音声・音韻	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	文献講読　② 形態論（１）－形態素、語、品詞－／形態論（２）－活用－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第5回	文献講読　③ 格／文の構造と文法カテゴリー	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	文献講読　④ 主題と主語／ボイス（１）－受身と使役－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第7回	文献講読　⑤ ボイス（２）－授受－／自動詞と他動詞	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	文献講読　⑥ 時間を表す表現（１）－テンス－／時間を表す表現（２）	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第9回	文献講読　⑦ モダリティ／とりたて	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	文献講読　⑧ 複文（１）／複文（２）－因果関係	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第11回	文献講読　⑨ 名詞修飾／「のだ」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第12回	文献講読　⑩ 「は」と「が」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第13回	文献購読　⑪ 談話・テキスト	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第14回	春学期試験	春学期の内容に関する試験
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認。 これまで学んできた日本語言語学に関する知識をまとめ，その問題点を確認する。
第2回	研究計画書とは	研究計画書の例をいくつか見て，全体の構成をイメージする。
第3回	文献講読 ⑫ 敬語	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	研究課題を決め，研究目的を書く	各自の頭の中を話し合いやメモを通して明示し，構想を整理して研究テーマを考える。
第5回	文献購読 ⑬ 方言	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	研究動機・背景の内容と構成を考える	各自の研究テーマについて，「どうしてその問題を研究したいのか」という動機と，「どうして自分の研究が必要なのか」という背景について書いてみる。
第7回	文献購読 ⑭ さまざまなバリエーション／日本語教育文法	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	研究に意義を見い出す	各自の研究テーマについて，「研究目的が達成できたら、どのような貢献ができるか」という意義について書いてみる。
第9回	文献購読 ⑮ コーパス / まとめ	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	骨組みになる文章に必要な根拠を考える	事実なのか，他人の意見なのか自分の判断，考えなのか，わかるように書く。自分の判断や考えの根拠についても適切に書けるようになる。
第11回	テーマに関する報告	各自のテーマについて報告する
第12回	引用の仕方を学ぶ・研究論文検索	他人の意見や主張を引用できるようになる。出典について適切に書けるようになる。参考文献リストを書けるようになる。
第13回	全体のまとめ	一年間学んできた内容についてのまとめ
第14回	報告とレポート提出	各自のテーマと研究計画について報告する。 レポートを提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
その都度言及するアサインメントに必ずアクセスし、自分で自分が扱うべき領域を開拓していくように努めること。その内容については、必要があれば、その都度質疑応答や議論の対象としたい。
　本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
最初に、庵功雄『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版』を購読する予定であるが，受講生の希望によって変更する可能性もある。後期には滝浦真人『ポライトネス入門』を購読する場合もある（その場合は授業内で指示する）。

【参考書】
高橋太郎（2005)『日本語の文法』ひつじ書房
日本語文法学会（編）(2014)『日本語文法辞典』大修館書店
益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版
ブラウン＆レヴィンソン／田中典子監訳(2011)『ポライトネス』研究社
滝浦真人(2005)『日本の敬語論』大修館書店
井出祥子(2006)『わきまえの語用論』大修館書店
三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮表現行動』ひつじ書房
トマス／浅羽亮一監修(1998)『語用論入門』研究社
オーティー編／浅羽亮一監修(2004)『異文化理解の語用論』研究社

【成績評価の方法と基準】
本授業の到達目標がどれくらい達成できているかを以下の方法により合計１００点で評価する。
　レポート（40％）＝（興味のある研究論文について紹介し、自分の意見を述べる）
　発表のパフォーマンス（20％）
　理解度確認のための課題（20％）
　受講態度、その他（20％）
　この成績評価の方法をもとに総合的に判定し、60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
講読は主に3年生が対象で，4年生は議論を通してその理解をサポートする。

【その他の重要事項】
少しでも日本語教師に興味があるならば、適宜相談に乗ります。

【Outline (in English)】
【Course outline】
From the aspect of teaching Japanese to non-native learners, students can deepen their thinking about the formation of knowledge about the Japanese language, the differences between Japanese and other languages such as the native language of the learners, and grammar and vocabulary for communication, as well as learn about the pragmatic functions of the Japanese language through the theory of "politeness".
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) To distinguish between the actual state of language and the linguistic knowledge possessed by native speakers in general (an objective view of the Japanese language).
(2) To learn how to extract linguistic events from linguistic materials.
(3) To learn how to understand the Japanese language from a broad and relative perspective.
(4) To think about what kinds of misuse are harmful to the other person's feelings, and whether there are other things besides misuse, such as speech style, that can affect the other person's feelings.
(5) There are many variations of language depending on the user, the situation of use, and the occasion, and language itself changes from moment to moment. Students will deepen their thinking on this issue.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to be sure to access the assignments that are mentioned in each case, and try to develop your own areas to handle. The contents will be the subject of question-and-answer sessions and discussions, if necessary.
Your required study time is at least four hours for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Report (40%) =(Introduce a research paper of your interest and state your opinion)
Performance of the presentation (20%)
Assignments to check for understanding (20%)
Attitude and others (20%)

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

副島　健作

サブタイトル：日本語教育のための日本語学
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語を母語としない学習者に日本語を教えるという側面から、日本語に関する知識の形成、日本語学習者の母語など他の言語との相違、コミュニケーションのための文法・語彙について考えを深める。また、「ポライトネス」理論によって、日本語の「語用論」的な機能について学ぶ。

【到達目標】
1）言語の実態と、一般的な母語話者が持っている言語的知識を区別する（日本語を客観的にとらえる）。
2）言語資料から言語的事象を取り出す方法を身につける。
3）広く相対的な観点から日本語を捉える方法を身につける。
4）相手の感情を害する誤用とはどういうものか、発話スタイルなど、誤用以外にも相手の感情に影響するものがあるか、考える。
5）言語には使用者や使用の状況、場面によって様々なヴァリエーションがあり、また言語そのものも刻一刻と変化していくものである。この問題についての考えを深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
まずは自分たちが母語をどのように使用しているかという実態を観察し、次に日本語言語学や語用論等の知見を応用して分析する。
　具体的には、授業計画であげたような項目について、観察をはじめる（ボトムアップのアプローチ）。同時に並行して理論書の講読をすすめていく（トップダウンのアプローチ）。
　最終的には、受講者の問題意識に応じて、現象の断片について個々に考察をすすめ、その都度授業内でフィードバックしていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション 具体的エピソード i	テキストの紹介・配布。 授業の進め方の確認。 外国人の日本語使用から「気づく」日本語の使用上の問題点を確認する。
第2回	具体的エピソード ii	第一回に引き続き、問題点を確認する。
第3回	文献購読　① 言語学の１分野としての日本語学／音声・音韻	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	文献講読　② 形態論（１）－形態素、語、品詞－／形態論（２）－活用－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第5回	文献講読　③ 格／文の構造と文法カテゴリー	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	文献講読　④ 主題と主語／ボイス（１）－受身と使役－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第7回	文献講読　⑤ ボイス（２）－授受－／自動詞と他動詞	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	文献講読　⑥ 時間を表す表現（１）－テンス－／時間を表す表現（２）	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第9回	文献講読　⑦ モダリティ／とりたて	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	文献講読　⑧ 複文（１）／複文（２）－因果関係	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第11回	文献講読　⑨ 名詞修飾／「のだ」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第12回	文献講読　⑩ 「は」と「が」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第13回	文献購読　⑪ 談話・テキスト	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第14回	春学期試験	春学期の内容に関する試験
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認。 これまで学んできた日本語言語学に関する知識をまとめ，その問題点を確認する。
第2回	研究計画書とは	研究計画書の例をいくつか見て，全体の構成をイメージする。
第3回	文献講読 ⑫ 敬語	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	研究課題を決め，研究目的を書く	各自の頭の中を話し合いやメモを通して明示し，構想を整理して研究テーマを考える。
第5回	文献購読 ⑬ 方言	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	研究動機・背景の内容と構成を考える	各自の研究テーマについて，「どうしてその問題を研究したいのか」という動機と，「どうして自分の研究が必要なのか」という背景について書いてみる。
第7回	文献購読 ⑭ さまざまなバリエーション／日本語教育文法	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	研究に意義を見い出す	各自の研究テーマについて，「研究目的が達成できたら、どのような貢献ができるか」という意義について書いてみる。
第9回	文献購読 ⑮ コーパス / まとめ	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	骨組みになる文章に必要な根拠を考える	事実なのか，他人の意見なのか自分の判断，考えなのか，わかるように書く。自分の判断や考えの根拠についても適切に書けるようになる。
第11回	テーマに関する報告	各自のテーマについて報告する
第12回	引用の仕方を学ぶ・研究論文検索	他人の意見や主張を引用できるようになる。出典について適切に書けるようになる。参考文献リストを書けるようになる。
第13回	全体のまとめ	一年間学んできた内容についてのまとめ
第14回	報告とレポート提出	各自のテーマと研究計画について報告する。 レポートを提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
その都度言及するアサインメントに必ずアクセスし、自分で自分が扱うべき領域を開拓していくように努めること。その内容については、必要があれば、その都度質疑応答や議論の対象としたい。
　本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
最初に、庵功雄『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版』を購読する予定であるが，受講生の希望によって変更する可能性もある。後期には滝浦真人『ポライトネス入門』を購読する場合もある（その場合は授業内で指示する）。

【参考書】
高橋太郎（2005)『日本語の文法』ひつじ書房
日本語文法学会（編）(2014)『日本語文法辞典』大修館書店
益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版
ブラウン＆レヴィンソン／田中典子監訳(2011)『ポライトネス』研究社
滝浦真人(2005)『日本の敬語論』大修館書店
井出祥子(2006)『わきまえの語用論』大修館書店
三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮表現行動』ひつじ書房
トマス／浅羽亮一監修(1998)『語用論入門』研究社
オーティー編／浅羽亮一監修(2004)『異文化理解の語用論』研究社

【成績評価の方法と基準】
本授業の到達目標がどれくらい達成できているかを以下の方法により合計１００点で評価する。
　レポート（40％）＝（興味のある研究論文について紹介し、自分の意見を述べる）
　発表のパフォーマンス（20％）
　理解度確認のための課題（20％）
　受講態度、その他（20％）
　この成績評価の方法をもとに総合的に判定し、60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
講読は主に3年生が対象で，4年生は議論を通してその理解をサポートする。

【その他の重要事項】
少しでも日本語教師に興味があるならば、適宜相談に乗ります。

【Outline (in English)】
【Course outline】
From the aspect of teaching Japanese to non-native learners, students can deepen their thinking about the formation of knowledge about the Japanese language, the differences between Japanese and other languages such as the native language of the learners, and grammar and vocabulary for communication, as well as learn about the pragmatic functions of the Japanese language through the theory of "politeness".
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) To distinguish between the actual state of language and the linguistic knowledge possessed by native speakers in general (an objective view of the Japanese language).
(2) To learn how to extract linguistic events from linguistic materials.
(3) To learn how to understand the Japanese language from a broad and relative perspective.
(4) To think about what kinds of misuse are harmful to the other person's feelings, and whether there are other things besides misuse, such as speech style, that can affect the other person's feelings.
(5) There are many variations of language depending on the user, the situation of use, and the occasion, and language itself changes from moment to moment. Students will deepen their thinking on this issue.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to be sure to access the assignments that are mentioned in each case, and try to develop your own areas to handle. The contents will be the subject of question-and-answer sessions and discussions, if necessary.
Your required study time is at least four hours for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Report (40%) =(Introduce a research paper of your interest and state your opinion)
Performance of the presentation (20%)
Assignments to check for understanding (20%)
Attitude and others (20%)

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

副島　健作

サブタイトル：日本語教育のための日本語学
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語を母語としない学習者に日本語を教えるという側面から、日本語に関する知識の形成、日本語学習者の母語など他の言語との相違、コミュニケーションのための文法・語彙について考えを深める。また、「ポライトネス」理論によって、日本語の「語用論」的な機能について学ぶ。

【到達目標】
1）言語の実態と、一般的な母語話者が持っている言語的知識を区別する（日本語を客観的にとらえる）。
2）言語資料から言語的事象を取り出す方法を身につける。
3）広く相対的な観点から日本語を捉える方法を身につける。
4）相手の感情を害する誤用とはどういうものか、発話スタイルなど、誤用以外にも相手の感情に影響するものがあるか、考える。
5）言語には使用者や使用の状況、場面によって様々なヴァリエーションがあり、また言語そのものも刻一刻と変化していくものである。この問題についての考えを深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
まずは自分たちが母語をどのように使用しているかという実態を観察し、次に日本語言語学や語用論等の知見を応用して分析する。
　具体的には、授業計画であげたような項目について、観察をはじめる（ボトムアップのアプローチ）。同時に並行して理論書の講読をすすめていく（トップダウンのアプローチ）。
　最終的には、受講者の問題意識に応じて、現象の断片について個々に考察をすすめ、その都度授業内でフィードバックしていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション 具体的エピソード i	テキストの紹介・配布。 授業の進め方の確認。 外国人の日本語使用から「気づく」日本語の使用上の問題点を確認する。
第2回	具体的エピソード ii	第一回に引き続き、問題点を確認する。
第3回	文献購読　① 言語学の１分野としての日本語学／音声・音韻	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	文献講読　② 形態論（１）－形態素、語、品詞－／形態論（２）－活用－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第5回	文献講読　③ 格／文の構造と文法カテゴリー	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	文献講読　④ 主題と主語／ボイス（１）－受身と使役－	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第7回	文献講読　⑤ ボイス（２）－授受－／自動詞と他動詞	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	文献講読　⑥ 時間を表す表現（１）－テンス－／時間を表す表現（２）	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第9回	文献講読　⑦ モダリティ／とりたて	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	文献講読　⑧ 複文（１）／複文（２）－因果関係	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第11回	文献講読　⑨ 名詞修飾／「のだ」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第12回	文献講読　⑩ 「は」と「が」	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第13回	文献購読　⑪ 談話・テキスト	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第14回	春学期試験	春学期の内容に関する試験
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認。 これまで学んできた日本語言語学に関する知識をまとめ，その問題点を確認する。
第2回	研究計画書とは	研究計画書の例をいくつか見て，全体の構成をイメージする。
第3回	文献講読 ⑫ 敬語	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第4回	研究課題を決め，研究目的を書く	各自の頭の中を話し合いやメモを通して明示し，構想を整理して研究テーマを考える。
第5回	文献購読 ⑬ 方言	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第6回	研究動機・背景の内容と構成を考える	各自の研究テーマについて，「どうしてその問題を研究したいのか」という動機と，「どうして自分の研究が必要なのか」という背景について書いてみる。
第7回	文献購読 ⑭ さまざまなバリエーション／日本語教育文法	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第8回	研究に意義を見い出す	各自の研究テーマについて，「研究目的が達成できたら、どのような貢献ができるか」という意義について書いてみる。
第9回	文献購読 ⑮ コーパス / まとめ	庵功雄「新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版」を読む
第10回	骨組みになる文章に必要な根拠を考える	事実なのか，他人の意見なのか自分の判断，考えなのか，わかるように書く。自分の判断や考えの根拠についても適切に書けるようになる。
第11回	テーマに関する報告	各自のテーマについて報告する
第12回	引用の仕方を学ぶ・研究論文検索	他人の意見や主張を引用できるようになる。出典について適切に書けるようになる。参考文献リストを書けるようになる。
第13回	全体のまとめ	一年間学んできた内容についてのまとめ
第14回	報告とレポート提出	各自のテーマと研究計画について報告する。 レポートを提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
その都度言及するアサインメントに必ずアクセスし、自分で自分が扱うべき領域を開拓していくように努めること。その内容については、必要があれば、その都度質疑応答や議論の対象としたい。
　本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
最初に、庵功雄『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第２版』を購読する予定であるが，受講生の希望によって変更する可能性もある。後期には滝浦真人『ポライトネス入門』を購読する場合もある（その場合は授業内で指示する）。

【参考書】
高橋太郎（2005)『日本語の文法』ひつじ書房
日本語文法学会（編）(2014)『日本語文法辞典』大修館書店
益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版
ブラウン＆レヴィンソン／田中典子監訳(2011)『ポライトネス』研究社
滝浦真人(2005)『日本の敬語論』大修館書店
井出祥子(2006)『わきまえの語用論』大修館書店
三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮表現行動』ひつじ書房
トマス／浅羽亮一監修(1998)『語用論入門』研究社
オーティー編／浅羽亮一監修(2004)『異文化理解の語用論』研究社

【成績評価の方法と基準】
本授業の到達目標がどれくらい達成できているかを以下の方法により合計１００点で評価する。
　レポート（40％）＝（興味のある研究論文について紹介し、自分の意見を述べる）
　発表のパフォーマンス（20％）
　理解度確認のための課題（20％）
　受講態度、その他（20％）
　この成績評価の方法をもとに総合的に判定し、60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
講読は主に3年生が対象で，4年生は議論を通してその理解をサポートする。

【その他の重要事項】
少しでも日本語教師に興味があるならば、適宜相談に乗ります。

【Outline (in English)】
【Course outline】
From the aspect of teaching Japanese to non-native learners, students can deepen their thinking about the formation of knowledge about the Japanese language, the differences between Japanese and other languages such as the native language of the learners, and grammar and vocabulary for communication, as well as learn about the pragmatic functions of the Japanese language through the theory of "politeness".
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) To distinguish between the actual state of language and the linguistic knowledge possessed by native speakers in general (an objective view of the Japanese language).
(2) To learn how to extract linguistic events from linguistic materials.
(3) To learn how to understand the Japanese language from a broad and relative perspective.
(4) To think about what kinds of misuse are harmful to the other person's feelings, and whether there are other things besides misuse, such as speech style, that can affect the other person's feelings.
(5) There are many variations of language depending on the user, the situation of use, and the occasion, and language itself changes from moment to moment. Students will deepen their thinking on this issue.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to be sure to access the assignments that are mentioned in each case, and try to develop your own areas to handle. The contents will be the subject of question-and-answer sessions and discussions, if necessary.
　Your required study time is at least four hours for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
　Report (40%) =(Introduce a research paper of your interest and state your opinion)
　Performance of the presentation (20%)
　Assignments to check for understanding (20%)
　Attitude and others (20%)

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

大西　亮

サブタイトル：スペイン語圏の文化と社会 ―「点」の知識を「線」でつなぎ、世界の見方を変える―
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「スペイン語圏」と聞いて、あなたは何を思い浮かべますか？ 情熱的なフラメンコ、サッカー、ZARAの最新ファッション、世界のヒットチャートを独占しつづける中南米系アーティスト。それとも、中南米を舞台としたアメリカの裏庭政策、麻薬問題、経済格差を背景とする不法移民問題、スペイン・カタルーニャをめぐる独立問題といったニュースでしょうか。
　じつは、これらのトピックはすべて、現代社会が抱える「文化の衝突」や「グローバル経済の歪み」の問題と深くつながっています。本ゼミでは、スペインから中南米諸国まで、世界20カ国以上に広がる広大なスペイン語圏を切り口に、世界を多角的な視点から読み解く力を養います。
　本ゼミが扱うのは、単なる「異文化の紹介」ではありません。歴史、芸術、スポーツ、社会問題など、あなたが自分で選んだテーマを、周辺地域（欧米・アジア）との関係性から再定義する作業です。
　「スペイン語は話せないけれど、スペイン語圏の文化や社会に興味がある」「ニュースの裏側を深く知りたい」「就活に向けて、物事を多角的に分析する力を身につけたい」――そんな意欲をもつ受講生を歓迎します。

【到達目標】
このゼミでは、上記「授業の概要と目的」に沿って、以下のような能力を伸ばすことを目的とする。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識の習得。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識を活かしながら、興味や関心のあるテーマを見つけ、それを追究していく思考力。
・興味や関心のあるテーマについて、それを幅広い視角から見つめなおす柔軟な発想力。
・興味や関心のあるテーマについて論理的に解釈し、それを他者にむけて明快に説明する能力。
・他者との議論を通じてみずからの問題意識を深める能力。
・効果的なプレゼンテーション技法および論理的な文章表現力。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミは2部構成のもとに進められる。第1部では、スペイン語圏の文化と社会を見ていくうえで「最低限これだけは知っておきたい」という事柄について、さまざまな資料を用いながらディスカッション形式で学んでいく。それを受けるかたちで、第2部では、より専門的な内容について、プレゼンテーションやグループ討議を通じて理解を深めていく。授業内での発表については、それぞれのテーマについて全体討議を実施し、教員がそれをまとめるかたちで指導、助言等を行なう。リアクションペーパーの提出を課す場合は、翌週の授業で教員からフィードバックを行ない、全体討議を通じて学生の理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、春学期のゼミ運営方針について話し合う。
第2回	各自のテーマ設定	各自「スペイン語圏の文化と社会」に関する発表テーマを自由に選ぶ。それを受けて、必要な下調べの方法や発表のポイントについて教員がコメントを加える。
第3回	各自で設定したテーマに関する事前学習	第2回のゼミで各自設定したテーマからいくつかの項目をピックアップし、関連資料を用いながら事前学習を行なう。
第4回	各自で設定したテーマに関する発表	各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、それを踏まえてグループディスカッションを行なう。
第5回	各自で設定したテーマに関する発表（つづき）	第4回にひきつづき、各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、さらなる理解を促す。
第6回	各自で設定したテーマに関する発表（まとめ）	各自で設定したテーマに関する発表のまとめを行なう。すべての発表を通じて見えてきた共通の問題や関心領域に注目し、教員による補足説明を行なったあと、グループディスカッションを通じて理解を深める。
第7回	スペイン・カタルーニャ州の独立運動と「スペイン社会のいま」	カタルーニャの独立運動に関する複数の資料を用いながら、この運動が生じた背景や歴史的経緯について、グループディスカッション等を通じて理解を深める。
第8回	スペイン内戦とフランコ独裁	カタルーニャ独立運動の背景を理解するために不可欠なスペイン内戦とその後のフランコ独裁時代の社会について学ぶ。
第9回	フランコ独裁体制とスポーツ	フランコ独裁時代におけるスポーツ、とりわけ国民的スポーツの代表格であるサッカーが果たした役割について見ていく。
第10回	スペインにおけるスポーツの歴史	スペイン社会の成り立ちにおいてスポーツが果たした役割を幅広い視点から見ていく。
第11回	スペインにおける映画産業	スペイン民主化の過程を映し出している映画に注目し、グループディスカッション等を通じてその背景理解に努める。
第12回	日本とスペインの交流史	日本とスペインを結ぶ知られざる歴史に光を当て、両国関係の歴史をひもとく。
第13回	スペインの食文化	食を通じてスペイン文化の特質を探る方途を探る。
第14回	春学期ゼミの振り返り	春学期の活動を振り返り、グループディスカッションや全体討議を通じて総括を行なう。
第1回	後期ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、具体的なゼミ運営方針について話し合う。
第2回	4年生による研究発表	各自設定したテーマについての4年生の発表後、関連テーマに関するグループディスカッションを行なう。
第3回	4年生による研究発表（つづき）	各自設定したテーマについての4年生の発表後、それを受けるかたちで3年生がプレゼンテーションを行ない、理解を深める。
第4回	スペインとラテンアメリカの交流史	広大なラテンアメリカ諸国とスペインの関係を歴史的観点から読み解く。

第5回	スペイン語圏における世界遺産の歴史と現状	スペイン語圏に存在する主だった世界遺産を取り上げ、その歴史と現状について見ていく。
第6回	ラテンアメリカのスポーツ	サッカーや野球など、ラテンアメリカのスポーツに着目し、そこから見えてくるさまざまな問題について考える。
第7回	ラテンアメリカの食文化	バラエティ豊かなラテンアメリカ諸国の食文化に着目し、その背後に横たわる歴史や文化に関する理解を深める。
第8回	中南米と日本の交流史	ラテンアメリカ諸国に点在する日系社会を中心に、中南米と日本の交流史に関する理解を深める。
第9回	スペイン語圏の音楽と舞踊	スペイン語圏の音楽に関するテーマを選び、グループ発表を中心にその歴史的背景についての理解を深める。
第10回	スペインおよび中南米における日本文化の現在	アニメや日本料理、ファッションなど、いまスペイン語圏で注目を浴びている日本文化の諸相をとりあげ、グループ発表等を通じてその実情に迫る。
第11回	中南米と北米の関係史	アメリカ合衆国が中南米社会にもたらしたさまざまな影響について見ていく。
第12回	スペインとイスラム文化	イスラム教徒が残したさまざまな影響を軸にスペイン社会の現状をとらえなおす。
第13回	スペイン語圏の文化と社会に関する総括	ゼミで扱ったさまざまなテーマをふりかえり、それらに共通する特徴や問題についてディスカッション形式で自由に話し合う。
第14回	まとめ	年間のゼミ活動を振り返り、反省点等の話し合いを通じて次年度のゼミ活動の活性化に役立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自のテーマに沿って参考文献を指示するので、それに目を通すこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
初回授業で指示する。

【参考書】
初回授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】
研究発表(70％)、平常点(30％）を目安に、発表の準備やプレゼンテーションスキル、グループ討議への積極的な参加、等々を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
まずは日本語できちんと議論し、論理的に自分の考えを展開することができる力を身につけることが重要です。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The purpose of this seminar is to enable students to face various aspects in vast Spanish-speaking nations, not only from Spain but Mexico in the north as well as the Argentine in the south etc.
Many of these problems have broken out in close contacts and relations with Europe, America and other countries in the world. What unexpected crucial scenes and points do students discover in approaching the problems in Spanish-speaking nations ?
To achieve the goal, there are diverse angles according to students' own interests —— history, art, sports, literature and so forth. It is, however, not enough to discover and confront their own favorite fields. Starting from their interesting areas, it is hopefully important to assess a variety of aspects in their flexible views.
In this seminar, students will be expected to challenge various activities to find out crucial points, mostly speaking Japanese. This course is, therefore, open to all students —— including those unfamiliar with Spanish language.
We sincerely welcome all students challenging our exciting intellectual discovery-trip.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following;
Quality of the students' presentation in the class: 70% and in class contribution:30%

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

大西　亮

サブタイトル：スペイン語圏の文化と社会 ―「点」の知識を「線」でつなぎ、世界の見方を変える―
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「スペイン語圏」と聞いて、あなたは何を思い浮かべますか？ 情熱的なフラメンコ、サッカー、ZARAの最新ファッション、世界のヒットチャートを独占しつづける中南米系アーティスト。それとも、中南米を舞台としたアメリカの裏庭政策、麻薬問題、経済格差を背景とする不法移民問題、スペイン・カタルーニャをめぐる独立問題といったニュースでしょうか。
　じつは、これらのトピックはすべて、現代社会が抱える「文化の衝突」や「グローバル経済の歪み」の問題と深くつながっています。本ゼミでは、スペインから中南米諸国まで、世界20カ国以上に広がる広大なスペイン語圏を切り口に、世界を多角的な視点から読み解く力を養います。
　本ゼミが扱うのは、単なる「異文化の紹介」ではありません。歴史、芸術、スポーツ、社会問題など、あなたが自分で選んだテーマを、周辺地域（欧米・アジア）との関係性から再定義する作業です。
　「スペイン語は話せないけれど、スペイン語圏の文化や社会に興味がある」「ニュースの裏側を深く知りたい」「就活に向けて、物事を多角的に分析する力を身につけたい」――そんな意欲をもつ受講生を歓迎します。

【到達目標】
このゼミでは、上記「授業の概要と目的」に沿って、以下のような能力を伸ばすことを目的とする。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識の習得。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識を活かしながら、興味や関心のあるテーマを見つけ、それを追究していく思考力。
・興味や関心のあるテーマについて、それを幅広い視角から見つめなおす柔軟な発想力。
・興味や関心のあるテーマについて論理的に解釈し、それを他者にむけて明快に説明する能力。
・他者との議論を通じてみずからの問題意識を深める能力。
・効果的なプレゼンテーション技法および論理的な文章表現力。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミは2部構成のもとに進められる。第1部では、スペイン語圏の文化と社会を見ていくうえで「最低限これだけは知っておきたい」という事柄について、さまざまな資料を用いながらディスカッション形式で学んでいく。それを受けるかたちで、第2部では、より専門的な内容について、プレゼンテーションやグループ討議を通じて理解を深めていく。授業内での発表については、それぞれのテーマについて全体討議を実施し、教員がそれをまとめるかたちで指導、助言等を行なう。リアクションペーパーの提出を課す場合は、翌週の授業で教員からフィードバックを行ない、全体討議を通じて学生の理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、春学期のゼミ運営方針について話し合う。
第2回	各自のテーマ設定	各自「スペイン語圏の文化と社会」に関する発表テーマを自由に選ぶ。それを受けて、必要な下調べの方法や発表のポイントについて教員がコメントを加える。
第3回	各自で設定したテーマに関する事前学習	第2回のゼミで各自設定したテーマからいくつかの項目をピックアップし、関連資料を用いながら事前学習を行なう。
第4回	各自で設定したテーマに関する発表	各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、それを踏まえてグループディスカッションを行なう。
第5回	各自で設定したテーマに関する発表（つづき）	第4回にひきつづき、各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、さらなる理解を促す。
第6回	各自で設定したテーマに関する発表（まとめ）	各自で設定したテーマに関する発表のまとめを行なう。すべての発表を通じて見えてきた共通の問題や関心領域に注目し、教員による補足説明を行なったあと、グループディスカッションを通じて理解を深める。
第7回	スペイン・カタルーニャ州の独立運動と「スペイン社会のいま」	カタルーニャの独立運動に関する複数の資料を用いながら、この運動が生じた背景や歴史的経緯について、グループディスカッション等を通じて理解を深める。
第8回	スペイン内戦とフランコ独裁	カタルーニャ独立運動の背景を理解するために不可欠なスペイン内戦とその後のフランコ独裁時代の社会について学ぶ。
第9回	フランコ独裁体制とスポーツ	フランコ独裁時代におけるスポーツ、とりわけ国民的スポーツの代表格であるサッカーが果たした役割について見ていく。
第10回	スペインにおけるスポーツの歴史	スペイン社会の成り立ちにおいてスポーツが果たした役割を幅広い視点から見ていく。
第11回	スペインにおける映画産業	スペイン民主化の過程を映し出している映画に注目し、グループディスカッション等を通じてその背景理解に努める。
第12回	日本とスペインの交流史	日本とスペインを結ぶ知られざる歴史に光を当て、両国関係の歴史をひもとく。
第13回	スペインの食文化	食を通じてスペイン文化の特質を探る方途を探る。
第14回	春学期ゼミの振り返り	春学期の活動を振り返り、グループディスカッションや全体討議を通じて総括を行なう。
第1回	後期ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、具体的なゼミ運営方針について話し合う。
第2回	4年生による研究発表	各自設定したテーマについての4年生の発表後、関連テーマに関するグループディスカッションを行なう。
第3回	4年生による研究発表（つづき）	各自設定したテーマについての4年生の発表後、それを受けるかたちで3年生がプレゼンテーションを行ない、理解を深める。
第4回	スペインとラテンアメリカの交流史	広大なラテンアメリカ諸国とスペインの関係を歴史的観点から読み解く。

第5回	スペイン語圏における世界遺産の歴史と現状	スペイン語圏に存在する主だった世界遺産を取り上げ、その歴史と現状について見ていく。
第6回	ラテンアメリカのスポーツ	サッカーや野球など、ラテンアメリカのスポーツに着目し、そこから見えてくるさまざまな問題について考える。
第7回	ラテンアメリカの食文化	バラエティ豊かなラテンアメリカ諸国の食文化に着目し、その背後に横たわる歴史や文化に関する理解を深める。
第8回	中南米と日本の交流史	ラテンアメリカ諸国に点在する日系社会を中心に、中南米と日本の交流史に関する理解を深める。
第9回	スペイン語圏の音楽と舞踊	スペイン語圏の音楽に関するテーマを選び、グループ発表を中心にその歴史的背景についての理解を深める。
第10回	スペインおよび中南米における日本文化の現在	アニメや日本料理、ファッションなど、いまスペイン語圏で注目を浴びている日本文化の諸相をとりあげ、グループ発表等を通じてその実情に迫る。
第11回	中南米と北米の関係史	アメリカ合衆国が中南米社会にもたらしたさまざまな影響について見ていく。
第12回	スペインとイスラム文化	イスラム教徒が残したさまざまな影響を軸にスペイン社会の現状をとらえなおす。
第13回	スペイン語圏の文化と社会に関する総括	ゼミで扱ったさまざまなテーマをふりかえり、それらに共通する特徴や問題についてディスカッション形式で自由に話し合う。
第14回	まとめ	年間のゼミ活動を振り返り、反省点等の話し合いを通じて次年度のゼミ活動の活性化に役立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自のテーマに沿って参考文献を指示するので、それに目を通すこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
初回授業で指示する。

【参考書】
初回授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】
研究発表(70％)、平常点(30％）を目安に、発表の準備やプレゼンテーションスキル、グループ討議への積極的な参加、等々を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
まずは日本語できちんと議論し、論理的に自分の考えを展開することができる力を身につけることが重要です。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The purpose of this seminar is to enable students to face various aspects in vast Spanish-speaking nations, not only from Spain but Mexico in the north as well as the Argentine in the south etc.
Many of these problems have broken out in close contacts and relations with Europe, America and other countries in the world. What unexpected crucial scenes and points do students discover in approaching the problems in Spanish-speaking nations ?
To achieve the goal, there are diverse angles according to students' own interests —— history, art, sports, literature and so forth. It is, however, not enough to discover and confront their own favorite fields. Starting from their interesting areas, it is hopefully important to assess a variety of aspects in their flexible views.
In this seminar, students will be expected to challenge various activities to find out crucial points, mostly speaking Japanese. This course is, therefore, open to all students —— including those unfamiliar with Spanish language.
We sincerely welcome all students challenging our exciting intellectual discovery-trip.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following;
Quality of the students' presentation in the class: 70% and in class contribution:30%

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

大西　亮

サブタイトル：スペイン語圏の文化と社会 ―「点」の知識を「線」でつなぎ、世界の見方を変える―
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「スペイン語圏」と聞いて、あなたは何を思い浮かべますか？ 情熱的なフラメンコ、サッカー、ZARAの最新ファッション、世界のヒットチャートを独占しつづける中南米系アーティスト。それとも、中南米を舞台としたアメリカの裏庭政策、麻薬問題、経済格差を背景とする不法移民問題、スペイン・カタルーニャをめぐる独立問題といったニュースでしょうか。
　じつは、これらのトピックはすべて、現代社会が抱える「文化の衝突」や「グローバル経済の歪み」の問題と深くつながっています。本ゼミでは、スペインから中南米諸国まで、世界20カ国以上に広がる広大なスペイン語圏を切り口に、世界を多角的な視点から読み解く力を養います。
　本ゼミが扱うのは、単なる「異文化の紹介」ではありません。歴史、芸術、スポーツ、社会問題など、あなたが自分で選んだテーマを、周辺地域（欧米・アジア）との関係性から再定義する作業です。
　「スペイン語は話せないけれど、スペイン語圏の文化や社会に興味がある」「ニュースの裏側を深く知りたい」「就活に向けて、物事を多角的に分析する力を身につけたい」――そんな意欲をもつ受講生を歓迎します。

【到達目標】
このゼミでは、上記「授業の概要と目的」に沿って、以下のような能力を伸ばすことを目的とする。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識の習得。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識を活かしながら、興味や関心のあるテーマを見つけ、それを追究していく思考力。
・興味や関心のあるテーマについて、それを幅広い視角から見つめなおす柔軟な発想力。
・興味や関心のあるテーマについて論理的に解釈し、それを他者にむけて明快に説明する能力。
・他者との議論を通じてみずからの問題意識を深める能力。
・効果的なプレゼンテーション技法および論理的な文章表現力。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミは2部構成のもとに進められる。第1部では、スペイン語圏の文化と社会を見ていくうえで「最低限これだけは知っておきたい」という事柄について、さまざまな資料を用いながらディスカッション形式で学んでいく。それを受けるかたちで、第2部では、より専門的な内容について、プレゼンテーションやグループ討議を通じて理解を深めていく。授業内での発表については、それぞれのテーマについて全体討議を実施し、教員がそれをまとめるかたちで指導、助言等を行なう。リアクションペーパーの提出を課す場合は、翌週の授業で教員からフィードバックを行ない、全体討議を通じて学生の理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、春学期のゼミ運営方針について話し合う。
第2回	各自のテーマ設定	各自「スペイン語圏の文化と社会」に関する発表テーマを自由に選ぶ。それを受けて、必要な下調べの方法や発表のポイントについて教員がコメントを加える。
第3回	各自で設定したテーマに関する事前学習	第2回のゼミで各自設定したテーマからいくつかの項目をピックアップし、関連資料を用いながら事前学習を行なう。
第4回	各自で設定したテーマに関する発表	各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、それを踏まえてグループディスカッションを行なう。
第5回	各自で設定したテーマに関する発表（つづき）	第4回にひきつづき、各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、さらなる理解を促す。
第6回	各自で設定したテーマに関する発表（まとめ）	各自で設定したテーマに関する発表のまとめを行なう。すべての発表を通じて見えてきた共通の問題や関心領域に注目し、教員による補足説明を行なったあと、グループディスカッションを通じて理解を深める。
第7回	スペイン・カタルーニャ州の独立運動と「スペイン社会のいま」	カタルーニャの独立運動に関する複数の資料を用いながら、この運動が生じた背景や歴史的経緯について、グループディスカッション等を通じて理解を深める。
第8回	スペイン内戦とフランコ独裁	カタルーニャ独立運動の背景を理解するために不可欠なスペイン内戦とその後のフランコ独裁時代の社会について学ぶ。
第9回	フランコ独裁体制とスポーツ	フランコ独裁時代におけるスポーツ、とりわけ国民的スポーツの代表格であるサッカーが果たした役割について見ていく。
第10回	スペインにおけるスポーツの歴史	スペイン社会の成り立ちにおいてスポーツが果たした役割を幅広い視点から見ていく。
第11回	スペインにおける映画産業	スペイン民主化の過程を映し出している映画に注目し、グループディスカッション等を通じてその背景理解に努める。
第12回	日本とスペインの交流史	日本とスペインを結ぶ知られざる歴史に光を当て、両国関係の歴史をひもとく。
第13回	スペインの食文化	食を通じてスペイン文化の特質を探る方途を探る。
第14回	春学期ゼミの振り返り	春学期の活動を振り返り、グループディスカッションや全体討議を通じて総括を行なう。
第1回	後期ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、具体的なゼミ運営方針について話し合う。
第2回	4年生による研究発表	各自設定したテーマについての4年生の発表後、関連テーマに関するグループディスカッションを行なう。
第3回	4年生による研究発表（つづき）	各自設定したテーマについての4年生の発表後、それを受けるかたちで3年生がプレゼンテーションを行ない、理解を深める。
第4回	スペインとラテンアメリカの交流史	広大なラテンアメリカ諸国とスペインの関係を歴史的観点から読み解く。

第5回	スペイン語圏における世界遺産の歴史と現状	スペイン語圏に存在する主だった世界遺産を取り上げ、その歴史と現状について見ていく。
第6回	ラテンアメリカのスポーツ	サッカーや野球など、ラテンアメリカのスポーツに着目し、そこから見えてくるさまざまな問題について考える。
第7回	ラテンアメリカの食文化	バラエティ豊かなラテンアメリカ諸国の食文化に着目し、その背後に横たわる歴史や文化に関する理解を深める。
第8回	中南米と日本の交流史	ラテンアメリカ諸国に点在する日系社会を中心に、中南米と日本の交流史に関する理解を深める。
第9回	スペイン語圏の音楽と舞踊	スペイン語圏の音楽に関するテーマを選び、グループ発表を中心にその歴史的背景についての理解を深める。
第10回	スペインおよび中南米における日本文化の現在	アニメや日本料理、ファッションなど、いまスペイン語圏で注目を浴びている日本文化の諸相をとりあげ、グループ発表等を通じてその実情に迫る。
第11回	中南米と北米の関係史	アメリカ合衆国が中南米社会にもたらしたさまざまな影響について見ていく。
第12回	スペインとイスラム文化	イスラム教徒が残したさまざまな影響を軸にスペイン社会の現状をとらえなおす。
第13回	スペイン語圏の文化と社会に関する総括	ゼミで扱ったさまざまなテーマをふりかえり、それらに共通する特徴や問題についてディスカッション形式で自由に話し合う。
第14回	まとめ	年間のゼミ活動を振り返り、反省点等の話し合いを通じて次年度のゼミ活動の活性化に役立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自のテーマに沿って参考文献を指示するので、それに目を通すこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
初回授業で指示する。

【参考書】
初回授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】
研究発表(70％)、平常点(30％）を目安に、発表の準備やプレゼンテーションスキル、グループ討議への積極的な参加、等々を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
まずは日本語できちんと議論し、論理的に自分の考えを展開することができる力を身につけることが重要です。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The purpose of this seminar is to enable students to face various aspects in vast Spanish-speaking nations, not only from Spain but Mexico in the north as well as the Argentine in the south etc.
Many of these problems have broken out in close contacts and relations with Europe, America and other countries in the world. What unexpected crucial scenes and points do students discover in approaching the problems in Spanish-speaking nations ?
To achieve the goal, there are diverse angles according to students' own interests —— history, art, sports, literature and so forth. It is, however, not enough to discover and confront their own favorite fields. Starting from their interesting areas, it is hopefully important to assess a variety of aspects in their flexible views.
In this seminar, students will be expected to challenge various activities to find out crucial points, mostly speaking Japanese. This course is, therefore, open to all students —— including those unfamiliar with Spanish language.
We sincerely welcome all students challenging our exciting intellectual discovery-trip.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following;
Quality of the students' presentation in the class: 70% and in class contribution:30%

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

大西　亮

サブタイトル：スペイン語圏の文化と社会 ―「点」の知識を「線」でつなぎ、世界の見方を変える―
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「スペイン語圏」と聞いて、あなたは何を思い浮かべますか？ 情熱的なフラメンコ、サッカー、ZARAの最新ファッション、世界のヒットチャートを独占しつづける中南米系アーティスト。それとも、中南米を舞台としたアメリカの裏庭政策、麻薬問題、経済格差を背景とする不法移民問題、スペイン・カタルーニャをめぐる独立問題といったニュースでしょうか。
　じつは、これらのトピックはすべて、現代社会が抱える「文化の衝突」や「グローバル経済の歪み」の問題と深くつながっています。本ゼミでは、スペインから中南米諸国まで、世界20カ国以上に広がる広大なスペイン語圏を切り口に、世界を多角的な視点から読み解く力を養います。
　本ゼミが扱うのは、単なる「異文化の紹介」ではありません。歴史、芸術、スポーツ、社会問題など、あなたが自分で選んだテーマを、周辺地域（欧米・アジア）との関係性から再定義する作業です。
　「スペイン語は話せないけれど、スペイン語圏の文化や社会に興味がある」「ニュースの裏側を深く知りたい」「就活に向けて、物事を多角的に分析する力を身につけたい」――そんな意欲をもつ受講生を歓迎します。

【到達目標】
このゼミでは、上記「授業の概要と目的」に沿って、以下のような能力を伸ばすことを目的とする。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識の習得。
・スペイン語圏の文化と社会に関する基礎的な知識を活かしながら、興味や関心のあるテーマを見つけ、それを追究していく思考力。
・興味や関心のあるテーマについて、それを幅広い視角から見つめなおす柔軟な発想力。
・興味や関心のあるテーマについて論理的に解釈し、それを他者にむけて明快に説明する能力。
・他者との議論を通じてみずからの問題意識を深める能力。
・効果的なプレゼンテーション技法および論理的な文章表現力。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミは2部構成のもとに進められる。第1部では、スペイン語圏の文化と社会を見ていくうえで「最低限これだけは知っておきたい」という事柄について、さまざまな資料を用いながらディスカッション形式で学んでいく。それを受けるかたちで、第2部では、より専門的な内容について、プレゼンテーションやグループ討議を通じて理解を深めていく。授業内での発表については、それぞれのテーマについて全体討議を実施し、教員がそれをまとめるかたちで指導、助言等を行なう。リアクションペーパーの提出を課す場合は、翌週の授業で教員からフィードバックを行ない、全体討議を通じて学生の理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、春学期のゼミ運営方針について話し合う。
第2回	各自のテーマ設定	各自「スペイン語圏の文化と社会」に関する発表テーマを自由に選ぶ。それを受けて、必要な下調べの方法や発表のポイントについて教員がコメントを加える。
第3回	各自で設定したテーマに関する事前学習	第2回のゼミで各自設定したテーマからいくつかの項目をピックアップし、関連資料を用いながら事前学習を行なう。
第4回	各自で設定したテーマに関する発表	各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、それを踏まえてグループディスカッションを行なう。
第5回	各自で設定したテーマに関する発表（つづき）	第4回にひきつづき、各自で設定したテーマに関する発表を行なう。それを受けて、発表で扱われたテーマに関する補足説明を教員が行ない、さらなる理解を促す。
第6回	各自で設定したテーマに関する発表（まとめ）	各自で設定したテーマに関する発表のまとめを行なう。すべての発表を通じて見えてきた共通の問題や関心領域に注目し、教員による補足説明を行なったあと、グループディスカッションを通じて理解を深める。
第7回	スペイン・カタルーニャ州の独立運動と「スペイン社会のいま」	カタルーニャの独立運動に関する複数の資料を用いながら、この運動が生じた背景や歴史的経緯について、グループディスカッション等を通じて理解を深める。
第8回	スペイン内戦とフランコ独裁	カタルーニャ独立運動の背景を理解するために不可欠なスペイン内戦とその後のフランコ独裁時代の社会について学ぶ。
第9回	フランコ独裁体制とスポーツ	フランコ独裁時代におけるスポーツ、とりわけ国民的スポーツの代表格であるサッカーが果たした役割について見ていく。
第10回	スペインにおけるスポーツの歴史	スペイン社会の成り立ちにおいてスポーツが果たした役割を幅広い視点から見ていく。
第11回	スペインにおける映画産業	スペイン民主化の過程を映し出している映画に注目し、グループディスカッション等を通じてその背景理解に努める。
第12回	日本とスペインの交流史	日本とスペインを結ぶ知られざる歴史に光を当て、両国関係の歴史をひもとく。
第13回	スペインの食文化	食を通じてスペイン文化の特質を探る方途を探る。
第14回	春学期ゼミの振り返り	春学期の活動を振り返り、グループディスカッションや全体討議を通じて総括を行なう。
第1回	後期ゼミ運営方針についての話し合い	学生による自主的なゼミ運営という基本原則を確認し、具体的なゼミ運営方針について話し合う。
第2回	4年生による研究発表	各自設定したテーマについての4年生の発表後、関連テーマに関するグループディスカッションを行なう。
第3回	4年生による研究発表（つづき）	各自設定したテーマについての4年生の発表後、それを受けるかたちで3年生がプレゼンテーションを行ない、理解を深める。
第4回	スペインとラテンアメリカの交流史	広大なラテンアメリカ諸国とスペインの関係を歴史的観点から読み解く。

第5回	スペイン語圏における世界遺産の歴史と現状	スペイン語圏に存在する主だった世界遺産を取り上げ、その歴史と現状について見ていく。
第6回	ラテンアメリカのスポーツ	サッカーや野球など、ラテンアメリカのスポーツに着目し、そこから見えてくるさまざまな問題について考える。
第7回	ラテンアメリカの食文化	バラエティ豊かなラテンアメリカ諸国の食文化に着目し、その背後に横たわる歴史や文化に関する理解を深める。
第8回	中南米と日本の交流史	ラテンアメリカ諸国に点在する日系社会を中心に、中南米と日本の交流史に関する理解を深める。
第9回	スペイン語圏の音楽と舞踊	スペイン語圏の音楽に関するテーマを選び、グループ発表を中心にその歴史的背景についての理解を深める。
第10回	スペインおよび中南米における日本文化の現在	アニメや日本料理、ファッションなど、いまスペイン語圏で注目を浴びている日本文化の諸相をとりあげ、グループ発表等を通じてその実情に迫る。
第11回	中南米と北米の関係史	アメリカ合衆国が中南米社会にもたらしたさまざまな影響について見ていく。
第12回	スペインとイスラム文化	イスラム教徒が残したさまざまな影響を軸にスペイン社会の現状をとらえなおす。
第13回	スペイン語圏の文化と社会に関する総括	ゼミで扱ったさまざまなテーマをふりかえり、それらに共通する特徴や問題についてディスカッション形式で自由に話し合う。
第14回	まとめ	年間のゼミ活動を振り返り、反省点等の話し合いを通じて次年度のゼミ活動の活性化に役立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自のテーマに沿って参考文献を指示するので、それに目を通すこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
初回授業で指示する。

【参考書】
初回授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】
研究発表(70％)、平常点(30％）を目安に、発表の準備やプレゼンテーションスキル、グループ討議への積極的な参加、等々を総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
まずは日本語できちんと議論し、論理的に自分の考えを展開することができる力を身につけることが重要です。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The purpose of this seminar is to enable students to face various aspects in vast Spanish-speaking nations, not only from Spain but Mexico in the north as well as the Argentine in the south etc.
Many of these problems have broken out in close contacts and relations with Europe, America and other countries in the world. What unexpected crucial scenes and points do students discover in approaching the problems in Spanish-speaking nations ?
To achieve the goal, there are diverse angles according to students' own interests —— history, art, sports, literature and so forth. It is, however, not enough to discover and confront their own favorite fields. Starting from their interesting areas, it is hopefully important to assess a variety of aspects in their flexible views.
In this seminar, students will be expected to challenge various activities to find out crucial points, mostly speaking Japanese. This course is, therefore, open to all students —— including those unfamiliar with Spanish language.
We sincerely welcome all students challenging our exciting intellectual discovery-trip.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following;
Quality of the students' presentation in the class: 70% and in class contribution:30%

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

衣笠　正晃

サブタイトル：身近な文化を読みほどく
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　どのような社会でも、その文化はつねに異文化＝他者との出会いや対決のなかで自らを形成し続けており（＝相関的）、その結果として多様な（＝複数的）要素が、重なり合って存在する（＝重層的）ものとなっています。
　本ゼミではこのような〈相関性・複数性・重層性〉という視点から、われわれを取り巻くさまざまな文化事象を、ゼミの仲間との自主的な議論を通じて考察してゆきます。そのなかで現代社会のあり方とそれが抱える問題を深く理解するとともに、それに向き合う批判的な視座と判断力を身につけることを目指します。
　なおこれまで本ゼミの授業や個人研究で取り上げられてきた対象は、アニメ、マンガ（コミック）、映画、ポピュラー音楽、ファッション、ツーリズム（観光）から、スポーツ社会学、都市空間論、教育問題、言語と社会、ITと社会など、多岐にわたります。

【到達目標】
1）比較文学・比較文化、カルチュラル・スタディーズ、文化社会学、メディア論など、文化の研究・分析に必要な理論的枠組みや知識を習得するとともに、批判的思考を身に付ける。
2）幅広い知的好奇心を保ちつつ自らの関心領域を絞り込み、具体的な文化事象の考察をおこない、現代世界の諸問題とその歴史的文脈について理解し、自らの考えを深める。
3）個人研究の発表、グループでの討議・報告を通じて、自らの意見を説得的に伝えることのできる論理性・プレゼンテーション力を身につける。
4）先行研究など文献の読解やフィールドワークなどの調査に必要な、アカデミックスキルを学び取る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　上記の目標を実現するため、このゼミではグループワークと個人研究を並行しておこないます。
　春学期には、文化を考えるための基礎となる考え方や理論を確認するため、教員の講義や文献講読にもとづいたディベートや、グループワークによるプレゼンテーション、ディスカッションをおこないます。秋学期は講義とそれにもとづくディベート、国際文化情報学会のためのグループワーク、各自の個人研究の紹介・発表をおこないます。また随所で理論的な枠組み、モデルとなる研究を検討します。
　演習参加者は自分の関心に応じてテーマを設定し（必要に応じて担当教員がアドバイスします）、授業を通じた学び、ゼミ生相互の批評やアドバイスを生かしながら、自らの研究として集約します。発表担当者はグループ・個人いずれの場合も、レジュメを作成し、パワーポイントなどを用いて発表をおこないます（事前に資料を配付してもらいます）。発表に対しては全員が参加してのディスカッションをおこないますので、担当者以外の人も十分な予習と積極的な発言が求められます。また毎回各自のコメントを提出してもらいますが、その内容については授業や学習支援システムをつうじて共有し、フィードバックします。
　なお授業での講読文献・グループワークのテーマについては、ゼミメンバーの関心や研究テーマを考慮して決定します。
　また夏休み中に実施予定の合宿では、テーマを決めた学習会や研究の中間報告を予定しています。加えて学期中にフィールドワークを実施する予定です。
※授業の進め方については、学生と教員との話し合いにもとづいて変更を加えることがあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	シラバス・授業の進め方の確認、各自が関心をもつトピックの紹介
2	グループワーク(1)＋教員による講義(1)	4年生による研究テーマの紹介、および教員による講義（文化研究の方法論ついて）
3	グループワーク(2)	発表とディスカッション、および第2回授業での講義にもとづくディベート
4	グループワーク(3)	発表とディスカッション、およびグループワークのテーマ決め
5	グループワーク(4)＋教員による講義(2)	発表とディスカッション、および教員による講義（批判的思考について）
6	グループワーク(5)	発表とディスカッション、および第5回授業での講義にもとづくディベート
7	グループワーク(6)	発表とディスカッション（学生による模擬授業①）
8	グループワーク(7)	発表とディスカッション（学生による模擬授業②）
9	フィールドワーク	東京の街を歩くなかでの問題発見とレポートの作成
10	グループワーク(8)	フィールドワークでの見聞にもとづくディベート
11	教員による講義(3)	論文の書き方についての整理と解説
12	グループワーク(9)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて①）
13	グループワーク(10)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて②）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ、夏合宿の準備
1	イントロダクション＋教員による講義(1)	秋学期のスケジュールの確認、および教員による講義（比較文化の諸問題）
2	グループワーク(1)	第1回授業での講義にもとづくディベート
3	教員による講義(2)	教員による講義（日本文化論の諸問題）
4	グループワーク(2)	第3回授業での講義にもとづくディベート
5	教員による講義(3)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見①）
6	グループワーク(3)	第5回授業での講義にもとづくディベート
7	教員による講義(4)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見②）
8	グループワーク(4)	第7回授業での講義にもとづくディベート、および卒論・ゼミ論の第1次提出
9	個人研究発表(1)＋グループワーク(5)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(1)
10	個人研究発表(2)＋グループワーク(6)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(2)
11	グループワーク(7)	国際文化情報学会でのゼミ発表準備(3)
12	個人研究発表(3)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)
13	個人研究発表(4)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い、卒論・ゼミ論の最終提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・指定ないし配布された文献・資料を十分に読み込んでおくこと。関連する資料・情報について事前の指示にしたがって（または自主的に）収集・入手し、理解につとめること。
・発表を担当する場合（グループ、個人とも）は、レジュメ等の資料作成を含め、プレゼンテーションの準備をおこなうこと。担当しない場合も事前の指示にしたがって予習をおこない、質問・議論すべき点をあらかじめ考えておくこと（内容の要約をミニレポートとして提出してもらう場合があります）。
・フィールドワークなどの際、指示にしたがってレポートを作成し、提出すること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・岡本健ほか（編）『ゆるレポ――卒論・レポートに役立つ「現代社会」と「メディア・コンテンツ」に関する40の研究（人文書院、2021年）
※その他文献や資料のプリント類を随時使用します。

【参考書】
※授業中に随時紹介します。基本図書およびブックガイドとして下記のものを挙げておきます。
・松本茂・河野哲也『大学生のための「読む・書く・ﾌﾟﾚｾﾞﾝ・ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ」の方法』（改訂第2版）（玉川大学出版部、2015年）
・井上俊・長谷正人（編著）『文化社会学入門――テーマとツール』（ミネルヴァ書房、2010年）
・吉見俊哉『現代文化論』（有斐閣、2018年）

【成績評価の方法と基準】
　平常点（授業準備、発表、議論への参加など。50％）、提出物（リアクションペーパー、課題、レポートなど。50％）をあわせて評価します。
　なお評価にあたっては、以下の5点に着目します。
(1) 文化を研究・分析するための基本概念と方法論を理解・習得できているか。
(2) 対象とする事例について、十分な情報にもとづいて、社会的・歴史的文脈のなかで正確に理解できているか。
(3) 文献読解や調査のスキルを習得できているか。
(4) 報告や討論を通じてコミュニケーション能力を向上させ、共同の学びに積極的に参加・貢献できているか。
(5) 授業での学習成果を主体的・説得的に表現できているか。
※この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
・ゼミ生の関心対象が多岐にわたるため、共通した目的としての批判的視点の育成と、実践的な調査方法についての指導をいっそう充実させたい。
・学生各自の研究・論文執筆へのサポートを強化するために、個別指導の機会をできるだけ設定したい。

【学生が準備すべき機器他】
・資料の配付および課題提出にあたっては学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
　自分の研究テーマに閉じこもるのではなく、幅広い知的関心をもってグループワークに参加するとともに、他のメンバーのテーマにたいして積極的に関心をもち、コメントやアドバイスのできる皆さんの参加を期待しています。

【Outline (in English)】
In this seminar we will learn how to analyze everyday cultural phenomena around us through active discussions among members, paying particular attention to the correlated, multitudinous, and multilayered structure of culture.　The goals of the course are to acquire a better understanding of the issues of contemporary society and cultivate a critical attitude toward them. Students will be expected to have completed required assignments after each class meeting. The required study time will be more than four hours for a class.　The overall grade will be decided based on in-class participation (50%) and submitted papers (50%).

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

衣笠　正晃

サブタイトル：身近な文化を読みほどく
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　どのような社会でも、その文化はつねに異文化＝他者との出会いや対決のなかで自らを形成し続けており（＝相関的）、その結果として多様な（＝複数的）要素が、重なり合って存在する（＝重層的）ものとなっています。
　本ゼミではこのような〈相関性・複数性・重層性〉という視点から、われわれを取り巻くさまざまな文化事象を、ゼミの仲間との自主的な議論を通じて考察してゆきます。そのなかで現代社会のあり方とそれが抱える問題を深く理解するとともに、それに向き合う批判的な視座と判断力を身につけることを目指します。
　なおこれまで本ゼミの授業や個人研究で取り上げられてきた対象は、アニメ、マンガ（コミック）、映画、ポピュラー音楽、ファッション、ツーリズム（観光）から、スポーツ社会学、都市空間論、教育問題、言語と社会、ITと社会など、多岐にわたります。

【到達目標】
1）比較文学・比較文化、カルチュラル・スタディーズ、文化社会学、メディア論など、文化の研究・分析に必要な理論的枠組みや知識を習得するとともに、批判的思考を身に付ける。
2）幅広い知的好奇心を保ちつつ自らの関心領域を絞り込み、具体的な文化事象の考察をおこない、現代世界の諸問題とその歴史的文脈について理解し、自らの考えを深める。
3）個人研究の発表、グループでの討議・報告を通じて、自らの意見を説得的に伝えることのできる論理性・プレゼンテーション力を身につける。
4）先行研究など文献の読解やフィールドワークなどの調査に必要な、アカデミックスキルを学び取る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　上記の目標を実現するため、このゼミではグループワークと個人研究を並行しておこないます。
　春学期には、文化を考えるための基礎となる考え方や理論を確認するため、教員の講義や文献講読にもとづいたディベートや、グループワークによるプレゼンテーション、ディスカッションをおこないます。秋学期は講義とそれにもとづくディベート、国際文化情報学会のためのグループワーク、各自の個人研究の紹介・発表をおこないます。また随所で理論的な枠組み、モデルとなる研究を検討します。
　演習参加者は自分の関心に応じてテーマを設定し（必要に応じて担当教員がアドバイスします）、授業を通じた学び、ゼミ生相互の批評やアドバイスを生かしながら、自らの研究として集約します。発表担当者はグループ・個人いずれの場合も、レジュメを作成し、パワーポイントなどを用いて発表をおこないます（事前に資料を配付してもらいます）。発表に対しては全員が参加してのディスカッションをおこないますので、担当者以外の人も十分な予習と積極的な発言が求められます。また毎回各自のコメントを提出してもらいますが、その内容については授業や学習支援システムをつうじて共有し、フィードバックします。
　なお授業での講読文献・グループワークのテーマについては、ゼミメンバーの関心や研究テーマを考慮して決定します。
　また夏休み中に実施予定の合宿では、テーマを決めた学習会や研究の中間報告を予定しています。加えて学期中にフィールドワークを実施する予定です。
※授業の進め方については、学生と教員との話し合いにもとづいて変更を加えることがあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	シラバス・授業の進め方の確認、各自が関心をもつトピックの紹介
2	グループワーク(1)＋教員による講義(1)	4年生による研究テーマの紹介、および教員による講義（文化研究の方法論ついて）
3	グループワーク(2)	発表とディスカッション、および第2回授業での講義にもとづくディベート
4	グループワーク(3)	発表とディスカッション、およびグループワークのテーマ決め
5	グループワーク(4)＋教員による講義(2)	発表とディスカッション、および教員による講義（批判的思考について）
6	グループワーク(5)	発表とディスカッション、および第5回授業での講義にもとづくディベート
7	グループワーク(6)	発表とディスカッション（学生による模擬授業①）
8	グループワーク(7)	発表とディスカッション（学生による模擬授業②）
9	フィールドワーク	東京の街を歩くなかでの問題発見とレポートの作成
10	グループワーク(8)	フィールドワークでの見聞にもとづくディベート
11	教員による講義(3)	論文の書き方についての整理と解説
12	グループワーク(9)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて①）
13	グループワーク(10)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて②）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ、夏合宿の準備
1	イントロダクション＋教員による講義(1)	秋学期のスケジュールの確認、および教員による講義（比較文化の諸問題）
2	グループワーク(1)	第1回授業での講義にもとづくディベート
3	教員による講義(2)	教員による講義（日本文化論の諸問題）
4	グループワーク(2)	第3回授業での講義にもとづくディベート
5	教員による講義(3)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見①）
6	グループワーク(3)	第5回授業での講義にもとづくディベート
7	教員による講義(4)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見②）
8	グループワーク(4)	第7回授業での講義にもとづくディベート、および卒論・ゼミ論の第1次提出
9	個人研究発表(1)＋グループワーク(5)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(1)
10	個人研究発表(2)＋グループワーク(6)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(2)
11	グループワーク(7)	国際文化情報学会でのゼミ発表準備(3)
12	個人研究発表(3)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)
13	個人研究発表(4)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い、卒論・ゼミ論の最終提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・指定ないし配布された文献・資料を十分に読み込んでおくこと。関連する資料・情報について事前の指示にしたがって（または自主的に）収集・入手し、理解につとめること。
・発表を担当する場合（グループ、個人とも）は、レジュメ等の資料作成を含め、プレゼンテーションの準備をおこなうこと。担当しない場合も事前の指示にしたがって予習をおこない、質問・議論すべき点をあらかじめ考えておくこと（内容の要約をミニレポートとして提出してもらう場合があります）。
・フィールドワークなどの際、指示にしたがってレポートを作成し、提出すること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・岡本健ほか（編）『ゆるレポ――卒論・レポートに役立つ「現代社会」と「メディア・コンテンツ」に関する40の研究（人文書院、2021年）
※その他文献や資料のプリント類を随時使用します。

【参考書】
※授業中に随時紹介します。基本図書およびブックガイドとして下記のものを挙げておきます。
・松本茂・河野哲也『大学生のための「読む・書く・ﾌﾟﾚｾﾞﾝ・ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ」の方法』（改訂第2版）（玉川大学出版部、2015年）
・井上俊・長谷正人（編著）『文化社会学入門――テーマとツール』（ミネルヴァ書房、2010年）
・吉見俊哉『現代文化論』（有斐閣、2018年）

【成績評価の方法と基準】
　平常点（授業準備、発表、議論への参加など。50％）、提出物（リアクションペーパー、課題、レポートなど。50％）をあわせて評価します。
　なお評価にあたっては、以下の5点に着目します。
(1) 文化を研究・分析するための基本概念と方法論を理解・習得できているか。
(2) 対象とする事例について、十分な情報にもとづいて、社会的・歴史的文脈のなかで正確に理解できているか。
(3) 文献読解や調査のスキルを習得できているか。
(4) 報告や討論を通じてコミュニケーション能力を向上させ、共同の学びに積極的に参加・貢献できているか。
(5) 授業での学習成果を主体的・説得的に表現できているか。
※この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
・ゼミ生の関心対象が多岐にわたるため、共通した目的としての批判的視点の育成と、実践的な調査方法についての指導をいっそう充実させたい。
・学生各自の研究・論文執筆へのサポートを強化するために、個別指導の機会をできるだけ設定したい。

【学生が準備すべき機器他】
・資料の配付および課題提出にあたっては学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
　自分の研究テーマに閉じこもるのではなく、幅広い知的関心をもってグループワークに参加するとともに、他のメンバーのテーマにたいして積極的に関心をもち、コメントやアドバイスのできる皆さんの参加を期待しています。

【Outline (in English)】
In this seminar we will learn how to analyze everyday cultural phenomena around us through active discussions among members, paying particular attention to the correlated, multitudinous, and multilayered structure of culture.　The goals of the course are to acquire a better understanding of the issues of contemporary society and cultivate a critical attitude toward them. Students will be expected to have completed required assignments after each class meeting. The required study time will be more than four hours for a class.　The overall grade will be decided based on in-class participation (50%) and submitted papers (50%).

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

衣笠　正晃

サブタイトル：身近な文化を読みほどく
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
どのような社会でも、その文化はつねに異文化＝他者との出会いや対決のなかで自らを形成し続けており（＝相関的）、その結果として多様な（＝複数的）要素が、重なり合って存在する（＝重層的）ものとなっています。
本ゼミではこのような〈相関性・複数性・重層性〉という視点から、われわれを取り巻くさまざまな文化事象を、ゼミの仲間との自主的な議論を通じて考察してゆきます。そのなかで現代社会のあり方とそれが抱える問題を深く理解するとともに、それに向き合う批判的な視座と判断力を身につけることを目指します。
なおこれまで本ゼミの授業や個人研究で取り上げられてきた対象は、アニメ、マンガ（コミック）、映画、ポピュラー音楽、ファッション、ツーリズム（観光）から、スポーツ社会学、都市空間論、教育問題、言語と社会、ITと社会など、多岐にわたります。

【到達目標】
1）比較文学・比較文化、カルチュラル・スタディーズ、文化社会学、メディア論など、文化の研究・分析に必要な理論的枠組みや知識を習得するとともに、批判的思考を身に付ける。
2）幅広い知的好奇心を保ちつつ自らの関心領域を絞り込み、具体的な文化事象の考察をおこない、現代世界の諸問題とその歴史的文脈について理解し、自らの考えを深める。
3）個人研究の発表、グループでの討議・報告を通じて、自らの意見を説得的に伝えることのできる論理性・プレゼンテーション力を身につける。
4）先行研究など文献の読解やフィールドワークなどの調査に必要な、アカデミックスキルを学び取る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
上記の目標を実現するため、このゼミではグループワークと個人研究を並行しておこないます。
春学期には、文化を考えるための基礎となる考え方や理論を確認するため、教員の講義や文献講読にもとづいたディベートや、グループワークによるプレゼンテーション、ディスカッションをおこないます。秋学期は講義とそれにもとづくディベート、国際文化情報学会のためのグループワーク、各自の個人研究の紹介・発表をおこないます。また随所で理論的な枠組み、モデルとなる研究を検討します。
演習参加者は自分の関心に応じてテーマを設定し（必要に応じて担当教員がアドバイスします）、授業を通じた学び、ゼミ生相互の批評やアドバイスを生かしながら、自らの研究として集約します。発表担当者はグループ・個人いずれの場合も、レジュメを作成し、パワーポイントなどを用いて発表をおこないます（事前に資料を配付してもらいます）。発表に対しては全員が参加してのディスカッションをおこないますので、担当者以外の人も十分な予習と積極的な発言が求められます。また毎回各自のコメントを提出してもらいますが、その内容については授業や学習支援システムをつうじて共有し、フィードバックします。
なお授業での講読文献・グループワークのテーマについては、ゼミメンバーの関心や研究テーマを考慮して決定します。
また夏休み中に実施予定の合宿では、テーマを決めた学習会や研究の中間報告を予定しています。加えて学期中にフィールドワークを実施する予定です。
※授業の進め方については、学生と教員との話し合いにもとづいて変更を加えることがあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	シラバス・授業の進め方の確認、各自が関心をもつトピックの紹介
2	グループワーク(1)＋教員による講義(1)	4年生による研究テーマの紹介、および教員による講義（文化研究の方法論ついて）
3	グループワーク(2)	発表とディスカッション、および第2回授業での講義にもとづくディベート
4	グループワーク(3)	発表とディスカッション、およびグループワークのテーマ決め
5	グループワーク(4)＋教員による講義(2)	発表とディスカッション、および教員による講義（批判的思考について）
6	グループワーク(5)	発表とディスカッション、および第5回授業での講義にもとづくディベート
7	グループワーク(6)	発表とディスカッション（学生による模擬授業①）
8	グループワーク(7)	発表とディスカッション（学生による模擬授業②）
9	フィールドワーク	東京の街を歩くなかでの問題発見とレポートの作成
10	グループワーク(8)	フィールドワークでの見聞にもとづくディベート
11	教員による講義(3)	論文の書き方についての整理と解説
12	グループワーク(9)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて①）
13	グループワーク(10)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて②）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ、夏合宿の準備
1	イントロダクション＋教員による講義(1)	秋学期のスケジュールの確認、および教員による講義（比較文化の諸問題）
2	グループワーク(1)	第1回授業での講義にもとづくディベート
3	教員による講義(2)	教員による講義（日本文化論の諸問題）
4	グループワーク(2)	第3回授業での講義にもとづくディベート
5	教員による講義(3)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見①）
6	グループワーク(3)	第5回授業での講義にもとづくディベート
7	教員による講義(4)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見②）
8	グループワーク(4)	第7回授業での講義にもとづくディベート、および卒論・ゼミ論の第1次提出
9	個人研究発表(1)＋グループワーク(5)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(1)
10	個人研究発表(2)＋グループワーク(6)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(2)
11	グループワーク(7)	国際文化情報学会でのゼミ発表準備(3)
12	個人研究発表(3)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)
13	個人研究発表(4)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い、卒論・ゼミ論の最終提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・指定ないし配布された文献・資料を十分に読み込んでおくこと。関連する資料・情報について事前の指示にしたがって（または自主的に）収集・入手し、理解につとめること。
・発表を担当する場合（グループ、個人とも）は、レジュメ等の資料作成を含め、プレゼンテーションの準備をおこなうこと。担当しない場合も事前の指示にしたがって予習をおこない、質問・議論すべき点をあらかじめ考えておくこと（内容の要約をミニレポートとして提出してもらう場合があります）。
・フィールドワークなどの際、指示にしたがってレポートを作成し、提出すること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・岡本健ほか（編）『ゆるレポ――卒論・レポートに役立つ「現代社会」と「メディア・コンテンツ」に関する40の研究（人文書院、2021年）
※その他文献や資料のプリント類を随時使用します。

【参考書】
※授業中に随時紹介します。基本図書およびブックガイドとして下記のものを挙げておきます。
・松本茂・河野哲也『大学生のための「読む・書く・ﾌﾟﾚｾﾞﾝ・ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ」の方法』（改訂第2版）（玉川大学出版部、2015年）
・井上俊・長谷正人（編著）『文化社会学入門――テーマとツール』（ミネルヴァ書房、2010年）
・吉見俊哉『現代文化論』（有斐閣、2018年）

【成績評価の方法と基準】
　平常点（授業準備、発表、議論への参加など。50％）、提出物（リアクションペーパー、課題、レポートなど。50％）をあわせて評価します。
　なお評価にあたっては、以下の5点に着目します。
(1) 文化を研究・分析するための基本概念と方法論を理解・習得できているか。
(2) 対象とする事例について、十分な情報にもとづいて、社会的・歴史的文脈のなかで正確に理解できているか。
(3) 文献読解や調査のスキルを習得できているか。
(4) 報告や討論を通じてコミュニケーション能力を向上させ、共同の学びに積極的に参加・貢献できているか。
(5) 授業での学習成果を主体的・説得的に表現できているか。
※この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
・ゼミ生の関心対象が多岐にわたるため、共通した目的としての批判的視点の育成と、実践的な調査方法についての指導をいっそう充実させたい。
・学生各自の研究・論文執筆へのサポートを強化するために、個別指導の機会をできるだけ設定したい。

【学生が準備すべき機器他】
・資料の配付および課題提出にあたっては学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
　自分の研究テーマに閉じこもるのではなく、幅広い知的関心をもってグループワークに参加するとともに、他のメンバーのテーマにたいして積極的に関心をもち、コメントやアドバイスのできる皆さんの参加を期待しています。

【Outline (in English)】
In this seminar we will learn how to analyze everyday cultural phenomena around us through active discussions among members, paying particular attention to the correlated, multitudinous, and multilayered structure of culture.　The goals of the course are to acquire a better understanding of the issues of contemporary society and cultivate a critical attitude toward them. Students will be expected to have completed required assignments after each class meeting. The required study time will be more than four hours for a class.　The overall grade will be decided based on in-class participation (50%) and submitted papers (50%).

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

衣笠　正晃

サブタイトル：身近な文化を読みほどく
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
どのような社会でも、その文化はつねに異文化＝他者との出会いや対決のなかで自らを形成し続けており（＝相関的）、その結果として多様な（＝複数的）要素が、重なり合って存在する（＝重層的）ものとなっています。
本ゼミではこのような〈相関性・複数性・重層性〉という視点から、われわれを取り巻くさまざまな文化事象を、ゼミの仲間との自主的な議論を通じて考察してゆきます。そのなかで現代社会のあり方とそれが抱える問題を深く理解するとともに、それに向き合う批判的な視座と判断力を身につけることを目指します。
なおこれまで本ゼミの授業や個人研究で取り上げられてきた対象は、アニメ、マンガ（コミック）、映画、ポピュラー音楽、ファッション、ツーリズム（観光）から、スポーツ社会学、都市空間論、教育問題、言語と社会、ITと社会など、多岐にわたります。

【到達目標】
1）比較文学・比較文化、カルチュラル・スタディーズ、文化社会学、メディア論など、文化の研究・分析に必要な理論的枠組みや知識を習得するとともに、批判的思考を身に付ける。
2）幅広い知的好奇心を保ちつつ自らの関心領域を絞り込み、具体的な文化事象の考察をおこない、現代世界の諸問題とその歴史的文脈について理解し、自らの考えを深める。
3）個人研究の発表、グループでの討議・報告を通じて、自らの意見を説得的に伝えることのできる論理性・プレゼンテーション力を身につける。
4）先行研究など文献の読解やフィールドワークなどの調査に必要な、アカデミックスキルを学び取る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
上記の目標を実現するため、このゼミではグループワークと個人研究を並行しておこないます。
春学期には、文化を考えるための基礎となる考え方や理論を確認するため、教員の講義や文献講読にもとづいたディベートや、グループワークによるプレゼンテーション、ディスカッションをおこないます。秋学期は講義とそれにもとづくディベート、国際文化情報学会のためのグループワーク、各自の個人研究の紹介・発表をおこないます。また随所で理論的な枠組み、モデルとなる研究を検討します。
演習参加者は自分の関心に応じてテーマを設定し（必要に応じて担当教員がアドバイスします）、授業を通じた学び、ゼミ生相互の批評やアドバイスを生かしながら、自らの研究として集約します。発表担当者はグループ・個人いずれの場合も、レジュメを作成し、パワーポイントなどを用いて発表をおこないます（事前に資料を配付してもらいます）。発表に対しては全員が参加してのディスカッションをおこないますので、担当者以外の人も十分な予習と積極的な発言が求められます。また毎回各自のコメントを提出してもらいますが、その内容については授業や学習支援システムをつうじて共有し、フィードバックします。
なお授業での講読文献・グループワークのテーマについては、ゼミメンバーの関心や研究テーマを考慮して決定します。
また夏休み中に実施予定の合宿では、テーマを決めた学習会や研究の中間報告を予定しています。加えて学期中にフィールドワークを実施する予定です。
※授業の進め方については、学生と教員との話し合いにもとづいて変更を加えることがあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	シラバス・授業の進め方の確認、各自が関心をもつトピックの紹介
2	グループワーク(1)＋教員による講義(1)	4年生による研究テーマの紹介、および教員による講義（文化研究の方法論ついて）
3	グループワーク(2)	発表とディスカッション、および第2回授業での講義にもとづくディベート
4	グループワーク(3)	発表とディスカッション、およびグループワークのテーマ決め
5	グループワーク(4)＋教員による講義(2)	発表とディスカッション、および教員による講義（批判的思考について）
6	グループワーク(5)	発表とディスカッション、および第5回授業での講義にもとづくディベート
7	グループワーク(6)	発表とディスカッション（学生による模擬授業①）
8	グループワーク(7)	発表とディスカッション（学生による模擬授業②）
9	フィールドワーク	東京の街を歩くなかでの問題発見とレポートの作成
10	グループワーク(8)	フィールドワークでの見聞にもとづくディベート
11	教員による講義(3)	論文の書き方についての整理と解説
12	グループワーク(9)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて①）
13	グループワーク(10)	発表とディスカッション（国際文化情報学会での発表テーマについて②）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ、夏合宿の準備
1	イントロダクション＋教員による講義(1)	秋学期のスケジュールの確認、および教員による講義（比較文化の諸問題）
2	グループワーク(1)	第1回授業での講義にもとづくディベート
3	教員による講義(2)	教員による講義（日本文化論の諸問題）
4	グループワーク(2)	第3回授業での講義にもとづくディベート
5	教員による講義(3)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見①）
6	グループワーク(3)	第5回授業での講義にもとづくディベート
7	教員による講義(4)	教員による講義（時事問題のなかでの問題発見②）
8	グループワーク(4)	第7回授業での講義にもとづくディベート、および卒論・ゼミ論の第1次提出
9	個人研究発表(1)＋グループワーク(5)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(1)
10	個人研究発表(2)＋グループワーク(6)	3年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)、および国際文化情報学会でのゼミ発表準備(2)
11	グループワーク(7)	国際文化情報学会でのゼミ発表準備(3)
12	個人研究発表(3)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(1)
13	個人研究発表(4)	4年生による個人研究発表とゼミ全体での相互批評(2)
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い、卒論・ゼミ論の最終提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・指定ないし配布された文献・資料を十分に読み込んでおくこと。関連する資料・情報について事前の指示にしたがって（または自主的に）収集・入手し、理解につとめること。
・発表を担当する場合（グループ、個人とも）は、レジュメ等の資料作成を含め、プレゼンテーションの準備をおこなうこと。担当しない場合も事前の指示にしたがって予習をおこない、質問・議論すべき点をあらかじめ考えておくこと（内容の要約をミニレポートとして提出してもらう場合があります）。
・フィールドワークなどの際、指示にしたがってレポートを作成し、提出すること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・岡本健ほか（編）『ゆるレポ――卒論・レポートに役立つ「現代社会」と「メディア・コンテンツ」に関する40の研究（人文書院、2021年）
※その他文献や資料のプリント類を随時使用します。

【参考書】
※授業中に随時紹介します。基本図書およびブックガイドとして下記のものを挙げておきます。
・松本茂・河野哲也『大学生のための「読む・書く・ﾌﾟﾚｾﾞﾝ・ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ」の方法』（改訂第2版）（玉川大学出版部、2015年）
・井上俊・長谷正人（編著）『文化社会学入門――テーマとツール』（ミネルヴァ書房、2010年）
・吉見俊哉『現代文化論』（有斐閣、2018年）

【成績評価の方法と基準】
　平常点（授業準備、発表、議論への参加など。50％）、提出物（リアクションペーパー、課題、レポートなど。50％）をあわせて評価します。
　なお評価にあたっては、以下の5点に着目します。
(1) 文化を研究・分析するための基本概念と方法論を理解・習得できているか。
(2) 対象とする事例について、十分な情報にもとづいて、社会的・歴史的文脈のなかで正確に理解できているか。
(3) 文献読解や調査のスキルを習得できているか。
(4) 報告や討論を通じてコミュニケーション能力を向上させ、共同の学びに積極的に参加・貢献できているか。
(5) 授業での学習成果を主体的・説得的に表現できているか。
※この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
・ゼミ生の関心対象が多岐にわたるため、共通した目的としての批判的視点の育成と、実践的な調査方法についての指導をいっそう充実させたい。
・学生各自の研究・論文執筆へのサポートを強化するために、個別指導の機会をできるだけ設定したい。

【学生が準備すべき機器他】
・資料の配付および課題提出にあたっては学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
　自分の研究テーマに閉じこもるのではなく、幅広い知的関心をもってグループワークに参加するとともに、他のメンバーのテーマにたいして積極的に関心をもち、コメントやアドバイスのできる皆さんの参加を期待しています。

【Outline (in English)】
In this seminar we will learn how to analyze everyday cultural phenomena around us through active discussions among members, paying particular attention to the correlated, multitudinous, and multilayered structure of culture.　The goals of the course are to acquire a better understanding of the issues of contemporary society and cultivate a critical attitude toward them. Students will be expected to have completed required assignments after each class meeting. The required study time will be more than four hours for a class.　The overall grade will be decided based on in-class participation (50%) and submitted papers (50%).

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

奥石　哲哉

サブタイトル：英語，英語圏文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は，学生が英語・英語圏文化を中心に，その言語・文化事象をさまざまな形で受信し，自らの考えを発信していくことを目的とします．

【到達目標】
到達目標としては，1）学生が授業を通じ，できるだけ多くの英語に触れ，英語の力をつける，2）学生が学んだことを可能なかぎり発信していく，の二つです．具体的には，学生がまず英語を理解する力をつけ，文献が読めたり，ニュース等が聞けるようになったりしなければいけません．そのために，数多くの言語・文化事象を自ら受信する能力を高めることで，きちんと英語圏の言語・文化を理解していく態度を身につけていきます．その上で，それを学生が発信していきますが，その際には可能なかぎり，英語で発信することを考えていきます．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に対面での開講となります．授業計画自体に変更がある場合には，「学習支援システム」で提示します．
英語・英語文化について，あるいはより一般的に，言語・文化についての材料を用意して，学生が読んだり見聞きしながら体験していくことから始めます．その後，ゼミ生同士で気づきを共有したり，さらに各自が自らの考えを発表したりすることで，より理解・考察を深めていきます．
春学期では，主に英語の言語・文化事象を体験していくことに焦点を当てます．担当教員や学生が選んだ教材を読んだり，見聞きしたりしながら，きちんと理解できる能力を培います．担当者だけでなく，他のゼミ生も教材を徹底的に調べて，自分なりに理解してくることが要求されます．
秋学期では，教材を理解していくことを続けながら，各自の選んだテーマについてのプレゼンを混ぜていきます．自らの意見を発信し，全員で討論することによって，学生は視野を広げ，より深い理解に繋げることを目指します．
課題等に対してのフィードバックは，個々の学生の事情に応じて，「学習支援システム」，個人メール等を通じて行う予定です．さらに最終授業にて，全体の講評・まとめを行いたいと思います．
なお，以下の授業計画ですが，教材の数については変更する可能性がありますことをご了解ください．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	学生との話し合い．ゼミについての概略を説明．学生・担当教員の自己紹介．春学期でどのような教材を用いるか確認．すぐ次回の教材（教材_1）を配布し，担当者を決める．
2	教材_1（1回目）	教材_1について担当者が正確に理解しているか，チェック．
3	教材_1（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．併せて教材_2を配布．担当者を決める．
4	教材_2（1回目）	教材_2について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_3を配布．担当者を決める．
5	教材_2（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
6	教材_3（1回目）	教材_3について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_4を配布．担当者を決める．
7	教材_3（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
8	教材_4（1回目）	教材_4について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_5を配布．担当者を決める．
9	教材_4（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
10	教材_5（1回目）	教材_5について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_6を配布．担当者を決める．
11	教材_5（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
12	教材_6（1回目）	教材_6について担当者が正確に理解しているか，チェック．
13	教材_6（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
14	総括	これまでの教材の理解の仕方を総括する．資料の用い方等についても，再度検討し，今後の研究に役立てる．
15	イントロダクション	春学期を振り返り，改めて秋学期の授業開始に際し，スケジュール等を確認する．教材_7を配布し，担当者を決める．
16	教材_7（1回目）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ読み始める．
17	教材_7（2回目：より詳細に検討）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ，読み進める．教材_8を配布し，担当者を決める．
18	教材_7（3回目：wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材_8を配布し，担当者を決める．
19	教材_8（1回目）	教材_8について担当者が正確に理解しているか，チェック．
20	教材_8（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
21	学部学会に向けた取り組み_1	学部発表の内容を各自考える．
22	学部学会に向けた取り組み_2	学部発表の内容を固めていく．
23	学部学会に向けた取り組み_3	学部発表の内容の内容を最終的に決定する．
24	学部学会のリハーサル_1	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについて学習する．
25	学部学会のリハーサル_2	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについてより深く学習する．
26	学部学会の最終リハーサル	学部学会を控え，最後のリハーサルを行う．実際の発表を見据え，あくまで当日のことを頭に描きながら，よりよい発表になるようベストを尽くす．
27	教材_9（1回目）	教材_9について担当者が正確に理解しているか，チェック．
28	教材_9（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
教材の扱っている事柄や学部学会のトピックについて，学生がきちんと先行研究を読むこと．また，固有名詞（人名，地名等）もおろそかにせず，きちんと下調べをしておくこと．最近ではネットを用いたりすればたいていの情報は入手できます．
本学学則基準に鑑み，本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします．

【テキスト（教科書）】
特定のものは用いません．プリントの形で配布，あるいは授業支援システム等を通じて配布します．

【参考書】
随時，指定します．

【成績評価の方法と基準】
平常点(50%)，国際文化情報学会への貢献等(50%)を合計して成績を出します．なお，授業は出席することが当然なので、成績評価基準として「出席点」や「出席」という記載はしませんが，欠席が5回以上になりますと，参加度ゼロという扱いをするため平常点が極めて低くなり，単位取得が困難になります．国際文化情報学会への参加は，必ずしも義務ではありませんが，何らかの発表の機会を設けますので，学生は発表をすることが求められます．

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
昨年度未開講につき，特にありません.

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンが必要なときには，パソコン，スクリーンを用います．またDVD等も随時使用いたします.

【その他の重要事項】
１．英語に興味が持てない方には不向きです．特に，英語を読むのが億劫な学生には向きません.
２．上記の授業計画(Schedule)は実状に合わせて変更・修正を行います.
３．遅刻・欠席は原則として一切認めません.

【カリキュラム上の位置づけ】
本科目は，3年生，4年生がSA等を通じて自ら選んだコース（言語文化コース）での集大成に至る科目です．4年間を一つの山にたとえた場合その頂点に向かう科目なので，その重要性をしっかりと認識してください.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】By the end of this course, you should:
- become acquainted with the basic literature on language, communication, and culture studies in general.
- begin to develop your own ability to express your opinion using English.
【到達目標（Learning Objectives）】
By taking the course, you will be able to:
- familiarise yourself with various texts in English, and
- express your own opinions publicly.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You should prepare for each class session by reading relevant materials, etc. Often ignored is the importance of proper nouns. Please check their meanings beforehand.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
- Class activities (50%) and 'publication' experience (50%, e.g. give presentation in the FIC Conference held in autumn).
- 1 demerit for each class missed. 5 demerits =total failure of the course.

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

奥石　哲哉

サブタイトル：英語，英語圏文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は，学生が英語・英語圏文化を中心に，その言語・文化事象をさまざまな形で受信し，自らの考えを発信していくことを目的とします．

【到達目標】
到達目標としては，1）学生が授業を通じ，できるだけ多くの英語に触れ，英語の力をつける，2）学生が学んだことを可能なかぎり発信していく，の二つです．具体的には，学生がまず英語を理解する力をつけ，文献が読めたり，ニュース等が聞けるようになったりしなければいけません．そのために，数多くの言語・文化事象を自ら受信する能力を高めることで，きちんと英語圏の言語・文化を理解していく態度を身につけていきます．その上で，それを学生が発信していきますが，その際には可能なかぎり，英語で発信することを考えていきます．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に対面での開講となります．授業計画自体に変更がある場合には，「学習支援システム」で提示します．
英語・英語文化について，あるいはより一般的に，言語・文化についての材料を用意して，学生が読んだり見聞きしながら体験していくことから始めます．その後，ゼミ生同士で気づきを共有したり，さらに各自が自らの考えを発表したりすることで，より理解・考察を深めていきます．
春学期では，主に英語の言語・文化事象を体験していくことに焦点を当てます．担当教員や学生が選んだ教材を読んだり，見聞きしたりしながら，きちんと理解できる能力を培います．担当者だけでなく，他のゼミ生も教材を徹底的に調べて，自分なりに理解してくることが要求されます．
秋学期では，教材を理解していくことを続けながら，各自の選んだテーマについてのプレゼンを混ぜていきます．自らの意見を発信し，全員で討論することによって，学生は視野を広げ，より深い理解に繋げることを目指します．
課題等に対してのフィードバックは，個々の学生の事情に応じて，「学習支援システム」，個人メール等を通じて行う予定です．さらに最終授業にて，全体の講評・まとめを行いたいと思います．
なお，以下の授業計画ですが，教材の数については変更する可能性がありますことをご了解ください．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	学生との話し合い．ゼミについての概略を説明．学生・担当教員の自己紹介．春学期でどのような教材を用いるか確認．すぐ次回の教材（教材_1）を配布し，担当者を決める．
2	教材_1（1回目）	教材_1について担当者が正確に理解しているか，チェック．
3	教材_1（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．併せて教材_2を配布．担当者を決める．
4	教材_2（1回目）	教材_2について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_3を配布．担当者を決める．
5	教材_2（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
6	教材_3（1回目）	教材_3について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_4を配布．担当者を決める．
7	教材_3（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
8	教材_4（1回目）	教材_4について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_5を配布．担当者を決める．
9	教材_4（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
10	教材_5（1回目）	教材_5について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_6を配布．担当者を決める．
11	教材_5（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
12	教材_6（1回目）	教材_6について担当者が正確に理解しているか，チェック．
13	教材_6（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
14	総括	これまでの教材の理解の仕方を総括する．資料の用い方等についても，再度検討し，今後の研究に役立てる．
15	イントロダクション	春学期を振り返り，改めて秋学期の授業開始に際し，スケジュール等を確認する．教材_7を配布し，担当者を決める．
16	教材_7（1回目）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ読み始める．
17	教材_7（2回目：より詳細に検討）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ，読み進める．教材_8を配布し，担当者を決める．
18	教材_7（3回目：wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材_8を配布し，担当者を決める．
19	教材_8（1回目）	教材_8について担当者が正確に理解しているか，チェック．
20	教材_8（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
21	学部学会に向けた取り組み_1	学部発表の内容を各自考える．
22	学部学会に向けた取り組み_2	学部発表の内容を固めていく．
23	学部学会に向けた取り組み_3	学部発表の内容の内容を最終的に決定する．
24	学部学会のリハーサル_1	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについて学習する．
25	学部学会のリハーサル_2	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについてより深く学習する．
26	学部学会の最終リハーサル	学部学会を控え，最後のリハーサルを行う．実際の発表を見据え，あくまで当日のことを頭に描きながら，よりよい発表になるようベストを尽くす．
27	教材_9（1回目）	教材_9について担当者が正確に理解しているか，チェック．
28	教材_9（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
教材の扱っている事柄や学部学会のトピックについて，学生がきちんと先行研究を読むこと．また，固有名詞（人名，地名等）もおろそかにせず，きちんと下調べをしておくこと．最近ではネットを用いたりすればたいていの情報は入手できます．
本学学則基準に鑑み，本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします．

【テキスト（教科書）】
特定のものは用いません．プリントの形で配布，あるいは授業支援システム等を通じて配布します．

【参考書】
随時，指定します．

【成績評価の方法と基準】
平常点(50%)，国際文化情報学会への貢献等(50%)を合計して成績を出します．なお，授業は出席することが当然なので、成績評価基準として「出席点」や「出席」という記載はしませんが，欠席が5回以上になりますと，参加度ゼロという扱いをするため平常点が極めて低くなり，単位取得が困難になります．国際文化情報学会への参加は，必ずしも義務ではありませんが，何らかの発表の機会を設けますので，学生は発表をすることが求められます．

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
昨年度未開講につき，特にありません.

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンが必要なときには，パソコン，スクリーンを用います．またDVD等も随時使用いたします.

【その他の重要事項】
１．英語に興味が持てない方には不向きです．特に，英語を読むのが億劫な学生には向きません.
２．上記の授業計画(Schedule)は実状に合わせて変更・修正を行います.
３．遅刻・欠席は原則として一切認めません.

【カリキュラム上の位置づけ】
本科目は，3年生，4年生がSA等を通じて自ら選んだコース（言語文化コース）での集大成に至る科目です．4年間を一つの山にたとえた場合その頂点に向かう科目なので，その重要性をしっかりと認識してください.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】By the end of this course, you should:
- become acquainted with the basic literature on language, communication, and culture studies in general.
- begin to develop your own ability to express your opinion using English.
【到達目標（Learning Objectives）】
By taking the course, you will be able to:
- familiarise yourself with various texts in English, and
- express your own opinions publicly.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You should prepare for each class session by reading relevant materials, etc. Often ignored is the importance of proper nouns. Please check their meanings beforehand.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
- Class activities (50%) and 'publication' experience (50%, e.g. give presentation in the FIC Conference held in autumn).
- 1 demerit for each class missed. 5 demerits =total failure of the course.

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

奥石　哲哉

サブタイトル：英語，英語圏文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は，学生が英語・英語圏文化を中心に，その言語・文化事象をさまざまな形で受信し，自らの考えを発信していくことを目的とします．

【到達目標】
到達目標としては，1）学生が授業を通じ，できるだけ多くの英語に触れ，英語の力をつける，2）学生が学んだことを可能なかぎり発信していく，の二つです．具体的には，学生がまず英語を理解する力をつけ，文献が読めたり，ニュース等が聞けるようになったりしなければいけません．そのために，数多くの言語・文化事象を自ら受信する能力を高めることで，きちんと英語圏の言語・文化を理解していく態度を身につけていきます．その上で，それを学生が発信していきますが，その際には可能なかぎり，英語で発信することを考えていきます．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に対面での開講となります．授業計画自体に変更がある場合には，「学習支援システム」で提示します．
英語・英語文化について，あるいはより一般的に，言語・文化についての材料を用意して，学生が読んだり見聞きしながら体験していくことから始めます．その後，ゼミ生同士で気づきを共有したり，さらに各自が自らの考えを発表したりすることで，より理解・考察を深めていきます．
春学期では，主に英語の言語・文化事象を体験していくことに焦点を当てます．担当教員や学生が選んだ教材を読んだり，見聞きしたりしながら，きちんと理解できる能力を培います．担当者だけでなく，他のゼミ生も教材を徹底的に調べて，自分なりに理解してくることが要求されます．
秋学期では，教材を理解していくことを続けながら，各自の選んだテーマについてのプレゼンを混ぜていきます．自らの意見を発信し，全員で討論することによって，学生は視野を広げ，より深い理解に繋げることを目指します．
課題等に対してのフィードバックは，個々の学生の事情に応じて，「学習支援システム」，個人メール等を通じて行う予定です．さらに最終授業にて，全体の講評・まとめを行いたいと思います．
なお，以下の授業計画ですが，教材の数については変更する可能性がありますことをご了解ください．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	学生との話し合い．ゼミについての概略を説明．学生・担当教員の自己紹介．春学期でどのような教材を用いるか確認．すぐ次回の教材（教材_1）を配布し，担当者を決める．
2	教材_1（1回目）	教材_1について担当者が正確に理解しているか，チェック．
3	教材_1（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．併せて教材_2を配布．担当者を決める．
4	教材_2（1回目）	教材_2について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_3を配布．担当者を決める．
5	教材_2（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
6	教材_3（1回目）	教材_3について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_4を配布．担当者を決める．
7	教材_3（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
8	教材_4（1回目）	教材_4について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_5を配布．担当者を決める．
9	教材_4（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
10	教材_5（1回目）	教材_5について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_6を配布．担当者を決める．
11	教材_5（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
12	教材_6（1回目）	教材_6について担当者が正確に理解しているか，チェック．
13	教材_6（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
14	総括	これまでの教材の理解の仕方を総括する．資料の用い方等についても，再度検討し，今後の研究に役立てる．
15	イントロダクション	春学期を振り返り，改めて秋学期の授業開始に際し，スケジュール等を確認する．教材_7を配布し，担当者を決める．
16	教材_7（1回目）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ読み始める．
17	教材_7（2回目：より詳細に検討）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ，読み進める．教材_8を配布し，担当者を決める．
18	教材_7（3回目：wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材_8を配布し，担当者を決める．
19	教材_8（1回目）	教材_8について担当者が正確に理解しているか，チェック．
20	教材_8（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
21	学部学会に向けた取り組み_1	学部発表の内容を各自考える．
22	学部学会に向けた取り組み_2	学部発表の内容を固めていく．
23	学部学会に向けた取り組み_3	学部発表の内容の内容を最終的に決定する．
24	学部学会のリハーサル_1	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについて学習する．
25	学部学会のリハーサル_2	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについてより深く学習する．
26	学部学会の最終リハーサル	学部学会を控え，最後のリハーサルを行う．実際の発表を見据え，あくまで当日のことを頭に描きながら，よりよい発表になるようベストを尽くす．
27	教材_9（1回目）	教材_9について担当者が正確に理解しているか，チェック．
28	教材_9（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
教材の扱っている事柄や学部学会のトピックについて，学生がきちんと先行研究を読むこと．また，固有名詞（人名，地名等）もおろそかにせず，きちんと下調べをしておくこと．最近ではネットを用いたりすればたいていの情報は入手できます．
本学学則基準に鑑み，本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします．

【テキスト（教科書）】
特定のものは用いません．プリントの形で配布，あるいは授業支援システム等を通じて配布します．

【参考書】
随時，指定します．

【成績評価の方法と基準】
平常点(50%)，国際文化情報学会への貢献等(50%)を合計して成績を出します．なお，授業は出席することが当然なので、成績評価基準として「出席点」や「出席」という記載はしませんが，欠席が5回以上になりますと，参加度ゼロという扱いをするため平常点が極めて低くなり，単位取得が困難になります．国際文化情報学会への参加は，必ずしも義務ではありませんが，何らかの発表の機会を設けますので，学生は発表をすることが求められます．

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
昨年度未開講につき，特にありません.

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンが必要なときには，パソコン，スクリーンを用います．またDVD等も随時使用いたします.

【その他の重要事項】
１．英語に興味が持てない方には不向きです．特に，英語を読むのが億劫な学生には向きません.
２．上記の授業計画(Schedule)は実状に合わせて変更・修正を行います.
３．遅刻・欠席は原則として一切認めません.

【カリキュラム上の位置づけ】
本科目は，3年生，4年生がSA等を通じて自ら選んだコース（言語文化コース）での集大成に至る科目です．4年間を一つの山にたとえた場合その頂点に向かう科目なので，その重要性をしっかりと認識してください.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】By the end of this course, you should:
- become acquainted with the basic literature on language, communication, and culture studies in general.
- begin to develop your own ability to express your opinion using English.
【到達目標（Learning Objectives）】
By taking the course, you will be able to:
- familiarise yourself with various texts in English, and
- express your own opinions publicly.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You should prepare for each class session by reading relevant materials, etc. Often ignored is the importance of proper nouns. Please check their meanings beforehand.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
- Class activities (50%) and 'publication' experience (50%, e.g. give presentation in the FIC Conference held in autumn).
- 1 demerit for each class missed. 5 demerits =total failure of the course.

LIN400GA（言語学 / Linguistics 400）

言語文化演習

奥石　哲哉

サブタイトル：英語，英語圏文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は，学生が英語・英語圏文化を中心に，その言語・文化事象をさまざまな形で受信し，自らの考えを発信していくことを目的とします．

【到達目標】
到達目標としては，1）学生が授業を通じ，できるだけ多くの英語に触れ，英語の力をつける，2）学生が学んだことを可能なかぎり発信していく，の二つです．具体的には，学生がまず英語を理解する力をつけ，文献が読めたり，ニュース等が聞けるようになったりしなければいけません．そのために，数多くの言語・文化事象を自ら受信する能力を高めることで，きちんと英語圏の言語・文化を理解していく態度を身につけていきます．その上で，それを学生が発信していきますが，その際には可能なかぎり，英語で発信することを考えていきます．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に対面での開講となります．授業計画自体に変更がある場合には，「学習支援システム」で提示します．
英語・英語文化について，あるいはより一般的に，言語・文化についての材料を用意して，学生が読んだり見聞きしながら体験していくことから始めます．その後，ゼミ生同士で気づきを共有したり，さらに各自が自らの考えを発表したりすることで，より理解・考察を深めていきます．
春学期では，主に英語の言語・文化事象を体験していくことに焦点を当てます．担当教員や学生が選んだ教材を読んだり，見聞きしたりしながら，きちんと理解できる能力を培います．担当者だけでなく，他のゼミ生も教材を徹底的に調べて，自分なりに理解してくることが要求されます．
秋学期では，教材を理解していくことを続けながら，各自の選んだテーマについてのプレゼンを混ぜていきます．自らの意見を発信し，全員で討論することによって，学生は視野を広げ，より深い理解に繋げることを目指します．
課題等に対してのフィードバックは，個々の学生の事情に応じて，「学習支援システム」，個人メール等を通じて行う予定です．さらに最終授業にて，全体の講評・まとめを行いたいと思います．
なお，以下の授業計画ですが，教材の数については変更する可能性がありますことをご了解ください．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	学生との話し合い．ゼミについての概略を説明．学生・担当教員の自己紹介．春学期でどのような教材を用いるか確認．すぐ次回の教材（教材_1）を配布し，担当者を決める．
2	教材_1（1回目）	教材_1について担当者が正確に理解しているか，チェック．
3	教材_1（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．併せて教材_2を配布．担当者を決める．
4	教材_2（1回目）	教材_2について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_3を配布．担当者を決める．
5	教材_2（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
6	教材_3（1回目）	教材_3について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_4を配布．担当者を決める．
7	教材_3（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
8	教材_4（1回目）	教材_4について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_5を配布．担当者を決める．
9	教材_4（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
10	教材_5（1回目）	教材_5について担当者が正確に理解しているか，チェック．併せて教材_6を配布．担当者を決める．
11	教材_5（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
12	教材_6（1回目）	教材_6について担当者が正確に理解しているか，チェック．
13	教材_6（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
14	総括	これまでの教材の理解の仕方を総括する．資料の用い方等についても，再度検討し，今後の研究に役立てる．
15	イントロダクション	春学期を振り返り，改めて秋学期の授業開始に際し，スケジュール等を確認する．教材_7を配布し，担当者を決める．
16	教材_7（1回目）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ読み始める．
17	教材_7（2回目：より詳細に検討）	教材_7について担当者が正確に理解しているか，チェックしつつ，読み進める．教材_8を配布し，担当者を決める．
18	教材_7（3回目：wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材_8を配布し，担当者を決める．
19	教材_8（1回目）	教材_8について担当者が正確に理解しているか，チェック．
20	教材_8（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．
21	学部学会に向けた取り組み_1	学部発表の内容を各自考える．
22	学部学会に向けた取り組み_2	学部発表の内容を固めていく．
23	学部学会に向けた取り組み_3	学部発表の内容の内容を最終的に決定する．
24	学部学会のリハーサル_1	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについて学習する．
25	学部学会のリハーサル_2	学部学会の発表を念頭に置き，これまで研究してきたことを実際に発表してみる．プレゼンの仕方などについてより深く学習する．
26	学部学会の最終リハーサル	学部学会を控え，最後のリハーサルを行う．実際の発表を見据え，あくまで当日のことを頭に描きながら，よりよい発表になるようベストを尽くす．
27	教材_9（1回目）	教材_9について担当者が正確に理解しているか，チェック．
28	教材_9（2回目：より詳細に検討，wrap-up）	前回の作業を続け，まとめに入る．教材を理解するための資料等について，適宜担当教員が説明．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
教材の扱っている事柄や学部学会のトピックについて，学生がきちんと先行研究を読むこと．また，固有名詞（人名，地名等）もおろそかにせず，きちんと下調べをしておくこと．最近ではネットを用いたりすればたいていの情報は入手できます．
本学学則基準に鑑み，本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします．

【テキスト（教科書）】
特定のものは用いません．プリントの形で配布，あるいは授業支援システム等を通じて配布します．

【参考書】
随時，指定します．

【成績評価の方法と基準】
平常点(50%)，国際文化情報学会への貢献等(50%)を合計して成績を出します．なお，授業は出席することが当然なので、成績評価基準として「出席点」や「出席」という記載はしませんが，欠席が5回以上になりますと，参加度ゼロという扱いをするため平常点が極めて低くなり，単位取得が困難になります．国際文化情報学会への参加は，必ずしも義務ではありませんが，何らかの発表の機会を設けますので，学生は発表をすることが求められます．

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
昨年度未開講につき，特にありません.

【学生が準備すべき機器他】
プレゼンが必要なときには，パソコン，スクリーンを用います．またDVD等も随時使用いたします.

【その他の重要事項】
１．英語に興味が持てない方には不向きです．特に，英語を読むのが億劫な学生には向きません.
２．上記の授業計画(Schedule)は実状に合わせて変更・修正を行います.
３．遅刻・欠席は原則として一切認めません.

【カリキュラム上の位置づけ】
本科目は，3年生，4年生がSA等を通じて自ら選んだコース（言語文化コース）での集大成に至る科目です．4年間を一つの山にたとえた場合その頂点に向かう科目なので，その重要性をしっかりと認識してください.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】By the end of this course, you should:
- become acquainted with the basic literature on language, communication, and culture studies in general.
- begin to develop your own ability to express your opinion using English.
【到達目標（Learning Objectives）】
By taking the course, you will be able to:
- familiarise yourself with various texts in English, and
- express your own opinions publicly.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You should prepare for each class session by reading relevant materials, etc. Often ignored is the importance of proper nouns. Please check their meanings beforehand.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
- Class activities (50%) and 'publication' experience (50%, e.g. give presentation in the FIC Conference held in autumn).
- 1 demerit for each class missed. 5 demerits =total failure of the course.

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

言語文化演習

佐々木　直美

サブタイトル：世界遺産に学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんは旅行先やTVなどで目にする世界遺産の絶景や不思議に感動したり、憧れたりした経験があることでしょう。しかし、多くの世界遺産は環境問題や貧困問題、宗教問題など様々な現代の問題を反映し、直接それらの影響を受けています。このゼミでは、各人の関心に従って世界遺産とそれにまつわる様々な問題を掘り下げて研究します。単に世界遺産に関する知識を増やすことは、このゼミの目的ではありません。真の目的は、世界遺産の意義である「平和」について考え・行動することを学ぶことです。

【到達目標】
①世界遺産の意義を理解し、世界遺産検定2級以上の知識を修得する。。
②世界が抱える諸問題を認識し、それらについて自分の意見を述べたり、グループで議論を展開させる力を養う。
③資料収集と文献・資料の分析を通じて、研究発表や論文執筆を行う。
④世界遺産を通して、持続可能な地球の未来に向けた行動を習慣化するようになる。
⑤グループワークを通じて、他者とともに課題に取り組む協同性を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　この授業は演習です。課題文献の輪講と討論に加えて状況が許せばフィールドワークへ出ることもあります。
　また、毎年秋学期に開催される国際文化情報学会にむけて、合宿形式のフィールドワークや資料作りなど積極的なゼミへの参加と協力が必須です。
　サブゼミの時間を使って世界遺産検定２級の自習学習や学会発表準備を行うため、サブゼミにも参加することが前提です。
教室で行う対面授業を基本とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション1	昨年度の振り返り。 今年度の研究テーマについて議論する。
2	・世界遺産の基礎（日本） ・	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産・フィールドワークのテーマや場所について議論する。
3	世界遺産の基礎（ヨーロッパ1）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産について議論する。
4	世界遺産の基礎（ヨーロッパ2） 今年度の研究テーマ選定会	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループワークの成果をプレゼンテーションする。
5	世界遺産の基礎（ヨーロッパ３）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。
6	世界遺産の基礎（アフリカ1） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』1-3章の輪講と討論
7	世界遺産の基礎（アフリカ2） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』4-6章の輪講と討論
8	世界遺産の基礎（アメリカ大陸１） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』7-9章 輪講と討論
9	世界遺産の基礎（アメリカ大陸２） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』1-3章の輪講と討論
10	世界遺産の基礎（アメリカ大陸3） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』4-6章の輪講と討論
11	世界遺産の基礎（アジア1） 記憶と遺産	・世界遺産基礎知識の学習 ・課題図書輪講『長崎原爆記』7章-最後の輪講と討論 ・フィールドワークの準備
12	世界遺産の基礎（アジア2） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講　（基礎） ・フィールドワークの準備
13	世界遺産の基礎（アジア3） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （基礎） ・フィールドワークの準備
14	まとめ	・課題図書輪講と討論 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （発展） ・フィールドワークの準備
1	オリエンテーション	春学期に学んだことの復習と輪講準備、学会発表についての方針と内容の策定。
2	フィールドワーク報告会	フィールドワークの成果を全員で共有しながら討論する。 学会準備
3	グループ・ワーク（１）	学会発表にむけた資料収集。 課題資料の輪講と討論
4	グループ・ワーク（２）	学会発表にむけた資料分析。 課題資料の輪講と討論
5	グループ・ワーク（３）	学会発表にむけたグループ討論。 課題資料の輪講と討論
6	グループ・ワーク（４）	学会発表資料全体での討論。 課題資料の輪講と討論

7	グループ・ワーク（5）	学会発表資料の作成。
8	グループ・ワーク（6）	学会発表資料の全体確認。
9	グループ・ワーク（7）	学会発表リハーサル1 学会発表の最終調整
10	学会発表リハーサル	学会発表リハーサル2
11	文献講読1 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アジアの遺産
12	文献講読2 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 ヨーロッパの遺産
13	文献講読3 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アメリカ大陸の遺産
14	世界遺産検定対策 総括	アフリカ大陸の遺産とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・課題テキスト、参考文献を指定された期日までに読み、疑問点や意見をまとめる。
・本授業の準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
スーザン・サザード (著), 宇治川 康江 (翻訳)『ナガサキ』みすず書房、2019年。
秋月辰一郎『長崎原爆記―被爆医師の証言 (平和文庫)』 2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー『世界遺産検定公式ガイド300＜第5版＞』毎日コミュニケーションズ、2023年。

授業内で受講生たちとともに今年度の研究テーマを決定したのちに、適宜授業内で指示します。

【参考書】
高瀬毅『ナガサキ　消えたもう一つの「原爆ドーム」』文藝春秋、2013年。
木曽功『世界遺産ビジネス』小学館新書、2015年。
佐滝剛弘『＜世界遺産＞の真実：過剰な期待、大いなる誤解』祥伝社新書、2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー監修『すべてがわかる世界遺産大事典＜上＞＜中＞＜下＞ 世界遺産検定1級公式テキスト』世界遺産検定事務局、2024年3月刊行。
その他、適宜授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】
ゼミへの貢献度（積極的な議論への参加・問題提起）と課題などの平常点（50％）と期末レポート（50%）を総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講生と相談しながら内容を柔軟に対応させます。授業についての希望や提案は、授業期間に遠慮無く教員に伝えてください。

【学生が準備すべき機器他】
　学習支援システムを活用した、資料配付を行いますので、パソコンは必ず必要です。

【その他の重要事項】
希望者は『世界遺産検定』（NPO法人世界遺産アカデミー主催）の２級取得に向けて先輩ゼミ生たちと共に受検対策をサポートします。
春学期・秋学期合わせての履修を強く推奨します。
授業の内容は、受講生と相談しながら柔軟に対応します。変更がある場合はあらかじめ学習支援システムやメールを通じて告知しますので、こまめに連絡をチェックしてください。

【Outline (in English)】
Many World Heritage Sites are influenced directly by reflecting various contemporary problems such as environmental problems, poverty problems, and religious problems etc.　In this seminar, we will study about World heritage Sites and various problems related to them according to each student's interest.
< Course outline>
The aim of this course is to help students to acquire understanding real significance and value of the World Heritage Sites of UNESCO.
< Learning objectives>
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1.Recognize the problems that the world faces, and develop the ability to express one's own opinions and develop discussions about them.
2.Acquire knowledge of World Heritage Site Level 2 or higher.
3.　Through World Heritage Sites, we will become a habit of acting toward sustainable futures.
< Learning activities>
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
< Grading Criteria/Policy>
Grading will be decided based on lab reports (40%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (60%).

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

言語文化演習

佐々木　直美

サブタイトル：世界遺産に学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんは旅行先やTVなどで目にする世界遺産の絶景や不思議に感動したり、憧れたりした経験があることでしょう。しかし、多くの世界遺産は環境問題や貧困問題、宗教問題など様々な現代の問題を反映し、直接それらの影響を受けています。このゼミでは、各人の関心に従って世界遺産とそれにまつわる様々な問題を掘り下げて研究します。単に世界遺産に関する知識を増やすことは、このゼミの目的ではありません。真の目的は、世界遺産の意義である「平和」について考え・行動することを学ぶことです。

【到達目標】
①世界遺産の意義を理解し、世界遺産検定2級以上の知識を修得する。。
②世界が抱える諸問題を認識し、それらについて自分の意見を述べたり、グループで議論を展開させる力を養う。
③資料収集と文献・資料の分析を通じて、研究発表や論文執筆を行う。
④世界遺産を通して、持続可能な地球の未来に向けた行動を習慣化するようになる。
⑤グループワークを通じて、他者とともに課題に取り組む協同性を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　この授業は演習です。課題文献の輪講と討論に加えて状況が許せばフィールドワークへ出ることもあります。
　また、毎年秋学期に開催される国際文化情報学会にむけて、合宿形式のフィールドワークや資料作りなど積極的なゼミへの参加と協力が必須です。
　サブゼミの時間を使って世界遺産検定２級の自習学習や学会発表準備を行うため、サブゼミにも参加することが前提です。
教室で行う対面授業を基本とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション1	昨年度の振り返り。 今年度の研究テーマについて議論する。
2	・世界遺産の基礎（日本） ・	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産・フィールドワークのテーマや場所について議論する。
3	世界遺産の基礎（ヨーロッパ1）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産について議論する。
4	世界遺産の基礎（ヨーロッパ2） 今年度の研究テーマ選定会	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループワークの成果をプレゼンテーションする。
5	世界遺産の基礎（ヨーロッパ３）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。
6	世界遺産の基礎（アフリカ1） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』1-3章の輪講と討論
7	世界遺産の基礎（アフリカ2） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』4-6章の輪講と討論
8	世界遺産の基礎（アメリカ大陸１） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』7-9章 輪講と討論
9	世界遺産の基礎（アメリカ大陸２） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』1-3章の輪講と討論
10	世界遺産の基礎（アメリカ大陸3） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』4-6章の輪講と討論
11	世界遺産の基礎（アジア1） 記憶と遺産	・世界遺産基礎知識の学習 ・課題図書輪講『長崎原爆記』7章-最後の輪講と討論 ・フィールドワークの準備
12	世界遺産の基礎（アジア2） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講　（基礎） ・フィールドワークの準備
13	世界遺産の基礎（アジア3） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （基礎） ・フィールドワークの準備
14	まとめ	・課題図書輪講と討論 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （発展） ・フィールドワークの準備
1	オリエンテーション	春学期に学んだことの復習と輪講準備、学会発表についての方針と内容の策定。
2	フィールドワーク報告会	フィールドワークの成果を全員で共有しながら討論する。 学会準備
3	グループ・ワーク（１）	学会発表にむけた資料収集。 課題資料の輪講と討論
4	グループ・ワーク（２）	学会発表にむけた資料分析。 課題資料の輪講と討論
5	グループ・ワーク（３）	学会発表にむけたグループ討論。 課題資料の輪講と討論
6	グループ・ワーク（４）	学会発表資料全体での討論。 課題資料の輪講と討論

7	グループ・ワーク（5）	学会発表資料の作成。
8	グループ・ワーク（6）	学会発表資料の全体確認。
9	グループ・ワーク（7）	学会発表リハーサル1 学会発表の最終調整
10	学会発表リハーサル	学会発表リハーサル2
11	文献講読1 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アジアの遺産
12	文献講読2 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 ヨーロッパの遺産
13	文献講読3 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アメリカ大陸の遺産
14	世界遺産検定対策 総括	アフリカ大陸の遺産とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・課題テキスト、参考文献を指定された期日までに読み、疑問点や意見をまとめる。
・本授業の準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
スーザン・サザード (著), 宇治川 康江 (翻訳)『ナガサキ』みすず書房、2019年。
秋月辰一郎『長崎原爆記―被爆医師の証言 (平和文庫)』 2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー『世界遺産検定公式ガイド300＜第5版＞』毎日コミュニケーションズ、2023年。

授業内で受講生たちとともに今年度の研究テーマを決定したのちに、適宜授業内で指示します。

【参考書】
高瀬毅『ナガサキ　消えたもう一つの「原爆ドーム」』文藝春秋、2013年。
木曽功『世界遺産ビジネス』小学館新書、2015年。
佐滝剛弘『＜世界遺産＞の真実：過剰な期待、大いなる誤解』祥伝社新書、2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー監修『すべてがわかる世界遺産大事典＜上＞＜中＞＜下＞ 世界遺産検定1級公式テキスト』世界遺産検定事務局、2024年3月刊行。
その他、適宜授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】
ゼミへの貢献度（積極的な議論への参加・問題提起）と課題などの平常点（50％）と期末レポート（50%）を総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講生と相談しながら内容を柔軟に対応させます。授業についての希望や提案は、授業期間に遠慮無く教員に伝えてください。

【学生が準備すべき機器他】
　学習支援システムを活用した、資料配付を行いますので、パソコンは必ず必要です。

【その他の重要事項】
希望者は『世界遺産検定』（NPO法人世界遺産アカデミー主催）の２級取得に向けて先輩ゼミ生たちと共に受検対策をサポートします。
春学期・秋学期合わせての履修を強く推奨します。
授業の内容は、受講生と相談しながら柔軟に対応します。変更がある場合はあらかじめ学習支援システムやメールを通じて告知しますので、こまめに連絡をチェックしてください。

【Outline (in English)】
Many World Heritage Sites are influenced directly by reflecting various contemporary problems such as environmental problems, poverty problems, and religious problems etc. In this seminar, we will study about World heritage Sites and various problems related to them according to each student's interest.
< Course outline>
The aim of this course is to help students to acquire understanding real significance and value of the World Heritage Sites of UNESCO.
< Learning objectives>
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1.Recognize the problems that the world faces, and develop the ability to express one's own opinions and develop discussions about them.
2.Acquire knowledge of World Heritage Site Level 2 or higher.
3. Through World Heritage Sites, we will become a habit of acting toward sustainable futures.
< Learning activities>
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
< Grading Criteria/Policy>
Grading will be decided based on lab reports (40%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (60%).

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

言語文化演習

佐々木　直美

サブタイトル：世界遺産に学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんは旅行先やTVなどで目にする世界遺産の絶景や不思議に感動したり、憧れたりした経験があることでしょう。しかし、多くの世界遺産は環境問題や貧困問題、宗教問題など様々な現代の問題を反映し、直接それらの影響を受けています。このゼミでは、各人の関心に従って世界遺産とそれにまつわる様々な問題を掘り下げて研究します。単に世界遺産に関する知識を増やすことは、このゼミの目的ではありません。真の目的は、世界遺産の意義である「平和」について考え・行動することを学ぶことです。

【到達目標】
①世界遺産の意義を理解し、世界遺産検定2級以上の知識を修得する。。
②世界が抱える諸問題を認識し、それらについて自分の意見を述べたり、グループで議論を展開させる力を養う。
③資料収集と文献・資料の分析を通じて、研究発表や論文執筆を行う。
④世界遺産を通して、持続可能な地球の未来に向けた行動を習慣化するようになる。
⑤グループワークを通じて、他者とともに課題に取り組む協同性を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　この授業は演習です。課題文献の輪講と討論に加えて状況が許せばフィールドワークへ出ることもあります。
　また、毎年秋学期に開催される国際文化情報学会にむけて、合宿形式のフィールドワークや資料作りなど積極的なゼミへの参加と協力が必須です。
　サブゼミの時間を使って世界遺産検定２級の自習学習や学会発表準備を行うため、サブゼミにも参加することが前提です。
教室で行う対面授業を基本とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション1	昨年度の振り返り。 今年度の研究テーマについて議論する。
2	・世界遺産の基礎（日本） ・	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産・フィールドワークのテーマや場所について議論する。
3	世界遺産の基礎（ヨーロッパ1）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産について議論する。
4	世界遺産の基礎（ヨーロッパ2） 今年度の研究テーマ選定会	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループワークの成果をプレゼンテーションする。
5	世界遺産の基礎（ヨーロッパ３）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。
6	世界遺産の基礎（アフリカ1） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』1-3章の輪講と討論
7	世界遺産の基礎（アフリカ2） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』4-6章の輪講と討論
8	世界遺産の基礎（アメリカ大陸１） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』7-9章 輪講と討論
9	世界遺産の基礎（アメリカ大陸２） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』1-3章の輪講と討論
10	世界遺産の基礎（アメリカ大陸3） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』4-6章の輪講と討論
11	世界遺産の基礎（アジア1） 記憶と遺産	・世界遺産基礎知識の学習 ・課題図書輪講『長崎原爆記』7章-最後の輪講と討論 ・フィールドワークの準備
12	世界遺産の基礎（アジア2） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講　（基礎） ・フィールドワークの準備
13	世界遺産の基礎（アジア3） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （基礎） ・フィールドワークの準備
14	まとめ	・課題図書輪講と討論 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （発展） ・フィールドワークの準備
1	オリエンテーション	春学期に学んだことの復習と輪講準備、学会発表についての方針と内容の策定。
2	フィールドワーク報告会	フィールドワークの成果を全員で共有しながら討論する。 学会準備
3	グループ・ワーク（１）	学会発表にむけた資料収集。 課題資料の輪講と討論
4	グループ・ワーク（２）	学会発表にむけた資料分析。 課題資料の輪講と討論
5	グループ・ワーク（３）	学会発表にむけたグループ討論。 課題資料の輪講と討論
6	グループ・ワーク（４）	学会発表資料全体での討論。 課題資料の輪講と討論

7	グループ・ワーク（5）	学会発表資料の作成。
8	グループ・ワーク（6）	学会発表資料の全体確認。
9	グループ・ワーク（7）	学会発表リハーサル1 学会発表の最終調整
10	学会発表リハーサル	学会発表リハーサル2
11	文献講読1 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アジアの遺産
12	文献講読2 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 ヨーロッパの遺産
13	文献講読3 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アメリカ大陸の遺産
14	世界遺産検定対策 総括	アフリカ大陸の遺産とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・課題テキスト、参考文献を指定された期日までに読み、疑問点や意見をまとめる。
・本授業の準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
スーザン・サザード (著), 宇治川 康江 (翻訳)『ナガサキ』みすず書房、2019年。
秋月辰一郎『長崎原爆記―被爆医師の証言 (平和文庫)』 2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー『世界遺産検定公式ガイド300＜第5版＞』毎日コミュニケーションズ、2023年。

授業内で受講生たちとともに今年度の研究テーマを決定したのちに、適宜授業内で指示します。

【参考書】
高瀬毅『ナガサキ　消えたもう一つの「原爆ドーム」』文藝春秋、2013年。
木曽功『世界遺産ビジネス』小学館新書、2015年。
佐滝剛弘『＜世界遺産＞の真実：過剰な期待、大いなる誤解』祥伝社新書、2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー監修『すべてがわかる世界遺産大事典＜上＞＜中＞＜下＞ 世界遺産検定1級公式テキスト』世界遺産検定事務局、2024年3月刊行。
その他、適宜授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】
ゼミへの貢献度（積極的な議論への参加・問題提起）と課題などの平常点（50％）と期末レポート（50%）を総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講生と相談しながら内容を柔軟に対応させます。授業についての希望や提案は、授業期間に遠慮無く教員に伝えてください。

【学生が準備すべき機器他】
　学習支援システムを活用した、資料配付を行いますので、パソコンは必ず必要です。

【その他の重要事項】
希望者は『世界遺産検定』（NPO法人世界遺産アカデミー主催）の２級取得に向けて先輩ゼミ生たちと共に受検対策をサポートします。
春学期・秋学期合わせての履修を強く推奨します。
授業の内容は、受講生と相談しながら柔軟に対応します。変更がある場合はあらかじめ学習支援システムやメールを通じて告知しますので、こまめに連絡をチェックしてください。

【Outline (in English)】
Many World Heritage Sites are influenced directly by reflecting various contemporary problems such as environmental problems, poverty problems, and religious problems etc.　In this seminar, we will study about World heritage Sites and various problems related to them according to each student's interest.
< Course outline>
The aim of this course is to help students to acquire understanding real significance and value of the World Heritage Sites of UNESCO.
< Learning objectives>
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1.Recognize the problems that the world faces, and develop the ability to express one's own opinions and develop discussions about them.
2.Acquire knowledge of World Heritage Site Level 2 or higher.
3.　Through World Heritage Sites, we will become a habit of acting toward sustainable futures.
< Learning activities>
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
< Grading Criteria/Policy>
Grading will be decided based on lab reports (40%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (60%).

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

言語文化演習

佐々木　直美

サブタイトル：世界遺産に学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：〈S〉〈カ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんは旅行先やTVなどで目にする世界遺産の絶景や不思議に感動したり、憧れたりした経験があることでしょう。しかし、多くの世界遺産は環境問題や貧困問題、宗教問題など様々な現代の問題を反映し、直接それらの影響を受けています。このゼミでは、各人の関心に従って世界遺産とそれにまつわる様々な問題を掘り下げて研究します。単に世界遺産に関する知識を増やすことは、このゼミの目的ではありません。真の目的は、世界遺産の意義である「平和」について考え・行動することを学ぶことです。

【到達目標】
①世界遺産の意義を理解し、世界遺産検定2級以上の知識を修得する。。
②世界が抱える諸問題を認識し、それらについて自分の意見を述べたり、グループで議論を展開させる力を養う。
③資料収集と文献・資料の分析を通じて、研究発表や論文執筆を行う。
④世界遺産を通して、持続可能な地球の未来に向けた行動を習慣化するようになる。
⑤グループワークを通じて、他者とともに課題に取り組む協同性を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　この授業は演習です。課題文献の輪講と討論に加えて状況が許せばフィールドワークへ出ることもあります。
　また、毎年秋学期に開催される国際文化情報学会にむけて、合宿形式のフィールドワークや資料作りなど積極的なゼミへの参加と協力が必須です。
　サブゼミの時間を使って世界遺産検定２級の自習学習や学会発表準備を行うため、サブゼミにも参加することが前提です。
教室で行う対面授業を基本とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション1	昨年度の振り返り。 今年度の研究テーマについて議論する。
2	・世界遺産の基礎（日本） ・	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産・フィールドワークのテーマや場所について議論する。
3	世界遺産の基礎（ヨーロッパ1）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループに分かれて、取りあげる世界遺産について議論する。
4	世界遺産の基礎（ヨーロッパ2） 今年度の研究テーマ選定会	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 グループワークの成果をプレゼンテーションする。
5	世界遺産の基礎（ヨーロッパ３）	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。
6	世界遺産の基礎（アフリカ1） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』1-3章の輪講と討論
7	世界遺産の基礎（アフリカ2） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』4-6章の輪講と討論
8	世界遺産の基礎（アメリカ大陸１） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『ナガサキ　核戦争後の人生』7-9章 輪講と討論
9	世界遺産の基礎（アメリカ大陸２） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』1-3章の輪講と討論
10	世界遺産の基礎（アメリカ大陸3） 記憶と遺産	世界遺産検定2級テキストに沿って、基礎知識を学ぶ。 ・課題図書『長崎原爆記』4-6章の輪講と討論
11	世界遺産の基礎（アジア1） 記憶と遺産	・世界遺産基礎知識の学習 ・課題図書輪講『長崎原爆記』7章-最後の輪講と討論 ・フィールドワークの準備
12	世界遺産の基礎（アジア2） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講　（基礎） ・フィールドワークの準備
13	世界遺産の基礎（アジア3） 今年度の研究テーマ	・世界遺産基礎知識の学習 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （基礎） ・フィールドワークの準備
14	まとめ	・課題図書輪講と討論 ・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 （発展） ・フィールドワークの準備
1	オリエンテーション	春学期に学んだことの復習と輪講準備、学会発表についての方針と内容の策定。
2	フィールドワーク報告会	フィールドワークの成果を全員で共有しながら討論する。 学会準備
3	グループ・ワーク（１）	学会発表にむけた資料収集。 課題資料の輪講と討論
4	グループ・ワーク（２）	学会発表にむけた資料分析。 課題資料の輪講と討論
5	グループ・ワーク（３）	学会発表にむけたグループ討論。 課題資料の輪講と討論
6	グループ・ワーク（４）	学会発表資料全体での討論。 課題資料の輪講と討論

7	グループ・ワーク（5）	学会発表資料の作成。
8	グループ・ワーク（6）	学会発表資料の全体確認。
9	グループ・ワーク（7）	学会発表リハーサル1 学会発表の最終調整
10	学会発表リハーサル	学会発表リハーサル2
11	文献講読1 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アジアの遺産
12	文献講読2 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 ヨーロッパの遺産
13	文献講読3 世界遺産検定対策	・今年度の研究テーマに沿った参考文献の輪講 アメリカ大陸の遺産
14	世界遺産検定対策 総括	アフリカ大陸の遺産とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・課題テキスト、参考文献を指定された期日までに読み、疑問点や意見をまとめる。
・本授業の準備学習・復習時間は各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
スーザン・サザード (著), 宇治川 康江 (翻訳)『ナガサキ』みすず書房、2019年。
秋月辰一郎『長崎原爆記―被爆医師の証言 (平和文庫)』 2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー『世界遺産検定公式ガイド300＜第5版＞』毎日コミュニケーションズ、2023年。

授業内で受講生たちとともに今年度の研究テーマを決定したのちに、適宜授業内で指示します。

【参考書】
高瀬毅『ナガサキ　消えたもう一つの「原爆ドーム」』文藝春秋、2013年。
木曽功『世界遺産ビジネス』小学館新書、2015年。
佐滝剛弘『＜世界遺産＞の真実：過剰な期待、大いなる誤解』祥伝社新書、2010年。
NPO法人世界遺産アカデミー監修『すべてがわかる世界遺産大事典＜上＞＜中＞＜下＞ 世界遺産検定1級公式テキスト』世界遺産検定事務局、2024年3月刊行。
その他、適宜授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】
ゼミへの貢献度（積極的な議論への参加・問題提起）と課題などの平常点（50％）と期末レポート（50%）を総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講生と相談しながら内容を柔軟に対応させます。授業についての希望や提案は、授業期間に遠慮無く教員に伝えてください。

【学生が準備すべき機器他】
　学習支援システムを活用した、資料配付を行いますので、パソコンは必ず必要です。

【その他の重要事項】
希望者は『世界遺産検定』（NPO法人世界遺産アカデミー主催）の２級取得に向けて先輩ゼミ生たちと共に受検対策をサポートします。
春学期・秋学期合わせての履修を強く推奨します。
授業の内容は、受講生と相談しながら柔軟に対応します。変更がある場合はあらかじめ学習支援システムやメールを通じて告知しますので、こまめに連絡をチェックしてください。

【Outline (in English)】
Many World Heritage Sites are influenced directly by reflecting various contemporary problems such as environmental problems, poverty problems, and religious problems etc.　In this seminar, we will study about World heritage Sites and various problems related to them according to each student's interest.
< Course outline>
The aim of this course is to help students to acquire understanding real significance and value of the World Heritage Sites of UNESCO.
< Learning objectives>
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1.Recognize the problems that the world faces, and develop the ability to express one's own opinions and develop discussions about them.
2.Acquire knowledge of World Heritage Site Level 2 or higher.
3.　Through World Heritage Sites, we will become a habit of acting toward sustainable futures.
< Learning activities>
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
< Grading Criteria/Policy>
Grading will be decided based on lab reports (40%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (60%).

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

言語文化演習

佐藤　千登勢

サブタイトル：映画で学ぶ国際情勢と人間の内的世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、さまざまな国の映画作品を通して象徴性・メタファー・寓意的表象で語られる映画言語を読み解き、背後にあるそれぞれの国・地域の文化、慣習、歴史的経緯、イデオロギー、社会体制を確認する作業も含めて、映画鑑賞と作品分析を楽しみます。そのための基礎概念として、《家父長制》《抑圧》《差別》《マイノリティ》《移民》《離散》といった社会的テーマから《トラウマ》《潜在意識》《欲望》など個人の内的世界に関わる問題をキーワードに、映画作品の多面性・両義性・重層性、そして映画作品に反映する国や地域の文化や社会について議論します。映画作品を分析する視点を培い、議論する力を養うことが本演習の目的となります。

【到達目標】
映画作品は社会の縮図であり、多様な国々の歴史、社会、文化、民族的な傾向を反映したモデルと言えます。様々な国々の映画作品を鑑賞、分析することで、洞察力やものごとの本質を見抜く力、さらにテクストを批判的に見る力を身につけ、これを言語化してプレゼンテーションする技術、議論する力を獲得する。これが演習の目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
初回から第３回までは、教員が提案する映画作品を皆で共有し、教員からは映画分析の方法やレジュメの切り方、議論ポイントの提示方法などを示します。映画作品共有後、ゼミ生は複数のグループに分かれて討論をしてもらいます。その後、グループごとに意見を発表してもらい、議論を深めていくかたちをとります。４回目以降は、ゼミ生のプレゼンテーション（映画の選択、レジュメを基に解説、司会、議論のまとめ）となります。
翌週までに、自身の見解をまとめた「映画鑑賞記録」を学習支援システムに提出してもらいます。教員およびゼミ生担当者は興味深い内容の映画鑑賞記録を４点程度選び、ゼミ生全員でこれを共有するようにします。プレゼンテーションに対し教員から個別にコメントを行い、フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。いくつかの映画作品をとりあげ、手法や技巧、効果について概説する。
2	映画の想像力：父権社会への抵抗を描く	『ゴンドラ』（ジョージア・ドイツ合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	宿命と自己決定	『イーダ』（ポーランド・デンマーク合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
1	イントロダクション 核実験と民族差別	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。映画『草原の実験』（ロシア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
2	自我の肥大化	『私、オルガ・ヘプナロヴァー』（チェコ・ポーランド他合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	独裁政権下に生きる	『４ヶ月、３週と２日』（ルーマニア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当のゼミ生は、自身がプレゼンテーションする映画作品を３回以上鑑賞の上、社会背景、歴史背景、制作背景、象徴、カメラワークなどの観点から詳細に調査を行い、レジュメを作成してください。発表準備に要する時間は計10 時間程度。
他の学生はゼミの前までに必ず映画作品について予習をしておくこと。また、毎回、ゼミで議論した映画作品について自身の見解をまとめた映画鑑賞記録（リアクションペーパー）を翌週までに提出する。本授業の準備学習・復習時間は各１時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
決まったテキストは使用しません。

【参考書】
・ジェニファー・ヴァン・シル『映画表現の教科書』吉田俊太郎訳（フィルムアート社、2012）
・カレン・M・ゴックシク他『アカデミック・ライティング』土屋武久訳（小鳥遊書房、2019）

【成績評価の方法と基準】
平常点（60％）、プレゼンテーション（20％）、リアクションペーパー（映画鑑賞記録）（20％）。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
とくに要望は示されませんでしたので改善点を具体的に挙げることはできませんが、昨年度は回を重ねるにつれて遅刻する学生が微増したように思います。グループディスカッションの時間に影響が出るため、定時開始を徹底できるようなんらかの工夫をしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
報告用レジュメをあらかじめLINEグループにアップする。
ゼミ活動内容（レジュメなど）を随時、Instagramにアップする。

【Outline (in English)】
●Course outline
In this seminar, we will analyze and interpret motion pictures of various countries from the point of view of an allegorical representation, metaphor, camera work, and the historical and political background of each of the countries. The basic concepts: Oedipus complex , trauma, subconscious, fascism, totalitarianism, discrimination, suppression, ethnicity and minority.
●Learning Objectives
By watching and analyzing movie works from various countries, you will acquire the ability to see the essence of things, as well as the ability to verbalize and present them, and the ability to discuss.
●Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to prepare for the movie work. Also, after each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your views on the movie works discussed in the seminar by the next week.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Short reports(20％), making a presentation（20％） and usual performance score(60％). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

言語文化演習

佐藤　千登勢

サブタイトル：映画で学ぶ国際情勢と人間の内的世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、さまざまな国の映画作品を通して象徴性・メタファー・寓意的表象で語られる映画言語を読み解き、背後にあるそれぞれの国・地域の文化、慣習、歴史的経緯、イデオロギー、社会体制を確認する作業も含めて、映画鑑賞と作品分析を楽しみます。そのための基礎概念として、《家父長制》《抑圧》《差別》《マイノリティ》《移民》《離散》といった社会的テーマから《トラウマ》《潜在意識》《欲望》など個人の内的世界に関わる問題をキーワードに、映画作品の多面性・両義性・重層性、そして映画作品に反映する国や地域の文化や社会について議論します。映画作品を分析する視点を培い、議論する力を養うことが本演習の目的となります。

【到達目標】
映画作品は社会の縮図であり、多様な国々の歴史、社会、文化、民族的な傾向を反映したモデルと言えます。様々な国々の映画作品を鑑賞、分析することで、洞察力やものごとの本質を見抜く力、さらにテクストを批判的に見る力を身につけ、これを言語化してプレゼンテーションする技術、議論する力を獲得する。これが演習の目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
初回から第３回までは、教員が提案する映画作品を皆で共有し、教員からは映画分析の方法やレジュメの切り方、議論ポイントの提示方法などを示します。映画作品共有後、ゼミ生は複数のグループに分かれて討論をしてもらいます。その後、グループごとに意見を発表してもらい、議論を深めていくかたちをとります。４回目以降は、ゼミ生のプレゼンテーション（映画の選択、レジュメを基に解説、司会、議論のまとめ）となります。
翌週までに、自身の見解をまとめた「映画鑑賞記録」を学習支援システムに提出してもらいます。教員およびゼミ生担当者は興味深い内容の映画鑑賞記録を４点程度選び、ゼミ生全員でこれを共有するようにします。プレゼンテーションに対し教員から個別にコメントを行い、フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。いくつかの映画作品をとりあげ、手法や技巧、効果について概説する。
2	映画の想像力：父権社会への抵抗を描く	『ゴンドラ』（ジョージア・ドイツ合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	宿命と自己決定	『イーダ』（ポーランド・デンマーク合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
1	イントロダクション 核実験と民族差別	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。映画『草原の実験』（ロシア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
2	自我の肥大化	『私、オルガ・ヘプナロヴァー』（チェコ・ポーランド他合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	独裁政権下に生きる	『４ヶ月、３週と２日』（ルーマニア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当のゼミ生は、自身がプレゼンテーションする映画作品を３回以上鑑賞の上、社会背景、歴史背景、制作背景、象徴、カメラワークなどの観点から詳細に調査を行い、レジュメを作成してください。発表準備に要する時間は計10 時間程度。
他の学生はゼミの前までに必ず映画作品について予習をしておくこと。また、毎回、ゼミで議論した映画作品について自身の見解をまとめた映画鑑賞記録（リアクションペーパー）を翌週までに提出する。本授業の準備学習・復習時間は各１時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
決まったテキストは使用しません。

【参考書】
・ジェニファー・ヴァン・シル『映画表現の教科書』吉田俊太郎訳（フィルムアート社、2012）
・カレン・M・ゴックシク他『アカデミック・ライティング』土屋武久訳（小鳥遊書房、2019）

【成績評価の方法と基準】
平常点（60％）、プレゼンテーション（20％）、リアクションペーパー（映画鑑賞記録）（20％）。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
とくに要望は示されませんでしたので改善点を具体的に挙げることはできませんが、昨年度は回を重ねるにつれて遅刻する学生が微増したように思います。グループディスカッションの時間に影響が出るため、定時開始を徹底できるようなんらかの工夫をしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
報告用レジュメをあらかじめLINEグループにアップする。
ゼミ活動内容（レジュメなど）を随時、Instagramにアップする。

【Outline (in English)】
●Course outline
In this seminar, we will analyze and interpret motion pictures of various countries from the point of view of an allegorical representation, metaphor, camera work, and the historical and political background of each of the countries. The basic concepts: Oedipus complex , trauma, subconscious, fascism, totalitarianism, discrimination, suppression, ethnicity and minority.
●Learning Objectives
By watching and analyzing movie works from various countries, you will acquire the ability to see the essence of things, as well as the ability to verbalize and present them, and the ability to discuss.
●Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to prepare for the movie work. Also, after each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your views on the movie works discussed in the seminar by the next week.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Short reports(20％), making a presentation（20％） and usual performance score(60％). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

言語文化演習

佐藤　千登勢

サブタイトル：映画で学ぶ国際情勢と人間の内的世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、さまざまな国の映画作品を通して象徴性・メタファー・寓意的表象で語られる映画言語を読み解き、背後にあるそれぞれの国・地域の文化、慣習、歴史的経緯、イデオロギー、社会体制を確認する作業も含めて、映画鑑賞と作品分析を楽しみます。そのための基礎概念として、《家父長制》《抑圧》《差別》《マイノリティ》《移民》《離散》といった社会的テーマから《トラウマ》《潜在意識》《欲望》など個人の内的世界に関わる問題をキーワードに、映画作品の多面性・両義性・重層性、そして映画作品に反映する国や地域の文化や社会について議論します。映画作品を分析する視点を培い、議論する力を養うことが本演習の目的となります。

【到達目標】
映画作品は社会の縮図であり、多様な国々の歴史、社会、文化、民族的な傾向を反映したモデルと言えます。様々な国々の映画作品を鑑賞、分析することで、洞察力やものごとの本質を見抜く力、さらにテクストを批判的に見る力を身につけ、これを言語化してプレゼンテーションする技術、議論する力を獲得する。これが演習の目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
初回から第３回までは、教員が提案する映画作品を皆で共有し、教員からは映画分析の方法やレジュメの切り方、議論ポイントの提示方法などを示します。映画作品共有後、ゼミ生は複数のグループに分かれて討論をしてもらいます。その後、グループごとに意見を発表してもらい、議論を深めていくかたちをとります。４回目以降は、ゼミ生のプレゼンテーション（映画の選択、レジュメを基に解説、司会、議論のまとめ）となります。
翌週までに、自身の見解をまとめた「映画鑑賞記録」を学習支援システムに提出してもらいます。教員およびゼミ生担当者は興味深い内容の映画鑑賞記録を４点程度選び、ゼミ生全員でこれを共有するようにします。プレゼンテーションに対し教員から個別にコメントを行い、フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。いくつかの映画作品をとりあげ、手法や技巧、効果について概説する。
2	映画の想像力：父権社会への抵抗を描く	『ゴンドラ』（ジョージア・ドイツ合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	宿命と自己決定	『イーダ』（ポーランド・デンマーク合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
1	イントロダクション 核実験と民族差別	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。映画『草原の実験』（ロシア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
2	自我の肥大化	『私、オルガ・ヘプナロヴァー』（チェコ・ポーランド他合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	独裁政権下に生きる	『４ヶ月、３週と２日』（ルーマニア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当のゼミ生は、自身がプレゼンテーションする映画作品を３回以上鑑賞の上、社会背景、歴史背景、制作背景、象徴、カメラワークなどの観点から詳細に調査を行い、レジュメを作成してください。発表準備に要する時間は計10 時間程度。
他の学生はゼミの前までに必ず映画作品について予習をしておくこと。また、毎回、ゼミで議論した映画作品について自身の見解をまとめた映画鑑賞記録（リアクションペーパー）を翌週までに提出する。本授業の準備学習・復習時間は各１時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
決まったテキストは使用しません。

【参考書】
・ジェニファー・ヴァン・シル『映画表現の教科書』吉田俊太郎訳（フィルムアート社、2012）
・カレン・M・ゴックシク他『アカデミック・ライティング』土屋武久訳（小鳥遊書房、2019）

【成績評価の方法と基準】
平常点（60％）、プレゼンテーション（20％）、リアクションペーパー（映画鑑賞記録）（20％）。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
とくに要望は示されませんでしたので改善点を具体的に挙げることはできませんが、昨年度は回を重ねるにつれて遅刻する学生が微増したように思います。グループディスカッションの時間に影響が出るため、定時開始を徹底できるようなんらかの工夫をしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
報告用レジュメをあらかじめLINEグループにアップする。
ゼミ活動内容（レジュメなど）を随時、Instagramにアップする。

【Outline (in English)】
●Course outline
In this seminar, we will analyze and interpret motion pictures of various countries from the point of view of an allegorical representation, metaphor, camera work, and the historical and political background of each of the countries. The basic concepts: Oedipus complex , trauma, subconscious, fascism, totalitarianism, discrimination, suppression, ethnicity and minority.
●Learning Objectives
By watching and analyzing movie works from various countries, you will acquire the ability to see the essence of things, as well as the ability to verbalize and present them, and the ability to discuss.
●Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to prepare for the movie work. Also, after each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your views on the movie works discussed in the seminar by the next week.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Short reports(20％), making a presentation（20％） and usual performance score(60％). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ART400GA（芸術学 / Art studies 400）

言語文化演習

佐藤　千登勢

サブタイトル：映画で学ぶ国際情勢と人間の内的世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、さまざまな国の映画作品を通して象徴性・メタファー・寓意的表象で語られる映画言語を読み解き、背後にあるそれぞれの国・地域の文化、慣習、歴史的経緯、イデオロギー、社会体制を確認する作業も含めて、映画鑑賞と作品分析を楽しみます。そのための基礎概念として、《家父長制》《抑圧》《差別》《マイノリティ》《移民》《離散》といった社会的テーマから《トラウマ》《潜在意識》《欲望》など個人の内的世界に関わる問題をキーワードに、映画作品の多面性・両義性・重層性、そして映画作品に反映する国や地域の文化や社会について議論します。映画作品を分析する視点を培い、議論する力を養うことが本演習の目的となります。

【到達目標】
映画作品は社会の縮図であり、多様な国々の歴史、社会、文化、民族的な傾向を反映したモデルと言えます。様々な国々の映画作品を鑑賞、分析することで、洞察力やものごとの本質を見抜く力、さらにテクストを批判的に見る力を身につけ、これを言語化してプレゼンテーションする技術、議論する力を獲得する。これが演習の目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
初回から第３回までは、教員が提案する映画作品を皆で共有し、教員からは映画分析の方法やレジュメの切り方、議論ポイントの提示方法などを示します。映画作品共有後、ゼミ生は複数のグループに分かれて討論をしてもらいます。その後、グループごとに意見を発表してもらい、議論を深めていくかたちをとります。４回目以降は、ゼミ生のプレゼンテーション（映画の選択、レジュメを基に解説、司会、議論のまとめ）となります。
翌週までに、自身の見解をまとめた「映画鑑賞記録」を学習支援システムに提出してもらいます。教員およびゼミ生担当者は興味深い内容の映画鑑賞記録を４点程度選び、ゼミ生全員でこれを共有するようにします。プレゼンテーションに対し教員から個別にコメントを行い、フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。いくつかの映画作品をとりあげ、手法や技巧、効果について概説する。
2	映画の想像力：父権社会への抵抗を描く	『ゴンドラ』（ジョージア・ドイツ合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	宿命と自己決定	『イーダ』（ポーランド・デンマーク合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
1	イントロダクション 核実験と民族差別	演習の方向性を示すとともに、各回担当者を決定。映画『草原の実験』（ロシア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
2	自我の肥大化	『私、オルガ・ヘプナロヴァー』（チェコ・ポーランド他合作）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
3	独裁政権下に生きる	『４ヶ月、３週と２日』（ルーマニア作品）鑑賞の上、教員による概説。学生による議論とまとめ。
4	ゼミ生による報告１	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
5	ゼミ生による報告２	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
6	ゼミ生による報告３	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
7	ゼミ生による報告４	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
8	ゼミ生による報告５	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
9	ゼミ生による報告６	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

10	ゼミ生による報告７	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
11	ゼミ生による報告８	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
12	ゼミ生による報告９	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
13	ゼミ生による報告10	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。
14	ゼミ生による報告11	担当学生による映画選択、概説、司会などのプレゼンテーション。議論。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当のゼミ生は、自身がプレゼンテーションする映画作品を３回以上鑑賞の上、社会背景、歴史背景、制作背景、象徴、カメラワークなどの観点から詳細に調査を行い、レジュメを作成してください。発表準備に要する時間は計10 時間程度。
他の学生はゼミの前までに必ず映画作品について予習をしておくこと。また、毎回、ゼミで議論した映画作品について自身の見解をまとめた映画鑑賞記録（リアクションペーパー）を翌週までに提出する。本授業の準備学習・復習時間は各１時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
決まったテキストは使用しません。

【参考書】
・ジェニファー・ヴァン・シル『映画表現の教科書』吉田俊太郎訳（フィルムアート社、2012）
・カレン・M・ゴックシク他『アカデミック・ライティング』土屋武久訳（小鳥遊書房、2019）

【成績評価の方法と基準】
平常点（60％）、プレゼンテーション（20％）、リアクションペーパー（映画鑑賞記録）（20％）。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
とくに要望は示されませんでしたので改善点を具体的に挙げることはできませんが、昨年度は回を重ねるにつれて遅刻する学生が微増したように思います。グループディスカッションの時間に影響が出るため、定時開始を徹底できるようなんらかの工夫をしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
報告用レジュメをあらかじめLINEグループにアップする。
ゼミ活動内容（レジュメなど）を随時、Instagramにアップする。

【Outline (in English)】
●Course outline
In this seminar, we will analyze and interpret motion pictures of various countries from the point of view of an allegorical representation, metaphor, camera work, and the historical and political background of each of the countries. The basic concepts: Oedipus complex , trauma, subconscious, fascism, totalitarianism, discrimination, suppression, ethnicity and minority.
●Learning Objectives
By watching and analyzing movie works from various countries, you will acquire the ability to see the essence of things, as well as the ability to verbalize and present them, and the ability to discuss.
●Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to prepare for the movie work. Also, after each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your views on the movie works discussed in the seminar by the next week.
●Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Short reports(20％), making a presentation（20％） and usual performance score(60％). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

HIS400GA（史学 / History 400）

言語文化演習

鈴木　靖

サブタイトル：アジアから見た日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国や台湾、韓国などアジアの人々の対日イメージと、日本人自身が抱く自己イメージとの間には大きな違いがあり、良好な近隣関係を築く上での障害となっている。
この授業では「アジアから見た日本」をテーマに、これらの国や地域と日本との交流の歴史や現状を概観するとともに、アジアの人々の対日イメージに大きな影響を与えた事件や人物に焦点を当て、それらが日本やアジアの国や地域でどのように語られてきたか、また、いまどのように伝えられているかを学ぶ。

【到達目標】
アジアの人々の対日イメージがどのように形成されたかを理解し、日本とアジアという双方の視点から問題を考える力（共感力 empathy）を養い、国際社会人として円滑な異文化間コミュニケーションを行う力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、若林正丈『台湾の歴史』をもとに、歴史的な視点からいわゆる「台湾有事」について考える。秋学期は昨年度中国で記録的なヒットとなった映画「南京写真館 Dead to Rights」を鑑賞しながら、それがいかなる史実をもとにしているのかを本多勝一『南京への道』を参考に、またなぜそのようなことが起こったのかをミルグラム『服従の心理』を参考に考える。
これと並行して、日中韓台に関連するテーマについて共同研究を行い、国際文化情報学会でその成果を発表する。
課題や発表に対するフィードバックの方法としては、受講生全員が参加する LINE のグループを用意し、これを通じて全員または個別にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	一年間の学習目標と方法、計画について話し合う
第2回	春のフィールドワーク	日本に建てられた台湾の民間信仰の廟を訪ねる
第3回	近代以前の台湾	芝山巌の光景 「海のアジア」と「陸のアジア」を往還する島――東アジア史の「気圧の谷」と台湾
第4回	清末から日本統治時代	「海のアジア」への再編入――清末開港と日本の植民地統治
第5回	植民地支配からの解放と二・ニ八事件	「中華民国」がやって来た――二・ニ八事件と中国内戦
第6回	冷戦時代の台湾	「中華民国」の台湾定着――東西冷戦下の安定と発展
第7回	国際的孤立と民主化の胎動	「変に処して驚かず」 ――「中華民国」の対外危機と台湾社会の自己主張
第8回	憲政改革	李登輝の登場と「憲政改革」
第9回	戒厳令の解除と新党の結成	台湾ナショナリズムとエスノポリティクス
第10回	冷戦時代の終焉と中台関係	中華人民共和国と台湾――結びつく経済、離れる心？
第11回	民主化後の台湾	「中華民国第二共和制」の出発 結び
第12回	夏のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める
第13回	今日の台湾	総統選挙が刻む台湾の四半世紀――なおも変容し躊躇するアイデンティティ 「台湾は何処にあるか」と「台湾は何であるか」
第14回	共同研究中間発表 夏合宿準備	これまでの共同研究の中間発表と夏合宿の準備作業を行う
第15回	なぜいま「南京写真館」なのか？	中国映画「南京写真館」と本多勝一『南京への道』、S. ミルグラム『服従の心理』の紹介
第16回	『南京への道』を読む(1) 杭州湾上陸	「日本軍百万 杭州湾北岸に上陸」 「我陸軍愈上海に上陸」 「蘇州城つひに陥落」
第17回	『南京への道』を読む(2) 無錫から句容へ	「皇軍、無錫を占拠す」 「常州城頭に日章旗」 「句容を抜き一路驀進」
第18回	『南京への道』を読む(3) 鎮江から南京へ	「鎮江県城占拠」 「百人斬り“超記録”」 「皇軍一斉南京城に殺到」
第19回	『南京への道』を読む(4) 大殲滅戦(1)	「大殲滅戦展開さる」(1) 捕虜の“処置”
第20回	『南京への道』を読む(5) 大殲滅戦(2)	「大殲滅戦展開さる」(2) 南京城内での民間人殺害
第21回	『南京への道』を読む(6) 大殲滅戦(3)	「大殲滅戦展開さる」(3)―下関での捕虜殺害
第22回	『南京への道』を読む(7) 事件後の南京	「平和立帰る南京」(1)(2)
第23回	学会発表準備(1) 資料作成(1)	学会発表の予稿作成
第24回	学会発表準備(2) 資料作成(2)	学会発表のプレゼン資料作成
第25回	学会発表準備(3) 予行演習	学会発表の予稿演習
第26回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考える(1)	「服従の心理実験」
第27回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考え(2)	「ソンミ村虐殺事件」
第28回	冬のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ゼミ生は、輪読図書の指定範囲を事前に熟読し、グループワークに備える
・発表者は、パワーポイントを使って輪読図書の内容を簡潔にまとめるとともに、他の図書・論文などを調査して情報を補足する
・本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
〔春学期〕
・若林正丈『台湾の歴史』（講談社学術文庫 2023 年）
〔秋学期〕
・本多勝一『南京への道』（朝日文庫 1989 年）
・ミルグラム『服従の心理』（河出文庫 2012 年）

【参考書】
参考書は指定しないが、国立国会図書館が電子化した関連資料を閲覧できるよう、国立国会図書館デジタルコレクションの利用者登録を行っておくこと
・国立国会図書館サーチ
https://ndlsearch.ndl.go.jp

【成績評価の方法と基準】
成績は輪読発表と共同研究（60％）、グループワークなどゼミの活動への参加度（40％）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・昨年度の夏のフィールドワークは、炎暑に見舞われたため、今年度は実施時期を早めた。
・昨年度は学会発表の準備に十分な時間が取れなかったため、今年度は準備時間を増やした。

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces how Japan's self image differs from the ideas and opinions held by the people of China, Taiwan and Korea, throughout history and what historical events, issues and persons of note helped to shape these ideas and opinions.
[Learning Objectives]
The goal of this course is to understand the reasons for the difference between how Japan sees itself, and how they are seen by the countries of China, Taiwan and Korea, through the use of text and visual materials.
[Learning activities outside of classroom]
Before each class, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from an assigned text. Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
[Grading Criteria/Policies]
Each student is expected to give at least one presentation during the course. Grading will be decided based on the quality of the student's performance(60%) and in class participation(40%).

HIS400GA（史学 / History 400）

言語文化演習

鈴木　靖

サブタイトル：アジアから見た日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国や台湾、韓国などアジアの人々の対日イメージと、日本人自身が抱く自己イメージとの間には大きな違いがあり、良好な近隣関係を築く上での障害となっている。
この授業では「アジアから見た日本」をテーマに、これらの国や地域と日本との交流の歴史や現状を概観するとともに、アジアの人々の対日イメージに大きな影響を与えた事件や人物に焦点を当て、それらが日本やアジアの国や地域でどのように語られてきたか、また、いまどのように伝えられているかを学ぶ。

【到達目標】
アジアの人々の対日イメージがどのように形成されたかを理解し、日本とアジアという双方の視点から問題を考える力（共感力 empathy）を養い、国際社会人として円滑な異文化間コミュニケーションを行う力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、若林正丈『台湾の歴史』をもとに、歴史的な視点からいわゆる「台湾有事」について考える。秋学期は昨年度中国で記録的なヒットとなった映画「南京写真館 Dead to Rights」を鑑賞しながら、それがいかなる史実をもとにしているのかを本多勝一『南京への道』を参考に、またなぜそのようなことが起こったのかをミルグラム『服従の心理』を参考に考える。
これと並行して、日中韓台に関連するテーマについて共同研究を行い、国際文化情報学会でその成果を発表する。
課題や発表に対するフィードバックの方法としては、受講生全員が参加する LINE のグループを用意し、これを通じて全員または個別にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	一年間の学習目標と方法、計画について話し合う
第2回	春のフィールドワーク	日本に建てられた台湾の民間信仰の廟を訪ねる
第3回	近代以前の台湾	芝山巌の光景 「海のアジア」と「陸のアジア」を往還する島――東アジア史の「気圧の谷」と台湾
第4回	清末から日本統治時代	「海のアジア」への再編入――清末開港と日本の植民地統治
第5回	植民地支配からの解放と二・ニ八事件	「中華民国」がやって来た――二・ニ八事件と中国内戦
第6回	冷戦時代の台湾	「中華民国」の台湾定着――東西冷戦下の安定と発展
第7回	国際的孤立と民主化の胎動	「変に処して驚かず」 ――「中華民国」の対外危機と台湾社会の自己主張
第8回	憲政改革	李登輝の登場と「憲政改革」
第9回	戒厳令の解除と新党の結成	台湾ナショナリズムとエスノポリティクス
第10回	冷戦時代の終焉と中台関係	中華人民共和国と台湾――結びつく経済、離れる心？
第11回	民主化後の台湾	「中華民国第二共和制」の出発 結び
第12回	夏のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める
第13回	今日の台湾	総統選挙が刻む台湾の四半世紀――なおも変容し躊躇するアイデンティティ 「台湾は何処にあるか」と「台湾は何であるか」
第14回	共同研究中間発表 夏合宿準備	これまでの共同研究の中間発表と夏合宿の準備作業を行う
第15回	なぜいま「南京写真館」なのか？	中国映画「南京写真館」と本多勝一『南京への道』、S. ミルグラム『服従の心理』の紹介
第16回	『南京への道』を読む(1) 杭州湾上陸	「日本軍百万 杭州湾北岸に上陸」 「我陸軍愈上海に上陸」 「蘇州城つひに陥落」
第17回	『南京への道』を読む(2) 無錫から句容へ	「皇軍、無錫を占拠す」 「常州城頭に日章旗」 「句容を抜き一路驀進」
第18回	『南京への道』を読む(3) 鎮江から南京へ	「鎮江県城占拠」 「百人斬り“超記録”」 「皇軍一斉南京城に殺到」
第19回	『南京への道』を読む(4) 大殲滅戦(1)	「大殲滅戦展開さる」(1) 捕虜の“処置”
第20回	『南京への道』を読む(5) 大殲滅戦(2)	「大殲滅戦展開さる」(2) 南京城内での民間人殺害
第21回	『南京への道』を読む(6) 大殲滅戦(3)	「大殲滅戦展開さる」(3)―下関での捕虜殺害
第22回	『南京への道』を読む(7) 事件後の南京	「平和立帰る南京」(1)(2)
第23回	学会発表準備(1) 資料作成(1)	学会発表の予稿作成
第24回	学会発表準備(2) 資料作成(2)	学会発表のプレゼン資料作成
第25回	学会発表準備(3) 予行演習	学会発表の予稿演習
第26回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考える(1)	「服従の心理実験」
第27回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考え(2)	「ソンミ村虐殺事件」
第28回	冬のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ゼミ生は、輪読図書の指定範囲を事前に熟読し、グループワークに備える
・発表者は、パワーポイントを使って輪読図書の内容を簡潔にまとめるとともに、他の図書・論文などを調査して情報を補足する
・本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
〔春学期〕
・若林正丈『台湾の歴史』（講談社学術文庫 2023 年）
〔秋学期〕
・本多勝一『南京への道』（朝日文庫 1989 年）
・ミルグラム『服従の心理』（河出文庫 2012 年）

【参考書】
参考書は指定しないが、国立国会図書館が電子化した関連資料を閲覧できるよう、国立国会図書館デジタルコレクションの利用者登録を行っておくこと
・国立国会図書館サーチ
https://ndlsearch.ndl.go.jp

【成績評価の方法と基準】
成績は輪読発表と共同研究（60％）、グループワークなどゼミの活動への参加度（40％）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・昨年度の夏のフィールドワークは、炎暑に見舞われたため、今年度は実施時期を早めた。
・昨年度は学会発表の準備に十分な時間が取れなかったため、今年度は準備時間を増やした。

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces how Japan's self image differs from the ideas and opinions held by the people of China, Taiwan and Korea, throughout history and what historical events, issues and persons of note helped to shape these ideas and opinions.
[Learning Objectives]
The goal of this course is to understand the reasons for the difference between how Japan sees itself, and how they are seen by the countries of China, Taiwan and Korea, through the use of text and visual materials.
[Learning activities outside of classroom]
Before each class, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from an assigned text. Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
[Grading Criteria/Policies]
Each student is expected to give at least one presentation during the course. Grading will be decided based on the quality of the student's performance(60%) and in class participation(40%).

HIS400GA（史学 / History 400）

言語文化演習

鈴木　靖

サブタイトル：アジアから見た日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国や台湾、韓国などアジアの人々の対日イメージと、日本人自身が抱く自己イメージとの間には大きな違いがあり、良好な近隣関係を築く上での障害となっている。
この授業では「アジアから見た日本」をテーマに、これらの国や地域と日本との交流の歴史や現状を概観するとともに、アジアの人々の対日イメージに大きな影響を与えた事件や人物に焦点を当て、それらが日本やアジアの国や地域でどのように語られてきたか、また、いまどのように伝えられているかを学ぶ。

【到達目標】
アジアの人々の対日イメージがどのように形成されたかを理解し、日本とアジアという双方の視点から問題を考える力（共感力 empathy）を養い、国際社会人として円滑な異文化間コミュニケーションを行う力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、若林正丈『台湾の歴史』をもとに、歴史的な視点からいわゆる「台湾有事」について考える。秋学期は昨年度中国で記録的なヒットとなった映画「南京写真館 Dead to Rights」を鑑賞しながら、それがいかなる史実をもとにしているのかを本多勝一『南京への道』を参考に、またなぜそのようなことが起こったのかをミルグラム『服従の心理』を参考に考える。
これと並行して、日中韓台に関連するテーマについて共同研究を行い、国際文化情報学会でその成果を発表する。
課題や発表に対するフィードバックの方法としては、受講生全員が参加する LINE のグループを用意し、これを通じて全員または個別にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	一年間の学習目標と方法、計画について話し合う
第2回	春のフィールドワーク	日本に建てられた台湾の民間信仰の廟を訪ねる
第3回	近代以前の台湾	芝山巌の光景 「海のアジア」と「陸のアジア」を往還する島――東アジア史の「気圧の谷」と台湾
第4回	清末から日本統治時代	「海のアジア」への再編入――清末開港と日本の植民地統治
第5回	植民地支配からの解放と二・ニ八事件	「中華民国」がやって来た――二・ニ八事件と中国内戦
第6回	冷戦時代の台湾	「中華民国」の台湾定着――東西冷戦下の安定と発展
第7回	国際的孤立と民主化の胎動	「変に処して驚かず」 ――「中華民国」の対外危機と台湾社会の自己主張
第8回	憲政改革	李登輝の登場と「憲政改革」
第9回	戒厳令の解除と新党の結成	台湾ナショナリズムとエスノポリティクス
第10回	冷戦時代の終焉と中台関係	中華人民共和国と台湾――結びつく経済、離れる心？
第11回	民主化後の台湾	「中華民国第二共和制」の出発 結び
第12回	夏のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める
第13回	今日の台湾	総統選挙が刻む台湾の四半世紀――なおも変容し躊躇するアイデンティティ 「台湾は何処にあるか」と「台湾は何であるか」
第14回	共同研究中間発表 夏合宿準備	これまでの共同研究の中間発表と夏合宿の準備作業を行う
第15回	なぜいま「南京写真館」なのか？	中国映画「南京写真館」と本多勝一『南京への道』、S. ミルグラム『服従の心理』の紹介
第16回	『南京への道』を読む(1) 杭州湾上陸	「日本軍百万 杭州湾北岸に上陸」 「我陸軍愈上海に上陸」 「蘇州城つひに陥落」
第17回	『南京への道』を読む(2) 無錫から句容へ	「皇軍、無錫を占拠す」 「常州城頭に日章旗」 「句容を抜き一路驀進」
第18回	『南京への道』を読む(3) 鎮江から南京へ	「鎮江県城占拠」 「百人斬り“超記録”」 「皇軍一斉南京城に殺到」
第19回	『南京への道』を読む(4) 大殲滅戦(1)	「大殲滅戦展開さる」(1) 捕虜の“処置”
第20回	『南京への道』を読む(5) 大殲滅戦(2)	「大殲滅戦展開さる」(2) 南京城内での民間人殺害
第21回	『南京への道』を読む(6) 大殲滅戦(3)	「大殲滅戦展開さる」(3)―下関での捕虜殺害
第22回	『南京への道』を読む(7) 事件後の南京	「平和立帰る南京」(1)(2)
第23回	学会発表準備(1) 資料作成(1)	学会発表の予稿作成
第24回	学会発表準備(2) 資料作成(2)	学会発表のプレゼン資料作成
第25回	学会発表準備(3) 予行演習	学会発表の予稿演習
第26回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考える(1)	「服従の心理実験」
第27回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考え(2)	「ソンミ村虐殺事件」
第28回	冬のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ゼミ生は、輪読図書の指定範囲を事前に熟読し、グループワークに備える
・発表者は、パワーポイントを使って輪読図書の内容を簡潔にまとめるとともに、他の図書・論文などを調査して情報を補足する
・本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
〔春学期〕
・若林正丈『台湾の歴史』（講談社学術文庫 2023 年）
〔秋学期〕
・本多勝一『南京への道』（朝日文庫 1989 年）
・ミルグラム『服従の心理』（河出文庫 2012 年）

【参考書】
参考書は指定しないが、国立国会図書館が電子化した関連資料を閲覧できるよう、国立国会図書館デジタルコレクションの利用者登録を行っておくこと
・国立国会図書館サーチ
https://ndlsearch.ndl.go.jp

【成績評価の方法と基準】
成績は輪読発表と共同研究（60％）、グループワークなどゼミの活動への参加度（40％）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・昨年度の夏のフィールドワークは、炎暑に見舞われたため、今年度は実施時期を早めた。
・昨年度は学会発表の準備に十分な時間が取れなかったため、今年度は準備時間を増やした。

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces how Japan's self image differs from the ideas and opinions held by the people of China, Taiwan and Korea, throughout history and what historical events, issues and persons of note helped to shape these ideas and opinions.
[Learning Objectives]
The goal of this course is to understand the reasons for the difference between how Japan sees itself, and how they are seen by the countries of China, Taiwan and Korea, through the use of text and visual materials.
[Learning activities outside of classroom]
Before each class, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from an assigned text. Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
[Grading Criteria/Policies]
Each student is expected to give at least one presentation during the course. Grading will be decided based on the quality of the student's performance(60%) and in class participation(40%).

HIS400GA（史学 / History 400）

言語文化演習

鈴木　靖

サブタイトル：アジアから見た日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国や台湾、韓国などアジアの人々の対日イメージと、日本人自身が抱く自己イメージとの間には大きな違いがあり、良好な近隣関係を築く上での障害となっている。
この授業では「アジアから見た日本」をテーマに、これらの国や地域と日本との交流の歴史や現状を概観するとともに、アジアの人々の対日イメージに大きな影響を与えた事件や人物に焦点を当て、それらが日本やアジアの国や地域でどのように語られてきたか、また、いまどのように伝えられているかを学ぶ。

【到達目標】
アジアの人々の対日イメージがどのように形成されたかを理解し、日本とアジアという双方の視点から問題を考える力（共感力 empathy）を養い、国際社会人として円滑な異文化間コミュニケーションを行う力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、若林正丈『台湾の歴史』をもとに、歴史的な視点からいわゆる「台湾有事」について考える。秋学期は昨年度中国で記録的なヒットとなった映画「南京写真館 Dead to Rights」を鑑賞しながら、それがいかなる史実をもとにしているのかを本多勝一『南京への道』を参考に、またなぜそのようなことが起こったのかをミルグラム『服従の心理』を参考に考える。
これと並行して、日中韓台に関連するテーマについて共同研究を行い、国際文化情報学会でその成果を発表する。
課題や発表に対するフィードバックの方法としては、受講生全員が参加する LINE のグループを用意し、これを通じて全員または個別にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	一年間の学習目標と方法、計画について話し合う
第2回	春のフィールドワーク	日本に建てられた台湾の民間信仰の廟を訪ねる
第3回	近代以前の台湾	芝山巌の光景 「海のアジア」と「陸のアジア」を往還する島――東アジア史の「気圧の谷」と台湾
第4回	清末から日本統治時代	「海のアジア」への再編入――清末開港と日本の植民地統治
第5回	植民地支配からの解放と二・ニ八事件	「中華民国」がやって来た――二・ニ八事件と中国内戦
第6回	冷戦時代の台湾	「中華民国」の台湾定着――東西冷戦下の安定と発展
第7回	国際的孤立と民主化の胎動	「変に処して驚かず」 ――「中華民国」の対外危機と台湾社会の自己主張
第8回	憲政改革	李登輝の登場と「憲政改革」
第9回	戒厳令の解除と新党の結成	台湾ナショナリズムとエスノポリティクス
第10回	冷戦時代の終焉と中台関係	中華人民共和国と台湾――結びつく経済、離れる心？
第11回	民主化後の台湾	「中華民国第二共和制」の出発 結び
第12回	夏のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める
第13回	今日の台湾	総統選挙が刻む台湾の四半世紀――なおも変容し躊躇するアイデンティティ 「台湾は何処にあるか」と「台湾は何であるか」
第14回	共同研究中間発表 夏合宿準備	これまでの共同研究の中間発表と夏合宿の準備作業を行う
第15回	なぜいま「南京写真館」なのか？	中国映画「南京写真館」と本多勝一『南京への道』、S. ミルグラム『服従の心理』の紹介
第16回	『南京への道』を読む(1) 杭州湾上陸	「日本軍百万 杭州湾北岸に上陸」 「我陸軍愈上海に上陸」 「蘇州城つひに陥落」
第17回	『南京への道』を読む(2) 無錫から句容へ	「皇軍、無錫を占拠す」 「常州城頭に日章旗」 「句容を抜き一路驀進」
第18回	『南京への道』を読む(3) 鎮江から南京へ	「鎮江県城占拠」 「百人斬り“超記録”」 「皇軍一斉南京城に殺到」
第19回	『南京への道』を読む(4) 大殲滅戦(1)	「大殲滅戦展開さる」(1) 捕虜の“処置”
第20回	『南京への道』を読む(5) 大殲滅戦(2)	「大殲滅戦展開さる」(2) 南京城内での民間人殺害
第21回	『南京への道』を読む(6) 大殲滅戦(3)	「大殲滅戦展開さる」(3)―下関での捕虜殺害
第22回	『南京への道』を読む(7) 事件後の南京	「平和立帰る南京」(1)(2)
第23回	学会発表準備(1) 資料作成(1)	学会発表の予稿作成
第24回	学会発表準備(2) 資料作成(2)	学会発表のプレゼン資料作成
第25回	学会発表準備(3) 予行演習	学会発表の予稿演習
第26回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考える(1)	「服従の心理実験」
第27回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考え(2)	「ソンミ村虐殺事件」
第28回	冬のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ゼミ生は、輪読図書の指定範囲を事前に熟読し、グループワークに備える
・発表者は、パワーポイントを使って輪読図書の内容を簡潔にまとめるとともに、他の図書・論文などを調査して情報を補足する
・本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
〔春学期〕
・若林正丈『台湾の歴史』（講談社学術文庫 2023 年）
〔秋学期〕
・本多勝一『南京への道』（朝日文庫 1989 年）
・ミルグラム『服従の心理』（河出文庫 2012 年）

【参考書】
参考書は指定しないが、国立国会図書館が電子化した関連資料を閲覧できるよう、国立国会図書館デジタルコレクションの利用者登録を行っておくこと
・国立国会図書館サーチ
https://ndlsearch.ndl.go.jp

【成績評価の方法と基準】
成績は輪読発表と共同研究（60％）、グループワークなどゼミの活動への参加度（40％）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・昨年度の夏のフィールドワークは、炎暑に見舞われたため、今年度は実施時期を早めた。
・昨年度は学会発表の準備に十分な時間が取れなかったため、今年度は準備時間を増やした。

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces how Japan's self image differs from the ideas and opinions held by the people of China, Taiwan and Korea, throughout history and what historical events, issues and persons of note helped to shape these ideas and opinions.
[Learning Objectives]
The goal of this course is to understand the reasons for the difference between how Japan sees itself, and how they are seen by the countries of China, Taiwan and Korea, through the use of text and visual materials.
[Learning activities outside of classroom]
Before each class, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from an assigned text. Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
[Grading Criteria/Policies]
Each student is expected to give at least one presentation during the course. Grading will be decided based on the quality of the student's performance(60%) and in class participation(40%).

HIS400GA（史学 / History 400）

言語文化演習

鈴木　靖

サブタイトル：アジアから見た日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国や台湾、韓国などアジアの人々の対日イメージと、日本人自身が抱く自己イメージとの間には大きな違いがあり、良好な近隣関係を築く上での障害となっている。
この授業では「アジアから見た日本」をテーマに、これらの国や地域と日本との交流の歴史や現状を概観するとともに、アジアの人々の対日イメージに大きな影響を与えた事件や人物に焦点を当て、それらが日本やアジアの国や地域でどのように語られてきたか、また、いまどのように伝えられているかを学ぶ。

【到達目標】
アジアの人々の対日イメージがどのように形成されたかを理解し、日本とアジアという双方の視点から問題を考える力（共感力 empathy）を養い、国際社会人として円滑な異文化間コミュニケーションを行う力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、若林正丈『台湾の歴史』をもとに、歴史的な視点からいわゆる「台湾有事」について考える。秋学期は昨年度中国で記録的なヒットとなった映画「南京写真館 Dead to Rights」を鑑賞しながら、それがいかなる史実をもとにしているのかを本多勝一『南京への道』を参考に、またなぜそのようなことが起こったのかをミルグラム『服従の心理』を参考に考える。
これと並行して、日中韓台に関連するテーマについて共同研究を行い、国際文化情報学会でその成果を発表する。
課題や発表に対するフィードバックの方法としては、受講生全員が参加する LINE のグループを用意し、これを通じて全員または個別にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	一年間の学習目標と方法、計画について話し合う
第2回	春のフィールドワーク	日本に建てられた台湾の民間信仰の廟を訪ねる
第3回	近代以前の台湾	芝山巌の光景 「海のアジア」と「陸のアジア」を往還する島――東アジア史の「気圧の谷」と台湾
第4回	清末から日本統治時代	「海のアジア」への再編入――清末開港と日本の植民地統治
第5回	植民地支配からの解放と二・ニ八事件	「中華民国」がやって来た――二・ニ八事件と中国内戦
第6回	冷戦時代の台湾	「中華民国」の台湾定着――東西冷戦下の安定と発展
第7回	国際的孤立と民主化の胎動	「変に処して驚かず」 ――「中華民国」の対外危機と台湾社会の自己主張
第8回	憲政改革	李登輝の登場と「憲政改革」
第9回	戒厳令の解除と新党の結成	台湾ナショナリズムとエスノポリティクス
第10回	冷戦時代の終焉と中台関係	中華人民共和国と台湾――結びつく経済、離れる心？
第11回	民主化後の台湾	「中華民国第二共和制」の出発 結び
第12回	夏のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める
第13回	今日の台湾	総統選挙が刻む台湾の四半世紀――なおも変容し躊躇するアイデンティティ 「台湾は何処にあるか」と「台湾は何であるか」
第14回	共同研究中間発表 夏合宿準備	これまでの共同研究の中間発表と夏合宿の準備作業を行う
第15回	なぜいま「南京写真館」なのか？	中国映画「南京写真館」と本多勝一『南京への道』、S. ミルグラム『服従の心理』の紹介
第16回	『南京への道』を読む(1) 杭州湾上陸	「日本軍百万 杭州湾北岸に上陸」 「我陸軍愈上海に上陸」 「蘇州城つひに陥落」
第17回	『南京への道』を読む(2) 無錫から句容へ	「皇軍、無錫を占拠す」 「常州城頭に日章旗」 「句容を抜き一路驀進」
第18回	『南京への道』を読む(3) 鎮江から南京へ	「鎮江県城占拠」 「百人斬り“超記録”」 「皇軍一斉南京城に殺到」
第19回	『南京への道』を読む(4) 大殲滅戦(1)	「大殲滅戦展開さる」(1) 捕虜の“処置”
第20回	『南京への道』を読む(5) 大殲滅戦(2)	「大殲滅戦展開さる」(2) 南京城内での民間人殺害
第21回	『南京への道』を読む(6) 大殲滅戦(3)	「大殲滅戦展開さる」(3)―下関での捕虜殺害
第22回	『南京への道』を読む(7) 事件後の南京	「平和立帰る南京」(1)(2)
第23回	学会発表準備(1) 資料作成(1)	学会発表の予稿作成
第24回	学会発表準備(2) 資料作成(2)	学会発表のプレゼン資料作成
第25回	学会発表準備(3) 予行演習	学会発表の予稿演習
第26回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考える(1)	「服従の心理実験」
第27回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考え(2)	「ソンミ村虐殺事件」
第28回	冬のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ゼミ生は、輪読図書の指定範囲を事前に熟読し、グループワークに備える
・発表者は、パワーポイントを使って輪読図書の内容を簡潔にまとめるとともに、他の図書・論文などを調査して情報を補足する
・本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
〔春学期〕
・若林正丈『台湾の歴史』（講談社学術文庫 2023 年）
〔秋学期〕
・本多勝一『南京への道』（朝日文庫 1989 年）
・ミルグラム『服従の心理』（河出文庫 2012 年）

【参考書】
参考書は指定しないが、国立国会図書館が電子化した関連資料を閲覧できるよう、国立国会図書館デジタルコレクションの利用者登録を行っておくこと
・国立国会図書館サーチ
https://ndlsearch.ndl.go.jp

【成績評価の方法と基準】
成績は輪読発表と共同研究（60％）、グループワークなどゼミの活動への参加度（40％）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・昨年度の夏のフィールドワークは、炎暑に見舞われたため、今年度は実施時期を早めた。
・昨年度は学会発表の準備に十分な時間が取れなかったため、今年度は準備時間を増やした。

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces how Japan's self image differs from the ideas and opinions held by the people of China, Taiwan and Korea, throughout history and what historical events, issues and persons of note helped to shape these ideas and opinions.
[Learning Objectives]
The goal of this course is to understand the reasons for the difference between how Japan sees itself, and how they are seen by the countries of China, Taiwan and Korea, through the use of text and visual materials.
[Learning activities outside of classroom]
Before each class, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from an assigned text. Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
[Grading Criteria/Policies]
Each student is expected to give at least one presentation during the course. Grading will be decided based on the quality of the student's performance(60%) and in class participation(40%).

HIS400GA（史学 / History 400）

言語文化演習

鈴木　靖

サブタイトル：アジアから見た日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国や台湾、韓国などアジアの人々の対日イメージと、日本人自身が抱く自己イメージとの間には大きな違いがあり、良好な近隣関係を築く上での障害となっている。
この授業では「アジアから見た日本」をテーマに、これらの国や地域と日本との交流の歴史や現状を概観するとともに、アジアの人々の対日イメージに大きな影響を与えた事件や人物に焦点を当て、それらが日本やアジアの国や地域でどのように語られてきたか、また、いまどのように伝えられているかを学ぶ。

【到達目標】
アジアの人々の対日イメージがどのように形成されたかを理解し、日本とアジアという双方の視点から問題を考える力（共感力 empathy）を養い、国際社会人として円滑な異文化間コミュニケーションを行う力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期は、若林正丈『台湾の歴史』をもとに、歴史的な視点からいわゆる「台湾有事」について考える。秋学期は昨年度中国で記録的なヒットとなった映画「南京写真館 Dead to Rights」を鑑賞しながら、それがいかなる史実をもとにしているのかを本多勝一『南京への道』を参考に、またなぜそのようなことが起こったのかをミルグラム『服従の心理』を参考に考える。
これと並行して、日中韓台に関連するテーマについて共同研究を行い、国際文化情報学会でその成果を発表する。
課題や発表に対するフィードバックの方法としては、受講生全員が参加する LINE のグループを用意し、これを通じて全員または個別にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	一年間の学習目標と方法、計画について話し合う
第2回	春のフィールドワーク	日本に建てられた台湾の民間信仰の廟を訪ねる
第3回	近代以前の台湾	芝山巌の光景 「海のアジア」と「陸のアジア」を往還する島――東アジア史の「気圧の谷」と台湾
第4回	清末から日本統治時代	「海のアジア」への再編入――清末開港と日本の植民地統治
第5回	植民地支配からの解放と二・ニ八事件	「中華民国」がやって来た――二・ニ八事件と中国内戦
第6回	冷戦時代の台湾	「中華民国」の台湾定着――東西冷戦下の安定と発展
第7回	国際的孤立と民主化の胎動	「変に処して驚かず」 ――「中華民国」の対外危機と台湾社会の自己主張
第8回	憲政改革	李登輝の登場と「憲政改革」
第9回	戒厳令の解除と新党の結成	台湾ナショナリズムとエスノポリティクス
第10回	冷戦時代の終焉と中台関係	中華人民共和国と台湾――結びつく経済、離れる心？
第11回	民主化後の台湾	「中華民国第二共和制」の出発 結び
第12回	夏のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める
第13回	今日の台湾	総統選挙が刻む台湾の四半世紀――なおも変容し躊躇するアイデンティティ 「台湾は何処にあるか」と「台湾は何であるか」
第14回	共同研究中間発表 夏合宿準備	これまでの共同研究の中間発表と夏合宿の準備作業を行う
第15回	なぜいま「南京写真館」なのか？	中国映画「南京写真館」と本多勝一『南京への道』、S. ミルグラム『服従の心理』の紹介
第16回	『南京への道』を読む(1) 杭州湾上陸	「日本軍百万 杭州湾北岸に上陸」 「我陸軍愈上海に上陸」 「蘇州城つひに陥落」
第17回	『南京への道』を読む(2) 無錫から句容へ	「皇軍、無錫を占拠す」 「常州城頭に日章旗」 「句容を抜き一路驀進」
第18回	『南京への道』を読む(3) 鎮江から南京へ	「鎮江県城占拠」 「百人斬り“超記録”」 「皇軍一斉南京城に殺到」
第19回	『南京への道』を読む(4) 大殲滅戦(1)	「大殲滅戦展開さる」(1) 捕虜の“処置”
第20回	『南京への道』を読む(5) 大殲滅戦(2)	「大殲滅戦展開さる」(2) 南京城内での民間人殺害
第21回	『南京への道』を読む(6) 大殲滅戦(3)	「大殲滅戦展開さる」(3)―下関での捕虜殺害
第22回	『南京への道』を読む(7) 事件後の南京	「平和立帰る南京」(1)(2)
第23回	学会発表準備(1) 資料作成(1)	学会発表の予稿作成
第24回	学会発表準備(2) 資料作成(2)	学会発表のプレゼン資料作成
第25回	学会発表準備(3) 予行演習	学会発表の予稿演習
第26回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考える(1)	「服従の心理実験」
第27回	なぜ南京事件は起こったのか――『服従の心理』から考え(2)	「ソンミ村虐殺事件」
第28回	冬のフィールドワーク	見学先はゼミでの話し合いよって決める

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・ゼミ生は、輪読図書の指定範囲を事前に熟読し、グループワークに備える
・発表者は、パワーポイントを使って輪読図書の内容を簡潔にまとめるとともに、他の図書・論文などを調査して情報を補足する
・本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
〔春学期〕
・若林正丈『台湾の歴史』（講談社学術文庫 2023 年）
〔秋学期〕
・本多勝一『南京への道』（朝日文庫 1989 年）
・ミルグラム『服従の心理』（河出文庫 2012 年）

【参考書】
参考書は指定しないが、国立国会図書館が電子化した関連資料を閲覧できるよう、国立国会図書館デジタルコレクションの利用者登録を行っておくこと
・国立国会図書館サーチ
https://ndlsearch.ndl.go.jp

【成績評価の方法と基準】
成績は輪読発表と共同研究（60％）、グループワークなどゼミの活動への参加度（40％）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・昨年度の夏のフィールドワークは、炎暑に見舞われたため、今年度は実施時期を早めた。
・昨年度は学会発表の準備に十分な時間が取れなかったため、今年度は準備時間を増やした。

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces how Japan's self image differs from the ideas and opinions held by the people of China, Taiwan and Korea, throughout history and what historical events, issues and persons of note helped to shape these ideas and opinions.
[Learning Objectives]
The goal of this course is to understand the reasons for the difference between how Japan sees itself, and how they are seen by the countries of China, Taiwan and Korea, through the use of text and visual materials.
[Learning activities outside of classroom]
Before each class, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from an assigned text. Required study/preparation time will be four, or more, hours per class.
[Grading Criteria/Policies]
Each student is expected to give at least one presentation during the course. Grading will be decided based on the quality of the student's performance(60%) and in class participation(40%).

ARSc400GA（地域研究（北アメリカ） / Area studies(North America) 400）

言語文化演習

遠藤　郁子

サブタイトル：アメリカの「なぜ」を考えよう
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は、ひとつの社会現象、問題、文化事象などに対してさまざまな角度から「なぜ」と問い続け、資料をもとにそれを分析します。与えられた情報を「事実」としてただ受け止めるのではなく、想像力を働かせ、柔軟な態度でそれを考察する能力を身に付けることが目的です。担当教員の専門領域がアメリカの文学・文化なので、アメリカに関する知見を深め、そもそも「アメリカ」とは何なのかを考えます。これらの作業を通じて、世界や日本について、また自分自身について知ることも演習の目的とします。
研究を通して自身の関心を深めつつ、授業では各学生の研究に関わる発表とアクティビティを通してゼミ生全員で様々なテーマについて話し合うことで広い視野を身に付けます。年に２本のゼミ論執筆と入念な発表準備を通して読む・書く・話すスキルの向上も目指します。

【到達目標】
I. この演習で学生は以下の力を身につけます。
(1) 一つの題材から、検討に値する問題点を見つけ出す。
(2)上記の問題点の理由を調べ、解釈・検討し、それを他者に伝える。
(3)他者の意見に耳を傾け、場合によっては自らの見解を修正しつつ、より正確で精緻な、説得力のある結論へと練り上げる。
言い換えれば(1)〜(3)のプロセスを通して、学生は問題発見、情報収集、解釈と分析と思考 、そして表現のスキルを磨いてゆきます。それが当演習の目標の一つです。
II. こうした探求の姿勢は、一つの事象の背景が決して単一で単純ではないことを、改めて気づかせてくれるはずです。その複雑さをときほぐすための、強靱かつ繊細な知力と感受性を身につけることも、当演習の目標となります。
III.「大学時代になにを学びましたか？」と聞かれたとき躊躇なく答えられることをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生は授業で浮かび上がった問題や、自分の経験を通して興味を抱いた事柄をテーマに選び、授業で獲得した方法論を使って、情報を取捨選択しながらゼミ論文を完成させ、プレゼンテーションを行います。プレゼンテーションでは自身のテーマについて発表するだけでなく、それについて受講生全員で考え、理解を深めるためのディスカッションを中心としたアクティビティを提供してもらいます。ゼミ論の執筆はもちろん一人で作業するだけではありません。随時論文の進行状況を報告しあいながら、学生同士の意見やアドバイスが活発に交差する機会を、授業内外で設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要の説明。自身の関心のあるトピックを共有しあいます。
第2回	講義＋表象分析（１）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第3回	講義＋表象分析（２）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第4回	講義＋表象分析（3）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第5回	ゼミ論合評会・ディスカッション（1）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第6回	ゼミ論合評会・ディスカッション（2）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第7回	ゼミ論合評会・ディスカッション（3）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第8回	ゼミ論合評会・ディスカッション（4） 春学期ゼミ論助走	ゼミ論とはなにか、テーマ設定、調査の方法、執筆の進め方などについて話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・ディスカッション（5） 春学期ゼミ論執筆（１）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・ディスカッション（6） 春学期ゼミ論執筆（２）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・ディスカッション（7） 春学期ゼミ論執筆（３）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・ディスカッション（8） 春学期ゼミ論執筆（４）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・ディスカッション（9） 春学期ゼミ論執筆（５）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	ゼミ論合評会・ディスカッション（10） 春学期の総括・反省 春学期ゼミ論執筆（6）	春学期ゼミの総括・反省を行います。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第1回	表象分析（１）	特定の表象作品（映画・音楽など）では、どんなテーマ設定が可能か検討します。
第2回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（1）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第3回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第4回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（３） 秋学期ゼミ論助走	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます
第5回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（４） 秋学期ゼミ論執筆（１）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第6回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（５） 秋学期ゼミ論執筆（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第7回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（６） 秋学期ゼミ論執筆（３）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

第8回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（７） 秋学期ゼミ論執筆（４）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（８） 秋学期ゼミ論執筆（５）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（９） 秋学期ゼミ論執筆（６）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（１０） 秋学期ゼミ論執筆（７）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（１１） 秋学期ゼミ論執筆（８）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（１２） 秋学期ゼミ論執筆（９）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	秋学期の総括・反省 秋学期ゼミ論執筆（１０）	秋学期ゼミの総括・反省を行います。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学生が翌週に向けて事前準備（題材を読む・観る・聞く・調べる）を行うことは、授業に参加するために不可欠です。準備の方法や範囲は、毎回具体的に指示します。春・秋学期のゼミ論作成には相応の時間と労力を費やすことになりますが、完成時の知的な満足感・充実感は学生時代の成果の一つとして、なにものにも換えられないはずです。また卒業してからも大きな自信となることでしょう。生成AIを使わなければ論文が書けない学生は受講をおすすめしません。本授業外の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
とくになし。主に論文、新聞、雑誌、ネット記事などの印刷物や映画・動画を使用します。

【参考書】
適宜、授業時間内に指示します。

【成績評価の方法と基準】
（１）発表(20%)
（２）レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度（20％）
（３）ゼミ論（40％）
（４）出席（20％）
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の希望を随時授業の内容や流れに反映し、受講者が主体的につくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
本授業ではGoogle Classroomを活用します。また各種マテリアルへのアクセスが必要な場合もあるので、パソコン、スマートフォンなどのディヴァイスを所持していることが望ましい。

【その他の重要事項】
（１）授業や授業準備を優先させられる
（２）向上心・知的好奇心が強い
（３）USAや特定の文化、あるいは文化全般に興味がある
（４）自分と人との違いを面白いと感じる
（５）生成AIに論文を執筆させない（自力で論文を書く）
– 以上の条件を満たす学生を望みます。また、学部SA先がアメリカ以外の学生や「嫌米」の学生も大歓迎です。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Through this course, students will be introduced to basic concepts and theories in order to understand various cultures, mainly those in the United States. Students are expected to develop an interest in the issues of ideology, power, everyday meaning-making and cultural practices. This course will explore different territories within the realm : popular culture and media studies, minority and subcultures, race, gender,etc. In addition, students will be learning and trying out various methods to find information, give presentations, write papers, cite sources, etc.
【到達目標（Learning Objectives）】
I. In this course, students will develop the following skills:
(1) The ability to find problems worthy of consideration from a single subject.
(2) The ability to investigate, interpret and examine the reasons for the above problems and communicate them to others.
(3) The ability to listen to the opinions of others, possibly revising their own views, and refine them into a more accurate, precise, and persuasive conclusion.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
It is essential for students to prepare in advance for the following week (reading, watching, listening, and researching the subject matter(s)) in order to participate in the class. This course will require students to complete about two hours of pre- and post-course study for each class.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
The following four aspects are the main targets of evaluation,which will be judged comprehensively.
(1) Personal presentation (20%)
(2) Completion of assignments such as essay plans and comment sheets for each session (2 0%)
(3) Seminar essay (40%)
(4) Contributions to each class (20%)
The above four aspects will be the main targets of evaluation and will be judged comprehensively.

ARSc400GA（地域研究（北アメリカ） / Area studies(North America) 400）

言語文化演習

遠藤　郁子

サブタイトル：アメリカの「なぜ」を考えよう
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は、ひとつの社会現象、問題、文化事象などに対してさまざまな角度から「なぜ」と問い続け、資料をもとにそれを分析します。与えられた情報を「事実」としてただ受け止めるのではなく、想像力を働かせ、柔軟な態度でそれを考察する能力を身に付けることが目的です。担当教員の専門領域がアメリカの文学・文化なので、アメリカに関する知見を深め、そもそも「アメリカ」とは何なのかを考えます。これらの作業を通じて、世界や日本について、また自分自身について知ることも演習の目的とします。
研究を通して自身の関心を深めつつ、授業では各学生の研究に関わる発表とアクティビティを通してゼミ生全員で様々なテーマについて話し合うことで広い視野を身に付けます。年に２本のゼミ論執筆と入念な発表準備を通して読む・書く・話すスキルの向上も目指します。

【到達目標】
I. この演習で学生は以下の力を身につけます。
(1) 一つの題材から、検討に値する問題点を見つけ出す。
(2)上記の問題点の理由を調べ、解釈・検討し、それを他者に伝える。
(3)他者の意見に耳を傾け、場合によっては自らの見解を修正しつつ、より正確で精緻な、説得力のある結論へと練り上げる。
言い換えれば(1)〜(3)のプロセスを通して、学生は問題発見、情報収集、解釈と分析と思考 、そして表現のスキルを磨いてゆきます。それが当演習の目標の一つです。
II. こうした探求の姿勢は、一つの事象の背景が決して単一で単純ではないことを、改めて気づかせてくれるはずです。その複雑さをときほぐすための、強靱かつ繊細な知力と感受性を身につけることも、当演習の目標となります。
III.「大学時代になにを学びましたか？」と聞かれたとき躊躇なく答えられることをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生は授業で浮かび上がった問題や、自分の経験を通して興味を抱いた事柄をテーマに選び、授業で獲得した方法論を使って、情報を取捨選択しながらゼミ論文を完成させ、プレゼンテーションを行います。プレゼンテーションでは自身のテーマについて発表するだけでなく、それについて受講生全員で考え、理解を深めるためのディスカッションを中心としたアクティビティを提供してもらいます。ゼミ論の執筆はもちろん一人で作業するだけではありません。随時論文の進行状況を報告しあいながら、学生同士の意見やアドバイスが活発に交差する機会を、授業内外で設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要の説明。自身の関心のあるトピックを共有しあいます。
第2回	講義＋表象分析（１）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第3回	講義＋表象分析（２）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第4回	講義＋表象分析（3）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第5回	ゼミ論合評会・ディスカッション（1）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第6回	ゼミ論合評会・ディスカッション（2）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第7回	ゼミ論合評会・ディスカッション（3）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第8回	ゼミ論合評会・ディスカッション（4） 春学期ゼミ論助走	ゼミ論とはなにか、テーマ設定、調査の方法、執筆の進め方などについて話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・ディスカッション（5） 春学期ゼミ論執筆（１）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・ディスカッション（6） 春学期ゼミ論執筆（２）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・ディスカッション（7） 春学期ゼミ論執筆（３）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・ディスカッション（8） 春学期ゼミ論執筆（４）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・ディスカッション（9） 春学期ゼミ論執筆（５）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	ゼミ論合評会・ディスカッション（10） 春学期の総括・反省 春学期ゼミ論執筆（6）	春学期ゼミの総括・反省を行います。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第1回	表象分析（１）	特定の表象作品（映画・音楽など）では、どんなテーマ設定が可能か検討します。
第2回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（1）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第3回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第4回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（３） 秋学期ゼミ論助走	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます
第5回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（４） 秋学期ゼミ論執筆（１）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第6回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（５） 秋学期ゼミ論執筆（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第7回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（６） 秋学期ゼミ論執筆（３）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

第8回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（7） 秋学期ゼミ論執筆（4）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（8） 秋学期ゼミ論執筆（5）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（9） 秋学期ゼミ論執筆（6）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（10） 秋学期ゼミ論執筆（7）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（11） 秋学期ゼミ論執筆（8）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（12） 秋学期ゼミ論執筆（9）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	秋学期の総括・反省 秋学期ゼミ論執筆（10）	秋学期ゼミの総括・反省を行います。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学生が翌週に向けて事前準備（題材を読む・観る・聞く・調べる）を行うことは、授業に参加するために不可欠です。準備の方法や範囲は、毎回具体的に指示します。春・秋学期のゼミ論作成には相応の時間と労力を費やすことになりますが、完成時の知的な満足感・充実感は学生時代の成果の一つとして、なにものにも換えられないはずです。また卒業してからも大きな自信となることでしょう。生成AIを使わなければ論文が書けない学生は受講をおすすめしません。本授業外の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
とくになし。主に論文、新聞、雑誌、ネット記事などの印刷物や映画・動画を使用します。

【参考書】
適宜、授業時間内に指示します。

【成績評価の方法と基準】
（1）発表(20%)
（2）レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度（20％）
（3）ゼミ論（40％）
（4）出席（20％）
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の希望を随時授業の内容や流れに反映し、受講者が主体的につくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
本授業ではGoogle Classroomを活用します。また各種マテリアルへのアクセスが必要な場合もあるので、パソコン、スマートフォンなどのディヴァイスを所持していることが望ましい。

【その他の重要事項】
（1）授業や授業準備を優先させられる
（2）向上心・知的好奇心が強い
（3）USAや特定の文化、あるいは文化全般に興味がある
（4）自分と人との違いを面白いと感じる
（5）生成AIに論文を執筆させない（自力で論文を書く）
– 以上の条件を満たす学生を望みます。また、学部SA先がアメリカ以外の学生や「嫌米」の学生も大歓迎です。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Through this course, students will be introduced to basic concepts and theories in order to understand various cultures, mainly those in the United States. Students are expected to develop an interest in the issues of ideology, power, everyday meaning-making and cultural practices. This course will explore different territories within the realm : popular culture and media studies, minority and subcultures, race, gender,etc. In addition, students will be learning and trying out various methods to find information, give presentations, write papers, cite sources, etc.
【到達目標（Learning Objectives）】
I. In this course, students will develop the following skills:
(1) The ability to find problems worthy of consideration from a single subject.
(2) The ability to investigate, interpret and examine the reasons for the above problems and communicate them to others.
(3) The ability to listen to the opinions of others, possibly revising their own views, and refine them into a more accurate, precise, and persuasive conclusion.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
It is essential for students to prepare in advance for the following week (reading, watching, listening, and researching the subject matter(s)) in order to participate in the class. This course will require students to complete about two hours of pre- and post-course study for each class.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
The following four aspects are the main targets of evaluation,which will be judged comprehensively.
(1) Personal presentation (20%)
(2) Completion of assignments such as essay plans and comment sheets for each session (2 0%)
(3) Seminar essay (40%)
(4) Contributions to each class (20%)
The above four aspects will be the main targets of evaluation and will be judged comprehensively.

ARSc400GA（地域研究（北アメリカ） / Area studies(North America) 400）

言語文化演習

遠藤　郁子

サブタイトル：アメリカの「なぜ」を考えよう
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は、ひとつの社会現象、問題、文化事象などに対してさまざまな角度から「なぜ」と問い続け、資料をもとにそれを分析します。与えられた情報を「事実」としてただ受け止めるのではなく、想像力を働かせ、柔軟な態度でそれを考察する能力を身に付けることが目的です。担当教員の専門領域がアメリカの文学・文化なので、アメリカに関する知見を深め、そもそも「アメリカ」とは何なのかを考えます。これらの作業を通じて、世界や日本について、また自分自身について知ることも演習の目的とします。
研究を通して自身の関心を深めつつ、授業では各学生の研究に関わる発表とアクティビティを通してゼミ生全員で様々なテーマについて話し合うことで広い視野を身に付けます。年に２本のゼミ論執筆と入念な発表準備を通して読む・書く・話すスキルの向上も目指します。

【到達目標】
I. この演習で学生は以下の力を身につけます。
(1) 一つの題材から、検討に値する問題点を見つけ出す。
(2)上記の問題点の理由を調べ、解釈・検討し、それを他者に伝える。
(3)他者の意見に耳を傾け、場合によっては自らの見解を修正しつつ、より正確で精緻な、説得力のある結論へと練り上げる。
言い換えれば(1)〜(3)のプロセスを通して、学生は問題発見、情報収集、解釈と分析と思考 、そして表現のスキルを磨いてゆきます。それが当演習の目標の一つです。
II. こうした探求の姿勢は、一つの事象の背景が決して単一で単純ではないことを、改めて気づかせてくれるはずです。その複雑さをときほぐすための、強靱かつ繊細な知力と感受性を身につけることも、当演習の目標となります。
III.「大学時代になにを学びましたか？」と聞かれたとき躊躇なく答えられることをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生は授業で浮かび上がった問題や、自分の経験を通して興味を抱いた事柄をテーマに選び、授業で獲得した方法論を使って、情報を取捨選択しながらゼミ論文を完成させ、プレゼンテーションを行います。プレゼンテーションでは自身のテーマについて発表するだけでなく、それについて受講生全員で考え、理解を深めるためのディスカッションを中心としたアクティビティを提供してもらいます。ゼミ論の執筆はもちろん一人で作業するだけではありません。随時論文の進行状況を報告しあいながら、学生同士の意見やアドバイスが活発に交差する機会を、授業内外で設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要の説明。自身の関心のあるトピックを共有しあいます。
第2回	講義＋表象分析（１）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第3回	講義＋表象分析（２）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第4回	講義＋表象分析（3）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第5回	ゼミ論合評会・ディスカッション（1）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第6回	ゼミ論合評会・ディスカッション（2）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第7回	ゼミ論合評会・ディスカッション（3）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第8回	ゼミ論合評会・ディスカッション（4） 春学期ゼミ論助走	ゼミ論とはなにか、テーマ設定、調査の方法、執筆の進め方などについて話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・ディスカッション（5） 春学期ゼミ論執筆（１）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・ディスカッション（6） 春学期ゼミ論執筆（２）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・ディスカッション（7） 春学期ゼミ論執筆（３）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・ディスカッション（8） 春学期ゼミ論執筆（４）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・ディスカッション（9） 春学期ゼミ論執筆（５）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	ゼミ論合評会・ディスカッション（10） 春学期の総括・反省 春学期ゼミ論執筆（6）	春学期ゼミの総括・反省を行います。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第1回	表象分析（１）	特定の表象作品（映画・音楽など）では、どんなテーマ設定が可能か検討します。
第2回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（1）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第3回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第4回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（３） 秋学期ゼミ論助走	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます
第5回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（４） 秋学期ゼミ論執筆（１）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第6回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（５） 秋学期ゼミ論執筆（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第7回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（６） 秋学期ゼミ論執筆（３）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

第8回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（7） 秋学期ゼミ論執筆（4）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（8） 秋学期ゼミ論執筆（5）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（9） 秋学期ゼミ論執筆（6）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（10） 秋学期ゼミ論執筆（7）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（11） 秋学期ゼミ論執筆（8）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（12） 秋学期ゼミ論執筆（9）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	秋学期の総括・反省 秋学期ゼミ論執筆（10）	秋学期ゼミの総括・反省を行います。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学生が翌週に向けて事前準備（題材を読む・観る・聞く・調べる）を行うことは、授業に参加するために不可欠です。準備の方法や範囲は、毎回具体的に指示します。春・秋学期のゼミ論作成には相応の時間と労力を費やすことになりますが、完成時の知的な満足感・充実感は学生時代の成果の一つとして、なにものにも換えられないはずです。また卒業してからも大きな自信となることでしょう。生成AIを使わなければ論文が書けない学生は受講をおすすめしません。本授業外の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
とくになし。主に論文、新聞、雑誌、ネット記事などの印刷物や映画・動画を使用します。

【参考書】
適宜、授業時間内に指示します。

【成績評価の方法と基準】
（1）発表(20%)
（2）レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度（20％）
（3）ゼミ論（40％）
（4）出席（20％）
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の希望を随時授業の内容や流れに反映し、受講者が主体的につくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
本授業ではGoogle Classroomを活用します。また各種マテリアルへのアクセスが必要な場合もあるので、パソコン、スマートフォンなどのディヴァイスを所持していることが望ましい。

【その他の重要事項】
（1）授業や授業準備を優先させられる
（2）向上心・知的好奇心が強い
（3）USAや特定の文化、あるいは文化全般に興味がある
（4）自分と人との違いを面白いと感じる
（5）生成AIに論文を執筆させない（自力で論文を書く）
– 以上の条件を満たす学生を望みます。また、学部SA先がアメリカ以外の学生や「嫌米」の学生も大歓迎です。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Through this course, students will be introduced to basic concepts and theories in order to understand various cultures, mainly those in the United States. Students are expected to develop an interest in the issues of ideology, power, everyday meaning-making and cultural practices. This course will explore different territories within the realm : popular culture and media studies, minority and subcultures, race, gender,etc. In addition, students will be learning and trying out various methods to find information, give presentations, write papers, cite sources, etc.
【到達目標（Learning Objectives）】
I. In this course, students will develop the following skills:
(1) The ability to find problems worthy of consideration from a single subject.
(2) The ability to investigate, interpret and examine the reasons for the above problems and communicate them to others.
(3) The ability to listen to the opinions of others, possibly revising their own views, and refine them into a more accurate, precise, and persuasive conclusion.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
It is essential for students to prepare in advance for the following week (reading, watching, listening, and researching the subject matter(s)) in order to participate in the class. This course will require students to complete about two hours of pre- and post-course study for each class.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
The following four aspects are the main targets of evaluation,which will be judged comprehensively.
(1) Personal presentation (20%)
(2) Completion of assignments such as essay plans and comment sheets for each session (2 0%)
(3) Seminar essay (40%)
(4) Contributions to each class (20%)
The above four aspects will be the main targets of evaluation and will be judged comprehensively.

ARSc400GA（地域研究（北アメリカ）/ Area studies(North America) 400）

言語文化演習

遠藤　郁子

サブタイトル：アメリカの「なぜ」を考えよう
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は、ひとつの社会現象、問題、文化事象などに対してさまざまな角度から「なぜ」と問い続け、資料をもとにそれを分析します。与えられた情報を「事実」としてただ受け止めるのではなく、想像力を働かせ、柔軟な態度でそれを考察する能力を身に付けることが目的です。担当教員の専門領域がアメリカの文学・文化なので、アメリカに関する知見を深め、そもそも「アメリカ」とは何なのかを考えます。これらの作業を通じて、世界や日本について、また自分自身について知ることも演習の目的とします。
研究を通して自身の関心を深めつつ、授業では各学生の研究に関わる発表とアクティビティを通してゼミ生全員で様々なテーマについて話し合うことで広い視野を身に付けます。年に２本のゼミ論執筆と入念な発表準備を通して読む・書く・話すスキルの向上も目指します。

【到達目標】
I. この演習で学生は以下の力を身につけます。
(1) 一つの題材から、検討に値する問題点を見つけ出す。
(2)上記の問題点の理由を調べ、解釈・検討し、それを他者に伝える。
(3)他者の意見に耳を傾け、場合によっては自らの見解を修正しつつ、より正確で精緻な、説得力のある結論へと練り上げる。
言い換えれば(1)〜(3)のプロセスを通して、学生は問題発見、情報収集、解釈と分析と思考 、そして表現のスキルを磨いてゆきます。それが当演習の目標の一つです。
II. こうした探求の姿勢は、一つの事象の背景が決して単一で単純ではないことを、改めて気づかせてくれるはずです。その複雑さをときほぐすための、強靱かつ繊細な知力と感受性を身につけることも、当演習の目標となります。
III.「大学時代になにを学びましたか？」と聞かれたとき躊躇なく答えられることをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生は授業で浮かび上がった問題や、自分の経験を通して興味を抱いた事柄をテーマに選び、授業で獲得した方法論を使って、情報を取捨選択しながらゼミ論文を完成させ、プレゼンテーションを行います。プレゼンテーションでは自身のテーマについて発表するだけでなく、それについて受講生全員で考え、理解を深めるためのディスカッションを中心としたアクティビティを提供してもらいます。ゼミ論の執筆はもちろん一人で作業するだけではありません。随時論文の進行状況を報告しあいながら、学生同士の意見やアドバイスが活発に交差する機会を、授業内外で設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要の説明。自身の関心のあるトピックを共有しあいます。
第2回	講義＋表象分析（１）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第3回	講義＋表象分析（２）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第4回	講義＋表象分析（3）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第5回	ゼミ論合評会・ディスカッション（1）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第6回	ゼミ論合評会・ディスカッション（2）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第7回	ゼミ論合評会・ディスカッション（3）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第8回	ゼミ論合評会・ディスカッション（4） 春学期ゼミ論助走	ゼミ論とはなにか、テーマ設定、調査の方法、執筆の進め方などについて話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・ディスカッション（5） 春学期ゼミ論執筆（１）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・ディスカッション（6） 春学期ゼミ論執筆（２）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・ディスカッション（7） 春学期ゼミ論執筆（３）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・ディスカッション（8） 春学期ゼミ論執筆（４）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・ディスカッション（9） 春学期ゼミ論執筆（５）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	ゼミ論合評会・ディスカッション（10） 春学期の総括・反省 春学期ゼミ論執筆（6）	春学期ゼミの総括・反省を行います。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第1回	表象分析（１）	特定の表象作品（映画・音楽など）では、どんなテーマ設定が可能か検討します。
第2回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（1）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第3回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第4回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（３） 秋学期ゼミ論助走	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます
第5回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（４） 秋学期ゼミ論執筆（１）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第6回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（５） 秋学期ゼミ論執筆（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第7回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（６） 秋学期ゼミ論執筆（３）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

第8回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（7） 秋学期ゼミ論執筆（4）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（8） 秋学期ゼミ論執筆（5）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（9） 秋学期ゼミ論執筆（6）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（10） 秋学期ゼミ論執筆（7）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（11） 秋学期ゼミ論執筆（8）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（12） 秋学期ゼミ論執筆（9）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	秋学期の総括・反省 秋学期ゼミ論執筆（10）	秋学期ゼミの総括・反省を行います。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学生が翌週に向けて事前準備（題材を読む・観る・聞く・調べる）を行うことは、授業に参加するために不可欠です。準備の方法や範囲は、毎回具体的に指示します。春・秋学期のゼミ論作成には相応の時間と労力を費やすことになりますが、完成時の知的な満足感・充実感は学生時代の成果の一つとして、なにものにも換えられないはずです。また卒業してからも大きな自信となることでしょう。生成AIを使わなければ論文が書けない学生は受講をおすすめしません。本授業外の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
とくになし。主に論文、新聞、雑誌、ネット記事などの印刷物や映画・動画を使用します。

【参考書】
適宜、授業時間内に指示します。

【成績評価の方法と基準】
（1）発表(20%)
（2）レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度（20％）
（3）ゼミ論（40％）
（4）出席（20％）
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の希望を随時授業の内容や流れに反映し、受講者が主体的につくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
本授業ではGoogle Classroomを活用します。また各種マテリアルへのアクセスが必要な場合もあるので、パソコン、スマートフォンなどのディヴァイスを所持していることが望ましい。

【その他の重要事項】
（1）授業や授業準備を優先させられる
（2）向上心・知的好奇心が強い
（3）USAや特定の文化、あるいは文化全般に興味がある
（4）自分と人との違いを面白いと感じる
（5）生成AIに論文を執筆させない（自力で論文を書く）
– 以上の条件を満たす学生を望みます。また、学部SA先がアメリカ以外の学生や「嫌米」の学生も大歓迎です。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Through this course, students will be introduced to basic concepts and theories in order to understand various cultures, mainly those in the United States. Students are expected to develop an interest in the issues of ideology, power, everyday meaning-making and cultural practices. This course will explore different territories within the realm : popular culture and media studies, minority and subcultures, race, gender,etc. In addition, students will be learning and trying out various methods to find information, give presentations, write papers, cite sources, etc.
【到達目標（Learning Objectives）】
I. In this course, students will develop the following skills:
(1) The ability to find problems worthy of consideration from a single subject.
(2) The ability to investigate, interpret and examine the reasons for the above problems and communicate them to others.
(3) The ability to listen to the opinions of others, possibly revising their own views, and refine them into a more accurate, precise, and persuasive conclusion.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
It is essential for students to prepare in advance for the following week (reading, watching, listening, and researching the subject matter(s)) in order to participate in the class. This course will require students to complete about two hours of pre- and post-course study for each class.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
The following four aspects are the main targets of evaluation,which will be judged comprehensively.
(1) Personal presentation (20%)
(2) Completion of assignments such as essay plans and comment sheets for each session (2 0%)
(3) Seminar essay (40%)
(4) Contributions to each class (20%)
The above four aspects will be the main targets of evaluation and will be judged comprehensively.

ARSc400GA（地域研究（北アメリカ） / Area studies(North America) 400）

言語文化演習

遠藤　郁子

サブタイトル：アメリカの「なぜ」を考えよう
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は、ひとつの社会現象、問題、文化事象などに対してさまざまな角度から「なぜ」と問い続け、資料をもとにそれを分析します。与えられた情報を「事実」としてただ受け止めるのではなく、想像力を働かせ、柔軟な態度でそれを考察する能力を身に付けることが目的です。担当教員の専門領域がアメリカの文学・文化なので、アメリカに関する知見を深め、そもそも「アメリカ」とは何なのかを考えます。これらの作業を通じて、世界や日本について、また自分自身について知ることも演習の目的とします。
研究を通して自身の関心を深めつつ、授業では各学生の研究に関わる発表とアクティビティを通してゼミ生全員で様々なテーマについて話し合うことで広い視野を身に付けます。年に２本のゼミ論執筆と入念な発表準備を通して読む・書く・話すスキルの向上も目指します。

【到達目標】
I. この演習で学生は以下の力を身につけます。
(1) 一つの題材から、検討に値する問題点を見つけ出す。
(2)上記の問題点の理由を調べ、解釈・検討し、それを他者に伝える。
(3)他者の意見に耳を傾け、場合によっては自らの見解を修正しつつ、より正確で精緻な、説得力のある結論へと練り上げる。
言い換えれば(1)〜(3)のプロセスを通して、学生は問題発見、情報収集、解釈と分析と思考 、そして表現のスキルを磨いてゆきます。それが当演習の目標の一つです。
II. こうした探求の姿勢は、一つの事象の背景が決して単一で単純ではないことを、改めて気づかせてくれるはずです。その複雑さをときほぐすための、強靱かつ繊細な知力と感受性を身につけることも、当演習の目標となります。
III.「大学時代になにを学びましたか？」と聞かれたとき躊躇なく答えられることをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生は授業で浮かび上がった問題や、自分の経験を通して興味を抱いた事柄をテーマに選び、授業で獲得した方法論を使って、情報を取捨選択しながらゼミ論文を完成させ、プレゼンテーションを行います。プレゼンテーションでは自身のテーマについて発表するだけでなく、それについて受講生全員で考え、理解を深めるためのディスカッションを中心としたアクティビティを提供してもらいます。ゼミ論の執筆はもちろん一人で作業するだけではありません。随時論文の進行状況を報告しあいながら、学生同士の意見やアドバイスが活発に交差する機会を、授業内外で設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要の説明。自身の関心のあるトピックを共有しあいます。
第2回	講義＋表象分析（１）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第3回	講義＋表象分析（２）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第4回	講義＋表象分析（3）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第5回	ゼミ論合評会・ディスカッション（1）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第6回	ゼミ論合評会・ディスカッション（2）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第7回	ゼミ論合評会・ディスカッション（3）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第8回	ゼミ論合評会・ディスカッション（4） 春学期ゼミ論助走	ゼミ論とはなにか、テーマ設定、調査の方法、執筆の進め方などについて話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・ディスカッション（5） 春学期ゼミ論執筆（１）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・ディスカッション（6） 春学期ゼミ論執筆（２）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・ディスカッション（7） 春学期ゼミ論執筆（３）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・ディスカッション（8） 春学期ゼミ論執筆（４）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・ディスカッション（9） 春学期ゼミ論執筆（５）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	ゼミ論合評会・ディスカッション（10） 春学期の総括・反省 春学期ゼミ論執筆（6）	春学期ゼミの総括・反省を行います。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第1回	表象分析（１）	特定の表象作品（映画・音楽など）では、どんなテーマ設定が可能か検討します。
第2回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（1）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第3回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第4回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（３） 秋学期ゼミ論助走	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます
第5回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（４） 秋学期ゼミ論執筆（１）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第6回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（５） 秋学期ゼミ論執筆（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第7回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（６） 秋学期ゼミ論執筆（３）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

第8回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（7） 秋学期ゼミ論執筆（4）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（8） 秋学期ゼミ論執筆（5）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（9） 秋学期ゼミ論執筆（6）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（10） 秋学期ゼミ論執筆（7）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（11） 秋学期ゼミ論執筆（8）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（12） 秋学期ゼミ論執筆（9）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	秋学期の総括・反省 秋学期ゼミ論執筆（10）	秋学期ゼミの総括・反省を行います。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学生が翌週に向けて事前準備（題材を読む・観る・聞く・調べる）を行うことは、授業に参加するために不可欠です。準備の方法や範囲は、毎回具体的に指示します。春・秋学期のゼミ論作成には相応の時間と労力を費やすことになりますが、完成時の知的な満足感・充実感は学生時代の成果の一つとして、なにものにも換えられないはずです。また卒業してからも大きな自信となることでしょう。生成AIを使わなければ論文が書けない学生は受講をおすすめしません。本授業外の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
とくになし。主に論文、新聞、雑誌、ネット記事などの印刷物や映画・動画を使用します。

【参考書】
適宜、授業時間内に指示します。

【成績評価の方法と基準】
（1）発表(20%)
（2）レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度（20％）
（3）ゼミ論（40％）
（4）出席（20％）
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の希望を随時授業の内容や流れに反映し、受講者が主体的につくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
本授業ではGoogle Classroomを活用します。また各種マテリアルへのアクセスが必要な場合もあるので、パソコン、スマートフォンなどのディヴァイスを所持していることが望ましい。

【その他の重要事項】
（1）授業や授業準備を優先させられる
（2）向上心・知的好奇心が強い
（3）USAや特定の文化、あるいは文化全般に興味がある
（4）自分と人との違いを面白いと感じる
（5）生成AIに論文を執筆させない（自力で論文を書く）
– 以上の条件を満たす学生を望みます。また、学部SA先がアメリカ以外の学生や「嫌米」の学生も大歓迎です。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Through this course, students will be introduced to basic concepts and theories in order to understand various cultures, mainly those in the United States. Students are expected to develop an interest in the issues of ideology, power, everyday meaning-making and cultural practices. This course will explore different territories within the realm : popular culture and media studies, minority and subcultures, race, gender,etc. In addition, students will be learning and trying out various methods to find information, give presentations, write papers, cite sources, etc.
【到達目標（Learning Objectives）】
I. In this course, students will develop the following skills:
(1) The ability to find problems worthy of consideration from a single subject.
(2) The ability to investigate, interpret and examine the reasons for the above problems and communicate them to others.
(3) The ability to listen to the opinions of others, possibly revising their own views, and refine them into a more accurate, precise, and persuasive conclusion.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
It is essential for students to prepare in advance for the following week (reading, watching, listening, and researching the subject matter(s)) in order to participate in the class. This course will require students to complete about two hours of pre- and post-course study for each class.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
The following four aspects are the main targets of evaluation,which will be judged comprehensively.
(1) Personal presentation (20%)
(2) Completion of assignments such as essay plans and comment sheets for each session (2 0%)
(3) Seminar essay (40%)
(4) Contributions to each class (20%)
The above four aspects will be the main targets of evaluation and will be judged comprehensively.

ARSc400GA（地域研究（北アメリカ） / Area studies(North America) 400）

言語文化演習

遠藤　郁子

サブタイトル：アメリカの「なぜ」を考えよう
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は、ひとつの社会現象、問題、文化事象などに対してさまざまな角度から「なぜ」と問い続け、資料をもとにそれを分析します。与えられた情報を「事実」としてただ受け止めるのではなく、想像力を働かせ、柔軟な態度でそれを考察する能力を身に付けることが目的です。担当教員の専門領域がアメリカの文学・文化なので、アメリカに関する知見を深め、そもそも「アメリカ」とは何なのかを考えます。これらの作業を通じて、世界や日本について、また自分自身について知ることも演習の目的とします。
研究を通して自身の関心を深めつつ、授業では各学生の研究に関わる発表とアクティビティを通してゼミ生全員で様々なテーマについて話し合うことで広い視野を身に付けます。年に２本のゼミ論執筆と入念な発表準備を通して読む・書く・話すスキルの向上も目指します。

【到達目標】
I. この演習で学生は以下の力を身につけます。
(1) 一つの題材から、検討に値する問題点を見つけ出す。
(2)上記の問題点の理由を調べ、解釈・検討し、それを他者に伝える。
(3)他者の意見に耳を傾け、場合によっては自らの見解を修正しつつ、より正確で精緻な、説得力のある結論へと練り上げる。
言い換えれば(1)〜(3)のプロセスを通して、学生は問題発見、情報収集、解釈と分析と思考 、そして表現のスキルを磨いてゆきます。それが当演習の目標の一つです。
II. こうした探求の姿勢は、一つの事象の背景が決して単一で単純ではないことを、改めて気づかせてくれるはずです。その複雑さをときほぐすための、強靱かつ繊細な知力と感受性を身につけることも、当演習の目標となります。
III.「大学時代になにを学びましたか？」と聞かれたとき躊躇なく答えられることをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生は授業で浮かび上がった問題や、自分の経験を通して興味を抱いた事柄をテーマに選び、授業で獲得した方法論を使って、情報を取捨選択しながらゼミ論文を完成させ、プレゼンテーションを行います。プレゼンテーションでは自身のテーマについて発表するだけでなく、それについて受講生全員で考え、理解を深めるためのディスカッションを中心としたアクティビティを提供してもらいます。ゼミ論の執筆はもちろん一人で作業するだけではありません。随時論文の進行状況を報告しあいながら、学生同士の意見やアドバイスが活発に交差する機会を、授業内外で設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要の説明。自身の関心のあるトピックを共有しあいます。
第2回	講義＋表象分析（１）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第3回	講義＋表象分析（２）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第4回	講義＋表象分析（3）	教員による論文の執筆に関する講義を受け、特定の表象作品（映画・音楽など）においてどのような論文を書きうるのか検討します。
第5回	ゼミ論合評会・ディスカッション（1）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第6回	ゼミ論合評会・ディスカッション（2）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第7回	ゼミ論合評会・ディスカッション（3）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第8回	ゼミ論合評会・ディスカッション（4） 春学期ゼミ論助走	ゼミ論とはなにか、テーマ設定、調査の方法、執筆の進め方などについて話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・ディスカッション（5） 春学期ゼミ論執筆（１）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・ディスカッション（6） 春学期ゼミ論執筆（２）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・ディスカッション（7） 春学期ゼミ論執筆（３）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・ディスカッション（8） 春学期ゼミ論執筆（４）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・ディスカッション（9） 春学期ゼミ論執筆（５）	４年次生の前学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、発表者がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	ゼミ論合評会・ディスカッション（10） 春学期の総括・反省 春学期ゼミ論執筆（6）	春学期ゼミの総括・反省を行います。また、春学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第1回	表象分析（１）	特定の表象作品（映画・音楽など）では、どんなテーマ設定が可能か検討します。
第2回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（1）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第3回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。
第4回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（３） 秋学期ゼミ論助走	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます
第5回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（４） 秋学期ゼミ論執筆（１）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第6回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（５） 秋学期ゼミ論執筆（２）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第7回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（６） 秋学期ゼミ論執筆（３）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった３・４年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

第8回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（7） 秋学期ゼミ論執筆（4）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第9回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（8） 秋学期ゼミ論執筆（5）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第10回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（9） 秋学期ゼミ論執筆（6）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第11回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（10） 秋学期ゼミ論執筆（7）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第12回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（11） 秋学期ゼミ論執筆（8）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第13回	ゼミ論合評会・共同発表・ディスカッション（12） 秋学期ゼミ論執筆（9）	ゼミ生の春学期ゼミ論をあらかじめ読み、概要を執筆者が発表。その後、ペアになった3・4年生がプロジェクトを用意し、全員で作業に取り組みます。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。
第14回	秋学期の総括・反省 秋学期ゼミ論執筆（10）	秋学期ゼミの総括・反省を行います。また、秋学期のゼミ論の進捗状況について話し合います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学生が翌週に向けて事前準備（題材を読む・観る・聞く・調べる）を行うことは、授業に参加するために不可欠です。準備の方法や範囲は、毎回具体的に指示します。春・秋学期のゼミ論作成には相応の時間と労力を費やすことになりますが、完成時の知的な満足感・充実感は学生時代の成果の一つとして、なにものにも換えられないはずです。また卒業してからも大きな自信となることでしょう。生成AIを使わなければ論文が書けない学生は受講をおすすめしません。本授業外の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
とくになし。主に論文、新聞、雑誌、ネット記事などの印刷物や映画・動画を使用します。

【参考書】
適宜、授業時間内に指示します。

【成績評価の方法と基準】
（1）発表(20%)
（2）レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度（20％）
（3）ゼミ論（40％）
（4）出席（20％）
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の希望を随時授業の内容や流れに反映し、受講者が主体的につくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
本授業ではGoogle Classroomを活用します。また各種マテリアルへのアクセスが必要な場合もあるので、パソコン、スマートフォンなどのディヴァイスを所持していることが望ましい。

【その他の重要事項】
（1）授業や授業準備を優先させられる
（2）向上心・知的好奇心が強い
（3）USAや特定の文化、あるいは文化全般に興味がある
（4）自分と人との違いを面白いと感じる
（5）生成AIに論文を執筆させない（自力で論文を書く）
– 以上の条件を満たす学生を望みます。また、学部SA先がアメリカ以外の学生や「嫌米」の学生も大歓迎です。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
Through this course, students will be introduced to basic concepts and theories in order to understand various cultures, mainly those in the United States. Students are expected to develop an interest in the issues of ideology, power, everyday meaning-making and cultural practices. This course will explore different territories within the realm : popular culture and media studies, minority and subcultures, race, gender,etc. In addition, students will be learning and trying out various methods to find information, give presentations, write papers, cite sources, etc.
【到達目標（Learning Objectives）】
I. In this course, students will develop the following skills:
(1) The ability to find problems worthy of consideration from a single subject.
(2) The ability to investigate, interpret and examine the reasons for the above problems and communicate them to others.
(3) The ability to listen to the opinions of others, possibly revising their own views, and refine them into a more accurate, precise, and persuasive conclusion.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
It is essential for students to prepare in advance for the following week (reading, watching, listening, and researching the subject matter(s)) in order to participate in the class. This course will require students to complete about two hours of pre- and post-course study for each class.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
The following four aspects are the main targets of evaluation,which will be judged comprehensively.
(1) Personal presentation (20%)
(2) Completion of assignments such as essay plans and comment sheets for each session (2 0%)
(3) Seminar essay (40%)
(4) Contributions to each class (20%)
The above four aspects will be the main targets of evaluation and will be judged comprehensively.

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

廣松　勲

サブタイトル：フランコフォニーの言語文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では「フランコフォニー（＝フランス語圏）」の言語や文化を総合的に分析・検討することで、世界に散在するフランス語・フランス文化の多様性と共通性を考察します。それにより、フランコフォニーに留まらず、文化接触や文化的差異の調整を理解する際の分析手法を身につけることを目的とします。
2026年度は、主にフランス本国とマグレブ地域（特にアルジェリア）のフランコフォニーに関連する書籍・論文・映像作品などを読解・視聴し、検討します。
「フランス」や「フランス的なもの」に関心があれば、フランス語の言語能力などの前提知識は必要としません。

【到達目標】
到達目標は、大きく分けて2つあります。
①フランス語・フランス文化は、「フランス共和国」の言語文化を超えて「フランコフォニー」の言語文化へと拡張を遂げつつあります。この観点から、各地域において、どのような方法によって多文化・他文化との共生の道を探っているのかを説明できる。
②文化間の「調整」も視野に入れつつ、異文化コミュニケーション（文化接触や文化的差異）を考察する際に、自らの分析方法を確りと意識して、分析・考察に取り組むことができる。
これらの目標に到達するために、学生はフランコフォニー地域における文化現象を一つ選択し、同時に分析手法を身に着けます。調査・分析・考察の結果は、レジュメ発表や中間発表に加えて、最終的にレポートや卒業論文などの形にまとめます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本演習は原則として対面で行います。ただ、大学の行動方針レベルにより一時的に変更などがある場合には、詳細を学習支援システムで伝達します。
本演習では、学生の人数・関心に鑑みて、以下のような形で演習を進めます。
≪春学期について≫
テクストや映像を丁寧に読み込む方法を知るため、主に演習形式（レジュメ発表と討議）で進めます。邦訳・字幕版の存在する代表的なフランコフォニーの文献・映像、それらに関するエッセイなどを分析対象とします。
最初の数回は講義形式で行い、参加学生と対話しながら、フランコフォニーの言語文化を読解する際の「方法論」や「レジュメの作成方法」などを説明します。「講読」においては、担当の学生がレジュメ発表し（何がどのように描かれているか？ など）、その上で問題提起とゼミ全体での討議を行います（なぜそのように描かれているのか？ など）。
春学期の最後には、個人研究のテーマや分析方法を決定する際のヒントを見つけるべく、学習内容についてレポートを提出してもらいます。
≪秋学期について≫
前半では、講読形式を継続する予定です。後半では、各自が自らの関心・問題意識から個人研究の口頭発表を行い、全員で討議を行います。
秋学期末には、個人研究の成果をレポートや論文などの形で提出してもらいます。
≪リアクション・ペーパーについて≫
演習内で触れられなかった疑問や意見、演習運営上の希望があれば、リアクション・ペーパーで提出してもらいます。その内容については、翌週の演習で検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・本演習の内容および参加方法を説明 ・「フランコフォニー（フランス語圏）」とは何か？ ・春学期の講読分担を決定
2	Ⅰ．方法論の概説、レジュメ作成方法・問題提起の仕方の確認	・文献読解の方法を概説する。テクストや映像を対象とした「テクスト分析」や「社会学的分析」を中心に論じる。 ・講読で必要となる「レジュメ」等の作成方法や「レポート」の書き方・構成方法等を解説 ・研究テーマ、関心などを抽出する方法を学ぶ
3	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第一部、第二部）を講読する。
4	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第三部、第四部）を講読する。
5	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・『バティモン5：望まれざる者』を見る ・個人研究のテーマなどを探る。
6	Ⅲ．フランス共和国と移民	・フランス共和国の歴史・文化を概説 ・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（序章〜第2章）を講読する。
7	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第3章〜第4章）を講読する。
8	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第5章〜第6章）を講読する。
9	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（終章）を講読する。 ・映画『憎しみ』を見る
10	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第1章と第2章）を講読する。
11	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第3章と第4章）を講読する。
12	個人発表①	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第1部）を見る
13	個人発表②	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第2部）を見る
14	まとめ	・春学期のまとめ ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討 ・映画『移民の記憶』（第3部）を見る
15	イントロダクション	・秋学期の演習内容と参加方法を確認 ・秋学期の講読分担を決める
16	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・マグレブのフランコフォニーに関して概説 ・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（はじめに〜第1部）を講読
17	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第2部〜第3部）を講読
18	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第4部〜第5部）を講読 ・『パピチャ』を見る
19	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅰ〜Ⅲ）を講読
20	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅳ〜Ⅴ）を講読
21	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅵ〜Ⅷ+エピローグ）を講読 ・『デリダ、異郷から』を見る
22	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第1部）を講読
23	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第2部）を講読
24	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第1楽章と第2楽章）を講読
25	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表①	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第3楽章と第4楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表
26	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表②	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第4楽章、第5楽章、最終楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表

27	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表③	・個人発表の総確認 ・『裸足になって』を見る
28	まとめ	・秋学期、および一年間のまとめ ・卒論完成版の内容発表 ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。主に以下の2点です。
≪準備学習に関して≫
レジュメ作成担当の学生は「要旨」と「問題提起」を切り分けて提示してください。担当ではない学生も積極的に討議に参加できるように、早めに全学生に資料を共有してください。
≪情報収集に関して≫
フランコフォニー社会の言語・文化・社会等について、できるだけ情報収集するように心掛けてほしいです。

【テキスト（教科書）】
講読文献について、参考文献とともに、初回において一覧を配布する予定です。ただ、学生との相談で、講読文献・映像を追加・変更する場合があります。
適宜、その他の資料を配布します（紙媒体またはHoppii上にて）。

【参考書】
・参考文献に関しては、講読文献とともに、初回の演習において一覧を配布します。希望者には、さらに詳しい参考文献・映像等を提示します。
・「フランコフォニー国際組織　OIF」のサイト（https://www.francophonie.org/）も参考になります。
・毎年3月20日の「国際フランコフォニーの日」の前後には、東京日仏学院や日仏学院において様々な催し物が開催されます。

【成績評価の方法と基準】
以下の項目を見て、総合的に評価します。
①平常点（リアクションペーパーの提出、質疑参加など）：30％
②講読発表・個人発表：30％
③学期末ごとのレポート：40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
例年通り、文献講読の際に必要なレジュメ作成や問題提起の仕方については、春学期最初の授業だけでなく、適宜解説を行います。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
フランス語の知識（＝語学能力）は要求しません。
講読や個人研究を進める上で疑問点などがあれば、廣松研究室（BT2008）での個人面談やオンライン面談、メール相談などにて話し合うことができます。

【Outline (in English)】
This course deals with the problematics of the French-speaking world (la francophonie) around the world while reading a variety of books and articles (principally written in japanese). It also enhances understanding of the situation of french language or national identity in the relevant countries or regions.For this year 2026, we will deal with the France as a immigrant nation and the postcolonial situation of Maghrebi culture.
The goals of this course are to understanding and explaining the socio-cultural situation of each French speaking regions.
Before and after each class meeting,students will be expected to spend four hours to read the relevant chapter(s) from the text.
Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, presentations: 30%, term-end reports: 40%.

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

廣松　勲

サブタイトル：フランコフォニーの言語文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では「フランコフォニー（＝フランス語圏）」の言語や文化を総合的に分析・検討することで、世界に散在するフランス語・フランス文化の多様性と共通性を考察します。それにより、フランコフォニーに留まらず、文化接触や文化的差異の調整を理解する際の分析手法を身につけることを目的とします。
2026年度は、主にフランス本国とマグレブ地域（特にアルジェリア）のフランコフォニーに関連する書籍・論文・映像作品などを読解・視聴し、検討します。
「フランス」や「フランス的なもの」に関心があれば、フランス語の言語能力などの前提知識は必要としません。

【到達目標】
到達目標は、大きく分けて2つあります。
①フランス語・フランス文化は、「フランス共和国」の言語文化を超えて「フランコフォニー」の言語文化へと拡張を遂げつつあります。この観点から、各地域において、どのような方法によって多文化・他文化との共生の道を探っているのかを説明できる。
②文化間の「調整」も視野に入れつつ、異文化コミュニケーション（文化接触や文化的差異）を考察する際に、自らの分析方法を確りと意識して、分析・考察に取り組むことができる。
これらの目標に到達するために、学生はフランコフォニー地域における文化現象を一つ選択し、同時に分析手法を身に着けます。調査・分析・考察の結果は、レジュメ発表や中間発表に加えて、最終的にレポートや卒業論文などの形にまとめます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本演習は原則として対面で行います。ただ、大学の行動方針レベルにより一時的に変更などがある場合には、詳細を学習支援システムで伝達します。
本演習では、学生の人数・関心に鑑みて、以下のような形で演習を進めます。
≪春学期について≫
テクストや映像を丁寧に読み込む方法を知るため、主に演習形式（レジュメ発表と討議）で進めます。邦訳・字幕版の存在する代表的なフランコフォニーの文献・映像、それらに関するエッセイなどを分析対象とします。
最初の数回は講義形式で行い、参加学生と対話しながら、フランコフォニーの言語文化を読解する際の「方法論」や「レジュメの作成方法」などを説明します。「講読」においては、担当の学生がレジュメ発表し（何がどのように描かれているか？ など）、その上で問題提起とゼミ全体での討議を行います（なぜそのように描かれているのか？ など）。
春学期の最後には、個人研究のテーマや分析方法を決定する際のヒントを見つけるべく、学習内容についてレポートを提出してもらいます。
≪秋学期について≫
前半では、講読形式を継続する予定です。後半では、各自が自らの関心・問題意識から個人研究の口頭発表を行い、全員で討議を行います。
秋学期末には、個人研究の成果をレポートや論文などの形で提出してもらいます。
≪リアクション・ペーパーについて≫
演習内で触れられなかった疑問や意見、演習運営上の希望があれば、リアクション・ペーパーで提出してもらいます。その内容については、翌週の演習で検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・本演習の内容および参加方法を説明 ・「フランコフォニー（フランス語圏）」とは何か？ ・春学期の講読分担を決定
2	Ⅰ．方法論の概説、レジュメ作成方法・問題提起の仕方の確認	・文献読解の方法を概説する。テクストや映像を対象とした「テクスト分析」や「社会学的分析」を中心に論じる。 ・講読で必要となる「レジュメ」等の作成方法や「レポート」の書き方・構成方法等を解説 ・研究テーマ、関心などを抽出する方法を学ぶ
3	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第一部、第二部）を講読する。
4	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第三部、第四部）を講読する。
5	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・『バティモン5：望まれざる者』を見る ・個人研究のテーマなどを探る。
6	Ⅲ．フランス共和国と移民	・フランス共和国の歴史・文化を概説 ・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（序章〜第2章）を講読する。
7	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第3章〜第4章）を講読する。
8	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第5章〜第6章）を講読する。
9	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（終章）を講読する。 ・映画『憎しみ』を見る
10	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第1章と第2章）を講読する。
11	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第3章と第4章）を講読する。
12	個人発表①	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第1部）を見る
13	個人発表②	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第2部）を見る
14	まとめ	・春学期のまとめ ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討 ・映画『移民の記憶』（第3部）を見る
15	イントロダクション	・秋学期の演習内容と参加方法を確認 ・秋学期の講読分担を決める
16	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・マグレブのフランコフォニーに関して概説 ・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（はじめに〜第1部）を講読
17	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第2部〜第3部）を講読
18	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第4部〜第5部）を講読 ・『パピチャ』を見る
19	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅰ〜Ⅲ）を講読
20	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅳ〜Ⅴ）を講読
21	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅵ〜Ⅷ+エピローグ）を講読 ・『デリダ、異郷から』を見る
22	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第1部）を講読
23	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第2部）を講読
24	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第1楽章と第2楽章）を講読
25	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表①	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第3楽章と第4楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表
26	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表②	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第4楽章、第5楽章、最終楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表

27	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表③	・個人発表の総確認 ・『裸足になって』を見る
28	まとめ	・秋学期、および一年間のまとめ ・卒論完成版の内容発表 ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。主に以下の2点です。
≪準備学習に関して≫
レジュメ作成担当の学生は「要旨」と「問題提起」を切り分けて提示してください。担当ではない学生も積極的に討議に参加できるように、早めに全学生に資料を共有してください。
≪情報収集に関して≫
フランコフォニー社会の言語・文化・社会等について、できるだけ情報収集するように心掛けてほしいです。

【テキスト（教科書）】
講読文献について、参考文献とともに、初回において一覧を配布する予定です。ただ、学生との相談で、講読文献・映像を追加・変更する場合があります。
適宜、その他の資料を配布します（紙媒体またはHoppii上にて）。

【参考書】
・参考文献に関しては、講読文献とともに、初回の演習において一覧を配布します。希望者には、さらに詳しい参考文献・映像等を提示します。
・「フランコフォニー国際組織　OIF」のサイト（https://www.francophonie.org/）も参考になります。
・毎年3月20日の「国際フランコフォニーの日」の前後には、東京日仏学院や日仏学院において様々な催し物が開催されます。

【成績評価の方法と基準】
以下の項目を見て、総合的に評価します。
①平常点（リアクションペーパーの提出、質疑参加など）：30％
②講読発表・個人発表：30％
③学期末ごとのレポート：40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
例年通り、文献講読の際に必要なレジュメ作成や問題提起の仕方については、春学期最初の授業だけでなく、適宜解説を行います。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
フランス語の知識（＝語学能力）は要求しません。
講読や個人研究を進める上で疑問点などがあれば、廣松研究室（BT2008）での個人面談やオンライン面談、メール相談などにて話し合うことができます。

【Outline (in English)】
This course deals with the problematics of the French-speaking world (la francophonie) around the world while reading a variety of books and articles (principally written in japanese). It also enhances understanding of the situation of french language or national identity in the relevant countries or regions.For this year 2026, we will deal with the France as a immigrant nation and the postcolonial situation of Maghrebi culture.
The goals of this course are to understanding and explaining the socio-cultural situation of each French speaking regions.
Before and after each class meeting,students will be expected to spend four hours to read the relevant chapter(s) from the text.
Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, presentations: 30%, term-end reports: 40%.

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

廣松　勲

サブタイトル：フランコフォニーの言語文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では「フランコフォニー（＝フランス語圏）」の言語や文化を総合的に分析・検討することで、世界に散在するフランス語・フランス文化の多様性と共通性を考察します。それにより、フランコフォニーに留まらず、文化接触や文化的差異の調整を理解する際の分析手法を身につけることを目的とします。
2026年度は、主にフランス本国とマグレブ地域（特にアルジェリア）のフランコフォニーに関連する書籍・論文・映像作品などを読解・視聴し、検討します。
「フランス」や「フランス的なもの」に関心があれば、フランス語の言語能力などの前提知識は必要としません。

【到達目標】
到達目標は、大きく分けて2つあります。
①フランス語・フランス文化は、「フランス共和国」の言語文化を超えて「フランコフォニー」の言語文化へと拡張を遂げつつあります。この観点から、各地域において、どのような方法によって多文化・他文化との共生の道を探っているのかを説明できる。
②文化間の「調整」も視野に入れつつ、異文化コミュニケーション（文化接触や文化的差異）を考察する際に、自らの分析方法を確りと意識して、分析・考察に取り組むことができる。
これらの目標に到達するために、学生はフランコフォニー地域における文化現象を一つ選択し、同時に分析手法を身に着けます。調査・分析・考察の結果は、レジュメ発表や中間発表に加えて、最終的にレポートや卒業論文などの形にまとめます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本演習は原則として対面で行います。ただ、大学の行動方針レベルにより一時的に変更などがある場合には、詳細を学習支援システムで伝達します。
本演習では、学生の人数・関心に鑑みて、以下のような形で演習を進めます。
≪春学期について≫
テクストや映像を丁寧に読み込む方法を知るため、主に演習形式（レジュメ発表と討議）で進めます。邦訳・字幕版の存在する代表的なフランコフォニーの文献・映像、それらに関するエッセイなどを分析対象とします。
最初の数回は講義形式で行い、参加学生と対話しながら、フランコフォニーの言語文化を読解する際の「方法論」や「レジュメの作成方法」などを説明します。「講読」においては、担当の学生がレジュメ発表し（何がどのように描かれているか？ など）、その上で問題提起とゼミ全体での討議を行います（なぜそのように描かれているのか？ など）。
春学期の最後には、個人研究のテーマや分析方法を決定する際のヒントを見つけるべく、学習内容についてレポートを提出してもらいます。
≪秋学期について≫
前半では、講読形式を継続する予定です。後半では、各自が自らの関心・問題意識から個人研究の口頭発表を行い、全員で討議を行います。
秋学期末には、個人研究の成果をレポートや論文などの形で提出してもらいます。
≪リアクション・ペーパーについて≫
演習内で触れられなかった疑問や意見、演習運営上の希望があれば、リアクション・ペーパーで提出してもらいます。その内容については、翌週の演習で検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・本演習の内容および参加方法を説明 ・「フランコフォニー（フランス語圏）」とは何か？ ・春学期の講読分担を決定
2	Ⅰ．方法論の概説、レジュメ作成方法・問題提起の仕方の確認	・文献読解の方法を概説する。テクストや映像を対象とした「テクスト分析」や「社会学的分析」を中心に論じる。 ・講読で必要となる「レジュメ」等の作成方法や「レポート」の書き方・構成方法等を解説 ・研究テーマ、関心などを抽出する方法を学ぶ
3	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第一部、第二部）を講読する。
4	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第三部、第四部）を講読する。
5	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・『バティモン5：望まれざる者』を見る ・個人研究のテーマなどを探る。
6	Ⅲ．フランス共和国と移民	・フランス共和国の歴史・文化を概説 ・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（序章〜第2章）を講読する。
7	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第3章〜第4章）を講読する。
8	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第5章〜第6章）を講読する。
9	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（終章）を講読する。 ・映画『憎しみ』を見る
10	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第1章と第2章）を講読する。
11	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第3章と第4章）を講読する。
12	個人発表①	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第1部）を見る
13	個人発表②	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第2部）を見る
14	まとめ	・春学期のまとめ ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討 ・映画『移民の記憶』（第3部）を見る
15	イントロダクション	・秋学期の演習内容と参加方法を確認 ・秋学期の講読分担を決める
16	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・マグレブのフランコフォニーに関して概説 ・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（はじめに〜第1部）を講読
17	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第2部〜第3部）を講読
18	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第4部〜第5部）を講読 ・『パピチャ』を見る
19	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅰ〜Ⅲ）を講読
20	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅳ〜Ⅴ）を講読
21	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅵ〜Ⅷ+エピローグ）を講読 ・『デリダ、異郷から』を見る
22	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第1部）を講読
23	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第2部）を講読
24	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第1楽章と第2楽章）を講読
25	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表①	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第3楽章と第4楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表
26	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表②	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第4楽章、第5楽章、最終楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表

27	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表③	・個人発表の総確認 ・『裸足になって』を見る
28	まとめ	・秋学期、および一年間のまとめ ・卒論完成版の内容発表 ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。主に以下の2点です。
≪準備学習に関して≫
レジュメ作成担当の学生は「要旨」と「問題提起」を切り分けて提示してください。担当ではない学生も積極的に討議に参加できるように、早めに全学生に資料を共有してください。
≪情報収集に関して≫
フランコフォニー社会の言語・文化・社会等について、できるだけ情報収集するように心掛けてほしいです。

【テキスト（教科書）】
講読文献について、参考文献とともに、初回において一覧を配布する予定です。ただ、学生との相談で、講読文献・映像を追加・変更する場合があります。
適宜、その他の資料を配布します（紙媒体またはHoppii上にて）。

【参考書】
・参考文献に関しては、講読文献とともに、初回の演習において一覧を配布します。希望者には、さらに詳しい参考文献・映像等を提示します。
・「フランコフォニー国際組織　OIF」のサイト（https://www.francophonie.org/）も参考になります。
・毎年3月20日の「国際フランコフォニーの日」の前後には、東京日仏学院や日仏学院において様々な催し物が開催されます。

【成績評価の方法と基準】
以下の項目を見て、総合的に評価します。
①平常点（リアクションペーパーの提出、質疑参加など）：30％
②講読発表・個人発表：30％
③学期末ごとのレポート：40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
例年通り、文献講読の際に必要なレジュメ作成や問題提起の仕方については、春学期最初の授業だけでなく、適宜解説を行います。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
フランス語の知識（＝語学能力）は要求しません。
講読や個人研究を進める上で疑問点などがあれば、廣松研究室（BT2008）での個人面談やオンライン面談、メール相談などにて話し合うことができます。

【Outline (in English)】
This course deals with the problematics of the French-speaking world (la francophonie) around the world while reading a variety of books and articles (principally written in japanese). It also enhances understanding of the situation of french language or national identity in the relevant countries or regions.For this year 2026, we will deal with the France as a immigrant nation and the postcolonial situation of Maghrebi culture.
The goals of this course are to understanding and explaining the socio-cultural situation of each French speaking regions.
Before and after each class meeting,students will be expected to spend four hours to read the relevant chapter(s) from the text.
Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, presentations: 30%, term-end reports: 40%.

ARSx400GA（地域研究（その他） / Area studies(Others) 400）

言語文化演習

廣松　勲

サブタイトル：フランコフォニーの言語文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では「フランコフォニー（＝フランス語圏）」の言語や文化を総合的に分析・検討することで、世界に散在するフランス語・フランス文化の多様性と共通性を考察します。それにより、フランコフォニーに留まらず、文化接触や文化的差異の調整を理解する際の分析手法を身につけることを目的とします。
2026年度は、主にフランス本国とマグレブ地域（特にアルジェリア）のフランコフォニーに関連する書籍・論文・映像作品などを読解・視聴し、検討します。
「フランス」や「フランス的なもの」に関心があれば、フランス語の言語能力などの前提知識は必要としません。

【到達目標】
到達目標は、大きく分けて2つあります。
①フランス語・フランス文化は、「フランス共和国」の言語文化を超えて「フランコフォニー」の言語文化へと拡張を遂げつつあります。この観点から、各地域において、どのような方法によって多文化・他文化との共生の道を探っているのかを説明できる。
②文化間の「調整」も視野に入れつつ、異文化コミュニケーション（文化接触や文化的差異）を考察する際に、自らの分析方法を確りと意識して、分析・考察に取り組むことができる。
これらの目標に到達するために、学生はフランコフォニー地域における文化現象を一つ選択し、同時に分析手法を身に着けます。調査・分析・考察の結果は、レジュメ発表や中間発表に加えて、最終的にレポートや卒業論文などの形にまとめます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本演習は原則として対面で行います。ただ、大学の行動方針レベルにより一時的に変更などがある場合には、詳細を学習支援システムで伝達します。
本演習では、学生の人数・関心に鑑みて、以下のような形で演習を進めます。
≪春学期について≫
テクストや映像を丁寧に読み込む方法を知るため、主に演習形式（レジュメ発表と討議）で進めます。邦訳・字幕版の存在する代表的なフランコフォニーの文献・映像、それらに関するエッセイなどを分析対象とします。
最初の数回は講義形式で行い、参加学生と対話しながら、フランコフォニーの言語文化を読解する際の「方法論」や「レジュメの作成方法」などを説明します。「講読」においては、担当の学生がレジュメ発表し（何がどのように描かれているか？ など）、その上で問題提起とゼミ全体での討議を行います（なぜそのように描かれているのか？ など）。
春学期の最後には、個人研究のテーマや分析方法を決定する際のヒントを見つけるべく、学習内容についてレポートを提出してもらいます。
≪秋学期について≫
前半では、講読形式を継続する予定です。後半では、各自が自らの関心・問題意識から個人研究の口頭発表を行い、全員で討議を行います。
秋学期末には、個人研究の成果をレポートや論文などの形で提出してもらいます。
≪リアクション・ペーパーについて≫
演習内で触れられなかった疑問や意見、演習運営上の希望があれば、リアクション・ペーパーで提出してもらいます。その内容については、翌週の演習で検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・本演習の内容および参加方法を説明 ・「フランコフォニー（フランス語圏）」とは何か？ ・春学期の講読分担を決定
2	Ⅰ．方法論の概説、レジュメ作成方法・問題提起の仕方の確認	・文献読解の方法を概説する。テクストや映像を対象とした「テクスト分析」や「社会学的分析」を中心に論じる。 ・講読で必要となる「レジュメ」等の作成方法や「レポート」の書き方・構成方法等を解説 ・研究テーマ、関心などを抽出する方法を学ぶ
3	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第一部、第二部）を講読する。
4	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・グザヴィエ・ヤコノ著『フランス植民地帝国の歴史』（第三部、第四部）を講読する。
5	Ⅱ．フランス植民地帝国の歴史を知る	・『バティモン5：望まれざる者』を見る ・個人研究のテーマなどを探る。
6	Ⅲ．フランス共和国と移民	・フランス共和国の歴史・文化を概説 ・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（序章〜第2章）を講読する。
7	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第3章〜第4章）を講読する。
8	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（第5章〜第6章）を講読する。
9	Ⅲ．フランス共和国と移民	・森千香子著『排除と抵抗の郊外』（終章）を講読する。 ・映画『憎しみ』を見る
10	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第1章と第2章）を講読する。
11	Ⅲ．フランス共和国と移民	・E・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』（第3章と第4章）を講読する。
12	個人発表①	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第1部）を見る
13	個人発表②	・各自のテーマについて、どのように研究したいかについて発表 ・映画『移民の記憶』（第2部）を見る
14	まとめ	・春学期のまとめ ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討 ・映画『移民の記憶』（第3部）を見る
15	イントロダクション	・秋学期の演習内容と参加方法を確認 ・秋学期の講読分担を決める
16	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・マグレブのフランコフォニーに関して概説 ・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（はじめに〜第1部）を講読
17	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第2部〜第3部）を講読
18	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・C・R・アージュロンの『アルジェリア近現代史』（第4部〜第5部）を講読 ・『パピチャ』を見る
19	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅰ〜Ⅲ）を講読
20	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅳ〜Ⅴ）を講読
21	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・J・デリダの『他者の単一言語使用』（Ⅵ〜Ⅷ+エピローグ）を講読 ・『デリダ、異郷から』を見る
22	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第1部）を講読
23	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第2部）を講読
24	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア）	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第1楽章と第2楽章）を講読
25	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表①	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第3楽章と第4楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表
26	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表②	・A・ジェバールの『愛、ファンタジア』（第3部の第4楽章、第5楽章、最終楽章）を講読 ・個人研究の成果を発表

27	Ⅳ．マグレブの言語文化（アルジェリア） 個人発表③	・個人発表の総確認 ・『裸足になって』を見る
28	まとめ	・秋学期、および一年間のまとめ ・卒論完成版の内容発表 ・研究テーマの発展方法や調査分析について検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。主に以下の2点です。
≪準備学習に関して≫
レジュメ作成担当の学生は「要旨」と「問題提起」を切り分けて提示してください。担当ではない学生も積極的に討議に参加できるように、早めに全学生に資料を共有してください。
≪情報収集に関して≫
フランコフォニー社会の言語・文化・社会等について、できるだけ情報収集するように心掛けてほしいです。

【テキスト（教科書）】
講読文献について、参考文献とともに、初回において一覧を配布する予定です。ただ、学生との相談で、講読文献・映像を追加・変更する場合があります。
適宜、その他の資料を配布します（紙媒体またはHoppii上にて）。

【参考書】
・参考文献に関しては、講読文献とともに、初回の演習において一覧を配布します。希望者には、さらに詳しい参考文献・映像等を提示します。
・「フランコフォニー国際組織　OIF」のサイト（https://www.francophonie.org/）も参考になります。
・毎年3月20日の「国際フランコフォニーの日」の前後には、東京日仏学院や日仏学院において様々な催し物が開催されます。

【成績評価の方法と基準】
以下の項目を見て、総合的に評価します。
①平常点（リアクションペーパーの提出、質疑参加など）：30％
②講読発表・個人発表：30％
③学期末ごとのレポート：40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
例年通り、文献講読の際に必要なレジュメ作成や問題提起の仕方については、春学期最初の授業だけでなく、適宜解説を行います。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
フランス語の知識（＝語学能力）は要求しません。
講読や個人研究を進める上で疑問点などがあれば、廣松研究室（BT2008）での個人面談やオンライン面談、メール相談などにて話し合うことができます。

【Outline (in English)】
This course deals with the problematics of the French-speaking world (la francophonie) around the world while reading a variety of books and articles (principally written in japanese). It also enhances understanding of the situation of french language or national identity in the relevant countries or regions.For this year 2026, we will deal with the France as a immigrant nation and the postcolonial situation of Maghrebi culture.
The goals of this course are to understanding and explaining the socio-cultural situation of each French speaking regions.
Before and after each class meeting,students will be expected to spend four hours to read the relevant chapter(s) from the text.
Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, presentations: 30%, term-end reports: 40%.

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

岩下　弘史

サブタイトル：比較文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較文化とは、時代や場所、ジャンルを越えて関係を持つ複数の文化について考える学問です。本演習ではなかでも文学（翻訳）や哲学・思想、歴史、映画、テレビドラマを射程に入れています。
こうした文化についての研究は役に立たない、文系の学問は意味がないという声もあるようですが、それは本当でしょうか。春学期にはまずこうした大きな問いについて中心的に考えていきたいと思っています。そのために一緒に読んでいく文献の候補は、戸田山和久『教養の書』、吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』、アラン・ソーカル『「知」の欺瞞――ポストモダン思想における科学の濫用』、ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』、C・P・スノー『二つの文化と科学革命』、ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』などです。
このようにして、文化について学ぶことの意義を共有したうえで、秋学期には、それぞれの関心に応じて知識を深めていってもらいます。その際には自分の思考を明確にする方法、さらにそれを相手に分かりやすく伝える方法などについても学んでいきます。

【到達目標】
0. なぜ文化的なことを研究するのかという問いに意識的になる。
1. 適切な先行研究の収集や文献を丁寧に読みこむなど研究に必要な基礎的スキルを学ぶ。
2. 個人研究の発表やそれについてのディスカッションを通じて、自らの意見を的確に伝えられるようになる。論理的な議論ができるようになる。わからないことをわからないままにせず、なるべく明晰に語れるようになる。
3. 自身の関心から出発し、先行研究を踏まえたうえで自説を発展させ、最終的にはそれについて構造を持った論文が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、講義形式と演習形式の併用によって進められます。発表やディスカッションへの参加は義務です。
課題等の提出・フィードバックは学習支援システムHoppiiを通じておこないます。
なお大学の行動方針レベルによってはオンラインでおこなうこともありますが、その際の詳細は学習支援システムHoppiiでお伝えいたします。
また受講者数が定員を超過する場合は別途指定する課題をもとに選抜をおこないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	各自が関心をもつトピックの紹介（自己紹介を兼ねる）、授業の進め方の確認
2	イントロダクション	文献や資料探索の方法、発表資料作成方法や発表の仕方など基礎事項の確認
3	比較文化基礎文献講読(1)	基礎文献を読みディスカッションを行う(1)
4	比較文化基礎文献講読(2)	基礎文献を読みディスカッションを行う(2)
5	比較文化基礎文献講読(3)	基礎文献を読みディスカッションを行う(3)
6	比較文化基礎文献講読(4)	基礎文献を読みディスカッションを行う(4)
7	比較文化基礎文献講読(5)	基礎文献を読みディスカッションを行う(5)
8	比較文化基礎文献講読(6)	基礎文献を読みディスカッションを行う(6)
9	個人的関心のプレゼンテーション（1）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（1）
10	個人的関心のプレゼンテーション（2）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（2）
11	個人的関心のプレゼンテーション（3）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（3）
12	個人的関心のプレゼンテーション（4）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（4）
13	個人的関心のプレゼンテーション（5）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（5）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ
1	イントロダクション	秋学期の方針の確認
2	論文の書き方について	論理的な文章とは何か、先行研究とはどのように向き合うべきかなどについての説明
3	グループワーク(1)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(1)
4	グループワーク(2)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(2)
5	グループワーク(3)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(3)
6	グループワーク(4)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(4)
7	グループワーク(5)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(5)
8	個人研究発表(1)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（1）
9	個人研究発表(2)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（2）
10	個人研究発表(3)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（3）
11	個人研究発表(4)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（4）
12	個人研究発表(5)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（5）
13	個人研究発表(6)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（6）
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題図書や映像等がある場合は確認してから授業に出席する。また毎回の授業で配布するプリントは必ず復習する必要がある。本授業の予習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
決まった教科書は用いませんが、各授業でプリントを配布します。

【参考書】
・異文化理解
青木保『多文化世界』岩波新書、2003年
稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版会、2000年
・比較文学・比較文化
佐々木英昭編『異文化への視線―新しい比較文学のために』名古屋大学出版会、1996年
土屋勝彦編『越境する文学』水声社、2009年
松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』世界思想社、1995年
・日本人論、日本文化論
船曳健夫『「日本人論」再考』講談社学術文庫、2010年
大久保喬樹『日本文化論の系譜―『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書、2003年
・教養について
戸田山和久『教養の書』（筑摩書房、2020年）

竹内洋『教養主義の没落』（中央公論新社、2003年）
吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社、2016年）
その他一次文献多数。

【成績評価の方法と基準】
発表・発言などの平常点(40%)および提出レポート(60%)。各学期欠席が4回以上の場合は、原則として単位修得を認めない。
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help the students to acquire basic academic skills and have better understanding of "culture". The participants are expected to be actively involved in class.
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant text. Required study time is at least two hours. In addition, after each class, students will be expected to spend reviewing the class content at least two hours to fully understand it.
Overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end paper: 60%, In-class contribution: 40%

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

岩下　弘史

サブタイトル：比較文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較文化とは、時代や場所、ジャンルを越えて関係を持つ複数の文化について考える学問です。本演習ではなかでも文学（翻訳）や哲学・思想、歴史、映画、テレビドラマを射程に入れています。
こうした文化についての研究は役に立たない、文系の学問は意味がないという声もあるようですが、それは本当でしょうか。春学期にはまずこうした大きな問いについて中心的に考えていきたいと思っています。そのために一緒に読んでいく文献の候補は、戸田山和久『教養の書』、吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』、アラン・ソーカル『「知」の欺瞞――ポストモダン思想における科学の濫用』、ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』、C・P・スノー『二つの文化と科学革命』、ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』などです。
このようにして、文化について学ぶことの意義を共有したうえで、秋学期には、それぞれの関心に応じて知識を深めていってもらいます。その際には自分の思考を明確にする方法、さらにそれを相手に分かりやすく伝える方法などについても学んでいきます。

【到達目標】
0. なぜ文化的なことを研究するのかという問いに意識的になる。
1. 適切な先行研究の収集や文献を丁寧に読みこむなど研究に必要な基礎的スキルを学ぶ。
2. 個人研究の発表やそれについてのディスカッションを通じて、自らの意見を的確に伝えられるようになる。論理的な議論ができるようになる。わからないことをわからないままにせず、なるべく明晰に語れるようになる。
3. 自身の関心から出発し、先行研究を踏まえたうえで自説を発展させ、最終的にはそれについて構造を持った論文が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、講義形式と演習形式の併用によって進められます。発表やディスカッションへの参加は義務です。
課題等の提出・フィードバックは学習支援システムHoppiiを通じておこないます。
なお大学の行動方針レベルによってはオンラインでおこなうこともありますが、その際の詳細は学習支援システムHoppiiでお伝えいたします。
また受講者数が定員を超過する場合は別途指定する課題をもとに選抜をおこないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	各自が関心をもつトピックの紹介（自己紹介を兼ねる）、授業の進め方の確認
2	イントロダクション	文献や資料探索の方法、発表資料作成方法や発表の仕方など基礎事項の確認
3	比較文化基礎文献講読(1)	基礎文献を読みディスカッションを行う(1)
4	比較文化基礎文献講読(2)	基礎文献を読みディスカッションを行う(2)
5	比較文化基礎文献講読(3)	基礎文献を読みディスカッションを行う(3)
6	比較文化基礎文献講読(4)	基礎文献を読みディスカッションを行う(4)
7	比較文化基礎文献講読(5)	基礎文献を読みディスカッションを行う(5)
8	比較文化基礎文献講読(6)	基礎文献を読みディスカッションを行う(6)
9	個人的関心のプレゼンテーション（1）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（1）
10	個人的関心のプレゼンテーション（2）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（2）
11	個人的関心のプレゼンテーション（3）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（3）
12	個人的関心のプレゼンテーション（4）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（4）
13	個人的関心のプレゼンテーション（5）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（5）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ
1	イントロダクション	秋学期の方針の確認
2	論文の書き方について	論理的な文章とは何か、先行研究とはどのように向き合うべきかなどについての説明
3	グループワーク(1)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(1)
4	グループワーク(2)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(2)
5	グループワーク(3)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(3)
6	グループワーク(4)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(4)
7	グループワーク(5)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(5)
8	個人研究発表(1)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（1）
9	個人研究発表(2)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（2）
10	個人研究発表(3)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（3）
11	個人研究発表(4)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（4）
12	個人研究発表(5)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（5）
13	個人研究発表(6)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（6）
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題図書や映像等がある場合は確認してから授業に出席する。また毎回の授業で配布するプリントは必ず復習する必要がある。本授業の予習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
決まった教科書は用いませんが、各授業でプリントを配布します。

【参考書】
・異文化理解
青木保『多文化世界』岩波新書、2003年
稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版会、2000年
・比較文学・比較文化
佐々木英昭編『異文化への視線―新しい比較文学のために』名古屋大学出版会、1996年
土屋勝彦編『越境する文学』水声社、2009年
松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』世界思想社、1995年
・日本人論、日本文化論
船曳健夫『「日本人論」再考』講談社学術文庫、2010年
大久保喬樹『日本文化論の系譜―『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書、2003年
・教養について
戸田山和久『教養の書』（筑摩書房、2020年）

竹内洋『教養主義の没落』（中央公論新社、2003年）
吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社、2016年）
その他一次文献多数。

【成績評価の方法と基準】
発表・発言などの平常点(40%)および提出レポート(60%)。各学期欠席が4回以上の場合は、原則として単位修得を認めない。
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help the students to acquire basic academic skills and have better understanding of "culture". The participants are expected to be actively involved in class.
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant text. Required study time is at least two hours. In addition, after each class, students will be expected to spend reviewing the class content at least two hours to fully understand it.
Overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end paper: 60%, In-class contribution: 40%

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

岩下　弘史

サブタイトル：比較文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較文化とは、時代や場所、ジャンルを越えて関係を持つ複数の文化について考える学問です。本演習ではなかでも文学（翻訳）や哲学・思想、歴史、映画、テレビドラマを射程に入れています。
こうした文化についての研究は役に立たない、文系の学問は意味がないという声もあるようですが、それは本当でしょうか。春学期にはまずこうした大きな問いについて中心的に考えていきたいと思っています。そのために一緒に読んでいく文献の候補は、戸田山和久『教養の書』、吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』、アラン・ソーカル『「知」の欺瞞――ポストモダン思想における科学の濫用』、ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』、C・P・スノー『二つの文化と科学革命』、ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』などです。
このようにして、文化について学ぶことの意義を共有したうえで、秋学期には、それぞれの関心に応じて知識を深めていってもらいます。その際には自分の思考を明確にする方法、さらにそれを相手に分かりやすく伝える方法などについても学んでいきます。

【到達目標】
0. なぜ文化的なことを研究するのかという問いに意識的になる。
1. 適切な先行研究の収集や文献を丁寧に読みこむなど研究に必要な基礎的スキルを学ぶ。
2. 個人研究の発表やそれについてのディスカッションを通じて、自らの意見を的確に伝えられるようになる。論理的な議論ができるようになる。わからないことをわからないままにせず、なるべく明晰に語れるようになる。
3. 自身の関心から出発し、先行研究を踏まえたうえで自説を発展させ、最終的にはそれについて構造を持った論文が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、講義形式と演習形式の併用によって進められます。発表やディスカッションへの参加は義務です。
課題等の提出・フィードバックは学習支援システムHoppiiを通じておこないます。
なお大学の行動方針レベルによってはオンラインでおこなうこともありますが、その際の詳細は学習支援システムHoppiiでお伝えいたします。
また受講者数が定員を超過する場合は別途指定する課題をもとに選抜をおこないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	各自が関心をもつトピックの紹介（自己紹介を兼ねる）、授業の進め方の確認
2	イントロダクション	文献や資料探索の方法、発表資料作成方法や発表の仕方など基礎事項の確認
3	比較文化基礎文献講読(1)	基礎文献を読みディスカッションを行う(1)
4	比較文化基礎文献講読(2)	基礎文献を読みディスカッションを行う(2)
5	比較文化基礎文献講読(3)	基礎文献を読みディスカッションを行う(3)
6	比較文化基礎文献講読(4)	基礎文献を読みディスカッションを行う(4)
7	比較文化基礎文献講読(5)	基礎文献を読みディスカッションを行う(5)
8	比較文化基礎文献講読(6)	基礎文献を読みディスカッションを行う(6)
9	個人的関心のプレゼンテーション（1）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（1）
10	個人的関心のプレゼンテーション（2）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（2）
11	個人的関心のプレゼンテーション（3）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（3）
12	個人的関心のプレゼンテーション（4）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（4）
13	個人的関心のプレゼンテーション（5）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（5）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ
1	イントロダクション	秋学期の方針の確認
2	論文の書き方について	論理的な文章とは何か、先行研究とはどのように向き合うべきかなどについての説明
3	グループワーク(1)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(1)
4	グループワーク(2)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(2)
5	グループワーク(3)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(3)
6	グループワーク(4)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(4)
7	グループワーク(5)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(5)
8	個人研究発表(1)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（1）
9	個人研究発表(2)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（2）
10	個人研究発表(3)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（3）
11	個人研究発表(4)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（4）
12	個人研究発表(5)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（5）
13	個人研究発表(6)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（6）
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題図書や映像等がある場合は確認してから授業に出席する。また毎回の授業で配布するプリントは必ず復習する必要がある。本授業の予習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
決まった教科書は用いませんが、各授業でプリントを配布します。

【参考書】
・異文化理解
青木保『多文化世界』岩波新書、2003年
稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版会、2000年
・比較文学・比較文化
佐々木英昭編『異文化への視線―新しい比較文学のために』名古屋大学出版会、1996年
土屋勝彦編『越境する文学』水声社、2009年
松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』世界思想社、1995年
・日本人論、日本文化論
船曳健夫『「日本人論」再考』講談社学術文庫、2010年
大久保喬樹『日本文化論の系譜―『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書、2003年
・教養について
戸田山和久『教養の書』（筑摩書房、2020年）

竹内洋『教養主義の没落』（中央公論新社、2003年）
吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社、2016年）
その他一次文献多数。

【成績評価の方法と基準】
発表・発言などの平常点(40%)および提出レポート(60%)。各学期欠席が4回以上の場合は、原則として単位修得を認めない。
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help the students to acquire basic academic skills and have better understanding of "culture". The participants are expected to be actively involved in class.
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant text. Required study time is at least two hours. In addition, after each class, students will be expected to spend reviewing the class content at least two hours to fully understand it.
Overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end paper: 60%, In-class contribution: 40%

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

岩下　弘史

サブタイトル：比較文化研究
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
比較文化とは、時代や場所、ジャンルを越えて関係を持つ複数の文化について考える学問です。本演習ではなかでも文学（翻訳）や哲学・思想、歴史、映画、テレビドラマを射程に入れています。
こうした文化についての研究は役に立たない、文系の学問は意味がないという声もあるようですが、それは本当でしょうか。春学期にはまずこうした大きな問いについて中心的に考えていきたいと思っています。そのために一緒に読んでいく文献の候補は、戸田山和久『教養の書』、吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』、アラン・ソーカル『「知」の欺瞞――ポストモダン思想における科学の濫用』、ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』、C・P・スノー『二つの文化と科学革命』、ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』などです。
このようにして、文化について学ぶことの意義を共有したうえで、秋学期には、それぞれの関心に応じて知識を深めていってもらいます。その際には自分の思考を明確にする方法、さらにそれを相手に分かりやすく伝える方法などについても学んでいきます。

【到達目標】
0. なぜ文化的なことを研究するのかという問いに意識的になる。
1. 適切な先行研究の収集や文献を丁寧に読みこむなど研究に必要な基礎的スキルを学ぶ。
2. 個人研究の発表やそれについてのディスカッションを通じて、自らの意見を的確に伝えられるようになる。論理的な議論ができるようになる。わからないことをわからないままにせず、なるべく明晰に語れるようになる。
3. 自身の関心から出発し、先行研究を踏まえたうえで自説を発展させ、最終的にはそれについて構造を持った論文が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、講義形式と演習形式の併用によって進められます。発表やディスカッションへの参加は義務です。
課題等の提出・フィードバックは学習支援システムHoppiiを通じておこないます。
なお大学の行動方針レベルによってはオンラインでおこなうこともありますが、その際の詳細は学習支援システムHoppiiでお伝えいたします。
また受講者数が定員を超過する場合は別途指定する課題をもとに選抜をおこないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	各自が関心をもつトピックの紹介（自己紹介を兼ねる）、授業の進め方の確認
2	イントロダクション	文献や資料探索の方法、発表資料作成方法や発表の仕方など基礎事項の確認
3	比較文化基礎文献講読(1)	基礎文献を読みディスカッションを行う(1)
4	比較文化基礎文献講読(2)	基礎文献を読みディスカッションを行う(2)
5	比較文化基礎文献講読(3)	基礎文献を読みディスカッションを行う(3)
6	比較文化基礎文献講読(4)	基礎文献を読みディスカッションを行う(4)
7	比較文化基礎文献講読(5)	基礎文献を読みディスカッションを行う(5)
8	比較文化基礎文献講読(6)	基礎文献を読みディスカッションを行う(6)
9	個人的関心のプレゼンテーション（1）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（1）
10	個人的関心のプレゼンテーション（2）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（2）
11	個人的関心のプレゼンテーション（3）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（3）
12	個人的関心のプレゼンテーション（4）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（4）
13	個人的関心のプレゼンテーション（5）	この段階で探究してみたいことについて紹介し、議論を通して、自身の関心を明確なものにする（5）
14	総括と反省	春学期の議論のまとめ
1	イントロダクション	秋学期の方針の確認
2	論文の書き方について	論理的な文章とは何か、先行研究とはどのように向き合うべきかなどについての説明
3	グループワーク(1)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(1)
4	グループワーク(2)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(2)
5	グループワーク(3)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(3)
6	グループワーク(4)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(4)
7	グループワーク(5)	基礎文献講読担当者の発表と、それについての全員によるディスカッション(5)
8	個人研究発表(1)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（1）
9	個人研究発表(2)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（2）
10	個人研究発表(3)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（3）
11	個人研究発表(4)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（4）
12	個人研究発表(5)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（5）
13	個人研究発表(6)	自身の関心とそれに関連する先行研究をまとめ、それについてのディスカッションを経て自身の問題を深める（6）
14	総括と反省	秋学期の議論のまとめ、来年度に向けての話し合い

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
課題図書や映像等がある場合は確認してから授業に出席する。また毎回の授業で配布するプリントは必ず復習する必要がある。本授業の予習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
決まった教科書は用いませんが、各授業でプリントを配布します。

【参考書】
・異文化理解
青木保『多文化世界』岩波新書、2003年
稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版会、2000年
・比較文学・比較文化
佐々木英昭編『異文化への視線―新しい比較文学のために』名古屋大学出版会、1996年
土屋勝彦編『越境する文学』水声社、2009年
松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』世界思想社、1995年
・日本人論、日本文化論
船曳健夫『「日本人論」再考』講談社学術文庫、2010年
大久保喬樹『日本文化論の系譜―『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書、2003年
・教養について
戸田山和久『教養の書』（筑摩書房、2020年）

竹内洋『教養主義の没落』（中央公論新社、2003年）
吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社、2016年）
その他一次文献多数。

【成績評価の方法と基準】
発表・発言などの平常点(40%)および提出レポート(60%)。各学期欠席が4回以上の場合は、原則として単位修得を認めない。
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help the students to acquire basic academic skills and have better understanding of "culture". The participants are expected to be actively involved in class.
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant text. Required study time is at least two hours. In addition, after each class, students will be expected to spend reviewing the class content at least two hours to fully understand it.
Overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end paper: 60%, In-class contribution: 40%

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

大野　ロベルト

サブタイトル：文学の世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文学は言葉の芸術である。時代を通じて、言葉は変化を続けている。また世界には様々な言語を用いる、様々な人々がいる。すなわち文学の世界は無限である。このゼミでは、古典から近代までの日本文学を足がかりに、海外の文学やあらゆる文化芸術にも積極的に目を向けながら、徹底的に言葉と戯れつつ、可能なかぎり広汎に文学の世界を逍遥したい。
本年度は、その生誕100年にあたることを記念し、三島由紀夫を「主人公」に設定して年間スケジュールを組み立てる。三島の生涯や作品に例をとりながら、春学期には①古典と近代文学、②外国文学と日本文学、③翻訳などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。夏季休暇の間に長編小説『金閣寺』を読了したうえで、秋学期には①文学のアダプテーション、②文学とメディア、③文学と社会などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。最終的には、世界の中の日本文学および日本語の特徴を俯瞰しつつ、あらためて三島由紀夫という存在の位置づけについて考えたい。また、年間を通じて文学研究の手法を理論と実践の双方から学び、履修者が個別に研究を進めるための準備を整えたい。

【到達目標】
文学を中心とする文化的な事象について、自身の考えを明確な言葉で他者に伝えることができるようになる。適切な文献調査に基づいた、論理的かつ論証的な論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式と講義形式を併用して授業を進める。基本的には、毎回の主題について教員が行う講義をきっかけに、学生によるディスカッションを行うが、学生各自にも学期ごとに少なくとも一度は発表を行ってもらい、それに基づくディスカッションやディベートも積み重ねてゆくことになる。レポートは夏休みに明けに1本、年度末に1本を提出してもらう。通年のゼミであるため、フィードバックは全体に対しても、個人的にも、随時行うことになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの進め方について説明し、自己紹介を行う。
2	三島入門	三島由紀夫について基本的な知識を得る。
3	古典と近代①	詩歌の歴史と変遷を学ぶ。
4	古典と近代②	散文の歴史と変遷を学ぶ。
5	古典と近代③	説話や能狂言について学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	外国文学と日本文学①	外国文学の受容について学ぶ。
8	外国文学と日本文学②	外国文学の影響について学ぶ。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と翻訳①	日本文学の外国語への翻訳について考える。
11	文学と翻訳②	外国文学の日本語への翻訳について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究に向けて	個別研究の計画発表。
14	春学期のまとめ	ふりかえりと課題説明、後期の内容について打ち合わせる。
1	イントロダクション	夏休みの成果を共有し、ゼミの進め方について説明する。
2	金閣寺①	『金閣寺』について各自の「読み」を共有する。
3	金閣寺②	『金閣寺』についての講義とディスカッション。
4	アダプテーション①	『金閣寺』のアダプテーションについて学ぶ。
5	アダプテーション②	三島作品におけるアダプテーションについて学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	文学とメディア①	文学とメディアの関係を考える。
8	文学とメディア②	三島とメディアの関係について考える。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と社会①	文学と社会の関係について考える。
11	文学と社会②	三島と社会の関係について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究	個別研究の成果を発表する。
14	秋学期のまとめ	ふりかえりと課題提出、来年度への展望を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の講義やディスカッションの出発点となるテクストを事前に精読し、作品の背景についても調べておくことが最低限の責務である。発表者はレジュメやパワーポイントの作成を怠らないこと。ディスカッションなどへの積極的な参加は必須である。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
授業中に折に触れて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点30％、通年の研究発表30％、レポート2本40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
海外の文化や言語に関心のある学生も歓迎したい。

【Outline (in English)】
This seminar encourages students to take a jouney to the vast world of literature. While we take into consideration all kinds of arts from different cultures and periods, Japanese literature, from classical to modern, will be the pivot.
The objective of this seminar is to acquire the set of skills necessary to convey, with clear language, one's idea about cultural issues, both orally and in writing.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 30 % participation, 30% presentation, and 40% written assignments. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

大野　ロベルト

サブタイトル：文学の世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文学は言葉の芸術である。時代を通じて、言葉は変化を続けている。また世界には様々な言語を用いる、様々な人々がいる。すなわち文学の世界は無限である。このゼミでは、古典から近代までの日本文学を足がかりに、海外の文学やあらゆる文化芸術にも積極的に目を向けながら、徹底的に言葉と戯れつつ、可能なかぎり広汎に文学の世界を逍遥したい。
本年度は、その生誕100年にあたることを記念し、三島由紀夫を「主人公」に設定して年間スケジュールを組み立てる。三島の生涯や作品に例をとりながら、春学期には①古典と近代文学、②外国文学と日本文学、③翻訳などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。夏季休暇の間に長編小説『金閣寺』を読了したうえで、秋学期には①文学のアダプテーション、②文学とメディア、③文学と社会などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。最終的には、世界の中の日本文学および日本語の特徴を俯瞰しつつ、あらためて三島由紀夫という存在の位置づけについて考えたい。また、年間を通じて文学研究の手法を理論と実践の双方から学び、履修者が個別に研究を進めるための準備を整えたい。

【到達目標】
文学を中心とする文化的な事象について、自身の考えを明確な言葉で他者に伝えることができるようになる。適切な文献調査に基づいた、論理的かつ論証的な論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式と講義形式を併用して授業を進める。基本的には、毎回の主題について教員が行う講義をきっかけに、学生によるディスカッションを行うが、学生各自にも学期ごとに少なくとも一度は発表を行ってもらい、それに基づくディスカッションやディベートも積み重ねてゆくことになる。レポートは夏休みに明けに1本、年度末に1本を提出してもらう。通年のゼミであるため、フィードバックは全体に対しても、個人的にも、随時行うことになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの進め方について説明し、自己紹介を行う。
2	三島入門	三島由紀夫について基本的な知識を得る。
3	古典と近代①	詩歌の歴史と変遷を学ぶ。
4	古典と近代②	散文の歴史と変遷を学ぶ。
5	古典と近代③	説話や能狂言について学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	外国文学と日本文学①	外国文学の受容について学ぶ。
8	外国文学と日本文学②	外国文学の影響について学ぶ。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と翻訳①	日本文学の外国語への翻訳について考える。
11	文学と翻訳②	外国文学の日本語への翻訳について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究に向けて	個別研究の計画発表。
14	春学期のまとめ	ふりかえりと課題説明、後期の内容について打ち合わせる。
1	イントロダクション	夏休みの成果を共有し、ゼミの進め方について説明する。
2	金閣寺①	『金閣寺』について各自の「読み」を共有する。
3	金閣寺②	『金閣寺』についての講義とディスカッション。
4	アダプテーション①	『金閣寺』のアダプテーションについて学ぶ。
5	アダプテーション②	三島作品におけるアダプテーションについて学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	文学とメディア①	文学とメディアの関係を考える。
8	文学とメディア②	三島とメディアの関係について考える。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と社会①	文学と社会の関係について考える。
11	文学と社会②	三島と社会の関係について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究	個別研究の成果を発表する。
14	秋学期のまとめ	ふりかえりと課題提出、来年度への展望を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の講義やディスカッションの出発点となるテクストを事前に精読し、作品の背景についても調べておくことが最低限の責務である。発表者はレジュメやパワーポイントの作成を怠らないこと。ディスカッションなどへの積極的な参加は必須である。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
授業中に折に触れて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点30％、通年の研究発表30％、レポート2本40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
海外の文化や言語に関心のある学生も歓迎したい。

【Outline (in English)】
This seminar encourages students to take a jouney to the vast world of literature. While we take into consideration all kinds of arts from different cultures and periods, Japanese literature, from classical to modern, will be the pivot.
The objective of this seminar is to acquire the set of skills necessary to convey, with clear language, one's idea about cultural issues, both orally and in writing.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 30 % participation, 30% presentation, and 40% written assignments. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

大野　ロベルト

サブタイトル：文学の世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文学は言葉の芸術である。時代を通じて、言葉は変化を続けている。また世界には様々な言語を用いる、様々な人々がいる。すなわち文学の世界は無限である。このゼミでは、古典から近代までの日本文学を足がかりに、海外の文学やあらゆる文化芸術にも積極的に目を向けながら、徹底的に言葉と戯れつつ、可能なかぎり広汎に文学の世界を逍遥したい。
本年度は、その生誕100年にあたることを記念し、三島由紀夫を「主人公」に設定して年間スケジュールを組み立てる。三島の生涯や作品に例をとりながら、春学期には①古典と近代文学、②外国文学と日本文学、③翻訳などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。夏季休暇の間に長編小説『金閣寺』を読了したうえで、秋学期には①文学のアダプテーション、②文学とメディア、③文学と社会などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。最終的には、世界の中の日本文学および日本語の特徴を俯瞰しつつ、あらためて三島由紀夫という存在の位置づけについて考えたい。また、年間を通じて文学研究の手法を理論と実践の双方から学び、履修者が個別に研究を進めるための準備を整えたい。

【到達目標】
文学を中心とする文化的な事象について、自身の考えを明確な言葉で他者に伝えることができるようになる。適切な文献調査に基づいた、論理的かつ論証的な論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式と講義形式を併用して授業を進める。基本的には、毎回の主題について教員が行う講義をきっかけに、学生によるディスカッションを行うが、学生各自にも学期ごとに少なくとも一度は発表を行ってもらい、それに基づくディスカッションやディベートも積み重ねてゆくことになる。レポートは夏休みに明けに1本、年度末に1本を提出してもらう。通年のゼミであるため、フィードバックは全体に対しても、個人的にも、随時行うことになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの進め方について説明し、自己紹介を行う。
2	三島入門	三島由紀夫について基本的な知識を得る。
3	古典と近代①	詩歌の歴史と変遷を学ぶ。
4	古典と近代②	散文の歴史と変遷を学ぶ。
5	古典と近代③	説話や能狂言について学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	外国文学と日本文学①	外国文学の受容について学ぶ。
8	外国文学と日本文学②	外国文学の影響について学ぶ。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と翻訳①	日本文学の外国語への翻訳について考える。
11	文学と翻訳②	外国文学の日本語への翻訳について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究に向けて	個別研究の計画発表。
14	春学期のまとめ	ふりかえりと課題説明、後期の内容について打ち合わせる。
1	イントロダクション	夏休みの成果を共有し、ゼミの進め方について説明する。
2	金閣寺①	『金閣寺』について各自の「読み」を共有する。
3	金閣寺②	『金閣寺』についての講義とディスカッション。
4	アダプテーション①	『金閣寺』のアダプテーションについて学ぶ。
5	アダプテーション②	三島作品におけるアダプテーションについて学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	文学とメディア①	文学とメディアの関係を考える。
8	文学とメディア②	三島とメディアの関係について考える。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と社会①	文学と社会の関係について考える。
11	文学と社会②	三島と社会の関係について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究	個別研究の成果を発表する。
14	秋学期のまとめ	ふりかえりと課題提出、来年度への展望を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の講義やディスカッションの出発点となるテクストを事前に精読し、作品の背景についても調べておくことが最低限の責務である。発表者はレジュメやパワーポイントの作成を怠らないこと。ディスカッションなどへの積極的な参加は必須である。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
授業中に折に触れて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点30％、通年の研究発表30％、レポート２本40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
海外の文化や言語に関心のある学生も歓迎したい。

【Outline (in English)】
This seminar encourages students to take a jouney to the vast world of literature. While we take into consideration all kinds of arts from different cultures and periods, Japanese literature, from classical to modern, will be the pivot.
The objective of this seminar is to acquire the set of skills necessary to convey, with clear language, one's idea about cultural issues, both orally and in writing.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 30 % participation, 30% presentation, and 40% written assignments. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIT400GA（文学 / Literature 400）

言語文化演習

大野　ロベルト

サブタイトル：文学の世界
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文学は言葉の芸術である。時代を通じて、言葉は変化を続けている。また世界には様々な言語を用いる、様々な人々がいる。すなわち文学の世界は無限である。このゼミでは、古典から近代までの日本文学を足がかりに、海外の文学やあらゆる文化芸術にも積極的に目を向けながら、徹底的に言葉と戯れつつ、可能なかぎり広汎に文学の世界を逍遥したい。
本年度は、その生誕100年にあたることを記念し、三島由紀夫を「主人公」に設定して年間スケジュールを組み立てる。三島の生涯や作品に例をとりながら、春学期には①古典と近代文学、②外国文学と日本文学、③翻訳などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。夏季休暇の間に長編小説『金閣寺』を読了したうえで、秋学期には①文学のアダプテーション、②文学とメディア、③文学と社会などの問題を中心にとりあげ、班ごとに課題作品を選んで発表およびディスカッションを行う。最終的には、世界の中の日本文学および日本語の特徴を俯瞰しつつ、あらためて三島由紀夫という存在の位置づけについて考えたい。また、年間を通じて文学研究の手法を理論と実践の双方から学び、履修者が個別に研究を進めるための準備を整えたい。

【到達目標】
文学を中心とする文化的な事象について、自身の考えを明確な言葉で他者に伝えることができるようになる。適切な文献調査に基づいた、論理的かつ論証的な論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式と講義形式を併用して授業を進める。基本的には、毎回の主題について教員が行う講義をきっかけに、学生によるディスカッションを行うが、学生各自にも学期ごとに少なくとも一度は発表を行ってもらい、それに基づくディスカッションやディベートも積み重ねてゆくことになる。レポートは夏休みに明けに1本、年度末に1本を提出してもらう。通年のゼミであるため、フィードバックは全体に対しても、個人的にも、随時行うことになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの進め方について説明し、自己紹介を行う。
2	三島入門	三島由紀夫について基本的な知識を得る。
3	古典と近代①	詩歌の歴史と変遷を学ぶ。
4	古典と近代②	散文の歴史と変遷を学ぶ。
5	古典と近代③	説話や能狂言について学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	外国文学と日本文学①	外国文学の受容について学ぶ。
8	外国文学と日本文学②	外国文学の影響について学ぶ。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と翻訳①	日本文学の外国語への翻訳について考える。
11	文学と翻訳②	外国文学の日本語への翻訳について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究に向けて	個別研究の計画発表。
14	春学期のまとめ	ふりかえりと課題説明、後期の内容について打ち合わせる。
1	イントロダクション	夏休みの成果を共有し、ゼミの進め方について説明する。
2	金閣寺①	『金閣寺』について各自の「読み」を共有する。
3	金閣寺②	『金閣寺』についての講義とディスカッション。
4	アダプテーション①	『金閣寺』のアダプテーションについて学ぶ。
5	アダプテーション②	三島作品におけるアダプテーションについて学ぶ。
6	発表①	課題作品についての発表とディスカッション。
7	文学とメディア①	文学とメディアの関係を考える。
8	文学とメディア②	三島とメディアの関係について考える。
9	発表②	課題作品についての発表とディスカッション。
10	文学と社会①	文学と社会の関係について考える。
11	文学と社会②	三島と社会の関係について考える。
12	発表③	課題作品についての発表とディスカッション。
13	個別研究	個別研究の成果を発表する。
14	秋学期のまとめ	ふりかえりと課題提出、来年度への展望を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の講義やディスカッションの出発点となるテクストを事前に精読し、作品の背景についても調べておくことが最低限の責務である。発表者はレジュメやパワーポイントの作成を怠らないこと。ディスカッションなどへの積極的な参加は必須である。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
授業中に折に触れて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点30％、通年の研究発表30％、レポート2本40％
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
海外の文化や言語に関心のある学生も歓迎したい。

【Outline (in English)】
This seminar encourages students to take a jouney to the vast world of literature. While we take into consideration all kinds of arts from different cultures and periods, Japanese literature, from classical to modern, will be the pivot.
The objective of this seminar is to acquire the set of skills necessary to convey, with clear language, one's idea about cultural issues, both orally and in writing.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 30 % participation, 30% presentation, and 40% written assignments. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

ARSi400GA（地域研究（アフリカ） / Area studies(Africa) 400）

国際社会演習

粟飯原　文子

サブタイトル：アフリカを学ぶ／アフリカに学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期 /Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんはアフリカについて何を知っていますか？ 何を連想するでしょう？ わたしたちが「知っている」アフリカとは、えてして、広大な大陸のごく一部を、ある特定の見方から切り取ったイメージでしかありません。アフリカとは実に50以上の独立国を含み、地域や社会や民族によって全く異なる言語、文化、慣習が存在する広大で豊かな場所。この演習では、そんな多様性豊かなアフリカのさまざまな時空間を「旅」することで、アフリカについて多角的に学んでいきます。アフリカについて学ぶことは、アフリカから学ぶことでもあり、わたしたちの思考法や物の見方が自然と変化を遂げていく経験となるでしょう。
また、この演習で学ぶことと平行して、あるいは、この演習で学ぶことからインスピレーションを受けて、他の旧植民地地域の歴史や文化にも関心を向けられるかもしれません。受講生個人の研究・発表のテーマは、アフリカに限らず、南アジアやカリブ海などの地域、人種差別や移民／難民などのテーマを対象とすることも可能です。

【到達目標】
・アフリカのさまざまな文化表現を通して、アフリカの多様性を理解し、かつアフリカの歴史・社会・政治に幅広く触れる。
・アフリカ（および旧植民地地域）について学び、考えることで、「世界史」への新しい視座を得る。
・批評・議論の力を発展させ、自主的な調査・研究の方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・アフリカの歴史、文化、社会に関する議論、学術論文などに触れる。
・担当者が問題提起を含む発表を行い、全体で討論を行う。または、全員が課題文献を読み問題意識や論点を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
・3年生の春学期の課題として、授業内で扱ったテーマか自分の関心にもとづいて1冊本を選び、レポートを作成する。また、秋学期の後半には全員に研究発表を行ってもらう。春学期同様、授業内で扱ったテーマから選んでもよいが、個人の関心や問題意識にもとづいて自由にテーマを設定することもできる。
・オフィスアワーなどを用いた個人面談で、課題(レポート、論文など)に対して指導、講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	春学期の演習の進め方について説明。自己紹介、関心のあるテーマを共有。
第2回	レポートと論文の書き方	発表やレジュメ作成の方法を学ぶ。レポートや論文の書き方について、疑問や不明な点を解消できるように基本事項を復習する。
第3回	アフリカを学ぶために①	わたしたちはどのようにアフリカにアプローチすべきか。まずは大陸の歴史を概観する。
第4回	アフリカを学ぶために②	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第5回	アフリカを学ぶために③	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第6回	映画から学ぶアフリカの現代史①	映画をより深く理解するために歴史的・政治的背景を学ぶ。
第7回	映画から学ぶアフリカの現代史②	映画を鑑賞してグループ・ディスカッションを行う。
第8回	ドキュメンタリー映画で学ぶアフリカ	関連する文献を読んだうえで映画を観て、グループ・ディスカッションをおこなう。
第9回	南アフリカ真実和解委員会①	南アフリカ共和国の真実和解委員会の取り組みについて学ぶ。まず南アの現代史を振り返る。
第10回	南アフリカ真実和解委員会②	南アの真実和解委員会について学ぶとともに、世界各地の「真実委員会」とも比較する。
第11回	南アフリカ真実和解委員会③	真実和解委員会について映画を通して理解を深める。
第12回	アフリカ文学とはなにか	アフリカ文学の基礎知識を身に着ける。
第13回	アフリカ文学を読む	アフリカ文学の代表作を読んで全体で議論をおこなう。
第14回	春学期のまとめ	レポートの提出。春学期で学んだことの復習、まとめ。
第1回	イントロダクション	秋学期の演習の進め方について説明。国際文化情報学会や後半に行う研究発表に関して意見を交換する。
第2回	アフリカ文学を読む① ナイジェリア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第3回	アフリカ文学を読む② ケニア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第4回	アフリカとLGBTQ＋	アフリカのLGBTQ＋の運動や表現を学ぶ。
第5回	アフリカとジェンダー	映画を観たうえで、ジェンダーの問題について議論を行う。
第6回	アフリカ音楽と政治・社会	アフリカの代表的なミュージシャンを通して、音楽の社会的・政治的役割とは何かを考える。
第7回	アフリカ音楽と解放闘争	アンゴラの現代音楽の歴史を概観し、解放闘争と音楽の関係について学ぶ。
第8回	パンアフリカニズムという夢	パンアフリカニズムの歴史、思想について、複数の文献を参照しながら理解を深める。
第9回	アフリカン・アートを学ぶ	アフリカの代表的なアーティストの作品に触れ、いくつかの批評分を読む。
第10回	研究発表①	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第11回	研究発表②	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第12回	研究発表③	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第13回	研究発表④	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第14回	秋学期のまとめ	秋学期のレポート、卒業研究の提出。秋学期で学んだことの復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・次週のための準備・予習は必ず行うこと。
・文献を読む場合、指名された担当者はレジュメを作成して発表する。
また、発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨んでほしい。
・春学期・秋学期ともにレポートを課題として出すので、そのための調査を独自に行うこと。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業時にコピーを配布する。

【参考書】
授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への貢献度、授業時間内の課題の提出）10％
・授業での発表（調査やレジュメの完成度）　30％
・学期末のレポート　60%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【その他の重要事項】
・全員が何らかの形で授業に貢献すること。
・授業で提示された文献をしっかり読むのは言うまでもなく、
自分で文献を探して積極的に読んでいき、研究テーマをできるだけ早く見つけられるようにする。

【Outline (in English)】
[Course outline] This African Studies seminar class is designed to expose students to varying interdisciplinary approaches to and perspectives on the Continent. [Learning objectives] By the end of this course, students will have (1) a solid understanding of important themes in the study of African history, culture, and society, (2) confidence in expressing their views orally and in written form, and (3) the ability to undertake independent research projects.[Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. The required study time is at least four hours for each class meeting. [Grading Criteria /Policies] Final grade will be decided based on the following: term paper (60%), presentation (30%), and in-class contribution (10%).

ARSi400GA（地域研究（アフリカ） / Area studies(Africa) 400）

国際社会演習

粟飯原　文子

サブタイトル：アフリカを学ぶ／アフリカに学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期 /Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんはアフリカについて何を知っていますか？ 何を連想するでしょう？ わたしたちが「知っている」アフリカとは、えてして、広大な大陸のごく一部を、ある特定の見方から切り取ったイメージでしかありません。アフリカとは実に50以上の独立国を含み、地域や社会や民族によって全く異なる言語、文化、慣習が存在する広大で豊かな場所。この演習では、そんな多様性豊かなアフリカのさまざまな時空間を「旅」することで、アフリカについて多角的に学んでいきます。アフリカについて学ぶことは、アフリカから学ぶことでもあり、わたしたちの思考法や物の見方が自然と変化を遂げていく経験となるでしょう。
また、この演習で学ぶことと平行して、あるいは、この演習で学ぶことからインスピレーションを受けて、他の旧植民地地域の歴史や文化にも関心を向けられるかもしれません。受講生個人の研究・発表のテーマは、アフリカに限らず、南アジアやカリブ海などの地域、人種差別や移民／難民などのテーマを対象とすることも可能です。

【到達目標】
・アフリカのさまざまな文化表現を通して、アフリカの多様性を理解し、かつアフリカの歴史・社会・政治に幅広く触れる。
・アフリカ（および旧植民地地域）について学び、考えることで、「世界史」への新しい視座を得る。
・批評・議論の力を発展させ、自主的な調査・研究の方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・アフリカの歴史、文化、社会に関する議論、学術論文などに触れる。
・担当者が問題提起を含む発表を行い、全体で討論を行う。または、全員が課題文献を読み問題意識や論点を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
・3年生の春学期の課題として、授業内で扱ったテーマか自分の関心にもとづいて1冊本を選び、レポートを作成する。また、秋学期の後半には全員に研究発表を行ってもらう。春学期同様、授業内で扱ったテーマから選んでもよいが、個人の関心や問題意識にもとづいて自由にテーマを設定することもできる。
・オフィスアワーなどを用いた個人面談で、課題(レポート、論文など)に対して指導、講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	春学期の演習の進め方について説明。自己紹介、関心のあるテーマを共有。
第2回	レポートと論文の書き方	発表やレジュメ作成の方法を学ぶ。レポートや論文の書き方について、疑問や不明な点を解消できるように基本事項を復習する。
第3回	アフリカを学ぶために①	わたしたちはどのようにアフリカにアプローチすべきか。まずは大陸の歴史を概観する。
第4回	アフリカを学ぶために②	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第5回	アフリカを学ぶために③	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第6回	映画から学ぶアフリカの現代史①	映画をより深く理解するために歴史的・政治的背景を学ぶ。
第7回	映画から学ぶアフリカの現代史②	映画を鑑賞してグループ・ディスカッションを行う。
第8回	ドキュメンタリー映画で学ぶアフリカ	関連する文献を読んだうえで映画を観て、グループ・ディスカッションをおこなう。
第9回	南アフリカ真実和解委員会①	南アフリカ共和国の真実和解委員会の取り組みについて学ぶ。まず南アの現代史を振り返る。
第10回	南アフリカ真実和解委員会②	南アの真実和解委員会について学ぶとともに、世界各地の「真実委員会」とも比較する。
第11回	南アフリカ真実和解委員会③	真実和解委員会について映画を通して理解を深める。
第12回	アフリカ文学とはなにか	アフリカ文学の基礎知識を身に着ける。
第13回	アフリカ文学を読む	アフリカ文学の代表作を読んで全体で議論をおこなう。
第14回	春学期のまとめ	レポートの提出。春学期で学んだことの復習、まとめ。
第1回	イントロダクション	秋学期の演習の進め方について説明。国際文化情報学会や後半に行う研究発表に関して意見を交換する。
第2回	アフリカ文学を読む① ナイジェリア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第3回	アフリカ文学を読む② ケニア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第4回	アフリカとLGBTQ＋	アフリカのLGBTQ＋の運動や表現を学ぶ。
第5回	アフリカとジェンダー	映画を観たうえで、ジェンダーの問題について議論を行う。
第6回	アフリカ音楽と政治・社会	アフリカの代表的なミュージシャンを通して、音楽の社会的・政治的役割とは何かを考える。
第7回	アフリカ音楽と解放闘争	アンゴラの現代音楽の歴史を概観し、解放闘争と音楽の関係について学ぶ。
第8回	パンアフリカニズムという夢	パンアフリカニズムの歴史、思想について、複数の文献を参照しながら理解を深める。
第9回	アフリカン・アートを学ぶ	アフリカの代表的なアーティストの作品に触れ、いくつかの批評分を読む。
第10回	研究発表①	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第11回	研究発表②	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第12回	研究発表③	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第13回	研究発表④	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第14回	秋学期のまとめ	秋学期のレポート、卒業研究の提出。秋学期で学んだことの復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・次週のための準備・予習は必ず行うこと。
・文献を読む場合、指名された担当者はレジュメを作成して発表する。
また、発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨んでほしい。
・春学期・秋学期ともにレポートを課題として出すので、そのための調査を独自に行うこと。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業時にコピーを配布する。

【参考書】
授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への貢献度、授業時間内の課題の提出）10％
・授業での発表（調査やレジュメの完成度）　30％
・学期末のレポート　60%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【その他の重要事項】
・全員が何らかの形で授業に貢献すること。
・授業で提示された文献をしっかり読むのは言うまでもなく、
自分で文献を探して積極的に読んでいき、研究テーマをできるだけ早く見つけられるようにする。

【Outline (in English)】
[Course outline] This African Studies seminar class is designed to expose students to varying interdisciplinary approaches to and perspectives on the Continent. [Learning objectives] By the end of this course, students will have (1) a solid understanding of important themes in the study of African history, culture, and society, (2) confidence in expressing their views orally and in written form, and (3) the ability to undertake independent research projects.[Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. The required study time is at least four hours for each class meeting. [Grading Criteria /Policies] Final grade will be decided based on the following: term paper (60%), presentation (30%), and in-class contribution (10%).

ARSi400GA（地域研究（アフリカ） / Area studies(Africa) 400）

国際社会演習

粟飯原　文子

サブタイトル：アフリカを学ぶ／アフリカに学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期 /Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんはアフリカについて何を知っていますか？ 何を連想するでしょう？ わたしたちが「知っている」アフリカとは、えてして、広大な大陸のごく一部を、ある特定の見方から切り取ったイメージでしかありません。アフリカとは実に50以上の独立国を含み、地域や社会や民族によって全く異なる言語、文化、慣習が存在する広大で豊かな場所。この演習では、そんな多様性豊かなアフリカのさまざまな時空間を「旅」することで、アフリカについて多角的に学んでいきます。アフリカについて学ぶことは、アフリカから学ぶことでもあり、わたしたちの思考法や物の見方が自然と変化を遂げていく経験となるでしょう。
また、この演習で学ぶことと平行して、あるいは、この演習で学ぶことからインスピレーションを受けて、他の旧植民地地域の歴史や文化にも関心を向けられるかもしれません。受講生個人の研究・発表のテーマは、アフリカに限らず、南アジアやカリブ海などの地域、人種差別や移民／難民などのテーマを対象とすることも可能です。

【到達目標】
・アフリカのさまざまな文化表現を通して、アフリカの多様性を理解し、かつアフリカの歴史・社会・政治に幅広く触れる。
・アフリカ（および旧植民地地域）について学び、考えることで、「世界史」への新しい視座を得る。
・批評・議論の力を発展させ、自主的な調査・研究の方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・アフリカの歴史、文化、社会に関する議論、学術論文などに触れる。
・担当者が問題提起を含む発表を行い、全体で討論を行う。または、全員が課題文献を読み問題意識や論点を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
・3年生の春学期の課題として、授業内で扱ったテーマか自分の関心にもとづいて1冊本を選び、レポートを作成する。また、秋学期の後半には全員に研究発表を行ってもらう。春学期同様、授業内で扱ったテーマから選んでもよいが、個人の関心や問題意識にもとづいて自由にテーマを設定することもできる。
・オフィスアワーなどを用いた個人面談で、課題(レポート、論文など)に対して指導、講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	春学期の演習の進め方について説明。自己紹介、関心のあるテーマを共有。
第2回	レポートと論文の書き方	発表やレジュメ作成の方法を学ぶ。レポートや論文の書き方について、疑問や不明な点を解消できるように基本事項を復習する。
第3回	アフリカを学ぶために①	わたしたちはどのようにアフリカにアプローチすべきか。まずは大陸の歴史を概観する。
第4回	アフリカを学ぶために②	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第5回	アフリカを学ぶために③	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第6回	映画から学ぶアフリカの現代史①	映画をより深く理解するために歴史的・政治的背景を学ぶ。
第7回	映画から学ぶアフリカの現代史②	映画を鑑賞してグループ・ディスカッションを行う。
第8回	ドキュメンタリー映画で学ぶアフリカ	関連する文献を読んだうえで映画を観て、グループ・ディスカッションをおこなう。
第9回	南アフリカ真実和解委員会①	南アフリカ共和国の真実和解委員会の取り組みについて学ぶ。まず南アの現代史を振り返る。
第10回	南アフリカ真実和解委員会②	南アの真実和解委員会について学ぶとともに、世界各地の「真実委員会」とも比較する。
第11回	南アフリカ真実和解委員会③	真実和解委員会について映画を通して理解を深める。
第12回	アフリカ文学とはなにか	アフリカ文学の基礎知識を身に着ける。
第13回	アフリカ文学を読む	アフリカ文学の代表作を読んで全体で議論をおこなう。
第14回	春学期のまとめ	レポートの提出。春学期で学んだことの復習、まとめ。
第1回	イントロダクション	秋学期の演習の進め方について説明。国際文化情報学会や後半に行う研究発表に関して意見を交換する。
第2回	アフリカ文学を読む① ナイジェリア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第3回	アフリカ文学を読む② ケニア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第4回	アフリカとLGBTQ＋	アフリカのLGBTQ＋の運動や表現を学ぶ。
第5回	アフリカとジェンダー	映画を観たうえで、ジェンダーの問題について議論を行う。
第6回	アフリカ音楽と政治・社会	アフリカの代表的なミュージシャンを通して、音楽の社会的・政治的役割とは何かを考える。
第7回	アフリカ音楽と解放闘争	アンゴラの現代音楽の歴史を概観し、解放闘争と音楽の関係について学ぶ。
第8回	パンアフリカニズムという夢	パンアフリカニズムの歴史、思想について、複数の文献を参照しながら理解を深める。
第9回	アフリカン・アートを学ぶ	アフリカの代表的なアーティストの作品に触れ、いくつかの批評分を読む。
第10回	研究発表①	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第11回	研究発表②	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第12回	研究発表③	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第13回	研究発表④	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第14回	秋学期のまとめ	秋学期のレポート、卒業研究の提出。秋学期で学んだことの復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・次週のための準備・予習は必ず行うこと。
・文献を読む場合、指名された担当者はレジュメを作成して発表する。
また、発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨んでほしい。
・春学期・秋学期ともにレポートを課題として出すので、そのための調査を独自に行うこと。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業時にコピーを配布する。

【参考書】
授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への貢献度、授業時間内の課題の提出）10％
・授業での発表（調査やレジュメの完成度）　30％
・学期末のレポート　60%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【その他の重要事項】
・全員が何らかの形で授業に貢献すること。
・授業で提示された文献をしっかり読むのは言うまでもなく、
自分で文献を探して積極的に読んでいき、研究テーマをできるだけ早く見つけられるようにする。

【Outline (in English)】
[Course outline] This African Studies seminar class is designed to expose students to varying interdisciplinary approaches to and perspectives on the Continent. [Learning objectives] By the end of this course, students will have (1) a solid understanding of important themes in the study of African history, culture, and society, (2) confidence in expressing their views orally and in written form, and (3) the ability to undertake independent research projects.[Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. The required study time is at least four hours for each class meeting. [Grading Criteria /Policies] Final grade will be decided based on the following: term paper (60%), presentation (30%), and in-class contribution (10%).

ARSi400GA（地域研究（アフリカ） / Area studies(Africa) 400）

国際社会演習

粟飯原　文子

サブタイトル：アフリカを学ぶ／アフリカに学ぶ
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期 /Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
みなさんはアフリカについて何を知っていますか？ 何を連想するでしょう？ わたしたちが「知っている」アフリカとは、えてして、広大な大陸のごく一部を、ある特定の見方から切り取ったイメージでしかありません。アフリカとは実に50以上の独立国を含み、地域や社会や民族によって全く異なる言語、文化、慣習が存在する広大で豊かな場所。この演習では、そんな多様性豊かなアフリカのさまざまな時空間を「旅」することで、アフリカについて多角的に学んでいきます。アフリカについて学ぶことは、アフリカから学ぶことでもあり、わたしたちの思考法や物の見方が自然と変化を遂げていく経験となるでしょう。
また、この演習で学ぶことと平行して、あるいは、この演習で学ぶことからインスピレーションを受けて、他の旧植民地地域の歴史や文化にも関心を向けられるかもしれません。受講生個人の研究・発表のテーマは、アフリカに限らず、南アジアやカリブ海などの地域、人種差別や移民／難民などのテーマを対象とすることも可能です。

【到達目標】
・アフリカのさまざまな文化表現を通して、アフリカの多様性を理解し、かつアフリカの歴史・社会・政治に幅広く触れる。
・アフリカ（および旧植民地地域）について学び、考えることで、「世界史」への新しい視座を得る。
・批評・議論の力を発展させ、自主的な調査・研究の方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・アフリカの歴史、文化、社会に関する議論、学術論文などに触れる。
・担当者が問題提起を含む発表を行い、全体で討論を行う。または、全員が課題文献を読み問題意識や論点を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
・3年生の春学期の課題として、授業内で扱ったテーマか自分の関心にもとづいて1冊本を選び、レポートを作成する。また、秋学期の後半には全員に研究発表を行ってもらう。春学期同様、授業内で扱ったテーマから選んでもよいが、個人の関心や問題意識にもとづいて自由にテーマを設定することもできる。
・オフィスアワーなどを用いた個人面談で、課題(レポート、論文など)に対して指導、講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	春学期の演習の進め方について説明。自己紹介、関心のあるテーマを共有。
第2回	レポートと論文の書き方	発表やレジュメ作成の方法を学ぶ。レポートや論文の書き方について、疑問や不明な点を解消できるように基本事項を復習する。
第3回	アフリカを学ぶために①	わたしたちはどのようにアフリカにアプローチすべきか。まずは大陸の歴史を概観する。
第4回	アフリカを学ぶために②	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第5回	アフリカを学ぶために③	アフリカ研究の基礎知識を身に付けるために、さまざまな導入的な文献を読む。
第6回	映画から学ぶアフリカの現代史①	映画をより深く理解するために歴史的・政治的背景を学ぶ。
第7回	映画から学ぶアフリカの現代史②	映画を鑑賞してグループ・ディスカッションを行う。
第8回	ドキュメンタリー映画で学ぶアフリカ	関連する文献を読んだうえで映画を観て、グループ・ディスカッションをおこなう。
第9回	南アフリカ真実和解委員会①	南アフリカ共和国の真実和解委員会の取り組みについて学ぶ。まず南アの現代史を振り返る。
第10回	南アフリカ真実和解委員会②	南アの真実和解委員会について学ぶとともに、世界各地の「真実委員会」とも比較する。
第11回	南アフリカ真実和解委員会③	真実和解委員会について映画を通して理解を深める。
第12回	アフリカ文学とはなにか	アフリカ文学の基礎知識を身に着ける。
第13回	アフリカ文学を読む	アフリカ文学の代表作を読んで全体で議論をおこなう。
第14回	春学期のまとめ	レポートの提出。春学期で学んだことの復習、まとめ。
第1回	イントロダクション	秋学期の演習の進め方について説明。国際文化情報学会や後半に行う研究発表に関して意見を交換する。
第2回	アフリカ文学を読む① ナイジェリア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第3回	アフリカ文学を読む② ケニア	アフリカ文学作品を精読。批評・分析の対象となる箇所を共有したうえで、グループ・ディスカッションを行う。
第4回	アフリカとLGBTQ＋	アフリカのLGBTQ＋の運動や表現を学ぶ。
第5回	アフリカとジェンダー	映画を観たうえで、ジェンダーの問題について議論を行う。
第6回	アフリカ音楽と政治・社会	アフリカの代表的なミュージシャンを通して、音楽の社会的・政治的役割とは何かを考える。
第7回	アフリカ音楽と解放闘争	アンゴラの現代音楽の歴史を概観し、解放闘争と音楽の関係について学ぶ。
第8回	パンアフリカニズムという夢	パンアフリカニズムの歴史、思想について、複数の文献を参照しながら理解を深める。
第9回	アフリカン・アートを学ぶ	アフリカの代表的なアーティストの作品に触れ、いくつかの批評分を読む。
第10回	研究発表①	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第11回	研究発表②	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第12回	研究発表③	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第13回	研究発表④	個人の研究発表。全体で討論を行う。
第14回	秋学期のまとめ	秋学期のレポート、卒業研究の提出。秋学期で学んだことの復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・次週のための準備・予習は必ず行うこと。
・文献を読む場合、指名された担当者はレジュメを作成して発表する。
また、発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨んでほしい。
・春学期・秋学期ともにレポートを課題として出すので、そのための調査を独自に行うこと。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業時にコピーを配布する。

【参考書】
授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への貢献度、授業時間内の課題の提出）10％
・授業での発表（調査やレジュメの完成度）　30％
・学期末のレポート　60%
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【その他の重要事項】
・全員が何らかの形で授業に貢献すること。
・授業で提示された文献をしっかり読むのは言うまでもなく、
自分で文献を探して積極的に読んでいき、研究テーマをできるだけ早く見つけられるようにする。

【Outline (in English)】
[Course outline] This African Studies seminar class is designed to expose students to varying interdisciplinary approaches to and perspectives on the Continent. [Learning objectives] By the end of this course, students will have (1) a solid understanding of important themes in the study of African history, culture, and society, (2) confidence in expressing their views orally and in written form, and (3) the ability to undertake independent research projects.[Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. The required study time is at least four hours for each class meeting. [Grading Criteria /Policies] Final grade will be decided based on the following: term paper (60%), presentation (30%), and in-class contribution (10%).

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

今泉　裕美子

サブタイトル：「国際関係」を文化から捉え直し、つむぎ直す
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　このゼミでは、「国際関係」の諸現象を、人および人々の営みとしての「文化」を軸に学びます。
　現在の国際関係では、戦争／紛争、移民／難民、格差／差別など問題が山積し、ロシアのウクライナ侵攻、アメリカのベネズエラ侵攻など、「力による平和」がまかり通っているように見えます。経済力、軍事力を持つ国、政治・経済的に優位な人の声高な主張が世界を動かし、最もしわ寄せをうけるマイノリティは無力のように報じられがちです。深刻な現実に直面していることは確かですが、人類には問題を解決する手立ては全くないのでしょうか。
　ゼミでは、(1)「国際関係」を、人のさまざまな集団（民族、国民、地域社会、階級、家族、ジェンダー、世代など)、彼らの営みが育む文化から捉え直します。そして、(2)私たちが知らず知らずに受け入れている思い込み―たとえば「国際関係」は国家同士の関係だけ／理解が難しい／遠い場所で起きていることは自分に関係しない、など―をゆさぶり、自分が世界の諸現象や諸問題とどうつながっているのか、を学びます。
　これまで無関係だと思っていた／知らなかった人や人々の文化、彼らとの見えなかった関係が見えてくると、新たな出会いが生まれ、聞こえなかった声や情報もどんどん飛び込んできます。
　こうした学びを通じて「国際関係」を捉え直し、自分が興味あることをより深く知ったり、問題の解決の手立てや協力すべきパートナーを見いだす、など、自分の関心あるテーマ、日々の生活の中から「国際関係」をつむぎ直す方法、自分の役割や可能性を見つけてゆきます。

【到達目標】
１．「国際関係」の理解、分析に必要な概念、理論、思想を学び、国際関係学の方法論を習得する。
２．テキストの趣旨を的確に理解、批判的に考察し、自分の意見をもつことができる。
３．プレゼンテーションやディスカッション、学術的文章表現の方法を身に着け、他者の意見を理解し、自分の意見を論理的に表現できる。ディスカッションのファシリテーターを務めることができる。
４．自分の問題意識に基づくテーマを見つけ、そのテーマの追究を通じてゼミでの学びを深めることができる。
５．研究テーマに関して先行研究の検討、資料調査、分析、報告書・論文の作成など研究に必要な方法を習得できる。
６.ゼミという共同での学びによって他者理解、コミュニケーション、リーダーシップや協力などの方法を実践的に身に着ける。
【2年生】１〜４、６を中心に、SAや３年次の学びにつなげる準備ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【今年度のテーマ】”Global Justice”を手がかりに見る現代国際関係
"Global Justice"とは、大雑把に説明すれば、一国内で議論されてきた”Social Justice”に関する考え方や取り組みを、国境を越えた世界の問題に応用、発展させたものです。欧米の政治学、哲学の分野で議論され、国際法や国際協力などで具体的な方法が検討されてきました。一方、現代世界では、地域固有の問題をグローバルな問題として捉える人びとが、国境を越えて協力し合い、解決するうえで、これを掲げています。例えば、Climate Justice、Nuclear Justice、Colonial Justiceなど、また特定の地域の問題では、Palestine Justice、Ukraine Justiceなど、で”Global Justice”を求める多様な問題のなかに、自分たちが抱える問題を位置付け、取り組んでいます。
授業では具体的な問題を取り上げ、世界各地の異なる文化をもつ人たちの”Global Justice”に関連する取り組みから、「国際関係」を問い直し、つむぎ直す手立てを見出します。
【１年間の学びの概要】
・今年度のゼミテーマに関する導入的なテキスト、続いてテーマに直接関係するテキストをいずれも共同講読し、問題関心や論点を共有する。映像資料を用いる場合もある。
・ゼミの学びを踏まえ、各自が関心あるテーマに関する文献を選び、研究報告を行ったうえで、学期末にはレポートなど学術論文を提出する。
・秋学期には春学期での学びを深化・発展させるため、国際文化情報学会で報告する。3年生はグループで調査・研究し、4年生は個人でこれを行う。
【毎回の授業構成】
・輪番で１名が最近の新聞報道から関心ある記事を取り上げて報告(10分)、ディスカッション(10分)。
・担当する報告者はレジュメを作成、プレゼンテーションし、全体でディスカッションする。担当者以外もテキストを熟読し、基本的な用語を調べたり疑問や意見を準備する。
【その他】
学外施設の見学、講演会などへの参加、夏休み中のゼミ合宿、国内外の大学生などとの合同ゼミ、専門家などを招いての講演を行う場合もある。授業計画以外の内容となる場合は、ゼミ生と相談して日時を決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、スケジュール、自己紹介、各自の関心を共有。
2	個人研究に関する報告【４年生】	4年生の個人研究から、ゼミでの学びを知る。
3	「国際関係」へのアプローチ１　時間軸のなかで考える意義	時間軸のなかでみるとは？ 文字記録と非文字記録から、「国際関係」へのアプローチを考える。
4	「国際関係」へのアプローチ２　行為体（アクター）としての人の集団とその文化	「国際関係」の行為体としての人の集団のなかで、民族、階級、ジェンダーなどについて、またその文化的特徴を学ぶ。
5	「国際関係」へのアプローチ３　行為体としての「地域」とその文化	国際関係の行為体としての「地域」とその文化、「地域」研究の方法を学ぶ。
6	「国際関係」へアプローチ４　戦争・紛争下の文化	戦争・紛争下の文化の特徴、戦時下の情報伝達や分析について学ぶ。
7	春学期の中間総括	論点と課題の明確化。各自の問題関心を共有し、春学期後半の授業につなげる。
8	学術論文を読む、書くに関するワークショップ	研究テーマの設定の仕方、史・資料収集、分析、論文の読み方、書き方を学ぶ。
9	今年度のゼミテーマ”Global Justice"を手がかりに見る現代国際関係について	テーマに関するオリエンテーション。

10	Climate Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
11	Nuclear Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
12	地域紛争・戦争をめぐるJusticeの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
13	ゼミテーマに関する事例の総括と各自の関心の所在	３事例の論点、現代「国際関係」における問題の所在や取り組みの特徴をまとめる。各自の関心の変化や深まりを改めて共有する。
14	春学期の総括	春学期の学びの論点をまとめ、秋学期の学びにつなげる準備をする。
1	秋学期のオリエンテーション	秋学期の授業計画の確認。学部学会で報告する研究テーマ、研究計画を設定。
2	グループ研究の発表①	グループ研究の構想発表【３年生】
3	グループ研究の発表②	グループ研究の構想発表【３年生】
4	個人研究の発表①	個人研究の中間報告【４年生】
5	グループ研究の発表③	グループ研究の構想発表【３年生】
6	グループ研究の発表④	グループ研究の発表【３年生】
7	グループ研究の発表⑤	グループ研究の発表【３年生】
8	個人研究の発表②	学会向けの準備報告【４年生】
9	グループ研究の発表⑥	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の再検討。
10	グループ研究の発表⑦	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の最終確認。
11	国際文化情報学会での報告についてふり返り	学会の講評をもとに成果と課題を共有、今後の研究につなげる。
12	個人研究の発表③	これまでの学びを踏まえて、各自が関心をもったテーマについて報告【３年生】
13	個人研究の発表④	個人研究に関するゼミ論の提出【４年生】
14	秋学期と1年の総括	秋学期と1年の総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
(1)報告担当者はレジュメを作成してプレゼンテーションをする。非担当者も質問、意見を準備する。
(2)授業に関連する参考文献を読み、授業の理解を深める。
(3)グループ研究、個人研究のテーマを見つけ、関係する文献、史資料を自主的に探して読む。教員の指導を自主的に受ける。
(4)本授業の準備・復習時間には各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年（オンデマンドで入手可能）。
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
鹿野政直『歴史を学ぶこと』岩波書店、1998年。
斉藤孝他『学術論文の技法』（新訂版）日本エディタースクール出版部、2005年。
その他、随時提示する。

【参考書】
内藤 正典/岡野 八代編著『グローバル・ジャスティス―新たな正義論への招待』ミネルヴァ書房、2013年。
『思想』【特集】グローバル・ジャスティス、1155号、岩波書店、2020年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
・個人・グループ発表、発表資料の作成、ディスカッションへの参加（50％）
・課題提出　（50％）
本成績評価の方法をもとに、授業の到達目標の60％以上を達成したものを合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・マニュアル化できない学びを身に着けることが出来るよう工夫している。
・読む・報告する・書くに全く自信がなくとも、ゼミで2年間学び続けることで身につけられた、との意見を反映させ、2年間の計画をより充実させる。
・ゼミ合宿（2025年度は沖縄）、美術館見学、パレスチナ人の講演会参加、などがゼミの学びを深めるうえで好評だったので、同様の企画を継続する。

【学生が準備すべき機器他】
Web授業を行う場合はPCと安定した電波環境を必要とする。

【その他の重要事項】
（1）今泉が担当する以下の授業の受講、またすでに受講している場合は復習することを強く推奨する。
・国際文化学部「国際関係学概論Ⅰ」「国際関係学概論Ⅱ」
・法学部公開科目「オセアニアの政治と社会Ⅰ」「オセアニアの政治と社会Ⅱ」
（オセアニアに関心がなくとも、地域研究の方法や、地域社会から国際関係にアプローチする方法を学ぶことが出来る）
・国際文化研究科（「自由科目」として受講可能）
「異文化社会論ⅠA」、「異文化社会論ⅠB」
（2）授業計画はゼミ生の関心、進捗状況、国内外の情勢によって一部変更する場合もある。

【Outline (in English)】
【Course outline】 The aim of this seminar is to study various phenomena in "international relations" with a focus on "culture" as the activity of individuals and groups.
Currently, international relations are fraught with numerous problems such as war/conflict, immigration/refugees, inequality/discrimination, and so on. Even in recent years, issues like Israel-Palestine conflict, Russia's invasion of Ukraine, and the US invasion of Venezuela might illustrate how "peace through power" seems to be gaining acceptance. The voices of nations with economic and military strength, and those in politically and economically privileged positions, tend to dominate global affairs, while minorities who bear the brunt of these issues are often portrayed as powerless.
In this seminar, we will challenge the assumptions that we unconsciously accept — for example, that "international relations" are only about relationships between nations, that they are difficult to understand, or that events in distant places have no connection to us. We will learn how we ourselves are connected to various global phenomena and issues. In particular, we will reconsider "international relations" through the viewpoints of various human groups (such as ethnicity, nationality, local community, class, family, gender, generation, and so on) and the cultures that they based on for their activities.
As you begin to see previously invisible relationships with people and cultures you once thought were unrelated or unknown, you will encounter new perspectives and receive information that was previously inaccessible. Through these studies, you will gain a new understanding of "international relations," learn more deeply about topics that interest you, and find ways to reweave "international relations" from your own research and daily life, finding your own roles and possibilities.
【Learning Objectives】
(1) Learn the essential concepts, theories, and ideas necessary to understand and analyze "international relations," and acquire the methodologies of International Studies.
(2) Comprehend the main points of the text, think critically, and develop your own opinions.
(3)Acquire skills in presentation, discussion, and written expression; be able to understand others' opinions, logically express your own ideas.

(4)Reserch your topic based on your interests and deepen your learning in the seminar.
(5)Master research methods necessary for your research topic, including reviewing previous studies, conducting document surveys, analysis, and preparing academic papers.
(6)Through collaborative learning in the seminar, acquire methods for understanding others, communication, leadership, and cooperation.
[For Second-Year Students] Focus mainly on objectives (1) ～(4) and (6), you will prepare for SA and learning in the third year.
[This Year's Theme]
"International Relations Viewed from the Perspective of "Global Justice""
To put it simply, "Global Justice" refers to the application and development of ideas and efforts concerning "Social Justice" — which have traditionally been discussed within a single country — toward global issues that cross national borders. This concept has been debated in the fields of politics and philosophy in Europe and the United States, and concrete methods have been examined in areas such as international law and international cooperation. On the other hand, in the modern world, people who recognize locally specific problems as global issues are working together across borders under the banner of "Global Justice" to find solutions. For example, in various issues such as Climate Justice, Nuclear Justice, and Colonial Justice, as well as in region-specific issues like Palestine Justice or Ukraine Justice, people are situating the problems they face within the broader context of "Global Justice" and working to address them.
In this course, students will select specific issues that interest them and, by examining the efforts related to "Global Justice" made by people from diverse cultures around the world, will seek new ways to question and reweave "international relations."
【Learning activities outside of classroom】
(1)Each class will commence by 10-minute presentation and 15-minute discussion of the news article. Presenters should choose one article and analyze it critically.
(2)Presenters of each class will be expected to write resume based on the readings assigned for the class. The presentations will be prepared for deep understanding of the readings and further discussion using other non-assigned sources for their comments. Other students will also be expected to understand of the readings and prepare for comments and questions.
(3)Pre-class and post-class assignment task are expected to take approximately 2 hours each to complete.
【Grading Criteria/Policy】
This course will be evaluated through in class contribution espeically to group research/indivisual research based on attendance, preparation of readings, presentation, participation in discussion, etc.(50%), and assignment papers (50%).

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

今泉　裕美子

サブタイトル：「国際関係」を文化から捉え直し、つむぎ直す
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　このゼミでは、「国際関係」の諸現象を、人および人々の営みとしての「文化」を軸に学びます。
　現在の国際関係では、戦争／紛争、移民／難民、格差／差別など問題が山積し、ロシアのウクライナ侵攻、アメリカのベネズエラ侵攻など、「力による平和」がまかり通っているように見えます。経済力、軍事力を持つ国、政治・経済的に優位な人の声高な主張が世界を動かし、最もしわ寄せをうけるマイノリティは無力のように報じられがちです。深刻な現実に直面していることは確かですが、人類には問題を解決する手立ては全くないのでしょうか。
　ゼミでは、(1)「国際関係」を、人のさまざまな集団（民族、国民、地域社会、階級、家族、ジェンダー、世代など)、彼らの営みが育む文化から捉え直します。そして、(2)私たちが知らず知らずに受け入れている思い込み―たとえば「国際関係」は国家同士の関係だけ／理解が難しい／遠い場所で起きていることは自分に関係しない、など―をゆさぶり、自分が世界の諸現象や諸問題とどうつながっているのか、を学びます。
　これまで無関係だと思っていた／知らなかった人や人々の文化、彼らとの見えなかった関係が見えてくると、新たな出会いが生まれ、聞こえなかった声や情報もどんどん飛び込んできます。
　こうした学びを通じて「国際関係」を捉え直し、自分が興味あることをより深く知ったり、問題の解決の手立てや協力すべきパートナーを見いだす、など、自分の関心あるテーマ、日々の生活の中から「国際関係」をつむぎ直す方法、自分の役割や可能性を見つけてゆきます。

【到達目標】
１．「国際関係」の理解、分析に必要な概念、理論、思想を学び、国際関係学の方法論を習得する。
２．テキストの趣旨を的確に理解、批判的に考察し、自分の意見をもつことができる。
３．プレゼンテーションやディスカッション、学術的文章表現の方法を身に着け、他者の意見を理解し、自分の意見を論理的に表現できる。ディスカッションのファシリテーターを務めることができる。
４．自分の問題意識に基づくテーマを見つけ、そのテーマの追究を通じてゼミでの学びを深めることができる。
５．研究テーマに関して先行研究の検討、資料調査、分析、報告書・論文の作成など研究に必要な方法を習得できる。
６.ゼミという共同での学びによって他者理解、コミュニケーション、リーダーシップや協力などの方法を実践的に身に着ける。
【2年生】１〜４、６を中心に、SAや３年次の学びにつなげる準備ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【今年度のテーマ】”Global Justice”を手がかりに見る現代国際関係
"Global Justice"とは、大雑把に説明すれば、一国内で議論されてきた”Social Justice”に関する考え方や取り組みを、国境を越えた世界の問題に応用、発展させたものです。欧米の政治学、哲学の分野で議論され、国際法や国際協力などで具体的な方法が検討されてきました。一方、現代世界では、地域固有の問題をグローバルな問題として捉える人びとが、国境を越えて協力し合い、解決するうえで、これを掲げています。例えば、Climate Justice、Nuclear Justice、Colonial Justiceなど、また特定の地域の問題では、Palestine Justice、Ukraine Justiceなど、で”Global Justice”を求める多様な問題のなかに、自分たちが抱える問題を位置付け、取り組んでいます。
授業では具体的な問題を取り上げ、世界各地の異なる文化をもつ人たちの”Global Justice”に関連する取り組みから、「国際関係」を問い直し、つむぎ直す手立てを見出します。
【１年間の学びの概要】
・今年度のゼミテーマに関する導入的なテキスト、続いてテーマに直接関係するテキストをいずれも共同講読し、問題関心や論点を共有する。映像資料を用いる場合もある。
・ゼミの学びを踏まえ、各自が関心あるテーマに関する文献を選び、研究報告を行ったうえで、学期末にはレポートなど学術論文を提出する。
・秋学期には春学期での学びを深化・発展させるため、国際文化情報学会で報告する。3年生はグループで調査・研究し、4年生は個人でこれを行う。
【毎回の授業構成】
・輪番で１名が最近の新聞報道から関心ある記事を取り上げて報告(10分)、ディスカッション(10分)。
・担当する報告者はレジュメを作成、プレゼンテーションし、全体でディスカッションする。担当者以外もテキストを熟読し、基本的な用語を調べたり疑問や意見を準備する。
【その他】
学外施設の見学、講演会などへの参加、夏休み中のゼミ合宿、国内外の大学生などとの合同ゼミ、専門家などを招いての講演を行う場合もある。授業計画以外の内容となる場合は、ゼミ生と相談して日時を決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、スケジュール、自己紹介、各自の関心を共有。
2	個人研究に関する報告【４年生】	4年生の個人研究から、ゼミでの学びを知る。
3	「国際関係」へのアプローチ１　時間軸のなかで考える意義	時間軸のなかでみるとは？ 文字記録と非文字記録から、「国際関係」へのアプローチを考える。
4	「国際関係」へのアプローチ２　行為体（アクター）としての人の集団とその文化	「国際関係」の行為体としての人の集団のなかで、民族、階級、ジェンダーなどについて、またその文化的特徴を学ぶ。
5	「国際関係」へのアプローチ３　行為体としての「地域」とその文化	国際関係の行為体としての「地域」とその文化、「地域」研究の方法を学ぶ。
6	「国際関係」へアプローチ４　戦争・紛争下の文化	戦争・紛争下の文化の特徴、戦時下の情報伝達や分析について学ぶ。
7	春学期の中間総括	論点と課題の明確化。各自の問題関心を共有し、春学期後半の授業につなげる。
8	学術論文を読む、書くに関するワークショップ	研究テーマの設定の仕方、史・資料収集、分析、論文の読み方、書き方を学ぶ。
9	今年度のゼミテーマ”Global Justice"を手がかりに見る現代国際関係について	テーマに関するオリエンテーション。

10	Climate Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
11	Nuclear Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
12	地域紛争・戦争をめぐるJusticeの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
13	ゼミテーマに関する事例の総括と各自の関心の所在	３事例の論点、現代「国際関係」における問題の所在や取り組みの特徴をまとめる。各自の関心の変化や深まりを改めて共有する。
14	春学期の総括	春学期の学びの論点をまとめ、秋学期の学びにつなげる準備をする。
1	秋学期のオリエンテーション	秋学期の授業計画の確認。学部学会で報告する研究テーマ、研究計画を設定。
2	グループ研究の発表①	グループ研究の構想発表【３年生】
3	グループ研究の発表②	グループ研究の構想発表【３年生】
4	個人研究の発表①	個人研究の中間報告【４年生】
5	グループ研究の発表③	グループ研究の構想発表【３年生】
6	グループ研究の発表④	グループ研究の発表【３年生】
7	グループ研究の発表⑤	グループ研究の発表【３年生】
8	個人研究の発表②	学会向けの準備報告【４年生】
9	グループ研究の発表⑥	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の再検討。
10	グループ研究の発表⑦	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の最終確認。
11	国際文化情報学会での報告についてふり返り	学会の講評をもとに成果と課題を共有、今後の研究につなげる。
12	個人研究の発表③	これまでの学びを踏まえて、各自が関心をもったテーマについて報告【３年生】
13	個人研究の発表④	個人研究に関するゼミ論の提出【４年生】
14	秋学期と1年の総括	秋学期と1年の総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
(1)報告担当者はレジュメを作成してプレゼンテーションをする。非担当者も質問、意見を準備する。
(2)授業に関連する参考文献を読み、授業の理解を深める。
(3)グループ研究、個人研究のテーマを見つけ、関係する文献、史資料を自主的に探して読む。教員の指導を自主的に受ける。
(4)本授業の準備・復習時間には各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年（オンデマンドで入手可能）。
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
鹿野政直『歴史を学ぶこと』岩波書店、1998年。
斉藤孝他『学術論文の技法』（新訂版）日本エディタースクール出版部、2005年。
その他、随時提示する。

【参考書】
内藤 正典/岡野 八代編著『グローバル・ジャスティス―新たな正義論への招待』ミネルヴァ書房、2013年。
『思想』【特集】グローバル・ジャスティス、1155号、岩波書店、2020年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
・個人・グループ発表、発表資料の作成、ディスカッションへの参加（50％）
・課題提出　（50％）
本成績評価の方法をもとに、授業の到達目標の60％以上を達成したものを合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・マニュアル化できない学びを身に着けることが出来るよう工夫している。
・読む・報告する・書くに全く自信がなくとも、ゼミで2年間学び続けることで身につけられた、との意見を反映させ、2年間の計画をより充実させる。
・ゼミ合宿（2025年度は沖縄）、美術館見学、パレスチナ人の講演会参加、などがゼミの学びを深めるうえで好評だったので、同様の企画を継続する。

【学生が準備すべき機器他】
Web授業を行う場合はPCと安定した電波環境を必要とする。

【その他の重要事項】
（1）今泉が担当する以下の授業の受講、またすでに受講している場合は復習することを強く推奨する。
・国際文化学部「国際関係学概論Ⅰ」「国際関係学概論Ⅱ」
・法学部公開科目「オセアニアの政治と社会Ⅰ」「オセアニアの政治と社会Ⅱ」
（オセアニアに関心がなくとも、地域研究の方法や、地域社会から国際関係にアプローチする方法を学ぶことが出来る）
・国際文化研究科（「自由科目」として受講可能）
「異文化社会論ⅠA」、「異文化社会論ⅠB」
（2）授業計画はゼミ生の関心、進捗状況、国内外の情勢によって一部変更する場合もある。

【Outline (in English)】
【Course outline】 The aim of this seminar is to study various phenomena in "international relations" with a focus on "culture" as the activity of individuals and groups.
Currently, international relations are fraught with numerous problems such as war/conflict, immigration/refugees, inequality/discrimination, and so on. Even in recent years, issues like Israel-Palestine conflict, Russia's invasion of Ukraine, and the US invasion of Venezuela might illustrate how "peace through power" seems to be gaining acceptance. The voices of nations with economic and military strength, and those in politically and economically privileged positions, tend to dominate global affairs, while minorities who bear the brunt of these issues are often portrayed as powerless.
In this seminar, we will challenge the assumptions that we unconsciously accept — for example, that "international relations" are only about relationships between nations, that they are difficult to understand, or that events in distant places have no connection to us. We will learn how we ourselves are connected to various global phenomena and issues. In particular, we will reconsider "international relations" through the viewpoints of various human groups (such as ethnicity, nationality, local community, class, family, gender, generation, and so on) and the cultures that they based on for their activities.
As you begin to see previously invisible relationships with people and cultures you once thought were unrelated or unknown, you will encounter new perspectives and receive information that was previously inaccessible. Through these studies, you will gain a new understanding of "international relations," learn more deeply about topics that interest you, and find ways to reweave "international relations" from your own research and daily life, finding your own roles and possibilities.
【Learning Objectives】
(1) Learn the essential concepts, theories, and ideas necessary to understand and analyze "international relations," and acquire the methodologies of International Studies.
(2) Comprehend the main points of the text, think critically, and develop your own opinions.
(3)Acquire skills in presentation, discussion, and written expression; be able to understand others' opinions, logically express your own ideas.

(4)Reserch your topic based on your interests and deepen your learning in the seminar.
(5)Master research methods necessary for your research topic, including reviewing previous studies, conducting document surveys, analysis, and preparing academic papers.
(6)Through collaborative learning in the seminar, acquire methods for understanding others, communication, leadership, and cooperation.
[For Second-Year Students] Focus mainly on objectives (1) ～(4) and (6), you will prepare for SA and learning in the third year.
[This Year's Theme]
"International Relations Viewed from the Perspective of "Global Justice""
To put it simply, "Global Justice" refers to the application and development of ideas and efforts concerning "Social Justice" — which have traditionally been discussed within a single country — toward global issues that cross national borders. This concept has been debated in the fields of politics and philosophy in Europe and the United States, and concrete methods have been examined in areas such as international law and international cooperation. On the other hand, in the modern world, people who recognize locally specific problems as global issues are working together across borders under the banner of "Global Justice" to find solutions. For example, in various issues such as Climate Justice, Nuclear Justice, and Colonial Justice, as well as in region-specific issues like Palestine Justice or Ukraine Justice, people are situating the problems they face within the broader context of "Global Justice" and working to address them.
In this course, students will select specific issues that interest them and, by examining the efforts related to "Global Justice" made by people from diverse cultures around the world, will seek new ways to question and reweave "international relations."
【Learning activities outside of classroom】
(1)Each class will commence by 10-minute presentation and 15-minute discussion of the news article. Presenters should choose one article and analyze it critically.
(2)Presenters of each class will be expected to write resume based on the readings assigned for the class. The presentations will be prepared for deep understanding of the readings and further discussion using other non-assigned sources for their comments. Other students will also be expected to understand of the readings and prepare for comments and questions.
(3)Pre-class and post-class assignment task are expected to take approximately 2 hours each to complete.
【Grading Criteria/Policy】
This course will be evaluated through in class contribution espeically to group research/indivisual research based on attendance, preparation of readings, presentation, participation in discussion, etc.(50%), and assignment papers (50%).

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

今泉　裕美子

サブタイトル：「国際関係」を文化から捉え直し、つむぎ直す
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　このゼミでは、「国際関係」の諸現象を、人および人々の営みとしての「文化」を軸に学びます。
　現在の国際関係では、戦争／紛争、移民／難民、格差／差別など問題が山積し、ロシアのウクライナ侵攻、アメリカのベネズエラ侵攻など、「力による平和」がまかり通っているように見えます。経済力、軍事力を持つ国、政治・経済的に優位な人の声高な主張が世界を動かし、最もしわ寄せをうけるマイノリティは無力のように報じられがちです。深刻な現実に直面していることは確かですが、人類には問題を解決する手立ては全くないのでしょうか。
　ゼミでは、(1)「国際関係」を、人のさまざまな集団（民族、国民、地域社会、階級、家族、ジェンダー、世代など)、彼らの営みが育む文化から捉え直します。そして、(2)私たちが知らず知らずに受け入れている思い込み―たとえば「国際関係」は国家同士の関係だけ／理解が難しい／遠い場所で起きていることは自分に関係しない、など―をゆさぶり、自分が世界の諸現象や諸問題とどうつながっているのか、を学びます。
　これまで無関係だと思っていた／知らなかった人や人々の文化、彼らとの見えなかった関係が見えてくると、新たな出会いが生まれ、聞こえなかった声や情報もどんどん飛び込んできます。
　こうした学びを通じて「国際関係」を捉え直し、自分が興味あることをより深く知ったり、問題の解決の手立てや協力すべきパートナーを見いだす、など、自分の関心あるテーマ、日々の生活の中から「国際関係」をつむぎ直す方法、自分の役割や可能性を見つけてゆきます。

【到達目標】
１．「国際関係」の理解、分析に必要な概念、理論、思想を学び、国際関係学の方法論を習得する。
２．テキストの趣旨を的確に理解、批判的に考察し、自分の意見をもつことができる。
３．プレゼンテーションやディスカッション、学術的文章表現の方法を身に着け、他者の意見を理解し、自分の意見を論理的に表現できる。ディスカッションのファシリテーターを務めることができる。
４．自分の問題意識に基づくテーマを見つけ、そのテーマの追究を通じてゼミでの学びを深めることができる。
５．研究テーマに関して先行研究の検討、資料調査、分析、報告書・論文の作成など研究に必要な方法を習得できる。
６.ゼミという共同での学びによって他者理解、コミュニケーション、リーダーシップや協力などの方法を実践的に身に着ける。
【2年生】１〜４、６を中心に、SAや３年次の学びにつなげる準備ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【今年度のテーマ】”Global Justice”を手がかりに見る現代国際関係
"Global Justice"とは、大雑把に説明すれば、一国内で議論されてきた”Social Justice”に関する考え方や取り組みを、国境を越えた世界の問題に応用、発展させたものです。欧米の政治学、哲学の分野で議論され、国際法や国際協力などで具体的な方法が検討されてきました。一方、現代世界では、地域固有の問題をグローバルな問題として捉える人びとが、国境を越えて協力し合い、解決するうえで、これを掲げています。例えば、Climate Justice、Nuclear Justice、Colonial Justiceなど、また特定の地域の問題では、Palestine Justice、Ukraine Justiceなど、で”Global Justice”を求める多様な問題のなかに、自分たちが抱える問題を位置付け、取り組んでいます。
授業では具体的な問題を取り上げ、世界各地の異なる文化をもつ人たちの”Global Justice”に関連する取り組みから、「国際関係」を問い直し、つむぎ直す手立てを見出します。
【１年間の学びの概要】
・今年度のゼミテーマに関する導入的なテキスト、続いてテーマに直接関係するテキストをいずれも共同講読し、問題関心や論点を共有する。映像資料を用いる場合もある。
・ゼミの学びを踏まえ、各自が関心あるテーマに関する文献を選び、研究報告を行ったうえで、学期末にはレポートなど学術論文を提出する。
・秋学期には春学期での学びを深化・発展させるため、国際文化情報学会で報告する。3年生はグループで調査・研究し、4年生は個人でこれを行う。
【毎回の授業構成】
・輪番で１名が最近の新聞報道から関心ある記事を取り上げて報告(10分)、ディスカッション(10分)。
・担当する報告者はレジュメを作成、プレゼンテーションし、全体でディスカッションする。担当者以外もテキストを熟読し、基本的な用語を調べたり疑問や意見を準備する。
【その他】
学外施設の見学、講演会などへの参加、夏休み中のゼミ合宿、国内外の大学生などとの合同ゼミ、専門家などを招いての講演を行う場合もある。授業計画以外の内容となる場合は、ゼミ生と相談して日時を決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、スケジュール、自己紹介、各自の関心を共有。
2	個人研究に関する報告【４年生】	4年生の個人研究から、ゼミでの学びを知る。
3	「国際関係」へのアプローチ１　時間軸のなかで考える意義	時間軸のなかでみるとは？ 文字記録と非文字記録から、「国際関係」へのアプローチを考える。
4	「国際関係」へのアプローチ２　行為体（アクター）としての人の集団とその文化	「国際関係」の行為体としての人の集団のなかで、民族、階級、ジェンダーなどについて、またその文化的特徴を学ぶ。
5	「国際関係」へのアプローチ３　行為体としての「地域」とその文化	国際関係の行為体としての「地域」とその文化、「地域」研究の方法を学ぶ。
6	「国際関係」へアプローチ４　戦争・紛争下の文化	戦争・紛争下の文化の特徴、戦時下の情報伝達や分析について学ぶ。
7	春学期の中間総括	論点と課題の明確化。各自の問題関心を共有し、春学期後半の授業につなげる。
8	学術論文を読む、書くに関するワークショップ	研究テーマの設定の仕方、史・資料収集、分析、論文の読み方、書き方を学ぶ。
9	今年度のゼミテーマ”Global Justice"を手がかりに見る現代国際関係について	テーマに関するオリエンテーション。

10	Climate Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
11	Nuclear Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
12	地域紛争・戦争をめぐるJusticeの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
13	ゼミテーマに関する事例の総括と各自の関心の所在	３事例の論点、現代「国際関係」における問題の所在や取り組みの特徴をまとめる。各自の関心の変化や深まりを改めて共有する。
14	春学期の総括	春学期の学びの論点をまとめ、秋学期の学びにつなげる準備をする。
1	秋学期のオリエンテーション	秋学期の授業計画の確認。学部学会で報告する研究テーマ、研究計画を設定。
2	グループ研究の発表①	グループ研究の構想発表【３年生】
3	グループ研究の発表②	グループ研究の構想発表【３年生】
4	個人研究の発表①	個人研究の中間報告【４年生】
5	グループ研究の発表③	グループ研究の構想発表【３年生】
6	グループ研究の発表④	グループ研究の発表【３年生】
7	グループ研究の発表⑤	グループ研究の発表【３年生】
8	個人研究の発表②	学会向けの準備報告【４年生】
9	グループ研究の発表⑥	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の再検討。
10	グループ研究の発表⑦	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の最終確認。
11	国際文化情報学会での報告についてふり返り	学会の講評をもとに成果と課題を共有、今後の研究につなげる。
12	個人研究の発表③	これまでの学びを踏まえて、各自が関心をもったテーマについて報告【３年生】
13	個人研究の発表④	個人研究に関するゼミ論の提出【４年生】
14	秋学期と１年の総括	秋学期と１年の総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
(1)報告担当者はレジュメを作成してプレゼンテーションをする。非担当者も質問、意見を準備する。
(2)授業に関連する参考文献を読み、授業の理解を深める。
(3)グループ研究、個人研究のテーマを見つけ、関係する文献、史資料を自主的に探して読む。教員の指導を自主的に受ける。
(4)本授業の準備・復習時間には各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年（オンデマンドで入手可能）。
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
鹿野政直『歴史を学ぶこと』岩波書店、1998年。
斉藤孝他『学術論文の技法』（新訂版）日本エディタースクール出版部、2005年。
その他、随時提示する。

【参考書】
内藤 正典/岡野 八代編著『グローバル・ジャスティス―新たな正義論への招待』ミネルヴァ書房、2013年。
『思想』【特集】グローバル・ジャスティス、1155号、岩波書店、2020年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
・個人・グループ発表、発表資料の作成、ディスカッションへの参加（50％）
・課題提出　（50％）
本成績評価の方法をもとに、授業の到達目標の60％以上を達成したものを合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・マニュアル化できない学びを身に着けることが出来るよう工夫している。
・読む・報告する・書くに全く自信がなくとも、ゼミで2年間学び続けることで身につけられた、との意見を反映させ、2年間の計画をより充実させる。
・ゼミ合宿（2025年度は沖縄）、美術館見学、パレスチナ人の講演会参加、などがゼミの学びを深めるうえで好評だったので、同様の企画を継続する。

【学生が準備すべき機器他】
Web授業を行う場合はPCと安定した電波環境を必要とする。

【その他の重要事項】
（1）今泉が担当する以下の授業の受講、またすでに受講している場合は復習することを強く推奨する。
・国際文化学部「国際関係学概論Ⅰ」「国際関係学概論Ⅱ」
・法学部公開科目「オセアニアの政治と社会Ⅰ」「オセアニアの政治と社会Ⅱ」
（オセアニアに関心がなくとも、地域研究の方法や、地域社会から国際関係にアプローチする方法を学ぶことが出来る）
・国際文化研究科（「自由科目」として受講可能）
「異文化社会論ⅠA」、「異文化社会論ⅠB」
（2）授業計画はゼミ生の関心、進捗状況、国内外の情勢によって一部変更する場合もある。

【Outline (in English)】
【Course outline】 The aim of this seminar is to study various phenomena in "international relations" with a focus on "culture" as the activity of individuals and groups.
Currently, international relations are fraught with numerous problems such as war/conflict, immigration/refugees, inequality/discrimination, and so on. Even in recent years, issues like Israel-Palestine conflict, Russia's invasion of Ukraine, and the US invasion of Venezuela might illustrate how "peace through power" seems to be gaining acceptance. The voices of nations with economic and military strength, and those in politically and economically privileged positions, tend to dominate global affairs, while minorities who bear the brunt of these issues are often portrayed as powerless.
In this seminar, we will challenge the assumptions that we unconsciously accept — for example, that "international relations" are only about relationships between nations, that they are difficult to understand, or that events in distant places have no connection to us. We will learn how we ourselves are connected to various global phenomena and issues. In particular, we will reconsider "international relations" through the viewpoints of various human groups (such as ethnicity, nationality, local community, class, family, gender, generation, and so on) and the cultures that they based on for their activities.
As you begin to see previously invisible relationships with people and cultures you once thought were unrelated or unknown, you will encounter new perspectives and receive information that was previously inaccessible. Through these studies, you will gain a new understanding of "international relations," learn more deeply about topics that interest you, and find ways to reweave "international relations" from your own research and daily life, finding your own roles and possibilities.
【Learning Objectives】
(1) Learn the essential concepts, theories, and ideas necessary to understand and analyze "international relations," and acquire the methodologies of International Studies.
(2) Comprehend the main points of the text, think critically, and develop your own opinions.
(3)Acquire skills in presentation, discussion, and written expression; be able to understand others' opinions, logically express your own ideas.

(4)Reserch your topic based on your interests and deepen your learning in the seminar.
(5)Master research methods necessary for your research topic, including reviewing previous studies, conducting document surveys, analysis, and preparing academic papers.
(6)Through collaborative learning in the seminar, acquire methods for understanding others, communication, leadership, and cooperation.
[For Second-Year Students] Focus mainly on objectives (1) ～(4) and (6), you will prepare for SA and learning in the third year.
[This Year's Theme]
"International Relations Viewed from the Perspective of "Global Justice""
To put it simply, "Global Justice" refers to the application and development of ideas and efforts concerning "Social Justice" — which have traditionally been discussed within a single country — toward global issues that cross national borders. This concept has been debated in the fields of politics and philosophy in Europe and the United States, and concrete methods have been examined in areas such as international law and international cooperation. On the other hand, in the modern world, people who recognize locally specific problems as global issues are working together across borders under the banner of "Global Justice" to find solutions. For example, in various issues such as Climate Justice, Nuclear Justice, and Colonial Justice, as well as in region-specific issues like Palestine Justice or Ukraine Justice, people are situating the problems they face within the broader context of "Global Justice" and working to address them.
In this course, students will select specific issues that interest them and, by examining the efforts related to "Global Justice" made by people from diverse cultures around the world, will seek new ways to question and reweave "international relations."
【Learning activities outside of classroom】
(1)Each class will commence by 10-minute presentation and 15-minute discussion of the news article. Presenters should choose one article and analyze it critically.
(2)Presenters of each class will be expected to write resume based on the readings assigned for the class. The presentations will be prepared for deep understanding of the readings and further discussion using other non-assigned sources for their comments. Other students will also be expected to understand of the readings and prepare for comments and questions.
(3)Pre-class and post-class assignment task are expected to take approximately 2 hours each to complete.
【Grading Criteria/Policy】
This course will be evaluated through in class contribution espeically to group research/indivisual research based on attendance, preparation of readings, presentation, participation in discussion, etc.(50%), and assignment papers (50%).

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

今泉　裕美子

サブタイトル：「国際関係」を文化から捉え直し、つむぎ直す
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　このゼミでは、「国際関係」の諸現象を、人および人々の営みとしての「文化」を軸に学びます。
　現在の国際関係では、戦争／紛争、移民／難民、格差／差別など問題が山積し、ロシアのウクライナ侵攻、アメリカのベネズエラ侵攻など、「力による平和」がまかり通っているように見えます。経済力、軍事力を持つ国、政治・経済的に優位な人の声高な主張が世界を動かし、最もしわ寄せをうけるマイノリティは無力のように報じられがちです。深刻な現実に直面していることは確かですが、人類には問題を解決する手立ては全くないのでしょうか。
　ゼミでは、(1)「国際関係」を、人のさまざまな集団（民族、国民、地域社会、階級、家族、ジェンダー、世代など)、彼らの営みが育む文化から捉え直します。そして、(2)私たちが知らず知らずに受け入れている思い込み―たとえば「国際関係」は国家同士の関係だけ／理解が難しい／遠い場所で起きていることは自分に関係しない、など―をゆさぶり、自分が世界の諸現象や諸問題とどうつながっているのか、を学びます。
　これまで無関係だと思っていた／知らなかった人や人々の文化、彼らとの見えなかった関係が見えてくると、新たな出会いが生まれ、聞こえなかった声や情報もどんどん飛び込んできます。
　こうした学びを通じて「国際関係」を捉え直し、自分が興味あることをより深く知ったり、問題の解決の手立てや協力すべきパートナーを見いだす、など、自分の関心あるテーマ、日々の生活の中から「国際関係」をつむぎ直す方法、自分の役割や可能性を見つけてゆきます。

【到達目標】
１．「国際関係」の理解、分析に必要な概念、理論、思想を学び、国際関係学の方法論を習得する。
２．テキストの趣旨を的確に理解、批判的に考察し、自分の意見をもつことができる。
３．プレゼンテーションやディスカッション、学術的文章表現の方法を身に着け、他者の意見を理解し、自分の意見を論理的に表現できる。ディスカッションのファシリテーターを務めることができる。
４．自分の問題意識に基づくテーマを見つけ、そのテーマの追究を通じてゼミでの学びを深めることができる。
５．研究テーマに関して先行研究の検討、資料調査、分析、報告書・論文の作成など研究に必要な方法を習得できる。
６.ゼミという共同での学びによって他者理解、コミュニケーション、リーダーシップや協力などの方法を実践的に身に着ける。
【2年生】１〜４、６を中心に、SAや３年次の学びにつなげる準備ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【今年度のテーマ】”Global Justice”を手がかりに見る現代国際関係
"Global Justice"とは、大雑把に説明すれば、一国内で議論されてきた”Social Justice”に関する考え方や取り組みを、国境を越えた世界の問題に応用、発展させたものです。欧米の政治学、哲学の分野で議論され、国際法や国際協力などで具体的な方法が検討されてきました。一方、現代世界では、地域固有の問題をグローバルな問題として捉える人びとが、国境を越えて協力し合い、解決するうえで、これを掲げています。例えば、Climate Justice、Nuclear Justice、Colonial Justiceなど、また特定の地域の問題では、Palestine Justice、Ukraine Justiceなど、で”Global Justice”を求める多様な問題のなかに、自分たちが抱える問題を位置付け、取り組んでいます。
授業では具体的な問題を取り上げ、世界各地の異なる文化をもつ人たちの”Global Justice”に関連する取り組みから、「国際関係」を問い直し、つむぎ直す手立てを見出します。
【１年間の学びの概要】
・今年度のゼミテーマに関する導入的なテキスト、続いてテーマに直接関係するテキストをいずれも共同講読し、問題関心や論点を共有する。映像資料を用いる場合もある。
・ゼミの学びを踏まえ、各自が関心あるテーマに関する文献を選び、研究報告を行ったうえで、学期末にはレポートなど学術論文を提出する。
・秋学期には春学期での学びを深化・発展させるため、国際文化情報学会で報告する。3年生はグループで調査・研究し、4年生は個人でこれを行う。
【毎回の授業構成】
・輪番で１名が最近の新聞報道から関心ある記事を取り上げて報告(10分)、ディスカッション(10分)。
・担当する報告者はレジュメを作成、プレゼンテーションし、全体でディスカッションする。担当者以外もテキストを熟読し、基本的な用語を調べたり疑問や意見を準備する。
【その他】
学外施設の見学、講演会などへの参加、夏休み中のゼミ合宿、国内外の大学生などとの合同ゼミ、専門家などを招いての講演を行う場合もある。授業計画以外の内容となる場合は、ゼミ生と相談して日時を決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、スケジュール、自己紹介、各自の関心を共有。
2	個人研究に関する報告【４年生】	4年生の個人研究から、ゼミでの学びを知る。
3	「国際関係」へのアプローチ１　時間軸のなかで考える意義	時間軸のなかでみるとは？ 文字記録と非文字記録から、「国際関係」へのアプローチを考える。
4	「国際関係」へのアプローチ２　行為体（アクター）としての人の集団とその文化	「国際関係」の行為体としての人の集団のなかで、民族、階級、ジェンダーなどについて、またその文化的特徴を学ぶ。
5	「国際関係」へのアプローチ３　行為体としての「地域」とその文化	国際関係の行為体としての「地域」とその文化、「地域」研究の方法を学ぶ。
6	「国際関係」へアプローチ４　戦争・紛争下の文化	戦争・紛争下の文化の特徴、戦時下の情報伝達や分析について学ぶ。
7	春学期の中間総括	論点と課題の明確化。各自の問題関心を共有し、春学期後半の授業につなげる。
8	学術論文を読む、書くに関するワークショップ	研究テーマの設定の仕方、史・資料収集、分析、論文の読み方、書き方を学ぶ。
9	今年度のゼミテーマ”Global Justice"を手がかりに見る現代国際関係について	テーマに関するオリエンテーション。

10	Climate Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
11	Nuclear Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
12	地域紛争・戦争をめぐるJusticeの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
13	ゼミテーマに関する事例の総括と各自の関心の所在	３事例の論点、現代「国際関係」における問題の所在や取り組みの特徴をまとめる。各自の関心の変化や深まりを改めて共有する。
14	春学期の総括	春学期の学びの論点をまとめ、秋学期の学びにつなげる準備をする。
1	秋学期のオリエンテーション	秋学期の授業計画の確認。学部学会で報告する研究テーマ、研究計画を設定。
2	グループ研究の発表①	グループ研究の構想発表【３年生】
3	グループ研究の発表②	グループ研究の構想発表【３年生】
4	個人研究の発表①	個人研究の中間報告【４年生】
5	グループ研究の発表③	グループ研究の構想発表【３年生】
6	グループ研究の発表④	グループ研究の発表【３年生】
7	グループ研究の発表⑤	グループ研究の発表【３年生】
8	個人研究の発表②	学会向けの準備報告【４年生】
9	グループ研究の発表⑥	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の再検討。
10	グループ研究の発表⑦	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の最終確認。
11	国際文化情報学会での報告についてふり返り	学会の講評をもとに成果と課題を共有、今後の研究につなげる。
12	個人研究の発表③	これまでの学びを踏まえて、各自が関心をもったテーマについて報告【３年生】
13	個人研究の発表④	個人研究に関するゼミ論の提出【４年生】
14	秋学期と1年の総括	秋学期と1年の総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
(1)報告担当者はレジュメを作成してプレゼンテーションをする。非担当者も質問、意見を準備する。
(2)授業に関連する参考文献を読み、授業の理解を深める。
(3)グループ研究、個人研究のテーマを見つけ、関係する文献、史資料を自主的に探して読む。教員の指導を自主的に受ける。
(4)本授業の準備・復習時間には各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年（オンデマンドで入手可能）。
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
鹿野政直『歴史を学ぶこと』岩波書店、1998年。
斉藤孝他『学術論文の技法』（新訂版）日本エディタースクール出版部、2005年。
その他、随時提示する。

【参考書】
内藤 正典/岡野 八代編著『グローバル・ジャスティス―新たな正義論への招待』ミネルヴァ書房、2013年。
『思想』【特集】グローバル・ジャスティス、1155号、岩波書店、2020年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
・個人・グループ発表、発表資料の作成、ディスカッションへの参加（50％）
・課題提出　（50％）
本成績評価の方法をもとに、授業の到達目標の60％以上を達成したものを合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・マニュアル化できない学びを身に着けることが出来るよう工夫している。
・読む・報告する・書くに全く自信がなくとも、ゼミで2年間学び続けることで身につけられた、との意見を反映させ、2年間の計画をより充実させる。
・ゼミ合宿（2025年度は沖縄）、美術館見学、パレスチナ人の講演会参加、などがゼミの学びを深めるうえで好評だったので、同様の企画を継続する。

【学生が準備すべき機器他】
Web授業を行う場合はPCと安定した電波環境を必要とする。

【その他の重要事項】
（1）今泉が担当する以下の授業の受講、またすでに受講している場合は復習することを強く推奨する。
・国際文化学部「国際関係学概論Ⅰ」「国際関係学概論Ⅱ」
・法学部公開科目「オセアニアの政治と社会Ⅰ」「オセアニアの政治と社会Ⅱ」
（オセアニアに関心がなくとも、地域研究の方法や、地域社会から国際関係にアプローチする方法を学ぶことが出来る）
・国際文化研究科（「自由科目」として受講可能）
「異文化社会論ⅠA」、「異文化社会論ⅠB」
（2）授業計画はゼミ生の関心、進捗状況、国内外の情勢によって一部変更する場合もある。

【Outline (in English)】
【Course outline】 The aim of this seminar is to study various phenomena in "international relations" with a focus on "culture" as the activity of individuals and groups.
Currently, international relations are fraught with numerous problems such as war/conflict, immigration/refugees, inequality/discrimination, and so on. Even in recent years, issues like Israel-Palestine conflict, Russia's invasion of Ukraine, and the US invasion of Venezuela might illustrate how "peace through power" seems to be gaining acceptance. The voices of nations with economic and military strength, and those in politically and economically privileged positions, tend to dominate global affairs, while minorities who bear the brunt of these issues are often portrayed as powerless.
In this seminar, we will challenge the assumptions that we unconsciously accept — for example, that "international relations" are only about relationships between nations, that they are difficult to understand, or that events in distant places have no connection to us. We will learn how we ourselves are connected to various global phenomena and issues. In particular, we will reconsider "international relations" through the viewpoints of various human groups (such as ethnicity, nationality, local community, class, family, gender, generation, and so on) and the cultures that they based on for their activities.
As you begin to see previously invisible relationships with people and cultures you once thought were unrelated or unknown, you will encounter new perspectives and receive information that was previously inaccessible. Through these studies, you will gain a new understanding of "international relations," learn more deeply about topics that interest you, and find ways to reweave "international relations" from your own research and daily life, finding your own roles and possibilities.
【Learning Objectives】
(1) Learn the essential concepts, theories, and ideas necessary to understand and analyze "international relations," and acquire the methodologies of International Studies.
(2) Comprehend the main points of the text, think critically, and develop your own opinions.
(3)Acquire skills in presentation, discussion, and written expression; be able to understand others' opinions, logically express your own ideas.

(4)Reserch your topic based on your interests and deepen your learning in the seminar.
(5)Master research methods necessary for your research topic, including reviewing previous studies, conducting document surveys, analysis, and preparing academic papers.
(6)Through collaborative learning in the seminar, acquire methods for understanding others, communication, leadership, and cooperation.
[For Second-Year Students] Focus mainly on objectives (1) ～(4) and (6), you will prepare for SA and learning in the third year.
[This Year's Theme]
"International Relations Viewed from the Perspective of "Global Justice""
To put it simply, "Global Justice" refers to the application and development of ideas and efforts concerning "Social Justice" — which have traditionally been discussed within a single country — toward global issues that cross national borders. This concept has been debated in the fields of politics and philosophy in Europe and the United States, and concrete methods have been examined in areas such as international law and international cooperation. On the other hand, in the modern world, people who recognize locally specific problems as global issues are working together across borders under the banner of "Global Justice" to find solutions. For example, in various issues such as Climate Justice, Nuclear Justice, and Colonial Justice, as well as in region-specific issues like Palestine Justice or Ukraine Justice, people are situating the problems they face within the broader context of "Global Justice" and working to address them.
In this course, students will select specific issues that interest them and, by examining the efforts related to "Global Justice" made by people from diverse cultures around the world, will seek new ways to question and reweave "international relations."
【Learning activities outside of classroom】
(1)Each class will commence by 10-minute presentation and 15-minute discussion of the news article. Presenters should choose one article and analyze it critically.
(2)Presenters of each class will be expected to write resume based on the readings assigned for the class. The presentations will be prepared for deep understanding of the readings and further discussion using other non-assigned sources for their comments. Other students will also be expected to understand of the readings and prepare for comments and questions.
(3)Pre-class and post-class assignment task are expected to take approximately 2 hours each to complete.
【Grading Criteria/Policy】
This course will be evaluated through in class contribution espeically to group research/indivisual research based on attendance, preparation of readings, presentation, participation in discussion, etc.(50%), and assignment papers (50%).

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

今泉　裕美子

サブタイトル：「国際関係」を文化から捉え直し、つむぎ直す
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　このゼミでは、「国際関係」の諸現象を、人および人々の営みとしての「文化」を軸に学びます。
　現在の国際関係では、戦争／紛争、移民／難民、格差／差別など問題が山積し、ロシアのウクライナ侵攻、アメリカのベネズエラ侵攻など、「力による平和」がまかり通っているように見えます。経済力、軍事力を持つ国、政治・経済的に優位な人の声高な主張が世界を動かし、最もしわ寄せをうけるマイノリティは無力のように報じられがちです。深刻な現実に直面していることは確かですが、人類には問題を解決する手立ては全くないのでしょうか。
　ゼミでは、(1)「国際関係」を、人のさまざまな集団（民族、国民、地域社会、階級、家族、ジェンダー、世代など)、彼らの営みが育む文化から捉え直します。そして、(2)私たちが知らず知らずに受け入れている思い込み―たとえば「国際関係」は国家同士の関係だけ／理解が難しい／遠い場所で起きていることは自分に関係しない、など―をゆさぶり、自分が世界の諸現象や諸問題とどうつながっているのか、を学びます。
　これまで無関係だと思っていた／知らなかった人や人々の文化、彼らとの見えなかった関係が見えてくると、新たな出会いが生まれ、聞こえなかった声や情報もどんどん飛び込んできます。
　こうした学びを通じて「国際関係」を捉え直し、自分が興味あることをより深く知ったり、問題の解決の手立てや協力すべきパートナーを見いだす、など、自分の関心あるテーマ、日々の生活の中から「国際関係」をつむぎ直す方法、自分の役割や可能性を見つけてゆきます。

【到達目標】
１．「国際関係」の理解、分析に必要な概念、理論、思想を学び、国際関係学の方法論を習得する。
２．テキストの趣旨を的確に理解、批判的に考察し、自分の意見をもつことができる。
３．プレゼンテーションやディスカッション、学術的文章表現の方法を身に着け、他者の意見を理解し、自分の意見を論理的に表現できる。ディスカッションのファシリテーターを務めることができる。
４．自分の問題意識に基づくテーマを見つけ、そのテーマの追究を通じてゼミでの学びを深めることができる。
５．研究テーマに関して先行研究の検討、資料調査、分析、報告書・論文の作成など研究に必要な方法を習得できる。
６.ゼミという共同での学びによって他者理解、コミュニケーション、リーダーシップや協力などの方法を実践的に身に着ける。
【2年生】１〜４、６を中心に、SAや３年次の学びにつなげる準備ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【今年度のテーマ】”Global Justice”を手がかりに見る現代国際関係
"Global Justice"とは、大雑把に説明すれば、一国内で議論されてきた”Social Justice”に関する考え方や取り組みを、国境を越えた世界の問題に応用、発展させたものです。欧米の政治学、哲学の分野で議論され、国際法や国際協力などで具体的な方法が検討されてきました。一方、現代世界では、地域固有の問題をグローバルな問題として捉える人びとが、国境を越えて協力し合い、解決するうえで、これを掲げています。例えば、Climate Justice、Nuclear Justice、Colonial Justiceなど、また特定の地域の問題では、Palestine Justice、Ukraine Justiceなど、で”Global Justice”を求める多様な問題のなかに、自分たちが抱える問題を位置付け、取り組んでいます。
授業では具体的な問題を取り上げ、世界各地の異なる文化をもつ人たちの”Global Justice”に関連する取り組みから、「国際関係」を問い直し、つむぎ直す手立てを見出します。
【１年間の学びの概要】
・今年度のゼミテーマに関する導入的なテキスト、続いてテーマに直接関係するテキストをいずれも共同講読し、問題関心や論点を共有する。映像資料を用いる場合もある。
・ゼミの学びを踏まえ、各自が関心あるテーマに関する文献を選び、研究報告を行ったうえで、学期末にはレポートなど学術論文を提出する。
・秋学期には春学期での学びを深化・発展させるため、国際文化情報学会で報告する。3年生はグループで調査・研究し、4年生は個人でこれを行う。
【毎回の授業構成】
・輪番で１名が最近の新聞報道から関心ある記事を取り上げて報告(10分)、ディスカッション(10分)。
・担当する報告者はレジュメを作成、プレゼンテーションし、全体でディスカッションする。担当者以外もテキストを熟読し、基本的な用語を調べたり疑問や意見を準備する。
【その他】
学外施設の見学、講演会などへの参加、夏休み中のゼミ合宿、国内外の大学生などとの合同ゼミ、専門家などを招いての講演を行う場合もある。授業計画以外の内容となる場合は、ゼミ生と相談して日時を決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、スケジュール、自己紹介、各自の関心を共有。
2	個人研究に関する報告【４年生】	4年生の個人研究から、ゼミでの学びを知る。
3	「国際関係」へのアプローチ１　時間軸のなかで考える意義	時間軸のなかでみるとは？ 文字記録と非文字記録から、「国際関係」へのアプローチを考える。
4	「国際関係」へのアプローチ２　行為体（アクター）としての人の集団とその文化	「国際関係」の行為体としての人の集団のなかで、民族、階級、ジェンダーなどについて、またその文化的特徴を学ぶ。
5	「国際関係」へのアプローチ３　行為体としての「地域」とその文化	国際関係の行為体としての「地域」とその文化、「地域」研究の方法を学ぶ。
6	「国際関係」へアプローチ４　戦争・紛争下の文化	戦争・紛争下の文化の特徴、戦時下の情報伝達や分析について学ぶ。
7	春学期の中間総括	論点と課題の明確化。各自の問題関心を共有し、春学期後半の授業につなげる。
8	学術論文を読む、書くに関するワークショップ	研究テーマの設定の仕方、史・資料収集、分析、論文の読み方、書き方を学ぶ。
9	今年度のゼミテーマ”Global Justice"を手がかりに見る現代国際関係について	テーマに関するオリエンテーション。

10	Climate Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
11	Nuclear Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
12	地域紛争・戦争をめぐるJusticeの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
13	ゼミテーマに関する事例の総括と各自の関心の所在	３事例の論点、現代「国際関係」における問題の所在や取り組みの特徴をまとめる。各自の関心の変化や深まりを改めて共有する。
14	春学期の総括	春学期の学びの論点をまとめ、秋学期の学びにつなげる準備をする。
1	秋学期のオリエンテーション	秋学期の授業計画の確認。学部学会で報告する研究テーマ、研究計画を設定。
2	グループ研究の発表①	グループ研究の構想発表【３年生】
3	グループ研究の発表②	グループ研究の構想発表【３年生】
4	個人研究の発表①	個人研究の中間報告【４年生】
5	グループ研究の発表③	グループ研究の構想発表【３年生】
6	グループ研究の発表④	グループ研究の発表【３年生】
7	グループ研究の発表⑤	グループ研究の発表【３年生】
8	個人研究の発表②	学会向けの準備報告【４年生】
9	グループ研究の発表⑥	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の再検討。
10	グループ研究の発表⑦	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の最終確認。
11	国際文化情報学会での報告についてふり返り	学会の講評をもとに成果と課題を共有、今後の研究につなげる。
12	個人研究の発表③	これまでの学びを踏まえて、各自が関心をもったテーマについて報告【３年生】
13	個人研究の発表④	個人研究に関するゼミ論の提出【４年生】
14	秋学期と1年の総括	秋学期と1年の総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
(1)報告担当者はレジュメを作成してプレゼンテーションをする。非担当者も質問、意見を準備する。
(2)授業に関連する参考文献を読み、授業の理解を深める。
(3)グループ研究、個人研究のテーマを見つけ、関係する文献、史資料を自主的に探して読む。教員の指導を自主的に受ける。
(4)本授業の準備・復習時間には各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年（オンデマンドで入手可能）。
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
鹿野政直『歴史を学ぶこと』岩波書店、1998年。
斉藤孝他『学術論文の技法』（新訂版）日本エディタースクール出版部、2005年。
その他、随時提示する。

【参考書】
内藤 正典/岡野 八代編著『グローバル・ジャスティス―新たな正義論への招待』ミネルヴァ書房、2013年。
『思想』【特集】グローバル・ジャスティス、1155号、岩波書店、2020年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
・個人・グループ発表、発表資料の作成、ディスカッションへの参加（50％）
・課題提出　（50％）
本成績評価の方法をもとに、授業の到達目標の60％以上を達成したものを合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・マニュアル化できない学びを身に着けることが出来るよう工夫している。
・読む・報告する・書くに全く自信がなくとも、ゼミで2年間学び続けることで身につけられた、との意見を反映させ、2年間の計画をより充実させる。
・ゼミ合宿（2025年度は沖縄）、美術館見学、パレスチナ人の講演会参加、などがゼミの学びを深めるうえで好評だったので、同様の企画を継続する。

【学生が準備すべき機器他】
Web授業を行う場合はPCと安定した電波環境を必要とする。

【その他の重要事項】
（1）今泉が担当する以下の授業の受講、またすでに受講している場合は復習することを強く推奨する。
・国際文化学部「国際関係学概論Ⅰ」「国際関係学概論Ⅱ」
・法学部公開科目「オセアニアの政治と社会Ⅰ」「オセアニアの政治と社会Ⅱ」
（オセアニアに関心がなくとも、地域研究の方法や、地域社会から国際関係にアプローチする方法を学ぶことが出来る）
・国際文化研究科（「自由科目」として受講可能）
「異文化社会論ⅠA」、「異文化社会論ⅠB」
（2）授業計画はゼミ生の関心、進捗状況、国内外の情勢によって一部変更する場合もある。

【Outline (in English)】
【Course outline】　The aim of this seminar is to study various phenomena in "international relations" with a focus on "culture" as the activity of individuals and groups.
Currently, international relations are fraught with numerous problems such as war/conflict, immigration/refugees, inequality/discrimination, and so on. Even in recent years, issues like Israel-Palestine conflict, Russia's invasion of Ukraine, and the US invasion of Venezuela might illustrate how "peace through power" seems to be gaining acceptance. The voices of nations with economic and military strength, and those in politically and economically privileged positions, tend to dominate global affairs, while minorities who bear the brunt of these issues are often portrayed as powerless.
In this seminar, we will challenge the assumptions that we unconsciously accept — for example, that "international relations" are only about relationships between nations, that they are difficult to understand, or that events in distant places have no connection to us. We will learn how we ourselves are connected to various global phenomena and issues. In particular, we will reconsider "international relations" through the viewpoints of various human groups (such as ethnicity, nationality, local community, class, family, gender, generation, and so on) and the cultures that they based on for their activities.
As you begin to see previously invisible relationships with people and cultures you once thought were unrelated or unknown, you will encounter new perspectives and receive information that was previously inaccessible. Through these studies, you will gain a new understanding of "international relations," learn more deeply about topics that interest you, and find ways to reweave "international relations" from your own research and daily life, finding your own roles and possibilities.
【Learning Objectives】
(1) Learn the essential concepts, theories, and ideas necessary to understand and analyze "international relations," and acquire the methodologies of International Studies.
(2) Comprehend the main points of the text, think critically, and develop your own opinions.
(3)Acquire skills in presentation, discussion, and written expression; be able to understand others' opinions, logically express your own ideas.

(4)Reserch your topic based on your interests and deepen your learning in the seminar.
(5)Master research methods necessary for your research topic, including reviewing previous studies, conducting document surveys, analysis, and preparing academic papers.
(6)Through collaborative learning in the seminar, acquire methods for understanding others, communication, leadership, and cooperation.
[For Second-Year Students] Focus mainly on objectives (1) ～(4) and (6), you will prepare for SA and learning in the third year.
[This Year's Theme]
"International Relations Viewed from the Perspective of "Global Justice""
To put it simply, "Global Justice" refers to the application and development of ideas and efforts concerning "Social Justice" — which have traditionally been discussed within a single country — toward global issues that cross national borders. This concept has been debated in the fields of politics and philosophy in Europe and the United States, and concrete methods have been examined in areas such as international law and international cooperation. On the other hand, in the modern world, people who recognize locally specific problems as global issues are working together across borders under the banner of "Global Justice" to find solutions. For example, in various issues such as Climate Justice, Nuclear Justice, and Colonial Justice, as well as in region-specific issues like Palestine Justice or Ukraine Justice, people are situating the problems they face within the broader context of "Global Justice" and working to address them.
In this course, students will select specific issues that interest them and, by examining the efforts related to "Global Justice" made by people from diverse cultures around the world, will seek new ways to question and reweave "international relations."
【Learning activities outside of classroom】
(1)Each class will commence by 10-minute presentation and 15-minute discussion of the news article. Presenters should choose one article and analyze it critically.
(2)Presenters of each class will be expected to write resume based on the readings assigned for the class. The presentations will be prepared for deep understanding of the readings and further discussion using other non-assigned sources for their comments. Other students will also be expected to understand of the readings and prepare for comments and questions.
(3)Pre-class and post-class assignment task are expected to take approximately 2 hours each to complete.
【Grading Criteria/Policy】
This course will be evaluated through in class contribution espeically to group research/indivisual research based on attendance, preparation of readings, presentation, participation in discussion, etc.(50%), and assignment papers (50%).

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

今泉　裕美子

サブタイトル：「国際関係」を文化から捉え直し、つむぎ直す
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　このゼミでは、「国際関係」の諸現象を、人および人々の営みとしての「文化」を軸に学びます。
　現在の国際関係では、戦争／紛争、移民／難民、格差／差別など問題が山積し、ロシアのウクライナ侵攻、アメリカのベネズエラ侵攻など、「力による平和」がまかり通っているように見えます。経済力、軍事力を持つ国、政治・経済的に優位な人の声高な主張が世界を動かし、最もしわ寄せをうけるマイノリティは無力のように報じられがちです。深刻な現実に直面していることは確かですが、人類には問題を解決する手立ては全くないのでしょうか。
　ゼミでは、(1)「国際関係」を、人のさまざまな集団（民族、国民、地域社会、階級、家族、ジェンダー、世代など)、彼らの営みが育む文化から捉え直します。そして、(2)私たちが知らず知らずに受け入れている思い込み―たとえば「国際関係」は国家同士の関係だけ／理解が難しい／遠い場所で起きていることは自分に関係しない、など―をゆさぶり、自分が世界の諸現象や諸問題とどうつながっているのか、を学びます。
　これまで無関係だと思っていた／知らなかった人や人々の文化、彼らとの見えなかった関係が見えてくると、新たな出会いが生まれ、聞こえなかった声や情報もどんどん飛び込んできます。
　こうした学びを通じて「国際関係」を捉え直し、自分が興味あることをより深く知ったり、問題の解決の手立てや協力すべきパートナーを見いだす、など、自分の関心あるテーマ、日々の生活の中から「国際関係」をつむぎ直す方法、自分の役割や可能性を見つけてゆきます。

【到達目標】
１．「国際関係」の理解、分析に必要な概念、理論、思想を学び、国際関係学の方法論を習得する。
２．テキストの趣旨を的確に理解、批判的に考察し、自分の意見をもつことができる。
３．プレゼンテーションやディスカッション、学術的文章表現の方法を身に着け、他者の意見を理解し、自分の意見を論理的に表現できる。ディスカッションのファシリテーターを務めることができる。
４．自分の問題意識に基づくテーマを見つけ、そのテーマの追究を通じてゼミでの学びを深めることができる。
５．研究テーマに関して先行研究の検討、資料調査、分析、報告書・論文の作成など研究に必要な方法を習得できる。
６.ゼミという共同での学びによって他者理解、コミュニケーション、リーダーシップや協力などの方法を実践的に身に着ける。
【2年生】１〜４、６を中心に、SAや３年次の学びにつなげる準備ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【今年度のテーマ】”Global Justice”を手がかりに見る現代国際関係
"Global Justice"とは、大雑把に説明すれば、一国内で議論されてきた”Social Justice”に関する考え方や取り組みを、国境を越えた世界の問題に応用、発展させたものです。欧米の政治学、哲学の分野で議論され、国際法や国際協力などで具体的な方法が検討されてきました。一方、現代世界では、地域固有の問題をグローバルな問題として捉える人びとが、国境を越えて協力し合い、解決するうえで、これを掲げています。例えば、Climate Justice、Nuclear Justice、Colonial Justiceなど、また特定の地域の問題では、Palestine Justice、Ukraine Justiceなど、で”Global Justice”を求める多様な問題のなかに、自分たちが抱える問題を位置付け、取り組んでいます。
授業では具体的な問題を取り上げ、世界各地の異なる文化をもつ人たちの”Global Justice”に関連する取り組みから、「国際関係」を問い直し、つむぎ直す手立てを見出します。
【１年間の学びの概要】
・今年度のゼミテーマに関する導入的なテキスト、続いてテーマに直接関係するテキストをいずれも共同講読し、問題関心や論点を共有する。映像資料を用いる場合もある。
・ゼミの学びを踏まえ、各自が関心あるテーマに関する文献を選び、研究報告を行ったうえで、学期末にはレポートなど学術論文を提出する。
・秋学期には春学期での学びを深化・発展させるため、国際文化情報学会で報告する。3年生はグループで調査・研究し、4年生は個人でこれを行う。
【毎回の授業構成】
・輪番で１名が最近の新聞報道から関心ある記事を取り上げて報告(10分)、ディスカッション(10分)。
・担当する報告者はレジュメを作成、プレゼンテーションし、全体でディスカッションする。担当者以外もテキストを熟読し、基本的な用語を調べたり疑問や意見を準備する。
【その他】
学外施設の見学、講演会などへの参加、夏休み中のゼミ合宿、国内外の大学生などとの合同ゼミ、専門家などを招いての講演を行う場合もある。授業計画以外の内容となる場合は、ゼミ生と相談して日時を決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の進め方、スケジュール、自己紹介、各自の関心を共有。
2	個人研究に関する報告【４年生】	4年生の個人研究から、ゼミでの学びを知る。
3	「国際関係」へのアプローチ１　時間軸のなかで考える意義	時間軸のなかでみるとは？ 文字記録と非文字記録から、「国際関係」へのアプローチを考える。
4	「国際関係」へのアプローチ２　行為体（アクター）としての人の集団とその文化	「国際関係」の行為体としての人の集団のなかで、民族、階級、ジェンダーなどについて、またその文化的特徴を学ぶ。
5	「国際関係」へのアプローチ３　行為体としての「地域」とその文化	国際関係の行為体としての「地域」とその文化、「地域」研究の方法を学ぶ。
6	「国際関係」へアプローチ４　戦争・紛争下の文化	戦争・紛争下の文化の特徴、戦時下の情報伝達や分析について学ぶ。
7	春学期の中間総括	論点と課題の明確化。各自の問題関心を共有し、春学期後半の授業につなげる。
8	学術論文を読む、書くに関するワークショップ	研究テーマの設定の仕方、史・資料収集、分析、論文の読み方、書き方を学ぶ。
9	今年度のゼミテーマ”Global Justice"を手がかりに見る現代国際関係について	テーマに関するオリエンテーション。

10	Climate Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
11	Nuclear Justiceの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
12	地域紛争・戦争をめぐるJusticeの主張から考える	関連するテキストや映像資料を選んで報告、ディスカッションする。
13	ゼミテーマに関する事例の総括と各自の関心の所在	３事例の論点、現代「国際関係」における問題の所在や取り組みの特徴をまとめる。各自の関心の変化や深まりを改めて共有する。
14	春学期の総括	春学期の学びの論点をまとめ、秋学期の学びにつなげる準備をする。
1	秋学期のオリエンテーション	秋学期の授業計画の確認。学部学会で報告する研究テーマ、研究計画を設定。
2	グループ研究の発表①	グループ研究の構想発表【３年生】
3	グループ研究の発表②	グループ研究の構想発表【３年生】
4	個人研究の発表①	個人研究の中間報告【４年生】
5	グループ研究の発表③	グループ研究の構想発表【３年生】
6	グループ研究の発表④	グループ研究の発表【３年生】
7	グループ研究の発表⑤	グループ研究の発表【３年生】
8	個人研究の発表②	学会向けの準備報告【４年生】
9	グループ研究の発表⑥	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の再検討。
10	グループ研究の発表⑦	プレゼンテーションの予行、報告構成・内容の最終確認。
11	国際文化情報学会での報告についてふり返り	学会の講評をもとに成果と課題を共有、今後の研究につなげる。
12	個人研究の発表③	これまでの学びを踏まえて、各自が関心をもったテーマについて報告【３年生】
13	個人研究の発表④	個人研究に関するゼミ論の提出【４年生】
14	秋学期と1年の総括	秋学期と1年の総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
(1)報告担当者はレジュメを作成してプレゼンテーションをする。非担当者も質問、意見を準備する。
(2)授業に関連する参考文献を読み、授業の理解を深める。
(3)グループ研究、個人研究のテーマを見つけ、関係する文献、史資料を自主的に探して読む。教員の指導を自主的に受ける。
(4)本授業の準備・復習時間には各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年（オンデマンドで入手可能）。
百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
鹿野政直『歴史を学ぶこと』岩波書店、1998年。
斉藤孝他『学術論文の技法』（新訂版）日本エディタースクール出版部、2005年。
その他、随時提示する。

【参考書】
内藤 正典/岡野 八代編著『グローバル・ジャスティス―新たな正義論への招待』ミネルヴァ書房、2013年。
『思想』【特集】グローバル・ジャスティス、1155号、岩波書店、2020年。
その他、授業時に提示する。

【成績評価の方法と基準】
・個人・グループ発表、発表資料の作成、ディスカッションへの参加（50％）
・課題提出　（50％）
本成績評価の方法をもとに、授業の到達目標の60％以上を達成したものを合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・マニュアル化できない学びを身に着けることが出来るよう工夫している。
・読む・報告する・書くに全く自信がなくとも、ゼミで2年間学び続けることで身につけられた、との意見を反映させ、2年間の計画をより充実させる。
・ゼミ合宿（2025年度は沖縄）、美術館見学、パレスチナ人の講演会参加、などがゼミの学びを深めるうえで好評だったので、同様の企画を継続する。

【学生が準備すべき機器他】
Web授業を行う場合はPCと安定した電波環境を必要とする。

【その他の重要事項】
（1）今泉が担当する以下の授業の受講、またすでに受講している場合は復習することを強く推奨する。
・国際文化学部「国際関係学概論Ⅰ」「国際関係学概論Ⅱ」
・法学部公開科目「オセアニアの政治と社会Ⅰ」「オセアニアの政治と社会Ⅱ」
（オセアニアに関心がなくとも、地域研究の方法や、地域社会から国際関係にアプローチする方法を学ぶことが出来る）
・国際文化研究科（「自由科目」として受講可能）
「異文化社会論ⅠA」、「異文化社会論ⅠB」
（2）授業計画はゼミ生の関心、進捗状況、国内外の情勢によって一部変更する場合もある。

【Outline (in English)】
【Course outline】 The aim of this seminar is to study various phenomena in "international relations" with a focus on "culture" as the activity of individuals and groups.
Currently, international relations are fraught with numerous problems such as war/conflict, immigration/refugees, inequality/discrimination, and so on. Even in recent years, issues like Israel-Palestine conflict, Russia's invasion of Ukraine, and the US invasion of Venezuela might illustrate how "peace through power" seems to be gaining acceptance. The voices of nations with economic and military strength, and those in politically and economically privileged positions, tend to dominate global affairs, while minorities who bear the brunt of these issues are often portrayed as powerless.
In this seminar, we will challenge the assumptions that we unconsciously accept — for example, that "international relations" are only about relationships between nations, that they are difficult to understand, or that events in distant places have no connection to us. We will learn how we ourselves are connected to various global phenomena and issues. In particular, we will reconsider "international relations" through the viewpoints of various human groups (such as ethnicity, nationality, local community, class, family, gender, generation, and so on) and the cultures that they based on for their activities.
As you begin to see previously invisible relationships with people and cultures you once thought were unrelated or unknown, you will encounter new perspectives and receive information that was previously inaccessible. Through these studies, you will gain a new understanding of "international relations," learn more deeply about topics that interest you, and find ways to reweave "international relations" from your own research and daily life, finding your own roles and possibilities.
【Learning Objectives】
(1) Learn the essential concepts, theories, and ideas necessary to understand and analyze "international relations," and acquire the methodologies of International Studies.
(2) Comprehend the main points of the text, think critically, and develop your own opinions.
(3)Acquire skills in presentation, discussion, and written expression; be able to understand others' opinions, logically express your own ideas.

(4)Reserch your topic based on your interests and deepen your learning in the seminar.
(5)Master research methods necessary for your research topic, including reviewing previous studies, conducting document surveys, analysis, and preparing academic papers.
(6)Through collaborative learning in the seminar, acquire methods for understanding others, communication, leadership, and cooperation.
[For Second-Year Students] Focus mainly on objectives (1) ～(4) and (6), you will prepare for SA and learning in the third year.
[This Year's Theme]
"International Relations Viewed from the Perspective of "Global Justice""
To put it simply, "Global Justice" refers to the application and development of ideas and efforts concerning "Social Justice" — which have traditionally been discussed within a single country — toward global issues that cross national borders. This concept has been debated in the fields of politics and philosophy in Europe and the United States, and concrete methods have been examined in areas such as international law and international cooperation. On the other hand, in the modern world, people who recognize locally specific problems as global issues are working together across borders under the banner of "Global Justice" to find solutions. For example, in various issues such as Climate Justice, Nuclear Justice, and Colonial Justice, as well as in region-specific issues like Palestine Justice or Ukraine Justice, people are situating the problems they face within the broader context of "Global Justice" and working to address them.
In this course, students will select specific issues that interest them and, by examining the efforts related to "Global Justice" made by people from diverse cultures around the world, will seek new ways to question and reweave "international relations."
【Learning activities outside of classroom】
(1)Each class will commence by 10-minute presentation and 15-minute discussion of the news article. Presenters should choose one article and analyze it critically.
(2)Presenters of each class will be expected to write resume based on the readings assigned for the class. The presentations will be prepared for deep understanding of the readings and further discussion using other non-assigned sources for their comments. Other students will also be expected to understand of the readings and prepare for comments and questions.
(3)Pre-class and post-class assignment task are expected to take approximately 2 hours each to complete.
【Grading Criteria/Policy】
This course will be evaluated through in class contribution espeically to group research/indivisual research based on attendance, preparation of readings, presentation, participation in discussion, etc.(50%), and assignment papers (50%).

POL400GA（政治学 / Politics 400）

国際社会演習

大中　一彌

サブタイトル：熱狂と崩壊 ― 世界の「ヤバさ」を言語化する ―
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教養としての政治学をまなびます。
今日の世界はなぜ不安定に見えるのかと考えることをつうじて、学問に近づいていくゼミです。
ゼミを紹介する動画をご覧ください（12秒）
https://youtu.be/UZqVhD_U46I
春セメスターでは大学１年生向けの教科書をもちいるので、国際関係に関する基本的な見方が無理なく頭に入ってくるでしょう。ＳＤＧｓやジェンダー、ネットメディアといった学生の皆さんの関心が比較的高いトピックスだけでなく、国際文化学部ではあまり学ぶ機会のない、国際経済や組織犯罪といった話題についても、大学卒業後、社会人として知っておくべき情報を得ることができます。
秋セメスターでは、特定の分野を掘り下げた研究（各論）として、金融恐慌にかんする一般向けの読みやすい入門書をとりあげます。このシラバスを執筆している2026年1月の時点で、世界のあちこちで戦争が起きるいっぽう、各国でインフレが進み、株価は高い状況です。国内的・国際的な政治経済のトレンドがどのようにして人びとに熱を吹き込み、結果として危機が引き起こされ、平和や安定が崩壊に向かうのか ― あなたが暮らすことになる国際社会の近未来を考えるための入口として、過去の金融恐慌の展開を冷静にふりかえります。

【到達目標】
スポーツの分野で、あなたの筋力や柔軟性が増すと、たずさわることのできる競技の幅が広がったり、あなたの競技レベルが向上したりします。社会に関する理解についても似たところがあり、学生さん本人は必ずしも気づいていなくても、毎週ゼミ（演習）に参加して、少しずつ学びを積み重ねることで、得られる成果があります。このゼミにはじめて参加する学生の皆さんに、前提となる知識は求めていません。国際文化学部の２〜４年次に在籍している学生なら、国籍やジェンダーに関係なく、どなたでも歓迎です。むしろ、このゼミ（演習）における取り組みの方向性を示す下記の●１〜●３の内容に「そうだよね」とある程度うなづいてもらえる方を、ゼミの参加者として求めています：
●１．社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）を上（うわ）向（む）かせる。
読み書き能力（リテラシー）とは、文字を読んだり書いたりして意味を理解し、伝える能力のことです。日本語においてこの能力を伸ばすには、教科書や、メディアの言説に触れ、漢字の読みや言葉の意味がわからない場合、わからないまま放置せずに自分から調べることを習慣化することが助けになります。日本語以外の記事や論文をとりあげる場合、生成ＡＩ等による機械翻訳で得られた日本語をそのまま読み上げ、発表している本人が意味をよく分かっていないという状況がありえます。こうした状況は、発表できないよりは良いですが、中身が濃いとはいえません。外国語の構文や、書かれている論理的な内容を理解するには、時間や手間がかかります。時間の管理をしっかりとおこない、ていねいに発表を準備することで、ゼミの活動が、社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）の向上（こうじょう）に、つながっていくことでしょう。
●２．さまざまな文化にかんする視野や理解力を広げる。
国際文化学部のカリキュラム・ポリシーに見られる、文化的多様性を理解するには英語以外の言語が必要との認識から出発します。具体的には、英語を使える人と、それ以外の言語を使う人（諸外国語圏ＳＡ経験者・参加予定者など）をあまり区別立てして考えない、という姿勢が基本になります。日本国内では日本語だけ、海外では英語だけ使うという考えは、いわば地球全体を「国内の空間」と「海外の空間」の２つに分け、その上で、それぞれの空間における単一言語使用 Monolingualism を当然とする感覚にねざしています。しかし、１つの空間には１つの言語だけあればよく、複数の言語が共存する状況はちょっとイメージできませんというのでは、多文化的な感覚からは遠いです。１つの空間には１つの言語だけという、単一言語使用の考え方を疑うところから出発し、言語や文化の多様性をめぐる視野や感覚が広げられていく経験をしていくことになるでしょう。
●３．しくみとしての社会のイメージがあなたのなかで育つ。
地球全体にせよ、ひとつの町や村にせよ、さまざまな現象をうみだす社会はしくみとして複雑です。できるだけ、理解するのをあきらめたり、乱暴なやり方で単純化してしまったりという姿勢はとらないよう努めるところから、取り組みは始まります。その上で、ゼミ内外における学びや、他の人とのコミュニケーションを活用しつつ、現実の複雑さを反映したものの見方を育てる方向に、あなたは一歩ずつ進んでいくことになるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業の進め方と方法はつぎのとおりです：
１．教科書の輪読（授業内の発表＋議論）
２．新聞コーナー（学生による話題提供、報道のされ方の分析、討論）
なお、これらの課題にかんするフィードバックは基本的に授業時間内で行いますが、学習支援システムやGoogle ClassroomなどLMS上で行う場合もあります。
この科目は基本的に「対面授業」の科目です。ただし、特別な事情が発生した授業回（自然災害等による公共交通機関の混乱が起きた場合や、教員の体調不良の場合）において、例外的にZoomを使ったオンライン授業に切り替わります。また、個別の授業回について、学生側からの要望によるオンラインをつうじた柔軟な授業参加を認めます。ただし「対面授業」であるため、オンラインによる授業参加は１セメスターあたり、１人７回までとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法や各種ツールの利用方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	「ラストフロンティア」アフリカの始動	教科書①269-288ページに関する発表と議論 新聞コーナー
3	国際経済から見た国際関係	教科書①20-36ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	国際社会の法秩序と国連の役割	教科書①57-75ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	デモクラシーのジレンマ	教科書①76-93ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	貧困と社会開発	教科書①94-113ページに関する学生の発表と議論

7	発展途上国の開発問題と持続可能な開発目標（SDGs）	教科書①114-130ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	グローバル化とメディア	教科書①147-164ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	紛争はなぜ起こるのか ― シリア内戦と「イスラーム国」から考える ―	教科書①167-185ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	移民 ― 越境者たちが変える世界 ―	教科書①203-217ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	グローバル化時代の越境組織犯罪 ― ビジネス・悪漢（ワル）・安全保障 ―	教科書①218-234ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	米中覇権のせめぎあい	教科書①235-250ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	統合と分担の狭間で揺れるＥＵ	教科書①251-268ページに関する発表と議論
14	まとめ（予備日）	春セメスターの取り組みのふりかえりと、秋セメスター教科書の入手方法や夏休み以降のゼミ活動の方向性など
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	教員による話題提供	富裕層の金融資産に課税することはできるか？　― ガブリエル・ズックマンの主張
3	国際金融の仕組み―日本はこれからも経常収支黒字国でいられるか？	教科書②13-25ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	金本位制と大恐慌―戦争と債務	教科書②26-48ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	ブレトンウッズ体制と固定相場制の崩壊 ― 基軸通貨とは何か？	教科書②49-76ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	ドル大暴落 ― 変動相場制、オイルショック、インフレ	教科書②77-95ページに関する発表と議論 新聞コーナー
7	日米貿易摩擦 ― プラザ合意、円高パニック、バブル発生	教科書②96-119ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	発展途上国において多発する債務危機	教科書②120-138ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	アジア通貨危機（メキシコ、タイ、インドネシア、韓国）	教科書②139-163ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	ヘッジファンドの興亡 ― 国家が攻撃目標になる時	教科書②164-177ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	低所得者の住宅ローンとリーマンショック	教科書②178-208ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	ユーロ危機とトンネルの中の蛇	教科書②209-233ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	新型コロナ以降の世界 ― 次の危機はどこから？	教科書①234-253ページに関する発表と議論 新聞コーナー
14	まとめ（予備日）	4年生から2-3年生に伝えたいこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①過剰な勉強量にならないよう配慮しています。
②本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。この基準にしたがうなら、あなたがこの演習の予習や復習にかける時間は、１日あたり35分程度以上となります。

【テキスト（教科書）】
【春】教科書①足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野泰義編『プライマリー国際関係学』、ミネルヴァ書房、2021年。
【秋】教科書②宮崎成人『教養としての金融危機』講談社現代新書、2022年。

【参考書】
・法政大学オンラインデータベースに入っているJapanKnowledgeなどの事典・辞典類をもちい、分からない用語や単語を調べること
・Ｃ・Ｐ・キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』日本経済新聞社、2004年。
・ガブリエル・ズックマン『失われた国家の富　タックス・ヘイブンの経済学』ＮＴＴ出版、2015年。
・ジェラール・ノワリエル『フランスという坩堝（るつぼ）』法政大学出版局、2015年。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準はつぎのとおりです。
演習への出席は成績評価項目としてかかげられてはいませんが、教室に来るか、Zoomのどちらかで、水４～５限の時間帯に、演習の活動に参加することが、単位修得の前提条件となります。
1. 学生による発表（新聞コーナー１回３点満点；教科書発表１回10点満点）40%
2. 授業内の口頭による発言（例：教科書内容に関する質問・意見など） 15%
3. ＬＭＳ上の書き込み（例：学習支援システムの授業内掲示板やGoogle Classroomのコメント欄における、他の学生の発表内容に対する投稿など） 15%
4. 期末提出物（タームペーパーなど）30%
5. その他（授業運営への協力など）※上記1.～4. の項目の合計＝100%の枠外で5-20%相当の加点を行います。

【学生の意見等からの気づき】
【このゼミを取るか迷っている人へ】「必要な学びなのかもしれないけれど、難しそう、つまらなさそう」が多くの人にとって政治学の入り口です。しかし、ゼミで勉強して他の人の話を聞いたり、知識がついてくるのにしたがい「必要だし興味も持てる」に少しずつ変わっていきます。
【Zoomの併用（ハイフレックス）】就職活動や体調など、さまざまな事情で、教室での活動に参加しづらい場合、Zoomでの個人の参加を１セメスターあたり１人７回まで認めています。
【外国人留学生】法政大学国際文化学部に外国人留学生入試等を経て在籍している皆さんを歓迎しています。
【留学について】留学を推奨しています。ＳＡや派遣留学にこれから参加する、または、既に参加した人が、年度の途中からゼミを履修することに何の問題もありません。むしろ、派遣留学や認定留学等にあたって海外大学から求められる、語学以外の専門性を深め、慣れない海外生活にたいする心構えをつくる意味で、役立つゼミになりたいと願っています。
【２年生と４年生について】３年生以外、つまり２年生や４年生から初めてこのゼミに参加する方を歓迎しています。

【学生が準備すべき機器他】
報告原稿やさまざまな連絡、学期末の成果物の提出など、基本的にすべてウェブ上（学習支援システムやGoogle Classroom）で行なっています。また、自宅など学外からも法政大学図書館のオンラインデータベースがアクセスする目的で、VPN接続を使う場合があります。PressReaderの利用を新聞コーナーにかんし推奨しています。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や大学院進学などの相談もOKです。
・問い合わせ先や、このゼミで学ぶメリット、たとえば公務員試験等との関連について、次のリンク先をご覧ください　https://hosei.box.com/s/25yq62npyxme5zjuscx2kkn94uggg5z9

【Outline (in English)】
This seminar introduces students to basic conceptual instruments of political research with a focus on the notion of poverty in a comparative perspective. The students are expected to develop their media literacy necessary to critically evaluate political discourses. Topics will include inequality, labor politics, and centrality of social class in contemporary capitalism.
[Goals]
By the end of the course, students are expected to :
- Improving her or his literacy in the field of social sciences.
- Enhancing her or his multicultural competence.
- Elaborating her or his own image of society as a complex system.
[Work to be done outside of class (preparation, etc.)]
Students will be expected to have completed the required assignments before class meeting. According to the Standards for the Establishment of Universities in Japan, students are required to prepare and review at least four hours per session to earn two credits.
[Grading criteria]
Several components contribute to a student's final grade. Not the least of these is attendance. Your final grade is determined as follows:
1. Student presentations in the classroom (Brief weekly reports by each student on international or local news in Japan; In-class oral presentations on the textbook with preparation of a written summary) - 35%
2. Discussion / Active contribution (Participating in class discussions and Posting on the Learning Management System Message Board) - 20%
3. Other kinds of contribution (Cooperation in class management) - 10%
4. Term paper - 35%

POL400GA（政治学 / Politics 400）

国際社会演習

大中　一彌

サブタイトル：熱狂と崩壊 ― 世界の「ヤバさ」を言語化する ―
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教養としての政治学をまなびます。
今日の世界はなぜ不安定に見えるのかと考えることをつうじて、学問に近づいていくゼミです。
ゼミを紹介する動画をご覧ください（12秒）
https://youtu.be/UZqVhD_U46I
春セメスターでは大学１年生向けの教科書をもちいるので、国際関係に関する基本的な見方が無理なく頭に入ってくるでしょう。ＳＤＧｓやジェンダー、ネットメディアといった学生の皆さんの関心が比較的高いトピックスだけでなく、国際文化学部ではあまり学ぶ機会のない、国際経済や組織犯罪といった話題についても、大学卒業後、社会人として知っておくべき情報を得ることができます。
秋セメスターでは、特定の分野を掘り下げた研究（各論）として、金融恐慌にかんする一般向けの読みやすい入門書をとりあげます。このシラバスを執筆している2026年1月の時点で、世界のあちこちで戦争が起きるいっぽう、各国でインフレが進み、株価は高い状況です。国内的・国際的な政治経済のトレンドがどのようにして人びとに熱を吹き込み、結果として危機が引き起こされ、平和や安定が崩壊に向かうのか ― あなたが暮らすことになる国際社会の近未来を考えるための入口として、過去の金融恐慌の展開を冷静にふりかえります。

【到達目標】
スポーツの分野で、あなたの筋力や柔軟性が増すと、たずさわることのできる競技の幅が広がったり、あなたの競技レベルが向上したりします。社会に関する理解についても似たところがあり、学生さん本人は必ずしも気づいていなくても、毎週ゼミ（演習）に参加して、少しずつ学びを積み重ねることで、得られる成果があります。このゼミにはじめて参加する学生の皆さんに、前提となる知識は求めていません。国際文化学部の２〜４年次に在籍している学生なら、国籍やジェンダーに関係なく、どなたでも歓迎です。むしろ、このゼミ（演習）における取り組みの方向性を示す下記の●１〜●３の内容に「そうだよね」とある程度うなづいてもらえる方を、ゼミの参加者として求めています：
●１．社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）を上（うわ）向（む）かせる。
読み書き能力（リテラシー）とは、文字を読んだり書いたりして意味を理解し、伝える能力のことです。日本語においてこの能力を伸ばすには、教科書や、メディアの言説に触れ、漢字の読みや言葉の意味がわからない場合、わからないまま放置せずに自分から調べることを習慣化することが助けになります。日本語以外の記事や論文をとりあげる場合、生成ＡＩ等による機械翻訳で得られた日本語をそのまま読み上げ、発表している本人が意味をよく分かっていないという状況がありえます。こうした状況は、発表できないよりは良いですが、中身が濃いとはいえません。外国語の構文や、書かれている論理的な内容を理解するには、時間や手間がかかります。時間の管理をしっかりとおこない、ていねいに発表を準備することで、ゼミの活動が、社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）の向上（こうじょう）に、つながっていくことでしょう。
●２．さまざまな文化にかんする視野や理解力を広げる。
国際文化学部のカリキュラム・ポリシーに見られる、文化的多様性を理解するには英語以外の言語が必要との認識から出発します。具体的には、英語を使える人と、それ以外の言語を使う人（諸外国語圏ＳＡ経験者・参加予定者など）をあまり区別立てして考えない、という姿勢が基本になります。日本国内では日本語だけ、海外では英語だけ使うという考えは、いわば地球全体を「国内の空間」と「海外の空間」の２つに分け、その上で、それぞれの空間における単一言語使用 Monolingualism を当然とする感覚にねざしています。しかし、１つの空間には１つの言語だけあればよく、複数の言語が共存する状況はちょっとイメージできませんというのでは、多文化的な感覚からは遠いです。１つの空間には１つの言語だけという、単一言語使用の考え方を疑うところから出発し、言語や文化の多様性をめぐる視野や感覚が広げられていく経験をしていくことになるでしょう。
●３．しくみとしての社会のイメージがあなたのなかで育つ。
地球全体にせよ、ひとつの町や村にせよ、さまざまな現象をうみだす社会はしくみとして複雑です。できるだけ、理解するのをあきらめたり、乱暴なやり方で単純化してしまったりという姿勢はとらないよう努めるところから、取り組みは始まります。その上で、ゼミ内外における学びや、他の人とのコミュニケーションを活用しつつ、現実の複雑さを反映したものの見方を育てる方向に、あなたは一歩ずつ進んでいくことになるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業の進め方と方法はつぎのとおりです：
１．教科書の輪読（授業内の発表＋議論）
２．新聞コーナー（学生による話題提供、報道のされ方の分析、討論）
なお、これらの課題にかんするフィードバックは基本的に授業時間内で行いますが、学習支援システムやGoogle ClassroomなどLMS上で行う場合もあります。
この科目は基本的に「対面授業」の科目です。ただし、特別な事情が発生した授業回（自然災害等による公共交通機関の混乱が起きた場合や、教員の体調不良の場合）において、例外的にZoomを使ったオンライン授業に切り替わります。また、個別の授業回について、学生側からの要望によるオンラインをつうじた柔軟な授業参加を認めます。ただし「対面授業」であるため、オンラインによる授業参加は１セメスターあたり、１人７回までとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法や各種ツールの利用方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	「ラストフロンティア」アフリカの始動	教科書①269-288ページに関する発表と議論 新聞コーナー
3	国際経済から見た国際関係	教科書①20-36ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	国際社会の法秩序と国連の役割	教科書①57-75ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	デモクラシーのジレンマ	教科書①76-93ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	貧困と社会開発	教科書①94-113ページに関する学生の発表と議論

7	発展途上国の開発問題と持続可能な開発目標（SDGs）	教科書①114-130ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	グローバル化とメディア	教科書①147-164ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	紛争はなぜ起こるのか ― シリア内戦と「イスラーム国」から考える ―	教科書①167-185ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	移民 ― 越境者たちが変える世界 ―	教科書①203-217ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	グローバル化時代の越境組織犯罪 ― ビジネス・悪漢（ワル）・安全保障 ―	教科書①218-234ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	米中覇権のせめぎあい	教科書①235-250ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	統合と分担の狭間で揺れるＥＵ	教科書①251-268ページに関する発表と議論
14	まとめ（予備日）	春セメスターの取り組みのふりかえりと、秋セメスター教科書の入手方法や夏休み以降のゼミ活動の方向性など
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	教員による話題提供	富裕層の金融資産に課税することはできるか？　― ガブリエル・ズックマンの主張
3	国際金融の仕組み―日本はこれからも経常収支黒字国でいられるか？	教科書②13-25ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	金本位制と大恐慌―戦争と債務	教科書②26-48ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	ブレトンウッズ体制と固定相場制の崩壊 ― 基軸通貨とは何か？	教科書②49-76ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	ドル大暴落 ― 変動相場制、オイルショック、インフレ	教科書②77-95ページに関する発表と議論 新聞コーナー
7	日米貿易摩擦 ― プラザ合意、円高パニック、バブル発生	教科書②96-119ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	発展途上国において多発する債務危機	教科書②120-138ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	アジア通貨危機（メキシコ、タイ、インドネシア、韓国）	教科書②139-163ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	ヘッジファンドの興亡 ― 国家が攻撃目標になる時	教科書②164-177ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	低所得者の住宅ローンとリーマンショック	教科書②178-208ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	ユーロ危機とトンネルの中の蛇	教科書②209-233ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	新型コロナ以降の世界 ― 次の危機はどこから？	教科書①234-253ページに関する発表と議論 新聞コーナー
14	まとめ（予備日）	4年生から2-3年生に伝えたいこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①過剰な勉強量にならないよう配慮しています。
②本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。この基準にしたがうなら、あなたがこの演習の予習や復習にかける時間は、１日あたり35分程度以上となります。

【テキスト（教科書）】
【春】教科書①足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野泰義編『プライマリー国際関係学』、ミネルヴァ書房、2021年。
【秋】教科書②宮崎成人『教養としての金融危機』講談社現代新書、2022年。

【参考書】
・法政大学オンラインデータベースに入っているJapanKnowledgeなどの事典・辞典類をもちい、分からない用語や単語を調べること
・Ｃ・Ｐ・キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』日本経済新聞社、2004年。
・ガブリエル・ズックマン『失われた国家の富　タックス・ヘイブンの経済学』ＮＴＴ出版、2015年。
・ジェラール・ノワリエル『フランスという坩堝（るつぼ）』法政大学出版局、2015年。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準はつぎのとおりです。
演習への出席は成績評価項目としてかかげられてはいませんが、教室に来るか、Zoomのどちらかで、水４～５限の時間帯に、演習の活動に参加することが、単位修得の前提条件となります。
1. 学生による発表（新聞コーナー１回３点満点；教科書発表１回10点満点）40%
2. 授業内の口頭による発言（例：教科書内容に関する質問・意見など） 15%
3. ＬＭＳ上の書き込み（例：学習支援システムの授業内掲示板やGoogle Classroomのコメント欄における、他の学生の発表内容に対する投稿など） 15%
4. 期末提出物（タームペーパーなど）30%
5. その他（授業運営への協力など）※上記1.～4. の項目の合計＝100%の枠外で5-20%相当の加点を行います。

【学生の意見等からの気づき】
【このゼミを取るか迷っている人へ】「必要な学びなのかもしれないけれど、難しそう、つまらなさそう」が多くの人にとって政治学の入り口です。しかし、ゼミで勉強して他の人の話を聞いたり、知識がついてくるのにしたがい「必要だし興味も持てる」に少しずつ変わっていきます。
【Zoomの併用（ハイフレックス）】就職活動や体調など、さまざまな事情で、教室での活動に参加しづらい場合、Zoomでの個人の参加を１セメスターあたり１人７回まで認めています。
【外国人留学生】法政大学国際文化学部に外国人留学生入試等を経て在籍している皆さんを歓迎しています。
【留学について】留学を推奨しています。ＳＡや派遣留学にこれから参加する、または、既に参加した人が、年度の途中からゼミを履修することに何の問題もありません。むしろ、派遣留学や認定留学等にあたって海外大学から求められる、語学以外の専門性を深め、慣れない海外生活にたいする心構えをつくる意味で、役立つゼミになりたいと願っています。
【２年生と４年生について】３年生以外、つまり２年生や４年生から初めてこのゼミに参加する方を歓迎しています。

【学生が準備すべき機器他】
報告原稿やさまざまな連絡、学期末の成果物の提出など、基本的にすべてウェブ上（学習支援システムやGoogle Classroom）で行なっています。また、自宅など学外からも法政大学図書館のオンラインデータベースがアクセスする目的で、VPN接続を使う場合があります。PressReaderの利用を新聞コーナーにかんし推奨しています。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や大学院進学などの相談もOKです。
・問い合わせ先や、このゼミで学ぶメリット、たとえば公務員試験等との関連について、次のリンク先をご覧ください　https://hosei.box.com/s/25yq62npyxme5zjuscx2kkn94uggg5z9

【Outline (in English)】
This seminar introduces students to basic conceptual instruments of political research with a focus on the notion of poverty in a comparative perspective. The students are expected to develop their media literacy necessary to critically evaluate political discourses. Topics will include inequality, labor politics, and centrality of social class in contemporary capitalism.
[Goals]
By the end of the course, students are expected to :
- Improving her or his literacy in the field of social sciences.
- Enhancing her or his multicultural competence.
- Elaborating her or his own image of society as a complex system.
[Work to be done outside of class (preparation, etc.)]
Students will be expected to have completed the required assignments before class meeting. According to the Standards for the Establishment of Universities in Japan, students are required to prepare and review at least four hours per session to earn two credits.
[Grading criteria]
Several components contribute to a student's final grade. Not the least of these is attendance. Your final grade is determined as follows:
1. Student presentations in the classroom (Brief weekly reports by each student on international or local news in Japan; In-class oral presentations on the textbook with preparation of a written summary) - 35%
2. Discussion / Active contribution (Participating in class discussions and Posting on the Learning Management System Message Board) - 20%
3. Other kinds of contribution (Cooperation in class management) - 10%
4. Term paper - 35%

POL400GA（政治学 / Politics 400）

国際社会演習

大中　一彌

サブタイトル：熱狂と崩壊 ― 世界の「ヤバさ」を言語化する ―
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教養としての政治学をまなびます。
今日の世界はなぜ不安定に見えるのかと考えることをつうじて、学問に近づいていくゼミです。
ゼミを紹介する動画をご覧ください（12秒）
https://youtu.be/UZqVhD_U46I
春セメスターでは大学１年生向けの教科書をもちいるので、国際関係に関する基本的な見方が無理なく頭に入ってくるでしょう。ＳＤＧｓやジェンダー、ネットメディアといった学生の皆さんの関心が比較的高いトピックスだけでなく、国際文化学部ではあまり学ぶ機会のない、国際経済や組織犯罪といった話題についても、大学卒業後、社会人として知っておくべき情報を得ることができます。
秋セメスターでは、特定の分野を掘り下げた研究（各論）として、金融恐慌にかんする一般向けの読みやすい入門書をとりあげます。このシラバスを執筆している2026年1月の時点で、世界のあちこちで戦争が起きるいっぽう、各国でインフレが進み、株価は高い状況です。国内的・国際的な政治経済のトレンドがどのようにして人びとに熱を吹き込み、結果として危機が引き起こされ、平和や安定が崩壊に向かうのか ― あなたが暮らすことになる国際社会の近未来を考えるための入口として、過去の金融恐慌の展開を冷静にふりかえります。

【到達目標】
スポーツの分野で、あなたの筋力や柔軟性が増すと、たずさわることのできる競技の幅が広がったり、あなたの競技レベルが向上したりします。社会に関する理解についても似たところがあり、学生さん本人は必ずしも気づいていなくても、毎週ゼミ（演習）に参加して、少しずつ学びを積み重ねることで、得られる成果があります。このゼミにはじめて参加する学生の皆さんに、前提となる知識は求めていません。国際文化学部の２〜４年次に在籍している学生なら、国籍やジェンダーに関係なく、どなたでも歓迎です。むしろ、このゼミ（演習）における取り組みの方向性を示す下記の●１〜●３の内容に「そうだよね」とある程度うなづいてもらえる方を、ゼミの参加者として求めています：
●１．社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）を上（うわ）向（む）かせる。
読み書き能力（リテラシー）とは、文字を読んだり書いたりして意味を理解し、伝える能力のことです。日本語においてこの能力を伸ばすには、教科書や、メディアの言説に触れ、漢字の読みや言葉の意味がわからない場合、わからないまま放置せずに自分から調べることを習慣化することが助けになります。日本語以外の記事や論文をとりあげる場合、生成ＡＩ等による機械翻訳で得られた日本語をそのまま読み上げ、発表している本人が意味をよく分かっていないという状況がありえます。こうした状況は、発表できないよりは良いですが、中身が濃いとはいえません。外国語の構文や、書かれている論理的な内容を理解するには、時間や手間がかかります。時間の管理をしっかりとおこない、ていねいに発表を準備することで、ゼミの活動が、社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）の向上（こうじょう）に、つながっていくことでしょう。
●２．さまざまな文化にかんする視野や理解力を広げる。
国際文化学部のカリキュラム・ポリシーに見られる、文化的多様性を理解するには英語以外の言語が必要との認識から出発します。具体的には、英語を使える人と、それ以外の言語を使う人（諸外国語圏ＳＡ経験者・参加予定者など）をあまり区別立てして考えない、という姿勢が基本になります。日本国内では日本語だけ、海外では英語だけ使うという考えは、いわば地球全体を「国内の空間」と「海外の空間」の２つに分け、その上で、それぞれの空間における単一言語使用 Monolingualism を当然とする感覚にねざしています。しかし、１つの空間には１つの言語だけあればよく、複数の言語が共存する状況はちょっとイメージできませんというのでは、多文化的な感覚からは遠いです。１つの空間には１つの言語だけという、単一言語使用の考え方を疑うところから出発し、言語や文化の多様性をめぐる視野や感覚が広げられていく経験をしていくことになるでしょう。
●３．しくみとしての社会のイメージがあなたのなかで育つ。
地球全体にせよ、ひとつの町や村にせよ、さまざまな現象をうみだす社会はしくみとして複雑です。できるだけ、理解するのをあきらめたり、乱暴なやり方で単純化してしまったりという姿勢はとらないよう努めるところから、取り組みは始まります。その上で、ゼミ内外における学びや、他の人とのコミュニケーションを活用しつつ、現実の複雑さを反映したものの見方を育てる方向に、あなたは一歩ずつ進んでいくことになるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業の進め方と方法はつぎのとおりです：
１．教科書の輪読（授業内の発表＋議論）
２．新聞コーナー（学生による話題提供、報道のされ方の分析、討論）
なお、これらの課題にかんするフィードバックは基本的に授業時間内で行いますが、学習支援システムやGoogle ClassroomなどLMS上で行う場合もあります。
この科目は基本的に「対面授業」の科目です。ただし、特別な事情が発生した授業回（自然災害等による公共交通機関の混乱が起きた場合や、教員の体調不良の場合）において、例外的にZoomを使ったオンライン授業に切り替わります。また、個別の授業回について、学生側からの要望によるオンラインをつうじた柔軟な授業参加を認めます。ただし「対面授業」であるため、オンラインによる授業参加は１セメスターあたり、１人７回までとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法や各種ツールの利用方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	「ラストフロンティア」アフリカの始動	教科書①269-288ページに関する発表と議論 新聞コーナー
3	国際経済から見た国際関係	教科書①20-36ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	国際社会の法秩序と国連の役割	教科書①57-75ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	デモクラシーのジレンマ	教科書①76-93ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	貧困と社会開発	教科書①94-113ページに関する学生の発表と議論

7	発展途上国の開発問題と持続可能な開発目標（SDGs）	教科書①114-130ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	グローバル化とメディア	教科書①147-164ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	紛争はなぜ起こるのか ― シリア内戦と「イスラーム国」から考える ―	教科書①167-185ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	移民 ― 越境者たちが変える世界 ―	教科書①203-217ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	グローバル化時代の越境組織犯罪 ― ビジネス・悪漢（ワル）・安全保障 ―	教科書①218-234ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	米中覇権のせめぎあい	教科書①235-250ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	統合と分担の狭間で揺れるＥＵ	教科書①251-268ページに関する発表と議論
14	まとめ（予備日）	春セメスターの取り組みのふりかえりと、秋セメスター教科書の入手方法や夏休み以降のゼミ活動の方向性など
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	教員による話題提供	富裕層の金融資産に課税することはできるか？　― ガブリエル・ズックマンの主張
3	国際金融の仕組み―日本はこれからも経常収支黒字国でいられるか？	教科書②13-25ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	金本位制と大恐慌―戦争と債務	教科書②26-48ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	ブレトンウッズ体制と固定相場制の崩壊 ― 基軸通貨とは何か？	教科書②49-76ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	ドル大暴落 ― 変動相場制、オイルショック、インフレ	教科書②77-95ページに関する発表と議論 新聞コーナー
7	日米貿易摩擦 ― プラザ合意、円高パニック、バブル発生	教科書②96-119ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	発展途上国において多発する債務危機	教科書②120-138ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	アジア通貨危機（メキシコ、タイ、インドネシア、韓国）	教科書②139-163ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	ヘッジファンドの興亡 ― 国家が攻撃目標になる時	教科書②164-177ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	低所得者の住宅ローンとリーマンショック	教科書②178-208ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	ユーロ危機とトンネルの中の蛇	教科書②209-233ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	新型コロナ以降の世界 ― 次の危機はどこから？	教科書①234-253ページに関する発表と議論 新聞コーナー
14	まとめ（予備日）	4年生から2-3年生に伝えたいこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①過剰な勉強量にならないよう配慮しています。
②本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。この基準にしたがうなら、あなたがこの演習の予習や復習にかける時間は、１日あたり35分程度以上となります。

【テキスト（教科書）】
【春】教科書①足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野泰義編『プライマリー国際関係学』、ミネルヴァ書房、2021年。
【秋】教科書②宮崎成人『教養としての金融危機』講談社現代新書、2022年。

【参考書】
・法政大学オンラインデータベースに入っているJapanKnowledgeなどの事典・辞典類をもちい、分からない用語や単語を調べること
・Ｃ・Ｐ・キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』日本経済新聞社、2004年。
・ガブリエル・ズックマン『失われた国家の富　タックス・ヘイブンの経済学』ＮＴＴ出版、2015年。
・ジェラール・ノワリエル『フランスという坩堝（るつぼ）』法政大学出版局、2015年。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準はつぎのとおりです。
演習への出席は成績評価項目としてかかげられてはいませんが、教室に来るか、Zoomのどちらかで、水４～５限の時間帯に、演習の活動に参加することが、単位修得の前提条件となります。
1. 学生による発表（新聞コーナー１回３点満点；教科書発表１回10点満点）40%
2. 授業内の口頭による発言（例：教科書内容に関する質問・意見など） 15%
3. ＬＭＳ上の書き込み（例：学習支援システムの授業内掲示板やGoogle Classroomのコメント欄における、他の学生の発表内容に対する投稿など） 15%
4. 期末提出物（タームペーパーなど）30%
5. その他（授業運営への協力など）※上記1.～4. の項目の合計＝100%の枠外で5-20%相当の加点を行います。

【学生の意見等からの気づき】
【このゼミを取るか迷っている人へ】「必要な学びなのかもしれないけれど、難しそう、つまらなさそう」が多くの人にとって政治学の入り口です。しかし、ゼミで勉強して他の人の話を聞いたり、知識がついてくるのにしたがい「必要だし興味も持てる」に少しずつ変わっていきます。
【Zoomの併用（ハイフレックス）】就職活動や体調など、さまざまな事情で、教室での活動に参加しづらい場合、Zoomでの個人の参加を１セメスターあたり１人７回まで認めています。
【外国人留学生】法政大学国際文化学部に外国人留学生入試等を経て在籍している皆さんを歓迎しています。
【留学について】留学を推奨しています。ＳＡや派遣留学にこれから参加する、または、既に参加した人が、年度の途中からゼミを履修することに何の問題もありません。むしろ、派遣留学や認定留学等にあたって海外大学から求められる、語学以外の専門性を深め、慣れない海外生活にたいする心構えをつくる意味で、役立つゼミになりたいと願っています。
【２年生と４年生について】３年生以外、つまり２年生や４年生から初めてこのゼミに参加する方を歓迎しています。

【学生が準備すべき機器他】
報告原稿やさまざまな連絡、学期末の成果物の提出など、基本的にすべてウェブ上（学習支援システムやGoogle Classroom）で行なっています。また、自宅など学外からも法政大学図書館のオンラインデータベースがアクセスする目的で、VPN接続を使う場合があります。PressReaderの利用を新聞コーナーにかんし推奨しています。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や大学院進学などの相談もOKです。
・問い合わせ先や、このゼミで学ぶメリット、たとえば公務員試験等との関連について、次のリンク先をご覧ください　https://hosei.box.com/s/25yq62npyxme5zjuscx2kkn94uggg5z9

【Outline (in English)】
This seminar introduces students to basic conceptual instruments of political research with a focus on the notion of poverty in a comparative perspective. The students are expected to develop their media literacy necessary to critically evaluate political discourses. Topics will include inequality, labor politics, and centrality of social class in contemporary capitalism.
[Goals]
By the end of the course, students are expected to :
- Improving her or his literacy in the field of social sciences.
- Enhancing her or his multicultural competence.
- Elaborating her or his own image of society as a complex system.
[Work to be done outside of class (preparation, etc.)]
Students will be expected to have completed the required assignments before class meeting. According to the Standards for the Establishment of Universities in Japan, students are required to prepare and review at least four hours per session to earn two credits.
[Grading criteria]
Several components contribute to a student's final grade. Not the least of these is attendance. Your final grade is determined as follows:
1. Student presentations in the classroom (Brief weekly reports by each student on international or local news in Japan; In-class oral presentations on the textbook with preparation of a written summary) - 35%
2. Discussion / Active contribution (Participating in class discussions and Posting on the Learning Management System Message Board) - 20%
3. Other kinds of contribution (Cooperation in class management) - 10%
4. Term paper - 35%

POL400GA（政治学 / Politics 400）

国際社会演習

大中　一彌

サブタイトル：熱狂と崩壊 ― 世界の「ヤバさ」を言語化する ―
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教養としての政治学をまなびます。
今日の世界はなぜ不安定に見えるのかと考えることをつうじて、学問に近づいていくゼミです。
ゼミを紹介する動画をご覧ください（12秒）
https://youtu.be/UZqVhD_U46I
春セメスターでは大学１年生向けの教科書をもちいるので、国際関係に関する基本的な見方が無理なく頭に入ってくるでしょう。ＳＤＧｓやジェンダー、ネットメディアといった学生の皆さんの関心が比較的高いトピックスだけでなく、国際文化学部ではあまり学ぶ機会のない、国際経済や組織犯罪といった話題についても、大学卒業後、社会人として知っておくべき情報を得ることができます。
秋セメスターでは、特定の分野を掘り下げた研究（各論）として、金融恐慌にかんする一般向けの読みやすい入門書をとりあげます。このシラバスを執筆している2026年1月の時点で、世界のあちこちで戦争が起きるいっぽう、各国でインフレが進み、株価は高い状況です。国内的・国際的な政治経済のトレンドがどのようにして人びとに熱を吹き込み、結果として危機が引き起こされ、平和や安定が崩壊に向かうのか ― あなたが暮らすことになる国際社会の近未来を考えるための入口として、過去の金融恐慌の展開を冷静にふりかえります。

【到達目標】
スポーツの分野で、あなたの筋力や柔軟性が増すと、たずさわることのできる競技の幅が広がったり、あなたの競技レベルが向上したりします。社会に関する理解についても似たところがあり、学生さん本人は必ずしも気づいていなくても、毎週ゼミ（演習）に参加して、少しずつ学びを積み重ねることで、得られる成果があります。このゼミにはじめて参加する学生の皆さんに、前提となる知識は求めていません。国際文化学部の２〜４年次に在籍している学生なら、国籍やジェンダーに関係なく、どなたでも歓迎です。むしろ、このゼミ（演習）における取り組みの方向性を示す下記の●１〜●３の内容に「そうだよね」とある程度うなづいてもらえる方を、ゼミの参加者として求めています：
●１．社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）を上（うわ）向（む）かせる。
読み書き能力（リテラシー）とは、文字を読んだり書いたりして意味を理解し、伝える能力のことです。日本語においてこの能力を伸ばすには、教科書や、メディアの言説に触れ、漢字の読みや言葉の意味がわからない場合、わからないまま放置せずに自分から調べることを習慣化することが助けになります。日本語以外の記事や論文をとりあげる場合、生成ＡＩ等による機械翻訳で得られた日本語をそのまま読み上げ、発表している本人が意味をよく分かっていないという状況がありえます。こうした状況は、発表できないよりは良いですが、中身が濃いとはいえません。外国語の構文や、書かれている論理的な内容を理解するには、時間や手間がかかります。時間の管理をしっかりとおこない、ていねいに発表を準備することで、ゼミの活動が、社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）の向上（こうじょう）に、つながっていくことでしょう。
●２．さまざまな文化にかんする視野や理解力を広げる。
国際文化学部のカリキュラム・ポリシーに見られる、文化的多様性を理解するには英語以外の言語が必要との認識から出発します。具体的には、英語を使える人と、それ以外の言語を使う人（諸外国語圏ＳＡ経験者・参加予定者など）をあまり区別立てして考えない、という姿勢が基本になります。日本国内では日本語だけ、海外では英語だけ使うという考えは、いわば地球全体を「国内の空間」と「海外の空間」の２つに分け、その上で、それぞれの空間における単一言語使用 Monolingualism を当然とする感覚にねざしています。しかし、１つの空間には１つの言語だけあればよく、複数の言語が共存する状況はちょっとイメージできませんというのでは、多文化的な感覚からは遠いです。１つの空間には１つの言語だけという、単一言語使用の考え方を疑うところから出発し、言語や文化の多様性をめぐる視野や感覚が広げられていく経験をしていくことになるでしょう。
●３．しくみとしての社会のイメージがあなたのなかで育つ。
地球全体にせよ、ひとつの町や村にせよ、さまざまな現象をうみだす社会はしくみとして複雑です。できるだけ、理解するのをあきらめたり、乱暴なやり方で単純化してしまったりという姿勢はとらないよう努めるところから、取り組みは始まります。その上で、ゼミ内外における学びや、他の人とのコミュニケーションを活用しつつ、現実の複雑さを反映したものの見方を育てる方向に、あなたは一歩ずつ進んでいくことになるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業の進め方と方法はつぎのとおりです：
１．教科書の輪読（授業内の発表＋議論）
２．新聞コーナー（学生による話題提供、報道のされ方の分析、討論）
なお、これらの課題にかんするフィードバックは基本的に授業時間内で行いますが、学習支援システムやGoogle ClassroomなどLMS上で行う場合もあります。
この科目は基本的に「対面授業」の科目です。ただし、特別な事情が発生した授業回（自然災害等による公共交通機関の混乱が起きた場合や、教員の体調不良の場合）において、例外的にZoomを使ったオンライン授業に切り替わります。また、個別の授業回について、学生側からの要望によるオンラインをつうじた柔軟な授業参加を認めます。ただし「対面授業」であるため、オンラインによる授業参加は１セメスターあたり、１人７回までとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法や各種ツールの利用方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	「ラストフロンティア」アフリカの始動	教科書①269-288ページに関する発表と議論 新聞コーナー
3	国際経済から見た国際関係	教科書①20-36ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	国際社会の法秩序と国連の役割	教科書①57-75ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	デモクラシーのジレンマ	教科書①76-93ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	貧困と社会開発	教科書①94-113ページに関する学生の発表と議論

7	発展途上国の開発問題と持続可能な開発目標（SDGs）	教科書①114-130ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	グローバル化とメディア	教科書①147-164ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	紛争はなぜ起こるのか ― シリア内戦と「イスラーム国」から考える ―	教科書①167-185ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	移民 ― 越境者たちが変える世界 ―	教科書①203-217ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	グローバル化時代の越境組織犯罪 ― ビジネス・悪漢（ワル）・安全保障 ―	教科書①218-234ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	米中覇権のせめぎあい	教科書①235-250ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	統合と分担の狭間で揺れるＥＵ	教科書①251-268ページに関する発表と議論
14	まとめ（予備日）	春セメスターの取り組みのふりかえりと、秋セメスター教科書の入手方法や夏休み以降のゼミ活動の方向性など
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	教員による話題提供	富裕層の金融資産に課税することはできるか？　― ガブリエル・ズックマンの主張
3	国際金融の仕組み―日本はこれからも経常収支黒字国でいられるか？	教科書②13-25ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	金本位制と大恐慌―戦争と債務	教科書②26-48ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	ブレトンウッズ体制と固定相場制の崩壊 ― 基軸通貨とは何か？	教科書②49-76ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	ドル大暴落 ― 変動相場制、オイルショック、インフレ	教科書②77-95ページに関する発表と議論 新聞コーナー
7	日米貿易摩擦 ― プラザ合意、円高パニック、バブル発生	教科書②96-119ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	発展途上国において多発する債務危機	教科書②120-138ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	アジア通貨危機（メキシコ、タイ、インドネシア、韓国）	教科書②139-163ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	ヘッジファンドの興亡 ― 国家が攻撃目標になる時	教科書②164-177ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	低所得者の住宅ローンとリーマンショック	教科書②178-208ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	ユーロ危機とトンネルの中の蛇	教科書②209-233ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	新型コロナ以降の世界 ― 次の危機はどこから？	教科書①234-253ページに関する発表と議論 新聞コーナー
14	まとめ（予備日）	4年生から2-3年生に伝えたいこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①過剰な勉強量にならないよう配慮しています。
②本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。この基準にしたがうなら、あなたがこの演習の予習や復習にかける時間は、１日あたり35分程度以上となります。

【テキスト（教科書）】
【春】教科書①足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野泰義編『プライマリー国際関係学』、ミネルヴァ書房、2021年。
【秋】教科書②宮崎成人『教養としての金融危機』講談社現代新書、2022年。

【参考書】
・法政大学オンラインデータベースに入っているJapanKnowledgeなどの事典・辞典類をもちい、分からない用語や単語を調べること
・Ｃ・Ｐ・キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』日本経済新聞社、2004年。
・ガブリエル・ズックマン『失われた国家の富　タックス・ヘイブンの経済学』ＮＴＴ出版、2015年。
・ジェラール・ノワリエル『フランスという坩堝（るつぼ）』法政大学出版局、2015年。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準はつぎのとおりです。
演習への出席は成績評価項目としてかかげられてはいませんが、教室に来るか、Zoomのどちらかで、水４～５限の時間帯に、演習の活動に参加することが、単位修得の前提条件となります。
1. 学生による発表（新聞コーナー１回３点満点；教科書発表１回10点満点）40%
2. 授業内の口頭による発言（例：教科書内容に関する質問・意見など） 15%
3. ＬＭＳ上の書き込み（例：学習支援システムの授業内掲示板やGoogle Classroomのコメント欄における、他の学生の発表内容に対する投稿など） 15%
4. 期末提出物（タームペーパーなど）30%
5. その他（授業運営への協力など）※上記1.～4. の項目の合計＝100%の枠外で5-20%相当の加点を行います。

【学生の意見等からの気づき】
【このゼミを取るか迷っている人へ】「必要な学びなのかもしれないけれど、難しそう、つまらなさそう」が多くの人にとって政治学の入り口です。しかし、ゼミで勉強して他の人の話を聞いたり、知識がついてくるのにしたがい「必要だし興味も持てる」に少しずつ変わっていきます。
【Zoomの併用（ハイフレックス）】就職活動や体調など、さまざまな事情で、教室での活動に参加しづらい場合、Zoomでの個人の参加を１セメスターあたり１人７回まで認めています。
【外国人留学生】法政大学国際文化学部に外国人留学生入試等を経て在籍している皆さんを歓迎しています。
【留学について】留学を推奨しています。ＳＡや派遣留学にこれから参加する、または、既に参加した人が、年度の途中からゼミを履修することに何の問題もありません。むしろ、派遣留学や認定留学等にあたって海外大学から求められる、語学以外の専門性を深め、慣れない海外生活にたいする心構えをつくる意味で、役立つゼミになりたいと願っています。
【２年生と４年生について】３年生以外、つまり２年生や４年生から初めてこのゼミに参加する方を歓迎しています。

【学生が準備すべき機器他】
報告原稿やさまざまな連絡、学期末の成果物の提出など、基本的にすべてウェブ上（学習支援システムやGoogle Classroom）で行なっています。また、自宅など学外からも法政大学図書館のオンラインデータベースがアクセスする目的で、VPN接続を使う場合があります。PressReaderの利用を新聞コーナーにかんし推奨しています。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や大学院進学などの相談もOKです。
・問い合わせ先や、このゼミで学ぶメリット、たとえば公務員試験等との関連について、次のリンク先をご覧ください　https://hosei.box.com/s/25yq62npyxme5zjuscx2kkn94uggg5z9

【Outline (in English)】
This seminar introduces students to basic conceptual instruments of political research with a focus on the notion of poverty in a comparative perspective. The students are expected to develop their media literacy necessary to critically evaluate political discourses. Topics will include inequality, labor politics, and centrality of social class in contemporary capitalism.
[Goals]
By the end of the course, students are expected to :
- Improving her or his literacy in the field of social sciences.
- Enhancing her or his multicultural competence.
- Elaborating her or his own image of society as a complex system.
[Work to be done outside of class (preparation, etc.)]
Students will be expected to have completed the required assignments before class meeting. According to the Standards for the Establishment of Universities in Japan, students are required to prepare and review at least four hours per session to earn two credits.
[Grading criteria]
Several components contribute to a student's final grade. Not the least of these is attendance. Your final grade is determined as follows:
1. Student presentations in the classroom (Brief weekly reports by each student on international or local news in Japan; In-class oral presentations on the textbook with preparation of a written summary) - 35%
2. Discussion / Active contribution (Participating in class discussions and Posting on the Learning Management System Message Board) - 20%
3. Other kinds of contribution (Cooperation in class management) - 10%
4. Term paper - 35%

POL400GA（政治学 / Politics 400）

国際社会演習

大中　一彌

サブタイトル：熱狂と崩壊 ― 世界の「ヤバさ」を言語化する ―
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教養としての政治学をまなびます。
今日の世界はなぜ不安定に見えるのかと考えることをつうじて、学問に近づいていくゼミです。
ゼミを紹介する動画をご覧ください（12秒）
https://youtu.be/UZqVhD_U46I
春セメスターでは大学１年生向けの教科書をもちいるので、国際関係に関する基本的な見方が無理なく頭に入ってくるでしょう。ＳＤＧｓやジェンダー、ネットメディアといった学生の皆さんの関心が比較的高いトピックスだけでなく、国際文化学部ではあまり学ぶ機会のない、国際経済や組織犯罪といった話題についても、大学卒業後、社会人として知っておくべき情報を得ることができます。
秋セメスターでは、特定の分野を掘り下げた研究（各論）として、金融恐慌にかんする一般向けの読みやすい入門書をとりあげます。このシラバスを執筆している2026年1月の時点で、世界のあちこちで戦争が起きるいっぽう、各国でインフレが進み、株価は高い状況です。国内的・国際的な政治経済のトレンドがどのようにして人びとに熱を吹き込み、結果として危機が引き起こされ、平和や安定が崩壊に向かうのか ― あなたが暮らすことになる国際社会の近未来を考えるための入口として、過去の金融恐慌の展開を冷静にふりかえります。

【到達目標】
スポーツの分野で、あなたの筋力や柔軟性が増すと、たずさわることのできる競技の幅が広がったり、あなたの競技レベルが向上したりします。社会に関する理解についても似たところがあり、学生さん本人は必ずしも気づいていなくても、毎週ゼミ（演習）に参加して、少しずつ学びを積み重ねることで、得られる成果があります。このゼミにはじめて参加する学生の皆さんに、前提となる知識は求めていません。国際文化学部の２〜４年次に在籍している学生なら、国籍やジェンダーに関係なく、どなたでも歓迎です。むしろ、このゼミ（演習）における取り組みの方向性を示す下記の●１〜●３の内容に「そうだよね」とある程度うなづいてもらえる方を、ゼミの参加者として求めています：
●１．社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）を上（うわ）向（む）かせる。
読み書き能力（リテラシー）とは、文字を読んだり書いたりして意味を理解し、伝える能力のことです。日本語においてこの能力を伸ばすには、教科書や、メディアの言説に触れ、漢字の読みや言葉の意味がわからない場合、わからないまま放置せずに自分から調べることを習慣化することが助けになります。日本語以外の記事や論文をとりあげる場合、生成ＡＩ等による機械翻訳で得られた日本語をそのまま読み上げ、発表している本人が意味をよく分かっていないという状況がありえます。こうした状況は、発表できないよりは良いですが、中身が濃いとはいえません。外国語の構文や、書かれている論理的な内容を理解するには、時間や手間がかかります。時間の管理をしっかりとおこない、ていねいに発表を準備することで、ゼミの活動が、社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）の向上（こうじょう）に、つながっていくことでしょう。
●２．さまざまな文化にかんする視野や理解力を広げる。
国際文化学部のカリキュラム・ポリシーに見られる、文化的多様性を理解するには英語以外の言語が必要との認識から出発します。具体的には、英語を使える人と、それ以外の言語を使う人（諸外国語圏ＳＡ経験者・参加予定者など）をあまり区別立てして考えない、という姿勢が基本になります。日本国内では日本語だけ、海外では英語だけ使うという考えは、いわば地球全体を「国内の空間」と「海外の空間」の２つに分け、その上で、それぞれの空間における単一言語使用 Monolingualism を当然とする感覚にねざしています。しかし、１つの空間には１つの言語だけあればよく、複数の言語が共存する状況はちょっとイメージできませんというのでは、多文化的な感覚からは遠いです。１つの空間には１つの言語だけという、単一言語使用の考え方を疑うところから出発し、言語や文化の多様性をめぐる視野や感覚が広げられていく経験をしていくことになるでしょう。
●３．しくみとしての社会のイメージがあなたのなかで育つ。
地球全体にせよ、ひとつの町や村にせよ、さまざまな現象をうみだす社会はしくみとして複雑です。できるだけ、理解するのをあきらめたり、乱暴なやり方で単純化してしまったりという姿勢はとらないよう努めるところから、取り組みは始まります。その上で、ゼミ内外における学びや、他の人とのコミュニケーションを活用しつつ、現実の複雑さを反映したものの見方を育てる方向に、あなたは一歩ずつ進んでいくことになるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業の進め方と方法はつぎのとおりです：
１．教科書の輪読（授業内の発表＋議論）
２．新聞コーナー（学生による話題提供、報道のされ方の分析、討論）
なお、これらの課題にかんするフィードバックは基本的に授業時間内で行いますが、学習支援システムやGoogle ClassroomなどLMS上で行う場合もあります。
この科目は基本的に「対面授業」の科目です。ただし、特別な事情が発生した授業回（自然災害等による公共交通機関の混乱が起きた場合や、教員の体調不良の場合）において、例外的にZoomを使ったオンライン授業に切り替わります。また、個別の授業回について、学生側からの要望によるオンラインをつうじた柔軟な授業参加を認めます。ただし「対面授業」であるため、オンラインによる授業参加は１セメスターあたり、１人７回までとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法や各種ツールの利用方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	「ラストフロンティア」アフリカの始動	教科書①269-288ページに関する発表と議論 新聞コーナー
3	国際経済から見た国際関係	教科書①20-36ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	国際社会の法秩序と国連の役割	教科書①57-75ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	デモクラシーのジレンマ	教科書①76-93ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	貧困と社会開発	教科書①94-113ページに関する学生の発表と議論

7	発展途上国の開発問題と持続可能な開発目標（SDGs）	教科書①114-130ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	グローバル化とメディア	教科書①147-164ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	紛争はなぜ起こるのか ― シリア内戦と「イスラーム国」から考える ―	教科書①167-185ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	移民 ― 越境者たちが変える世界 ―	教科書①203-217ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	グローバル化時代の越境組織犯罪 ― ビジネス・悪漢（ワル）・安全保障 ―	教科書①218-234ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	米中覇権のせめぎあい	教科書①235-250ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	統合と分担の狭間で揺れるＥＵ	教科書①251-268ページに関する発表と議論
14	まとめ（予備日）	春セメスターの取り組みのふりかえりと、秋セメスター教科書の入手方法や夏休み以降のゼミ活動の方向性など
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	教員による話題提供	富裕層の金融資産に課税することはできるか？　― ガブリエル・ズックマンの主張
3	国際金融の仕組み―日本はこれからも経常収支黒字国でいられるか？	教科書②13-25ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	金本位制と大恐慌―戦争と債務	教科書②26-48ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	ブレトンウッズ体制と固定相場制の崩壊 ― 基軸通貨とは何か？	教科書②49-76ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	ドル大暴落 ― 変動相場制、オイルショック、インフレ	教科書②77-95ページに関する発表と議論 新聞コーナー
7	日米貿易摩擦 ― プラザ合意、円高パニック、バブル発生	教科書②96-119ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	発展途上国において多発する債務危機	教科書②120-138ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	アジア通貨危機（メキシコ、タイ、インドネシア、韓国）	教科書②139-163ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	ヘッジファンドの興亡 ― 国家が攻撃目標になる時	教科書②164-177ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	低所得者の住宅ローンとリーマンショック	教科書②178-208ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	ユーロ危機とトンネルの中の蛇	教科書②209-233ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	新型コロナ以降の世界 ― 次の危機はどこから？	教科書①234-253ページに関する発表と議論 新聞コーナー
14	まとめ（予備日）	4年生から2-3年生に伝えたいこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①過剰な勉強量にならないよう配慮しています。
②本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。この基準にしたがうなら、あなたがこの演習の予習や復習にかける時間は、１日あたり35分程度以上となります。

【テキスト（教科書）】
【春】教科書①足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野泰義編『プライマリー国際関係学』、ミネルヴァ書房、2021年。
【秋】教科書②宮崎成人『教養としての金融危機』講談社現代新書、2022年。

【参考書】
・法政大学オンラインデータベースに入っているJapanKnowledgeなどの事典・辞典類をもちい、分からない用語や単語を調べること
・Ｃ・Ｐ・キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』日本経済新聞社、2004年。
・ガブリエル・ズックマン『失われた国家の富　タックス・ヘイブンの経済学』ＮＴＴ出版、2015年。
・ジェラール・ノワリエル『フランスという坩堝（るつぼ）』法政大学出版局、2015年。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準はつぎのとおりです。
演習への出席は成績評価項目としてかかげられてはいませんが、教室に来るか、Zoomのどちらかで、水４～５限の時間帯に、演習の活動に参加することが、単位修得の前提条件となります。
1. 学生による発表（新聞コーナー１回３点満点；教科書発表１回10点満点）40%
2. 授業内の口頭による発言（例：教科書内容に関する質問・意見など） 15%
3. ＬＭＳ上の書き込み（例：学習支援システムの授業内掲示板やGoogle Classroomのコメント欄における、他の学生の発表内容に対する投稿など） 15%
4. 期末提出物（タームペーパーなど）30%
5. その他（授業運営への協力など）※上記1.～4. の項目の合計＝100%の枠外で5-20%相当の加点を行います。

【学生の意見等からの気づき】
【このゼミを取るか迷っている人へ】「必要な学びなのかもしれないけれど、難しそう、つまらなさそう」が多くの人にとって政治学の入り口です。しかし、ゼミで勉強して他の人の話を聞いたり、知識がついてくるのにしたがい「必要だし興味も持てる」に少しずつ変わっていきます。
【Zoomの併用（ハイフレックス）】就職活動や体調など、さまざまな事情で、教室での活動に参加しづらい場合、Zoomでの個人の参加を１セメスターあたり１人７回まで認めています。
【外国人留学生】法政大学国際文化学部に外国人留学生入試等を経て在籍している皆さんを歓迎しています。
【留学について】留学を推奨しています。ＳＡや派遣留学にこれから参加する、または、既に参加した人が、年度の途中からゼミを履修することに何の問題もありません。むしろ、派遣留学や認定留学等にあたって海外大学から求められる、語学以外の専門性を深め、慣れない海外生活にたいする心構えをつくる意味で、役立つゼミになりたいと願っています。
【２年生と４年生について】３年生以外、つまり２年生や４年生から初めてこのゼミに参加する方を歓迎しています。

【学生が準備すべき機器他】
報告原稿やさまざまな連絡、学期末の成果物の提出など、基本的にすべてウェブ上（学習支援システムやGoogle Classroom）で行なっています。また、自宅など学外からも法政大学図書館のオンラインデータベースがアクセスする目的で、VPN接続を使う場合があります。PressReaderの利用を新聞コーナーにかんし推奨しています。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や大学院進学などの相談もOKです。
・問い合わせ先や、このゼミで学ぶメリット、たとえば公務員試験等との関連について、次のリンク先をご覧ください　https://hosei.box.com/s/25yq62npyxme5zjuscx2kkn94uggg5z9

【Outline (in English)】
This seminar introduces students to basic conceptual instruments of political research with a focus on the notion of poverty in a comparative perspective. The students are expected to develop their media literacy necessary to critically evaluate political discourses. Topics will include inequality, labor politics, and centrality of social class in contemporary capitalism.
[Goals]
By the end of the course, students are expected to :
- Improving her or his literacy in the field of social sciences.
- Enhancing her or his multicultural competence.
- Elaborating her or his own image of society as a complex system.
[Work to be done outside of class (preparation, etc.)]
Students will be expected to have completed the required assignments before class meeting. According to the Standards for the Establishment of Universities in Japan, students are required to prepare and review at least four hours per session to earn two credits.
[Grading criteria]
Several components contribute to a student's final grade. Not the least of these is attendance. Your final grade is determined as follows:
1. Student presentations in the classroom (Brief weekly reports by each student on international or local news in Japan; In-class oral presentations on the textbook with preparation of a written summary) - 35%
2. Discussion / Active contribution (Participating in class discussions and Posting on the Learning Management System Message Board) - 20%
3. Other kinds of contribution (Cooperation in class management) - 10%
4. Term paper - 35%

POL400GA（政治学 / Politics 400）

国際社会演習

大中　一彌

サブタイトル：熱狂と崩壊 ― 世界の「ヤバさ」を言語化する ―
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教養としての政治学をまなびます。
今日の世界はなぜ不安定に見えるのかと考えることをつうじて、学問に近づいていくゼミです。
ゼミを紹介する動画をご覧ください（12秒）
https://youtu.be/UZqVhD_U46I
春セメスターでは大学１年生向けの教科書をもちいるので、国際関係に関する基本的な見方が無理なく頭に入ってくるでしょう。ＳＤＧｓやジェンダー、ネットメディアといった学生の皆さんの関心が比較的高いトピックスだけでなく、国際文化学部ではあまり学ぶ機会のない、国際経済や組織犯罪といった話題についても、大学卒業後、社会人として知っておくべき情報を得ることができます。
秋セメスターでは、特定の分野を掘り下げた研究（各論）として、金融恐慌にかんする一般向けの読みやすい入門書をとりあげます。このシラバスを執筆している2026年1月の時点で、世界のあちこちで戦争が起きるいっぽう、各国でインフレが進み、株価は高い状況です。国内的・国際的な政治経済のトレンドがどのようにして人びとに熱を吹き込み、結果として危機が引き起こされ、平和や安定が崩壊に向かうのか ― あなたが暮らすことになる国際社会の近未来を考えるための入口として、過去の金融恐慌の展開を冷静にふりかえります。

【到達目標】
スポーツの分野で、あなたの筋力や柔軟性が増すと、たずさわることのできる競技の幅が広がったり、あなたの競技レベルが向上したりします。社会に関する理解についても似たところがあり、学生さん本人は必ずしも気づいていなくても、毎週ゼミ（演習）に参加して、少しずつ学びを積み重ねることで、得られる成果があります。このゼミにはじめて参加する学生の皆さんに、前提となる知識は求めていません。国際文化学部の２〜４年次に在籍している学生なら、国籍やジェンダーに関係なく、どなたでも歓迎です。むしろ、このゼミ（演習）における取り組みの方向性を示す下記の●１〜●３の内容に「そうだよね」とある程度うなづいてもらえる方を、ゼミの参加者として求めています：
●１．社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）を上（うわ）向（む）かせる。
読み書き能力（リテラシー）とは、文字を読んだり書いたりして意味を理解し、伝える能力のことです。日本語においてこの能力を伸ばすには、教科書や、メディアの言説に触れ、漢字の読みや言葉の意味がわからない場合、わからないまま放置せずに自分から調べることを習慣化することが助けになります。日本語以外の記事や論文をとりあげる場合、生成ＡＩ等による機械翻訳で得られた日本語をそのまま読み上げ、発表している本人が意味をよく分かっていないという状況がありえます。こうした状況は、発表できないよりは良いですが、中身が濃いとはいえません。外国語の構文や、書かれている論理的な内容を理解するには、時間や手間がかかります。時間の管理をしっかりとおこない、ていねいに発表を準備することで、ゼミの活動が、社会科学分野における読み書き能力（リテラシー）の向上（こうじょう）に、つながっていくことでしょう。
●２．さまざまな文化にかんする視野や理解力を広げる。
国際文化学部のカリキュラム・ポリシーに見られる、文化的多様性を理解するには英語以外の言語が必要との認識から出発します。具体的には、英語を使える人と、それ以外の言語を使う人（諸外国語圏ＳＡ経験者・参加予定者など）をあまり区別立てして考えない、という姿勢が基本になります。日本国内では日本語だけ、海外では英語だけ使うという考えは、いわば地球全体を「国内の空間」と「海外の空間」の２つに分け、その上で、それぞれの空間における単一言語使用 Monolingualism を当然とする感覚にねざしています。しかし、１つの空間には１つの言語だけあればよく、複数の言語が共存する状況はちょっとイメージできませんというのでは、多文化的な感覚からは遠いです。１つの空間には１つの言語だけという、単一言語使用の考え方を疑うところから出発し、言語や文化の多様性をめぐる視野や感覚が広げられていく経験をしていくことになるでしょう。
●３．しくみとしての社会のイメージがあなたのなかで育つ。
地球全体にせよ、ひとつの町や村にせよ、さまざまな現象をうみだす社会はしくみとして複雑です。できるだけ、理解するのをあきらめたり、乱暴なやり方で単純化してしまったりという姿勢はとらないよう努めるところから、取り組みは始まります。その上で、ゼミ内外における学びや、他の人とのコミュニケーションを活用しつつ、現実の複雑さを反映したものの見方を育てる方向に、あなたは一歩ずつ進んでいくことになるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業の進め方と方法はつぎのとおりです：
１．教科書の輪読（授業内の発表＋議論）
２．新聞コーナー（学生による話題提供、報道のされ方の分析、討論）
なお、これらの課題にかんするフィードバックは基本的に授業時間内で行いますが、学習支援システムやGoogle ClassroomなどLMS上で行う場合もあります。
この科目は基本的に「対面授業」の科目です。ただし、特別な事情が発生した授業回（自然災害等による公共交通機関の混乱が起きた場合や、教員の体調不良の場合）において、例外的にZoomを使ったオンライン授業に切り替わります。また、個別の授業回について、学生側からの要望によるオンラインをつうじた柔軟な授業参加を認めます。ただし「対面授業」であるため、オンラインによる授業参加は１セメスターあたり、１人７回までとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法や各種ツールの利用方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	「ラストフロンティア」アフリカの始動	教科書①269-288ページに関する発表と議論 新聞コーナー
3	国際経済から見た国際関係	教科書①20-36ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	国際社会の法秩序と国連の役割	教科書①57-75ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	デモクラシーのジレンマ	教科書①76-93ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	貧困と社会開発	教科書①94-113ページに関する学生の発表と議論

7	発展途上国の開発問題と持続可能な開発目標（SDGs）	教科書①114-130ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	グローバル化とメディア	教科書①147-164ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	紛争はなぜ起こるのか ― シリア内戦と「イスラーム国」から考える ―	教科書①167-185ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	移民 ― 越境者たちが変える世界 ―	教科書①203-217ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	グローバル化時代の越境組織犯罪 ― ビジネス・悪漢（ワル）・安全保障 ―	教科書①218-234ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	米中覇権のせめぎあい	教科書①235-250ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	統合と分担の狭間で揺れるＥＵ	教科書①251-268ページに関する発表と議論
14	まとめ（予備日）	春セメスターの取り組みのふりかえりと、秋セメスター教科書の入手方法や夏休み以降のゼミ活動の方向性など
1	初顔合わせ 将来の希望とゼミでの学びにかんするトーク	教科書の入手方法の確認、輪読や新聞コーナーの担当日程決定
2	教員による話題提供	富裕層の金融資産に課税することはできるか？　― ガブリエル・ズックマンの主張
3	国際金融の仕組み―日本はこれからも経常収支黒字国でいられるか？	教科書②13-25ページに関する発表と議論 新聞コーナー
4	金本位制と大恐慌―戦争と債務	教科書②26-48ページに関する発表と議論 新聞コーナー
5	ブレトンウッズ体制と固定相場制の崩壊 ― 基軸通貨とは何か？	教科書②49-76ページに関する発表と議論 新聞コーナー
6	ドル大暴落 ― 変動相場制、オイルショック、インフレ	教科書②77-95ページに関する発表と議論 新聞コーナー
7	日米貿易摩擦 ― プラザ合意、円高パニック、バブル発生	教科書②96-119ページに関する発表と議論 新聞コーナー
8	発展途上国において多発する債務危機	教科書②120-138ページに関する発表と議論 新聞コーナー
9	アジア通貨危機（メキシコ、タイ、インドネシア、韓国）	教科書②139-163ページに関する発表と議論 新聞コーナー
10	ヘッジファンドの興亡 ― 国家が攻撃目標になる時	教科書②164-177ページに関する発表と議論 新聞コーナー
11	低所得者の住宅ローンとリーマンショック	教科書②178-208ページに関する発表と議論 新聞コーナー
12	ユーロ危機とトンネルの中の蛇	教科書②209-233ページに関する発表と議論 新聞コーナー
13	新型コロナ以降の世界 ― 次の危機はどこから？	教科書①234-253ページに関する発表と議論 新聞コーナー
14	まとめ（予備日）	4年生から2-3年生に伝えたいこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①過剰な勉強量にならないよう配慮しています。
②本学学則基準によると、講義や演習で２単位を得るのに必要な予習・復習の時間は１回につき４時間以上とされているそうです。この基準にしたがうなら、あなたがこの演習の予習や復習にかける時間は、１日あたり35分程度以上となります。

【テキスト（教科書）】
【春】教科書①足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野泰義編『プライマリー国際関係学』、ミネルヴァ書房、2021年。
【秋】教科書②宮崎成人『教養としての金融危機』講談社現代新書、2022年。

【参考書】
・法政大学オンラインデータベースに入っているJapanKnowledgeなどの事典・辞典類をもちい、分からない用語や単語を調べること
・Ｃ・Ｐ・キンドルバーガー『熱狂、恐慌、崩壊 金融恐慌の歴史』日本経済新聞社、2004年。
・ガブリエル・ズックマン『失われた国家の富　タックス・ヘイブンの経済学』ＮＴＴ出版、2015年。
・ジェラール・ノワリエル『フランスという坩堝（るつぼ）』法政大学出版局、2015年。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準はつぎのとおりです。
演習への出席は成績評価項目としてかかげられてはいませんが、教室に来るか、Zoomのどちらかで、水４～５限の時間帯に、演習の活動に参加することが、単位修得の前提条件となります。
1. 学生による発表（新聞コーナー１回３点満点；教科書発表１回10点満点）40%
2. 授業内の口頭による発言（例：教科書内容に関する質問・意見など） 15%
3. ＬＭＳ上の書き込み（例：学習支援システムの授業内掲示板やGoogle Classroomのコメント欄における、他の学生の発表内容に対する投稿など） 15%
4. 期末提出物（タームペーパーなど）30%
5. その他（授業運営への協力など）※上記1.～4. の項目の合計＝100%の枠外で5-20%相当の加点を行います。

【学生の意見等からの気づき】
【このゼミを取るか迷っている人へ】「必要な学びなのかもしれないけれど、難しそう、つまらなさそう」が多くの人にとって政治学の入り口です。しかし、ゼミで勉強して他の人の話を聞いたり、知識がついてくるのにしたがい「必要だし興味も持てる」に少しずつ変わっていきます。
【Zoomの併用（ハイフレックス）】就職活動や体調など、さまざまな事情で、教室での活動に参加しづらい場合、Zoomでの個人の参加を１セメスターあたり１人７回まで認めています。
【外国人留学生】法政大学国際文化学部に外国人留学生入試等を経て在籍している皆さんを歓迎しています。
【留学について】留学を推奨しています。ＳＡや派遣留学にこれから参加する、または、既に参加した人が、年度の途中からゼミを履修することに何の問題もありません。むしろ、派遣留学や認定留学等にあたって海外大学から求められる、語学以外の専門性を深め、慣れない海外生活にたいする心構えをつくる意味で、役立つゼミになりたいと願っています。
【２年生と４年生について】３年生以外、つまり２年生や４年生から初めてこのゼミに参加する方を歓迎しています。

【学生が準備すべき機器他】
報告原稿やさまざまな連絡、学期末の成果物の提出など、基本的にすべてウェブ上（学習支援システムやGoogle Classroom）で行なっています。また、自宅など学外からも法政大学図書館のオンラインデータベースがアクセスする目的で、VPN接続を使う場合があります。PressReaderの利用を新聞コーナーにかんし推奨しています。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や大学院進学などの相談もOKです。
・問い合わせ先や、このゼミで学ぶメリット、たとえば公務員試験等との関連について、次のリンク先をご覧ください　https://hosei.box.com/s/25yq62npyxme5zjuscx2kkn94uggg5z9

【Outline (in English)】
This seminar introduces students to basic conceptual instruments of political research with a focus on the notion of poverty in a comparative perspective. The students are expected to develop their media literacy necessary to critically evaluate political discourses. Topics will include inequality, labor politics, and centrality of social class in contemporary capitalism.
[Goals]
By the end of the course, students are expected to :
- Improving her or his literacy in the field of social sciences.
- Enhancing her or his multicultural competence.
- Elaborating her or his own image of society as a complex system.
[Work to be done outside of class (preparation, etc.)]
Students will be expected to have completed the required assignments before class meeting. According to the Standards for the Establishment of Universities in Japan, students are required to prepare and review at least four hours per session to earn two credits.
[Grading criteria]
Several components contribute to a student's final grade. Not the least of these is attendance. Your final grade is determined as follows:
1. Student presentations in the classroom (Brief weekly reports by each student on international or local news in Japan; In-class oral presentations on the textbook with preparation of a written summary) - 35%
2. Discussion / Active contribution (Participating in class discussions and Posting on the Learning Management System Message Board) - 20%
3. Other kinds of contribution (Cooperation in class management) - 10%
4. Term paper - 35%

ARSx400 GA

国際社会演習

小川　敦

サブタイトル：社会の中の言語、言語の中の社会　ー多言語社会を手がかりにして
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
皆さんは「多言語社会」と聞いて、どのような社会を思い浮かべるでしょうか。ベルギーやスイスのように公用語が複数ある国、アメリカ合衆国のヒスパニック系住民やフランスのアルザス地方のような言語マイノリティの事例を思い出す人もいるかもしれません。
しかし、多言語社会ーすなわち複数の言語が使われる社会ーは、決して外国だけの話ではありません。私たちの住む日本社会にも、さまざまな言語的・文化的背景をもつ人々が暮らしており、日本語以外にも多くの言語が日常的に用いられています。また、標準語といわゆる「方言」を場面に応じて使い分けている人もいるでしょう。さらに、外国語を学び、使うことも、多言語社会の一側面といえます。
では、多言語社会において、人々は複数の言語をどのように学び、どのように使い分けながら生活しているのでしょうか。また、それぞれの言語に対して、どのような評価や意識をもっているのでしょうか。さらに、それらの言語にはどのような社会的・公的な位置づけがあり、学ぶ権利はどのように保障されているのでしょうか。
本演習では、「多言語社会」を手がかりに、言語と社会の関係について考察します。社会の中で言語がどのような役割を果たしているのかを、具体的な事例を通して検討し、言語と社会を分析するための基本的な視点や方法を身につけることを目的とします。

【到達目標】
・言語を社会から、社会を言語から多角的に思考する力を身につける。
・自分のテーマを見つけ、探求する力を身につける。
・他者の意見に耳を傾け、自らの言語的な知識や経験を相対的に見る力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身で関心を持つテーマについて、文献から学び取り、自らの言葉で説明する力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身のテーマについて、口頭でプレゼンテーションを行う力、文献を参照しながら論理的にレポートを作成する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
＜春学期＞
社会言語学や多言語社会研究に関する基本的な文献を講読します。学生はレジュメを作成し、発表し、その上で議論を行います。
教員から話題を提供し、学生同士で議論を行うこともあります。
「言語景観」についてフィールドワークをし、議論、発表をしていただきます。
＜秋学期＞
前半はさらに個別事例を扱った文献の講読を行います。
後半はゼミ生の関心に基づいて発表をしていただく予定です。
学生の人数や関心によって若干変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの内容の紹介および説明。問題の設定。 分担の決定。
2	「多言語であること」の実例	教員による話題提供とグループでの議論
3	文献の講読1-①	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
4	文献の講読1-②	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
5	文献の講読1-③	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
6	文献の講読1-④	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
7	文献の講読1-⑤	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
8	文献の講読1-⑥	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
9	文献の講読1-⑦	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
10	文献の講読1-⑧	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
11	言語景観①	言語景観のフィールドワーク
12	言語景観②	言語景観に関する発表と議論
13	個人発表	主に4回生による研究発表
14	まとめ	春学期の総括と総合的な議論
1	イントロダクション	受講生の現在の研究テーマ・関心についてもお話しいただきます。
2	文献の講読2-①	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
3	文献の講読2-②	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
4	文献の講読2-③	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
5	文献の講読2-④	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
6	文献の講読2-⑤	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
7	文献の講読2-⑥	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
8	個人発表①	研究テーマについて発表を行う。3回生は研究の構想を発表。
9	個人発表②	研究テーマについて発表を行う。4回生は総仕上げに向けた発表。

10	文献の講読3-①	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
11	文献の講読3-②	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
12	文献の講読3-③	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
13	文献の講読3-④	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
14	今年度のまとめ	今年度の総括と総合的な議論を行う。3回生は研究の進捗状況を報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・発表の準備、発表の相互評価など
・レポートの作成
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業で提示します。

【参考書】
以下のようなものが挙げられますが、全て読みましょうというわけではありません。
また、その他は授業内で提示します。
＜基本的な文献＞
・佐野直子『社会言語学のまなざし』三元社、2015年
・平高・木村（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、2017年
・本田・岩田・倉林『街の公共サインを点検する』大修館書店、2017年
・柿原・上村・長谷川『今そこにある多言語なニッポン』くろしお出版、2020年
・井上・田邊（編著）『社会言語学の枠組み』くろしお出版、2022年
・岩田・重光・村田（著）『改訂版 社会言語学―基本からディスコース分析まで』ひつじ書房、2022年
・三宅・新井『境界と周縁―社会言語学の新しい地平』ひつじ書房、2025年
＜様々な事例を扱った文献＞
・野呂・山下（編著）『「正しさ」への問い　批判的社会言語学の試み』三元社、2009年
・庵・イ・森（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか　多文化共生社会を実現するために』ココ出版、2013年
・杉野・原（編著）『言語と格差　差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』、2015年
・義永・山下（編）『ことばの「やさしさ」とは何か　批判的社会言語学からのアプローチ』三元社、2015年
・かどや・ましこ（編著）『行動する社会言語学』三元社、2017年
・杉野（監修）田中・波多野（編著）『言語と教育　多様化する社会のなかで新たな言語教育のあり方を探る』明石書店、2017年
・中島孝史『ろう教育と「ことば」の社会言語学　手話・英語・日本語リテラシー』生活書院、2018年
・貞包和寛『言語を仕分けるのは誰か　ポーランドの言語政策とマイノリティ』明石書店、2020年
・尾辻・熊谷・佐藤（編）『ともに生きるために　ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からあみることばの教育』春風社、2021年
・柿原・仲・布尾・山下『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社、2021年
・田中宝紀『海外ルーツの子ども支援　言葉・文化・制度を超えて共生へ』青弓社、2021年
・杉野（監修）田中・垣原・野沢（編）『言語教育のマルチダイナミクス』明石書店、2024年

【成績評価の方法と基準】
・発表 20％
・レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度 30％
・期末レポート 40％
・毎回の授業での発言等 10％
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。
学生が主体的にゼミをつくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
紙媒体をできるだけ用いないようにする予定ですので、配布物の閲覧用にPCやタブレットなどをご持参ください。

【その他の重要事項】
担当教員の専門上、ヨーロッパ、特にドイツ語圏の話が多くなるかもしれませんが、参加者は必ずしもドイツ語を履修している必要はありません。日本の国内外を問わず、言語と社会、言語と政治・政策、言語と教育、人々の言語意識などに関心を持つ人はご検討ください。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this seminar, we will consider various aspects of the relationship between language and society, using "multilingual society" as a starting point.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-Students will acquire the ability to think from multiple perspectives: language from society and society from language.
-Students will be able to find and explore their own research topics.
-Students will develop the ability to listen to others' opinions and cultivate a relative perspective on their own linguistic knowledge and experiences.
-Students will acquire the ability to learn from literature on seminar themes or personally interesting topics, and articulate them in their own words.
-Students will develop the ability to present topics orally and produce logically structured reports with reference to the literature.
【Learning activities outside of classroom】
-Preparation of presentations, peer evaluation of presentations.
-Writing of reports.
-The standard preparation and review time for this seminar is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to the followings:
-Oral presentation 20%
-Assignments such as resumes and comment sheets for each session 30%
-Final report 40%
-Active participation in the seminar 10%

ARSx400 GA

国際社会演習

小川　敦

サブタイトル：社会の中の言語、言語の中の社会　ー多言語社会を手がかりにして
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
皆さんは「多言語社会」と聞いて、どのような社会を思い浮かべるでしょうか。ベルギーやスイスのように公用語が複数ある国、アメリカ合衆国のヒスパニック系住民やフランスのアルザス地方のような言語マイノリティの事例を思い出す人もいるかもしれません。
しかし、多言語社会ーすなわち複数の言語が使われる社会ーは、決して外国だけの話ではありません。私たちの住む日本社会にも、さまざまな言語的・文化的背景をもつ人々が暮らしており、日本語以外にも多くの言語が日常的に用いられています。また、標準語といわゆる「方言」を場面に応じて使い分けている人もいるでしょう。さらに、外国語を学び、使うことも、多言語社会の一側面といえます。
では、多言語社会において、人々は複数の言語をどのように学び、どのように使い分けながら生活しているのでしょうか。また、それぞれの言語に対して、どのような評価や意識をもっているのでしょうか。さらに、それらの言語にはどのような社会的・公的な位置づけがあり、学ぶ権利はどのように保障されているのでしょうか。
本演習では、「多言語社会」を手がかりに、言語と社会の関係について考察します。社会の中で言語がどのような役割を果たしているのかを、具体的な事例を通して検討し、言語と社会を分析するための基本的な視点や方法を身につけることを目的とします。

【到達目標】
・言語を社会から、社会を言語から多角的に思考する力を身につける。
・自分のテーマを見つけ、探求する力を身につける。
・他者の意見に耳を傾け、自らの言語的な知識や経験を相対的に見る力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身で関心を持つテーマについて、文献から学び取り、自らの言葉で説明する力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身のテーマについて、口頭でプレゼンテーションを行う力、文献を参照しながら論理的にレポートを作成する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
＜春学期＞
社会言語学や多言語社会研究に関する基本的な文献を講読します。学生はレジュメを作成し、発表し、その上で議論を行います。
教員から話題を提供し、学生同士で議論を行うこともあります。
「言語景観」についてフィールドワークをし、議論、発表をしていただきます。
＜秋学期＞
前半はさらに個別事例を扱った文献の講読を行います。
後半はゼミ生の関心に基づいて発表をしていただく予定です。
学生の人数や関心によって若干変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの内容の紹介および説明。問題の設定。 分担の決定。
2	「多言語であること」の実例	教員による話題提供とグループでの議論
3	文献の講読1-①	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
4	文献の講読1-②	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
5	文献の講読1-③	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
6	文献の講読1-④	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
7	文献の講読1-⑤	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
8	文献の講読1-⑥	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
9	文献の講読1-⑦	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
10	文献の講読1-⑧	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
11	言語景観①	言語景観のフィールドワーク
12	言語景観②	言語景観に関する発表と議論
13	個人発表	主に4回生による研究発表
14	まとめ	春学期の総括と総合的な議論
1	イントロダクション	受講生の現在の研究テーマ・関心についてもお話しいただきます。
2	文献の講読2-①	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
3	文献の講読2-②	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
4	文献の講読2-③	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
5	文献の講読2-④	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
6	文献の講読2-⑤	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
7	文献の講読2-⑥	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
8	個人発表①	研究テーマについて発表を行う。3回生は研究の構想を発表。
9	個人発表②	研究テーマについて発表を行う。4回生は総仕上げに向けた発表。

10	文献の講読3-①	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
11	文献の講読3-②	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
12	文献の講読3-③	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
13	文献の講読3-④	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
14	今年度のまとめ	今年度の総括と総合的な議論を行う。3回生は研究の進捗状況を報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・発表の準備、発表の相互評価など
・レポートの作成
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業で提示します。

【参考書】
以下のようなものが挙げられますが、全て読みましょうというわけではありません。
また、その他は授業内で提示します。
＜基本的な文献＞
・佐野直子『社会言語学のまなざし』三元社、2015年
・平高・木村（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、2017年
・本田・岩田・倉林『街の公共サインを点検する』大修館書店、2017年
・柿原・上村・長谷川『今そこにある多言語なニッポン』くろしお出版、2020年
・井上・田邊（編著）『社会言語学の枠組み』くろしお出版、2022年
・岩田・重光・村田（著）『改訂版 社会言語学―基本からディスコース分析まで』ひつじ書房、2022年
・三宅・新井『境界と周縁―社会言語学の新しい地平』ひつじ書房、2025年
＜様々な事例を扱った文献＞
・野呂・山下（編著）『「正しさ」への問い　批判的社会言語学の試み』三元社、2009年
・庵・イ・森（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか　多文化共生社会を実現するために』ココ出版、2013年
・杉野・原（編著）『言語と格差　差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』、2015年
・義永・山下（編）『ことばの「やさしさ」とは何か　批判的社会言語学からのアプローチ』三元社、2015年
・かどや・ましこ（編著）『行動する社会言語学』三元社、2017年
・杉野（監修）田中・波多野（編著）『言語と教育　多様化する社会のなかで新たな言語教育のあり方を探る』明石書店、2017年
・中島孝史『ろう教育と「ことば」の社会言語学　手話・英語・日本語リテラシー』生活書院、2018年
・貞包和寛『言語を仕分けるのは誰か　ポーランドの言語政策とマイノリティ』明石書店、2020年
・尾辻・熊谷・佐藤（編）『ともに生きるために　ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からあみることばの教育』春風社、2021年
・柿原・仲・布尾・山下『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社、2021年
・田中宝紀『海外ルーツの子ども支援　言葉・文化・制度を超えて共生へ』青弓社、2021年
・杉野（監修）田中・垣原・野沢（編）『言語教育のマルチダイナミクス』明石書店、2024年

【成績評価の方法と基準】
・発表 20％
・レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度 30％
・期末レポート 40％
・毎回の授業での発言等 10％
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。
学生が主体的にゼミをつくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
紙媒体をできるだけ用いないようにする予定ですので、配布物の閲覧用にPCやタブレットなどをご持参ください。

【その他の重要事項】
担当教員の専門上、ヨーロッパ、特にドイツ語圏の話が多くなるかもしれませんが、参加者は必ずしもドイツ語を履修している必要はありません。日本の国内外を問わず、言語と社会、言語と政治・政策、言語と教育、人々の言語意識などに関心を持つ人はご検討ください。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this seminar, we will consider various aspects of the relationship between language and society, using "multilingual society" as a starting point.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-Students will acquire the ability to think from multiple perspectives: language from society and society from language.
-Students will be able to find and explore their own research topics.
-Students will develop the ability to listen to others' opinions and cultivate a relative perspective on their own linguistic knowledge and experiences.
-Students will acquire the ability to learn from literature on seminar themes or personally interesting topics, and articulate them in their own words.
-Students will develop the ability to present topics orally and produce logically structured reports with reference to the literature.
【Learning activities outside of classroom】
-Preparation of presentations, peer evaluation of presentations.
-Writing of reports.
-The standard preparation and review time for this seminar is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to the followings:
-Oral presentation 20%
-Assignments such as resumes and comment sheets for each session 30%
-Final report 40%
-Active participation in the seminar 10%

ARSx400 GA

国際社会演習

小川　敦

サブタイトル：社会の中の言語、言語の中の社会　ー多言語社会を手がかりにして
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
皆さんは「多言語社会」と聞いて、どのような社会を思い浮かべるでしょうか。ベルギーやスイスのように公用語が複数ある国、アメリカ合衆国のヒスパニック系住民やフランスのアルザス地方のような言語マイノリティの事例を思い出す人もいるかもしれません。
しかし、多言語社会ーすなわち複数の言語が使われる社会ーは、決して外国だけの話ではありません。私たちの住む日本社会にも、さまざまな言語的・文化的背景をもつ人々が暮らしており、日本語以外にも多くの言語が日常的に用いられています。また、標準語といわゆる「方言」を場面に応じて使い分けている人もいるでしょう。さらに、外国語を学び、使うことも、多言語社会の一側面といえます。
では、多言語社会において、人々は複数の言語をどのように学び、どのように使い分けながら生活しているのでしょうか。また、それぞれの言語に対して、どのような評価や意識をもっているのでしょうか。さらに、それらの言語にはどのような社会的・公的な位置づけがあり、学ぶ権利はどのように保障されているのでしょうか。
本演習では、「多言語社会」を手がかりに、言語と社会の関係について考察します。社会の中で言語がどのような役割を果たしているのかを、具体的な事例を通して検討し、言語と社会を分析するための基本的な視点や方法を身につけることを目的とします。

【到達目標】
・言語を社会から、社会を言語から多角的に思考する力を身につける。
・自分のテーマを見つけ、探求する力を身につける。
・他者の意見に耳を傾け、自らの言語的な知識や経験を相対的に見る力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身で関心を持つテーマについて、文献から学び取り、自らの言葉で説明する力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身のテーマについて、口頭でプレゼンテーションを行う力、文献を参照しながら論理的にレポートを作成する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
＜春学期＞
社会言語学や多言語社会研究に関する基本的な文献を講読します。学生はレジュメを作成し、発表し、その上で議論を行います。
教員から話題を提供し、学生同士で議論を行うこともあります。
「言語景観」についてフィールドワークをし、議論、発表をしていただきます。
＜秋学期＞
前半はさらに個別事例を扱った文献の講読を行います。
後半はゼミ生の関心に基づいて発表をしていただく予定です。
学生の人数や関心によって若干変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの内容の紹介および説明。問題の設定。 分担の決定。
2	「多言語であること」の実例	教員による話題提供とグループでの議論
3	文献の講読1-①	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
4	文献の講読1-②	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
5	文献の講読1-③	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
6	文献の講読1-④	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
7	文献の講読1-⑤	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
8	文献の講読1-⑥	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
9	文献の講読1-⑦	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
10	文献の講読1-⑧	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
11	言語景観①	言語景観のフィールドワーク
12	言語景観②	言語景観に関する発表と議論
13	個人発表	主に4回生による研究発表
14	まとめ	春学期の総括と総合的な議論
1	イントロダクション	受講生の現在の研究テーマ・関心についてもお話しいただきます。
2	文献の講読2-①	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
3	文献の講読2-②	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
4	文献の講読2-③	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
5	文献の講読2-④	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
6	文献の講読2-⑤	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
7	文献の講読2-⑥	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
8	個人発表①	研究テーマについて発表を行う。 3回生は研究の構想を発表。
9	個人発表②	研究テーマについて発表を行う。 4回生は総仕上げに向けた発表。

10	文献の講読3-①	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
11	文献の講読3-②	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
12	文献の講読3-③	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
13	文献の講読3-④	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
14	今年度のまとめ	今年度の総括と総合的な議論を行う。3回生は研究の進捗状況を報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・発表の準備、発表の相互評価など
・レポートの作成
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業で提示します。

【参考書】
以下のようなものが挙げられますが、全て読みましょうというわけではありません。
また、その他は授業内で提示します。
＜基本的な文献＞
・佐野直子『社会言語学のまなざし』三元社、2015年
・平高・木村（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、2017年
・本田・岩田・倉林『街の公共サインを点検する』大修館書店、2017年
・柿原・上村・長谷川『今そこにある多言語なニッポン』くろしお出版、2020年
・井上・田邊（編著）『社会言語学の枠組み』くろしお出版、2022年
・岩田・重光・村田（著）『改訂版 社会言語学―基本からディスコース分析まで』ひつじ書房、2022年
・三宅・新井『境界と周縁―社会言語学の新しい地平』ひつじ書房、2025年
＜様々な事例を扱った文献＞
・野呂・山下（編著）『「正しさ」への問い　批判的社会言語学の試み』三元社、2009年
・庵・イ・森（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか　多文化共生社会を実現するために』ココ出版、2013年
・杉野・原（編著）『言語と格差　差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』、2015年
・義永・山下（編）『ことばの「やさしさ」とは何か　批判的社会言語学からのアプローチ』三元社、2015年
・かどや・ましこ（編著）『行動する社会言語学』三元社、2017年
・杉野（監修）田中・波多野（編著）『言語と教育　多様化する社会のなかで新たな言語教育のあり方を探る』明石書店、2017年
・中島孝史『ろう教育と「ことば」の社会言語学　手話・英語・日本語リテラシー』生活書院、2018年
・貞包和寛『言語を仕分けるのは誰か　ポーランドの言語政策とマイノリティ』明石書店、2020年
・尾辻・熊谷・佐藤（編）『ともに生きるために　ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からあみることばの教育』春風社、2021年
・柿原・仲・布尾・山下『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社、2021年
・田中宝紀『海外ルーツの子ども支援　言葉・文化・制度を超えて共生へ』青弓社、2021年
・杉野（監修）田中・垣原・野沢（編）『言語教育のマルチダイナミクス』明石書店、2024年

【成績評価の方法と基準】
・発表 20％
・レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度 30％
・期末レポート 40％
・毎回の授業での発言等 10％
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。
学生が主体的にゼミをつくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
紙媒体をできるだけ用いないようにする予定ですので、配布物の閲覧用にPCやタブレットなどをご持参ください。

【その他の重要事項】
担当教員の専門上、ヨーロッパ、特にドイツ語圏の話が多くなるかもしれませんが、参加者は必ずしもドイツ語を履修している必要はありません。日本の国内外を問わず、言語と社会、言語と政治・政策、言語と教育、人々の言語意識などに関心を持つ人はご検討ください。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this seminar, we will consider various aspects of the relationship between language and society, using "multilingual society" as a starting point.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-Students will acquire the ability to think from multiple perspectives: language from society and society from language.
-Students will be able to find and explore their own research topics.
-Students will develop the ability to listen to others' opinions and cultivate a relative perspective on their own linguistic knowledge and experiences.
-Students will acquire the ability to learn from literature on seminar themes or personally interesting topics, and articulate them in their own words.
-Students will develop the ability to present topics orally and produce logically structured reports with reference to the literature.
【Learning activities outside of classroom】
-Preparation of presentations, peer evaluation of presentations.
-Writing of reports.
-The standard preparation and review time for this seminar is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to the followings:
-Oral presentation 20%
-Assignments such as resumes and comment sheets for each session 30%
-Final report 40%
-Active participation in the seminar 10%

ARSx400 GA

国際社会演習

小川　敦

サブタイトル：社会の中の言語、言語の中の社会　ー多言語社会を手がかりにして
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
皆さんは「多言語社会」と聞いて、どのような社会を思い浮かべるでしょうか。ベルギーやスイスのように公用語が複数ある国、アメリカ合衆国のヒスパニック系住民やフランスのアルザス地方のような言語マイノリティの事例を思い出す人もいるかもしれません。
しかし、多言語社会ーすなわち複数の言語が使われる社会ーは、決して外国だけの話ではありません。私たちの住む日本社会にも、さまざまな言語的・文化的背景をもつ人々が暮らしており、日本語以外にも多くの言語が日常的に用いられています。また、標準語といわゆる「方言」を場面に応じて使い分けている人もいるでしょう。さらに、外国語を学び、使うことも、多言語社会の一側面といえます。
では、多言語社会において、人々は複数の言語をどのように学び、どのように使い分けながら生活しているのでしょうか。また、それぞれの言語に対して、どのような評価や意識をもっているのでしょうか。さらに、それらの言語にはどのような社会的・公的な位置づけがあり、学ぶ権利はどのように保障されているのでしょうか。
本演習では、「多言語社会」を手がかりに、言語と社会の関係について考察します。社会の中で言語がどのような役割を果たしているのかを、具体的な事例を通して検討し、言語と社会を分析するための基本的な視点や方法を身につけることを目的とします。

【到達目標】
・言語を社会から、社会を言語から多角的に思考する力を身につける。
・自分のテーマを見つけ、探求する力を身につける。
・他者の意見に耳を傾け、自らの言語的な知識や経験を相対的に見る力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身で関心を持つテーマについて、文献から学び取り、自らの言葉で説明する力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身のテーマについて、口頭でプレゼンテーションを行う力、文献を参照しながら論理的にレポートを作成する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
＜春学期＞
社会言語学や多言語社会研究に関する基本的な文献を講読します。学生はレジュメを作成し、発表し、その上で議論を行います。
教員から話題を提供し、学生同士で議論を行うこともあります。
「言語景観」についてフィールドワークをし、議論、発表をしていただきます。
＜秋学期＞
前半はさらに個別事例を扱った文献の講読を行います。
後半はゼミ生の関心に基づいて発表をしていただく予定です。
学生の人数や関心によって若干変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの内容の紹介および説明。問題の設定。 分担の決定。
2	「多言語であること」の実例	教員による話題提供とグループでの議論
3	文献の講読1-①	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
4	文献の講読1-②	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
5	文献の講読1-③	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
6	文献の講読1-④	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
7	文献の講読1-⑤	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
8	文献の講読1-⑥	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
9	文献の講読1-⑦	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
10	文献の講読1-⑧	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
11	言語景観①	言語景観のフィールドワーク
12	言語景観②	言語景観に関する発表と議論
13	個人発表	主に4回生による研究発表
14	まとめ	春学期の総括と総合的な議論
1	イントロダクション	受講生の現在の研究テーマ・関心についてもお話しいただきます。
2	文献の講読2-①	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
3	文献の講読2-②	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
4	文献の講読2-③	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
5	文献の講読2-④	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
6	文献の講読2-⑤	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
7	文献の講読2-⑥	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
8	個人発表①	研究テーマについて発表を行う。3回生は研究の構想を発表。
9	個人発表②	研究テーマについて発表を行う。4回生は総仕上げに向けた発表。

10	文献の講読3-①	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
11	文献の講読3-②	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
12	文献の講読3-③	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
13	文献の講読3-④	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
14	今年度のまとめ	今年度の総括と総合的な議論を行う。3回生は研究の進捗状況を報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・発表の準備、発表の相互評価など
・レポートの作成
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業で提示します。

【参考書】
以下のようなものが挙げられますが、全て読みましょうというわけではありません。
また、その他は授業内で提示します。
＜基本的な文献＞
・佐野直子『社会言語学のまなざし』三元社、2015年
・平高・木村（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、2017年
・本田・岩田・倉林『街の公共サインを点検する』大修館書店、2017年
・柿原・上村・長谷川『今そこにある多言語なニッポン』くろしお出版、2020年
・井上・田邊（編著）『社会言語学の枠組み』くろしお出版、2022年
・岩田・重光・村田（著）『改訂版 社会言語学―基本からディスコース分析まで』ひつじ書房、2022年
・三宅・新井『境界と周縁―社会言語学の新しい地平』ひつじ書房、2025年
＜様々な事例を扱った文献＞
・野呂・山下（編著）『「正しさ」への問い　批判的社会言語学の試み』三元社、2009年
・庵・イ・森（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか　多文化共生社会を実現するために』ココ出版、2013年
・杉野・原（編著）『言語と格差　差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』、2015年
・義永・山下（編）『ことばの「やさしさ」とは何か　批判的社会言語学からのアプローチ』三元社、2015年
・かどや・ましこ（編著）『行動する社会言語学』三元社、2017年
・杉野（監修）田中・波多野（編著）『言語と教育　多様化する社会のなかで新たな言語教育のあり方を探る』明石書店、2017年
・中島孝史『ろう教育と「ことば」の社会言語学　手話・英語・日本語リテラシー』生活書院、2018年
・貞包和寛『言語を仕分けるのは誰か　ポーランドの言語政策とマイノリティ』明石書店、2020年
・尾辻・熊谷・佐藤（編）『ともに生きるために　ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からあみることばの教育』春風社、2021年
・柿原・仲・布尾・山下『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社、2021年
・田中宝紀『海外ルーツの子ども支援　言葉・文化・制度を超えて共生へ』青弓社、2021年
・杉野（監修）田中・垣原・野沢（編）『言語教育のマルチダイナミクス』明石書店、2024年

【成績評価の方法と基準】
・発表 20％
・レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度 30％
・期末レポート 40％
・毎回の授業での発言等 10％
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。
学生が主体的にゼミをつくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
紙媒体をできるだけ用いないようにする予定ですので、配布物の閲覧用にPCやタブレットなどをご持参ください。

【その他の重要事項】
担当教員の専門上、ヨーロッパ、特にドイツ語圏の話が多くなるかもしれませんが、参加者は必ずしもドイツ語を履修している必要はありません。日本の国内外を問わず、言語と社会、言語と政治・政策、言語と教育、人々の言語意識などに関心を持つ人はご検討ください。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this seminar, we will consider various aspects of the relationship between language and society, using "multilingual society" as a starting point.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-Students will acquire the ability to think from multiple perspectives: language from society and society from language.
-Students will be able to find and explore their own research topics.
-Students will develop the ability to listen to others' opinions and cultivate a relative perspective on their own linguistic knowledge and experiences.
-Students will acquire the ability to learn from literature on seminar themes or personally interesting topics, and articulate them in their own words.
-Students will develop the ability to present topics orally and produce logically structured reports with reference to the literature.
【Learning activities outside of classroom】
-Preparation of presentations, peer evaluation of presentations.
-Writing of reports.
-The standard preparation and review time for this seminar is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to the followings:
-Oral presentation 20%
-Assignments such as resumes and comment sheets for each session 30%
-Final report 40%
-Active participation in the seminar 10%

ARSx400 GA

国際社会演習

小川　敦

サブタイトル：社会の中の言語、言語の中の社会　ー多言語社会を手がかりにして
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
皆さんは「多言語社会」と聞いて、どのような社会を思い浮かべるでしょうか。ベルギーやスイスのように公用語が複数ある国、アメリカ合衆国のヒスパニック系住民やフランスのアルザス地方のような言語マイノリティの事例を思い出す人もいるかもしれません。
しかし、多言語社会ーすなわち複数の言語が使われる社会ーは、決して外国だけの話ではありません。私たちの住む日本社会にも、さまざまな言語的・文化的背景をもつ人々が暮らしており、日本語以外にも多くの言語が日常的に用いられています。また、標準語といわゆる「方言」を場面に応じて使い分けている人もいるでしょう。さらに、外国語を学び、使うことも、多言語社会の一側面といえます。
では、多言語社会において、人々は複数の言語をどのように学び、どのように使い分けながら生活しているのでしょうか。また、それぞれの言語に対して、どのような評価や意識をもっているのでしょうか。さらに、それらの言語にはどのような社会的・公的な位置づけがあり、学ぶ権利はどのように保障されているのでしょうか。
本演習では、「多言語社会」を手がかりに、言語と社会の関係について考察します。社会の中で言語がどのような役割を果たしているのかを、具体的な事例を通して検討し、言語と社会を分析するための基本的な視点や方法を身につけることを目的とします。

【到達目標】
・言語を社会から、社会を言語から多角的に思考する力を身につける。
・自分のテーマを見つけ、探求する力を身につける。
・他者の意見に耳を傾け、自らの言語的な知識や経験を相対的に見る力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身で関心を持つテーマについて、文献から学び取り、自らの言葉で説明する力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身のテーマについて、口頭でプレゼンテーションを行う力、文献を参照しながら論理的にレポートを作成する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
＜春学期＞
社会言語学や多言語社会研究に関する基本的な文献を講読します。学生はレジュメを作成し、発表し、その上で議論を行います。
教員から話題を提供し、学生同士で議論を行うこともあります。
「言語景観」についてフィールドワークをし、議論、発表をしていただきます。
＜秋学期＞
前半はさらに個別事例を扱った文献の講読を行います。
後半はゼミ生の関心に基づいて発表をしていただく予定です。
学生の人数や関心によって若干変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの内容の紹介および説明。問題の設定。 分担の決定。
2	「多言語であること」の実例	教員による話題提供とグループでの議論
3	文献の講読1-①	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
4	文献の講読1-②	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
5	文献の講読1-③	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
6	文献の講読1-④	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
7	文献の講読1-⑤	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
8	文献の講読1-⑥	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
9	文献の講読1-⑦	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
10	文献の講読1-⑧	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
11	言語景観①	言語景観のフィールドワーク
12	言語景観②	言語景観に関する発表と議論
13	個人発表	主に4回生による研究発表
14	まとめ	春学期の総括と総合的な議論
1	イントロダクション	受講生の現在の研究テーマ・関心についてもお話しいただきます。
2	文献の講読2-①	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
3	文献の講読2-②	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
4	文献の講読2-③	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
5	文献の講読2-④	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
6	文献の講読2-⑤	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
7	文献の講読2-⑥	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
8	個人発表①	研究テーマについて発表を行う。 3回生は研究の構想を発表。
9	個人発表②	研究テーマについて発表を行う。 4回生は総仕上げに向けた発表。

10	文献の講読3-①	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
11	文献の講読3-②	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
12	文献の講読3-③	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
13	文献の講読3-④	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
14	今年度のまとめ	今年度の総括と総合的な議論を行う。3回生は研究の進捗状況を報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・発表の準備、発表の相互評価など
・レポートの作成
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業で提示します。

【参考書】
以下のようなものが挙げられますが、全て読みましょうというわけではありません。
また、その他は授業内で提示します。
＜基本的な文献＞
・佐野直子『社会言語学のまなざし』三元社、2015年
・平高・木村（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、2017年
・本田・岩田・倉林『街の公共サインを点検する』大修館書店、2017年
・柿原・上村・長谷川『今そこにある多言語なニッポン』くろしお出版、2020年
・井上・田邊（編著）『社会言語学の枠組み』くろしお出版、2022年
・岩田・重光・村田（著）『改訂版 社会言語学―基本からディスコース分析まで』ひつじ書房、2022年
・三宅・新井『境界と周縁―社会言語学の新しい地平』ひつじ書房、2025年
＜様々な事例を扱った文献＞
・野呂・山下（編著）『「正しさ」への問い　批判的社会言語学の試み』三元社、2009年
・庵・イ・森（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか　多文化共生社会を実現するために』ココ出版、2013年
・杉野・原（編著）『言語と格差　差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』、2015年
・義永・山下（編）『ことばの「やさしさ」とは何か　批判的社会言語学からのアプローチ』三元社、2015年
・かどや・ましこ（編著）『行動する社会言語学』三元社、2017年
・杉野（監修）田中・波多野（編著）『言語と教育　多様化する社会のなかで新たな言語教育のあり方を探る』明石書店、2017年
・中島孝史『ろう教育と「ことば」の社会言語学　手話・英語・日本語リテラシー』生活書院、2018年
・貞包和寛『言語を仕分けるのは誰か　ポーランドの言語政策とマイノリティ』明石書店、2020年
・尾辻・熊谷・佐藤（編）『ともに生きるために　ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からあみることばの教育』春風社、2021年
・柿原・仲・布尾・山下『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社、2021年
・田中宝紀『海外ルーツの子ども支援　言葉・文化・制度を超えて共生へ』青弓社、2021年
・杉野（監修）田中・垣原・野沢（編）『言語教育のマルチダイナミクス』明石書店、2024年

【成績評価の方法と基準】
・発表 20％
・レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度 30％
・期末レポート 40％
・毎回の授業での発言等 10％
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。
学生が主体的にゼミをつくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
紙媒体をできるだけ用いないようにする予定ですので、配布物の閲覧用にPCやタブレットなどをご持参ください。

【その他の重要事項】
担当教員の専門上、ヨーロッパ、特にドイツ語圏の話が多くなるかもしれませんが、参加者は必ずしもドイツ語を履修している必要はありません。日本の国内外を問わず、言語と社会、言語と政治・政策、言語と教育、人々の言語意識などに関心を持つ人はご検討ください。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this seminar, we will consider various aspects of the relationship between language and society, using "multilingual society" as a starting point.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-Students will acquire the ability to think from multiple perspectives: language from society and society from language.
-Students will be able to find and explore their own research topics.
-Students will develop the ability to listen to others' opinions and cultivate a relative perspective on their own linguistic knowledge and experiences.
-Students will acquire the ability to learn from literature on seminar themes or personally interesting topics, and articulate them in their own words.
-Students will develop the ability to present topics orally and produce logically structured reports with reference to the literature.
【Learning activities outside of classroom】
-Preparation of presentations, peer evaluation of presentations.
-Writing of reports.
-The standard preparation and review time for this seminar is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to the followings:
-Oral presentation 20%
-Assignments such as resumes and comment sheets for each session 30%
-Final report 40%
-Active participation in the seminar 10%

ARSx400 GA

国際社会演習

小川　敦

サブタイトル：社会の中の言語、言語の中の社会　ー多言語社会を手がかりにして
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
皆さんは「多言語社会」と聞いて、どのような社会を思い浮かべるでしょうか。ベルギーやスイスのように公用語が複数ある国、アメリカ合衆国のヒスパニック系住民やフランスのアルザス地方のような言語マイノリティの事例を思い出す人もいるかもしれません。
しかし、多言語社会ーすなわち複数の言語が使われる社会ーは、決して外国だけの話ではありません。私たちの住む日本社会にも、さまざまな言語的・文化的背景をもつ人々が暮らしており、日本語以外にも多くの言語が日常的に用いられています。また、標準語といわゆる「方言」を場面に応じて使い分けている人もいるでしょう。さらに、外国語を学び、使うことも、多言語社会の一側面といえます。
では、多言語社会において、人々は複数の言語をどのように学び、どのように使い分けながら生活しているのでしょうか。また、それぞれの言語に対して、どのような評価や意識をもっているのでしょうか。さらに、それらの言語にはどのような社会的・公的な位置づけがあり、学ぶ権利はどのように保障されているのでしょうか。
本演習では、「多言語社会」を手がかりに、言語と社会の関係について考察します。社会の中で言語がどのような役割を果たしているのかを、具体的な事例を通して検討し、言語と社会を分析するための基本的な視点や方法を身につけることを目的とします。

【到達目標】
・言語を社会から、社会を言語から多角的に思考する力を身につける。
・自分のテーマを見つけ、探求する力を身につける。
・他者の意見に耳を傾け、自らの言語的な知識や経験を相対的に見る力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身で関心を持つテーマについて、文献から学び取り、自らの言葉で説明する力を身につける。
・ゼミのテーマや自分自身のテーマについて、口頭でプレゼンテーションを行う力、文献を参照しながら論理的にレポートを作成する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
＜春学期＞
社会言語学や多言語社会研究に関する基本的な文献を講読します。学生はレジュメを作成し、発表し、その上で議論を行います。
教員から話題を提供し、学生同士で議論を行うこともあります。
「言語景観」についてフィールドワークをし、議論、発表をしていただきます。
＜秋学期＞
前半はさらに個別事例を扱った文献の講読を行います。
後半はゼミ生の関心に基づいて発表をしていただく予定です。
学生の人数や関心によって若干変更することもあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	ゼミの内容の紹介および説明。問題の設定。 分担の決定。
2	「多言語であること」の実例	教員による話題提供とグループでの議論
3	文献の講読1-①	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
4	文献の講読1-②	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
5	文献の講読1-③	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
6	文献の講読1-④	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
7	文献の講読1-⑤	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
8	文献の講読1-⑥	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
9	文献の講読1-⑦	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
10	文献の講読1-⑧	多言語社会研究や社会言語学に関する文献のうちの1章を扱い、議論を行う。
11	言語景観①	言語景観のフィールドワーク
12	言語景観②	言語景観に関する発表と議論
13	個人発表	主に4回生による研究発表
14	まとめ	春学期の総括と総合的な議論
1	イントロダクション	受講生の現在の研究テーマ・関心についてもお話しいただきます。
2	文献の講読2-①	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
3	文献の講読2-②	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
4	文献の講読2-③	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
5	文献の講読2-④	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
6	文献の講読2-⑤	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
7	文献の講読2-⑥	言語と格差、言語と教育、言語とアイデンティティ、少数言語などの個別事例を扱った文献から1つの章を選び発表し、全体で議論を行う。
8	個人発表①	研究テーマについて発表を行う。 3回生は研究の構想を発表。
9	個人発表②	研究テーマについて発表を行う。 4回生は総仕上げに向けた発表。

10	文献の講読3-①	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
11	文献の講読3-②	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
12	文献の講読3-③	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
13	文献の講読3-④	国内外の多言語状況に関するトピックを1つ選び発表し、議論を行う。
14	今年度のまとめ	今年度の総括と総合的な議論を行う。3回生は研究の進捗状況を報告する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・発表の準備、発表の相互評価など
・レポートの作成
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業で提示します。

【参考書】
以下のようなものが挙げられますが、全て読みましょうというわけではありません。
また、その他は授業内で提示します。
＜基本的な文献＞
・佐野直子『社会言語学のまなざし』三元社、2015年
・平高・木村（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版、2017年
・本田・岩田・倉林『街の公共サインを点検する』大修館書店、2017年
・柿原・上村・長谷川『今そこにある多言語なニッポン』くろしお出版、2020年
・井上・田邊（編著）『社会言語学の枠組み』くろしお出版、2022年
・岩田・重光・村田（著）『改訂版 社会言語学―基本からディスコース分析まで』ひつじ書房、2022年
・三宅・新井『境界と周縁―社会言語学の新しい地平』ひつじ書房、2025年
＜様々な事例を扱った文献＞
・野呂・山下（編著）『「正しさ」への問い　批判的社会言語学の試み』三元社、2009年
・庵・イ・森（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか　多文化共生社会を実現するために』ココ出版、2013年
・杉野・原（編著）『言語と格差　差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』、2015年
・義永・山下（編）『ことばの「やさしさ」とは何か　批判的社会言語学からのアプローチ』三元社、2015年
・かどや・ましこ（編著）『行動する社会言語学』三元社、2017年
・杉野（監修）田中・波多野（編著）『言語と教育　多様化する社会のなかで新たな言語教育のあり方を探る』明石書店、2017年
・中島孝史『ろう教育と「ことば」の社会言語学　手話・英語・日本語リテラシー』生活書院、2018年
・貞包和寛『言語を仕分けるのは誰か　ポーランドの言語政策とマイノリティ』明石書店、2020年
・尾辻・熊谷・佐藤（編）『ともに生きるために　ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からあみることばの教育』春風社、2021年
・柿原・仲・布尾・山下『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社、2021年
・田中宝紀『海外ルーツの子ども支援　言葉・文化・制度を超えて共生へ』青弓社、2021年
・杉野（監修）田中・垣原・野沢（編）『言語教育のマルチダイナミクス』明石書店、2024年

【成績評価の方法と基準】
・発表 20％
・レジュメや各回コメントシートなどの課題の完成度 30％
・期末レポート 40％
・毎回の授業での発言等 10％
上記4つの側面を主たる評価の対象として、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。
学生が主体的にゼミをつくりあげる授業を目指します。

【学生が準備すべき機器他】
紙媒体をできるだけ用いないようにする予定ですので、配布物の閲覧用にPCやタブレットなどをご持参ください。

【その他の重要事項】
担当教員の専門上、ヨーロッパ、特にドイツ語圏の話が多くなるかもしれませんが、参加者は必ずしもドイツ語を履修している必要はありません。日本の国内外を問わず、言語と社会、言語と政治・政策、言語と教育、人々の言語意識などに関心を持つ人はご検討ください。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this seminar, we will consider various aspects of the relationship between language and society, using "multilingual society" as a starting point.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-Students will acquire the ability to think from multiple perspectives: language from society and society from language.
-Students will be able to find and explore their own research topics.
-Students will develop the ability to listen to others' opinions and cultivate a relative perspective on their own linguistic knowledge and experiences.
-Students will acquire the ability to learn from literature on seminar themes or personally interesting topics, and articulate them in their own words.
-Students will develop the ability to present topics orally and produce logically structured reports with reference to the literature.
【Learning activities outside of classroom】
-Preparation of presentations, peer evaluation of presentations.
-Writing of reports.
-The standard preparation and review time for this seminar is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to the followings:
-Oral presentation 20%
-Assignments such as resumes and comment sheets for each session 30%
-Final report 40%
-Active participation in the seminar 10%

HIS400GA（史学 / History 400）

国際社会演習

佐々木　一惠

サブタイトル：歴史から捉える国際文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
過去とは、私たちにとって「異文化」の一つである。また、過去の出来事や事象を探究することとは、現在と過去の間の関係性を相関的に捉えていくことでもある。この演習では、歴史学の視点から国際文化学を検討していく。そこから、私たちにとって「当たり前」と思われてきた事象や歴史認識を批判的に捉えなおす力を養う。また、各自の研究テーマ（過去の事象を取り上げるテーマ、宗教やジェンダーに関連したテーマを歓迎します）を構想し、調査・分析を経て論文としてまとめていく方法・技術の修得を目指す。
＊今年度は、ある特定の事件や地域、個人に着目した「マイクロヒストリー（ミクロストリア）」をテーマに取り上げます。

【到達目標】
- 文献を読み、内容を理解するだけでなく、自分自身の解釈や批判を含めたクリティカル・レビューや先行研究分析ができるようになる。
- 一次史料（資料）に関して、それが書かれた政治的・経済的・社会的・文化的文脈の中で解釈できるようになる。
- 自分が関心のある事象について、歴史的な視点から史料（資料）収集や現地調査を行い、研究論文としてまとめていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
- 共通テキストの講読（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
- 一次史料の分析（グループワークにより、一次史料を批判的に読解する）
- 個人研究の発表（各自のテーマに関する先行研究を整理し、個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
- その他（夏合宿、国際文化情報学会での発表、論文合評会など）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
春1	イントロダクション	教員が授業の概要を説明した上で、受講者と問題関心を共有する。
春2	高校の世界史から大学の歴史学へ	研究論文・研究書の読み方、リーティング・ノートの作成、先行研究の分析、発表の仕方などを学ぶ。
春3	個人研究発表①	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春4	個人研究発表②	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春5	共通テキストの講読①	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春6	共通テキストの講読②	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春7	共通テキストの講読③	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春8	共通テキストの講読④	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春9	共通テキストの講読⑤	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春10	共通テキストの講読⑥	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春11	個人研究発表③	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春12	個人研究発表④	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春13	個人発表①	３年生の文献講読発表。
春14	個人発表②	３年生の文献講読発表。
秋1	共同研究発表①	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋2	共同研究発表②	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋3	共同研究発表③	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋4	個人研究発表⑤	４年生の個人研究発表を行う。
秋5	共同研究発表④	３年生の共同研究発表を行う。
秋6	個人研究発表⑥	４年生の個人研究発表を行う。
秋7	共同研究発表⑤	３年生の共同研究発表を行う。
秋8	個人研究発表⑦	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋9	個人研究発表⑧	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋10	共同研究発表⑥	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋11	個人研究発表⑨	３年生の個人研究発表を行う。
秋12	個人研究発表⑩	３年生の個人研究発表を行う。
秋13	個人研究発表⑪	３年生の個人研究発表を行う。
秋14	まとめ	今年度学んだことについて振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 文献を読み、疑問点や質問、意見を準備してくる。
- 発表にあたっている班は、事前に集まって発表のための準備を行う。
- 個人研究の準備を進める（文献表の作成、先行文献の整理と批判、資料収集、現地調査など）。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
上村忠男『歴史をどう書くか：カルロ・ギンズブルグの実験』みすず書房、2023年。
カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫：１６世紀の一粉挽き屋の世界像』みすず書房、2021年。
カルロ・ギンズブルグ（上村忠男訳）『ミクロストリアと世界史：歴史家の仕事について』みすず書房、2016年。

【参考書】
必要に応じて授業の中で提示する。

【成績評価の方法と基準】
個人発表・グループ発表：50％、提出課題：50％。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
史料（資料）検索の実習等において、パソコンを使用することがある。

【その他の重要事項】
担当教員が担当する予定の以下の授業の受講を推奨する。
« 学部基盤科目»
- 宗教と社会
- ジェンダー論
- Religion and Society
« 学部専攻科目»
- 宗教社会論II（キリスト教と社会運動）
- The Global South: History and Politics
（旧科目名：Approaches to Transnational History）
« 大学院科目（自由科目として受講）»
- 多文化相関論III（歴史学の諸アプローチ）
- ジェンダー論（ジェンダー史の展開）

【Outline (in English)】
« Course outline»
The past is "a different culture" with different values, beliefs, and customs. The study of past events and phenomena is thus a re-examination of the relationship between the present and the past. This seminar examines cross-cultural phenomena from a historical perspective.
« Learning objectives»
By the end of the course, students are expected to be able to: 1) conduct a critical review and analysis of previous research, 2) interpret primary sources in the political, economic, social, and cultural contexts in which they were written, and 3) collect historical materials on issues of their interest and write a research paper.
« Learning activities outside of classroom»
Students will be expected to: 1) have read the assigned texts and prepared with questions, comments, and opinions, 2) prepare for group presentations, and 3) conduct individual research for their research projects.
« Grading Criteria /Policy»
Students are expected to spend 4 hours per week working on homework, revision, and assignments. The final grade is determined by presentations (50%) and assignments (50%).

HIS400GA（史学 / History 400）

国際社会演習

佐々木　一惠

サブタイトル：歴史から捉える国際文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
過去とは、私たちにとって「異文化」の一つである。また、過去の出来事や事象を探究することとは、現在と過去の間の関係性を相関的に捉えていくことでもある。この演習では、歴史学の視点から国際文化学を検討していく。そこから、私たちにとって「当たり前」と思われてきた事象や歴史認識を批判的に捉えなおす力を養う。また、各自の研究テーマ（過去の事象を取り上げるテーマ、宗教やジェンダーに関連したテーマを歓迎します）を構想し、調査・分析を経て論文としてまとめていく方法・技術の修得を目指す。
＊今年度は、ある特定の事件や地域、個人に着目した「マイクロヒストリー（ミクロストリア）」をテーマに取り上げます。

【到達目標】
- 文献を読み、内容を理解するだけでなく、自分自身の解釈や批判を含めたクリティカル・レビューや先行研究分析ができるようになる。
- 一次史料（資料）に関して、それが書かれた政治的・経済的・社会的・文化的文脈の中で解釈できるようになる。
- 自分が関心のある事象について、歴史的な視点から史料（資料）収集や現地調査を行い、研究論文としてまとめていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
- 共通テキストの講読（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
- 一次史料の分析（グループワークにより、一次史料を批判的に読解する）
- 個人研究の発表（各自のテーマに関する先行研究を整理し、個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
- その他（夏合宿、国際文化情報学会での発表、論文合評会など）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
春1	イントロダクション	教員が授業の概要を説明した上で、受講者と問題関心を共有する。
春2	高校の世界史から大学の歴史学へ	研究論文・研究書の読み方、リーティング・ノートの作成、先行研究の分析、発表の仕方などを学ぶ。
春3	個人研究発表①	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春4	個人研究発表②	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春5	共通テキストの講読①	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春6	共通テキストの講読②	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春7	共通テキストの講読③	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春8	共通テキストの講読④	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春9	共通テキストの講読⑤	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春10	共通テキストの講読⑥	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春11	個人研究発表③	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春12	個人研究発表④	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春13	個人発表①	３年生の文献講読発表。
春14	個人発表②	３年生の文献講読発表。
秋1	共同研究発表①	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋2	共同研究発表②	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋3	共同研究発表③	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋4	個人研究発表⑤	４年生の個人研究発表を行う。
秋5	共同研究発表④	３年生の共同研究発表を行う。
秋6	個人研究発表⑥	４年生の個人研究発表を行う。
秋7	共同研究発表⑤	３年生の共同研究発表を行う。
秋8	個人研究発表⑦	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋9	個人研究発表⑧	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋10	共同研究発表⑥	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋11	個人研究発表⑨	３年生の個人研究発表を行う。
秋12	個人研究発表⑩	３年生の個人研究発表を行う。
秋13	個人研究発表⑪	３年生の個人研究発表を行う。
秋14	まとめ	今年度学んだことについて振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 文献を読み、疑問点や質問、意見を準備してくる。
- 発表にあたっている班は、事前に集まって発表のための準備を行う。
- 個人研究の準備を進める（文献表の作成、先行文献の整理と批判、資料収集、現地調査など）。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
上村忠男『歴史をどう書くか：カルロ・ギンズブルグの実験』みすず書房、2023年。
カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫：１６世紀の一粉挽き屋の世界像』みすず書房、2021年。
カルロ・ギンズブルグ（上村忠男訳）『ミクロストリアと世界史：歴史家の仕事について』みすず書房、2016年。

【参考書】
必要に応じて授業の中で提示する。

【成績評価の方法と基準】
個人発表・グループ発表：50％、提出課題：50％。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
史料（資料）検索の実習等において、パソコンを使用することがある。

【その他の重要事項】
担当教員が担当する予定の以下の授業の受講を推奨する。
« 学部基盤科目»
- 宗教と社会
- ジェンダー論
- Religion and Society
« 学部専攻科目»
- 宗教社会論II（キリスト教と社会運動）
- The Global South: History and Politics
（旧科目名：Approaches to Transnational History）
« 大学院科目（自由科目として受講）»
- 多文化相関論III（歴史学の諸アプローチ）
- ジェンダー論（ジェンダー史の展開）

【Outline (in English)】
« Course outline»
The past is "a different culture" with different values, beliefs, and customs. The study of past events and phenomena is thus a re-examination of the relationship between the present and the past. This seminar examines cross-cultural phenomena from a historical perspective.
« Learning objectives»
By the end of the course, students are expected to be able to: 1) conduct a critical review and analysis of previous research, 2) interpret primary sources in the political, economic, social, and cultural contexts in which they were written, and 3) collect historical materials on issues of their interest and write a research paper.
« Learning activities outside of classroom»
Students will be expected to: 1) have read the assigned texts and prepared with questions, comments, and opinions, 2) prepare for group presentations, and 3) conduct individual research for their research projects.
« Grading Criteria /Policy»
Students are expected to spend 4 hours per week working on homework, revision, and assignments. The final grade is determined by presentations (50%) and assignments (50%).

HIS400GA（史学 / History 400）

国際社会演習

佐々木　一惠

サブタイトル：歴史から捉える国際文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
過去とは、私たちにとって「異文化」の一つである。また、過去の出来事や事象を探究することとは、現在と過去の間の関係性を相関的に捉えていくことでもある。この演習では、歴史学の視点から国際文化学を検討していく。そこから、私たちにとって「当たり前」と思われてきた事象や歴史認識を批判的に捉えなおす力を養う。また、各自の研究テーマ（過去の事象を取り上げるテーマ、宗教やジェンダーに関連したテーマを歓迎します）を構想し、調査・分析を経て論文としてまとめていく方法・技術の修得を目指す。
＊今年度は、ある特定の事件や地域、個人に着目した「マイクロヒストリー（ミクロストリア）」をテーマに取り上げます。

【到達目標】
- 文献を読み、内容を理解するだけでなく、自分自身の解釈や批判を含めたクリティカル・レビューや先行研究分析ができるようになる。
- 一次史料（資料）に関して、それが書かれた政治的・経済的・社会的・文化的文脈の中で解釈できるようになる。
- 自分が関心のある事象について、歴史的な視点から史料（資料）収集や現地調査を行い、研究論文としてまとめていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
- 共通テキストの講読（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
- 一次史料の分析（グループワークにより、一次史料を批判的に読解する）
- 個人研究の発表（各自のテーマに関する先行研究を整理し、個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
- その他（夏合宿、国際文化情報学会での発表、論文合評会など）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
春1	イントロダクション	教員が授業の概要を説明した上で、受講者と問題関心を共有する。
春2	高校の世界史から大学の歴史学へ	研究論文・研究書の読み方、リーティング・ノートの作成、先行研究の分析、発表の仕方などを学ぶ。
春3	個人研究発表①	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春4	個人研究発表②	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春5	共通テキストの講読①	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春6	共通テキストの講読②	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春7	共通テキストの講読③	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春8	共通テキストの講読④	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春9	共通テキストの講読⑤	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春10	共通テキストの講読⑥	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春11	個人研究発表③	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春12	個人研究発表④	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春13	個人発表①	３年生の文献講読発表。
春14	個人発表②	３年生の文献講読発表。
秋1	共同研究発表①	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋2	共同研究発表②	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋3	共同研究発表③	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋4	個人研究発表⑤	４年生の個人研究発表を行う。
秋5	共同研究発表④	３年生の共同研究発表を行う。
秋6	個人研究発表⑥	４年生の個人研究発表を行う。
秋7	共同研究発表⑤	３年生の共同研究発表を行う。
秋8	個人研究発表⑦	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋9	個人研究発表⑧	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋10	共同研究発表⑥	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋11	個人研究発表⑨	３年生の個人研究発表を行う。
秋12	個人研究発表⑩	３年生の個人研究発表を行う。
秋13	個人研究発表⑪	３年生の個人研究発表を行う。
秋14	まとめ	今年度学んだことについて振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 文献を読み、疑問点や質問、意見を準備してくる。
- 発表にあたっている班は、事前に集まって発表のための準備を行う。
- 個人研究の準備を進める（文献表の作成、先行文献の整理と批判、資料収集、現地調査など）。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
上村忠男『歴史をどう書くか：カルロ・ギンズブルグの実験』みすず書房、2023年。
カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫：１６世紀の一粉挽き屋の世界像』みすず書房、2021年。
カルロ・ギンズブルグ（上村忠男訳）『ミクロストリアと世界史：歴史家の仕事について』みすず書房、2016年。

【参考書】
必要に応じて授業の中で提示する。

【成績評価の方法と基準】
個人発表・グループ発表：50％、提出課題：50％。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
史料（資料）検索の実習等において、パソコンを使用することがある。

【その他の重要事項】
担当教員が担当する予定の以下の授業の受講を推奨する。
« 学部基盤科目»
- 宗教と社会
- ジェンダー論
- Religion and Society
« 学部専攻科目»
- 宗教社会論II（キリスト教と社会運動）
- The Global South: History and Politics
（旧科目名：Approaches to Transnational History）
« 大学院科目（自由科目として受講）»
- 多文化相関論III（歴史学の諸アプローチ）
- ジェンダー論（ジェンダー史の展開）

【Outline (in English)】
« Course outline»
The past is "a different culture" with different values, beliefs, and customs. The study of past events and phenomena is thus a re-examination of the relationship between the present and the past. This seminar examines cross-cultural phenomena from a historical perspective.
« Learning objectives»
By the end of the course, students are expected to be able to: 1) conduct a critical review and analysis of previous research, 2) interpret primary sources in the political, economic, social, and cultural contexts in which they were written, and 3) collect historical materials on issues of their interest and write a research paper.
« Learning activities outside of classroom»
Students will be expected to: 1) have read the assigned texts and prepared with questions, comments, and opinions, 2) prepare for group presentations, and 3) conduct individual research for their research projects.
« Grading Criteria /Policy»
Students are expected to spend 4 hours per week working on homework, revision, and assignments. The final grade is determined by presentations (50%) and assignments (50%).

HIS400GA（史学 / History 400）

国際社会演習

佐々木　一惠

サブタイトル：歴史から捉える国際文化
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
過去とは、私たちにとって「異文化」の一つである。また、過去の出来事や事象を探究することとは、現在と過去の間の関係性を相関的に捉えていくことでもある。この演習では、歴史学の視点から国際文化学を検討していく。そこから、私たちにとって「当たり前」と思われてきた事象や歴史認識を批判的に捉えなおす力を養う。また、各自の研究テーマ（過去の事象を取り上げるテーマ、宗教やジェンダーに関連したテーマを歓迎します）を構想し、調査・分析を経て論文としてまとめていく方法・技術の修得を目指す。
＊今年度は、ある特定の事件や地域、個人に着目した「マイクロヒストリー（ミクロストリア）」をテーマに取り上げます。

【到達目標】
- 文献を読み、内容を理解するだけでなく、自分自身の解釈や批判を含めたクリティカル・レビューや先行研究分析ができるようになる。
- 一次史料（資料）に関して、それが書かれた政治的・経済的・社会的・文化的文脈の中で解釈できるようになる。
- 自分が関心のある事象について、歴史的な視点から史料（資料）収集や現地調査を行い、研究論文としてまとめていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
- 共通テキストの講読（レジュメを作成し、文献の要旨を報告し、疑問点・問題点を提起する）
- 一次史料の分析（グループワークにより、一次史料を批判的に読解する）
- 個人研究の発表（各自のテーマに関する先行研究を整理し、個人研究の構想・概要・進捗状況に関する発表を行う）
- その他（夏合宿、国際文化情報学会での発表、論文合評会など）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
春1	イントロダクション	教員が授業の概要を説明した上で、受講者と問題関心を共有する。
春2	高校の世界史から大学の歴史学へ	研究論文・研究書の読み方、リーティング・ノートの作成、先行研究の分析、発表の仕方などを学ぶ。
春3	個人研究発表①	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春4	個人研究発表②	４年生の個人研究の構想発表を行う。
春5	共通テキストの講読①	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春6	共通テキストの講読②	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春7	共通テキストの講読③	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春8	共通テキストの講読④	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春9	共通テキストの講読⑤	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春10	共通テキストの講読⑥	マイクロヒストリー（ミクロストリア）に関する文献の講読に基づく発表と議論を行う。
春11	個人研究発表③	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春12	個人研究発表④	４年生の個人研究の先行研究分析発表。
春13	個人発表①	３年生の文献講読発表。
春14	個人発表②	３年生の文献講読発表。
秋1	共同研究発表①	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋2	共同研究発表②	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋3	共同研究発表③	３年生の共同研究の構想発表を行う。
秋4	個人研究発表⑤	４年生の個人研究発表を行う。
秋5	共同研究発表④	３年生の共同研究発表を行う。
秋6	個人研究発表⑥	４年生の個人研究発表を行う。
秋7	共同研究発表⑤	３年生の共同研究発表を行う。
秋8	個人研究発表⑦	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋9	個人研究発表⑧	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋10	共同研究発表⑥	国際文化情報学会における個人発表の予行演習を行う。
秋11	個人研究発表⑨	３年生の個人研究発表を行う。
秋12	個人研究発表⑩	３年生の個人研究発表を行う。
秋13	個人研究発表⑪	３年生の個人研究発表を行う。
秋14	まとめ	今年度学んだことについて振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 文献を読み、疑問点や質問、意見を準備してくる。
- 発表にあたっている班は、事前に集まって発表のための準備を行う。
- 個人研究の準備を進める（文献表の作成、先行文献の整理と批判、資料収集、現地調査など）。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
上村忠男『歴史をどう書くか：カルロ・ギンズブルグの実験』みすず書房、2023年。
カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫：１６世紀の一粉挽き屋の世界像』みすず書房、2021年。
カルロ・ギンズブルグ（上村忠男訳）『ミクロストリアと世界史：歴史家の仕事について』みすず書房、2016年。

【参考書】
必要に応じて授業の中で提示する。

【成績評価の方法と基準】
個人発表・グループ発表：50％、提出課題：50％。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
史料（資料）検索の実習等において、パソコンを使用することがある。

【その他の重要事項】
担当教員が担当する予定の以下の授業の受講を推奨する。
« 学部基盤科目»
- 宗教と社会
- ジェンダー論
- Religion and Society
« 学部専攻科目»
- 宗教社会論II（キリスト教と社会運動）
- The Global South: History and Politics
（旧科目名：Approaches to Transnational History）
« 大学院科目（自由科目として受講）»
- 多文化相関論III（歴史学の諸アプローチ）
- ジェンダー論（ジェンダー史の展開）

【Outline (in English)】
« Course outline»
The past is "a different culture" with different values, beliefs, and customs. The study of past events and phenomena is thus a re-examination of the relationship between the present and the past. This seminar examines cross-cultural phenomena from a historical perspective.
« Learning objectives»
By the end of the course, students are expected to be able to: 1) conduct a critical review and analysis of previous research, 2) interpret primary sources in the political, economic, social, and cultural contexts in which they were written, and 3) collect historical materials on issues of their interest and write a research paper.
« Learning activities outside of classroom»
Students will be expected to: 1) have read the assigned texts and prepared with questions, comments, and opinions, 2) prepare for group presentations, and 3) conduct individual research for their research projects.
« Grading Criteria /Policy»
Students are expected to spend 4 hours per week working on homework, revision, and assignments. The final grade is determined by presentations (50%) and assignments (50%).

ARS（e）400GA

国際社会演習

張　勝蘭

サブタイトル：マイノリティの諸相から多文化共生を考える
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マイノリティとは何か。それは少数民族・エスニック集団から、社会的力関係の変化により生み出される多様な社会的少数派まで、実に多くの具体像を持っている。社会の変動や人の移動に伴う環境の変化によって、少数民族などの伝統社会・文化が大きく変容してきた。それと同時に、人々は状況次第で、容易に何らかのカテゴリーのマイノリティになり得る。このような観点から、マイノリティの視点から現代社会を理解することは、きわめて重要である。
本ゼミでは変化していくマイノリティの諸相に注目し、とりわけ観光や移民といった世界規模で展開される「人の移動」、そしてエスニシティーを切り口に、日本そ及び国際社会における多文化共生を考えていく。

【到達目標】
・関連する文献を読み、その内容を理解した上で、批判的に分析する力を身につける。そのトレーニングを通して、自らの関心事象・問題意識を明確にし、研究テーマを設定できるようになる。
・設定した研究テーマについて、自ら現地調査を行い、データや資料の収集・整理・分析を通じて、論文としてまとめられるようになる。
・マイノリティ、独自性・多様性、観光化、移民、エスニシティーといったキーワードを手がかりに、多文化共生について考察し、日本および国際社会を多角的に捉える視点を身につけることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春セメスターでは、関連研究文献の講読を行う。各自がレジュメを作成し、要旨を発表するとともに、感想や疑問点を提示し、議論を行うことで問題意識を明確にしていく。その上で、チームまたは個人単位で研究調査テーマを設定し、先行研究の整理を行う。さらに、テーマ別の研究文献を精読するとともに現地調査を実施し、入手した資料や調査データを整理した上で、研究計画書を作成する。
・秋セメスターでは、引き続き研究調査を行い、新たに収集した資料の整理・分析を進める。全体構想の検討や中間報告などの段階を踏まえながら、研究成果を研究論文としてまとめる。完成した研究成果は、9月末の懸賞論文への応募や12月に開催される国際文化情報学会での発表などを通じて、第三者による評価を受けることを目指す。
・授業は原則として対面方式で行う。ただし、状況に応じてオンライン授業と併用する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教員による授業の概要及び進め方の説明、ゼミ生の自己紹介、関心問題を発表
第2回	教員及び上級生による研究紹介、新ゼミ生による関心テーマ紹介	研究内容とフィールド調査について紹介。問題意識、先行研究、発表レジュメ・研究論文の書き方などの基本事項を再確認。新ゼミ生の関心テーマと文献リストの紹介
第3回	グループ別作業（1）	上級生は調査（準備）・論文執筆①、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティ－関連の文献①をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第4回	グループ別作業（2）	上級生は調査（準備）・論文執筆②、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献②をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第5回	グループ別作業（3）	上級生は調査（準備）・論文執筆③、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献③をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第6回	グループ別作業（4）	上級生は調査（準備）・論文執筆④、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献④をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第7回	先行研究の発表（1）	具体的な関心テーマの先行研究について発表①、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第8回	先行研究の発表（2）	具合的な関心テーマの先行研究について発表②、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第9回	研究調査計画の立案（1）	研究テーマ・背景・目的、調査対象の再検討
第10回	模擬調査実習	選定した調査地を歩き、観察・記録してみる
第11回	研究調査計画の立案（2）	模擬調査の報告及び調査方法、調査内容の再検討
第12回	研究調査計画の立案（3）	文献資料による調査地の概況調査
第13回	研究調査計画の発表と討論（1）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論①
第14回	研究調査計画の発表と討論（2）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論②
第1回	研究調査の概要報告	研究調査の進捗状況の報告、教員から懸賞論文・学会発表・卒論等の説明、スケジュールの確認
第2回	グループ別作業（1）	補足調査を継続しつつ、研究調査の資料整理と文章化（構想発表①）
第3回	グループ別作業（2）	研究調査の論文執筆（構想発表②）、必要に応じて補足調査
第4回	グループ別作業（3）	研究調査の論文執筆（構想発表③）、必要に応じて補足調査
第5回	研究成果の発表（1）	研究成果の発表と討論（中間報告①）
第6回	研究成果の発表（2）	研究成果の発表と討論（中間報告②）
第7回	学会発表のための準備（1）	学会発表論文の論理展開の確認とフィードバック
第8回	学会発表のための準備（2）	学会発表論文の予行演習とフィードバック

第9回	グループ別個別指導（1）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック①
第10回	グループ別個別指導（2）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック②
第11回	グループ別作業（4）	研究調査の論文の完成度を高め、全体の再確認
第12回	ゼミ別就職セミナー	大学キャリアセンターによるゼミ別就職セミナーを受ける
第13回	4年生による卒論、就職活動についての助言及び交流	次年度のゼミ活動に関する諸調整も行う
第14回	研究成果の最終まとめ・発表	完成稿に向けて執筆した論文・レポートの最終確認を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・春学期では、共通テキストの講読を行うとともに、個人またはグループごとに研究テーマに関する研究文献を精読し、問題点の整理やレジュメの作成を行う。また、研究調査にもとづき、研究計画書を作成する。
・秋学期では、引き続きフィールドワークや文献調査によって得られた調査結果の整理・分析を随時行い、研究成果を論文としてまとめ、発表する。
・本授業の準備・復習時間は、各段階の作業内容によって異なるが、次回授業に向けて毎週行うこととする。目安としては、各回おおよそ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に定めない、適宜関連資料を配布する。

【参考書】
山口誠・須永和博・鈴木涼太郎編『観光のレッスンーツーリズム・リテラシー入門』新曜社、2021年
市野澤潤平・碇陽子・東賢太朗編『観光人類学のフィールドワークーツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
リーペレス ファビオ『ストレンジャーの人類学――移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店、2020年
吉原和男編『現代における人の国際移動―アジアの中の日本』慶応義塾大学出版会、2013年
横浜商科大学編『横浜中華街の世界【増補版】』学校法人横浜商科大学、2012年
日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
山下晋司『観光人類学の挑戦―「新しい地球」の生き方』(講談社選書メチエ)講談社、2009年
白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化―グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房、2008年
佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社、2008年
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998年
初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館出版、1996年
青柳こまち編・監訳『「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への貢献度・調査への参加度）：50％
期末に提出するレポート・論文：50％
上記の割合で成績評価を行う。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミにおいて、学生が主体的に意見交換を行い、活発な議論に参加できるよう、授業運営に工夫を凝らす。授業支援システム等を活用することで、学生同士の相互交流を促進し、学修効果の向上を図る。

【その他の重要事項】
・シラバスの内容や授業計画に変更が生じる場合は、事前に周知する。
・現段階では、マイノリティの諸相から多文化共生を考察するというコンセプトにもとづき、人の移動や観光に関するテーマを中心に扱っているが、授業の進行状況や学生の関心に応じて、少数民族やエスニック集団に関する問題なども取り上げていく。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course deals with tourism, migration and ethnicity .
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants are expected to understand Japan and other countries from the viewpoint of transnationalism.
【Learning activities outside of classroom】
In spring term, students will be expected to read academic papers on research themes. In autumn term, students will be expected to analyze survey results and write a dissertation.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated to the following process: Term-end report/ dissertation（50％） and contribution in class or fieldwork（50％).

ARS（e）400GA

国際社会演習

張　勝蘭

サブタイトル：マイノリティの諸相から多文化共生を考える
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マイノリティとは何か。それは少数民族・エスニック集団から、社会的力関係の変化により生み出される多様な社会的少数派まで、実に多くの具体像を持っている。社会の変動や人の移動に伴う環境の変化によって、少数民族などの伝統社会・文化が大きく変容してきた。それと同時に、人々は状況次第で、容易に何らかのカテゴリーのマイノリティになり得る。このような観点から、マイノリティの視点から現代社会を理解することは、きわめて重要である。
本ゼミでは変化していくマイノリティの諸相に注目し、とりわけ観光や移民といった世界規模で展開される「人の移動」、そしてエスニシティーを切り口に、日本そ及び国際社会における多文化共生を考えていく。

【到達目標】
・関連する文献を読み、その内容を理解した上で、批判的に分析する力を身につける。そのトレーニングを通して、自らの関心事象・問題意識を明確にし、研究テーマを設定できるようになる。
・設定した研究テーマについて、自ら現地調査を行い、データや資料の収集・整理・分析を通じて、論文としてまとめられるようになる。
・マイノリティ、独自性・多様性、観光化、移民、エスニシティーといったキーワードを手がかりに、多文化共生について考察し、日本および国際社会を多角的に捉える視点を身につけることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春セメスターでは、関連研究文献の講読を行う。各自がレジュメを作成し、要旨を発表するとともに、感想や疑問点を提示し、議論を行うことで問題意識を明確にしていく。その上で、チームまたは個人単位で研究調査テーマを設定し、先行研究の整理を行う。さらに、テーマ別の研究文献を精読するとともに現地調査を実施し、入手した資料や調査データを整理した上で、研究計画書を作成する。
・秋セメスターでは、引き続き研究調査を行い、新たに収集した資料の整理・分析を進める。全体構想の検討や中間報告などの段階を踏まえながら、研究成果を研究論文としてまとめる。完成した研究成果は、9月末の懸賞論文への応募や12月に開催される国際文化情報学会での発表などを通じて、第三者による評価を受けることを目指す。
・授業は原則として対面方式で行う。ただし、状況に応じてオンライン授業と併用する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教員による授業の概要及び進め方の説明、ゼミ生の自己紹介、関心問題を発表
第2回	教員及び上級生による研究紹介、新ゼミ生による関心テーマ紹介	研究内容とフィールド調査について紹介。問題意識、先行研究、発表レジュメ・研究論文の書き方などの基本事項を再確認。新ゼミ生の関心テーマと文献リストの紹介
第3回	グループ別作業（1）	上級生は調査（準備）・論文執筆①、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティ－関連の文献①をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第4回	グループ別作業（2）	上級生は調査（準備）・論文執筆②、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献②をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第5回	グループ別作業（3）	上級生は調査（準備）・論文執筆③、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献③をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第6回	グループ別作業（4）	上級生は調査（準備）・論文執筆④、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献④をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第7回	先行研究の発表（1）	具体的な関心テーマの先行研究について発表①、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第8回	先行研究の発表（2）	具合的な関心テーマの先行研究について発表②、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第9回	研究調査計画の立案（1）	研究テーマ・背景・目的、調査対象の再検討
第10回	模擬調査実習	選定した調査地を歩き、観察・記録してみる
第11回	研究調査計画の立案（2）	模擬調査の報告及び調査方法、調査内容の再検討
第12回	研究調査計画の立案（3）	文献資料による調査地の概況調査
第13回	研究調査計画の発表と討論（1）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論①
第14回	研究調査計画の発表と討論（2）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論②
第1回	研究調査の概要報告	研究調査の進捗状況の報告、教員から懸賞論文・学会発表・卒論等の説明、スケジュールの確認
第2回	グループ別作業（1）	補足調査を継続しつつ、研究調査の資料整理と文章化（構想発表①）
第3回	グループ別作業（2）	研究調査の論文執筆（構想発表②）、必要に応じて補足調査
第4回	グループ別作業（3）	研究調査の論文執筆（構想発表③）、必要に応じて補足調査
第5回	研究成果の発表（1）	研究成果の発表と討論（中間報告①）
第6回	研究成果の発表（2）	研究成果の発表と討論（中間報告②）
第7回	学会発表のための準備（1）	学会発表論文の論理展開の確認とフィードバック
第8回	学会発表のための準備（2）	学会発表論文の予行演習とフィードバック

第9回	グループ別個別指導（1）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック①
第10回	グループ別個別指導（2）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック②
第11回	グループ別作業（4）	研究調査の論文の完成度を高め、全体の再確認
第12回	ゼミ別就職セミナー	大学キャリアセンターによるゼミ別就職セミナーを受ける
第13回	4年生による卒論、就職活動についての助言及び交流	次年度のゼミ活動に関する諸調整も行う
第14回	研究成果の最終まとめ・発表	完成稿に向けて執筆した論文・レポートの最終確認を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・春学期では、共通テキストの講読を行うとともに、個人またはグループごとに研究テーマに関する研究文献を精読し、問題点の整理やレジュメの作成を行う。また、研究調査にもとづき、研究計画書を作成する。
・秋学期では、引き続きフィールドワークや文献調査によって得られた調査結果の整理・分析を随時行い、研究成果を論文としてまとめ、発表する。
・本授業の準備・復習時間は、各段階の作業内容によって異なるが、次回授業に向けて毎週行うこととする。目安としては、各回おおよそ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に定めない、適宜関連資料を配布する。

【参考書】
山口誠・須永和博・鈴木涼太郎編『観光のレッスンーツーリズム・リテラシー入門』新曜社、2021年
市野澤潤平・碇陽子・東賢太朗編『観光人類学のフィールドワークーツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
リーペレス ファビオ『ストレンジャーの人類学――移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店、2020年
吉原和男編『現代における人の国際移動―アジアの中の日本』慶応義塾大学出版会、2013年
横浜商科大学編『横浜中華街の世界【増補版】』学校法人横浜商科大学、2012年
日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
山下晋司『観光人類学の挑戦―「新しい地球」の生き方』(講談社選書メチエ)講談社、2009年
白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化―グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房、2008年
佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社、2008年
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998年
初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館出版、1996年
青柳こまち編・監訳『「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への貢献度・調査への参加度）：50％
期末に提出するレポート・論文：50％
上記の割合で成績評価を行う。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミにおいて、学生が主体的に意見交換を行い、活発な議論に参加できるよう、授業運営に工夫を凝らす。授業支援システム等を活用することで、学生同士の相互交流を促進し、学修効果の向上を図る。

【その他の重要事項】
・シラバスの内容や授業計画に変更が生じる場合は、事前に周知する。
・現段階では、マイノリティの諸相から多文化共生を考察するというコンセプトにもとづき、人の移動や観光に関するテーマを中心に扱っているが、授業の進行状況や学生の関心に応じて、少数民族やエスニック集団に関する問題なども取り上げていく。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course deals with tourism, migration and ethnicity .
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants are expected to understand Japan and other countries from the viewpoint of transnationalism.
【Learning activities outside of classroom】
In spring term, students will be expected to read academic papers on research themes. In autumn term, students will be expected to analyze survey results and write a dissertation.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated to the following process: Term-end report/ dissertation（50％） and contribution in class or fieldwork（50％).

ARS（e）400GA

国際社会演習

張　勝蘭

サブタイトル：マイノリティの諸相から多文化共生を考える
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マイノリティとは何か。それは少数民族・エスニック集団から、社会的力関係の変化により生み出される多様な社会的少数派まで、実に多くの具体像を持っている。社会の変動や人の移動に伴う環境の変化によって、少数民族などの伝統社会・文化が大きく変容してきた。それと同時に、人々は状況次第で、容易に何らかのカテゴリーのマイノリティになり得る。このような観点から、マイノリティの視点から現代社会を理解することは、きわめて重要である。
本ゼミでは変化していくマイノリティの諸相に注目し、とりわけ観光や移民といった世界規模で展開される「人の移動」、そしてエスニシティーを切り口に、日本そ及び国際社会における多文化共生を考えていく。

【到達目標】
・関連する文献を読み、その内容を理解した上で、批判的に分析する力を身につける。そのトレーニングを通して、自らの関心事象・問題意識を明確にし、研究テーマを設定できるようになる。
・設定した研究テーマについて、自ら現地調査を行い、データや資料の収集・整理・分析を通じて、論文としてまとめられるようになる。
・マイノリティ、独自性・多様性、観光化、移民、エスニシティーといったキーワードを手がかりに、多文化共生について考察し、日本および国際社会を多角的に捉える視点を身につけることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春セメスターでは、関連研究文献の講読を行う。各自がレジュメを作成し、要旨を発表するとともに、感想や疑問点を提示し、議論を行うことで問題意識を明確にしていく。その上で、チームまたは個人単位で研究調査テーマを設定し、先行研究の整理を行う。さらに、テーマ別の研究文献を精読するとともに現地調査を実施し、入手した資料や調査データを整理した上で、研究計画書を作成する。
・秋セメスターでは、引き続き研究調査を行い、新たに収集した資料の整理・分析を進める。全体構想の検討や中間報告などの段階を踏まえながら、研究成果を研究論文としてまとめる。完成した研究成果は、9月末の懸賞論文への応募や12月に開催される国際文化情報学会での発表などを通じて、第三者による評価を受けることを目指す。
・授業は原則として対面方式で行う。ただし、状況に応じてオンライン授業と併用する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教員による授業の概要及び進め方の説明、ゼミ生の自己紹介、関心問題を発表
第2回	教員及び上級生による研究紹介、新ゼミ生による関心テーマ紹介	研究内容とフィールド調査について紹介。問題意識、先行研究、発表レジュメ・研究論文の書き方などの基本事項を再確認。新ゼミ生の関心テーマと文献リストの紹介
第3回	グループ別作業（1）	上級生は調査（準備）・論文執筆①、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティ－関連の文献①をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第4回	グループ別作業（2）	上級生は調査（準備）・論文執筆②、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献②をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第5回	グループ別作業（3）	上級生は調査（準備）・論文執筆③、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献③をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第6回	グループ別作業（4）	上級生は調査（準備）・論文執筆④、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献④をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第7回	先行研究の発表（1）	具体的な関心テーマの先行研究について発表①、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第8回	先行研究の発表（2）	具合的な関心テーマの先行研究について発表②、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第9回	研究調査計画の立案（1）	研究テーマ・背景・目的、調査対象の再検討
第10回	模擬調査実習	選定した調査地を歩き、観察・記録してみる
第11回	研究調査計画の立案（2）	模擬調査の報告及び調査方法、調査内容の再検討
第12回	研究調査計画の立案（3）	文献資料による調査地の概況調査
第13回	研究調査計画の発表と討論（1）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論①
第14回	研究調査計画の発表と討論（2）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論②
第1回	研究調査の概要報告	研究調査の進捗状況の報告、教員から懸賞論文・学会発表・卒論等の説明、スケジュールの確認
第2回	グループ別作業（1）	補足調査を継続しつつ、研究調査の資料整理と文章化（構想発表①）
第3回	グループ別作業（2）	研究調査の論文執筆（構想発表②）、必要に応じて補足調査
第4回	グループ別作業（3）	研究調査の論文執筆（構想発表③）、必要に応じて補足調査
第5回	研究成果の発表（1）	研究成果の発表と討論（中間報告①）
第6回	研究成果の発表（2）	研究成果の発表と討論（中間報告②）
第7回	学会発表のための準備（1）	学会発表論文の論理展開の確認とフィードバック
第8回	学会発表のための準備（2）	学会発表論文の予行演習とフィードバック

第9回	グループ別個別指導（1）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック①
第10回	グループ別個別指導（2）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック②
第11回	グループ別作業（4）	研究調査の論文の完成度を高め、全体の再確認
第12回	ゼミ別就職セミナー	大学キャリアセンターによるゼミ別就職セミナーを受ける
第13回	4年生による卒論、就職活動についての助言及び交流	次年度のゼミ活動に関する諸調整も行う
第14回	研究成果の最終まとめ・発表	完成稿に向けて執筆した論文・レポートの最終確認を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・春学期では、共通テキストの講読を行うとともに、個人またはグループごとに研究テーマに関する研究文献を精読し、問題点の整理やレジュメの作成を行う。また、研究調査にもとづき、研究計画書を作成する。
・秋学期では、引き続きフィールドワークや文献調査によって得られた調査結果の整理・分析を随時行い、研究成果を論文としてまとめ、発表する。
・本授業の準備・復習時間は、各段階の作業内容によって異なるが、次回授業に向けて毎週行うこととする。目安としては、各回おおよそ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に定めない、適宜関連資料を配布する。

【参考書】
山口誠・須永和博・鈴木涼太郎編『観光のレッスンーツーリズム・リテラシー入門』新曜社、2021年
市野澤潤平・碇陽子・東賢太朗編『観光人類学のフィールドワークーツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
リーペレス ファビオ『ストレンジャーの人類学――移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店、2020年
吉原和男編『現代における人の国際移動―アジアの中の日本』慶応義塾大学出版会、2013年
横浜商科大学編『横浜中華街の世界【増補版】』学校法人横浜商科大学、2012年
日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
山下晋司『観光人類学の挑戦―「新しい地球」の生き方』(講談社選書メチエ)講談社、2009年
白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化―グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房、2008年
佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社、2008年
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998年
初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館出版、1996年
青柳こまち編・監訳『「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への貢献度・調査への参加度）：50％
期末に提出するレポート・論文：50％
上記の割合で成績評価を行う。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミにおいて、学生が主体的に意見交換を行い、活発な議論に参加できるよう、授業運営に工夫を凝らす。授業支援システム等を活用することで、学生同士の相互交流を促進し、学修効果の向上を図る。

【その他の重要事項】
・シラバスの内容や授業計画に変更が生じる場合は、事前に周知する。
・現段階では、マイノリティの諸相から多文化共生を考察するというコンセプトにもとづき、人の移動や観光に関するテーマを中心に扱っているが、授業の進行状況や学生の関心に応じて、少数民族やエスニック集団に関する問題なども取り上げていく。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course deals with tourism, migration and ethnicity .
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants are expected to understand Japan and other countries from the viewpoint of transnationalism.
【Learning activities outside of classroom】
In spring term, students will be expected to read academic papers on research themes. In autumn term, students will be expected to analyze survey results and write a dissertation.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated to the following process: Term-end report/ dissertation（50％） and contribution in class or fieldwork（50％).

ARS（e）400GA

国際社会演習

張　勝蘭

サブタイトル：マイノリティの諸相から多文化共生を考える
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マイノリティとは何か。それは少数民族・エスニック集団から、社会的力関係の変化により生み出される多様な社会的少数派まで、実に多くの具体像を持っている。社会の変動や人の移動に伴う環境の変化によって、少数民族などの伝統社会・文化が大きく変容してきた。それと同時に、人々は状況次第で、容易に何らかのカテゴリーのマイノリティになり得る。このような観点から、マイノリティの視点から現代社会を理解することは、きわめて重要である。
本ゼミでは変化していくマイノリティの諸相に注目し、とりわけ観光や移民といった世界規模で展開される「人の移動」、そしてエスニシティーを切り口に、日本そ及び国際社会における多文化共生を考えていく。

【到達目標】
・関連する文献を読み、その内容を理解した上で、批判的に分析する力を身につける。そのトレーニングを通して、自らの関心事象・問題意識を明確にし、研究テーマを設定できるようになる。
・設定した研究テーマについて、自ら現地調査を行い、データや資料の収集・整理・分析を通じて、論文としてまとめられるようになる。
・マイノリティ、独自性・多様性、観光化、移民、エスニシティーといったキーワードを手がかりに、多文化共生について考察し、日本および国際社会を多角的に捉える視点を身につけることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春セメスターでは、関連研究文献の講読を行う。各自がレジュメを作成し、要旨を発表するとともに、感想や疑問点を提示し、議論を行うことで問題意識を明確にしていく。その上で、チームまたは個人単位で研究調査テーマを設定し、先行研究の整理を行う。さらに、テーマ別の研究文献を精読するとともに現地調査を実施し、入手した資料や調査データを整理した上で、研究計画書を作成する。
・秋セメスターでは、引き続き研究調査を行い、新たに収集した資料の整理・分析を進める。全体構想の検討や中間報告などの段階を踏まえながら、研究成果を研究論文としてまとめる。完成した研究成果は、9月末の懸賞論文への応募や12月に開催される国際文化情報学会での発表などを通じて、第三者による評価を受けることを目指す。
・授業は原則として対面方式で行う。ただし、状況に応じてオンライン授業と併用する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教員による授業の概要及び進め方の説明、ゼミ生の自己紹介、関心問題を発表
第2回	教員及び上級生による研究紹介、新ゼミ生による関心テーマ紹介	研究内容とフィールド調査について紹介。問題意識、先行研究、発表レジュメ・研究論文の書き方などの基本事項を再確認。新ゼミ生の関心テーマと文献リストの紹介
第3回	グループ別作業（1）	上級生は調査（準備）・論文執筆①、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティ－関連の文献①をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第4回	グループ別作業（2）	上級生は調査（準備）・論文執筆②、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献②をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第5回	グループ別作業（3）	上級生は調査（準備）・論文執筆③、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献③をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第6回	グループ別作業（4）	上級生は調査（準備）・論文執筆④、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献④をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第7回	先行研究の発表（1）	具体的な関心テーマの先行研究について発表①、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第8回	先行研究の発表（2）	具合的な関心テーマの先行研究について発表②、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第9回	研究調査計画の立案（1）	研究テーマ・背景・目的、調査対象の再検討
第10回	模擬調査実習	選定した調査地を歩き、観察・記録してみる
第11回	研究調査計画の立案（2）	模擬調査の報告及び調査方法、調査内容の再検討
第12回	研究調査計画の立案（3）	文献資料による調査地の概況調査
第13回	研究調査計画の発表と討論（1）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論①
第14回	研究調査計画の発表と討論（2）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論②
第1回	研究調査の概要報告	研究調査の進捗状況の報告、教員から懸賞論文・学会発表・卒論等の説明、スケジュールの確認
第2回	グループ別作業（1）	補足調査を継続しつつ、研究調査の資料整理と文章化（構想発表①）
第3回	グループ別作業（2）	研究調査の論文執筆（構想発表②）、必要に応じて補足調査
第4回	グループ別作業（3）	研究調査の論文執筆（構想発表③）、必要に応じて補足調査
第5回	研究成果の発表（1）	研究成果の発表と討論（中間報告①）
第6回	研究成果の発表（2）	研究成果の発表と討論（中間報告②）
第7回	学会発表のための準備（1）	学会発表論文の論理展開の確認とフィードバック
第8回	学会発表のための準備（2）	学会発表論文の予行演習とフィードバック

第9回	グループ別個別指導（1）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック①
第10回	グループ別個別指導（2）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック②
第11回	グループ別作業（4）	研究調査の論文の完成度を高め、全体の再確認
第12回	ゼミ別就職セミナー	大学キャリアセンターによるゼミ別就職セミナーを受ける
第13回	4年生による卒論、就職活動についての助言及び交流	次年度のゼミ活動に関する諸調整も行う
第14回	研究成果の最終まとめ・発表	完成稿に向けて執筆した論文・レポートの最終確認を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・春学期では、共通テキストの講読を行うとともに、個人またはグループごとに研究テーマに関する研究文献を精読し、問題点の整理やレジュメの作成を行う。また、研究調査にもとづき、研究計画書を作成する。
・秋学期では、引き続きフィールドワークや文献調査によって得られた調査結果の整理・分析を随時行い、研究成果を論文としてまとめ、発表する。
・本授業の準備・復習時間は、各段階の作業内容によって異なるが、次回授業に向けて毎週行うこととする。目安としては、各回おおよそ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に定めない、適宜関連資料を配布する。

【参考書】
山口誠・須永和博・鈴木涼太郎編『観光のレッスンーツーリズム・リテラシー入門』新曜社、2021年
市野澤潤平・碇陽子・東賢太朗編『観光人類学のフィールドワークーツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
リーペレス ファビオ『ストレンジャーの人類学――移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店、2020年
吉原和男編『現代における人の国際移動―アジアの中の日本』慶応義塾大学出版会、2013年
横浜商科大学編『横浜中華街の世界【増補版】』学校法人横浜商科大学、2012年
日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
山下晋司『観光人類学の挑戦―「新しい地球」の生き方』(講談社選書メチエ)講談社、2009年
白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化―グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房、2008年
佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社、2008年
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998年
初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館出版、1996年
青柳こまち編・監訳『「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への貢献度・調査への参加度）：50％
期末に提出するレポート・論文：50％
上記の割合で成績評価を行う。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミにおいて、学生が主体的に意見交換を行い、活発な議論に参加できるよう、授業運営に工夫を凝らす。授業支援システム等を活用することで、学生同士の相互交流を促進し、学修効果の向上を図る。

【その他の重要事項】
・シラバスの内容や授業計画に変更が生じる場合は、事前に周知する。
・現段階では、マイノリティの諸相から多文化共生を考察するというコンセプトにもとづき、人の移動や観光に関するテーマを中心に扱っているが、授業の進行状況や学生の関心に応じて、少数民族やエスニック集団に関する問題なども取り上げていく。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course deals with tourism, migration and ethnicity .
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants are expected to understand Japan and other countries from the viewpoint of transnationalism.
【Learning activities outside of classroom】
In spring term, students will be expected to read academic papers on research themes. In autumn term, students will be expected to analyze survey results and write a dissertation.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated to the following process: Term-end report/ dissertation（50％） and contribution in class or fieldwork（50％).

ARS（e）400GA

国際社会演習

張　勝蘭

サブタイトル：マイノリティの諸相から多文化共生を考える
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マイノリティとは何か。それは少数民族・エスニック集団から、社会的力関係の変化により生み出される多様な社会的少数派まで、実に多くの具体像を持っている。社会の変動や人の移動に伴う環境の変化によって、少数民族などの伝統社会・文化が大きく変容してきた。それと同時に、人々は状況次第で、容易に何らかのカテゴリーのマイノリティになり得る。このような観点から、マイノリティの視点から現代社会を理解することは、きわめて重要である。
本ゼミでは変化していくマイノリティの諸相に注目し、とりわけ観光や移民といった世界規模で展開される「人の移動」、そしてエスニシティーを切り口に、日本そ及び国際社会における多文化共生を考えていく。

【到達目標】
・関連する文献を読み、その内容を理解した上で、批判的に分析する力を身につける。そのトレーニングを通して、自らの関心事象・問題意識を明確にし、研究テーマを設定できるようになる。
・設定した研究テーマについて、自ら現地調査を行い、データや資料の収集・整理・分析を通じて、論文としてまとめられるようになる。
・マイノリティ、独自性・多様性、観光化、移民、エスニシティーといったキーワードを手がかりに、多文化共生について考察し、日本および国際社会を多角的に捉える視点を身につけることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春セメスターでは、関連研究文献の講読を行う。各自がレジュメを作成し、要旨を発表するとともに、感想や疑問点を提示し、議論を行うことで問題意識を明確にしていく。その上で、チームまたは個人単位で研究調査テーマを設定し、先行研究の整理を行う。さらに、テーマ別の研究文献を精読するとともに現地調査を実施し、入手した資料や調査データを整理した上で、研究計画書を作成する。
・秋セメスターでは、引き続き研究調査を行い、新たに収集した資料の整理・分析を進める。全体構想の検討や中間報告などの段階を踏まえながら、研究成果を研究論文としてまとめる。完成した研究成果は、9月末の懸賞論文への応募や12月に開催される国際文化情報学会での発表などを通じて、第三者による評価を受けることを目指す。
・授業は原則として対面方式で行う。ただし、状況に応じてオンライン授業と併用する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教員による授業の概要及び進め方の説明、ゼミ生の自己紹介、関心問題を発表
第2回	教員及び上級生による研究紹介、新ゼミ生による関心テーマ紹介	研究内容とフィールド調査について紹介。問題意識、先行研究、発表レジュメ・研究論文の書き方などの基本事項を再確認。新ゼミ生の関心テーマと文献リストの紹介
第3回	グループ別作業（1）	上級生は調査（準備）・論文執筆①、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティ－関連の文献①をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第4回	グループ別作業（2）	上級生は調査（準備）・論文執筆②、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献②をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第5回	グループ別作業（3）	上級生は調査（準備）・論文執筆③、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献③をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第6回	グループ別作業（4）	上級生は調査（準備）・論文執筆④、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献④をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第7回	先行研究の発表（1）	具体的な関心テーマの先行研究について発表①、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第8回	先行研究の発表（2）	具合的な関心テーマの先行研究について発表②、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第9回	研究調査計画の立案（1）	研究テーマ・背景・目的、調査対象の再検討
第10回	模擬調査実習	選定した調査地を歩き、観察・記録してみる
第11回	研究調査計画の立案（2）	模擬調査の報告及び調査方法、調査内容の再検討
第12回	研究調査計画の立案（3）	文献資料による調査地の概況調査
第13回	研究調査計画の発表と討論（1）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論①
第14回	研究調査計画の発表と討論（2）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論②
第1回	研究調査の概要報告	研究調査の進捗状況の報告、教員から懸賞論文・学会発表・卒論等の説明、スケジュールの確認
第2回	グループ別作業（1）	補足調査を継続しつつ、研究調査の資料整理と文章化（構想発表①）
第3回	グループ別作業（2）	研究調査の論文執筆（構想発表②）、必要に応じて補足調査
第4回	グループ別作業（3）	研究調査の論文執筆（構想発表③）、必要に応じて補足調査
第5回	研究成果の発表（1）	研究成果の発表と討論（中間報告①）
第6回	研究成果の発表（2）	研究成果の発表と討論（中間報告②）
第7回	学会発表のための準備（1）	学会発表論文の論理展開の確認とフィードバック
第8回	学会発表のための準備（2）	学会発表論文の予行演習とフィードバック

第9回	グループ別個別指導（1）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック①
第10回	グループ別個別指導（2）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック②
第11回	グループ別作業（4）	研究調査の論文の完成度を高め、全体の再確認
第12回	ゼミ別就職セミナー	大学キャリアセンターによるゼミ別就職セミナーを受ける
第13回	4年生による卒論、就職活動についての助言及び交流	次年度のゼミ活動に関する諸調整も行う
第14回	研究成果の最終まとめ・発表	完成稿に向けて執筆した論文・レポートの最終確認を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・春学期では、共通テキストの講読を行うとともに、個人またはグループごとに研究テーマに関する研究文献を精読し、問題点の整理やレジュメの作成を行う。また、研究調査にもとづき、研究計画書を作成する。
・秋学期では、引き続きフィールドワークや文献調査によって得られた調査結果の整理・分析を随時行い、研究成果を論文としてまとめ、発表する。
・本授業の準備・復習時間は、各段階の作業内容によって異なるが、次回授業に向けて毎週行うこととする。目安としては、各回おおよそ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に定めない、適宜関連資料を配布する。

【参考書】
山口誠・須永和博・鈴木涼太郎編『観光のレッスンーツーリズム・リテラシー入門』新曜社、2021年
市野澤潤平・碇陽子・東賢太朗編『観光人類学のフィールドワークーツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
リーペレス ファビオ『ストレンジャーの人類学――移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店、2020年
吉原和男編『現代における人の国際移動―アジアの中の日本』慶応義塾大学出版会、2013年
横浜商科大学編『横浜中華街の世界【増補版】』学校法人横浜商科大学、2012年
日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
山下晋司『観光人類学の挑戦―「新しい地球」の生き方』(講談社選書メチエ)講談社、2009年
白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化―グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房、2008年
佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社、2008年
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998年
初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館出版、1996年
青柳こまち編・監訳『「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への貢献度・調査への参加度）：50％
期末に提出するレポート・論文：50％
上記の割合で成績評価を行う。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミにおいて、学生が主体的に意見交換を行い、活発な議論に参加できるよう、授業運営に工夫を凝らす。授業支援システム等を活用することで、学生同士の相互交流を促進し、学修効果の向上を図る。

【その他の重要事項】
・シラバスの内容や授業計画に変更が生じる場合は、事前に周知する。
・現段階では、マイノリティの諸相から多文化共生を考察するというコンセプトにもとづき、人の移動や観光に関するテーマを中心に扱っているが、授業の進行状況や学生の関心に応じて、少数民族やエスニック集団に関する問題なども取り上げていく。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course deals with tourism, migration and ethnicity .
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants are expected to understand Japan and other countries from the viewpoint of transnationalism.
【Learning activities outside of classroom】
In spring term, students will be expected to read academic papers on research themes. In autumn term, students will be expected to analyze survey results and write a dissertation.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated to the following process: Term-end report/ dissertation（50％） and contribution in class or fieldwork（50％).

ARS（e）400GA

国際社会演習

張　勝蘭

サブタイトル：マイノリティの諸相から多文化共生を考える
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マイノリティとは何か。それは少数民族・エスニック集団から、社会的力関係の変化により生み出される多様な社会的少数派まで、実に多くの具体像を持っている。社会の変動や人の移動に伴う環境の変化によって、少数民族などの伝統社会・文化が大きく変容してきた。それと同時に、人々は状況次第で、容易に何らかのカテゴリーのマイノリティになり得る。このような観点から、マイノリティの視点から現代社会を理解することは、きわめて重要である。
本ゼミでは変化していくマイノリティの諸相に注目し、とりわけ観光や移民といった世界規模で展開される「人の移動」、そしてエスニシティーを切り口に、日本そ及び国際社会における多文化共生を考えていく。

【到達目標】
・関連する文献を読み、その内容を理解した上で、批判的に分析する力を身につける。そのトレーニングを通して、自らの関心事象・問題意識を明確にし、研究テーマを設定できるようになる。
・設定した研究テーマについて、自ら現地調査を行い、データや資料の収集・整理・分析を通じて、論文としてまとめられるようになる。
・マイノリティ、独自性・多様性、観光化、移民、エスニシティーといったキーワードを手がかりに、多文化共生について考察し、日本および国際社会を多角的に捉える視点を身につけることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春セメスターでは、関連研究文献の講読を行う。各自がレジュメを作成し、要旨を発表するとともに、感想や疑問点を提示し、議論を行うことで問題意識を明確にしていく。その上で、チームまたは個人単位で研究調査テーマを設定し、先行研究の整理を行う。さらに、テーマ別の研究文献を精読するとともに現地調査を実施し、入手した資料や調査データを整理した上で、研究計画書を作成する。
・秋セメスターでは、引き続き研究調査を行い、新たに収集した資料の整理・分析を進める。全体構想の検討や中間報告などの段階を踏まえながら、研究成果を研究論文としてまとめる。完成した研究成果は、9月末の懸賞論文への応募や12月に開催される国際文化情報学会での発表などを通じて、第三者による評価を受けることを目指す。
・授業は原則として対面方式で行う。ただし、状況に応じてオンライン授業と併用する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教員による授業の概要及び進め方の説明、ゼミ生の自己紹介、関心問題を発表
第2回	教員及び上級生による研究紹介、新ゼミ生による関心テーマ紹介	研究内容とフィールド調査について紹介。問題意識、先行研究、発表レジュメ・研究論文の書き方などの基本事項を再確認。新ゼミ生の関心テーマと文献リストの紹介
第3回	グループ別作業（1）	上級生は調査（準備）・論文執筆①、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティ－関連の文献①をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第4回	グループ別作業（2）	上級生は調査（準備）・論文執筆②、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献②をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第5回	グループ別作業（3）	上級生は調査（準備）・論文執筆③、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献③をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第6回	グループ別作業（4）	上級生は調査（準備）・論文執筆④、新ゼミ生は観光・人の移動・エスニシティー関連の文献④をグループ分けして講読。掲示板で進捗状況を共有
第7回	先行研究の発表（1）	具体的な関心テーマの先行研究について発表①、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第8回	先行研究の発表（2）	具合的な関心テーマの先行研究について発表②、それに基づき、グループ単位または個人での調査・研究を決める
第9回	研究調査計画の立案（1）	研究テーマ・背景・目的、調査対象の再検討
第10回	模擬調査実習	選定した調査地を歩き、観察・記録してみる
第11回	研究調査計画の立案（2）	模擬調査の報告及び調査方法、調査内容の再検討
第12回	研究調査計画の立案（3）	文献資料による調査地の概況調査
第13回	研究調査計画の発表と討論（1）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論①
第14回	研究調査計画の発表と討論（2）	グループ・個人の研究調査計画の発表、討論②
第1回	研究調査の概要報告	研究調査の進捗状況の報告、教員から懸賞論文・学会発表・卒論等の説明、スケジュールの確認
第2回	グループ別作業（1）	補足調査を継続しつつ、研究調査の資料整理と文章化（構想発表①）
第3回	グループ別作業（2）	研究調査の論文執筆（構想発表②）、必要に応じて補足調査
第4回	グループ別作業（3）	研究調査の論文執筆（構想発表③）、必要に応じて補足調査
第5回	研究成果の発表（1）	研究成果の発表と討論（中間報告①）
第6回	研究成果の発表（2）	研究成果の発表と討論（中間報告②）
第7回	学会発表のための準備（1）	学会発表論文の論理展開の確認とフィードバック
第8回	学会発表のための準備（2）	学会発表論文の予行演習とフィードバック

第9回	グループ別個別指導（1）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック①
第10回	グループ別個別指導（2）	ゼミ論・ゼミレポートの査読とフィードバック②
第11回	グループ別作業（4）	研究調査の論文の完成度を高め、全体の再確認
第12回	ゼミ別就職セミナー	大学キャリアセンターによるゼミ別就職セミナーを受ける
第13回	4年生による卒論、就職活動についての助言及び交流	次年度のゼミ活動に関する諸調整も行う
第14回	研究成果の最終まとめ・発表	完成稿に向けて執筆した論文・レポートの最終確認を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・春学期では、共通テキストの講読を行うとともに、個人またはグループごとに研究テーマに関する研究文献を精読し、問題点の整理やレジュメの作成を行う。また、研究調査にもとづき、研究計画書を作成する。
・秋学期では、引き続きフィールドワークや文献調査によって得られた調査結果の整理・分析を随時行い、研究成果を論文としてまとめ、発表する。
・本授業の準備・復習時間は、各段階の作業内容によって異なるが、次回授業に向けて毎週行うこととする。目安としては、各回おおよそ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に定めない、適宜関連資料を配布する。

【参考書】
山口誠・須永和博・鈴木涼太郎編『観光のレッスンーツーリズム・リテラシー入門』新曜社、2021年
市野澤潤平・碇陽子・東賢太朗編『観光人類学のフィールドワークーツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
リーペレス ファビオ『ストレンジャーの人類学――移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店、2020年
吉原和男編『現代における人の国際移動―アジアの中の日本』慶応義塾大学出版会、2013年
横浜商科大学編『横浜中華街の世界【増補版】』学校法人横浜商科大学、2012年
日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年
山下晋司『観光人類学の挑戦―「新しい地球」の生き方』(講談社選書メチエ)講談社、2009年
白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化―グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房、2008年
佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社、2008年
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998年
初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館出版、1996年
青柳こまち編・監訳『「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への貢献度・調査への参加度）：50％
期末に提出するレポート・論文：50％
上記の割合で成績評価を行う。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミにおいて、学生が主体的に意見交換を行い、活発な議論に参加できるよう、授業運営に工夫を凝らす。授業支援システム等を活用することで、学生同士の相互交流を促進し、学修効果の向上を図る。

【その他の重要事項】
・シラバスの内容や授業計画に変更が生じる場合は、事前に周知する。
・現段階では、マイノリティの諸相から多文化共生を考察するというコンセプトにもとづき、人の移動や観光に関するテーマを中心に扱っているが、授業の進行状況や学生の関心に応じて、少数民族やエスニック集団に関する問題なども取り上げていく。

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course deals with tourism, migration and ethnicity .
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants are expected to understand Japan and other countries from the viewpoint of transnationalism.
【Learning activities outside of classroom】
In spring term, students will be expected to read academic papers on research themes. In autumn term, students will be expected to analyze survey results and write a dissertation.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated to the following process: Term-end report/ dissertation（50％） and contribution in class or fieldwork（50％).

ARSe400GA（地域研究（東アジア）/ Area studies(East Asia) 400）

国際社会演習

髙柳　俊男

サブタイトル：朝鮮半島と日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
2026年の現在、隣国の韓国に向ける日本の視線には、K-POPやダンスをはじめ韓流ブームによる関心や憧れがある一方で、歴史問題や領土問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一方の北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、親子代々の権力世襲や軍事力優先の国家体制に対して、冷やかな眺めが支配的である。
どうしてこのような現状になっているのであろうか？　そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？　状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？
この授業では、参加するゼミ生たちとともに、日本と朝鮮半島間の複雑に絡まった糸を少しずつ解いていく作業をする。これまでの歩みをひも解き、それを踏まえてあるべき未来を考察することを目指したい。なかでも文化交流に重点を置き、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性の掘り起こしにも努めたい。
同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。
受講生たちが、一般的ないし図式的理解にとどまることなく、具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで自らの認識を深化させること――いわば「個別を極めることを通じて普遍に至る」ような学び方を身につけることを重視したい。

【到達目標】
日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解する。理解した内容を、受け売りではなく、自ら紡いだ言葉で、責任をもって語れるようにすることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の基本的な流れは以下の通りだが、2・3年生の新規参加者に配慮して、導入に一定の時間をかけたい。
その後、本論に入る。昨年度のゼミでは、良書の翻訳など、日韓間の出版交流に長年尽力してきた舘野晳さん（1935年生まれ、本学出身）をお招きしたイベントと、関連したパネル展示をゼミで実施することにし、それに向けた準備学習を続けてきた。
今年度も、髙柳がHOSEIミュージアムなど学内の展示施設で「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」を開催予定であることを視野に、その展示をゼミ全体で担っていく方向で、関連する学びを進めたい。
具体的には、たとえば以下などの人物を取り上げる。
①歴代総長や教員の韓国・朝鮮との関係：小田切秀雄など
②本学で学んだ朝鮮半島からの留学生：朴泰遠、尹学準など
③韓国・朝鮮と関係の深い在日コリアンや日本人：韓昌祐、深沢夏衣、舘野晳など
秋学期には、夏季休業中の学びの振り返りを経て、春学期の学びを継続したい。
ゼミの進め方としては、年間を通して原則的に毎回レポーターを決め、その人の発表と全員の討論で進行する。発表の際には、テキストの内容要約のほか、関連する他の書物や新聞・雑誌報道などにも目を通し、取り上げられたテーマに対する多面的で客観的な分析となるよう心掛けること。毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。
関連映像の視聴を随時まじえ、関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫等により、適宜実施したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦するゼミ関連書籍の紹介、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	導入として髙柳執筆の文章を読む①
第3回	導入教材②	導入として髙柳執筆の文章を読む②
第4回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第5回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入①	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ①
第6回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入②	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ②
第7回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第8回	小田切秀雄を取り上げる	小田切秀雄に関する資料を読む
第9回	朴泰遠を取り上げる	朴泰遠に関する資料を読む
第10回	尹学準を取り上げる	尹学準に関する資料を読む
第11回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第12回	韓昌祐を取り上げる	韓昌祐に関する資料を読む
第13回	深沢夏衣を取り上げる	深沢夏衣に関する資料を読む
第14回	春学期のまとめ	展示実施に向けた春学期の学習のまとめと、秋学期のスケジュール確認、夏季休業中の課題の伝達
第1回	秋学期の導入	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分程度）
第2回	HOSEIミュージアム等での展示の準備①	展示の最終準備・確認①
第3回	HOSEIミュージアム等での展示の準備②	展示の最終準備・確認②
第4回	HOSEIミュージアム等での展示の準備③	展示の最終準備・確認③
第5回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第6回	夏季休業中の振り返り①	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日など）
第7回	夏季休業中の振り返り②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞など）
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り①	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続①
第10回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り②	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続②
第11回	校外研修①	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く①

第12回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り③	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続③
第13回	校外研修②	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く②
第14回	年間のまとめ	展示の総括と、年間の学習のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。
なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要教材を毎回配付する。

【参考書】
レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。
韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

【成績評価の方法と基準】
演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの質問や意見を表明することが大切である。
そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を35％ずつ、学期末のレポートを30％として判断する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の自立した営みの上に、学生と教員全員で切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していければと思う。
本年度は昨年度に続き、学内における展示を計画しているので、そうした方向性がいっそう発揮できるよう、ともに努めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
未知の事項が出てきた場合、その場で適宜検索等ができるよう、ゼミに毎回PCを持参することが望ましい。

【その他の重要事項】
①年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。
その意味は、一つは人類のこれまでの長い歴史の中で蓄積されてきた膨大な知をどう学び、活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。
とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。
そのためには、具体にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにせず、学びを螺旋形に積み上げていくことが重要であろう。
②ゼミは登録上は1コマだが、2コマ続けて実施することを教授会で申し合わせしてある。本ゼミも、5限にまでまたがって行うことを原則とするので、その時間帯に他の授業やアルバイト等を入れないこと。
③ゼミ担当者の髙栁は、2026年度をもって定年退職となる。したがって2027年度以降、ゼミ担当教員が変わることになるので、新規に入ゼミする新2年生・3年生はそのことを承知しておいてほしい。

【Outline (in English)】
This seminar aims to learn why there are many issues between Japan and Korea, and how we can solve these difficult problems by our own intelligence, sensibility, and experiences.

Students are expected to read the papers mentioned in the classroom, visit relevant locations, and participate in the events held on and off campus.
Final grade will be calculated according to the following process.
In-class presentation 35%, in-class contribution 35%, and term-end report 30%.

ARSe400GA（地域研究（東アジア）/ Area studies(East Asia) 400）

国際社会演習

髙柳　俊男

サブタイトル：朝鮮半島と日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
2026年の現在、隣国の韓国に向ける日本の視線には、K-POPやダンスをはじめ韓流ブームによる関心や憧れがある一方で、歴史問題や領土問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一方の北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、親子代々の権力世襲や軍事力優先の国家体制に対して、冷やかな眺めが支配的である。
どうしてこのような現状になっているのであろうか？　そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？　状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？
この授業では、参加するゼミ生たちとともに、日本と朝鮮半島間の複雑に絡まった糸を少しずつ解いていく作業をする。これまでの歩みをひも解き、それを踏まえてあるべき未来を考察することを目指したい。なかでも文化交流に重点を置き、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性の掘り起こしにも努めたい。
同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。
受講生たちが、一般的ないし図式的理解にとどまることなく、具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで自らの認識を深化させること――いわば「個別を極めることを通じて普遍に至る」ような学び方を身につけることを重視したい。

【到達目標】
日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解する。理解した内容を、受け売りではなく、自ら紡いだ言葉で、責任をもって語れるようにすることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の基本的な流れは以下の通りだが、2・3年生の新規参加者に配慮して、導入に一定の時間をかけたい。
その後、本論に入る。昨年度のゼミでは、良書の翻訳など、日韓間の出版交流に長年尽力してきた舘野晳さん（1935年生まれ、本学出身）をお招きしたイベントと、関連したパネル展示をゼミで実施することにし、それに向けた準備学習を続けてきた。
今年度も、髙柳がHOSEIミュージアムなど学内の展示施設で「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」を開催予定であることを視野に、その展示をゼミ全体で担っていく方向で、関連する学びを進めたい。
具体的には、たとえば以下などの人物を取り上げる。
①歴代総長や教員の韓国・朝鮮との関係：小田切秀雄など
②本学で学んだ朝鮮半島からの留学生：朴泰遠、尹学準など
③韓国・朝鮮と関係の深い在日コリアンや日本人：韓昌祐、深沢夏衣、舘野晳など
秋学期には、夏季休業中の学びの振り返りを経て、春学期の学びを継続したい。
ゼミの進め方としては、年間を通して原則的に毎回レポーターを決め、その人の発表と全員の討論で進行する。発表の際には、テキストの内容要約のほか、関連する他の書物や新聞・雑誌報道などにも目を通し、取り上げられたテーマに対する多面的で客観的な分析となるよう心掛けること。毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。
関連映像の視聴を随時まじえ、関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫等により、適宜実施したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦するゼミ関連書籍の紹介、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	導入として髙柳執筆の文章を読む①
第3回	導入教材②	導入として髙柳執筆の文章を読む②
第4回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第5回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入①	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ①
第6回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入②	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ②
第7回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第8回	小田切秀雄を取り上げる	小田切秀雄に関する資料を読む
第9回	朴泰遠を取り上げる	朴泰遠に関する資料を読む
第10回	尹学準を取り上げる	尹学準に関する資料を読む
第11回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第12回	韓昌祐を取り上げる	韓昌祐に関する資料を読む
第13回	深沢夏衣を取り上げる	深沢夏衣に関する資料を読む
第14回	春学期のまとめ	展示実施に向けた春学期の学習のまとめと、秋学期のスケジュール確認、夏季休業中の課題の伝達
第1回	秋学期の導入	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分程度）
第2回	HOSEIミュージアム等での展示の準備①	展示の最終準備・確認①
第3回	HOSEIミュージアム等での展示の準備②	展示の最終準備・確認②
第4回	HOSEIミュージアム等での展示の準備③	展示の最終準備・確認③
第5回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第6回	夏季休業中の振り返り①	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日など）
第7回	夏季休業中の振り返り②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞など）
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り①	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続①
第10回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り②	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続②
第11回	校外研修①	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く①

第12回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り③	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続③
第13回	校外研修②	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く②
第14回	年間のまとめ	展示の総括と、年間の学習のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。
なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要教材を毎回配付する。

【参考書】
レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。
韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

【成績評価の方法と基準】
演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの質問や意見を表明することが大切である。
そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を35％ずつ、学期末のレポートを30％として判断する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の自立した営みの上に、学生と教員全員で切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していければと思う。
本年度は昨年度に続き、学内における展示を計画しているので、そうした方向性がいっそう発揮できるよう、ともに努めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
未知の事項が出てきた場合、その場で適宜検索等ができるよう、ゼミに毎回PCを持参することが望ましい。

【その他の重要事項】
①年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。
その意味は、一つは人類のこれまでの長い歴史の中で蓄積されてきた膨大な知をどう学び、活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。
とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。
そのためには、具体にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにせず、学びを螺旋形に積み上げていくことが重要であろう。
②ゼミは登録上は1コマだが、2コマ続けて実施することを教授会で申し合わせしてある。本ゼミも、5限にまでまたがって行うことを原則とするので、その時間帯に他の授業やアルバイト等を入れないこと。
③ゼミ担当者の髙栁は、2026年度をもって定年退職となる。したがって2027年度以降、ゼミ担当教員が変わることになるので、新規に入ゼミする新2年生・3年生はそのことを承知しておいてほしい。

【Outline (in English)】
This seminar aims to learn why there are many issues between Japan and Korea, and how we can solve these difficult problems by our own intelligence, sensibility, and experiences.

Students are expected to read the papers mentioned in the classroom, visit relevant locations, and participate in the events held on and off campus.
Final grade will be calculated according to the following process.
In-class presentation 35%, in-class contribution 35%, and term-end report 30%.

ARSe400GA（地域研究（東アジア）/ Area studies(East Asia) 400）

国際社会演習

髙柳　俊男

サブタイトル：朝鮮半島と日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
2026年の現在、隣国の韓国に向ける日本の視線には、K-POPやダンスをはじめ韓流ブームによる関心や憧れがある一方で、歴史問題や領土問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一方の北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、親子代々の権力世襲や軍事力優先の国家体制に対して、冷やかな眺めが支配的である。
どうしてこのような現状になっているのであろうか？　そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？　状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？
この授業では、参加するゼミ生たちとともに、日本と朝鮮半島間の複雑に絡まった糸を少しずつ解いていく作業をする。これまでの歩みをひも解き、それを踏まえてあるべき未来を考察することを目指したい。なかでも文化交流に重点を置き、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性の掘り起こしにも努めたい。
同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。
受講生たちが、一般的ないし図式的理解にとどまることなく、具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで自らの認識を深化させること――いわば「個別を極めることを通じて普遍に至る」ような学び方を身につけることを重視したい。

【到達目標】
日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解する。理解した内容を、受け売りではなく、自ら紡いだ言葉で、責任をもって語れるようにすることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の基本的な流れは以下の通りだが、2・3年生の新規参加者に配慮して、導入に一定の時間をかけたい。
その後、本論に入る。昨年度のゼミでは、良書の翻訳など、日韓間の出版交流に長年尽力してきた舘野晳さん（1935年生まれ、本学出身）をお招きしたイベントと、関連したパネル展示をゼミで実施することにし、それに向けた準備学習を続けてきた。
今年度も、髙柳がHOSEIミュージアムなど学内の展示施設で「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」を開催予定であることを視野に、その展示をゼミ全体で担っていく方向で、関連する学びを進めたい。
具体的には、たとえば以下などの人物を取り上げる。
①歴代総長や教員の韓国・朝鮮との関係：小田切秀雄など
②本学で学んだ朝鮮半島からの留学生：朴泰遠、尹学準など
③韓国・朝鮮と関係の深い在日コリアンや日本人：韓昌祐、深沢夏衣、舘野晳など
秋学期には、夏季休業中の学びの振り返りを経て、春学期の学びを継続したい。
ゼミの進め方としては、年間を通して原則的に毎回レポーターを決め、その人の発表と全員の討論で進行する。発表の際には、テキストの内容要約のほか、関連する他の書物や新聞・雑誌報道などにも目を通し、取り上げられたテーマに対する多面的で客観的な分析となるよう心掛けること。毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。
関連映像の視聴を随時まじえ、関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫等により、適宜実施したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦するゼミ関連書籍の紹介、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	導入として髙柳執筆の文章を読む①
第3回	導入教材②	導入として髙柳執筆の文章を読む②
第4回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第5回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入①	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ①
第6回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入②	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ②
第7回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第8回	小田切秀雄を取り上げる	小田切秀雄に関する資料を読む
第9回	朴泰遠を取り上げる	朴泰遠に関する資料を読む
第10回	尹学準を取り上げる	尹学準に関する資料を読む
第11回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第12回	韓昌祐を取り上げる	韓昌祐に関する資料を読む
第13回	深沢夏衣を取り上げる	深沢夏衣に関する資料を読む
第14回	春学期のまとめ	展示実施に向けた春学期の学習のまとめと、秋学期のスケジュール確認、夏季休業中の課題の伝達
第1回	秋学期の導入	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分程度）
第2回	HOSEIミュージアム等での展示の準備①	展示の最終準備・確認①
第3回	HOSEIミュージアム等での展示の準備②	展示の最終準備・確認②
第4回	HOSEIミュージアム等での展示の準備③	展示の最終準備・確認③
第5回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第6回	夏季休業中の振り返り①	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日など）
第7回	夏季休業中の振り返り②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞など）
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り①	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続①
第10回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り②	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続②
第11回	校外研修①	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く①

第12回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り③	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続③
第13回	校外研修②	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く②
第14回	年間のまとめ	展示の総括と、年間の学習のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。
なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要教材を毎回配付する。

【参考書】
レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。
韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

【成績評価の方法と基準】
演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの質問や意見を表明することが大切である。
そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を35％ずつ、学期末のレポートを30％として判断する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の自立した営みの上に、学生と教員全員で切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していければと思う。
本年度は昨年度に続き、学内における展示を計画しているので、そうした方向性がいっそう発揮できるよう、ともに努めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
未知の事項が出てきた場合、その場で適宜検索等ができるよう、ゼミに毎回PCを持参することが望ましい。

【その他の重要事項】
①年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。
その意味は、一つは人類のこれまでの長い歴史の中で蓄積されてきた膨大な知をどう学び、活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。
とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。
そのためには、具体にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにせず、学びを螺旋形に積み上げていくことが重要であろう。
②ゼミは登録上は1コマだが、2コマ続けて実施することを教授会で申し合わせしてある。本ゼミも、5限にまでまたがって行うことを原則とするので、その時間帯に他の授業やアルバイト等を入れないこと。
③ゼミ担当者の髙栁は、2026年度をもって定年退職となる。したがって2027年度以降、ゼミ担当教員が変わることになるので、新規に入ゼミする新2年生・3年生はそのことを承知しておいてほしい。

【Outline (in English)】
This seminar aims to learn why there are many issues between Japan and Korea, and how we can solve these difficult problems by our own intelligence, sensibility, and experiences.

Students are expected to read the papers mentioned in the classroom, visit relevant locations, and participate in the events held on and off campus.
Final grade will be calculated according to the following process.
In-class presentation 35%, in-class contribution 35%, and term-end report 30%.

ARSe400GA（地域研究（東アジア）/ Area studies(East Asia) 400）

国際社会演習

髙柳　俊男

サブタイトル：朝鮮半島と日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
2026年の現在、隣国の韓国に向ける日本の視線には、K-POPやダンスをはじめ韓流ブームによる関心や憧れがある一方で、歴史問題や領土問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一方の北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、親子代々の権力世襲や軍事力優先の国家体制に対して、冷やかな眺めが支配的である。
どうしてこのような現状になっているのであろうか？　そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？　状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？
この授業では、参加するゼミ生たちとともに、日本と朝鮮半島間の複雑に絡まった糸を少しずつ解いていく作業をする。これまでの歩みをひも解き、それを踏まえてあるべき未来を考察することを目指したい。なかでも文化交流に重点を置き、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性の掘り起こしにも努めたい。
同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。
受講生たちが、一般的ないし図式的理解にとどまることなく、具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで自らの認識を深化させること――いわば「個別を極めることを通じて普遍に至る」ような学び方を身につけることを重視したい。

【到達目標】
日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解する。理解した内容を、受け売りではなく、自ら紡いだ言葉で、責任をもって語れるようにすることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の基本的な流れは以下の通りだが、2・3年生の新規参加者に配慮して、導入に一定の時間をかけたい。
その後、本論に入る。昨年度のゼミでは、良書の翻訳など、日韓間の出版交流に長年尽力してきた舘野晳さん（1935年生まれ、本学出身）をお招きしたイベントと、関連したパネル展示をゼミで実施することにし、それに向けた準備学習を続けてきた。
今年度も、髙柳がHOSEIミュージアムなど学内の展示施設で「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」を開催予定であることを視野に、その展示をゼミ全体で担っていく方向で、関連する学びを進めたい。
具体的には、たとえば以下などの人物を取り上げる。
①歴代総長や教員の韓国・朝鮮との関係：小田切秀雄など
②本学で学んだ朝鮮半島からの留学生：朴泰遠、尹学準など
③韓国・朝鮮と関係の深い在日コリアンや日本人：韓昌祐、深沢夏衣、舘野晳など
秋学期には、夏季休業中の学びの振り返りを経て、春学期の学びを継続したい。
ゼミの進め方としては、年間を通して原則的に毎回レポーターを決め、その人の発表と全員の討論で進行する。発表の際には、テキストの内容要約のほか、関連する他の書物や新聞・雑誌報道などにも目を通し、取り上げられたテーマに対する多面的で客観的な分析となるよう心掛けること。毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。
関連映像の視聴を随時まじえ、関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫等により、適宜実施したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦するゼミ関連書籍の紹介、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	導入として髙柳執筆の文章を読む①
第3回	導入教材②	導入として髙柳執筆の文章を読む②
第4回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第5回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入①	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ①
第6回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入②	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ②
第7回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第8回	小田切秀雄を取り上げる	小田切秀雄に関する資料を読む
第9回	朴泰遠を取り上げる	朴泰遠に関する資料を読む
第10回	尹学準を取り上げる	尹学準に関する資料を読む
第11回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第12回	韓昌祐を取り上げる	韓昌祐に関する資料を読む
第13回	深沢夏衣を取り上げる	深沢夏衣に関する資料を読む
第14回	春学期のまとめ	展示実施に向けた春学期の学習のまとめと、秋学期のスケジュール確認、夏季休業中の課題の伝達
第1回	秋学期の導入	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分程度）
第2回	HOSEIミュージアム等での展示の準備①	展示の最終準備・確認①
第3回	HOSEIミュージアム等での展示の準備②	展示の最終準備・確認②
第4回	HOSEIミュージアム等での展示の準備③	展示の最終準備・確認③
第5回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第6回	夏季休業中の振り返り①	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日など）
第7回	夏季休業中の振り返り②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞など）
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り①	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続①
第10回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り②	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続②
第11回	校外研修①	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く①

第12回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り③	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続③
第13回	校外研修②	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く②
第14回	年間のまとめ	展示の総括と、年間の学習のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。
なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要教材を毎回配付する。

【参考書】
レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。
韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

【成績評価の方法と基準】
演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの質問や意見を表明することが大切である。
そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を35％ずつ、学期末のレポートを30％として判断する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の自立した営みの上に、学生と教員全員で切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していければと思う。
本年度は昨年度に続き、学内における展示を計画しているので、そうした方向性がいっそう発揮できるよう、ともに努めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
未知の事項が出てきた場合、その場で適宜検索等ができるよう、ゼミに毎回PCを持参することが望ましい。

【その他の重要事項】
①年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。
その意味は、一つは人類のこれまでの長い歴史の中で蓄積されてきた膨大な知をどう学び、活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。
とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。
そのためには、具体にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにせず、学びを螺旋形に積み上げていくことが重要であろう。
②ゼミは登録上は1コマだが、2コマ続けて実施することを教授会で申し合わせしてある。本ゼミも、5限にまでまたがって行うことを原則とするので、その時間帯に他の授業やアルバイト等を入れないこと。
③ゼミ担当者の髙栁は、2026年度をもって定年退職となる。したがって2027年度以降、ゼミ担当教員が変わることになるので、新規に入ゼミする新2年生・3年生はそのことを承知しておいてほしい。

【Outline (in English)】
This seminar aims to learn why there are many issues between Japan and Korea, and how we can solve these difficult problems by our own intelligence, sensibility, and experiences.

Students are expected to read the papers mentioned in the classroom, visit relevant locations, and participate in the events held on and off campus.
Final grade will be calculated according to the following process.
In-class presentation 35%, in-class contribution 35%, and term-end report 30%.

ARSe400GA（地域研究（東アジア）/ Area studies(East Asia) 400）

国際社会演習

髙柳　俊男

サブタイトル：朝鮮半島と日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
2026年の現在、隣国の韓国に向ける日本の視線には、K-POPやダンスをはじめ韓流ブームによる関心や憧れがある一方で、歴史問題や領土問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一方の北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、親子代々の権力世襲や軍事力優先の国家体制に対して、冷やかな眺めが支配的である。
どうしてこのような現状になっているのであろうか？　そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？　状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？
この授業では、参加するゼミ生たちとともに、日本と朝鮮半島間の複雑に絡まった糸を少しずつ解いていく作業をする。これまでの歩みをひも解き、それを踏まえてあるべき未来を考察することを目指したい。なかでも文化交流に重点を置き、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性の掘り起こしにも努めたい。
同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。
受講生たちが、一般的ないし図式的理解にとどまることなく、具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで自らの認識を深化させること――いわば「個別を極めることを通じて普遍に至る」ような学び方を身につけることを重視したい。

【到達目標】
日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解する。理解した内容を、受け売りではなく、自ら紡いだ言葉で、責任をもって語れるようにすることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の基本的な流れは以下の通りだが、2・3年生の新規参加者に配慮して、導入に一定の時間をかけたい。
その後、本論に入る。昨年度のゼミでは、良書の翻訳など、日韓間の出版交流に長年尽力してきた舘野晳さん（1935年生まれ、本学出身）をお招きしたイベントと、関連したパネル展示をゼミで実施することにし、それに向けた準備学習を続けてきた。
今年度も、髙柳がHOSEIミュージアムなど学内の展示施設で「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」を開催予定であることを視野に、その展示をゼミ全体で担っていく方向で、関連する学びを進めたい。
具体的には、たとえば以下などの人物を取り上げる。
①歴代総長や教員の韓国・朝鮮との関係：小田切秀雄など
②本学で学んだ朝鮮半島からの留学生：朴泰遠、尹学準など
③韓国・朝鮮と関係の深い在日コリアンや日本人：韓昌祐、深沢夏衣、舘野晳など
秋学期には、夏季休業中の学びの振り返りを経て、春学期の学びを継続したい。
ゼミの進め方としては、年間を通して原則的に毎回レポーターを決め、その人の発表と全員の討論で進行する。発表の際には、テキストの内容要約のほか、関連する他の書物や新聞・雑誌報道などにも目を通し、取り上げられたテーマに対する多面的で客観的な分析となるよう心掛けること。毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。
関連映像の視聴を随時まじえ、関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫等により、適宜実施したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦するゼミ関連書籍の紹介、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	導入として髙柳執筆の文章を読む①
第3回	導入教材②	導入として髙柳執筆の文章を読む②
第4回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第5回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入①	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ①
第6回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入②	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ②
第7回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第8回	小田切秀雄を取り上げる	小田切秀雄に関する資料を読む
第9回	朴泰遠を取り上げる	朴泰遠に関する資料を読む
第10回	尹学準を取り上げる	尹学準に関する資料を読む
第11回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第12回	韓昌祐を取り上げる	韓昌祐に関する資料を読む
第13回	深沢夏衣を取り上げる	深沢夏衣に関する資料を読む
第14回	春学期のまとめ	展示実施に向けた春学期の学習のまとめと、秋学期のスケジュール確認、夏季休業中の課題の伝達
第1回	秋学期の導入	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分程度）
第2回	HOSEIミュージアム等での展示の準備①	展示の最終準備・確認①
第3回	HOSEIミュージアム等での展示の準備②	展示の最終準備・確認②
第4回	HOSEIミュージアム等での展示の準備③	展示の最終準備・確認③
第5回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第6回	夏季休業中の振り返り①	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日など）
第7回	夏季休業中の振り返り②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞など）
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り①	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続①
第10回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り②	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続②
第11回	校外研修①	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く①

第12回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り③	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続③
第13回	校外研修②	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く②
第14回	年間のまとめ	展示の総括と、年間の学習のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。
なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要教材を毎回配付する。

【参考書】
レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。
韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

【成績評価の方法と基準】
演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの質問や意見を表明することが大切である。
そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を35％ずつ、学期末のレポートを30％として判断する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の自立した営みの上に、学生と教員全員で切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していければと思う。
本年度は昨年度に続き、学内における展示を計画しているので、そうした方向性がいっそう発揮できるよう、ともに努めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
未知の事項が出てきた場合、その場で適宜検索等ができるよう、ゼミに毎回PCを持参することが望ましい。

【その他の重要事項】
①年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。
その意味は、一つは人類のこれまでの長い歴史の中で蓄積されてきた膨大な知をどう学び、活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。
とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。
そのためには、具体にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにせず、学びを螺旋形に積み上げていくことが重要であろう。
②ゼミは登録上は1コマだが、2コマ続けて実施することを教授会で申し合わせしてある。本ゼミも、5限にまでまたがって行うことを原則とするので、その時間帯に他の授業やアルバイト等を入れないこと。
③ゼミ担当者の髙栁は、2026年度をもって定年退職となる。したがって2027年度以降、ゼミ担当教員が変わることになるので、新規に入ゼミする新2年生・3年生はそのことを承知しておいてほしい。

【Outline (in English)】
This seminar aims to learn why there are many issues between Japan and Korea, and how we can solve these difficult problems by our own intelligence, sensibility, and experiences.

Students are expected to read the papers mentioned in the classroom, visit relevant locations, and participate in the events held on and off campus.
Final grade will be calculated according to the following process.
In-class presentation 35%, in-class contribution 35%, and term-end report 30%.

ARSe400GA（地域研究（東アジア）/ Area studies(East Asia) 400）

国際社会演習

髙柳　俊男

サブタイトル：朝鮮半島と日本
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
2026年の現在、隣国の韓国に向ける日本の視線には、K-POPやダンスをはじめ韓流ブームによる関心や憧れがある一方で、歴史問題や領土問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一方の北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、親子代々の権力世襲や軍事力優先の国家体制に対して、冷やかな眺めが支配的である。
どうしてこのような現状になっているのであろうか？　そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？　状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？
この授業では、参加するゼミ生たちとともに、日本と朝鮮半島間の複雑に絡まった糸を少しずつ解いていく作業をする。これまでの歩みをひも解き、それを踏まえてあるべき未来を考察することを目指したい。なかでも文化交流に重点を置き、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性の掘り起こしにも努めたい。
同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。
受講生たちが、一般的ないし図式的理解にとどまることなく、具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで自らの認識を深化させること――いわば「個別を極めることを通じて普遍に至る」ような学び方を身につけることを重視したい。

【到達目標】
日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解する。理解した内容を、受け売りではなく、自ら紡いだ言葉で、責任をもって語れるようにすることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の基本的な流れは以下の通りだが、2・3年生の新規参加者に配慮して、導入に一定の時間をかけたい。
その後、本論に入る。昨年度のゼミでは、良書の翻訳など、日韓間の出版交流に長年尽力してきた舘野晳さん（1935年生まれ、本学出身）をお招きしたイベントと、関連したパネル展示をゼミで実施することにし、それに向けた準備学習を続けてきた。
今年度も、髙柳がHOSEIミュージアムなど学内の展示施設で「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」を開催予定であることを視野に、その展示をゼミ全体で担っていく方向で、関連する学びを進めたい。
具体的には、たとえば以下などの人物を取り上げる。
①歴代総長や教員の韓国・朝鮮との関係：小田切秀雄など
②本学で学んだ朝鮮半島からの留学生：朴泰遠、尹学準など
③韓国・朝鮮と関係の深い在日コリアンや日本人：韓昌祐、深沢夏衣、舘野晳など
秋学期には、夏季休業中の学びの振り返りを経て、春学期の学びを継続したい。
ゼミの進め方としては、年間を通して原則的に毎回レポーターを決め、その人の発表と全員の討論で進行する。発表の際には、テキストの内容要約のほか、関連する他の書物や新聞・雑誌報道などにも目を通し、取り上げられたテーマに対する多面的で客観的な分析となるよう心掛けること。毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。
関連映像の視聴を随時まじえ、関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫等により、適宜実施したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦するゼミ関連書籍の紹介、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	導入として髙柳執筆の文章を読む①
第3回	導入教材②	導入として髙柳執筆の文章を読む②
第4回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第5回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入①	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ①
第6回	「人物でみる法政大学と韓国・朝鮮」の導入②	「法政学」授業での配付資料を使って、概要を学ぶ②
第7回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第8回	小田切秀雄を取り上げる	小田切秀雄に関する資料を読む
第9回	朴泰遠を取り上げる	朴泰遠に関する資料を読む
第10回	尹学準を取り上げる	尹学準に関する資料を読む
第11回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第12回	韓昌祐を取り上げる	韓昌祐に関する資料を読む
第13回	深沢夏衣を取り上げる	深沢夏衣に関する資料を読む
第14回	春学期のまとめ	展示実施に向けた春学期の学習のまとめと、秋学期のスケジュール確認、夏季休業中の課題の伝達
第1回	秋学期の導入	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分程度）
第2回	HOSEIミュージアム等での展示の準備①	展示の最終準備・確認①
第3回	HOSEIミュージアム等での展示の準備②	展示の最終準備・確認②
第4回	HOSEIミュージアム等での展示の準備③	展示の最終準備・確認③
第5回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第6回	夏季休業中の振り返り①	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日など）
第7回	夏季休業中の振り返り②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞など）
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り①	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続①
第10回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り②	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続②
第11回	校外研修①	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く①

第12回	HOSEIミュージアム等での展示の振り返り③	展示の反響、反省、機会があったら追加すべき人物についての学びの継続③
第13回	校外研修②	ゼミに関連する博物館等の展示を見に行く②
第14回	年間のまとめ	展示の総括と、年間の学習のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。
なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
必要教材を毎回配付する。

【参考書】
レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。
韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

【成績評価の方法と基準】
演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの質問や意見を表明することが大切である。
そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を35％ずつ、学期末のレポートを30％として判断する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の自立した営みの上に、学生と教員全員で切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していければと思う。
本年度は昨年度に続き、学内における展示を計画しているので、そうした方向性がいっそう発揮できるよう、ともに努めていきたい。

【学生が準備すべき機器他】
未知の事項が出てきた場合、その場で適宜検索等ができるよう、ゼミに毎回PCを持参することが望ましい。

【その他の重要事項】
①年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。
その意味は、一つは人類のこれまでの長い歴史の中で蓄積されてきた膨大な知をどう学び、活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。
とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。
そのためには、具体にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにせず、学びを螺旋形に積み上げていくことが重要であろう。
②ゼミは登録上は1コマだが、2コマ続けて実施することを教授会で申し合わせしてある。本ゼミも、5限にまでまたがって行うことを原則とするので、その時間帯に他の授業やアルバイト等を入れないこと。
③ゼミ担当者の髙栁は、2026年度をもって定年退職となる。したがって2027年度以降、ゼミ担当教員が変わることになるので、新規に入ゼミする新2年生・3年生はそのことを承知しておいてほしい。

【Outline (in English)】
This seminar aims to learn why there are many issues between Japan and Korea, and how we can solve these difficult problems by our own intelligence, sensibility, and experiences.

Students are expected to read the papers mentioned in the classroom, visit relevant locations, and participate in the events held on and off campus.
Final grade will be calculated according to the following process.
In-class presentation 35%, in-class contribution 35%, and term-end report 30%.

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

国際社会演習

岩瀬　裕子

サブタイトル：観光とまちづくりの人類学―資源化する文化・環境・宗教
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
私たちは観光の現場にて、伝統芸能・歌や踊りなどの「文化」、自然環境や野生の動物などの「環境」、神社仏閣やパワースポットといった「宗教」などに眼差しを向けます。その舞台裏では文化・環境・宗教に新たな意味や価値が付与され、資源化するという現象が起こっています。例えばある地域で継承されてきた踊りが、本来の目的や文脈（＝地域の守り神を祭る等）から外れ、観光用（＝観光客からお金を得る等）に演じられることで資源化するのです。また、これらの資源は地域活性化の文脈でも活用され、観光まちづくりといった現象も生み出しています。
現代社会において観光客は国内外から訪れます。そのため、地域のローカルな文化・環境・宗教はナショナル、グローバルな文脈に置かれ、資源として生成されます。観光客を受け入れる（ホスト）側はどのように資源化を行い、観光客（ゲスト）側はそれをどのように経験するのでしょうか。また、地域活性化や、環境との両立につながる持続可能な観光とは何でしょうか。本ゼミでは文化人類学の概念や理論、関連する国内外の事例を学ぶことを通して、グローバル化時代の観光現象を広い視野から理解することを目指します。

【到達目標】
・文化人類学および観光人類学の専門的な概念や理論、質的調査の方法論を習得する。
・文献の内容をただ理解するだけではなく、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの問題関心や研究テーマの設定につなげる。
・先行研究の検討に始まり、研究テーマの構想、調査項目の設定、調査の実施と資料の収集、資料の整理・分析、論文の作成に至る一連の学問的営為を習得する。
・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や多文化共生に関する洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期の後半は文献の輪読をベースにしつつ、適宜、講義形式を取り入れることで共通の問題意識を深める。秋学期は授業の成果を国際文化情報学会で発表するために、グループ単位で調査・研究を行う（ただし、卒業研究に取り組む４年生は原則、個人単位での学会発表とする）。
・文献の輪読では、毎回発表者を立てる。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
・履修者から出された興味深いコメントや質問等を取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、履修上の注意、自己紹介、各自の問題関心を発表
第2回	観光人類学とは何か？ ①	（文献＋講義）「観光と文化」を読む。関連講義。
第3回	観光人類学とは何か？ ②	（文献＋講義）「観光とまちづくり」にかかわる文献を読む。関連講義。
第4回	観光人類学の理論・概念①	（文献の発表・討論）ホストとゲスト
第5回	観光人類学の理論・概念②	（文献の発表・討論）観光と真正性
第6回	観光人類学の理論・概念③	（文献の発表・討論）観光と伝統・文化の創造
第7回	観光人類学の理論・概念④	（文献の発表・討論）観光と表象・政治
第8回	観光人類学の理論・概念⑤	（文献の発表・討論）観光とメディア
第9回	観光とまちづくりの事例①	（文献の発表・討論）エコツーリズムの事例
第10回	観光とまちづくりの事例②	（文献の発表・討論）ダークツーリズムの事例
第11回	観光とまちづくりの事例③	（文献の発表・討論）アニメツーリズムの事例
第12回	観光とまちづくりの事例④	（文献の発表・討論）都市近郊の観光化
第13回	観光とまちづくりの事例⑤	（文献の発表・討論）オーバーツーリズムの事例
第14回	質的な調査・研究を進めるために②	（講義＋作業）研究論文の構成と考え方、各自のテーマについて発表し、グループ討論を行う。
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール
第2回	研究構想発表①	各自の研究構想について発表し、グループ討論を行う。
第3回	研究構想発表②	各自の研究構想について発表し、グループ分けを行う。
第4回	先行研究発表と討論①	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第5回	先行研究発表と討論②	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第6回	研究調査の中間報告①	調査研究の進捗状況を報告する。
第7回	研究調査の中間報告②	調査研究の進捗状況を報告する。
第8回	国際文化情報学会の発表準備①	入手した一次資料の文章化および整理を中心に行う。
第9回	国際文化情報学会の発表準備②	入手した一次資料の分析を中心に行う。
第10回	国際文化情報学会の発表準備③	論文執筆を継続するとともに、全体的な論理展開を確認する。
第11回	国際文化情報学会の発表準備④	学会発表の予行演習を行う。
第12回	研究成果の発表	研究成果を発表し、グループ討論を行う。
第13回	研究成果の振り返り	学会発表を踏まえて振り返りを行い、リプライを作成する。
第14回	総括	１年間に学んだことを振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
・フィールドワーク等を実施して資料を収集するとともに、資料の整理・分析を行う。
・研究発表のための資料作成やプレゼンテーションの練習を行う。

・本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
市野澤潤平編『基本概念から学ぶ観光人類学』ナカニシヤ出版、2022年。
市野澤潤平ほか編『観光人類学のフィールドワーク―ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
石森大知ほか編『宗教と開発の人類学―グローバル化する開発言説とポスト世俗主義』春風社、2019年。
橋本和也『地域文化観光論―新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版、2016 年。
山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続』世界思想社、2012 年。
山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣双書、2011年。
（以上のほか、授業時に適宜紹介する）

【成績評価の方法と基準】
討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70％）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30％）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用する。

【その他の重要事項】
・本演習では「文化人類学の思考法－現代社会へのアプローチ」という大きな問題意識のもと、「観光とまちづくり」のテーマを取り上げる（ただし、2027年度も同じテーマとは限りません）。
・シラバス内容や授業計画に変更が生じた場合は授業内もしくは学習支援システムで周知します。
・春学期・秋学期合わせての履修を原則とします。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This seminar introduces the foundations of cultural anthropology, with a particular focus on tourism and community revitalization. It also aims to deepen students' understanding of contemporary global issues.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students are expected to acquire a broad perspective on issues concerning minorities, multiculturalism, interfaith dialogue, ethnic conflicts, and community development.
[Learning Activities Outside of Classroom]
Students are expected to spend four hours per week on preparation and review to ensure a thorough understanding of the course content.
[Grading Criteria/Policy] Grading will be decided based on the briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

国際社会演習

岩瀬　裕子

サブタイトル：観光とまちづくりの人類学―資源化する文化・環境・宗教
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
私たちは観光の現場にて、伝統芸能・歌や踊りなどの「文化」、自然環境や野生の動物などの「環境」、神社仏閣やパワースポットといった「宗教」などに眼差しを向けます。その舞台裏では文化・環境・宗教に新たな意味や価値が付与され、資源化するという現象が起こっています。例えばある地域で継承されてきた踊りが、本来の目的や文脈（＝地域の守り神を祭る等）から外れ、観光用（＝観光客からお金を得る等）に演じられることで資源化するのです。また、これらの資源は地域活性化の文脈でも活用され、観光まちづくりといった現象も生み出しています。
現代社会において観光客は国内外から訪れます。そのため、地域のローカルな文化・環境・宗教はナショナル、グローバルな文脈に置かれ、資源として生成されます。観光客を受け入れる（ホスト）側はどのように資源化を行い、観光客（ゲスト）側はそれをどのように経験するのでしょうか。また、地域活性化や、環境との両立につながる持続可能な観光とは何でしょうか。本ゼミでは文化人類学の概念や理論、関連する国内外の事例を学ぶことを通して、グローバル化時代の観光現象を広い視野から理解することを目指します。

【到達目標】
・文化人類学および観光人類学の専門的な概念や理論、質的調査の方法論を習得する。
・文献の内容をただ理解するだけではなく、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの問題関心や研究テーマの設定につなげる。
・先行研究の検討に始まり、研究テーマの構想、調査項目の設定、調査の実施と資料の収集、資料の整理・分析、論文の作成に至る一連の学問的営為を習得する。
・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や多文化共生に関する洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期の後半は文献の輪読をベースにしつつ、適宜、講義形式を取り入れることで共通の問題意識を深める。秋学期は授業の成果を国際文化情報学会で発表するために、グループ単位で調査・研究を行う（ただし、卒業研究に取り組む４年生は原則、個人単位での学会発表とする）。
・文献の輪読では、毎回発表者を立てる。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
・履修者から出された興味深いコメントや質問等を取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、履修上の注意、自己紹介、各自の問題関心を発表
第2回	観光人類学とは何か？ ①	（文献＋講義）「観光と文化」を読む。関連講義。
第3回	観光人類学とは何か？ ②	（文献＋講義）「観光とまちづくり」にかかわる文献を読む。関連講義。
第4回	観光人類学の理論・概念①	（文献の発表・討論）ホストとゲスト
第5回	観光人類学の理論・概念②	（文献の発表・討論）観光と真正性
第6回	観光人類学の理論・概念③	（文献の発表・討論）観光と伝統・文化の創造
第7回	観光人類学の理論・概念④	（文献の発表・討論）観光と表象・政治
第8回	観光人類学の理論・概念⑤	（文献の発表・討論）観光とメディア
第9回	観光とまちづくりの事例①	（文献の発表・討論）エコツーリズムの事例
第10回	観光とまちづくりの事例②	（文献の発表・討論）ダークツーリズムの事例
第11回	観光とまちづくりの事例③	（文献の発表・討論）アニメツーリズムの事例
第12回	観光とまちづくりの事例④	（文献の発表・討論）都市近郊の観光化
第13回	観光とまちづくりの事例⑤	（文献の発表・討論）オーバーツーリズムの事例
第14回	質的な調査・研究を進めるために②	（講義＋作業）研究論文の構成と考え方、各自のテーマについて発表し、グループ討論を行う。
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール
第2回	研究構想発表①	各自の研究構想について発表し、グループ討論を行う。
第3回	研究構想発表②	各自の研究構想について発表し、グループ分けを行う。
第4回	先行研究発表と討論①	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第5回	先行研究発表と討論②	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第6回	研究調査の中間報告①	調査研究の進捗状況を報告する。
第7回	研究調査の中間報告②	調査研究の進捗状況を報告する。
第8回	国際文化情報学会の発表準備①	入手した一次資料の文章化および整理を中心に行う。
第9回	国際文化情報学会の発表準備②	入手した一次資料の分析を中心に行う。
第10回	国際文化情報学会の発表準備③	論文執筆を継続するとともに、全体的な論理展開を確認する。
第11回	国際文化情報学会の発表準備④	学会発表の予行演習を行う。
第12回	研究成果の発表	研究成果を発表し、グループ討論を行う。
第13回	研究成果の振り返り	学会発表を踏まえて振り返りを行い、リプライを作成する。
第14回	総括	１年間に学んだことを振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
・フィールドワーク等を実施して資料を収集するとともに、資料の整理・分析を行う。
・研究発表のための資料作成やプレゼンテーションの練習を行う。

・本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
市野澤潤平編『基本概念から学ぶ観光人類学』ナカニシヤ出版、2022年。
市野澤潤平ほか編『観光人類学のフィールドワーク―ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
石森大知ほか編『宗教と開発の人類学―グローバル化する開発言説とポスト世俗主義』春風社、2019年。
橋本和也『地域文化観光論―新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版、2016 年。
山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続』世界思想社、2012 年。
山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣双書、2011年。
（以上のほか、授業時に適宜紹介する）

【成績評価の方法と基準】
討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70％）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30％）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用する。

【その他の重要事項】
・本演習では「文化人類学の思考法－現代社会へのアプローチ」という大きな問題意識のもと、「観光とまちづくり」のテーマを取り上げる（ただし、2027年度も同じテーマとは限りません）。
・シラバス内容や授業計画に変更が生じた場合は授業内もしくは学習支援システムで周知します。
・春学期・秋学期合わせての履修を原則とします。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This seminar introduces the foundations of cultural anthropology, with a particular focus on tourism and community revitalization. It also aims to deepen students' understanding of contemporary global issues.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students are expected to acquire a broad perspective on issues concerning minorities, multiculturalism, interfaith dialogue, ethnic conflicts, and community development.
[Learning Activities Outside of Classroom]
Students are expected to spend four hours per week on preparation and review to ensure a thorough understanding of the course content.
[Grading Criteria/Policy] Grading will be decided based on the briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

国際社会演習

岩瀬　裕子

サブタイトル：観光とまちづくりの人類学―資源化する文化・環境・宗教
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
私たちは観光の現場にて、伝統芸能・歌や踊りなどの「文化」、自然環境や野生の動物などの「環境」、神社仏閣やパワースポットといった「宗教」などに眼差しを向けます。その舞台裏では文化・環境・宗教に新たな意味や価値が付与され、資源化するという現象が起こっています。例えばある地域で継承されてきた踊りが、本来の目的や文脈（＝地域の守り神を祭る等）から外れ、観光用（＝観光客からお金を得る等）に演じられることで資源化するのです。また、これらの資源は地域活性化の文脈でも活用され、観光まちづくりといった現象も生み出しています。
現代社会において観光客は国内外から訪れます。そのため、地域のローカルな文化・環境・宗教はナショナル、グローバルな文脈に置かれ、資源として生成されます。観光客を受け入れる（ホスト）側はどのように資源化を行い、観光客（ゲスト）側はそれをどのように経験するのでしょうか。また、地域活性化や、環境との両立につながる持続可能な観光とは何でしょうか。本ゼミでは文化人類学の概念や理論、関連する国内外の事例を学ぶことを通して、グローバル化時代の観光現象を広い視野から理解することを目指します。

【到達目標】
・文化人類学および観光人類学の専門的な概念や理論、質的調査の方法論を習得する。
・文献の内容をただ理解するだけではなく、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの問題関心や研究テーマの設定につなげる。
・先行研究の検討に始まり、研究テーマの構想、調査項目の設定、調査の実施と資料の収集、資料の整理・分析、論文の作成に至る一連の学問的営為を習得する。
・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や多文化共生に関する洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期の後半は文献の輪読をベースにしつつ、適宜、講義形式を取り入れることで共通の問題意識を深める。秋学期は授業の成果を国際文化情報学会で発表するために、グループ単位で調査・研究を行う（ただし、卒業研究に取り組む４年生は原則、個人単位での学会発表とする）。
・文献の輪読では、毎回発表者を立てる。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
・履修者から出された興味深いコメントや質問等を取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、履修上の注意、自己紹介、各自の問題関心を発表
第2回	観光人類学とは何か？ ①	（文献＋講義）「観光と文化」を読む。関連講義。
第3回	観光人類学とは何か？ ②	（文献＋講義）「観光とまちづくり」にかかわる文献を読む。関連講義。
第4回	観光人類学の理論・概念①	（文献の発表・討論）ホストとゲスト
第5回	観光人類学の理論・概念②	（文献の発表・討論）観光と真正性
第6回	観光人類学の理論・概念③	（文献の発表・討論）観光と伝統・文化の創造
第7回	観光人類学の理論・概念④	（文献の発表・討論）観光と表象・政治
第8回	観光人類学の理論・概念⑤	（文献の発表・討論）観光とメディア
第9回	観光とまちづくりの事例①	（文献の発表・討論）エコツーリズムの事例
第10回	観光とまちづくりの事例②	（文献の発表・討論）ダークツーリズムの事例
第11回	観光とまちづくりの事例③	（文献の発表・討論）アニメツーリズムの事例
第12回	観光とまちづくりの事例④	（文献の発表・討論）都市近郊の観光化
第13回	観光とまちづくりの事例⑤	（文献の発表・討論）オーバーツーリズムの事例
第14回	質的な調査・研究を進めるために②	（講義＋作業）研究論文の構成と考え方、各自のテーマについて発表し、グループ討論を行う。
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール
第2回	研究構想発表①	各自の研究構想について発表し、グループ討論を行う。
第3回	研究構想発表②	各自の研究構想について発表し、グループ分けを行う。
第4回	先行研究発表と討論①	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第5回	先行研究発表と討論②	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第6回	研究調査の中間報告①	調査研究の進捗状況を報告する。
第7回	研究調査の中間報告②	調査研究の進捗状況を報告する。
第8回	国際文化情報学会の発表準備①	入手した一次資料の文章化および整理を中心に行う。
第9回	国際文化情報学会の発表準備②	入手した一次資料の分析を中心に行う。
第10回	国際文化情報学会の発表準備③	論文執筆を継続するとともに、全体的な論理展開を確認する。
第11回	国際文化情報学会の発表準備④	学会発表の予行演習を行う。
第12回	研究成果の発表	研究成果を発表し、グループ討論を行う。
第13回	研究成果の振り返り	学会発表を踏まえて振り返りを行い、リプライを作成する。
第14回	総括	１年間に学んだことを振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
・フィールドワーク等を実施して資料を収集するとともに、資料の整理・分析を行う。
・研究発表のための資料作成やプレゼンテーションの練習を行う。

・本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
市野澤潤平編『基本概念から学ぶ観光人類学』ナカニシヤ出版、2022年。
市野澤潤平ほか編『観光人類学のフィールドワーク―ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
石森大知ほか編『宗教と開発の人類学―グローバル化する開発言説とポスト世俗主義』春風社、2019年。
橋本和也『地域文化観光論―新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版、2016 年。
山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続』世界思想社、2012 年。
山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣双書、2011年。
（以上のほか、授業時に適宜紹介する）

【成績評価の方法と基準】
討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70％）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30％）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用する。

【その他の重要事項】
・本演習では「文化人類学の思考法－現代社会へのアプローチ」という大きな問題意識のもと、「観光とまちづくり」のテーマを取り上げる（ただし、2027年度も同じテーマとは限りません）。
・シラバス内容や授業計画に変更が生じた場合は授業内もしくは学習支援システムで周知します。
・春学期・秋学期合わせての履修を原則とします。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This seminar introduces the foundations of cultural anthropology, with a particular focus on tourism and community revitalization. It also aims to deepen students' understanding of contemporary global issues.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students are expected to acquire a broad perspective on issues concerning minorities, multiculturalism, interfaith dialogue, ethnic conflicts, and community development.
[Learning Activities Outside of Classroom]
Students are expected to spend four hours per week on preparation and review to ensure a thorough understanding of the course content.
[Grading Criteria/Policy] Grading will be decided based on the briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

CUA400GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 400）

国際社会演習

岩瀬　裕子

サブタイトル：観光とまちづくりの人類学―資源化する文化・環境・宗教
配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
私たちは観光の現場にて、伝統芸能・歌や踊りなどの「文化」、自然環境や野生の動物などの「環境」、神社仏閣やパワースポットといった「宗教」などに眼差しを向けます。その舞台裏では文化・環境・宗教に新たな意味や価値が付与され、資源化するという現象が起こっています。例えばある地域で継承されてきた踊りが、本来の目的や文脈（＝地域の守り神を祭る等）から外れ、観光用（＝観光客からお金を得る等）に演じられることで資源化するのです。また、これらの資源は地域活性化の文脈でも活用され、観光まちづくりといった現象も生み出しています。
現代社会において観光客は国内外から訪れます。そのため、地域のローカルな文化・環境・宗教はナショナル、グローバルな文脈に置かれ、資源として生成されます。観光客を受け入れる（ホスト）側はどのように資源化を行い、観光客（ゲスト）側はそれをどのように経験するのでしょうか。また、地域活性化や、環境との両立につながる持続可能な観光とは何でしょうか。本ゼミでは文化人類学の概念や理論、関連する国内外の事例を学ぶことを通して、グローバル化時代の観光現象を広い視野から理解することを目指します。

【到達目標】
・文化人類学および観光人類学の専門的な概念や理論、質的調査の方法論を習得する。
・文献の内容をただ理解するだけではなく、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの問題関心や研究テーマの設定につなげる。
・先行研究の検討に始まり、研究テーマの構想、調査項目の設定、調査の実施と資料の収集、資料の整理・分析、論文の作成に至る一連の学問的営為を習得する。
・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や多文化共生に関する洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・春学期の後半は文献の輪読をベースにしつつ、適宜、講義形式を取り入れることで共通の問題意識を深める。秋学期は授業の成果を国際文化情報学会で発表するために、グループ単位で調査・研究を行う（ただし、卒業研究に取り組む４年生は原則、個人単位での学会発表とする）。
・文献の輪読では、毎回発表者を立てる。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
・履修者から出された興味深いコメントや質問等を取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、履修上の注意、自己紹介、各自の問題関心を発表
第2回	観光人類学とは何か？ ①	（文献＋講義）「観光と文化」を読む。関連講義。
第3回	観光人類学とは何か？ ②	（文献＋講義）「観光とまちづくり」にかかわる文献を読む。関連講義。
第4回	観光人類学の理論・概念①	（文献の発表・討論）ホストとゲスト
第5回	観光人類学の理論・概念②	（文献の発表・討論）観光と真正性
第6回	観光人類学の理論・概念③	（文献の発表・討論）観光と伝統・文化の創造
第7回	観光人類学の理論・概念④	（文献の発表・討論）観光と表象・政治
第8回	観光人類学の理論・概念⑤	（文献の発表・討論）観光とメディア
第9回	観光とまちづくりの事例①	（文献の発表・討論）エコツーリズムの事例
第10回	観光とまちづくりの事例②	（文献の発表・討論）ダークツーリズムの事例
第11回	観光とまちづくりの事例③	（文献の発表・討論）アニメツーリズムの事例
第12回	観光とまちづくりの事例④	（文献の発表・討論）都市近郊の観光化
第13回	観光とまちづくりの事例⑤	（文献の発表・討論）オーバーツーリズムの事例
第14回	質的な調査・研究を進めるために②	（講義＋作業）研究論文の構成と考え方、各自のテーマについて発表し、グループ討論を行う。
第1回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール
第2回	研究構想発表①	各自の研究構想について発表し、グループ討論を行う。
第3回	研究構想発表②	各自の研究構想について発表し、グループ分けを行う。
第4回	先行研究発表と討論①	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第5回	先行研究発表と討論②	研究構想に関する先行研究を発表し、グループ討論を行う。
第6回	研究調査の中間報告①	調査研究の進捗状況を報告する。
第7回	研究調査の中間報告②	調査研究の進捗状況を報告する。
第8回	国際文化情報学会の発表準備①	入手した一次資料の文章化および整理を中心に行う。
第9回	国際文化情報学会の発表準備②	入手した一次資料の分析を中心に行う。
第10回	国際文化情報学会の発表準備③	論文執筆を継続するとともに、全体的な論理展開を確認する。
第11回	国際文化情報学会の発表準備④	学会発表の予行演習を行う。
第12回	研究成果の発表	研究成果を発表し、グループ討論を行う。
第13回	研究成果の振り返り	学会発表を踏まえて振り返りを行い、リプライを作成する。
第14回	総括	１年間に学んだことを振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
・フィールドワーク等を実施して資料を収集するとともに、資料の整理・分析を行う。
・研究発表のための資料作成やプレゼンテーションの練習を行う。

・本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
市野澤潤平編『基本概念から学ぶ観光人類学』ナカニシヤ出版、2022年。
市野澤潤平ほか編『観光人類学のフィールドワーク―ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房、2021年
石森大知ほか編『宗教と開発の人類学―グローバル化する開発言説とポスト世俗主義』春風社、2019年。
橋本和也『地域文化観光論―新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版、2016 年。
山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続』世界思想社、2012 年。
山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣双書、2011年。
（以上のほか、授業時に適宜紹介する）

【成績評価の方法と基準】
討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70％）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30％）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用する。

【その他の重要事項】
・本演習では「文化人類学の思考法－現代社会へのアプローチ」という大きな問題意識のもと、「観光とまちづくり」のテーマを取り上げる（ただし、2027年度も同じテーマとは限りません）。
・シラバス内容や授業計画に変更が生じた場合は授業内もしくは学習支援システムで周知します。
・春学期・秋学期合わせての履修を原則とします。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This seminar introduces the foundations of cultural anthropology, with a particular focus on tourism and community revitalization. It also aims to deepen students' understanding of contemporary global issues.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students are expected to acquire a broad perspective on issues concerning minorities, multiculturalism, interfaith dialogue, ethnic conflicts, and community development.
[Learning Activities Outside of Classroom]
Students are expected to spend four hours per week on preparation and review to ensure a thorough understanding of the course content.
[Grading Criteria/Policy] Grading will be decided based on the briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

松本　悟

サブタイトル：国際協力を捉える視点
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「国際協力」とは異なる文化的背景を抱えた人々のつながりの一形態であり、演習では国際協力それ自体だけでなく、国際協力が必要となる背景や実施した影響を含む。具体的には、貧困、環境、開発、格差、紛争、難民、教育などの「グローバルイシュー」、国際機構、ＮＧＯ、政府機関、企業などの「組織」、ボランティア、募金、善意、助け合いなど「国際協力を実践する個人や社会のあり方」、さらにそれらを表象するメディアなどの言説も学びの対象とする。それらを考察することを通して、「国際協力」に留まらない、物事を洞察する多様な分析視角＝視点を修得する。

【到達目標】
【2年次（春学期)】「国際協力」や「開発」に関する知識、人文社会科学の視点や研究方法を使ってSA/SJ等での調査計画を立てることができるようになる。
【3年春学期】「国際協力」や「開発」を広く分析する人文社会科学の視点や研究方法を習得し、各自が研究したいテーマや研究方法を見出せるようになる。
【3年秋学期】実際に調査・取材や研究に携わってその結果を発表したり、先輩の研究の進捗に積極的に触れたりすることを通して、研究に必要な方法を習得し、各自が研究したいテーマに関わる意義ある問いや仮説を立てられる、もしくはそれをサポートできるようになる。
【4年春学期】「国際協力」や「開発」に係る事象を分析する人文社会科学の視点を深めるとともに、自らの研究テーマに沿った調査を進めることで、実践知（フロネーシス）として知識を捉えることができるようになる。
【4年秋学期】先行研究や適切な方法に基づいた研究論文の執筆と研究発表を行うことができる、もしくは、それをサポートできるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【概要】春学期は「視点」と「方法論」を毎回学ぶ。「視点」では専門的な文献の読解を通して知識を蓄積しながら、読む力、理解する力、考える力、発表する力を鍛える。「方法論」（サブゼミ）では、考えたり調べたりするのに必要な研究方法を実習する。秋学期は、10月の法政大学懸賞論文や12月の国際文化情報学会など発表の場を積極的に活かして、春学期のインプットをアウトプットへと繋げていく。
【方法】
１．読む力、考える力、発表する力、議論する力の鍛錬：開発協力に関する専門書やゼミの卒業生が書いた学位論文を題材にした議論・発表、各自の研究テーマに関する文献や事例をもとにした発表・議論を行う。
２．研究方法の習得：卒業生の学位論文を例に研究方法を習得する。
３．「叩き愛」：お互いの研究計画、進捗報告、草稿などを事前に読んでゼミの時間にコメントし合う。「愛を持って叩く」という姿勢が重要。
４．外部講師の招へい：演習の学びを高め、実践との繋がりを考えるため外部講師を招くこともある。
５．ゼミ合宿：9月上旬に2泊3日程度で実施する。
【課題へのフィードバック】毎回の発表に対してはその場でコメントし、研究進捗報告などの課題に対しては学習支援システムを通じてコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	演習の説明、他己紹介、論文とは何か、をテーマにこのゼミを体感するような議論。
第2回	[視点]文献講読① [方法論]研究とは？	[視点]では担当教員が執筆した開発協力の20年に関する論文をもとに議論。[方法論]では文献の探し方と研究倫理についての講義。
第3回	[視点]文献講読② [方法論]ドキュメント分析①	[視点]では担当教員が執筆した市民社会に関する論文をもとに議論。[方法論]では市議会会議録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第4回	[視点]文献講読③ [方法論]ドキュメント分析②	[視点]では担当教員が執筆した問題案件のその後を追った論文をもとに議論。[方法論]では国会議事録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第5回	[視点]文献講読④ [方法論]インタビュー①	[視点]では担当教員が執筆したミャンマー民主化後の開発協力に関する論文をもとに議論。[方法論]ではラオスでのインタビュー調査をもとに英語で執筆した卒業生の論文を読む。
第6回	[視点]文献講読⑤ [方法論]インタビュー②	[視点]では担当教員が執筆した途上国の軍への政府開発援助に関する論文をもとに議論。[方法論]ではカンボジアの孤児院をテーマに日本でインタビュー調査をした卒業生の論文を読む。
第7回	[視点]文献講読⑥ [方法論]参与観察	[視点]では担当教員が執筆した「マスメディアと開発・環境」に関する論文をもとに議論。[方法論]では古着支援をテーマにNGOを参与観察して執筆した卒業生の論文を読む。
第8回	[視点]文献講読⑦ [方法論]リサーチペーパー	[視点]では担当教員が執筆した「はかることと開発」に関する論文をもとに議論。[方法論]ではロシアの対外援助をテーマにしたリサーチペーパーを読む。
第9回	４年生個人研究発表	４年生全員の個人研究の進捗を発表し、ゼミ生間で議論する。
第10回	２・３年生個人研究発表①	2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ１）。
第11回	派遣留学の学び／２・３年生個人研究発表②	SAや派遣留学の経験を共有し留学について考える／2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ２）。
第12回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛①	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ１）。
第13回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛②	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ２）。
第14回	懸賞論文初稿の叩き愛と春学期の学び	10月締切の法政大学懸賞論文初稿にコメントし合う。春学期の学びをKJ法を使って深める。
第15回	個人研究論文の発表とグループ討議（Ａグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Ａグループ）。
第16回	個人研究論文の発表とグループ討議（Ｂグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Ｂグループ）。
第17回	懸賞論文から学ぶ	法政大学懸賞論文に投稿することの意義、学び、難しさを共有する。
第18回	ゼミ生によるゼミ（テーマA、B）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第19回	ゼミ生によるゼミ（テーマC、D）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第20回	ゼミ生によるゼミ（テーマE）／6千字論文の書き方	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際文化情報学会に向けて6千字の論文をどう書くかを考える。
第21回	ゼミ生によるゼミ（テーマF）／実務家セッション（国際組織）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際組織の実務経験者を招いてセッションを行う。
第22回	ゼミ生によるゼミ（テーマG）／実務家セッション（公益団体）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／公益団体Oの実務経験者を招いてセッションを行う。
第23回	国際文化情報学会投稿論文叩き愛	国際文化情報学会に投稿する論文の草稿を読み、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。

第24回	国際文化情報学会口頭発表叩き愛	国際文化情報学会に向けた口頭発表の練習を行い、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。
第25回	ゼミ生によるゼミ（テーマH・I）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第26回	ゼミ生によるゼミ（テーマJ・K）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第27回	秋学期の振り返り、4年生座談会	4年生の個人研究からの学びを共有する。また、春学期に学んだKJ法を使って秋学期のゼミを振り返る。
第28回	3年生の個人研究中間発表	3年生の1年間の個人研究の成果を発表し、4年生からフィードバックをもらう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
■ほぼ毎週事前課題の文献があるので必ず精読してくること。
■発表担当になった場合は、事前に準備すること。
■毎回のゼミ後に「学び」を学習支援システムに提出すること。学びを書くことで考えて文章を書く訓練になる。
■法政大学懸賞論文、外国語でのスピーチコンテスト、学生論文コンテストなど大学内外のコンテストへの投稿・出展、あるいは、ゼミ生有志の国際協力活動を奨励・サポートするので、積極的に挑戦して欲しい。
■本授業の毎回の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
■4月の演習が始まるまでに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣。
■7月第1週までに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
川喜多二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中公新書。

【参考書】
■文章の書き方をトレーニングするために以下の文献を折に触れて読むことを薦める。
吉岡友治（2015）『シカゴ・スタイルに学ぶ論理的に考え、書く技術』草思社。
それ以外については毎回の授業で紹介する。
■担当教員が書いた本、本の章、論文などを調べて読んでおくと演習での学びが定着しやすい。担当教員の履歴・業績などについては以下を参照のこと。
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/profile.html

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への参加度）40%、授業後の「学び」の提出60%。
・ただし2年生と3年生は各学期に4回以上欠席した場合は単位を取得できない。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
■知識を吸収する授業は演習以外にもあるので、演習では学生たち自らが調べたことなどを議論する時間を設けて欲しいという要望が多く出されている。一方で、知識が不十分なため議論が浅くなるという意見もある。この両者を活かすようなシラバスにしているつもりである。
■この演習で卒業研究に取り組むことを知らなかったという声もあったので、原則として全員が個人研究に取り組むことを明記した。

【学生が準備すべき機器他】
■学習支援システムを頻繁に使用する。正式の連絡は演習のMLで伝える。
■発表ツールとしてCanvaを使うので、各自ノートパソコンを持参することを勧める。
■発表や議論の際は、WORD、EXCEL、Power Point、Canvaなどを使い、議論や考えを図式化するように心がけること。

【その他の重要事項】
■このゼミでは研究し論文を書くことを学びの「手段」として捉えているので、原則全員が研究や論文（2年生論文や卒業論文）に取り組む。ゼミの内容も研究や論文に取り組むことを前提で組まれている。結果的に書けなかったり、思うような内容でなかったりしても、取り組むプロセスで習得できることに意味と価値がある。ただし精神的に辛かったり個人的な事情があったりして断念することはやむを得ないので、その場合は遠慮なく申し出て欲しい。
■専攻科目の「実践社会調査法」は必ず履修する／していること。曜日・時限の関係でどうしても履修が難しい場合は事前に担当教員に相談して欲しい。
■担当教員は国際協力学博士の学位を持つ一方で、NHK報道記者、開発途上国での草の根協力、国際援助政策の策定にも長く携わってきた実務家教員であり、具体的事例と理論を融合した演習を行う。
■図書館、CiNiiやWeb of Scienceなどの大学のリソースを早めに使えるようになること。春学期の初めにそのための実習を行うが、1度習っただけでは使えるようにならないので、日常的にこうしたリソースを使うようにして欲しい。
■授業内容は変更がありうるので2026年3月の演習説明会や4月の演習開始時に説明する。
■2021年度から2年生を若干名受け入れているので、シラバスもそれに対応したものになっている。具体的には、水曜日5限以降に必修授業がある場合は、そちらを優先して構わない。秋学期にSAに参加しない学生や夏休みのSJに参加する留学生に対しては、演習の到達目標に準じた秋学期のカリキュラムを追加する。
■3年～4年次は継続して履修すること。ただし、途中で関心を失ったり、他にやりたいことを見出した場合は履修登録の継続を見送ることを推奨する。
■4年次から新たに履修する場合は、3年次までに人文社会科学的なものの見方や学術的な研究の方法を一定程度身につけ、かつ本演習に係る具体的なテーマを設定し文献研究を進めていること。ただし、4年生の募集をするかどうかは、演習説明会の資料を確認すること。
■国際文化協力、平和学、国際関係学概論、国際関係研究Ⅰ・Ⅱ、実践社会調査法、実践国際協力など、関連する授業を受講していることが望ましい。特に実践社会調査法は春学期のゼミ内容と関係しているので必ず履修すること。
■演習は他学部公開にしていないものの、国際文化学部以外の学生や大学院生がオブザーバー参加することを認めているので、関心のある学生は担当教員までメールで連絡して頂きたい。

【Outline (in English)】
[Course Outline] This seminar covers inter-national cooperation, inter-cultural cooperation and various social problems or "global issues" which demand such cooperation, including poverty, environmental destruction, inequality, conflicts, refugees, or lack of education. It focuses actors (governments, international organizations, NGOs, companies), social norms (voluntarism, dependency, good faith, mutual help) or representations through various media. The goals of this seminar are to enable students to understand the relevant issues in diverse perspectives, and to develop their ideas and skills to conduct his/her own research.
[Learning Objectives]
By the end of the course;
A. The second year students are expected to understand the methodology of social science and humanities, and to write a short essay on the topic relevant to SA or SJ based on it.
B. The third year students are expected to design the research project in accordance with the relevant literature review and the academic methodology.
C. The fourth year students are expected to complete the qualified academic research paper of more than 20,000 letters in Japanese or 8,000 words in English.
[Learning activities outside of classroom]
1. Students will be expected to have completed the required reading assignments before each class. Your study time will be more than two hours for a class.
2. Students will be expected to have completed the required writing assignments after each class. Your study time will be more than two hours for a class.
3. In addition, students will be expected to present your research at least once each semester. Your preparation time will be more than ten hours.
[Grading Criteria/Policies]
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Assignments: 60%, in class contribution: 40%.

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

松本　悟

サブタイトル：国際協力を捉える視点
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「国際協力」とは異なる文化的背景を抱えた人々のつながりの一形態であり、演習では国際協力それ自体だけでなく、国際協力が必要となる背景や実施した影響を含む。具体的には、貧困、環境、開発、格差、紛争、難民、教育などの「グローバルイシュー」、国際機構、ＮＧＯ、政府機関、企業などの「組織」、ボランティア、募金、善意、助け合いなど「国際協力を実践する個人や社会のあり方」、さらにそれらを表象するメディアなどの言説も学びの対象とする。それらを考察することを通して、「国際協力」に留まらない、物事を洞察する多様な分析視角＝視点を修得する。

【到達目標】
【2年次（春学期)】「国際協力」や「開発」に関する知識、人文社会科学の視点や研究方法を使ってSA/SJ等での調査計画を立てることができるようになる。
【3年春学期】「国際協力」や「開発」を広く分析する人文社会科学の視点や研究方法を習得し、各自が研究したいテーマや研究方法を見出せるようになる。
【3年秋学期】実際に調査・取材や研究に携わってその結果を発表したり、先輩の研究の進捗に積極的に触れたりすることを通して、研究に必要な方法を習得し、各自が研究したいテーマに関わる意義ある問いや仮説を立てられる、もしくはそれをサポートできるようになる。
【4年春学期】「国際協力」や「開発」に係る事象を分析する人文社会科学の視点を深めるとともに、自らの研究テーマに沿った調査を進めることで、実践知（フロネーシス）として知識を捉えることができるようになる。
【4年秋学期】先行研究や適切な方法に基づいた研究論文の執筆と研究発表を行うことができる、もしくは、それをサポートできるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【概要】春学期は「視点」と「方法論」を毎回学ぶ。「視点」では専門的な文献の読解を通して知識を蓄積しながら、読む力、理解する力、考える力、発表する力を鍛える。「方法論」（サブゼミ）では、考えたり調べたりするのに必要な研究方法を実習する。秋学期は、10月の法政大学懸賞論文や12月の国際文化情報学会など発表の場を積極的に活かして、春学期のインプットをアウトプットへと繋げていく。
【方法】
１．読む力、考える力、発表する力、議論する力の鍛錬：開発協力に関する専門書やゼミの卒業生が書いた学位論文を題材にした議論・発表、各自の研究テーマに関する文献や事例をもとにした発表・議論を行う。
２．研究方法の習得：卒業生の学位論文を例に研究方法を習得する。
３．「叩き愛」：お互いの研究計画、進捗報告、草稿などを事前に読んでゼミの時間にコメントし合う。「愛を持って叩く」という姿勢が重要。
４．外部講師の招へい：演習の学びを高め、実践との繋がりを考えるため外部講師を招くこともある。
５．ゼミ合宿：9月上旬に2泊3日程度で実施する。
【課題へのフィードバック】毎回の発表に対してはその場でコメントし、研究進捗報告などの課題に対しては学習支援システムを通じてコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	演習の説明、他己紹介、論文とは何か、をテーマにこのゼミを体感するような議論。
第2回	[視点]文献講読① [方法論]研究とは？	[視点]では担当教員が執筆した開発協力の20年に関する論文をもとに議論。[方法論]では文献の探し方と研究倫理についての講義。
第3回	[視点]文献講読② [方法論]ドキュメント分析①	[視点]では担当教員が執筆した市民社会に関する論文をもとに議論。[方法論]では市議会会議録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第4回	[視点]文献講読③ [方法論]ドキュメント分析②	[視点]では担当教員が執筆した問題案件のその後を追った論文をもとに議論。[方法論]では国会議事録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第5回	[視点]文献講読④ [方法論]インタビュー①	[視点]では担当教員が執筆したミャンマー民主化後の開発協力に関する論文をもとに議論。[方法論]ではラオスでのインタビュー調査をもとに英語で執筆した卒業生の論文を読む。
第6回	[視点]文献講読⑤ [方法論]インタビュー②	[視点]では担当教員が執筆した途上国の軍への政府開発援助に関する論文をもとに議論。[方法論]ではカンボジアの孤児院をテーマに日本でインタビュー調査をした卒業生の論文を読む。
第7回	[視点]文献講読⑥ [方法論]参与観察	[視点]では担当教員が執筆した「マスメディアと開発・環境」に関する論文をもとに議論。[方法論]では古着支援をテーマにNGOを参与観察して執筆した卒業生の論文を読む。
第8回	[視点]文献講読⑦ [方法論]リサーチペーパー	[視点]では担当教員が執筆した「はかることと開発」に関する論文をもとに議論。[方法論]ではロシアの対外援助をテーマにしたリサーチペーパーを読む。
第9回	４年生個人研究発表	４年生全員の個人研究の進捗を発表し、ゼミ生間で議論する。
第10回	２・３年生個人研究発表①	2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ１）。
第11回	派遣留学の学び／２・３年生個人研究発表②	SAや派遣留学の経験を共有し留学について考える／2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ２）。
第12回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛①	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ１）。
第13回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛②	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ２）。
第14回	懸賞論文初稿の叩き愛と春学期の学び	10月締切の法政大学懸賞論文初稿にコメントし合う。春学期の学びをKJ法を使って深める。
第15回	個人研究論文の発表とグループ討議（Ａグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Ａグループ）。
第16回	個人研究論文の発表とグループ討議（Ｂグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Ｂグループ）。
第17回	懸賞論文から学ぶ	法政大学懸賞論文に投稿することの意義、学び、難しさを共有する。
第18回	ゼミ生によるゼミ（テーマA、B）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第19回	ゼミ生によるゼミ（テーマC、D）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第20回	ゼミ生によるゼミ（テーマE）／6千字論文の書き方	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際文化情報学会に向けて6千字の論文をどう書くかを考える。
第21回	ゼミ生によるゼミ（テーマF）／実務家セッション（国際組織）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際組織の実務経験者を招いてセッションを行う。
第22回	ゼミ生によるゼミ（テーマG）／実務家セッション（公益団体）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／公益団体Oの実務経験者を招いてセッションを行う。
第23回	国際文化情報学会投稿論文叩き愛	国際文化情報学会に投稿する論文の草稿を読み、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。

第24回	国際文化情報学会口頭発表叩き愛	国際文化情報学会に向けた口頭発表の練習を行い、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。
第25回	ゼミ生によるゼミ（テーマH・I）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第26回	ゼミ生によるゼミ（テーマJ・K）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第27回	秋学期の振り返り、4年生座談会	4年生の個人研究からの学びを共有する。また、春学期に学んだKJ法を使って秋学期のゼミを振り返る。
第28回	3年生の個人研究中間発表	3年生の1年間の個人研究の成果を発表し、4年生からフィードバックをもらう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
■ほぼ毎週事前課題の文献があるので必ず精読してくること。
■発表担当になった場合は、事前に準備すること。
■毎回のゼミ後に「学び」を学習支援システムに提出すること。学びを書くことで考えて文章を書く訓練になる。
■法政大学懸賞論文、外国語でのスピーチコンテスト、学生論文コンテストなど大学内外のコンテストへの投稿・出展、あるいは、ゼミ生有志の国際協力活動を奨励・サポートするので、積極的に挑戦して欲しい。
■本授業の毎回の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
■4月の演習が始まるまでに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣。
■7月第1週までに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
川喜多二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中公新書。

【参考書】
■文章の書き方をトレーニングするために以下の文献を折に触れて読むことを薦める。
吉岡友治（2015）『シカゴ・スタイルに学ぶ論理的に考え、書く技術』草思社。
それ以外については毎回の授業で紹介する。
■担当教員が書いた本、本の章、論文などを調べて読んでおくと演習での学びが定着しやすい。担当教員の履歴・業績などについては以下を参照のこと。
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/profile.html

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への参加度）40%、授業後の「学び」の提出60%。
・ただし2年生と3年生は各学期に4回以上欠席した場合は単位を取得できない。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
■知識を吸収する授業は演習以外にもあるので、演習では学生たち自らが調べたことなどを議論する時間を設けて欲しいという要望が多く出されている。一方で、知識が不十分なため議論が浅くなるという意見もある。この両者を活かすようなシラバスにしているつもりである。
■この演習で卒業研究に取り組むことを知らなかったという声もあったので、原則として全員が個人研究に取り組むことを明記した。

【学生が準備すべき機器他】
■学習支援システムを頻繁に使用する。正式の連絡は演習のMLで伝える。
■発表ツールとしてCanvaを使うので、各自ノートパソコンを持参することを勧める。
■発表や議論の際は、WORD、EXCEL、Power Point、Canvaなどを使い、議論や考えを図式化するように心がけること。

【その他の重要事項】
■このゼミでは研究し論文を書くことを学びの「手段」として捉えているので、原則全員が研究や論文（2年生論文や卒業論文）に取り組む。ゼミの内容も研究や論文に取り組むことを前提で組まれている。結果的に書けなかったり、思うような内容でなかったりしても、取り組むプロセスで習得できることに意味と価値がある。ただし精神的に辛かったり個人的な事情があったりして断念することはやむを得ないので、その場合は遠慮なく申し出て欲しい。
■専攻科目の「実践社会調査法」は必ず履修する／していること。曜日・時限の関係でどうしても履修が難しい場合は事前に担当教員に相談して欲しい。
■担当教員は国際協力学博士の学位を持つ一方で、NHK報道記者、開発途上国での草の根協力、国際援助政策の策定にも長く携わってきた実務家教員であり、具体的事例と理論を融合した演習を行う。
■図書館、CiNiiやWeb of Scienceなどの大学のリソースを早めに使えるようになること。春学期の初めにそのための実習を行うが、1度習っただけでは使えるようにならないので、日常的にこうしたリソースを使うようにして欲しい。
■授業内容は変更がありうるので2026年3月の演習説明会や4月の演習開始時に説明する。
■2021年度から2年生を若干名受け入れているので、シラバスもそれに対応したものになっている。具体的には、水曜日5限以降に必修授業がある場合は、そちらを優先して構わない。秋学期にSAに参加しない学生や夏休みのSJに参加する留学生に対しては、演習の到達目標に準じた秋学期のカリキュラムを追加する。
■3年～4年次は継続して履修すること。ただし、途中で関心を失ったり、他にやりたいことを見出した場合は履修登録の継続を見送ることを推奨する。
■4年次から新たに履修する場合は、3年次までに人文社会科学的なものの見方や学術的な研究の方法を一定程度身につけ、かつ本演習に係る具体的なテーマを設定し文献研究を進めていること。ただし、4年生の募集をするかどうかは、演習説明会の資料を確認すること。
■国際文化協力、平和学、国際関係学概論、国際関係研究Ⅰ・Ⅱ、実践社会調査法、実践国際協力など、関連する授業を受講していることが望ましい。特に実践社会調査法は春学期のゼミ内容と関係しているので必ず履修すること。
■演習は他学部公開にしていないものの、国際文化学部以外の学生や大学院生がオブザーバー参加することを認めているので、関心のある学生は担当教員までメールで連絡して頂きたい。

【Outline (in English)】
[Course Outline] This seminar covers inter-national cooperation, inter-cultural cooperation and various social problems or "global issues" which demand such cooperation, including poverty, environmental destruction, inequality, conflicts, refugees, or lack of education. It focuses actors (governments, international organizations, NGOs, companies), social norms (voluntarism, dependency, good faith, mutual help) or representations through various media. The goals of this seminar are to enable students to understand the relevant issues in diverse perspectives, and to develop their ideas and skills to conduct his/her own research.
[Learning Objectives]
By the end of the course;
A. The second year students are expected to understand the methodology of social science and humanities, and to write a short essay on the topic relevant to SA or SJ based on it.
B. The third year students are expected to design the research project in accordance with the relevant literature review and the academic methodology.
C. The fourth year students are expected to complete the qualified academic research paper of more than 20,000 letters in Japanese or 8,000 words in English.
[Learning activities outside of classroom]
1. Students will be expected to have completed the required reading assignments before each class. Your study time will be more than two hours for a class.
2. Students will be expected to have completed the required writing assignments after each class. Your study time will be more than two hours for a class.
3. In addition, students will be expected to present your research at least once each semester. Your preparation time will be more than ten hours.
[Grading Criteria/Policies]
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Assignments: 60%, in class contribution: 40%.

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

松本　悟

サブタイトル：国際協力を捉える視点
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「国際協力」とは異なる文化的背景を抱えた人々のつながりの一形態であり、演習では国際協力それ自体だけでなく、国際協力が必要となる背景や実施した影響を含む。具体的には、貧困、環境、開発、格差、紛争、難民、教育などの「グローバルイシュー」、国際機構、ＮＧＯ、政府機関、企業などの「組織」、ボランティア、募金、善意、助け合いなど「国際協力を実践する個人や社会のあり方」、さらにそれらを表象するメディアなどの言説も学びの対象とする。それらを考察することを通して、「国際協力」に留まらない、物事を洞察する多様な分析視角＝視点を修得する。

【到達目標】
【2年次（春学期)】「国際協力」や「開発」に関する知識、人文社会科学の視点や研究方法を使ってSA/SJ等での調査計画を立てることができるようになる。
【3年春学期】「国際協力」や「開発」を広く分析する人文社会科学の視点や研究方法を習得し、各自が研究したいテーマや研究方法を見出せるようになる。
【3年秋学期】実際に調査・取材や研究に携わってその結果を発表したり、先輩の研究の進捗に積極的に触れたりすることを通して、研究に必要な方法を習得し、各自が研究したいテーマに関わる意義ある問いや仮説を立てられる、もしくはそれをサポートできるようになる。
【4年春学期】「国際協力」や「開発」に係る事象を分析する人文社会科学の視点を深めるとともに、自らの研究テーマに沿った調査を進めることで、実践知（フロネーシス）として知識を捉えることができるようになる。
【4年秋学期】先行研究や適切な方法に基づいた研究論文の執筆と研究発表を行うことができる、もしくは、それをサポートできるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【概要】春学期は「視点」と「方法論」を毎回学ぶ。「視点」では専門的な文献の読解を通して知識を蓄積しながら、読む力、理解する力、考える力、発表する力を鍛える。「方法論」（サブゼミ）では、考えたり調べたりするのに必要な研究方法を実習する。秋学期は、10月の法政大学懸賞論文や12月の国際文化情報学会など発表の場を積極的に活かして、春学期のインプットをアウトプットへと繋げていく。
【方法】
１．読む力、考える力、発表する力、議論する力の鍛錬：開発協力に関する専門書やゼミの卒業生が書いた学位論文を題材にした議論・発表、各自の研究テーマに関する文献や事例をもとにした発表・議論を行う。
２．研究方法の習得：卒業生の学位論文を例に研究方法を習得する。
３．「叩き愛」：お互いの研究計画、進捗報告、草稿などを事前に読んでゼミの時間にコメントし合う。「愛を持って叩く」という姿勢が重要。
４．外部講師の招へい：演習の学びを高め、実践との繋がりを考えるため外部講師を招くこともある。
５．ゼミ合宿：9月上旬に2泊3日程度で実施する。
【課題へのフィードバック】毎回の発表に対してはその場でコメントし、研究進捗報告などの課題に対しては学習支援システムを通じてコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	演習の説明、他己紹介、論文とは何か、をテーマにこのゼミを体感するような議論。
第2回	[視点]文献講読① [方法論]研究とは？	[視点]では担当教員が執筆した開発協力の20年に関する論文をもとに議論。[方法論]では文献の探し方と研究倫理についての講義。
第3回	[視点]文献講読② [方法論]ドキュメント分析①	[視点]では担当教員が執筆した市民社会に関する論文をもとに議論。[方法論]では市議会会議録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第4回	[視点]文献講読③ [方法論]ドキュメント分析②	[視点]では担当教員が執筆した問題案件のその後を追った論文をもとに議論。[方法論]では国会議事録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第5回	[視点]文献講読④ [方法論]インタビュー①	[視点]では担当教員が執筆したミャンマー民主化後の開発協力に関する論文をもとに議論。[方法論]ではラオスでのインタビュー調査をもとに英語で執筆した卒業生の論文を読む。
第6回	[視点]文献講読⑤ [方法論]インタビュー②	[視点]では担当教員が執筆した途上国の軍への政府開発援助に関する論文をもとに議論。[方法論]ではカンボジアの孤児院をテーマに日本でインタビュー調査をした卒業生の論文を読む。
第7回	[視点]文献講読⑥ [方法論]参与観察	[視点]では担当教員が執筆した「マスメディアと開発・環境」に関する論文をもとに議論。[方法論]では古着支援をテーマにNGOを参与観察して執筆した卒業生の論文を読む。
第8回	[視点]文献講読⑦ [方法論]リサーチペーパー	[視点]では担当教員が執筆した「はかることと開発」に関する論文をもとに議論。[方法論]ではロシアの対外援助をテーマにしたリサーチペーパーを読む。
第9回	４年生個人研究発表	４年生全員の個人研究の進捗を発表し、ゼミ生間で議論する。
第10回	２・３年生個人研究発表①	2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ１）。
第11回	派遣留学の学び／２・３年生個人研究発表②	SAや派遣留学の経験を共有し留学について考える／2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ２）。
第12回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛①	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ１）。
第13回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛②	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ２）。
第14回	懸賞論文初稿の叩き愛と春学期の学び	10月締切の法政大学懸賞論文初稿にコメントし合う。春学期の学びをKJ法を使って深める。
第15回	個人研究論文の発表とグループ討議（Aグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Aグループ）。
第16回	個人研究論文の発表とグループ討議（Bグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Bグループ）。
第17回	懸賞論文から学ぶ	法政大学懸賞論文に投稿することの意義、学び、難しさを共有する。
第18回	ゼミ生によるゼミ（テーマA、B）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第19回	ゼミ生によるゼミ（テーマC、D）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第20回	ゼミ生によるゼミ（テーマE）／6千字論文の書き方	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際文化情報学会に向けて6千字の論文をどう書くかを考える。
第21回	ゼミ生によるゼミ（テーマF）／実務家セッション（国際組織）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際組織の実務経験者を招いてセッションを行う。
第22回	ゼミ生によるゼミ（テーマG）／実務家セッション（公益団体）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／公益団体Oの実務経験者を招いてセッションを行う。
第23回	国際文化情報学会投稿論文叩き愛	国際文化情報学会に投稿する論文の草稿を読み、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。

第24回	国際文化情報学会口頭発表叩き愛	国際文化情報学会に向けた口頭発表の練習を行い、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。
第25回	ゼミ生によるゼミ（テーマH・I）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第26回	ゼミ生によるゼミ（テーマJ・K）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第27回	秋学期の振り返り、4年生座談会	4年生の個人研究からの学びを共有する。また、春学期に学んだKJ法を使って秋学期のゼミを振り返る。
第28回	3年生の個人研究中間発表	3年生の1年間の個人研究の成果を発表し、4年生からフィードバックをもらう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
■ほぼ毎週事前課題の文献があるので必ず精読してくること。
■発表担当になった場合は、事前に準備すること。
■毎回のゼミ後に「学び」を学習支援システムに提出すること。学びを書くことで考えて文章を書く訓練になる。
■法政大学懸賞論文、外国語でのスピーチコンテスト、学生論文コンテストなど大学内外のコンテストへの投稿・出展、あるいは、ゼミ生有志の国際協力活動を奨励・サポートするので、積極的に挑戦して欲しい。
■本授業の毎回の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
■4月の演習が始まるまでに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣。
■7月第1週までに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
川喜多二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中公新書。

【参考書】
■文章の書き方をトレーニングするために以下の文献を折に触れて読むことを薦める。
吉岡友治（2015）『シカゴ・スタイルに学ぶ論理的に考え、書く技術』草思社。
それ以外については毎回の授業で紹介する。
■担当教員が書いた本、本の章、論文などを調べて読んでおくと演習での学びが定着しやすい。担当教員の履歴・業績などについては以下を参照のこと。
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/profile.html

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への参加度）40%、授業後の「学び」の提出60%。
・ただし2年生と3年生は各学期に4回以上欠席した場合は単位を取得できない。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
■知識を吸収する授業は演習以外にもあるので、演習では学生たち自らが調べたことなどを議論する時間を設けて欲しいという要望が多く出されている。一方で、知識が不十分なため議論が浅くなるという意見もある。この両者を活かすようなシラバスにしているつもりである。
■この演習で卒業研究に取り組むことを知らなかったという声もあったので、原則として全員が個人研究に取り組むことを明記した。

【学生が準備すべき機器他】
■学習支援システムを頻繁に使用する。正式の連絡は演習のMLで伝える。
■発表ツールとしてCanvaを使うので、各自ノートパソコンを持参することを勧める。
■発表や議論の際は、WORD、EXCEL、Power Point、Canvaなどを使い、議論や考えを図式化するように心がけること。

【その他の重要事項】
■このゼミでは研究し論文を書くことを学びの「手段」として捉えているので、原則全員が研究や論文（2年生論文や卒業論文）に取り組む。ゼミの内容も研究や論文に取り組むことを前提で組まれている。結果的に書けなかったり、思うような内容でなかったりしても、取り組むプロセスで習得できることに意味と価値がある。ただし精神的に辛かったり個人的な事情があったりして断念することはやむを得ないので、その場合は遠慮なく申し出て欲しい。
■専攻科目の「実践社会調査法」は必ず履修する／していること。曜日・時限の関係でどうしても履修が難しい場合は事前に担当教員に相談して欲しい。
■担当教員は国際協力学博士の学位を持つ一方で、NHK報道記者、開発途上国での草の根協力、国際援助政策の策定にも長く携わってきた実務家教員であり、具体的事例と理論を融合した演習を行う。
■図書館、CiNiiやWeb of Scienceなどの大学のリソースを早めに使えるようになること。春学期の初めにそのための実習を行うが、1度習っただけでは使えるようにならないので、日常的にこうしたリソースを使うようにして欲しい。
■授業内容は変更がありうるので2026年3月の演習説明会や4月の演習開始時に説明する。
■2021年度から2年生を若干名受け入れているので、シラバスもそれに対応したものになっている。具体的には、水曜日5限以降に必修授業がある場合は、そちらを優先して構わない。秋学期にSAに参加しない学生や夏休みのSJに参加する留学生に対しては、演習の到達目標に準じた秋学期のカリキュラムを追加する。
■3年～4年次は継続して履修すること。ただし、途中で関心を失ったり、他にやりたいことを見出した場合は履修登録の継続を見送ることを推奨する。
■4年次から新たに履修する場合は、3年次までに人文社会科学的なものの見方や学術的な研究の方法を一定程度身につけ、かつ本演習に係る具体的なテーマを設定し文献研究を進めていること。ただし、4年生の募集をするかどうかは、演習説明会の資料を確認すること。
■国際文化協力、平和学、国際関係学概論、国際関係研究Ⅰ・Ⅱ、実践社会調査法、実践国際協力など、関連する授業を受講していることが望ましい。特に実践社会調査法は春学期のゼミ内容と関係しているので必ず履修すること。
■演習は他学部公開にしていないものの、国際文化学部以外の学生や大学院生がオブザーバー参加することを認めているので、関心のある学生は担当教員までメールで連絡して頂きたい。

【Outline (in English)】
[Course Outline] This seminar covers inter-national cooperation, inter-cultural cooperation and various social problems or "global issues" which demand such cooperation, including poverty, environmental destruction, inequality, conflicts, refugees, or lack of education. It focuses actors (governments, international organizations, NGOs, companies), social norms (voluntarism, dependency, good faith, mutual help) or representations through various media. The goals of this seminar are to enable students to understand the relevant issues in diverse perspectives, and to develop their ideas and skills to conduct his/her own research.
[Learning Objectives]
By the end of the course;
A. The second year students are expected to understand the methodology of social science and humanities, and to write a short essay on the topic relevant to SA or SJ based on it.
B. The third year students are expected to design the research project in accordance with the relevant literature review and the academic methodology.
C. The fourth year students are expected to complete the qualified academic research paper of more than 20,000 letters in Japanese or 8,000 words in English.
[Learning activities outside of classroom]
1. Students will be expected to have completed the required reading assignments before each class. Your study time will be more than two hours for a class.
2. Students will be expected to have completed the required writing assignments after each class. Your study time will be more than two hours for a class.
3. In addition, students will be expected to present your research at least once each semester. Your preparation time will be more than ten hours.
[Grading Criteria/Policies]
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Assignments: 60%, in class contribution: 40%.

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

松本　悟

サブタイトル：国際協力を捉える視点
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「国際協力」とは異なる文化的背景を抱えた人々のつながりの一形態であり、演習では国際協力それ自体だけでなく、国際協力が必要となる背景や実施した影響を含む。具体的には、貧困、環境、開発、格差、紛争、難民、教育などの「グローバルイシュー」、国際機構、ＮＧＯ、政府機関、企業などの「組織」、ボランティア、募金、善意、助け合いなど「国際協力を実践する個人や社会のあり方」、さらにそれらを表象するメディアなどの言説も学びの対象とする。それらを考察することを通して、「国際協力」に留まらない、物事を洞察する多様な分析視角＝視点を修得する。

【到達目標】
【2年次（春学期)】「国際協力」や「開発」に関する知識、人文社会科学の視点や研究方法を使ってSA/SJ等での調査計画を立てることができるようになる。
【3年春学期】「国際協力」や「開発」を広く分析する人文社会科学の視点や研究方法を習得し、各自が研究したいテーマや研究方法を見出せるようになる。
【3年秋学期】実際に調査・取材や研究に携わってその結果を発表したり、先輩の研究の進捗に積極的に触れたりすることを通して、研究に必要な方法を習得し、各自が研究したいテーマに関わる意義ある問いや仮説を立てられる、もしくはそれをサポートできるようになる。
【4年春学期】「国際協力」や「開発」に係る事象を分析する人文社会科学の視点を深めるとともに、自らの研究テーマに沿った調査を進めることで、実践知（フロネーシス）として知識を捉えることができるようになる。
【4年秋学期】先行研究や適切な方法に基づいた研究論文の執筆と研究発表を行うことができる、もしくは、それをサポートできるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【概要】春学期は「視点」と「方法論」を毎回学ぶ。「視点」では専門的な文献の読解を通して知識を蓄積しながら、読む力、理解する力、考える力、発表する力を鍛える。「方法論」（サブゼミ）では、考えたり調べたりするのに必要な研究方法を実習する。秋学期は、10月の法政大学懸賞論文や12月の国際文化情報学会など発表の場を積極的に活かして、春学期のインプットをアウトプットへと繋げていく。
【方法】
１．読む力、考える力、発表する力、議論する力の鍛錬：開発協力に関する専門書やゼミの卒業生が書いた学位論文を題材にした議論・発表、各自の研究テーマに関する文献や事例をもとにした発表・議論を行う。
２．研究方法の習得：卒業生の学位論文を例に研究方法を習得する。
３．「叩き愛」：お互いの研究計画、進捗報告、草稿などを事前に読んでゼミの時間にコメントし合う。「愛を持って叩く」という姿勢が重要。
４．外部講師の招へい：演習の学びを高め、実践との繋がりを考えるため外部講師を招くこともある。
５．ゼミ合宿：9月上旬に2泊3日程度で実施する。
【課題へのフィードバック】毎回の発表に対してはその場でコメントし、研究進捗報告などの課題に対しては学習支援システムを通じてコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	演習の説明、他己紹介、論文とは何か、をテーマにこのゼミを体感するような議論。
第2回	[視点]文献講読① [方法論]研究とは？	[視点]では担当教員が執筆した開発協力の20年に関する論文をもとに議論。[方法論]では文献の探し方と研究倫理についての講義。
第3回	[視点]文献講読② [方法論]ドキュメント分析①	[視点]では担当教員が執筆した市民社会に関する論文をもとに議論。[方法論]では市議会会議録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第4回	[視点]文献講読③ [方法論]ドキュメント分析②	[視点]では担当教員が執筆した問題案件のその後を追った論文をもとに議論。[方法論]では国会議事録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第5回	[視点]文献講読④ [方法論]インタビュー①	[視点]では担当教員が執筆したミャンマー民主化後の開発協力に関する論文をもとに議論。[方法論]ではラオスでのインタビュー調査をもとに英語で執筆した卒業生の論文を読む。
第6回	[視点]文献講読⑤ [方法論]インタビュー②	[視点]では担当教員が執筆した途上国の軍への政府開発援助に関する論文をもとに議論。[方法論]ではカンボジアの孤児院をテーマに日本でインタビュー調査をした卒業生の論文を読む。
第7回	[視点]文献講読⑥ [方法論]参与観察	[視点]では担当教員が執筆した「マスメディアと開発・環境」に関する論文をもとに議論。[方法論]では古着支援をテーマにNGOを参与観察して執筆した卒業生の論文を読む。
第8回	[視点]文献講読⑦ [方法論]リサーチペーパー	[視点]では担当教員が執筆した「はかることと開発」に関する論文をもとに議論。[方法論]ではロシアの対外援助をテーマにしたリサーチペーパーを読む。
第9回	４年生個人研究発表	４年生全員の個人研究の進捗を発表し、ゼミ生間で議論する。
第10回	２・３年生個人研究発表①	2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ１）。
第11回	派遣留学の学び／２・３年生個人研究発表②	SAや派遣留学の経験を共有し留学について考える／2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ２）。
第12回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛①	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ１）。
第13回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛②	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ２）。
第14回	懸賞論文初稿の叩き愛と春学期の学び	10月締切の法政大学懸賞論文初稿にコメントし合う。春学期の学びをKJ法を使って深める。
第15回	個人研究論文の発表とグループ討議（Ａグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Ａグループ）。
第16回	個人研究論文の発表とグループ討議（Ｂグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Ｂグループ）。
第17回	懸賞論文から学ぶ	法政大学懸賞論文に投稿することの意義、学び、難しさを共有する。
第18回	ゼミ生によるゼミ（テーマA、B）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第19回	ゼミ生によるゼミ（テーマC、D）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第20回	ゼミ生によるゼミ（テーマE）／6千字論文の書き方	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際文化情報学会に向けて6千字の論文をどう書くかを考える。
第21回	ゼミ生によるゼミ（テーマF）／実務家セッション（国際組織）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際組織の実務経験者を招いてセッションを行う。
第22回	ゼミ生によるゼミ（テーマG）／実務家セッション（公益団体）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／公益団体Oの実務経験者を招いてセッションを行う。
第23回	国際文化情報学会投稿論文叩き愛	国際文化情報学会に投稿する論文の草稿を読み、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。

第24回	国際文化情報学会口頭発表叩き愛	国際文化情報学会に向けた口頭発表の練習を行い、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。
第25回	ゼミ生によるゼミ（テーマH・I）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第26回	ゼミ生によるゼミ（テーマJ・K）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第27回	秋学期の振り返り、4年生座談会	4年生の個人研究からの学びを共有する。また、春学期に学んだKJ法を使って秋学期のゼミを振り返る。
第28回	3年生の個人研究中間発表	3年生の1年間の個人研究の成果を発表し、4年生からフィードバックをもらう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
■ほぼ毎週事前課題の文献があるので必ず精読してくること。
■発表担当になった場合は、事前に準備すること。
■毎回のゼミ後に「学び」を学習支援システムに提出すること。学びを書くことで考えて文章を書く訓練になる。
■法政大学懸賞論文、外国語でのスピーチコンテスト、学生論文コンテストなど大学内外のコンテストへの投稿・出展、あるいは、ゼミ生有志の国際協力活動を奨励・サポートするので、積極的に挑戦して欲しい。
■本授業の毎回の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
■4月の演習が始まるまでに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣。
■7月第1週までに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
川喜多二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中公新書。

【参考書】
■文章の書き方をトレーニングするために以下の文献を折に触れて読むことを薦める。
吉岡友治（2015）『シカゴ・スタイルに学ぶ論理的に考え、書く技術』草思社。
それ以外については毎回の授業で紹介する。
■担当教員が書いた本、本の章、論文などを調べて読んでおくと演習での学びが定着しやすい。担当教員の履歴・業績などについては以下を参照のこと。
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/profile.html

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への参加度）40%、授業後の「学び」の提出60%。
・ただし2年生と3年生は各学期に4回以上欠席した場合は単位を取得できない。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
■知識を吸収する授業は演習以外にもあるので、演習では学生たち自らが調べたことなどを議論する時間を設けて欲しいという要望が多く出されている。一方で、知識が不十分なため議論が浅くなるという意見もある。この両者を活かすようなシラバスにしているつもりである。
■この演習で卒業研究に取り組むことを知らなかったという声もあったので、原則として全員が個人研究に取り組むことを明記した。

【学生が準備すべき機器他】
■学習支援システムを頻繁に使用する。正式の連絡は演習のMLで伝える。
■発表ツールとしてCanvaを使うので、各自ノートパソコンを持参することを勧める。
■発表や議論の際は、WORD、EXCEL、Power Point、Canvaなどを使い、議論や考えを図式化するように心がけること。

【その他の重要事項】
■このゼミでは研究し論文を書くことを学びの「手段」として捉えているので、原則全員が研究や論文（2年生論文や卒業論文）に取り組む。ゼミの内容も研究や論文に取り組むことを前提で組まれている。結果的に書けなかったり、思うような内容でなかったりしても、取り組むプロセスで習得できることに意味と価値がある。ただし精神的に辛かったり個人的な事情があったりして断念することはやむを得ないので、その場合は遠慮なく申し出て欲しい。
■専攻科目の「実践社会調査法」は必ず履修する／していること。曜日・時限の関係でどうしても履修が難しい場合は事前に担当教員に相談して欲しい。
■担当教員は国際協力学博士の学位を持つ一方で、NHK報道記者、開発途上国での草の根協力、国際援助政策の策定にも長く携わってきた実務家教員であり、具体的事例と理論を融合した演習を行う。
■図書館、CiNiiやWeb of Scienceなどの大学のリソースを早めに使えるようになること。春学期の初めにそのための実習を行うが、1度習っただけでは使えるようにならないので、日常的にこうしたリソースを使うようにして欲しい。
■授業内容は変更がありうるので2026年3月の演習説明会や4月の演習開始時に説明する。
■2021年度から2年生を若干名受け入れているので、シラバスもそれに対応したものになっている。具体的には、水曜日5限以降に必修授業がある場合は、そちらを優先して構わない。秋学期にSAに参加しない学生や夏休みのSJに参加する留学生に対しては、演習の到達目標に準じた秋学期のカリキュラムを追加する。
■3年～4年次は継続して履修すること。ただし、途中で関心を失ったり、他にやりたいことを見出した場合は履修登録の継続を見送ることを推奨する。
■4年次から新たに履修する場合は、3年次までに人文社会科学的なものの見方や学術的な研究の方法を一定程度身につけ、かつ本演習に係る具体的なテーマを設定し文献研究を進めていること。ただし、4年生の募集をするかどうかは、演習説明会の資料を確認すること。
■国際文化協力、平和学、国際関係学概論、国際関係研究Ⅰ・Ⅱ、実践社会調査法、実践国際協力など、関連する授業を受講していることが望ましい。特に実践社会調査法は春学期のゼミ内容と関係しているので必ず履修すること。
■演習は他学部公開にしていないものの、国際文化学部以外の学生や大学院生がオブザーバー参加することを認めているので、関心のある学生は担当教員までメールで連絡して頂きたい。

【Outline (in English)】
[Course Outline] This seminar covers inter-national cooperation, inter-cultural cooperation and various social problems or "global issues" which demand such cooperation, including poverty, environmental destruction, inequality, conflicts, refugees, or lack of education. It focuses actors (governments, international organizations, NGOs, companies), social norms (voluntarism, dependency, good faith, mutual help) or representations through various media. The goals of this seminar are to enable students to understand the relevant issues in diverse perspectives, and to develop their ideas and skills to conduct his/her own research.
[Learning Objectives]
By the end of the course;
A. The second year students are expected to understand the methodology of social science and humanities, and to write a short essay on the topic relevant to SA or SJ based on it.
B. The third year students are expected to design the research project in accordance with the relevant literature review and the academic methodology.
C. The fourth year students are expected to complete the qualified academic research paper of more than 20,000 letters in Japanese or 8,000 words in English.
[Learning activities outside of classroom]
1. Students will be expected to have completed the required reading assignments before each class. Your study time will be more than two hours for a class.
2. Students will be expected to have completed the required writing assignments after each class. Your study time will be more than two hours for a class.
3. In addition, students will be expected to present your research at least once each semester. Your preparation time will be more than ten hours.
[Grading Criteria/Policies]
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Assignments: 60%, in class contribution: 40%.

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

松本　悟

サブタイトル：国際協力を捉える視点
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「国際協力」とは異なる文化的背景を抱えた人々のつながりの一形態であり、演習では国際協力それ自体だけでなく、国際協力が必要となる背景や実施した影響を含む。具体的には、貧困、環境、開発、格差、紛争、難民、教育などの「グローバルイシュー」、国際機構、ＮＧＯ、政府機関、企業などの「組織」、ボランティア、募金、善意、助け合いなど「国際協力を実践する個人や社会のあり方」、さらにそれらを表象するメディアなどの言説も学びの対象とする。それらを考察することを通して、「国際協力」に留まらない、物事を洞察する多様な分析視角＝視点を修得する。

【到達目標】
【2年次（春学期)】「国際協力」や「開発」に関する知識、人文社会科学の視点や研究方法を使ってSA/SJ等での調査計画を立てることができるようになる。
【3年春学期】「国際協力」や「開発」を広く分析する人文社会科学の視点や研究方法を習得し、各自が研究したいテーマや研究方法を見出せるようになる。
【3年秋学期】実際に調査・取材や研究に携わってその結果を発表したり、先輩の研究の進捗に積極的に触れたりすることを通して、研究に必要な方法を習得し、各自が研究したいテーマに関わる意義ある問いや仮説を立てられる、もしくはそれをサポートできるようになる。
【4年春学期】「国際協力」や「開発」に係る事象を分析する人文社会科学の視点を深めるとともに、自らの研究テーマに沿った調査を進めることで、実践知（フロネーシス）として知識を捉えることができるようになる。
【4年秋学期】先行研究や適切な方法に基づいた研究論文の執筆と研究発表を行うことができる、もしくは、それをサポートできるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【概要】春学期は「視点」と「方法論」を毎回学ぶ。「視点」では専門的な文献の読解を通して知識を蓄積しながら、読む力、理解する力、考える力、発表する力を鍛える。「方法論」（サブゼミ）では、考えたり調べたりするのに必要な研究方法を実習する。秋学期は、10月の法政大学懸賞論文や12月の国際文化情報学会など発表の場を積極的に活かして、春学期のインプットをアウトプットへと繋げていく。
【方法】
１．読む力、考える力、発表する力、議論する力の鍛錬：開発協力に関する専門書やゼミの卒業生が書いた学位論文を題材にした議論・発表、各自の研究テーマに関する文献や事例をもとにした発表・議論を行う。
２．研究方法の習得：卒業生の学位論文を例に研究方法を習得する。
３．「叩き愛」：お互いの研究計画、進捗報告、草稿などを事前に読んでゼミの時間にコメントし合う。「愛を持って叩く」という姿勢が重要。
４．外部講師の招へい：演習の学びを高め、実践との繋がりを考えるため外部講師を招くこともある。
５．ゼミ合宿：9月上旬に2泊3日程度で実施する。
【課題へのフィードバック】毎回の発表に対してはその場でコメントし、研究進捗報告などの課題に対しては学習支援システムを通じてコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	演習の説明、他己紹介、論文とは何か、をテーマにこのゼミを体感するような議論。
第2回	[視点]文献講読① [方法論]研究とは？	[視点]では担当教員が執筆した開発協力の20年に関する論文をもとに議論。[方法論]では文献の探し方と研究倫理についての講義。
第3回	[視点]文献講読② [方法論]ドキュメント分析①	[視点]では担当教員が執筆した市民社会に関する論文をもとに議論。[方法論]では市議会会議録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第4回	[視点]文献講読③ [方法論]ドキュメント分析②	[視点]では担当教員が執筆した問題案件のその後を追った論文をもとに議論。[方法論]では国会議事録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第5回	[視点]文献講読④ [方法論]インタビュー①	[視点]では担当教員が執筆したミャンマー民主化後の開発協力に関する論文をもとに議論。[方法論]ではラオスでのインタビュー調査をもとに英語で執筆した卒業生の論文を読む。
第6回	[視点]文献講読⑤ [方法論]インタビュー②	[視点]では担当教員が執筆した途上国の軍への政府開発援助に関する論文をもとに議論。[方法論]ではカンボジアの孤児院をテーマに日本でインタビュー調査をした卒業生の論文を読む。
第7回	[視点]文献講読⑥ [方法論]参与観察	[視点]では担当教員が執筆した「マスメディアと開発・環境」に関する論文をもとに議論。[方法論]では古着支援をテーマにNGOを参与観察して執筆した卒業生の論文を読む。
第8回	[視点]文献講読⑦ [方法論]リサーチペーパー	[視点]では担当教員が執筆した「はかることと開発」に関する論文をもとに議論。[方法論]ではロシアの対外援助をテーマにしたリサーチペーパーを読む。
第9回	４年生個人研究発表	４年生全員の個人研究の進捗を発表し、ゼミ生間で議論する。
第10回	２・３年生個人研究発表①	2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ１）。
第11回	派遣留学の学び／２・３年生個人研究発表②	SAや派遣留学の経験を共有し留学について考える／2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ２）。
第12回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛①	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ１）。
第13回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛②	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ２）。
第14回	懸賞論文初稿の叩き愛と春学期の学び	10月締切の法政大学懸賞論文初稿にコメントし合う。春学期の学びをKJ法を使って深める。
第15回	個人研究論文の発表とグループ討議（Aグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Aグループ）。
第16回	個人研究論文の発表とグループ討議（Bグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Bグループ）。
第17回	懸賞論文から学ぶ	法政大学懸賞論文に投稿することの意義、学び、難しさを共有する。
第18回	ゼミ生によるゼミ（テーマA、B）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第19回	ゼミ生によるゼミ（テーマC、D）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第20回	ゼミ生によるゼミ（テーマE）／6千字論文の書き方	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際文化情報学会に向けて6千字の論文をどう書くかを考える。
第21回	ゼミ生によるゼミ（テーマF）／実務家セッション（国際組織）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際組織の実務経験者を招いてセッションを行う。
第22回	ゼミ生によるゼミ（テーマG）／実務家セッション（公益団体）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／公益団体Oの実務経験者を招いてセッションを行う。
第23回	国際文化情報学会投稿論文叩き愛	国際文化情報学会に投稿する論文の草稿を読み、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。

第24回	国際文化情報学会口頭発表叩き愛	国際文化情報学会に向けた口頭発表の練習を行い、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。
第25回	ゼミ生によるゼミ（テーマH・I）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第26回	ゼミ生によるゼミ（テーマJ・K）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第27回	秋学期の振り返り、4年生座談会	4年生の個人研究からの学びを共有する。また、春学期に学んだKJ法を使って秋学期のゼミを振り返る。
第28回	3年生の個人研究中間発表	3年生の1年間の個人研究の成果を発表し、4年生からフィードバックをもらう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
■ほぼ毎週事前課題の文献があるので必ず精読してくること。
■発表担当になった場合は、事前に準備すること。
■毎回のゼミ後に「学び」を学習支援システムに提出すること。学びを書くことで考えて文章を書く訓練になる。
■法政大学懸賞論文、外国語でのスピーチコンテスト、学生論文コンテストなど大学内外のコンテストへの投稿・出展、あるいは、ゼミ生有志の国際協力活動を奨励・サポートするので、積極的に挑戦して欲しい。
■本授業の毎回の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
■4月の演習が始まるまでに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣。
■7月第1週までに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
川喜多二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中公新書。

【参考書】
■文章の書き方をトレーニングするために以下の文献を折に触れて読むことを薦める。
吉岡友治（2015）『シカゴ・スタイルに学ぶ論理的に考え、書く技術』草思社。
それ以外については毎回の授業で紹介する。
■担当教員が書いた本、本の章、論文などを調べて読んでおくと演習での学びが定着しやすい。担当教員の履歴・業績などについては以下を参照のこと。
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/profile.html

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への参加度）40%、授業後の「学び」の提出60%。
・ただし2年生と3年生は各学期に4回以上欠席した場合は単位を取得できない。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
■知識を吸収する授業は演習以外にもあるので、演習では学生たち自らが調べたことなどを議論する時間を設けて欲しいという要望が多く出されている。一方で、知識が不十分なため議論が浅くなるという意見もある。この両者を活かすようなシラバスにしているつもりである。
■この演習で卒業研究に取り組むことを知らなかったという声もあったので、原則として全員が個人研究に取り組むことを明記した。

【学生が準備すべき機器他】
■学習支援システムを頻繁に使用する。正式の連絡は演習のMLで伝える。
■発表ツールとしてCanvaを使うので、各自ノートパソコンを持参することを勧める。
■発表や議論の際は、WORD、EXCEL、Power Point、Canvaなどを使い、議論や考えを図式化するように心がけること。

【その他の重要事項】
■このゼミでは研究し論文を書くことを学びの「手段」として捉えているので、原則全員が研究や論文（2年生論文や卒業論文）に取り組む。ゼミの内容も研究や論文に取り組むことを前提で組まれている。結果的に書けなかったり、思うような内容でなかったりしても、取り組むプロセスで習得できることに意味と価値がある。ただし精神的に辛かったり個人的な事情があったりして断念することはやむを得ないので、その場合は遠慮なく申し出て欲しい。
■専攻科目の「実践社会調査法」は必ず履修する／していること。曜日・時限の関係でどうしても履修が難しい場合は事前に担当教員に相談して欲しい。
■担当教員は国際協力学博士の学位を持つ一方で、NHK報道記者、開発途上国での草の根協力、国際援助政策の策定にも長く携わってきた実務家教員であり、具体的事例と理論を融合した演習を行う。
■図書館、CiNiiやWeb of Scienceなどの大学のリソースを早めに使えるようになること。春学期の初めにそのための実習を行うが、1度習っただけでは使えるようにならないので、日常的にこうしたリソースを使うようにして欲しい。
■授業内容は変更がありうるので2026年3月の演習説明会や4月の演習開始時に説明する。
■2021年度から2年生を若干名受け入れているので、シラバスもそれに対応したものになっている。具体的には、水曜日5限以降に必修授業がある場合は、そちらを優先して構わない。秋学期にSAに参加しない学生や夏休みのSJに参加する留学生に対しては、演習の到達目標に準じた秋学期のカリキュラムを追加する。
■3年～4年次は継続して履修すること。ただし、途中で関心を失ったり、他にやりたいことを見出した場合は履修登録の継続を見送ることを推奨する。
■4年次から新たに履修する場合は、3年次までに人文社会科学的なものの見方や学術的な研究の方法を一定程度身につけ、かつ本演習に係る具体的なテーマを設定し文献研究を進めていること。ただし、4年生の募集をするかどうかは、演習説明会の資料を確認すること。
■国際文化協力、平和学、国際関係学概論、国際関係研究Ⅰ・Ⅱ、実践社会調査法、実践国際協力など、関連する授業を受講していることが望ましい。特に実践社会調査法は春学期のゼミ内容と関係しているので必ず履修すること。
■演習は他学部公開にしていないものの、国際文化学部以外の学生や大学院生がオブザーバー参加することを認めているので、関心のある学生は担当教員までメールで連絡して頂きたい。

【Outline (in English)】
[Course Outline] This seminar covers inter-national cooperation, inter-cultural cooperation and various social problems or "global issues" which demand such cooperation, including poverty, environmental destruction, inequality, conflicts, refugees, or lack of education. It focuses actors (governments, international organizations, NGOs, companies), social norms (voluntarism, dependency, good faith, mutual help) or representations through various media. The goals of this seminar are to enable students to understand the relevant issues in diverse perspectives, and to develop their ideas and skills to conduct his/her own research.
[Learning Objectives]
By the end of the course;
A. The second year students are expected to understand the methodology of social science and humanities, and to write a short essay on the topic relevant to SA or SJ based on it.
B. The third year students are expected to design the research project in accordance with the relevant literature review and the academic methodology.
C. The fourth year students are expected to complete the qualified academic research paper of more than 20,000 letters in Japanese or 8,000 words in English.
[Learning activities outside of classroom]
1. Students will be expected to have completed the required reading assignments before each class. Your study time will be more than two hours for a class.
2. Students will be expected to have completed the required writing assignments after each class. Your study time will be more than two hours for a class.
3. In addition, students will be expected to present your research at least once each semester. Your preparation time will be more than ten hours.
[Grading Criteria/Policies]
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Assignments: 60%, in class contribution: 40%.

SOS400GA（その他の社会科学 / Social science 400）

国際社会演習

松本　悟

サブタイトル：国際協力を捉える視点
配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期・秋学期/Spring・Fall
人数制限・選抜・抽選：選抜
備考（履修条件等）：単位数は、春学期 2 単位／秋学期 2 単位である。https://gakububbs.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/FIC2026SeminarList.pdf
その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「国際協力」とは異なる文化的背景を抱えた人々のつながりの一形態であり、演習では国際協力それ自体だけでなく、国際協力が必要となる背景や実施した影響を含む。具体的には、貧困、環境、開発、格差、紛争、難民、教育などの「グローバルイシュー」、国際機構、ＮＧＯ、政府機関、企業などの「組織」、ボランティア、募金、善意、助け合いなど「国際協力を実践する個人や社会のあり方」、さらにそれらを表象するメディアなどの言説も学びの対象とする。それらを考察することを通して、「国際協力」に留まらない、物事を洞察する多様な分析視角＝視点を修得する。

【到達目標】
【2年次（春学期)】「国際協力」や「開発」に関する知識、人文社会科学の視点や研究方法を使ってSA/SJ等での調査計画を立てることができるようになる。
【3年春学期】「国際協力」や「開発」を広く分析する人文社会科学の視点や研究方法を習得し、各自が研究したいテーマや研究方法を見出せるようになる。
【3年秋学期】実際に調査・取材や研究に携わってその結果を発表したり、先輩の研究の進捗に積極的に触れたりすることを通して、研究に必要な方法を習得し、各自が研究したいテーマに関わる意義ある問いや仮説を立てられる、もしくはそれをサポートできるようになる。
【4年春学期】「国際協力」や「開発」に係る事象を分析する人文社会科学の視点を深めるとともに、自らの研究テーマに沿った調査を進めることで、実践知（フロネーシス）として知識を捉えることができるようになる。
【4年秋学期】先行研究や適切な方法に基づいた研究論文の執筆と研究発表を行うことができる、もしくは、それをサポートできるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
【概要】春学期は「視点」と「方法論」を毎回学ぶ。「視点」では専門的な文献の読解を通して知識を蓄積しながら、読む力、理解する力、考える力、発表する力を鍛える。「方法論」（サブゼミ）では、考えたり調べたりするのに必要な研究方法を実習する。秋学期は、10月の法政大学懸賞論文や12月の国際文化情報学会など発表の場を積極的に活かして、春学期のインプットをアウトプットへと繋げていく。
【方法】
１．読む力、考える力、発表する力、議論する力の鍛錬：開発協力に関する専門書やゼミの卒業生が書いた学位論文を題材にした議論・発表、各自の研究テーマに関する文献や事例をもとにした発表・議論を行う。
２．研究方法の習得：卒業生の学位論文を例に研究方法を習得する。
３．「叩き愛」：お互いの研究計画、進捗報告、草稿などを事前に読んでゼミの時間にコメントし合う。「愛を持って叩く」という姿勢が重要。
４．外部講師の招へい：演習の学びを高め、実践との繋がりを考えるため外部講師を招くこともある。
５．ゼミ合宿：9月上旬に2泊3日程度で実施する。
【課題へのフィードバック】毎回の発表に対してはその場でコメントし、研究進捗報告などの課題に対しては学習支援システムを通じてコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	演習の説明、他己紹介、論文とは何か、をテーマにこのゼミを体感するような議論。
第2回	[視点]文献講読① [方法論]研究とは？	[視点]では担当教員が執筆した開発協力の20年に関する論文をもとに議論。[方法論]では文献の探し方と研究倫理についての講義。
第3回	[視点]文献講読② [方法論]ドキュメント分析①	[視点]では担当教員が執筆した市民社会に関する論文をもとに議論。[方法論]では市議会会議録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第4回	[視点]文献講読③ [方法論]ドキュメント分析②	[視点]では担当教員が執筆した問題案件のその後を追った論文をもとに議論。[方法論]では国会議事録をドキュメント分析した卒業生の論文を読む。
第5回	[視点]文献講読④ [方法論]インタビュー①	[視点]では担当教員が執筆したミャンマー民主化後の開発協力に関する論文をもとに議論。[方法論]ではラオスでのインタビュー調査をもとに英語で執筆した卒業生の論文を読む。
第6回	[視点]文献講読⑤ [方法論]インタビュー②	[視点]では担当教員が執筆した途上国の軍への政府開発援助に関する論文をもとに議論。[方法論]ではカンボジアの孤児院をテーマに日本でインタビュー調査をした卒業生の論文を読む。
第7回	[視点]文献講読⑥ [方法論]参与観察	[視点]では担当教員が執筆した「マスメディアと開発・環境」に関する論文をもとに議論。[方法論]では古着支援をテーマにNGOを参与観察して執筆した卒業生の論文を読む。
第8回	[視点]文献講読⑦ [方法論]リサーチペーパー	[視点]では担当教員が執筆した「はかることと開発」に関する論文をもとに議論。[方法論]ではロシアの対外援助をテーマにしたリサーチペーパーを読む。
第9回	４年生個人研究発表	４年生全員の個人研究の進捗を発表し、ゼミ生間で議論する。
第10回	２・３年生個人研究発表①	2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ１）。
第11回	派遣留学の学び／２・３年生個人研究発表②	SAや派遣留学の経験を共有し留学について考える／2年生の研究計画、3年生の研究アイディア発表と議論（グループ２）。
第12回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛①	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ１）。
第13回	ライフストーリーインタビュー研究と叩き愛②	2年生、3年生のライフストーリーインタビューをもとにした論文にコメントし合う（グループ２）。
第14回	懸賞論文初稿の叩き愛と春学期の学び	10月締切の法政大学懸賞論文初稿にコメントし合う。春学期の学びをKJ法を使って深める。
第15回	個人研究論文の発表とグループ討議（Aグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Aグループ）。
第16回	個人研究論文の発表とグループ討議（Bグループ）	法政大学懸賞論文に投稿する学生の個人研究論文の発表とそれに対するグループ討議（Bグループ）。
第17回	懸賞論文から学ぶ	法政大学懸賞論文に投稿することの意義、学び、難しさを共有する。
第18回	ゼミ生によるゼミ（テーマA、B）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第19回	ゼミ生によるゼミ（テーマC、D）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第20回	ゼミ生によるゼミ（テーマE）／6千字論文の書き方	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際文化情報学会に向けて6千字の論文をどう書くかを考える。
第21回	ゼミ生によるゼミ（テーマF）／実務家セッション（国際組織）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／国際組織の実務経験者を招いてセッションを行う。
第22回	ゼミ生によるゼミ（テーマG）／実務家セッション（公益団体）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する／公益団体Oの実務経験者を招いてセッションを行う。
第23回	国際文化情報学会投稿論文叩き愛	国際文化情報学会に投稿する論文の草稿を読み、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。

第24回	国際文化情報学会口頭発表叩き愛	国際文化情報学会に向けた口頭発表の練習を行い、コメントし合う。なお、学会での発表方法によってゼミの内容が変わる可能性がある。
第25回	ゼミ生によるゼミ（テーマH・I）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第26回	ゼミ生によるゼミ（テーマJ・K）	3年生が自らの研究テーマに関する課題を提示し、ゼミでの議論を担当する。テーマは3年生の研究テーマを踏まえて春学期の終わりに決定する。
第27回	秋学期の振り返り、4年生座談会	4年生の個人研究からの学びを共有する。また、春学期に学んだKJ法を使って秋学期のゼミを振り返る。
第28回	3年生の個人研究中間発表	3年生の1年間の個人研究の成果を発表し、4年生からフィードバックをもらう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
■ほぼ毎週事前課題の文献があるので必ず精読してくること。
■発表担当になった場合は、事前に準備すること。
■毎回のゼミ後に「学び」を学習支援システムに提出すること。学びを書くことで考えて文章を書く訓練になる。
■法政大学懸賞論文、外国語でのスピーチコンテスト、学生論文コンテストなど大学内外のコンテストへの投稿・出展、あるいは、ゼミ生有志の国際協力活動を奨励・サポートするので、積極的に挑戦して欲しい。
■本授業の毎回の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
■4月の演習が始まるまでに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣。
■7月第1週までに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
川喜多二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中公新書。

【参考書】
■文章の書き方をトレーニングするために以下の文献を折に触れて読むことを薦める。
吉岡友治（2015）『シカゴ・スタイルに学ぶ論理的に考え、書く技術』草思社。
それ以外については毎回の授業で紹介する。
■担当教員が書いた本、本の章、論文などを調べて読んでおくと演習での学びが定着しやすい。担当教員の履歴・業績などについては以下を参照のこと。
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/profile.html

【成績評価の方法と基準】
・平常点（授業への参加度）40%、授業後の「学び」の提出60%。
・ただし2年生と3年生は各学期に4回以上欠席した場合は単位を取得できない。
・この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
■知識を吸収する授業は演習以外にもあるので、演習では学生たち自らが調べたことなどを議論する時間を設けて欲しいという要望が多く出されている。一方で、知識が不十分なため議論が浅くなるという意見もある。この両者を活かすようなシラバスにしているつもりである。
■この演習で卒業研究に取り組むことを知らなかったという声もあったので、原則として全員が個人研究に取り組むことを明記した。

【学生が準備すべき機器他】
■学習支援システムを頻繁に使用する。正式の連絡は演習のMLで伝える。
■発表ツールとしてCanvaを使うので、各自ノートパソコンを持参することを勧める。
■発表や議論の際は、WORD、EXCEL、Power Point、Canvaなどを使い、議論や考えを図式化するように心がけること。

【その他の重要事項】
■このゼミでは研究し論文を書くことを学びの「手段」として捉えているので、原則全員が研究や論文（2年生論文や卒業論文）に取り組む。ゼミの内容も研究や論文に取り組むことを前提で組まれている。結果的に書けなかったり、思うような内容でなかったりしても、取り組むプロセスで習得できることに意味と価値がある。ただし精神的に辛かったり個人的な事情があったりして断念することはやむを得ないので、その場合は遠慮なく申し出て欲しい。
■専攻科目の「実践社会調査法」は必ず履修する／していること。曜日・時限の関係でどうしても履修が難しい場合は事前に担当教員に相談して欲しい。
■担当教員は国際協力学博士の学位を持つ一方で、NHK報道記者、開発途上国での草の根協力、国際援助政策の策定にも長く携わってきた実務家教員であり、具体的事例と理論を融合した演習を行う。
■図書館、CiNiiやWeb of Scienceなどの大学のリソースを早めに使えるようになること。春学期の初めにそのための実習を行うが、1度習っただけでは使えるようにならないので、日常的にこうしたリソースを使うようにして欲しい。
■授業内容は変更がありうるので2026年3月の演習説明会や4月の演習開始時に説明する。
■2021年度から2年生を若干名受け入れているので、シラバスもそれに対応したものになっている。具体的には、水曜日5限以降に必修授業がある場合は、そちらを優先して構わない。秋学期にSAに参加しない学生や夏休みのSJに参加する留学生に対しては、演習の到達目標に準じた秋学期のカリキュラムを追加する。
■3年～4年次は継続して履修すること。ただし、途中で関心を失ったり、他にやりたいことを見出した場合は履修登録の継続を見送ることを推奨する。
■4年次から新たに履修する場合は、3年次までに人文社会科学的なものの見方や学術的な研究の方法を一定程度身につけ、かつ本演習に係る具体的なテーマを設定し文献研究を進めていること。ただし、4年生の募集をするかどうかは、演習説明会の資料を確認すること。
■国際文化協力、平和学、国際関係学概論、国際関係研究Ⅰ・Ⅱ、実践社会調査法、実践国際協力など、関連する授業を受講していることが望ましい。特に実践社会調査法は春学期のゼミ内容と関係しているので必ず履修すること。
■演習は他学部公開にしていないものの、国際文化学部以外の学生や大学院生がオブザーバー参加することを認めているので、関心のある学生は担当教員までメールで連絡して頂きたい。

【Outline (in English)】
[Course Outline] This seminar covers inter-national cooperation, inter-cultural cooperation and various social problems or "global issues" which demand such cooperation, including poverty, environmental destruction, inequality, conflicts, refugees, or lack of education. It focuses actors (governments, international organizations, NGOs, companies), social norms (voluntarism, dependency, good faith, mutual help) or representations through various media. The goals of this seminar are to enable students to understand the relevant issues in diverse perspectives, and to develop their ideas and skills to conduct his/her own research.
[Learning Objectives]
By the end of the course;
A. The second year students are expected to understand the methodology of social science and humanities, and to write a short essay on the topic relevant to SA or SJ based on it.
B. The third year students are expected to design the research project in accordance with the relevant literature review and the academic methodology.
C. The fourth year students are expected to complete the qualified academic research paper of more than 20,000 letters in Japanese or 8,000 words in English.
[Learning activities outside of classroom]
1. Students will be expected to have completed the required reading assignments before each class. Your study time will be more than two hours for a class.
2. Students will be expected to have completed the required writing assignments after each class. Your study time will be more than two hours for a class.
3. In addition, students will be expected to present your research at least once each semester. Your preparation time will be more than ten hours.
[Grading Criteria/Policies]
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Assignments: 60%, in class contribution: 40%.

OTR200GA（その他 / Others 200）

インターンシップ事前学習

岩下　弘史

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：春学期授業/Spring
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈優〉〈実〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業の目的は、学生が「国際文化学部に親和性のある企業・団体の第一人者によるプロフェッショナルな仕事」を理解し、今後の就職活動などに活かすことにあります。複数の外部講師が登壇する「オムニバス授業」です。
本学部学生の中には、卒業後どのような仕事に就くのか、就けるのかという点について不安に思っている方もいるかもしれません。本授業を通じて、いくつかの業界は国際文化学部との親和性が大きいものであることを理解するでしょう。
またそうした業界の第一線で働く経験豊富な講師による授業を見聞きすることで、学生はそれぞれの業界・企業・団体の仕事の内容と将来の展望を知ることができます。
※なお本授業は2026年度で終了いたします。

【到達目標】
1）国際文化学部に関連する企業・団体の第一線で活躍される外部講師らによる講義を通じて、学生は各職種の特徴・問題などを学ぶことができる。
2）実社会で生きるとはどういうことかを、最新のデータや体験談を交えて学ぶことができる。
3）国際文化学部と親和性の高い企業・機関に関する生の情報を収集することで、「インターンシップ」という就業体験や就職活動などの準備にも活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・本授業は、初回を除いて外部講師によるオムニバス授業となります。各回ではパワーポイントなどを用いながら、各企業・機関・団体の活動やインターンシップ制度などについて講演して頂きます。毎回、授業時間内にコメントシートに記載してもらいます。
・各授業の最後に質疑応答時間を設け、履修者からの質問を受け付けます。その場で外部講師の方にフィードバックをして頂きます。
・もし質疑応答時間後に質問が生じた場合（あるいは時間の都合で質疑応答時間中に質問できなかった場合）は本授業担当教員までメールで連絡ください。できる限り外部講師の方にご回答いただき、履修者にフィードバックするようにします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	・本授業の目的・方法の説明 ・成績評価の詳細
第2回	榎本裕洋氏（株式会社丸紅経済研究所、研究主幹）	総合総社とはなにか
第3回	代島裕世氏（サラヤ株式会社、コミュニケーション本部、本部長）	SARAYAのSDGsビジネス
第4回	梅野太輝氏（株式会社朝日広告社 、プランナー）	広告について
第5回	山崎はずむ氏（株式会社ナレッジワーク、CAIO(Cief AI Officer)）	「労働は苦役なり」を乗り越えるナレッジワークの挑戦
第6回	松江陽一郎氏（株式会社テレビ朝日、お客様フロント部、部長）、菅原知広氏（株式会社テレビ朝日、アナウンサー）	テレビ局の仕事とは
第7回	松山匡延氏（M-wing合同会社（青年海外協力隊ルワンダOV会、NPO法人LeaD）、代表）	国際協力事業における教育分野での活動について
第8回	武田伸也氏（アムネスティ・インターナショナル日本、キャンペーン部門マネージャー）	ストリートバスケと人権活動
第9回	藤下超氏（NHK、メディア総局、特別主幹、解説委員）	公共放送の現在と未来
第10回	水野義弘氏（ANA総合研究所、産学連携部、主席研究員）	航空業界の概要と今後
第11回	畑中晴雄氏（花王株式会社、ESG部門ESG戦略部 ESG戦略スペシャリスト）	Kirei Lifestyle Plan: 花王のESG戦略と具体的取組
第12回	市川明代氏（毎日新聞社、人事本部、採用研修担当部長）	メディアの役割
第13回	深澤孝之氏（出版社代表）	群れから逸れて生きるための出版ビジネス戦略
第14回	片貝悠氏（株式会社インターネットイニシアティブ、IT サービスインテグレーション本部 兼 広報部 リードエンジニア）	ネット社会を支えるネットワークエンジニアのお話

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・毎回の配布資料については、しっかりと再読すること。
・興味のある講師のテーマや職種については、図書館などで関連する文献を調べ、できるだけ視野を広げること。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・教科書はとくにありません。授業内において関連資料を配布します。

【参考書】
・随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】
・「平常点（出席＆コメントシート）60％」と「期末レポート40％」による総合評価。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。
・第14回目授業後に期末レポートの提出。締切期日・分量・提出方法など詳細については初回授業時に説明します。

【学生の意見等からの気づき】
・例年、各授業の最後には質疑応答の時間をとっている。しかし、必ずしも毎回意見や質問が出るわけではない。そのため、もしも質問が出ない場合には、改めて補足説明をお願いしたり、適宜学生に当てたりするなど、今後も授業運営を工夫する。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出・質疑応答等のために学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
・「インターンシップ事前学習」という授業名称ではありますが、本授業は各業界におけるインターンシップに直結したものではありません。
・本授業は「実務経験のある教員による授業」です。企業・団体で勤務実績があり、第一線で活躍されている外部講師らが業界分析・企業研究などを行います。

【Outline (in English)】
This course aims to introduce professional works which have affinity with educations and researches in the Faculty of Intercultural Communication. In this course, each lecture will be given in omnibus format, mainly by lecturers who work in some Japanese company or international organization. The goals of this course are to understand the difference of activities in each company or international organization. In doing so, they will know what and how to prepare for participating in internship programs or job hunting in the future. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on term-end report (40%) and in class contribution (60%).

ARSi200GA（地域研究（アフリカ） / Area studies(Africa) 200）

国際関係研究III

粟飯原　文子

サブタイトル：アフリカから見る世界
配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：国際関係研究VI
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
サハラ以南アフリカについて、主に歴史、社会、政治、国際関係というカテゴリーから学び、アフリカ研究の導入となる知識を身につける。それによって、変わりゆくアフリカ地域の「いま」を考え、アフリカを多面的に理解することを目指す。

【到達目標】
・アフリカを学ぶための基礎知識を身につける。
・アフリカの多様性を理解し、アフリカ研究への関心を高める。
・世界史のなかのアフリカ地域をとらえ直す。国際関係におけるアフリカの位置について考える。
・アフリカについて学び、アフリカから「世界」を見ることで、欧米中心的な視点や思考を乗り越える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業は学習支援システムを通じたオンライン（オンデマンド方式）での開講となる。毎週金曜日に「お知らせ」を配信するので確認すること。
・毎回視聴覚資料を配信する。各自で学習して、期限までに課題を提出すること。
・リアクションペーパーにおけるコメントの紹介、質問に対する応答を通じて、さらなる議論につなげたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション ー アフリカを学ぶために	授業の概要と進め方、成績評価の基準について説明。アフリカについて学ぶにあたり、いくつかの前提を共有する。
第2回	イメージとしてのアフリカ	長いあいだイメージとして構築されてきた「アフリカ」について、その歴史を批判的に振り返る。
第3回	アフリカ史の視点①	「アフリカ史」の視点をもつことの意味はなにか考える。王国・帝国の歴史を見ていく。
第4回	アフリカ史の視点②	引き続き、アフリカ史の視点から歴史を語り直すとはどういうことかを考え、いくつかの事例を見ていく。スワヒリ文明、奴隷貿易、抵抗の歴史など。
第5回	アフリカの宗教①	大陸の信仰・宗教について概観する。
第6回	アフリカの宗教②	アフリカに広がった、イスラームとキリスト教について学ぶ。
第7回	アフリカと移動①	アフリカ大陸の「移動」の歴史を概観する。
第8回	アフリカと移動②	現代の大陸内外に広がる人びとの移動を考察する。
第9回	アフリカ近現代史を振り返る①	アフリカの現在への考察を深めるために、近現代史を振り返る。植民地時代を詳しく見ていく。
第10回	アフリカ近現代史を振り返る②	アフリカ諸国独立に至るプロセス、独立後の難題について概観する。
第11回	アフリカと紛争①	ポスト冷戦期のアフリカにおける武力紛争について、いくつかの文脈に位置づけて考える。
第12回	アフリカと紛争②	アフリカにおける紛争解決について学ぶ。
第13回	アフリカと国際関係	アフリカの国際関係について、アフリカ諸国間関係、新興国との関係を中心に考える。
第14回	全体のまとめと復習	全体の復習をおこない、期末課題について説明する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
復習として授業時に配布したハンドアウトや資料を読み直すこと。
また、参考文献を適宜紹介するので、それを読むこと。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
資料を配布する。

【参考書】
授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価の方法と基準は次の通り。
・各回の課題（リアクションペーパーなど）の提出（60％）
・期末課題（40％）
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
・アフリカについてまったく学んだことのない学生にも理解してもらえるよう、十分な説明を心掛けたい。
・ひとりひとりの疑問点を解決できるように、フィードバックを丁寧におこないたい。

【その他の重要事項】
・初回の授業資料は9月18日（金）13時にアップロードします。
　受講希望者は必ず、この時間までに、**Hoppii**の「講義内情報」を読んで、登録をおこなってください。
・受講希望者が多い場合、抽選をおこないます。

【Outline (in English)】
[Course outline] The purpose of this course is to introduce students to key concepts and debates in the field of African Studies. [Learning objectives] Over the course of the semester, students will learn important topics in 1) history, 2) society, 3) politics and 4) international relations, and gain a comprehensive understanding of Africa's diversities and its roles and relations in the contemporary world. [Learning activities outside of classroom] Students will be expected to review the audio-visual materials and the handouts. The required study time is at least four hours for each class session. [Grading policy] Final grade will be decided based on the following: short reports 60% and term-end examination 40%.

CUA200GA（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 200）

国際関係研究Ⅳ

宮本　佳和

サブタイトル：家族と結婚の人類学
配当年次／単位：1〜4年／2単位
旧科目名：国際関係研究Ⅶ
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：

その他属性：〈他〉〈優〉〈未〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
私たちは「夫婦」「親子」「血縁」「性別役割」などの概念を自明視しがちですが、これらは社会や時代によって多様な形をとってきました。本授業では、文化人類学の理論や民族誌的事例を通して、世界各地の多様な親族体系、婚姻形態、生殖技術、そしてケアのネットワークを概観します。血のつながりとは何か、家族を定義するのは何かという問いを通じ、現代社会における家族の変容（非婚化、共同養育、LGBTQ+の家族形成など）を相対化し、批判的に考察する力を養うことを目的とします。

【到達目標】
・文化人類学、とくに家族と結婚に関する基本的な理論や概念を習得する。
・ものごとを幅広い視野から捉えることによって得られる他者理解の洞察力に身に付ける。
・世界の多様な人間の在り方を学び、結婚・親子・家族とは何かについて相対的な視点を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業の理解度や平常の取り組みを評価するため、授業コメントや質問・疑問を求めるリアクションペーパーを課します。
・リアクションペーパー等における興味深いコメントや質問等を授業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要、成績評価方法の説明
第2回	家族と親族①	核家族は普遍的か？
第3回	家族と親族②	生物学的父と法的父という考え方
第4回	家族と親族③	親子の絆とは何か
第5回	性と婚姻①	生殖技術と現代社会
第6回	性と婚姻②	LGBTQ+の家族形成と選ばれる家族
第7回	中間テスト	第2回〜第6回の内容の理解度テストと解説
第8回	婚姻をめぐる社会関係①	インセストタブーと交換
第9回	婚姻をめぐる社会関係②	体系的な親族組織
第10回	婚姻の諸形態①	一夫多妻、一妻多夫、通い婚
第11回	婚姻の諸形態②	結納、婚資、持参金
第12回	血縁を超えた関係①	擬制的親族関係
第13回	血縁を超えた関係②	ケアと共同性
第14回	期末テストと総括	第8回〜第13回の内容の理解度テストと解説、全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業内で紹介する文化人類学や社会人類学の関連文献を読み、授業の理解を深める。
・図書館などで関連文献を調べ、自らの興味関心を広げる。
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
中間テスト:25%、期末テスト:25%、平常点（リアクションペーパー、出席状況等）:50%として総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムや動画閲覧サービス等を利用します。

【その他の重要事項】
・本授業では授業コメント（リアクションペーパー）の提出を課しますが、生成AIツールは使用しないでください。
・初回授業において教室定員の都合で着席できなかった学生がいた場合は、当該学生に対してオンデマンドで授業資料を後日提供します。なお、第2回以降は教室を変更する予定です。
・対面をオンラインで同時配信するハイフレックス型授業は実施しません。
・シラバス内容や授業計画に変更が生じた場合は授業内もしくは学習支援システムで周知します。
・本学では成績評価におけるSの割合を受講者の20％以内を目安とすることを定めており（ただし少人数授業等を除く）、本授業でもこれに従って評価を行います。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This course covers the basics of social and cultural anthropology, which seeks to understand social and cultural diversity around the world. We focus especially on parent-child relationships, kinship, and marriage to understand social relations that connect people in everyday life.
[Learning Objectives]
The goals of this course are to understand the contemporary meaning of kinship and social relations from an anthropological perspective.
[Learning Activities Outside of the Classroom]
Before/after each class meeting, students are expected to spend four hours studying the course content.
[Grading Criteria/Policy]
Grading will be based on mid- and final examinations (25% each) and in-class contributions (50%).

LANe300GA（英語 / English language education 300）

Art, Rebellion and Advertising

ジョナサン・エイブル

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.
その他属性：〈グ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will examine certain cultural phenomena that impact our lives. Emphasis throughout this course will be on the notion of 'possibility' – the exercise of looking beyond mere appearance. The notion of 'possibility' will be used to explore three major themes – art, rebellion, and market advertising. Each theme will be explored through short authentic readings, visual material, and music CDs, all of which will be used to set the groundwork for group discussions and an exchange of viewpoints.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course is designed to improve students' critical thinking ability by challenging their belief systems while examining three cultural phenomena – art, rebellion and advertising.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Emphasis throughout this course will be on the notion of 'possibility' – the exercise of looking beyond mere surface appearance. We will use this notion of 'possibility' to explore three major themes – art, rebellion, and market advertising. Each theme will be explored through short authentic readings, visual material, and music CDs, all of which will be used to set the groundwork for group discussions and an exchange of viewpoints. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria.
Week 2	Theme: Art Topic: Symbols and Logos	English lecture, reading, discussion and written assignment on symbols and logos.
Week 3	Theme: Art Topic: Symbols and meanings in Vincent van Gogh's 'Peasant Shoes'	English reading, lecture and discussion on the symbols and their means in Vincent van Gogh's 'Peasant Shoes'.
Week 4	Theme: Art Topic: Analysis of Vincent van Gogh's 'Wheatfield with Crows'	English lecture, reading, discussion and written assignment on Vincent van Gogh's 'Wheatfield with Crows'.
Week 5	Theme: Art Topic: A Comparison of Edward Hopper's 'Nighthawks' (1942) and Archibald J. Motley Jr.'s 'Nightlife'	English reading, lecture and discussion on Edward Hopper's 'Nighthawks' (1942) and Archibald J. Motley Jr.'s 'Nightlife'.
Week 6	Theme: Art Topic: Art and Function: Can functional objects be works of art?	English lecture, reading, discussion and written assignment on whether functional objects can be considered works of art.
Week 7	Theme: Rebellion Topic: Music as means to change – Woody Guthrie and the Dustbowl of the 1930s	English reading, lecture and discussion on the music of Woody Guthrie and the Dustbowl of the 1930s.
Week 8	Theme: Rebellion Topic: Music as means to change – Bob Dylan and Neil Young	English lecture, reading, discussion and written assignment on the music of Bob Dylan and Neil Young as a stimulus for social change.
Week 9	Theme: Rebellion Topic: Martin Luther King: 'I have a dream' speech	English reading, lecture and discussion of Martin Luther King's 'I have a dream' speech.
Week 10	Theme: Advertising Topic: Advertising techniques	English lecture, reading, discussion and written assignment on advertising techniques.
Week 11	Theme: Advertising Topic: Advertising techniques continued	English reading, lecture and discussion of more techniques used in advertising.
Week 12	Theme: Advertising Topic: Advertising vs Branding	English lecture, reading, discussion and written assignment on advertising and branding.
Week 13	Theme: Beliefs Topic: Is the unexamined life worth living?	English reading, lecture and discussion on the underlying briefs people seldom consider.
Week 14	Theme: Final remarks and discussion	Final remarks and discussion.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Student presentations are to be researched outside class. Most presentations will have both a written and visual component. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
References will vary depending on the subject matter of the students' presentations. Research suggestions will be made by the instructor.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
Students are required to give presentations based on topics discussed in class. The purpose of the presentations is to further class discussion. Students are required to complete all assigned presentations to receive a passing grade. Class grade is based on presentations and participation in class discussions.
Presentations – 70%
Class Participation – 30%
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【学生が準備すべき機器他】
None

LANe300GA（英語 / English language education 300）

The History of Tourism

ＭＡＲＫ　Ｅ　ＦＩＥＬＤ

配当年次／単位：3〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講　｜　開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：初回の授業に出席し担当教員の受講許可を得ること
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.
その他属性：〈グ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. All third and fourth-year students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country through their Study Abroad experience, which is an Intercultural Communication Activity sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
In this course, we will first look at the historical development of tourism and its expanding cultural significance. Later participating students will be asked to investigate potential areas and/or sites where tourism is developing or may be developed in the future. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	History of Tourism: World Tourism Day	Brief English lecture on UNWTO. Students take notes, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	History of Tourism: Global Code of Ethics for Tourism	Brief English lecture on UNWTO's Code of Ethics, students take notes, then discuss parts of the code and their practical meaning.
Week 4	History of Tourism: The Development of Mass Tourism	Brief English lecture on the technological and economic changes that made modern mass tourism possible. Students take notes, followed by class discussion, and Q&A session.
Week 5	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourist destinations incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 6	Tourist Markets: Transportation & Infrastructure	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 7	Tourist Markets: Accommodations	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 8	Tourist Markets: Attractions & Activities	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 9	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourism related topics incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 10	New Modes of Tourism: Cruises	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 11	New Modes of Tourism: Thematic Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 12	Business Constraints: The Economics of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 13	Social Considerations: The Environmental and Cultural Impacts of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 14	Examination/ Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some course material early in the semester, and participating students will generate more course material as the semester progresses.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)
20% Short Presentations
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】
OHC and PC presentations.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

PHL300GA（哲学 / Philosophy 300）

History of Western Thought

MARK E FIELD

配当年次／単位：2〜4年／2単位
旧科目名：
旧科目との重複履修：
毎年・隔年：毎年開講 ｜ 開講セメスター：秋学期授業/Fall
人数制限・選抜・抽選：
備考（履修条件等）：国際文化学部主催科目に必要とされる英語能力基準は、TOEFL iBT 61-75、TOEFL ITP Level1 500-539、TOEFL ITP Level 2500、TOEIC675-819、ＩＥＬＴＳ6.0、英検準1級程度。基準スコアに満たない、あるいはスコアを持っていない学生は、担当教員に相談すること。
Courses in Intercultural Communication need the higher English proficiency mentioned below: TOEFL® iBT 61-75, TOEFL® ITP Level 1 500-539, TOEFL® ITP Level 2500, TOEIC® 675-819, IELTS 6.0, and EIKEN Grade Pre-1st. If you don't have any score mentioned above, contact the instructors directly.
その他属性：〈グ〉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
The Culture, Language, and Thought of the English-Speaking World is the product of many historical interactions between a variety of peoples with different ways of thinking and living in the world. To understand many aspects of the societies in the modern English-Speaking World, one must first recognize the historical forces that shaped them and brought them about.

【到達目標】
The primary goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand: 1) how societies and cultures change in general and 2) how the cultures of the English-Speaking World developed their unique forms. Using the framework of cultural change, we will examine the formation of "Western" religious and political institutions that developed before 1500 CE in order to better appreciate the roots of "Western" social, political, and economic thought. Building on this foundation, the evolution of modern social systems and political-economic thought that occurred in the English-Speaking World after 1500 CE will be discussed.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
国際文化学部のディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連。

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
The course will start out by outlining the forces behind cultural change. This will be followed by a series of lectures discussing the development of European political and religious institutions following the Ancient Greco-Roman era. We will then attempt to analyze Britain's rather unique political &economic institutions at the beginning of the modern era as a product of cultural change. Building on this foundation, the cultural changes, i.e., the changes in thought, caused by the Protestant Reformation and Enlightenment Philosophy will be examined and their impact on the development of British and American Political-Economic Systems through the 19th and 20th Centuries will be discussed. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	Class Orientation:	Introduction to the Forces Behind Cultural Change
2回	Religion &Philosophy:	The Foundations of Culture & Thought?
3回	The Role of Myths:	Social Formation in the Ancient World
4回	Cultural Conflicts:	Change in the Hellenic World
5回	The World at the End of the Ancient Era:	Roman's Unique Position
6回	Mass Migration:	The End of the Roman Empire
7回	Political and Religious Conflicts:	The Medieval World
8回	The World at the Beginning of the Modern Era:	Britain's Unique Position
9回	The Renaissance:	The English Reformation &The English Enlightenment
10回	The English World:	Revolutionary Challenges, Industrialization &Empire
11回	World War I:	Wilson's Democratic Vision
12回	World Depression:	Keynesian Economics &FDR's New Deal
13回	Post-War America & Britain:	The New International Order
14回	Examination/ Comments:	Recapping what has been covered in the semester.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lectures at home to enhance their participation in classroom lectures and discussions. Students may also be expected to find and analyze information from various forms of English resource materials and media independently for the preparation of Research Papers.
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some course reading material during the semester.

【参考書】
Participating students will do independent reading for their written assignments.

【成績評価の方法と基準】
30% In Class Evaluation (Participation, Discussions, etc.)
30% Homework/Research Paper/Midterm Examination,
40% Final Examination/Term Project.
**Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester.
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance.
The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester.
The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

法政大学
HOSEI University